國意考
國號考
鉗狂人
古史成文
異稱日本傳

文學博士 物集高見編

新註

皇學叢書

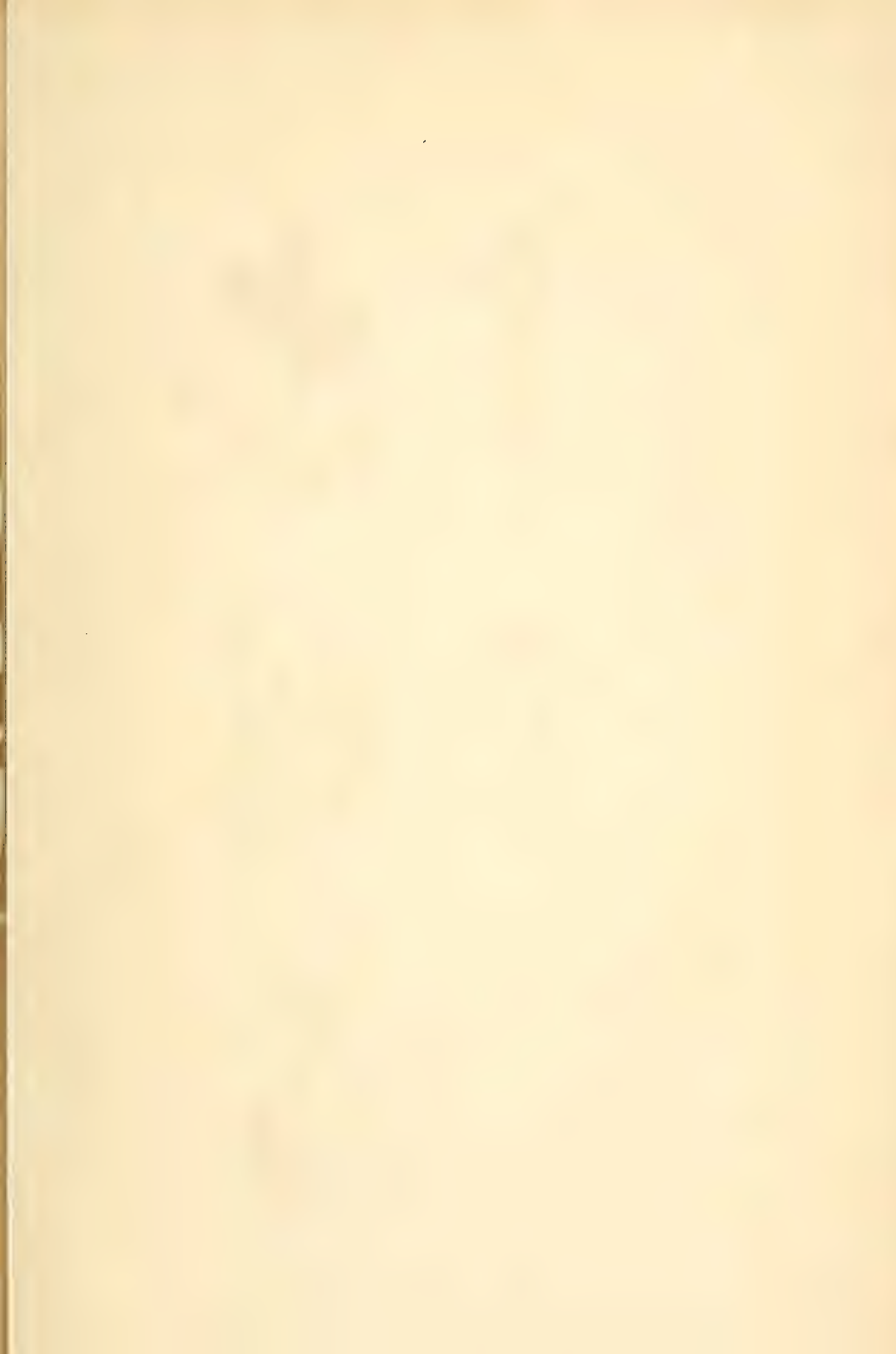
第十一卷

廣文庫刊行會

新註皇學叢書第十一卷題辭

元帥陸軍大將 伯爵 奥保鞏閣下

公爵 伊藤博邦閣下

樞密院顧問官 江木千之閣下

昭和二年春日

博邦題

一系天皇臨兆民
情極父子義君臣
孫萬國運嵩山泰
億萬斯年有此基

大正丙寅建國祭之日恭賦　深千之

新註
皇學叢書第十一卷目次

新註皇學叢書第十一卷目次　終

解題

國意考

一

本書は加茂眞淵翁否むしろ當代に於ける古道復興論者のすべてといひたい――の思想を窺ふべき重要な資料の一であり、また儒家の主張に對する正面攻擊の經典と見られる。左に少しく本書にあらはれた一流の主張を述べて見よう。

當時に於ける儒家の態度は改めてこゝに說くまでもなく、聖賢君子の道を高唱し、漢土の文華を禮讃してやまなかつた。それに對して反感を抱く者の出るやうになつたのも自然である。翁は先づ支那の國體を冷笑して憚らない。

さていやしげなるひとも、出て君をころし、みづから帝といへば、世の人みなかうべをたれて順かひつかへそれのみならず、四方の國をばえびすなどいひていやしめつるも、其夷てふ國より立て唐國のみかどとなれるときは、またみなぬかづきて、したかへり、さらば夷とていやしめたることいたづらごとならずや。

これと對照して考へるとき、我が上代の國風に著しく心ひかれるのであつた。翁の思へらく、

こゝの國は天地の心のまに〳〵治めたまひ……ちひさき理りめきたることなきまゝに……いにしへよりあまたの御代〳〵やゝさかえまし給ふを、此儒のことわたりつるほどに、……天武の御時大なる亂出來て、夫よりならの都の宮のうちも、衣冠調度など唐めきて、萬うはへのみみやびかになりつゝよこしまの心ども多くなりぬ。

移植された海外文化の餘弊を歎くところは、卓見でもあり眞理でもある。しかしながら、かういふ風な觀察の缺陷についても、一部の國學研究者の反對論がある。

二

本書にあらはれた佛教觀はまた甚しく特異な色彩がある。翁は排佛論に同情しなかつた。しかし、佛教を侮視した點に於ては、排佛論者以上であつた。卽ち、

或人は佛のことをわろしといへど、ひとの心のおろかになり行なれば、君は天か下の人のおろかにならねばさかえたまはぬものにて侍り、さらば佛のことは大なるさわはひは侍らぬなり。」

本文の主張は恐らくたゞ翁の一家言に過ぎまいと思ふ。「君は天が下の人のおろかにならねば」云々かういふ見解は今日から認容さるべくもないし、また古道論者の信條がみなかういふものだつたとするならば、庶人を愚にする政策の讃仰であつて、極めて不純な理想を是認するものといは

なければならない。翁が皇運の無窮ならんことをねがはれたのは臣子の至情である。從て、

凡天が下は、ちひさき事はとてもかくても、世々すべらきの傳りたまふこそよけれ、上傳れば下も傳れり。

かういふ本書の宣言も正當に違ひない。けれども國學者の一部に佛教を民衆を愚にするために利用すべしと考へたり、――佛教に對して餘に無智な言である―― 庶民の愚なることが君主に利ありといふやうな思想を抱く人々があつたことは遺憾に堪へない。要するにこれを宣長の思想や主義と比較するとき、我國の古意を正解すること於て翁は一歩を讓らなければならぬ。

三

本書にはまた次の言がある。

唐國の學びは其始人の心もて作れるものなれば、家々にたばかりありて、心得安し、我すべら御國の古への道は天地のまに〳〵丸く平らかにして人の心詞にいひつくしがたければ、後の人知えがたし。

末文の思想は下條に「よきもあしきも丸くてこそよけれ方なることわりは益なし」といへると同じく技巧的な感情や思想を斥け、自らなる道を說くものである。さうして儒家の高唱する仁義禮智信といふやうなことも、そんな術語の有無にかゝはらず、それが人としての自然の道であるかぎり、「凡天が下に此五つのものは、おのづからあること、四時をなすがごとし、……いづこに

かさる心なからむや」と論じてゐる。かういふ思想からまた次のやうな意見が出て來る。

唐國は心わろき國なれば、深く敎ても、おもてはよき樣にて終に大なるわろごととして世をみたせり、此國はもとより人の直き國にて少しの敎をもよく守り侍るに……おしへずして宜きなり。

儒家はかういふ國學者の思想を不快としたに違ひない。よつて事實の上から、種々な非難を敢てした。上代に於ける親族結婚の攻擊などはその一例とすべきである。本書にはまたそれ等の論者に一矢をむくいた左の言が見えて居る。

或人の云、むかし此國には、やから、うからを妻として、鳥けものと同じかりしを唐國の道わたりて、さることもなくなりぬと……御國のいにしへは母の同じき筋を誠の兄弟とし侍り、母しかはればきらはぬなり、物はところにつけたる定こそよけれ。

さりながら、これだけでは、要するに、まだ消極的辯解の態度であつて、支那文化の崇拜者を覺醒せしめるに足らぬことはいふをまたない。

四

現今の實際問題として漢字の廢止とか制限とかいふことが頻に論議されて居る、維新前の國學者の中にも、儒家の本城を陷れようとする考へから、漢字排斥を主唱した人があつた。本書にあ

らはれた翁の所説などもその適例とすべきであらう。

此國に文字なし、唐國字を用て萬づそれにて知るべし。

かういふ儒家の思想を斥けて次の言がある。

皇御國もいかなる字様かはありつらんを、かのからの字を傳へてより……かれにおぼれて、今はむかしの詞のみのこれり……おらんだには二十五字とか此國には五十字とか、大かた字の樣も四方の國同じきを、たゞから國のみわづらはしきことをつくりて、代もをさまらず、ことも不便なり

これ等は國學界の思想史上からいつてもまた一般文化史の上から見ても興味の深い事實である。しかし、かういふ主張だけからでは、時人が果して漢字の不便を感じてゐたかどうかを判斷することは出來ない。殊に本書の儒教觀を見るときは、罵らんがために罵り、斥けんがためにしりぞけるといふ風な傾向のあることを否定するわけにゆかない。從て右の漢字論にもさういふ色彩があると考へられる。

五

右に述べた漢字論は、一面に動かし難い眞理を持つて居るからよいのであるが、次の議論に至つては、餘に感情的な態度ではあるまいか。

又人を鳥獸にことなりといふは人の方に我ほめにいひて外をあなどるものにて唐人のくせなり……凡天地の際に生けるものはみな蟲ならずやそれが中に人のみいかで貴く、人のみいかむことあるにや……おのれがおもふに人は萬物のあしきものとかいふべき……人皆智あればいかなることもあひうちとなりて終に用なきなり。

國學者の一部が儒家に對抗する必要から西歐の知識を借りようとする傾向のあつたことが、「オランダ」文字の引證や、「生けるものはみな虫ならずや」こんな風の奇矯のやうな主張の中にみとめられるけれども、その人類罵倒――人類中心說の否定は相當の理由がある。――に至つては、曲論に近い。前文に指摘して置いた佛敎利用論の甚しく我等の信ずる君民關係觀と背馳する點と共に本書にあらはれた思想圈内の大暗點である。國學者の中からも儒家に同情し、本居平田諸家の說を排擊しようとする論客の出たことは、世に知られて居るけれども、彼等はみな異端者視される傾がありはしまいか。しかし、本書をよんで深く考へるとき、それ等の人々は、決して輕々しく異端視して斥け去るべきものでないことを想ふものである。

國號考

一

國號の本義とか由來とかいふやうな問題については國民のすべてが知らなければならぬことである。たゞその道の人々だけによつて論議されてゐるのみでは、あきたらぬことゝいはなければならぬ。しかし、この平凡のやうで大きな問題は永く解きあかされずに居つたのである。

本書は翁がその缺陷を除かうとして執筆されたものと考へられる。まづ「大八島國、葦原中國の稱から始めて夜麻登の稱、倭の文字をとき、和の字に及ひ、更に「日本」なる名稱の由來と意義とに說き及んでゐる。これ等の名稱の本義はいふまでもなく本書の所說によつて確定されるわけにはゆかぬけれども、かういふ問題に關する解答の一として永久に傳へらるべきものであらう。またその說の一部は他の諸說を排して優秀な地位を確保して居るかも知れない。しかし、今こゝではさういふ批判的な態度は執らずに、翁の所見の主要點だけを紹介することゝしよう。「日本」の古名はその數が頗ぶる多い。けれども、內外に渉つて學徒の研究項目ともなり、一般人士の興味をもひくものは「倭」と日本の二種である。他のそれはたゞ古典にあらはれた特殊な稱呼として記憶されるに過ぎないからである。

二

「日本」の稱が使用された理由は「日出之處」といふ考へからとするのが穩當な考へと思はれる

本居翁も種々と思ひめぐらされた結果はさういふ結論を得られたのである。即ち本書の一節に左の如く述べられた。――但その訓方の論については下文に説く。

> 日本としもつけたまへる號の意は、萬國を御照しましゝます、日の大御神の生ませる御國といふ意か、又は西蕃諸國より日の出る方にあたれる意か、此二つの中にはじめのは殊にことわりにかなへれども、そのかみのすべての趣を思ふになほ後の意にてぞ名づけられたりけむ。

「日本」なる稱呼が邦人によつて定められたものとする限り、何人も容易に右の推定を否認するわけにはゆかぬ。たゞ木村正辭氏のやうに「日本」の稱を全く外人の呼び始めたものとする考があるけれども、星野博士等もそれを排斥された。――古く伴信友も、日本の稱は韓人の稱へはじめたと考へてゐる　木村氏の説はそれと多少の連絡がないともいへぬ。しかし、これ等の説を承認するためには「日本」なる文字の原始的讀法が字音であることの確證を要する。この點では本居翁も音讀として居られるけれども――下文に説く――どうであらうか。内田博士のやうにヤマトだと考へるのが正しくはあるまいか。勿論、どちらにしても、他の説を確實に排斥するほどの立證はなし得ないのである。星野、喜田兩博士も「日本」が日出處即ちヒノモトの意であることは認められたが訓はヤマトとする。

註

(1) 星野博士　日本國號考――史學雜誌三十一號三七頁以下。

(2) 史學雜誌　第十一卷二號喜田氏說參照。

三

次に多くの人々から考へられたのは倭の稱とその名義である。それに關する翁の意見を求めると、次の一節がある。その要點をあげよう。

ヤマトなる名稱の意味する原始の地域については、

もと畿内なる大和一國の名なるを神武天皇此國に大宮しきませしよりして後の御代〳〵の京もみな此國内なりける故におのづから天の下の大名にもなれるなり……或說に夜麻登といふは神代より天の下の大名なりしを神武天皇の御代よりしてわきて帝都の一國の名にもなれるなり……といへるはみな誤なり

から論ぜられた。次にヤマトなる語義については、

萬葉考の一つの考へに此國は四方みな山門より出入れば山門國と名を負るなりと有……此說ぞ宜しかるべき…

……夜麻の山なることは論なし、登には三つの考へあり一つには登は處にて山處の意なるべし……二つには…

……山都富（ヤマツホ）なるべし……富は……すべて物のつゝまれこもりたる處をいへる古言なりされば是又山のめぐれる

よしをもて負へる名なり……三つには……山宇都の國なるべし……內といふことなるべし古に內を宇都といへる例多し……此三つの考へのうち、見む人心のよからむかたをとりてよ。

その所見を固執しない態度は尊敬すべきであるが、これ等の說は今日から容易に承認されさうには考へられぬ。いふまでもなく、「ヤマト」が局地的な名稱であつて、全國的な稱呼となつたことは後であるとする說は正しいと思ふ。

四

更に進んで、ヤマトに宛られた「倭」の文字を考へよう。これに關する翁の見解はどうであらうか。

倭の字はもともろこしの國よりつけたる名にて、その始めて見えたるは後漢書地理志に、東夷天性柔順異於三方之外……樂浪海中有倭人……といへる是なり……さて倭とはいかなる意にて名づけたるにか、その由はさたかに見えたる事はなけれども……班固が意は說文に、此倭字の本義を順貌と注したると同じくて柔順なる故に、倭人とはいふと心得たるごとく聞ゆめり……。

維新後の學者にも、これを認める人があつて、星野博士は、

漢人ノ稱呼ノ儘ニ倭ノ字ヲ用キラレシニ其稱倭奴國王ニ起因シ且文字モ雅ナラサルニヨリ一時日出處又ハ東國ナド稱セラレシガ大化初年ニ日本ノ文字ヲ制定セラレ」云々。

から述べられた。結論に於て翁の所見と同じである。しかしながら、この問題はまた多くの異説を容れる餘地もあり、新見の出づべき機會もあらうと考へられる。從つてこゝにはたゞ翁の所説として紹介するに留めて置く。

因みにいふ「倭」といふ國號については古く釋日本紀に引いた古書などにも興味のある說が傳つてゐる。從來學者の多くはこれを一笑し去つたやうであるけれども、さういふ誤解から、大なる確定的な結果を生むこともまたあり得られると思ふ。しかし、本文の一節で新にこれ等の問題を復原考察する要を認めないのである。また倭の字を和の字に改めた年代について翁は天平勝寶四年十一月とされてゐる。

註

(1) 星野博士　日本國號考――史學雜誌三十一號三三頁等

(2) 國號考　和の字條によると、同年十一月三日から廿四日までの間に改められたとある。

五

日本なる名稱の使用し始められた時代はいつ頃であるか。これについて翁の見解は左の通である。

まづ古事記に此號見えず、又書紀皇極天皇の御卷までに夜麻登といふに日本とかゝれたるは後に此紀を撰ばれ

し時に改められたる物にしてそのかみの文字にはあらざるを……大化元年秋七月丁卯朔丙子高麗百濟新羅並遣使進調云々……詔於高麗使曰明神御宇日本天皇詔旨云々又詔於百濟使曰明神御宇日本天皇詔旨云々と見えたるこれぞ新に日本といふ號を建て示したまへるはじめなりける……かゝればこの日の本といふ號は孝德天皇の御宇大化元年にはじめて建られたることいちじるし……もろこしの書どもと引合せて驗るに隋の代までは倭とのみいへるを唐にいたりて始めて日本といふことは見えたり。

明治以降になつてからも本說と見を同じうする學者がある。——星野博士等——但これには多くの異說を納れる餘地があつて日本紀の撰定と同時——少なくとも古事紀撰進以後日本紀の完成するまでの間——と見る人々も少なくない。川住、喜田諸氏などはその論者である。

(1) 星野博士は「日本國號考」と「日本遙號考ノ備考」——史學雜誌第十編十一號等——でこの說を主張して居られる。

(2) 川住氏は推古帝のとき遣外文書に日出處天子の句あるをあげて當時未だ「日本」なる成語なきを說き、その名稱の成立した年代は「古事記ニ日本ノ文字ヲ用ヒサルヲ見レバ、……和銅五年ヨリ日本書紀ノ成レル養老四年ニ至ル凡九年ノ間ニ制定セラレタルコトヲ信ズと明言した。日本國號管見——史學雜誌第十編十二號所載——喜田博士もそれに贊同してゐる。史學雜誌第十一卷二號參照

「日本」はニホムと音讀すべしといふのが翁の見解であつた。國號考の末文に次の一節がある。

比能母登といふ號は、古の書に見えず日本といふは……もと異國へしめさむために設けたまへるなれば、ひのもとゝはよまず始めより爾富牟と字音にぞいひけむ、萬葉集に日本之とあるをひのもとのと訓るところ多かるは後人のしひて五言によまむためのひがことにて皆四言にやまとよむべきなり。たゞ三の卷なる不盡山の長歌に、日本之山跡國乃云々とあると、續後紀十九卷興福寺の僧の長歌に、日本乃野馬臺乃……などゝある……はひのもとなりされど、こは國號にいへるにはあらず倭といはむ枕詞なり……此枕詞もしいと古くより有しことならば、孝德天皇も日本といふはこれをおもほしてや建たまひけむされどかの不盡山の歌はいとしも古からず……こは日本といふ號のこゝろをおもひて後にいひそめつるにもあらむか、その本末はわきまへがたくなむ。

しかしながらこれについても多くの異論がある。またあるべきであらう。のみならず、「日本」を音讀すべしとする確證はないやうに思はれる。勿論こゝではその當否をいふの必要を認めないけれども、

去來子等早日本邊大伴乃
御津乃濱松待戀奴良武

この歌の古訓が「ヒノモト」らしい――ヤマトとよむ說もあるが――ところから考へ、「日本」は

日出之處の意を偶した文字であるところから推しても、日本といふ文字をヒノモトと訓んだことは、疑ひなからうと思はれる。日本紀神代卷には特に「日本此云耶麻騰」と訓注した位であるから、音讀する例があつたとしてもそれは、比較的後のことゝ考へられる。たゞ上文にもいふが如くにそれをヒノモトとよむ慣例は確にあつたと考へる。書紀が特に訓注を加へてヤマトと訓むべしと示したことも、それ以外の讀法があることを豫想せしめる。しかもそれが音讀であつたとは考へにくいのである。とにかくこれ等の問題は更に將來の研究に俟つべきものと思はれる。

註

(1)翁は「日本(ニホム)とはもと比能母登といふ號の有しを書る文字にはあらず異國へ示さむためにことさらに建られたる號なり」と確信された。勿論、さういふ定稱はなくてもよいのであるが、ヒノモトといふ思想の存在を否定し難い以上は、ヒノモトと呼ぶこともあつたと見るのが自然である。

鉗狂人

一

本書は種々な方面から見て多くの興味を持つて居り、大きな期待を持つて生れたものらしく考

へられる。近代に於ける古代文化研究の學界には二大思想の對立があつた。その一は縣居鈴屋諸大人によつて代表される學派であつていふまでもなく、本邦の原始文化を尊重し移植文化を輕視する。その行動は精神的に見れば純なものといへるけれども、その論議の方法とか內容とかには往々常規を逸するやうなこともあつたのである。それに對して僧家佛家等の不快な感情を懷抱するに至つたことも一面の理であり、直に否定排擊するわけにもゆかぬ。しかし、さういふ非國學者だけがさういふ意見を持つてゐた時代はよいけれども、後になつてから、同じ國學者の中からまで、類似な反抗的態度を執る者を出すやうになつた。本書著作の目的は、藤井貞幹の「衝口發」にあらはれた思想を反擊するにある。貞幹は佛家の出身であつたけれど、和漢外典の學にも精通し、殊に考古學上代史などの研究については、特異な見識を持つた人物である。著撰の書籍は頗ぶる多い中にも「衝口發」は最も汎ねく人に知られ、また學界に一流の思想的潮流を移入することゝなつた。よつて次にその主要な見解——卽ち、一般の國學者からいへば、甚しく異端視さるべき色彩を含んだもの——を略述する。それでなければ、本居翁が特に「鉗狂人」を著はした所以が明にならぬからである。

二

衝口發はこの卷尾に天明元年辛丑七月とあつて、著作年代は明に知られる。また卷頭には引用書目を明記してあり、かなり自由な立脚地からそれ等の資料を驅使して本居翁等の說くやうな、尙古的な見解を一蹴せんとした。

(イ)國語は大部分韓語及古代韓音、乃至は漢音の轉訛したものにすぎない。
(ロ)日本紀の紀年は六百年を減ずる要がある。それでなければ支、韓、日、三國の年代が符合しない。
(ハ)上古の日本人は上流の一部を除いて庶人はみな裸體で居つた。
(ニ)上古に死とかそれに關した禮式や墓などを穢としたことはない。
(ホ)墓そのものを祠としたらしい。中古以來の制をみても山陵には鳥居がある。
(ヘ)和歌の風も韓の古俗である彼地では漢風に摸擬追隨してこの俗を失つてしまつた。
(ト　高天原は大和高市郡であり、天香山が天照大神の陵地である。香山とは隱山の義である。
(チ)「神代紀ニ卷異邦ノ書ヲ取集メ、雜フルニ佛見ヲ以テ結構ス」――卽ち、神代卷は支那及佛教の知識によつて作られたものとする。
(リ)「夫レ人ハ一日モ昔ヲ忘ルベカラズ、西土ノ書ヲヨミ、華夷ヲ分別シ聖賢ノ道ヲシルハ全ク天智文武ニ帝ノ賜モノ也」

これを國意考の所說などに比べてみたならば、何人もその距離の甚しきに驚くことゝ思はれる。

右にあげた諸說の他に皇祖神武帝の事、及日本なる國家の起原に關する自由不羈な見解が載せてあり、明治年間の著作としても恐らく公刊を許されなかつたらうと考へられる位なものである。右に述べたやうな內容を持つた一書が世上に流傳し始めたとき、正統派の古典學者はこれを觀過すべくもなかつた。本居翁の立つて破邪顯正の擧に努力されたのは當然な使命であつたといはなければならぬ。その著「鉗狂人」の卷頭には次の宣言がある。いはく、

いつこのいかなる人にかあらむ、近きころ衝口發といふ書をあらはしてみだりに大御國のいにしへをいやしめおとして、かけまうもかしこき皇統をさへに、はゞかりもなくあらぬすぢに論じ奉れるなど、ひとへに狂人の言なり、故に今これを辨じて名づくる事斯の如し。

以て貞幹の一著がどの位まで正統派の國學研究者を戒心動搖せしめたかを察することが出來ようと思ふ。

これから前文に列記した貞幹の論旨と對照して翁の見解を概叙しよう。

(1) 神武帝元年辛酉は六百年後の辛酉ならむとの說

これについては「三國史記東國通鑑など……は、ことに後の物にして信じかたき事多く、年紀などもたがへることども多くて……據とするにたらざるものなるに……さることをも思ひはからず

……論者の淺見おしはかられてあはれなり」と論じ、書紀の年紀を疑ふ論據を奪はんとし、六百年延長論については「六百年こなたへちゞめて漢宣帝神爵二年とも定めたるは……いとをかしき事なり其故は日本紀の年紀を用ひずして六百年違へりとする程のものゝ辛酉とあるを用ゐたるはいかに、かの元年のかならず辛酉なるべきことは何によりて知れるぞ」と冷笑された。

(2) 國語の言訓は多く韓、漢、乃至西土より移れ來れるものとする說

これはまた二方面から論破された。先づ海外との「往來はじまつて以來は數千言の中にはまれまれ三韓漢の戎言のうつりたるもなきにはあらず」といひ、例證として貞幹のあげたる各語については「漢字音なるも、韓語なるも、なきにはあらざれでも、其餘多くもとより皆國言なるをしひて皆韓語なりといへるものなり……又數千言の中には他國とおのづから似たるも同じきもなどかまじらざらむ」かういふ方面から貞幹所說の缺陷をあげて非難を加へられた。次には「韓の國々は多く皇國に服屬して在つればつねに往來しげく、たがひに此方にも彼方にも久しくとゞまり居たりし人も多かりしかば、言語のみならず、衣服器財風俗なども此方より彼方へうつりたるも多しと見ゆるに、それをすら……彼より此に移れる物とするは深く思はざるひがごとなり」と主張された。これは現今でも一部の學者の陷りやすい態度であつて、翁の見解は正しくそれ等の輩

の反省に値するものと考へる。

(3) 上代服裝論及その矛盾

貞幹の考はかなり徹底したものであつて、一面には事實をもふくむものと考へられる。しかし彼の主張に甚しく强辯のあることも否定されない。彼はいふ

上古衣服タヾ千早アルノミ……小野妹子入唐ニモ是ヲ着シ行シト見エタリ。

痛快な言ではあるが、これは恐らくその眞意ではなからう。日本人種を、漢韓兩土と密接な連絡を持つ者としてゐる者の論としては笑ふべきである。本居翁も「下文に應神天皇の時より君臣始て韓衣を着たりといふと自語忽ち相違せり」と指摘された。貞幹の說に次の辭句がある。

應神帝ノ御宇縫女二人ヲ貢セシヨリ始テ君臣韓衣ヲ着タリ——庶人ニ至テハ皆裸形ナリシトゾ。

裸形の徒があつたといふことは別個の問題であるが、應神帝以前に韓衣なしといふ所說の矛盾はいふまでもないが、これ等の點も「もとより此方には有ながら、猶まされるかあらは韓よりめされしことは此外の事にも猶有なり」と翁の辨せられた通である。

三

本書にあげられた翁の辯難は、前文にあげた貞幹所說のすべてに涉つてゐない。天照大神の都

城及御陵に關しては「或人天神都城辨といふ書を著はして……大神の都は大和國なりといひて種々の證を擧たるをおのれ又其非を辨じて天祖都城辨々と名づけて一卷あり、……今くはしくは辨せず「此大御神に御陵のことをいふが非なるよしくはしく辨々にいへり」と說かれ、上古の喪葬に關する說についてはたゞ「無稽の妄說なり、こと〳〵く論辨あれども……こゝには默しつゝ、其說をきかむとならばさらに問へ、」といつて居られる。かくて本書を脫稿された年代は卷尾に

「天明五年乙己十二月　　伊勢人　本居宣長」

とあつて、當時翁は五十六歲のときであつた。門人渡邊重名の求めによつて執筆されたと傳へられてゐる。翁の一代の中には多くの異端者と論爭されたことがあつて、これなどはその重要なもの丶一である。他にも直毘靈、(これは四十二歲のとき著はされたもの)について市川匡麻呂の非難に答へて「葛花」を書かれたことがあり、上田秋成の邪見を破るために呵刈葭一卷を公にされたこともある。前者は本書よりも數年前に、後者は數年後に成つたものでいづれも汎ねく世に知られてゐる。それ等の撰著を通覽してみても、「道」のために盡された翁の意見がよく窺はれる。

古史成文

一

本書は平田胤篤の生涯に於て一期を劃すべき著作である。その著述された文化八年十二月も從て最も記憶さるべき時である。彼は廿九歳のときから少しづゝ入門の弟子があるやうになつたけれども、毎年數名（二—四名）に過ぎなかつた。三十六歳のときはじめて十三名の新弟子を得たと傳へられてゐる。その年は即ち本書著撰の歳に當る。

本書は全部十五卷で神代から推古天皇までを著したものといはれて居るけれども、刊行されたものだ神代卷だけあり、他は恐らく未定稿に了つたものか或は計畫だけに留つたものであらうと思はれる。內容は古事記の體を模して、同書はいふまでもなく日本書紀古語拾遺風土記などの類を參照してすべての事實を盡す考への下に書れたものである。本書の註釋書が即ち古史傳であつてすべて三十七卷の大部を神代だけに費してゐる。（人皇の御代はない）

註

(1) 本書の刊本には文政六年九月十五日治部卿藤原貞直の序があつて、その卷尾に「伊吹廼舍先生著撰書目」

といふものが添へられて居る。その第一に「古史成文十五卷神代部三卷刻成」と見えて居る。

篤胤が本書を著はすに至つた徑路については古史徵開題記が詳に傳へて居る。よつて左にその大要を述べよう。

二

文化八年十月のことであつた。柴崎直古（駿河府中の人）が江戸から郷里へ歸らうとするとき、かねて同好の人々とも、會談のうへ、篤胤をその邸に迎へて親しく指導を求めるやうに努力した。彼もその志を納れて彼地に下向し、斯道のためには晝夜の分ちもなく從來の教授につとめた。さういふ風にして年も暮れかゝつた時、彼は次のやうなことを弟子達にたづねた。

おのれも早くより思ふ旨あり、何處にまれ靜なる家の一間なる處を……。

かくて撰ばれたところは柴崎家の一室であつたのである。かういふ希望の洩されたわけはいふまでもなく、專心著作に耽らうとするのであつた。開題記は前文について、

さて有合ふ古書とも參らせよとあるに鄙ひたる鄕の初學のともから何をか持はべらむ有ふれたる書とも五部六部とり集めて奉る。

と傳へてゐる。かうして、すべての準備が整へられたとき「汝等は家の業事しげかるべしよく營

みて勿おこたりそ」と訓示し、十二月五日から全力をその新著のために傾注し出したと傳へられて居る。

註

本節はすべて古史徵開題記の卷頭序文の次にある「古史徵のそへごと」によつた。次節の記載もさうである。

三

右のやうにして書き始められた本書の脫稿を見るまでは、殆ど超人的な努力精進がつゞけられたのである。

夜の衾も近づけ給はず……夜も日もすから書をよみかき筆とり……朝夕の御饌參らす間もあからめもせで書よみつゝ云々。

かういふ狀態が二週日に近づいたとき、その過勞を憂へて臥床をすゝめる弟子の言を諒して快く眠つた。かくて再び起きてその勞作をつゞけながらその年を終つたのである。新年の慶賀を述べに行つた弟子に彼はその悅びを洩して、

ほゝゑみて去年とやいはむ今年とやいはむよべの丑の時の鐘打ころまでに書をへたるこの書よ、汝がねもころに請へるにうづなひ……年の內にかき竟させ給へと神たちに宇氣比まをしたりしかひ有げなり。

といひながら、成稿した本書を示したさうである。これだけの記載から考へても、本書の完成した事情とか、執筆中に於ける著者の努力とかゞよく知り得られる。また篤胤がどの位まで斯道に熱誠であり、良好な體質の所有者であつたかゞわかると想ふ。宣長にしても篤胤にしても、斯道献身者の事蹟の中には後人を感激せしめることが多いのであるが、古史成文執筆當時の精勵と熱誠もその一例として永く傳へらるべきものであらう。

異稱日本傳

一

祖國の歷史を考へたり、文化の系統推移を調べたりするためには、二方面から文献を涉獵するの要がある。その一は內國のそれであつて、これについては今こゝでいふの要を認めない。猶それから他の一は海外の文献を博覽することを努めなければならない。けれども、此方面は種々な事情に制限されるから、至難な事業である。よつて近代學界の識者等は、どうにかしてその難關を打開しようとつとめて已まなかつた。松下氏の手に成つた本書なども、さういふ篤志家の努力と貢献を語る貴重な遺寶である。のみならず、少なくも今日から、徵證し得られる限に於ては、

さういふ風な成書の先頭をかざるものが、この異稱日本傳である。

本書の著作年代は序文によつて明にされるまたそれによると、松下見林の精神もよく窺はれるから、次に主要な字句を示さう。

故異邦之書隨レ時志ニ我方宜美惡一居レ多昔舍人親王撰ニ日本書紀一往々引以備ニ參考一余亦竊比、以ニ三餘之暇一常閲ニ載籍一其間得ニ我遺事一則集錄之、……分爲ニ上中下三卷一上卷則集ニ漢魏晋宋齊梁隋唐五季宋元書一中卷則集ニ明書一下卷集ニ斯盧書一名曰ニ異稱日本傳一……。

元祿戊辰九月已亥　　西峰散人自序

卽ち撰者は奈良朝の昔、舍人親王が國史修撰に際して執らせられた御態度——外籍を引いて考據の資とすること——を範とし奉つたのである。かういふ事情であつたから、本書を手にして見林の功績を想ふ者は、更に遡つて、皇子の遺德を偲ばなければならぬ。本書の特色はこればかりではない。更に序文の一節を顧みよう。

而諸書之所述、是非混淆、虛實紛糅……豈可ニ盡信一哉、當主ニ我國記一徵レ之……而論辨取舍則可也、於是……今加ニ今案一釋ニ同異一正ニ嫌疑一有ニ餘義一必兼註レ之。

道に忠なるものといふべきである。かういふ苦心の成果としての本書が保持する價値は永久に渉るものと認められる。

二

本書はどういふ程度に外籍を集錄したか、これについても著者はその用意を忘れなかつた。引用書目表が卽ちそれの解答となる。

上　巻

これは更に三巻に分たれて居り、その收錄書目は次表に示す如くである。

一　山海經等で八部（按文に引いた者を除く。以下同じ）
二　舊唐書以下十五部
三　太平御覽以下廿八部

中　巻

八巻に分たれる。

一　皇明資治通紀以下三部
二　兩朝平攘錄
三　高皇帝御製文集以下廿二部
四　閩書
五　圖書編
六　武備志
七　續文章正宗以下十八部
八　蒼霞草以下三部

下　巻

これは四巻になつてゐる。

一―二　東國通鑑

三　三國史記以下九部

四　經國大典以下五部

上巻　六十二部

中巻　五十巻

下巻　十五部

以上を合算してみると、

かうなつて、百廿七部である。（按文に引いたものは算入しない。）その範圍は必しも廣しといふわけにもゆかぬけれども、第一著としての名譽は充分に擔ひ得られる。先哲叢談の傳へるところによると、彼はその志を果すまでに三十餘年を費したさうである。のみならず、その完成を見る前に近隣の失火にあつたことがあり、僅に難を免れたといはれてゐる。そのとき恰も外出して、知らずにかへつてからも、たゞ日本傳草稿の安否をきいたばかりだつたと傳へられて居る。彼は本書の完成にその位まで熱烈な態度を執つた。學界の佳話として後人の歎稱を値するものといはねばならぬ。

三

次に少しく類似の成書について述べよう。それによつて本書の有する價値と意義とはより多く認められるのである。

國史外考　二十三卷（未定稿）

著者は林恕で内閣文庫の所藏

日本外志　三十卷

これも未定稿で、今はその約半部を散佚し去たらしい。山本北山の著

隣交徴書　六册

これは詩文だけに限られてゐる。伊藤松貞の著

異稱日本事實　百卷

今日その傳本があるかどうか知れない。先哲叢談による　増島濟水の著

異稱日本外史拾遺　百六十四卷

山本北山の著を異稱日本外史ともいつたらしく、その拾遺であるが、今存否を明にしない。これも先哲叢談による。

異稱日本傳補遺　無卷數

本下元香の著、未定稿で百五十餘部の引書から成つて居た。今傳はらない。

同　一册

著者を知らぬ。引用書は曹大理集以下十九部である。

續異稱日本傳　三卷

十五册本で、小原良直の著、本居大平門の和歌山藩士で、別に再續異稱日本傳をも著した。

同　二册

引用書は江南經略以下七部で、著者は明でない、しかし山崎美成らしく想はれる。

上にあげた位に多くの類書があるところを見ても、見林の事業が學界を刺戟を與へた程度が推察されようと思ふ。

四

終に一言を添へる。續異稱日本傳は同名異書が多い。それは前掲の二著からでもいへるけれども、その他に最大な内容を持つ別著があることを忘れてはならぬ。卽ち尾崎雅嘉の著作である。舊蓮池藩侯鍋島子爵家に全部所藏されて居つた。今は他に轉寫本もあるやうで、上野帝國圖書館も一本を收藏して居る。卷數は三百三十卷百册に餘る大著であつて、尾崎雅嘉の手に成つた。菅茶山がその序文を書いて、一節に、

先輩松下見璘……有二異稱日本傳之著一……而猶多二脫漏一不レ備讙者恨焉、浪華尾崎先生博覽强記……增補此書、

頃將レ卒レ業、爲卷凡三百三十、可レ謂レ勤矣。

から述べて居る。本書の著者は群書一覽の著者で、藏書の豐富を以て知られた人物である。その人にして始めてこの撰があり得たのであらうと思ふ。以上にあげたやうな多くの類書はみな維新前のものであるから今日のやうに容易く中華の文獻を利用し得られる時代の人が見たならば、意に充たぬことの多かるべきは勿論であらう。

五

次に少しく見林の生涯と他の著者について附記しよう。近代著述目錄によると次の諸著があげてある。

習齋規格　一
運氣論疏抄　一三
本朝學源　一
異稱日本傳　十五
前王廟陵記　二
國朝佳節錄　一

評閲神代卷　二
公事根源集釋　三
神國童蒙先習　一
職源抄參考　五
見宜翁傳　一
大玉命社記　古語拾遺句解ニ附ス　一

三代實錄　コレハ訓點セシナリ　五十

本文は勿論そのすべてを盡して居ない先哲叢談

續編卷三には

諸大臣執柄年表　十二
將軍稱制年表　八
國朝佳節錄補遺　二
異稱日本傳拾遺　二十

神國言葉遺式　二
國朝諸禮分類　八十
讀史隨錄　十
神國字源考　二
西峯筆記　二
雜說考　一

（前揭の書と重複する分を省く）

右のやうな多數の撰著があつたけれども、今日はたゞその一部しか傳存せぬのである。しかし、かういふ業績を殘した見林は好個の學徒であつた。寛永十四年に生れ元祿十六年十二月に六十七歲で歿するまで、筆硯文籍に親しみつゞけてゐた。その師は古林見宜で醫として知られた人物である。見林は十三からその門に入つた。――そのときの紹介者は天學上人で、新田氏の系を引いて居るといふ見林もまた楠氏の庶族だとの說がある。眞僞は知れない。――拔群の天分を持つた少年はすぐ門下中の秀才に列せられてしまつた。

一家をなしてからも彼の篤學は尊敬すべきものがある。長崎から絕えず新書を求めてゐたし、

内國の書物も求めて殆ど十萬卷の藏書を擁する身となつた。しかも開放主義で何人にも借出を辭さなかつたさうである。數理にも長じ家計も豐裕であつたけれど、自ら省みて卑劣な態度は執らなかつた。高松侯や京都所司代戸田忠昌に信任されたことは、學識の然らしめたところで當然なことである。（以上は先哲叢談續編卷三による。）

國意考

國意考

ある人の、我は歌やうのちひさきことを、心とはし侍らず、世の中を治めむずる、から國の道をこそといふ。おのれ、たゞ笑てこたへず。後に、また其人にあひぬるに、萬のことを、ことわるめるに、たゞ笑にわらひておはせしは、故ありやなどいふに、おのれいふ、そこのいふは、から國の儒とやらむのことか。そは天地のこゝろを、しひて、いとちひさく、人の作れるわざにこそあれといふに、いとはら立て、いかで此大道を、ちひさしといふにやといふ。おのれいはく、世の中の治りつるやいなや、承りぬべしといへば、堯・舜・夏・殷・周などをもて答。おのれいふ、其後にはなきや、答、なしと。また問、凡から國の傳れる代は、いくばくぞや。こたふ、堯より今まで幾ち云々。また問、さらばなどや堯より周までのさまなる、其後にあらざりけむや。たゞ百千々の世の、いとむかしのみかたよりて、さるよきことのありしぞ。そはたゞ、むかし物語にこそありけれ。見よ見よ、世の中のことは、さる理りめきたることのみにては、立ぬ物と見ゆるをといへば、此人、いよゝはらだち、むかしのことしかじかと解。おのれいふ、なづめり〳〵、かの堯は、舜のいやしけなるに讓れりとか。天が下のためなることはよき

〔堯〕五帝の一、帝嚳の子、名は放勳、支那太古の聖主也

〔舜〕五帝の一、顓頊七世の孫名は重華、堯に仕へ後ち其禪を受けて帝位に卽く、其德堯と共に後世に併び稱せらる。

〔夏〕舜の臣禹、舜の禪を受けて建てし國、第十七代桀王に至りて亡ぶ。

〔殷〕商王、成陽の桀を亡して建てし國、もと商と號す、第廿八代（異說多し史記卅一代）紂王の時滅亡す。

〔周〕武王の紂を亡して建てし國、第十三代平王、京を鎬京より洛邑に遷す、依て其の後を東周とも云へり、第三十七代赧王に至り東秦に滅さる

やうなれど、こは皇御國にては、よしぎらひものてふ物にて、よきに過たるや。さるからに、ゆづらぬいやしげなる者の出て、世をうばひ、君をころしまつるやうになれり。こはあしぎらひ物なり。かくよきにすぐれば、わろきにすぐることの出るぞかし。又、孟子とかいひけむ人は、堯・舜の民は、家をならべて封ずべしといへり。是をおもふに、舜の父は、めくらものとかいふは、子のよきを見知らぬ故にや。この堯の民、舜の父なれど、いかで封ずべき人ならむ。舜の後を禹といふ、此父はわろ人にて、遠き國にながしつるとか。こは舜の民にて、禹の父なるに、また封がたき人ならずや。然らば、孟子も、今の世にいふ、勸化の口さきらのみなりけり。また殷の世は、いくらつゞきしにや。其始はよき人とて、禹の世を讓りつるといへり。さらば、其つぎ〳〵、などやよき人につたへざりけん。末にたぐひなき紂とやらんいふわろ人のいづるとか。さらばよきに讓りしは、惟上つ代一代二代にや、それもとほらぬわざなりけり。さて周の文王とやらむは、ひとかたをだも知りたるに、ようせずば、身のわざはひと成べけれ。紂王のわろきによりて、中々に、人をなづけなどせしはさること也。武王の時、紂をうちしを、ことわりあるいくさとやらんいへど、伯夷・叔齊がいさめしとかいふを、孔子てふひとも、よき人とのたまひしとか。さらば武王をいかにいはん。まことに義ならば、紂の後をも立つべきを、それが末を、韓などへはふらしやりて、など、みづからの子うまごにゆづりけむ。

○さて、周公、政をとりて、殷の諸侯を、四十餘りほろぼしけむこと、孟子てふ文にみゆ。此

〔孟子〕魯の公族孟孫の後、名は軻、孔子の意を述べて孟子七篇を作る。

〔舜の父〕瞽叟也。

〔此父は云々〕禹の父は帝顓頊の子、名を鯀といふ、堯の時水を治むること九年にて成らず、攝政舜これを羽山に謫し、後ち誅す。

〔文王〕姫姓、名は昌、古公亶父の孫也、守文よく周の基礎を固む。

〔武王〕文王の第二子、名は發也。

〔伯夷叔齊〕共に孤竹君（名初）の子也。武王紂を討つに及びその不倫を諫めしも聽かれず、周粟を食むを義に非ずとなし、首陽山に遁れて餓死す。

〔周公〕名は旦、文王の第四子也、兄武王を助けて其覇業を成さしめ、王崩じて其子成王立つや旦、政を攝すること七年、禮を制し樂を作し、以て周家の治を爲せり。

〔文帝〕漢第三代の皇帝にして、名は桓、高帝の子也、呂氏の亂の後を承け、深く意を民治に用ひ、産業を勵まし租税を減ぜしかは、吏民安樂し漢室また安らかなるに至れり。

四十あまりの侯、みなわろ人にあらむか。周公にあだなふまゝに、しひてほろぼせしとしるべし。かくするが義といふものにや。そのさかえは、八百年とかいへど、初二代にて四十年ばかりは、治れりといはんか。やがていと亂て、なか〳〵おとろへにけり。其四十年ばかりの間、周公てふよき人は、弟によこしませられて、外へまかりつるとか。世の中のみだれは、世の中のわざにもといふべきを、兄弟しもよこしませるは、内のみだれにて、亂の甚しきものなり。さらば四十年の間も、治れるには侍らざりけり。

○それよりのちは、漢の世に、文帝とかいひし時、暫治まりけむかし。さていやしげなるひとも出て、君をころし、みづから帝といへば、世の人みなかうべをたれて、順がひつかへ、それのみならず、四方の國をば、えびすなどいひて、いやしめつるも、其夷てふ國より立て、唐國のみかどとなれるときは、またみなぬかづきてしたがへり。さらば夷とて、いやしめたること、いたづらごとならずや。はた世擧ていへる語にはあらざるべし。如レ是世々にみだれて、治れることもなきに、儒てふ道ありとて、天が下の理りを解ぬ。げに打聞たるには、いふべきこともならざるべう覺れど、いとちひさく理りたるものなれば、人のとく聞得るにぞ侍る。先ものの專らとするは、世の治り、人の代々傳ふるをこそ貴め、さる理り有とて、生てある天が下の同じきに似て、異なる心なれば、うはべ聞しやうにて、心にきかぬことしるべし。然るを、此國に來たり傳ては、唐國にては、此理りにて治りしやうに解は、みなそらごとのみ也。猶なづ

める人をやりて、唐國を見せばや、浦島の子が、故鄕へかへりしごとくなるべし。

○こゝの國は、天地の心のまに〳〵治めたまひて、さるちひさき理りめきたることのなきまゝ、俄かにげにと覺ることゞもの渡りつれば、まことなりとおもふむかし人の、なほきより傳へひろめて侍に、いにしへより、あまたの御代々々、やゝさかえまし給ふを、此儒のこと、わたりつるほどに成て、天武の御時、大なる亂出來て、夫よりならの宮のうちも、衣冠調度など唐めきて、萬うはべのみ、みやびかになりつゝ、よこしまの心ども多くなりぬ。凡儒は、人の心のさかしく成行ば、君をばあがむるやうにて、尊きに過さしめて、天が下は臣の心になりつ。

○夫よりのち、終にかたじけなくも、すべらぎを島へはふらしたることゝ成ぬ。是みな、かのからことのわたりてよりなすことなり。或人は、佛のことをわろしといへど、ひとの心のおろかになり行なれば、君は、天が下の人の、おろかにならねば、さかえたまはぬものにて侍り、さらば、佛のことは、大なるわざはひは侍らぬなり。

○凡世の中は、あら山荒野の有か、自ら道の出來るがごとく、こゝも自ら、神代の道のひろごりて、おのづから國につけたる道のさかえは、皇いよ〳〵さかえまさんものを、かへす〳〵儒の道こそ、其國をみだすのみ。こゝをさへかくなし侍りぬ、然るを、よく物の心をもしらず、おもてにつき、たゞかの道をのみ貴み、天か下治るわざとおもふは、まだしきことなり。

○さて歌は、人の心をいふものにて、いはでも有ぬべく、世のために用なきに似たれど、是を

〔天武〕舒明天皇の第二皇子、御名を大海人と申す、第四十代の天皇也。

〔大なる亂云々〕壬申の亂也、尙は此亂は弘文天皇御宇のことなれど、古へは弘文天皇を歷代に數へ奉らざりしより、爰に天武の御時とある也。

〔ならの宮〕所謂奈良朝時代卽ち元明元正、聖武、孝謙、淳仁、稱德、光仁、七代の間を云ふ。

〔衣冠〕冠と袍とに指貫を着けたる裝ひを云ふことあるも、爰は衣と冠との義、總じて裝束を云ふ。

〔はふらし〕放ち捨つることにて、茲にては天皇を流し奉るを云ふ。

よくしるときは、治りみだれんよしをも、おのづから知べきなり。孔子てふ人も、詩を捨ずして、卷の上に出せしとか、さすがにさる心なるべし。凡物は、理にきと書ゝることは、いはゞ死たるがごとし。天地とともにおこなはるゝおのづからの事こそ、生てはたらく物なれ。萬のことをも、ひとわたり知を、あしとにはあらねど、やゝもすればそれにかたよるは、人の心のくせなり。知てすつるこそよけれ。たゞ歌は、たとひ惡きよこしまなるねぎごとをいへど、中々心みだれぬものにて、やはらいで、よろづにわたるものなり。

歌のいさほしはすでにいへり。

○天が下の人をまつりごつに、からのこと知しとて、時にのぞみて、人のよくことわらるゝものにあらず。さるかたに、かしこう、げにとおぼゆることといひいづるひとの、おのづから出來るぞかし。たとへば、くすしの、よく唐文よみ知たるが、病をいやすことは、大かた少きものにて、此國におのづから傳りて、何のよし、何のことわりともなき藥こそ、かならず病はいやし侍れ。たゞみづから、其事に心を盡しえたるものこそよけれ。物になづまぬこと也、一たび我よしとおもへることに、引よらせまほしく、儒學生は、中々まつりごち得ぬは、唐國にも、さるものにゆだねて、をさまらざりし世もおほかりけり。

○或人云、むかし此國には、やからうからを妻として、鳥け物と同じかりしを、唐國の道わたりて、さることも心し侍るがごとく、萬儒によりてよくなりぬと。おのれ是を聞て大に笑へる

〔孔子〕叔梁紇の子名を丘、字を仲尼と云ふ、魯の襄公二十二年誕生、周に赴き老子に就き禮を修め、仁義の道を說きて諸國を遍歷す、春秋亂離の時に會し諸侯多くこれを用ひずと雖も、其德を慕ひ門に集る者三千、其言行永く後世に範たり、敬王四十一年卒す。

〔ねぎごと〕祈り願ふ事也。

〔まつりごつ〕政を活用せる語、政治を行ふをいふ。

〔くすし〕醫師也。

〔やからうから〕「やから」は家族(ヤカラ)又は彌屬(イヤカラ)の義、「うから」は氏族(ウヂカラ)の義と云ふ親族をいふ。

〔唐には云々〕同姓不娶は周代の定め也、然れども諸侯を主として立てし制なれば庶人に及ばず、又た春秋時代には諸侯の同姓を娶りし例も少からざりしと云ふ。

〔えびすと云々〕禮記王制篇に、中國戎夷五方之民、皆有性也、不可推移、東方曰夷、被髮文身、云々、南方曰蠻、雕題交趾、云々、西方曰戎、被髮衣皮云々、北方曰狄、衣羽毛穴居、とあり、自ら尊て中國と號し外國を貶せるを云ふ。

を、かたへの人云、唐には、同じ姓をめとらずてふ定はありつるを、おのが母を姦せしことも侍りしからは、只さる定のありしのみにて、いかばかりのわろごとのありけむ、さることをみぬや。同姓めとらずばよからむといひしのみと聞ゆるを、世こぞりて、しかありとおもふはいかが、おろかなるこゝろにや、またさることをば隱していふにや。すべら御國のいにしへは、母の同じき筋を、誠の兄弟とし侍り、母しかはれば、きらはぬなり。物はところにつけたる定こそよけれ。さる代には、年々にさかえたまふを、儒のわたりて、漸に亂れ行て、終にかくなること、上に云如し。如何同姓めとらずなど、敎のこまかなることよしとて、代々に位を人に奪はれ、かのいやしめる四方の國々に、とらるゝやうのことは如何。天が下は、こまかなる理りにて治らぬことを、いまだおもひしらぬおろかなるこゝろに、聞を崇むてふ耳を心とせしよ。いふにもたらぬことなり。

○又、人を、鳥獸にことなりといふは、人の方にて、我ほめにいひて、外をあなどるものにて、また唐人のくせなり。四方の國をえびすといやしめて、其言の通らぬがごとし。凡天地の際に生とし生るものは、みな蟲ならずや。それが中に、人のみ、いかで貴く、人のみ、いかなることあるにや。唐にては、萬物の靈とかいひて、いと人を貴めるを、おのれがおもふに、人は萬物のあしきものとかいふべき。いかにとなれば、天地日月のかはらぬまゝに、鳥も、獸も、魚も、草木も、古のごとくならざるはなし。是なまじひにしるてふことのありて、おのが用ひ

侍るより、たがひの間に、さま〳〵のあしき心の出來て、終に世もみだしぬ。又、治れるがうちにも、かたみにあざむきをなすぞかし。もし、天が下に、一人二人物しることあらむ時は、よきことあるべきを、人皆智あれば、いかなることも、あひうちとなりて　終に用なきなり。今、鳥獸の目よりは、人こそわろけれ、かれに似ることなかれと、をしへぬべきものなり。されば、人のもとをいはゞ、兄弟より別れけむ。然るを、別に定をするは、天地にそむけるものなり。見よ見よ、さることを、犯すものゝおほきを。

○又云、然れども、此國に文字なし。唐國字を用ひて、萬づそれにて知るべしと。答、まづ唐國のわづらはしく、あしき世の治らぬは、いはんかたもさらなり。こまかなることをいはゞ、繪のごとくの文字成けり。今按、□□てふ人の、用ある字のみを擧といへるを見れば、三萬八千とやらむ侍り。譬へば、花の一にも、咲・散・蕊・樹・莖、其外、十まりの字なくてはたらず。また、こゝの國所の名、何の草木の名などいひて、別に一の字ありて、外に用ぬも有。かく多の字を、夫とつとむる人すら、皆覺ゆるかは。或は誤り、或は代々に轉々して、其約にかゝれるも、益なくわづらはし。然るを、天竺には、五十字もて、五千餘卷の佛の語を書傳へたり。たゞ五十の字をだにしれば、古しへ今と、限りなき詞もしられ、傳へられ侍るをや。字のみかは五十の聲は、天地の聲にて侍れば、其内にはらまるゝものゝ、おのづからのことにして侍り。其ごとく皇御國も、いかなる字樣かはありつらんを、かのからの字を傳へてより、あやまり

〔十まり〕十餘り也。

〔天竺〕古へ用ひし印度の通稱也、一切經音義に、或言ニ天竺一、或云ニ身毒一、或作ニ賢豆一、皆訛也正言ニ印度一とあり

〔五十字〕梵字はもと四十七字なりし故その概數を云へるなるべし、西域記に、詳ニ其文字一、梵天所レ製、原始垂レ則四十七言也、乃至、因レ地隨レ人微有ニ改變一、語ニ其大較一、未レ異ニ本源一、云々と見えたり。

〔五千餘卷〕一切經に納めし五千四十八卷の經卷により云へるなるべし。

て、かれにおほはれて、今はむかしの詞のみのこれり。其詞は、また天竺の五十音に同じからねど、萬のことを云樣、五十音の通ふことなどは、又、同じ理りにて、右にいふ花をば、さく・ちる・つぼむ・うつろふ・しべ・くきなどいへば、字をもからで、よしもあしもやすくいはれて、わづらひなし。おらんだには、二十五字とか、此國には五十字とか、大かた字の樣も、四方の國同じきを、たゞからのみわづらはしきことをつくりて、代もをさまらず、ことも不便なり。さて唐の字は用たるやうなれど、古へはたゞ字の音のみかりて、こゝの詞の目じるしのみなり。其暫後には、字のこゝろをも交へて用たれど、猶訓をのみ專ら用て、意にはかゝはらざりしなり。

○かく語を主として、字を奴としたれば、心にまかせて、字をばつかひしを、後には語の主、はふれ失て、字の奴の爲かはれるがごとし。是又、かの國の奴が、みかどとなれる、わろくせのうつりたるなれば、いまはし〳〵、こをおもひわかで、字は尊きものとのみおもふは、言にもたらず。或人猶いふ、夷はさは行ふなるを、たゞ唐ぞ風雅なればしかると、おのれ天をあふぎて笑ふ。其風雅てふは、世の中のこと、物の理りにつのれば人の亂るゝを、理りの上にて、理りにかゝはらず、天地のよろづの物に、文をなすがごとく、おのづから心を治め、なぐさましむるものぞかし。

○且、かしこにも、古しへは繩を結びしとか。其後は木草鳥獸など、萬のかたを字とせしならじや。天竺の五十字も、もとは物のかたちか。何にもせよ、字はやゝ俗にして、風雅なることあ

〔はふれ〕放るゝをいふ。

〔唐〕我國にて唐代に限らず凡て支那を呼ぶに用ふ、寺島良安の和漢三才圖會に、漢與レ唐之治世盛久、故今雖レ號ニ大淸一、倭以爲レ漢爲レ唐、就中唐世、多日本通好、故於レ今稱ニ唐船唐人唐物等一、と見えたり。

〔天をあふぎ云々〕大に笑ふ也、史記滑稽傳に、淳于髡仰レ天大笑、冠纓索絕、と見えたり。

〔繩を結び云々〕結繩時代也、易繫辭に、上古結レ繩而治、後世聖人易レ之以ニ書契一とあり。

〔四方に書き〕四角に書くをいふ。
〔あげつらふ〕論ずる也。
〔神世の巻〕日本紀第一巻、第二巻を神代巻と稱す、後人の名づけしもの也。
〔いとのきて〕遙かに遠ざかりての意也。
〔宋〕五代の末葉、後周の節度使趙匡胤の立てし國、十八世三百二十年にして、衞王の時元に滅さる。
〔儒の道を云々〕宋の周濂溪、張横渠、程明道、程伊川、朱子等の性理の學を主張せるを云ふ。
〔ふつに〕全く也。

るべきや。其後まろきも、四方に書なしなどせしを、それにつけて、又筆法などいふよ、笑ふにたへぬわざなり。いかで此字のうせば、おのづからなる字を天よりえて、國も治り、此爭ひやみぬべし。

○是らは、古への歌の意詞を、あげつろふまゝに、人はたゞ、歌の言とのみ思ふらむや。其いへるごとく古への心詞也。古の歌もて、古の心詞をしり、それを推して、古への世の有様を知るべし。古の有様をしりてより、おしさかのぼらしめて、神代のことをもおもふべし。さるを、下れる世に、神世の巻のことを言ふ人多きが、そを聞ば、萬にかまへて心深く、神代のことを、目の前にみるがごとくいひて、且つばらに、人のこゝろのおきて成さまにとりなせり。いでや、然いふ人の、いかにしてさは甚きや。さもこそふりにしこと。よく知つらむとおもひて、それがかける物などを、見聞ものするに、古へのことは、一つも知り侍らざる也。然るを、古の人の代をしらで、いとのきて、神代のことをば知るべきものかは。こはかの唐國の文どもすこし見て、それが下れる世に、宋てふ代ありて、いとゞせばき儒の道を、また〳〵狹く、理りもていひつのれるをうらやみて、ひそかに、こゝの神代のことにうつしたるもの也けり。さる故に、ふつに文みぬ人は、さもこそおもふを、少しもやまとの文、唐の文しれる人は、おもひそへたることを知りて笑ふぞかし。そも〳〵、かしこにも、いと上つ代には、何のことか有し。其後に人のつくりしことゞもなれば、こゝにも作り侍るべきことゝおもふにや。人の心もて作れることは、違ふ

〔老子〕姓は李、名は耳、伯陽と字す、道德を修め自から隱れて名なきを以て務とす、周の衰ふるを見、去りて關に至り、老子上下篇を著し、道を述ぶること五千言後ち去りて終る所を知らず。

〔すべらき〕統君（スミルキ）の轉、天皇を申す。

〔おみ〕臣也、「オミ」は大身の略、君に仕ふる身を敬して云へる詞なりと云ふ。

こと多ぞかし。かしこに、ものしれる人の作りしてふをみるに、天地の心にかなはねば、其道用ひ侍る世はなかりし也。よりて老子てふ人の、天地のまに〳〵いはれしことこそ、天が下の道には叶ひ侍るめれ。そをみるに、かしこも、たゞ古へは直かりけり。こゝも、只なほかることは、右にいふ歌の心のごとし。古へは只詞も少く、ことも少し。こと少く心直き時は、むつかしき教は用なきことなり。教へねども、直ければことゆく也。それが中に、人の心はさま〴〵なれば、わるきこと有を、わろきわざも、直き心よりすればかくれず。かくれねば、大なることにいたらず。たゞ其一日の亂にてやむのみ。よりて古へとても、よき人のをしへなきにはあらねど、かろく少しのことにて足ぬ。ただ唐國は、心わろき國なれば、深く教てしも、おもてはよき樣にて、終に大なるわろごとして、世をみだせり。此國は、もとより人の直き國にて、少しの教をも、よく守り侍るに、はた天地のまに〳〵、おこなふこと故に、をしへずして宜き也。さるを、唐國の道きたりて、人の心わろくなり下れば、唐國ににたるほどのをしへをいふといへど、さる教は、朝に聞て夕は忘れゆくものなり。我國のむかしのさまはしからず。只、天地に隨て、すべらぎは日月也、臣は星也、おみのほしとして日月を守れば、今もみるごと、星の月日をおほふことなし。されば天つ日月星の、古へより傳ふる如く、此すべら日月も、臣の星と、むかしより傳へてかはらず、世の中平らかに治れり。さるをやつこの出て、すべらぎのおところへ玉ふまに〳〵、傳へこし臣もおとろへり。此心をおして、神代の巻を言べし。そをおさむに

は、古の歌もて、古への心詞を知るが上に、はやう擧たる文どもを、よくみよかし。

○或人、此國の古へに、仁・義・禮・智てふことなければ、さる和語もなしとて、いといやしきことゝせるは、まだしかりけり。先唐國に、此五のことを立て、それに違ふを、わろしとしあへりけむ。凡天が下に、此五つのものは、おのづから有こと、四時をなすがことし。天が下のいづこにか、さる心なからむや。されども、其四時を行ふに、春も漸にして、長閑き春となり、夏も漸にして、あつき夏となれるがごとく、天地の行は、丸く漸くにして至るを、唐人の言のごとくならば、春立ば、すなはちあたゝかに、夏立は、急にあつかるべし。是、唐の教は、天地に背て、急速に佶屈也。よりて人の打聞には、方角有てきゝやすく、ことわりやすけれど、さは行はれざるものなり。天地のなす春・夏・秋・冬の漸なるに背ける故也。天地の中の蟲なる人、いかで天地の意より、せまりていふ教を行ふことをえむや。凡天が下のものには、かの四時のわかち有ごとく、いつくしみも、いかりも、理りも、さとりも、おのづから有こと、四時の有限りは絶じ。それを、人として、別に仁・義・禮・智など名付るゆゑに、とることせばきやうには成ぞかし。たゞさる名もなくて、天地の心のまゝなるこそよけれ。さる故に、此國久しく治るをしらずや。目の前に、おのがみなれたることをのみ、おもひせまるをこ(嗚呼)人のことは、言にもたらねど、おもひわかたぬわらは(童)べのために、猶いはん。

○唐國の學びは、其始人の心もて作れるものなれば、きくにたばかり有て心得安し。我すべら

〔まだし〕未だし也未だ正しからずとなり。

〔五のこと〕五常即ち仁義禮智信を指す、孟子に仁義禮智を四端と云ひしが董仲舒に至り、始めて信を加へてこれを五行に配せる也、漢書董仲舒傳に、「仁義禮智信五常之道、王者所レ當ニ修飾一」とあり。

〔をこ〕愚かしきを云ふ、又、支那後漢の頃の南蠻に烏滸の國あり、其風俗理非を顚倒して笑ふべきこと多かりしより其語暗合して、後には混合せり、三代實錄「内藏富繼、長尾末繼、伎善ニ散樂一、令ニ人大咲一、所レ謂嗚呼人近レ之矣」とあり。

〔ものゝふ〕武士を云ふ、和訓栞に、ものゝふ、物部と書けり、ものゝべとも云ふ、されど少しは差別ある事なり、神武帝東征し給ひし時、饒速日命をして、內物部を率ひて武威を示させたまひしより、物部氏の任となれるをもて、後世に至ても、武士をもはら、物のふといへる也、と見えたり。

〔あや〕文(アヤ)を織り出したる織物を云ふ、仲哀天皇九年新羅始めて我國に獻じ、應神天皇の御宇より我國にてもこれを織り出せり。

御國の古への道は、天地のまに〳〵丸く平らかにして、人の心詞に、いひつくしがたければ、後の人、利えがたし。されば古への道、皆絶たるにやといふべけれど、天地の絶ぬ限りは、たゆることなし。其はかりやすき唐の道によりて、かく成れるばかりぞや。天地の長きよりおもへば、五百年千年、またゝきの數にもたらぬことなり。ことせばく人のいひしことをあふぐてふ類には侍らず。凡天地のまにまに、日月を初て、おのづから有物は皆丸し。是を草の上の露にたとふ。その露、くまある葉に置時は、したがひてことなる形となれど、又平らかなる上にかへして置ば、もとの丸きがごとし。されば、世を治めたまふも、此丸きをもとゝしてこそ治るべけれ。けたにことせりがましきは治らぬと、唐の世をみて知べし。かくて天地の心なれば、さるべき時には、もとにかへしたまふべし。いやしくせばき人の心もていそぐは、かへいてみだれとなれゝ。唐人は、上なる人は、威をしめし貴をしめすといへども、おろそけなるをしめすはよし。尊きをしめすは、みだるゝはし也。其威をしめす、ものゝふの道の外なし。是をわすれずして行ふべし。ことに我すべら御國は、此道もて立たるを見よ。又おろそけなるをしめすのよきは、上のおろそけなるをみて、かたじけなきおもひをおこし、おのがじゝも、夫にしたがひて、こと少に成ぬ。事の少ければ好み少し、好み少ければ心易し、心易ければ平らかなり。貴をしめすのわろきことなり。先宮殿衣服をはじめて、宮女衣をかざり、宮人あやをまとひするを見て、誠に貴とみて、心よりあがむる人は、貴をしめさずとも、事もあらじ。夫

〔ゆふ〕古へ楮の皮にて製せる布を云ふ、和訓栞に、「ゆふ、萬葉集日本紀に木綿を訓ぜり、潔白清淨の義也、もと楮樹の皮を剝ぎて造れるよし古くいへり、されば寶基本紀に、謂下以二穀木一作二白和幣一上名二號木綿一と見ゆ、云々、今の木綿にあらず」と見えたり。

〔黑葛卷の太刀〕通釋に、つゞらを以て柄鞘共に卷けるなりと云へり。

〔なみせられ〕ないがしろにせらるゝ也、「なみす」は無き者にする義なり。

が中に、天地に心いたれるを、ますらをとして、かくてあらむこそ本意なれ。いとせばき命かは、天に任せて行はんなどおもふものも、たま〳〵有て、うばゝむ謀をなすめり。又さのみ勢及ばぬまゝに、おもひしひてあるも、心のねたみ、いかばかりならむや。いでや我こそあれ、いか成所よりか亂よかし。ついでにのりて、さるべく謀らんとおもふ心は、宜者は皆侍るべし。

○たゞ其國の、天地のなしのまに〳〵、古へよりなし來るがごとく、板のやね、土の垣、ゆふのあさの衣、黑葛卷の太刀とやうにして、すべらき御みずから、弓矢を携へて獵したまふ程ならば、などか、かくうつりゆかむ。人の心は、うつくしきにつき、高ぶるを好むもの成に、唐人のさまを羨てせし頃より、たゞ宮殿衣服のみよろしく成て、上の身いと貴に過て、心はおろかに、女のごとくなりたまひ、かしこきにあまりて、上の位をしのぎ、まつりごと臣に取れたまへれば、上は御身のみ貴くて、御心はいと下れり。臣ぞ古への上のごとく成て、唐のごとく名をおかし、上を穢することはせねども、上はあれども無が如く成ぬ。さらば臣は、夫にてとほるにやと見るに、其古、臣も後の臣になみせられて行て、其名の傳るのみなり。是こゝの道を忘て、人の國にならひたるあやまちよりなれること也。或人問、さらば、古へは、皆おしき人はなきか、世は亂れざるかと。答、此問は、またよく直きてふ意をしらぬ故なり。凡心の直ければ、萬に物少し、もの少ければ、心にふかくかまふることなし。さて直きにつきて、たま〳〵わろきことをなし、世を奪んとおもふ人もまゝあれど、直き心より思ふことなれば、かくれなし。

かくれなければ、忽に取ひしがる、よりて大なる亂なし。直き時は、いさゝかのわろき事は常あれど、譬へば村里のをこのものゝ、ちからをあらそふがごとくにて、行ひ鎭めやすき也。

○世の中の生るものを、人のみ貴しとおもふは、おろか成こと也。天地の父母の目よりは、人も獸も鳥も蟲も、同じことなるべし。夫が中に、人ばかりさときはなし。其さときがよきかとおもへば、天が下に一人二人さとくば、よきことも有べきを、人皆さとければ、かたみに其さときをかまふるにつけて、より／＼によこしまのおこれるなり。夫もおのづからこと少き世には、思ひよもにはせ、たゞまのあたりのみにして、ことをなす故に、さとさも少し。よりてちひさき事はあれど、大なることなし。たとへば、犬の其里に、多く他の里の犬の來る時は、是をふせぎ、其友の中にては、くひもの、女の道につきては爭へども、たゞ一わたりの怒にして、深くかまふることなきがごとし。唐にては事を人にしらせず、上なるものゝみ知ておこなふぞよきとて、萬の事ををぐらく。たとへば堯・舜を、佛家の云あみだ釋迦のごとく立て、其次の夏・殷・周を證據とする也。堯・舜も夏・殷・周も、いひ傳ふるごとくはあらで、つとわろきことの多かりけむを、さては教にならずとして、かくして本ををぐらくして、人をまどはしむる也。是を傳へて、此國にも、のち／＼は、さることをいひおもへども、今おもふに、さては天が下の人、よく心得ず。上つ代の事をも、何もみな少しも僞らずいひ開て、天が下にものなきことをしらせて、後に、然はあれど、かく後の世となりては、とも有べしかくすべしと、よきほど

〔萬の事ををぐらく〕萬事小暗き也。

〔あみだ〕阿彌陀也無量壽とも譯す、淨土に生すと云ふ如來の名也。

〔釋迦〕印度迦毘羅城主淨飯王の子、我國綏靖天皇の二十五年に生る、四門出遊の途上生老病死の相を觀て世を厭ひ、宮殿を出でて出家し、苦行數年人天の師となり、更に四方を遊歷して衆生を化導すること四十餘年我が懿德天皇二十四年沙羅雙樹下に入寂す。

（經濟）國を經（カハ）り世を濟ふを云ふ

（かつ〳〵）相應にの意也。

（こと成る）異る也。

（天地の父母）天地は萬物創成の元なる故云ふ、書經泰誓に、惟天地萬物父母、惟人萬物之靈、と見えたり。

（はらから）同胞即ち同母をいふ。

に敎を立べきもの也。扨、少も物學びたる人は、人を敎へ、國を經濟とやらむをいふよ。かれが本とする孔子のをしへすら、用たる世々、かしこにもなきを、こゝにもて來て、いかで何の益にかたゝむ。人は敎にしたがふ物と思へるは、天地の心を悟らぬゆゑなり。をしへねど、犬も鳥も、其心はかつ〳〵有ば、必四時の行はるゝが如し、同姓をめとらずといふを、よしとのみ思ひて、此國は兄弟相通たり、獸に同じといへり。天の心に、いつか鳥獸にことなりといへるや。生とし生るものは、皆同じこと也。暫く制を立るは人なれば、其制も國により、地により、こと成るべきことは、草木鳥獸もこと成が如し。然れば、其國の宜に隨て出來る制は、天地の父母の敎也。此國のいにしへのはらからを兄弟とし、異母をば兄弟とせず。よりて、古へは人情の直ければ、はらから通ぜしことはなくて、異母兄弟に通ぜしは常に多し。たま〳〵はらからの通ぜしを、おもきつみとせし也、物の本をいへば、兄弟姉妹相逢て、人は出來べきことなり。然れども、人の世と成りて、おのづから、はらからの制は有しぞかし。其獸にわかたむとして、同姓をめとらずてふ國の古へは、母を姦したることさへ見ゆる。たま〳〵文に書出たるをおもへば、隱しては、いかなることかせしならむ。ふと一度制を立れば、必、天が下の人、後の世迄守るものとおもふは、おろかなるわざなり。其同姓おかさぬ敎も、守るほどならば、君を弑せんかは。君を弑し父をころす制は破れて、同姓めとらぬを、てがらとおもへるは、如何なる愚昧にや。凡天が下は、ちひさき事は、とてもかくても、世々すべらきの傳りたまふこそよ

けれ。上傳れば下も傳れり。から人の云如く、ちりも動ぬ世の百年あらむよりは、少しのどには有ども、千年治れるこそよけれ。此天地の久しきにむかへては、千年も萬年も、一瞬にもあらねば、よきほどに、よきもあしきも丸くてこそよけれ。方なることわりは益なし。

○佛の道てふこと渡りてより、人をわろくせしことの甚しきは、いふにもたらず。其誠の佛心は、さは有べからず。それを行ふものゝ、おのが欲にひかれて、佛をかりて、限りもなきそらごとどもを云ぞかし。それもたゞ、人にのみ罪あることにいへり。生とし生るものは同じ物なるに、いかなる佛か、鳥獸に教たるや。さてむくひなどいふことを、多くの人さることゝおもへり。其事古世よりの證どもいはむもわづらはし。人の耳にも猶疑ぬべし。たゞ今の御世にてたとへむに、先罪報は、人を殺せしより大なるはなかるべし。然るに、今より先つ世、大きに亂て、年月みな軍して人殺せり。其時、一人も殺さで有しは、今のなほ人どもなり。人を少し殺せしは、今の旗本侍といふ。今少し多く殺せしは、大名と成ぬ。又、其上に多く殺せしは、一國のぬしと成ぬ。さて、そを限なく殺せしは、いたりてやむごとなき御方とならせたまひて、世々榮え給へり。是に何のむくひの有や。人を殺も蟲を殺も、同じこと成を知べし。すべてむくひといひ、あやしきことゝいふは、狐狸のなすこと也。凡天が下のものに、おのがじゝ、得たることあれど、皆みえたること成を、たゞ狐狸のみ、人をしもたぶらかすわざをえたるなり。もし、今往昔、人多く殺したれば、うまごに報やせんとおもふ人あれば、狸やがて知て、

〔のどに〕「のどかに」といふに同じ。

〔なほびと〕只人に同じ。

〔旗本侍〕旗本は陣中本營の義にて、轉じて本營に詰めて主將に直隷せる武士の稱なりしが、江戸時代には、幕府に直屬せる臣下の内、一萬石以下の所領を有し、將軍に拜謁し得る家柄の士を云へり。

〔大名〕もと名田を多く所領せるものの稱、鎌倉時代よりは名田に限らず土地を多く領せる武士を云ひ、江戸時代には幕府に直隷せる一萬石以上の士人を云ふ。

〔やむごとなき〕貴きをいふ。

〔おのがじし〕各自に也。

〔あはれ〕感動詞、あゝと云ふに同じ。

〔元帥〕總大將を云ふ、左傳僖公二十七年に、作三三軍一謀二元帥一、とありて、其注に、元帥三軍統領也、とあり。

〔うめり〕倦む也。

〔時しあらば〕しは彈辭の助詞、時機だにあらば也。

むくひの色をあらはして、なぐさみとすべし。たゞ人多く殺せしは、ほまれぞかし。もし此後もさる世にあはゞ、我なほ多くころして富をまし、名を擧むとおもふには、狸もえよりがたし。然るに、かく治りては、さることもなければ、はへ蚊を殺すすら、いらぬことよといふ樣になりて、僧にも狸にもばかさるれ。

○ものゝふの猛きを專らとして、世の治るてふことにつけて、或人云、今見るに、軍の法まねぶは、いかで軍あれかし、あはれ元帥と成らむ。又つはものゝ道をえたる者思へらく、あはれ世亂れよかし、一方を防ぎ、いかなるつよきものにても、我むかひて殺してむと。かゝれば世の治りの爲わろしと、おのれいふ。しからず。こは人のこゝろをしらぬものなり。みづからのこゝろをかへり見よ。大平に生れて、させることもなきには、大平にうめり。さる時には、かくてのみやは有べき。古へ我おや／＼の事をおもひ時しあらば、よき品になりなむを、今いかにせんとおもひて、成ぬべきわざをして、命を終るのみなり。心の内に思ふことあれど、時のいきほひにしたがひて過すのみ。たけき道をまねぶ人は、しかのみにて、世の亂れよかしと思へど、亂るゝものにあらず。一人二人、其心のまゝにせんも、世の中に隨はでは、今日もへがたければ、せむかたなしとて、ことをかくしてをりぬ。人の心は皆さるものにて、上に猛き威あれば、皆心ならねど、しばし隨ふのみ也。然らば猛き道をまねび、子孫に傳へて、一度の用に立むとするも、又よからずや。さる人は、心こはくわろしといへど、さることをよく學ぶ人は、こはき

物にあらず。中に一人こはきもあれど、武をまねばで、こはくわろきものいくそばくぞや。たまく〱有をもて、かたらすることなかれ。いでもし事あらむ時に、其心こはきやつも、一かたたのもしきもの也。世はいつまでも、かくてあらむとのみおもふにや、未知がたきものなり。時の心にかなふをのみよしとおもふは、其主の愚かなる也。多き從者の中には、さま〲有こそよけれ。物の本たけきをむねとして、ここかしこに隱れをる猛者をもおこらせず。又顯れて、いきほひ有をも、おそれしむるより外なき也。たゞなべての人、おもてをなだらかにすれば、心も然かなりとおもふにや。心の僞りは、人毎に有ものなり。少しも人の上なる人、隨がふものは、いかにも成べしとおもふにや。暫くやむべからずして、したがふなり。たとへ主從の約有とも、大かたにめぐみては、誠に辱しとおもはじ。其惠も、凡ての人、よきことをば忘れて、わろきことをば深く思ふもの也。然れば、一度よきとて、いつまでも忘れまじきと思ふはおろか也。こゝをよく心得べし。又少しもよき人の、從者百にも餘れらんは、皆軍の道をまねぶべし。たゞ一わたり、こゝにはかくかまへ、かしこにはそなへなどせるを、まねぶことなれど、其かまへも備も、猛き軍人のなくては有べからず。其人のありても、心より隨はではかなはず。もしいま馬を出さんに、人の隨はずば、いかにとおもふ心、おのづからつくべし。さらば隨ふことをせんとするに、たれかは俄に隨はん。親あり妻子あり、かくて死なんよりはなど思ひて、逃かくれ、せんかたなく隨ふもの、などかは心をまとめむや。よりて、餘りにみづから貴

〔いくそばく〕幾十許（イクソバカリ）の轉、幾許に同じ。

〔おもてを云々〕表面平穩なるを云ふ

〔大かたに云々〕一通りの恩惠にてはと也。

〔まねぶ〕眞似（マネ）を働かせし詞、學ぶ也。

〔馬を出さん云々〕出陣せんとするにの意也。

を示さず、上下と打やはらぎ親しみて、子の如く思はんには、主てふ名の有が上に、かたじけなき心は、骨にしむべし。さる時には、此國のならはし、命をおしまず、おや子をもかへりみぬほどならめ。凡人は、物のかひなくては、事の情も深くおこらぬもの也。よりて佛の道は、是をとなふれば、今生後生をたすかり、富貴と成といひて、引入侍るなり。人皆なづみ行ぬ。武の道も、ただにこはわろし、かはあしゝと教てのみは、かひなきまゝに、理りとはおもへど、人の心の引かたにつきて、教のとほるはなし。さて從者、誠に辱けなしと、こぞりておもはゞ、百人五百人にすぎずとも、其いひおもふこと、天が下に聞ん。さあらば馬を出さんに、まねかずして人集りぬべし。これをもて大にかつべき道なりけり。よりて、たけきを學ぶに及はなし。かくいはゞ、たゞ軍の時の爲とのみおもはしめ。しか從者をしたしまば、心を用ひずして、家も富榮えまし。誠に武の道は直ければ、おろそかなし私なし。手をたむだきて、家をも治べし、天が下をも治べし。

○或人云、古今集などにあげたる歌のいさほしはさること也、なほ又心有やと。答、かの序にかける、天地を動し、鬼神をあはれと思はせ、男女の中をやはらげ、たけき武士の心をもなぐさむるといふは、其あるべきことを、おち〳〵にわけていへるなれば、是もさること也。それがうへにて、すべてをいはゞ、和しき心にとる。凡人の心は、私ある物にて、人と爭ひ、理りをもて事を分つを、此歌の心有時は、理りの上にて、和らぎを用る故に、世治り人靜也。是

〔今生後生〕佛教に三世の說あり、人の魂魄は三世の間を流轉輪廻すとなす、三世の內生死の間卽ち現世を今生、死後卽ち未來を後生と云ふ。

〔手をたむだきて〕手をこまぬくこと、卽ち腕組みするをいふ。

〔古今集〕萬葉集撰定以後より延喜五年までの歌を撰びし歌集にして、醍醐天皇の勅命を奉じ、紀貫之、紀友則、凡河內躬恒、壬生忠岑等の撰びしもの、全部二十卷也。

〔序〕紀貫之の作也

もたとへば四時の如し。夏はあつかるべき理りとて、夏立つより、急度あつくのみあらば、人たふべからず。然るを、物を漸にして、あつきさむきが中にも、朝夕夜晝につけて、しのぐことの有るにてこそたふれ。是世の中に、さる和らぎなくば、誰かは住まはん。此事はもろこしの歌もしかり。さるを、後には、いと事もなきによみ、人を驚かせばや、はたかくいひては、人のいかゞそしらん、かくては人のよろこばじなど思ひて物すれば、誠の心にあらず、まことの歌にあらず。されども、むかしより此心を用ひ來れば、今よむ歌はわろかれど、むかしの和らぎたる心は、世にみちぬ。人としいへば、此心を知るが故に、おのづから理の上をなすこと也。理の上にていはゞ、つかさ位高く、いきほひあらん人は、萬の人を皆無みして、萬をおすべし。官位はさる物から、賤しきことても、さのみはしがたしとて、和らぎのことをまじへ、たけく雄々しき人も、よわき人をば、皆おしふせんや。これはた和らぎを本とすべし。其歌讀出るには、もと和らがんとての心にはあらねど、心におもふことの、匂ひ出る物なれば、おのづから、たゞ成よりは、和らかにやさしき事あり。或人云、さいふ所は理りなれど、猶いと上つ代のことにして、今の世に、手ぶり大にかはりて、人の心、邪に成ぬれば、いかで昔にかへすことを得むや。然らば、其時のまに〳〵、よろしう取なすべし。古の事、今はなきことなりと。答、誠にしかこそは誰もおもへ。凡軍の理りをいふにも、治國をいふにも、先其本をとゝのふることをいへり。然るに、其君の心によりて、いく萬もとゝのふるを、多くの人のうち、さる

〔もろこし〕支那を云ふ、諸（モロモロ）の海山を越えて行く遠境の義なりとも又、諸越の地を訓讀したるなりとも云ふ。

〔つかさ〕積重の義にて高き所の意なりしが、轉じて官職の意となる、官省、台、職、坊、寮など、各其統ぶる所によりて文字を異にすれども、何れも「ツカサ」と云ふ、神代紀に首又は官司、顯宗紀に官府、欽明紀に執事を「ツカサ」と訓めるも同じ義なり。

〔手ぶり〕風俗也。

〔上の一人〕主上を申す。

〔いくさのきみ〕大將を云ふ、日本紀に、將、將軍、督將、元帥などを訓めり。

よき君のうまれこんはかたし。其よからぬ君の、心のまゝにしたがひまつりごつに、よきことのあらむやは、たま〳〵よき君の出むをまちて、萬づはいふのみ。其如く、もし上に古へを好みて、世のなほからんをおぼす人出來む時は、十年二十とせを過ずして、世は皆直かるべし。大かたにそはえなほらじとおもふだし。上の一人の心にて、世はうつる物にぞある。命かけたる軍だに、いくさのきみの心ぞ、よりて萬の人の、身をしまぬさまに成ぞかし。ただ何事も、もとつ心のなほきにかへりみよ。

國意考 終

國號考

國號考

大八嶋國

皇大御國の號、神代に二つあり、一には大八島國、二には葦原中國なり。その八島國といふは古事記に、伊邪那岐命伊邪那美命御合、生二子淡道之穗之狹別島一、次生二伊豫之二名島一、次生二隱伎之三子島一、次生二筑紫島一、次生二伊伎島一、次生二津島一、次生二佐度島一、次生二大倭豐秋津島一、故因此八島先所生、謂二大八島國一と見えたり。書紀にも、生坐る次第などは、傳々異なれども、八の數は同くて、由是始二起大八洲國之號一焉とあり。そも〳〵志麻とは、周廻りに界限のありて、一區なる域をいふ名なり。然云本の意は、しまるしゞまるせまるせばしなどいふ言と同じきなるべし。これらも、取はなち曠く界限なくはあらで、界限ありて、とりしまれる意よりいふ言なればなり。されば志麻てふ名も、本はかならず海のみならず、國中にて山川などのめぐれる地にもいへりと見ゆ。そのよしは下條なる秋津島のところにいふを見てしるべし。又この大八島などいふ名のごとく、いと大きなるにもいへれば、必しも小きをのみいへるにもあらず。但し小くて海の中にあるは、殊にめぐりの界限も炳焉ければ、專さる地のみの名の如くにもおのづから

〔淡道之穗之狹別島〕今の淡路島也。

〔伊豫之二名島〕古事記傳に「此は阿波讃岐伊余土左の四國を總べたる名なり、後世四國と云ふ」とあり。

〔隱伎之三子島〕通釋に「古事記傳に或人此國三島ある故に云ふといへり、今國圖を考ふに、此國四島に分る、其中に東北方に在りて大なるを俗に島後といひ、その西南方に、天之島、向之島、知夫島とて三つあり、此三島を統べて島前といふ、三子とは是を以ていふなるべし」とあり。

〔津島〕對島也。

〔大倭豐秋津島〕本州也。

〔畿內七道〕畿內とは山城、大和、攝津、河內、和泉をいひ、七道とは、東山、東海、北陸、山陰、山陽、西海、南海をいふ。四三頁參照すべし。

〔八千矛神〕大國主命の別名也、日本紀に「大國主神、亦名大物主神、亦號二國作大已貴命一、亦曰二葦原醜男一、亦曰二八千矛神一、亦曰二大國玉神一云々」とあり。

〔大帶日子云々〕景行天皇を申す。

なれるなり。さて島洲などの字をあてゝ書るも、その海の周れる地をいふ一かたにつきてなり。されどこれらの字に泥みて、必もとより海の中なるをのみいひ、又小きをのみいふ名なりとな思ひあやまりそ。凡て皇國の言に漢字をあてたるは、全くあたれるもあり、又かたへは當りて、かたへはあたらざるも多かるを、後世には、たゞひたぶるに字にのみよる故に、言の本の意を誤ることのみ多きぞかし。さてこの大八島の島も、海の周りて隔れる一界の國をいへるにてその例は、書紀の神代卷に、三韓國をも韓鄕之島といひ、萬葉集の歌には、海をへだてゝは、大和國の方をさしても倭嶋とよみ、又此大八嶋をすべても、倭島根とよめるなど是なり。さて八島としてもいふは、海を隔てずて一連なるをば、幾國にまれ一島として、その數八つなればなり。かくてその八は例の彌にて、もとはたゞ島の數の多かる意の號なりけむを、やゝ後に八つの意にとりて、その數をとゝのへていひ傳へたるかとも、疑はるめれども古事記にしるされたる八つにて、畿內七道の諸國みな備はり、又他の島々は一もまじらずして、餘れるもなく足ざるもなければ、本より八の數は動かざるにこそ、書紀の傳々には、此內に他の島々もまじれゝば、八の數動けれども、古事記の正しきにつきて定むべきなり。さて此號は、外國に對はず、ひとりだちて天の下を統言號なり、八千矛神の御歌に、夜斯麻久爾とよみたまひ、倭建命の御言に、吾者、坐二纏向之日代宮一所二知大八島國一大帶日子淤斯呂和氣天皇之御子とのりたまひ、孝德天皇の詔にも、現爲明神御二八島國一天皇とのり給へり。公式令の詔書式にも、朝廷の大事

〔明神〕天皇の尊稱也、天皇は現身の神に坐す故也、萬葉には明津神吾皇と見えたり。

〔御孫命〕天照大神の御孫にて、瓊々杵尊を申す。

〔續後紀〕續日本後記なり、仁明天皇の天長十年二月より嘉祥三年三月までの記録にして、勅により藤原良房等の撰修せるもの也。

〔大穴牟遲云々〕日本紀神代上に「夫大巳貴命、與ニ少彦名命一戮ㇾ力一ㇾ心、經ニ營天下一、復爲ニ顯見蒼生及畜産一、則定ニ其療ㇾ病之方一、又爲ㇾ攘ニ鳥獸昆蟲之災異一、則定ニ其禁厭之法一」云々とあり。

に用ひらるゝ詔には、明神御ニ宇大八洲ニ天皇詔旨、とのりたまふと見えたり。

葦原中國　水穗國なども附いふ

葦原中國とは、もと天つ神代に、高天原よりいへる號にして、此御國ながらいへる號にはあらず。さて此號の意は、いと〳〵上つ代には、四方の海べたはこと〴〵く葦原にて、其中に國處は在て、上方より見下せば、葦原のめぐれる中に見えける故に、高天原よりかくは名づけたるなり。かれ古事記書紀に、此號はおほく天上にしていふ言のみ見えたり、心をつけて考ふべし。その中に此御國にていへるも、いと稀にはなきにしもあらざれども、そは御孫命の天降坐て後には、此御國にても、もと天上にありていひならへる號をもて呼べることも有しよりおこれるなり。さてよもの海邊のこと〴〵に葦原なりしことは、續後紀に、仁明天皇の四十の御賀に、興福寺の僧等の獻れる長歌に、日本乃、野馬臺能國遠、賀美侶伎能、宿那毗古那加、葦菅遠、殖生志川々、國固米、造介牟與理、云々、とよめる、此事今傳はれる古書どもには見えざれども、かくよめるは、必そのかみ據ありけん。さればもと、大穴牟遲少名毗古那二柱御神の國造堅めむために、植生し廻らしたまへるなりけり。かくて中昔のころまでも、海の渚には、いづくにも葦の多かりしこと、世々の歌どもなどを見てもしるべし。さて此葦原中國てふ號には、くさ〴〵説あれども、皆古への意にかなはず、そのわろき由は、こと〴〵に論はむもわづら

はしければ、もらしつ。

又これを豐葦原之水穗國ともいへり。豐は美稱にて、大八島の大のたぐひなり。そは此國號へすべて係れり、葦のみにかけて云にはあらず、葦原は上件にいへるが如し。水は字は借字にて、物のうるはしきをほむる言にて、これは穗をほめたるなり。書紀に瑞字を書れたるはあたらず彼字につきて、祥瑞などの意とな思ひまがへそ。穗は稻穗をいへり、葦のにはあらず、凡て稻穗をたゞに穗とのみいへるは、萬葉に秋穗などもいひ、書紀に、天照大神又勅曰、以吾高天原所御齋庭之穗亦、當御於吾兒とあるがごとし。さて皇國は、萬の事も物も、異國にはまされる中にも、稻は殊に萬國に比ひなく、はるかにすぐれて、いと美好きこと、神代よりかくのごとく深き由緒のありて、今に至るまでまことに水穗國の名に負へるたふとさ、いふもさらなるを、天の下の諸人、かゝるめでたき稻をしも朝夕に給べながら、皇神の御惠をおほろかに思ひなすへきわざかは、そも〳〵人は命ばかり重き物はなきを、それ續てながらふることは、もはら稻の功にしあれば、世にこればかり重く貴き寶は何物かあらむ、その稻のかばかりすぐれてめでたきにも、皇國の萬國にすぐれて、最尊きほどはいちじるきものぞ。

夜麻登　秋津島師木島なども附いふ

夜麻登といふは、もと畿内なる大和一國の名なるを、神武天皇此國に大宮しきませりしより

〔高天原〕古事記傳に「高天原とは、此國土より云ふ事なり、されば記に天照大御神の天石屋に隱り坐るの御言、又紀の須佐之男命の天上坐とき又、御誓の處の天照大御神の御言などは皆たゞ天原とあり、然るに此に吾高天原と詔へる處の一つあるは撰者の何心もなく書れたるか云々」とあり。

〔齋庭〕平田翁は、齋庭は天照大神の大嘗聞食すと齋ひ淨めたる庭をいふ」といへり。

〔吾兒〕平田翁は、御孫命は更なり、繼體の天皇の御裔を遠くかけて詔へる御語也」といへり。

して、後の御代〱の京も、みな此國内なりける故に、おのづから天の下の大名にもなれるなり。さて此名は、邇藝速日命のあまくだらしゝ時に、虚空見倭國といへる古語ありて、神代よりの名なり。又それよりさきに、八千矛神の御歌に、やまとの一本すゝきとあれども、そは此國の名をよみたまへるにはあらじとぞおもふ。又書紀の神武御卷の末に、昔伊弉諾尊目此國曰日本者、浦安國、細戈千足國、磯輪上秀眞國、とも見えたり。かくて神武天皇は此國に宮しきましけるによりて、神日本磐余彦尊と大御名を稱奉れり、然るをかへりて、此大御名より起りて國の名ともなれりといふは、いみしきひがことなり。又或説に、夜麻登といふは、神代より天の下の大名なりしを、神武天皇の御代よりして、わきて帝都の一國の名にもなれるなり。其故は、此天皇御卷に、皇輿巡幸因、登腋上嗛間丘、而廻望國狀曰、妍哉乎國之獲矣。雖内木綿之眞迮國、猶如蜻蛉之臀呫焉、由是始有秋津洲之號也。昔伊弉諾尊目此國曰云、とある秋津洲も浦安國も、みな天の下の大名なれば、夜麻登もはやく伊邪那岐命の御時より大名と聞え、又神代紀に廼生大日本豐秋津洲と見え、又狹野尊云々、後撥平天下奄有八洲故復加號曰神日本磐余彦尊などゝある、これらみな神代より天の下の大名なりしおもむきなりといへるは、みな誤なり。まづかの秋津洲も、大和の國内の地名なり、天の下をすべいふにはあらず、そは廻望國狀とあるにても知るべし。いとも廣き天下の形狀は、嗛間丘より一目にはいかでか見わたしたまふべき。又内木綿之眞迮國とのたまへるも、狹き國といふ事なる

〔細戈〕通釋に「茲に戈とはあれども杖の事なり、古は戈を杖に突きありきしかば、戈といふも杖なり、上古の神又は人は常に道路を行く時には、必ず杖を突きありきし云々」と見ゆ。

〔磯輪上秀眞國〕磯輪は磯回の意にて磯の回りたる地、上は土地の高き處をいひ、秀眞國とは國の中にても秀でたる國をいふ。

〔狹野尊〕神武天皇を申す、地名に依れる御名なり、狹野は神代よりの地名にて、天皇御幼少の折、高千穗宮にましませし時の御名なる由也。

〔内木綿之云々〕うつゆふ、まさぐにの枕詞、まさぐにには狹き國の意にして、まは美稱也。

〔うらやすに云々〕萬葉集卷十四に「春へ咲く、藤の末葉の、うらやすに、さ寢る夜ぞなき、子ろをし思へば」とあり。うらやすとは、心安きをいふ。

〔出羽〕續日本紀に「元明天皇和銅元年九月丙戌、越後國言新建二出羽郡一、許レ之云々」とあり、而して出羽國となれるは和銅五年なる由、同書に見えたり。

〔加賀〕類聚三代格に「弘仁四年二月三日太政官謹奏、割二越前國江沼加賀二郡一、爲二加賀國一云々」とあり。

をおもふべし。猶此地の事は、下に別に委くいふべし。又浦安國といふも、一國のことなるを、釋日本紀などにも、天の下の大名として說たるはひがことなり。大和は海なければ、浦安とはいふべからずと、疑ふ人もありぬべけれど、海は借字にて、うらさびしうらがなしなどのうらの意なり。萬葉十四の卷に、うらやすにさぬる夜ぞなきなどよめるにてもしるべし。また生二大日本豐秋津洲一とあるは、天の下の大號にもなりての後の世よりいへる語にして、神代の當昔の言にはあらず、秋津洲といふ號も、上に見えたるごとく、神武天皇の御代より始まれるにてさとるべし。そも／＼神代より、大八島國葦原中國などいひしに、其號をあげずして、生二大日本一としもいへるはいかにといふに、かの二つの號は、八洲を惣たる大號なるに、これはそのうちの七洲をのぞきて、一洲をいふ所なればなり。かくて此一洲の大號は別になき故に、しばらく大日本とはいへり。夜麻登は一國の名なるが、天の下の大號にもなり、又一國の内にて、わきて京師をさしてもいひて、廣くも狹くも用ひらるゝ號なるが故なり。そは筑紫といふも伊豫といふも、一國の名なるを、九國四國の大名にもして、筑紫洲伊豫之二名洲などいへる例に同じ。又狹野尊云々とある文のさまは、天下の大號を取て神日本云々とは稱へ奉れるごと聞ゆめれど、然にはあらず。これも皇京しき坐る國の名をとれる大御名なり。かゝれば夜麻登といふは、本よりの大號にはあらず、一國の名より轉れること疑ひもなし。すべてもとは狹き名の、後に廣くなれる例おほし。出羽加賀なども、もとは郡の名なりしを取て、國の名とはせられつること

國史に見え、そのほか駿河國駿河郡駿河鄕、出雲國出雲郡出雲鄕、安藝國安藝郡安藝鄕、大隅國大隅郡大隅鄕なども、もと鄕名なるが郡の名にもなり、郡の名の國名にもなれりと聞ゆるをや。書紀の崇神御卷の歌に、椰麼等那殊於朋望能農之能とある大物主神は、天下を經營成たまへりしかば、此椰麼等は大號のごとく聞ゆめれど、こはたとへば後世の語に、日本一の剛の者といふなる日本は、皇國のことなれども、意はおのづから天地のあひだにならびなき剛の者と聞ゆるがごとくにして、古大和の京の時は、その一國の名をいひて、おのづから天の下の事にもなれるにて、猶天下をすべいへるにはあらず。さればこれは、意は天下をいへるなれども、意はなほ一國の夜麻登なり。かくてやうやくうちまかせたる大號にもなれりと見えて、古事記に、仁德天皇日女島に幸せる時、其島にて雁が卵をうめるを、建內宿禰命に其事とはせたまへる大御歌に、たまきはる、內のあそ、汝こそは、世の長の人、そら見つ、やまとの國に、雁子產と、きくや、これに答へ奉れる歌にも、そらみつ、倭の國に、雁子產と、いまだきかず、とよまれたり。日女島は津國にあり。書紀には二首ともに、秋津島やまとゝ有て、地も河內國茨田堤に雁產とあり、いづれにまれ大和の國內にはあらず。又雁の產むことは、すべて皇國にてはめづらしければ、此夜麻登はまさしく天の下の大號なり。さて一國の名をもて天下の大名とする事は、もろこしの國にても代々の例なれば、夜麻登もかれにならへかと、疑ふ人あれども、仁德天皇の御世に、はやく御歌にもよませたまふばかりいひなれつる事なれば、いかでか然ら

〔大物主神云々〕大物主神は大國主神の別名なり、また大己貴命ともいふ神代紀に「夫大己貴命、與二山彥名命一、戮レ力一レ心、經二營天下一云々」とあり。

〔うちまかせたる〕世の常なる意也。

〔日女島〕古事記傳に「姬島は攝津國西成郡に在り、難波の古き圖な見るに、姬島は九條島の南に並びたる島にて、今の世に勘助島といふ處のあたりにあたれり云云」とあり。

〔茨田堤〕河內國茨田郡、今の北河內郡の地に在り。

〔そのかみ〕當時也

〔山邊郡〕今の生駒郡の一部なりし也

〔城下郡〕今の磯城郡の一部なりしなり。

〔奈良朝〕大和國平城京に皇居を置かれたる、元明、元正、聖武、孝謙、淳仁、稱德、光仁の七代の天皇の御宇を申す。

〔大倭直〕直は尸にて、姓氏錄に「直者謂レ君也」とあり紀には阿多比延と訓める所あり。

む。そのかみ、かの國籍は、既に渡りまうで來つれども、かの國の事を然ばかりならひたまふことは、いまだあらざりき。然るに萬の事、かの國のふりをならふことになれる後の世の心をもて見るから、神代より有來つる事どもをすら、皆かれにならへるかとはうたがふなり。かならずしもならはざれども、こゝとかしこと、おのづから心ばへの相通へることも多かりかし。

夜麻登といふは、もと山邊郡倭鄕より始れる名なりと、くはしく師の萬葉考別記に見えたり。これにあまたの論あり。まづ此倭鄕は、和名抄には、城下郡大和於保夜末止と見えたるを、神名帳には、山邊郡大和坐大國魂神社と有て、郡のたがへるを、師は城下郡に入れるを、後の事なりといはれつれども、はやく續紀の天平寶字二年の文にも、城下郡大和神山とあれば、もと城下郡なりしが、後に山邊郡には入れるなるべし。かの御社今も新泉村といふに在て、山邊郡なり。すべて和名抄は後に出來つれども、諸國郡鄕の名は、奈良朝のころしるせる物によりて、そのまゝを擧たりと見ゆれば、かへりつて神名帳よりはふるきこともあるなり。さて又此鄕を紀などには、やまとゝのみいへるを、和名抄に於保夜末止とあるは、今の京になりての唱へなるかといはれつれども、垂仁紀に大倭直と見え、右の續紀の文にも大和とあるをや、一國を大和といふから、此鄕の名にも同じく大てふ意を加へたるなり。さて夜麻登といふはもとかの鄕より始まりて、後に一國の名にもなれりといふは、上に引る諸國の例どもゝおほかれば、まことに論なきがごとし。然れども猶よく考るに、此名はもとより一國の名なるを、かの鄕名は、

後に倭大國御魂神の鎭座るによりて、とり分て一國の名を負せて、その鄕をも倭とはいふなるべし。今の世に伊勢の國内にても、大御神の宮のべの里をさして、殊に伊勢といふと、同じ心ばへなり。他所にも此例猶有べきなり。然るに書紀神武御卷に、以二珍彥一爲二倭國造一とあるは疑はし。其故は、まづ此倭は師のいはれつるごとく、倭鄕の事なり。然るにかの大國魂神は、もと天皇の大殿の内に祭りたまへりしを、崇神天皇の六年に、始めて、他所にはうつして祭たまひ、同七年に、市磯長尾市てふ人を、神主としたまへり。又垂仁御卷に、一の傳へをあげていはく、是時倭大神著二穗積臣遠祖大水口宿禰一而誨之曰云々、時天皇聞二是言一則命二中臣連祖探湯主一而、卜二之誰人以令レ祭二大倭大神一、即渟名城稚姬命食卜焉、因以命二渟名城稚姬命一定二神地於穴磯邑一、祠二於大市長岡岬一、然是渟名城稚姬命既身體悉痩弱、以不レ能レ祭、是以命二大倭直祖長尾市宿禰一令レ祭矣、とあり、かゝれば此大國魂神の、倭鄕に鎭座せるは、崇神か垂仁の御世よりなれば、神武の御代に倭と云鄕名はあるべからず。もし此崇神の御代より前に、はやくその名あらば、祠二於倭邑一などあるべきに、さはあらで、定二神地於穴磯邑一、祠二於大市長岡岬一とあるは、いまだ倭てふ鄕名はあらざりし故なり。穴磯大市はともに、後には城上郡に入れゝども、此わたり城上城下山邊三郡堺ちかきところなれば、そのかみは大名を穴磯といひて、そのうちなる大市の長岡といふ地なりけむを、此大倭大神の鎭座る故に、その後に倭鄕とは名づけたりけむ。さてかの長尾市宿禰は、姓氏錄によるに、かの宇豆彥の後胤にて、倭國造の祖なり、然れ

〔珍彥〕火々出見尊の御子、葺不合尊の御弟武位起命の兒（タケクラオキノミコト）なる由見えたり。

〔市磯長尾市〕神武紀なる珍彥爲二倭國造一とある其の裔也、市磯は十市郡礒余市磯に住居れりし故に、其地名を冠らしゝ也、長尾市も、倭大神を此穴磯邑なる大市長尾岬に奉齋りしより、其地に留り住へるからの名也といふ。

大倭神社注進狀に「大倭神社在二大和國山邊郡大倭邑一蓋出雲杵築大社別宮也、傳聞大國魂神者、大巳貴神之荒魂、云々、因以號二倭大國魂神一」とあり。

ども此長尾市の世は、いまだ倭國造といふ職にもあらず、その姓にてもあらずと見えて、垂仁御卷三年七年二十五年のところに見えたるに、みな倭直祖とのみ有て、直に倭直とも國造とも見えたることはなし。雄略御卷に至りてぞ、此氏はじめて倭國造とは見えたる、然れば此氏の倭國造といふになれるは、かの長尾市宿禰の、大倭大神を祭る神主となりてのうへ、其後のことなりけむを、書紀に珍彦を倭國造とすとあるは、子孫の職號を、始祖へもさかのぼしてかたり傳へたるを取て記されたるものなるべし。抑神武天皇の御代には、道臣命大久米命などぞ、功最大きなるを、此臣たちすら、居于築坂邑などとのみありて、その國造としたまふ事は見えざれば、ましてつぎ〳〵の人どもをや。但しかの長尾市宿禰も、いやしからぬ臣とは聞えたれば、始祖珍彦の世より、かの長岡岬のあたりの地を賜りて、知傳へてはありけむ。長尾市てふ名も、長岡岬てふ地名によれりと聞えたり。さて倭大神と申すは、大倭一國の國御魂神に坐故の御號にして、鎭座る地名によれる御號にはあらず。故崇神垂仁の御世のころ、倭てふ郷名はいまだ聞えざれども、此神の御號はもとより有しなり。さて郷名の倭は、仁德天皇の大后石姫命の御歌に、始めて見えたり、をだて山、やまとをすぎ、とあるこれなり。さて又藤原御井の歌に、日本の青香具山といひ、また幸于吉野宮時の歌に、倭には、鳴てか來らむ、よぶこ鳥、云々といへるも、ともに大和の國内にして、さらに倭といへるは、かの山邊郡のやまとを、藤原都のあたりまでも冠らせいひなれしなりといはれつるも論あり。都の名をこそ、かたはらの郡まで

〔職〕高き所をいふ詞にて、積重の義なりしが、轉じて官職の意となれり。神代紀に、首又は官司、顯宗紀に官府、欽明紀に、執事を訓むも、同じ義也。

〔姓〕類聚名物考に「この姓を訓て訶波禰といふは、骨族の如し、骨を可波禰といふ事、顯宗紀にも、又續紀にも、根可波禰の事有、姓氏錄の序に言へるも、人民の氏骨の義に譬へたり、云々」とあり。

〔石姫命〕葛城襲津彦命の女也。

も及ばしていふべけれ、かへりて隣郡の郷名を、何の由にかは都あたりまで冠らせいふべき。もしまた藤原都あたりまでも倭郷の內なりとせば、同じ倭郷の內にしてさらにやまとゝいはむは、倭國內にしてさらにやまとゝいはむも同じ事ならずや。さればこれも、かの伊勢といふ例と同じ心ばへにて、同じ倭國の內ながらも、殊に京師のあたりをさして倭とはいへるなり。香具山は、藤原都の東方にならびていと近し、吉野にてよめる歌も同じ意なり。かゝればこは萬葉考の說はわろくて、冠辭考のしき島の條に、一國の名を都に負せていへるなり、といはれつるかたぞ宜しかりける。

夜麻登といふ名の意は、萬葉考の一つの考へに、此國は四方みな山門より出入れば、山門國と名を負るなりと有て、そのよし委くしるされたり。此說ぞ宜しかるべき。又己が考へあり、そはまづ書紀神武御卷に、天皇の御言に、此國の事を、聞ニ於鹽土老翁曰一、東有ニ美地一、靑山四周云々と見え、又大已貴命は、玉墻內國と目けたまひ、又古事記倭建命の御歌に、夜麻登波、久爾能麻本呂波、多々那豆久、阿袁加岐夜麻、碁母禮流、夜麻登志、宇流波斯、とよみたまひ、又石比賣命の御歌に、袁陀弖夜麻夜麻登云々、とよみたまふ。此比賣命の御歌なるは、かの倭郷をのたまへるなれども、袁陀弖夜麻といふは、一國の倭によれる枕詞にて、楯を立並べたる如くに、山のめぐれるをのたまへるなり。右の件の古言どもみな、此國は山の周廻れる中にあることをいへるなれば、夜麻の山なることは論なし。登には三つの考へあり。一つには、登は處

〔藤原都〕持統、文武、兩天皇の皇居にて、大和國高市郡鴨公村大字高殿に在り。

〔鹽土老翁〕是れ住吉大神の現人神となりて現れ給へるといふ。

〔東有ニ美地一〕大倭國を指して言へる也、日本書紀通證に「自ニ日向國一指ニ大和地方一爲レ東」とあり。

〔夜麻登波云々〕倭は國のまほろば、たゝなづく靑垣山隱れる、倭し美し也。

〔久爾能麻本呂波〕丘又は山にて圍まれたる地をいふ、「ま」は美稱、「ほ」は含む意、「ろば」は助辭也。

にて、山處の意なるべし、處を登とのみいへるは、立處伏處寢處竈處井處秡處足處などの例のごとし。又止字を古く登と訓むこと、書紀の私記に、古語謂二居住一爲レ止とあり　字書にも、居共住共注し、說文に處字を止也と注し、玉篇に、處字を居也と注したるなどをも思ふべし。二つには、登は都富の約まりたるにて、山都富なるべし。都は例の之に通ふ助辭、富は字は假字にて、すべて物につゝまれこもりたる處をいへる古言なり。されば是又山のめぐれるよしをもて負へる名なり。そのよしを委くいはむには、應神天皇の、葛野を望坐てよませたまへる大御歌に、知婆能、加豆怒袁美禮婆、毛々知陀流、夜邇波母美由、久爾能富母美由とあるは、葛野のあたりは、今の平安京の地なれば、山のめぐりてつゝみたる中に在て　山代國の奧區なるをもて、國の富とのたまへるなり。さてこれに、かの倭建命の御歌に、夜麻登波、久爾能麻本呂波云々、阿袁加岐夜麻、碁母禮流、夜麻登登云々、とある御歌を合せて見べし。麻本呂波の麻は眞、呂波は助辭にて、これも久爾能本なり。又書紀には此御歌を、景行天皇の大御歌とし、麻本呂波を、摩保邏摩とありて、釋紀に私記曰、師說謂、摩謂二眞實一也、言鳥腋羽乃古止久掩藏之國也、案奧區也、今俗謂二保呂羽一訛也云々、今案、大和國者奧區之由褒美也といへるこれも山の周迴れる中につゝまれこもりたるよしなり。但し鳥腋羽乃古止久といへるは、いさゝかたがへるか、かの羽に譬へてまはらまといふにはあらず。されど鳥の保羅羽も、翅の内につゝまれこもれる羽といふ意にて、らは助辭なるべければ、保と

〔說文〕正しくは說文解字といふ、漢の許愼の撰する所にして、凡て三十卷、六書の義を推究して文字の成立を說明したるものなり、四三頁參照。

〔知婆能〕千葉のなり、葛の葉は繁きものなれば、その枕詞にいふ。

〔加豆怒云々〕葛野を見れば也、

〔毛々知陀流云々〕百千足る、家庭も見ゆ、國の富も見ゆ也、國の富は、古事記傳に國の中原也と云へり。

いふ言の意は同じきなり。又古言に、ふゝまるほゝまる、又けほごもりなどいへるも、布と保とは通ふ音にて、含まれこもれる意、また懐も、今伊勢人などは即ほところともいひて、これも衣につゝまれこもれる所をいふ。中昔の言に山ぶところといへるも、人の懐にたとへたるにはあらず、たゞ山にこもれる地といふ意なり。又書紀の神武の卷に此倭を、秀眞國とほめたまへるよし見えたる、此秀も同じ意なるに、秀の字をしも書れたるは、上に引る古言どもにみな此國をば、山のめぐれるを以て美稱えて、勝れたる事にいへれば、おのづから此字の意にも相通ふなり。されど言の本の意は、浪秀などの秀とは異なれば、此字の意にはあらず。然るを契沖などが、かの摩保邏摩、又萬葉集の五の卷九の卷十八の卷などに、國之麻保良とよめるなど、みな眞秀の意なりとして、かの私記の說を、おほつかなしといへるは、中々に考への至らざるなり。かの萬葉の歌どもなるは、山のめぐれる意にもあらず、又眞秀の意にもあらず、たゞ國といへるまでにて、麻保良はいと輕くて、意なきがごとく聞ゆめるは、上つ代よりいひなれたる言の、意の幾重も轉り變れる物なるべし。又眞原の意ぞといふ說も、かの應神天皇の大御歌に、富とのみよませたまへるにかなはず、すべてかゝることは、そのもとをよく考へ明らめて、末の轉れる方にはなづけまじきわざなるをや。三つには、登は、宇都の宇を省き、都を通はしいへるにて、山宇都の國なるべし。かくてその宇都は、宇都は無戶室などの宇都ならむかとも思へども、なほ內といふことなるべし。古へに內を宇都といへる例多し、其中に萬葉の歌に、垣內とあるは、

〔契沖〕俗姓下河氏大阪高津圓珠院の住僧にて、字を空心といふ、國學者にして又歌人也、萬葉代匠記、厚顏抄、勢語臆斷、古今集餘材抄等名著頗る多し。

〔國之麻保邏云々〕萬葉集卷五に「父母を見れば尊し、云々、蝦蟇のさ渡る極み、聞し治す國のまほらぞ、かにかくに、欲しき隨々、然にはあらじか」とあり。

〔應神天皇〕第十五代の天皇也、應神紀に「譽田天皇、足仲彥天皇第四子也、母曰氣長足姬尊、天皇以皇后討新羅之年、歲次庚辰冬十二月、生於筑紫之蚊田」と見えたり。

垣都とも書て、假字に可伎都とあると同じければ、然訓べきことしるし、今本にかきうちとよめるはよろし。されば、これ、内をうつといひ、その字を省けることをも兼たる例なり。さて今世に、垣内と書て加伊登と唱ふる地名、こゝかしこにあるは、加伎都の轉れるにて、字は本のまゝに書傳へたるものなり、これ又宇都の都を登ともいふべき例なり。なほ都と登と通ふ例もつね多き中に、上に引る應神天皇の大御歌には、葛野を加豆怒とよみたまへるに、和名抄などには加止乃と見え、參河國の郷名の磯泊を、和名抄には之波止としるし、萬葉に高圓を高松ともおほく書るなどはことに近し。さてかの青牆山ごもれるとあると、玉牆内國とあるとを思ひ合せて、山内國と名つくべきことをさとるべし。玉牆内國とは、玉牆を造りめぐらしたらむ如くに、山の周れる内なる國といふ意なればなり。上件師の山門の說と、己が此三つの考へとのうち、見む人心のよらむかたをとりてよ、此國の名には、古よりとり〴〵の說どもあれども、みなよろしからず。一つ二つ論はゞ、まづ書紀私記に、天地剖判、泥濕未レ乾、是以栖レ山往來、因多二蹤跡一、故曰二山跡一、山謂二之耶麻一、跡謂二之止一、又古語謂二居住一爲レ止、言止二住於山一也といへるは、もとより天下の大號と見ていへる說なれば誤なり。また泥濕未レ乾などいへるみな、ふるくより山跡と書ならへる文字につきて、おしはかりに設けたる妄說なり。泥濕の乾ざりし事も、山に住し事も、古書に見えたることなし。書紀神代卷に、古國稚地稚などいへる事はあれども、これは國も人もいまだ出來ぬさきの事なれば、山に住などいふべき時にはあらずかし。然るを契沖が、此

〔葛野〕こゝは山城國の葛野、乙訓、紀伊三郡の總稱なるべし、この歌は應神天皇が大和國より山を越えて近江國へ行幸し給ふ時に宇遲野に御立して葛野を遠望し給ひて詠ませ給ひし御歌也。

〔天地剖判〕紀に、古天地未レ剖、陰陽不レ分、渾沌如二鷄子一とあり、其の後虛空と地と分れし也。

〔古國稚地稚云々〕神代紀に「一書曰、古國稚地稚之時、譬猶二浮膏一而漂蕩云々」と見えたり。

〔萬葉考〕加茂眞淵の著、萬葉集を註釋考證したるもの也。

〔山背てふ國名〕山城の國也、萬葉集には開木代と書けり、又山代に作る此の地もと山背川（今の木津川）の左右に過ぎず、後に葛野、宇治等を併せて山背國を置く桓武天皇の時、皇都を葛野、愛宕二郡の地に置き、山城と改稱す。

〔伊駒山〕今は生駒山に作る、磯城郡北生駒村の西に聳立する山にて、其の一半は河內國に跨る。

名をもと一國の名と見て、和州にかぎりて涅濼のかわかざるべきにあらずといひて、此私記の說を取ざりしは、さる事なるに、なほ山跡の字になづみて、和州は四面みな山なれば、往來の跡山におほかるべしといひて、萬葉集におほく山跡と書るなどを證に引るは、ひがことなり。山に往來の跡のおほからむからに、國の名に負べくもあらず。もし山に住とならば、猶さもいふべけなれど、その說をとらざるうへは、跡の意はいはれず。すべて古は字の義にはかゝはらず、訓の通へば、いづれにまれ借て書る例おほかる中に、地名などはことに借字のおほかるを、契沖などは、猶文字になづむ世間のくせのうせざりしぞかし。さて又萬葉考の、かの倭郷を名の本とせられたる說に、大坂門木門などの如く、上つ代に此郷より東へ越る山門有て名づけつらむ、といはれつるは、從ひがたし。其故は大和國こそまことに四方みな山門より出入れば、其說いはれたれ、かの郷のあたりは、然いふべき地のさまにもあらず。又さる古き證もなくして、ただ上つ代に東へこゆる山門ありて名つけつらむとは、みだりなればなり。おしてかくいはゞ、山近き地は、何處にても然いはるべし。そのうへかの郷の名を本とするは、いかゞなること、上に委くいへるが如くなるをや。又或人の說に、大和は伊駒山の東南なる國なれば、山外の意なり、かの山の北なる國を山背といふにてしるべし、といへるもわろし。東南を外といふべき由なく、山背てふ國名も、伊駒山によれるにはあらず。かれは大和を主として、その北の方の山の後なるよしなり。されば山背に對へては、倭は山內とこそいふべけれ、外とはいかでかい

〔大八洲な云々〕神代一書に「天神謂ニ伊弉諾尊伊弉冊尊一曰云々、然後同レ宮共住而生レ兒號ニ大日本豐秋津洲、次淡路洲、次伊豫二名洲云々、由レ此謂ニ之大八洲國一矣とあり。

〔大倭は終り云々〕二三頁本文を參照すべし。

〔大倭帶日子云々〕日本書紀には日本足彥國押人天皇といふ、第六代孝安天皇を申すなり。

〔秋津島宮〕大和國葛上郡賓村にあり百一年にして廢都となる。

はむ。そのうへ外といひては、かの青垣山ごもれるなどおほくある古語どもにもそむけり」又倭は、北なる奈良坂の方のみ山低くして開けたるをもて、山門國といふ、といへるも心得ず。かの師の考への如く、四方みな山門より出入むにこそさは名つくべけれ。その中に一かた山低きにつきて山門といはむは、似たる事ながらいたく違へる物をや。又或說に、伊弉諾伊弉冉尊の大八洲を生ます時に、始めに大日本豐秋津洲を生坐る故に、やまとは八洲本といふ意の名なりといふは、七洲を除きての大號につきていへるなれば、かなはず。そのうへ八洲を生ませる次第も、古事記には、大倭は終りなるをや、又契沖が說に、釋名に山產也、產ニ生萬物一也といへるを引て、嘉號なる故に天下の總名に用ひらるゝよしいへるは、古の意にあらず、後に萬の事學問ざたになりての世にこそ、諸國郡鄕の名など、好字を著よ嘉名を取れなどいふことも有つれ。夜麻登といふが天の下の大號になれるは、上つ代よりのことなれば、さるさだあるべくもあらぬをや。

秋津島は、古事記に、大倭帶日子國押人命、坐ニ葛城室之秋津島宮一治ニ天下一也と見え、書紀にも此御卷に、二年冬十月遷ニ於室地一、是謂ニ秋津島宮一と有て、もと此孝安天皇の都の地名なり。かの神武天皇の、猶ニ如蜻蛉之臀呫一と詔へりしは、卽此地のことにて、かの大詔より起れる名なり。腋上も嗛間丘も室も、みな相近きところにて、大和國葛上郡なり。さて孝安天皇の百餘年久しく敷坐りし京師の名なるから、秋津島倭とつゞけていひならひ、その倭に引れ

て、つひに天の下の大名にもなれることは、師木島と全同じ例なり、次に委くいふを合せ見べし、然るにかの神武天皇の國狀を御覽して、蜻蛉の臀呫せるが如しとのたまへるを、或は天の下のことゝし、或は大和一國の事とするから、此秋津島てふ名をも、然心得めれども、然にはあらず。國狀とあるにつきては、なほ疑ふ人もありぬべけれど、古は後に郡鄕などになれるほどの地をも、某國といへる、常のことなれば、なにごとかあらむ。さて雄略天皇の吉野に幸行し時に、虻の御腕を咋たるに、蜻蛉飛來て、その虻を咋ける時の大御歌に、手こむらに、虻かきつき、其あむを、阿岐豆はやくひ、かくのごと、名に負むと、そらみつ、倭の國を、阿岐豆島と云、とよませたまひ、それより其地を阿岐豆野と名づけられし事、古事記に見えたり。此御歌の意は、古より此倭國を秋津島といふことは、今かくの如く、其名に負て蜻蛉が功あらむとてなり、とよみなしたまへるなれば、秋津島の事には、あづからず。然るを書紀には、此御歌の詞、はふ蟲も、大君に、まつらふ、汝がかたは置む、秋津島倭とあり。是はすなはち汝が名におへる此秋津島倭國に、形をのこしおきて、此地を蜻蛉野と名づけむ、とのたまふ意なるべし。されどこはよくせずば、此時の蜻蛉の功によりて、國名を秋津島と名づけたまへるごと聞えて、まぎれぬべし。さてまた秋津の津は、古事記書紀萬葉など古書にあまた出たる、假名には皆阿岐豆と、濁音の豆をのみ書て、淸音の假字書るは一つもなし、後世に淸てよむは訛なり、蟲の名も同じ。又この島を洲とも書るにつきて、阿岐豆須ともいふは、ことにひがことなり、

〔蜻蛉ノ臀呫〕神武紀三十一年に「夏四月乙酉朔、皇輿巡幸、因登二腋上嗛間丘一、而廻二望國狀一曰、姸哉國之獲矣、雖二內木綿之眞迮國一、猶如二蜻蛉之臀呫一焉、由レ是始有二秋津洲之號一也」とあり。

〔雄略天皇〕御名は大泊瀨幼武尊、允恭天皇の第五皇子にして、御母は忍坂大中姬命、安康天皇に次いで御卽位、人皇第二十一代の天皇也。

〔阿岐豆野〕大和國吉野郡西河村の西南に在る野也。

洲字は須に用るはつねのことなれども、秋津洲のとき然いふことは、例もなくことわりもかなはぬことなるをや。さて又海なき地に島といふ名のあることは、志麻とは、もとは必しも海の中ならねども、山川などにまれ、周れる界限のある地をいふ名なること、始にいへるが如くなれば、此秋津島なども、山のめぐれるをもていふなり。蜻蛉の臀呫せるが如しとのたまへるも、青山のめぐれるさまなるを思ふべし。またそのあたりを室といひしも、さる由にてつけたる名にやあらむ、猶他にも例多し。書紀に、越國を大八洲の一つにとりて、越洲といへるも、海は隔たらねども、彼國は、いづくよりも山を隔てゝ、別に一區なるが如くなればなるべく、筑紫の宇佐を宇佐島とあるも、山川などのめぐりて、一區の地なる故なり。又應神天皇の都は、大和國高市郡の輕といふ所なるを、輕島といひ、欽明天皇の都は、師木といふ所なるを、師木島といへるなども皆同じ。此餘にも海なき國々に、某島といふ地名のおほかる、多くは此例にてぞつけつらむ。その中には、かならずいちじるき界限はなき地をも、ことさらに一區としめ定めて、名づけたるも有ぬべし、それもなづらる意は同じ事なりかし。

師木島は、古事記に、天國押波流岐廣庭命者、坐二師木島大宮一治二天下一也と見え、書紀にも此御代の巻に、元年秋七月丙子朔己丑、遷二都倭國磯城郡磯城島一、仍號二爲磯城島金刺宮一と有て、もと此欽明天皇の都の地名なるを、萬葉集の歌どもに、しきしまのやまとの國とよめり。抑かくのごくしきしまのやまとゝつゞけいへる意は、もとは大和一國をさしてにはあらず、京師をさし

〔越國〕北陸道七箇國の總古稱也、越洲とある亦同じ。

〔宇佐〕今豐前國宇佐郡也、紀に兎狹、記に宇沙に作る、和名抄に「野麻、酒井」等十郷を載す。

〔應神天皇〕御名は譽田別尊、仲哀天皇の第四皇子にして、御母は神功皇后、人皇第十五代の天皇也。

〔天國押波流岐廣庭命〕欽明天皇を申す、四二頁を見よ。

〔師木島大宮〕大和國磯城郡金屋村の西南に在りし也。

てやまとゝはいへるにて、しきしまの都といはむが如し。かの萬葉の歌に、やまとには、鳴てか來らむ、よぶこ鳥、かくよめるやまとも、誠に京師をさしていへると同じ。又かの秋津島倭とつゞけいふも、もはら同じくて、本は秋津島の京といはむがごとし。さればその秋つしまも師木島も共にみな京の名をいへるにて、國の名にはあらず、これらもし一國のことならば、倭の秋津島、倭のしきしまといはではことわりかなはず。さて本はいづれも右のごとく、京師をいへるなれども、かくつゞけなれては、やがて一國の倭にも轉して、秋津島やまとの國とも、しきしまの倭の國ともよめるは、枕詞のごとくにもなれるなり。さてまた轉りて、萬葉十九卷に、立わかれ、君がいまさば、しき島の、人はわれじく、いはひてまたむとよめるは、大和國をやがてしき島といへるなり。こはかの奈良を青によし、難波をおしてるとのみいへるに似たり。さてまた倭にひかれて、つひに天の下の大號の如くになれることも、秋津島ともはら同じ。又歌の道をしきしまの道といふは、大號より出て、又轉れるものなり。さて此師木島てふ名の起りをとくに、崇神天皇と欽明天皇と二御代の都を兼ていふは誤なり。其故は、すべてかゝることに、古を考へ合せていふは、物しり人のうへのわざにこそ有れ、世間のなべての人は、たゞ何となく、さしあたりたる事よりこそはいひ出る物なれ、古を思ひていふものにはあらず。されば京をしきしまといふも、たゞ欽明天皇の御時にいひならへる、當時の京の名を、他京にうつりて後も猶云るが、おのづからなべての京の稱のごとなれるなり。たとへば、もろこしにも唐

〔よぶこ鳥〕呼子鳥也、深山に棲む、形いだかに似て、大さ鳩の如し、全身黒文灰黒相雑はり腹は淡黄にて白黒文あり、尾は灰赤にて白點あり、目邊薄赤にてきざあり、觜尖り、指は前後各二、尖りて黒し、聲物を呼ぶが如し。

〔萬葉集十九卷に〕京少進大伴宿禰黒麿の歌「立ち別れ、君がいまさば、敷島の、人は我れじく、齋ひて待たむ」也。

〔難波〕攝津國の古稱、又同國西成東郡淀川流域の總稱に用ひし時もあり

〔崇神天皇〕御名は御間城入彦尊、開化天皇の第二皇子にして、人皇第十代の天皇也。

といへるが、後々の代までの國の名になれる、それもたゞ李姓の唐よりいひならへるにこそあれ、古への唐虞の唐をもかねていふにはあらざるがごとく、これも古への崇神天皇の京までを思ひていひならへるにはあらず。もしまたはやく崇神天皇の都よりいひ出たりとならば、後の欽明天皇の都までを待べきにあらずかし。

又かの伊邪那岐命の詔へりし稱辭どもの意、浦安國は、上にいへるが如し。細戈千足國とは、細戈は知の枕詞にして、細は戈をほめたる詞なれば、久波斯と訓べし。知とつゞく意は、玉矛の道といふと同じ。道も美は御にて、添たる言なれば、枕詞はかならず知へ係れり。さるは古へ戈の柄に、知といふ處の有しなるべし。凡て手に取て引擧べき料に付たる物を、知と云例多し、今も幕などに乳と云ものこれなり。されば戈にても、取持ところを然はいへるなるべし。さて枕詞よりつゞきたる意は、此知てふ言のうへのみにて、千足の意は別なり、そは上に引る應神天皇の大御歌に、毛々知陀流、夜邇波母美由とある、知陀流これなり。此事は古事記傳に委くいへれば、こゝにははぶきつ。磯輪上秀眞國は、磯輪上は、これも枕詞とは聞えたれども、いかにいへるにか、いと心得がたし。されど強ていはゞ、磯輪は皺にて、波をいへるか、古今集なる壬生忠岑が長歌に、立浪の、浪の皺にや、おほゝれむとよめるも、もしくはもとより、浪を皺ともいへる事の有し故にや、と思はるればなり。もしさもあらば、上は浪の立のぼるなり、かくいふこゝろは、浪のたつを波の秀といへること、書紀萬葉などに見えたれば、波立のぼる

〔唐〕皇紀千二百七十八年、李淵隋を滅して唐國を建て高祖を稱せしより皇紀千五百六十六年迄凡そ三百年二十代の間の稱也。

〔欽明天皇〕御名は天國排開廣庭尊、繼體天皇の第三皇子にして、御母は手白香皇女、宣化天皇に次で御卽位人皇第二十九代の天皇也。

〔壬生忠岑〕從五位下安綱の子也、和歌を善くす、初め右近衞大將藤原定國の隨身と爲る、詠歌に巧みなるを以て藤原時平に知られ、御書所に候し、累進して攝津大目に任じ六位に叙せらる。

秀といふ意につゞきたるなるべし。故上をもしばらく能煩流とは訓つ、されどこはこゝろみにいへるばかりなり、なほよく考ふべし、さてこれも、枕詞よりつゞきたる意は、右の如くにて秀眞國の意は然らず、その秀の意は上にいへり。かくて此三つは、たゞ畿內の大和國をほめて、かくのまたへるのみにて、まさしき國名にはあらず、故書紀に目レ之と書れたり。さればいふまでもあらず天の下の大號にもあらねども、倭のちなみにいさゝかこゝには擧つるなり。

倭の字

倭の字は、もともろこしの國よりつけたる名にて、その始めて見えたるは、前漢書地理志に、東夷天性柔順、異二於三方之外一、故孔子悼二道不レ行、設二桴於海一、欲レ居二九夷一、有レ以也夫、樂浪海中有二倭人一、分爲二百餘國一、以二歲時一來獻見云、といへる是なり。その後の書どもにも、みなかく倭人といひ、又はぶきて倭とのみもいへり。さて倭とは、いかなる意にて名づけつるにか、その由はさだかに見えたる事はなけれども、かの漢書に、東夷天性柔順と書出して、有二倭人一とつらねいへるを思へば、班固が意は、說文に、此倭字の本義を、順貌と注したると同じくて、柔順なる故に倭人とはいふと心得たるごとく聞ゆめり。されどそれも字につきてのおしはかりなるべし。また皇國の舊說に、此國之人、昔到二彼國一、唐人問云、汝國之名稱如何、自指二東方一答云、和奴國耶云々、和奴猶レ言レ我也、自レ其後謂二之和奴國一也、と釋日本紀元々集などに載られたれ

〔畿內〕山城、大和、河內、和泉、攝津五箇國の總稱也、孝德紀大化二年正月に「東自二名墾横河一以來、南自二紀伊兄山一以來、西自二赤石櫛淵一以來、北自二狹々浪合坂山一以來爲二畿內一」とあり。

〔前漢書〕一に漢書又は西漢書とも云ふ、後漢扶風の人班固の撰する處にて、漢高帝以後十二世、二百三十年間の紀傳體の歷史也。

〔說文〕說文解字の略、漢の許愼の撰、三十卷あり、凡十四篇、他に目錄一篇總べて五百四十部に分つ、文九千三百五十三、重文千一百六十三、注文十三萬三千四百四十字あり。

〔後漢書〕南北朝の頃宋人范曄の撰、百二十卷、紀傳體にて、後漢二十帝の事を記せり、十紀十志八十列傳合せて百篇を作る豫定なりしが、中十志は未だ成らずして事に依り罰せられて誅せられたり梁の世に至り、劉昭之を補成す。

〔唐書〕新舊の別あり、各二十四史に加へらる、舊唐書は、五代の石晉の時の官撰にて、劉昫等の手に成る、帝紀二十卷、列傳百五十一卷、志あり表なし、總て二百卷、新唐書は、宋の歐陽修等の撰五〇頁頭注に詳也

ども、これも信うけがたき說なり。そのゆゑは、まづ倭奴國といふ名は、後漢書にはじめて見えて、倭國之極南界也とあれば、皇國の內の南の方の一國の名なるを、唐書などにこゝろえあやまりて、皇國の舊の大號のごとく書るを、そのゝちみな此誤りを傳へて、かしこにてもこゝにても、たださる事とのみ思ひ居るは、いみじきひがことなり。この事おのれ馭戎慨言につばらかに辨へ論へり。されば倭奴は、もとより國名にまれ、又我といふ意にて答へたるにまれ、皇國の內の一國の名なれば、これをもて大號の倭てふ意を說べきにあらず。又或說に、倭奴國を唐國の音にていへば、於能許にて、磤馭盧島といふ事なり、といへるもひがことなり。磤馭盧島は、大八洲より先には出來つれども、淡路島のほとりにある一つの小島の名にこそあれ、神代より天の下の大號にいへることさらになし。然れば皇國人のいはぬ名を、外國の人の知て名づくべき由あらめやは。此說はもと、近き世に神道者といふものゝ、此おのごろ島を、皇國の本號のごと說なせるによりていへるなり。また倭奴國といふはおのころ島、おのころ島は丈夫島といふ意なりといふ說は、誠にあたらぬ事なり。こは於と袁と音の異なるをだにもしらぬみだりごとぞかし。

夜麻登といふに、やがて此倭の字をあてゝ書事は、いと〳〵古よりのことゝ見えたり。古事記にもみな此字をかき、又書紀にも、日本と書て夜麻登と訓事は、神代卷に、此云耶麻騰と註あれども、倭の字を書るにはかゝる註もなければ、世にあまねく用ひならへることしられたり。

すべて文字は、萬の物の名も何ももろこしの國のを借用る例なれば、これもかの國より名づけて書る字を、そのまゝに用ひむ事、さもあるべきわざなり。然るを此字嘉號にあらず、といひて嫌ふ人あれども、字の意はいかにもあれ、皇大御國の號となりては、すなはち嘉號なるをや、さて此倭の字、もろこしより名づけたるは、大號のみにて、畿內のやまとをば、皇國人のいへるを聞てかけりとおぼしくて、後漢書魏志などに耶馬臺、隋書北史などにも耶麻堆といへり。然れども皇國にては、畿內のにも通はして、みな倭の字を用ひたり。

和の字

和といふは、皇國にて後に改められたる字なり。さる故に、異國の書に、大號に此字を書ることさらになし。思ふにこれは、古より倭の字を用ひ來つれども、もと異國よりつけたる名にして、美字にもあらずとしてぞ、同音の好字をゑらびて、改められたりけむ。さるは古はたゞ、夜麻登といふ名をのみむねとはして、文字はいかにまれ、假の物なれば、よきあしきさだにも及ばず、あるまゝに倭の字を用ひ來にしを、やゝ後には、文字の好惡きをもゑらばるゝ事になれりしなりけり。さて此和の字の事、上に引る漢書の文、又順貌と注せるなどに、和順などともつゞくを合せておもへば、倭と字義も遠からず、また書紀の繼體天皇御卷の詔詞に、日本邕邕名擅二天下一云々とある、邕は雝と通ひて、詩の大雅に雝々といふ註に、鳳凰鳴之和也とも、

〔隋書〕八十五卷、唐の魏徵等の纂述に係る、勅撰の書なり、帝紀五卷、列傳五十卷、其の外禮義以下十志あり。一に五代史志と云ふ。

〔繼體天皇〕御名は男大迹尊、彥主人王の皇子にして、御母は振媛命、武烈天皇に次いで御卽位、人皇第二十六代の天皇也。

〔詩〕詩經の略也、書經舜典に、詩は志を言ふとありて民間の歌謠を採集して以て其の風俗を觀察し、政治の得失を知る參考とせり、孔子の大成に係り、三百五篇あり、五經の一にして、又十三經の一に加へらる。

〔天平勝寶〕孝謙帝御宇の年號、天平感寶元年（天平二十一年）七月改元、八年を經て天平寶字と改む。
〔拾芥抄〕三卷、洞院公賢の撰にして曾孫實凞の增補也、七十九部に分つ。
〔元明天皇〕御名は阿閇、日本根子天津御代豐國成姬天皇と謚す、天智天皇第四皇女にして草壁皇太子の妃となり、文武、元正兩天皇の母后たり人皇第四十三代の天皇也。
〔聖武天皇〕御名は首、天璽國押開豐櫻彥尊、勝寶感神聖武皇帝と稱す、法諱は勝滿、文武帝第一皇子、第四十五代の天皇也。

和之至也ともいへる、又聖徳太子の憲法の首に、以レ和爲レ貴とある、又もろこしにて雍州といふは、もと王都の國の名なる故に、皇國にても後世にこれにならひて、山城國を雍州といふ。此雍字も雝と通ひて、和也といふ註ある、これらみな由あれば、いづれにまれその義を取れたるかとも思はるれど、それまでもあるべからず。すべての事後に考ふれば、おのづから由ある事どもは、くさぐ〵いでくる物なり。また子華子てふ書には、太和之國といふこともあれども、これらはさらに由なし。

倭を、この和の字に改められつるは、いづれの御代にかと考ふるに、齋部正通の神代卷口決に、天平勝寶改爲二大和一と見え、拾芥抄にも、天平勝寶年月日改爲二大和一とあり。これらは後世の書なれども、よりどころありげに聞ゆる故に、なほ古書どもを考へ見るに、まづ古事記はさらにもいはず、書紀にも和の字にかけることは見えず、續紀に至りて、はじめて此字にかけること見えたり。これによりて、かの天平勝寶とあるが、妄にもあらざることをかつぐ〵しりぬ。されども然改められたることはしるされず。故なほ委く彼紀を考ふるに、はじめのほどは倭の字をのみ書て、そのあひだには、和の字に書るは一つも見えず、元明天皇の御代、和銅六年五月の大命に、畿內七道諸國郡鄕名着二好字一とあれども、これは改らずと見えて、其後も猶もとのまゝに倭字なり。さて聖武天皇の御代、天平九年十二月丙寅、改二大倭國一爲二大養德國一、同十九年三月辛卯、改二大養德國一依レ舊爲二大倭國一とあれば、此時もなほ倭の字なりしことしられたり。

其後も孝謙天皇の天平勝寶四年十一月乙巳日の下に、以ニ從四位上藤原朝臣永手一爲ニ大倭守一とあるまでは、みな倭字にて、その後天平寶字二年二月己巳日の勅に、はじめて大和國と見えたる。これより後は、又みな和の字をのみかゝれたり。これにてまづ、勝寶四年十一月より、寶字二年二月までの間に改められたりとはしられたり。それも何となく和の字を書かせるにはあるべからず、かの養德と改められし時の例を思へば、此和の字も、かならず詔命にて著られたりけむを、紀にはその事しるし漏されたるなるべし。類聚國史などにも見えざれば、後に寫し脫せるにはあらじ。さて又萬葉集を考ふるに、十八の卷までには、歌にも詞にも、和の字を書る所はなくして、十九の卷、天平勝寶四年十一月二十五日、新嘗會肆宴、應レ詔歌六首の中に、右一首大和國守藤原永手朝臣とある、これ和の字を書る始めなり。又二十卷に、先太上天皇詔ニ陪從王臣一曰、夫諸王卿等宜下賦ニ和歌一而奏上云々、右天平勝寶五年五月云々とある、これに始めて和歌とも書り。そも〳〵かの永手朝臣を大倭守とせられしは、上に引る紀の文のごとく、勝寶四年十一月乙巳日にて、乙巳は二日なるに、そこに猶倭の字をかけると、此萬葉に、その同月の二十五日の事に、和の字を書るとを引合せておもへば、まことに天平勝寶四年十一月の、三日より二十四日までのあひだに改められたるなりけり。さて又大倭宿禰といふ姓は、かの養德と改められし時も、その字にしたがひて、大養德宿禰とかゝれたれば、和の字に改まりたる時も、それにしたがふべきわざなるに、寶字元年六月の所までも、なほ倭字をかきて、同年十二

〔孝謙天皇〕御名は阿閉、注名法基尼、高野天皇と申す、重祚の後ち稱德天皇と謚す、聖武天皇皇女にして、第四十六代の天皇也

〔藤原朝臣永手〕房前の第二子、勝寶の初め大和守となり累進左大臣從一位となる、光仁帝の時正一位に進む、寶龜二年二月病みて薨去す、太政大臣を贈らる世に長岡大臣と稱す

〔養德〕續紀、聖武天皇天平九年十二月の條に改ニ大倭國一爲ニ大養德國一とあり、〔

〔類聚國史〕二百卷別に目錄二卷、帝王系圖三卷あり、今散佚して、六十一卷を存す、菅原道眞勅により撰する處也。

〔寶字元年〕天平寶字元年の略也、孝謙帝御宇の年號、勝寶九年八月十八日改元、八年を經て天平神護と改む

〔田令の云々〕田令は令第九に載す、凡三十七條あり、面積、田租、口分田、位田、職分田、功田等を規定せり其の畿內置官田の條に「大和攝津各卅町云々」とあるを指したる也。

〔和琴〕倭琴とも書く、やまとごとゝ訓む東琴とも云ふ、本邦固有の琴にて諸樂器第一位に置かる、體源抄に「長五尺表二五德一、廣六寸、表二六合一、絃柱有レ六、表二六律呂一」とあり。

月の文より、始めて大和宿禰とあり、そのころは既に姓氏の文字なども、私に心にまかせてはかゝず、必おほやけより勅有て、定められし事なれば、國名の和の字に成しとき、此姓の字も然改むべき勅あるべきに、其後しばしなほ舊のまゝに書しは、此姓の字改むべき勅は、寶字元年に至りて有しなるべし。さて寶字元年の所に、此姓を大和宿禰と書るにて、國名の方は、それよりさきに既に改まりつること、いよゝいちじるし。すべて續紀には、はじめに倭の字なるほどは、みな倭の字をのみ書て、和と書ることなく、和の字に書始めて後は、又みな和の字のみにて、倭を書雜へたることはなければ、改められつる年月も、おのづから右のごとくには考へしらるゝなりけり。然るを田令の中に、大和と書る所あり、又書紀崇神御卷にも、和と書る所一つあり、又續紀八の卷にも、二所大和國とかき、和琴ともかき、又萬葉集七の卷にも和琴とかける、これらはみな後に寫し誤れるものなり。その前にも後にもいとおほかるやまとに、みな倭の字をのみ書る中に、いとまれ〳〵に一つ二つ和と書べき由なければなり。後世には、心にまかせて通はし書く故に、たゞ同じことゝ心得居て、ふと寫したがへたるなるべし　又和銅てふ年號もあれども、此和はやまとの義にはあらず。さて上件續紀に出たるは、皆畿內の大和一國の名の字にて、天の下の大號のやまとのさだにはあらず、大號のには、書紀よりして、おほくは日本といふ字を用ひられたりし故に、そのさだには及ばざりしにや、和の字に改まりて後も畿內の國名ならぬには、なほ倭の字をも廢ずして、すはなち續紀などにも、倭根子天皇などと

か丶れ、その外にもおほく見えたり。しかはあれども、大號も本はかの一國の名よりおこれるに、その本を改められつるうへは、何事にもみな、和の字を用ひむをや宜しとはいふべからむ。

日本　比能母登といふ事をも附いふ

日本とは、もとより比能母登といふ號の有しを書る文字にはあらず、異國へ示さむために、ことさらに建られたる號なり。公式令の詔書式に、明神御宇大八洲天皇詔旨とあるをば、義解に、用ニ於朝廷大事一之辭也といひ、明神御宇日本天皇詔旨とあるをば、以ニ大事一宣ニ於蕃國使一之辭也、といへるをもて知べし。さて此號を建られたるは、いづれの御代ぞといふに、まづ古事記に此號見えず、又書紀皇極天皇の御卷までに、夜麻登といふに日本とか丶れたるは、後に此紀を撰ばれし時に、改められたる物にして、そのかみの文字にはあらざるを、孝德天皇卽位、大化元年秋七月丁卯朔丙子、高麗百濟新羅並遣レ使進レ調云々、巨勢德大臣詔ニ於高麗使一曰、明神御ニ宇日本一天皇詔旨云々、又詔ニ於百濟使一曰、明神御宇日本天皇詔旨云々と見えたる、これぞ新に日本といふ號を建て、示したまへるはじめなりける。故さき〴〵の詔のさまとは異になむありける。また同二年二月甲午朔戊申、天皇幸ニ宮東門一使ニ蘇我右大臣一詔曰、明神御ニ宇日本一倭根子天皇詔於集侍卿等臣連國造伴造及諸百姓云々、これは異國人に示す詔にはあらざれども、此號を建られて、始めたる詔なるが故に、かく宣て、皇朝

〔公式令〕令第二十一に當り、凡八十九條あり、集解に「公式、謂公文式様也、此令亦有ニ驛鈴傳符等事一、而止以ニ公式一爲レ名」とあり。

〔詔書式〕公式令第一條以下十條に亘り其の規定あり。

〔孝德天皇〕御名は輕、天萬豐日天皇と申す、茅渟王の皇子にして、御母は吉備姬女王、人皇第三十六代の天皇也。

〔大化〕孝德帝御宇の年號、帝、皇極帝の四年卽位、始めて年號を立つ、五年を經て白雉と改む。

〔新唐書〕宋の歐陽修、宋祁の同撰する處にして、本紀十卷、志五十卷、表十五卷、列傳一百五十卷あり、紀と志とは陽修、列傳は祁の定むる所也、四四頁參照。

〔咸亨元年〕唐高宗の時の年號、我が天智天皇の九年に當れり。

〔夏音〕夏は皇紀前一千百六年より一千五百四十五年までの支那の國號也其の時代の字音を云ふ。

〔貞觀十九年〕は唐の太宗の時の年號、我が孝德天皇の大化元年に當れり。

の人どもにも、新號を示したまへるなり。もし然らざれば、日本倭根子と、倭へ重ねて宣たまへるは、やまと〳〵と、同じことのいたづらに重なるにあらずや。かゝればこの日本といふ號は、孝德天皇の御世、大化元年にはじめて建られたることいちじるし。然るを世々の識者ども、かの文をよく考へざる故に、何れの御代より始まりしとも、えしらざるなり。すべて此孝德の御世には、年號なども始まり、その外も新に定められつる事ども多かれば、此號の出來しも、いよゝ由有ておぼゆるなり。さてこれをもろこしの書どもと引合せて驗るに、隋の代までは倭とのみいへるを、唐にいたりて、始めて日本といふことは見えたり。新唐書に、日本古倭奴國也云々、咸亨元年遣レ使賀レ平ニ高麗一、後稍習ニ夏音一惡ニ倭名一更號ニ日本一、使者自言下國近ニ日所レ出以爲上レ名、或云ニ日本乃小國、爲レ倭所レ并、故冒ニ其號一、使者不レ以レ情故疑焉といへり。舊唐書には、倭と日本とを別に擧て、日本國者倭國之別種也、以ニ其國在ニ日邊一故以ニ日本一爲レ名、或曰下倭自惡ニ其名不上レ雅、改爲中日本上、或曰ニ日本舊小國、併ニ倭國之地一といへり。これらを見るに、此號の出來ていまだいくほどもあらざりしころなる故に、彼國にては、いまださだかには知らざりしなり。大化元年は、唐太宗が世、貞觀十九年にあたれるを、かの咸亨元年は、その子高宗が世にて、天智天皇の九年にあたれば、廿五年後なり。その間にも往來は有つれども、なほかの國へは、もとのまゝにて御言は通はされて、日本といふ新號の建しことは、たゞ此方の人のわたくしに語れるなどを、かつ〳〵聞るばかりにぞ有けむ。さて後文武天皇の御代に、粟田朝臣眞人を

〔武后〕唐高宗の后也、帝病弱を以つて之れに代り、政を専にす、帝歿後自ら帝位につき、則天武后と稱す。

〔東國通鑑〕東寰錄に「東國通鑑、成宗十六年、命₂徐居正₁撰ㇾ之」とあり、成宗は高麗國六世の王たり。

〔文武王〕朝鮮の古代に新羅國あり、文武王は、其の第三十世の王にて、名は法敏、二十九代武烈王の子也。

〔推古天皇〕人皇第三十三代の天皇、御名は豐御食炊屋姫尊、舒明天皇の皇女、御母は蘇我稻目の女堅鹽媛也。

大御使につかはしゝをりよりぞ、かの國へも正しく日本とはなのられける。此朝臣かしこにまかり着たりし時に、いづれの國の御使ぞととはれて、日本國の使なりと名のりしこと、續記に見え、又かの舊唐書にもさき〴〵の往來のことをば、みな倭國といふ方にしるして、日本國といふ方には、此眞人朝臣のまかりけるを始めとしてしるしたり。此時かの國は武后が世なりき。故或說に此號を、唐武后が時にかの國よりつけたるごとくにいへるは、ひが事ながら此由なり。さて又三韓の使には、大化元年にすなはち宣知らせたまひしこと、上に書紀を引ていへるがごとくなるを、その國の東國通鑑といふ書に、新羅の文武王十年のところに、倭國更號₂日本₁、自言下近₂日所₁ㇾ出以爲ㇾ名上といへるは、唐の咸亨元年にあたりて、年も文も同じければ、かの唐書をとりて書たる物にて、論にたらず。すべて東國通鑑は、かくさまのうけがたき事のみぞおほかる。

日本としもつけたまへる號の意は、萬國を御照しまします、日の大御神の生ませる御國といふ意か、又は西蕃諸國より、日の出る方にあたれる意か、此二つの中に、はじめのは殊にことわりにかなへれども、そのかみのすべての趣を思ふに、なほ後の意にてぞ名づけられたりけむ。かの推古天皇の御世に、日出處天子とのたまひつかはしゝと同じこゝろばへなり。

夜麻登といふに、日本といふもじを用ることは、書紀よりはじまれり。そはいまだ例なき事にて、世人のまどふべき故に、神代卷に、日本此云₂耶麻騰₁下皆效ㇾ此、といふ訓注はあるなり。

〔倭姬命〕垂仁紀十五年に「皇后日葉酢姬命生三三男二女一、第一曰二五十瓊敷入彦命一云々、第四曰二倭姬命一云々」とあり。

〔日本武尊〕景行紀二年に「春三月丙寅朔戊辰、立二播磨稻日大郞姬一爲二皇后一、后生二二男一、第一曰二大碓皇子一、第二曰二小碓尊一云々、是小碓尊、亦名日本童男、亦曰二日本武尊一、幼有二雄略之氣一、及レ壯容貌魁偉身長一丈、力能扛レ鼎焉」とあり。

〔天皇の大御父〕景行紀五十一年に「初日本武尊娶二兩道入姬皇女一爲レ妃生二稻依別一、次足仲彦天皇」とあり、足仲彦天皇は仲哀天皇也。

古事記は、太化の年よりはるかに後に出來つれども、すべての文字も何も、ふるく書傳へたるまゝにしるされて、夜麻登にもみな倭字をのみかきて、日本とかゝれたる所はひとつもなきを、書紀は、漢文をかざり、字をゑらびてかゝれたる故に、あらたに此嘉號をあてゝかゝれたるなり。但し畿内の一國のやまとには、おほく倭とかき、天の下の大號のには日本とかき、又一國の名の時も、おほやけにかゝれるをば日本とかゝれて、紀中おほかた此例なり。人名も此こゝろばへにて、天皇の大御には日本、さらぬ人のには倭とかゝれたり。神日本磐余彦天皇倭姬命などのごとし。日本武尊は、天皇の大御父に坐て、よろづ天皇とひとしきゆゑに、日本とはかゝれつるなり。

比能杼登といふ號は、古の書に見えず、日本といふは、意はその意なれども、もと異國へしめさむために設けたまへるなれば、ひのもとゝはよまず、始めより爾富牟と字音にぞいひけむ。萬葉集に日本之とあるを、ひのもとのと訓るところ多かるは、後人の、しひて五言によまむためのひがことにて、皆四言にやまとのとよむべきなり。たゞ三の卷なる不盡山の長歌に、日本之、山跡國乃云々とあると、續後紀十九卷、興福寺の僧の長歌に、日本乃、野馬臺能國遠云々、また日本乃、倭之國波云々、などとある、これらのみはひのもとのなり。されどこは國號にいへるにはあらず、倭といはむ枕詞なり。それにつきて、おのれいまだわかゝりし程に思へりしは、やまとを日本と書故に、その字のうちまかせたる訓を、やがて枕詞におけるにて、春日の春

〔天武天皇〕諱は大海人皇子、舒明天皇の第二皇子にして、御母は皇極天皇也、天智天皇の皇弟にして、人皇第四十代の天皇也

〔飛鳥淨御原宮〕天武天皇の皇居、大和國高市郡上居村に古趾あり、天武天皇元年九月都す、十四年にて廢す。

〔不盡山〕駿河國富士郡と甲斐國南都留郡とに跨る富士山是也。

日、飛鳥の飛鳥、などと同じ例なりと思へりしは、あらざりき。まづ春日のかすがとは、春の日影のかすむといふ意につゞけ、飛鳥のあすかとは、書紀に、天武天皇の十五年、改レ元曰ニ朱鳥元年一、仍名レ宮曰ニ飛鳥淨御原宮一とある。これ朱鳥の祥瑞の出來つるをめでたまひて、年號をも然改めたまひ、大宮の號をも、飛鳥云々とはつけたるひしなり。さればこれは、とぶとりの淨御原宮とよむべきなり。あすかの淨御原といはむは、本よりの地名なれば、ことさらにこゝに、仍名レ宮曰ニ云々一などいふべきにあらざるをおもふべし。とぶ鳥とは、はふ蟲といふと同じくて、たゞ鳥のことなり。さて大宮の號を、然いふから、その地名にも冠らせて、飛鳥の明日香とはいへるなり。さてかすがを春日、明日香を飛鳥ともかくことは、いひなれたる枕詞の字をもて、やがてその地名の字となせる物なり。そはかのあをによしおしてるなどいふ枕詞を、やがて奈良難波の事にしていへると、心ばへ相似たり。かゝれば春日のかすが、飛鳥の明日香といふも、その地名の字のうちまかせたる訓を枕詞になせるにはあらざれば、ひのもとのやまとも、然にはあらず、又これは枕詞のひのもとてふ字をもて、國名の夜麻登の字として日本とかくにもあらざれば、かの二つの例にもあらず、たゞ日の本都國たる倭といふ意にぞ有ける。それにとりて此枕詞、もしいと古くより有しことならば、孝德天皇も、日本といふ名は、これをおもほしてや建たまひけむ。されどかの不盡山の歌は、いとしも古からず、それよりあなたには見えざれば、こは日本といふ號のこゝろをおもひて、後にいひそめつるにもあらむか、その

本末はわきまへがたくなむ。

豐また大てふ稱辭

葦原中國秋津島などに豐てふ言を冠らせて、豐葦原中國豐秋津島といひ、八島倭などには、大てふ意を冠らせて、大八島大倭といふ、これらの國號のみにもあらず。凡て豐とも大ともいへる例多き、みな上つ代の稱辭なり。然るを大日本などいふ大は、もろこしの國にて、當代の國號をたふとみて、大漢大唐などいふにならへる物ぞといふ說のあるは、古のことをしらぬ、例のおしあてのみだりごとなり。もし然いはゞ、かの豐葦原などの豐は、いかにとかいはむ、こはかの國にはさらに聞えぬ美稱なるものをや。又もろこしにては、王の母を大后とはいふを、皇國の古には、當御代の嫡后を大后と申せりき。これらも、大といふこと、すべてかの國にならへるにあらざる證なり。然るを書紀には、古稱をたがへて、大御母をしも皇大后と記されたる、これぞ彼國にならへるにては有ける。書紀にはかく、彼國にならひてかゝれたる事もおほきからに、神代よりありこし事をも、かれと似たるをば、皆ならへるにやとは疑ふなり。抑大てふ美稱は、大臣大連などいふたぐひ猶多し。みないと上つ代よりのことにして、大倭といへるも、古事記の景行天皇御段に、熊曾建が詞に、大倭國と見え、また懿德天皇孝安天皇孝靈天皇孝元天皇などの大御名、又古事記には、意富夜麻登玖邇阿禮比賣命と、假字に書る御名さへある

〔大臣〕上代の職官臣姓の統領にて、皇別を以て之に任ず、大連と共に、臣連八十伴緒を引率して朝政を執る後世左右大臣の如し、雄略天皇の時平群眞鳥を以て任ぜしを初めとす。

〔大連〕連姓の統領にて、神別の人を以て之に任ず、雄略天皇の時、大伴室屋を任ぜしを初見とす。

〔懿德天皇〕御名は大日本彥耜友尊、安寧天皇の皇子第四代の天皇也。

〔孝安天皇〕御名は日本足彥國押人尊孝照天皇第二皇子第六代の天皇也。

〔孝靈天皇〕御名大日本根子彥太瓊尊、孝安天皇の第一皇子、第七代の

天皇也。

〔孝元天皇〕大日本根子彦國牽尊、孝靈天皇の第一皇子、第八代の天皇也。

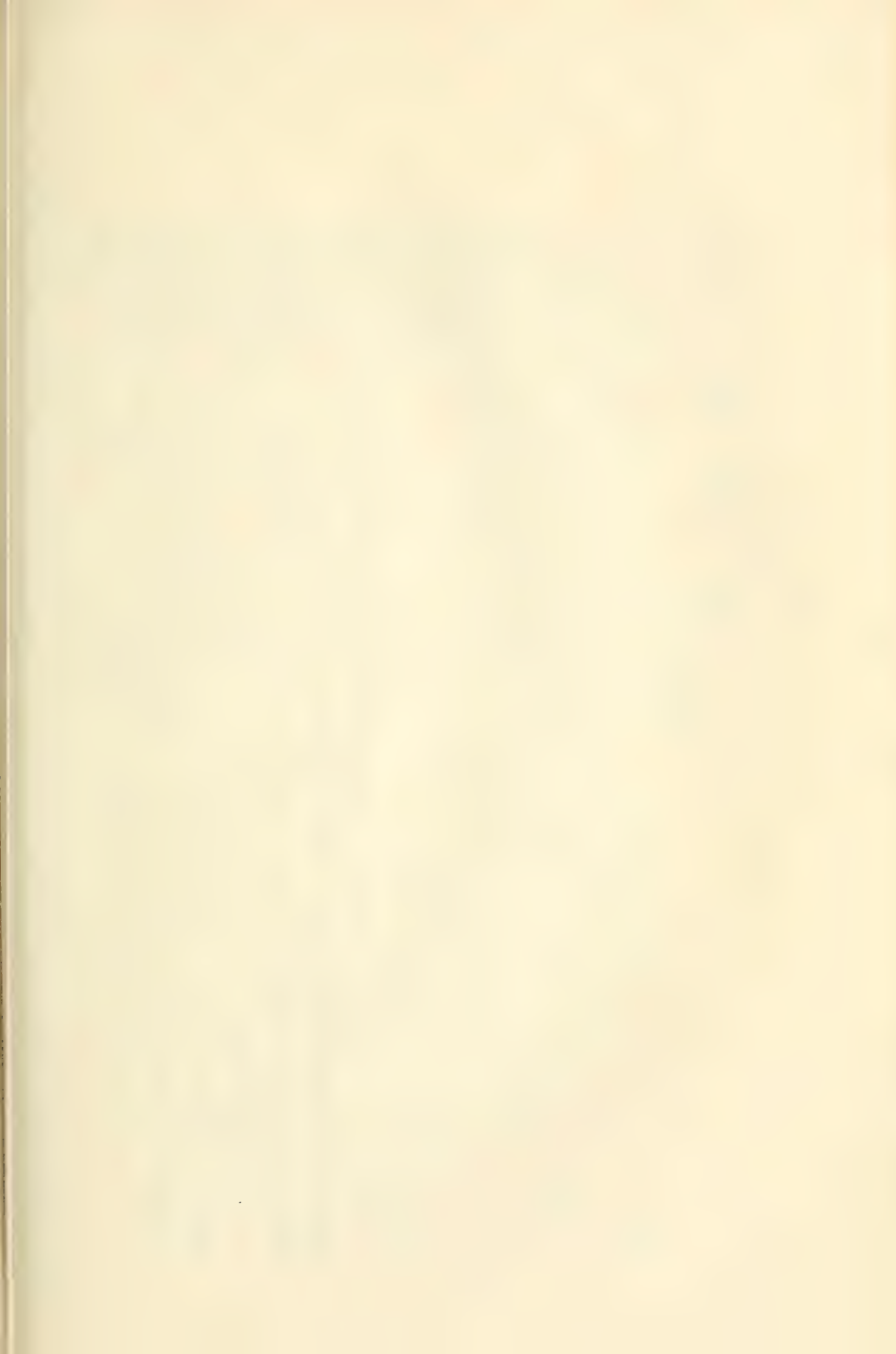
〔大和〕今の奈良縣是也、和名抄に「大和、於保夜萬止、國府在二高市郡一行程一日」とあり。

〔城下郡〕今大和國磯城郡の一部、和名抄に「城下、之岐乃之毛」と注し、「賀美、大和、三宅、鏡作、黒田、室原」の六鄉を載す。

をや。

大和と書たるは、かならず意富夜麻登とよむことなり。和名抄に、畿内の大和も、又その國の、城下郡なる大和郷も、ともに於保夜萬止とあるをもて知べし。然るをつねの語に、たゞ夜麻登とのみいふから、大字の添へるをも、たゞ夜麻登とのみよみ、また夜麻登といふに、かならず大字を添てかく事と心得たるなど、みなひがことなり。たゞ夜麻登といふには、和字のみかけり。但し諸國の名、又郡郷の名、皆必二字に書べしとの御定なれば、畿内の國名、又その郷名には、必大字を添書て、意富夜麻登と訓ぞ正しかりける。

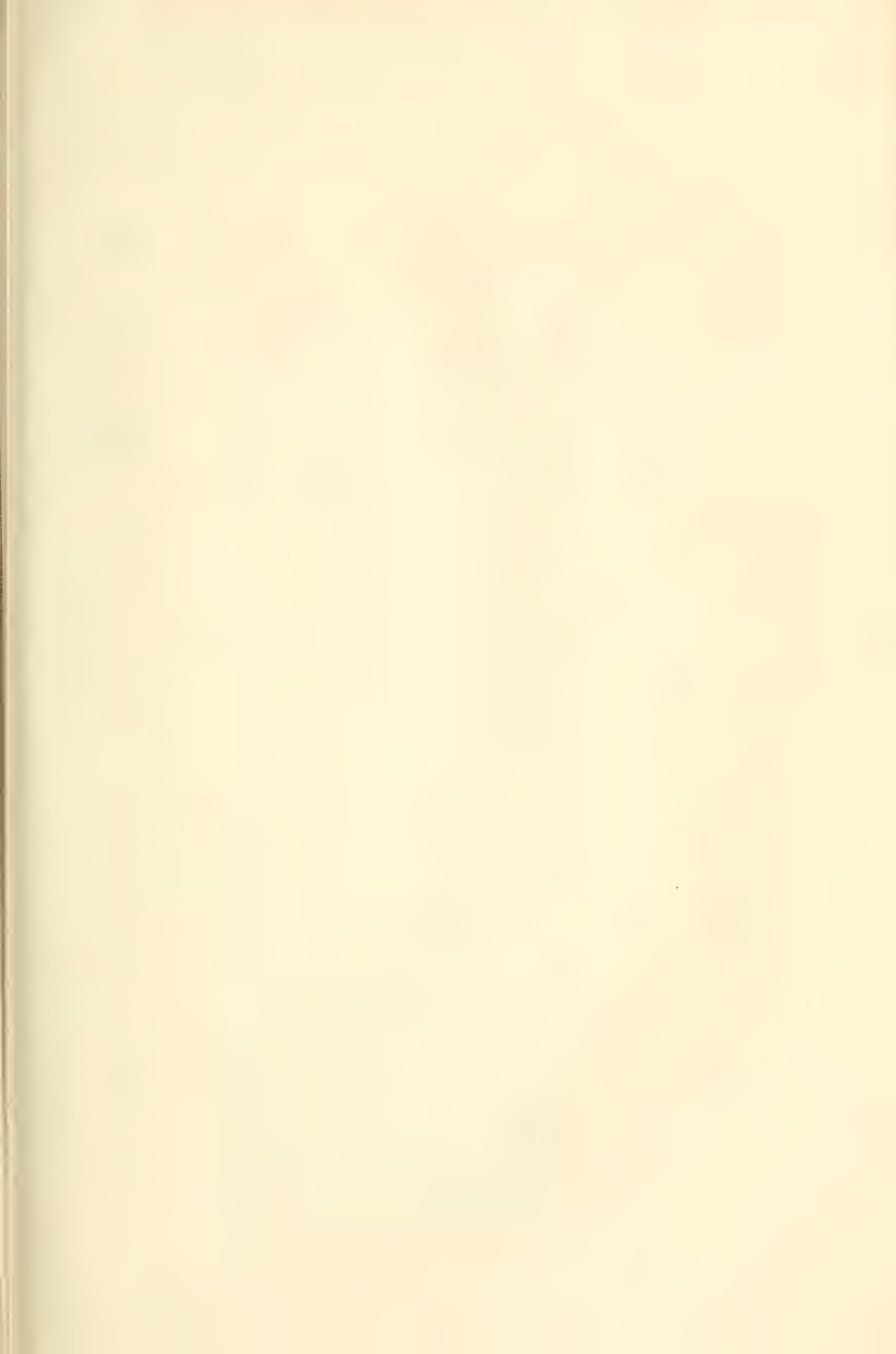
國號考終

鉗狂人

鉗狂人序

かけまくもかしこきすめらみことの御民となりいでて、あしたゆふべに、その大御蔭にかくろひながら、大御代は天明といひけるころ、ひとりのたふれありて、ゆゝしともかしこしとも、いはむかたなきたは言どもかきはなちたる物ありけり。さるをそのころ、豐國人藤原重名京にものまなびしてありけるに、或人その書をみせければ、いたくうれたみて、かゝるふみをなむ見得はんべる、いかでこのたはわざ、とくうちきため給へかしと、鈴屋翁かり、いひおこせたるに、うべなひていととく物せられたるの書になむ。かくてこの書うつし卷にて世にながくつたへむには、うつしひがめもこそおほからめとなげきて、このたび高市何がしといふわか山のふみあき人わが師藤垣内翁にこひ得て、板にゑらせたるは、いとうれしきことゝ思ふにあはせて、此聞つたへたるゆゑよし、一くだりかくはものしつ。

文政二年三月

從四位下度會神主正癸

鉗狂人

いづこのいかなる人にかならむ、近きころ衝口發といふ書をあらはして、みだりに大御國のいにしへをいやしめおとして、かけまくもいともかしこき皇統をさへに、はゞかりもなくあらぬすぢに論じ奉れるなど、ひとへに狂人の言也。故今これを辨じて、名づくることかくの如し。

彼書云、上古の世を天神七代地神五代となづけて、これを神代といふ。神武紀に此間を一百七十九萬二千四百七十餘歲とす、此年數もとより論ずるにたらず。

此年數は、自二天祖降臨一以逮二于今一とあれば、邇々藝命の天降坐しよりこなた也。その上文に我天祖とあるも、邇々藝命なるにて知べし。然るを今七代五代を合せての年數の如くいへるは誤なり。忍穗耳命よりあなたの年數は、なほいく百萬歲といふことをしらず。さて此年數を論

〔天神七代〕塵添壒囊鈔に「國常立尊國狭槌尊、豐斟渟尊、泥土瓊尊、沙土瓊尊、大戸之道尊、大戸之間邊尊、面足尊、惶根尊、伊弉諾尊、伊弉册尊」とあれど天神七代の稱は正史には見えず。

〔地神五代〕塵添壒囊鈔には、天照大神、正哉勝々速日天忍穗耳尊、天津彦々火瓊々杵尊、彦火々出見尊、彦波瀲武鸕鷀葺不合尊とあれど地神五代の稱は正史にはなし。

ずるにたらずといふは、甚しきみだり言なり。論ずるにたらざること、何をもて知れるにかいぶかし。すべて神代の傳說は、みな大に靈異くして、尋常の事理にことなる故に、人みな是を信ずることあたはず、世々にこれを解釋する人も、おのが心のひくかたにさまぐ〵いひ曲て、今日の事理にかなふさまに說なすめれ共、そはみな漢籍意に惑ひたる私ごと也。おのが心をもて思ふかたにいひまげば、もろ〳〵のこといかやうにもいひ曲らるべし。然るに今論者の如きは、しかいひまぐる事の非なるを知故に、ひたふるに論ずるにたらずとして、すべて神代の傳へをば取ざる也。これかの己が心にまかせていひまぐるよりは、少しまされるに似たれ共、靈異きを以てこれを信ぜざるは、又同じく漢籍意にまどへるもの也。凡てからぶみごころは、尋常の見聞の事理になづみて、甚小量なるもの也。いかにといふに、まことの理といふものは、はなはだ靈異しく妙なる物にして、さらに人の小き智をもて測識べきところにあらず。人のよくはかりしる所は、わづかにその百分が一にも及ぶべからず。然れば此天地の内にも外にも、上古にもゆくさきにも、思ひの外なるいかやうの奇異き事のあらむも測知がたきわざなるを、漢國のならひとして、古の聖人といふものを始め世々の人みな、おのが心をもてよろづを思ひはかりて、かくあるべき理ぞ、かくはあるまじき理ぞと定めて、その己が定めたるところを理の至極と思ひ、此理の外はなきことゝ心得めり。その驗むるところとては、書典にのする所、三千年にたらざる内の事にして、その間に無き事は、天地の始にも終にも決めて無き理と思ひ、又

〔靈異〕神妙不可思議にて、人智を以て測り知る事の出來ざるをいふ。

〔ひたぶるに〕ひたすらに同じ。

〔小量〕心の狹きをいふ。

〔漢國〕「から」とよむは、藝苑日涉に「加羅或作二迦羅一、又作二駕落一、或加良、今人呼レ唐爲二加羅一誤矣、蓋崇神天皇時、意富加羅國王子來歸、此外國朝貢之始也、故當時呼二外國一爲二加羅一不二獨唐而已一」と見え、始めは今の朝鮮を云ひしが、後支那外國をも一般に「から」といふに至れり。

その間の年數を、いといと久しき事と思ふめり。天地の無窮なるあひだにとりては、二千年三千年などは、たゞいさゝかのほどなるべきに、其間に無しとて無きに定めむは、智の甚小量なるにあらずや。すべて人の智は、かの聖人といふ者といへ共、限有てなほえ知らぬ事はいと多きを、ましてその聖人にも及ばぬ人をや。今論者神代の年數を信ずることあたはざるも、此漢書に惑ひおほれて、まことの理の測がたき事を思はず、天地の始終の甚久遠なるべきことを思はざるより起れり。或人琉球國にまかり渡りて、こゝの事共かたりける中に、加賀殿と申す御大名は、百萬石の地を領じ給ふ也といひければ、かしこのかしこき人あざわらひて、日本人の物語はみなそらごとなりけりとて、聞ずなりにけりとぞ、心ばへのよく似たることなり。すべてなまさかしく少し智ある人、漢ぶみ心にうつりぬれば、いよ〳〵その智小量になるを、返りて智の開けたる如く思ふこそをこなれ。もしその小量なるからぶみごころを清くはなれて、まことの理ははかり知がたきものぞといふことをだによくさとりなば、神代に疑ひはあるべからず。抑皇國は、四海萬國を照し坐ます天照大御神の生坐る本つ御國にして、その皇孫命の、天より降りましまして、天地とともに遠長くしろしめす御國なれば、萬國の元にして、萬國にすぐれたるが故に、天地の始より神代の事共、いと詳に正しく傳はり來て、今も古事記日本紀にのこれり。外國は天照大御神の生ませる御國にあらず。皇孫命のしろしめす御國にあらざるが故に、はじめより定まれる君だになくして、惡神ところをえてあらびつゝ、國治まりがたく、その時々かしこ

〔琉球〕皇明世法錄に「古爲ニ流虬一、地界萬濤蜿蜒若ニ虬浮ニ水中一、因名、後轉謂ニ琉球一」と見え、又傳信錄に、隋書には琉求と書き、元史には瑠求といひ、明洪武中改ニ琉球一と見えたり。

〔皇孫命〕瓊々杵尊をいふ。神代紀下に「天照大神之子正哉吾勝勝速日天忍穗耳尊、娶ニ高皇產靈尊之女、栲幡千々姬一、生ニ天津彥彥火瓊々杵尊一」とあり。

〔天地とともに云云〕神代紀下に「因勅ニ皇孫一曰、豐葦原千五百秋之瑞穗國、是吾子孫可レ王之地也云々、當ト與ニ天壤一無レ窮者矣」と見えたり。

〔不經〕常法にあらざるをいふ。
〔周公旦〕姓は姬、旦は名、世に周公と稱す、文王の子にて、成王を輔けて禮を制し、樂を作して周家の治を爲せり。
〔さかしら心〕物しりぶること、又かしこげ振るをいふ
〔太極〕天地未だ開けず陰陽の分れざりし以前に、元氣混沌として唯一なりしものをいふ、又た太初に作る、易經繫辭傳に「易有㆓太極㆒是生㆓兩儀㆒」とあり。
〔陰陽〕天地間にありて萬物を造り出す二氣也。釋名に「陰、蔭也、氣在㆑內奧蔭也、陽、揚也、氣在㆑外發揚也」と見えたり。

きものつよき者あらそひて、かはる〳〵君長とはなりて、いと〳〵みだりがはしきから、天地のはじめ神代の事共も、正しく詳なる傳說なくして、今のあたり世を照し給ふ日神の始をすらえ知り奉らず、たゞ例のおのれおのれがさかしら心にまかせて、天地の始をも萬の事をも、おしはかりの說をのみなして、返りてそれをかしこき事におもへり。さるは正しく詳にこそあらね、いづれの國にもおの〳〵いさゝかづつ上古の傳說は有て、そのまことの傳へは、いづれも奇靈(あやし)き事多くして、神代紀の心ばへに似たりけむを、漢國などにはそのかたはしのこれるをも、みな不經虛誕なりとして、とりあげざりしから、漸に失(うせ)ゆきつゝまれになれる也。殷の代などまではなほ上古の傳へを守し事も有(り)つとおぼしきに、周に至て周公旦といふをのこ、聖人といはるゝ中にも、殊に邪智ふかく、ひたすらにさかしらをのみ用ひしより、いよ〳〵世人のさかしら心增長せり。」抑此天地は、漢國人のつねにいふなる太極陰陽などの如き小理にては決て成立すまじく、はなはだ靈異(あやし)く微妙なる理有て成立したるべければ、神代の事迹はもとより甚あやしき事のみ多かるべき物也。又天地出來てより以來は、甚久遠なるべければ、神武紀に出たる年數も何かは疑ふべき、是を虛妄也として取(ら)ざるは中々に愚昧也といふべし。外國人はもとより神代の正しきまことの傳說をしらざるものなればせむかたなし。ありがたくも皇國には、かゝるまことの傳へごととののこりて、皆人これをうかゞひ知ることなるに、これを信ずることあたはずして、かへりてかの外國の風俗をかしこきことに思ひ信ずるは、いかなるまど

〔高千穗宮〕一説に日向國臼杵郡なる今の高千穗嶽なりといふ、又一説に日向の南端にて、大隅國の堺なる今の霧島山なりといふ二説あり、今定かに極め難けれど後説稍眞に近きが如し。

〔神武天皇云々〕神武紀に「七十有六年春三月午朔甲辰天皇崩二于橿原宮一時年一百二十七歲」とあり。

〔西漢云々〕又前漢ともいふ、高祖より平帝に至る約二百十年間をいふ、高祖位に即きたるは我が孝元天皇の九年也。

ひぞや。その中に疑ひながらも尊むともがらは、なほその惑ひ淺きを、此論者の如く人よりすぐれてかしこからむとて、ひたふるに是を廢るは、いよ〳〵まどひの甚しき也。かく近くはしく辨じても、千數百年にしみ付たるからぶみ心の癖は、なほすみやかには除こりがたかるべければ、たちまちに信ずる人はよに有がたかるべけれど、人はいかにかしこきも智のかぎりの有て、なほ小き物なれば、誠の理は測知がたき物ぞといふ事をだにさとりなば、まどふことは有まじきぞかし。さてかの神武紀の天孫臨降以來の年數を、今かりにその三代にひとしく分つときは一代大よそ六十萬歲ばかりにあたるべきを、古事記に日子穗々手見命坐二高千穗宮一伍佰捌拾歲とある。かくの如く此尊の年數の甚短く、又神武天皇に至りてはいよ〳〵ちゞまり給へること人の疑ひあるべけれど、これは必然るべき故の有こと也。その子細は古事記傳に詳にいへればこゝには略きつ。

天神七代は名のみにして人體なし。

人體なきこと何をもて知れるにか、古傳を信ぜず、己が心におしはかりてかくいふは、例の漢籍意の俗習也。

地神五代の始めは西土の西漢の時にあたる。

〔姓氏錄〕三十卷、萬多親王等撰、新撰姓氏錄を云ふ、畿内に貫族せる皇別、神別、蕃別の諸氏及び其所由を記せるもの也。

〔神別〕天神地祇の胄裔たる氏族をいふ。

〔地祇〕國つ神をいふ。

〔夏〕事林廣記に「舜擧二鯀之子禹一、以成二父續一、禹抑二洪水一、天下平、堯以二其功一、賜二姓姒氏一、舜薦レ禹爲レ嗣、舜崩三年之喪畢、踐二天子位一、都二安邑一國號レ夏云々」と見ゆ。

〔殷〕また商といふ湯王が夏を滅してより二十八世六百四十四年の間周に至る迄をいふ。

まづ地神五代と申す事、古書に見えず、大に違へる稱也。其故は、天照大御神天之忍穗耳命は高天原に坐ませば、天つ神と申す事もとより論なし。邇々藝命は此土に天降り給へ共、是も本天つ神也。日子穗々手見命葺不合命は此土に生坐ぬれ共、此二御代をも天つ神の御子と申し、天孫などとこそ申せ、地神と申せることなし、姓氏錄に神別の諸氏を三つに分て、天神天孫地祇といへるに、此御代々々の御後をば天孫部に收めて、地祇には收めざるを以て知べし。されば地神五代と申す稱は、古をも知らざる後世人のみだりにいひ出たること也。これはこゝの論の趣意にあづからざる事なれば、かくいふは詞とがめに似たれ共、此論者古意古書をしらず、古事記日本紀をまことによく解することあたはずして、上古を論ずること甚みだりなる故に、いささか驚かしおく也。此書の趣すべて古に昧きこと、皆此類也と知べし。さて天照大御神の高天原をしろしめし初しは、かの一百七十九萬餘歳よりなほ遙に古の事にして、其年數は傳へごとなければ、幾百萬歳といふことをしらず。然るに今例の漢國のわづかに夏殷の代などよりこなたの年紀を立て、とかくいふなる小き說にならひて、これをはからむとするは、いと〳〵おふけなくなむ。

辰韓は秦の亡人にして、素戔嗚尊は辰韓の主なり。

此段皇國をもろこしの秦の代より後の事也とし、又何事も皆韓より起れりとする、論者の趣意の

〔須佐之男命〕日本紀、神代卷に「一書曰、素盞嗚尊所行無狀云々、逐逐之、是時素盞嗚尊帥二五十猛神一降二到於新羅國一居二曾尸茂梨之處一云々」とあり。

〔周武王云々〕史記宋微子世家に「武王、乃封二箕子於朝鮮一、而不レ臣也、其後箕子朝レ周、過二故殷虚一、感二宮室毀壞生一レ禾黍一、箕子傷レ之云々」とあり

〔北史〕唐の李延壽の撰する所、北朝の魏より隋に至る四代二百四十二年の歷史にて、凡て一百卷あり。

本也。然れ共須佐之男命を辰韓の主といふこと、さらに據なし。因て按ずるにこれは神代紀に、此神新良の國に降り給へりしことあるをもて據とするなるべし。そは新良卽辰韓と心得ていふめれ共、これ大に誤れること也。抑須佐之男命は天照大御神の御弟命にましませば、かのもろこしにては、周武王が箕子を朝鮮に封ぜし時などよりも、數百萬歲以前の神にてましませば、くだ〳〵しき辰韓の辨などには及ばざる事なれ共、姑く論者の意を立ていはむには、まづ新羅を辰韓と心得たること麁忽也。そのよしは先韓地の沿革を詳にして後に辨ずべし。抑今の朝鮮國は、古の三韓朝鮮高句麗穢貊沃沮などいふ國々を混一したる物にして、三韓の地は今の朝鮮の內の南方半分ばかり也。三韓とは馬韓辰韓辨辰の三にして、馬韓は西に在て大也。辰韓はその東にありて小也。辨辰は辰韓の南に在て是も小也。はて周武王が箕子を封じたりし古の朝鮮は、三韓の北に在て一小國なりしを、漢代の始つかた、燕の亡人衛滿その國を取て、孫の世までたもちたる。此時はやゝ大にして、傍なる高麗穢貊沃沮などをもしたがへたれ共、これらの國々にも別に君長は有り。なほ又南なる三韓は別にして、馬韓に五十よ國、辰韓辨辰におの〳〵十二國ありて、すべて七十餘の小國有り。さて魏志には、辨辰の內二十六國有てその名共を擧たる中に斯盧國といふあり。これ新羅也。北史の新羅傳に亦曰二斯盧國一といへり。故に唐書に新羅辨韓苗裔也といひ、五代史にも新羅辨韓之遺種也といへり。然れば新羅はこれ辨辰の中の一國にして、辰韓には非ること明らけし。然るをもろこしにてもこれを誤りて辰韓と心得た

〔宋書〕齊の武帝の永明五年沈約が勅命によりて撰する所、卽ち南北朝の宋の世、六十年間の事を記せる歷史也。

〔魏書〕北齊の魏收の撰する所、三國の魏と區別せんために後魏書ともいふ、道武帝以下十四代の歷史にて、凡て一百十四卷より成る。

〔南史〕唐の李延壽の撰する所、南朝四代百七十年間の事を記せる歷史にて、凡て八十卷より成る。

る者あり、北史に新羅者其先本辰韓種也といへるたぐひ是也。こは辨辰を辨韓とも辨辰韓ともいへる故に、辰字によりて辰韓とまぎれたる物也。又漢書には三韓といふ名は見えずして、これを辰國といへり。後漢書にも三韓皆古之辰國也といへり。然るを魏志に辰韓者古之辰國也といひ、顏師古が漢書の注にも辰辰韓之國といへる、是らも辰字によりてふと誤れるもの也。さて新羅は、魏志に出たる所は甚小國と聞えて、晉書にも其傳なく、宋書魏書などにも百濟の傳はあれ共、新羅傳はなし。北史南史に至て新羅傳も有。然れば漸くに強大に成て、その比は高麗百濟と鼎足の如く相並たりと見ゆ。日本紀に見えたる趣も然也。かくて後はもはら此三國をさして三韓といふめれ共、其本は然らず。其中に百濟を馬韓とするは違はず、新羅を辰韓とするは誤なること上にいへるが如し。又高麗を辨韓とするは殊に違へり。辨韓は三韓の中にも最南に在り。高麗はもと三韓とは別にして朝鮮穢貊などをへだてゝ北方にあれば也。後に漸くに大國となりて、傍國を多く倂せたれ共、そのかみ猶辨韓の地はその域内にあらざるをや。さて三韓の事、漢國の代々の史に記せるところ、次第に前史の文を心得誤りてまぎらはしき事、かの辨辰と辰韓とを混じたる類いと多し。見む人よくせずば誤りぬべし。今はその代々の史共を引合せて考へたるところ、件の如く也。然るに論者漢籍をばひたすらに信じて、かくの如く誤のあるをもえさとらず、新羅卽辰韓と心得て、姓氏錄なる新良の事を引合せていへるなど皆謬也。新羅は辨韓にして辰韓には非ること、上件の如くなれば、須佐之男命辰韓には緣なし。

抑今論者上古の傳說を破りて、新說を立むとならば、その本づく所をよく固めおきてこゝにいふべき事なるに、その考へ甚輕忽にして、根本とする所にまづかくの如き相違あるうへは、餘も准へ知べき也。又秦の亡人云々の文は、後漢書魏志晉書等に記せるまゝなるに、その本をば考へたゞさずして、いたく後世の東國通鑑に據て定めたるはいかゞ。たゞから書にてだにあれば、何れの書にてもみなたしかなる物と思へるにや。

姓氏錄、右京皇別新良貴、彥波瀲武鸕鷀草葺不合尊男稻飯命之後也、是出二於新良國主一稻飯命出二於新羅國王一者祖合日本紀不レ見。

姓氏錄此條板本は誤有て其義聞えず。おのれさきに古本二本を以て挍合したりしに、いづれも是出の出字なく、國字の下に卽爲國の三字有て、是於二新良國一卽爲二國王一とあり。是にてよく聞えたり。出於の出字は、下にも出於とある本よりまぎれて、上にも入り、又卽爲國の三字は、國字の二つあるよりまぎれて脫たるなり。もしわが古本といふを疑はゞ、其本世間に有尋ねて見べし。さて其下の文は、古本も皆板本と同じこと也。猶誤有べし。こゝろみにいはゞ、下の出於は二字ともに衍にて、稻飯命新良國王之祖也とや有けむ。かならずかくの如くならでは上文と意貫かず聞えぬ事也。此命新羅國へ渡り給へりとおぼしきことあり、其よし古事記傳にいへり。さて論者これをこゝに引たるは、神武天皇は周惠王よりはるかに後なりといふ證にしたるなれ

〔後漢書〕南北朝の宋の人范曄の撰する所、後漢二十帝の事を記せる歷史にて、凡て一百二十卷より成る。

〔晉書〕唐の房玄齡李延壽等が太宗の勅命を奉じて編修する所、西晉四代五十四年、東晉十一代一百二年間の事を記せる歷史にて、凡て一百三十卷あり。

〔周惠王より云々〕神武紀元元年は惠王の十七年に當り惠王は神武紀元九年に薨じたり、而して惠王の卽位したるは神武紀元元年の前年也。

〔稲飯命〕古事記には稲氷命に作る、同記に「是の天津日高日子波限建鵜草葺不合命、其の御姨、玉依毘賣命に娶ひて、生みませる御子の御名は五瀬命、次に稲氷命、次に御毛沼命、次に若御毛沼命、云々、故、御毛沼命は、波の穗を跳みて、常世國に渡り坐し、稲氷命は、妣の國として、海原に入り坐しき」と見えたり、若御毛沼命は神武天皇を申す。

〔姓氏錄〕正しくは新撰姓氏錄といふ。神武天皇より弘仁天皇に至る凡そ一千一百八十氏の姓氏を說きたるもの、凡て三十卷也。六四頁參照。

共、件の如く板本脫誤ありて、論者の意とは反覆したる事なれば、さらにかなはず。そも〳〵論者、何をなり共引出て、己が說を助けむとする心のみすゝみはやれるから、いさゝかも三韓にかゝれることとあるをば、見つくるまゝに引出て、文義の聞えぬにも心つかず、かやうの疎漏ありて、中々に強事のあらはるゝこそうたてけれ。いで板本の誤なる由は、稲飯命を胥不合尊の男といひながら、たちまちにまた出二於新良國主一とはいかゞ。もし然らば胥不合尊をも共に新良王より出給ふとするにや。姓氏錄は、此論者などの說の如く口にまかせていふべき私の書にはあらず。朝廷に進る公の書なるに、皇祖なる胥不合尊を、新良王より出給ふとして可ならむやは、又稲飯命もし新良王より出給はゞ、此姓は諸蕃にてぞ收むべけれ、いかでか皇別には收めむ。皇別に收たるは、神武天皇の御兄弟にますが故也。

神武帝の辛酉元年を、周惠王十七年にあつれども、周惠王の時何ぞ辰馬の二韓あらむ。

論者たゞ漢國の書をのみ據として、三韓などをもみな周の代よりは後の事と思ふめれ共、然らざること也。漢國にてその國あることを知りたるこそ、周より後にてもあらめ。其國々はもとより有て王も有べく、天地のはじめより數百萬歲の間には、いく度か變易ありて、國の盛衰人物の有無增減などもかはるべし。然れ共外國はすべて上古の傳說詳ならざれば、はるかに上代

〔周の末秦の比〕史上に所謂戰國時代と稱する時にて、秦の始皇の卽位せしは、我が孝靈天皇の四十五年に當る。

〔新羅〕北史に「新羅者、其先本辰韓種也、辰韓始有六國、後稍分爲十二、新羅、則其一也、或稱魏將毋丘儉、討高麗破之、奔沃沮、其後復歸、故國有留者、遂爲新羅」と見えたり。

〔百濟〕佛祖統記に「百濟、馬韓之屬國、於帶方故地、初以百實濟、故名云々」とあり。

の事共は、傳はらざること多かるべく、又傳はりたる事どもゝ、いつの代といふことなどはさだかならざるべきを、漢國の書にのせざるかぎりをば、おして皆後の事とし、それより以前にはその國々もなかりし如くに思ふは、例のいと小き心也。かの辰韓の如きも、周の末秦の比こそしばらく無人の境にて、秦の亡人の來てより人物は有そめけめ。それよりはるかに古には、又人物ももとより有しも測がたし。たとひ辰韓はいかにもあれ、須佐之男命の降り給ひしは、辨韓の新羅なれば、辰韓の始めにはかゝはることなし。さてこゝに辰馬の二韓といへるは、上に引る東國通鑑に、辰韓は常用馬韓人作主といへる故に、馬韓の事をも出さる也。これ又晉書等の文也。かくて馬韓をも周より後の事とするは、かの東國通鑑などに、百濟などの始祖をも、漢代とするによれるなるべし。然れ共その後世までつゞきたる王の始祖こそ漢代にても有けめ。それより以前にも、その先祖ならぬ王は有べし。又百濟はもとは、馬韓五十餘國の内の一國にてこそあれ。五十よ國おの／＼王はあるべきに、いづれもみな周より後也とは何をもてしらむ。又後漢書に三韓皆古之辰國也馬韓最大共立其種爲辰王盡王三韓之地其諸國王先皆是馬韓種人焉ともいへるによれば、もと三韓の總王も有し也。其諸國の王もみな馬韓種人にて、七十餘國ありつるを、こと／″＼く何れの代より始まるといふこと知べきにあらず、たゞ百濟等三國の始祖に准じて、みなこと／″＼く漢代より始まるとせむは、强說ならずや。

五代の年數知べからずといへ共、大巳貴命は素戔雄尊の子にして、其子事代主命の女姫蹈鞴五十鈴姫命神武天皇の后なれば、其大概察すべし。

大巳貴命を須佐之男命の御子也とは、日本紀によりていへるなれ共、古事記によるに、實は六世の御孫にして、其間五世の神名も一々見えたり。すべて上古は先祖をばいく世にてもみな於夜といへり。故に祖字をもしか訓り。又子孫をばいく世にても皆子といへり。代々の天皇を天津神の御子と申すにても知べし。されば日本紀に須佐之男命の子とあるも、もとの傳へは子孫の意にて有しなり。さて又五十鈴姫命を事代主命の御女といふも、神武紀ばかりかいなでに見ていひては違ふこと也。かの姫命は神代紀に、事代主神八尋鰐に化て、三島の溝樴姫に逢て生ませる御子也。されば御父は事代主神の現身にはあらず。後に此神を祠れる神社の神靈の、八尋鰐に化給ひての御事也。これを古事記の傳へにては、三輪之大物主神の御事とせるを合せても知べし。大物主と申すは三輪に祠る御名也。故に三輪之といへり。然れば大物主にもあれ事代主にもあれ、その現身には非ず。神社にまつれる神靈なること明らけし。大和國に事代主神を祠れる神社これかれ有。又神靈の男身をあらはして女を娶り、子を生給へること上代には例多し。凡て神に現身をいふと、後に社にまつる神靈をいふとのかはり有。たとへば天照大神とは、神代紀の如く現身をも申し又伊勢宮にいつきまつる神靈をも申すが如し。普通の神學者は、かや

〔大巳貴神〕神代紀上に「一書曰、大國主神、亦名大物主神、亦號國作大己貴命、亦曰葦原醜男、亦曰八千矛神、亦曰大國玉神」とあり。

〔六世の御孫〕古事記に「遠須佐之男命、娶櫛名田比賣所生神、八島士奴美神、其神娶大山津見神之女名木花知流比賣、生子布波能母遲久奴須奴神、此神娶淤迦美神之女名日河比賣、生子深淵之水夜禮花神、此神娶天之都度閇知泥神、生子淤美豆奴神、此神娶布怒豆奴神之女名布帝耳神、生子天之冬衣神、此神娶刺國若比賣、生子大國主神」と見ゆ。

うのくはしき子細をばえ考へしらずして、かの事代主の御女の事をも、さま〴〵に疑へる事なれ共、精密なる古學の眼をもて見れば、いと明らかなるもの也。これらは年代の論には要なけれ共、論者古に昧くして、かゝる子細をも尋ねず、みだりに論ずる故に、いさゝかこれを辨ずる也。年代の事は上にいへる如く、神代は一世といへ共、いと〴〵久遠なることなれば、たとひ神武天皇の后須佐之男命の直の御女にても、すこしも妨なき物をや。

神武天皇元年辛酉は、後漢宣帝神爵二年辛酉にして云々、かくの如く六百年減ぜざれば三國の年紀符合せず。

三國とは新羅百濟高麗をいふなるべし。その年紀は外には考ぬべきところなければ、三國史記東國通鑑などをもていふなるべし。これらの書はことに後の物にして、信じがきことおほく、年紀などもたがへる事共おほくて、古の事共を記せるはすべて據とするにたらざる物なるに、さる事をも思ひはからずして、ゆくりなく證據としたる、論者の淺見おしはかられてあはれ也もし此と彼とを照して正さむとならば、吾國の古書と古書とをよく考へ合せてこそ正すべきに、共古書の考へは甚麁忽にして、返りて迂遠なる他國の謬誤おほき後世の書を以てこれを論ずるは、譬へば隣の屋根を準として、已が家の梁を傾きたりといはむが如し。屋根は片低りなる物なることをえさとらぬしれものゝ事也。さて宣帝神爵は前漢なるを、後漢といへるは傳寫の誤

〔神武天皇の后〕古事記には富登多多良伊須須岐比賣命といふ、同書中に「三島湟咋之女、名は勢夜陀多良比賣、其容姿麗美かりければ、美和大物主神見感て云々、其の美人に娶ひて生みませる御子、名は富登多多良伊須須岐比賣命、亦の名は比賣多々良伊須氣余理比賣と謂す」とあり、日本紀には、踏鞴五十鈴と書けり。

〔後漢宣帝云々〕宣帝は高祖より十代の天子にて、神爵二年は我が崇神天皇の三十八年に當る。

〔五鳳元年〕神爵四年の翌年にて、新羅の赫居世の元年也、我が崇神天皇の四十一年に當る

〔垂仁天皇云々〕第十一代の天皇に在し、其の元年は皇紀六百三十二年にて、前漢成帝の建始九年、新羅赫居世の二十九年に當る。

〔史記〕古くは太史公書といふ、漢の司馬遷の著にて、上は黄帝より、下は漢の武帝に至る三千餘年間の事を記せる歴史也、凡て一百三十篇あり

歟。さて神武天皇元年を、六百年こなたへちゞめて、漢の宣帝神爵二年としも定めたるは、例の東國通鑑に、新羅の始祖の元年を、かの宣帝の五鳳元年にあてたるに據るなるべし。五鳳は神爵の次の年號にて、辛酉神爵二年なれば也。抑かくの如く年を定めていへるはいとをかしき事也。其故は日本紀の年紀を用ひずして、六百年違へりとする程のものゝ、辛酉とあるをば用ひたるはいかに。かの元年のかならず辛酉なるべきことは、何によりて知れるぞや。六百年も違へる物ならば、辛酉はいよ〳〵おぼつかなき事ならずや。笑ふべし〳〵。さて論者のかくの如く定めたる年紀も、又かの須佐之男命を新羅王也といへると符合せず。いかにといふに、新羅の始祖元年漢の五鳳元年にあたり、神武帝の元年もその三年前の神爵二年にあたらむに、帝の后の曾祖父なる須佐之男命新羅王ならば、かの始祖元年より百餘年の前に有べしいかゞ。もし須佐之男命は始祖より前の王也とせば、その年紀は又何を以て定めむ。然ればもし強て此年紀を合せむとせば、猶百餘年ばかりもこなたへちゞめて、垂仁天皇の御代の末ごろにあてざれば合ざる也。猶又東國通鑑の三國の年紀は、論ずべきもの多けれ共、くだ〳〵しければもらしつ。

かくのごとく新しき事故、史記にも朝鮮傳はあれども日本傳はなし、漢書にもなし。

すべて漢國の歴史に他國の傳を立たる例、おほくは其國と通好して、自國にあづかる事あるも

る也。史記に朝鮮傳のあるも、自國に係れる事のある故なり。通好せず自國にあづかる事なき國は、おほくは傳を立ることなし。然るに史記に傳なしとて、新しき事と思ふは、いと／＼愚也。もし然らば、史記に傳のなき國々は、みなそれより後に出來たるにや笑ふべし。又漢書には、別に傳はなけれども、樂浪海中有倭人分爲百餘國といへり。後漢書には、倭凡百餘國自武帝滅朝鮮使譯通於漢者三十許國といへり。漢武帝が朝鮮をほろぼしたるは、かの宣帝神爵二年より五十年ばかり前なれば、これらをば神武天皇より前の事としていふにや。

皇統

或記云、神武天皇御母は玉依姫、䳓不合尊の御子にはましまさず、御年も䳓不合尊よりは長じ給へり。其先は吳泰伯の苗裔より出させ給ふ、中略後に□り南海を淩き、大倭國に饒速日命長□都を開き給へり、云々、されば後世に我邦は太伯の末と云、又は周は姬姓なれば姬氏國の名もあり、神武天皇の御末は仲哀天皇にて盡させ給ふ下略按應神天皇はいづくより出させ給ふや、胎中天皇いろ／＼疑はしく思はるゝ也。

此段などはむげに淺はかなる事にて、論ずるにもたらざれ共、かけまくもかしこき皇統の御事をよしもなきすぢにいひまけ奉りたれば、見過しがたくていさゝかこれを辨ずる也。まづ或記云

〔漢武帝云々〕漢の武帝が朝鮮を滅したるは同帝の元封三年にて、時の朝鮮は衞右渠の代也而して我が開化天皇の五十年、皇紀五百五十三年に當り漢の神爵二年より四十九年前也。

〔玉依姫云々〕鵜草葺不合尊の御母なる豐玉姫の御妹にて、鵜草葺不合尊の御叔母に當り給へり。

〔吳泰伯〕史記、吳太伯世家に「吳太伯、太伯弟仲雍、皆周太王之子、而王季歷之兄也、季歷賢而有聖子昌、太王欲立季歷以及昌、於是太伯仲雍二人、乃奔荊蠻、文身斷髮、示不可用云々」とあり。

〔神武天皇〕神武紀に「神日本磐余彥天皇、彥波瀲武鸕鷀草葺不合尊第四子也、母曰玉依姫、海童之小女也云々」と見ゆ。

〔葺不合尊〕彥波瀲武鸕鷀草葺不合尊なり、記には天津日高日子波限建鵜葺不合尊とあり、彥火々出見尊の御子にて、御母を豐玉姫と申す。

〔張本〕後に書き出す本文の下地を豫め備ふるものをいふ、卽ちまへおきの也、なほ伏線といふが如し、左傳隱公五年注に「傳具其事、爲後晉事張本」とあり。

といへるは、實は論者の僞りてみづから造りたる說にして、神武天皇吳泰伯が後也といふ說を信にせむがためのたくみ也。いかにといふに、もし實に或記ならば、かならず神武天皇は某の御子也と御父をもいふべし。もし御父詳ならずば、又そのよしを必いふべき事也。然るにたゞ葺不合尊の御子にはましまさずとのみいひて、一言も御父のさだはなくて、まづ始に御母は玉依姫とのみいへる、僞作の趣意あらはなるもの也。これ下の今按に、泰伯の苗裔此島に來て、玉依姫を娶てといふ事をいはむために、こゝには先その御母ばかりをいひて、御父の事は、今按をまちて知るゝやうに作り合せたる也。又御父をだにいかに共いはぬほどなれば、御年の事などはいふべくもあらぬに、葺不合尊よりは長じ給へりといへるも、御從母兄弟とする今按を助けむがため也。又□り南海を凌ぎ云々といひて、その出給ひし地名の所を蟲喰にしたるも、又同じく下の今按の琉球を信にせむため、又其勃興し給ふ地名蠹魚に破られといへるも、此蟲喰の所に心をつけさせむため也。その蟲喰の下にりの字を置たるは、琉球よりと有しりの字をのこして、蟲のくひたるさまに見せたる也。又次にも今一蟲喰をなしたるは、たゞ一つにては、もし人の疑はむかと思ひて、たぐひあることを見せたる也。然れば此或記は、下の今按を信にせむための張本に造りたる物にして、いふべき事をいはずのこし置て、今按を相待て事のわかるゝやうにたくみたるもの也。此たぐひの僞りごと猶外にもみゆ。よまむ人心すべし

さて泰伯の事は、もと漢國の晉書の倭人傳に、自謂太伯之後といへるより起りて、此方にても

中古より、此からぶみの說を信ぜしものも有て、姫氏國などいふ名をさへ作れり。又近世或人は、天照大神と申すは、すなはち呉泰伯にて、邇々藝命の天より降り給ふといふは、その子孫の呉國より渡り來給へる也といへり。すべて近き世には此類の說をいひ出るを發明と思へり。自謂とは此方の人のみづからいへるなれば、上古より此傳へ有し事ならむと思ふべけれど、すべて漢籍に皇國の事をいへるは、うきたること多くして信じがたきこと、下に委くいふべし。後世の事は、此方の事は、此方の人はよく知れる故に、その違へること明らかに分るゝを、上古の事は、此方の事を、此方の人もたしかに知らざるゆゑに、違へりや違はずや明らかならざるから、漢國の書にいへることをみな信ずる也。かの自謂と記せるも、實はいかゞ有けむ、さだかならぬことなれ共、もしは西國の邊鄙のをこの者などの、たま〳〵かの國にまかり渡りしが、かの國人に尊まれむために、僞りてみだりにいひし事も有やしけむ。とにかくにおぼつかなきこと也。抑泰伯は、かの國にてこそたふとくもあらめ、西戎なれば、皇室にては何の尊き事かあらむ。然るを世々の人、何事につけても漢國をみだりに尊尙する心にて、孔丘が至德とほめたる人なれば、尊きものに思ひて、此說をよろこぶ人も中古より有し也。今此論者の意は須佐之男命を韓人也といふを根本として、萬の事皆韓より起れりとするものゝ、此泰伯の說もふるきからぶみに出たる事なれば、廢むことの惜さに、是をも引入て說を作れる也。もし漢籍に據て說を立むとならば、倭は秦徐福が後也といへることも有。これはかの國にて尊まぬ人なる故

〔姫氏國〕釋日本紀に「問、此國謂二東海女國一、又謂二東海姫氏國一、若有二其說一哉、答、師說梁時、寶志和尚讖云二東海姫氏國一者倭國之名也、今案天照大神、始祖之陰神也、神功皇后又女王也、就二此等義一、或謂二女國一、或稱二姫氏國一、謂二東海一者、日本自二大唐一當二東方一之間、唐朝所レ名也」と見えたり。

〔孔丘〕世に所謂孔子也、丘は孔子の名也。

〔徐福〕方士にて齊の人、秦の始皇の命を受けて三神山に不死の藥を求め遂に歸らず、日本に來ること後漢書に見ゆ。

に、此方にて此說は取る人なけれ共、論者はもとよりことさらに皇國をいひおとさむとするものなれば、秦伯よりは此徐福ぞ時代もかの漢の神爵二年に近く、又海に浮びて東方に來りしなど、かれこれいと似つかはしかるべきに、これをば引入れざるは、考へもらせるにや。されど皇國は、ありがたくも天照大御神の皇統たること昭々たれば、いかなる巧言妖妄の說ありとも、からぶみに惑はぬともがらは、あざむかるゝこと有べくもあらぬ物をや。又かの或記に、神武天皇の御末は仲哀天皇にて盡させ給ふ下略といへる、是にても又論者の僞作なることいよ〳〵あらはれたり。もし仲哀天皇にて盡させ給ふといふ程ならば、かならず應神天皇はその皇子にはあらずといひて、其故をも何とぞいふべき事なるに、應神天皇の御事をいかにともいはざるは、又かの神武帝の御父をいはざると同じ作意にて、今按に胎中天皇いろ〳〵疑しといふと相照さむためのたくみ也。應神天皇の御事は下に辨ずべし。

海宮といふは、琉球の惠平也嶋をいふ云々、日本紀に阿麻美又菴美に作云々。嶋の東北に山あり、天孫嶽といふ、土人いはく、此山上古神人降臨の地也、故に嶋の名とすと。神人降臨とは、則彦火々出見尊の御事にて云々、太伯の裔此島に渡り、玉依姬を娶て、神武帝生れさせ給ひ云々。

〔神爵二年に近く〕秦の始皇が方士徐福をして不死の藥を求めしめたるは皇紀四百四十二年孝靈天皇の七十二年にして神爵二年は皇紀六百一年なれば其間百五十九年也。

〔胎中天皇〕應神天皇を申す。

〔應神天皇〕應神紀に「譽田天皇、足仲彥天皇第四子也母曰二氣長足姬尊一、天皇以下皇后討二新羅一之年、歲次庚辰冬十二月生二於筑紫之蚊田一」と見えたり。

〔海神宮〕海宮と龍宮との關係に就ては古來諸說あり、また龍宮については錄異記に「海龍王宅、在二蘇州東一、入レ海五六日程、小島之前濶百餘里、四面海水粘濁、此水清無レ風、而浪高數丈云云」とあり、又、祖庭事苑に「按二華嚴經疏一、佛滅度後六百年、龍樹菩薩入二龍宮一、見二華嚴大經一、凡有二三本一云々」とあり。

〔天孫嶽〕今の琉球奄美島にあり。

〔惠平也島〕今は伊平島に作る。

海神宮を琉球の事也とは、さきに或人もいひ、又對馬也といふ說も有。そも〳〵海神宮の事は佛書にもからぶみにも、全く似たる事のあれは、天竺にも漢國にも上古より傳へ有けむを、から國心は例のなまさかしらにて、尋常の小理になづみて、海底に別にこれあることを信ずることあたはず、己が心々にまかせて附會の說共をなせる也。かやうにすこしづつのかゝりを據にして、そこぞかしこぞといはゞ、いかやうにもいひなさるゝことぞかし。今論者天孫嶽神人降臨の地といふを以て據とすれ共、神代の三世は日向國に坐ましゝかば、その間にたま〳〵琉球の地へも行幸し事も有て、さる傳へのあるも知がたし。又からぶみ弘簡錄に、琉球云々據二其世纘圖一云宋淳熙十四年舜天卽二王位一舜天爲朝公之男子云々民苦二疾疫一多依二英祖一英祖者天孫氏之後也といへるを、或人の說に、爲朝公といへるは、卽鎭西八郞爲朝の事にして、かの國人今に至るまで、爲朝の子孫といひ傳へて、舜天王と號すれば、英祖といふも其旁支にて、王位に代りたりと見えたりといへるは、誠に然るべし。爲朝も皇國の人にて皇孫の源氏なれば、天孫の後といひつたへて、かの天孫嶽といふは、その天孫を祠れる地などにても有べし。さればかたがたかの嶋に天孫嶽といふあればとても、かならず海神宮なる證にはいかでかならむ。又論者日本紀等をばすべてとらず、ことさらに是をいひ破らむとするものゝ、天孫といふ稱につきてはこれを用ひたるはいかに。もし日本紀をとらぬものならば、天孫といふ稱をも取まじき事なるに、己が要ずる事ある時は、をり〳〵これを用ふるこそ心ぎたなけれ。又惠平也嶋の所に、か

らぶみを多く引たるは何の用ぞや。其書どもあまみ嶋といふ名の證にもならず、天孫嶽といふ名の證にもならず、もとより海神宮なる證にもならず、たゞ惠平也嶋といふ名を證せるのみなれば、こゝには無益の事ならずや。さて又泰伯の裔此嶋に渡り來て云々の事は、何の據もなき例の妄言也。天孫嶽たとひ玉依姫には據あるにもせよ、泰伯の裔には何の緣かある。みづからも此緣なき事を、こゝろよからず思へるから、かの或記を作り出して、強て緣をあらせたる物也。されど海神宮の事は、此作意にはいとまはり遠きことなるに、かく引入れたるは、天孫嶽玉依姫を餌にして、世人を泰伯へ喰つかせむためのたくみ也。

斷髮文身は呉越の古俗也、三才圖會云有ニ大琉球小琉球一云々、男子去レ髭黥ニ手手一云々、女人以レ墨黥レ首爲ニ龍蛇文一云々と、琉球の古俗勾呉と同じ勾呉の人入來てうつれる風俗なる事知べし、日本決釋によれば、本邦もと文身の國なれば、神武帝東征の後、其人入來て、其俗のうつるものならむ。

琉球男子黥ニ手手一といへること、北史隋書等の琉求國傳に、婦人以レ墨黥レ手爲ニ蟲蛇之文一とこそあれ、男子黥する事は見えず。三才圖會は此北史等の文をとりて鹵忽に誤れる物也。さて又風俗同じければとて、必呉より入來てうつれる證にはいかでかならむ。國々おのづから同じ風

〔呉〕初めは今の江蘇省内の地なりしが、後には其の版圖浙江省内に及ぶ、越絶に「昔者、呉之先君太伯、周之世、武王封ニ太伯於呉一、到ニ夫差一計二十六世且千歳、闔廬之時大覇、築ニ呉越城一、城中有ニ小城二一、徙ニ治胥山一、後二世而至ニ夫差一、立二十三年越王勾踐滅レ之」と見ゆ。

〔越〕春秋戰國時代今の浙江省地方をいふ。

〔黥〕また劓に作る入墨する也。

〔あま〕日本釋名に「海士とも書く、あは青海也、まは住居の略なり、青海にすまゐする者なり、魚とるあまあり、海邊の山の本を切りて賣るあまあり、かづきの海士あり、」云々」と見えたり。

〔文レ身〕身に入墨するをいふ。

〔馭戎慨言〕後桃園天皇の安永七年、宣長が四十九歳の時の著にて、國風の發揚を高潮したるもの也。

俗なる事もなどかなからむ。又皇國の上代文身なりしこと、さらに物に見えず。日本決釋といへるは、かの或記のたぐひと聞ゆ。これ漢籍ばかりに據ては、人の難ぜむことを恐れて、かゝる書名を作りて證とせるなり。されどたしかならぬ後世の書は、いかほど引くともいかでか證とするにたらむ。畢竟愚人をあざむくばかりの事也。からぶみには倭男子皆黥面文身以二其文左右大小一別二尊卑之差一と後漢書にいひ、魏志にも今倭水人好三沈沒捕二魚蛤一文レ身亦以厭二大魚水禽一後稍以爲レ飾云々などいへれども、信用するにたらず。思ふにこれは上古九州の海邊のあまなどの、さる事せしが有しを見て語れるを、傳へ誤りてかくは記せるなるべし。大かたかの書どもなどに、皇國の事をしるせる、非なる事いとおほし。其中にまれ〳〵に實を得たる事もまじれるを見てそれに准じて、非なるをも皆實ならむと思ふはいと愚也。筑紫の僞僭の者にあざむかれて、そこを皇朝と心得て記せる事など、おのれさきに馭戎慨言を著して辨じたるが如し。すべて他國の事を記せるは、思ひの外に浮たることの多き也。代々の史をこれかれ引合せて、こまかに考れば、前後相違して合ざることおほく、前史の非の後の史にて見えたるも有。又その風俗などは、おほくは前史によりて記せる中に、もと誤れるをも考へ正さで、其まゝにしるし、又前史を麁忽に見誤りて、あらぬさまに記し違へたるなども多く、又よくも知れさる事を、人のいふまゝにしるして、大に實にたがへるも有。又その國々へ使者のゆきて、まのあたり見聞たるところを記せる趣なるにも違へる事多し。そはその使者の復命の時に僞はれること殊に多く、又誤れる

〔梁書〕唐の太宗の貞觀三年に姚思廉魏徵の二人が詔を奉じて編修せるものにて、梁の四代五十五年間の歷史凡て五十六卷也。

〔齊永元元年〕齊は南朝に於て蕭成の建てたるもの、七世二十二年にて梁に滅さる、永元元年は我が武烈天皇の元年に當る。

〔荊州〕古く九州の一にて、今の湖南湖北、廣西及貴州にあたる。

事もあれば也。又すへて漢國の史は、漢國を主として記せる物なる故に、その文のさまにて他國は皆賤しくて漢國ひとり尊げに聞ゆること多し。漢字を用ひざる國々の王より贈れる書などは、大かたその意を得て、漢國人の譯し書るなれば、其文漢國王をいみじくたふとみたる如くに事なせり。これらも實には其國々の王の意は、たゞ隣國通好のおもむきなりしをも、おして朝貢の如く書なしたるたぐひぞ多かるべき。すべて漢籍は、かやうの所をよく心得て見ざれば、まどはさるゝ事おほきぞかし。又ひたすらに虛妄なることさへ有。その例を一つ いはゞ、梁書南史などに扶桑といふ國の傳を立たる、其國在ニ大漢國ノ東二萬里一地在ニ中國之東一といひて、その風俗など委く記せり。今考るに、もろこしの東の方に、別に大漢國といふべき國もなく、又扶桑といふべき國もあることなし。たとひ其名は時代によりてかはる共、實に其國あらば、今もあるべきに、今さる國あることなければ、これ全く虛妄なること論なし。さるは齊ノ永元元年其ノ扶桑國の慧深といひし僧の、荊州に至てかたりける語のまゝを記せるよしなり。思ふに此僧まことは何れの國の人なるかしらねとも、古き書どもに東方日出の處に扶桑といへることの有を思ひよりて、これを國の名に作り、その風俗などまことしげにくはしくいつはり作りて、おのれその國より來れりとあざむきいへるを、虛實をよくも察せずして記したる物也。かくて後の書どもにもつぎ〳〵に記せる程に、つひに實にさる國あるやうに思ふめり。これその始はたゞかの一妄僧の虛談より出たる事也。然るにその本をえさとらずして、皇國の事歟琉球の事かなど

とさへ思ひよするはいと愚昧也。すべて漢國の史共に他國の事をいへるは浮說のおほき事、此一つにてもおしはかるべし。抑からぶみはかくの如くうきたることの多かるを、元わきまへさとらずして、ひたすらに是を正しき物と思ひ信じて、かへりて皇國の正しき古傳をば疑ふはいかなる心ぞや。但し漢籍は古く皇國の書はからにくらぶれば、いたく後にして、今傳はるところ、ふるきも和銅養老の比出來たり。殊に日本紀などは、から書を取て書る文多し。それより前にも古書おほく有つとは見ゆれ共、それも仁德履中の御世以來に過ず。然ればそれより以前の事を記せるは、文字書籍のなき世なれば信じがたしとぞ思ふらむ。然れ共これはたゞ一わたりの見解にて、今少し至らざるもの也。其故は皇國の古傳は、古語拾遺序に、上古之世未レ有二文字一貴賤老少口口相傳前言往行存而不レ忘とある如く、文字なかりし世には、口語をもて傳へし事の、甚正しく詳に全くして、中々に書籍にかきつたへたるよりもまさりて信ずべきよしの有也。かくいひても猶おぼつかなき事と思ふめれ共、文字を用ひなれて、何事もそれにゆだぬる後の世の心もて思ふとは、大にたがへることゝ知べし。又日本紀の文の事は、おのれ古事記傳の首卷に委く論ずるが如し。撰定の意趣をよく心得て見るときは、文につきて疑ふへき物にはあらず。文は文と別に立おきて、古事記と引合せて、古意古言をつまびらかに會得するときは神代の事もまことに誣がたく、口傳への正しく實なりしことを、おのづからさとるべし。その時に至りなば、返りてからぶみの信じがたき事も、おのづからさとるべし。然れ共世人いまだ

〔和銅養老〕和銅は元明天皇の御宇の年號にて、元年は唐の中宗の景龍二年に當り、七年にて靈龜と改元あり、養老は元正天皇の御宇の年號にて、元年は唐の玄宗の開元六年に當り、七年にて神龜と改元あり。

〔仁德履中〕仁德天皇は第十六代に在し、其即位元年は晉の愍帝の建興元年に當り、崩御は東晉の隆安三年也、履中天皇は仁德の次代にて、其即位元年は東晉安帝の隆安四年に當る。

〔古語拾遺〕紀記に洩れたる神代の事を齋部廣成の立場より述べたるもの也。

からぶみごころの惑ひをえまぬかれず、古事記日本紀をまことによく解することあたはざるが故に、古傳を疑ひて、かへりてからぶみをば信ずる也けり。

言語

本邦の言語、音訓共に異邦より移り來るもの也、和訓には種々の説あれども、十に八九は上古の韓音韓語、或は西土の音の轉ずるもの也。

すべて此論者の心は、はるかの上代には、此御國には人もなくて、いはゆる無人島の如くなりしを、韓より移り來て後に、人は出來たりと思ふにや。又人はもとより有ながら、韓漢と往來せざりし以前は、すべて物もいはず、瘖のごとくにて有し事と思ふにや。もしもとより人あらば其人みな物いはずには居まじければ、おのづからの言語ありし事論なし。然るに今言語はみな異邦よりうつり來れりとは、いかなる強言ぞや。又音とは漢字音をいふ歟、字音はもとより外國より來れること論なし。されど上古には字音の言はあることなし。言に字音をまじふるは後の事也。又訓とは皇國言をいふ歟。皇國言は神代の始よりおのづからの皇國言にして、其めでたく妙なる事、さらに諸の戎狄言と同日に論ずべきにあらず。但し韓國と往來はじまりて以來は數千言の中にはまれ〱三韓漢の戎言のうつりたるも無きにはあらず。論者のこゝに擧たる數

〔音〕漢字の音にて最も多く我が國に傳はれるは漢音と吳音とにて、其他唐音、宋音などもあり、又、いづれの頃よりか儒書は漢音、佛書は吳音にて讀む例となれり、倭訓栞に「漢音は長安の音、吳音は江左の音なるべし、云々」と見えたり。

〔西土〕ここにては支那を指す。

〔瘖〕啞に同じ、說文に「从レ疒音聲、不レ能レ言病」と見ゆ。

〔強言〕無理なる言をいふ。

〔牽强〕道理に合はぬことを無理にこじつくる也、蘇轍の詩に「煮ニ蔥崖蜜一眞牽强、慚愧山蜂久蓄藏」と見えたり。

〔鹿を馬也〕秦の趙高が鹿を馬也といひし故事にて、事を設けて人を欺くをいふ。史記秦始皇紀に「趙高欲レ爲レ亂、恐ニ羣臣不一レ聽、乃先設レ驗、持レ鹿獻ニ於二世一、曰馬也、二世笑曰、丞相誤耶、謂レ鹿爲レ馬、問ニ左右一、左右或默、或言レ馬、以阿ニ順趙高一、或言レ鹿者、高因陰中ニ諸言レ鹿者一以レ法、後羣臣皆畏レ高」とあり。

言の中にも、全く漢字音なるも韓語なるも、なきにはあらざれ共、其餘多くはもとよりの皇國言なるを、しひて皆韓語なりといへるもの也。たとひまれにはさること有りとも、そのまれなるを引出て證として、千言萬語みな然也とせむは牽强にあらずや。殊にこゝに出せる言どもの說は、鹿を馬也といへりしよりも甚し。又數千言の中には、他國とおのづから似たるも同じきもなどかまじらざらむ。又古へ韓の國々は、多く皇國に服屬して在りつれば、つねに往來しげく、たがひに此方にも久しくとゞまり居たりし人も多かりしかば、言語のみならず、衣服器財風俗なども、此方より彼方へうつりたるも多しと見ゆるに、それらをすら返りて彼より此に移れる物とするは、深く思はざるひがことなり。但し其類をもしひて彼を本也といひ曲るぞ論者の趣意なりける。抑皇國は、文字を始として、後には天下の制度までおほくから樣を用ひ給ひ、人の心さへことぐ\くからになりぬる故に、上古にいまだうつらずならはざりし以前の事まで、ことごとく後の格を以て推むとするは、からぶみ學者の癖也。もし異國と似たることのあるをも、みなかれにならひて移れる物ぞといはゞ、鳥獸草木のたぐひも同じきが多く、又人の形も頭面手足目口耳鼻まで全く同じきは、これらももと漢にならひて作れる物とせむ歟。又人もその始はから人の來たるが漸に多くなれる也。鳥獸ももとはかしこよりゐて來たる也。草木もから國の種をまきひろめたる也と强說せむとする歟。山川などはいかに、これももとかの國より船にのせてはこびもて來し也といはむかわらふべしく\。殊に言語は、萬國おのく\異にして

そのつかひやうも又各異なるもの也。その例を一二いはゞ、皇國にては、形を見る、聲を聞、言す爲こと無しなどといふを、漢國にては、見形聞聲不言無爲とやうに、體用をさかさまにいへり。諸の言みな此格なり。其外も異なること多き、これに准へて知べく、又餘の國々の言も、おの〳〵異なること准へてしるべし。これ言語はその國々の自然の事にして、他よりならはざる明證也。かゝること他國にならひて、本のいひざまを改め變ることを得べけむやは。もし他國の人皇國にうつり來て、雜居するときは、其人の言語皇國言にこそうつれ、皇國言のその人の言にうつる物にはあらず。上件の子細どもをも考へず、たゞ大よそに論じて、人をまどはさむとするはいとをこ也かし。

姓　氏

國朝諸姓、其元三韓の官名及其言語に出るもの多し、是又上古此邦にても、韓の官職を用ひらるゝ一證とすべし。

諸氏の中に、韓國より移り來たる人共の子孫の姓尸は、やがてその本國の官職などをとられたるもなきにあらざれ共、もとよりの皇朝の人の姓尸は、みな本より皇國の地名又はその職などによりたる物にして、韓の官名などによれるもの有ことなし。然るに是をおほく韓より出たりと思ふは、例の古へに昧き故歟。はた强言歟。さてこゝに擧たる臣連縣主直等の類は加婆禰也。

〔姓〕上代には官名なりしが、王朝時代以後家筋の尊卑等級を分つ號となれり、又氏と姓との通稱にもいふ、類聚名物考に「この姓を訓て訶波禰といふは、骨族の如し、骨を可波禰といふ事、顯宗紀にも、又續紀にも、根可波禰の事有、されば姓氏錄の序に云へるも、人民の氏骨の義に管へたり云々」とあり。

〔氏〕内の義、即ち同宗一家の意、中臣、藤原、源、平の類之れなり、大小ありて、大氏は宗家、小氏は支流をいふ。

〔皇太子〕緑雪亭雑言に「古者天子之嫡子、亦稱二世子一、諸侯之子、亦稱二太子一、西漢天子嫡子、稱二皇太子一云々」とあり。

〔皇子〕名物六帖に「皇子男稱二天子之子一、古者稱二王子一、如二王子比干王子晋一是也」と見えたり。

〔日本の號云々〕唐書日本國傳に「日本古倭奴也、去二京師一萬四千里、在二海中一、隋開皇末、始與二中國一通云々」と見ゆ。

これ外國には無き物にて、當べき字なき故に、日本紀にはこれをも姓と書れたれ共、姓とは別なる物也。後世には尸字を借用て、姓と別てり。佐伯をこの中へ出せるは笑ふべし。さて加婆禰もみな本より皇國の言にして、各其義ある事なるを、例のみな韓國の官名にあてむとせる。いと〳〵迂遠なる附會にして、一も似つかはしきことなし、誰かこれを信せむ。又宿禰の義は釋にいへるごとく少兄也。又皇子に大兄と申す御名もこれかれ有。これらももとよりみな皇國言也。大と少とを對へていふ例古言に多く、兄といふ稱もつねに多し。いかでか他國にならへりとせむ。そのうへ高麗の大兄少兄の事は、もと魏書のかの國の傳に、其官名有二謁奢太奢大兄小兄之號一といひ、北史には官有二大對盧太大兄大兄小兄云々凡十二等一といへれは、大兄の上に謁奢太奢或は大對盧太大兄などいふ有也。然るを皇國にして皇太子皇子などの御名に、その謁奢等の尊きをとらずして、次々なる卑き大兄の稱をならひ取給ふべきやうなし。高麗の官名はおのづから同じきか、又はこなたの稱をとれるにもあらむかし。

國號

日本の號、西土の書に考ふるに、唐以前の書に見あたらず云々、日本紀を始め上古日本の字を用るは、みな追記なること知べし。

此論はまことにさること也。但しかゝる事まで、たゞ西土の書をのみ考へて、此方の古書に考

へざるはいかに。古事記に日本といふ字なきうへは、他を尋ぬるには及ばぬ事也。又唐以前といへるもたがへり、隋以前とこそいふべけれ、唐の書共には、日本とある也。猶國號の事は、已にさきに國號考一卷あり。論者の如く古に昧き考へにては、詳なることは知べきところにあらず。

倭大倭大和養徳みなやまとと訓ず云々、養德と書しより考ふれば、やまとは倭奴の轉語なること必せり。

大倭大和などと書るをば、おほやまととよむ事也。たゞやまとといふに、大字を加へてかける例なし。然るをこれらをもやまとゝ訓ずといへるは、例の古にくらきなり。さて倭和等の字の事も、國號考に委くいへり。やまとを養德と書れしは、聖武天皇の御時たゞしばらくの間の事にて、その始終續日本紀に見えたり。是はたゞ音の似たる美字を撰て、改められたるにこそあれ、いかでか倭奴の轉語ならむ。美號を立むとして、倭奴などいふ名を取給はむ物かは。此論なとは、聖武天皇の御代にあらたに撰ばれたる字なることをも考へしらずして、例のみだりにいへるもの也。又倭奴の事も、昔より大に誤り來れり。そのよしは馭戎慨言に辨ず。

木あるをもて木の國、火あるをもて火の國といふ類は古かるべし。

〔唐〕高祖の建てたる號にて、我が紀元千二百七十八年より千五百六十六年に至る、卽ち隋の後、宋の前の時代をいふ。

〔隋〕文帝が南北朝を統一して建てたる號にて、我が崇峻天皇の二年より推古天皇の二十五年に至る、四帝三十九年にして唐に譲る。

〔倭和等の字云々〕國號考に「倭の字はもろこしの國よりつけたる名にて、その始めて見えたるは前漢書地理志に、樂浪海中有二倭人一云々と云へる是也」又、同書に「和といふは皇國にて後に改められたる字也」云々」と見えたり。

〔木國〕古事記に、「乃ち木國の大屋毘古神云々」とあり、又日本書紀神代上に「初五十猛神天降之時、多將二樹種一、而下云々始レ自二筑紫一、凡大八洲國之內、莫レ不三播殖而成二靑山一焉云々、卽紀伊國所坐大神是也」と見えたり。

〔火國〕日本紀に「弟豐戸別皇子、是火國別之始祖也」と見ゆ。

〔履中紀云々〕履中紀に「召二阿曇連濱子一云々、而豕レ祀科レ墨云々」と又、同紀に頓絶以不レ黥二飼部一而止之」とあり。

其餘國號古書に見えたるは、後世名づけて追記したる物也。始より此名あるにあらず。按伊弉忍穗共に居西干の轉ずるものなり云々。

天下諸國の名又郡鄕等の名、いづれも皆いとふるし。たゞ其文字は後につけたる物にして、正字も有、音をかれるも有、訓を借れるも有て種々也。其中に字音を借用ひたるやう、地名は一種の格あり。すべて地名に字音を用ひたるは、みな假字にして、字に意はなきこと也。然るに論者のいふところは、漢國の例の如く、名と字とを一に心得たるにや。その字をさして名といへるは、皇國の古書に昧きこと也。木國火國の如きも、後には紀伊國肥國と書にはあらずや。これらにても、本の名と字とは別なる物にして、名は字にはかゝはらぬことをさとるべし。されば餘の國名もみな字は後の追記なれども、名は本より有て古きこと、此紀國肥國に准じて知べし。これらはいとよく分れたる事なるに、猶えわきまへしらぬにや。かへすがへす古にくらきこと也。又伊弉忍穗云々などは、いふにもたらぬをこごと也。始よりしていく度か此居西干を引出て、汁にも菜にも肴にも用ひたるこそ、いともいともをかしけれ。

容飾

上世文身黑齒被髮す云々、文身いづれの時に禁ぜられしを知らず、

履中紀によれば、應神仁德の朝に止められしならむ。

上世男黑齒の事所見なし。からぶみ又後世の書にいへるは據とするにたらず。被髮の事はくさぐさ考へ有事長く又こゝに緊要の論にもあらざれば略しつ。黥面文身の事は上に既に辨したり。履中紀によれば云々とは、黥面の事なるべし。彼紀に文身の事は考ふべき事なし。黥面の事は、阿曇連濱子が死罪を宥めて黥之事、又飼部の黥の氣を、淡路島に坐伊弉諾神の惡ませ給へるによりて、飼部を黥ことを止給ひし事、履中紀に見えたり。これらをいふなるべし。されどこれらの事は返りて、上古より黥面すること無かりし證とこそすべけれ。いかにといふに、もし黥する事上古よりなべての風俗ならば、死罪に行はるべきほどの重き罪を、これにかへ給ふべきにあらず。たとひ既に應神仁德の御世に止られたり共、それは猶いと近き事なれば上古よりの風俗を、人はさのみ恥辱とも思ふまじければ也。又上古より近代までの風俗ならむには、伊弉諾神いかでか其氣をにくみ給はむ。然れば此二の事をもて、黥は上古の風俗にはあらざりし事をさとるべし。飼部を黥せしは、別にゆゑ有し事なるべし。

衣服

上古衣服たゞ千早あるのみ、千早の製一條の布を用ひて、その横幅の中間を裂て、頭を出し、其兩端を以て結束す、小野妹子入隋にも是を着し行しと見えたり。

〔飼部〕之れ河内の飼部也、河内に馬飼の在りし事、續紀に見ゆ、飼部は上古より一種の賤民に定めしが故に良民との識別のために入墨して使びしものと見えたり

〔小野妹子〕天帶彥國押人命六世孫、世々近江國滋賀郡小野村に家するを以て氏とす、推古天皇の朝に仕へ、大禮の位に叙す、十五年遣隋使となる、隋人妹子を呼びて蘇因高といへり。

〔意須比〕頭より被りて衣裳を掩ふものにて、後世婦人の被衣（カツキ）の如し、もとは婦人の服なれども、男子も亦服せし事、記に、八千矛神の游須比遠母、伊麻陀登加泥婆の御歌にて知るべし。

〔十二階の冠〕推古紀に「十二月戊辰朔壬申、始行ニ冠位一、大德、小德、大仁、小仁、大禮、小禮、大信、小信、大義、小義、大智、小智、幷十二階云々」と見ゆ。

〔裙襦〕はだぎをいふ、裙も襦も共に下着の義也。

千早といふ服は古書に見えたることなし。然るを上古にこれを着したりといふは、例の論者の妄說也。たゞ和名抄に本朝式襷襅褌讀ニ知波衣一未レ詳と見えたり。未詳とは、此字漢には字書にも何にも見えざる故にいふ歟。又ちはやと訓るを疑ひたるか、いづれにまれ此物は、今論者のいふが如き物にあらず。天武紀には襅をまへもとよめり。前裳の謂なるべし。但し是をもちはやと訓べきか、さだかならず。中古以來巫覡の着する千早といふ物は、上古の意須比の遺製にして、その着つなとは變れる也。意須比の事など、論者は夢にも知らぬなるべし。さて上古の衣は千早のみ也といへるは、例のからぶみに男衣皆以ニ横幅一結束相連女人衣如ニ單被一貫レ頭而着レ之といへるを據として、是を着したる體、甚見苦しき圖を新作して、千早の製也といへる、皆強て皇國をいやしめおとさむための妄說也。ちはやは襲にせし服と見ゆれば、本製豈かくの如き物ならむや。抑論者須佐之男命は韓人、神武帝の御父は吳泰伯が裔といへるに、その御子たちは何とて韓衣吳衣をば廢て、裸體同前の千早のみを着給へるぞや。もし韓吳の風うつりなば、そのかみより韓衣も吳衣も有べき物をや。諺に尻口のあはぬといふは此論者の事也けり。又小野妹子隋へもこれを着て行たりといふも、下文に應神天皇の時より君臣始めて韓衣を着たりといふと、自語たちまち相違せりいかゞ。妹子が隋にまかりしは、推古帝の十四年也。それよりまへ十一年に、十二階の冠をさへ製せられたるに、いかでか論者のいふ千早のごとき物のみを着せて、異國へは遣すべきぞ。これは隋書に男子衣ニ裙襦一其袖狹小云々頭亦無レ冠云々至レ隋

其王始制レ冠といへるを、心得たがへていふなるべし。

後世千早に襷褌の字を用ふ、千早を着たる背の體、たすきをかけたる如き故に假用るならむ云々、千早振神代といふ此事なり。

和名抄に知波夜とあるは、襷一字の訓にして、襷とは別なるを、たすきをかけたる如き故にとは、大なる相違也。すべて論者の說かくの如き疎漏多し。心をつくべし。又千早ふる神代とは此事也といへるは、腹をかゝへて笑ふべし。何をなり共引出て證據にせむとするから、かゝる稚き事をさへいふ也。袖あらばこそ振もすべけれ。圖の如くにては何をふりしにか、かへすがへすわらふべし。さて襷につきて論者の此段の說の非なることをいはむ。抑襷は、神代より膳羞の類又は供神物をとりまかなふ人の掛る物にして、古語に忌部の弱肩に太襷とりかけといひ、祝詞にも襷掛る伴の緒といひ、景行紀に磐鹿六鴈の、蒲をもて手繦として、膾を作りて進りし事なども見えたり。今の世にも食物をとりまかなふ者のこれをかくる、同じ事也。されば是はその供神物食物に、袖の觸むことを憚り恐れて、袖をかゝけ束するために掛る物也。もし論者のいふ所の千早の如き衣ならむには、袖なければ襷をかくべき由なし。是にて上古の衣に袖も有し事を知べし。

〔千早振〕冠辭考に「稜威速夫流の略」にて、稜威迅速きをいひ、迅速に走る意、夫流は其さまを云ふ詞にて、取続べて云へば、勢の烈しく當り難きないふ辭なる由いへり、後は神の枕詞となる。

〔膳羞〕牲肉と甘き食物の義より、膳部の意となれり。

〔磐鹿六鴈云々〕景行紀に「冬十月至二上總國一、從二海路一渡二淡水門一、是時聞二覺賀鳥之聲一、欲レ見二其鳥形一、尋而出二海中一、仍得二白蛤一、於レ是膳臣遠祖名磐鹿六鴈以レ蒲爲二手繦一、白蛤爲レ膾而進之云々」とも見えたり。

叙福寺緣起に葬禮の古圖あり、其地を掘り又墓を治むる人、千早を着たるあり、其體後漢書魏志晋書等にいふところのごとし。

これを千早といひて、古への衣服のさまとしたるは例の強ごと也。これはたゞ墓地を堀とて、土涅に穢れむ事を避て、ことさらに袖もなく短き物を着たるなるべし。今の世とても葬の壙を堀る者などは、かくの如きさまなるを、是また今の世のなべての衣服の例として可ならむやは。

應神帝御宇縫女二人を貢せしより、始て君臣韓衣を着たり、然れども庶人に至りては裸形なりしとぞ。

縫女を貢ぜしは、物縫ふ事の巧なる女をめされし也。これより以前に、裁縫の制なかりしにはあらず。此後雄略帝の十四年にも、呉國より衣縫女を貢じたり。これを以て應神帝の御時のも、裁縫の始めにはあらざりし事を准へ知べし。もとより此方にも有ながら、猶まされるがあれば、韓よりめされしことは、此外の事にも例有也。海東諸國記といふ朝鮮の書に、皇國の事共をいへる、天皇代序の中に、應神天皇十四年始制ニ衣服ヲと記せるも、此縫女の來りし事を誤りていへる也。此天皇代序はすべて、後世の年代記やうの俗書を取て記せるもの也。さてこゝに應神天皇の御時より始て韓衣を着たりといふも、後に唐服を用ひられしに准へて、おしはかりにいへる物にて、何の據もなきこと也。日本決釋とて引るは、かの或記のたぐひとこそ聞ゆれ。

〔叙福寺〕河内國南河内郡磯長村に在り。俗に磯川の勝軍寺を下太子といふに對し、この寺を上太子といふ、推古天皇の御宇、聖德太子の建立する所たり。

〔縫女二人云々〕應神紀に「十四年春二月、百濟王貢ニ縫衣工女ヲ、曰ニ眞毛津ト、是今來目衣縫之始也」と見えたり。

〔呉國より云々〕雄略紀に「十四年春正月、身狹村主青等、共ニ呉國使ト、將ニ呉所ノ獻手末才伎、漢織呉織、及衣縫兄媛弟媛等ヲ、泊ニ於住吉津ニ云々」と見えたり。

河内國石河郡山中古塚に土物一枚を堀出す、其體左袵狹袖左の如し。圖有

土物のたぐひは、たゞ人の大よその形を造れるまでにて、衣服などのこまかなるさまゝで、くはしくは造りわくべきにあらざれば、證とするにたらず。今の世とても紙雛などいふ物を見よ衣服のさま甚麁にして、袖だになきをや。古の土物も思ひやるべし。されどこゝに擧たる圖を見るに、まことに上古の衣服の大よそのさまは、是にぞ似たらむ。但し裁縫韓服に似たりとて、必彼を取れりとするは非也。すべて衣服のさまは、いづれの國も大體は似たる物なれば、おのづから韓と似たる事も有べし。又韓吾にならへる事も有べし。いかでか一偏にはいふべからむ。首飾の事も是に同じ。さて左袵の事は、かの河内國の土物のみならず、所々の石人なども古く見ゆるは多く左袵なるを。續日本紀に養老三年二月初令ニ天下百姓右襟とあると合せて思へば、これより以前は、庶人はみな左袵なりし事疑ひなし。抑衣服の制令は、推古天皇の御時より見えて、御世々々を經て次第に漢國の制になりて、持統天皇の御世に百姓の服制も有しに其後養老に至るまで、左袵をば改められざりし事は故あるべし。是によりて思ふに、漢國は右袵にして、左袵をば夷狄の風といやしむる事なれ共、よく思へば實にはいづれをよし共わろし共定むべき事にあらず。されどもし萬國みな左袵ならば、かならず左袵にて宜しき理あることなるべし。諸の異國の服みな左袵歟。又本より右袵の國もある歟。あまねくは知らね共、他國

〔石河郡〕今の南河内郡也。

〔左袵〕ひだりまへをいふ、支那にては野蠻人の衣服の着かた也、論語憲問篇に「微ニ管仲一、吾其被髮左袵矣」と見えたり。

〔養老三年〕第四十四代、元正天皇の御宇の年號也。

〔百姓の服制云々〕持統紀七年の條に「是日、詔令ニ天下百姓一、服ニ黄色衣一、奴皂衣云々」と見えたり。

〔皇祖大神〕神代紀下に、故皇祖高皇産靈尊云々、など見え、高皇産靈尊をいひ、又、古語拾遺には天照大神をもいふ由見えたり。

〔中國〕世界の中央に位する國の義にて、支那人が自國をいふ語也、書經梓材篇に「皇天既付二中國民一云々」とあり。

〔右衽〕右まへをいふ。劉景復の詩に「麻衣右衽皆漢人」と見えたり。

はいかにもあれ、皇國の古左衽なりしからは、これ皇祖大神の定めおき給へる正しき制にして、かならず然るべき道理有けること明らけし。かくてもし萬國みな左衽ならむには、其中にたゞ一國のみ別に右衽なるべきよしなければ、漢國も共に上代は左衽なりけむを、聖人の智術にて、ひとり右衽に改めて、他國と異なるけぢめをなして、己が國は中國也、他國は夷狄也といふしるしとなしたる物なるべし。然れ共中國は右衽夷狄は左衽と分るべきゆゑはなき事なれば、いかでか是にかゝはるべき。すべてかの國の聖人といふものは、かやうの新作をなして、天下後世をあざむけるたぐひいと多し。然るを後人その右衽なるを以て、誠に中國なるしるしぞと思ひたふとぶから、後にはかの國の風をしたひならひて、右衽に改めたる國々も有べし。皇國もかの養老の時に改められて、今は千有餘年右衽になれたる故に、今の世の心にては、左衽はいかにも、夷狄の風にて正しかるまじき事と思ふめれども、左衽になれなば又右衽をいかがと思ふべし。實には何れを正し共、人の心もて定むべきにあらず、何事も皇祖大神の定めおき給へる皇國の制こそまことに正しきにはありけれ。古の左衽を恥の如く思ふめるは、漢國にへつらへる後世の心也。

喪葬

此段みな無稽の說也、こと〴〵く論辨あれ共、あまり事長くなれば、こゝには默しつ、其說を

〔稚日女尊〕神代紀上に「是後稚日女尊、坐ニ于齋服殿一、而織ニ神之御服一也、素戔嗚尊見レ之、則逆ニ剝斑駒一、投ニ入之於殿內一、稚日女尊乃驚而墮レ機、以ニ所レ持梭一傷レ體而神退矣」と見えたり。

〔天鈿女云々〕神代記上に「又猿女君遠祖天鈿女命、則手持ニ茅纏之矟一、立ニ於天石窟戸之前一、巧作俳優」とあり。

聞むとならば、さらに問へ、答ふべし。

祭祀

天照大神梭を以て身を傷崩じ給ふ、石窟陵也の前に於て、天鈿女俳優をなす、これ又辰韓より傳る巫をして神を祭らしむる古俗也。

梭に御身を傷ひて神ざりまし〻は、稚日女尊なるを、天照大神とはいかゞ。かくの如く古傳を私に亂りていはゞ、何事かいはれざらむ。又天照大御神のしばらくさしこもり坐まし〻石窟を陵也とはいかゞ。そも／＼此大御神はすなはち今日のあたり天にまし／＼て、四海萬國を照し給ふ日の大御神にまし／＼て、常しへにまします事、辨をまたず、古傳昭々たる物也。然るに近世なまさかしき學者、例のからぶみの小理になづみて、これを信ずることあたはず、たゞ此國土に在し上古の人ぞと思ふから、くさ／＼臆度の妄說をいひ、やゝもすれば崩御と申し、御陵の事を論ずるは、いともかしこくゆゝしき狂言也、もし此大御神崩御ましまさむには、天地は黑闇となりて、たちまち此世はほろびうせぬべきものをや。あなかしこ／＼。又天鈿女の俳優を、辰韓より傳ふる古俗也とは、例の牽强の甚しき、辨をまたず。

神籬を比毛呂岐と訓ずるは、もと新羅の辭にして、それを假て用る

もの也、殯斂韓音比毛呂岐也、天日槍が携來たる熊神籬も、その父

祖の主なること知べし。

殯斂韓音比毛呂岐也とは、例のさらに據なきこと也。ヒムとヒモと通じ、レとロと通ずるから思ひよれる妄説也。すでて論者の附會みなかくの如し。かゝることをいひて、世の愚人をまどはさむとする心は、いと〳〵あさまし。熊神籬の事は、往年或人此名を疑ひて問るに、答へたる考へ有。聞むと思ふ人は別に問べし。

磐境は墓をいふ也、云々、磐境の字の音波安加なれば、又つひに墓字

の訓となれり。

又例の妄説也。これ下文に引出たる古事記の婆々迦木を、強て墓の木の義とせむとて、思ひよれる附會也。こはイハサカのイハを上略すればハとなり。サカのサはアと横通の音なるから妄にこれを磐境の字音といひなして、愚人をあざむけるもの也。少しも知識あらむ人、かゝる淺はかなる説を誰かは信ぜむ。

天照大神御陵、日本紀以下に見えず、按に當時天照大神皇居大和國

高市郡にあること日本紀に依て知べし、然れば葬り奉れる地も、他

〔天日槍が云々〕垂仁紀に「三年春三月、新羅王子天日槍來歸焉、將來物羽太玉一箇、足高玉一箇、鵜鹿々赤石一箇、出石小刀一口、出石桙一枝日鏡一面、熊神籬一具并七物、則藏于但馬國、常爲神物一也」とあり

〔熊神籬〕玉勝間に「熊は漢字にて、隈隱などゝ同言にて云々佛像を入れ置く厨子といふ物の如く作りたるものなるべし」と見えたり。

〔磐境〕また磐坐に作る、磐を以て座なかまへたるものをいふ、磐は天磐戸などの磐に同じく、たゞに神の御坐をいふ。

〔天香山〕大和風土記に「謂天有レ山、分而墮レ地、一片爲ニ伊豫國之天山一、一片爲ニ大和國之香山一」とあり、又延喜式に「大和國十市郡天香山坐云云」と見えたり。

〔神武紀に云々〕神武紀に「是夜自祈而寢、夢有ニ天神一訓之曰、宜取ニ天香山社中土一、以造ニ天平瓮八十枚一」云云」とあり。

國にあらざること知べし、和州の事記せる物に、天香山を天隱山とも書によれば、天の隱れの山にて、天照大神の御陵たること知べし、

續古今集に云々、神武紀に云々。

神別記といひて近世僞作せる書は、天照大神の都は豐前國也といへるを、或人天祖都城辨といふ書を著し、これを破して、大神の都は大和國也といひて、種々其證を擧たるを、おのれ又其非を辨じて、天祖都城辨々となづけて一卷有。今論者のいふところ、多くかの或人の說に類せる故に今くはしくは辨ぜず。此大御神に御陵の事をいふが非なるよしも委しく辨々にいへり又大和に高市郡又天香山あることは、天上なる高市香山を擬したる名也。そも〳〵大和國は後に皇居たるべき事、神代より幽契ありし趣、往々に見えたれば、天香山などは、神武天皇以前より既に此名有と見えたり。又香山を隱山と書事、古書にはさらに無きこと也。隱のクは清音香山のグは濁音にて、かやうの清濁も古言は精嚴なるを、混淆していふは後世の俗解也。又續古今集の歌を引たるは、ことにをさなし。後世の歌はもとよりかやうの事の證とするにたらざるうへに、此歌の意は、風土記に此山天上より降れりとあるをよめるにこそあれ。又神武紀に云云の事の如きは、天上の靈區を擬したる山なるが故也。

和　歌

〔八雲の詠〕古事記に「故、是を以て其の速須佐之男命云々、茲の大神、初め須賀宮、作らし時に其地より雲立ち騰りき、云云、八雲起つ、出雲八重垣、夫妻隱に、八重垣造る、其の八重垣に」とあり。

〔難波津の歌〕古今集の序に「難波津に咲くや木の花冬ごもり、今は春べと咲くや木の花」とあり。

〔高き屋に云々〕此の歌、新古今集には仁德天皇の御歌とあり、水鏡にも亦、仁德天皇の御歌なる由見えたり

按に八雲の詠素戔嗚尊の御詞なれば、三十一字ともに辰韓の辭なること知べし云々、王仁難波津の歌も是に同じく、難波津にといふは此邦の地名、咲やこの花以下は、みな百濟の詞なること知べし。されば文字の多寡によらず、歌は韓の古俗なること明らか也。

此條などは辨ずるにも及ばず。甚しき强說也とは、たれもよく心得つべし。但しなにはつの歌を、世に王仁が作といふにつきては、いさゝか疑ひをなす人もあらむか。かの歌は王仁が作にはあらず、後の人の作なること疑ひなし。すべて歌は、意も詞も、その時代々々のふり有て、あらそひがたき物なるに、此歌は決して應神仁德の御世などの風調にあらず、はるかに後の口つきなれば也。かの高き屋にのぼりて見ればといふ歌は、延喜の御時日本紀竟宴の、時平大臣の歌のすこし訛れる物なるを、仁德天皇の御製也といひ傳へたるたぐひにて准へ知べし。たとひ王仁が歌にもせよ、皇朝に參りて三十年にも及びしころの事なれば、こゝの語言をもよくならひ得てよみたりとせむも、何事かあらむ。又須佐之男命を韓人也といふも、もとより論者の私事(わたくしごと)にて、さらに據もなき事なれば、八雲の詠辰韓の詞也といふも、辨を費すにたらず。

國史

日本紀をよむには、先(まづ)此國の事は辰馬の二韓よりひらけ、かたはら

辨韓の事も相まじはると心得、それをわすれずしてよまざれば解しがたし云々。

此數言にて論者全體の惑ひをみづから顯はしたり。こゝにをかしきたとへあり。富士山の上より望めば、朝日の出るさま、阿彌陀如來三尊の御來迎なりとて、かの山にのぼる人皆まち拜むこと也。此俗說にまどへる人の目には、いかにもかの三佛の形の如く見ゆる也。今の論者の見もこれに同じ。日本紀をこと〲く三韓の御來迎と心得て見る故に、こと〲く三韓の御來迎と見ゆるは、まことに然るべきこと也、日本紀すべて漢意の潤色多く、卷首に古天地未剖云々のたぐひは、全く漢籍をとれりといふことなどは、誰かこれを知らざらむ。此類の事によりて疑ひをなすは、普通の學者の見解にして、めづらしからず。又からぶみと心ばへの似たる事あるによりて疑ふも、いまだしきこと也。おのづから似たる事も符合せな事もなどかなからむ。似たるをもて疑がはゞ、佛書には猶よく似たること共多きをや。すべて古言古意を詳に明らめて、古事記と相照してよく見るときは、うたがふべき事もなく、解せずといふことなし。然るに論者三韓より起ると見ざれば解しがたしと思ふは、古書に昧くして、古言古意を明らむることあたはず、たゞ漢意になづめる先輩の註釋につきて見る故に、こと〲く疑ひ有て解しがたきから、萬の事韓よりひらけたりと心得たる也。かくていづく迄も其論を立とほさむとするから、さま〲牽强附會の說をなして、みづから覺えず愚人も笑ふべきほどの淺はかなる事

〔阿彌陀如來云々〕阿彌陀如來とは極樂に居るといふ佛にて、又た無量壽佛ともいふ。三尊とは阿彌陀、勢至觀音にて、御來迎とは、この三尊が念佛の行者を極樂淨土へ迎ふるをいふ。

〔三佛〕常に三佛とは、佛鑑、佛眼、佛果、又、法佛、報佛、化佛をいふなるも、玆にては三尊と同じく、彌陀、勢至、觀音をいふなるべし。

共をさへいふに至れり。又すべて神代の事を疑ふも、みな漢籍の小理に溺れて、おのが小きさかしら心を先とするが故也。此漢籍の癖を清くはなれて、一たび古學に入て古言古意に明らかならば、おのづから疑ひはみな晴ぬべき物をや。

古事記の序に天武帝云々。

是はまことにあたれる論也。然れ共論者のとれる意とはいさゝか異也。其よしは古事記傳第二卷にいへるを考へて知べし。又序にかくの如き詔命のあるを以て、此記の正實にして虛僞なき事を證すべし。

姓氏錄序に云々、三韓蕃賓稱二日本之神胤一云々。

此文の意は、古へ三韓より歸化せし人の子孫の、先祖を僞りて、皇國の神の御末ぞといひなせるまぎれの有しをいふ也。然るを論者これを逆にとりなして、さやうのまぎれのあるも、もと須佐之男命の韓の人なることを、掩ひかくすより起れりといへる、例の強ごと也。又論者の意の如きは、須佐之男命を、日本紀に記されたる如く、もとより此國の神として、新羅へ渡り給ひてかの國にいませる間の子孫としても同じ事なれば、もと辰韓より出給ふといふ證據には少しもならぬ事なるをや。

〔天武帝云々〕古事記序に「天皇詔して給はく朕聞く『諸家の賫る所の帝紀及び本辭、既に正實に違ひ、多く虛僞を加ふと』今の時に當りて其の失を改めずば、未だ幾何の年を經ずして其旨滅びなむとす、云々、故おもほさく、帝紀を撰錄し舊辭を討覈し、僞を削り、實を定め後葉に傳へんす」とあり。

〔蕃賓〕蕃國の賓客にて、なほ外賓といふが如し。

〔新羅へ渡り云々〕日本紀神代卷上に「一書曰、素盞嗚尊云々帥二其子五十猛神一降二到於新羅一居二曾尸茂梨之處一云々」とあり。

應神帝の所出をかくし云々。

此天皇の取出をかくしたる事、何の書にもいまだ見あたらず。古事記にも日本紀にも仲哀天皇の御子也といふことはいと明らか也。然るに論者今かくいふは、上の皇統係に、此帝の御事をいろいろ疑はしといへれば、仲哀天皇の御子とあるは僞にて、實の御父を隱したりといふことなるべし。抑此天皇、仲哀天皇の御子にあらずといふ事は、近世ある狂儒も種々いへり。すべてからぶみにおぼれて、ひたすら彼國を尊くせむと思ふともがら、吾皇統の神代よりつゞかせ給ふ事を妬みて、何事をなり共見出て、しひていひ破らむとする心から、かゝる邪說をも巧み出せる也。そは日本紀に仲哀天皇は九年春二月五日に崩給ふ。まづ此俄に崩給ふを邪說の疑ひの始めとす。さてその九月に皇后開胎とあれば、此御懷姙は八年の十二月よりの御事なるに、應神帝之御誕生は十二月十四日なれば、十三箇月にあたれり、又からぶみ後漢書魏志などに、此皇后の御事を年長不レ嫁事ニ鬼神道一能以レ妖惑レ衆於レ是共立爲レ王侍婢千人少レ有ニ見者一唯有ニ男子一人一給ニ飲食一傳ニ辭語一といへる、この男子一人を疑はしといふ據とするか、大かたこれらの外に疑はしといふべきものなし。抑御父天皇の俄に崩給ひしは、神の御とがめによれり。又懷姙十三箇月にして生るゝは、今もある事にて、めづらしからず。殊に此時の御事は何事もみな、神のことなる御はからひなれば、さらに凡人のうへをもてとかく申べきにあらず。然るをかの韓籍どもに、事ニ鬼神道一能以レ妖惑レ衆などといへるは、戎狄の人たゞ尋常の小理になづみて、皇神

〔二月五日云々〕仲哀紀に「九年春二月癸卯朔丁未、天皇忽有ニ痛身一而明日崩、時年五十二」とありて、本文に五日とあれども、丁未は五日にて、其の明日なれば、崩御は六日なり、永享本には明日の二字なし、宣長翁は是れに據られたるなるべし。

〔十二月十四日〕神功紀に「皇后從ニ新羅一還之、十二月戊戌朔辛亥、生ニ譽田天皇於筑紫一、故時人號ニ其產處一曰ニ字瀰一也」と見えたり。

〔鬼神道〕玆にては神わざの意なるべし。

〔筑紫〕上古、今の九州の總名と、筑前筑後地方の名稱とに用ひたり、前者は筑紫洲といひ後者は筑紫國と稱したり、玆に筑紫とは筑前國也。

〔伊邪那美命云々〕神代紀に「然後伊弉諾尊追二伊弉冊尊一、入二於黃泉一、而及之共語時、伊弉冊尊曰、吾夫君尊何來之晩也」とあり。

〔妣國〕古事記上に「妣の國、根之堅洲國に、罷らむと欲ふが故に哭く云云」と見ゆ。

の道の靈異きことわりをしらざるが故に、此皇后の神の御教へにしたがひて、齋祀をおごそかにし給ひ、さま〴〵靈異有し御事などを、ほのかに傳へ聞てあやしみ思へるなり。又かの侍婢千人云々の女王は、筑紫の僞僭の者のしわざなるを、魏の使それにあざむかれたるなれば、男子一人云々も論にたらぬ事也。此事われさきに馭戎慨言に委く辨ぜり。ひらき見てさとるべし。されば應神天皇仲哀天皇の御子にましますこと、何の疑はしき事かある。もしこれをしひて疑はしといはゞ、天下古今の人の父、みなうたがはしといふべし。

素戔鳴尊は辰韓より渡り給ふ、故に新羅を父母の根の國といふ。

これは神代紀に、吾欲レ從二母於根國一と此神のの給へる事也。根國といふは夜見の國の事にて、伊邪那美命のまします故に、從レ母とのたまへり。古事記にも同じく妣國とこそあれ、父母の國とのたまへる事は、何の書にも見えざるを、母ばかりの國といひては、人の信ずまじきを恐れて、私に父字を加へてまきらかせる巧こそをこなれ。そのうへもし根國といふが新羅にして、此神其國より渡り給へることを掩ひかくす物ならば、母國とも記さるべきにあらず。況や父母國とはいかでか記されむ。かやうの事共をよくも思ひはからずして、みだりにいへる故に、皆しひごとなることのあらはるゝぞかし。

これらのことは、書をよむ人の眼高からざれば、共に談じがたく、

癡人の前に夢をとくが如し。

これ又近代普通の學者の常の見解也。ひたすら強て皇國をいやしめおとすを眼高しと心得たるは、返りて眼も心も卑くして、漢籍におぼれ惑へる故也。今一層眼を高くして見よ、その非をさとるべし。わが古學の眼を以て見れば、外國はすべて天竺も漢國も三韓も其餘の國々も、みな少名毗古那の神の何事をも始め給へる物とこそ思はるれ。されば漢國にてことごとしくいふなる伏羲神農黄帝堯舜なども、その本はみな此神よりぞ出つらむを、かの國などには神代の傳說を失ひて、今に至るまで、この始めをしらぬこそいとほしけれ。此事は猶くはしき考へ有ていふもの也。されどとにかくにからぶみのまどひの除こらぬ人には、まことに癡人の前に夢をとくがごとくになむ。

天明五年乙巳十二月

本居宣長

鉗狂人　終

〔癡人の前云々〕愚人に向ひて夢の話をする義にて、馬鹿々々しきに喩ふ。黄山谷題跋に「觀ニ淵明責レ子詩ー、想ニ見其人ー、豈弟慈祥俗人便謂ニ淵明子皆不肖ー、可レ謂ニ癡人前不レ得レ說レ夢ー也」とあり。

〔少名毗古那神云々〕神代紀上に「其後少彥名命行ニ至熊野之碕ー、遂適ニ於常世鄉ー矣、亦曰至ニ淡島ー而儀ニ粟莖ー者、彈渡而至ニ常世鄉ー矣」とあり

〔伏羲神農云々〕何れも支那上代の聖天子にて、皇王大紀には是を五帝といへり。

本書は、本居宣長翁、藤井貞幹が衝口發といふ書を著して、みだりに、皇國をいやしめおとし、皇統をさへ憚りもなく論じて、皇國の大本を忘れ、皇學を輕忽に附するを慨き、鉗狂人を著して辨駁せられたるも、猶あきたらずとし、此の水草の上の物語を書き添へて、當時の漢學者輩が支那の制度文物に心醉して我が皇道の大本をあやまるを覺醒せしめんとし、寓言に託して闡明せられたるものなれば、玆に附錄としたる也。
〔西の方云々〕中世以來漢學盛に行はれ、皇學の衰微せるにたとへたり。

水草のうへの物語

今はむかし、あめつちの池とて、いと大きなる池のほとりに、夏のころ夕つかた人人よりあひて、何くれとむかし今の物がたりしつゝ、すゞみゐけり。中に年おいたる、むかしその池はりしほどより、始めよくしり居て、五十年ばかりにもや成ぬらむ、そのをりは、とゐりきかゝりき。卅年あまりさきには冬いみじく寒くて、此池ことごとくにこほりわたりて、その氷のうへを人のかよひありきし事も有き。その後又、みな月ばかりに久しくひでりのしたりし年は、水のこりなくかれにしぞかしなど、とし久しくなりぬる事共を、いとよくおぼえゐてかたる。池の面には水草どもさまざまいとしげかる中に、まなび草とて、よにめでたき物にすなる草の、ものよりことにめにたちて、こゝかしこに生まじりて、こゝちよげにさかえたる、夕露の玉のひかりにもてはやされて、いとすゞしくおもしろく見わたさるゝを、東のかたのみぎはにちかき一本なむ、こよなくかじけていとまばらに、西のかたなるがひろごりきたるに、おしけたれて、をれふしなどしたる莖の本より、まだ

〔わか葉のひとつふたつ〕荷田春滿、賀茂眞淵等の皇學者をいへり。

〔この翁〕名を神代の御典といひ皇國の古傳說にたとへて名づけたる也。

〔みなじち云々〕皆眞實に違ひたるをいふ。

〔まさしき學草〕皇國の實の古傳說のみ萬代不易にして實に違ふことなきをいひし也。

〔まうと〕客也、參人(マヰト)の音便の轉ならんといふ、また「まらうど」の約ともいふ。

いとちひさきわか葉の、ひとつふたつ水のうへに、はつかに見えたるを、この翁めとゞめて、大かた此池にまなびぐさとて、かくいとしげくはおひにてあれども、まさしきは此めぐみそめたる、一本の中のわか葉のみこそあれ。いとよく似てはあんめれども、にしのかたなるは、みなじちのにはあらずなむある。まさしき學草(まなびぐさ)は、まことばなとて、よにすぐれたる花なむさくを、としごろ池の水ぬるみたるけにや、たえてさかずなりぬるを、この若葉のかく生出そめつるは、水も寒くなりていま又花さきぬべきにこそは有けれ。むかし此たねどもまきそめしも、まろはよくしれるをやなど、こまかにかたる。かくいふおきなが名は、かみよのみふみとぞいひける。やう／＼暮ゆくまゝに、ほたるどもひかり出てとびちかひ、こゝかしこ水草のうへにもしげく見えたる中に、かのかじけたる一本のまなび草の中なる若葉のはしに、たゞひとつすがりゐたる、名は大やまとのまさ彦、いとちひさくかひなげなるつらづゑをつきて、此物がたりをきゝいりをり、又、西のかたにひろごりたる浮葉(うきは)どもには、いとあまたゐたる中に、からごころの狹麻呂(さまろ)といふ、此東なるわかばのうへにとびうつり來ていふやう。まうとは、いとおろかなるものかな。あの翁が物語は、みなそらごとにこそあれ。人のいのちよ、われ

〔おふけなく〕身の分にすぎて堪へ難きをいふ。

〔たはやすく〕たやすしに同じ。

〔みくさ〕水草也。

〔あなかまたまへ〕あなかしまし靜まり給への意也。

〔みぎは〕汀也。

らがよになずらへて思ふに、いかに長くとも一とせのほどにはよも過じを、五十年にも成ぬらむなどとて、此池のはじめの事をしも、見たりけむやうにかたりなすこと、又こほりといふ物のゐて、此水の上をふみありきつるなど、すべてさることわりあるべくもあらず。又花さくまことのまなび草は、此まうとがゐるわか葉ぞといふなるも、もはらうけられず。われらがゐる西のこそ、くきも葉もこよなくうるはしくさかえてはあなれといへば、げにいとあやしくめづらかなる事とはわれもきけど、人といふもの、こよなく命のながゝなるものとしきけば、五十年あなたのこと、かならずしるまじ共さだめがかくなむ。又さばかりひさしきよゝをへにけむほどには、さま〳〵めづらかなる事共も、などかなからむ。われらいとはかなきいのちにて、春秋をだにしらぬみの、おふけなくいかでかは人のうへをば、たはやすくおしはかりしるべきといふに、さまろうちわらひて、さは、この池のうちに、蛙こそ春のほどよりうまれ出て、命長きものはあれ。いでかたらひ來て此事さだめむといへば、かたへなるみくさのかげより、漢經史あざなは聖賢とかいふ、おとな〳〵しげなる蛙とび出來て、あなかまたまへ、なにごともおのれよくしれり。此みぎはにむかし物語すなる人どもは、此ほど著くなりてこそ

〔つのぐみそめし〕芽、角の如く出で初むるをいふ。

〔おひそめし云々〕かの大倭の正彦の如くに、我が住める池の始をさへ知れるは、誠に串世の御典を信ずる心によりてなり、さるをかの蛙の心得顔にいふをきゝて末葉の上を何か爭はんと也、卽ち皇國の根本を知らずして徒らに漢土の制度文物に心醉するを戒め諷せし也

すゞみにとて此わたりにはほのめくなれ。いにしうづきのころまでは、さらに人といふもの見えざりし物を、去年よりあなたのことはいかでかしらむ。このまなび草のたねまきそめし世の事など、しりがほにかたるこそいとをこなれ。すべて此池の水くさどもは、いづれも〳〵この春おのがいときなかりしほどにこそ、つのぐみそめしか。それよりあなたに、なでふ草葉かはあらむなど、ことおほくいとかしかましく鳴つゞくるを、みぎはなるおきなつく〴〵と聞居て、

おひそめし根ざしもしらでまなび草末葉のうへを何かあらそふ。

あなはかなとぞ。

夏むしかはづのたとひはしも、ことふりにたれど、をかしくおもひ出らるゝままに、筆のついで二ひら三ひらのこれるかみの有けるに。

古史成文

瓠形之。天正志斗號之御世廼。十餘五年登云祁留年余理。天日嗣之高御座爾坐々氐。明御神登。大八嶋國所知看世留。天皇命乃。慶長斯斗號之御世乃。四年登云計留年爾。淸原國賢朝臣邇勅命世賜比。大御許奈琉日本紀袁出之給比氐。板爾彫斯米賜反流事者。石上古傳説乎。廣久天下爾流布之賜波牟云。大御心者然物邇旦。當昔乃世人。神道者萬道之根柢爾志氐。諸蕃之敎等者。皆此御道乃末葉也登仕毛思有受。其徑乎。道斗學夫我多在事袁之。憐斗那母所思坐低。何叙毛本乎棄氐末乎取刀。御諭志坐留。御擧也之事者。國賢朝臣廼表文爾見延天。炳焉加理。此後斯毛。是大御心乎心登之氐。他國能。卑伎道乃學者除氐。大皇國之尊吉道袁許曾學婆米斗。此御道二畏美奉仕留輩。多久成持來計琉中爾。遠江國用理。加茂眞淵斗云祁留翁出氐。先是道袁世二説明之始米。伊勢國與里。平宜長斗云翁出天。殊爾此學乎稱揚氐。珍斯支書等數著世流爾。天離留鄙人者更二毛云受。内日刺宮人佐閇彌次々邇。其説二從事止奈母成努琉波。最毛太自吉功績也可志。然乎又鳥之鳴東國爾。平篤胤登云翁有。本由理神廼生賦賜反流倭魂二。漢學之才佐閇有氐。

彼二翁之本志乎負繼低、歌文乃雅遊廼態袁婆心斗爲受。唯一向爾。萬乃根多留、神道之學爾思比入氏力勤美。外國々與理入來禮流、末之惡伎習乎婆論呂比捨氏。種々廼籍共書著波之。別爾古道乃本書斗撰倍留。古史云書者母。古書邇有由琉古事共乃眞事袁之。委曲々々爾讀考閇撰別多米。其考得多流說等者。其徵斗傳登爾。甚實々志久。書記勢留物那流乎。今度持上里氏見世有爾。盛邇大皇國之道乃。尊伎由緣呼說著齊留。顯明事廼考廼、感多吉者更奈理。幽冥事能目邇見延奴事乎斯毛。奇志九其情乎悟得氏。現世之人乃。善斗母惡登毛。定云牟波事爾母非受。唯幽世乃神之心爾耻留事奈支。眞道乎許曾行氏有米斗。言立多流。心之底乃淸ゝ斯左波。書見留隨爾。推察良琉々說共爾氏。正目二相見毛。雄々志支眞心著明久、體者悉大倭心爾、凝成禮留人乃如思波琉、其者著勢流籍袁良熟讀。直爾逢見牟人者、已自爾知奈武物敍。其學風乎先開題世琉記乃終爾。吾乎知留毛。吾袁罪流母。共二此史奈理登言擧世流者。實然言邇敍有祁流、斯有翁之眞心乃書等呼斯。科戶之大神相宇豆那比。大內邊廼最高支、雲乃上麻傳伊吹飄都留乎。見行之感聞延賜布斗佐閇所聞而有波。徒有米夜毛、庸夫廼思乎母徒爾半棄坐奴。廣伎厚支大御惠斗・此翁之朝爾夕邇。天地乃諸神等二幣淤支氏、祈願白齊流倭心能祥爾敍因禮理計留。實也。天正斯斗號祁流御世廼天皇命乃。深伎大御心與理。慶長久傳賜閇流古道之、世爾

明計九弘恭理氏。今斯母文政云布御世爾仕毛。斯有御惠之幸蒙禮留。翁之學風乃最向斯久。愛玖所思爾。魂相留哉。余二序袁斗乞布隨爾。本用理共邇歡思布事奈流二。彼國賢朝臣者。余我本生乃遠祖爾士安連婆。殊二幽契有事爾所思。心能曾古斐諾奈妣氏。唯斗云都々母。頓邇身豆可樂筆執低。如此那毛序制類時者。文政六年登云年廼。九月十餘五日斗云日也。

治部卿藤原貞直

古史成文 一之巻

神代上

〔神魯岐命〕古事記傳に「神漏岐は、神生祖君（カムアレオヤギミ）なり、阿と夜とを上下を略きて、禮於を切て漏といへり、生祖とは人にまれ物にまれ、生れ出る始の御祖なる由なり」とあり。

〔神魯美命〕古事記傳に「神漏美は神生祖女君（カムアレオヤメギミ）なり、賣岐を切て美となれり」と見ゆ。

〔葦牙〕葦の芽也。

〔隱御身〕隱身（カクリミ）にして、天地の原素を構成せる神の義也。

〔一〕古天地未生之時。於天御虛空成坐神之御名。天之御中主神。次高皇產靈神。亦名高木神。亦云鷹枕高皇產靈。次神皇產靈神。亦云神產巢日御祖命。亦云神魂此神。此者所謂神魯岐命也。大刀自神。此者所謂神魯美命也。三柱神者。並獨神成坐而。隱御身矣。

〔二〕爾大虛空之中一物生而。其狀難言。浮雲之如無根係之所而。漂蕩之時。自其中。狀如葦牙之初生於泥中而。有萌騰之物。因其物而。始成坐神之御名。宇麻志阿志訶備比古遲神。次天之底立神。亦云天之常立神。亦云天之壁立命。亦名天角凝魂命。亦云天角己利命。亦云角魂神。此二柱神亦。獨神成坐而。隱御身矣。

上件五柱神者。別天神。

〔三〕次又有物。生於空中。因此而成坐神之御名。國之底立神。亦云國之常立神。次豐斟淳神。

亦云豐雲野神。亦云豐組野神。亦云見野神。亦云豐齧野神。亦云豐國主神。此二亦云豐國野神。亦云葉木國野神。亦云浮經野豐買神。亦云豐香節野神。柱神亦獨神成坐而隱御身矣。

〔四〕次國地稚在之時成坐神之御名。宇比地邇神。次妹須比智邇神。亦云埿土根神。次妹沙土根神。次角杙神。次妹活杙神。次大斗能地神。次妹大斗乃辨神。亦云大富道神。次妹大富邊神。次淤母陀琉神次妹訶志古泥神。亦云吾屋惶根神。亦云吾屋橿城神。亦云青橿城根神。亦云吾忌橿城神。次伊邪那岐神。次妹伊邪那美神。

上件自國之底立神以下。伊邪那岐伊邪那美神以上。幷稱神世七代。上二柱者。獨神各云一代。次雙坐十神者。各合二神而。云一代也。

〔五〕爾其天神諸之命以而。詔伊邪那岐命伊邪那美命二柱神。修固成是漂在國而。賜天瓊戈而言依給矣。故二柱神。立天之浮橋而。指下其瓊戈而。畫給青海原則。鹽許袁呂許袁呂然畫鳴而。引上之時。自其戈之末垂落之潮。自然凝積而成島。是淤能碁呂島也。二柱神。於其島天降坐而。以其天神之所賜之天瓊戈。衝立其島而。爲國中之

〔妹〕夫婦兄弟他人の別なく、男女相雙ぶ時にその女の方を指していふ詞也、後世の妹（イモウト）の語より範圍廣し

〔伊邪那岐神、伊邪那美神〕伊邪は誘ふ意の感動詞、那は汝の義也、夫婦相協力して修理固成の大道にいそしむ意の御名也。

〔天神〕五柱の別天神を指す。

〔命〕「みこと」は御言の義也、伊邪那岐、伊邪那美二神以後、諸神の名の下に命とあるは、天神の命を受けて修理固成を爲す意也。

〔詔〕「のりごち」は「詔り事し」の約也

〔天瓊戈〕「天」は稱詞瓊戈は瓊玉を以て飾とせる矛の也

御柱而。見立天之御柱。化作八尋殿而、共住給矣。故其瓊戈。後者化小山矣。

〔六〕於是伊邪那岐命、於其妹伊邪那美命。問曰汝身者如何成則。答云吾身者。成成而不成合處一處在矣。伊邪那岐命詔曰之。我身者。成成而成餘之處一處在。故以此吾身之成餘之處、刺塞汝身之不成合處而、以爲生成國土奈何詔之則。伊邪那美命答曰然善矣。爾伊邪那岐命。然則吾與汝。行廻逢是天之御柱而。爲美斗能麻具波比詔之。如此云期而。乃詔曰汝者自左廻逢。吾者自右廻逢。約竟廻坐而。會一面之時。伊邪那美命。先唱曰阿那邇夜志愛袁登古袁。後伊邪那岐命。和曰阿那邇夜志愛袁登賣袁矣。各言竟而後。伊邪那岐命不悅給而。告其妹。曰吾者男在則。當先唱理也。如何女言先立乎不良矣。雖然。於久美度興而。御合坐時。不知看其術。爾鶺鴒飛來。搖其首尾。二柱神見行而。學之。得交道而。先生給子蛭子矣。此子者雖滿三歲。脚尚不立故、入葦船而。順流放棄之。次生給淡島矣。是亦不入子之列也。

〔七〕於是二柱神議云之。今吾所生之子不良、仍宜白天神之御所詔而、卽共參上而。具奏其狀而。請給天神之命矣。爾天神。於太兆卜相而。致之曰、因女言先立之而不良。復還降而、宜改言詔之矣。

〔美斗能麻具波比〕「美斗」は寢所の義「麻具波比」は夫婦の交りの意也。

〔阿那邇夜志云々〕阿那は感動詞「嗚呼」に同じ、邇は妍又は美の意、夜志は感動詞「かな」に似たり、「愛袁登古」は可愛らしき男の意、「袁」は感動詞「よ」といふに似たり。

〔久美度〕「籠處」（コモリド）の義にて、夫婦の起臥する所也。

〔太兆〕太は美稱にして「まに」は「まにまに」の義也、「まにまに」は天地萬有の生々發展する自然の狀態也、爰はこの根本原理を或る事物に標徵して以て占筮の用に供せるをいふ。

〔八〕故二柱神。卽返降坐而。改而。伊邪那岐命者自左。伊邪那美命者自右。往廻其天之御柱而遇之時。伊邪那岐命。先唱曰阿那邇夜志愛袁登賣袁。後妹伊邪那美命。和曰阿那邇夜志愛袁登古袁矣。如此言竟而後御合坐而。御產之時。先以淡路穗之狹別島爲胞而。生給子大倭豐秋津島矣。亦名謂天御虛空豐秋津根別。次生給伊豫之二名島矣。此島者身一而面有四。每面有名。故伊豫國謂愛比賣。讚岐國謂飯依比古。粟國謂大宜都比賣。土佐國謂建依別。次生給筑紫島。此島者身一而面有五。每面有名。故筑紫國謂白日別。豐國謂豐日別。火國謂速日別。日向國謂豐久士比泥別。熊襲國謂建日別。次生給壹岐島。亦名謂天一柱。次生給津島。亦名謂天之狹手依比賣。次生給隱岐之三子島。亦名謂天之忍許呂別。次生給佐渡島矣。一傳云。雙生隱岐島與佐渡島。世有雙生者。象此也。故此八島因先生坐之國而。稱大八島國也。

〔九〕然後還坐之時。生給吉備兒島。亦名謂建日方別。次生給小豆島。亦名謂大野手比賣。次生給大島。亦名謂大多麻流別。次生給日女島。亦名謂天一根。次生給知訶島。亦名謂天之忍男。次生給兩兒島。亦名謂天兩屋。故處處之小島者。皆潮沫之凝成矣。

〔一〇〕爾神伊邪那岐伊邪那美命。妹妋二柱嫁繼而。生竟國之八十國島之八十島。

〔故〕「斯かれば」、「此の故に」の接續詞也。

〔胞〕鈴木重胤曰く「最初に出來れる子長（コノカミ）なるよしを以て、淡路島爲兄と云傳へたるか、言の同じきに、兄を胞と誤れるならん」と、胞は元來兒の胎中にある時、此を包みて日足す胞衣の義也爰は鈴木說と何れにも決し難し

〔筑紫國〕今の筑前筑後也。

〔豐國〕今の豐前、豐後也。

〔火國〕今の肥前、肥後也。

〔熊襲國〕今の大隅薩摩也。

〔八十國〕「八」は彌（ヤ）の約りたる語にして、八十國は多くの國の義也。

〔坐龍田立野神〕大和國生駒郡三郷村立野なる龍田神社に坐す神也、崇神天皇の時、この神の託宣によりて創建すと傳ふ。

〔麻奈弟子〕眞の末子の義にて、やがて深く愛する末子の意に用ふ。

〔蕃登〕含處（ホホト）、秀門（ホト）、火處（ホト）などの義の諸説あり、陰部をいふ。

〔病臥〕「こやし」は「こゆ」の延語也、「こゆ」は臥す意の古語也。

〔多具理〕俗に嘔吐（ヘド）といふ物の古稱也。

〔那勢〕「汝兄」の義にて、婦人が男子を呼ぶ愛稱也。

生給八百萬之神。亦悉生給萬物。然後。伊邪那岐命詔曰。吾所生之國。唯朝霧而薫滿哉詔之而。於吹撥之御氣成坐神之名。志那都比古神。次志那都比賣神。亦云志那斗辨神。此者風神也。亦名謂天之御柱命國之御柱命。此者坐龍田立野神也。故亦謂龍田比古龍田比女神。

〔一一〕爾伊邪那美命。於麻奈弟子。生給火產靈神而。御蕃登被燒而石隱坐而。於伊邪那岐命。告曰夜七夜晝七日。勿見吾。我那勢命矣。不足此七日而。其隱坐事爲奇而。見所行之時。生給火而。所燒御蕃登而病臥坐也。其悶熱懊惱之時。於多具理成坐神之名。金山毘古神。次金山毘賣神。此者金神也。

〔一二〕於是伊邪那美命白曰。吾那勢命之。勿見吾白然。見阿波多志吾給焉申給而。我那勢命者可知看上津國。吾者將知下津國白而。復石隱給而。至坐與美津枚坂而所思食之。吾那勢命之所知食於上津國。生置心惡子而來詔之而。返坐而。更生給御子。生給水神土神天吉葛川菜矣。故於御尿成坐神之名。彌都波能賣神。此者水神也。次於御屎成坐神之名。埴夜須毘賣神。亦云健埴安神。亦名丹生都比賣神。亦云爾保都比賣神。新具蘇比賣神。亦名埴山毘賣神。此者土神也。生給此四種之物而。此心惡子之心荒

則。水神瓠。土神持川菜而。鎭奉焉。事致悟給矣。

凡伊邪那岐伊邪那美二柱神。共所生之島十四島。神五神也、此者伊邪那美神未神避坐之以前生坐也。唯淤能碁呂島者。非所生坐。亦蛭子與淡島。不入子之列也。

〔十三〕故是火產靈神。亦名火雷神。亦名火之迦具土神。亦名火之燒速男神。亦名火之炫毘古神。卽此火產靈神。娶埴山毘賣神而。生坐神之名稚產靈神。亦云若御魂神。此神之御子謂豐宇氣毘賣神。亦云豐遠迦比賣神。亦云登由宇氣神。亦名宇氣母智神。亦名大宜都比賣神。亦云大御膳都神。亦名宇迦之御魂神。亦名若宇迦能賣神。亦云豐宇賀能賣神。亦云大宇迦神。此神之幸御魂神。謂木神久久能智神。亦云木祖神。次野神草野比賣神。亦名野椎神。亦云草祖神。亦合此二神而。號屋船神。卽御殿之神也。

〔一四〕故其伊邪那美神者。因生坐火產靈神而。遂神避坐也。於是伊邪那岐命詔之。愛之我那邇妹命乎。替子之一木哉詔之而。匍匐哭之時。於御淚成坐神之名泣澤女神。此者坐香山之畝尾之樹本神也。故其伊邪那美神者。坐木國熊野之有馬村。土俗祭此之御魂。有花時則以花祭之。又立幟皷敲笛吹舞而祭之。

〔愛之我那邇妹命乎〕「愛しき」は愛すべきの意也、那邇妹は「なぎも」にて、汝、妹の義、乎(カ)は呼掛くる感動詞也。

〔替子之一木哉〕「一木」は一つの木の斷片の意也、木の一斷片位にしか値せぬ子と交換しつる事哉と、伊邪那美命の崩御を甚だ悼み給へる也。

〔香山之畝尾之樹本〕大和國磯城郡香久山村大字木之本啼澤杜卽ち是れ也。

〔有馬村〕那智三卷書に「有馬村有產田宮、乃伊弉冊尊神退之地、而其東有隱窟、亦曰產立窟、亦曰花窟、所葬伊弉冊尊岩窟也」とあり。

〔十握劍〕幾握もある長き劍也。

〔御刀〕「みはかし」は「佩く」に繼續の副語尾の添はりたる「佩かす」の轉じて、刀の意の名詞となれるもの也。

〔鐔〕「つみは」と訓むは抓刃の義、又は留刃の轉なりといふ、刀心を貫きて刃と柄との間にはめたる輪金也。

〔天之尾羽張〕「天之」は稱詞、尾羽張は劍の尾卽ち芒尖が幅廣くして、兩方に張り出でたる形を示す詞也。

〔伊都之尾羽張〕書紀には「嚴」又は「稜威」に作る、神威の烈しく銳くして、犯し難き刀の義也。

〔一五〕於是伊邪那岐命。拔御佩之十拳劍而。斬其御子迦具土神而。爲給三段矣。爾於其御刀之刃。垂落之血。激上而。爲天之安河原在五百箇石村矣。復於其御刀之鋒。垂落之血。激越其磐石而。成坐神之名。磐裂神。次根裂神。二神矣。此神之子磐筒之男神。次磐筒之女神。此者經津主神之御祖也。復於其御刀之鐔。垂落之血。激越其磐石而。成坐神之名。甕速日神。一神矣。此神之子熯速日神。此者建御雷之男神之御祖也。是時之血。激灑而。染石礫樹草。此草木沙石。自然含火之緣也。故所斬之御刀之名。謂天之尾羽張。亦謂伊都之尾羽張神。亦謂稜威之雄走神。

〔一六〕爾其被殺坐之。迦具土神之御骸之。每段各化神矣。於其一段成坐神之名。大雷神。次於其一段成坐神之名。大山祇神。次於其一段成坐神之名。高龗神。凡三神矣。一傳云。迦具土神之於頭成坐神之名。正鹿山津見神。次於胸成坐神之名。淤縢山津見神。次於腹成坐神之名。奥山津見神。次於陰成坐神之名。闇山津見神。次於左手成坐神之名。志藝山津見神。次於右手成坐神之名。羽山津見神。次於左足成坐神之名。原山津見神。次於右足成坐神之名。戸山津見神。幷八神也。

〔一七〕故其大山積神。亦云大山罪御祖命。亦名大水上神。亦云大水上御祖命。亦名山雷

神。此神之子。謂高水上神。亦云高水神。此大山津見神。與野椎神二柱。因山野持別而。生坐神之名。天之狹土神。次國之狹土神。次天之狹霧神。次國之狹霧神。次天之闇戸神。次國之闇戸神。次大戸惑子神。次大戸惑女神。凡八神矣。

〔一八〕於是伊邪那岐命。欲相見其妹伊邪那美命而。追往豫母都國矣。故其伊邪那美命。自殿騰戸出向之時。伊邪那岐命語詔之。愛之吾那邇妹命。悲忍汝之故來。吾與汝所作之國。未作竟故。可還詔矣。爾伊邪那美命答白。悔哉不速來而。吾已爲豫母都戸喫。雖然愛之吾那勢命。入來坐之事恐故欲還。且與豫母都神相論。族也莫視我白而。還入其殿内之間。甚久而難待矣。故刺左之御美豆良。湯津爪櫛之男柱一箇取闕而。燭一火入見之時。宇士多加禮斗呂々岐而。八雷公副居矣。

〔一九〕於是伊邪那岐命見畏而。吾不意到伊那志許米伎汚穢國矣詔而。逃還之時。伊邪那美命耻恨而白曰。何不用要言而。令耻見吾耶。汝已見我情。我復見汝情白之時。伊邪那岐命亦慙焉。因將出返之時。不直默歸而。盟之曰。族離。不負於族詔之而。乃唾之時成坐神之名。速玉之男神。次掃之時成坐神之名。豫母都事解之男神。亦名謂大事忍男神。凡二神坐。今世人。夜忌燭一火者。此其緣也。

〔豫母都國〕古事記には黄泉國とありまた、根の國、底の國、根の堅洲國などともいふ、人の死後その死骸の行くてふ想像上の國也。

〔殿騰戸〕宮殿の戸にて、上下に開閉さるゝが如く作れるもの也。

〔豫母都戸喫〕日本紀には「食泉之竈矣」とあり、黄泉國の竈にて煮炊きしたる物を食する義也。

〔御美豆良〕額の左右に角の如く結びし髪をいふ。

〔湯津爪櫛〕「五百箇迫櫛」の義にて、歯の細かく迫りたる櫛也。

〔男柱〕櫛の兩端の大いなる歯をいふ。

〔揮乍〕「振りつゝ」の古語也。
〔黑御鬘〕頭髮の裝飾に着くる物を鬘といふ、上古は男女共に之を用ひし也、黑はその鬘の色也。
〔摭〕「ひりひ」は「拾ひ」の古語也。
〔笋〕「たかむな」は「竹芽菜」にて、竹の子を食用に供する目的にいふ詞也
〔宇都志伎〕「愛しき」又は「いつくしき」の意也。
〔青人草〕世の人の生れ出づるを、草の彌々益々生ひ茂るに譬へていへる語也、人民をいふ。
〔度事戸〕夫婦の契を絶つ由を言ひ渡すをいふ。

〔一〇〕於是伊邪那美命。即遣豫母都志許賣。亦云豫母都日狹女。八人而令追矣。故伊邪那岐命。拔御佩之十拳劒而。於後手揮乍。逃行。取黑御鬘而。投棄之則。乃蒲葡子生矣。豫母都志許賣摭食之間。逃行。然。噉了而仍追則。亦刺其右之御美豆良。引闕湯津爪櫛而。投棄之則。乃笋生矣。豫母都志許女。又拔食其笋。噉了而更追。最後則。其妹伊邪那美命。身自追來焉。是時伊邪那岐命。已到坐豫母都平坂。隱坐其坂之桃樹下而。其實三箇採而。待擊之則。雷等悉逃返矣。爾伊邪那岐命告桃曰。汝如助吾。所有宇都志伎青人草之。落苦瀨而惚苦之時。可助焉詔之而。賜大加牟豆美命云名矣。此桃之避惡鬼事本也。又夜忌擲櫛者。此其緣也。

〔一一〕於是伊邪那岐命。以千引磐。引塞其坂路而。中置其石。各對立而。度事戸之時。伊邪那美命白曰。愛之吾名妹命。汝如此言則。吾汝國之人草。一日千頭將絞殺白給矣。爾伊邪那岐命詔曰。愛之我汝妹命。汝然爲之則。吾哉一日當立千五百產屋。自此以遷莫來詔而。即投棄其御杖矣。是以一日必千人死。一日必千五百人生也。

〔一二〕於是伊邪那岐命復詔曰。始爲族。悲及思哀者。吾怯也矣詔之時。伊邪那美命。託豫母都道守者。及菊理比咩神而。令白曰。吾與汝已生國矣。奈何更求生乎。吾則留

此國而。不共去白給矣伊邪那岐命聞而善之。乃散去矣。故其所謂豫母都比良坂者、今謂出雲國之伊賦夜坂也。亦伊邪那美命號豫母都大神。亦以其追及而。號道敷大神。亦於其投棄之御杖成坐神之名。來名戸之祖神。亦云久那斗神。亦名衝立船戸神。亦云岐神。亦於其豫美坂所塞之石者。號道反大神。亦號塞坐豫美戸大神。亦號八衢比古八衢比賣神。凡三神矣。

上件。久那斗神。八衢比古八衢比賣神三柱者。所謂障神等也。

〔一三〕伊邪那岐大神。既還坐而。悔之曰。吾至伊那志許米志許米伎汚穢國而在哉。故欲滌去御身之穢惡詔而。往見粟門及速吸名門。然此二門者。潮太急。故到坐筑紫日向之橘之小戸之。阿波岐原而。禊祓給矣。故於投棄御帶成坐神之名。道之長乳齒神。亦云長道磐神。次於投棄御衣成坐神之名。和豆良比之宇斯能神。亦云煩神。次於投棄御褌成坐神之名。飽咋之宇斯能神。亦云開囓神。次於投棄左御手之手纏成坐神之名。奥疎神。次奥津那藝佐毘古神。次奥津甲斐辨羅神。次於投棄右御手之手纏成坐神之名。邊疎神。次邊津那藝佐毘古神。次邊津甲斐辨羅神。凡九神矣。

〔伊賦夜坂〕今は同國八束郡揖屋村（イヤムラ）の東、伊藤鼻の上なる山坂にその舊跡あり。

〔障神〕豫母都志許賣を支へ留めたる功徳によりて、名を負へる神也、これより後ち、路に邪魅を遮る神として尊祟さる。

〔伊那志許米云々〕「いな」は厭ふべき意、俗に「いやな」といふに同じ、「しこめき」は見苦しく忌むべき意也、之を重ねたるは意を強めたる也。

〔速吸名門〕今の豐後水道にて、佐賀關と佐田岬と相對する所也、「なと」は「のと」の轉也、「なと」が轉じて「灘」（ダナ）となれり。

上件自道之長乳齒神以下。邊津甲斐辨羅神以前。九柱神者。因脫著身之物而。成神也。

〔一四〕於是伊邪那岐大神。詔言上瀨者瀨急。下瀨者瀨弱而。初於中瀨墮迦豆伎而滌之時。吹生大禍津日神。亦云八十枉津日神。亦云天之麻我都比神。此神者。到坐其穢繁國之時。因汚垢而。所成之神也。次爲直其禍而。吹生大直毘神。亦云神直日神。次伊豆能賣神。亦云速秋津日神。次洗御鼻之時。成坐之神名。速佐須良比賣神。凡四神矣。

〔一五〕於是於水底沈濯之時。吹生坐之神名。底津綿津見神。次底筒之男命。亦云底土神。於中潜濯之時。吹生坐之神名。中津綿津見神。次中筒之男命。亦云赤土命。於水上浮濯之時。吹生坐之神名。上津綿津見神。次上筒之男命。亦云磐土命。亦云石土毘古神。石巢比賣神。凡六神矣。故此三柱之和多都美神者。阿曇連等之祖神以伊都久。筑紫志加大神也。此大綿津見神。亦名豐玉毘古命。之子。宇都志日金拆命。亦名穗高見命者。安曇連。凡海連。海犬養。阿曇犬養等之祖也。亦子布留多麻命者。八太造之祖也。其底筒之男命。中筒之男命。

〔迦豆伎〕「かづく」は「上着」(カミツク)の轉にて物にて頭を被ふをいふ、爰は水を被ふ義也。

〔大禍津日神〕禍は「曲」(マガ)の義にて直の反對也、こはあらゆる禍惡の源泉なる神也。

〔速佐須良比賣神〕あらゆる不淨邪惡の禍を「さすらひ失ふ」事を掌る神也、大祓詞に此の神の職分見ゆ。

〔阿曇連〕阿曇は氏の名、連は「尸」(カバネ)の名也、阿曇連は世々海人の事を掌り、且つ宮室の御膳に奉仕せり

〔伊都久〕嚴に奉祀する意也。

〔墨江之三前大神〕攝津國住吉郡（今東成郡）住吉村にある住吉神社に奉祀する大神也、神功皇后征韓の時、此神に祈禱して靈驗ありしの故を以て、始めて社を造りて鎭め奉る、是を本社の起原とす海事及び和歌の神として尊崇さる。

〔亦御名建速須佐之男命〕月夜見命と須佐之男命と同神となすは甚だ隱當ならず、古事記にある如く月夜見命は「夜食國」を須佐之男尊は「海原」を知らす別神なる事、寸毫も疑ふべからず。

〔祓戸神〕大祓の時に祓庭（祓所）に祭る神をいふ「戸」は「處」「トコロ」の義也。

上筒之男命三柱神者。津守連之齋祠。墨江之三前大神也。

〔一六〕然後。因洗給左御目而。所成坐神之御名者。撞賢木嚴之御魂天疎向津比賣命。亦御名天照大御神。亦御名謂大日孁貴命。亦云天照大日孁命。亦云豐日孁命。亦云天照坐皇大御神。復因洗給右御目而。所成坐神之御名者。月夜見命。亦云月弓命。亦御名健速須佐之男命。亦云神速須佐之男命。亦云神須佐之男命。凡二神矣。

上件。自大禍津日神以下。速須佐之男命以前。十二柱神者。因滌給御身而。生坐之神等也。

〔一七〕故其八十枉津日神。亦名大綾津日神。亦名大屋毘古神。亦名瀨織津比賣神。此者天照大御神之荒御魂也。次其神直日神。亦名大戸日別神。亦名氣吹戸主神。亦名天之吹男神。亦名風木津別之忍男神。此者天照大御神之和御魂也。次速秋津日子神。次妹速秋津比賣神。此者水戸神也。次速佐須良比賣神者。與速須佐之男命。合力而座神也。

上件。瀨織津比賣神。氣吹戸主神。速秋津日神。速佐須良比賣神四柱者。所謂祓戸

〔因二河海一云々〕港の内、更に河に屬する方と、海に屬する方とを持ち分けて主宰する神を得給はんとの目的にてとの意也。
〔天之水分神〕「天之」は稱詞、「みくまり」は「水配」(みくばり)の古語也、即ち水を過不足なく分配する神也。
〔瑲瑲〕玉と玉と相觸する音也。
〔取由良迦志〕手に取り、ゆらゆらと搖り動かす意也。
〔八拳須〕須は鬚の略字也、幾握もある長き鬚也。
〔心前〕心は胸也。
〔伊佐知〕日本紀に「血泣」、「涕泣」等の字を當てたる意也。
〔恚〕「むづかり」憤る意也。

神等也。

〔一八〕故其速秋津日子神。速秋津比賣神二柱。因河海持別而。生坐之神名。沫那藝神。次沫那美神。次頬那藝神。次頬那美神。次天之水分神。次國之水分神。次天之久比奢母智神。次國之久比奢母智神。凡八神矣。

〔一九〕此時伊邪那岐命。大歡喜而詔曰。吾者生生子而。於生終。得二柱貴子也詔矣。爾其天照大御神。質性光華明彩坐而。照徹於天地。故伊邪那岐命詔曰。吾子雖多。未有若此靈異之子。不宜留此國也詔而。即其御頸珠之玉緒。瑲瑲然取由良迦志而。賜天照大御神而詔之。汝命者所知高天原矣。事依而賜也。故其御頸珠之名。謂御倉板擧之神。是時。天地相去。未遠之故。以天之御柱。擧奉天上矣。故天照大御神者。隨其依賜之命而。知看高天原矣。次詔健速須佐之男命曰。汝命者所知青海原潮之八百重也。事依給矣。爾此神亦質性。光彩亞日神而。明麗坐矣。

〔二〇〕爾健速須佐之男命。不治其所命之國而。八拳須至于心前。哭伊佐知恚矣。其啼泣之狀者。青山如枯山泣枯。河海者悉泣乾。亦勇悍安忍而。人草多夭折矣。故伊邪那岐大御神。詔速須佐之男命曰。何由哉汝者。不治事依之國而。哭伊佐知流耶詔之。

則答白。吾者欲罷母國根之堅洲國之故。哭也白給矣。於是伊邪那岐大御神。大忿怒而。然則汝者勿在此國汝治此國則。殘傷多焉。任情所知夜之食國詔矣。故速須佐之男命白曰。然則請天照大御神而。將罷焉白給則。伊邪那岐命勅許之。因乃參上天矣。

〔三一〕於是伊邪那岐大御神者。神功既畢而。昇坐天報命白給而。仍留宅日之少宮。又坐淡海之多賀。亦坐淡路洲。此大御神。爲通行天而梯作立給矣。此云天梯立大神之御寢之間。仆伏矣。仍怪久志備坐矣。乃在丹波國久志備之濱是也。

〔三二〕於是健速須佐之男命。參上天之時。山川悉動。國土皆震。此者神性之雄健而使然也。爾天照大御神聞驚而。我那勢命之上來由者。必不善心。欲奪我國耳。吾雖手弱女。何當避乎詔而。卽解御髮。纏御髻而纏御裳而爲袴。於左右之御美豆羅。亦於御鬘。亦於左右之御手。各纏持八尺勾璁之五百津之美須麻流之珠而。於曾毘良者負千入之靫。於比良者。附五百入之靫。臂者取佩伊都之高鞆而。弓腹振立。劒之手上急握而。堅庭者於向股蹈那豆美。如沫雪蹶散而。伊都之男健蹈健發稜威之嘖讓而。御親迎而待問之。何故上來耶問給矣。爾速須佐之男命答白。吾者無邪心。唯大御神之命以而。問給吾之哭伊佐知流事之故。白都良久。吾欲往母國而哭也。白之則。大

〔淡海之多賀〕近江國犬上郡多賀村、今、官幣中社多賀神社所在地也。

〔解御髮云々〕女裝を男裝に變へさせ給へる也。

〔勾璁〕「眞赤玉」（マアカダマ）或は「眞明玉」（マアカダマ）の義なりといふ。

〔曾毘良〕「脊平」也脊中に同じ。

〔千入〕千入（チノイリ）の義也。「ノ」は篦にして箭の竹をいふ。

〔靫〕「弓箭」（ユミヤ）の轉也、矢を盛る器也。

〔高鞆〕革にて作り臂に着けて絃音を高くせしむる具也。

〔夜良比〕「遣ふ」の延語也。
〔姉〕「なね」と訓めるは「汝姉」の約にて姉を愛稱せる也
〔宇氣布〕「うけふ」とは神の力を請ひ受くる爲に或る誓約を立つる事をいふ、曲直を判斷し、又は成否を豫知する目的にてする方式也、その方式は一定せず時に依りて之を定む。
〔乞度〕先方に乞ひて此方に受取る意の古語也。
〔佐賀美〕「さ」は接頭語也、「賀美」は噛み也。
〔瓊響〕「瓊」は珠玉也、「ぬな」とは「瓊の音」の約也。
〔美豆良〕「耳鬘」の約也、頂髮を左右に分けて雙角の如く結へる髮也

御神。然則汝者、勿往此國爲詔而。夜良比給之故。以爲請將罷往之狀而也。跋涉雲霧而。參上耳。不意姉命之飜起嚴顏矣。吾無異心也白給。則天照大御神詔。然則汝心之清明事者。何以將知矣。於是速須佐之男命白曰。各宇氣比而。於其誓之間。當生子也白給矣。

〔三三〕故於是。各中置天安河而。相對立而。宇氣布之時。天照大御神詔曰。若汝不有異心。則其所生之子。必當男子爲言訖而。天照大御神。先乞度速須佐之男命之御佩之十拳劒而。打折三段而。於天之眞名井（亦云天淳名井。亦名去來之眞名井。）振滌而。佐賀美爾迦美而。於吹棄氣噴之狹霧成坐神之名。多紀理毘賣命。次狹依毘賣命。次多岐都比賣命。凡三柱女神生坐矣。

〔三四〕於是速須佐之男命。乞度天照大御神所纒左御美豆良八尺勾璁之五百津之御統之珠而。瓊響瑲瑲然。於天之眞名井振滌而。佐賀美爾迦美而。於吹棄氣噴之狹霧。男御子生坐矣。於是速須佐之男命與言而。曰正哉吾勝矣。因其御子之御名。謂正哉吾勝勝速日天之忍穗耳命。次乞度所纒右御美豆良御統之珠而。佐賀美爾迦美而。於吹棄氣噴之狹霧成坐神之名。天之穗日命。次乞度所纒御鬘御統之珠而。佐

賀美爾迦而美。於吹棄氣吹之狹霧成坐神之名。天津日子根命。次乞度所纏左御手御統之珠而。佐賀美爾迦美而。於吹棄氣噴之狹霧成坐神之名。活津日子根命。次乞度所纏右御手御統之珠而。佐賀美爾迦美而。於吹棄氣噴之狹霧成坐神之名。熊野久須毘命。亦云熊野忍隅命。亦云熊野大隅命。亦云熊野忍蹈命。凡五柱男神生坐矣。

〔三五〕於是天照大御神。方知看速須佐之男命之悶無惡意矣。故詔曰。是於後所生之。五柱男子者。物實因我物而所成也。故自吾子也。於先所生之。三柱女子者。物實因汝物而所成也。故乃汝子也。如此詔別給矣。

〔三六〕故其先所生之神。多紀理毘賣命者。亦云田心毘賣命。坐胸形之奧津宮。故亦名謂瀛津島比賣命。次狹依毘賣命者。亦名市杵島比賣命。坐胸形之中津宮。故亦名謂中津島比賣命。次多岐都比賣命者。亦云高津比賣命。坐胸形之邊津宮。故亦名謂邊津島比賣命。此三柱神者。胸形君等之持伊都久三前大神也。此大神自天降而。居埼門山之時。以青蕤玉置奧津宮之表。以八坂紫蕤玉置中津宮之表。以八咫鏡置邊津宮之表。以此三表成神體之形而。納置三宮而隱之。因云身形郡。亦坐豐國宇佐島矣。

〔胸形之奧津宮〕筑前國宗像郡沖島（今は恩賀島といふ）に在り、海岸を距る事凡そ十五里玄界灘の中にあり之を第三の宮ともいふ。

〔胸形之中津宮〕沖島の東南凡そ十里の所なる大島にあり、之を第二の宮ともいふ。

〔胸形之邊津宮〕もと神湊の東海濱にありしが、建長年中今の田島の地に遷し奉る。以上三神社を總稱して宗像神社といふ。

〔胸形君〕胸形は姓にて後に宗像、宗形と書けるも同じ君は尸也。

〔三七〕故其後所生之。五柱男子之中。正哉吾勝勝速日天之忍穗耳命者。亦云天大耳命。亦云天忍穗根命。亦云天忍穗別命。天照大御神。特鍾愛而。常懷御腋而。育賜矣。仍奉稱腋子矣。此神。御合產巢日神之御女。天萬栲幡千幡比賣命。亦云栲幡千千比賣命。亦云萬幡比賣命。亦名萬幡豐秋津師比賣命。亦云萬幡豐秋津比賣命。亦名火之戸幡比賣命之兒。玉依毘賣命。而先所生神名。天照國照日子火明命。亦云天火明命。此神娶天道日女命而。所生之兒。天香山命。亦云天香語山命。此者。尾張國造。尾張連。丹波國造。石作連。丹比連。襷多治比宿禰。蝮壬部首。丹比周敷連。津守連等之祖也。

〔三八〕次天穗日命。亦云天之夫比命。之兒。武夷鳥命。亦云天夷鳥命。亦云武日照命。亦云建比良鳥命。亦名武三熊命。亦云武三熊之大人。此者。出雲國造。出雲臣。土師連。菅原宿禰。秋篠宿禰。島津國造。武藏國造。相模國造。大島國造。伯耆國造。菊麻國造。上海上國造。下海上國造。安房國造。伊甚國造。新治國造。高國造。豐國造。一方國造等之祖也。

〔國造〕上古各地の一國を統治支配する者に賜へる尸(カバネ)にて、後ち職名の如くなれり、語義は「國の御臣」(クニノミヤツコ)の義也、神武天皇の時、珍彥を倭國造となしたるを始めとす。

〔連〕尸の一種也、主として神別の人に賜へり、語義諸說ありて決し難し。

〔宿禰〕尸の一種也書紀私紀に「昔稱皇子爲大兄、又稱近臣爲少兄、也、宿禰之義取於少兄也」とあり。

〔首〕上古の職名にて、後ち尸となれり、大人(オホト)の義にて其の部曲を統領する者の義也。

〔稲置〕上代の地方の職名也、屯倉の事を掌る、古へ國用の宗は米穀なりしかば、殊に重んじて諸國より出す米穀は、各地に屯倉を置き、稲置をして之を司らしめし也。「いなぎ」といふは「稲君」の義也、成務天皇の時始めて縣邑に之を置きたり。
〔額田部湯坐連〕額田部は姓、湯坐は職名也。
〔三枝部造〕顯宗天皇の時起りし姓也
〔凡河内國造〕河内國の國造也。
〔茨城國造〕常陸國茨城郡の國造也。

〔三九〕次天津日子根命之裔。天麻比止都根命。亦云天目一箇命。亦名天久斯麻比士都命。亦云天久之比命。亦名天之御影命。亦云明立天御影命。亦名天戸間見命。故是天津日子根命者。犬上縣主。蒲生稲置。菅田首。桑名首。額田部連。額田部湯坐連。三枝部造。高市縣主。奄智造。凡河内國造。凡河内直。津國造。山背國造。山背直。磐城國造。磐瀬國造。菊多國造。周淮國造。馬來田國造。師長國造。茨城國造。周防國造等之祖也。

古史成文一之卷終

古史成文 二之巻

神代中

〔宇氣母智神〕古事記に大氣津比賣神とあると同神也、「宇氣」は食の義也即ち食物及び食物の生產の事を持ち掌る神をいふ。

〔味物〕「ためつもの」は珍味の意の古語也。

〔天熊之大人〕「くま」は「米」の古言也、即ち此の神、稻種等を持ち上りて天照大御神に奉りしによりて、かかる名を負へる也

〔四〇〕於是天照大御神、詔神速須佐之男命曰。於葦原中國。聞有宇氣母智神云者。宜爾就候詔矣、故速須佐之男命、受勅而、天降坐而、到宇氣母智神之許而食物乞給。其宇氣母智神矣、爾宇氣母智神。自鼻口及尻。取出種種之味物而、於百取之机。種種作具而。奉饗之時。速須佐之男命。立伺其態而。爲奉進穢物而。忿然作色詔曰。穢哉鄙哉。寧以穢物。養吾乎詔而。迺拔劒。擊殺其宇氣母智神而。復命而。具言其事之時。天照大御神。甚怒坐而。汝者惡神也、不須相見詔而、乃一日一夜隔離而住矣。

〔四一〕故是後天照大御神。復遣天熊之大人而。看之時、宇氣母智神實已死矣。故其所殺之神身生物者。於顱上生粟。於眉上生蠶與桑木。於目生稗。於腹生稻種。於陰生麥及大豆小豆。頂化爲牛馬矣。故天熊之大人。悉取持而。奉獻之時、天照大御神喜之

詔曰。是物者。宇都志枳青人草之。食而可活物也詔而。乃以粟稗麥豆。爲陸田種子。以稻爲水田種子。又定天邑君。卽以其稻種。始而令殖天狹田及長田。則。其秋。垂穎八握莫莫然。甚快實矣。又於天香山殖桑木而養蠶。其蠒含口而抽絲。養蠶絍織之業。自此時始有矣。

〔四二〕於是速須佐之男命。亦名勝速日命。白天照大御神曰。我心淸明之故。我所生之子得男子。因此而言則。自我勝云而。於勝佐健。荒健而。春則毀其御營田之畔。溝埋。樋放。頻蒔。秋則穀物已成之時。亘以絡繩。馬伏。串刺矣。亦天照大御神之聞看新嘗之時。其新宮之御席之下。陰屎麻理散矣。天照大御神不知看而。徑坐其席之上矣。由是御體擧不平焉。故雖然爲。天照大御神者。以恩親之意。不咎給不恨給。容之而詔曰。如屎者。醉而吐散登許曾。我那勢命如此爲歟。又毀田畔。溝埋者。地矣惜登許曾。我那勢命。如此爲歟。雖詔直給。仍其惡態不止而轉焉。

〔四三〕天照大御神。御坐忌服屋而。織給神之御衣之時。速須佐之男命。穿其服屋之棟而。以天斑馬。生剝之逆剝剝而所墮入矣。於是天照大御神。見驚動而以梭傷身。發慍而乃入天石窟。閉石戸而刺幽居爾。一傳云。稚日女命。坐齋服殿而。織給神之御服之時。須佐之男命見之。逆剝天斑駒而。投

〔天邑君〕「天」は美稱にして邑君は農人の村の長の意也

〔天香山〕大和國風土記に「天上有山、分而墮地、一片爲伊豫國之天山、一片爲大和國之香山」とあり。

〔頻蒔〕一度種を蒔きたる田畑に重ねて更に播種するをいふ。

〔串刺〕田畑に串を刺してその田畑の主の田畑に這入り得ざるやうにするをいふ。

〔新嘗〕「新饗」(ニヒアヘ)の約轉也、嘗は支那の秋祭の名なるを借りて當てたる也、これ後世の新嘗祭の起原也。

〔轉焉〕惡しき方に愈深く進み荒むをいふ。

〔天堅石〕「かたし」は「かたしい」の略也

〔鍛人〕「かぬち」は「金打」の義也、鍛冶工をいふ。

〔眞名鹿〕古事記には「眞男鹿」とあり「眞」、接頭語、「名」は助詞也。

〔木國〕紀伊國の古名也。

〔日前國懸大神〕紀伊國海草郡宮村秋月にある、日前神宮と國懸神宮との祭神を總稱せる也現今何れも官幣大社也。

〔伊勢大御神也〕鏡は天照大御神の御靈形として齋き祭れる也、鏡と天照大御神と御同一なるには非ず。

入殿内矣。爾稚日女命驚而墮機。以所持梭傷體而神退矣。故天照大御神。謂須佐之男命曰。汝猶有黑心。不欲相見詔之。乃入天石窟而。閉著磐戸矣。爾天原皆暗。天下悉闇。因此而常夜往。故庶事燎火而辨矣。於是惡神之喧響。如狹蠅皆涌。萬物之妖悉發矣。

〔四四〕故是以八百萬神愁迷而。於天安河原神集集而。計可禱奉方。高皇産靈神之命以而。於八意思兼神令思矣。此神有思慮之智。深慮而白曰。圖造彼神之象。爲云之謀而。宜奉招禱白矣。故是天思兼神。亦云天八意命。之兒。天表春命者。信濃國阿智祝之祖也。次子天下春命者。秩父國造之祖也。

〔四五〕於是從思兼神之議而。取天安河之河上之天堅石。取天金山亦名天香山。之鐵而。求鍛人天津麻羅而。科伊斯許理度賣命而。令作日像之鏡。全剝眞名鹿之皮剝而。作天羽鞴。用此奉造矣。初度所造之二面者。少而不合諸神之意。此者坐木國日前國懸大神也。次度所造之八咫鏡者。亦云眞經津鏡。其狀美麗矣。是者伊勢大御神也。

〔四六〕故其伊斯許理度賣命。亦名天香山命者。天照國照彦火明命亦名天糠戸神。之兒。鏡

〔鐵鐸〕「さなぎ」の「さ」は發語、「なぎ」は鳴きにて其の音によりて名づけたる也、鈴をいふ。

〔和幣〕よく練りたる和かき布類の稱也多く穀の木の皮にて織れる木綿(ユフ)の類をいふ。

〔神衣祭〕伊勢大神宮の祭也、神服部(カムハトリ)等潔齋して、三河國の赤引の糸を以て、和妙の神衣を織り、麻績の連等麻を績みて、荒妙の御衣を織りて皇太神宮及び荒祭宮に奉る祭りなるが故にかく名づく、毎年四月、九月の十四日に之を行ふ。

作造。水主直。六人部連。五百木部連。伊福部連。檜前舍人連。竹田連。竹田川邊連。笛吹連等之祖也。

〔四七〕爾科天麻比止都命。亦名天津麻羅命、亦名明立天御蔭命、而。令作雜刀斧及鐵鐸矣。故是天目一箇命者。筑紫伊勢兩國忌部。倭鍛冶等之祖也。

〔四八〕爾科天日鷲命而。種穀木。令作白和幣。科長白羽命而。種麻。令作青和幣。是穀木麻。並衣蕃茂矣。於天羽槌雄命。令織文布。所謂荒衣是也。亦謂敷和衣。即宇都波多是也。以天御梓命為司。以天八千千比賣命。亦名天機比賣命。為織女而。令織神衣矣。所謂和衣是也。是者神衣祭之緣也。

〔四九〕故其天日鷲命者。亦云天日鷲翔矢命。產巢日神之御子。天底立命亦名角凝魂命之子。天手力男神亦名天石戸別命。亦名伊佐布魂命。亦名明日名門命。之子。粟國忌部。多米連。天語連。弓削連等之祖也。次長白羽命者。亦云天白羽命。亦名天物知命。亦名天八坂彥命。天日鷲命之子。神麻續連等之祖也。次天羽槌雄命亦云健葉槌命。亦云天羽雷命。亦名綺日安命。亦。出自角凝魂命之子。作佐布魂命。倭文連。

〔天御量〕古語拾遺に「天御量、大小斤雜器等之名也」とあり、卽ち諸物の大小長短、輕重等を量り定むる度量權衡の類をいふ。

〔瑞御殿〕「瑞」は稱詞、「御殿」は「御在處」(ミアリカ)の義にて家の敬語也。

〔忌部〕齋部氏に屬し、神祭に奉仕し又は祭器を造りし部曲也。

〔玉串〕榊の枝等に木綿(ユフ)ユフをつけて神に奉るものをいふ、爰は神に奉る意に於ての單なる榊をいふ。

〔野篶〕竹の一種也「しの」、「しのざさ」の類をいふ。

〔天波波迦〕「天」は稱詞、「波波迦」は今の「かば櫻」をいふ。

長幡部等之祖也。次天御梶命者。神服部連等之祖也。次天八千千比賣命者。作伊勢人面等之祖也。

〔五〇〕爾科手置帆負命彥狹知命。而以天御量。以齋斧而。伐大峽小峽之材而。以齋鉏立齋柱而。令造瑞御殿及御笠矛盾矣。故是手置帆負命。亦名天御食持命。亦名多久豆玉命。彥狹知命者。產巢日神之御子。木國忌部。讚岐國忌部。伊勢國爪工連。丹波國楯縫氏等之祖也。

〔五一〕爾科天櫛明玉命而。令作八尺勾玉五百箇御統之珠。科山雷神而。使採天香山之五百枝眞賢木之八十玉串。科野槌神而。令採五百枝野篶之八十玉串矣。故是天櫛明玉命者。亦云天豐玉命。亦云天明玉命。亦云天羽明玉命。亦云玉祖命。高皇產靈神之女。栲幡千千比賣命之妹。出雲國忌部。忌玉作。玉祖連等之祖也。

〔五二〕如此種種設備而。召天兒屋根命。亦名天思兼命。天布刀玉命而。令卜擬。生捕天香山之眞男鹿而。全拔其肩拔而放之。取天香山之天波波迦。燒其肩骨而卜合則。御宇良合謀矣。此者鹿之御卜之起也。

〔五三〕於是天兒屋根命。以天香山之五百枝眞賢木。根許士爾許士而。於上枝。取著其天明玉命之所作之八坂瓊之曲玉。於中枝。取繫其天香山命之所作之八咫鏡。於下枝。取垂其天日鷲命之所作之由布而。此種種之物者。天太玉命。取持太御幣而。天兒屋根命。太祝詞言禱白而。神祝祝之。

〔五四〕爾集常世長鳴鳥而。互令長鳴。今世鳥名子。長鳴之緣也。以天手力男神。隱立石戸之側。而以天宇受賣命。亦云天於受賣命。爲神樂之長而。探天香山之竹。於其節間彫孔而吹鳴。今世笛類也。木木合合而。當安樂之聲。天加奈止美命。與天香弓六張而。爲諸狙遠賀世。而其子長白羽命。左右之手持茅輿笛而奏之時。金色之鵄居高弭之上矣。是倭琴之起。須賀加伎之緣也。

〔五五〕於是天宇受賣命。以天香山之天日蔭爲鬘。以天香山之天眞拆爲手次繫而。以天香山之小竹葉。結手草而。手持鐸著之矛而。亦云茅纏之矟。於天之石屋戸前。擧庭燎。伏汙氣而。蹈登杼呂許志。爲神懸而云。比登布多美用伊都牟由那那夜許許能多理毛毛智用呂都而。相共歌舞。掛出胸乳。裳緒押垂蕃登矣。故高天原動而。八百萬神共咲矣

〔太御幣〕「太」は稱詞也、「みてぐら」は「御手座」或は「御捧座」(ミタヘクラ)又は「充座」(ミテクラ)の意なりといふ、神に奉る物の總名也。

〔神祝祝之〕「はざく」は祝ぎ言ふ意也、「ほざきほざき」と重ねたるは、文詞を力強く整へる爲の上古の語法也、

〔常世長鳴鳥〕鷄をいふ、「常世」は「常夜」の義也、鷄は夜に鳴きて夜明けを告ぐるが故の名也

〔狙遠賀世〕「ひかげのかつら」「さがりこけ」の類をいふ。

〔汗氣〕紀には槽の字を當てたり、受は盥等の如き物を伏せて足拍子を取る爲に置ける也。

〔俳優〕神憑の態（ワザ）をして、神を招（チ）く義也。

〔尻久米縄〕「しり」は本の意、「くめ」は「籠」（コメ）の義也、即ち藁の本を斷ち去らずになひ籠めたる縄にて、神域を標淨するに用ふ。

〔日之御綱〕尻久米縄をいふ。

〔大殿祭〕神今食、新甞祭若しくは皇居の遷移、齋宮、齋院卜定の後等に屋船久久遲命・屋船豐受姫命、及び大宮賣命を祭り宮殿の災變なきを祈る祭也。

〔御門祭〕櫛磐牖命豐磐牖命を祭りて四方の門を守り、皇居に災變なきを祈る祭也。

是時之俳優者。神樂之起也。

〔五六〕於是天照大御神以爲怪。亦聞看天兒屋根命之。廣厚稱辭祈啓而詔曰。頃者人雖多請。未有若此言之麗美也詔之而。細開天石屋戸而。自內詔者。因吾隱坐而。以爲天原自暗。葦原中國亦皆闇矣。何由天宇受賣者。爲樂。亦八百萬神。諸咲耶詔矣。爾天宇受賣。益汝命而。貴神坐之故。嘘樂遊也白矣。如此言之間。天太玉命。指出其鏡而。示奉之時。天照大御神。逾思奇而。稍自戸出而臨坐之時。其隱立之天手力男神。引開其石戸。取其御手而。奉引出矣。卽中臣神忌部神。以尻久米縄。控度其御後方而。白言從此以內。勿還入坐矣。是時。以鏡。入其石窟則。觸戸而小瑕矣。其瑕於今仍存。此卽伊勢崇祕之大神也。

〔五七〕於是天照大御神。遷坐其新宮。天兒屋根命。天太玉命。廻懸日之御綱而。令大宮能賣命。亦云大宮比賣命。亦名天宇受賣命。亦名宮比神。亦名矢之波波伎神。侍其御前。今世內侍。以善言美詞。和君臣之間。如令悅懌宸襟也。令天石戸別命亦名櫛石窗命。亦名豐石窗命。守衞其殿門而。天太玉命。大殿祭。御門祭供奉矣。故天宇受賣命者。御巫。猨女君等之祖也。次天石門別神。此神者御門之神

也。亦名謂阿居太都命。亦名天背男命。此者犬養縣犬養連。宮部造令木連。巨椋連。大椋置始連等之祖也。

〔五八〕當天照大御神。出坐天石屋戸之時。天原及天下白得照明。而八百萬神。衆倶相見面皆明白矣。備伸手而歌舞。相與稱曰。阿波禮。阿那於茂志呂。阿那多能志。阿那佐夜憩。飫憩矣。此者大嘗會之事本也。

〔五九〕於是八百萬神共議。而於速須佐之男命。科千座置戸之祓。具令拔髪須及手足之爪。而以手爪爲吉棄物。以足爪爲凶棄物。而以唾爲白和幣。以洟爲青和幣。乃使天兒屋根命宣其解除之太諄辭。而賴天小菅揃而。令敝覚。八百萬神等嘖速須佐之男命而。汝所行甚惡也。故勿住天上。亦勿住葦原中國。宜然適底根國云而。乃共神逐逐降矣。世人慎收己爪者。此其緣也。

〔六〇〕故其天兒屋根命者。亦名八意思兼神。亦云天兒屋根命。亦云天津兒屋根命。亦名太詔戸命。亦名櫛眞智命。亦云櫛眞命。亦名大麻等能智命。亦云大麻等能豆神。亦名國之事代主命。津速產靈神。亦云神道魂命。之子武乳速命。是添縣主祖也。亦子天相命。亦名市千魂命。之子興台產靈神。亦云巳巳登魂命。亦名天之事代主命。娶玉主命。亦云天石門別安國玉主命。

〔阿那於茂志呂〕古語拾遺によれば天照大神出給ひて、天下明るくなり、神々の面皆白くなれるによりて賛せる詞なりといふ。

〔阿那多能志〕古語拾遺によれば、手を伸べて舞ふ意なりといふ。

〔佐夜憩〕古語拾遺によれば竹葉の聲なりといふ。

〔飫憩〕古語拾遺によれば飫憩木の葉の聲なりといふ。

〔直會〕神祭の後ちに行ふ解齋の式をいふ、後世は其の饗膳に神饌の下物を以て之に充てたり。「なほらひ」は「なほりあひ」の約にて、直るとは齋をゆるべて平常に復る意也。

〔直〕戸の一種也、名義に就き諸説あれど「直兄」(アタエ)の義なりとする説最も正しきが如し。

〔縣主〕上古の職名也、畿内及び諸國の御料田の事を掌り、子孫之を世襲せり。

〔被逐〕「やらはえ」といふは「やらはれ」の古語也。

〔距之〕「さえ」といふは「塞へ」の轉にて、「塞ふ」は「障る」と同系の語にて、他を妨げ防ぐ意也。

之女。許登能麻遲比賣命而所生之子。中臣連。藤原朝臣。大中臣朝臣。津島直。壹岐直。四國之卜部等之祖也。

〔六一〕故其天太玉命者。産巣日神之御子。天櫛明玉命之兄也。亦名謂天櫛玉命。亦名天神玉命。此神之后神。謂天比理刀咩命。其子謂大宮能賣命。是。太玉命久志備所生之神也。亦子謂天神立命。亦名天押立命。亦名建角身命。亦子謂天櫛耳命。又諸忌部。供作諸氏者。悉太玉命所率之氏氏也。故天太玉命者。忌部首。小山連。日置部。白堤首。葛野鴨縣主。久我直。葛城直。役直。矢田部。纏向神主。穴師神主等之祖也。

〔六二〕於是健速須佐之男命。被逐八百萬神而。降坐之時。霖降之故。結束青草。爲蓑笠而。於衆神宿乞給矣。爾其神等。皆曰汝者躬行惡而。見逐之神也。如何乞宿於我而。同距之。是以。雖甚雨降風吹。不得留休。辛苦而降坐矣。自爾以來。諱著蓑笠入他人屋內。又諱負束草入他人家內而。犯此者。必債解除。此大古之遺法也。

〔六三〕是後速須佐之男命詔曰。我被逐諸神而。今當永去。如何不相見我姊命而。徑去歟云而。廼復上詣天之時。天宇受賣命見之。告日神則。詔曰吾那勢命。上來之故者。

非復好意矣。爾速須佐之男命白天照大御神曰。吾更昇來由者。衆神處我以根國。故今當就去。不相見姉命則不能忍離。故。實以淸心。復上來耳。今奉覲已訖。則隨衆神之意。當永歸根國。請姉命平安坐而照臨天國。且吾以淸心所生兒等。奉於姉命白而復還降焉。

〔六四〕是時天照大御神。於先與須佐之男命誓而生坐之三柱之女神。授須佐之男命而。汝三神。宜降居道中。奉助皇美麻命而。爲皇美麻命所祭也教給矣。今在海北道中。號曰道主貴。此水沼君等之所祭神也。此三柱神。亦謂須勢理毘賣命。

〔六五〕於是健速須佐之男命。帥其子五十猛神。天壁立極迴坐而。降到於新羅國。居曾尸茂梨之處而。乃興言曰。此地吾不欲居詔而。以埴作舟而。乘之東渡。來坐出雲國安來之埃之川上而。吾御心者。安平成焉詔矣。故其地云安來也。

〔六六〕爾神速須佐之男命詔曰。韓鄕之島者。有金銀。於吾兒所御之國。不有浮寶則未佳也詔而。乃拔鬚髯而散之則。卽成杉。又拔胸毛而散之則。是成檜。尻毛者成柀。眉毛者成櫲樟。已而。定其當用而。乃稱之曰。杉及櫲樟。此兩木者。可爲浮寶。檜者可爲瑞宮之材。柀者宇都志伎青人草之。可爲奧津棄戶臥之具詔而。夫須噉八十木種。皆播生

〔新羅〕三韓の中の辰韓の地に起りし國也、而してその國祖、朴赫居世の立ちしは我が崇神天皇の四十一年に當る年なれば、爰にいへるは古朝鮮の汎稱也。「しらぎ」といふは「除羅伐」の音と意を取りて名くともいひ「しらくに」の轉なりともいふ。

〔曾尸茂梨〕神代紀口訣に「荒芒地猶云蕃宍之國」とあり。

〔安來〕島根郡（今は八束郡）にあり。

〔奧津棄戶〕鈴木重胤は「奧津柄之上」の義にて家をいふといへり。

之矣。

〔六七〕爾其子五十猛神。亦云伊太祁曾神。亦名大屋毘古神。初天降之時。多將樹種而下坐矣。雖然不殖韓地。盡持歸而。始自筑紫島而。大八洲之國內。悉播殖而。成青山矣。所以稱五十猛神而。謂有功之神。卽坐木國大神是也。此神之妹大屋津比賣命。亦云大屋毘賣神。次柧津比賣命亦分布木種矣。故此二柱神亦奉渡於木國。卽木國造之齋祠神等也。五十猛神。亦謂韓神曾富理神。此者坐宮內省神也。

〔六八〕爾健速須佐之男命。到坐出雲國簸之川上在鳥上之地時。箸從其河流下矣。於是須佐之男命。於其河上以爲人有而。覓上往者。河上有啼哭聲矣。故尋其聲而往上者。老夫與老女二人在而。中置童女而。撫之泣也。問給汝等者誰耶。則其老夫答白。吾者國神。大山津見神之子也。吾名謂足名椎。妻名手名椎。女名眞髮觸奇稻田比賣也白矣。復問汝之哭由者何歟。則答白我女者。自本在八稚女矣。爾高志之八俣遠呂智之。每年來喫焉。今其可來時之故泣。問給其形者如何歟。則答白。彼目如赤加賀智而。身一有八頭八尾。亦其身。生蘿及檜杉。其長度谿八谷峽八尾而。見其腹則。悉常血

〔坐木國大神〕紀伊國海草郡西山東村、國幣中社伊太祁曾神社に齋き祭る神也。

〔韓神曾富理神〕今大物主神を祭れる園神社と、この神を祭れる韓神社を合祀して園韓神社として宮內省に齋き祭れり、桓武天皇宮城を山城に造り給ふ時に、造宮使等此神を他所に遷さんとせしに、神猶ほ此地に座して天皇を護らんと教へ給ひしが故に之を宮內省に鎭祭せし也。

〔簸之川〕出雲國簸川郡斐伊川也。

〔鳥上〕出雲國仁多郡鳥上村なる船通山に舊跡存せり。

〔高志〕今の北陸道諸國の總稱也。

爛也白矣。爾速須佐之男命。於其老父。是汝之女則。立奉於吾哉詔之。答白雖恐不覺御名則吾。天照大御神之伊呂勢也。故今自天降坐也答之矣。爾足名椎手名椎神。白然坐則恐。隨勅立奉矣。

〔六九〕爾速須佐之男命、以其童女。取成湯津爪櫛而、刺御美豆良而。告其足名椎手名椎神曰、汝等、以衆菓。釀八鹽折之毒酒。且作廻垣。於其垣作八門。每門結八佐受伎。每其佐受伎。各置一口酒槽而。每船。盛其八鹽折酒而。可待。吾爲汝。當殺其遠呂智也敎之矣。

〔七〇〕於是足名椎手名椎神。隨敎言。設備而待之時。其八俣遠呂智。信如言來。爾速須佐之男命。勅遠呂智曰。汝者可畏神也。敢不饗乎詔而。乃以八甕酒。每口沃入之則。其遠呂智。每船。垂入頭而。飲其酒矣、於是飲醉而。留伏寢矣。爾速須佐之男命。拔其御佩之十拳劒而。切散其遠呂智則。簸之川變血而流。其骸者。每段悉化雷。飛躍而昇天矣。故切其中尾之時。御刀之刄少缺矣、爾思怪而。以御刀之鋒刺。割而見之則。別有都牟刈之大刀。故取此大刀而。思異物而。安置御許而齋之矣。天叢雲劒是也。蓋其遠呂智之居所之上。常有雲氣故名歟。故斷給遠呂智劒之號謂大蛇之麁玉。亦云天羽羽斬之劒。亦云

〔伊呂勢〕「いろ」は親愛の意、「せ」は「兄」にて、兄弟他人を問はず、女に對して男を稱する語也。

〔八鹽折之毒酒〕「鹽」は借字にて、「入」または「重」の意也、幾度も幾度も繰り返して精釀せる毒酒をいふ。

〔佐受伎〕假に構へたる床也、後世之を轉訛して棧敷（サジキ）といふ。

〔都牟刈之大刀〕尾羽張の反對の形にて窄りたる形の大刀なりとの說あり、玉籤集裏書に、草薙劒長二尺七八寸刄先は菖蒲の葉形にして、中程はむくりと厚みありと記されたり。

天蠅斫之劍。亦云大蛇韓鋤之劍。 此劍者今在石上也。

〔七一〕故是以。其速須佐之男命。宮可造之地。求給出雲國而。到坐須賀地而詔之。吾來此地而。我御心須賀須賀斯也詔而。於其地作宮而坐矣。故其地者。於今云須賀也。玆大神。初作須賀宮之時。自其地雲立騰矣。爾歌曰。夜久毛多都。伊豆毛夜幣賀伎。都麻碁微爾。夜幣賀伎都久流。曾能夜幣賀伎袁。亦造御室而所宿之處。云御室山。爾喚其足名椎手名椎神而。勅汝等任我兒宮之首而。於一柱神賜稻田宮主神云號矣。亦云稻田宮主須賀之八耳神。亦云稻田宮主簀狹之八耳神。故以其櫛名田比賣。亦云稻田比賣命。於久美度起而。令産之神名。八島士奴美神。其奇稻田美等與麻奴良比賣命。將産之時。求將産之處而。來坐熊谷郷而。甚久麻久麻志枳谷在詔之。故其地云熊谷也。

〔七二〕玆速須佐之男大神之御子。都留支日子命。此神之。此處耶。吾敷坐山口處也詔之地。於今云山口。亦子國忍別命。此神之吾敷坐地者。國形宜也詔之處云方結。亦子磐坂日子命。此神之國巡坐之時。到坐惠曇郷而。此處者國稚美好。國形如畫鞆哉。吾宮者。將造此處云矣。故云惠曇。亦子衝杵等乎留比古命。此神之國巡坐之時。到坐

〔石上〕大和國山邊郡丹波市町なる石上神宮也、崇神天皇の時、始めて此處に宮を建て齋き祀れり。

〔夜久毛多都云々〕「やくも」は「八重雲」の意、「いづも」は出づる雲の約言也、「つまごみに」は「夫妻隱る爲に」の意也、上古は夫妻相呼びて互に「つま」といへり。「やへがき」は雲の立ち重なるを宮殿の垣と見立てたる也、「を」は感動詞也、卽ち宮殿を造る時立ち騰れる雲を吉兆として賞美し給へる也。

〔首〕大人の義にて爰は須賀宮の事務を掌る職名に似たり。

多太鄕而。吾御心者。明正眞成焉。吾將靜坐此處。云而靜坐矣。故云多太。亦子青幡佐草日古命。此神。於高麻山上。時初麻矣。故云高麻山。於此山上。其御魂坐也。又此神之坐處云大草也。

〔七三〕茲健速須佐之男大神。以佐世木葉。爲頭刺而。踊躍之時。所刺之佐世木葉之墮之地。云佐世。亦至坐須佐鄕而。此國者。雖小國國處也。故吾名者。不著木石。詔而。卽鎭置己命之御魂而。定給大須佐田小須佐田矣。故云須佐。卽有正倉。亦詔朝御饌勸養。夕御饌勸養五贄緒之處。而定給之處。云朝酌鄕也。

〔七四〕此大神。又娶大山津見神之女。名神大市比賣命。而令生之子大年神。亦云大歳御祖命。

故此大年神之子御年神。亦子奥津日子神。次奥津比賣命。亦名大戸比賣神。此二柱神。謂庭津日神。亦云庭高津日神。此者諸人之持伊都久竈神也。亦子阿須波神。次波比岐神。此者座摩之御巫之持伊都久神也。亦子香山戶神。次羽山戶神。亦子大山咋神。亦名山末之大主神。此神者坐近淡海國日枝山。亦坐葛野之松尾神也。亦子大土神。亦云大土之御祖神。此

〔大年神〕「年」は穀物、特に稻をいふ、卽ち此の神は年穀を司る神也。

〔阿須波神〕土地、特に邸地を守る神也。

〔波比岐神〕人家の庭より家に入る入口を守る神也。

〔座摩〕「ゐがすり」といふは「井之後」(イガシリ)の轉にて、井の神をいひ、轉じてもと此神の鎭座ませし攝津國西生郡の地名となれり

〔御巫〕「神の子」の義、神に仕へて齋き守る人をいふ、職員令集解に「巫者、知鬼神之道者也、在男曰巫、在女曰覡云々」とあり。

神者度會之地主神也。亦子稻依比女命。亦子千依比賣命。亦子佐佐津比古命。此三柱神亦坐度會縣神等也。

〔七五〕故其羽山戸神之子。若山咋神。次若年神。次妹若沙那賣神。次彌豆麻岐神。次夏之賣神。亦名夏高津日神。次秋毘賣神。次久久年神。次久久紀若室葛根神。

〔七六〕故其大年神之兄。八島士奴美神。亦名淸之繫名坂輕彦八島手神。亦云淸之湯山主三名狹漏彦八島篠神。亦云淸之湯山主三名狹漏彦八島野神。亦名謂八束水臣津野命。亦云淤美豆奴神。此神稱國引坐神由者。八雲立出雲國者。狹布之堆國在哉。初國小所作。故將作縫詔而。栲衾志良紀之三埼。國之餘有耶見者。國之餘有詔而。童女胸鉏所取而。大魚之支太衝別而。波多須須支穗振別而。三身之綱打挂而。霜黑葛闇々耶々邇。河船之毛々曾々呂々邇。國々來々引來縫國者。自去豆打絶而。八穗米支豆支之御埼也。此而堅立之加志者。石見國與出雲國之堺在。名佐比賣山是也。亦持引綱者。薗之長濱是也。亦北門佐伎之國。國之餘有耶見者。國之餘有詔而。童女胸鉏所取而。大魚之支太衝別而。波多須須支穗振別而。三身之綱打挂而。霜黑葛闇々耶々邇。河船之毛々曾々呂々邇。

〔地主神〕其の土地を主領する神也、度會は伊勢國度會郡の地にて五十鈴川の流域也、神名祕書によれば、「興玉神、五十鈴河上地主也云々、衢神猿田彦大神是也」とあり。

〔國引〕この事出雲風土記、意宇郡の名義の由來の條に見ゆ、以下の本文は之を引ける也。

〔初國云々〕諾册二尊國生みの時に小さく作られたりとの意也。

〔栲衾〕「白」といふ語の枕言葉也、栲は木綿(ユフ)の類にて其布白きを以て也。

〔去豆〕今簸川郡の小津といふ。

〔支豆支之御埼〕今日の御碕といふ。

〔狹田之國〕後の秋鹿郡(今は八束郡)の地也。
〔童女胸鉏〕處女の胸の如く廣く平らなる鋤也。
〔大魚云々〕大魚の腮を衝くが如くにその地の一角を衝き別けてと也。
〔霜黑葛〕「來る」といふ爲の序詞也。
〔闇見國〕八束郡本庄村の舊名といふ。
〔都都之三崎〕丹後國橋立の地にありしといふ。
〔三穗之埼〕今の地藏崎也。
〔夜見島〕伯耆國弓濱也。
〔大神岳〕今の大山也。

國々來々引來縫國者。自多久打絶而。狹田之國是也。亦北門良波之國。國之餘。餘有耶見者。國之餘有詔而。童女胸鉏所取而。大魚之支太衝別而。波多須須支穗振別而。三身之綱打挂而。霜黑葛。闇々耶々邇。河船之毛々曾々呂々爾。國々來々引來縫國者。自手波打絶而。闇見國是也。亦高志之都都之三埼。國之餘。餘有耶見者。國之餘有詔而。童女胸鉏所取而。大魚之支太衝別而。波多須須支穗振別而。三身之綱打挂而。霜黑葛。闇々耶々邇。河船之毛々曾々呂々邇。國々來々引來縫國者。三穗之埼也。持引綱者。夜見島是也。堅立之加志者。伯耆國在。大神岳是也。今者國引訖詔而。於意宇杜。御杖衝立而。詔意惠矣。故其地云意宇。亦此神。詔八雲立之語之故。云八雲立出雲也。

〔七七〕故是八束水意美豆努神之子。天之冬衣神。亦云天葺根神。亦子赤衾伊努大住日子佐別命。此神之社。在伊努鄕中。亦其后天甕津日女命國巡行坐之時。詔伊努哉之地。云伊努也。

〔七八〕故其天之冬衣神。娶刺國大之神之女。名刺國若比賣而。令生之子大國主神。亦名國作大己貴神。亦云大名牟遲神。亦名宇都志國玉神。亦名葦原醜男神。亦名八千矛神。

〔稻羽〕因幡國八頭郡曳田村附近の地也。

〔婚〕「よばふ」は呼ぶの延言にて、結婚する意の古語也

〔帒〕旅行具を入れし袋也。

〔氣多之前〕因幡國氣高郡杖衝坂の附近也。

〔淤岐島〕氣高郡内海の沖の小島也。

〔和邇〕今の鮫の類なりといふ。

〔讀〕數ふる意の古語也。

亦名大地主神。亦名大名持神。幷有七名。亦荒魂之號謂大國御魂神。亦云大國玉神。

〔七九〕於是健速須佐之男命詔曰。此天叢雲劒者。神劒也。吾何敢私以安乎詔而。遣孫子天背根神而。上奉於天照大御神。于時天照大御神詔曰。是我劒也。吾屏岩屋之時。所落近淡海之伊布貴山劒也詔矣。然後健速須佐之男命居熊成峯而。遂入於根國矣。故亦名謂月夜見命。亦謂八束髮速佐須良命。

〔八〇〕故其大國主神之庶兄弟。八十神坐矣。雖然皆國者。奉避於大國主神矣。奉避由者。其八十神各。欲婚稻羽之八上比賣之心有而。共行稻羽之時。於大名牟遲神令負帒。爲從者而率往矣。於是到氣多之前時。裸之菟伏也。爾八十神謂其菟云。汝將爲者浴此海鹽。當風吹而。可伏高山之尾上云。故其菟。從八十神之教而伏矣。爾隨其鹽之乾而。其身皮悉風見吹拆之故。痛苦而泣伏則。最後來之大名牟遲神。見其菟而。問言何由汝泣伏耶。菟答白。吾在淤岐島而。雖欲度此地。無將度因之故。欺海之和邇而言之。吾與汝。欲競計族之多少。故汝者。其族之在悉率來。自此島至氣多之前。皆可列伏度。吾蹈其上而。走乍將讀度。於是與吾族將知孰多事。如此言則。見欺而列伏之時。吾蹈其上而讀度來。今將下地之時。吾云汝爲我見欺焉竟則。卽伏最端和邇。捕我而。

悉剝我衣服矣。因此而泣患則、先立行之八十神之命以而、浴海鹽、當風而伏焉、誨告矣。故如敎爲則、我身悉見傷焉白矣。於是大名牟遲神、敎其菟曰、今急往此水門、而以水洗汝身、而即取其水門之蒲黃、敷散而、輾轉其上則、汝身如本膚必可差者也、敎矣。故如敎爲則、其身如本也。故其菟白大名牟遲神云、此八十神者、必不得八上比賣、雖負帒、汝命獲之白矣。此稻羽之素菟者也。於今謂菟神也。

〔八一〕於是八上比賣、答八十神云、吾不聞汝等之言、將嫁大名牟遲神云。故爾八十神怒而、將殺大名牟遲神共議而、至伯耆國之手間山本而云者、此山赤猪在也。故和禮共追下則、汝待取。若不待取則、必將殺汝云而、似猪大石以火燒而、轉落追下矣。爾追下取時、於其石所燒著而死矣。爾其御祖命哭患而、參上天而、請神產巢日命之時、乃遣蚶貝比賣與蛤貝比賣而、令作活之。爾蚶貝比賣伎佐宜集而、蛤貝比賣持水而、塗母乳汁則、成麗壯夫而、出遊行矣。

〔八二〕於是八十神見之、且欺而、率入山而、切伏大樹、茹矢而打立其木、令入其中而、即打離其冰目矢而、拷殺矣。爾亦其御祖命哭乍求則見得、即拆其木而、取出活而、告其子言、汝有此間則、遂爲八十神所滅焉云而、乃於木國之大屋毘古神之御許違遣

〔伏〕「ふせれ」は「伏せ」の延言也。

〔蒲黃〕蒲は水中に生ずる草の名にて、其莚などに作る、其の穗は蠟燭の形に似て、長さ七八寸に及べり、其の中に黃粉を含む、之を蒲黃といひて、今も藥となす。

〔稻葉之素菟〕因幡國氣高郡末恒村大字內海に白菟神社あり、菟の宮とも大菟宮ともいふ、これ此の菟を祀れる也。

〔手間山本〕伯耆國西伯郡（舊の會見郡）天津村に手間山あり

〔冰目矢〕冰目は割れ目の事にて、冰目矢はその割れ目にはめたる楔をいふ、一說に「祕矢」の義ともいふ。

之。爾八十神覓追臻而。矢刺之時。自木俣漏逃而去矣。

〔八三〕爾大屋毘古神議曰。可參向須佐之男命之所坐之根堅洲國。必其大神將議焉詔矣。故隨御命而。參到須佐之男命之御所則。其御女須勢理毘賣命出見而。爲目合。相婚坐而。還入。告其御父。甚麗神參來坐焉白矣。爾其大神出見而。此者葦原醜男云神也告而。卽喚入而。令寢其蛇室屋矣。於是其妻須勢理毘賣命。以蛇比禮授其夫而告云。其蛇將咋則。以此比禮三擧而可打撥告之。故如教爲之則。蛇自靜之故。平寢而出矣。亦來日夜者。入吳公與蜂室屋然。且授吳公蜂之比禮而。如先教之故。平而出矣。

〔八四〕於是其大神。以鳴鏑射入大野之中而。令採其矢矣。故入其野時。卽以火燒廻其野焉。爾不知所出之間。鼠來云之。內者富々良々。外者須々夫々。如此言故。蹈其處則。落入隱之間。火者燒過焉。爾其鼠咋持其鳴鏑出來而奉之。其矢羽者。其鼠子等皆喫矣。

〔八五〕於是其御妻須勢理毘賣命者。持喪具而哭來。其父大神者。思已死訖而。出立其野則。爾持其矢而奉之時。率入家而。喚入八田間之大室屋而。令取其御頭之虱矣。

〔蛇比禮〕「へみ」は「へび」の古語也、比禮は害を避くる咒咀の品也。

〔吳公〕蜈蚣の略字也。

〔鳴鏑〕單に「かぶら矢」ともいふ、鏃の一種也、木にて圓く長く脹めて作り、中を空にして三孔を穿ち、雁股を添へて用ふ、射れば空氣を通じて響あり、其形、蕪（カブラ）に似たるが故にかく名づく

〔富々良々云々〕「ほら」は洞也、「すぶ」は窄き意にて野中に穴あるが、その外は窄けれども內は廣々として火を避け得る由を知らする詞也。

〔生大刀生弓矢〕「生」はその物を賞美する爲に冠する美稱也。

〔天沼琴〕「天」は稱詞にて「沼」は瓊の意也、卽ち珠玉をもて飾れる琴也。

〔椽〕「たりき」は「垂木」の意にて、棟より軒前へ長く垂れたる木也、今は「たろき」といふ。

〔御尾〕「御」は接頭語にして、「尾」は丘の意也。

〔意禮〕「己」（オレ）の意にて、他人を賤め罵る稱なれども、爰は慈愛の情を含めていへり。

〔嫡妻〕「むかひめ」といふは正しく夫に對配（ムカ）ふ意也卽ち本妻をいふ。

故見其御頭則。呉公多在。爾其妻取牟久木實與赤土。授其夫故。咋破其木實含赤土而唾出之則。其大神以爲咋破呉公唾出而。於御心愛思而。御寢坐矣。

〔八六〕於是握其大神之御髮而。其室屋之每椽結著而。以五百引石。取塞其室戶而。負其御妻須勢理毘賣而。取持其大神之生大刀生弓矢。及其天沼琴而。逃出之時。其天沼琴拂樹而。地動響矣。故其御寢之大神。聞驚而。引倒其室屋矣。雖然。解結椽之御髮之間。遠逃矣。故爾迄豫母都平坂。追到而遙望而。呼大名牟遲神而謂曰。其汝之所持之。以生大刀生弓矢而。汝之庶兄弟者。追伏坂之御尾。追撥河之瀨而。意禮爲大國主神。亦爲宇都志國玉神而。以其我女須勢理毘賣。爲嫡妻而。於宇迦能山之山本。於底津石根宮柱太知。於高天原氷木高知而居。是奴耶詔矣。大名牟遲神還坐而後。適坐其若須勢理毘賣命之時。於其社之前有石。其上甚滑也。卽云滑磐哉矣。故其地云滑狹也。

〔八七〕於是大國主神。爲伐八十神而造城矣。城名樋山之地是也。故八十神者。不置靑垣山裡詔而。持其生大刀生弓矢而。追避之時。每坂之御尾追伏。每河之瀨追撥而。國作始矣。其追廢之時。追及坐之處云來次。亦此大神之。射操立而射之處者。卽矢代

郷是也。亦令莞笑之處云矢内郷也。

〔八八〕故其八上比賣者。如先期。美斗阿多波志爲。爾其八上比賣者。雖率來坐畏其御嫡妻須勢理毘賣而。其所生子者。刺狹木俣而返矣。故其子之名云木俣神。亦名謂御井神。此者座摩之御巫之伊都伎奉神也。

〔八九〕故是大國主神。平國之時。到坐出雲國伊佐佐之小汀而。爲御食之時。海上有人聲。故。驚而求之。都不見物。頃時而。甚小神。自波穗。乘天之蘿摩船而。以佐々伎羽爲衣服。隨海水而漸浮到焉。大國主神。即取而。置掌中翫之則。跳而齧其頰矣。故以爲怪物也。雖問其名。不答。且雖問所從之諸神。皆白不知矣。爾谷具久白云。此者久延毘古必將知焉白。則。即召久延毘古而。問之時。此者產巣日神之御子。少毘古那神也白矣。

〔九〇〕故爾遣使而。白上於神產巣日御祖命。則詔曰。此者實我子也。吾所生子。凡有千五百座。其中最惡而。不順教養。自吾手俣漏墮之子也。愛養而與汝葦原醜男命。爲兄弟而。宜作堅其國詔矣。故少毘古那神。亦謂手間天神。亦謂小名牟遲神。亦云少御神。乃產巣日神之長子也。故顯白此神所謂久延毘古者。於今云山田之曾富騰者也。此神者足雖不行。盡知天下之事神也。

〔羅摩〕俗に「ががいも」といふ蔓草の名也、其の莢は舟の形したり、中に白き絮あり、俗にばんやといふ、この莢を船に代用したる也。

〔佐々伎〕溝鷦鷯（ミソサザイ）といふ鳥の古名也、巣を深山の崖の樹枝に懸けて營む。

〔谷具久〕蟾蜍（ヒキガヘル）の古語也、谷間の狹き穴をも自由自在に漏れ出入する故「谷漏」（タニクグ）の意なるべし。

〔山田之曾富騰〕案山子（カヽシ）也、濡るる事を「そほづ」といへば、「そほど」は雨に濡れて立つ意より起れる名なるべし。

〔九一〕故自爾大名牟遲與小名牟遲二柱神。相並而一心戮力。國巡作堅之時。伊邪那岐神之麻奈子坐熊野加武呂命。亦云熊野加夫呂岐櫛御氣野命。五百津鉏鉏所取々而。於二柱神事依賜矣。於是殖生葦蘆萱而。如水月浮漂之國地。固造矣。因曰葦原國。爾時稻種之墮處。於今云多禰也。

〔九二〕爾大名牟遲神。遠延而伏之時。少毘古那神。欲活之而。以大分速見湯。自下樋持度來而。漬浴則有蹔間而。活起居然。詠曰眞蹔寢哉。而踐健之跡處。於今存湯中之石上。伊豫國之溫泉是也。仍憫人草之病。二柱神相議而。始製藥湯泉術矣。伊豆國神湯亦其數而。箱根之元湯是也。

〔九三〕爾復二柱神。爲宇都志伎青人草及畜產。則定其療病方。又爲攘鳥獸昆蟲之災異。則定給其禁厭法矣。是以百姓至于今。咸蒙其恩賴。而皆有効驗。復此少毘古那神者。作始酒之神也。故亦謂久斯神。

〔九四〕爾大國主神。謂少毘古那神曰。吾等所造之國。豈謂善成之乎。詔則少毘古那神。答曰或有所成處。或有不成處焉。其後少日子命者。到坐伯耆國粟島。蒔粟而莠實之時。載其莖。見彈而。渡坐常世國矣。故其地云粟島。此二柱神坐之。所謂志都岩屋者。

〔遠延〕「なゆ」の活用也、衰へ弱るをいふ。

〔大分速見湯云〻〕速見湯は今の別府溫泉也、釋日本紀に引ける伊豫風土記に「湯郡、大穴持命見悔恥、而宿奈毗古那命欲活、而大分速見湯自下樋持度來。以宿奈毗古奈命而浴漬者。蹔間有活起居、然詠曰、眞蹔寢哉、踐健跡處、今在湯中石上也」とあり。

〔恩賴〕「みたまのふゆ」の「みたま」は「御靈」の義、「ふゆ」は「殖」又は「榮」〔ハユ〕の義といふ、神又は天子の御恩澤也。

〔久斯〕酒の古語也

在石見國也。

〔九五〕於是大國主神愁而詔曰。吾獨而何能得作此國。孰神與吾能相作此國耶詔之。是時。忽然神光照海原。爲素裝束現浪末而。持天櫛矛而有依來神。其神詔曰。能治吾前則。吾共與相作成焉。若不然則。國難成焉詔矣。爾大國主神問曰。然則汝者誰耶。答曰。吾者汝之幸魂奇魂也。大國主神白曰。唯然。廼知。汝者吾幸魂奇魂也矣。今欲往何處耶白之則。答言吾者。伊都伎奉倭之青垣東山上矣。故於彼處營御室而。令鎭坐矣。故云御室山。此者大三輪之大物主神也。大國主神之和魂也。亦此神之荒魂神者。坐狹井社也。

〔九六〕於是大國主神與其和魂神戮力。以廣矛爲御杖而。撥平國中之邪鬼而。國作給矣。因亦名謂八千矛神。其國巡之時。到坐出雲國手染鄕而。此國者。丁寧所造國也詔而。號丁寧矣。今人訛謂手染。卽有正倉。亦此大神。天御飯田之御倉將造之處。覓巡行矣。爾時。暴雨久多美能山也詔之處云玖潭。亦此國者。非大非小。川上者木穗判加布。川下者河志婆這度之。是者爾多志根小國詔之處云仁多。亦見行三處鄕而。此地之田好。故吾御地之田也詔矣。故云三處也。

〔幸魂奇魂〕古事記傳に「幸魂奇魂は共に和魂の名にて幸奇(サキ)とは、その德用をいふなり二魂には非ず」とあり、神代口決は「幸魂、奇魂者一魂兩化之名、幸魂者、念而先臨而就、奇魂者不レ念而成、是卽天命一身之重也」と見ゆ。

〔御室山〕大和國磯城郡三輪町の東方にあり、三輪山ともいふ。

〔大三輪之大物主神〕御室山なる大神神社に祀れり、崇神天皇の時神託により大田田根子をして之を祭らしむ。

〔九七〕爾大地主神。營田之時。田人令食牛宍矣。于時。御年神之御子。至其田而。唾饗還坐而。於父告其狀之時。御年神怒坐而。於其營田。放給蝗矣。於是苗葉忽然枯損而。似篠竹矣。故大地主神。令片巫志止鳥肱巫。今俗竈輪及米占也。占求之則。此者御年神之祟也。故獻白豬白馬白鷄而。宜解其怒白矣。故依其教而。奉謝御年神之時。御年神答曰。實吾意也。故以麻柄作桛而桛之。乃以其葉掃之。以天押草押之。以烏扇扇之。仍不去則。於溝口置牛宍。作男莖形而加之。以薏子山椒吳桃葉及鹽。宜班置其畔也。言教給矣。於是大地主神。從其教而。行之時。苗葉復茂而。年穀豐稔矣。此今以白豬白馬白雞祭御年神緣也。

〔九八〕爾八千矛神。將婚高志國之。意支都久辰爲命之子。俾都久辰爲命之子。沼河比賣。亦云沼名宜波比賣命。幸行之時。到其沼河比賣之家而。歌曰。夜知富許能。迦微能美許登波。夜斯麻久爾。都麻麻岐迦泥弖。登富登富斯。故志能久邇邇。佐加志賣遠。阿理登伎加志弖。久波志賣遠。阿理登伎許志弖。佐用婆比爾。阿理多多斯。用婆比邇。阿理加用波勢。多知賀遠母。伊麻陀登加受弖。淤須比遠母。伊麻陀登加泥婆。遠登賣能。那須夜

〔御年神〕大年神の子にして、もと同じく年穀を司る神也、古事記傳によれば「とし」は「田寄」の義にて、穀物の類をいふといへり。

〔竈輪〕大晦日の除夜に竈を洗ひて、翌年の吉凶をトする類の占法也。

〔鷄〕「かけ」は鳴聲を以て名とせる由也。

〔佐加志賣〕賢女也

〔久被志賣〕妙にして美しき女也。

〔佐用婆比〕「さ」は發語也、「よばひ」は「呼ぶ」の延言にして、男女相呼びて婚するをいふ。

〔淤須比〕頭より覆ひ掛けて着る一種の外套也。

伊多斗遠。淤曾夫良比。和何多多勢禮婆。比許豆良比。和何多多勢禮婆。阿遠夜麻邇。奴延波那伎。佐怒都登理。伎藝斯波登與牟。爾波都登理。迦祁波那久。宇禮多久母。那久那留登理加。許能登理母。宇知夜米許世泥。伊斯多布夜。阿麻波勢豆加比。許登能加多理其登母。許遠婆。爾其沼河日賣。未開戶而。自內歌曰。夜知富許能。迦微能美許等。怒延久佐能。賣邇志阿禮婆。和何許許呂。宇良須能登理叙。伊麻許曾波。知杼理邇阿良米。能知波。那杼理邇阿良牟遠。伊能知波。那志勢多麻比曾。阿遠夜麻邇。比賀迦久良婆。奴婆多麻能。用波伊傳那牟。阿佐比能。惠美佐迦延伎弖。多久豆怒能。斯路伎多陀牟伎。阿和由伎能。和加夜流牟泥遠。曾陀多伎。多多伎麻那賀理。麻多麻傳。多麻傳佐斯麻伎。毛毛那賀爾。伊波那佐牟遠。阿夜爾。那古斐伎許志。夜知富許能。迦微能美許登。許登能迦多理碁登母。許遠婆。故其夜者不合而。明日夜爲御合矣。

〔九九〕 爾大國主神之嫡后須勢理毘賣命。甚爲嫉妬矣。故其日子遲神。和備而。自出雲。將上坐倭國而。束裝立時。片御手繫御馬之鞍。片御足蹈入其御鐙而歌曰。奴婆多麻能。久路伎美祁斯遠。麻都夫佐爾。登理與曾比。淤伎都登理。牟那美流登伎。波多多藝母。許禮波布佐波受。幣都那美。曾邇奴岐宇弖。蘇邇杼理能。阿遠伎美祁斯遠。麻都

〔淤曾夫良比〕「押し振り」の延語也。戸を開けさせじと押し振る也。

〔佐怒都登理〕「さ野つ鳥」の義にて、雉の枕詞也。

〔宇禮多久母〕慨はしくもの意也。

〔許能登理母云々〕人の心も知らずに鳴騷ぎて夜明けを告ぐるこれ等の鳥を打惱めたきものよと也。

〔怒延久佐能〕女(メ)の枕言葉也、「ぬえぐさ」は「なよなよ」したる軟き草也。

〔宇良須能登理叙〕浦渚の千鳥の如く心騷ぎて落着かざるをいふ。

〔那杼理〕和鳥に汝鳥の意を含めたり

〔蘇邇杼理能〕青の枕言葉也。

〔淤伎都登理云々〕沖の鳥が頸を傾け胸を見る時に羽を廣げて上下する樣に、我も袖を廣げ兩手を擧げて打ち振りつゝ、衣服を着用せる工合を見れば、この着物も我と似合しからずと也。

〔夜麻賀多爾云々〕「やまがた」は「山縣」にして山地也、「あたね」は茜にして染料にする蔓草也。茜の根を舂き搾りし液を染木が汁といふ。

〔宇那加夫斯〕頸を傾くるをいふ。

〔阿夜加伎〕文（アヤ）を施せる絁にて作り室内の隔とする帷帳（トバリ）也。

夫佐邇登理、與曾比淤伎都登理、牟那美流登伎、波多多藝母許母布佐波受。幣都那美、曾邇奴棄宇弖。夜麻賀多爾、麻岐斯、阿多泥都伎。曾米紀賀斯流邇、斯米許呂母遠。麻都夫佐邇登理、與曾比淤伎都登理、牟那美流登伎。波多多藝母許斯與呂志、伊刀古夜能伊毛能美許等、牟良登理能、和賀牟禮伊那婆、比氣登理能、和賀比氣伊那婆、那迦士登波、那波伊布登母、夜麻登能、比登母登須須伎。宇那加夫斯、那賀那加佐麻久、阿佐阿米能、佐疑理邇、多多牟叙、和加久佐能、都麻能美許登、許登能加多理基登母、許遠婆。爾其后、取二大御酒坏一而、立依指擧而、歌曰、夜知富許能、加微能美許登夜。阿賀淤富久邇奴斯、許曾波遠邇伊麻世婆、宇知微流、斯麻能佐伎邪伎。加伎微流、伊蘇能佐伎淤知受、和加久佐能、都麻母多勢良米。阿波母與、賣邇斯阿禮婆、那遠伎弖、遠波那志、那遠伎弖、都麻波那斯、阿夜加伎能、布波夜賀斯多爾、牟斯夫須麻、爾古夜賀斯多爾、多久夫須麻、佐夜具賀斯多爾、阿和由伎能、和加夜流牟泥遠、多久豆怒能。斯路伎多陀牟伎、曾陀多伎、多多伎麻那賀理。麻多麻傳、多麻傳佐斯麻伎、毛毛那賀邇、伊遠斯那世、登與美伎。多弖麻都良世。夜知富許能。加微能美許登。許登能。迦多理基登母。許遠婆。如此歌而。即爲二宇伎由比一而。宇那賀氣理而。至レ今鎭坐也。此謂二神語歌一也。

〔胸形奧津宮〕筑前國宗像郡沖島（今は恩賀島といふ）にあり、恩賀島は海岸を去る凡そ十五里玄海灘の中にあり。

〔宇良加志〕樂しましむる意の古語也

〔神吉事〕所謂「出雲國造神賀詞」也、卽ち出雲國造新任後、國に居りて潔齋する事一年にして、諸祝部、國司等と共に、朝廷に參上し、種々なる方物を奉り、且つ天皇の大御代を祝して奏上する壽詞をいふ。

〔神名樋山〕大和國磯城郡三輪町の東方の三輪山をいふ

〔一〇〇〕故此大國主神。娶胸形奧津宮坐神。多紀理毘賣命而。令生給之子。味鉏高日子根神。亦名一言主神。次妹高比賣命。亦名下照比賣命。亦名謂大倉比賣命。亦名謂阿陀加夜努志多伎吉比賣命。此神之坐處。於今云多伎也。

〔一〇一〕故其味鉏高日子根命。迄御鬚八握生。御辭不通。晝夜甚哭坐矣。仍造高屋而令坐之。建高椅而。登降養奉之。其處云高岸。亦御祖命。御子乘船而。率巡八十島而。雖宇良加志給。尚不止哭坐矣。於是大神。告御子之哭由而。夢願坐則。夜夢見御子辭通矣。寤而問之時。白御津矣。何處然云問之則。卽立去御祖命之御前。出坐而。石川度。至留坂上而。此處也白給矣。爾時。汲出其津之水而。御身沐浴矣。故其處云三津。卽有正倉。故國造。奏神吉事。參向朝庭時。汲出其水而用之。依此。今姙婦者。不食彼之村稻。若食則。所生之子不言也。

〔一〇二〕故是味鉏高日子根命之后。天御梶日女命。產給多伎都比古命之時。來坐多吉村而。敎曰。汝命御祖之向位也。欲生此處宜也。詔矣。神名樋山之西。有高一丈周一丈許之石神。亦側有百箇許之小石神。其所謂石神者。卽多伎都比古命之御魂也。

〔邊津宮〕筑前國神湊の東海濱にありしが、建長年中、宗像郡田島に移し奉れり、之を第一の宮といふ。

〔高津比賣〕古事記にある、田寸津比賣命と同神にして速須佐之男命の御子也。

〔積羽八重言代主神〕古事記には事代主神又は八重事代主神とあり、姓氏錄には本書の如く見ゆ、名義は、「命」(ミコト)を知る神の義也、卽ち後ち、父大國主命に勸めて國土を天孫に奉りしが如く、臣子たるの命をよく知りたるが故也と。

旱乞雨時。必令零也。亦子鹽冶毘古命之坐處。云止屋。此神之子。謂燒大刀火守大穗日子命。

〔一〇三〕　大國主神。亦娶邊津宮坐神。高津比賣命。亦名神屋楯比賣命而。令生給之子。積羽八重言代主神。次妹高照比賣命。亦將御合須佐之男命之御女。八野若比賣命而。令造屋之地。云八野。亦娶高志之沼河比賣命而。令生給之子。謂御穗須須美命。亦名健御名方神。此神之所坐之地。云美保。亦子山代日子命之坐處。云山代。即有正倉。亦子若布都主命之御狩爲坐之時。於大野鄕西山谷立狩人而。追之猪至北山之河內谷而。其猪之跡失焉。爾時。自然哉。猪之跡失焉詔之故。其處云內野矣。今云大野者訛也。亦此神。天御領田之長供奉坐而。鎭坐之鄕。云美談。即有正倉。此大國主神之御子。凡有百八十一神矣。以十五柱。爲珍子。而天下四方國人等。令成蒙恩賴矣。

〔一〇四〕　大國主神。談坐綾門日女命之時。女神不肯。逃隱之時。大神伺求之處。於今云宇賀。亦娶朝山坐。眞玉著玉之邑日女命而。每朝通坐矣。故云朝山。此二柱神者。並神産巢日御祖命之御子也。亦子八尋鉾長依日子命。此神之詔吾御心平明不憤之

〔正倉〕また「神庫」「寶倉」とも書す、「秀庫」(ホクラ)の義也その構造高ければかく名づく、神寶を收め置く庫をいふ、垂仁紀に「神庫雖レ高、我能爲ニ神庫ー造レ梯、神庫此云ニ保玖羅ー」とあり。

〔神主〕東雅には神事を主るの義なりといひ、祝詞考にはその神に親しく仕奉る人也といひ神道名目類聚抄に一社の上首也、勅許の職也といへり爰は神に奉仕する部曲の職名なるを「尸」(カバネ)の如く用ひたり。

〔猨田毘古大神〕古事記傳によれば、「尻明光彦」(シリアカルテルヒコ)の義なりといふ

地云生馬。亦子薦枕志都沼値命。亦名天津枳値可美高日子命。此神之坐鄉云漆沼。即有正倉。亦子支佐貝比賣命。亦子宇武賀比比賣命。此神化法吉鳥而。飛度鎮坐之處云法吉。亦子天活玉命。亦云伊久魂命。此者猪使連。恩智神主等之祖也亦子天三降命。此者豐國宇佐國造之祖也。

〔一〇五〕故其支佐貝比賣命。爲將生佐太大神。亦云猨田毘古大神。亦名大土之御祖神。時。弓箭失坐矣。爾時。御祖支佐貝比賣命。吾御子。麻須羅神之子坐則。所亡之弓箭出來願給矣。爾時角弓箭。隨水流出來。爾時。生坐之御子詔曰。此者非弓箭也詔而擲廢之。又金弓箭流出來。即待取之坐而。闇岩屋哉詔而。射通之時。光加加明也。故其處云加加。加賀鄉加賀神埼是也。佐太大神之坐所也。即御祖支佐貝比賣命之社坐此處。今人行此窟屋邊之時。必聲磅礚而行。若密行則。神現而飄風起。行船者必覆也。

古史成文二之巻終

古史成文　三之巻

神代下

〔一〇六〕天照大御神之命以而。豐葦原。千秋長五百秋之水穗國者。我御子正哉吾勝勝速日天忍穗耳命之可知國也。言依賜而。天降給矣。於是天忍穗耳命。於天浮橋多多志而。臨睨之詔曰。彼地者未平矣。伊多久佐夜藝而在矣。伊那加夫斯。凶目杵國歟。詔之而。更還上而。請給天照大御神矣。爾高皇產靈神天照大御神之命以而。於天安河之河原。神集八百萬神集而。於天思兼神令思而。神議議曰。此葦原中國者。我御子之可知國。言依所賜之國也。故於彼國。道速振荒振國神。如螢光神。邪神等多在而。磐根木株。草片葉猶能言語。夜者若火瓮而喧響之。晝者如狹蠅而沸騰之。先遣誰神而。將言趣其邪鬼也。詔矣。爾思兼神。及八百萬神等皆議白之。天穗日命者傑神也。是可遣也白矣。故遣天穗日命。則。乃媚附大國主神而。至三年不復奏矣。故復遣其子武

〔天浮橋〕古事記傳に「天浮橋は天と地との間を、神たちの昇り降り通ひ給ふ路にかゝれる橋なり、空に懸れる故に、浮橋とはいふならむ」とあり。

〔臨睨〕上より下を見下すをいふ、平田篤胤の說に今俗に人の隱せる事等を探露するを「ほぜる」といふも此の意なりといへり

〔伊那加夫斯〕「否」と頭を傾くるをいふ今の人が否定の意を表すに、頭を横に振ると同じ意也。

〔道速振〕「逸速ぶる」の約にして、神威の猛きをいふ。

〔火瓮〕神壽詞後釋に、瓮の中にて燒く火也といへり。

三熊之大人。亦云健三熊命。亦名大背飯三熊之大人。亦名稻背脛命。亦名天鳥船命。此神亦順其父之事而。返言不申矣。

〔一〇七〕於是高皇産靈神。更會諸神等而問曰。所遣葦原中國天穗日命。久不復奏。亦使何神則吉。爾諸神僉白。天津國玉神之子。天稚日子者壯士也。宜遣之白矣。故於是。以天之加久弓。天之加久矢。亦云天麻加古弓。天麻加古矢。賜天稚日子而遣之。爾天稚日子亦不忠誠。降到其國而。卽娶大國主神之女。下照比賣亦名稚國玉神。因。留住而。云吾欲馭此國而。至八年不復奏矣。

〔一〇八〕是時高皇産靈神。怪其久不來報而。亦問諸神等曰。天稚日子久不復奏。又遣曷神而。當令問其淹留之由。問給矣。於是諸神等。及思兼神答白。可遣雉名鳴女。焉白之時。詔之。汝行而。問天稚日子狀者。汝使葦原中國由者。言趣和其國之荒振神等也。何至八年。不復奏焉。宜問詔之而。乃遣名鳴雉雉。則此雉飛降而。見粟田豆田。留而不返。故復遣名鳴雌雉而令伺之。此於今諺云雉頓使之緣也。

〔武三熊之大人〕此の神の亦の名を天夷鳥命、武夷鳥命、武日照命、建比良鳥命とも申し、名の數々あるは、其の功によりて種々の名を得給ひしなるべしといふ。

〔天之加久弓〕天之は美稱也、鹿兒を射る弓より起れる名なりといふ。

〔名鳴女〕紀に無名雉（ナナシキジ）とあり。

〔粟田豆田〕「ふ」と訓めるは、倭名抄に「粟田（アハフ）豆田（マメフ）」とありて「ふ」は麻生、茅生蓬生などの生（フ）にて、其物の專ら生殖（オフ）る地をいふ」とあり。

〔頓使〕行きて返らざる使者の意也、俗に、梨のつぶてなど云ふ類也。

〔湯津杜木〕湯津は五百箇（イホツ）の約音、多きをいふ、杜木は牝桂（メカツラ）也。
〔天佐具賣〕日本紀に、天探女とあり、古說に天稚日子の侍女と曰へり。
〔天之波士弓〕前の天之加久弓と同一物也、櫨（ハジ）にて造れる弓也。
〔麻賀禮〕禍（マガ）の活用にて、枉死せよとの意也。
〔高胸坂〕頭部を高くし足部を低くして胡床に仰ぎ寢たる胸の傾斜の樣を云へる古語也。
〔伎佐理持〕葬送の時、死人の食を頭上に戴きて行く人也といふ。
〔尸者〕口訣に、尸者齋ニ死衣一而謂レ吊とあり。

〔一〇九〕故其雉自天飛降而。居天稚日子門之湯津杜木之杪而。委曲如天神之詔命告矣。爾天佐具賣。聞此鳥之言而。語天稚日子言。此鳥者。鳴音甚惡也。故可射殺云進。則卽天稚日子。持天神之所賜天之波士弓天之波波矢而。射殺其雉焉。爾其矢。自雉胸通而。逆被射上而。到高皇產靈神之座前矣。時高皇產靈神。取其矢而見行者。血著其羽也。爾高皇產靈神。此矢者。昔所賜天稚日子之矢也。今何爲而來歟。矢羽血染者。蓋與國神。相戰而然歟詔而。示諸神等而。咒之曰。或天稚日子。不誤命。爲射惡神之矢之至則。不中天稚日子。若有邪心則。天稚日子。於此矢麻賀禮也云而。取其矢而。自其矢穴。衝返之則。中天稚日子之。寢胡床高胸坂而。立處身死矣。此者天稚日子。爲新嘗而休臥之時也。此世人所謂。返矢可畏之緣也。

〔一一〇〕故其天稚日子之妻。下照比賣之哭聲。與風響而到天矣。於是在天天稚日子之父。天津國玉神。及其妻子等。聞其哭聲而。知天稚日子之死而。遣疾風神。擧尸而致天。便造喪屋而殯之。卽河鴈爲伎佐理持。鷺爲掃持。雀爲碓女。鶺鴒爲哭女。鵄爲尸者。鷄爲綿造。翠鳥爲御食人。烏爲宍者。凡以衆鳥任事。如此行定而。日八日夜八夜爲哭遊矣。

〔十掬劒〕又十握劒とも書す、掬はつかむにて、物の長さを量るにいふ。こゝは劒身の長を云ふ也。
〔藍見河〕武儀郡藍見村の郡上川に當る、下流は長良川にて、岐阜市より五里許の河上也。
〔伊呂妹〕家妹（イロモ）の約、妹に同じ。
〔高比賣命〕下照姫の一名也、大國主神の子にて、味鉏高彥根神の妹也。
〔阿米那流夜云々〕高天原なる弟棚機姫の美しき御頸に掛けたる玉の御統（ミスマル）、其御統の玉よ、噫美しき其玉の光り輝くが如く谷々に輝きて美しき光を放ち給ふは我御兄たる味鉏高彥根の神ぞと也。

〔一一一〕是時味鉏高彥根神。昇天而。弔天稚日子之喪之時。天稚日子之父。母親屬。其妻子等。云我子者不死而在矣。我君者不死而坐矣而。攀牽手足而。且喜且慟矣。其過之由者。此二柱神之。容姿甚能相似。故是以過之也。於是阿遲志貴高日子根神。大怒而。我者愛之朋友之故。弔來耳。何哉。以吾比穢死人云而。拔御佩之十掬劒而。切伏其喪屋。以足蹶離遣矣。此卽落而成山。今在美濃國藍見河之河上。喪山云山是也。其御刀之名。謂大葉刈。亦名。謂神度劒。　世人惡以生者誤死者事。此其緣也。

〔一一二〕此味鉏高彥根神。容儀華艷而。映于二丘二谷之間矣。其赫然而飛去之時。其伊呂妹高比賣命。思顯其御名而。歌曰。阿米那流夜。淤登多那婆多能。宇那賀世流。多麻能美須麻流。美須麻流邇。阿那陀麻波夜。美多邇。布多和多良須。阿治志貴。多迦比古泥能。迦微曾也。此歌者夷振也。

一傳云。又歌曰。阿麻佐加流。比那都賣能。伊和多羅須勢杼。伊志加波加多布知。加多布知邇。阿彌波理和多斯。米呂余斯邇。余斯余理許禰。伊斯加波加多布知。此兩首者今號夷曲也。

〔一一三〕於是高皇產靈神。更會諸神等而。當遣葦原中國神。選之時。天思兼神。及

諸神等僉白之。磐裂根裂神之子。磐筒之男磐筒之女神之子。經津主神。是將佳。亦坐天安河之河上之天石窟神。名伊都之尾羽張神。是可遣。若亦非此神則。其神之子。甕速日神之子。熯速日神之子。武甕槌之雄神。是應遣。且其天尾羽張神者。逆塞上天安河之水而。塞道居。故他神者不得行。故別遣天迦久神而。可問白矣。故爾使天迦久神而。問天尾羽張神之時。天尾羽張神。答白。恐之。當仕奉。雖然於此道者。可遣吾子武甕槌神白而。乃貢進矣。故是經津主神。亦名彌加布都命。亦名比古佐自布都命。此者矢作連之祖也。次武甕槌之雄神。亦云健雷神。亦名謂健布都神。亦名謂豐布都神。

〔一一四〕 於是其天穗日命者。押別天之八重雲而。天翔國翔而。見廻天下而。返事白之。豐葦原之水穗國者。晝者如狹蠅水沸。夜者如火瓮光神在。石根木根立。青水沫亦言問而荒振國也。雖然鎮平而。於皇美麻命。爲安國平然。將令所知坐白而。以己命之子。天夷鳥命。亦云天鳥船神。副經津主神。健御雷之男神而。天降遣而。撥平荒振神等。國作之大神亦媚鎮而。大八島國之現事顯事。令事避矣。

〔一一五〕 於是經津主神。健御雷之男神。降到出雲國伊多佐之小汀。亦云伊那佐之小濱。亦云

〔天之八重雲〕幾重にも重なる雲也、以下出雲國造神賀詞の句を引ける也

〔天翔國翔〕天下を見廻る意也。

〔晝者云々〕晝は五月頃の蠅の如く荒ぶる神が蜂起して騷がしきをいふ。

〔夜者云々〕書紀に螢火の如く光る神とある如く、邪神が群がり騷ぐ樣をいへる也。

〔石根木根立云々〕荒振る國津神等は勿論、岩石や木の株や、水の沫に至るまでも物言ひ騷ぐ國なりとの意也

〔現事顯事〕朝廷の萬づの政をいふ。

〔宇志波祈流〕領知する意也、うしは主となる義、はくは宰領する義也。

〔言依〕委れ任ずるをいふ。

〔登陀琉天之御巢〕「とだる」は富足る也、御巢とは宮殿の烟出の「えつり」の簀の事也、古へは炊烟の盛なるを富の象徴としたる故、宮殿の結構を稱するには必ず簀の事をいへり。

〔八十坰手〕八十は多きをいふ、くまでは隈路(クマチ)にて、道の隈を多く經て行く間、卽ち幽冥界をさしていふ也。

〔十足天日隅宮〕天の御巢に同じ、宮殿をいふ、後に宮號となりて杵築大社をいへり。

伊佐々、之小汀。而拔十掬劍而。逆刺立浪穗而。趺坐其劍前而。問其大國主神曰。高皇產靈神之命以而問使之。汝宇志波祁流。葦原中國者。我御子所知國也。言依賜也。故先遣吾二神而令駈平。汝意何如。當避奉不乎。問之時。大國主神對曰之。疑之。汝二神者。非來吾處。故不須許。唯吾住所者。如天神御子之天津日繼所知之。登陀琉天之御巢而。於底津石根。宮柱太知。於高天原。氷木高知而。治賜則。吾於百不足八十坰手隱而。侍焉白給矣。

〔一一六〕於是經津主神。還昇而。報告之時。高皇產靈神。乃還遣二柱神而。勅大國主神曰。今聞汝之所言。深有其理。故更條條而勅之。夫汝之所治之現事者。宜吾皇美麻命治。汝者可治神事。又汝之應住十足天日隅宮者。今當供造。其宮造之制者。乃蹤橫之御量。以千尋栲繩。百結結。八十結結下而。柱則高太。板則廣厚。將田供佃。又爲汝之往來遊海之具。高橋。及天鳥船亦將供造。於天安河亦造打橋。又供造百八十縫之白楯。又當主汝之祭祀者。天穗日命也。令詔之時。大國主神白曰。天神之勅教。慇懃如此。敢不從命乎。吾兒八重言代主神。爲鳥遊漁而。有三津之碕。今問之。當報命白而。以熊野諸手船。亦名天鳩船。載使者稻背脛命。遣而。以天神之勅。致言代主神而。令

〔天逆手〕逆は借字にて、退る時に打つ拍子にて、葦原中國を天神の御子に讓奉りて、天退手を打て隱れ給へる由也。

〔八重青柴垣云々〕青葉の柴垣をもて圍みたるにて、所謂神籬の類也。

〔宇奈提之神奈備〕宇奈提は大和の地名にして、茲に坐す神也、今雲梯村に八王子といふ社あり、其舊蹟也といふ。

〔稻背脛命〕一五九頁本文初行にある武三熊之大人に同じ。

〔千引石云々〕千人にて引くばかりの重き石の意也。

〔手末〕手先也。

問報命之辭矣。

〔一一七〕於是積羽八重言代主神。亦云都波八重事代主神。令言其父大神曰。恐之。如天神之命此國者。可立奉天神之御子。吾亦不違奉云而。即蹈傾其船枻而。天逆手。於八重青柴垣打成而。隱坐矣。此者坐宇奈提之神奈備。及葛城之鴨社神也。此神化爲八尋熊鰐而。通產巢日神之御子。三島縣主祖。天神玉命之子。三島溝咋耳命之女。溝咋比賣亦名活玉依毘賣。而令生之子。天八現津彥命。此者長公。長我孫。土佐國造。等之祖也。故其事代主神者。亦坐三島鴨社。亦坐伊豆三島社。此神之后。謂伊古奈比賣命。亦本后。謂阿波咩命。亦云阿波波神。亦云阿波神。亦云天津羽羽神。是者天石帆別命即天石戶別命是也。之女也。所生之子。五柱坐矣。其一柱之名。謂物忌奈命。此者並坐伊豆國神等也。

〔一一八〕於是稻背脛命。報命之時。大國主神。如其子之辭白給二柱神矣。故爾健御雷之男神。問曰亦有可白子乎。則大國主神白之。亦我子有健御名方神。亦云健御名方富神。亦名御穗須々美命。除此者無也白之間。其健御名方神。千引石。擎手末而來。言之。誰來我國而。忍

忍如此物言。然則欲爲力競。故我先欲取其御手云。故令取其御手。即取成立氷。亦取成劒刄。故懼而退居。爾欲取其健御名方神之手。乞返而取者。如取若葦。搤批而投離之則。即逃去矣。故追往而。迫到信濃國之諏方海而。將殺之時。健御名方神白之。恐之。莫殺我。除此地者。不行他處。亦不違我父大國主神之命。不違兄八重事代主神之言。此葦原中國者。隨天神御子之命而。獻焉白給矣。此者諏方祝部之伊都久神也。此神之后神。謂八坂刀賣命。

〔一一九〕於是健御雷之男神。更且還來而。問其大國主神曰。汝子等。言代主神。健御名方神二神者。隨天神御子之命而。不違白訖。故汝心奈何問給矣。爾答白之。隨吾子等二人之白而。吾亦不違。此葦原中國者。隨命既獻焉。如吾防禦者。國內之諸神。必當同禦。今我奉避。則誰有不順者。亦吾子等百八十神者。八重事代主神。爲神之御尾前而。仕奉則。不有違神曰給矣。

〔一二〇〕於是大國主神。白皇美麻命之將鎭坐大倭國而。已命之和御魂。取託八咫鏡而。倭大物主櫛𤭖玉命。稱名而。令坐大三輪之神奈備。己命之子。味鉏高日子根命之御魂。令坐葛木之鴨之神奈備。事代主命之御魂。令坐宇奈提之神奈備。賀夜奈流

〔立氷云々〕氷柱を採るが如く更に動かず挫けざるを云ふ。

〔乞返而取者〕此方より反對に請求して腕を採ればの意也。

〔若葦云々〕若葦の莖を採るが如くいとやすきをいふ。

〔伊都久〕齋く也。

〔御尾前〕御は敬語尾前は前後をいふ

美命之御魂。令坐飛鳥之神奈備而。天神之御子之爲近守神。貢置給矣。

〔一二一〕　故大國主神。平越之八國而。還坐之時。來坐長江山而詔之。我造坐而令國者。皇美麻命。平世所知。依奉之。但八雲立出雲國者。我靜坐國。廻靑垣山而。玉置而守也詔矣。故號其處云母理。爲將平其越之八國而往之時。林地之樹林茂矣。爾時。詔吾御心之波夜志矣。故號其地云拜志也。

〔一二二〕　於是產巢日神之。天御量以而。如大國主神之請白而。於出雲國之多藝志之小濱。令造天之御舍而。以御子天御鳥命。爲楯部而。天降給矣。爾時退下而。大神之宮之。御裝之楯造之。仍至今。造楯桙而。立奉皇神。爾楯縫之地是也。

〔一二三〕　於是大國主神。以其平國之時所杖之廣矛。授二柱神而白之。吾以此矛卒有治功。皇美麻命。用此矛治國則。必當平安。吾所治顯明事者。皇美麻命當治。吾退而。將治幽冥事白而。乃鷹岐神於二柱神而。此神代吾而。當奉從言訖而。卽躬披瑞之八坂瓊而。遂於八百丹杵築宮。長隱鎭坐矣。此宮造之時。諸神等。參集宮處而。杵築之故。云杵築。亦百八十神等集坐。立給御厨而。令釀酒給之。百八十日喜燕而。解散坐之地。云佐香也。

〔越之八國〕此の文出雲風土記によれり、一本に越の八口とあり、山陰より北陸にいたる國國をいふ。

〔平世〕常世に同じ永久變らざるをいふ。

〔母理〕地名也、風土記には文理とありて、神龜三年母理と改むとあり、今の能義郡母里村の地也。

〔拜志〕風土記には林とありて、神龜三年拜志と改むとあり、今の八東郡玉湯村の地に字林あり。

〔岐神〕一に船戸神また久那斗神と申す、塞神（サヘノカミ）也。

〔佐香〕簸川郡佐香村の地といふ。

〔禮白利〕「禮代」或は「禮物」ともいふ「り」は「ろし」の約也、即ち「禮のしろし」の義也。
〔膳夫〕饗膳の事を掌る人也、「かしはで」といふは、上古飲食物を柏の葉に盛りしが故也。
〔燧臼〕火を切り出す具也。
〔登陀流〕富み足る義也。
〔口大之尾翼鱸〕支那にて鱸を「巨口細鱗」などいふを譯せる也、口大は巨口に當り、尾翼は「小鱗」にて細鱗に當る。
〔拆竹之云々〕拆きたる竹の撓むが如く數多くの義也。
〔眞魚咋〕大小の魚類を調理して饗應するをいふ。

〔一二四〕　爾大國主神鎭坐之時。神魯岐神魯美命。詔天穗日命曰。汝天穗日命者。天皇命之。手長之大御世。堅石常石奉伊波比而。伊賀志之御世。可幸奉仰賜矣。此者出雲國造之。統々仕奉杵築宮而。爲神禮自利臣禮自。於天皇命獻御禱之神寶而。奏神賀吉詞之緣也。

〔一二五〕　於是水戶神之孫櫛八玉神。爲膳夫而。獻天御饗之時。禱白而。櫛八玉神化鵜。入海底而。咋出底之波邇而。作天八十平瓮而。鎌海布柄。作燧臼。以海蓴柄。作燧杵而。鑽出火而白云。是我所燧火者。於高天原者。神皇産靈御祖命之。登陀流天之新巢之凝烟之。迄八擧垂燒擧。地下者。於底津石根燒凝而。栲繩之千尋繩打延。爲釣海人之。口大之尾翼鱸。佐和佐和然。控依騰而。拆竹之登遠々登遠々然。將獻天之眞魚咋白矣。

〔一二六〕　於是經津主神。健御雷之男神。以岐神爲鄕導而。周流削平而。逆命者斬戮。歸順者神和和之。荒振神等則。神問問之。神攘攘而。語問之磐根樹立。艸之片葉亦令語止而。於中不服之。星神天香香背男者。亦名。天津甕星遣倭文神健葉槌命則。乃服矣。此經津主神。國巡坐時。來山國之地而。是土者不止見欲也詔矣。故云山國。即有正倉。亦天

石椅。縫直之處。於今云椅縫也。

〔一二七〕故其普都大神。巡行葦原中津國。和平山河荒梗之類畢而。心存歸天上而。即隨身之嚴杖甲戈楯劍。及所執玉。悉留置常陸國信太郷而。即乘白雲而。二柱神共。還參上天上而。奏言葦原中國者。皆已言向竟矣。

〔一二八〕故是時。歸順之首渠者。大物主神。大國御魂神。及言代主神。乃合八百萬神於天高市而。帥其諸神。共昇天而。陳其誠欵之至。時。高皇産靈神。勅大物主神曰。汝若以國神爲妻則。吾猶謂汝有疎心。故今以吾女三穗津比賣。配汝爲妻。宜領八百萬神而。永爲皇美麻命奉護詔而。乃使還降給矣。

〔一二九〕故即手置帆負神定爲笠作者。彥狹知神爲楯縫者。天目一箇神爲金匠者。天日鷲神爲由布作者。櫛明玉神爲玉作者。乃使天太玉命之弱肩。被太手襁而。代御手而。祭大物主神者。始起於是時矣。且天兒屋命者。主神事之宗源者也。故以太兆之卜事。俾仕奉矣。是時齋之大人。號齋主神。此神今在東國檝取之地。亦健御雷之男神者。稱香島天大神。於天則號曰香島宮。於此地則名豐香島宮矣。此者鹿島連之伊都伎奉神也。

〔普都大神〕經津主命也。

〔天高市〕天の安川の附近にして、八百萬神の集はせ給ふ所といふ。

〔太兆〕「太占」と書せるに同じ「ふと」は尊稱にして、「まに」は「まにまに」の約にして、神意神慮に隨順して、事を占決するをいふ。

〔齋之大人〕上古、軍の首途又は國治めに出立つ時に、その道の口に忌瓮を齋ひ祭りて行く先の平安等を祈る事を掌る人の義也、齋主神、經津主神を指していへり。

〔東國檝取〕下總國香取郡香取町にて今こゝに香取神宮あり。

〔一三〇〕故是時。大國魂神白之。天照大御神者。悉治天原。皇美麻命者。專治葦原中國之八十魂神。我者親治大地官焉言訖矣。大地主神之號。起于此時矣。是者坐大和社神也。此大國魂神。天降坐之時。於飯成之地而。御膳食給矣。故其地云飯梨也。

〔一三一〕故其八重事代主神者。製天磐笛而。奉皇美麻命而祝之。亦奉進天押楯與天狹弓矣。此天事代主命者。飛鳥直。長柄首等之祖也。

〔一三二〕於是天照大御神。高皇產靈神之命以而。詔太子正哉吾勝勝速日天忍耳命曰。今白葦原中國平訖。故隨言依賜之。降坐而知看詔矣。爾天忍穗耳命白之。吾者。將降裝束之間。子生出焉。名天邇岐志國邇岐志天津日高日子番能邇邇藝命。亦云天饒石國饒石天津彦火瓊瓊杵命。亦云天津彦彦火瓊瓊杵命。亦云天津彦火瓊瓊杵根命。亦云天津彦國光彦火瓊瓊杵命。亦云天津彦根火瓊瓊杵命。亦名天之杵火火、置瀨命。亦云天杵瀨命。　應降此御子白給矣。此御子者。御合產巢日神之御女萬幡豐秋津比賣命之子。玉依毘賣命而。令生之御子也。天照大御神。高皇產靈神。特憐愛而。奉崇養給矣。

〔一三三〕故是以隨白之。科詔日子番能邇邇藝命而。奉坐天都高御座而。此豐葦原

〔大地主神云々〕古語拾遺に「大地主神」とあるを「大國主命」なりと斷定して、爰にかく立論せるものなれども、大國主命(大國魂神)が天照大神及び皇孫の分掌を定むるが如き謂れ絕對にあるべからず、大國主命の系統は素盞嗚尊の子孫なれば伊邪那岐命の定め給へる如く「海」(タワ)をこそ掌るべき也。

〔大和社〕大和國磯城郡三輪町なる「大神神社」也。

〔直〕戸の一種也、「直兄」(アタエ)又は「當易」(アテカヒ)「授兄」(アタヒエ)等名義に就き諸說ありて定かならず。

〔產巢日神〕高御產巢日神也。

水穗國者。汝將知國也。言依賜。故隨命而可天降焉。詔而。天兒屋命。天太玉命。天宇受賣命。伊斯許理度賣命。玉祖命。拜五伴緒。天忍日命。及諸部緒之神等支加而。以其遠岐之八咫鏡。及天藂雲劍二種之神寶。永令爲天日嗣之御璽。而亦副賜其遠岐之八尺勾璵。及平國之廣矛。常世思兼神。布刀玉神。天手力男神。萬幡豐秋津比賣神。護齋之鏡三面。子鈴一合。又天照大御神。勅曰吾天原所御。齋庭之穗亦。當御吾兒。而依賜矣。

〔一三四〕　於是天照大御神御手。捧持鏡劒賜而。言壽詔曰。大八島豐葦原水穗國者。吾子孫。可王地也。皇我宇都御子皇美麻命。就坐而。御坐此之天津高御座而。爲安國平然天津日嗣之瑞穗。爲天御膳長御膳之遠御膳。於萬千秋之長五百秋安然所知食。於齋庭。此之鏡者。專爲吾御魂而。如拜吾御前。令坐同殿同床而。宜齋奉寶祚之隆坐事。當與天壤無窮矣。詔而。復勅天兒屋命亦云常世思兼神。天太玉命曰。惟爾二柱神亦。侍同殿內而。取持御前事而。爲政焉。詔矣。故此二柱神者。拜祭佐久久斯侶伊須受宮。次天手力男神萬幡豐秋津比賣神者。坐佐那縣。此者御戶開之神也。次天懸大神。國懸大神者。拜祭木國名草宮。次登由宇氣神。此者坐外宮之度相。次若御魂神。此者。坐

〔遠岐之云々〕古事記には「於是、其の招（オ）ぎし八尺の勾璁、鏡、及草那藝劒云々」とあり、勾璁と鏡とは天岩戶にて天照大御神を招ぎ出し奉りし經歷あるが故にかく言へれど、爰に「天叢雲劍」とあるは其意不明也。

〔二種之神寶云々〕これ古語拾遺に依りて言ひし所にして、「天日嗣御璽」は鏡、劒、玉の三種ならざるべからず。

〔齋庭之穗〕天祖が新嘗に聞召せる稻穗をいふ。

〔佐久久斯侶云々〕伊勢大神宮也。

〔木國名草宮〕紀伊國海草郡なる、國懸神宮也、日前國懸神宮ともいふ。

〔巻向穴師社〕神名式に「大和國城上郡巻向坐若御魂神社、大、月次、相嘗新嘗」とある神社を指せり。

〔磐境〕伊勢貞丈は「いはひさかひ」の略にして、神を祝ひ祭る所の意なりといへり。

〔不得目勝問〕相手の威力強くして眞正面より向ひ得ざる意也。

〔伊牟迦布〕「い向ふ」にて、「い」は接頭語也。

〔面勝〕相手を威壓し、威服する意也。

巻向穴師社神也。

〔一三五〕爾神魯岐神魯美命之命以而。於高天原事始而。天都詞之太詞事。言依賜而。天神社。國神社。令稱辭竟奉而。高皇産靈神勅曰。吾則造天津磐境而。起樹天津神籬。當爲皇美麻命奉齋。汝天兒屋命。太玉命宜持天津神籬。降葦原中國而。亦爲皇美麻命奉齋詔而。復勅太玉命曰。宜率諸部神而。供擧其職。如天上之儀而。令諸神亦與陪從矣。

〔一三六〕爾日子番能邇邇藝命。將天降坐之時。先驅者還白云。於天之八衢。鼻長七咫。背長七尺餘之神居而。上光天原。下光葦原中國。眼如八咫鏡矣。卽遣從神而。令問之時。不得目勝問矣。故天照大御神。高皇産靈神之命以而。詔天宇受賣神曰。汝者雖有手弱女。與伊牟迦布神面勝神也。故專汝往而。可問吾御子之將天降之道。誰耶如此而居詔矣。故天宇受賣命。往向而問之時。八衢之神答白。吾國神。名猨田毘古大神也。出居由者。聞天神御子天降坐之故。參向待而侍焉白給矣。天宇受賣命復問曰。汝先立行乎。抑吾先立行乎。答白吾先立而啓行焉。天宇受賣命復問曰。汝者到何處。皇美麻命者何處到耶。答曰。天神御子者。當到筑紫日向高千穗槵觸之峯。吾者應到

伊勢狹長田。伊須受之川上。發顯我名汝也。故汝可送吾白給矣。爾天宇受賣命。還詣而。報其狀矣。

【一三七】爾詔天津日子番能邇邇藝命而。離天磐座。奉眞床覆衾而。引開天磐戸而。天降奉矣。故稱此神。曰天國饒石彥火瓊瓊杵命。故其猨田毘王神立御先而。天忍日命。於背取負天磐靫。於臂著稜威高鞆。於手取持天梔弓。手狹天波波矢。副持八目鳴鏑。取佩頭槌之劍。師大久米部而。立御前而仕奉。天牟羅雲命。取太玉串。天忍雲根命。宣天津諄辭。祓清而。於天之浮橋。亦云天之磐船。宇伎士麻理蘇理多多志而。排分天之八重多那雲而。稜威之道別道別而。果先如猨田毘古神之言。於筑紫日向之高千穗之久士布流峯天降坐矣。然後以大來目部。爲天靫負部。天靫負部之號。起於此時也。故其天押日命 亦名神倭日命。亦名大久日主命。亦名天津久糸命。亦名天槵津大來目命。 此者産巢日神之御子。安牟須比命之子。大伴連。久米直。浮穴直。門部連。佐伯連等之祖也。次天村雲命者。天曾己多智命之子。天嗣杵命 亦名明日名門命。 之子。天鈴杵命之子。天御雲命之子。伊勢朝臣。額田

〔狹長田〕伊勢國多氣郡佐那村の地也今こゝに佐那神社あり。

〔天磐靫〕天は尊貴磐は堅牢の意を表はす添辭にて、ただ靫といふに同じ靫は「矢筒」(ヤケ)の轉にして、矢を盛りて背に負ふ具也

〔稜威高鞆〕弓の具也、左の手に結び附け、弦にて腕を打つを防ぐ爲に用ひ、併せて弦に觸れしめて音を高く鳴らしむる用に供す。「稜威高」はこの音の高きものをいへる也。

〔天波波矢〕「天」は美稱、「波波矢」は「羽張矢」の義にて矢の羽の廣く大なるをいふ。

部宿禰。度會神主等之祖也。次天忍雲根命者。亦云天押雲命。天兒屋根命之子也。

〔一三八〕爾天津彥火瓊瓊杵命。於高千穗二上峯天降坐之時。天暗冥晝夜不別而。人物失道。物色難別。茲有土蛛。名曰大鉗小鉗二人奏言皇美麻命以命之御手拔稻千穗而爲籾而。投散于四方則。虛得開晴白矣。于時如大鉗等所奏。搓千穗之稻爲籾而。投散之則。即天開晴。日月照光焉。因曰高千穗二上峯。既而。移幸襲之高千穗槵日二上峯矣。

〔一三九〕於是皇美麻命。自襲之高千穗曾褒里山峯之天浮橋遊行而。膂肉之空國。自頓丘覓國行去而。到坐吾田笠狹之御碕。登坐長屋之竹島而。巡覽其地而詔曰。朝日之直刺國。夕日之日照國也。故此地者。甚吉地也詔而。召國主事勝國勝長狹神而問曰。此地者誰國歟。對曰。此者長狹之所住國也。雖然。今乃奉上天神御子。取捨任意遊之白矣。故於底津石根宮柱太知。於高天原氷木高知而坐矣。故其事勝國勝長狹神。亦名鹽椎神。亦云鹽土老翁。亦云鹽筒老翁。此者伊邪那岐大神之御子也。

〔一四〇〕故爾皇美麻命。詔天宇受賣命曰。此立御前而仕奉之猨田毘古大神者。専

〔膂肉之空國〕熊襲の國を指していへる也、仲哀紀に「熊襲國者膂之空國」とあり、即ち熊襲國は山脈連亘して五穀の生ふべき平原なきを以ていふ。

〔頓丘〕「ひた」は「直」或は「單」等の義にて一向に他を雜へざる意也、即ち山脈打ち續きて平地の無き所也。

〔吾田笠狹之御碕〕今の薩摩國加世田港の附近也。

〔長屋〕今の長永山なりといふ。

〔鹽椎神〕鈴木重胤は伊邪那岐命が檍原にて禊し給ひし時生れませる、底筒男、中筒男、表筒男の三神を一つにせる名なりといへり。

顯白之。汝送奉。亦其神之御名者。汝負而仕奉詔矣。卽天宇受賣命。隨猨田毘古神之所乞而。侍送矣。是以猨女君等負其猨田毘古之男神之名而。女呼猨女君事是也。

〔一四一〕　於是天宇受賣命。送猨田毘古神而還到。乃悉追聚鰭廣物鰭狹物而。汝等者。仕奉天神御子耶。問之時。諸魚等皆白仕奉之中。海鼠不白。故天宇受賣命。謂海鼠云。此口乎。不答口之云而。以紐小刀。拆其口矣。故於今海鼠口拆也。是以御代御代。獻島之速贄之時。給猨女君等也。

〔一四二〕　故其猨田毘古神。坐阿邪訶之時。爲漁而於比良夫貝。見咋合其手而。沈溺海水矣。故其沈居底時之名。謂底度久御魂。其海水之都夫多都時之名。謂都夫多都御魂。其阿和佐久時之名。謂阿和佐久御魂。故是猨田毘古大神者。宇治土公氏之祖也。此神之子。謂吾娥津比賣命。亦謂伊賀津比賣命。此神之所領之地云伊賀也。

〔一四三〕　爾天兒屋根命。於皇美麻命之御前仕奉而。以天忍雲根命。於神魯岐神魯美命之御前。受給申而。奉上天之二上而。皇美麻命之御膳水者。於宇都志國之水。加天津水而將立奉。可白。事教給矣。於是天忍雲根命。乘天之浮雲而。昇坐天之二上而。白神魯岐神魯美命之御前。則以天玉串事依奉而。刺立此玉串而。自夕日至于朝日

〔顯白〕猨田毘古神の御名及び來歷等を顯はし申したる意也。

〔猨女君〕猨女は氏也、君は尸（カバネ）也。

〔海鼠〕「なまこ」といふは熬海鼠（イリコ）に對していへる名也。

〔紐小刀〕下紐に挿す懷劍也。

〔島之速贄〕志摩國より每年、初物として朝廷に獻上する魚類也。

〔阿邪訶〕伊勢國壹志郡阿坂村に阿射神社あり、此の神の住地也。

〔比良夫貝〕蛤の類にて、殼の表赤く裏は黃色にて、平たき貝也。

〔天都詔戸之太詔刀言〕祝詞を尊びていふ詞也。「太」は美稱にして、「天都」は天つ神の勅言なればかくいふ

〔麻知〕「太占」(フトマニ)の「まに」と同意の語にして、爰は「兆」(ウラ)の意也、また「まち」は龜卜鹿卜等に於て占兆を彫りて灼くをいひ、之を町形ともいひ、田町形ともいひ、方なる圏の中に縦横の筋あるものなれども、爰はその意に非ず。

〔弱韮〕韮は韭の借字にして、弱韮は午前をいふ、又一説に若韮の如くに齋(ユ)しき意にて篁を形容せる語也といふ。

照以天都詔戸之太詔刀言告。如此告則。麻知則。於弱韮。由都五百篁生出而。自其下。天之八井將出。持此而。爲天津水。所聞食焉。奉事依賜矣。

一傳云。皇大神。皇美麻命天降坐之時。天牟羅雲命。取太玉串。立御前而。天降仕奉矣。於是諸神白之。葦原中國者潮也。可何爲白之時。皇美麻命。召天村雲命而詔曰之。食國之水者未熟。荒水在矣。故參上御祖命之御許而。言此由而來焉詔之而。令登之。卽天牟羅雲命、參上而。於御祖命之御前。以皇美麻命之可白宣事。子細申上之時。神魯岐神魯美命詔曰。雜雜將仕奉政者。雖行下奉而在。水取之政者。遺而在矣。思將下奉何神之間。勇志久。參上來焉詔之而。以天忍石之長井之水。八盛取而。入玉瓮而。誨曰。持下此水而。於皇大神之御饌八盛。於皇美麻命之御饌八盛獻之而。遺水者。術云天忍水而。於食國之水於灌和而。獻初朝夕之御饌。仕奉御伴而。天降之神等。八十伴之諸人亦。令飲此水焉詔之而。神財之玉毛比共授給而。奉下賜矣。天村雲命受賜而。持下而。獻之時。皇美麻命詔曰。自何道耶。參上乎問之時、白云。大橋者。皇大神。皇美麻命之畏天降坐而。自後之小橋。參上也申之時。皇美麻命詔曰、後亦畏仕奉事、勇也詔而。令負天村雲命。天二登命。後小橋命云三名賜矣、卽日向高千穗宮之。御井定崇居而。於朝夕之御饌奉仕。而後。移居丹波氷沼而奉仕矣。

〔一四四〕於是天兒屋根命。任天都神之御依而。所聞食。由庭之瑞穗。持太兆之卜事

〔悠紀主基國〕之を兩齋國といふ、この二國の稻を用ひて大嘗祭の神饌となす也、然して悠紀は「齋忌」の義にて、主基は濯ぎ清むる義也。
〔黑木〕常山の根を黑燒きにして、雜ぜたる酒也。
〔白木〕他物を雜ぜざる清酒也。
〔赤丹之穗〕酒を飲みて頰の赤くなるをいふ。
〔天神之壽詞〕天皇即位の日、中臣氏の奏聞して大御代を祝ぎ奉る詞也、令義解に、「中臣奏天神之壽詞、謂以神代之古事、爲萬壽之鎭詞也」とあり。
〔阿菩大神〕この條播磨風土記より取れる也。

奉仕而。齋定悠紀主基國而。物部之人等。酒造兒。酒波。粉走。灰燒。薪採。相作。稻實公等。於大嘗之齋場。持齋波理參來而。由志理伊都志理持恐恐之。清麻波理奉仕而。月內撰定日時而獻之。此獻之悠紀主基之黑木白木之大御酒。皇美麻命。爲太都御膳之長御膳之遠御膳。於汁亦實。赤丹之穗所聞食而。豐明明御坐焉。以天神之壽詞。稱辭定奉而。亦稱辭定奉之於皇神等。獻相嘗而於千秋之五百秋之相嘗。奉相宇豆能比。堅磐常磐齋奉而。於伊賀志御世令榮奉。自此年始而。與天地月日共照志明之御坐事而。皇神等。與皇美麻命之御中執持而。伊賀志桙之不傾本末仕奉。以壽詞稱辭定奉給矣。此者大嘗祭之御政之本也。亦諸部之神等。如天津神之勅。歷世相承而。各奉供其職矣。

〔一四五〕 爾天都神之天御量以而。以天香山天降之時。二箇分而。以片端者於倭國天降矣。天香山是也。以片端者。於伊豫國天降給矣。天山是也。一傳云。自空布理降之山之大者。降阿波國矣。天詔戶山是也。其山之碎而、於倭國布理就者。云天香山也。此天降就神之香山。愛畝火。與耳梨山相諍競矣。爾時出雲國阿菩大神。聞三山之相闘而。欲諫止而。上來之時。到坐播磨國聞闘止

〔神集之形覆〕播磨風土記、阿菩大神留りし所の條には「故號神阜、阜形似覆」とあり。

〔百取机代之物〕机は居(スヱ)の義にて、食器を載する臺也、その机の數多きを百取といひ「代」は食物を指す數多き饗應物の意にて、爰は聟取の禮物也。

〔爲婚〕「みと」は「みとのまぐはひ」の略にて、男女の交媾をいひ、「あたはしつ」は行ひたりとの意也。

而。覆其所乘之船而坐之地。號神集之形覆也。

〔一四六〕於是天津日高日子番能邇邇藝命。遊幸笠沙御前之時。於麗美少女之遇問汝者誰女耶。則答白之。大山津見神之女。名木花之佐久夜毘賣也白給矣亦名豐吾田津比賣。亦云神吾田津比賣。亦名鹿葦津比賣。亦云神吾田鹿葦津比賣。亦名櫻大刀自神。復問汝有兄弟乎則。我姉石長比賣在也白給矣。爾詔曰。吾欲目合汝者。奈何詔則。吾不得白。吾父大山津見神將白云給矣。故乞遣其父大山津見神之時。大歡而。副其姉石長比賣而。令持百取机代之物而奉出矣。故爾其姉者。因甚凶醜。見畏而。返送給而。唯留其弟木花之佐久夜毘賣而。一宿爲婚焉。一傳云。皇美麻命。到坐吾田笠狹之御碕而。問事勝國勝長狹神曰。其於秀起浪穗之上。起八尋殿而。手玉玲瓏。織紝之少女者。誰女子耶。答曰。大山祇神之女等。大號磐長比賣。少號木花開耶毘賣白矣。因皇美麻命。幸木花開耶毘賣而。一夜爲婚矣。

〔一四七〕爾大山津見神。因返給石長比賣而。大恥而。白送之言者。我女二人並而立奉之由者。使石長比賣則。天神御子之御命者。雖雪零風吹。恒如石而。常堅坐。亦使木花之佐久夜毘賣則。如木花之榮榮坐。宇氣比而貢進矣。斯在今返石長比賣而。木

〔木花之阿麻比〕阿麻比の語、古來諸說あれど未だ正解を見ず、されど日本書紀に「移落」「衰去」「俄遷」「轉當」「衰去」等の字を當てたるにて推量すべし。

〔福慈岳〕富士山也木花佐久夜毘賣命は始め富士山頂に祭りありしかど後ち駿河國富士郡大宮町に遷し奉れり、垂仁天皇の三年に創建し、現今官幣大社也。

〔產〕「うます」は生むの敬語也。

〔無戸室〕「うつ」は空の義也、卽ち中を空にして、外を塗り籠めたる室をいふ。

花之佐久夜毘賣獨留之故。天神御子之御壽者。木花之阿麻比能微坐焉白給矣。亦磐長比賣。耻恨唾泣而曰之。宇都志伎青人草者。如木花之移落。轉當衰去云矣。此世人之命短折之緣也。故此磐長比賣命者。坐伊豆國雲見山。亦木花之佐久夜毘賣命者坐駿河國福慈岳也。

〔一四八〕是後木花之佐久夜毘賣命。參出而白之。吾妊身。今臨產之時。是天神之御子。私不可產奉。故請之白給矣。皇美麻命嘲笑而詔曰。佐久夜毘賣。一宿哉妊有。其非我子。必國神之子也歟詔。則。甚懟恨而白之。吾妊之子。若國神之子在。則產不幸。若天神之御子坐則幸焉誓而。卽作無戸八尋殿而。入坐其殿內。而以土塞塗而。方產時而。於其無戸室。著火而產也。故其火盛燒時。所生坐子之名。火須勢理命。亦名火進命。亦名火照命。亦云火須會理命。亦云火須佐利命。次火炎衰而。避火熱之時。所生坐御子之名。火遠理命。亦云火夜織命。亦御名天津日高日子穗穗手見命。凡二柱生坐矣。

〔一四九〕爾神吾田津比賣命。自火爐之中出來。稱言曰。吾所生之子。及吾身。當火難而。無少損事。見之乎白之時。皇美麻命詔曰。吾本雖知吾子。但一夜而之娠故。慮有

〔竹刀〕「あた」は竹はその葉も莖も青きを以ていひ、「ひえ」は「へぐ」(削り剝ぐ意)の意より出でし語也。

〔天甜酒〕「天」は美稱也、「たむ」は「ためつもの」の「ため」の轉にて、飲み物に對して、食べ物の義ともいひ、或は單に味(マウ)き意なりともいふ。

〔渟浪田〕日本書紀纂疏に「渟浪田謂水田也」とあり。

〔意伎都母波云々〕沖より海の藻は磯邊に寄せ來たれども、妹君は再び歸り來て床を共にする事も能はぬ事哉と、濱千鳥に寄せて詠嘆せる歌也。

疑者而。使衆人知吾子。亦天神之令一夜娠。亦汝有靈異之威。欲明子等復有超倫之氣之故。前日嘲之也詔矣。此御子等之所生坐之時。以竹刀截其臍帶矣。其所棄之竹刀。終成竹林矣。故號彼地曰竹屋。是時神吾田鹿葦津比賣。以卜定田號狹名田而。以其田之稻釀天甜酒。以渟浪田之稻爲飯而嘗之矣。與此櫻大刀自神。合力而坐神名。謂苔虫神。此者並坐朝熊社神等也。

〔一五〇〕　爾木花之佐久夜毘賣命。誓言有驗而後。奉恨皇美麻命而。不與共言之故。皇美麻命憂之歌曰。意伎都母波。倍邇波余禮杼母。佐禰杼許母。阿多波怒加母用。波麻都智杼理用。焉歌矣。後久坐而天津彥火瓊瓊杵命。崩坐矣。因葬日向埃之山陵也。

〔一五一〕　爾火須勢理命者。爲海佐智毘古而。取鰭廣物鰭狹物。火遠理命者。爲山佐智毘古而。取毛麤物毛柔物矣。爾其兄者。每雨零風吹。不得其利。弟者雖雨零風吹。其利不減矣。於是火須勢理命。謂其弟曰。吾試。與汝易佐知。欲用云矣。火遠理命。許諾而。各相易而。火須勢理命。持弟之佐知弓佐知矢。入山而覓獸。終不見獸之乾迹。火遠理命。持兄之佐知鉤。出海而釣魚。都不得一魚。亦其鈎鈎失海而。無由覓矣。故俱空手而

歸坐焉。

〔一五二〕於是火須勢理命。悔而。返弟命之弓箭而。乞己之鈎鈎而。曰山佐知亦己之佐々智々。海佐知亦己之佐々知々。今各返佐知之時。火遠理命詔曰。汝之鈎者。魚鈎而。不得一魚而。遂失海也。詔之。雖然其兄強乞徵矣。故其弟。別作新鈎而。雖償給。兄不肯受而。猶責其故鈎。火遠理命患之而。破御佩之十拳劒而。鍛作數千之鈎鈎。盛一箕而。雖償給。兄怒而不受。曰非吾故鈎則。雖多不取而。益責徵矣。

〔一五三〕於是其弟火遠理命。往坐海邊而。侸佪愁吟之時。見行川鴈之嬰羂而困厄。卽起憐心而。解放之。須臾而鹽椎神來問曰。何虛空津日高之。泣患之由者。問奉則。答言。我與兄易佐知而。失其鈎矣。斯而乞其鈎之故。雖償多鈎。不受而仍云欲得其本鈎也。故泣患之詔矣。爾鹽椎神。吾爲汝命作善議。勿憂坐云而。卽取囊中之玄櫛而。投地則。化成五百箇竹林。因取其竹而。造間無勝間之小船而。〔一云大目麁籠。〕奉載其船而教曰。我押流此船則。差暫可往。將有味御路。乃乘其道而往則。如魚鱗所造之宮。其綿津見神之宮也。到坐其神之御門則。傍之井上。將有湯津香木。故坐其木上者。其海神之女。見將相議者也。敎奉而。推放海中則。自然沈去矣。故隨鹽椎神之教而。小行坐則。備

〔山佐知亦云々〕君が狩獵も我が漁業も各自の持前の業なれば、互に交換などすべきに非ずとの意也。

〔空津日高〕谷川士清の說に「天津日高」は天子の稱「虛空津日高」は太子の稱なりといへり。

〔間無勝間〕日本書紀には「以無目堅間爲浮木云々、無目堅間是今之竹籠也」とあり。

〔味御路〕便利なる通路也。

〔湯津香木〕湯津は「五百津」の意にして、爰は香木（肉桂の木）の茂れるをいふ。

〔從婢〕「まかだち」は「前子等達」（マヘツコラタチ）の轉約にして、前は公卿を「前つ君」といふが如き「前」の意にして、子等は女の稱也、即ち君の御前に侍り仕ふる女をいふ

〔玉器〕「もひ」は水の古語なれども、火などに對する時は「みづ」といひ飲用の目的の時に「もひ」といふ、轉じて水を入るゝ器をもいふに至れり

〔含〕「ふふみ」は「ふくみ」の古語也

如其言。海底有可怜小汀矣。乃棄堅間而尋汀而進。則到坐海神豐玉毘古命之宮矣。於門外有井。於井傍有湯津杜木。枝葉扶疏也。即登其木而坐矣。一傳云。火遠理命愁吟而坐海濱時。鹽筒老翁曰。勿憂坐。吾將計。海神所乘駿馬者八尋鰐也。是豎其鰭背而在橘之小戶。吾當與彼共策云而。乃將火遠理命而。其往而見之。是時鰐魚策之曰。吾八日以後。致奉皇美麻命於海宮。唯我王駿馬一尋鰐。是當一日之內。奉致。故歸而。使彼出來。宜乘彼而入海。海中有味小汀。隨其汀而進者。必至我王之宮。宮門井上當有湯津杜木。宜就其木上而居上言訖而。即入海去矣。故皇美麻命。隨鰐魚之言。留居而待之。果而一尋和邇來。因乘而入坐海。悉遵前鰐之教言矣。

〔一五四〕爾海神豐玉毘古命之御女。豐玉毘賣命之從婢。持玉器出來而。將酌水。終不能滿。俯視井中。則於水底。人笑之影倒映也。仰見者。麗壯夫有杜木之上。思甚奇異矣。爾火遠理命。見其婢而。乞欲得水。婢女乃酌水而。入玉器貢進矣。爾水者不飲而。解御頸之璵而。含御口而。唾入其玉器矣。於是其璵。著器而婢不得離璵。故璵任著。奉進豐玉毘賣命矣。爾見其璵而。於婢。問曰若於門外有人哉。則從婢答白。於我井上之香木上有人。甚麗壯夫也。吾謂我王獨絕麗然。益我王而。甚貴。故其人乞水之故。奉之則水者不飲而。唾入此璵也。是不得離故。任入持參來而獻也白矣。

〔目合〕爰は目と目を見合はせて挨拶するをいふ。

〔虛空彥〕「天上人」などの意を含む尊稱也。

〔美智〕海驢と書す。今はアシカと呼ぶ。海獸の古言なりといふ。その形、川獺に似て、太さその倍程あり、故に海獺ともいふ。

〔口女〕日本書紀に「口女卽鯔魚也」とあり、本草綱目に「鯔生二江河淺水中一似レ鯉身圓、頭偏骨軟、性喜レ食レ泥」と見ゆ。

〔悽然〕「うらぶる」は「心詫ろ」（ウラワブル）の約にして、心快快として樂まざるをいふ。

〔一五五〕爾豐玉毘賣命思奇而出見、乃見感而爲目合、還入而於其父白之、於吾門有麗人。顔貌甚且閑而、殆非常人。若從天降者、當有天垢。從地來者、當有地垢。實是妙美虛空彥云者歟、白給矣。爾海神自出見而、此人者、天津日高之御子、虛空津日高也云而、卽奉率入內而、敷美智皮之疊八重、亦絕疊八重敷其上而、奉坐其上、崇敬拜奉慰而、具百取机代物而、爲御饗、卽令婚其御女豐玉毘賣而。天神之御子。到坐此間由者。奈何問奉給矣。爾於其大神備語給其兄之責失鉤之狀矣。

〔一五六〕故是以海神、悉召集大小之魚等而、若有取此鉤魚乎。過問之時、諸魚等僉白不識之中。一魚白之。口女久有口病而不參來。於喉有鯁而、物不得食愁言。故必是取也。白矣。故卽召來口女而、探其喉、則果有失鉤矣。爾海神制云、儞口女、從今以往、勿呑餌、勿預天神之御子之御饌云矣。卽以口女魚不進御饌者。此其事本也。

〔一五七〕於是火遠理命、娶豐玉毘賣命而、留住其國、纏綿篤愛而已、經三年矣。然彼處雖安樂處、仍有憶鄕之情、思其初事而、爲大一歎矣。故豐玉毘賣命、聞其御歎而、白其父言。三年雖住給、恆無歎事而。今夜悽然、爲大歎一聲者、若有何由歟、白給。則其父大神、問其御聟夫曰、今旦聞我女之語云、則三年雖坐、恆無歎事而、今夜爲大歎

〔貧鈎〕貧乏になる意の呪語也「まぢ」は「まづし」と同系の語也。

〔淤煩鈎〕鬱悒になるべき意の呪語也鬱悒の意の古語を「おほほし」といふ事、萬葉集等に多く見えたり、日本紀には「大鈎」と清音に書けり。

〔須須鈎〕日本紀には「踉蹡鈎」(ススチ)とあり、よろめく病となる意の呪語也

〔宇流鈎〕日本紀には「癡鈎」と書きて「うるけち」と訓ませたり、癡愚となるべき意の呪語也

〔上國〕海宮より此の國土を指していへる詞也。

焉白也。天神之御子。若欲還鄕歟問之則。火遠理命對曰。然矣。爾海神。取出其鈎而。淸洗而立奉之時。思則潮滿珠。思則潮涸珠。幷二箇。副其鈎而奉進之。敎之曰。以此鈎給其兄之時。陰言狀者。此鈎者。貧鈎。淤煩鈎。須須鈎。宇流鈎也。詛言而。三下唾而。於後手投棄之。可授賜。向勿授之。白而。復奉敎。用珠之法而。其兄作高田則。汝命者。可營洿田。其兄作洿田則。汝命者。可營高田。然爲之則。吾掌水故。三年之閒。必其兄。貧窮焉。若其恨然爲之事而。攻戰則。淸潮滿珠。則潮忽滿。然爲而沒溺。若其悔而。愁請則。淸潮涸珠。則潮自涸。又其兄。出海而。爲釣則。汝命者。在海濱而。作風招。如此則。吾起瀛風邊風。起奔波而溺惱之。如此而令惚苦則。其兄自然。當伏焉白給矣。

〔一五八〕　於是大綿津見神。復白之。天神御子之。臨吾處之欣。何日忘之。皇美麻命。雖隔八重之隈路。時相憶而。勿棄置也。白而。卽悉召集鰐等而。問曰。今天津日高之御子。虛空津日高。爲將出幸上國。誰者。幾日送奉而。覆奏焉。問之矣。故各。隨身之長短。限日而白之中。一尋和邇。白吾者。一日送奉而。可還來矣。故告其一尋鰐。然則汝可送奉。若渡海中之時。勿令惶畏也。告而。乃奉載其和邇之頸而。送出奉矣。故如期。一日之內送奉之。其鰐將返之時。解御佩之紐小刀而。著其頸而返給矣。故其一尋鰐者。於今謂佐

比持神也。

〔一五九〕爾火遠理命。受其珠與鉤而。歸來本宮而。備如海神之敎言而。先與其鉤鉤矣故自爾後。其兄火須勢理命。日稍兪貧窮而。更起荒心而迫來。將攻之時。出潮滿珠則。潮滿溢而。其兄沒溺。因愁請云。吾奉事汝而爲奴僕。願救活云矣。因出潮涸珠則。潮自涸而。其兄平復。已而後。改前言而。吾者汝之兄也。如何爲人兄而。事弟耶云之時。火遠理命。復出潮滿珠則。其兄見之。走登高山。爾其潮。亦沒山。緣高樹則。潮亦沒樹。兄慶窮途而。無所逃去。故出潮涸珠而救之。亦其兄之爲鉤時。火遠理命。居海濱而嘯之則。迅風忽起而。其兄溺苦而。無可生由之故。遙請弟命曰。汝久居海原則。必有善術。願救之。若活給吾則。自今以往。吾生兒之八十連屬。不離汝命之御垣邊。爲晝夜之守護人。爲狗人而。仕奉也白矣。於是火遠理命。停給嘯則。風亦吹息焉。

〔一六〇〕故火須勢理命。知弟命之有神德而。欲自伏辜而。火遠理命。仍御心不解而。不與其言。於是火須勢理命。著犢鼻。以赭塗掌中及面而。告云。吾如此汚身焉。永當爲汝命之俳優者云而。乃擧足踏行而。學其溺苦之狀而。初潮漬足時者。爲足占。至膝時者。擧足。至股時者。走廻。至腰時者。捫腰。至腋時者。胸置手。至頸時者。擧手飄掌之狀而。

〔佐比持神〕「さひ」は「さみ」と同意の語にして「さ」は接頭語「ひ」は刀身をいふ詞也。神は鰐が皇子を送り奉れる功德によりてかく稱せし也。

〔兄〕同母兄の意也「いろ」は親愛の意といひ、また「家等」(イヘ)の轉約なりともいふ。

〔嘯〕口をすぼめて聲を出すをいふ、和訓栞には「うそ鳥の鳴くが如くするをいふ」とあり。

〔狗人云々〕この神の子孫は後世隼人といひて、帝都に出で、宮内の守護に加はり、行幸には駕に從ひて、狗に代りて吠ゆる事を掌り、また俳優の事を以て仕へ奉れり。

〔吾田小橋君〕吾田は氏にして、君は尸也。

〔從容〕「おもぶる」は「おもむろ」の古語也。

〔萱草〕屋根を葺くに用ふる草類の總名にして、一種の草名には非ず。

〔甍〕「いらか」は「鱗」(イロコ)の轉也、屋根に葺く瓦の類をいふ。

〔竊伺〕「かきまみ」の「かき」は接頭語にして、「まみ」は「間見」の義、卽ち物の隙間より窺ひ見るをいふ。

〔海坂〕陸と海との境界を比喩していへる也。

稽首白矣。故至于今。是裔之隼人等。不離天皇命之宮墻之傍。代吠狗而。亦其溺時之、種種之態不絶仕奉也。是世人。不債失針事本也。故此火須勢理命者。吾田小橋君。阿多隼人。阿多御手犬養。大角隼人。日下部二見首。坂合部宿禰等祖也。

【一六一】故於先。火遠理命。自海宮將還坐之時。豐玉毘賣命。從容語曰。吾已有身。天神之胤。非可產奉海中。故當產之時。將就君之御處。風急濤峻之日。於海濱。造產屋而、相待也白給矣。故火遠理命。還坐而。全以鵜羽爲萱草。作產屋而待之。爾其產屋之甍。未萱合而。豐玉毘賣命。馭大龜而。光海原。冒風波而。如先期。參來焉。時孕月已滿之故、御腹難忍而。不待萱合而。入坐產殿矣。爾方產之時。白其日子言。吾產之時。勿見吾焉白給矣。火遠理命。思奇其言而。竊伺則。化八尋熊和邇而。匍匐委蛇矣。卽見驚畏而。遁退給矣。

【一六二】爾豐玉毘賣命。知其伺見之事而。以爲心恥而。白曰。吾恒通海路而。欲往來然。伺見吾形給之。甚怍事也白而。又其御子者。裹眞床覆衾及草。生置波瀲而。自今以往。吾奴婢至君處則。勿放還。君奴婢。至吾處亦。不還云而。去之時。火遠理命就坐而。問御子名者。何稱者當可者。答白之。宜號日子波限建鵜草葺不合命言訖而。卽塞海坂

而。徑還入海鄕坐矣。此海陸不相通之緣也。

〔一六三〕故是彥波瀲武鸕鷀草葺不合命之生坐之時。大綿津見神之子。振魂命四世孫。天忍人命。陪侍供奉而。作箒掃蟹。仍掌鋪設矣。故遂爲職號而云蟹守。是者掃部連等之祖也。又取他婦人而。爲乳母湯母及飯嚼湯坐。備行諸部而奉養焉。此世取乳母而。養兒之緣也。亦子武位起命。此命之子。謂椎根津比古命。此者大和國造。大和直。久比岐國造。明石國造。青海首等之祖也

〔一六四〕然後者。豐玉毘賣命。雖恨伺情事。不得忍戀心而。因治養其御子之緣而。附其弟玉依毘賣命而。獻歌之。其歌云。阿加陀麻波。袁佐閇比迦禮杼。斯良多麻能。伎美何余曾比斯。多布斗久阿理祁理。一傳云。阿加陀麻廼。比加理波阿理登。比登波伊閇杼。伎美賀余曾比斯。多布斗久阿理祁理。爾其日子遲。答給之御歌云。意伎都登理。加毛度久斯麻邇。和賀韋泥斯。伊毛波和須禮士。余能許登碁登邇。號此二首曰擧歌。故日子穗穗手見命者。於高千穗宮。五百八十歲坐而。崩坐矣。御陵者。卽在其高千穗山之西。高屋之山上也。

〔一六五〕天津日高日子波限建鸕鷀草葺不合命。御合其御姨。玉依毘賣命而。生坐御子之名者。五瀨命。亦云彥五瀨命。次稻氷命。亦云彥稻飯命。次御毛沼命。亦云三毛入野命。次若御毛

〔乳母〕日本書紀纂疏に「謂ニ以レ乳昭レ兒者ニ」とあり「おも」といふは梵語「阿摩」の轉なりといひ、或は「阿母」の字音なりといへり。

〔湯母〕日本書紀纂疏に「掌ニ湯藥ニ之人ニ」とあり。

〔飯嚼〕日本書紀纂疏に「嚼レ飯哺レ兒者」とあり。

〔湯坐〕日本書紀纂疏に「洗ニ浴兒ニ者」とあり、古事記傳にもかく見えたり

〔阿加陀麻云々〕赤玉は緒さへ光れど白玉の君が裝ひし貴くありけり、の意也。

沼命。亦云豐見毛沼命。亦御名神倭伊波禮毘古命。亦云神倭磐余彦穂穂手見命。亦名狹野命。凡四柱坐矣。

後久坐而。日子波限建鵜草葺不合命。於西州之宮崩坐矣。因奉葬日向之吾平山上之陵焉。

〔西州之宮〕古事記に「日子穂々手見命者、坐高千穂宮」伍佰捌拾歳云々」とある高千穂宮を指せり。

〔吾平山〕今の大隅國肝屬郡吾平郷上名村の地也。

古史成文 三之巻 終

異稱日本傳

異稱日本傳序

學若稽。大日本國者。神靈所扶。自開闢神聖出。而崇尚其道。神明其位。拓土貽統。傑於百派千流朝宗之中。中華以爲禮義之國。質直有雅風。吳敗姫氏來奔。秦暴徐福逃入。至若任那斯盧屈膝、魯侯赤帝之後莫不依歸。此豈得非神道文明。有仁民愛物之政哉。然質文衰盛。不能無殊、故異邦之書。隨時志我方宜美惡。居多。昔舍人親王。撰日本書紀。往々引以備參考。余亦竊比。以三餘之暇常閱載籍。其間得我遺事則集錄之。而諸書之所述是非混淆。虛實紛糅。不知而作者有之、豈可盡信乎。當主我國記徵之而論辨取舍則可也。於是不自揆加今按釋同異正嫌疑。有餘義則必兼注之。分爲上中下三卷。上卷集漢魏晉宋齊梁隋唐五季宋元書。中卷集明書。下卷集斯盧書。名曰異稱日本傳。異稱者取諸異邦之人稱之之語也。考索不該洽。未必集成。惟爲同志艱於考據不能正妄謬者。述之而已矣。

元祿戊辰九月己亥　　西峰散人自序

異稱日本傳卷上一引用書目

山海經今按中引二釋日本紀。并纂疏。論語。尚書。本朝文粹一。

史記

後漢書今按中引二舊事本紀。日本書紀。萬葉集。古語拾遺。蕉堅藁。熊野記等一。

論衡

魏志今按中引二延喜式。類聚三代格一。

呉志今按中引二風土記。源氏物語等一。

晉書今按中引二新撰姓氏錄。政事要略。維摩會緣起。史記。蕉丁子抄。惠命院僧正記。神皇正統記一。

續博物志

宋書

南齊書

南史

北史今按中引二公式令。三代實錄一。

梁書

文選

述異記今按中引二神異經一。

玉篇

隋書

新唐書今按中引二續日本紀。東征傳。日本後紀。神鏡抄。東海一漚集。空海廣傳。性靈集。朝野群載。續日本後紀。類聚國史。令集解等一。

卷上二引用書目

舊唐書今按中引二淮海集一。

曲江集

杜佑通典

周禮註疏今按中引二儀式。白虎通。諸神記。度會延佳問答一。

唐詩鼓吹今按中引二懷風藻。元亨釋書。唐決集等一。　　西陽雜俎今按中引二西域記一。

李太白詩今按中引二古今和歌集一。　　杜子美詩

白氏長慶集後序今按中引二江談抄、金澤文庫文集。江吏部集。詠歌大概一。　　法苑珠林

禪月集　　義楚六帖

宋史今按中引二王年代記、拾芥抄、萬葉集、鎮座本記。度會荒木田系圖。兵範記。宇佐記。公卿補任、古事記傳曆。釋家官班記。菅家文草、菅家傳、百練抄。無題詩集。小右記、瑞像記。東齋隨筆。兼好法師記一。

文獻通考　　雲笈七籤

卷上二引用書目

太平御覽　　太平廣記今按中引二邢智三卷書。高名錄。稗海。宊俊蔭(ウツボトシカゲ)一。

文苑英華今按中引二三體詩。字彙、禮記。靈應記、六家抄註。秘笈新書一。　　皇朝類苑今按中引二源平盛衰記。椎林遺芳鈔、道長公記。夜鶴庭訓抄。歷朝故事一。

歐陽全集今按中引二司馬溫公集一　　玉海

書言故事　　米元章書史

中華古今註　　鼠璞

菊譜一本賞二白菊一事在二此條一。　　鶴林玉露

僧史略　　釋氏資鑑今按中引二善隣國寶記一。

敎行錄　釋門正統

宋高僧傳　傳燈錄今按中引二神社考一。

普燈錄今按中引二五燈會元一。　佛祖統紀今按中引二日本靈異記一

元史今按中引二帝王編年集成。藤原經長記等一。　居家必用事類

薩天錫雜詩今按中引二菅家後草一。　書史會要幷補遺今按中引二簾中抄一。

圖繪寶鑑今按中引二著聞集半陶藁等一。　瀛奎律髓

韻府羣玉　事文類聚今按中引二集事淵海一。

卷中一引用書目

皇明資治通紀今按中引二康富記。翰林葫蘆集一。　明政統宗

皇明實紀

卷中二引用書目

兩朝平攘錄今按中引二東鑑。續古事談等一。

卷中三引用書目

高皇帝御製文集　蘿山集今按中引二延久官符。尾張國風土記一。

大明一統志今按中引ニ新猿樂記ー。
大明會典
紀効新書
續說郛
唐詩訓解
月令廣義
劉氏鴻書今按中引ニ寶基本紀。閑耕餘錄ー。
萬姓統譜
瑯琊代醉編
三才圖會今按中引ニ九曆西宮記ー。
五燈會元續略今按中引ニ夢窓年譜。天龍寺紀年考ー。
續釋鑑稽古略
夢觀集
適情錄
玉煙堂今按中引ニ體源抄ー。
醫學綱目今按中引ニ釋氏要覽。證治準繩ー。
文房器具箋
本艸綱目
五雜組(俎カ)
潛確類書

卷中四引用書目

圖書

卷中五引用書目

圖書編今按中引ニ九州軍記等ー。

卷中六引用書目

武備志今按中引二眞言傳。皇字沙汰文等一。

卷中七引用書目

續文章正宗今按中引二綱鑑。性理大全一。

續資治通鑑綱目今按中引二神祇本源一。

大學衍義補

聽雨紀談

五倫書

不求人

皇明世法錄今按中引二袋中法師記。南浦文集等一。

普陀山志今按中引二道元禪師傳一。

遵生八牋

事林廣記

唐詩歸

明詩選

唐類函

博物典彙

音韻字海

大明一統賦

儷語編類

弇州稿選

卷中八引用書目

蒼霞草

獻徵錄

登壇必究有ニ愛宕山事一。今按中引ニ京華集。麗氣記 台記等一。

卷下一引用書目

東國通鑑今按中引ニ元元集一。異國號ニ加羅一事在ニ此卷一。

卷下二引用書目

東國通鑑今按中引ニ仁智要錄等一。

卷下三引用書目

三國史記今按中引ニ四聲通解一。
三韓詩龜鑑

慕齋集今按中引ニ朝鮮八道地圖一。
東文選今按中引ニ造化論。華嚴經等一。

晉山世稿
東人詩話

三綱行實圖
續三綱行實圖

大平通載

卷下四引用書目

經國大典
大典續錄

神應經序今按中引ニ新續古今和歌集。覆載萬安方一。
海東諸國記今按中引ニ長寬勘文儀式帳。御敎書案。山槐記 應仁記等一。

懲毖錄

異稱日本傳 巻上一

〔山海經〕十八卷あり、夏の禹王或は伯益の撰と云ふ、隋志以來地理書の類に加ふるも、神怪奇談小說に類す

〔論衡〕原本八十五篇今其の一を佚す三十卷あり、漢の王充世俗を憤嫉して、勸善黜惡に資せんとして作りし者也。

〔卜部兼方〕國學者也一に懷賢に作る平野社預第十三世にして釋日本紀の著者也。

〔藤原兼良〕藤原經嗣子、一條氏、神道に通じ、佛書に抄る學者也。

山海經卷第十二海內北經

南倭北倭屬燕。晉郭璞註。倭國在帶方東。大海內。以女爲主。其俗露頂。衣服無針。以丹朱塗身。不妬忌。一男子數十婦也。

今按。王充論衡曰。禹益並治洪水。禹主治水。益主記異物。海外山表。無遠不至。以所聞見作山海經。觀此則山海經者。益之所作。堯時之書也。山海經有倭名。則倭名舊矣。凡異邦人以我朝名倭。此爲權輿乎。然據我舊記。則倭名爲起於漢時矣。卜部兼方日本書紀釋曰。弘仁私記序曰。日本古者謂之倭國。但倭義未詳。或云。取我之音。漢人所名之字也。我音。此曰話伽。藤原兼良日本書紀纂疏曰。舊說吾邦之人。初入漢。漢人問謂。汝國名如何。吾答曰。謂吾國耶。漢人即取吾字之和訓。命之曰倭。見林以漢朝人言語不通。不曉我朝人謂吾國耶之意。不能再問。訛傳倭也。日本仲哀天皇崩。神功皇后攝政而征三韓。漢晉人能知之。故曰。以女爲主。蓋倭字從女从人。乃以女爲主之義。而以所訛聞之不爲音也。以一時事爲國號者。非是。或國人倭作和。音義同。南倭北倭者。日本自遼東則南也。自吳越則北也。故曰南倭曰北倭。屬燕者非也。帶方會稽郡名。今八閩地方。露頂禮也。見尊長取笠及巾。猶烏蒙夷人。相見去幘。雲南尋甸軍民。挂笠背之類。衣服無針功。

魏志曰、男子衣横幅、但結束相連略無縫。婦人作衣如單被。穿其中央、貫頭衣之。故謂衣服無針功歟。然我有針功。諸州作針。如姉小路針。以便于女功。以丹朱塗身。婦人塗燕脂。爲面色之義歟。燕脂我國自古有之。未聞以丹朱塗身。但我神代。兄火酢芹命知弟火折尊德欲自伏辜。而弟有慍色、不與共言。於是兄著犢鼻、以赭塗掌塗面。告其弟曰。吾汚身如此。永爲汝俳優者。事詳見日本書紀。郭氏傳聞此事。訛云爾。不妬忌。一男子數十婦、後漢書曰、大人皆有四五妻、其餘或兩或三。女人不淫不妒。正此意也。然此亦非定事。傳聞之訛也。日本國號古來甚多。曰豐葦原千五百秋之瑞穗國、曰秋津洲、曰日本國。曰浦安國、曰細戈千足國。曰磯輪上秀眞國。曰玉牆內國。曰虛空見日本國。以我朝神聖之所名也。曰倭國、曰倭面國、曰倭人國。曰耶馬臺國。曰姬氏國。曰扶桑國。曰君子國。此異邦之所稱也。君子之號本于論語云、子欲居九夷。或曰。陋、子曰、君子居之、何陋之有。范曄以爲。東夷天性柔順、異於三方之外。故孔子悼道之不行、乘桴浮於海、欲居九夷。朱熹意與此不同。云。君子所居、則化、何陋之有。我三善淸行、雖以九夷爲日本事。見文註。明漳本淸。以日本爲九夷之一。然則九夷、獨不可爲日本事。且從朱熹說、則孔子語。非貴九夷之義。由是言之、不可以此爲口實也。況山海經。並擧倭君子之國、則倭與君子之國相異明甚。曰。大荒東經曰、有君子之國。其人衣冠帶劍。註。亦使虎豹好謙讓也。如衣冠帶劍好謙讓。雖似我國風。而我國無使虎豹。後漢書曰。無虎豹是也。

史記卷之六。秦始皇本紀第六

漢　太史令　司馬遷　撰

（火折尊）彥火々出見尊の一名也、瓊瓊杵尊の御子、御母は吾田鹿津姬、神武天皇の御祖父に當り給ふ。

（朱熹）宋の世、健寧の人、松の子、字は元晦、世に之を朱子と云ふ。

（三善淸行）醍醐天皇頃の人、才學時輩を超え、遂に參議兼宮內卿に任す。

（史記）漢の司馬遷の撰、百三十卷あり。

（秦始皇帝）秦は紀元四百十五年より五十三年に至る支那王朝の名、始皇帝は其第一世の天子、我が孝靈天皇の頃の人也。

（司馬遷）漢代の人字は子長、武帝の時太史令となる。

方士徐市等入海求神藥。數歲不得。費多恐譴乃詐曰、蓬萊藥可得、然常爲大鮫魚所苦。故不得至。願請善射與俱。見則以連弩射之。始皇夢。與海神戰如人狀。問占夢博士曰。水神不可見、以大魚鮫龍爲候。今上禱祠備謹。而有此惡神。當除去。而善神可致。乃令入海者齎捕巨魚具。而自以連弩候大魚出射之。自琅邪北至榮成山弗見。至之罘見巨魚。射殺一魚。遂並海西至平原津而病。

又卷之一百一十八。淮南王安傳。

昔。秦絶先王之云云、又使徐福入海求神異物。還爲僞辭曰。臣見海中大神言曰。汝西皇之使邪、臣答曰。然。汝何求。曰。願請延年益壽藥。神曰、汝秦王之禮薄。得觀而不得取。即從臣東南至蓬萊山。見芝成宮闕。有使者。銅色而龍形。光上照天。於是臣再拜。問曰。宜何資以獻。海神曰、以令名男子。若振女與百工之事。即得之矣。秦皇帝大說遣振男女三千人資之五穀種種百工而行。徐福得平原廣澤。止王不來。

今按。太史公所說如此。而本紀曰。徐市列傳曰。徐福其名不同。云爲亦異。其所止惟言平原廣澤。不言地名。後漢書以爲夷洲澶洲。北史及隋書。以秦王國爲夷洲。云。不能明也、圖書編別載徐福島。然義楚六帖。歐陽全集。太平御覽。羅山集。世法錄等書。指爲日本之地。而此日本傳引義楚六帖等。故舉其所因循。王字非也。徐福來于我爲氓。詳見後漢書今按。見林亦謂。日本者神國也。徐福曰。海中大神似能言日本風。又推古天皇上隋帝書曰、東天皇敬白西皇帝。西皇帝者。蓋本于西

〔淮南王安傳〕淮南王、安の傳也、淮南は姓劉、名は安、前漢の人也、淮南子二十一卷の著あり。

〔徐福〕國史略に「孝靈天皇七十二年、秦人徐福來、云々或云、止ニ富士山ニ、或云、熊野山有ニ徐福祠ー」とあり。

〔蓬萊山〕支那傳說三神山の一也、一に蓬壺とも云ふ、勃海中に在りと云ふ。

〔北史〕唐の代、李延壽の撰にして、百卷あり。

〔隋書〕唐の代、魏徵等の撰にして、八十五卷あり。

〔武帝〕我が開化天皇御宇の頃、西漢七代の帝たり。

〔光武〕我が垂仁天皇御宇の頃、東漢を興し洛陽に都す前漢高祖六世の孫也。

〔印綬〕支那にて官印を帶ぶる緒を云ふ、こゝに光武の賜ひし印授とは、所謂「委奴國王印」の刻あるものにして、天明四年二月二十三日、筑前國那珂郡滋賀島より出でたる金印これなるべしと云ふ。

〔安帝〕我が景行天皇御宇の頃東漢六代の主たり。

〔永初元年〕我が紀元七百六十七年即ち景行天皇の三十七年に當れり。

皇之語也。

後漢書一百一十五。東夷列傳第七十五　宋宣城大守范曄撰　唐章懷太子賢注

倭在韓東南海中。依山島爲居。凡百餘國。自武帝滅朝鮮、使驛（劉攽曰、使驛按當作使譯。）通於漢者三十許國。國皆稱王。世世傳統。其大倭王居邪馬臺國。（按今名邪摩惟音之訛也）樂浪郡徼去其國萬二千里。去其西北界狗邪韓國七千餘里。其地大較在會稽東冶之東。與朱崖儋耳相近。故其法俗多同。土宜禾稻麻紵蠶桑。知織績爲縑布。出白珠青玉。其山有丹。土氣溫暖。冬夏生菜茹。無牛馬虎豹羊鵲。（鵲或作雞。）其兵有矛楯木弓竹矢。或以骨爲鏃。男子皆黥面文身。以其文左右大小別尊卑之差。其男衣皆橫幅。結束相連。女人被髮屈紒。衣如單被。貫頭而著之。並以丹朱坋身。（說文曰、坋塵也。音蒲頓切。）如中國之用粉也。有城柵屋室。父母兄弟異處。唯會同男女無別。飲食以手。而用籩豆。俗皆徒跣。以蹲踞爲恭敬。人性嗜酒。多壽考。至百餘歲者甚衆。國多女子。大人皆有四五妻。其餘或兩或三。女人不淫不妒。又俗不盜竊。少爭訟。犯法者沒其妻子。重者滅其門族。其死停喪十餘日。家人哭泣不進酒食。而等類就歌舞爲樂。灼骨以卜。用決吉凶。行來度海。令一人不櫛沐。不食肉不近婦人。名曰持衰。若在塗吉利則雇以財物。如病疾遭害。以爲持衰不謹。便共殺之。光武中元二年。倭奴國奉貢朝賀。使人自稱大夫。倭國之極南界也。光武賜以印綬。安帝永初元年。倭國王帥升等。獻生口百六十人。願請見。桓靈間倭國大亂。更相攻伐。歷年無主。有一女子。名曰卑彌呼。年長不嫁。事鬼神道。能以妖惑衆。於是共立爲王。侍婢千人。少有見者。唯有男子一人。給飲食傳辭語。居處宮室。樓觀城柵皆持兵守衛。法俗嚴峻。自

女王國東度海千餘里至狗奴國。雖皆倭種而不屬女王。自女王國南四千餘里。至朱儒國。人長三四尺。自朱儒東南行船一年。至裸國黑齒國。使驛所傳。極於此矣。會稽海外有東鯷人。（鯷音達奚切。）分爲二十餘國。又有夷洲及澶洲。傳言。秦始皇遣方士徐福。將童男女數千人入海。求蓬萊神仙不得。（事見史記。）徐福畏誅不敢還。遂止此洲。世世相承有數萬家。人民時至會稽市。會稽東冶縣人有入海行遭風。流移至澶洲者。所在絕遠。不可往來。（沈瑩臨海水土志曰。夷洲在臨海東南。去郡二千里。土地無霜雪。草木不死。四面是山谿。人皆髠髮穿耳。女人不穿耳。土地饒沃。既生五穀。又多魚肉。有犬尾短。如麢尾狀。此夷舅姑子婦。臥息共一大牀。略不相避。地有銅鐵。唯用鹿格。爲矛以戰鬭。摩礪青石以作弓矢。取生魚肉雜貯大瓦器中。以鹽鹵之。歷月餘日。仍啖食之。以爲上肴也。）

又卷第一下。光武帝紀第一下

中元二年春正月辛未。東夷倭奴國王。遣使奉獻。（倭在帶方東南大海中。依山島爲國。）

又卷第九十。鮮卑傳

光和元年冬。又寇酒泉。緣邊莫不被毒。種衆日多。田畜射獵不足給食。檀石槐乃自徇行。見烏集秦水。廣從數百里。水停不流。其中有魚。不能得之。聞倭善網捕。於是東擊倭人國。得千餘家。徙置秦水上。令捕魚。以助糧食。

今按。邪馬臺國大和國也。古謂大養德國。所謂倭奴國也。邪馬臺大和和訓也。自神武天皇至光仁天皇。都大和國處處。范曄記我風俗。是非混淆。無牛馬者非也。神代既有牛馬。出舊事本紀。日本書紀。無虎豹者是也。羊鵲鷄皆有之。灼骨以卜者。灼鹿肩骨以卜也。名太占。或曰肩燒卜。萬葉集

〔中元二年〕我が紀元七百十七年、即ち垂仁天皇の八十六年に當れり。

〔光和元年〕我が紀元八百四十年、即ち成務天皇の五十一年に當れり。

〔倭奴國〕諸說あり藤井貞幹は、筑前國怡土郡なりとし星野恒は、同國宗像郡怡土鄉ありとし、三宅米吉は、同儺縣（今の那珂郡）なりとせり。

〔太占〕上古鹿の肩骨を燒きて卜するを云ふ、龜卜に對して鹿卜とも云ふ「フト」は稱辭、「マニ」は「マ、ニ」の義也、神慮に任せて神慮に從ふ意也。

歌曰、武藏野爾、卜部肩燒肩間爾毛。不新君加名、卜爾出爾計利。謂此也。亦以鵄骨卜、見古語拾遺。光武中元二年、當此土垂仁天皇八十六年。檢我國史無奉貢朝賀事。倭國之極南界者、范氏以大和國爲我國之極南界。非也。紀伊國土佐國薩摩國等、當爲極南界也。安帝永初元年、當景行天皇三十七年。玉海卷一百五十二、永初元年下、有冬十月字。倭國王帥升等、獻生口百六十人。願請見者、景行天皇御諱。大足彥忍代別。所謂帥升等者訛稱也。檢我國史、無獻生口及請見事。日本紀曰、景行天皇四十年夏六月、東夷多叛邊境騷動。天皇詔日本武尊平之。日本武尊受命征東夷。東夷悉平。以所俘蝦夷等獻於神宮。所獻神宮蝦夷等、晝夜喧嘩、出入無禮。時倭姬命曰、是蝦夷等、不可近就於神宮。則進上於朝廷。仍令安置御諸山傍。未經幾時、悉伐神山樹、叫呼隣里、而脅人民。天皇聞之、詔群卿曰、其置神山傍之蝦夷、是本有獸心。難住中國。故隨其情願、令班邦畿之外。是乃播磨讚岐伊豫安藝阿波。凡五國佐伯部之祖也。恐當斯時、亦獻蝦夷於漢乎。然、日本紀不引後漢書。則不可附會也。見非自謂之義。蓋願漢帝見此生口也。孝德天皇時、以蝦夷示唐天子之意與。然古代事、不可以臆見論之也。靈帝光和元年、當成務天皇四十八年。檀石槐事、檢我國史無之。檀石槐東胡人也。蓋此時、蝦夷之地、防禦不備。故異類來侵邊境。若其然也。其後海防甚嚴。霜威肅清。雖蒙古之大軍、不能上陸、終盡溺死海中。卑彌呼者、神功皇后御名、氣長足姬尊、故訛云然。范曄不知我國事、妄傳聞之訛。其失出自陳壽。壽說見下所引魏志中。他則且置焉。所謂以妖惑衆者、慢神也。曄豈知我國是神國乎。況神功皇后之御靈。天神地祇助之。以得三韓

〔鵄〕巫鳥とも書く。古語拾遺に「片巫、志止止鳥」と注せり、又、天武紀九年三月の條白巫鳥の注に「巫鳥此言芝苔々こ」とあり、倭訓栞に、今云ふ「あなじ鳥」なりと見えたり。

〔玉海〕宋の王應麟等勅を奉じて撰す、二百卷あり、天文律曆地理等二十一門に分類せり。二八九頁參照

〔靈帝〕我が成務天皇御宇の頃、桓帝に次いで、東漢十二世の帝たり。

〔三韓〕太古朝鮮半島の南部、卽ち漢江以南に國を建てたる馬韓、辰韓、弁韓の總稱、神功皇后頃には、高麗、百濟、新羅の三國之れに代れり。

〔譽田別皇子〕人皇第十五代應神天皇の御名也、仲哀天皇第四皇子、御母は神功皇后也。

〔熊野新宮〕熊野早玉神社也、今紀伊國東牟婁郡新宮町に鎭座、官幣大社に列す、祭神伊弉諾尊の御子速玉男神也。

〔高血食祠〕高倉下（タカクラジ）祠也、玉勝間に「神藏山は新宮より二町許り東南に有り、社の說に天照大神と高倉下と二柱を祭ると云へり」と見ゆ。

〔熊野三山〕紀伊國熊野坐神社、熊野早玉神社、那智神社を云ふ。

非凡夫私智所窺測也。謹按日本書紀曰。仲哀天皇時。熊襲叛不朝貢。天皇親伐之。有神降教伐新羅國。天皇不用神言而崩。神功皇后傷之。解罪改過。欲知神名。逮于七日七夜。神降告名。乃祭之然後令吉備臣祖鴨別擊熊襲。未浹辰自服。皇后蒙神祇之靈。藉群臣之助。興師西征。時海中大魚浮扶船。大風順吹。不勞艫楫。便到新羅。隨船潮浪遠逮國中。新羅王大恐曰。新羅建以來。未嘗聞海水淩國。若天運盡。國爲海乎。言未訖。船師滿海。旌旗耀日。鼓吹起聲。山川悉震。新羅王曰。吾聞東有神國。謂日本。必其國之神兵也。豈可擧兵以拒乎。乃面縛降於王船之前。皇后解其縛。遂入其國中。封重寶府庫。收圖籍文書。高麗王百濟王。聞斯羅降於日本國。密伺其軍勢。乃知不可勝。自來于營外。叩頭曰。自今以後。永稱西蕃。不絕朝貢。皇后歸自新羅。攝政。立譽田別皇子爲皇太子。觀此則知皇后之神靈。而壽蹕之失自彼矣。夷洲澶洲。皆指日本海島。相傳。紀伊國熊野山下。飛鳥之地。有徐福墳。又曰。熊野新宮東南有蓬萊山。山有徐福祠。近沙門絕海入明。太祖皇帝召見。指日本圖。顧問海邦遺跡。敕賦熊野詩。海詩曰。熊野峰前徐福祠。滿山藥草雨餘肥。只今海上波濤穩。萬里好風須早歸。御製賜和曰。熊野峰高血食祠。松根琥珀也應肥。昔時徐福求仙藥。直到如今竟不歸。見蕉堅藁。所謂徐福祠者。謂蓬萊山祠也。此祠屬熊野大權現。熊野大權現者。神代明神。書於國史式條昭昭也。徐福覩國之光。來此脫於虎豹之秦。死爲神。在熊野三山之間。亦匪直人也。或曰。歐陽永叔日本刀歌曰。徐福行時經未焚。逸書百篇今猶存。劉氏引原始祕書曰。日本之學始於徐福。然則其德可稱之。而爲始我則不信也。

漢　會稽　王充　著

論衡卷第八儒增篇

周時天下太平。越裳獻白雉。倭人貢鬯草。

又卷第十九恢國篇

成王之時。越常獻雉。倭人貢暢。

又卷第五異虛篇

暢草可以熾釀。芬香暢達者。將祭灌暢降神。

又卷第十三超奇篇

暢草獻於倭。珍物產於四遠幽遼之地。未可言無奇人也。

今按。周成王之時。當此土鸕鷀草葺不合尊之代。鬯古暢字。香草也。祭祀酒和灌地。達其氣於高遠。以降神。我朝者神國也。事神之禮至矣。投周以此草。非偶然。嗚呼虎狼之秦。不能得不死之藥。周得此草。其德廣被也。周公佐成王。天下太平。我亦神代河出圖之時乎。我國人知之者。蓋自此始焉。

其投暢草。雖無稽我記。仲任不誣矣。

魏志卷三十倭人傳　晉　平陽侯相陳壽撰述　宋　西鄉侯裴松之集註

倭人在帶方東南大海之中。依山島爲國邑。舊百餘國。漢時有朝見者。今使譯所通三十國。從郡至倭。循海岸水行歷韓國。乍南乍東。到其北岸狗邪韓國七千餘里。始度一海。千餘里至對馬國。其大官曰卑狗。副曰卑奴母離。所居絕島。方可四百餘里。土地山險多深林。道路如禽鹿徑。有千餘戶。

〔成王〕我が紀元四百五十年頃、周王第二世たり。

〔鸕鷀草葺不合尊〕彦瀲建鵜茅葺不合尊の亦名也。彦火火出見尊の皇子、御母は豐玉姬、即ち神武天皇の御父神にましませり。

〔周公〕姬旦を稱す。周文王の子、武王を相けて紂王を伐ち天下を安んず。又成王を輔けて禮を制し樂を作し、以て周家の治をなせり。

〔陳壽〕字は承祚、巴西安漢の人、三國志六十五篇の著あり。

〔末盧國〕肥前國松浦郡也、日本紀「梅豆羅」に作り、古事記並に舊事紀は「末羅」に作る、和名抄に「庇羅、大沼、値嘉、生佐、久利」の鄕名を載せたり。

〔伊都國〕筑前國怡土郡也、日本紀に「伊蘇、伊都、伊覩」等に作り、古事記「伊斗」に作る孝謙天皇天平勝寶八年六月始めて怡土城を築く、和名抄に「飽田、託杜、大野、長野、雲須、良人、石田、海部」の鄕を載せたり。

〔投馬國〕對馬國也

無良田。食海物自活。乘船南北市糴。又南渡一海千餘里。名曰瀚海。至一大國。官亦曰卑狗。副曰卑奴母離。方可三百里。多竹木叢林。有三千許家。差有田地。耕田猶不足食。亦南北市糴。又渡一海千餘里。至末盧國。有四千餘戶。濱山海居。草木茂盛。行不見前。人好捕魚鰒。水無深淺。皆沈沒取之。東南陸行五百里。到伊都國。官曰爾支。副曰泄謨觚柄渠觚。有千餘戶。世有王。皆統屬女王國。郡使往來常所駐。東南至奴國百里。官曰兕馬觚。副曰卑奴母離。有二萬餘戶。東行至不彌國百里。官曰多模。副曰卑奴母離。有千餘家。南至投馬國。水行二十日。官曰彌彌。副曰彌彌那利。可五萬餘戶。南至邪馬臺國。女王之所都。水行十日。陸行一月。官有伊支馬。次曰彌馬升。次曰彌馬獲支。次曰奴佳鞮。可七萬餘戶。自女王國以北。其戶數道里可得略載。其餘旁國遠絕。不可得詳。次有斯馬國。次有巳百支國。次有不呼國。次有姐奴國。次有對蘇國。次有蘇奴國。次有呼邑國。次有華奴蘇奴國。次有鬼國。次有爲吾國。次有鬼奴國。次有邪馬國。次有躬臣國。次有巴利國。次有支惟國。次有烏奴國。次有奴國。此女王境界所盡。其南有狗奴國。男子爲王。其官有狗古智卑狗。不屬女王。自郡至女王國萬二千餘里。男子無大小。皆黥面文身。自古以來其使詣中國。皆自稱大夫。夏后少康之子。封於會稽。斷髮文身。以避蛟龍之害。今倭水人。好沈沒捕魚蛤。文身亦以厭大魚水禽。後稍以爲飾。諸國文身各異。或左。或右。或大。或小。尊卑有差。計其道里。當在會稽東治之東。其風俗不淫。男子皆露紒。以木緜招頭。其衣橫幅。但結束相連略無縫。婦人被髮屈紒。作衣如單被。穿其中央。貫頭衣之。種禾稻。紵麻蠶桑緝績。出細紵縑緜。其他無牛馬虎豹羊鵲。兵用矛楯木弓。木弓短下長上。竹箭或鐵鏃。或

骨鏃。所有無與儋耳朱崖同。倭地溫暖。冬夏食生菜。皆徒跣。有屋室。父母兄弟臥息異處。以朱丹塗其身體。如中國用粉也。食飲用籩豆手食。其死有棺無槨。封土作冢。始死停喪十餘日。當時不食肉。喪主哭泣。他人就歌舞飲酒。已葬擧家詣水中澡浴。以如練沐。其行來渡海詣中國。恒使一人不梳頭。不去蟣蝨。衣服垢汚。不食肉。不近婦人。如喪人。名之爲持衰。若行者吉善。共顧其生口財物。若有疾病遭暴害。便欲殺之。謂其持衰不謹。出眞珠青玉。其山有丹。其木有柚杼。豫樟。楺櫪。投橿。烏號。楓香。其竹篠簳。桃支。有薑橘椒蘘荷。不知以爲滋味。有獮猿。黑雉。其俗擧事行來有所云爲。輒灼骨而卜。以占吉凶。先告所卜。其辭如令龜法。視火坼占兆。其會同坐起。父子男女無別。人性嗜酒。魏略曰。其俗不知正歲四節。但記春耕秋收爲年紀。見大人所敬。但搏手以當跪拜。其人壽考。或百年。或八九十年。其俗國大人皆四五婦。下戸或二三婦。婦人不淫。不妒忌。不盜竊。少諍訟。其犯法輕者沒其妻子。重者滅其門戸。及宗族尊卑各有差序。足相臣服。收租賦有邸閣。國國有市。交易有無。使大倭監之。自女王國以北。特置一大率檢察。諸國畏憚之。常治伊都國。於國中有如刺史。王遣使詣京都。帶方郡諸韓國。及郡使倭國。皆臨津。搜露傳送文書賜遺之物。詣女王不得差錯。下戸與大人相逢道路。逡巡入草。傳辭說事。或蹲。或跪。兩手據地。爲之恭敬。對應聲曰噫。比如然諾。其國本亦以男子爲王。住七八十年。倭國亂相攻伐。歷年乃共立一女子爲王。名曰卑彌呼。事鬼道能惑衆。年已長大。無夫壻。有男弟。佐治國。自爲王以來。少有見者。以婢千人自侍。唯有男子一人。給飲食傳辭出入。居處宮室樓觀。城柵嚴設。常有人持兵守衛。女王國東渡海千餘里。復有國。皆倭種。又有侏儒國。在其

〔籩豆〕籩は竹豆、豆は木豆にて、祭肉を盛る器也。諸語泰作篇に「籩豆之事、則有司存」とあり。

〔槨〕椁に同じ、棺の外郭、卽ち、棺を納るゝ「うはひつぎ」也。

〔龜法〕龜卜の法也。龜甲を燒きて、その割れ方によりて吉凶禍福を判斷する卜法を云ふ、神功皇后の時、中臣烏賊津使主はじめて韓土より此法を傳ふ。

〔下戸〕貧民也、酒多く呑むを上戸と云ふ、財寶豐かなれば多量に呑むを得るより、酒量の弱きものを下戸と云ふを財少き意にも云ひし也。

〔景初二年〕我が紀元八百九十八年神功皇后の攝政三十八年に當る魏國の年號にして、蜀漢の後主延凞元年也。

〔漢文帝〕我が孝元天皇御宇の頃、西漢五代の帝也。

〔蒨絳〕赤色也。蒨は「あかね色」又は、色の鮮なるに云ふ、絳は大いに赤き色にて濃赤を云へり。

〔細斑華罽〕こまかきまだらの美しき毛氈也。

〔丹〕丹砂也 水銀と硫黃の化合物にして、通常濃紅色又は赤褐色也。

〔正始元年〕我が紀元九百年神功皇后攝政四十年に當る魏國の年號也。

南。人長三四尺。去女王四千餘里。又有裸國黑齒國。復在其東南。船行一年可至。參問倭地。絕在海中洲島之上。或絕或連。周旋可五千餘里。景初二年六月。倭女王遣大夫難升米等詣郡。求詣天子朝獻。太守劉夏遣吏將送詣京都。其年十二月。詔書報倭女王曰。制詔。親魏倭王卑彌呼。帶方太守劉夏遣使。送汝大夫難升米。次使都市牛利。奉汝所獻男生口四人。女生口六人。班布二匹二丈。以到。汝所在踰遠。乃遣使貢獻。是汝之忠孝。我甚哀汝。今以汝爲親魏倭王。假金印紫綬。裝封付帶方太守假授。汝其綏撫種人。勉爲孝順。汝來使難升米牛利涉遠道路勤勞。今以難升米爲率善中郎將。牛利爲率善校尉。假銀印青綬。引見勞賜遣還。今以絳地交龍錦五匹。（裴松之集註。臣松之以爲。地應爲綈。漢文帝著皂衣。謂之弋綈。是也。此字不體。非魏朝之失。則傳寫者誤也。）絳地縐粟罽十張。蒨絳五十匹。紺青五十匹。答汝所獻貢直。又特賜汝紺地句文錦三匹。細班華罽五張。白絹五十匹。金八兩。五尺刀二口。銅鏡百枚。眞珠鉛。丹各五十斤。皆裝封付難升米牛利。還到錄受。悉可以示汝國中人。使知國家哀汝。故鄭重賜汝好物也。正始元年。太守弓遵遣建中校尉梯儁等。奉詔書印綬。詣倭國。拜假倭王。幷齎詔。賜金帛錦罽刀鏡采物。倭王因使上表答謝恩詔。其四年。倭王復遣使大夫伊聲耆掖邪狗等八人。上獻生口倭錦。絳青縑。緜衣。帛布丹木𤝔短弓矢。掖邪狗等壹拜率善中郎將印綬。其六年。詔賜倭難升米黃幢。付郡假授。其八年。太守王頎到官。倭女王卑彌呼與狗奴國男王卑彌弓呼素不和。遣倭載斯烏越等詣郡。說相攻擊狀。遣塞曹掾張政等。因齎詔書黃幢。拜假難升米。爲檄告喩之。卑彌呼以死。大作冢。徑百餘步。殉葬者奴婢百餘人。更立男王。國中不服。更相誅殺。當時殺千餘人。復立卑彌呼宗女壹與。年十三爲王。國中遂定。政等以檄告喩壹與。壹與遣倭大夫率善中郎將掖邪狗等二十人。送政等還。因詣臺獻上男女生口

三十人。貢白珠五十孔。青大白珠二枚。異文雜錦二十匹。評曰。史漢著朝鮮兩越。東京撰錄西羌。魏世匈奴遂衰。更有烏丸鮮卑。爰及東夷。使譯時通。記述隨事。豈常也哉。

今按。景初正始魏明帝年號。當我朝神功皇后之時。邪馬壹之壹當作臺。景初二年二。據日本書紀。當作三。國名官名人名多不可曉。女王男王不和者。言忍熊王反也。事見日本書紀。大作冢徑百餘步。殆與我舊記合。按延喜諸陵式。曰狹城盾列池上陵。磐余稚櫻宮御宇神功皇后。在大和國添下郡。兆域東西二町。南北二町。守戸五烟。是也。殉葬者奴婢百餘人者非也。垂仁天皇之時。永禁殉葬。詳見日本書紀。聚類三代格。據此言之。則神功皇后崩時。豈有殉葬乎。宗女壹與事。無稽之言也。神功皇后無皇女。崩後皇太子即位。應神天皇是也。在位四十一年。天下文明。民到于今蒙其澤。何國中不服之有。大抵傳聞之訛居多。日本書紀引魏志。取二三策而已。

吳志卷二　　前人

孫權。黃龍二年春正月。遣將軍衞溫諸葛直。將甲士萬人。浮海求夷洲及亶州。亶州在海中。長老傳言。秦始皇帝。遣方士徐福。將童男童女數千人。入海求蓬萊神山及仙藥。止此洲不還。世相承有數萬家。其上人民。時有至會稽貨布。會稽東縣人。海行亦有遭風流移至亶州者。所在絕遠。卒不可得至。但得夷洲數千人還。

今按。吳孫權黃龍二年。當我神功皇后三十年。明太祖以權伐夷洲。爲伐日本事。見御製文集。故表出于此。然日本書紀不引之。

或問曰。據後漢書。則夷洲澶洲在會稽海外。爲徐福所止之地。以二洲雖列于倭下。然我舊紀無

（忍熊王）仲哀天皇の皇子、母は皇妃大中姫、麛坂皇子と兵を起して神功皇后と爭ふ、武内宿禰の計に陷りて逢坂に敗れ、逃れて水に入りて死す。

（狹城盾列池上陵）大和國生駒郡平城村大字山陵にあり

（添下郡）今大和國生駒郡に併す、神武紀に「層富縣」と見え、和名抄に「村國佐紀 矢田、鳥貝」の郷名を載せたり。

（黃龍二年）我が紀元九百年に當る、吳國の年號也。

此洲名。則似非倭地也。吾子前以爲我海島。今亦引吳志者何謂也。答曰。二洲名雖無所見。諸書多謂徐福來于日本。則以二洲爲日本地可也。參考前後。則其義盡矣。

又曰。我通中國漢時爲始。文字亦興。然王充以爲周時通此說似有理。見我國史。神武天皇以後、紀年月日時分明。由是觀之。蓋我通中國在神代之末至神武天皇通曉文字及應神天皇經學盛行乎。日本之學非始於徐福也。

或又問曰。日本紀曰。聚常世之長鳴鳥。少彦名命適常世國。三毛入野命往常世鄉。遣田道間守于常世國俱指中國否。答曰。常世者據我風土記及古記。則我國處處有之。又指絕域。源氏物語。胡謂常世之類是也。未惟指中國也。

晉書卷九十七四夷列傳第六十七倭人　唐太宗文皇帝　御撰

倭人在帶方東南大海中。依山島爲國。地多山林。無良田。食海物。舊有百餘小國相接。至魏時有三十國通好。戶有七萬。男子無大小。悉黥面文身。自謂太伯之後。又言。上古使詣中國。皆自稱大夫。昔夏少康之子。封於會稽。斷髮文身。以避蛟龍之害。今倭人好沈沒取魚。亦文身以厭水禽。計其道理。當會稽東治之東。其男子衣以橫幅。但結束相連。略無縫綴。婦人衣如單被。穿其中央以貫頭。而皆被髮徒跣。其地溫暖。俗種禾稻紵麻。而蠶桑織績。土無牛馬。有刀楯弓箭。以鐵爲鏃。有屋宇。父母兄弟臥息異處。食飲用俎豆。嫁娶不持錢帛。以衣迎之。死有棺無槨。封土爲冢。初喪哭泣不食肉。已葬舉家入水澡浴。自絜以除不祥。其舉大事。輙灼骨以占吉凶。不知正歲四節。但計秋收之

〔吳志〕三國志の一にして、魏志と同じく、宋の陳壽の撰にかゝれり。

〔常世之長鳴鳥〕鷄を云ふ。

〔少彦名命〕高皇産靈神の御子にて、火國主神と共に天下を造り治め給ひ又禁厭醫藥等の道を教へし神也。

〔三毛入野命〕鵜茅葺不合尊の御子にして、神武天皇と御同胞にませり。

〔田道間守〕垂仁帝十九年常世國に使して、「ときじくのみ」（橘果）を求む、歸り來れば、帝既に崩じ給ふ、田道間守香果を山陵に奉り、慟哭して絕命すといふ。

〔晉書〕二十一史の一、西晉四代五十四年間と、東晉十一代百二年間の史書也。

〔一犬吠虛云々〕潛夫論に「一犬吠形、百犬吠聲、一人傳虛、萬人傳實」とあるに依れり。

〔大日本豐秋津洲〕大彌靈處（オホヤマト）豐明（トヨアキツ）島の義也、我が國の別稱、古事記神代卷に見ゆ。

〔新撰姓氏錄〕中務卿四品萬多親王、右大臣藤原園人、參議同緒嗣、阿部眞勝、三原弟平、上毛野穎人等、嵯峨天皇の勅を奉じて撰ぶ、三十卷也。

時以下年紀一人多壽百年。或八九十。國多婦女、不淫不妒無爭訟、犯輕罪者沒其妻孥、重者族滅。其家舊以男子爲主。漢末倭人亂。攻伐不定、乃立女子爲王。名曰卑彌呼。宣帝之平公孫氏也、其女王遣使至帶方朝見。其後貢聘不絕。及文帝作相又數至。秦始初、遣使重譯入貢。

今按、秦當西晉武帝年號、當我朝神功皇后之時。晉書說我國事、其間與前史有異同、宜參考諸史皆倣此。謂太伯之後者、此爲首出。夫一犬吠虛千犬吠聲、從晉書此言出後史多同然一辭。何其不詳乎。聽者不察引以爲口實、何其惑乎。自天地開闢之初、有我國而號曰大日本豐秋津洲、我君之子。世世傳統。所謂天照大神之神孫也。吳始自太伯世之相後數千萬歲。日本何爲太伯之後哉。按史記吳世家。太伯卒無子。弟仲雍嗣立、後十七世夫差爲越句踐所滅。斯時當我朝孝昭天皇三年。夫差之前。吳不通日本。謹按國史及我諸書、有異域人嚮風慕義。來爲臣民者。其氏族號蕃別。蕃別種類甚多。其中有松野氏。新撰姓氏錄曰松野吳王夫差之後也。夫此吳人來于我之始也、三國時。我通吳日本書紀曰、應神天皇三十七年春二月、遣阿知使主。都加使主於吳。令求縫工女。二使者渡高麗、欲達于吳、更不知道路、乞知道者於高麗。高麗王乃副久禮波。久禮志二人爲嚮導、由是得通吳。吳王與工女兄媛弟媛吳織穴織四人。是也　政事要略第二十五卷。及維摩會緣起曰、大織冠鎌足執政時、百濟禪尼法明來于對馬島、吳音誦維摩經。因吳音曰對馬讀、乃吳音之始起也、不求其端、不訊其末者。幸國曰、吳國風斷髮文身。我俗亦斷髮吳服而多吳音、則太伯之後也。此豈非傳會之說乎。或以官人輩染齒爲文身之義、甚大謬也。男子以倍子鐵漿染齒者、起於鳥羽

院天皇事。具惠命院僧正記。釋圓月作日本史獻于朝。以太伯爲始祖。故有議不行。見蕉了子抄。源親房公神皇正統記。關傳會之說爲太備矣。藤原兼良公亦曰。吳太伯姬姓。逃荊蠻斷髮文身。以避龍蛇之害。而吳瀕東海。本朝俗皆黥面推髻。故稱太伯之後。此蓋附會而言之。然吾國君臣。皆爲天神之苗裔。豈太伯之後哉。號姬氏國者。出誌公讖文。考韻書。姬婦人之美稱。天照大神始祖之陰靈。神功皇后中興之女主。故國俗或假用之。惟依字不依義也。愚亦觀明茅元儀武備志日本考。曰。天村雲命之後也。此又虛妄之言也。世法錄等以爲徐福之後。福乃負來秬來者也。豈爲帝王之祖哉。嗚呼異邦人。山海阻深。不能見我傳紀。惟所據者口說也。宜乎失事實矣。

續博物志卷之五　　晉　隴西　李石　撰

倭。辰。余國。或橫書或左書。或結繩。或鍥木。唯高麗。摹寫穎法。取正中華。

今按。倭日本。辰辰韓也。據東國通鑑。辰韓卽新羅也。冬穴夏巢之時。雖中華不結繩乎。此言元始之質也。至趙宋。我國野人。若愚章草妙。中土能書者亦鮮及。其餘藤原道長。王子手跡等。馳名於中華者甚多。其詳如左。

宋書九十七列傳第五十七夷蠻　　臣　沈約　新撰

倭國。在高麗東南大海中。世修貢職。高祖永初二年。詔曰。倭讚。萬里修貢。遠誠宜甄。可賜除授。太祖元嘉二年。讚又遣司馬曹達。奉表獻方物。讚死。弟珍立遣使貢獻。自稱使持節都督。倭百濟新羅任那秦韓慕韓六國諸軍事。安東大將軍倭國王。表求除正。詔除安東將軍倭國王。珍又求除正倭隋等十

〔釋圓月〕安齋隨筆に「圓月は建武年中の人、」とありて註に「東海一謳集の作者」と見えたり。

〔太伯〕周太王の子にして、王季歷の兄也、武王の時吳國に封ず。

〔天村雲命〕饒速日尊の孫にして、天香語山命の子也、亦の名は天五多底、度會神主等の祖也。

〔宋書〕齊の武帝の永明五年の撰也。

〔高祖〕我が紀元千八十年頃、東晉に代りて宋朝を建つ、武帝と稱す。

〔太祖〕我が紀元千八十年少帝に次いで宋朝二代の帝となる、高祖の子にして文帝と稱す。

（世祖）我が紀元千百十四年より千百二十四年まで、宋朝に帝たり、孝武帝と稱す。

（大明六年）我が紀元千百二十　年雄略天皇の六年に當れり。

（順帝）我が紀元千百三十七年（雄略帝の二十一年）同八年宋朝の帝たり

（昇明二年）我が紀元千百三十八年、雄略天皇の二十二年に當れり。

三人平西征虜冠軍輔國將軍號。詔並聽。二十年。倭國王濟。遣使奉獻。復以爲安東將軍倭國王。二十八年。加使持節都督倭新羅任那加羅秦韓慕韓六國諸軍事。安東將軍如故。并除所上二十三人軍郡。濟死。世子興遣使貢獻。世祖大明六年。詔曰。倭王世子興。奕世載忠作藩外海。稟化寧境。恭修貢職。新嗣邊業。宜授爵號。可安東將軍倭國王。興死。弟武立。自稱使持節都督倭百濟新羅任那加羅秦韓慕韓七國諸軍事。安東大將軍倭國王。順帝昇明二年。遣使上表曰。封國偏遠。作藩于外。自昔祖禰。躬擐甲冑。跋涉山川。不遑寧處。東征毛人五十五國。西服衆夷六十六國。渡平海北九十五國。王道融泰。廓土遐畿。累葉朝宗。不愆于歲。臣雖下愚。忝胤先緒。驅率所統。歸崇天極。道逕百濟。裝治船舫。而句驪無道。圖欲見吞。掠抄邊隸。虔劉不已。毎致稽滯。以失良風。雖曰進路。或通或不。臣亡考濟。實忿寇讎壅塞天路。控弦百萬。義聲感激。方欲大擧。奄喪父兄。使垂成之功。不獲一簣。居在諒闇。不動兵甲。是以偃息未捷。至今欲練甲治兵。申父兄之志。義士虎賁。文武效功。白刃交前。亦所不顧。若以帝德覆載。摧此彊敵。克靖方難。無替前功。竊自假開府儀同三司。其餘咸假授。以勸忠節。詔除武使持節都督。倭新羅任那加羅秦韓慕韓六國諸軍事安東大將軍倭王。

今按。永初元嘉當本朝允恭天皇之時。大明昇明當雄略天皇之時。讃。略履中天皇諱。去來穗別訓。珍。反正天皇諱瑞齒別。瑞珍字形似。故訛曰珍。濟。允恭天皇諱雄朝津間稚子。濟津字形似。故訛稱之。軍郡文獻通考作職。興。安康天皇諱。穴穗訛書興。武。雄略天皇諱。大泊瀨幼武略之也。

南齊書卷五十八列傳第三十九東南夷

梁　臣蕭子顯　撰

〔南史〕南朝四代百七十年間の事を記せるものにして、本紀十卷、列傳七十卷あり。

〔李延壽〕唐の代、相州に生る、字は遐齡、仕へて崇文館學士となり、南北史一百八十卷を作る。

〔大虵〕大蛇也、虵は蛇の俗字也。

〔晉安帝〕我が紀元千五十七年より同七十八年まで在位、東晉十世の帝也。

倭國。在帶方東南大海島中。漢末以來立女王。土俗已見前史。建元元年進新除使持節都督。倭新羅任那加羅秦韓六國諸軍事。安東大將軍倭王武號鎭東大將軍。

今按。南齊高帝建元元年。當我朝淸寧天皇卽位年。天皇諱白髮武廣國押稚日本根子。故略曰倭王武。

南史卷七十九列傳第六十九夷貊下　倭　　唐　崇賢館　學士　李延壽　撰

倭國。其先所出及所在。事詳北史。其官有伊支馬。次曰彌馬獲支。次曰奴往鞮人。種禾稻紵麻。蠶桑織績。有薑桂橘椒蘇。出黑雉眞珠青玉。有獸如牛。名山鼠。又有大虵吞此獸。虵皮堅不可斫。其上有孔。乍開。乍閉。時或有光。射中而蛇則死矣。物產略與儋耳朱崖同。地氣溫暖。風俗不淫。男女皆露髮。富貴者以錦繡雜采爲帽。似中國胡公頭。食飲用籩豆。其死有棺無槨。封土作冢。人性皆嗜酒。俗不知正歲。多壽者或至八九十。或至百歲。其俗女多男少。貴者至四五妻。賤者猶至兩三妻。婦人不淫妒。無盜竊。少諍訟。若犯法。輕者沒其妻子。重則滅其宗族。晉安帝時。有倭王讚。遣使朝貢。及宋武帝永初二年。詔曰。倭讚遠誠宜甄。可賜除授。文帝元嘉二年。讚又遣司馬曹達。奉表獻方物。讚死弟珍立。遣使貢獻。自稱使持節都督。倭百濟新羅任那秦韓慕韓六國諸軍事。安東大將軍倭國王。表求除正。詔除安東將軍倭國王。珍又求除正倭隋等十三人。平西征虜冠軍輔國將軍等號。詔並聽之。二十年。倭國王濟。遣使奉獻。復以爲安東將軍倭國王。二十八年。加使持節都督。倭新羅任那加羅秦韓慕韓六國諸軍事。安東將軍如故。并除所上二十三人職。濟死。世子興遣使貢獻。孝武大明六年。詔

〔百濟〕孝武帝の大明六年は、二十代蓋鹵王の時也

〔新羅〕孝武帝の大明六年は、二十代長壽王の時也。

〔句麗〕高麗也、順帝の昇明二年は、二十代長壽王臣璉の時也。

〔文身國〕三才圖會に「文身國物至賤行不齎糧王居飾以金玉市用珍寶交易」とあり。

〔北史〕北朝の魏より隋に至る四代二百四十二年間の事を記す、本紀十二卷、列傳八十八卷あり。

授與安東將軍倭國王。興死弟武立。自稱使持節都督。倭百濟新羅任那加羅秦韓慕韓七國諸軍事。安東大將軍倭國王。順帝昇明二年。遣使上表言。自昔祖禰。躬擐甲冑。跋涉山川。不遑寧處。東征毛人五十五國。西服衆夷六十六國。陵平海北九十五國。王道融泰。廓土遐畿。累葉朝宗。不愆于歲。道逕百濟。裝飾船舫。而句麗無道。圖欲見呑。臣亡考濟。方欲大擧奄喪。父兄使垂成之功。不獲一簣。今欲練兵申父兄之志。竊自假開府儀同三司。其餘咸各假授。以勸忠節。詔除武使持節都督。倭新羅任那秦韓慕韓六國諸軍事。安東大將軍。梁武帝即位。進武號征東大將軍。其南有侏儒國。人長四尺。又南有黑齒國裸國。去倭四千餘里。船可行一年至。又西南萬里有海人。身黑眼白。裸而醜。其肉美。行者或射而食之。文身國在倭東北七千餘里。人體有文。如獸。其額上有三文。文直者貴。小文者賤。土俗歡樂物豐而賤。行客不齎糧。有屋宇。無城郭。國王所居。飾以金銀珍麗。繞屋爲塹。廣一丈。實以水銀。雨則流於水銀之上。市用珍寶。犯輕罪者則鞭杖。犯死罪則置猛獸食之。有枉則獸避而不食。經宿則赦之。大漢國。在文身國東五千餘里。無兵士。不攻戰。風俗幷與文身國同。而言語異。

今按。南史所記。多與後漢書魏志宋書同。倭滑之滑。當作濟。侏儒。黑齒。裸國。海人。文身。大漢皆異類也。非我神國事。

北史卷九十四列傳第八十二倭國　　唐　崇賢館　學士　李延壽　撰

倭國。在百濟新羅東南水陸三千里。於大海中依山島而居。魏時譯通中國。三十餘國皆稱子。夷人不知里數。但計以日。其國境東西五月行。南北三月行。各至於海。其地勢東高。西下。居於邪摩堆(ヤマト)。則魏

志所謂邪馬臺者也。又云。去樂浪郡境及帶方郡。並一萬二千里。在會稽東。與儋耳相近。俗皆文身。自云。太伯之後。計從帶方至倭國。循海水行歷朝鮮國。乍南。乍東。七千餘里。始度一海。又南千餘里度一海。闊千餘里。名瀚海。至一支國。又度一海千餘里。名末盧國。又東南陸行五百里。至伊都國。又東南百里。至奴國。又東行百里。至不彌國。又南水行二十日。至投馬國。又南水行十日。陸行一月。至邪馬臺國。即倭王所都。漢光武時。遣使入朝。自稱大夫。安帝時。又遣朝貢。謂之倭奴國。靈帝光和中。其國亂。遞相攻伐。歷年無王。有女子。名卑彌呼。能以鬼道惑衆。國人共立爲王。無夫。有二男子。給王飲食。通傳言語。其王有宮室樓觀城柵。皆持兵守衛。爲法甚嚴。魏景初五年。公孫文懿誅後。卑彌呼。始遣使朝貢。魏主假金印紫綬。正始中。卑彌呼死。更立男王。國中不服。更相誅殺。復立卑彌呼宗女臺與爲王。其後復立男王。并受中國爵命。江左歷晉宋齊梁。朝聘不絕。及陳平。至開皇二十年。倭王姓阿每。字多利思比孤。號阿輩雞彌。遣使詣闕。上令所司訪其風俗。使者言。倭王以天爲兄。以日爲弟。天明時出聽政。跏趺坐。日出便停理務。云委我弟。文帝曰。此大無義理。於是訓令改之。王妻姓雞闕三字。有女六七百人。名太子爲（通考爲作謂）利歌彌多弗利。無城郭。內官有十二等。一曰大德。次小德。次大仁。次小仁。次大義。次小義。次大禮。次小禮。次大智。次小智。次大信。次小信。員無定數。有軍尼一百二十人。猶中國牧宰。八十戶置一伊尼翼。如今里長也。十伊尼翼屬一軍尼。其服飾。男子衣裙襦。其袖微小。履如屨形。漆其上。繫之脚。人庶多跣足。不得用金銀爲飾。故時衣橫幅。結束相連。而無縫頭。亦無冠。但垂髮於兩耳上。至隋其王始制冠。以錦綵爲之。以金銀鏤華爲飾。婦人中束髮

〔邪馬臺國〕魏志「耶馬臺」に作る、今の大和國を指して云へり。

〔一支國〕壹岐國也

〔內官有十二等〕日本紀推古天皇の十一年の條に「十二月戊辰朔壬申、始行冠位、大德、小德、大仁、小仁、大禮、小禮、大信、小信、大義、小義、大智、小智、幷十二階」とあるに當れり。

〔伊尼翼〕稍置也、上代地方の職名にして、屯倉のことを掌る、成務天皇の代始めて縣邑に置きたり。

〔軍尼〕國造（クニノミヤツコ）を云へしなるべし。

於後、亦衣裙襦、裳皆有撰攕（通考作襈纖）竹梁以爲梳。編艸爲薦、雜皮爲表、緣以文皮、有弓矢刀矟弩䂎斧。漆皮爲甲、骨爲矢鏑。雖有兵無征戰、其王朝會必陳設儀仗其國樂、日（通考日作戶）可十萬。俗殺人強盜及姦皆死、盜者計贓酬物、無財者沒身爲奴、自餘輕重或流或杖、每訊冤獄、不承引者以木壓膝、或張強弓以弦鋸其項、或置小石於沸湯中。令所競者探之、云、理曲者即手爛。或置蛇瓮中令取之。云、曲者即螫手、人頗恬靜、罕爭訟、少盜賊、樂有五絃琴笛、男女皆黥臂。點面。文身、沒水捕魚無文字。唯刻木結繩、敬佛法。於百濟求得佛經、始有文字。知卜筮尤信巫覡、每至正月一日。必射戲飲酒、其餘節略與華同、好棊博握槊樗蒲之戲、氣候溫暖、草木冬青、土地膏腴、水多陸少、以小環掛鸕鷀項。令入水捕魚、日得百餘頭、俗無盤俎。藉以槲葉、食用手餔之、性質直有雅風、女多男少、婚嫁不取同姓、男女相悅者即爲婚。婦入夫家、必先跨火。（隋書作犬）乃與夫相見。婦人不淫妒。死者斂以棺槨、親賓就屍歌舞。妻子兄弟以白布製服。貴人三年殯。庶人卜日而瘞、及葬置屍船上、陸地牽之。或以小輿。有阿蘇山。其石無故火起接天者。俗以爲異、因行祭禱、有如意寶珠其色青、大如雞卵、夜則有光。云、魚眼睛也。新羅。百濟。皆以倭爲大國、多珍物、並仰之。恒通使往來。大業三年。其王多利思比孤遣朝貢。使者曰、聞海西菩薩天子重興佛法、故遣朝拜、兼沙門數十人、來學佛法。國書曰。日出處天子致書日沒處天子。無恙云云。帝覽不悅。謂鴻臚卿曰。蠻夷書有無禮者、勿復以聞。明年上遣文林郎裴世清。使倭國、度百濟、行至竹島。南望耽羅國。經都斯麻國、迥在大海中。又東至一支國、又至竹斯國、又東至秦王國、其人同於華夏。以爲夷洲。疑不能明也。又經十餘國

〔無文字〕古語拾遺に「蓋聞上古之世、未有文字、貴賤老少、口々相傳、前言往行、存而不忘」とあり。

〔於百濟云々〕欽明紀十三年の條に「冬十月、百濟王聖明王遣西部姬氏達率怒唎斯致契等、獻釋迦佛金銅像一軀、幡蓋若干經論若干卷」とあり。

〔大業三年〕我が紀元千二百六十七年即ち推古天皇の十五年也。

〔竹島〕朝鮮慶尚北道釜山浦沖にある絕影島を云へり。

〔竹斯國〕筑紫國也

〔天御中主尊〕古事記、並に日本紀神代卷一書、古語拾遺等には天地初發の時に成りませる神と傳へり、神名は世の中の主宰の義なり。

〔三代實錄〕宇多天皇、醍醐天皇二世に亘りて勅撰せるものにして、清和陽成光孝三代の史實を錄せり、全五十卷あり。

〔文獻通考〕元の馬端臨の撰、三百四十八卷あり、宋朝の制度を詳述せり。

達於海岸。自竹斯國以東。皆附庸於俀。俀王遣小德何輩臺。從數百人。設儀仗。鳴鼓角。來迎。後十日。又遣大禮哥多毗。從二百餘。郊勞。既至彼都。其王與何清來貢方物。此後遂絕。

今按。卑彌呼事踵後漢書之訛。倭王姓阿每者無稽之言也。蓋天訓阿每。我天神初主。號天御中主尊。異邦人不曉其意。以阿每爲姓。神代纂疏曰。天者所依之處。御者統御也。中者四方之中央。主君也。掌也。此神主於上天之中央。而統御下土也。當以此知天字義矣。本朝風。天子無姓。天子孫子稱王氏。按三代實錄曰。王號乃止於五世。至于六世別賜姓。嵯峨天皇時。皇太子外。諸子賜姓。其後天子曾孫必賜姓。凡姓氏者。爲人臣例也。多利思比孤。舒明天皇諱息長足日廣額。訛曰多利思比孤。開皇二十年。當我推古天皇八年。舒明天皇爲推古天皇後王。故混言之。阿輩雞彌。推古天皇諱豐御食炊屋姬。訛之也。王妻姓雞。字闕。余觀太平御覽。引北史作雞彌沒官。可以補三字闕也。雞彌沒官未詳何轉誤。名太子爲利歌彌多弗利。此亦寄語之訛。今不可辨。內官有十二等。日本書紀所謂冠位十二階也。日本書紀。以德仁禮信義智爲次。北史。以德仁義禮智信爲次。其所次北史爲是。軍尼伊尼翼。亦寄語之訛也。撰檝。文獻通考作儀襈是也。襈蓋今之裾也。藉以槲葉。古人所用。三綱葉之義。雖有盤俎。藉以木葉。乃古之俗也。阿蘇山。在肥後國。山石自燒。火起接天。到于今有信。詳見肥後國風土記。大業隋煬帝年號。大業三年當此土推古天皇十五年。國書曰。日出處天子。致書日沒處天子。證之日本書紀。裴世清歸時國書曰。東天皇敬白西皇帝。蓋謂此也。北史載國書於前。世清歸時。謂其王與世清來者非也。小德何輩臺謂大河內糠手與。大禮哥多毗謂小

〔小野臣妹子〕孝昭天皇の皇子、天足彥國押人命六世の孫米餅搗大使主命の後也、世に近江國滋賀郡小野村に家するを以つて氏となす。

〔通事〕正字通に「通謂之譯」とあり、又周禮秋官の條に「掌邦國之通事、而結其交好」とありて、俗に通譯にたづさはる人と云ふに同じ。

〔蘇因高〕伴信友は「按に小野はサヌ約はス、唐人蘇と譯し、イモコを因高と譯し書たる也」と云へり。

〔難波高麗館〕攝津志に「東生郡三韓館在安國坂上」とあるものこれなるべし。

野妹子與。日本書紀曰。推古天皇十五年。秋七月庚戌。大禮小野臣妹子。遣於大唐。以鞍作福利爲通事。十六年夏四月。小野臣妹子。至自大唐。唐國號妹子臣曰蘇因高。卽大唐使人裴世淸。下客十二人。從妹子臣至於筑紫。遣難波吉師雄成。召大唐客裴世淸等。爲唐客。更造新館於難波高麗館之上。六月丙辰。客等泊于難波津。是日以飾船三十艘。迎客等于江口。安置新館。於是以中臣宮地連麻呂。大河內直糠手。船史王平。爲掌客。秋八月癸卯。唐客入京。是日遣飾騎七十五疋而迎唐客於海石榴市衢。額田部連比羅夫以告禮辭焉。壬子。召唐客於朝庭。令奏使旨。時阿倍鳥臣。物部依網連抱二人爲客之導者也。於是大唐之國信物。置於庭中。時使主裴世淸。親持書兩度再拜。言上使旨而立之。其書曰。皇帝問倭皇。使人長吏大禮蘇因高等。至具懷。朕欽承寶命。臨仰區宇。思弘德化。覃被含靈。愛育之情。無隔遐邇。知皇介居海表。撫寧民庶。境內安樂。風俗融和。深氣至誠。遠脩朝貢。丹款之美。朕有嘉焉。稍暄比如常也。故遣鴻臚寺掌客裴世淸等。稍宣往意。幷送物如別。時阿倍臣出進。以受其書而進行。大伴嚙連迎出承書。置於大門前机上。而奏之。事畢而退焉。是時皇子。諸王諸臣。悉以金髻華著頭。亦衣服皆用錦紫繡織。及五色綾羅。一云。服色皆用冠色。丙辰饗唐客等於朝。九月乙亥。饗客等於難波大郡。辛巳唐客裴世淸罷歸。則復以小野妹子臣爲大使。吉士雄成爲小使。福利爲通事。副于唐客而遣之。爰天皇聘唐帝。其辭曰。東天皇敬白西皇帝。使人鴻臚寺掌客裴世淸等至。久憶方解。季秋薄冷。尊何如。想淸念。此卽如常。今遣大禮蘇因高。大禮乎那利等往。謹白不具。是時遣於唐國學生。倭漢直福因。奈羅譯語惠明。高向漢人玄理。新漢人大國。學

〔南淵漢人請安〕大和志に「高市郡稻淵村、有南淵先生冢、今稱明神冢」とありて、集解に「皇極天皇三年紀、有南淵先生、蓋後歸俗爲儒」と見えたり、

〔梁書〕本紀六卷、列傳五十卷あり、唐の太宗の貞觀三年の勅撰也。

〔姚思廉〕唐朝の萬年縣の人也、　の子、一に姚志廉とも書す、初め隋に仕へて代王の侍讀と爲る、唐兵の隋を討つや善戰それに當る、唐主淵之を義として、仁者と賞し重く用ふ、文學館十八學士の一人と爲り、魏徵と同じく梁陳書を撰す。

問僧新漢人日文・南淵漢人請安。志賀漢人惠隱。新漢人廣齊等并八人也。十七年秋九月。小野臣妹子至自大唐。唯通事福利不來。我國史之詳且盡始此。可以正北史之誤。

又按。舊事紀。日本紀。皆謂隋爲唐。蓋有唐之時撰之。故有此語。猶虞時紀唐堯事言虞書也。國書謂東天皇者。公式令詔書式曰。明神御宇日本天皇詔旨。云々。咸聞。集解古記云。御宇日本天皇詔旨。對隣國及蕃國而詔之辭。問。隣國與蕃國何其別。答。隣國者大唐。蕃國者新羅也。西皇帝者我稱中國天子之辭。史記淮南王安列傳徐福曰。臣見海中大神。言曰。汝西皇之使邪。蓋本於此語也。

梁書卷五十四列傳第四十八諸夷東夷　　唐　散騎常侍姚思廉　撰

倭者自云。太伯之後。俗皆文身。去帶方萬二千餘里。大抵在會稽之東。相去絶遠。從帶方至倭。循海水行歷韓國。乍東乍南。七千餘里。始度一海。海闊千餘里。名瀚海。至一支國。又度一海千餘里。名未盧國。又東南陸行五百里。至伊都國。又東南行百里。至奴國。又東行百里。至不彌國。又南水行二十日。至投馬國。又南水行十日。陸行一月日。至祁馬臺國。即倭王所居。其官有伊支馬。次曰彌馬獲支。次曰奴往鞮。民種禾稻紵麻。蠶桑織績。有薑桂橘椒蘇。出黑雉眞珠青玉。有獸如牛。名山鼠。又有大蛇呑此獸。蛇皮堅不可斫。其上有孔。乍開乍閉。時或有光。射之中蛇。則死矣。物產略與儋耳朱崖同。地溫暖。風俗不淫。男女皆露紒。富貴者以錦繡雜采爲帽。似中國胡公頭。食飲用籩豆。其死有棺無槨。封土作冢。人性皆嗜酒。俗不知正歲。多壽考。多至八九十。或至百歲。其俗女多男少。貴者至四五妻。賤者猶兩三妻。婦人無淫妒。無盜竊。少諍訟。若犯法。輕者沒其妻子。重則滅其宗族。漢靈帝光和

中。倭國亂相攻伐、歷年乃共立一女子卑彌呼爲王。彌呼無夫壻。挾鬼道能惑衆。故國人立之。有男弟佐治國。自爲王少有見者。以婢千人自侍。唯使一男子出入傳敎令。所處宮室。常有兵守衛。至魏景初三年公孫淵誅後。卑彌呼始遣使朝貢。魏以爲親魏王。假金印紫綬。正始中。卑彌死。更立男王。國中不服更相誅殺。復立卑彌呼宗女臺與爲王。其後復立男王。并受中國爵命。晉安帝時。有倭王贊。贊死立弟彌。彌死立子濟。濟死立子興。興死立弟武。齊建元中。除武持節督倭新羅任那伽羅秦韓慕韓六國諸軍事。鎭東大將軍。高祖卽位。進武號征東將軍。其南有侏儒國。人長三四尺。又南黑齒國。裸國去倭四千餘里。船行可一年至。又西南萬里。有海人。身黑眼白。裸而醜。其肉美。行者或射而食之。

今按。此摘後漢書。魏志。晉書。宋書。南史。北史。以爲文也。祁馬臺國祁當作邪。露紒紒同結。南史作髺。山海經註作頂。謂無官位者結髮於後顯露頂也。唐書所謂椎髻。中華古今注所謂隋髻。皆同。以錦繡雜采爲帽者。謂十九階也。日本書紀曰。孝德天皇五年二月。制冠十九階。一曰大織。二曰小繡（織カ）三曰大繡。四曰小繡。五曰大紫。六曰小紫。七曰大華（上脱カ）。八曰大華下。九曰小華上。十曰小華下。十一曰大山上。十二曰大山下。十三曰小山上。十四曰小山下。十五曰大乙上。十六曰大乙下。十七曰小乙上。十八曰小乙下。十九曰立身　天智天皇三年二月。改華曰錦。

文選卷第十四

梁昭明太子蕭統　撰

鮑明遠舞鶴賦。

〔伽羅〕垂仁紀に、「意加羅國」隋書新羅傳に「加羅國」加洛國記に「大駕洛」、又、伽耶國」三國史記に「伽落國」、伽耶」とあるも皆同國也、蓋太古弁韓の地にして今の朝鮮慶尚道地方也。

〔文選〕原本三十卷なりしが、唐の李善之が注を作り、毎卷を分ちて二となし六十卷とす、今傳ふるものこれ也。

〔昭明太子蕭統〕南北朝の頃、梁武帝の太子也、蕭は姓、統は名也。

〔通典〕二百卷あり唐の杜佑撰也、食貨、選擧、職官、禮、樂、兵刑、州郡、邊防の八門に分てり。

〔荊州〕支那湖南省にあり、和漢三才圖會に「禹貢荊州之域、春秋楚郢都」とあり、二州十一縣をなせり。

〔中國〕支那人が自ら其國を稱する語也、書經梓材篇に「皇天既付中國民」とあり。

〔扶桑皮〕扶桑は灌木にして本草綱目に「扶桑產南方、乃木槿別種也、其樹華葉皆如桑」とあり。

市日域以廻鶩。

述異記卷上　　梁　樂安　任昉　著

磅礴山去扶桑五萬里。日所不及。其地甚寒。有桃樹千圍。萬年一實。一說。日本國有金桃。其實重一斤。

今按。扶桑東夷國名。在東海中。人有誤以扶桑為日本別號者。蓋日本近日所出。淮南子曰。日拂于扶桑。故牽合為日本事。戴仲培鼠璞曰。扶桑其地乃在中國東。或謂日出扶桑。以日自東方出耳。猶倭自謂日出處天子耳。觀此則當知扶桑亦近日所出而與日本別矣。又杜佑通典卷第一百八十五東夷上。載日本。卷第一百八十六東夷下。載扶桑。詳說其風土。可以此自知扶桑非日本也。

通典曰。扶桑南齊時聞焉。廢帝永元初。其國有沙門慧深。來至荊州。說云。扶桑在大漢國東二萬餘里。地在中國之東。其土多扶桑木。葉似桐。初生如筍。國人食之。實如梨而赤。績其皮為布。以為衣。亦為錦。作板屋。無城郭。有文字。以扶桑皮為紙。無兵甲。不攻戰。名國王為乙祁。貴人第一者為大對盧。第二者為小對盧。第三者為納咄沙。國王行有鼓角導從。其衣色隨年改易。甲乙年青。丙丁年赤。戊己年黃。庚辛年白。壬癸年黑。有牛角甚長。以角載物。至勝二十斛。車有馬車鹿車。國人養鹿如牛。以乳為酪。有赤梨。經年不壞。多蒲桃。其地無鐵有銅。不貴金銀。市無租稅。其婚姻法。大抵與中國同。親喪七日不食。祖父母喪五日不食。兄弟伯叔姑姊妹喪三日不食。設坐為神

像。朝夕拜奠。不レ制二縗絰一。嗣王立三年不レ視二國事一。自二宋孝武帝大明二年一罽賓有二比丘五人一。遊行至二其國一。始通二佛法像教一。

愚按。讀二通典一而後知二扶桑國風土與レ我甚異一也。我國不レ聞レ多二扶桑一。扶桑國無二城郭兵甲一。我有二城郭甲兵之守一。扶桑國有二牛角勝二十斛一。我無二此異物一。扶桑國有二馬車鹿車一。我無レ之有二牛車一。扶桑國無レ鉄不レ貴二金銀一。我有レ鉄貴二金銀一。扶桑國不レ制二縗絰一。我制二縗絰之輕重一。當レ知扶桑非二日本一也

東方朔神異經曰。東方有二桑樹一焉高八十丈。敷張自輔。其葉長一丈。廣六七尺。其上自有レ蠶作レ繭。長三尺。繰不レ合二一繭一斤一。有レ甚焉長三尺五寸。圍如レ長。

或有下引二此釋扶桑國名義一者上。絶域之事不レ可レ知。又東方朔似レ語レ怪。

大廣益會玉篇卷第三　梁 顧野王 撰

倭烏不切。國名。

今按。倭字義見レ前。

隋書卷八十一列傳第四十六東夷　特進臣魏徴 上(タテマツル)

倭國

倭國在二百濟新羅東南一。水陸三千里。於二大海之中一依二山島一而居。魏時譯通二中國一。三十餘國。皆自稱レ王。夷人不レ知二里數一。但計以レ日。其國境東西五月行。南北三月行。各至二於海一。其地勢東高西下。都二於邪靡堆一。則魏志所謂邪馬臺者也。古云。去二樂浪郡境及帶方郡一並一萬二千里。在二會稽之東一與二儋耳一相近。漢光

〔縗絰〕喪の時に着するさよみの衣服と首と腰につくる麻と也。

〔大廣益會玉篇〕俗に玉篇と云ふ、三十卷あり、爾雅説文と相並びて字書の祖となす。

〔顧野王〕南北朝の頃、呉郡の人也、字は希馮、七歳五經を讀み、九歳にして文を屬せり、陳に歸し、黄門侍郎となる。

〔隋書〕正史にして二十四史の一、帝紀五卷、列傳五十卷、其他禮儀、音樂等の十志ありて全八十卷あり。

〔魏徴〕唐代、下曲陽の人也、字は元成、太宗に仕へて諫儀大夫となり、累進して鄭國公に封ぜらる。

武時。遣使入朝。自稱大夫。安帝時又遣使朝貢。謂之俀奴國。桓靈之間。其國大亂。遞相攻伐。歷年無主。有女子名卑彌呼。能以鬼道惑衆。於是國人共立爲王。有男弟佐卑彌理國。其王有侍婢千人。罕有見其面者。唯男子二人給王飮食。通傳言語。其王有宮室。樓觀城柵。皆持兵守衛。爲法甚嚴。自魏至于齊梁。代與中國相通。開皇二十年。俀王姓阿每。字多利思北孤。號阿輩雞彌。遣使詣闕。上令所司訪其風俗。使者言。倭王以天爲兄。以日爲弟。天未明時。出聽政跏趺坐。日出便停理務。云委我弟。高祖曰。此大無義理。於是訓令改之。王妻號雞彌。後宮有女六七百人。名太子爲利歌彌多弗利。無城郭。內官有十二等。一曰大德。次小德。次大仁。次小仁。次大義。次小義。次大禮。次小禮。次大智。次小智。次大信。次小信。員無定數。有軍尼一百二十人。猶中國牧宰。八十戶置一伊尼翼。如今里長也。十伊尼翼屬一軍尼。其服飾男子衣裙襦。其袖微小。履如屨形。漆其上。繫之於脚。人庶多跣足。不得用金銀爲飾。故時衣橫幅。結束相連而無縫。頭亦無冠。但垂髮於兩耳上。至隋其王始制冠。以錦綵爲之。以金銀鏤華爲飾。婦人束髮於後。亦衣裙襦。裳皆有襈襹。竹爲梳。編草爲薦。雜皮爲表。緣以文皮。有弓矢刀矟弩穳斧。漆皮爲甲。骨爲矢鏑。雖有兵無征戰。其王朝會必陳設儀仗。奏其國樂。戶可十萬。其俗殺人。強盜及姦皆死。盜者計贓酬物。無財者沒身爲奴。自餘輕重。或流或杖。每訊究獄訟。不承引者。以木壓膝。或張強弓。以弦鋸其項。或置小石於沸湯中。令所競者探之。云理曲者卽手爛。或置蛇瓮中。令取之。云。曲者卽螫手矣。人頗恬靜罕爭訟。少盜賊。樂有五弦琴笛。男女多黥臂。點面文身。沒水捕魚。無文字。唯刻木結繩。敬佛法。於百濟求得佛經。始有文字。知

〔魏〕我が紀元千九十二年より千百九十四年に至る、これより東西兩魏に分れ、東魏は十七年にして北齊に併され、西魏は二十四年にして北周に代らる。

〔齊〕南朝の王朝の一にして、我が紀元千百三十九年に起り二十三年にして亡ぶ。

〔梁〕齊に次いで起り、五十六年にして亡ぶ、時に我が紀元千二百十六年也。

〔至隋云々〕前出推古天皇十一年官位十二階を定めたるを云ふ、彼我年代を對比すれば、煬帝大業元年より三年前に當れり。

卜筮、尤信巫覡。每至正月一日、必射戲飲酒。其餘節略與華同。好棊博握槊樗蒲之戲。氣候溫暖、草木冬青。土地膏腴、水多陸少。以小環挂鸕鷀項、令入水捕魚、日得百餘頭。俗無盤俎、藉以檞葉、食用手餔之。性質直、有雅風。女多男少、婚嫁不取同姓。男女相悅者即爲婚。婦人入夫家、必先跨犬、乃與夫相見。婦人不淫妒。死者斂以棺槨、親賓就屍歌舞。妻子兄弟以白布製服。貴人三年殯於外、庶人卜日而瘞。及葬置屍船上、陸地牽之。或以小轝。有阿蘇山。其石無故火起接天者、俗以爲異、因行禱祭。有如意寶珠、其色青、大如鷄卵、夜則有光。云魚眼睛也。新羅百濟皆以倭爲大國、多珍物、並敬仰之。恒通使往來。大業三年、其王多利思北孤遣使朝貢。使者曰、聞海西菩薩天子重興佛法、故遣朝拜、兼沙門數十人來學佛法。其國書曰、日出處天子致書日沒處天子無恙云々。帝覽之不悅、謂鴻臚卿曰、蠻夷書有無禮者、勿復以聞。明年上遣文林郎裴清使於倭國。度百濟、行至竹島、南望舳羅國、經都斯麻國、迥在大海中。又東至一支國、又至竹斯國、又東至秦王國。其人同於華夏。以爲夷洲、疑不能明也。又經十餘國、達於海岸。自竹斯國以東、皆附庸於倭。倭王遣小德阿輩臺、從數百人、設儀仗、鳴鼓角來迎。後十日、又遣大禮可多毗、從二百餘騎郊勞。既至彼都、其王與清相見。大悅曰。我聞、海西有大隋禮義之國、故遣朝貢。我夷人僻在海隅、不聞禮義。是以稽留境內、不即相見。今故清道飾館以待大使、冀聞大國惟新之化。清答曰、皇帝德並二儀、澤流四海、以王慕化、故遣行人來此宣諭。既而引清就館。其後清遣人謂其王曰、朝命既達、請即戒塗。於是設宴享以遣清。復令使者隨清來貢方物。此後遂絕。

〔小轝〕小さき輿也。轝は史記封禪書に初見する處にして輿に同じ。

〔如意寶珠〕如意珠をいふ。種々の所求を出すこと意の如くなる寶珠を云へり、或は佛舍利變じて珠となれるを云ふとも云ふ。

〔沙門〕もと外道佛徒を論ぜず總じて出家者の都名なりしが、後には勞劬して佛道を修する義を以て僧侶を云へり。

〔都斯麻國〕對馬國也。

〔筑紫〕上代今の九州の總名と、兩筑地方の名稱とに用ひたり、古事記神代卷に「次生筑紫島、身一有面四」とあるは前者にして、萬葉集に「すめろぎの遠の御朝廷と、不知火の筑紫の國はあだまもる、おさへの城ぞと云々」とあるは後者の謂也。

〔山陽〕山陽道の略也、播磨、美作、三備、安藝、周防、長門の八箇の總稱也、文武天皇の時初めて置けり。

〔山陰〕山陰道の略也、兩丹、但馬、因幡、伯耆、出雲、石見、隱伎の八箇國の總稱也、文武天皇の時初めて置けり。

今按、隋書之說、多據前史爲文、邪靡堆當作摩、北戶北當作比、秦王國未詳、北史及隋書曰、自竹斯國東至秦王國。又經十餘國達於海岸、以此觀之、則秦王國在筑紫與中國之間耳。以山陽山陰諸國名中國。　蓋今嚴島與。遣使於隋、北史隋書並言之、隋書記事爲詳、北史曰、其王與世淸來貢方物。非也。見前。隋書曰、令使者隨淸來貢方物。與我國史同、亦見前。此後遂絕不久隋滅。故與通使至此絕也、其後至唐、遣使不絕、故舊事本紀曰、推古天皇十五年。秋七月庚戌。大禮小野臣妹子遣於大隋、以鞍作福利爲通事。此遣唐之始也。

唐書一百二十東夷列傳第一百四十五　　宋祁　奉　勅　撰

日本古倭奴也、去京師萬四千里。直新羅東南在海中、島而居。東西五月行、南北三月行、國無城郭、聯木爲柵落、以草茨屋。左右小島五十餘、皆自名國、而臣附之。置本率一人、檢察諸部、其俗多女少男、有文字、尙浮屠法、其官十有二等。其王姓阿每氏、自言初主號天御中主、至彥瀲凡三十二世、皆以尊爲號、居筑紫城。彥瀲子神武立、更以天皇爲號、徙居大和州。次曰綏靖。次安寧。次懿德。次孝昭。次天安。次孝靈。次孝元。次開化。次崇神。次垂仁。次景行。次成務。次仲哀。仲哀死。以開化曾孫女神功爲主。次應神。次仁德。次履中。次反正。次允恭。次安康。次雄略。次淸寧。次顯宗。次仁賢。次武烈。次繼體。次安閑。次宣化。次欽明。欽明之十一年。直梁承聖元年。次海達。次用明。亦曰目多利思比孤。直隋開皇末。始與中國通。次崇峻。崇峻死。欽明之孫女推古立。次舒明。次皇極其俗椎髻無冠帶。跣以行。幅巾蔽後。貴者冠錦。婦人衣純色。裹長腰襦。結髮于後。至煬帝賜其民錦綫冠。飾以金玉。文布爲衣。

左右佩銀藹。長八寸。以多少明貴賤。太宗貞觀五年。遣使者入朝。帝矜其遠。詔有司毋拘歳貢。遣新州刺史高仁表。往諭。與王爭禮不平。不肯宣天子命而還。久之更附新羅使者上書。永徽初。其王孝德卽位。改元曰白雉。獻虎魄大如斗。碼碯若五升器。時新羅爲高麗百濟所暴。高宗賜璽書。令出兵援新羅。未幾孝德死。其子天豐財立。死。子天智立。明年使者。與蝦蛦人偕朝。蝦蛦亦居海島中。其使者鬚長四尺許。珥箭於首。令人戴瓠立數十步。射無不中。天智死。子天武立。死。子總持立。咸亨元年遣使賀平高麗。後稍習夏音。惡倭名。更號日本。使者自言。國近日所出。以爲名。或云。日本乃小國爲倭所幷。故冒其號。使者不以情。故疑焉。又妄夸。其國都方數千里。南西盡海。東北限大山。其外卽毛人云。長安元年其王文武立。改元曰大寶。遣朝臣眞人粟田貢方物。朝臣眞人者猶唐尙書也。冠進德冠。頂有華藹四披。紫袍帛帶。眞人好學能屬文。進止有容。武后宴之麟德殿。授司膳卿。還之。文武死。子阿用立。死。子聖武立。改元曰白龜。開元初。粟田復朝。請從諸儒授經。詔四門助敎趙玄默卽鴻臚寺爲師。獻大幅布爲贄。悉賞物貿書以歸。其副朝臣仲滿慕華不肯去。易姓名曰朝衡。歷左補闕儀王友。多所該識。久乃還。聖武死。女孝明立。改元曰天平勝寶。天寶十二載。朝衡復入朝。上元中擢左散騎常侍安南都護。新羅梗海道。更繇明越州朝貢。孝明死。大炊立。死。以聖武女高野姬爲王。死。白壁立。建中元年。使者眞人興能獻方物。眞人蓋因官而氏者也。興能善書。其紙似繭而澤。人莫識。貞元末。其王曰桓武。遣使者朝。其學子橘免勢。浮屠空海。願留肄業。歷二十餘年。使者高階眞人來請免勢等俱還。詔可。次諾樂立。次嵯峨。次浮和。次仁明。仁明直開成四年。復入貢。次文德。次淸和。

〔孝德〕人皇第三十一代の天皇也，御名は輕皇子，天萬豐日天尊と申す，御父は茅渟王，御母は吉備姫女王也。白雉五年十月十日崩御，御壽五十九歳にましき。

〔天豐財〕天豐財重日足姫天皇，卽ち人皇三十五代（又重祚三十七代齊明天皇）の皇極天皇の御事の誤傳なるべし。

〔天智〕人皇三十八代の天皇なれば，第三十四代舒明天皇の皇子也。天豐財の子とあるは誤傳也。

〔天武〕人皇第四十代天武天皇にまして，天智天皇の御弟にませり。

次陽成、次光孝。直光啓元年、其東海嶼中、又有邪古波邪多尼三小王。北距新羅、西北百濟、西南直越州。有絲絮怪珍云。

今按、古者指後漢也。詭耶麻騰曰倭奴。島而居。後漢書作依山島爲居是也。彥瀲彥波瀲武鸕鷀草葺不合尊也。大略之、凡三十二世三字衍。筑紫城謂日向宮崎也。天安天當作孝。欽明之十一年直梁承聖元年。一字當作三。海達海當作敏。貝多利思比孤按日本書紀、用明天皇諱橘豐日。橘此曰多知貝奈。故誤之曰貝多利。思豐字之訛。比孤近日訓。直隋開皇末。始與中國通者失也。後漢始通。已見上。欽明之孫女推古者非也。推古天皇欽明天皇之中女也。太宗貞觀五年當舒明天皇三年。高仁表日本書紀作高表仁。爭禮事日本書紀不見。按日本書紀。曰舒明天皇二年秋八月丁酉、以大仁犬上君三田耜。大仁藥師惠日遣於大唐。四年秋八月。大唐遣高表仁送三田耜。共泊于對馬。冬十月甲寅。唐國使人高表仁等到于難波津。則遣大伴連馬養迎於江口。船卅二艘及鼓吹旗幟皆具整飾。馬養告高表仁等曰。聞天子所 命之使到于天皇朝迎之。時高表仁對曰。風寒之日。飾整船艘。以賜迎之。歡愧也。於是令難波吉士小槻大河內直矢伏爲導者。到館前。乃遣伊岐史乙等難波吉士八牛。引客等入於館。即日給神酒。五年春正月甲辰。大唐客高表仁等歸國。送使吉士雄摩呂黑摩呂等到對馬而還之。永徽高宗年號。高宗賜璽書。令出兵援新羅。我國史不見。據我國史。則百濟伐新羅。至庚申年。大唐新羅幷力伐百濟。既以百濟義慈王王后太子爲虜而去。百濟乞救。由是爲百濟伐新羅。御船幸筑紫。孝德死、其子天豐財立非也。皇極天皇諱天豐財重日足

〔筑紫城〕こゝには上記唐の「初生號天御中主、至彥瀲云云、居筑紫城」とあるを引けるものにて、今日向國諸縣郡都々城宮丸村に遺跡を存する、瓊瓊杵尊の宮趾、高千穗宮を指して云ひたるなるべし、こゝに「謂日向宮崎」とあるは如何。

〔難波津〕攝津國東成郡淀川流域の總稱、卽ち今の大阪地方の古稱也。古今集序に「難波津に咲くや木の花冬籠り、今を春邊と咲くや木の花」とあるも是也。

姬。孝德天皇同母姉也。孝德天皇崩。重祚。奉號齊明天皇。是也。天智立。明年使者與蝦蛦人偕朝。亦非也。按日本書紀。曰齊明天皇五年七月戊寅。遣小錦下坂合部連石布大山下津守連吉祥使於唐國。仍以陸奥蝦夷男女二人示唐天子。詳見下文杜佑通典蝦夷國下今按中。天武立。死。子摠持立者誤也。摠持當作持統。持統天皇天智天皇第二女也。適天武天皇爲妃。天武天皇崩。持統天皇繼。咸亨元年當我天智天皇九年。以咸亨元年事繫持統天皇者非也。按日本書紀。天智天皇四年九月壬辰。唐國遣朝散大夫沂州司馬上柱國劉德高等。十一月辛巳。饗賜劉德高等。十二月辛亥。賜物於劉德高等。是月劉德高等罷歸。遣小錦守君大石等於大唐。云云。長安則天皇后年號。遣朝臣眞人粟田貢方物。朝臣眞人者猶唐尙書也。大失事實。姓粟田朝臣。名眞人。官民部尙書也。此官姓名人爲入唐使。續日本紀曰。文武天皇大寶元年正月丁酉。以守民部尙書直大貳粟田朝臣眞人爲遣唐執節使。左大辨直廣參高橋朝臣笠間爲大使。右兵衛率直廣肆坂合部宿禰大分爲副使。五月己卯。入唐使粟田朝臣眞人授節刀。二年五月乙丑。遣唐使等去年從筑紫而入海。風浪暴險。不得渡海。至是及發。慶雲元年秋七月甲申朔。正四位下粟田朝臣眞人自唐國至。初至唐時。有人來問曰。何處使人。答曰日本國使我使反問曰。此是何州界。答曰是大周楚州鹽城縣界也。更問。先是大唐今稱大周。國號緣何改稱。答曰。永淳二年。天皇大帝崩。皇太后登位。稱號聖神皇帝。國號大周。問答略了。唐人謂我使曰。亟聞。海東有大倭國。謂之君子國。人民豐樂。禮儀敦行。今看使人容儀。大淨。豈不信乎。語畢而去。八月辛酉粟田朝臣眞人等拜朝。十一月丙申賜正四位下粟田朝臣眞人。大倭國

〔持統天皇〕人皇第四十一代にませり御名は鸕野讃良皇女、御稱號高天原廣野姬尊と云ふ、天智天皇の第二皇女、母は蘇我遠智娘、初め天武天皇の皇后なり。

〔朝散大夫〕從五位下の唐名也、又、支那にては、文獻通考に「朝散大夫隋置散官、唐因之云々、宋元豐更官制、以朝散大夫換中行郎子」とあり。

〔慶雲元年〕紀元千三百六十四年文武天皇の八年也。

〔永淳二年〕我が紀元千三百四十四年に當る、唐高宗の代也。

田二十町穀一千斛。以奉使絶域也。文武死。子阿用立。用當作閼。文武次元明天皇。小名阿閇皇女。文武天皇母也。謂子者非也。開元初。粟田復朝。亦非也。按續日本紀。元正天皇靈龜二年當唐玄宗開元四年。八月多治比眞人縣守等爲遣唐使。下道朝臣眞備從入唐留學。研究經史。該涉衆藝。聖武天皇天平五年當開元二十一年。從遣唐使多治比眞人廣成等歸朝。在唐凡十八年。七年四月辛亥。入唐留學生下道朝臣眞備。獻唐禮一百三十卷。大衍暦經一卷。大衍暦立成十二卷。測影鐵尺一板。銅律管一部。鐵如方響寫律管聲十二條。樂書要錄十卷。絃纏漆角弓一張。馬上飲水漆角弓一張。露面漆四節角弓一張。射甲箭二十隻。平射箭十隻。十八年。改賜姓吉備朝臣。稱德天皇天平勝寶四年當天寶十一年。閏三月。爲入唐副使。觀此則吉備再入唐。而令名齊粟田。謂粟田復朝者。混而言之也。今不據國史正之則千古之間。淄澠不分。孰爲夫子矣。好學能屬文者粟田也。帥趙玄默者吉備也。進德冠者。凡遣唐使所著之冠也。續日本紀曰。天平寶字二年三月。進冠船神。其冠者以錦造。入唐使所垂者也。唐書所謂華蘤四披是也。孝明明當作謙。天寶十二載當孝謙天皇天平勝寶五年。朝衡復入朝續日本紀不見。東征傳曰。天寶十二載。歳次癸巳。十月十五日壬午。日本國使大使特進藤原朝臣清河 副使銀青光祿大夫秘書光祿卿大伴宿彌胡萬。副使銀青光祿大夫秘書監吉備朝臣眞備。衛尉卿朝衡。觀此則朝衡復入唐昭然也。按續日本紀。天平勝寶六年。入唐副使大伴宿禰古麻呂。及吉備朝臣眞備來歸。大使藤原朝臣清河。遭逆風漂著驩州。會祿山發亂。道路多難不能歸。後歴十有七年。寶龜元年。新羅使金初正等言。在唐大使藤原清河。學生朝衡等宿衛王子金隱居。附書送於郷親。由是言之。

〔玄宗〕唐朝第六世の帝也、姓李、名隆基、睿宗の第三子、在位四十五年改元三度、先天、開元、天寶是也。

〔藤原朝臣清河〕房前の子、遣唐使たること二回、勝寶七年再度唐に使し同九年歸國に際し肥後天草灘に難破して遂に歿す、正二位を贈られ、次いで承和三年從一位を追贈せらる。

〔大伴宿禰胡萬〕大伴古麿也、勝寶二年藤原清河に副して唐に使す、歸國後、左大辨に任じ正四位に至る、寶字の初め陸奥鎭守將軍按察使を兼ね橘奈良麿等と事を與にしたる故を以つて鞠問杖死す。

〔舍人親王〕崇道盡敬皇帝と追尊す、天武天皇の三子、文武天皇の時親王となり二品に叙し養老二年一品に進む、同三年封戶二千を賜ふ、天平七年十一月薨ず、太政大臣を贈らる、淳仁天皇の時、帝號を贈られたり。

〔貞元〕紀元千四百四十五年より千四百六十四年に至る間の唐朝德宗の時の年號也。

〔橘逸勢〕淸友の子奈良麿の孫也、入唐の際、彼國人呼びて橘秀才と云ひ、世に嵯峨天皇及び空海と並べて三筆と稱す。

則朝衡與淸河俱入唐。後亦同居矣。孝明死大炊立。死。以聖武女高野姬爲王者誤也。廢帝諱大炊王。天武天皇之孫。舍人親王第七之子也。孝謙天皇立爲皇太子。卽天皇位。後孝謙天皇廢之。封淡路公。白重祚號稱德天皇。高野姬者諱也。白壁光仁天皇諱白壁王。建中元年當光仁天皇寶龜十一年。眞人興能。按日本後紀曰延曆二十三年三月壬辰。遣唐大使從四位上藤原葛野麻呂。副使從五位上石川道益等。葛野訓若近興能音。然未詳。紳鏡抄曰。葛野或曰賀能。式部大輔藤原敦光曰。賀能乃葛野之反名也。反名者取上字假名之初與下字之初。若終連爲名。稱之曰反名。匡房反名萬歲。通憲反名氏輪。猶葛野稱賀能也。據此觀之。則興能蓋賀能也。興能善書。其紙似繭而澤。人莫識。東海一漚集。註唐書文曰。繭紙日本謂之引合。貞元末。其王曰桓武。遣使者朝。延曆二十三年（當唐貞元二十年。）藤原葛野爲遣唐大使也。其學子橘免勢。浮屠空海。願留肄業。免當作逸。太平御覽等書。皆誤作免。空海弘法大師也。空海廣傳曰。奉勅爲留學。乘賀能船。七月六日。發從肥前國松浦郡田浦解纜。八月十日。到福州長溪縣。空海與福州觀察使請入京啓。（載性靈集。）有勅遣迎客使。給大使以七珍鞍。次使等給雜鞍。十二月二十三日。至上都長安城。唐貞元二十年也。入京之儀不可說盡。見者滿遐邇。依詔。安置宣陽坊官宅。二十四年（乙酉唐貞元二十一年。）二月十一日。大使等旋軔本朝。空海幷橘逸勢。准勅以留。歷二十餘年。使者高階眞人來。請免勢等俱還。詔可。歷二十餘年者誤也唐貞元二十年八月到唐元和元年八月泛船歸朝。其間歷三年。凡二十五月也。二十餘年年當作月。高階眞人者高階眞人遠成也。大同元年（當唐元和元年。）十月廿二日。沙門空海上新請來經等目錄表曰。謹

〔類聚國史〕二百卷、別に目錄二卷、帝王系圖三卷ありしが、今散佚して六十一卷を存す、六國史所載の記事を神祇、帝王等四十餘門に分ち類聚編したるもの也、寛平年間、菅原道眞宇多天皇の勅により撰したるもの也

〔憲宗〕唐朝十五代の帝也、我が紀元千四百六十六年より同八十年に至る十五年間在位す。

〔火闌降命〕瓊々杵尊の御子、御母は鹿葦津姫、彦火々出見尊の御兄也。

附判官正六位上行太宰大監高階眞人遠成。奉表以聞。類聚國史第九十九。平城天皇大同元年十二月壬申。遣唐判官正六位上高階眞人遠成授從五位上。遠成率爾奉使。不遑治行。其意可矜。故復命之日特授焉。又唐元和元年正月廿八日。憲宗可遠成中大夫試太子中允位記曰。日本國使判官正五品上兼行鎭西府大監高階眞人遠成等奉其君長之命。趍我會同之禮。越溟波而萬里獻方物。宜褒奬並錫班榮。載在朝野群載。浮和、浮當作淳。開成四年當仁明天皇承和六年。此時遣唐使藤原朝臣常嗣也。續日本後紀曰。參議左大辨從三位藤原常嗣者。延暦廿年遣唐持節大使中納言正三位葛野麻呂第七之子也。少遊大學。涉獵史漢。暗誦文選。又好屬文。兼能隷書。立性明幹。威儀可稱。又曰承和六年八月癸酉。太宰府飛驛。上奏入唐大使藤原朝臣常嗣等歸著之由。兼使等奏狀九月甲午常嗣進節刀。乙未天皇御紫宸殿。常嗣昇自東階。天顏咫尺。勅曰。遠涉危難之途平安參來乎。嘉賜都大坐。常嗣稱唯。拜舞庭中。更召殿上。累屬焉。于時使者及路中艱難。一一以聞。內侍持御被一條。御衣一襲。佇立。大臣命常嗣云。今勅。汝銜國命。遠涉滄海。每聞險難。憐愍殊深。仍賜纏物。卽稱唯。賜御被。拜舞退出。光啓唐僖宗年號。光啓三年當光孝天皇仁和元年。邪古掖玖島也。掖玖與邪古通。或作邪久。詳見下引杜氏通典。今按。波邪蓋隼和訓。觀類聚國史。異類從皇化者、不稱姓名。常號夷俘。夷俘中有隼部。諸國往往多之。諸國介爲夷俘專當。亦古者指大隅薩摩爲隼人。多隼人氏也。姓氏錄曰。大角隼人出自火闌降命也。日本書紀持統天皇紀曰。隼人大隅。萬葉集曰。隼人之薩摩。職員令集解曰。薩摩大隅等國人。初捍後服。奉仕于君者名隼人。蓋隼人時不從命。

故唐書以西南之地隼人所有之島、指名波邪、爲有小王也。多尼多禰島也。或作多褹。日本紀曰。天武天皇六年八月丙戌。遣多禰島使人等貢多禰島圖。其國去京五千餘里、居筑紫南海中。切髪草裳。粳稻常豐一植兩收。土毛。支子。莞子。及種種海物等多。蓋古者各有島主不攝國郡。故曰小王。後隷郡立國。

又卷二百二文藝列傳中第一百二十七

蕭穎士字茂挺。梁鄱陽王恢七世孫。祖晶賢而有謀。任雅相伐高麗。表記室。越王貞舉兵杖策。詣之陳、王不用。晶度必敗乃亡去。客死廣陵。穎士四歲屬文、十歲補大學生。觀書一覽卽誦。通百家譜系書籀學。開元二十三年擧進士、對策第一。父旻以莒丞抵罪。穎士往訴於府佐張惟一。惟一曰。旻有佳兒。吾以旻獲譴不憾。乃平宥之。天寶初、穎士補秘書正字。于時裴耀卿席豫張均宋遙韋述皆先進。器其材。與鈞禮。由是名播天下。奉使括遺書趙衞間。淹久不報。爲有司劾免。留客濮陽。於是尹徵王恒盧異盧士式賈邕趙匡閻士和柳并等皆執弟子禮以次授業。號蕭夫子。召爲集賢校理。宰相李林甫欲見之。穎士方父喪不詣。林甫嘗至故人舍邀穎士。穎士前往。哭門內以待。林甫不得已。前弔乃去。怒其不下已。調廣陵參軍事。穎士急中不能堪。作伐櫻桃樹賦曰。擢無庸之璅質。蒙本枝以自庇。雖先寢而或薦。非和羹之正味。以譏林甫云。君子恨其褊。會母喪免。流播吳越。嘗謂。仲尼作春秋。爲百王不易法。而司馬遷作本紀書表世家列傳叙事。依違失褒貶。體不足以訓。乃起漢元年訖隋義寧編年。依春秋義類爲傳百篇。在魏書高貴崩曰。司馬昭弑帝於南闕。在梁書陳受

〔隼人〕日本紀神代卷に「號大隅隼人、是隼人等始祖也、」とあり。

〔多禰島〕今種子島と云ふ、大隅國熊毛郡、南北凡十四里、東西凡二里半の小島也。

〔支子〕梔子也、葉は李に似て厚く、光澤あり、夏の頃六片の白花開き、赤く黄ばみたる實を結ぶ、果實は染料又は藥用とす。

禪。曰。陳霸先反。又自以梁枝孫。而宣帝逆取順守。故武帝得血食三紀。昔曲沃篡晉。而文公爲五伯。仲尼弗貶也。乃黜陳閏隋。以唐土德承梁火德。皆自斷。諸儒不與論也。有太原王緒者。僧辯裔孫。譔永寧公輔梁。書黜陳不帝。穎士佐之。亦著梁蕭史譜。及作梁不禪陳論。以發緒義例使光明云。史官革述。薦穎士自代。召詣史館待制。穎士乘傳詣京師。而林甫方威福自擅。穎士遂不屈愈見疾。俄免官往來鄠杜間。林甫死更調河南府參軍事。倭國遣使入朝。自陳。國人願得蕭夫子爲師者。中書舍人張漸等。諫不可而止。安祿山寵恣。穎士陰語柳井曰。胡人負寵而驕。亂不久矣。東京其先陷乎。即託疾游太室山。已而祿山反。穎士往見河南採訪使郭納。言御守計。納忽不用。歎曰。肉食者以兒戲御劇賊。難矣哉。聞封常淸陳兵東京。往觀之。不宿而還。因藏家書於箕潁間。身走山南。節度使源洧辟掌書記。賊別校攻南陽。洧懼欲退保江陵。穎士說曰。官兵守潼關。財用急。必待江淮轉餉乃足。餉道由漢沔。則襄陽乃今天下喉襟。一日不守則大事去矣。且列郡數十人。百萬訓兵攘寇。社稷之功也。賊方專崤陝。公何遽輕土地。欲取笑天下乎。洧乃按甲不出。亦會祿山死賊解去洧卒。往客金陵。永王璘召之不見。時盛王爲淮南節度大使。留蜀不遣。副大使李承式玩兵不振。穎士與宰相崔圓書。以爲。今兵食所資在東南。但楚越。重山複江。自古中原擾則盜先起。宜時遣使以扞鎭江淮。俄而劉展果反。賊圍雍丘。脅泗上軍。承式遣兵往救。大宴賓客陳女樂。穎士曰。天下暴露。豈臣下盡歡時邪。夫投兵不測。乃使觀聽華麗。一旦思歸誰致其死哉。弗納。崔圓聞之。即授揚州功曹參軍。至官信宿去。後客死汝南逆旅。年五十二。門人共謚曰文元先生。穎士樂聞人善。以推引後進爲己任。如

〔文公〕晉の文公也三代の世、並に春秋の世に五覇の一人に稱せられたり

〔五伯〕五覇と云ふに同じ、三代の頃には、夏作昆吾、商伯大彭、豕韋、周伯齊桓、晉文を云ひ、春秋の頃には齊桓、晉文、楚莊、吳闔閭、越勾踐の五人を云へり。

〔仲尼〕孔子也。

〔祿山〕安祿山也、唐代、營州柳城の胡也、本姓康、幼字は安犖山、玄宗に仕へ東平郡王の爵を賜はる、後叛して僅か一年餘帝號を僣稱せるも幾干ならずして誅せらる。

〔殷寅〕唐朝の人也長平の人殷踐猷の子也、太子校書郎たり。
〔顏眞卿〕唐朝の人字は淸臣、博學にして詩に工みに又書を善くす、玄宗以下四朝に歷仕し太師に位し、魯國公に封ぜられ、文忠と諡せらる。
〔柳芳〕唐朝の人、字は仲藪、譜學に精通し、永泰年中皇宗譜二十卷を撰す、號し永泰新譜と云ふ。
〔李華〕唐朝の人、字は遐叔、詩賦に工み也、含元殿賦其他古戰場を吊する文を作る事多し

李陽李幼卿皇甫冉陸渭等數十人。由獎目皆爲名士。天下推知。人稱蕭功曹。嘗兄事元德秀。而友殷寅顏眞卿柳芳陸據李華邵軫趙驊。時人語曰。殷顏柳陸李蕭邵趙。以能全其交也。所與游者。孔至賈至源行恭張有略。族弟李遐劉頌韓極陳晉孫益韋建韋收。獨華與齊名。世號蕭李。嘗與華據游洛龍門。讀路旁碑。頴士卽誦。華再閲據三乃能盡記。聞者謂三人才高下。此其分也。有奴事頴士十年。笞楚嚴慘。或勸其去。答曰。非不能愛其才耳。頴士數稱。班彪皇甫謐張華劉混潘尼。能尙古而混流俗。不自振。曹植陸機所不逮也。又言。裴子野善著書。所許可當世者。陳子昂富嘉謩盧藏用之文辭。董南事孔述睿之博學而已。子存字伯誠。亮直有父風。能文辭。與韓會沈既濟梁肅徐岱等善。浙西觀察使李栖筠表常熟主簿。顏眞卿在湖州。與存及陸鴻漸等討摭古今韻字所原。作書數百篇。建中初由殿中侍御史四遷比部郎中。張滂主財賦。辟存留務京師。裴延齡與滂不叶。存疾其姦去官。風痺卒。韓愈少爲存所知。自袁州還過存廬山故居。而諸子前死唯一女在。爲經贍其家。殷寅者陳郡人。邵軫者汝南人。陸據河南人。字德鄰。後周上庸公騰六世孫。神寓警邁善物理。年三十始到京師。公卿愛其文交譽之。天寶十三載終司勳員外郎。

今按。讀蕭夫子傳。而後知我欲得英材而教育之。風流儒雅。誠不謬擧。惜哉其不來矣。

異稱日本傳卷上一終

異稱日本傳 卷上二

舊唐書列傳卷第一百四十九上

監修國史推誠守節保運功臣特進守司空兼門下侍郎同中書門下平章事上柱國譙國公食邑五千戶食實封四百戶臣劉昫等奉勅修

聞人詮校刻沈桐同校

東夷

倭國者古倭奴國也。去京師一萬四千里。在新羅東南大海中。依山島而居。東西五月行。南北三月行。世與中國通。其國居無城郭。以木爲柵。以草爲屋。四面小島五十餘國。皆附屬焉。其王姓阿每氏。置一大率。檢察諸國。皆畏附之。設官有十二等。其訴訟者匍匐而前。地多女少男。頗有文字。俗敬佛法。並皆跣足。以幅布蔽其前後。貴人戴錦帽。百姓皆椎髻無冠帶。婦人衣純色裙長腰襦。束髮於後。佩銀花。長八寸。左右各數枝。以明貴賤等級。衣服之制。頗類新羅。貞觀五年。遣使獻方物。太宗矜其道遠。勅所司無令歲貢。又遣新州刺史高表仁持節往撫之。表仁無綏遠之才。與王子爭禮。不宣朝命而還。至二十二年。又附新羅奉表。以通起居。

〔舊唐書〕五代石晉の時の官撰にして劉昫等の手に成る帝紀二十卷、列傳百五十一卷、志あり、表なし、總べて二百卷あり。

〔劉昫〕五代の人、字は日輝、涿州歸義に居る、唐の莊宗の時太常博士翰林學士と爲り、舊唐書を監修す、長興三年相に拜せらる、晉の高宗の時東都晋守となり、進みて太保となる。

〔刺史〕支那の古制にて、州の知事を云ふ、古代の牧伯の官に相當す。

日本國者倭國之別種也。以其國在日邊。故以日本爲名。或曰。倭國自惡其名不雅。改爲日本。或云。日本舊小國。併倭國之地。其人入朝者自矜大。不以實對。故中國疑焉。又云。其國界東西南北各數千里。西界南界咸至大海。東界北界有大山爲限。山外卽毛人之國。長安三年、其大臣朝臣眞人。來貢方物。朝臣眞人者。猶中國戸部尙書。冠進德冠。其頂爲花。分而四散。身服紫袍。以帛爲腰帶。眞人好讀經史。解屬文。容止溫雅。則天宴之於麟德殿。授司膳卿。放還本國。開元初。又遣使來朝。因請儒士授經。詔四門助敎趙玄默。就鴻臚寺敎之。乃遣玄默闊幅布。以爲束修之禮。題云。白龜元年調布。人亦疑其僞。此題所得錫賚盡市文籍。泛海而還。其偏使朝臣仲滿。慕中國之風。因留不去。改姓名爲朝衡。仕歷左補闕。儀王友。衡。留京師五十年。好書籍。放歸鄕。逗留不去。天寶十二年。又遣使貢。上元中。擢衡爲左散騎常侍鎭南都護。貞元二十年。遣使來朝。留學生橘免勢。學問僧空海。元和元年。日本國使判官高階眞人上言。前件學生藝業稍成。願歸本國。便請與臣同歸。從之。開成四年。又遣使朝貢。

今按。舊唐書之文。與新唐書有異同。前所載者新書也。舊書長洲文徵明叙論新書曰。其事則增於前。其文則省於舊。是以今亦引舊唐書。以草爲屋。新書爲作茨。我朝茅茨草盧古代風也。後有檜皮葺瓦葺。平攘錄曰。雖皇宮上不蓋瓦。下不砌磚。本國泥土不膠。無磚瓦匠也。此不知我俗而作者也。詳見中卷。一大率新書作本率。設官有十二等。新書曰。其官十有二等。北史竝隋書擧其名。日本紀曰。推古天皇十一年十二月壬申。始行冠位。大德小德大仁小仁大禮小禮大信小信大義小義大智小智。幷十二階。並以當色絁縫之。頂撮摠如囊而著縁。唯元日著髻華。十二年春正月戊戌朔。

〔大臣〕上代の職官臣の姓の統領にて皇別の人を以て之に任ず、孝德天皇の時に至り更めて別に左右大臣を置く、こゝに大臣とあるは後の意也。

〔朝臣〕上代尸（カバネ）の一、神別の氏氏に賜ふ、古くは「阿曾」（アソ）と書したり。阿曾美の略也。

〔眞人〕尸の一種、「マヒト」「マプト」「マウド」「マツト」と訓めり、聖武天皇の十三年十月詔して八色の姓を改められし時に、其の首位に置く。

〔貞元二十年〕我が紀元千四百六十四年桓武天皇延曆二十三年に當る、唐德宗の代也。

始賜冠位於諸臣。親此則十二階者冠名。以此分位高下。次第北史與此不同。北史則德仁義禮智信而分大小。其訴訟者匍匐而前地。新書無之。衣服之制。頗類新羅。新書無之。杜氏通典亦曰。衣服之地。頗同新羅。高表仁。新書作高仁表。舊書合日本紀。日本國者倭國之別種也。新書不以倭日本別立條。爲是。通典曰。倭一名日本。亦是也。世法錄等書。分日本倭人條者因舊書也。其名不雅如說。宜通攷山海經今按。日本舊小國。倂倭國之地。新書曰。日本乃小國。爲倭所倂。故冒其號。二說相須文義備矣。此日本者似指日向國。倭國實指大和國。大和國舊曰倭國。後改爲大和國。神武天皇始在日向國。後平倭國。故曰日本倂倭國之地。考之日本紀。曰神日本磐余彥天皇〔神武天皇也。〕及年四十五歲。謂諸兄及子等曰。昔我天神高皇產靈尊。大日孁尊。擧此豐葦原瑞穗國。而授我天祖彥火瓊瓊杵尊。於是火瓊々杵尊。闢天關披雲路。駈仙蹕以戾止。是時運屬鴻荒。時鍾草昧。故蒙以養正治此西偏。皇祖皇考。乃神乃聖。積慶重暉。多歷年所。自天祖降跡。以逮于今。一百七十九萬二千四百七十餘歲。而遼邈之地。猶未霑於王澤。遂使邑有君。村有長。各自分疆。用相陵躒。抑又聞於鹽土老翁。曰東有美地。靑山四周。埍〔倭國也〕其中亦有乘天磐船而飛降者。余謂彼地必當足以恢弘天業。光宅天下。蓋六合之中心乎。厥飛降者。謂是饒速日歟。何不就而都之乎。諸皇子對曰。理實灼然。我亦恒以爲念。宜早行之。是年也大歲甲寅。其年冬十月丁巳朔辛酉。天皇親帥諸皇子舟師東征。十一月甲午。天皇至筑紫岡水門。十二月壬午。至安藝國。居于埃宮。乙卯年春三月己未。徙入吉備國。居之。是日高島宮。積三年間。備舟檝。蓄兵食。將欲以一擧而平天下也。戊午年春二月

〔杜氏〕唐の杜佐也字は君卿、萬年の人・父希重、桓州刺史たり、祐、蔭を以て參軍に補せらる、德憲兩朝、司空に拜し、司徒に進み、岐國公に封ぜらる。

〔新書〕新唐書を云へり。

〔舊書〕舊唐書を云へり。

〔大和國〕五畿内の一なり、今の奈良縣に當る、古へ倭に作る、神武天皇橿原奠鼎の時、珍彥を倭國造となすを初見とす、孝謙天皇の天平寶字元年大和の字に改む

〔埃宮〕古事記に多邪理宮に作る、安藝國安藝郡府中村に遺跡存せり。

〔河內國草香邑〕和名抄に「河內國河內郡日下鄕」の名見えたり、今河內國中河內郡草香村也。

〔白肩之津〕今詳ならざれども、古事記「泊青雲之白肩津」云々、故號其地謂楯津ことあるに徵すれば、今の河內國中河內郡日根市村の日下也。

〔膽駒山〕河內國河內郡と大和國平群郡とに跨り、峯は寬かにして嶮ならず、今生駒山に作れり。

〔孔舍衞坂〕河內國河內郡日根市村日下の東方にある、草香嶺の坂路にして、一に暗（クラかり）嶺と云ふ。

丁未。皇師遂東。舳艫相接。方到難波之碕。會有奔潮太急。因以名爲浪速國。亦曰浪華。今謂難波訛也。三月丙子。遡流而上。徑至河內國草香邑青雲。白肩之津。夏四月甲辰。皇師勒兵歩趣龍田。而其路狹嶮。人不得並行。乃還更欲東踰膽駒山而入中洲。時長髓彥聞之曰。夫天神子等。所以來者。必將奪我國。則盡起屬兵。徼之於孔舍衞坂。與之會戰。有流矢中五瀨命肱脛。皇師不能進戰。天皇憂之。乃運神策。令軍中曰。且停。勿復進。乃引軍還。虜亦不敢逼。却至草香津。植盾而爲雄誥焉。五月癸酉。軍至茅渟山城水門。六月丁巳。軍至名草邑。誅名草戶畔者。遂越狹野到熊野神邑。且登天磐盾。仍引軍漸進。海中卒遇暴風。皇舟漂蕩。天皇獨與皇子手研耳命。帥軍而進至熊野荒坂津。因誅丹敷戶畔者。旣而皇師欲趣中洲。而山中嶮絕無復可行之路。時夜夢。天照大神訓于天皇曰。朕今遣頭八咫烏。宜以爲鄕導。果有烏自空翔降。時大伴氏遠祖日臣命。帥大來目督將元戎。蹈山啓行。乃尋烏所向。仰視而追之。遂達于菟田下縣。八月乙未。天皇例徵兄猾及弟猾。兄猾不來。乃斬之。有兄磯城軍。布滿於磐余邑。道臣命謀殺之。無復噍類。十一月己巳。皇師大學攻磯城彥破之。十二月丙申。皇師遂擊長髓彥殺之。悉誅餘黨。己未年三月丁卯。下令曰。自我東征。於玆六年矣。賴以皇天之威。凶徒就戮。而中洲之地。無復風塵。後撥平天下。奄有八洲。朝臣眞人粟田朝臣眞人也。見新書今按。開元初又遣使來朝。此使指吉備朝臣眞備也。新書曰。開元初。粟田復朝。非也。亦見前。乃遣玄默闊幅布。以爲束修之禮。學令曰。凡學生在學。各以長幼爲序。初入學。皆行束修之禮於其師。各布一端。皆有酒食。其分束修。三分入博士。二分入助教。白龜白當作

神。神龜聖武天皇年號。調布諸國貢布也。賦役令曰。凡調絹絁布兩頭。具注國郡里戶主姓名年月日。各以國印印之。人亦疑其僞此題。此布蓋本調布。我天子賜眞備物。故有此題乎。人疑之者。不可知也。朝衡事宜參考文苑英華李白唐詩詩訓解等。儀王傳見唐書列傳卷第五十七。儀王璲玄宗第十二子也。初名𤀹。開元十三年五月。封爲儀王。十五年授河南牧。二十三年。加開府儀同三司。兼河南牧。其年改名璲。永泰元年二月薨。廢朝三日。贈太傅。天寶中。有子封王者二人。上元肅宗年號。當日本淡路廢帝時。

又按阿倍仲滿者我朝先輩。事蹟粗見文苑英華下。亦往往隨所引書籍文義註之。今一貫以便覽。仲滿父船守。仕至中務大輔。我元正天皇靈龜二年（當唐玄宗開元四年。）八月入唐。改姓名曰朝衡。（見舊新唐書。）然奉使歸寧父母。有詩（見英華。）詠和歌。（見古今和歌集。）王維（見唐詩訓解。）包佶送詩。（見英華。）李白哭朝衡詩。蓋此前後事。天寶十二載。又入唐。（見東征傳。）逢安史亂終不歸。或友儀王。（見唐書。）或在新羅。附書送於鄕親。（見續日本紀。）至左散騎常侍鎭南都護。（見唐書。）光仁天皇寶龜十年（當唐代宗十四年。）五月。前學生阿倍朝臣仲麻呂在唐而亡。家口偏乏。葬禮有闕。勅賜東絁一百疋。白綿三百屯。（見續日本紀。）時年七十二。自入唐到此六十四年。仁明天皇承和三年（當唐文宗開成元年。）五月戊申。附聘唐使贈仲滿正二品。以慰幽魂。（見續日本後紀。）

又本紀卷第四高宗上

永徽五年十二月癸丑。倭國獻琥珀碼瑙。琥珀大如斗。碼瑙大如五斗器。

今按新書。五斗作五升。見前。

〔日本淡路廢帝〕人皇第四十七代の淳仁天皇也、御名は大炊、天武天皇の皇子舍人親王の御子也、寶字元年四月孝謙天皇の太子となり、二年八月禪を受けて卽位し在位六年にして、淡路に幸して崩ず御陵同國加集村にあり。

〔阿倍仲滿〕阿倍仲麿也、中務大輔船守の子、靈龜二年遣唐留學生に選ばれ渡唐し遂にこれに留り、朝衡と易名せり、承和三年遣唐使正二位を贈られたり。

〔永徽五年〕紀元千三百十五年に當る唐朝高宗の時也。

〔張巡〕唐の世、南陽の人、博く群書に通ず、身長七尺鬚髯神の如し、戰陣の法を曉り、志氣高邁、詩最も雄壯也、開元の末に進士の第に擢でられ清河令と爲り、累進して、楊州大都督を贈らる。

〔肅宗〕唐朝第七世の帝也、姓は李、名は亨、郭子儀、李光弼等の力に依り、安祿山の黨を討平す、然れども是より藩鎭益〻强く、唐室の威令殆ど行はれず、在位七年、改元四度、至德、乾元、上元、寶應是也。

〔張九齡〕唐代、曲江に居す、字は子壽、玄宗、其の才能を愛し、死後始興伯に追封す。

文列傳卷第一百四十下

文苑下

蕭穎士者字茂挺。與華同年登進士第。當開元中。天下承平人物駢集。如賈曾席豫張垍韋述輩。皆有盛名。而穎士皆與之遊。由是縉紳多譽之。李林甫採其名。欲拔用之。乃召見時。穎士寓居廣陵。母喪卽縗麻而詣京師。徑謁林甫於政事省。林甫素不識。遽見縗麻。大惡之。卽令斥去。穎士大忿。乃爲伐櫻桃賦。以刺林甫云。擢無庸之瑣質。因本枝而自庇。洎枝幹而非據。專廟廷之右地。雖先寢而或薦。豈和羹之正味。其狂率不遜。皆此類也。然而聰警絕倫。嘗與李華陸據。同遊洛南龍門。三人共讀路側古碑。穎士一閱卽能誦之。華再閱。據三閱。方能記之。議者以三人才格高下。亦如此。是時外夷亦知穎士之名。新羅使入朝言。國人願得蕭夫子爲師。其名動華夷若此。終以誕傲褊忿困躓而卒。華宗人翰。亦以進士知名。天寶中。寓居陽翟爲文精密。用思苦澁。常從陽翟令皇甫曾求音樂。每思涸則奏樂。神逸則著文。祿山之亂。友人張巡客宋州。巡率州人守城。賊攻圍經年。食盡矢窮方陷。當時薄巡者言。其降賊。翰乃序巡守城事迹。撰張巡姚誾等傳兩卷上之。肅宗方明巡之忠義。士友稱之。上元中爲衛縣尉。入朝爲侍御史。

今按。舊事曰。新羅願得蕭夫子爲師。與新書異。故並載之。秦少游詩。穎士聲名動倭國。見淮海集。觀此則少游亦用新書說。

唐丞相曲江張先生文集卷之七

曲江　張九齡

〔王明樂美御德〕「スメラミコト」と訓むは、統べ治し食し給ふ御方の意我國天皇の尊稱也

〔文苑英華〕宋の李昉等勅を奉じて撰する處、一千卷あり、此書は蕭統の文選に續ぐの意を以つて作れるものにして、梁末より始め、唐朝の文を收めたり、賦、詩歌行、雜文、策判表、書、序、論等凡三十七類とす。

〔延喜式〕五十卷、朝廷年中の儀式、百官臨時の作法及び諸官中の事務、其他國々の恆式等を詳かに記す、延長五年左大臣藤原忠平等勅に依りて撰する處也。

勅書　勅日本國王書

勅日本國王王明樂美衜德。彼禮義之國。神靈所扶。滄溟往來。未嘗爲患。不知去歲。何負幽明。丹墀眞人廣成等。入朝東歸。初出江口。雲霧斗暗。所向迷方。俄遭惡風。諸船飄蕩。其後一船。在越州界。卽眞人廣成。尋已發歸。計當至國。一船飄入南海。卽朝臣名代。艱虞備至。性命僅存。名代未發之間。又得廣州表。奏朝臣廣成等。飄至林邑國。既在異國。言語不通。並被却掠。或殺或賣。言念災患。所不忍聞。然則林邑諸國。比常朝貢。朕已勅安南都護。令宣勅告示。見在者令其送來。待至之日。當存撫發遣。又一船不知所在。永用疚懷。或已達彼蕃。有來人可具奏。此等災變。良不可測。卿等忠信。則爾何負神明。而使彼行人。罹其凶害。想卿聞此。當用驚嗟。然天壤悠悠。各有命也。中冬甚寒。卿及百姓。並平安好。今朝臣名代還。一一口具。遣書指不多及。

今按。此玄宗勅書也。張九齡爲知制誥作之。日本國王指聖武天皇。王明樂美衜德文苑英華王作主。衜作御是。儀制令義解。我稱天皇。曰須明樂美御德。禮義之國稱我也。北史曰。性質直有雅風。宋史曰。國王一姓。亦此意也。神靈所扶。凡每發遣唐使。必奉幣于住吉。以船居者吾佐之致也。見延喜式。丹墀音近多治比。多治比眞人姓也。文苑英華丹墀廣成作城。非是。乃我國史所謂多治比眞人廣成也。續日本紀曰。聖武天皇天平四年。當唐玄宗開元二十年。八月丁亥。以從四位上多治比眞人廣成爲遣唐大使。從五位下中臣朝臣名代爲副使。判官四人。錄事四人。六年當開元二十二年。十一月丁丑。入唐大使。從四位上多治比眞人廣成等來著多禰島。七年當開元二十三年。三月丙寅。入唐大使從四位上多

（波斯）西域記に「波剌斯國舊曰波斯、雖非印度之國、路次也、周數萬里大都城號蘇剌薩儻那、周數四十餘里川土既多氣序亦異大抵温也、引水爲田人戸富饒、出金銀鍮石水精異寶、工織大錦細褐（ニシキトロメン）𣰽毹（ケオリ）之類、多善馬、貨用大銀錢、人性躁暴俗無禮義、文字語言異於諸國、無學藝、多工技、」とあり。

（崑崙國）三才圖會に「崑崙層斯」に作る、太平御覽に「南夷志曰、崑崙國王、北去西洱河八十一程、出象及青木香旃檀檳榔琉璃水精犀角等物、」とあり。

治比眞人廣成等。自唐國至進節刀。朝臣名代中臣朝臣。名代。續日本紀曰。八年（當國元二十四年。）七月庚午。入唐副使從五位上中臣朝臣名代等。率唐人三人波斯一人拜朝。十一月戊寅。天皇臨朝。詔授入唐副使從五位上中臣朝臣名代從四位下。朝臣廣成。我國史所云平群朝臣廣成。續日本紀曰。十一年（當開元二十七年。）十一月辛卯。平群朝臣廣成等拜朝。初廣成。天平五年隨大使多治比眞人廣成入唐。六年十月。事畢却歸。四船同發。從蘇州入海。惡風忽起。彼此相失。廣成之船。一百一十五人。漂著崑崙國。有賊兵來圍。遂被拘執。成等四人。僅免死得見崑崙王。仍給升糧。安置惡處。至七年。有唐國欽州熟崑崙到。彼使被偸載出來。既歸唐國。逢本朝學生阿倍仲滿。便奏得奏天子。許之。給船粮發遣。十年三月。從登州入海。五月到渤海界。適遇其王大欽茂差使欲聘我朝。卽時同發。及渡海。渤海一船遇浪傾覆。大使胥要德等四十人沒死。廣成等率遺衆到著出州國。（州當作羽。）

通典卷第一百八十五

唐京兆杜佑君卿纂

邊防一　東夷上

倭

倭自後漢通焉。在帶方東海大海中。依山島爲居。凡百餘國。光武中元二年。倭奴國奉朝貢賀。使人自稱大夫。倭國之極南界也。安帝永初元年。倭面土地王師升等獻生口。桓靈間。倭國大亂。更相攻伐。歷年無主。有一女子。名曰卑彌呼。年長不嫁。事鬼道。能以妖惑衆。於是共立爲王。侍婢千人。少有見者。唯有男子一人。給飲食以傳辭。出入語。居處宮室。樓觀城柵嚴設。常有人持兵守衞。魏明帝景

〔晉武帝〕後趙主第三世也、字は季龍勒の養子、性酷虐にして殺を嗜む、然れども軍中に在て勇幹策略あり、衆を御する事嚴にして煩しからず、勒、之を指授攻討せしむろに向ふ處なし、故に之を籠任す、勒が子弘を立てゝ太子と爲すや、季龍之を怨む、曰く主上襄國に都せしより以來、端拱指授して吾が躬を以て矢石に當つる二十餘年、大業を成すものは我也と、遂に趙王弘を殺して其の位を簒ふて自ら帝と稱す。

初二年。司馬宣王之平公孫氏也。倭女王始遣大夫。詣京都貢獻。魏以爲親魏倭王。假金印紫綬。齊王正始中。卑彌呼死。立其宗女臺與爲王。魏略云。倭人自謂太伯之後。其後復立男王。並受中國爵命。晉武帝太始初。遣使重譯入貢。宋武帝永初二年。倭王讃脩貢職。至曾孫武。順帝昇明二年。遣使上表曰。封國偏遠。作藩于外。自昔祖禰。躬擐甲冑。跋涉山川。不遑寧處。東征毛人五十五國。西服衆夷六十六國。渡平海北九十五國。臣雖下愚。忝胤先緒。驅率所統。歸崇天極。道遙百濟。裝理船舫。而句麗無道。圖欲見呑。虔劉不已。毎致稽滯。臣欲練甲理兵。摧此強敵。克靖方難。無替前功。竊自假開府儀同三司。其餘咸各假授。詔除武使持節安東大將軍倭王。其王理邪馬臺國。或云。邪摩堆。去遼東萬二千里。在百濟新羅東南。其國東西五月行。南北三月行。各至於海。大較在會稽閩川之東。亦與朱崖儋耳相近。其國土俗宜禾稻麻苧蠶桑。知織績爲縑布。出白珠青玉。其山出銅。有丹土氣温暖。冬夏生菜茹。無牛馬虎豹羊。有薑桂橘椒蘘荷。不知以爲滋味。出黒雉。有獸如牛。名山鼠。又有大蛇。呑此獸。蛇皮堅不可斫。其上孔乍開乍閉。時或有光。射中之。蛇則死。其兵有矛楯木弓竹矢。或以骨爲鏃。男子皆黥面文身。自謂太伯之後。衣皆横幅結束。相連無縫。女人被髪屈紒作衣。如單被穿其中央。貫頭而著之並以丹朱坌其身。如中國之用粉也。有城柵屋室。父母兄弟異處。唯會同男女無別。飲食以手。而用籩豆。俗皆徒跣。以蹲踞爲恭敬。人唯嗜酒。多壽考。國多女。大人皆有四五妻。其餘或兩或三。女人不婬不妬。又俗不盜竊。少爭訟。其婚嫁不娶同姓。婦入夫家。必先跨火。乃與夫相見。其死停喪十餘日。家人哭泣不進酒食肉。親賓就屍。歌舞爲樂。有棺無槨。封土作冢。舉大事灼骨以卜。用決

〔燕享〕饗宴也、燕は古くは、宴又は醼、讌に通用し、酒宴の意也、詩經小雅鹿鳴の條に「式燕式敖」などあるは此の意也。

〔煬帝〕隋第二世煬皇帝也、姓は楊、名は廣、一名英、小字阿麼、文帝の第二子、位に卽いて土木を窮極し奢侈度なく、天下騷然として盜賊蜂起す、帝南遊して江都に在り、唐公李淵遙に之を廢して恭帝を立つ、後其將宇文化及等に殺さる、在位十二年改元一、大業是也。

吉凶。其行來渡海。詣中國。常使一人不櫛沐。不食肉。不近婦人。名曰持衰。若在途吉利。則共顧其財物。若有疾病遭暴害。以爲持衰不謹。便欲殺之。官有十二等。一曰大德。次小德。次大仁。次小仁。次大義。次小義。次大禮。次小禮。次大智。次小智。次大信。次小信。員無定數。有軍尼百二十人。猶中國牧宰。八十戸置一伊尼翼。如里長也。十伊尼翼屬一軍尼。其王以天爲兄。以日爲弟。尤信巫覡。每至正月一日。必射戲飮酒。節略與華同。樂有五絃琴笛。好碁握槊樗蒲之戲。隋文帝開皇二十年。倭王姓阿每名日多利思比孤。其國號阿輩雞彌華言天兒也。遣使詣闕。其書曰。日出處天子。致書日沒處天子。無恙云々。帝覽之不悅。謂鴻臚卿曰。蠻夷書有無禮者。勿復以聞。明年帝遣文林郎裴清使於倭國。渡百濟東至一支國。又至竹斯國。又東至秦王國。其人同於華夏。以爲夷州疑不能明也。又經十餘國。達於海岸。自竹斯以東。皆附庸於倭。清將至。王遣小德阿輩臺。從數百人設儀仗。鳴鼓角來迎。又遣大禮歌多毘。從二百餘騎郊勞。既至彼都。其王與清相見。設燕享以遣。復令使者隨清來貢方物。其國跣足。以幅布蔽其前後。椎髻無冠帶。隋煬帝時。始賜與衣冠。今以綵錦爲冠飾。裳皆施襈。音饌綴以金玉。衣服之地。頗同新羅。大唐貞觀五年。遣新州刺史高仁表。持節撫之。浮海數月。方至。仁表無綏遠之才。與其王爭禮。不宣朝命而還。由是遂絕。又千餘里至侏儒國。人長三四尺。自侏儒東南行。船行一年至裸國黑齒國。使驛所傳極於此矣。倭一名日本。自云。國在日邊。故以爲稱。武太后長安二年。遣其大臣朝臣眞人。貢方物。眞人者猶中國地官尚書也。頗讀經史。解屬文。首冠進德冠。其頂百花分而四散。身服紫袍。以帛爲腰帶。容止溫雅。朝廷異之。拜爲司膳員外郎。天寶末。衞尉少卿朝

衡。卽其國人。

今按。通典與前史大同小異。宜參考。有薑桂橘椒蘘荷。不知以爲滋味。出魏志見前。然自古栽薑食之。日本書紀神武天皇歌曰。倶梅能故邏餓介者茂等珥宇惠志破餌介瀰匂致弭比倶。觀此則我國人食薑尙矣。

又　蝦夷

蝦夷國海島中小國也。其使鬚長四尺。尤善弓矢。插箭於首。令人戴瓠而立。四十歩射之。無不中者。

大唐顯慶四年十月隨倭國使人入朝。

今按蝦夷事亦見唐書。而通典爲詳矣。按日本書紀所稱蝦夷者非一。陸奧與越蝦夷。齶田渟代二郡蝦夷。渡島蝦夷。柵養蝦夷。飽田蝦夷（飽田與齶田同與。）津輕郡蝦夷。膽振鉏蝦夷。問菟蝦夷是也。又曰。伊吉連博德書曰。天子問曰。此等蝦夷國在何方。使人謹答。國在東北。天子問曰。蝦夷幾種。使人謹答。類有三種。遠者名都加留。次者麁蝦夷。近者名熟蝦夷。

又卷第一百八十六

邊防二　東夷下

流求（條）煬帝大業初。海師何蠻等云。每春秋二時天淸氣靜。東向依稀似有煙霧之氣。亦不知幾千里。三年帝令羽騎尉朱寬入海求訪異俗。何蠻言之。遂與蠻倶往。因到流求國。言不相通。掠一人幷取其布甲而還。時倭國使來朝。見之曰。此夷邪久國人所用也。帝遣虎賁郎將陳稜朝請大夫張鎭州。率

〔倶梅能故邏云々〕久米の子等が、垣本に植ゑし椒、口疼ゝ也。

〔齶田〕飽田或は秋田とも書す、齊明天皇の四年四月、越國守阿部比羅夫こゝの蝦夷を討ちたる由、日本紀に記せり。

〔津輕郡〕古へ陸奥國、今青森縣に屬す、書紀「津刈」に作る、蝦夷の故地也、齊明天皇四年四月阿倍比羅夫津輕を定め、之を越國に隷し、尋で出羽國に屬せしむ、延喜式、和名抄、拾芥抄共に郡名見えず、文祿檢地以後其名を記されたり。

兵自義安（今潮陽郡）浮海擊之、至流求。初稜將南方諸國人從軍、有崑崙人頗解其語、遣人慰諭之、流求不從、逆官軍、稜擊走之。進至其都、頻戰皆敗、毀其宮室、虜其男女數千人而還。

今按。邪久者。唐書所謂邪古。日本書紀所謂掖玖也。字雖異音通。邪久爲我西南小島。故使者知其布甲。日本書紀推古天皇二十四年三月、掖玖人三口歸化。五月夜句人廿口來之。七月亦掖玖人二十口來之。先後幷三十人。皆安置於朴井。未及還皆死焉。二十八年八月、掖玖人二口。流來於伊豆島。舒明天皇元年四月辛未朔。遣田部連（闕名）於掖玖。二年九月。田部連等至自掖玖。三年二月庚子、掖玖人歸化。觀此則其歸我久矣。

周禮註疏卷第二十五　　漢鄭氏註　　唐陸德明釋文

春官宗伯第三

大祝辨九𢷬。一曰稽首。二曰頓首。三曰空首。四曰振動。五曰吉𢷬。六曰凶𢷬。七曰奇𢷬。八曰褒𢷬。九曰肅𢷬。以享右祭祀。〔註〕鄭大夫（大中大夫鄭少贛名興）云、動讀爲董。書亦或爲董。振董以兩手相擊也。〔釋文〕𢷬音拜。下同。振動如字。李音董。杜徒弄反。今倭人拜以兩手相擊。如鄭大夫之說。蓋古之遺法。

今按。倭當作倭。拜擊兩手。謂拍手也。凡拜神拍手。儀式曰。大嘗祭辰日。獻物拍手。四段段別八度。所謂八開手也。正此意。又按日本書紀。曰持統天皇四年春正月戊寅朔。即天皇位。公卿百寮羅列、匝拜而拍手。觀此則古者拜君亦拍手也。又類聚國史曰。桓武天皇延曆十八年春正月丙午朔。皇帝御大極殿。受朝。文武九品已上。蕃客等各陪從、減四拜爲再拜。不拍手。以有渤海國使也。白虎

〔周禮〕一に周官とも云ふ、周の周公旦攝政六年の間に作りたるもの、後世之れに、儀禮、禮記を併せて三禮と曰ひ、又、十三經に列せり。

〔鄭氏〕鄭玄也、字は康成、高密の人博學能文、氣力絕倫なり、其の注釋する處、詩書、易經、禮記、儀禮、論語、孝經等凡そ百餘萬言ありと云ふ。

〔陸德明〕名は元朗字を以つて行はる蘇州の人、名理の言を善くし、貞觀の始め國子博士に拜し、吳縣男に封す、撰著する處、經典釋文三十卷、孝子疏十五卷、易疏二十卷あり。

通曰。再拜法陰陽也。蓋審容知之。不知我朝兩段再拜。故減爲再拜。唐失拍手禮。故止之歟。諸神記云。凡天空而晝夜運行。地虛無而萬物生。人無心而動靜成。皆所以虛而有靈也。手中無一物。拍則聲自生。此亦虛而有靈也。無一物而相交。故拜拍手。二條亞相記。以訓拍手。曰加之八手宇都。其意謂。或曰。訓膳曰加之波手。古者用柏葉盛飲食。故名加之波手。君拍手召膳。臣拍手獻之。故拍手亦曰加之波手。愚以爲。加之八手乃八開手之意。蓋開手拍之。其半如柏葉。度會延佳曰。韻會小補動下。亦有倭人拜以兩手相擊說。

唐詩鼓吹卷第一　元資善大夫中書左丞郝天挺註　古岡後學廖文炳解

劉禹錫　贈日本僧智藏

浮杯萬里過滄溟。高僧傳。杯渡者不知其姓名。常乘木杯渡河。因以名焉。宋文帝元嘉元年。行至赤山湖而死。徧禮名山適性靈。深夜降龍潭水黑。後趙佛圖澄。能降龍致風雨。新秋放鶴野田青。放鶴事已見下送處厚入蘭註。晉永嘉郡記曰。青田有雙白鶴。年年生子。長大便去。惟餘父母一雙在耳。身無彼我那懷土。論語。小人懷土。心會眞如不讀經。馬祖曰。眞如有變易。豈不聞善知識者。能迴三毒爲三聚淨戒。迴六賊爲六神通。迴煩惱作菩提。迴無明作大智。若眞如無變易。是外道矣。爲問中華學道者。幾人雄猛得寧馨。晉書。王衍字夷甫。神情明秀。總角嘗造山濤。濤曰。何物老嫗生寧馨兒。寧馨吳語猶當言如是也。

三毒ハ天心毒。地隱毒。人心毒。三聚氣色神也。六賊ハ眼耳鼻舌身意。

首言。智藏自日本浮杯渡海而來。凡到名山未嘗不拜禮焉。三句言有法力。四句言其好生。五句言僧既無彼我。豈尚有故鄉之懷。六句言佛道既精。尚何假于文句之事。未許其勇于學道中國之僧所不及也。

今按。此詩亦載文苑英華卷第二百二十一。杯作盃。性靈作舊扃。集作性靈。懷風藻有智藏。天智持統時

〔兩段再拜〕續和漢名數に「本朝兩段再拜、江家次第曰、本朝之風、四度拜神、謂之兩段再拜」とあり。

〔八開手〕本書の說の他尚數說あり、彌開手にて、兩手を左右に充分引き開きて打つ拍手の意とも、又、八度拍手を打ち鳴らす意なりと云ふ。太神宮儀式帳にも「八開手拍互」とあり。

〔三毒〕貪瞋痴の三を云ふ、智度論三十一に「有利益我者生貪欲、違逆我者而生瞋恚、此結使不從智生從狂惑生故是名爲痴、三毒爲一切煩惱根本」とあり。

〔懷風藻〕安齋隨筆

に「懷風藻」一卷あり、此の書は日本人の詩を集めたる、四十六代孝謙天皇天平勝寶二年の撰なり、撰者は詳かならず、此の時代は唐朝に交り往來あり、唐に旅寓し、彼の土にて學文する者もありし故、詩も唐風也」とあり。

〔元亨釋書〕三十卷推古天皇以來元亨中に至る七百年間釋敎に係りたることを悉く記せり、一書の體、其意春秋史記に擬すと云へり、初め著者師練三十歲の時、鎌倉建長寺に往き、唐僧一山に會してこゝに暗示を得て編纂せる也と云ふ

人。入唐而前劉禹錫百有餘年。然則與禹錫贈詩智藏別也。又呉國僧有智藏。元亨釋書曰。釋智藏呉國人。謁嘉祥受三論微旨。入此土居法隆寺。白鳳元年爲僧正。慈智光皆藏之徒也。此亦禹錫以前人。

又卷第五

皮日休

送圓載上人歸日本國

講殿談餘著賜衣。椰帆却返舊禪扉。椰帆以椰木爲帆檣。貝多紙上經文動。貝多出摩伽陀國。長六七尺。冬不凋。梵語貝多婆力叉。漢言樹葉。西域寫經用此。西陽雜俎。如意瓶中佛爪飛。圓覺經云。譬如清淨摩尼寶珠映於五色。注 梵言摩尼。漢言如意也。○宋史西河隴石人劉直詞於丹陽城下得青玉珠。見放光明。集僕掘得鐵函。函中又有銀函。盛舍利及佛爪髮。詔遣沙門釋雲迎之。颶母影邊持戒宿。波神宮裏受齋歸。嶺表志云 秋夏間有暈如虹。謂之颶母影。必有颶風。能覆舟。人泛海者常以爲懼也。詩言。圓載上人修持戒律。精嚴能使龍宮命食。雖遇颶風亦無傷也。波神宮謂龍宮也。家山到日將何日。白象新秋十二回。西陽雜俎。乾陀國頭河岸有繫白象樹。花葉似棗季冬方熟。相傳。此樹滅佛法亦滅。

首言。上人講論之餘。蒙賜衣之寵。今且挂帆而歸於日本。行見道途之間。展貝多而經文動。探如意而佛爪飛。其唄梵之勤。靈感之異當有如斯者矣。乃若舟行海上。颶母影邊持戒而宿。波神宮裏受齋而歸。風濤之險不足爲上人患也。於是計其到家之日。白象之樹秋乃榮茂。則其新秋至國。白象亦當十二回也。佛法之盛。不於上人見之哉。

今按。圓載上人。仁明天皇時。遊學于中華。續日本後紀曰。承和十一年。當唐武宗會昌四年。七日癸未。勅曰。在唐天台請益僧圓仁。留學僧圓載等。久遊絕域。應乏旅資。宜附圓載傔從僧仁好還次賜各黃金百兩。者所司准勅。分付如前。天恩之及遠厚矣。宋高僧傳廣脩傳有載事。見下。又天台山僧維蠲獻

郎中使君閣下書曰。貞元中僧最澄來會僧道邃。爲講義。陸使君給判印。歸國大闡玄風。去年僧圓載奉本國命。送太后衲袈裟。供養大師影。聖德太子法華經疏。鎭天台藏。賚衆疑五十科。來問抄寫所欠經論。禪林寺廣脩答。一本已蒙前使李端公判印竟。維蠲答一本幷付經論疏義三十本。伏乞。郎中賜以判印。開成五年八月十三日。朝議郎使持節台州刺史上柱國賜緋魚袋滕邁判云。圓載闍梨是東國至人。洞西竺妙理。梯山航海。以月繫時。涉百餘萬道途之勤。歷三大千世界之遠。經文翻於貝葉。鄉路出於扶桑。破後學之昏迷。爲空門之標表。週禮白足。淹留赤城。遊巡既周。巾錫將返。懇求印信。以爲公憑。行業衆知。須允其請。或曰。載圓仁之徒也。學成歸朝。溺于海。

酉陽雜俎前集卷之三　　唐　太常少卿臨淄柯古　段成式　撰

國初。僧玄奘往五印取經。西域敬之。成式見倭國僧金剛三昧。言嘗至中天。寺中多畫玄奘麻屩及匙筯。以綵雲乘之。蓋西域所無者。每至齋日輒膜拜焉。

今按。唐太宗時。玄奘三藏。至五印度國求佛法。取經六百餘部而歸。其所過諸國事。著西域記十二卷。記之詳矣。金剛三昧不知何人。往來十萬里難。親見天竺人仰奘遺愛。誠異僧也。惜哉國記失其傳矣。古來本國僧。欲往天竺不能者亦不爲不多也。眞如親王。過流沙到羅越國逝旅遷化。師鍊贊曰。自推古至今七百歲。學者之事西游也以千百數。而跂印度者只如一人而已。蓋不考金剛三昧事也。西域所無者指麻屩匙筯也。西域記曰。食以一器。衆味相調。手指斟酌。略無匙箸。至於老病。乃用銅匙。

〔天台山〕支那浙江省台洲天台縣の西にあり、隋の智者大師此山に依て一宗を開闢し、依て天台宗の名あり。

〔最澄〕傳教大師と謚す、姓は三津氏其先は漢獻帝の苗裔、我が應神の朝歸化せるもの、父は百枝、天台宗の開祖也。

〔玄奘〕唐代の高僧也、姓は陳氏、漢の太丘仲丘の後也貞觀三年西遊し百難を排して印度に入り、唯識を戒賢論師に受け、同十九年長安に歸る、弘德寺、慈恩寺、玉華宮に於て諸經論を譯す。

〔五印〕五印度也、印度を東西中南北の五區劃の稱也。

李太白詩卷之十六

送王屋山人魏萬還王屋詩。

其略曰、迴橈楚江濱。揮策揚子津。身著日本裘。昂藏出風塵。楊齊賢註、裘則朝卿所贈日本布爲之。

又卷之二十五哀傷

哭晁卿衡

日本晁卿辭帝都。征帆一片遶蓬壺。明月不歸沈碧海。白雲秋色滿蒼梧。

今按、晁衡者阿倍仲麻呂。唐書曰、仲滿慕華不肯去。易姓名曰朝衡。詳見前。仲麻呂數往還。唐人餞別爲此也。古今和歌集中載仲麻呂在唐。看月詠和歌曰。天乃原布利佐計看禮波春日奈留三笠乃山爾出之月加毛。又文苑英華。使本國詩、皆此時耶。終沒于唐。故仁明天皇承和三年五月戊申。附聘唐使。贈遣使往彼邦本朝前入唐使并留學等在彼身沒者八人位記。以慰幽魂。仲麻呂其一也。其詔詞曰、故留學問贈從二品安倍朝臣仲滿。大唐光祿大夫右散騎常侍兼御史中丞北海郡開國公贈潞州大都督朝衡、可贈正二品。身涉鯨波。業成麟角。詞峰聳峻。學海揚漪。顯位斯昇。英聲已播。如何不慭、奠遠言歸。唯有掩天之草。長傳擲地之聲。追賁幽壤。既隆於前命。重叙崇班。俾洽於命詔。李太伯亦作詩哀之。然自死在衡前。詳在文苑英華條。

杜子美詩分類集註卷之六　五言古　都城類

錫山二泉邵　寶國賢父集註
同邑最木過　棟汝器父參箋

〔李太白〕李白也、太白は字也、青蓮と號す、唐朝、隴西城記の人、涼武昭王九世の孫、長安元年母長庚を夢みて之を生む、故に白と名くと、少うして逸才あり、志氣宏放、縱橫の術を喜び、士氣なく、節操なきの中獨り超然時流をぬき、詩聖を以つて稱さる。

〔蓬壺〕蓬萊山をいふ、三神山の一也、拾遺記に「三壺、海中三山也、一曰方壺、則方丈也、二曰蓬壺、則蓬萊也、三曰瀛壺、則瀛洲也、形如壺器」とあり。

〔杜子美〕杜甫也、子美は字也、唐朝の詩人にて少陵と號す。

三吳雲望周子文岐陽父校梓

奉レ和ニ嚴中丞西城晩眺一十韻

汲黯匡レ君切。廉頗出將頻。直詞才不世。雄略動如レ神。政簡移レ風速。詩淸立レ意新。層城臨ニ媚景一。絕域望餘春一。旗尾蛟龍會。樓頭燕雀馴。地平江動レ蜀。天濶樹浮レ秦。帝念深分レ閫。軍須遠算レ緡。花羅封ニ蛺蝶一。瑞錦送ニ麒麟一。辭レ第輸ニ高義一。觀レ圖憶ニ古人一。征南多ニ興緒一。事業闇相親。集註。蛺蝶麒麟ハ羅錦之上文繡也。漢武時西域獻ニ蛺蝶羅一。日本國貢ニ麒麟錦一。眩ニ人眼目一。

今按。漢武帝ハ當ニ日本開化天皇崇神天皇之時一。

白氏長慶集後序

白氏前著ニ長慶集五十卷一。元微之爲レ序。後集二十卷自爲レ序。今又續後集五卷自爲レ記。前後七十五卷。詩筆大小凡三千八百四十首。集有ニ五本一。一本在ニ廬山東林寺經藏院一。一本在ニ蘇州南禪寺經藏內一。一本在ニ東都勝善寺鉢塔院律庫樓一。一本付ニ姪龜郎一。一本付ニ外孫談閣童一。各藏ニ於家一。傳ニ於後一。其日本暹羅諸國。及兩京人家傳寫者。不レ在ニ此記一。又有ニ元白唱和因繼集一。共十七卷。劉白唱和集五卷。洛下遊賞宴集十卷。其文盡在ニ大集內一。錄出別行ニ於時一。若集內無。而假レ名流傳者皆謬爲耳。會昌五年夏五月一日。樂天重記。

今按。江談抄曰。嵯峨太上天皇。得ニ白居易文集一珍レ之。又越後守平貞顯。金澤文庫所レ藏文集卷第三十三後書曰。會昌四年五月二日夜。奉下爲ニ日本國僧惠萼上人一寫中此本上。西峯謂。樂天所謂日本傳寫

〔廬山〕支那江西省にある山名也、一に匡廬とも云ふ、古來詩賦に詠ぜらる、就中李白の廬山瀑布の詩に「日照ニ香爐一生ニ紫烟一、遙看瀑布掛ニ長川一、飛流直下三千尺、疑是銀河落ニ九天一」とあるは有名也。

〔蘇州〕支那江蘇省の蘇州府也、張繼の楓橋夜泊の詩、「月落烏鳴霜滿レ天、江楓漁火對ニ愁眠一、姑蘇城外寒山寺、夜半鐘聲到ニ客船一」にて世に知らる。

〔暹羅〕三才圖繪に「暹羅在ニ占城極南海中一、本暹與ニ羅斛二國、暹乃漢赤眉遺種、厥土瘠不レ宜ニ耕藝一、羅斛土田平衍多稼ニ暹人一」とあり。

〔白居易〕唐朝の人、字は樂天、其の先は太原の人、詩を善くす、晩年意を詩酒に委ね、東都に居り、沼を疏して柳を殖ゑ、醉吟先生と號す。

〔長慶集〕七十五卷あり、白居易氏の編也。

〔阿育王〕西紀前三百二十一年頃、印度に於て孔雀王朝を創立せし、旃陀掘多大王の孫也、紀元前二百七十年頃印度を統一し、大いに佛教を保護し、之を各地に宣布せしむ。

者。正謂是耶。惠萼本題曰。文集太原。白居易乃此本。流布于世。故我朝古之人。引白氏長慶集。惟稱文集。源氏物語。江吏部集等俱曰文集是也。其後。中國印本文集渡于我朝。題曰。白氏文集。爾來亦僉謂白氏文集。詠歌大概曰。白氏文集是也。各知其有由矣。

法苑珠林卷第五十一　　唐上都西明寺沙門釋道世玄惲撰

倭國。在此洲外大海中。距會稽萬餘里。隋大業初。彼國官人會丞。來此學問。內外博知。至唐貞觀五年。共本國道俗七人方還倭國。未去之時。京內大德。每問彼國佛法之事。因問阿育王。依經所說。佛入涅槃一百年後出世。取佛八國舍利。使諸鬼神。一億家爲一佛塔。造八萬四千塔。偏閻浮洲。彼國佛法晚至。未知已前有阿育王塔不。會丞答曰。彼國文字不說。無所承據。然驗其靈迹。則有所歸。故彼土人開發土地。往往得古塔靈盤。佛諸儀相數放神光。種々奇瑞。詳此嘉應。故知先有也。

今按、日本書紀。推古天皇十六年。當隋大業四年。遣於國隋學生倭漢直福因。奈羅譯語惠明高向漢人玄理。新漢人大國。學問僧新漢人日文。南淵漢人請安。志賀漢人惠隱。新漢人廣齊等幷八人也。三十一年。當唐武德六年。大唐學問者福因等歸。法苑珠林。所謂會丞。大業初來學問。貞觀五年共道俗七人還者是也。然學生中無會丞。恐福因之訛。

禪月集卷十二五言律詩

送僧歸日本　　浙江東道婺州蘭溪縣和安寺西岳賜紫蜀國禪月大師貫休述

〔信濃淺間〕淺間山也、信濃國北佐久郡の北端と、上野國吾妻郡とに跨る活火山にして、高さ八千二百三十尺頂上常に硫煙を吐けり。

〔肥後阿蘇〕阿蘇山也、肥後國阿蘇郡の南部、熊本市の東方にあり、活火山也、山彙中に杵島、烏帽子、中、高、根子の五嶽あり。

〔越中立山〕古訓「たちやま」越中國にあり、山上に縣社雄山神社あり、高さ二千九百米、登攀至難なれども山上の眺望甚だ壯宏也。

〔兜率天〕佛說にて地上三十二萬由旬にありて彌勒菩薩の住する處と云ふ。

焚香祝海雲。開眼夢中行。得達卽便是。無生可作輕。流黃山火著。碇石柰雷鳴。想到東王禮。遠爲上寺迎。有僧遊日本云。彼祇有三寺。上寺名兜率。國王供養。中寺名停士。上棟品官人供養。下寺名祇上寺。風俗供養。有德行。卽漸遷上也。

今按。流黃山火著。本朝諸州山。產硫黃處。石燒飛如迅雷。自遠視之。火烟騰發。如信濃淺間。肥前溫泉。肥後阿蘇。越中立山之類。彼祇有三寺。日本有數萬伽藍。而分三品也。君王勅願。臣下建立。庶民構造。是矣。上寺名兜率者。其壯麗如佛說兜率天。上寺各有號。非總名兜率也。臣民之寺亦各有名所謂停士。祇上寺者傳聞之謬也。

義楚六帖卷第二十一　後周　齊州開元寺講俱舍論賜紫明教大師進釋氏六帖　義楚集

國城州市部第四十三

日本國亦名倭國。東海中。秦時。徐福將五百童男五百童女。止此國也。今人物一如長安。又顯德五年歲在戊午。有日本國傳瑜伽大教弘順大師賜紫寬輔。又云。本國都城南五百餘里有金峯山。頂上有金剛藏王菩薩。第一靈異。山有松檜名花軟草。大小寺數百節行。高道者居之。不曾有女人得上。至今男子欲上。三月斷酒肉欲色。所求皆遂。云。菩薩是彌勒化身。如五臺文殊。又東北千餘里有山。名富士。亦名蓬萊。其山峻。三面是海。一朶上聳。頂有火煙。日中上有諸寶流下。夜卽却上。常聞音樂。徐福止此。謂蓬萊。至今子孫皆曰秦氏。彼國古今無侵奪者。龍神報護。法不殺人。爲過者配在犯人島。其他靈境名山。不及一一記之。

今按。五代史無日本傳。義楚六帖。說日本事。粗詳。可以補五代史闕也。後周太祖顯德五年。當此土村上天皇天德二年。金峰山在大和國吉野郡。所謂吉野山也。富士山在駿河國富士郡。

宋史卷四百九十一列傳第二百五十

開府儀同三司上柱國錄軍國重事前中書右丞相監修國史領經筵事都總裁臣脫脫等奉　勅修

外國七　日本國

日本國者本倭奴國也。自以其國近日所出。故以日本爲名。或云。惡其舊名改之也。其地東西南北各數千里。西南至海。東北隅隔以大山。山外卽毛人國。自後漢始朝貢。歷魏晉宋隋皆來貢。唐永徽顯慶長安開元天寶上元貞元元和開成中。並遣使入朝。雍熙元年。日本國僧奝然。與其徒五六人浮海而至。獻銅器十餘事幷本國職員今王年代紀各一卷。奝然衣綠。自云。姓藤原氏。父爲眞連。眞連其國五品品官也。奝然善隸書。而不通華言。問其風土。但書以對云。國中有五經書及佛經白居易集七十卷。並得自中國。土宜五穀。而少麥。交易用銅錢。文曰。乾文大寶。畜有水牛驢羊。多犀象。産絲蠶。多織絹。薄緻可愛。樂有國中高麗二部。四時寒暑。大類中國。國之東境接海島。夷人所居。身面皆有毛。東奧洲産黃金。西別島出白銀。以爲貢賦。國王以王爲姓。傳襲至今王六十四世。文武僚吏皆世官。其年代紀所記云。初主號天御中主。次曰天村雲尊。其後皆以尊爲號。次天八重雲尊。次天彌聞尊。次天忍勝尊。次瞻波尊。次萬魂尊。次利々魂尊。次國狹槌尊。次角龔魂尊。次汲津丹尊。次面垂見尊。次國常立尊。次天鑑尊。次天萬尊。次沫名杵尊。次伊弉諾尊。次素盞烏尊。次天照大神尊。次正哉吾勝速日天押穗

〔五代史〕宋の歐陽修の撰する處にして、梁、唐、晉、漢、周の五代を合して一史としたるもの也、本紀十二卷、列傳四十卷なり。

〔金峰山〕大和國吉野郡吉野山を云ふこゝに、金峯山寺あり、俗に藏王權現堂とも、藏王堂とも云ふ、又、金輪王寺とも云ふ、古くは天台、眞言兩派なりしが今天台宗延曆寺末となる、本尊は藏王大權現也。

〔國狹槌尊〕古事記に國常立神の次に記せり、天神七代の第二位の神也。

〔國常立尊〕古事記に天之常立神の次に記せり、天神七代の第一位也。

〔天鑑尊〕日本紀一書に「天鏡尊子天萬尊、天萬尊子、沫蕩尊、沫蕩尊子伊弉冉尊」とあり、又舊事記には天八下尊亦名天鏡尊と注せり。

〔天彦尊〕天津彦火瓊々杵尊也。

〔炎尊〕火々尊の誤ならん、天津彦火瓊々杵尊の御子、彦火々出見尊也。

〔彦瀲尊〕彦火々出尊の御子、彦瀲建鵜茅葺不合尊也。

〔筑紫宮〕高千穗宮を云へり、瓊々杵尊より神武天皇迄の三代の皇居也、大隅國霧島山の麓今官幣大社霧島神社の鎭座地たる、西國分寺村字宮内に其の遺跡あり。

〔白壁天皇〕人皇第

耳尊。次天彦尊。次炎尊。次彦瀲尊。凡二十五世。並都於筑紫日向宮。彦瀲第四子號神武天皇。自筑紫宮入居大和州橿原宮。即位元年甲寅。當周僖王時也。次綏靖天皇。次安寧天皇。次懿德天皇。次孝照天皇。次孝天皇。次孝靈天皇。次孝元天皇。次開化天皇。次崇神天皇。次垂仁天皇。次景行天皇。次成務天皇。次仲哀天皇。國人言。今爲鎭國香椎大神。次神功天皇。開化天皇之曾孫女。又謂之息長足姬天皇。國人言。今爲大奈良姬大神。次應神天皇。甲辰歲。始於百濟得中國文字。今號八蕃菩薩。有大臣。號紀武內。年三百七歲。次仁德天皇。次履中天皇。次反正天皇。次允恭天皇。次安康天皇。次雄略天皇。次清寧天皇。次顯宗天皇。次仁賢天皇。次武烈天皇。次繼體天皇。次安閑天皇。次宣化天皇。次天國排開廣庭天皇。亦名欽明天皇。即位十一年壬申歲。始傳佛法於百濟國。當此土梁承聖元年。次敏達天皇。次用明天皇。有子曰聖德太子。年三歲。聞十人語同時解之。七歲悟佛法于菩提寺講聖鬘經。天雨曼陀羅華。當此土隋開皇中。遣使泛海。至中國求法華經。次崇峻天皇。次推古天皇。欽明天皇之女也。次舒明天皇。次皇極天皇。次孝德天皇。白雉四年。律師道照。求法至中國。從三藏僧玄奘受經律論。當此土唐永徽四年也。次天豐財重日足姬天皇。令僧智通等入唐。求大乘法相教。當顯慶三年。次天智天皇。次天武天皇。次持總天皇。次文武天皇。大寶三年當長安元年。遣粟田眞人入唐求書籍。律師道慈求經。次阿閉天皇。次皈依天皇。次聖武天皇。寶龜二年。遣僧正玄昉入朝。當開元四年。次孝明天皇。聖武天皇之女也。天平勝寶四年當天寶中。遣使及僧入唐求内外經教及傳戒。次天炊天皇。次高野姬天皇。聖武天皇之女也。次白壁天皇二十四年。遣二僧靈仙行賀入唐禮五臺山學佛法。次桓武天皇。

四十九代光仁天皇也、天皇御名は白壁、天宗高紹天皇とも稱し奉る、天智天皇の皇子施基皇子の第六皇子、御母は紀諸人の女橡姬也。

（勝元葛野）人皇第五十二代嵯峨天皇なるべし、天皇御名は神野（カミヌ）葛野（カドヌ）と其の音相似たり、又其の御陵所在地は山城國葛野郡嵯峨村にあれば、葛野の地名を以つて稱し奉りしか考ふべし。

（諾樂天皇）人皇第五十一代平城（ナラ）天皇也、初名は安殿、幼名小殿、桓武天皇の皇長子、御母皇后藤原乙牟漏也。

次勝元葛野與空海大師及延曆寺僧澄入唐。詣天台山傳智者止觀義。當元和元年也。次諾樂天皇。次嵯峨天皇。次淳和天皇。次仁明天皇。當開成會昌中。遣僧入唐禮五臺。次文德天皇。當大中年間。次清和天皇。次陽成天皇。次光孝天皇。遣僧宗叡入唐傳教。當光啓元年也。次仁和天皇。當此土梁龍德中。遣僧寬建等入朝。次醍醐天皇。次天慶天皇。次封上天皇。當此土周廣順年也。次冷泉天皇。今爲太上天皇。次守平天皇。卽今王也。凡六十四世。畿內有山城大和河內和泉攝津。凡五州共統五十三郡。東海道有伊賀伊勢志摩尾張參河遠江駿河伊豆甲斐相模武藏安房上總常陸。凡十四州。共統一百一十六郡。東山道有通江美濃飛驒信濃上野下野陸奧出羽。凡八州。共統一百二十二郡。北六道有狹（若狹）越前加賀能登越中越後佐渡。凡七州。共統三十郡。山陰道有丹波丹後徂馬因幡伯耆出雲石見隱伎。凡八州。共統五十二郡。小陽道有播麼美作備前備中備後安藝周防長門。凡八州。共統六十九郡。南海道有伊紀淡路河波讚耆伊豫土佐。凡六州。共統四十八郡。西海道筑前筑後豐前豐後肥前肥後日向大隅薩摩。凡九州。共統九十三郡。又有壹伎對馬多褹。凡三島。各統二郡。是謂五畿七道三島。凡三千七百七十二都（郡）。四百一十四驛。八十八萬三千三百二十九課丁。課丁之外不可詳見。皆奝然所記云。按。隋開皇二十年。倭王。姓阿每名自多利思比孤。遣使致書。唐永徽五年。遣使獻琥珀馬腦。長安二年。遣其朝臣眞人貢方物。開元初遣使來朝。天寶十二年。又遣使來貢。元和元年遣高階眞人來貢。開成四年又遣使來貢。此與其所記皆同。大中光啓龍德及周廣順中皆嘗遣僧至中國。唐書中五代史失其傳。唐咸亨中乃（及）開元二十三年。大曆十二年。建中元年。皆來朝貢。其記不載。太宗召見奝然。

〔太宗〕唐朝第二世の帝、太宗世民也。高祖淵の次子也、初め世の亂れたるを見て、父に大業を勸む、淵遂に兵を大原に起し、進で長安に入る、其勢甚盛にして恭王盾を立て隋帝を太上皇となしたりしが、遂に隋帝の禪を受け唐國を建てたり。

〔孝經〕作者不詳、初めに孝の大體を述べ、天より天子より庶民に至る孝道を述べ、後、孝の用を說明せり。

〔大藏經〕一切經とも云ふ、佛教にかかる經典の總稱也、唐の玄宗の時沙門智昇始めて譯集したるもの、八千五百三十四卷あり。

〔傳燈大法師位〕僧

存撫之甚厚。賜紫衣。館于太平興國寺。上聞。其國王一姓傳繼。臣下皆世官。因。歎息謂宰相曰。此島夷耳。乃世祚遐久。其臣亦繼襲不絕。此蓋古之道也。中國自唐季之亂。縣分裂。梁周五代。享歷尤促。大臣世胄。鮮能嗣續。朕雖德慚往聖。常夙夜寅畏。講求治本。不敢暇逸。建無窮之業。垂可久之範。亦以爲子孫之計。使大臣之後世襲祿位。此朕之心焉。其國多有中國典籍。奝然之來。復得孝經一卷。越王孝經新義第十五一卷。皆金縷紅羅縹。水晶爲軸。孝經卽鄭氏注者。越王者乃唐太宗子越王貞。新義者記室參軍任希古等撰也。奝然復求詣五臺。許之。令所過續食。又求印本大藏經。詔亦給之。二年隨台州寧海縣商人鄭仁德船。歸其國。後數年仁德還。奝然遣其弟子喜因奉表。來謝曰。日本國東大寺・大朝法濟大師。賜紫沙門奝然啓。傭鱗入夢。不忘漢主之恩。枯骨合歡。猶亢魏氏之敵。雖云羊僧之拙。誰忍鴻霈之誠。奝然誠惶誠恐。頓首頓首死罪。奝然附商船之離岸。期魏闕於生涯。望落日而西行。十萬里之波濤難盡。顧信風而東別。數千里之山嶽易過。妄以下根之卑。適詣中華之盛。於是。宣旨頻降。恣許荒外之跋涉。宿心克協。粗觀寰內之瓌奇。況乎金闕曉後。望堯雲於九禁之中。巖扃晴前拜聖燈於五臺之上。就三藏而稟學。巡數寺而優游。遂使蓮華迴文神筆出於北闕之北。貝葉印字佛詔傳於東海之東。重蒙宣恩。忽趁來跡。季夏解台州之纜。孟秋達本國之郊。爰逮同年。初到舊邑。緇素欣待。侯伯慕迎。伏惟陛下。惠溢四溟。恩高五嶽。世超黃軒之古。人直金輪之新。奝然空辭鳳凰之窟。更還螻蟻之封。在彼在斯。只仰皇德之盛。越山越海。敢忘帝念之深。縱粉百年之身。何報一日之惠。染筆拭淚。伸紙搖魂。不勝慕恩之至。謹差上足弟子傳燈大法師位嘉因幷大朝剃頭受戒僧祚乾

位の一也、僧位は朝廷より賜はる法階を云ふ、法印大和尚位、法眼和尚位、法橋上人位、傳燈大法師位、傳燈法師位、傳燈滿位、傳燈住位、傳燈入位の八階あり其の中、法印、法眼、法橋を僧綱と云ふ、傳燈大法師法は、禪林象器箋に「燃二法燈一展傳不レ絕、謂二之法燈一」とあり。

〔太宰府〕「オホミコトモチノツカサ」とも訓む、大御言持の義也、天皇の詔を承けて任所に赴き、管内の政を行ふ意也、又「トホノミカド」(遠御門)とも訓めり、筑前國御笠郡太宰府村に遺跡あり。

等。拜表以聞。稱其本國永延二年歲次戊子二月八日。實端拱元年也。又別啓貢佛經。納青木函。琥珀青紅白水晶。紅黑木槵子念珠。各一連。並納螺鈿花形形平函。毛籠一納螺杯二口。葛籠一納法螺二口染皮二十枚。金銀蒔繪筥一合。納髮鬘二頭。又一合納參議正四位上藤佐理手書二卷及進奉物數一卷表狀一卷。又金銀蒔繪硯一筥一合納金硯一。鹿毛筆。松煙墨。金銅水瓶。鐵刀。又金銀蒔繪扇筥一合納檜扇二十枚。蝙蝠扇二枚。螺鈿梳函一對。其一納赤木梳二百七十。其一。納龍骨十橛。螺鈿書案一。螺鈿書几一。金銀蒔繪平筥一合納白細布五匹。鹿皮籠一納貂裘一領。螺鈿鞍轡一副。銅鐵鐙。紅絲鞦。泥障。倭畫屛風一雙。石流黃七百斤。咸平五年。建州海賈周世昌。遭風飄至日本。凡七年得還。與其國人滕木吉至。上皆召見之。世昌以其國人唱和詩來上。詞甚雕刻。膚淺無所取。詢其風俗云。婦人皆被髮。一衣用二三縑。又陳所記州名年號。上令滕木吉以所持弓矢挽射。矢不能遠。詰其故。國中不習戰鬪。賜木吉時裝錢遣還。景德元年。其國僧寂照等八人來朝。寂照不曉華言。而識文字。繕寫甚妙。凡問答並以筆札。詔號圓通大師。賜紫方袍。天聖四年十二月。明州言。日本國太宰府遣人貢方物。而不持本國表。詔却之。其後亦未通朝貢。南賈時有傳其物貨至中國者。熙寧五年。有僧誠尋至台州。止天台國清寺。願留州。以聞。詔使赴闕。誠尋獻銀香爐。木槵子。白琉璃。五香。水精。紫檀。琥珀所飾念珠。及青色織物綾。神宗以其遠人而有戒業。處之開寶寺。盡賜同來僧紫方袍。是後連貢方物。而來者僧也。元豐元年。使通事僧仲回來。賜號慕化懷德大師。明州又言。得其國太宰府牒。因人孫忠還遣仲回等。貢絁二百匹。水銀五千兩。以孫忠乃海商。而貢禮與諸國異。請自移牒報。而答

〔拾芥抄〕一に略要抄とも云ふ、三卷五十七部也、洞院公賢の撰にして、天文、地理、歲時、律曆、官位、儀節、歷代の帝號、勅撰集の始末、經史の總目等の類より、動植物の事に至る迄、要を採り、華を摘み、蒐羅して餘す處なし、實に史書參考の最たるもの也。

〔大伴宿禰家持〕大納言旅人の子、延曆年中の人、和歌を能くし名吟頗る多し、萬葉集は實に其の撰する處に係る。

使其物貢。付仲囘東歸。從之。乾道九年。始附明州綱首。以方物入貢。淳凞二年倭船火兒滕太明毆鄭作死。詔械太明付其綱首。歸治以其國之法。三年。風泊日本舟至明州。衆皆不得食行乞至臨安府者復百餘人。詔。人日給錢五十文米二升。俟其國舟至日遣歸。十年。日本七十三人復飄至秀州華亭縣。給常平義倉錢米。以振之。紹凞四年、泰州及秀州華亭縣復有倭人。爲風所泊而至者。詔勿取其貨。出常平米振給而遣之。慶元六年。至平江府。嘉泰二年。至定海縣。詔並給錢米遣歸國。

今按。奝然始居東大寺。後居嵯峨棲霞寺。元亨釋書曰。奝然居東大寺學三論。又受密乘于元杲。永觀元年秋。入宋。東大寺送書青龍寺。比睿山寄進天台山。然持一書著宋地。太宗太平興國八年也。永觀我朝圓融院年號。永觀元年。當宋太宗太平興國八年。其明年雍熙元年也。職貢令。令作今者非也。昔太政大臣淡海公。奉勅撰令二十篇。其第二篇有職員令。言官省寮司等各有員數。故名職員令。王年代記。記歷代帝王事。今猶存。宋史所引。文字多誤。眞連其國五品官也。本朝五品相當官無眞連。蓋奝然父諱眞連仕至于五品也。訛云爾。乾文大寶文當作元。拾芥抄。本朝錢品。有乾元大寶。天德二年三月二十五日所鑄。詳中卷引三才圖會文中。多犀象訛傳也。樂有國中高麗二部。文獻通考國中作中國是。東奧洲通考洲作州是。東奧州產黃金。續日本紀曰。聖武天皇天平二十一年二月丁巳。陸奧國始貢黃金。於是奉幣。以告畿內七道諸社。自此以來歷代。陸奧國貢黃金不絕。萬葉集天平感寶元年五月十二日。於越中國守館。大伴宿禰家持。賀陸奧國出金。作歌。其一曰。須賣呂伎能御代佐可延牟等阿頭麻奈流美知能久夜麻爾金花作久。西別島指對馬島。此島始出銀。

〔鎭坐本紀〕神道五部書の一、豐受太神宮御鎭座本紀の略也、一に飛鳥本紀とも云ふ。

〔度會氏系圖〕度會氏は伊勢神宮の神主也、天二上命、亦名小橋命の後也と傳へり。

〔荒木田系圖〕荒木田氏の系圖也、荒木田氏は、伊巳呂比命より出づ、成務天皇の時、其孫最上新に神田三千代(シロ)を墾く、依つて姓を荒木田と賜ふ、子孫世々大神宮の神主となる。

日本書紀曰、天武天皇三年三月丙辰、對馬國司守忍海造大國言、銀始出于當國、卽貢上、由是大國授小錦下位、凡銀有倭國初出于此時、故悉奉諸神祇、亦周賜小錦以上大夫等、初主號天御中主、鎭坐本紀曰、天地初發之時、大海之中有一物、浮形如葦牙、其中神人化生、名號天御中主神、次曰天村雲尊、耳也、天村雲命或作天牟羅雲命、按度會氏系圖、天御中主尊、次天八下尊、次天三下尊、次天合尊、次天八百日尊、次天八十萬魂尊、次神皇産靈尊、次櫛眞乳魂命、次天曾已多智命、次天嗣柞命、次天鈴柞命、次天御雲命、次大牟羅雲命、亦名天二上命、亦名小橋命、天孫降臨之時供奉、度會氏祖神也、非帝王之祖矣、其後皆以尊爲號、日本書紀曰、至貴曰尊、自餘曰命、並訓美擧等也、纂疏、尊高稱也、君父之稱也、故曰至尊曰尊、指帝者祖宗之神、自餘曰命者、指人臣祖先之神、命猶令也、爲臣者行君之命令也、日尊日命、雖別君臣之義、至於人之所敬則無貴賤之殊、故各訓曰美擧等、美擧等猶言御事、吾國尊其人則言御事也、天八重雲尊有天八百日尊、訛此耶、然則天御中主尊五世之孫也、次天彌聞尊、通考無此五字、按荒木田系圖、有神聞勝命、天御中主尊十七世之孫也、天忍勝尊有天忍日命、高皇産靈尊之子也、瞻波尊天村雲命子有天波與命、訛之與、次萬魂尊、按舊事本紀、振魂尊次神萬魂尊、乃天御中主尊十一世也、利利魂尊當作天剛川命、舊事本紀曰、萬魂尊兒天剛川命、次國狹槌尊、舊事本紀曰、國常立尊、亦云國狹槌尊、天御中主尊次神也、又據日本書紀、國常立尊國狹槌尊別神也、國狹槌尊乃國常立尊次神也、角龔魂尊龔當作龍、舊事本紀曰、三代耦生天神角樴尊、亦云角龍魂尊、泥津丹尊當作泥土煮尊沙土煮尊、面垂見尊當作

〔耦生〕並びに生れたなの意也、「たぐひ」は相雙ぶ義也。

〔周僖王〕東周第十六代の帝也、我が紀元前十九年頃の人也。

〔宇佐八幡宮記〕宇佐八幡宮の事を書せる文書也、八幡宮は、今豐前國宇佐町南宇佐の馬城の西北菱形山に鎭座する、官幣大社宇佐神宮を云へり、祭神神功皇后、仲哀天皇、應神天皇の三座也。

〔大江匡房〕江師と號す、匡衡の曾孫成衡の子也、人皇第七十三代堀河天皇頃の人也。

〔結繩〕繩の結び方によりて意志を表示せる也易經に「上古結繩而治」など見えたり。

面足尊。蓋足訓多留、與垂訓同。足見字相似。故訛曰面垂見尊。次國常立尊。據舊事本紀。國狹槌尊別號也。據日本書紀。天神第一代之神也。次天鑑尊。日本書紀曰。國常立尊生天鏡尊。次天萬尊。日本書紀曰。天鏡尊生天萬尊。次沫名杵尊。日本書紀曰。天萬尊生沫蕩尊。沫名杵乃沫蕩也。訓同。次伊弉諾尊。據日本書紀。伊弉諾尊者自國常立尊第七代。乃面足尊惶根尊次神也。次素戔烏尊。素戔烏尊伊弉諾尊之子也。然非人君。故次字非也。次天照大神。天照大神伊弉諾尊次神也。非素戔烏尊次。故次字亦非也。次正哉吾勝速日天押穗耳尊。穗當作穗。正哉吾勝勝速日天忍穗耳尊乃天照大神之子也。次天彥尊。天津彥彥火瓊瓊杵尊乃吾勝尊之子也。次炎尊。彥火火出見尊。炎火火訛乃瓊瓊杵尊之子也。次彥瀲等通考等作尊是。彥波瀲武鸕鷀草葺不合尊。乃彥火火出見尊之子也。凡二十五世非。唐書曰。初主號天御中主。至彥瀲凡三十二世。亦非。已見上。天神七代地神五代。凡十二代。餘皆支庶也。通考曰向。作日向。者非也。當周僖王時也。通考無也字。孝照通考照作昭。是。孝天皇通考孝字下有安字。是。成務通考成作城。非。仲哀天皇國人言。今爲鎭國香椎大神。筑前國那珂郡有香椎大神。兵範記曰。香椎大多羅志姬宮。今宋史以爲仲哀天皇。此亦一說非是。大奈良姬大神奈良當作多良志。宇佐八幡宮記曰。嵯峨天皇弘仁十一年。神功皇后靈降託曰。我是大帶姬也。與八幡大神可利蒼生。十四年四月十四日。勅新造大帶姬宮。應神天皇甲辰歲十五年也。通考無甲辰歲三字。始於百濟得中國文字。大江匡房筥崎宮記曰。尋其本體應神天皇之神靈也。我朝書文字。代結繩之政。即削於此朝。見朝野群載卷第三。日本書紀曰。十五年秋八月丁卯。百濟王遣阿直岐。貢良馬

二匹。阿直岐能讀經典。卽太子菟道稚郎子師焉。於是天皇問阿直岐曰、如勝汝博士亦有耶。對曰、有王仁者。是秀也。時遣上毛野君祖荒田別巫別於百濟、仍徵王仁。十六年春二月。王仁來。菟道稚郎子習諸典籍於王仁。莫不通達。王仁者書首等始祖也。今號八幡菩薩。蕃當作幡。通考作番。亦非。宇佐記曰。欽明天皇三十二年二月癸卯。豐前國宇佐郡菱形池上小倉山邊有神。託三歲兒告異人大神比義曰、辛國城八流之幡降（辛國地名。在豐前國宇佐郡）。我是日本人王十六代。譽田天皇廣幡八幡麿呂也。諸州處々垂跡爲神。於是號八幡大神。立祠祭之。蓋當時有紅素八面幡降之瑞。故取爲神號。甚爲近理。或曰、天皇始誕生時旗降。後以爲神號。未知孰是。紀武內年三百七歲。武內事詳見日本書紀。又公卿補任曰、武內大臣孝元天皇五世之孫也。景行天皇九年己卯生。仁德天皇七十八年庚寅薨。歷事六帝。爲時名臣。壽二百十二歲。不知所終。或曰。入美濃國不破山而弗見。又曰。征東夷賊平還薨。葬於大和國葛下郡。今室墓是也。次清寧天皇通考脫此五字。安開通考開作閑是。欽明通考欽作銘非。卽位十一年通考無此五字。一當作三。始傳佛法於百濟國。日本書紀曰。十三年冬十月百濟聖明王（更名聖王）遣西部姬氏達率怒唎斯致契等。獻釋迦佛金銅像一軀。幡蓋若干。經論若干卷。三歲問十人訴。同時解之。通考問作聞。日本書紀曰。生而能言。有聖智。及壯一聞十人訴以勿失能辨。兼知未然。七歲而弘佛法平氏傳曆曰。敏達天皇七年。太子七歲。燒香披見經論。于菩提寺講勝鬘經。天雨曼陀羅華。鬘當作勝。日本書紀曰、推古天皇十四年秋七月。天皇請皇太子令講勝鬘經。三日說竟之。平氏傳曆曰。講竟之夜蓮華零。華長二三尺而溢方三四丈之地。明旦奏

〔朝野群載〕目序に三十卷とあれども、十、十四、十八、十九、二十三、二十四、二十五・三十の九卷は散逸して傳はらず、三善爲康の著にして、平安朝時代の法制其他史實の好資料たり。

〔濟聖明王〕我が紀元千百八十三年より千二百十三年までの間、百濟を治む。

〔西部〕唐書東夷傳高麗條に「分五部」云々、號前部曰西部、卽消奴部也」とあればもと高麗の一部族也。

〔勝鬘經〕勝鬘師子吼一乘大方便方廣經の略也、劉宋の求那跋陀羅の譯者也。

〔橘寺〕大和國高市郡高市村大字橘にあり、菩提寺又は橘尼寺とも稱す。今佛頂山上宮院と號す、天台宗也。

〔橘京岡本宮〕舒明天皇のましませる岡本宮なるべし、舒明紀二年三月に「天皇遷於飛鳥岡傍、是謂岡本宮」とありて玉林抄に「岡本宮は、橘寺のひかし逝回岡郎今の岡寺の地に礎のところ也」とあり、今大和國高市郡岡村に舊蹟存す

〔止觀〕梵語、奢摩他の譯にて、諦理に停止して動かざるを云ふ、觀とは觀智通達して眞如に契會するの義、止は、忘念を止息する義也。

〔眞言義〕眞言の義

之。天皇大奇。車駕而覽之。即於其地誓立寺。橘樹寺是也。時人名菩提寺。或曰。橘樹寺今橘寺也。斯地橘京岡本宮之所在。橘樹爲林。故寺亦有此號。遣使泛海。至中國求法華經。使小野妹子。事在平氏傳曆。道照照當作昭。道昭事詳見續日本紀。天豐財重日足姬天皇皇極天皇也。重祚治天下。亦號齊明天皇。令智通等入唐求大乘法相教。日本書紀曰。天豐財重日足姬天皇四年五月。沙門智通智達。奉勅乘新羅船。往大唐國。受無性衆生義於玄弉法師所。持總當作持統。律師道慈。道慈智藏之徒也。釋書有傳。釋家官班記曰。元興寺僧善性。文武天皇二年三月十八日。爲律師。律師自性始。持統天皇時未有律師。故不可謂律師道慈。阿閉天皇孝謙天皇。諱阿閉內親王。此重出阿閉天皇者非也。次飯依天皇。通考飯作阪非也。依當作豐。次亦失也。次在仕清寧天皇下。古事記曰。白髮大倭根子命。清寧天皇也。坐伊波禮之甕栗宮治天下也。此天皇無皇后亦御子。故天皇崩後無可治天下之王也。於是問日繼所知之王也。市邊忍齒別王之妹忍海郎女亦名飯豐王。坐葛城忍海之高木角刺宮。僧正玄昉元亨釋書有傳。孝明天皇明當作謙。遣使及僧入唐求內外經教。及傳戒。見唐書宋高僧傳等書。天炊天皇通考天作大。是乃淡路廢帝。次高野姬天皇。通考無姬字。孝謙天皇重祚號稱德天皇。高野天皇者別號也。白璧天皇光仁天皇也。諱白璧王。雄仙未詳。行賀釋家官班記曰。興福寺第三別當。寶龜十年十月二日。爲律師。次騰元葛野此處必有缺誤。騰元當作藤原。藤原葛野爲桓武天皇時遣唐使。空海大師及延曆寺僧澄入唐。詣天台山。傳智者止觀義。空海傳智者止觀者舛。空海延曆二十三年五月。從遣唐使藤原賀能浮海。傳惠果眞言義。上新請來經

等。日錄表略云。周遊諸寺訪擇師依。幸遇青龍寺灌頂阿闍梨法號慧果和尙。以爲師主。延曆寺僧澄最澄。延曆二十三年七月。從遣唐使菅原淸公浮海。屬天台國淸寺道邃傳天台敎旨。詳宋高僧傳。在中卷諸樂天皇平城天皇也。平城或作諸樂。倶和訓奈良。會昌中遣僧僧惠蕚也。釋書蕚傳云。齊衡初應橘太后詔。齎幣入唐。著登萊界。抵雁門上五臺。次光孝天皇遣僧宗叡入唐。傳敎。釋書宗叡傳曰。貞觀三年。入唐請益。乃懿宗咸通三年也。觀此則光孝天皇遣叡者失也。仁和天皇指宇多天皇也。遣僧寬建等入朝寬建謂中瓘歟。按菅家文草第九第十及菅家傳。瓘在唐久阻兵亂。寬平五年三月。附商客王訥等上表。言大唐凋弊。六年七月二十二日。賜瓘沙金一百五十兩。支旅菴衣鉢。八月廿日。以左中將菅原朝臣道眞爲遣唐使。九月下中瓘表。令公卿博士議。終止遣唐使。天慶天皇朱雀天皇也。封上天皇封當作村。守平天皇圓融院諱守平。尾張通考脫尾字非也。通江通考通作近是也。北六道通考六作陸是。有狹通考狹字上有若字是。丹彼彼當作後。小陽道小當作山。美竹通考竹作作是也。伊紀當作紀伊。奝然復求詣五臺。許之。天元五年七月十三日。奝然上人入唐時。爲母修善願文曰。奝然天祿以降有心渡海。本朝久停乃貢之使而不遣。入唐間待商賈之客而得渡。今遇其便欲遂此志。奝然願先參五臺山。欲逢文殊之卽身。願次詣中天竺。欲禮釋迦之遺跡。觀此則奝然素有欲涉五臺中天竺之志。乃得詣五臺。而不能往中天竺也。大朝謂宋也。法濟大師於宋有此號。本朝五臺山淸涼寺。稱奝然號弘濟大師奝然天元五年十一月入宋。永延元年二月歸朝。凡六年。百練抄曰。一條天皇永延元年二月十一日。入唐僧奝然歸。隨

也、眞言は、梵語曼怛羅を云ふ、大日經疏に「眞言者梵曰漫怛羅即是眞語如語不妄不異之音、龍樹釋論謂之秘密號、舊譯曰呪非正翻也」とあり

〔天台敎旨〕隋の智敎大師天台山に入寂しければ天台大師と云ふ、天台大師の所立を天台宗と名く、此宗は法華經を以て本經とし、智度論を以て指南とし、涅槃經を以て扶疏とし、大品を以て觀法とし、以て一心三觀の妙理を明かす、卽ち之れ天台の敎旨也。

〔五臺山淸凉寺〕山城國葛野郡嵯峨村にあり、今釋迦堂と云ふ。

〔愛宕護神輿〕愛宕神社の神輿也、愛宕神社は、神社覈錄に「祭神伊弉冉尊、火彦靈尊、愛宕山頂朝日峯に在す、丹波山城兩國堺也拾芥抄云、愛宕護在山城國葛野郡」とあり、今山城國葛野郡嵯峨村の上方愛宕山鎭座愛宕神社是也。

〔藤佐理〕藤原佐理（スケマサ）也、敦敏の子、實賴の孫也、人皇第六十二代村上天皇頃の人兼明親王、藤原行成と並稱して三筆と云ふ。

〔公卿補任〕一に公卿傳とも云ふ、神武天皇より村上天皇に至る其後代に撰次明治五年に及べり、公卿補任の年曆也。

第三傳釋迦像。十六羅漢繪像。幷摺本一切經到蓮臺寺。大臣公卿以下下車拜之。後安釋迦像于栖霞寺。藤原敦基詩注。玆寺安釋尊第三傳之像。或栖霞寺號清凉寺。西峰據小右記瑞像記等說。嵯峨有棲霞觀。左大臣源融公之別業也。後爲佛寺。號棲霞寺。奝然就建一堂。安釋迦像。永延元年八月十八日。奏請以愛宕護山號五臺山。建一伽藍號大清凉寺。安旃檀釋迦像。未遂夙心。長和五年三月十六日逝。高弟盛算法師重奏。以棲霞寺內釋迦堂號清凉寺。勅許之。盛算從奝然入宋。嘗作私日記。惜哉無傳。余修日本傳。及讀宋史。感獻太宗以職員令年代記。發世祚遐久其臣不絕之歎焉。是以詣清凉寺訪其遺蹤。如摺本一切經應仁之亂消歇。瑞像記可以少概見矣。今清凉寺納愛宕護神輿。孟夏祭出之以迎送神。寺雖在山下。神地多屬焉。故題樓門曰愛宕山。蓋有以也。奝然藤氏之子也。因勸請氏神春日明神。亦賽渡海無事。合祭住吉大神云。祠在棲霞寺東。又奝然墓在棲霞寺側。嘉因祚乾二人。倶奝然弟子。嘉因蓋盛算別號。上文嘉作喜。恐非是。佛祖統紀喜作嘉。祚作祈。表文中行様事。通考論之。宜互攷。參議正四位上藤佐理奝然同時人。公卿補任曰。藤佐理者。左近少將敦敏第一之子。天曆五年正月七日叙從五位下。廿八日昇殿。時歲十八。貞元二年八月二日叙正四位下。爲書殿門額賞。三年十月十七日任參議。此間叙位闕。正曆二年正月廿七日任太宰大貳。三年三月十四日叙正三位。六年正月十八日止大貳。長德四年任兵部卿。七月廿五日薨。東齋隨筆曰。佐理手書感鬼神。太宰秩滿歸路歷伊豫三島。風浪惡不能發船。夢三島神告曰。乞書社額。覺乃書之。應時海上穩。榜曰。日本總鎭守大山積大明神。咸平宋眞宗年號。咸平五

年當日本一條院長德四年。藤木吉未詳。月令廣義。載藤木吉獻眞宗詩見中卷。上令藤木吉以所持弓矢挽射。矢不能遠。詰其故。國中不習戰鬪。人之射也不過百步。矢力盡矣。藤木吉矢不及此乎。及我戰國。如木間孫四郎遠矢。世之所知也。與其兵爭能遠孰若其淸平不能遠。子曰。射不主皮。爲力不同科。古之道也。知藤木吉亦古之道也。景德亦眞宗年號。景德元年當一條院寛弘元年。寂昭傳在釋書。天聖宋仁宗年號。天聖四年當日本後一條院萬壽三年。熈寧宋神宗年號。熈寧五年當日本後三條院延久四年。誠尋誠當作成。釋書有成尋傳。元豐亦神宗年號。元豐元年當日本白河院承曆二年。仲回孫忠未詳。乾道宋孝宗年號。乾道九年當日本高倉院承安三年。貢方物入貢。内大臣平重盛道好於宋。施金于育王山。詳見平家物語。蓋謂此也。淳熈二年當高倉院安元元年。火兒。蓋肥後也。火兒和訓近肥後。紹熈宋光宗年號。紹熈四年當日本後鳥羽院建久四年。慶元宋寧宗年號。慶元六年當日本土御門院正治二年。嘉泰亦寧宗年號。嘉泰二年當土御門院建久二年。凡有宋之間。我朝僧入宋者多。及於史之闕文。證月上人渡唐記一卷。聞其名未見之。蘭陀寺道眼入宋。兼好法師略言之不詳。

〔天聖〕我が紀元千六百八十三年より九十一年の九年間の年號也。
〔仁宗〕宋朝四代の帝、我が後一條、後朱雀、後冷泉の三代頃の人也。
〔熈寧〕我が紀元千七百二十八年より三十七年に至る十年間の年號也。
〔神宗〕宋朝六代の帝、我が後三條、白河の兩朝頃の人也。
〔元豐〕我が紀元千七百三十七年より四十五年の八年間の年號也。
〔孝宗〕我が二條、六條、高倉三朝頃の人也。
〔乾道〕我が紀元千八百二十五年より三十三年に至る九年間の年號也。

文獻通考卷之一百四十八

鄱陽　馬　端臨　貴與　著

樂考　夷部樂

倭國　其樂有五弦琴笛。每至正月一日。必射戲。飲酒爲樂。隋大業中。嘗遣裴世淸使其國。其王設儀仗。鼓角歌舞迎之。日本　自唐以來。屢遣貢使。三月三日。有桃花曲水宴。八月十五日。放生會呈百

〔自漢武帝云々〕武帝の朝鮮を討滅せしは、其の元封二年にして、我が紀元五百五十二年即ち開化天皇の四十九年也，其の翌三年に其の地に、樂浪、臨屯、元菟眞番の四郡を置けり。

〔太守〕一州の事を掌る長官の名稱也漢書職官志に「郡守秦官、掌治其郡、秩二千石、景帝更名太守」とあり。

〔文帝〕宋朝四代の帝也、我が允恭天皇の頃世を治む。

〔元嘉〕我が紀元千八十三年より百十三年に至る三十年間の年號也。

戯。其樂有中國高麗二部。歌詞雖甚雕刻而膚淺。

又卷之三百二十四

四裔考　倭即日本　倭於爲切順貌　島何切國名

倭在韓及帶方郡東南大海中。依山島爲居。去樂浪郡境及帶方郡並一萬二千里。凡百餘國。自漢武帝滅朝鮮云云。不可往來。南史。倭ノ西南里有海人。云云。言語異。倭國有獸如牛。名曰山鼠。又有大蛇。云云蛇則死矣 魏志曰。從帶方郡至倭循海岸云云。至女王國萬二千餘里。

魏景初二年。旣平公孫氏。倭女王遣大夫難升米等詣郡。求詣天子朝獻。太子送詣都。乃以金印紫綬封爲親魏倭王。升難米等並拜中郎校尉。假印銀青綬。勞賜優渥。正始元年。太守弓遵遣使奉詔書印綬。幷齎詔賜金帛錦罽刀鏡采物。倭王國使上表。答謝詔恩。其四年復遣使。上獻生口方物。八年太守王頎到官。倭女王卑彌呼與狗奴國男王卑彌弓乎素不和。遣使詣郡。說相攻擊狀。遣塞曹掾史張政等。齎詔告諭之。卑彌呼死更立男王。國中不服。更相誅殺。復立卑彌呼宗女壹與。遣使送政等還。因獻男女生口。貢白珠青大句珠異文雜錦。晉武帝太始初。遣使重譯入貢。安帝時。倭王讚遣使入朝貢。宋武帝永初二年詔曰。倭讚遠誠宜甄。可賜除授。文帝元嘉二年。讚又遣使。奉表獻方物。讚死。云云。輔國將軍等號詔並聽之。云云。幷除所上二十三人職。濟死。世子興遣使貢獻。孝武大明六年。詔授興安東將軍倭國王。興死。弟武立。自稱使持節都督倭百濟新羅任那加羅秦韓慕韓七國諸軍事安東大將軍倭國王。順帝昇明二年。遣使上表言。自昔祖禰躬擐甲冑。跋涉山川。不遑寧處。東征毛

〔開皇二十年〕開皇は隋文帝の時の年號にして、我が紀元千二百四十九年を元年として二十年續けり、其の二十年は、推古天皇の八年に當れり。

〔蝦姨人〕蝦夷人也　蝦夷人には數說あり、（一）日本固有の土人にして、王化東漸するに從ひ漸次逐はれて、渡島國に移り、今の蝦夷人は其遺孽なりとも、（二）上代蝦夷島の土人、我邦北邊に渡り住せるなりと、（三）蝦夷人の容貌魁岸骨格雄偉なる、恐らくは白皙人種なるべしと等諸說あり　上代「エミシ」と云ひ、中古以來「エゾ」と云ふ。

人五十五國。西服衆夷六十六國。陵平海北九十五國。王道融泰。廓土遐畿。累葉朝宗不愆于歳。道逕百濟。裝飾船舫。而句麗無道。圖欲見吞。臣亡考濟方。欲大舉奄喪。父兄使垂成之功不獲一簣。今欲練兵申父兄之志。竊自假開府儀同三司。其餘咸各假授以勸忠節。詔除武使持節都督倭新羅任那加羅秦韓慕韓六國諸軍鎭東大將軍。梁武帝即位。進武號征東大將軍。陳平至隋開皇二十年云云。此後遂絕。唐太宗貞觀九年。遣使入朝帝矜其遠。詔有司無拘歳貢。遣新州刺史高仁表往諭。與王爭禮不平。不肯宣詔而還久。之更附新羅使者上書。永徽初。其王孝德即位。改元白雉。獻琥珀瑪瑙。時新羅爲高麗百濟所暴。高宗賜璽書。令出兵援新羅。未幾孝德死。子天豐財立。死。子天智立。明年使者與蝦姨人偕朝。蝦姨人亦居海島中。其使者鬚四尺許。珥箭於首。令人戴瓠立數百步射。無不中者。天智死。子天父立。死。子總持立。咸亨元年云云。有絲架怪珍云。宋雍熙元年。本國僧奝然。與其徒五人浮海而至。獻銅器十餘事幷本國職員令年代紀各一卷。奝然衣綠自云。姓藤原氏。父爲眞連。眞連其國五品官也。奝然善隸書。而不通華言。問其風土。但書以對。上召見。存撫甚厚。賜紫衣。上聞。其國王一姓傳繼。臣下皆世官。因謂宰相曰。此島夷耳。乃世祚遐遠。其臣亦繼襲不絕。蓋古之道也。中國唐季。寓縣分割。梁周五代享歷尤促。大臣世冑。鮮能嗣續。可歎也。其國多中國典籍。奝然之來。復得孝經一卷。越王孝經新義第十五一卷。皆金縷紅羅縹。水晶爲軸。孝經即鄭氏。註者越王。乃唐太宗子越王貞。新義者記室參軍任希古等撰也。奝然又求印本大藏經。詔給之。　二年隨台州寧海縣商人船歸其國。後數年遣弟子。奉表來謝。又別啓。貢佛敎經及方物。　奝然書曰。國中有五經書及佛經白

居易集七十卷。云云。皆裔然所記。云。按隋開皇唐永徽長安天寶元和開成史稱遣使來貢。與此所記皆同。大中光啓龍德及周廣順中皆嘗遣僧至中國。唐書五代史失其傳。唐咸亨中。及開元二十三年。大曆十二年。建中元年。皆來朝貢。其記不載。

咸平五年建州云云。以國人唱和詩來上。其詞雕刻膚淺無取。後賜裝錢遣還。景德元年。其國僧寂照八人。云云。天聖四年明州言。日國太宰府遣人。云云。仲囘等貢色段二百疋。水銀五千兩。州以孫忠乃泛海商客而云云。綱首進貢方物。淳熙三年。其國人泛海遭風。飄至明州。無口食。詔給之。又有百人。行丐於市。至臨安詔守臣支給津。遣往明州養贍。候有便船發回本國。十年七十三人飄至秀州華亭。紹熙元年。飄至泰州。詔。見行貨物免抽買船隻物件。盡數給還。仍給常平米賑恤。慶元六年。至平江。嘉泰二年。至定海縣。詔。並支給錢米養贍。候風便津發回國。按。倭人自後漢始通中國。史稱。從帶方至倭國。循海水行歷朝鮮國。乍南乍東。渡三海歷七國。凡一萬二千里。然後至其國都。又言。去樂浪郡境及帶方郡並一萬二千里。在會稽東。與儋耳相近。其地去遼東甚遠。而去閩浙甚邇。其初通中國也。實自遼東而來。故其迂回如此。至六朝及宋。則多從南道浮海入貢。及通互市之類。而不自北方。則以遼東非中國土地故也。三朝志雍熙中僧裔然入貢。歸國後奉表來謝。余（余當作敍）其來則曰。望落日而西行。十萬里之波濤難盡顧。信風而東別。數千重之山嶽易過。何其遠也。敍其歸則曰。季夏解台州之纜。孟秋達本國之郊。又何其近也。而繼之曰。爰逮明春初到舊邑。緇素欣待。侯伯慕迎。然則其國境雖去浙東甚近。而其國都則又必半年而後達歟。

（長安）我が紀元千三百六十一年即ち文武天皇の大寶元年に、周の則天武后の久視二年の改年號也、唐朝第四代中宗の嗣聖十八年に當れり。

（天寶）我が紀元千四百二年より同十五年に至る十五年間の唐朝六代玄宗の時の年號也。

（元和）我が紀元千四百六十六年より八十年に至る十五年間、の唐朝六代憲宗の時の年號也

（開成）我が紀元千四百九十六年より五百年に至る五年間の唐朝十四代文宗の時の年號也。

今按。桃花曲水宴日本書紀。顯宗天皇元年及二年三月上巳幸二後苑一。曲水宴爾來有二桃花曲水宴一。八月十五日放生會呈二百戲一。政事要略卷第二十三。舊記云。養老四年大隅日向兩國隼人發レ亂。勅以二豐前守宇努首男人一爲二將軍一。祈二八幡大神一伐レ之、多殺二隼人一大勝之。於レ是爲二放生會一報二神恩一。始自二宇佐一諸國亦有二放生一。凡放生會奏レ樂爲二相撲一以樂レ神。通考與二宋史一大同小異。同二宋史一文以二云云一略レ之。

雲笈七籤卷之一百　　宋張君房輯　明張萱訂

軒轅本紀云。有二騰黄一神獸。其色黄狀如レ狐。背上有二兩角龍翼一。一本云。龍翼而馬身。一名二乘黄一。一名二飛黄一。或云古黄。又曰翠黄。出二日本國一。壽三千歳。日行萬里。乘レ此令二人壽二千歳一。出二日本國一。壽二千歳。六典曰。宋齊梁陳皆有二車府乘黄之官一。今太僕寺有二乘黄署一。卽其事。黄帝得而乘レ之。遂周二旋六合一。所謂乘二八翼之龍一遊二天下一也。故遷徙往來无レ常。

今按。黄帝之時。當二日本神代之季一。

〔曲水宴〕「ゴクスヰノエン」とも讀む、王朝時代朝廷及び貴族間に於いて、三月三日各人小流に臨みて所々に座を設け、上流より羽觴を流すを取て酒を汲みつゝ當題の詩を賦し、畢て別堂にて宴を設け之を披露するを云ふ、朝廷にて行はるものを特に「メグリミヅノトヨノアカリ」と訓む也。

〔放生會〕佛教思想より來れる行事にて、魚鳥等の人に捕へられて殺されんとするものを買ひ集めて、法を修して放ちやる法會也。

異稱日本傳　卷上二　終

異稱日本傳 卷上三

太平御覽卷第七百八十二

翰林院學士承旨正奉大夫守工部尙書知制誥上柱
國隴西縣開國伯食邑百戶賜紫金魚袋臣李昉等奉
勅纂

四夷部三　東夷三

倭　日本　紵嶼人　蝦夷國

倭

後漢書曰。倭在韓東南大海中。依山川爲居。凡百國。漢武帝滅朝鮮。使驛通於漢者三十許國。倭王居邪馬臺國。云云。

今按。太平御覽所引後漢書以下文。余與正史參考。同者略之。以云云攝之。正史全文皆見上。

魏志曰。倭國在帶方東南大海中。云云。自帶方至女國。萬二千餘里。其俗男子無大小。皆黥面文身。聞其舊語。自謂太伯之後。又云。自上古以來。其使詣中國。草傳辭說事。或蹲或跪。兩手據地。謂之恭

〔四夷〕四方の野人の意也、禮記王制篇によれば、東夷南蠻、西戎、北狄の四を云へり。
〔東夷〕四夷の一、禮記王制篇に「東方曰夷、被髪文身」とあり。
〔女國〕女人國也、一に女護島とも云ふ、「三才圖會に「女人國在東南海上、水東流、數年一泛蓮開、長尺許、桃核長二尺、昔有船舟飄落其國、群女攜以歸無不死者、有一智者、夜盜船得去、遂傳其事、女人遇南風裸形感風而生云云」とあり。

〔長安三年云々〕續紀文武天皇の大寶元年春正月乙亥朔丁酉の條に「以二守民部尙書直大貳粟田朝臣眞人一爲二遣唐執節使一、左大辨直廣參高橋朝臣笠間爲二大使一云々」、又、同紀大寶二年六月の條に「遣唐使等去年從二筑紫一而入レ海、風浪暴險不レ得二渡海一、至レ是及レ發」あり、卽ち長安三年は既注の如く、この年に當れり。

〔橘免勢〕橘逸勢也

〔元和元年〕我が紀元千四百六十六年卽ち桓武天皇の大同元年に當り、唐朝十一代憲宗の時也。

敬。其呼應聲曰レ噫。噫如二然諾一矣。

今按。聞二其舊語一。自謂二太伯之後一。今魏志無二此文一。故備存レ之。宜二參考一。

日本國

唐書、日本國者倭國之別種也。云云。長安三年。其大臣朝臣眞人。來二貢方物一。朝臣眞人者猶二中國戶部尙書一。冠二進德冠一。其頂爲レ花。分而四散。身服二紫袍一。以レ帛爲二腰帶一。眞人好レ讀二經史一。解レ屬レ文。容止閑雅。則天宴二於使殿一。授二司膳卿一。放二還本國一。

又曰。開元初。日本國遣レ使來朝。因請二儒士一授レ經。云云。

又曰。貞元二十一年。日本國遣レ使來朝。留學生橘免勢。學問僧空海。元和元年朝貢使判官高階眞人上言。前件學生藝業稍成。願レ歸二本國一。便請下與レ臣同歸上。從レ之。開成四年。又遣レ使朝貢。

綜嶼人

外國記曰。周詳泛レ海。落二綜嶼一。上多レ紵。有二三千餘家一云。是徐福童男之後。風俗似二吳人一。

今按。綜嶼不レ知レ指二何地一。疑今八丈島歟。

蝦夷國

唐書曰。蝦夷國海島中小國也。其使鬚長四尺。尤善二弓矢一。挿二箭於首一。令三人戴レ瓠而立一。數十步射レ之。无レ不レ中者。明慶四年十月隨二倭使一入朝。

今按。明慶當レ作二顯慶一。顯慶唐高宗年號。顯慶四年當二日本齊明天皇五年一。

〔道術〕佛老又は仙人の道を行ふ人を云ふ、後漢書靈思何皇后紀の注に「道人謂道術人」とあり。

〔憲皇〕唐朝第十一世、姓は李、名は純、順宗の長子也、在位十五年、宦者に弑せらる、改元一度、元和と云ふ。

〔穆宗〕唐朝第十二代也、我が嵯峨天皇の弘仁十二年より淳仁天皇の天長二年まで治世す、子敬宗、文宗、武宗皆帝位に卽けり

太平廣記卷第七十五　道術五

宋翰林學士中順大夫戶部尙書上柱國賜紫金魚袋李昉等撰　明長洲許自昌玄佑甫校

韓志和

韓志和者本倭國人也。中國爲飛龍衞士。善雕木爲鸞鶴烏鵲之形。置機捩于腹中。發之則飛高三二百尺。數百步外方始却下。又作龍牀爲御榻。足一履之則鱗鬣爪角皆動。夭矯如生。又於唐憲皇前出蠅虎子五六十頭。分立隊。令舞梁州曲。皆中曲度。致詞時殷殷有聲。曲畢則累累而退。若有尊卑等級焉。帝大悅。賜金帛加等。志和一出宮門。盡施散他人。後忽失之。出曲傳拾遺。

今按唐憲皇當日本平城天皇。嵯峨天皇之世。

又卷第二百二十七　伎巧三

韓志和

穆宗朝有飛龍士韓志和。本倭國人也。善雕木作鸞鶴鴉鵲之狀。飮啄悲鳴。與眞無異。以關捩置於腹內。發之則凌空奮翼。可高百尺。至一二百步外。方始却下。兼刻木猫兒以捕雀鼠。飛龍使異其機巧。奏之。上覩而悅之。志和更雕踏牀。高數尺。其上飾之以金銀綵繪。謂之龍牀。置之則不見龍形。踏之則鱗鬣爪角俱出。始進。上以足履之。而龍夭矯若得雲雨。上恐畏。遂令撤去。志和伏於上前稱。臣愚昧而致有驚忤聖躬。臣願別進薄伎。以娛陛下耳目。以贖死罪。上笑曰。所解何伎。試爲我出。志和於懷中將出一桐木合方數寸。其中有物。名蠅虎子。數不啻一二百焉。其形皆赤。云以丹砂啗之

〔嵯峨天皇〕人皇第五十二代、御名は神野、御父は藤原乙牟漏、桓武天皇の第二皇子にして平城天皇の御皇弟也、

〔淳仁天皇〕人皇第五十六代、一に日本根子天高譲彌遠天皇と稱す、御母は藤原旅子、嵯峨天皇の御皇弟也。

〔飛驒工〕延喜民部式に「飛驒匠丁」あり、賦役令に「凡斐陀（飛驒なり）國庸調俱免、毎里點匠丁十人、毎四丁給廝丁一人、一年一替、餘丁輸米、充匠丁食」とあり、類聚三代格の承和元年の條に「弘仁五年五月二十一日云々、得飛驒國解偁、貢上下匠」などあり

故也。乃分爲五隊。令舞梁州。上召國樂以擧其曲。而虎子盤廻宛轉無不中節。毎遇致詞處則隱隱如蠅聲。及曲終累々而退。若有尊卑等級。志和臂虎子於指上。獵蠅於數步之內。如鷂擒雀。罕有不獲者。上嘉其伎。小有可觀。即賜以雜彩銀器。而志和出宮門。悉轉施於人。不逾年竟不知志和所在。出杜陽編。

今按。穆宗當日本嵯峨天皇淳和天皇之世。昔本朝飛驒國多匠氏。巧作宮殿寺院。又有作木偶人。動容周旋如生者。至于今稱曰飛驒工。如韓志和。蓋亦飛驒國人。有道術而廉者也。

又卷第二百二十八　博戲

弈棊　日本王子

大中中。日本國王子來朝。獻寶器音樂。上設百戲珍饌以禮焉。王子善圍棊。上敕待詔顧師言對手。王子出楸玉棊局冷暖玉棊子云。本國之東三萬里有集眞島。島上有凝霞臺。臺上有手譚池。池中出玉子。不由製度。自然黑白分明。冬溫夏冷。故謂之冷暖玉。更產如楸玉。狀類楸木。琢之爲棊局。光潔可鑑。及顧□與之敵手至三十三下。勝負未決。師言懼辱君命而汗手。凝思方敢落指。即謂之鎭神頭。乃是解兩征勢也。王子瞪目縮臂。已伏不勝。廻語鴻臚曰。待詔第幾手耶。鴻臚詭對曰。第三手也。師言實稱國手。王子曰。願見第一。曰。王子勝第三方得見第二。勝第二得見第一。今欲躁見第一。其可得乎。王子掩局而吁曰。小國之第一不如大國之第三。信矣。今好事者。尙有顧師言三十三下鎭神頭圖。出杜陽編。

〔文德天皇〕人皇第五十五代、御名は道康、御母は藤原順子、仁明天皇の皇長子也。
〔肥前國大村〕東彼杵郡大村町也。
〔源氏物語〕五十四帖あり、紫式部の著なることは著名の事也。式部は一條天皇の御世の人也。
〔直入郡〕「ナホリ」と訓む、景行天皇紀十二年十月の條に直入縣と見えたり萬葉集に「名欲」に作り、延喜式後直入に作る、和名抄に「三宅、直入」の二郷を載せたり
〔那智瀧〕紀伊國東牟婁郡那智村にあり那智神社と並びて名勝天下に弘まれり。

今按。大中唐宣宗年號。玉海以此故事繫大中七年。當文德天皇仁壽三年。然遣我王子于唐。及王子事無考。高名錄曰。橘良利肥前國大村人。寬平之世爲碁妙手。出家號寬蓮法師。源氏物語曰。碁聖大德是也。蓋碁聖者仁壽近矣。而非王子矣。凝霞臺韻府霞作露。豐後國直入郡有建男霜凝日子神社。海部郡佐加關有白濱黑濱。生黑白石。若置碁子。不能取之。神所不許。蓋凝霞爲霜凝乎。或曰。手譚池指熊野那智瀧。那智三卷書曰。那智舊名難地。以此言之。譚池難地晉相近。那智產好碁石。未知孰是。□據書言故事等書。當作之言。見下文。并撿稗海。載杜陽編。

又卷第四百八十一　蠻夷二

新羅國東南與日本鄰。云云。出紀聞。

又天寶初。使贊善大夫魏曜使新羅。策立幼主。曜年老深憚之。有客曾到新羅。因訪其行路。客曰。永徽中。新羅日本皆通好遣使。兼報之。使人既達新羅。將赴日本國。海中遇風。波濤大起。數十日不止。隨波漂流。不知所屆。忽風止波靜至海岸邊。日方欲暮。時同志數船。乃維舟登岸。約百有餘人。岸高二三十丈。望見屋宇。爭往趨之。有長人出。長二丈。身具衣服。言語不通。見唐人至大喜。于是遮擁令入宅中。以石填門而皆出去。俄有種類百餘。相隨而到。乃簡閱唐人膚體肥充者。得五十餘人。盡烹之。相與食噉。兼出醇酒。同爲宴樂。夜深皆醉。諸人因得至諸院。後院有婦人三十人。皆前後風漂爲所擄者。自言。男子盡被食之。唯留婦人。使造衣服。汝等今乘其醉。何爲不去。吾請道焉。衆悅。婦人出其練縷數百匹負之。然後取刀盡斷醉者首。乃行至海岸。岸高昏黑不可下。皆以帛繫身。自縋而

下。諸人更相縋下至水濱。皆得入船。及天曙船發聞山頭叫聲。顧來處已有千餘矣。絡繹下山。須臾至岸。既不及船。虓吼振騰。使者及婦人並得還。出紀聞。

今按。永徽唐高宗年號。當日本孝德天皇齊明天皇之時。此言萬里皇華使將赴日本。海中逢風波至異類之地。喪命或幸免也。嗚呼古來。我遣唐使亦遭多少難。是以菅贈大相國。奏停遣唐使。源能有著空俊蔭。托言遣唐使漂至波斯國。皆言行路難。良有以也。

文苑英華卷第二百十九　詩六十九

翰林院學士朝請大夫中書舍人廣平縣開國男食邑三百戶上柱國賜紫金魚袋宋白等奉勅纂

釋門一　送僧歸日本　　錢　起

上國隨緣去。至。集作東來。集作途若夢行。浮天滄海遠。去世法舟輕。水月通禪觀。魚龍聽梵聲。唯憐塔燈影。萬里眼中明。

又卷第二百二十三　詩七十三

釋門五　送僧歸日本　　方　干

四極雖云共一儀。晦明前後卽難知。西方尙在星辰下。東域已過寅卯時。大海浪中分國界。扶桑樹底是天涯。滿帆若有歸風便。到岸猶須隔歲期。

日東一作僧本　　項　斯

雲水絕歸路。來時風送船。已無身後念。猶坐病中禪。深壁藏燈影。空窗出艾煙。要人知是客。白日指

〔高宗〕唐朝第三世、姓は季、名は治、字は爲善、小字は雉奴、太宗の第九子、則天武氏皇后となり、長孫無忌を殺し、褚遂良を黜け、政中宮に在り、在位三十四年、改元十三度、永徽、顯慶、龍朔、乾封、總章、咸亨、上元、儀鳳、永隆、開耀、永淳、弘道是也。

〔釋門〕釋敎の門戶也、門とは通入の義、差別の義、有緣の衆生之に通入すれば門と云ひ、他敎に差別すれば門と云ふ、轉じて佛敎の部門の意に用ゆ、釋は佛氏の姓より轉じ、佛道の意となれり。

〔三體詩〕宋の周弼の撰也、弼字は伯弼、汶陽の人也、唐人の詩を選集せるものにして六卷あり、三體とは、七言絕句、七言律、五言律を云ふ、首に七言絕句を載せ七言絕句を實接、虛接、用事、前對、後對、拗體、側體の七格に分ち、七言律を四實、四虛前虛後實、前實後虛、結句、詠物の六格に分ち、五言律は、前の四格は七言に同じく、後の三格を一意、起句、結句に分てり。

〔司空圖〕唐朝、虞鄉の人、字は表聖耐辱居士と號す。

生緣。

今按。此詩載三體詩下卷。大異。日東僧作日東病僧。已無身後念。作不言身後事。要人知是客。白日指生緣。作已無鄉土夢。起塔寺門前。

又卷第二百二十四 詩七十四

釋門六　贈日東鑒禪師　司空圖

故國無心度集作渡。海潮。老禪方丈倚中條。夜深雨絕松堂靜。一點飛山。集作螢照宿寥。

今按。此詩亦載三體詩上卷。

送日東僧遊天台　楊夔

一瓶離日外。行指赤城中。去自重雲下。來從積水東。攀蘿躋石徑。挂錫憩松風。迴首鷄林道。唯應夢想通。

又卷第二百三十二 詩八十二

隱逸三　送褚山人歸日本　賈島

懸帆待秋色。去入杳冥間。東海幾年別。中華此日還。岸遙生白髮。波盡露青山。隔水相思在。無書也是閑。

送朴山人歸日本　釋無可

海際晚帆開。應無鄉信催。水從荒外積。人指日邊迴。望國乘風久。浮天絕島來。儻因華夏使。書禮

〔吉備公〕吉備眞備を云ふ、元正天皇の靈龜二年二十四歲にして遣唐留學生となり、聖武天皇の天平七年歸朝す。

〔方干〕唐朝、桐廬の人、字は雄飛、咸通中進士に擧げらる、後ち鏡湖上に隱る、時に徐凝詩名あり、方三拜補唇先生の號あり、歿後門人私諡して元英先生と云ふ。

〔字彙〕明の梅膺祚の撰にして、十二集とし、首末二卷を添ふ、十二支を以て各集に題し、一畫より十七畫に至るまで二百十四部を列し、三萬三千七十九字を統ぶ。

疑作レ札。韓愈哉、

又卷第二百七十一　詩一百二

送行六　送金文學還日東　沈頌

君家東海東、君去因秋風。漫漫指鄕路、悠悠如夢中。煙霧積孤島、波濤連太空。冒險當不懼、皇恩措爾躬。

今按、豬山人朴山人金文學不詳何人也、金文學蓋吉備公眞、金吉音近。我國人入中土、多易姓名、猶阿倍仲麻呂稱朝衡之類、其餘不可考、

又卷第二百八十　詩一百八

送行十五　送人之日本　方干

蒼茫大荒外。風敎卽難知。連夜揚帆去、經年到岸遲。波濤吞集作レ宕左界。星斗正東夷。集作レ定東維。或有歸風便。當爲相見期。

又卷第二百九十六　詩一百四十六

行邁八　奉使衘命使本國　胡衡

衘命將辭國。非才忝侍臣。天中戀明主。海外憶慈親。伏奏違金闕。騑驂去玉津。蓬萊鄕路遠。若木故園鄰。西望懷恩日。東歸感義辰。平生一寶劍。留贈結交人、

今按、衘命、字彙曰、奉君命而行曰衘命、檀弓曰、衘君命而使、朝衡日本人。仕唐奉命。使父母之

〔古今和歌集〕二十卷あり、單に古今集とも云ふ、勅撰の和歌集にして萬葉撰定後より延喜五年四月まで殆ど百五十年間の歌を撰びたるものにして、初め續萬葉集と稱せしを、新に部分をなして今の名に改むと云ふ、紀貫之、紀友則、凡河内躬恒、壬生忠岑等醍醐天皇の延喜五年勅を奉じて撰したるもの也

〔白山〕加賀國石川郡と飛驒、越前國境の三叉點をなす頂上に國幣小社白山比咩神社の奥の院あり。

國。故曰。衡命使本國。胡衡當作朝衡。朝衡阿倍仲麻呂也。詳見李白詩條。古今和歌集傳仲麻呂傳。引此詩爲仲麻呂詩。又張之象唐雅此詩爲朝衡作。則胡字訛書明矣。國指唐。忝侍臣。謂自祕書監歷左補闕爲侍從之臣。天中九重。明主蓋玄宗也。衡歷事玄宗肅宗代宗。海外指日本。慈親乃衡之父母。衡其先出自孝元天皇皇子大彥命。阿倍倉橋麻呂之後也。父正五位上中務大輔船守。伏奏違金闕。騑驂去玉津。言奏請離帝居。乘駟馬至津而入海也。蓬萊在日本。所指不一。或曰。熊野。或曰富士。或曰熱田。宜參考史漢六帖日東曲。瀛應記曰。加賀國白山也。六家抄註曰。攝津國住吉也。藤原家隆歌。君加爲蓬萊島毛寄奴倍之生藥取住吉乃浦是也。或曰。在鼇島海底。巨龜負金山。夜夜出沒不測。承安四年上皇願文曰。省滄波之浮蓬壺是也。若木樹名。淮南子曰。灰野之山有樹。名曰若木。日所出處。西望西望唐也。恩君恩。東歸東歸日本也。義臣義。辰時也。平生一寶劍衡常所帶之寶劍。結交人據新舊唐書。儀王友朝衡。又魏萬包佶王維李白等。爲平生友。不知當贈寶劍者誰也。衡以靈龜二年八月入唐。其後奉使歸寧父母。天寶十二載。又入唐。逢安史亂。終不歸。代宗時卒。年七十二。續日本紀曰。光仁天皇寶龜十年五月。前學生阿倍朝臣仲麻呂。在唐而亡。家口偏乏。葬禮有闕。勅賜東絁一百疋白綿三百屯。李白卒在衡前。而哭晁衡詩可疑。蓋衡歸本國時風浪惡。白誤以衡爲死乎。江談鈔及長谷寺記曰。吉備公入唐時。仲麻呂已卒。爲鬼與吉備公語者甚非也。二人同時人也。

送日本國聘賀使晁臣卿東歸

包　佶

上才生下國。東海是西隣。九譯蕃君使。千年聖主臣。野情偏得禮。木性本含仁。錦帆乘風轉。金裝照地新。孤城開蜃閣。曉日上車輪。早識本朝歲。塗山玉帛均。

今按、晁臣卿朝衡。李太白詩。作晁卿衡是也。晁姓王子朝之後。故古來朝晁通用。如漢晁錯一作朝錯。

又卷第二百九十七詩一百四十七

行邁九　奉使　重送陸侍御使日本　錢起

萬里三韓國。行人滿目愁。辭天使星遠。臨水簡霜秋。雲帆迎仙島。紅旆過蜃樓。定知懷魏闕。廻首海西頭。

今按。此詩前有送陸珽侍御使新羅詩。曰。衣冠周柱史。才學我鄉人。受命辭雲陛。傾城送使臣。去和滄海月。歸思上林春。始覺儒風遠。殊方禮樂新。觀此則陸珽使新羅及日本。故首句曰萬里三韓國。行人滿目愁與。

送日本使還　徐凝

絕國將無外。扶桑更有東。來朝逢聖日。歸去及秋風。夜泛潮廻際。晨征蒼莽中。鯨波騰水府。蜃氣壯仙宮。天眷何期遠。王文久已同。相望杳不見。離恨托飛鴻。

送王中丞使日本　曹松

辭天理玉鬐。揆日使鷄林。獨有中華戀。方同積浪深。張帆度鯨口。啣命見臣心。渥澤遐宣後。歸期

〔錢起〕唐朝、長興の人、字は仲文、詩に巧也、天寶中進士に擧げられ、郞士元と名を齊ふす、時に語に曰く前に沈宋あり、後に錢郞ありと、大曆の十才子、起は其一也。

〔仙島〕仙人の居る島の意也、仙境、仙洞など云ふに倣ひし也。

〔扶桑〕古へ我國を指して支那にて云へり。夜航詩話に「王維送晁監、鄕國扶桑外、主人孤島中、」とある等皆日本を云へり。

抵萬金。

又卷第四百七十一 翰林制詔五十二

蕃書四　諸國書　勅日本國王書　　張九齡

勅。日本國王主明樂美御德。彼禮義之國。神靈所扶。滄溟往來。未嘗爲患。不知去歲。何負幽明。丹墀眞人廣城（集作成。下同。）等入朝東歸。初出江口。雲霧斗暗。所向迷方。俄遭惡風。諸船漂（集作飄）蕩。其後一船在越州界。卽眞人廣城尋已發歸。計當至國。一船漂入南海。卽朝臣名代。艱虞備至。性命僅存。名代未發之閒。又得廣州表奏。朝臣廣城等漂（集作飄）。至林邑國。既在異域（集作國）。言語不通。並被劫掠。或殺或賣。言念災患。所不忍聞。然林邑諸國。比常朝貢。朕已勅安南都護。令宣勅告示。見在者令其送來。待至之日。當存撫發遣。又一船不知所在。永用疚懷。或已達本（集作彼）蕃。云云。當用驚嗟。然大壞悠悠。各有命也。冬中甚冷。（集作中冬甚寒。）卿及首領。百姓並云云。指不多及。

今按。秘笈新書云。賜外國書曰蕃書。此勅書出曲江集。見上。

又卷第五百八判六　樂門十九道

旅人奏散判

日本請吏賜宴于朝。旅人奏散不以韎。爲惠文冠所持。辭云屬鞮𩎟氏。

對　　張秀明

國家有道。日本請吏。皇恩載洽。式宴于朝。眷彼旅人。掌我夷樂。遞夏不雜聲。未動（一作勤）於禁韎。風霜

〔丹墀眞人廣城〕田治比眞人廣成也、田治比姓は、宣化天皇の皇子上殖葉王の後也、仁明天皇の時、右中辨丹墀貞峰の奏言によれば、上殖葉王、十市王を生み、十市王、多治比古王を生む、之れに依つて姓となす、天武天皇の時、多治比古の孫左大臣島に眞人姓を賜ふ、島の子廣成遣唐使となり彼國に在り、丹墀と改むと云ふ、而して日本逸史に「天長九年夏四月丁亥、木工頭從五位多治比眞人貞成等奏、請改多治比三字爲丹墀兩字」とあり。

有レ典レ罪。已彰二於惠文一。雖二御史彈奏一。雅存二綱紀一。而旄人有レ訴。聞二鞮鞻一。

同レ前　常無欲

中間有レ停。蕃方婆娑。不レ遠二滄海一。來趨二天闕一。仰二衣冠一而竭レ誠。顧二臣妾一而見レ訴。固宜二茲備一。式宴且酣。方樂二[illegible]一。聞二[illegible]一。旄人[illegible]斯。[illegible]。茲任[illegible]乖。周舍之宜須レ寘。踈遠之罰。侍二惠文所一レ抵。信得二其由一。[illegible]二鞮鞻之[illegible]一。（一作レ待）未レ聞二其可一。

又卷第五百五十一　判四十九　雙闕門中十二道

旄人奏レ散判

日本請レ吏賜二宴於朝一云云。屬二鞮鞻氏一。

李木脩レ防判

又柴桑備二陽侯一脩レ防。李土木丁獨不レ從。曰將レ俟二息壤一。無レ何是成。徒告二其祇懸一。以爲二瑞科一告不レ伏。並仰二正斷一。

對

湖南聲教萬國賓王。神竈滋液。百珍賓用。日本歸獻。越二沙海一而西浮。陽侯順レ流。泛二滄江一而東徙。衣冠所レ到。是同二於中外一。雖レ蓋二其飛一。有レ聞二於今昔一。而賜二之禮樂一。飭以二隄防一。歌鍾之奏已聞。土木之功爰事。將使レ陳二茲禁鞅一。無レ差二絕國之音一。乘二彼柴桑一。有二廣通レ津之備一。彼而奏發。稍レ盖（一作レ失）有レ常。此獨不レ從。寔乖二於衆一。遽彰二糾禁一。幾抗成レ詞。初引二罪於鞮鞻一。竟登二期於息壤一。職司之分。是則可レ矜。祇妄之疑。未レ應レ爲レ允。

〔旄人〕舞人の一、周禮の春官旄人の註に「旄、旄牛尾、舞者所レ持、以指麾」とありて、この舞人は旄牛の尾を持ちて舞ひしものなるを以つて名付く。

〔鞮鞻〕下に鞮鞻氏とあるに同じ、四夷の樂を掌る官也

〔散〕琴の曲名也、晉書嵇康傳に「有二廣陵散一」とあるは此の意也。

〔禮樂〕孝經廣要道章に「移レ風易レ俗、莫レ善二於樂一、安レ上治レ民、莫レ善二於禮一、禮者敬而已矣」と又禮記樂記篇に「樂者天地之和也、禮者天地之序也、和故百物皆化、序故群物皆別、樂由レ天作、禮以レ地制」とあり。

惠文所劾。旄人不可寘刑。息壞既成縣斷理宜稱璃。各從案記。庶用平反。

今按、請吏臣服義。文選單于白屋。請吏帥職。旄人舞者也。惠文冠法冠謂御史。鞮鞻四夷樂人之革履。故周禮名掌四夷之樂官。曰鞮鞻氏。言唐朝賜宴于我遣唐使、當以靺樂。而旄人奏散樂。不以靺。故御史彈治之。旄人亦訴于樂官。於是令諸儒判之。數有問對。靺靺鞨北狄也。當時服于我。陸奧坪碑曰。多賀城去靺鞨國界三千里。散樂文獻通考云。散樂野人爲樂之善者。非部伍之正聲。

皇朝類苑卷第四十三 皇朝類苑一日皇宋事實類苑

左朝請大夫權發遣吉州　軍州事　江少虞　撰

仙釋僧道　日本僧

景德三年。予知銀臺通進司。有日本僧入貢。遂召問之。僧不通華言。善書札。命以牘對云。住天台山延歷寺。寺僧三千人。身名寂照。號圓通大師。國王年二十五。大臣十六七人。郡僚百許人。每歲春秋二時集貢士。所試或賦或詩。凡及第者常三四十人。國中專奉神道。多祠廟。伊州有大神。或託三五歲童子。降言禍福事。山州有賀茂明神。亦然。書有史記漢書文選五經論語孝經爾雅醉鄉日月御覽玉篇蔣魴歌老列子神仙傳朝野僉載白集六帖初學記。本國有國史祕府略日本紀文館詞林混元錄等書。釋氏論及疏抄傳集之類多有。不可悉數。寂照領徒七人。皆不通華言。國中多習王右軍書。寂照頗得其筆法。上召見賜紫衣束帛。其徒皆賜以紫衣。復館於上寺。寂照願遊天台山。詔令縣道續食。三司使丁謂見寂照甚悅之。謂姑蘇人。爲言其山水奇見。寂照心愛。因留止吳門寺。其徒不願住者遣數人

〔文獻通考〕元の馬端臨撰す、三百四十八卷あり、通典八門を析して一十有九と爲し、增すに經籍、帝系、封建、象緯、物異の五門を以てし、共に二十門と爲す。

〔散樂〕俗間の舞樂にして、我國古の猿樂の類也。周禮旄人に、「掌教舞散樂」と注に「散樂、野人爲樂之善者、若今黃門倡矣、自有舞」とあり。

〔醉鄉〕醉鄉記也、隋の大儒、王通の弟王績の作りし文章也、績、酒を嗜み醉中の趣を述べて醉鄉と名けし也

〔初學記〕唐の徐堅等の撰する所にして三十卷あり、玄宗の頃の書也。

歸二本國一。以二黑金水瓶一寄レ謂。并詩曰。提攜三五載。日用不二曾離一。曉井斟二殘月一。春爐釋二夜澌一。鄙銀難レ免レ侈。菜石易レ成レ虧。此器堅還實。寄レ君應レ可レ知。謂分二月俸一給レ之。寂照漸通二此方言一。持二戒律一精至。通二內外學一。三吳道俗以歸向。寂照東遊。予遺以二印本圓覺經一。并詩送レ之。後寄レ書。擧二予詩中兩句一云。身隨二客槎一遠。心與二海鷗一親。不レ可レ忘也。圓覺閱目不二暫舍一云。後南海商人船。自二其國一還。得下國王弟與二寂照一書上。稱二野人若愚一。書末云。嗟乎。絕域殊方。雲濤萬里。昔日芝蘭之志。如今胡越之身。非二歸雲不一レ報二心懷一。非二便風不一レ傳二音問一。人生之恨何以過レ之。後題寬弘四年九月。又左大臣藤原道長書略云。商客至通レ書。誰謂宋遠。用慰二馳結一。先巡二禮天台一。更可レ攀二五臺之遊一。既果二本願一。甚悅甚悅。懷レ土之心。如二何再會一。胡馬猶向二北風一。上人莫レ忘二東日一。後題。寬弘五年七月。又治部卿源從英書略云。所レ諳唐曆以後史籍。及他內外經書。未レ來二本國一者。因寄二便風一爲レ望。商人重レ利。惟載二輕貨一而來。上國之風絕而無レ聞。學者之恨在二此一事一。末云。分レ手之後。相見無レ期。生爲二兩鄕之身一。死會二一佛之土一。書中報二寂照俗家及墳墓事一甚詳悉。後題寬弘五年九月。凡三書皆二王之迹。而野人若愚章草特妙。中土能書者亦鮮レ及。紙墨尤精。左大臣乃國之上相。治部九卿之列。見二楊文公談苑一。

今按。景德宋眞宗年號。景德三年當二日本一條天皇寬弘三年一。延曆寺縣當レ作レ曆。寂昭俗姓大江氏。名定基。仕至二參河守一。後投二僧都源信一出家。詳見二元亨釋書及源平盛衰記一。國王年二十五謂二一條天皇一。每歲春秋云云常三四十人。略言二我朝登科義一。菅原和長桂林遺芳鈔曰。王者用レ人。唯貴二賢才一。故試二四科一擧レ人。更試二詩賦各一道一。皆獻策。試レ詩之時有二虛題一。有二實題一。題二風月一爲二虛題一。題二經史一爲二實題一。

〔芝蘭〕善良清淨の意に喩ふ。孔子家語在厄篇に「芝蘭生二於深林一、不下以レ無レ人而不上レ芳、君子修レ道立レ德、不下爲二困窮一而敗上レ節」と、又同書六本篇に「與二善人一居、如レ入二芝蘭之室一、久而不レ聞二其香一、卽與レ之化矣」等あり。

〔寬弘四年〕卽一條天皇の御宇也。

〔源信〕僧都也、姓卜部氏、和州葛木郡の人、正親の子、慈慧大師に事へて顯密の敎を極めたり。壯歲を過ぎ榮名を忌み橫川に屛居し專ら著述に從事す。一乘要訣、往生要集、阿彌陀經疏、大乘對、俱舍抄、因明相違註釋等あり。

〔伊州有大神云云〕伊勢內外皇太神宮を云へり。

〔賀茂別雷神社〕山城國愛宕郡上賀茂村鴨山麓にあり、上社と云ふ、祭神賀茂別雷神、今官幣大社に列す。

〔賀茂御祖神社〕同國同郡下賀茂村糺の森にあり、下社と云ふ、祭神賀茂別雷神の母、玉依媛及び外祖父賀茂建角見命を祭る、今官幣大社に列す

〔具平親王〕世に六條宮、又は千種殿と稱し、また後中書王とも云ふ、六十二代村上天皇の皇子、圓融天皇の皇弟、母は女御莊子女王也。

詩必五言也。或六對十二句。或八對十六句。於大學寮試謂寮試。於式部省試謂省試。各有法而有評定文。賜進士及第者二十人以爲常。若過此數者名餘貢。亦曰小省試。或有放島試。於朱雀院行之。令進士駕舟放島獻策。延喜十六年八月廿八日。行幸朱雀院。御題高風送秋。時及第者八人。康保二年十月廿三日。行幸朱雀院。御題飛葉共舟輕。時及第者。橘倚平及御問辨散樂。藤雅材獻策。式部省被還菅神時御硯。承久蒙塵失之。其餘事詳遺芳鈔。伊州有大神。謂二所大神宮。見下卷引武備志條。山州有賀茂明神。謂山城國愛宕郡賀茂別雷神社。賀茂御祖神社也。此兩社乃山城國之鎭。天下宗之。其神之靈。其祭之久。詳見山城國風土記及國史。本國有國史云云。國史謂類聚國史新國史等。秘府略天長二年滋野貞主奉勅。與諸儒撰之。集古今文書。以類相從。凡千卷。文觀當作日觀。日觀集也。村上天皇在東宮。令詞臣撰之。詞林新撰本朝詞林。江談抄云。源爲憲撰。在故二條殿下所傳于世者略本也。混元錄混當作坤。聲之誤也。坤元錄魏王守泰所撰。即括地志也。其書殘缺。我朝傳之。古人多取其地名題詩。野人若愚不知何皇子也。或曰。具平親王歟。親王者村上天皇第七之子。冷泉天皇圓融天皇之弟也。寛弘六年四月十六日薨。以文才稱。余謂。國王弟而自稱野人。必出家隱者乎。然則非具平親王矣。此時藤行成。以入木鳴于世。蓋若愚者皇子爲桑門。學書於行成者。左大臣藤原道長書略云。商客至通書云云。藤原道長御堂關白也。道長公記曰。寛弘二年十二月十五日己丑。入唐寂昭上人書來。可憐萬里往來書。治部卿源從英從英當作俊房。從俊字似。英房訓同。源俊房者道長公外孫。後號堀川太政大臣。嘗著水左記。夜鶴庭訓抄云。

俊房能書榜。妙筆。

又卷第五十九

廣知博識　僧贊寧

江南僞謗知潤州節度使温之少子也。美姿度。喜蓄奇玩。蕃商得一鳳頭。乃飛禽之枯首也、綵翠奪目。朱冠紺毛。金觜如生。正類大雄雞廣五寸。其腦平正。可爲枕。謗償錢五十萬。又得畫牛一軸。晝齕草欄外。夜則歸臥欄中。謗獻後主煜。煜持貢闕下。太宗張後苑。以示群臣。俱無知者。惟僧錄贊寧曰。南倭島和切　海水或減則灘磧微露。倭人拾方諸蚌胎中有餘淚數滴者得之。和色著物則晝隱而夜顯。沃焦山時。或風撓飄擊。忽有石落海岸。得之滴水磨色。染物則晝顯而夜晦。諸學士皆以爲無稽。寧曰。見張騫海外異記。後杜鎬檢三館書目。果見於六朝舊本書中。載之。湘山野錄

今按。事文類聚。畫牛作畫羊。沃焦山作沃焦山。又歷朝故事註。沃焦山在東海中。

又卷第六十

風俗雜誌　日本扇

熙寧末余遊相國寺。見賣日本國扇者。琴漆柄以鴉青紙。如餅揲爲旋風扇。淡粉畫平遠山水。薄傅以五彩。近岸爲寒蘆衰蓼鷗鷺竚立。景物如八九月間。艤小舟。漁人披蓑釣其上。天末隱隱有微雲飛鳥之狀。意思深遠。筆勢精妙。中國之善畫者或不能也。索價絕高。余時苦貧。無以買之。每以爲恨。其後再訪。都市不復有矣。

〔贊寧〕宋朝の高僧高氏、吳興の人、南山律を習ふ、太宗三年、吳越王に隨ひて朝見す、勅して號を通慧大師と賜ふ、左街の天壽寺に住せしむ、明年勅を奉じて僧史を修む、太平興國七年、宋高僧傳を編む、淳化元年鷲嶺聖賢錄を著す、二年勅して史館編修に充つ、咸平元年、汴京右街僧錄となる、次年左街に進む、二年二月寂す、壽八十二。

〔張騫〕漢朝、河内の人、字は子文、武帝の時、郎となりて西域に使し、大宛に至りて葡萄種を得以て酒を釀すことを知る、元朔年中匈奴を擊ちて博望侯に封す。

〔熙寧〕我が紀元千七百二十八年（七十代後冷泉天皇の朝）より四十五年（七十二代白河天皇の朝）迄八年間北宋六世神宗の時の年號也。

〔神宗〕宋朝六世、姓は趙氏、諱は頊、英宗の長子、王安石を用ひて相と爲し、新法を行ふ、物議騷然たり、在位十九年、壽三十八、改元二度、熙寧、元豐是也。

〔張學士君房〕張君房也、宋朝安陸の人、眞宗の時、日本の使至り、詞臣に乞ひて寺記を撰せしむ、時に直院の文は多く君房代りて之を爲ると云へり。

今按。熙寧宋神宗年號。熙寧末我朝白河天皇時也。前與寂昭書。今房書。其書畫之妙。見稱于中華。可謂當時我朝不乏人也。

又卷第六十三

談諧戲謔

祥符中日本國。忽梯航稱貢。非常貢也。蓋因本國之東有祥光現。其國素傳。中原天子。聖明則此光現。眞宗大喜。勅。本國建一佛祠以鎭之。賜額曰神光。朝辭日上親臨遣。夷使面乞。令詞臣撰一寺記。當時直者雖偶中魁選。詞學不甚優。居常止以張學士君房代之。蓋假其稽古才雅也。既傳宣令急撰寺記。時張尙爲小官。醉飮於樊樓。遣人遍京城尋之。不得。而夷人在閤門。趨足而待。又中使三促之。紫微大窘。後錢楊二公。玉堂暇日改閑忙。令大年曰。世上何人最得閑。司諫拂衣歸華山。蓋种放得告還山養藥之時也。錢希白曰。世上何人最號忙。紫微失却張君房。時傳此事爲雅笑。湘山野錄

今按。祥符大中祥符。宋眞宗年號。佛祖統記以祥光爲景德五年事。景德五年卽祥符元年。當日本一條天皇寛弘五年。

又卷第七十八

安邊禦寇　日本

公言。雍熙初。日本僧奝然來朝。獻其國職貢令。年代紀。奝然衣綠。自云。姓藤原氏。爲眞連。國五品官也。奝然善隷而不通華言。有所問書以對之。國有五經及釋氏經教。並得於中國。有白居易集七十

卷。地管州六十八。土曠而人少。率長壽。多百餘歲。國王一姓。相傳六十四世。文武僚吏皆世官。予在史局。閱所降禁書。有日本年代紀一卷及奝然表啓一卷。因得修其國史傳甚詳。奝然後歸附。商人舡奉所貢方物爲謝。案。日本倭之別種也。以國在日邊。故以日本爲名。不惟改之。蓋通中國文字。故唐長安中。遣其大臣眞人來貢。皆讀經史。善屬文。後亦累有使至。多求文籍釋典以歸。開元中有朝衡者。隷大學。應舉仕至補闕。求歸國。授檢校祕書監放還。王維及當時名輩。皆有詩序送別。後不果去。歷官左右常侍安南都督。吳越錢氏多因海舶通信。天台智者教五百餘卷。有錄而多闕。賈人言日本有之。錢俶買書於其國主。奉黃金五百兩求寫其本。盡得之訖。今天台教大布江左。楊文公談苑

歐陽文忠公全集卷十五

日本刀歌

昆夷道遠不復通。世傳切玉誰能窮。寶刀近出日本國。越賈得之滄海東。魚皮裝貼香木鞘。黃白閒雜鍮與銅。眞鍮似金。眞銅似銀。百金傳入好事手。佩服可以禳妖凶。傳聞其國居大島。土壤沃饒風俗好。其先徐福詐秦民。採藥淹留丱童老。百工五種與之居。至今器玩皆精巧。前朝貢獻屢往來。士人往往工詞藻。徐福行時書未焚。逸書百篇今尚存。令嚴不許傳中國。舉世無人識古文。先生大典藏夷貊。蒼波浩蕩無通津。令人感激坐流涕。鏽澀短刀何足云。

今按。司馬溫公集略、亦載日本刀歌。大同小異。妖作祆、玩作用。蒼波浩蕩無通津。作嗟予乘桴欲往學。愚謂。張鼎思之博洽。以日本刀歌爲歐陽永叔之作。然則後人誤入溫公集與。其先徐福歐陽

〔歐陽文忠公全集〕文忠公全集とも云ふ、百五十三卷あり、附錄五卷、宋の歐陽修の撰也、周必大の編纂にかゝる、必大も亦歐陽公と同じく、宋代廬陵の人也。

〔司馬溫公〕司馬光也、宋朝、陝州夏縣の人、字は君實涑水先生と號す、尚書左僕射に拜し門下侍郎を兼ぬ、博識篤學にして、著す處、資治通鑑を始め二十種五百餘卷あり、卒して太師溫公を贈り、文正と謚す。

〔玉海〕二百卷、宋の王應麟等勅を奉じて撰す、天文、律曆、地理等二十一門に分ち、廣く經史子集中より典故を抄錄す、實に宋代類書の淵海たり、又た附錄として應麟の著書十一種を合刻せり。

〔王應麟〕宋朝、慶元の人、字は伯厚、八歲にして六經に通ず、學問博該、文を爲る敏捷、淳祐の初の進士、官、翰林學士禮部尙書たり、著す所、地理考、困學紀聞、玉海等あり、

〔太平興國九年〕太平興國は宋二代太宗の時の年號、其の九年は、我が六十四代圓融天皇の永觀二年に當れり

子以日本先祖爲徐福者非也。宜參考引吾書及世法錄今按。

玉海卷第一百八　　浚儀　王應麟伯厚甫

音樂門　四夷樂　唐日本獻樂

實錄。宣宗大中七年四月。日本國遣王子來朝。獻寶器音樂。帝曰。近者黃河淸。今又日本來朝。朕德薄何以堪之。因賜百僚宴。陳百戲以禮之。

今按。唐宣宗大中七年當日本文德天皇仁壽三年。撿我國記。此年秋儻唐商欽良暉發舶。圓珍法師共之泛海。八月十五日。著唐之嶺南福州境。此外不見遣王子事。

又卷一百五十四

朝貢　獻方物　元豐日本貢方物

太平興國九年三月。日本國也。古倭奴　裔然來獻銅鈴磐壺幷本國職員全年代紀。又言。其國多中國典籍。因出孝經一卷。越王孝經新義一卷。孝經卽鄭氏注。越王唐越王正也。　元豐元年閏正月二十五日。日本僧仲廻貢方物。乾道九年五月廿五日。貢方物。

今按。太平興國九年。卽雍熙元年。宋太宗年號。職員全當作職員令。詳見宋史條。又玉海第一百五十二。第一百五十三。第一百五十四。日本事與魏志唐書等同者故略之。

書言故事大全卷之四　　廬陵　胡繼宗集　　安成　陳玩直　解

琱言唐宣宗朝。日本國王子來朝。善鬪棋。帝命待詔顧師言與之對手。待詔官名、對手對著棋也。　王子出本國楸

玉、綦局。冷暖玉棊子。蓋玉之蒼者如櫰木之色。冷暖者冬暖夏冷。

米元章書史

陳賢草書帖六七紙、字亦奇逸難辨。如日本書。上亦有唐氏雜迹字印。在李瑋家。又多似歐陽詢草。

劉涇在宿州。云云、其後得余家十七帖日本書及日本告吳融。

中華古今注卷中　　國子監大學博士　馬　編集

盤桓釵梁冀婦之所制也。梁冀妻改翠眉爲愁眉。長安婦女好爲盤桓髻。到于今其法不絕。墮馬髻今無復作者。倭墮髻一云墮馬之餘形也。

今按。日本書紀神代卷曰。髻鬟弘仁先說訓之曰御以那情吉。見林始不曉此訓義。及讀中華古今注。而後知。御以那御結長也。情吉卽墮髻之義。本國婦人髮之形也。言其結髮長也。今散髻加美也。古事記髻鬟作御美豆良。

鼠璞　　桃源戴埴仲培父

扶桑

其地乃在中國東。或謂日出扶桑。以日自東方出耳。猶倭自謂日出處天子耳。

今按、鼠璞之意。以扶桑倭俱爲日出之處。乃扶桑與倭別。此意是也。愚按。詳見上卷引述異記下。

菊譜　　彭城　劉蒙

花總數三十有五品。以品視之。可以見花之高下。以花視之。可以知品之得失。具列之如

〔中華古今注〕三卷あり、名物を考證せり、續百川學海に蒐錄す。

〔馬〕馬縞也、五代の人、其世家を知らず、明經及宏詞科に擧げられ梁に事へて太常少卿となり、禮を知るを以て世に稱せらる唐の莊宗の時、中書舍人に累進す、明宗の時、戶部兵部侍郞に遷る、盧文紀相となり、其迂儒を以て之を鄙とし國子祭酒に改む享年八十歲。

〔散髻加美〕下髮也

〔御美豆良〕御鬘の義にて、髮を左右に分けて、結ひわがねたるを云ふ。和名抄に「鬟、和名美豆良、屈髮也」とあり。

〔鶴林玉露〕十六卷宋の羅大經の撰、本書の體、詩話語錄の間にあり、引く所朱子、張栻、眞德秀、魏了翁、楊萬里の語多し、而して、又兼て陸九淵を推せり、其の宗旨も亦文章道學の二者にあり、大抵議論に詳にして、考證に略也。

〔羅大經〕宋朝の人字は景綸、盧陵の人也、其事蹟考ふべきなし。

〔朱文公〕朱熹の謚號也。

〔六經〕漢書武帝紀賛に「孝武初立、卓然罷黜百家、表章六經」とありて其の顏注に「六經、謂易、詩、書、春秋、禮、樂也」とあり。

左云。

新羅第二

新羅一名玉梅。一名倭菊。或云。出海外國中。開以九月末。千葉純白。長短相次。而花葉尖薄。鮮明瑩徹。若瓊瑤然。花始開時。中有青黃細葉。如花蘂之狀。盛開之後。細葉舒展。廼始見其蘂焉。枝正紫色葉青。支股而小。凡菊類多尖闕。而此花之蘂。分爲五出。如人之有支股也。與花相映。標韻高雅。似非尋常之比也。然余觀。諸菊開頭枝葉。有多少繁簡之失。如桃花菊則恨葉多。如毬子菊則恨花繁。此菊一枝多開一花。雖有旁枝亦少。雙頭並開者。正素獨立之意。故詳紀焉。

今按。菊譜以白菊爲出海外。名倭菊者是也。又謂新羅則似出新羅國。然非此義。蓋日本語白曰之良。與新羅音近。故謂新羅菊。亦白菊之義也。自古和歌詠菊者多詠白菊。重我國之產。且色尙白也。中國白菊詩少。許棠白菊詩曰。所尙雪霜姿。非關落帽期。香飄風外別。影到月中疑。發在林凋後。繁（類詩作開。）當露冷時。人間稀有此。自古乃無詩。見文苑英華第三百三十二。

鶴林玉露卷之十六人集四

盧陵　羅大經景綸　編

日本國僧

余少年時。於鐘陵邂逅日本國一僧。名安覺。自言。離其國已十年。欲盡記一部藏經乃歸。念誦甚苦。不舍晝夜。每有遺忘。即叩頭佛前。祈佛陰相。是時已記藏經一半矣。夷狄之人。異敎之徒。其立志堅苦。不退轉至於如此。朱文公云。今世學者讀書。尋行數墨。備禮應數。六經語孟不曾全記。得三五

〔千光國師〕建仁寺の僧、榮西の別號也、備中吉備津宮の人、叡山に登り、台教を究め、後ち葉上流の一流を創せり。

〔承元元年〕紀元千八百六十七年、即ち八十三代土御門天皇の九年也、南宋四代古宗の開元三年に當る。

〔倭名抄〕倭名類聚抄の略也、二十卷、十卷の二種あり、源順の著也。

板。如此而望有成。亦已難矣。其視此僧殆有愧色。僧言。其國稱其國主曰天人國王。安撫曰牧隊。通判曰在國司。秀才曰殿羅罷。僧曰黃榜。硯曰松蘇利必。筆曰分直。墨曰蘇彌。頭曰加是羅。手曰提。眼曰媚。口曰窟底。耳曰弭々。面曰皮部。心曰母兒。脚曰叉兒。雨曰下米。風曰客安之。鹽曰洗和。酒曰沙嬉。

今按。安覺者釋經祐。姓色條氏。本名良祐。號安覺。千光國師弟也。嘗入宋。歸朝之後。止筑前國田島香正寺。汲彥高根神泉。在豐前國。詳見下卷海東諸國記條。滴爲硯水。手自書寫一切經。承元元年十二月終其功。筆畫楷正。今猶存。天人當作天皇。牧隊隊。在國司在字衍字。殿羅罷當作罷殿羅。秀和訓罷殿流。羅與流音通。然此訓不合秀才二字。秀才曰須具禮罷殿多流加度。亦曰比止加度。選叙令云。凡秀才取博學高才者。考課令云。凡秀才試方略策二條。義疏。方大也。略要也。大事之要略。文理俱高者爲上上。文高理平文平理高爲上中。文理俱平爲上下。文理粗通爲中上。文劣理滯皆爲不第。黃榜御坊也。御訓黃。坊榜音通。國俗尊僧曰御坊。客安之安衍。

大宋僧史略卷下

右街僧錄通慧大師　贊寧　奉勅撰

日本國僧圓載住西明寺。辭廻本國。賜紫遣還。

倭國則賜僧傳燈法師之號。

今按。倭名抄。我朝僧位階。有傳燈大法師位。准三位。傳燈法師位。准四位。傳燈滿位。准五位。傳燈住位。准六位。傳燈入位。准七位。

〔小治田朝〕小治田は、古事記に「豐御食炊屋比賣命小治田宮に坐しまして參拾漆歲天下治しめしき」とありて、推古天皇の皇居の在りし地也、故にこの天皇の御代を小治田朝と云ふ、今大和國高市郡雷土村、稻䦨と坂田二大字の邊堺に亙りて舊跡存せり。

〔咸平六年〕咸平は宋朝三代眞宗の時の年號、其の六年は我が紀元千六百六十三年一條天皇の長保五年に當れり。

〔楞嚴院〕比叡山延曆寺に屬す、山城國愛宕郡橫川にあり、天長六年慈覺大師の草創也、

歷朝釋氏資鑑卷第五

閩 虔峰 沙門 熙仲 集

大隋丙寅大業二年。倭國云云。其國書曰。日出處天子致書曰。日入處天子無恙云云。帝覽之甚悅。

今按。中原師遠等勘文引經籍後傳記曰。小治田朝推古天皇遣小野臣因高於隋、購求書籍。兼聘隋天子。其書曰。日出處天皇致書日沒處天子。煬帝覽之不悅。猶怪其意氣高遠。遣裴世淸等十三人送因高。來觀國風。詳見善隣國寶記。釋氏資鑑曰。帝覽之甚悅。殆近于此矣。

教行錄卷第四

四明石芝沙門 宗曉 編

答日本國師二十七問幷序　准行業碑則云二十問。若據傳寫諸本並載二十七問。恐續後問答參入前文。今依二十七問刊行。

日本國師問　四明法師答

皇宋咸平六年癸卯歲。日本國僧寂照等賷到彼國天台山源信禪師於天台教門致相違問目二十七條。四明傳教沙門知禮。憑教略答。隨問書之。

諸方匠碩。或一披覽無吝斤削云。

天台宗疑問二十七條。恭投

函文。伏冀垂慈。一一伸釋。不勝至幸。

日本國天台山楞嚴院法橋上士位內供奉十大禪師源信　上

一問。法華三周授記作佛云云。近代疑者云。爲是初住佛。爲是妙覺佛。若是妙覺者。大師當云。初住八相佛也。若是初住者。圓頓速疾。經一二生尚可究竟。況經無數劫耶。

〔八相〕佛教にて、降兜率、入胎、住胎、出胎、出家、成道、轉法輪、入滅の八道に現する相を云ふ。

〔妙覺〕三藏法數に「自覺覺他覺行圓滿不可思議、故名妙覺性」とあり。

〔法身〕佛教にて、理智顯現して有爲功德法の體性を云ふ、又、勝鬘經寶窟には「法身者卽是實相眞如法也」とあり。

〔初住〕菩薩乘五十二位中十住の第一の稱也。

〔台學〕天台宗の敎學を云ふ。

答。三周所授乃八相應身記也。此之八相。始從初住分顯治身。終至妙覺究竟法身。皆能現此金物之相。三周得入者不局初住。如疏云。身子既是上根利智。必是超人。而多云初住者。蓋指其首耳。又皆云經無數劫者。只約結緣作淨佛國土因也。若無衆多受化之機。如何現身說法耶。若論法身之本。乃卽座而得。豈待經無數劫乎。

二問云云

答云云

二十七問。五百問論題下云妙樂大師造。疑者云。此論似多訛謬。且擧一二。如言阿難羅雲。論中不擧供養佛數。及破他師所釋種性等七地義。似歡喜等十地。若是大師所製不可不通。

答。此論宋地闕本。並不得而評論矣。

草菴錄紀日本國師問事。

日本國師。嘗遣徒抗海。致問二十於法智。法智答之。皆深於理致也。後廣智闡法席。復遣其徒紹良等二人。齎金字法華經。如贄見之禮。因哀泣致敬。請學於輪下三載。其道大成。還國大洪台學。命爵公碑其塔。其道之。

再答日本國十問。

此十問。不知彼國何師所設而來。相傳但云。日本國問。四明法師答。

一問云云　答云云

〔三大部〕玄義十卷文句十卷、止觀十卷、これを天台の三大部と云ふ、三大部補註序に「玄文止觀、共三十卷、時人謂之三大部」とあり。

〔釋門正統〕八卷、宋の嘉熙年中良渚の沙門宗鑑の集也天台宗の記傳史にてもと吳の鎧庵居士之を草し、竣へずして歿す、其の後鑑師舊史を增續し、遷の史法に准じて之を完成し、以て釋門の正統は台宗に在るを論述し、禪家の所傳燈相承の謬因に對す

十問云云　答云云

又卷第六

四明尊者遣僧日本國求仁王經疏。

有宋之初。台教乃漸航海入吳越。今世所傳三大部之類是也。然尚有留而不至。與夫至而非其本眞者。仁王經疏先至。有一本衆咸斥其僞。昔法智既納日本信禪師所寄辟支佛髮。答其所問二十義。乃求其所謂仁王經疏。信即授諸海舶。無何中流大風驚濤。舶人念無以息龍神之怒。遽投斯疏以騁安之。法智乃求强記者二僧。詣信使讀誦以歸。不幸二僧死于日本國矣。此文見晁說之所作仁王經疏序。此疏雖非本眞。而此說不可亡矣。

今按。據唐決集元亨釋書則二十七問也。云二十問非也。上士位上當作人二十七及十問答略之。宜參考本錄。

釋門正統第一　　良渚沙門　宗鑑　集

晁公序仁王護國般若經疏云。陳隋間。天台智者。遠稟龍樹立一大教。九傳而至荊溪。荊溪復傳而至新羅。曰法融。曰理應。曰純英。故此教播於日本而海外盛矣。屬中原喪亂。典籍蕩滅。雖此教是爲不可亡者。亦難乎其存也。然杲日將出而曉霞先升。眞人應運而文明自見。我有宋之初。此教乃漸航海入吳越。今世所傳三大部之類是也。然尚有留而不至。與夫至而非其本眞者。仁王經疏先至。有一本衆咸斥其僞。昔法智既納日本信禪師所寄辟支拂髮。答其所問二十義。乃求其所謂仁王經疏。信

即授諸海舶。無何中流大風驚濤。船人念無以息龍神之怒。遽投斯疏。以慰安之。法智乃求強記者二僧。詣信使讀誦以歸。不幸二僧死于日本。至元豐初。海賈乃持今仁王疏二卷來四明。於是老僧如恂。因緣得之云云。

今按。釋門正統所引晁說之仁王經疏序文。比敎行錄詳。

又第二義寂傳

初智者所說敎迹。自安史挺亂以來。會昌籍沒之後。當時碩德。但握半珠。隱而不曜。所有法藏。多流海東。師痛念本折枝摧力網羅之。先於金華古藏中。僅得淨名一疏而已。後以錢忠懿王覽內典昧於敎相。請扣韶國師。韶稱師洞明台道。王召師建講。遣使抵日本。求其遺逸。仍爲造寺。賜號淨光。追謚九祖尊者。台道鬱而復興。師之力也。嚴敎主拜像詩云。憶昔昏衢萬里開。德星一點耀南台。修眞名自神州起。慕法僧從日本來。道樹幾將成巨蠹。慧燈相次作寒灰。當時不假扶持力。塵劫茫々事可哀

智禮傳。日本國師源信。寄遺學徒寂照等。持二十七問。詢求法要。師答之。咸臻其妙。厥後廣智嗣席。復遺其徒紹良等二人。齎金字法華經。如貴見之禮。因哀泣致敬。請學於輪下。三載其道大成。還國大弘台學。曾魯公碑其塔。具道之。據敎行錄。更載答日本十問之文。但不知爲彼國何師也。

又第三弟子志

所謂天台敎者云云。此宗自安史擾亂會昌籍沒以來。舊聞放失。傳者罔憑。或握半珠隱而不曜。所有

〔法藏〕又佛法藏とも如來藏とも云ふ、法性の理を云ふ、法藏無量の性德を含藏すれば云へり。無量壽經に「行權方便入佛法藏究竟彼岸」と又同書に「受持如來甚深法藏護佛種性」とあり。

〔淨名〕淨名は、梵語維摩羅詰の約にて、無垢の意也。

〔法要〕簡約に法の概要を說けるを云ふ、維摩經弟子編に「佛爲諸比丘略說法要」とあり、又、註維摩經五に「什曰、以要言說法、謂簡要之言折繫理也。肇曰、善以約言而擧多義。美其能得說法之要趣也」とあり。

法藏多流海東。吳越錢忠懿王。覩永嘉集。昧於教相。問韶國師。師稱螺溪寂洞明台道。王召寂建講。爲遣使日本。求其遺逸。

今按。禪宗永嘉集二卷。唐永嘉沙門玄覺撰。此永嘉集文事詳佛祖統記。見下。

所謂密教者云云。先是空弟子慧果。授與日本空海。傳授不絕。近俊芿來雲間。從北峰印學者。即其遺派。學術行業眞海東翹楚也。

又第七

宗印字元實號北峰。云云。嗣法俊芿。先得密教於日本。慕台道航海來學。開禧逆虜犯順。芿欲結壇誦呪如不空解安西圍者。時論孰韙。扣閽無路。師俾芿遣其徒於日本。取五部法。而徒死于海。吁聖教行否。亦有時耶。茲足以表其無我。

今按。俊芿泉涌寺僧。傳見元亨釋書。

宋高僧傳卷第十四　宋左街天壽寺通慧大師賜紫沙門贊寧等　奉勅撰

唐揚州大雲寺鑒眞傳

釋鑒眞姓淳于氏。廣陵江陽縣人也。總丱俊明。器度宏博。能典謁矣。隨父入大雲寺。見佛像感動夙心。因白父求出家。父奇其志許焉。登便就智滿禪師循其獎訓。屬天后長安元年詔於天下度僧。乃爲息慈。配住本寺。後改爲龍興。殆中宗孝和帝神龍元年。從道岸律師受菩薩戒。景龍元年詣長安。至二年三月二十八日於實際寺。依荊州恒景律師邊得戒。雖新發意。有老成風。觀光兩京。名師陶

〔永嘉沙門玄覺〕唐朝、溫州永嘉の玄覺禪師也、姓は戴氏、天台の止觀に精通す、眞覺大師と號す、唐の睿宗先天元年入寂、諡を無相大師と賜ふ、證道歌首、永嘉集等の著あり。

〔宋高僧傳〕三十卷あり。

〔鑒眞〕「カンジン」又は「ガンジン」と讀むを例とす、俗姓は淳于氏、唐の楊州江陽縣の人、智滿禪師に就き佛典を究む、聖武天皇の御時歸來す。

〔菩薩戒〕三聚淨戒とも云ふ、大乘菩薩僧の戒律也、梵網爲宗と瑜伽稟承の二說あり、天台にては、梵網爲宗の說をとれり。

誘。三藏教法、數稔該通。動必研幾。曾無矜伐。言旋淮海。以戒律化誘。鬱爲一方宗首。冰池印月。適足清明。猊座揚音。良多響答。時日本國有沙門榮叡普照等。東來募法。用補缺然。於開元年中達于揚州。爰來請問。禮眞足曰。我國在海之中。不知距齊州幾千萬里。雖有法而無傳法人。譬猶終夜有求於幽室。非燭何見乎。願師可能輟此方之利樂。爲海東之導師乎。眞觀其所以。察其翹勤。乃問之曰。昔聞。南岳思禪師。生彼爲國王。興隆佛法。是乎。又聞。彼國長屋曾造千袈裟。來施中華名德。復於衣緣繡偈云。山川異域。風月同天。寄諸佛子。共結來緣。以此思之。誠是佛法有緣之地也。默許行焉。所言長屋者則相國也。眞乃募比丘思託等一十四人。買舟自廣陵賫經律法離岸。乃天寶二載六月也。至越州浦止署風山。眞夜夢甚靈異。纔出洋遇惡風濤。舟人顧其垂没。有投棄𣘦香木者。聞空中聲云。勿投棄。時見神艫。各有神將。介甲操仗焉。尋時風定。俄漂入蛇海。其蛇長三丈餘。色若錦文。後入魚海。魚長尺餘。飛滿空中。次一洋純見飛鳥。集於舟背。壓之幾没。泊出鳥海之水。俄泊一島。池且泓澄。人飲甘美。相次達於日本。其國王歡喜。迎入城大寺安止。初於盧舍那殿前立壇。爲國王授菩薩戒。次夫人王子等。然後教本土有德沙門。足滿十員。度沙彌澄修等四百人。用白四羯磨法也。又有王子一品親田。捨宅造寺。號招提。施水田一百頃。自是已來。長敷律藏。受教者多。彼國號大和尚。傳戒律之始祖也。以日本天平寶字七年癸卯歲五月五日無疾辭衆坐亡。身不傾壞。乃唐代宗廣德元年矣。春秋七十七。至今其身不施苧漆。國王貴人。信士時將寶香塗之。僧思託著東征傳。詳述焉。

〔戒律〕五戒十善戒乃至二百五十戒など、佛徒の邪非を防止する法律を云ふ、戒は梵語、尸羅の譯、律は優波羅叉の譯也。

〔南岳思禪師〕慧思禪師を云ふ、支那の五岳の一衡岳之れを南岳と云ふ、禪師それに住せるにより此の稱あり

〔廣德元年〕廣德は唐ノ代、代宗の時の年號、我が紀元千四百二十三年、同四年の二年間を稱す、其の元年は、即ち、四十七代淳仁天皇の七年に當れり。

〔傳燈錄〕三十卷、宋の眞宗景德元年吳の沙門道彥、釋迦以來の祖々の法脈を系し、法語を錄せしもの、後に倣ひて種々の燈錄あり、是れその嚆矢也。

〔長屋王〕天武天皇第二皇子、高市王の長子、慶雲年中正四位上に叙し、和銅二年從三位に進み宮內卿となり後ち累進して、養老五年從二位に進み右大臣を拜す、神龜元年正二位となり左大臣に轉ず天平元年二月事に坐して舍人親王の糺問を受け自盡を給ふ。

今按。南岳思禪師。生彼爲國王。興隆佛法。元亨釋書鑑眞傳曰。我聞。南嶽思公。生和國弘佛法。聖德太子事我知之。詳見下文傳燈錄條。長屋王高市親王之子也。仕至左大臣。故曰長屋者則相國也歟。實非相國矣。城大寺城當作東。王子一品親田親當作新。新田部親王天武天皇第八之子。天平七年九月薨。東征傳曰。以寶字元年丁酉十一月廿三日。勅。施備前國水田一百町。眞以此田欲立伽藍。時有勅旨。施大和上園地一區。是故新田部親王之舊宅。寶字三年八月一日。私立唐律招提。後請官額。今唐招提是。思託鑑眞之弟子。台州開元寺僧也。東征傳有思託五言初謁大和上二首幷序。東征傳一卷。寶龜十年二月眞人玄開撰。高僧傳謂思託著東征傳者失也。

又卷第二十九唐天台山國淸寺道邃傳

貞元二十一年。日本國沙門最澄者。亦東夷卉服中。剛決明敏僧也。泛溟滓達江東。慕天台之法門。求顗師之禪決。屬邃講訓委曲指教。澄得旨矣。乃盡繕寫一行教法東歸。慮其或問從何而聞得誰所印俾防疑悞。乃造邦伯作援證焉。時台州刺史陸淳。判云。最澄闍梨。形雖異域性實同源。特稟生知。觸類玄解。遠傳天台教旨。又遇龍象邃公。總萬行於一心。了殊塗於三觀。親承祕密。理絕名言。猶慮他方學徒未能信受。所請印記。安可不任爲憑。云澄泛海。到國實教法。指一山爲天台。號一寺爲國淸。風行電照。斯教大行。倭僧遙尊邃爲祖師。

今按。貞元唐德宗年號。貞元二十一年當日本桓武天皇延曆二十四年。指一山爲天台。謂近江國比叡山也。號一寺爲國淸。謂延曆寺也。澄傳見元亨釋書。亦詳有別傳。

〔聖德太子〕御名は廐戸皇子、また豐聰皇子、上宮太子と云ふ、世に上宮法王又は法主王と稱し、後人更に其德行を尊びて、聖德太子と諡す、用明天皇の第一皇子御母は穴穗部間人皇后也。

〔浮屠氏〕浮屠は、佛陀の轉音「フト」にて、佛を云ふ、南山戒疏に、「言佛者梵云佛陀、或言浮陀浮圖浮頭、蓋傳音之訛耳、此無其人以義翻之名爲覺」とあり。

又卷第三十唐天台山禪林寺廣脩傳

開成三年。日本國僧圓載來躬請法。

今按、圓載事見下引唐詩鼓吹條上。

景德傳燈錄卷第十七　　宋沙門　道　原　纂

雲居道膺禪師傳

洞山有時謂師曰。周聞、思大和尚生倭國作王。虛實曰。若是思大佛亦不作。況乎國王。洞山然之。

今按。世傳聖德太子前生南嶽思大和尚也。然據道膺說則虛也。又羅浮子曰。或問、傳燈錄雲居道膺傳謂。思大和尚生倭國作王、鑑眞亦曰。我聞思公生和國弘佛法。聖德太子事我知之。且又所行于世太子傳具載此事。未知果然否。余答曰。再生之說。浮屠氏之所言也。非吾儒之所專言也。雖然革祜圓澤事。是史傳之所稱。亦不可誣乎。有說于此。人物之生也。皆天地陰陽之所感。生者自息。死者自消。譬如逝川之不舍晝夜。更無一息之間斷也。今年之春非去年之春。樹頭之花非復根之花。易曰。原始反終。故知死生之說。由是觀之。無人死再生之義。雖然聚散遲速。如火之初滅而烟氣猶鬱乎。故有鬼神之感格。有厲鬼之來出。有精爽之依託。有魂魄之流行。而其終由太虛無所不之。何蹤跡之遺有哉。況其人死又託胎乎。佛氏三世之說。今之果夙之因也。今之因後之果也。其要至令人人修善止惡而已。下愚庸昧不悟此意。恐懼疑惑。遂以爲實有三世。是必野狐耳。若夫祭祀祖考。存其至誠。則洋洋乎如見如在。譬如植梅子得梅樹種杏仁得杏樹。於物已然。人

〔得度〕生死を海に比し、涅槃を彼岸に比し、生死を超えて涅槃に到るを度と云ふ、佛家これを儀式の名とし、落髮して沙彌となるを云へり。
〔乾道〕南宋孝宗の時の年號、我が紀元千八百二十五年より二十九年の六年間これを稱せり
〔嘉應〕八十代高倉天皇の御時の年號南宋の孝宗の乾道年間に當る。
〔五偈〕五の偈にて偈は梵語「ガタ」の略訛にて、頌の義也、佛の功德を讃美するに稱ふる詩を云ふ。
〔淳熙〕乾道十年改元してこれを稱す其の元年は、我が高倉天皇の承安四年に當れり。

亦如此。是蓋一氣之條理也。故曰非其鬼而祭之諂也。

嘉泰普燈錄卷第二十　　平江府報恩光孝禪寺臣僧　正受　編

日本國覺阿上人

覺阿上人日本國滕氏子也。十四得度受具。習大小乘有聲。二十九屬商者自中都回。言禪宗之盛。阿奮然拉法弟金慶。航海而來。歲餘始至。乾道辛卯夏也。袖香拜靈隱佛海禪師。海問其來。阿輒書而對復書曰。我國無禪宗。唯講五宗經論。國主無姓氏。號金輪王。以嘉應改元捨位出家。名行眞。年四十四。王子七歲令受位。今已五載。度僧無進納而講義高者賜之。某等仰服聖朝遠公禪師之名。特詣丈室禮拜。願傳心印以度迷津。且如心佛及衆生是三無差別。離相離言。假言顯之。禪師如何開示。海曰。衆生虛妄見。見佛見世界。阿書云。無明因何而有。海便打。卽命海陞座決疑。明年秋辭游金陵。抵長蘆江岸聞鼓聲。忽穎（會元穎作大）悟。始知佛海垂手旨趣。旋靈隱述五偈叙所見。辭海東歸。偈曰。航海來探教外傳。要離知見脫蹄筌。諸方參遍草鞋破。水在澄潭月在天。其一 掃盡葛藤與知見。信手拈來全體現。腦後圓光徹太虛。千機萬機一時轉。其二 妙處如何說向人。倒地便起自分明。驀然踏著故田地。倒裹幞頭孤路行。其三 求眞滅妄元非妙。卽妄明眞都是錯。堪笑靈山老古錐。當陽拋下破木杓。其四 豎拳下喝少賣弄。說是論（會元論非說）非入泥水。截斷千差休指注。一聲歸笛囉々哩。其五 海稱善書偈贈其行。阿少親文墨善諸國書。至此未數載。徑躋祖域。其於華語能口通。淳熙乙未。與其國僧統遣僧訊海。副以水晶降魔杵及數珠一臂綵扇二十事。貯以寶函。壬寅夏。王請住持其國叡山寺。復

〔百錬鈔〕もと十七卷あり、今傳はるもの上三卷を缺く冷泉天皇安和二年(卽ち第四卷に載す)より後深草天皇の正元元年十二月二十八日に終る群書類聚本に「嘉元二年正月十五日以大理(定房卿)本書寫校合畢」とあり。

〔佛祖統紀〕五十四卷、天台一家の正史也。

〔貞元〕貞元は宋九代德宗の時の年號其の二十一年は我が紀元千四百四十五年にして、五十代桓武天皇の大同元年に當る、此年元和と改元せり。

〔紀元〕年號を云ふこれを改むるを改元と稱す、こゝに紀元と云ふは、桓

遣僧通嗣書。時海已入寂矣。

今按。普濟五燈會元亦載覺阿上人傳。大同小異。乾道宋孝宗年號。辛卯乾道七年。當日本高倉天皇承安元年。嘉應高倉天皇年號。捨位出家。名行眞。年四十四。百錬鈔曰。後白河天皇嘉應元年六月七日出家。法諱行眞。時年四十三。王子七歲令受位。今已五載。高倉天皇仁安三年三月廿三日卽位。時年八歲。至承安二年已五載矣。淳熙亦孝宗年號。乙未淳熙二年。當日本高倉天皇安元々年。壬寅淳熙九年。當日本安德天皇壽永元年。

佛祖統紀卷八

大宋　四明東湖沙門志磐　撰

十祖興道尊者道邃傳。貞元二十一年。日本國最澄。遠來求法。聽講受誨。晝夜不息。盡寫一宗論疏以歸。將行詣郡庭。白大守。求一言爲據。大守陸淳嘉其誠。卽署之曰。最澄闍梨。身雖異域。性實同源。明敏之姿。道俗所敬。既觀光於上國。復傳教於名賢。邃公法師摠萬法於一心。了殊塗於三觀。而最澄親承祕密。不外筌蹄。猶慮他方學者。未能信受其說。所請印記。安可不從。澄既泛舸東還。指一山爲天台。創一刹爲傳教。化風盛播。學者日蕃。遂遙尊邃師爲始祖。日本傳教實紀於此。　述曰。指要序日本乾淑所錄。遂和上止觀中。異義云云。

今按。陸淳印記。亦見高僧傳。其言大異。故雖涉泛倶舉之。創一刹爲傳教非也。高僧傳曰。號一寺爲國淸。近是。元亨釋書最澄傳曰。弘仁十四年春二月。賜寺額。配紀元曰延曆。遵先皇之崇建也。貞觀八年秋七月。敕諡傳教大師。

十五祖淨光尊者義寂傳。初天台教迹。遠自安史挺亂。天寶末年。安祿山史思明。相繼反逆。近從會昌焚毀。武宗會昌五年。罷僧尼毀寺院。殘編斷簡傳者無憑。師每痛念。力網羅之。先於金華古藏。僅得淨名一疏。吳越忠懿王。因覽永嘉集。有同除四住此處爲齊若伏無明三藏即劣之語。以問韶國師。傳燈天台德韶國師。姓陳。嗣清涼益禪師。至天台。覩智者遺蹤。有若舊居。又與智者同姓。時疑其後身云。韶云。此是教義。可問天台寂師。王即召師。出金門建講。以問前義。師曰。此出智者妙玄。自唐末喪亂。教籍散毀。故此諸文多在海外。於是吳越王。遣使十人往日本國。求取教典。既回。王爲建寺螺溪。扁曰定慧。賜號淨光法師。及請諡天台諸祖。止諡天台以下六祖。一家教學鬱而復興。師之力也。案二師口義云。吳越王遣使。以五十種寶。往高麗求教文。其國令諦觀來奉諸部。而智論疏仁王疏。華嚴骨目。五百門等不復至。據此則知。海外兩國。皆曾遣使。若論教文復還中國之實。則必以高麗諦觀來奉教卷爲正。

今按。佛祖統記之意。天台教文得之於日本。而小註及第十第二十三卷第四十四卷以爲得之於高麗日本兩國。據皇朝類苑。則天台中興者。盡得之於日本。已見上。

十七祖法智尊者知禮傳。至道六年。日本國遣寂照。持源信法師問目二十七條。請答釋。

今按。至道當作咸平。咸平六年。當日本一條天皇長保四年。寂昭爲師持台教疑義。遠使於宋。時亦通國信乎。故皇朝類苑曰入貢。佛祖統記曰日本國遣寂昭。亦此意也。問目事亦見佛祖統記第十二第五十。俱列下。

又卷十

吳越忠懿王錢弘俶傳。嘗召螺溪寂法師。至金門建講。問智者教義。以典籍不全。慨然遣使齎重寶。

武天皇の時の年號延曆を云ふ、延曆は桓武天皇の天應二年八月十九日の改元にして、二十四年を經て大同と改めたり。

〔安史挺亂〕唐六代玄宗の天寶十四年に起れる、安祿山の亂を云へり、我が四十六代孝謙天皇の天平勝寶八年に當れり。

〔智論疏〕大智度論の疏也。

〔仁王疏〕仁王經の疏也、舊經に天台の疏五卷、嘉祥の疏三卷あり、新經に青龍疏三卷、弘法の開題一卷、智證の開題一卷あり。

求遺書於高麗日本。於是一家教乘復見全盛。螺溪得以授之寶雲。寶雲得以傳之四明。而法智遂專中興之名。推原其自。實忠懿護教之功爲多也。

又卷十二

廣智尙賢法師傳。日本國師。遣紹良等。齎金字法華爲贄。請學輪下。三年學成辭還日本。大弘斯道。

法師源信日本國十大禪師也。咸平六年遣其徒寂照。持教義二十七問。詣南湖求決。法智爲其一一答釋。照欣領歸國。信大服其說。西向禮謝。又卷五十。書宋公所撰碑文略見下。宜參考。

今按。咸平宋眞宗年號。咸平六年當日本一條天皇長德四年。元亨釋書源信傳曰。信作台宗二十七疑。問宋國南湖知禮法師。禮得問書嗟嘆曰。東域有深解之人乎。乃造答釋返之。風帆來往。音問相續。又安海傳曰。信法師作二十七疑。問宋之知禮法師。海見問目曰。是等膚義豈須遠問。乃作上中下三答曰。宋國答釋。不出我三種而已。及禮答來。海已死。台徒曰。禮之決釋。多海之中下義也。海之徒便持宋答及海釋。如墓讀祭。余謂。知禮私淑於螺溪二世之傳。而專天台中興之名。溪也得遺教於日本。而日本信請業於禮。觀此則如禮可謂青出於藍而青於藍乎。安海法師誠出類拔萃之人也。亦可知本朝作人之盛矣。又寂昭傳曰。長保二年。信作台宗問目二十七條。付昭寄知禮法師。禮延昭爲上客。丞相丁晉公。欽昭德義。禮答釋成。昭欲持歸本土。晉公留之。昭止于吳門寺。令其徒送禮答釋。今佛祖統記。言照欣領歸國者非也。

卷十七

〔廣智尙賢法師〕宋の延慶寺の尙賢、號を廣智と賜はる。四明尊者法智に依りて教觀を學び、性宗の旨を悟る。仁宗の天聖六年、法智に繼いで延慶寺に主となり、道化大に行はる。

〔南湖〕宋の四明山の法智尊者知禮を號す、字は約言、後人其の居所に依りて四明大師と號す、七歳出家、十五具戒、專ら律部を學ぶ、太平興國四年寶雲に從つて天台の教觀を受け、淳化二年始めて請を受け乾符に主たり、六年正月寂す。六十九歳。

〔瑜伽密教〕眞言宗の眞義を云ふ、密教にては其の經典を瑜伽經と云ひ、眞言宗を瑜伽密宗とも云へり、瑜伽は密教にては、行と相應する意、密教は大日如來所說の金胎兩部の教法を云ふ。

〔五部之法〕五部とは、小乘の五部を云ふ、佛滅後百年付法藏第五世、優婆毱多の下に五人の弟子あり、戒律の上に各異見を抱き、一大律藏初めて五派に分る、曇無德部、薩婆多部、彌沙塞部、加葉遺部、婆麁富羅部之れ也、一に五律とも云ふ。

法師俊芿。日本國人。先傳瑜伽密教。（唐元和間。國人空海入中國。受密教於不空弟子慧果。）久之航海來中國。登雪山。謁北峰。學天台一宗。執經受教。盡通其旨。開禧初北虜犯邊。芿啓北峰。欲結壇誦咒如不空解安西圍。時論委靡。竟不克行。北峰乃令道徒歸國取中華先所傳五部之法。而其徒淪于海。

今按。開禧宋寧宗年號。當日本土御門天皇之時。

卷二十三

法師子麟四明人。五代唐清泰二年。往高麗百濟日本諸國。授智者教。高麗遣使李仁日。送師西還。吳越王鏐於郡城建院。以安其衆。（今東壽昌。）

今按。清泰二年當日本朱雀天皇承平四年。

卷三十

瑜伽密教二祖不空灌頂國師傳。不空弟子有慧果者。元和中。日本空海入中國。從果學。歸國盛行其道。

鎧菴曰。自金剛智諸師。爲末代機緣有宜密教者。故東傳此道。以名一家。然嗣其後者。功效寖微。唐末亂離。經疏銷毀。今其法盛行於日本。而吾邦所謂瑜伽者。但存法事耳。

卷四十

高宗永徽四年。日本國遣沙門道照。入中國。從奘法師傳法。

今按。永徽四年當日本孝德天皇四年。道照續日本紀日本靈異記元亨釋書等作道昭。靈異記上卷曰。道昭法師。奉勅。求法於大唐。至於新羅山中。講法華。五百群虎來聽。其中有人。以倭語學問。

昭問。誰。曰役小角也。昭以爲。我國賢聖也。下高座求之。無人。

顯慶三年。日本國遣沙門智通。入中國求大乘法。

今按。顯慶三年當日本齊明天皇四年。

卷四十一

玄宗開元四年。日本國遣沙門元昉。入中國求法。

今按。開元四年當日本元明天皇靈龜二年。元昉續日本紀元亨釋書等作玄昉。

十四年。日本國沙門榮睿普照。至楊州。奉國主命。以價伽梨十領。施中國高行律師。鑒眞受其衣。感外國有佛種。遂與睿等附船而東。既至。王迎勞之。館于毗盧遮那殿。請其授歸戒。夫人羣臣以次稟教。日本律教始行於此。

今按。開元十四年當日本聖武天皇神龜三年。鑒眞事詳具上。

又卷四十三

宣宗大中四年。日本國遣沙門常曉。入中國求釋迦密教。

今按。大中四年當日本仁明天皇嘉祥三年。

十二年。日本國沙門慧鍔。禮五臺山得觀音像。道四明將歸國。舟過補陀山。附著石上不得進。衆疑懼禱之。曰。若奪像於海東機緣未熟。請留此山。舟即浮動。鍔哀慕不能去。仍結廬海上以奉之。今山側有新羅礁。鄞人聞之請其像。歸安開元寺。今人或稱五臺寺。又稱不肯去觀音。其後有異僧。持嘉木至寺。倣其製刻之。扃

〔大乘法〕大乘とは梵語、摩訶衍の譯にして、一切智を開かしむる教を云ふ、法華經譬喩品に「若有衆生從佛世尊聞法信受勤修精進、求一切智、佛智、自然智、無師智、如來知見、力、無所畏、愍念安樂無量衆生、利益天人、度一切、是名大乘」とあり。

〔玄昉〕姓は阿刀氏、龍門寺の義淵に師事す、靈龜二年勅を奉じて入唐し、撲陽の知周に法相宗を學び、在唐二十年にして歸り、之を興福寺に弘む、翌年紫衣を賜ひ、僧正に擢んで內道場に侍せしむ後ち筑紫に觀世音寺を造り住す。

戸施功。彌月成像。忽失僧所在。乃迎置補陀山。山在大海中。去鄞城東南水道六百里。即華嚴所謂。南海岸孤絶處有山名補怛落迦。觀音菩薩住其中也。即大悲經所謂補陀落迦山觀世音宮殿。是爲對釋迦佛說大悲心印之所。其山有潮音洞。海潮呑吐晝夜砰訇。洞前石橋。瞻禮者至此懇禱。或見大士宴坐。或見善財俯仰將迎。或但見碧玉淨瓶。或唯見頻伽飛舞。去洞六七里。有大蘭若。是爲海東諸國朝覲商賈往來致敬投誠。莫不獲濟。草菴録。

今按。大中十二年當日本文德天皇天安二年。慧鍔文德實録及釋書作惠蕚。實録曰。嵯峨太皇大后。嘗多造寶幡及繡文袈裟。窮盡妙巧。左右不知其意。後遣沙門惠蕚。泛海入唐。以繡文袈裟奉施定聖者僧伽和上康僧等。以寶幡及鏡奩之具施入五臺山寺。

又卷四十四

宋太祖建隆元年十月初。天台教卷。經五代之亂殘毀不全。吾越王俶。遣使之高麗日本以求之。至是高麗遣沙門諦觀。持論疏諸文。至螺溪謁寂法師。一宗教文復還中國。螺溪以授寶雲。雲以授法智。法智大肆講說。遂專中興教觀之名。呉越王傳。

雍熙元年三月。日本國沙門奝然丁久反來朝。然言。其國傳襲六十四世。八十五主。至應神天皇。始傳中國文字。云云。次元(桓)武立。遣僧空海入中國。傳智者教。當元和年中也。貞元元和間有日本最澄。受荊溪一宗流記以歸。當以此爲傳教之始可也。而奝然乃言空海傳教。而不及最澄何耶。唐書亦言。空海肄業中國二十年。然吾宗未見空海傳教之迹。今據釋門正統云。空海入中國學密教於不空弟子慧果。始知奝然言學智者教者誤也。案唐書。日本漢倭人也。云云。

〔頻伽飛舞〕迦陵頻伽の舞也、頻伽は迦陵頻伽を云ふ、慧苑音義に「迦陵頻伽、此云美音鳥、或云妙聲鳥、此鳥本出雪山、在殼中即能鳴、其音和雅、聽者無厭」とあり、又玄應音義に「迦毘者聲、加羅者好、名爲好聲鳥」ともあり。

〔文德實錄〕日本文德天皇實錄の略、十卷五冊、文德天皇御一代の實錄にして嘉祥三年三月より天安二年八月迄の史實を載す貞觀十三年の勅撰也

〔雍熙元年〕我が紀元千六百四十四年六十四代圓融天皇の永觀二年に至る北宋一代太祖の時の年號也。

端拱元年。日本國法濟大師奝然遣弟子嘉因祈乾來朝。

今按。宋史嘉因作喜因。祈乾作祚乾。

卷四十五

眞宗景德元年。日本國沙門寂昭來。進無量壽佛像金字法華經水晶數珠。賜紫方袍。

五年。日本國遣使釋（譯）（五十三釋作入）貢言。國東有祥光見。舊傳。中原天子聖明則應此瑞。上喜。詔日本建寺。賜額神光。敕詞臣爲撰寺記。

卷四十六

仁宗熙寧五年。日本國沙門尋成（成尋）來朝。

卷四十八

孝宗乾道三年。日本遣使致書四明郡庭。問佛法大意。乞集名僧。對使發函讀之。郡將大集緇衣。皆畏縮莫敢應命。棲心維那忻然而出。日本之書與中國同文。何足爲疑。即揖太守。褫封疾讀。以爪掐其紙七處。讀畢語使人曰。日本雖欲學文。不無疎繆。遂一一爲折之。使慚懼而退。守踊躍大喜曰。天下維那也。又卷五十三云。棲心維那對使宣讀。斥其文義疎繆者凡七處。

今按。乾道三年當日本二條天皇仁安二年。

唐非三藏譯大般若經。成六百卷。云云。本朝淳熙間有沙門。不知所從來。車載此經。至四明角東。行道中口浪浪誦不輟。里人沃承璋過諸塗。問之曰。我車上經皆能背誦。云云沃本巨室。初不信法。由沙

〔端拱元年〕北宋二代太宗の時の年號我が紀元千六百六十五年、即ち六十六代一條天皇の御宇に當る。

〔眞宗〕北宋三代也我が一條、三條後一條の三朝の頃に治世す。

〔景德元年〕眞宗の咸平四年の改元にして、我が一條天皇の寬弘元年に當れり。

〔緇衣〕紫にして淺黑く染めたる衣也僧史略に、「緇衣者何狀貌、笠、紫而淺黑、非正色也」とあり。

〔大般若經〕大般若波羅密多經の畧也四處十六會の說を蒐む、六百卷あり。

〔圓通大師〕俗名大江定基、齊光の子也、遇〻愛姫力壽の死に遭ひて無常を感じ出家し、如意輪寺に投じ、僧寂心に事へ寂昭と改む、長保四年入宋し、呉門寺に學びて戒律に精至す長元七年其地に卒す、圓通の號は宋主の賜ふ處也。

〔元史〕明の宋濂等勅を奉じて編修せる者也、明の太祖洪武の初め、元の世十三朝の實錄を得たりしかば、乃ち詔して李善長、宋濂等十餘人をして編纂せしむ、僅か六ヶ月にして成る、本紀四十七、志五十三、表六、列傳九十七、傳中に釋老傳あるは此書のみなり。

門一化。乃能背誦般若。然不知回向淨土。其沒也生日本為國主。背有銘曰。大宋沃承璋。日本人說若此。

今按。宋沃承璋生日本為國主廬誕也。吾書曰。日本國人自言。泰伯之後。佛祖統紀曰。日本人說若此。皆好事者言之也。

卷五十

清獻公法智大師行業記。法智大師。名知禮。字約言。金姓。世為明人。梵相奇偉。性恬而器閎。云云。道法大熾。學徒如林。日本國師。遣徒。持二十問。來詢法要。師答之。咸臻其妙。

卷五十一

慈雲大師遵式南岳止觀後序。噫斯文也歲月遼遠。因韜晦于海外。道將復行也。果於咸平三祀。日本國圓通大師寂照。錫背扶桑。杯泛諸夏。既登鄮嶺。解篋出卷。天竺沙門遵式首而得之。度支外郎朱公頓冠首序。出奉錢（奉音鳳。祿也。作俸音蓊皆誤。）模板而廣行之。大矣哉斯文也。始自西傳猶月之生。今復東返猶日之升。素景圓暉。終環回於我土也。因序大略。以紀顯晦耳。

今按。咸平三祀當日本一條天皇長保二年。

元史卷二百八　外夷傳卷九十五

皇明翰林學士亞中大夫知制誥兼脩國史臣宋濂

翰林待制承直郞同知制誥國史院編脩官臣王禕等奉勅脩

〔顯慶〕顯慶は唐朝三代高宗の時の年號、我が齊明天皇の時に當る、其の元年は、我が紀元千三百十六年齊明天皇の二年也。

〔元〕宋についで起れる支那の國號、蒙古の成吉思汗の孫忽必烈、我が九十一代後宇多天皇の弘安三年（紀元千九百四十年）南宋に代りて帝位に卽く、これを世祖と稱す、これより十一代九十八年にして明に滅ぼさる

〔世祖〕蒙古王太祖（成吉思汗）の子拖拖の子忽必烈、兄憲宗についで南宋の景定元年王位につく（龜山天皇の文應元年）後に十年にして元朝を建て世祖と稱す。

朝列大夫國子監祭酒臣蕭雲擧
承德郎右春坊右中允管國子監司業事臣周如砥等奉　勅重校刊

日本

日本國在東海之東。古稱倭奴國。或云。惡其舊名。故改名日本。以其國近日所出也。其土疆所至。與國王世系及物產風俗見宋史本傳。日本爲國。去中土殊遠。又隔大海。自後漢歷魏晉宋隋。皆來貢。唐永徽。顯慶。長安。開元。天寶。上元。貞元。元和。開成中。並遣使入貢。宋雍熙元年。日本僧奝然與其徒五六人浮海而至。奉職貢。并獻銅器十餘事。奝然善隸書。不通華言。問其風土。但書以對云。其國中有五經書及佛經白居易集七十卷。奝然還後。以國人來者曰滕木吉。以僧來者曰寂照。寂照識文字。繕寫甚妙。至熙寧以後。連貢方物。其來者皆僧也。元世祖之至元一年。以高麗人趙彝等言日本國可通擇可奉使者。三年八月。命兵部侍郎黑的給虎符充國信使。禮部侍郎殷弘。給金符充國信副使。持國書使日本。書曰。大蒙古國皇帝奉書日本國王。朕惟。自古小國之君。境土相接。尙務講信修睦。況我祖宗受天明命。奄有區夏。遐方異域。畏威懷德者不可悉數。朕卽位之初。以高麗無辜之民久瘁鋒鏑。卽令罷兵還其疆域。反其旄倪。高麗君臣感戴來朝。義雖君臣。歡若父子。計王之君臣亦已知之。高麗朕之東藩也。日本密邇高麗。開國以來。亦時通中國。至於朕躬而無一乘之使以通和好。尙恐王國知之未審。故特遣使持書布告朕志。冀自今以往。通問結好。以相親睦。且聖人以四海爲家。不相通好。豈一家之理哉。以至用兵夫孰所好。王其圖之。黑的等道由高麗。高麗國王王禃。以帝

〔王禃〕高麗王二十四世元宗を云ふ、元宗は高宗の子にして、我が紀元千九百二十年より二十四年頃迄世を治せり。

〔太宰府守護所〕鎮西九國奉行所也、文治元年天野遠景を鎮西九國奉行人と稱して豐後に留め平氏の餘族に備ふ、建久二年鎮西奉行と改め、武藤資頼を鎮西守護とし太宰少貳に任ず、これより太宰府衰へたり、奉行は建治四年九州探題を置くに至りて廢されたり。

命遣其樞密院宋君斐借禮部侍郎金贇等導詔使黒的等往日本。不至而還。四年六月。帝謂王禃以辭爲解。令去使徒還。復遣黒的等至高麗諭禃。委以日本事。以必得其要領爲期。禃以爲。海道險阻。不可辱天使。九月遣其起居舍人潘阜等。持書往日本。留六月。亦不得其要領而歸。五年九月。命黒的弘。復持書。往至對馬島。日本人拒而不納。執其塔二郎彌二郎二人而還。六年六月。命高麗金有成送還執者。俾中書省牒其國。亦不報。有成留其太宰府守護所者久之。十二月又命秘書監趙良弼往使。書曰。蓋聞王者無外。高麗與朕既爲一家。王國實爲鄰境。故嘗馳信使修好。爲疆場之吏抑而弗通。所獲二人。敕有司慰撫。俾賫牒以還。遂復寂無所聞。繼欲通問。屬高麗權臣林衍構亂坐是弗果。豈王亦因此輟不遣使。或已遣而中路梗塞。皆不可知。不然。日本素號知禮之國。王之君臣。寧肯漫爲弗思之事乎。近已滅林衍。復舊王位。安集其民。特命少中大夫秘書監趙良弼充國信使。持書以往。如卽發使與之偕來。親仁善鄰國之美事。其或猶豫以至用兵。夫誰所樂爲也。王其審圖之。良弼將往。乞定與其王相見之儀。廷議。與其國上下之分未定。無禮數可言。帝從之。七年十二月。詔諭高麗王禃。送國信使趙良弼。通好日本。期於必達。仍以忽林失。王國昌。洪茶丘。將兵送抵海上。比國信使還。姑令金州等處屯駐。八年六月。日本通事曹介升等上言。高麗迂路導引國使。外有捷徑。倘得便風。半日可到。若使臣去。則不敢同往。若大軍進征。則願爲鄉導。帝曰。如此則當思之。九月高麗王禃。遣其通事別將徐稱。導送良弼。使日本。日本始遣彌四郎者。入朝。帝宴勞遣之。九年二月。樞密院臣言。奉使日本趙良弼。遣書狀官張鐸來言。去歲九月。與日本國人彌四郎等至太宰府西守護

所守者云。鑾爲高麗所紿。屢言。上國來伐。豈期皇帝好生惡殺。先遣行人。下示璽書。然王京去此尙遠。願先遣人從奉使回報。良弼乃遣譯同其使二十六人。至京師求見帝。疑其國主使之來。云守護所者詐也。詔翰林承旨和禮霍孫。以問姚樞許衡等。皆對曰。誠如聖算。彼懼我加兵。故發此輩伺吾强弱耳。宜示之寬仁。且不宜聽其入見。從之。是月高麗王禃。致書日本。五月又以書往。令必通好大朝。皆不報。十年六月。趙良弼復使日本。至太宰府而還。十一年三月。命鳳州經略使忻都高麗軍民總管洪茶丘。以千料舟。拔都魯輕疾舟。汲水小舟。各三百。共九百艘。載士卒一萬五千。期以七月征日本。冬十月入其國敗之。而官軍不整。又矢盡。惟虜掠四境而歸。十二年二月。遣禮部侍郎杜世忠兵部侍郎何文著計議官撒都魯丁往使。復致書。亦不報。十四年。日本遣商人。持金來易銅錢。許之。十七年二月。日本殺國使杜世忠等。征東元帥忻都。洪茶丘。請自率兵往討。廷議姑少緩之。五月召范文虎。議征日本。八月詔募征日本士卒。十八年正月。命日本行省右丞相阿剌罕。右丞范文虎。及忻都洪茶丘等。率十萬人征日本。二月諸將陛辭。帝敕曰。始因彼國使來。故朝廷亦遣使往。彼遂留我使不還。故使卿輩爲此行。朕聞漢人言。取人家國。欲得百姓土地。若盡殺百姓。徒得地何用。又有一事。朕實憂之。恐卿輩不和耳。假若彼國人至。與卿輩有所議。當同心協謀如出一口答之。五月日本行省參議裴國佐等言。本省右丞相阿剌罕、范右丞。李左丞。先與忻都茶丘入朝。時同院官議定。領舟師至高麗金州。與忻都茶丘軍會。然後入征日本。又爲風水不便。再議定會於一岐島。今年三月。有日本船爲風水漂至者。令其水工畫地圖。因見近太宰府。西有平戶島者。周圍皆水。可屯軍船。

〔忻都〕元朝の將たり、君弼等と兵を構へて擒へらる。

〔洪茶〕本名は、俊哥、元の時遼陽行省右丞たり。

〔范文虎〕元朝の人呂文德の婿、始め宋に仕へ後元に歸服して中書左丞に進む、兵十萬に將として右丞相阿剌罕と共に我が國を寇して失敗す。

〔阿剌罕〕元朝の人札剌兒氏、或は孫都思氏に作る、父祖皆戰功あり、陣に死す、阿剌罕、萬戶を襲ふ、伯顏等と共に屢戰功あり、江東宣撫史を授けられ尋で行省左丞相に拜せられ、諸道の兵四十萬を統べて日本を征す、行きて慶元に次し軍中に卒す

〔平戸島〕肥前國にあり、和漢三才圖會に「平戸、唐書爲飛蘭島云々、北爲壹岐長崎、三十五里、西至宇久島、海上七里餘」とあり。

〔徹里帖木兒〕元朝阿魯溫氏、監察御史に叙せらる、時に鐵木迭兒右丞相を以て擅に人を生殺す、敢て忤ふ者なし、徹里帖木兒獨り抗言して其奸を詆る、至元中累遷して中書平章政事に拜せらる、奏して科擧を罷む、後ち伯顏其己に忤ふを惡みて南安に貶す、竟に貶所に卒す。

〔拔都〕太祖の太子朮赤の子也。

此島非其所防。若徑往據此島、使人乘船往一岐。呼忻都茶丘來會進討爲利。帝曰。此間不悉彼中事宜。阿刺罕輩必知。令其自處之。六月阿刺罕以病不能行。命阿塔海代總軍事。八月諸將未見敵。喪全師以還。乃言。至日本欲攻太宰府。暴風破舟。猶欲議戰。萬戶厲德彪。招討王國佐。水手總管陸文政等。不聽節制。輒逃去。本省載餘軍至合浦。散遣還鄉里。未幾敗卒于閶脫歸言。官軍六月入海。七月至平壺島。移五龍山。八月一日風破舟。五日。文虎等諸將。各自擇堅好船乘之。棄士卒十餘萬于山下。衆議推張百戶者爲主帥。號之曰張總管。聽其約束。方伐木作舟欲還。七日日本人來戰。盡死。餘二三萬爲其虜去。九日至八角島。盡殺蒙古高麗漢人。謂新附軍爲唐人。不殺而奴之。閶輩是也。蓋行省官議事不相下。故皆棄軍歸。久之莫靑與吳萬五者亦逃還。十萬之衆得還者三人耳。二十年。命阿塔海爲日本省丞相。與徹里帖木兒右丞劉二拔都兒左丞。募兵造舟。欲復征日本。淮西宣慰使昂吉兒上言。民勞乞寢兵。二十一年又以其俗尙佛。遣王積翁與補陀僧如智往使。舟中有不願行者。共謀殺積翁。不果至。二十三年帝曰。日本未嘗相侵。今交趾犯邊。宜置日本專事交趾。成宗大德二年。江浙平章政事也速答兒乞用兵日本。帝曰。今非其時。朕徐思之。三年遣僧寧一山者。加妙慈弘濟大師。附商舶往使。日本人竟不至。

今按。元世祖之至元一年當日本龜山天皇文永元年。四年六月云々。遣其起居舍人潘阜等。持書往日本。證之我帝王編年集成云。文永五年二月七日。高麗牒狀至。常磐井大相國藤實氏。進之于太上天皇。廿五日依蒙古事。立臨時二十二社奉幣使。以祈攘不祥。三月廿七日。有仗議。其塔二郎彌

二郎二人事不詳。九月高麗王禃遣其通事別將徐稱、導良弼使日本。帝王編年集成曰。文永六年三月七日。自九國報六波羅曰。蒙古國使人二人。高麗使人四人、傔人七十餘人。至對馬。時陸奥守平時茂。式部大夫平時輔。居京六波羅北南。武斷關西事。日本始遣弼四郎。下文曰、去歳九月與日本國人彌四郎等至太宰府西守護所、觀此則四郎同人也、弼彌二字不知何是、愚謂。弼字爲是。太宰府官人有大弼少弼、弼四郎者弼官第四之子乎。此不可知也。冬十月入其國敗之。而官軍不整。又矢盡。文永十一年十月五日（或三日）申刻、蒙古賊船至于對馬淺茅浦。酉刻著國府地頭所。宗右馬允助國。率八十餘騎發向。翼日卯刻差通事眞繼男問之、放箭交鋒。蒙古軍千人。皆下與戰。騎馬者四人。宗馬次郎及彌次郎射殪之、助國亦戰死。馬次郎養子彌太郎同八郎刑部丞及僕三郎兵衛次郎庄太郎、流人肥後國江井藤三等十二人。各鬪死。蒙古放火淺茅浦。小太郎等馳報博多。太宰府告急于六波羅。時武藏守平時村。左近大夫將監平時國。居六波羅北南。十四日申刻、蒙古來于壹岐、四百人下舟、建赤幟拜東。守護代平內左衛門尉經高。幷御家人百餘騎射之、蒙古亦射如雨、守護代士卒多死。明日經高自殺。經高僕宗三郎馳報博多。壹岐對馬殘破甚、水陸諸路兵大至。少貳大友臼杵戸次松浦菊池原田小玉黨合十萬餘騎。以逐蒙古。十一月廿日。挑戰。山田次郎重基宅磨別當太郎賴秀以二百三十騎突入蒙古軍。大戰死之。松浦少貳原田敗績。少貳子三郎左衛門景資及平四郎斬蒙古渠魁。於是敵軍不整。景資等亦於志賀島得賊船一艘、而諸軍入城固守。廿一日蒙古乃退。會夜大風雨。蒙古高麗賊船觸巖崖多敗。神之所罰也。日本殺國使杜世忠等。編年集成曰。後宇

〔六波羅〕こゝには六波羅探題を云へり、鎌倉時代の職制にて、南北二職あり、京都及び近畿關西諸國の政務並に軍務を司らしむ。

〔平時村〕北條時村也、義時の子時房の子也。

〔平時國〕北條時房三世の孫也。

〔小貳子云々〕小貳は藤原資能を云ふ、即ち景資は資能の子也。

〔惟康親王〕第八十八代後嵯峨天皇の皇長子宗尊親王の王子也。
〔水城〕堤防を築き其内に水を貯へ敵を防ぐの用に供せし所を云ふ、天智紀三年に「是歲於筑紫築大堤貯水名曰水城」とあるを初見とす。
〔平實政〕北條義時の子、金澤實泰、實泰の子實時、實時の子卽ち實政也
〔河野六郎通有〕彌九郎藏人と稱す、弘安記に五郎、系圖に六郎、日蓮注書贊に通高に作る上野介通繼の男、驍勇を以て尤も著はる、對馬守に任ぜられ、蒙古襲來の勤功により、肥前神崎庄、肥後山崎庄等を賜はる。

多天皇建治元年正月十八日。蒙古人二人。高麗人一人。明州人一人。已上四人。自鎭西遣關東。不入洛中。自山崎東經岡屋醍醐。七月廿一日。自鎭西亦送蒙古人于關東。路次依前。九月六日。以征夷大將軍惟康親王執權相模守平時宗之命。於鎌倉龍口斬蒙古使等九人。平戶島在肥前國。官軍六月入海云云。平壺亦平戶也。戶壺音通。平戶此曰比羅度。三才圖會作飛蘭島。五龍山鷹島也。在筑前國。託宣集曰。金海拾芥曰。見海卽是。明太祖曰。元之艨艟漂於蛇海。亦指此地。謂蛇海者訛少。謂五龍山者大訛。蓋五广。龍鷹。山島之誤也。八月一日。破舟云々。我舊記倶言閏七月朔日。八角島博多也。音相近。登壇必究。武備志作花旭塔。音訛。博多津亦在筑前國。後宇多天皇弘安四年六月。高麗賊船五百艘。至壹岐對馬殺人。島民隱山。賊聞兒啼探刺殺之。其惡無狀。然後高麗船寄宗像沖。蒙古賊船至壹岐。已而著筥崎前殘島志加島。東國通鑑曰。世界村大明浦。是也。世界。與志加音近。高麗船。自宗像沖近蒙古船。島民告博多。時關東秋田城次郎等大軍。及九國二島兵。悉集于水城。昔天智天皇。於筑紫築大堤貯水。名曰水城。今及蒙古禍起。北條氏更脩水城。數十里間。以大石築之。高一丈餘。平坦。乘馬直下賊船。又多々良濱壁亂椽。據億丈之城置兵數十萬。以前上總介平實政爲探題。時草野次郎密乘船一艘。向志賀島。斬賊二十一人。賊船舳艫千里。以鏁連之。日本人近則發弩射之。或曰放鳥銃。伊豫國住人。河野六郎通有。以帆檣爲橋。入蒙古船。冒矢石。左肩被創。斬獲甚多。大友散位藏人。率三十餘騎。斬首若干。城次郎僕。新左近十郎。今井次郎。財部九郎。大戰死之。自六日其上至十三日。水戰不止。而賊不能上岸。據于鷹島。舊門山記曰。山影浮于海。賊疑。危石在渡口。懼不能上岸。値斯危難。西

國不輸羅。民有菜色。京鎌倉恟恟。二十日天皇行幸神祇官。祈請胡塵。及詔諸社禱之。於是諸社甚多靈應。豈非精誠能感通。聞旦負仗神力以誅賊。七月晦日。夜半西北風。閏七月朔日。大風震雷。青龍出首。硫黄滿海。賊船三千五百艘。俄漂蕩。或破。或上磯。或流。士卒溺死。屍隨潮汐入浦。浦爲之塞。可踐而行。或海中積尸。望之如島。敗卒在鷹島。修破船欲遁。三郎左衛門尉景資。率勞擊之賊不知歸路。以相剪屠。或沒海。或降而盡殺之。九日九國驛馬告捷。自文永以來。鬼方犯邊十有餘年。於是一時蕩攘群兇。今津高麗寺鑿深坑。瘞蒙古高麗屍。三年遣僧寧一山者。元成宗大德三年。當日本後伏見天皇正安元年。釋一寧號一山。初元國樓船偵我西鄙。神靈戮力。風波破蕩。元主秦心不止。奇謀百計。以我鄉浮居。諭寧往使。寧道不得已。駕舶著太宰府。副元帥北條貞時。激怒謫伊豆國。或稱寧道譽。貞時素重禪法。此冬延主巨福寺。天子亦敬之。終止于日本遷化。文保元年十月。勅特進前御史大夫源有房祭之。其文略曰。不留幻質。隕此偉人。若亡良弼。思慕罔極。見林羅山藤原經長記。曰。正安三年十二月十日。異國賊船。來于薩摩國子甑島者一艘。凡海上船可二三百艘。此寧一山後事而元史不見。蓋世祖困於我。二十三年罷征日本。遂死後也。成宗繼立。圖遣使一山。而一山不歸。故浮巨艦。候我動靜。我亦固守備守禦。後二條天皇乾元二年閏四月十七日。令鎭西人築博多前濱石垣。及置兵船于瀨海要害之畔。以備異賊。

又卷六本紀第六世祖三

至元二年八月丁卯。以兵部侍郞黑的禮部侍郞殷弘使日本。賜書曰。皇帝奉書日本國王。朕惟云々。

〔成宗〕世祖の子眞金、眞金の子成宗也、祖父世祖に次いで元二世となる、我が伏見天皇永仁三年より後二條天皇德治二年の間の頃世を治む。

〔北條貞時〕時宗の子、後、執權七代となる。

〔源有房〕通光の孫也、元應元年六月内大臣となり、同年七月薨ず、六條内大臣と號す。

〔一山〕僧也、又一寧と云ふ、宋の台州胡氏の子也、正安元年、元主に命ぜられて我國に使し、貞時の爲に伊豆に流され、後巨福寺の席を主らしむ、次いで圓覺淨智の諸寺に移れり

〔五年〕龜山天皇の文永五年に當る、この年二月、蒙古の使者來る、三月時宗執權職に任ず

〔七年〕文永七年に當る、この年蒙古僧子曇來る。

〔八年〕文永八年に當る、九月高麗、蒙古の來寇を告ぐ西陲に勅して警備す、十月蒙古使者趙良弼來る、十二月蒙古の難を大廟に告ぐ、又蒙古にてはこの年十一月國號を元と改む。

王其國之。又詔高麗。導去使至其國。

四年六月乙酉。黑的殷弘以高麗使者宋君斐金贊不能導達至日本來奏。降詔責高麗王王禃。仍令其遣官。至彼宣布。以必得要領為期。

五年七月丙子。高麗國王王禃遣其臣崔東秀來言。備兵一萬。造船千隻。詔遣都統領脫朶兒往閱之。就相視黑山日本道路。仍命耽羅別造船百艘。以俟調用。

九月巳丑。立河南屯田。命兵部侍郎黑的禮部侍郎殷弘。齎國書。復使日本。仍詔高麗國。遣人導送。期於必達。毋致如前稽阻。

又卷七本紀第七世祖四

七年二月丙申朔。命陝西等路宣撫使趙良弼為祕書監。充國信使使日本。

八年二月庚寅朔。奉使日本趙良弼。遣書狀官張鐸。同日本二十六人。至京師求見。

今按。元史日本傳曰。九年二月。奉使日本趙良弼遣書狀官張鐸來言。世祖本紀曰。八年二月。趙良弼張鐸至京師。自相矛盾。據我藤原經長記八年說為是。具于列傳今按。

三月乙丑。諭旨中書省。日本使人速議遣還。安童言。良弼請。移金州戍兵。勿使日本妄生疑懼。臣等以為。金州戍兵彼國所知。若復移戍恐非所宜。但開諭來使。此戍乃為耽羅暫設。爾等不須疑畏也。帝稱善。

又卷第八世祖五

十年六月戊申。使日本趙良弼。至太宰府而還。具以日本君臣爵號州郡名數風俗土宜來上。

九月甲申。襄陽生券軍至大都。詔伯顏諭之。釋其械繫免死罪。聽自立部伍俾征日本。仍敕樞密院。具鎧使人各賜鈔。

十一年三月庚寅。敕鳳州經略使忻都高麗軍民總管洪茶丘等。將屯田軍及女直軍幷水軍。合萬五千人。戰船大小合九百艘。征日本。

十二年二月庚戌。遣禮部侍郎杜世忠兵部郎中何文著。賚書使日本國。〇丙辰賞征東元帥府日本戰功錦絹弓矢鞍勒。

又卷第十世祖七

十五年十一月丁未。詔諭沿海官司。通日本國人市舶。

十六年二月甲申。以征日本。敕揚州湖南贛州泉州四省。造戰船六百艘。〇六月壬午。敕造戰船征日本。以高麗材用所出。卽其地製之。令高麗王議其便以聞。〇秋七月壬戌。造征日本及交趾戰船。〇八月戊子范文虎言。臣奉詔征討日本。比遣周福欒忠與日本僧。賚詔往諭其國。期以來年四月還報。待其從否。始宜進兵。又請簡閱舊戰船以充用。皆從之。

又卷第十一世祖八

十七年二月己丑。日本國殺國使杜世忠等。征東元帥忻都洪茶丘請自率兵往討。廷議姑少緩之。〇六月壬辰。召范文虎議征日本。〇秋七月戊辰。詔括前願從軍者及張世傑潰軍。使征日本。命范文

〔十年〕我が文永十年に當る、この年三月元使趙良弼復太宰府に至る。

〔十一年〕我が文永十一年に當る、十月元兵對馬壹岐に寇し、宗助國、平景隆戰死す。

〔十二年〕後宇多天皇の建治元年に當る、四月元使杜世忠等至る、九月時宗元使を斬る、十一月北條實政筑紫探題となる、元にては、この正月范文等降伏す、二月文天祥勤王の兵を起す。

〔十五年〕後宇多天皇の弘安元年に當る。

〔十六年〕時宗又元將夏貴等の使周禪等を斬る、八月元僧祖元等來る、十月筑紫に兵を送る

〔高麗王王賰〕二十五世忠烈王也、元宗の子にして、我が紀元千九百三十五年より六十八年に至る間世を治す卽ち後宇多、伏見、後伏見、後三條の四朝に亙る。

〔虎符〕虎は威猛の獸也、兵符に之を圖せり、故に虎符と云ふ、史記信陵君傳に「得虎符奪晉鄙軍」と、又、同書孝文紀に「初與郡國守相爲銅虎符、竹使符」とあり。

〔巨濟島〕朝鮮慶尙南道にあり。

虎等。招集避罪附宋蒙古囘々等軍。○八月戊子。以前所括願從軍者爲軍。付茶忽領之征日本。○戊戌。高麗王王賰來朝。且言。將益兵三萬征日本。○冬十月甲戌。遣使。括開元等路軍三千征日本。○戊寅發兵十萬。命范文虎將之。賜右丞洪茶丘所將征日本新附軍鈔及甲。○十二月辛未。高麗王王賰領兵萬人。水手萬五千人。戰船九百艘。粮一十萬石。出征日本。給右丞洪茶丘等戰具高麗國鎧甲戰襖。諭諸道。征日本兵。取道高麗。毋擾其民。以高麗中贊金方慶。爲征日本都元帥密直司副使。朴球金周鼎爲管高麗國征日本軍萬戶。並賜虎符。○癸酉以高麗國王王賰爲中書右丞相。○甲戌復授征日本軍官元佩虎符。十八年春正月戊戌朔。命忻都洪茶丘軍陸行抵日本。兵甲則舟運之所過。州縣給其糧食。用范文虎言。益以漢軍萬人。文虎又請馬二千。給禿失忽思軍及囘囘砲。帝曰戰舡安用此。皆不從。○壬子高麗王王賰遣使言。日本犯其邊境。乞兵追之。詔以戍金州隘口軍五百付之。○癸亥賜征日本諸軍鈔。○二月戊辰。發侍衞軍四千。完正殿賜征日本善射軍及高麗火長水軍鈔四千錠。○乙亥詔諭范文虎等。以征日本之意。仍申嚴軍律。○丙戌征日本國軍。啓行。給征日本軍衣甲弓矢。○夏四月戊子。賜征日本河西軍等鈔。○六月壬午。日本行省臣。遣使來言。大軍駐巨濟島。至對馬島獲島人言。太宰府西六十里。舊有戍軍。已調出戰。宜乘虛擣之。詔曰。軍事卿等當自權衡之。○庚寅以阿刺罕有疾。詔阿塔海統率軍。往征日本。○八月壬辰詔征日本軍囘。所在官爲給糧。忻都洪茶丘。范文虎。李庭金。金方慶諸軍船。爲風濤所激。大失利。餘軍囘至高麗境。十存一二。○冬十月壬寅。賜征日本將校衣裘幣帛靴帽等物。有差。○辛酉給征日本囘侍衞新附軍冬

衣。○十一月己巳。高麗國金州等處。置鎭邊萬戸府以控制日本。○高麗國王請充濱海城防日本。不允。○丁丑敕征日本回軍。後至者分戍沿海。○十二月巳亥。罷日本行中書省。

又卷十二世祖九

十九年秋七月壬戌。高麗國王請。自造船一百五十艘助征日本。○九月戊寅。給新附軍賈祐衣糧。祐言。爲日本國焦元帥壻。知江南造船。遣其來候動靜軍馬壓境。願先降附。

今按。賈祐不詳何人。焦元帥亦亡是。其意蓋指北條。焦字似條字。時北條爲副元帥。僧斷江見元伐木造戰艦。嘆詩曰。萬木森森截盡時。青山無處不傷悲。斧斤若到耶溪上。留取箇長松啼子規。出眞和集。恐爲此時作。

十一月甲戌。中書省臣言。天下重囚。除謀反大逆殺祖父母父母。妻殺夫。奴殺主。因姦殺夫。並正典刑。外餘犯死罪者。令充日本占城緬國軍從之。

二十年春正月乙丑。預備征日本軍糧。令高麗國備二十萬石。以阿塔海依舊爲征東行中書省丞相。○丙寅發五衞軍二萬人征日本。○壬申蒙古軍。習舟師者二千人。探馬赤萬人。習水戰者五百人。征日本。○二月甲寅。賜日本軍官八忽帶及軍士銀鈔有差。○三月丁巳。罷女直造日本出征船。○己未御史臺臣言。平灤造船。五臺山造寺伐木。及南城建新寺。凡役四萬人。乞罷之。詔伐木建寺卽罷。造船一事。其與省臣議。前後衞軍自願征日本者。命選留五衞漢軍千餘其新附軍令悉行。○乙丑命元奴忽魯帶。往揚州錄囚。遣江北重囚謫征日本。○夏四月丙戌。以侍衞親軍二萬人。助征

〔謀反〕君にそむくを云ふ、史記高祖紀に「楚王信謀反」とあり。

〔丞相〕宰相なり、丞は佐にて、相は助くる也、即ち君主の意を承け、之れを助くる也、史記秦紀に「悼武王二年、初置丞相」とあり、又、漢書百官公卿表に、「丞相秦官、金印紫綬、掌丞天子助理萬機」とあり。

〔御史〕百官を糾彈するを掌る官名、唐百官志に「御史大夫一人、正二品、掌以刑法典章糾正百官罪惡」又た宋史職官志に「御史臺掌糾察官邪、肅正綱紀、大事則廷辯、小事則奏彈」とあり。

〔占城〕三才圖會に「占城則漢林邑也、其屬郡有賓童龍、賓陀陵、化州、安南、王舍城」とありて、和漢三才圖會に「占城、(チンパン、チエンチン)東距海、西雲南、北安南、南眞臘、東北廣東」とあり。

〔緬國〕緬甸國也、瀛環志略に、この國の王、及國境を緬王、緬界と云へり、又、國語に「緬然引領南望」等あり。

日本。○壬辰阿塔海求軍官習舟楫者同征日本。命元帥張林招討張瑄總管朱淸等行。以高麗王就領行省。規畫日本事宜。○乙巳命樞密院集軍官。議征日本事宜。程鵬飛請明賞罰。有功者軍前給憑驗。候班師日改授。從之。○發大都所造回回砲及其匠張林等。付征東行省。

今按。回回砲列傳第九十云亦思馬因回回氏。西域旭烈人也。善造砲。太平記曰。元犯我。其攻具有鐵炮。卽是。

○辛亥以征日本。給後衞軍衣甲及大名衞輝新附軍鈔。○己未免五衞軍征日本。○甲子徙揚州淘金夫赴益都。立征東行中書省。以高麗國王與阿塔海共事。給高麗國征日本軍衣甲。御史中丞崔或言。江南盜賊相繼而起。皆緣拘水手造海船民不聊生。日本之役。宜姑止之。江南四省。應辦軍需。宜量民力。勿强以土產所無。凡給物價及民者。必以實召募手水。當從所欲。伺民之氣稍蘇我之力粗備。三二年復東征未晚。不從。○甲戌發征日本重囚。往占城緬國等處從征。○六月戊子以征日本民間騷動。盜賊竊發。忽都帖木兒忙古帶乞益兵禦寇。詔以興國江州軍付之。○秋七月丙辰。諭阿塔海所造征日本船。宜少緩之。所拘商船。其悉給還。○八月丁未浙西道宣慰使史弼言。頃以征日本船五百艘。科諸民間。民病之。宜取阿八赤所有船。修理以付阿塔海。庶寬民力。幷給鈔於沿海募水手。從之。○九月壬戌。調黎兵同征日本。○冬十月庚寅。給征日本新附軍鈔三萬錠。○十二月辛卯以茶忽所管軍六千人。備征日本。

又卷第十三世祖十

二十一年春正月甲戌。遣王積翁。齎詔使日本。賜錦衣玉環鞍轡。積翁由慶元航海。至日本近境。爲舟人所害。○二月辛巳。罷高麗造征日本船。○閏五月癸巳。江南諸行省造征日本船。隱弊詔按察司毋得沮撓。○冬十月甲戌。詔諭行中書省。凡征日本船。及長年篙手。並官給鈔。增價募之。

二十二年夏四月丙午。以征日本船運糧江淮。及教軍水戰。○辛酉以琉羅所造征日本船百艘。賜高麗。○六月庚戌。命女直水達達。造船二百艘。及造征日本迎風船。○冬十月癸丑。立征東行省。以阿塔海爲左丞相。劉國傑陳巖並左丞洪茶丘右丞征日本。○丁卯勅。樞密院計膠萊諸處漕船。高麗江南諸處所造海船。括備江淮民船備征日本。仍勅。習泛海者募水工。至千人者爲千戶。百人爲百戶。○十一月戊寅。遣使告高麗發兵萬人船六百五十艘。助征日本。仍令於近地多造船。○癸巳。勅漕江淮米百萬石。泛海貯於高麗之合浦。仍令東京及高麗各貯米十萬石。備征日本諸軍。期於明年三月以次而發八月會於合浦。○丙申赦因徒黥其面。及招宋時販私鹽軍。習海道者爲水工。以征日本。○十二月以古城遁還忽都虎劉九田二復舊職。從征日本。增阿塔海征日本戰士萬人回回砲手五十人。○己亥從樞密院請。嚴立軍籍條例。選壯士及有力家充軍。勅。樞密院向以征日本。故遣五衛軍。還家治裝。今悉選壯士。以正月一日到京師。江淮行省。以戰船千艘。習水戰江中。

又卷第十四世祖十一

二十三年春正月甲戌。帝以。日本孤遠島夷。重困民力。罷征日本。召阿八赤赴闕。仍散所顧民船。○九月壬辰。高麗遣使獻日本俘。○冬十月壬戌。高麗遣使來獻日本俘十六人。

〔江南〕爾雅に「江南曰揚州」と又、杜甫の詩に「今日江南老、他時渭北童」とあり。
〔中書省〕大政を掌る官署の名也、事物起原に「中書之官、雖起自漢武、而所治府、魏晉始有之、謂之中書省、通典曰、中書之官舊矣、謂之中書省、自魏晉始焉」とあり。
〔東京〕和漢三才圖會に「東京（トンキン）」と訓みて「交趾之都府也」とあり。
〔回回砲手〕回回砲を操縱する者也、回回は大なる貌、杜甫の有事於南郊賦に「地回回風浙々」とあるも此の意也、されば回回砲は大砲の意也

又卷第十五世祖十二

二十六年春正月戊申。遣參知政事張守智翰林直學士李天英使高麗。督助征日本糧。

卷第十七世祖十四

二十九年六月己巳。日本來互市。風壞三舟。惟一舟達慶元路。○冬十月。日本舟至四明求互市。舟中甲仗皆具。恐有異圖。詔立都元帥府令哈剌帶將之以防海道。

又卷第二十成宗三

大德三年癸巳。命妙慈弘濟大師江浙釋教總統補陀僧一山。齎詔使日本。詔曰。有司奏陳。向者世祖皇帝。嘗遣補陀禪僧如智及王積翁等。兩奉璽書。通好日本。咸以中途有阻而還。爰自朕臨御以來。綏懷諸國。薄海內外靡有遐遺。日本之好宜復通問。今如智已老。補陀寧一山。道行素高。可令往諭。附商船以行。庶可必達。朕特從其請。蓋欲成先帝遺意耳。至於悖好息民之事。王其審圖之。○五月庚子。復征東行中書省。

又卷第二十一成宗四

七年夏四月丙戌。置千戸所戍定海。以防歲至倭船。○冬十月戊戌。命省臺院官。詢高麗國相吳祈及千戸石天輔等。以祈離間王父子。天輔謀歸日本。皆笞之徙安西。

十年夏四月甲子。倭商有慶等。抵慶元貿易。以金鎧甲為獻。命江浙行省平章阿老瓦丁等備之。

又卷第三十泰定帝二

〔互市〕兩國互に賣買交易するを云ふ。後漢書烏桓傳に「置校尉于上寧城、開營府、幷領鮮卑、賞賜質子、歲時互市」とあり、又、晉書惠帝紀に「勢位之家、以貴陵物、忠賢路絕、讒邪得志、更相薦舉、天下謂之互市」とあり。

〔璽書〕文體明辯に「璽者、印也信也、古者尊卑共之、漢初有三璽、天之書用璽以封、故曰璽書」とあり。

〔泰定帝〕元朝十世晉帝を云ふ、我が九十六代後醍醐天皇の正中元年より嘉應二年頃まで世を治む。

（順帝）元朝十五世の帝にして、太祖五世の孫、元八世明帝の子也。

（至元二年）我が後醍醐天皇の建武元年に當る。

（至正十二年）至元七年改元して至正と稱す、其の十二年は、我が九十六代後村上天皇の正平七年に當れり。

（至治元年）元九世英宗の時の年號にして、我が後醍醐天皇の元亨元年に當れり。

三年秋七月戊午。遣日本僧瑞興等四十人還國。

又卷第三十九順帝二

至元二年二月戊子。詔以世祖所賜王積翁田八十頃還其子都中。初積翁奉詔諭日本。死於王事。甞受賜。後收入官。故復賜之。

又卷第四十二順帝五

至正十二年八月丁未。日本國白。高麗賊過海剽掠。身稱島居民。高麗國王伯顏帖木兒調兵剿捕之。賜金繫腰一鈔二千錠。

又卷第四十六順帝九

二十三年八月丁酉朔。倭人寇蓬州。守將劉暹擊敗之。自十八年以來。倭人連寇瀕海郡縣。至是海隅遂安。

又卷第九十二百官志七

征東等處行中書省。至元二十年。以征日本國。命高麗王置省典軍興之務。師還而罷。大德三年。復立行省。以中國之法治之。既而王言其非。便詔罷行省。從其國俗。至治元年復置。以高麗王兼領。丞相得自奏。選屬官治瀋陽。統有二府一司五道。

又卷第九十九兵志二　鎮戍

武宗至大二年七月。樞密院臣言。去年日本商船焚掠慶元。官軍不能敵。江浙省言。請以慶元台州沿海萬戶府新附軍。往陸路鎭守。以蘄縣宿州兩萬戶府陸路漢軍。移就沿海屯鎭。臣等議自世祖時。伯顏阿朮等。相地之勢制事之宜。然後安置軍馬。豈可輕動。前行省忙古䚟等亦言。以水陸軍互換遷調。世祖有訓。曰。忙古䚟得非狂醉而發此言。以水路之兵習陸路之伎。驅步騎之士而從風水之役。難成易敗。於事何補。今欲禦備姦宄。莫若　宜。於水路沿海萬戶府新附軍。三分取一。與陸路蘄縣萬戶府漢軍相參鎭守。從之。䚟四年十月以江浙省嘗言兩浙沿海瀕江隘口地接諸番。海寇出沒。兼收附江南之後。三十餘年。承平日久。將驕卒惰。帥領不得其人。軍馬安置不當。乞斟酌衝要。去處遷調鎭遏。樞密院官議。慶元與日本相接。且爲倭商焚毀。宜如所請。其餘遷調軍馬事。關機務。別議行之。

又卷一百二十二列傳第九

洗都鐵木祿。好讀書。與學士大夫遊。字之曰漢卿。平章政事程鵬飛建議征日本。奏漢卿爲征東省郎中。帝顧脫因納若曰。鵬飛南士也。猶知其能。姑聽之。候還朕自擇。任征東省罷。役。漢卿遷承中阿里海牙以。湖廣行省機密事重。舍漢卿無可用者。遣郎中岳洛也奴奏留。從之。

又卷一百二十三列傳第十

月里麻思傳。十八年以招討使。將兵征日本。死於敵。

艾貌傳。招手號新軍二千五百餘人。陞宣武將軍總管。賜虎符。有旨征日本也。

〔伯顏〕元朝の人、蒙古巴隣部より出づ、世々其の部の千戶たり、世祖至元十一年討宋軍の督たり、成祖の時太傅を加へ軍事の重事、江南三省を錄せしむ、歿後大德八年淮南王に加封し忠武と謚す。

〔阿朮〕元朝の人、兀良合台の子、沈毅にして勇略あり諸國を征伐して累功あり、世祖の時征南都元帥に拜す伯顏と共に宋軍を破る、後ち河南王に追封す。

〔阿里海牙〕元朝の畏吾兒の人、聰明にして膽略あり、世祖に仕へて僉河南行省事に拜す、卒して楚國公に追封し、武定と謚す

又卷一百二十九列傳第十六

阿剌罕傳。十八年召拜光祿大夫中書左丞相行中書省事。統蒙古軍四十萬征日本。行次慶元卒于軍中。

阿塔海傳。二十年遷征東行省丞相。征日本。遇風舟壞。喪師十七八。

又一百三十一列傳第十八

囊加歹傳。召爲都元帥管領通事軍馬。東征日本。未至而還。忙兀台傳。初宋降將五虎陳義。嘗助張弘範擒史天祥。助完者都討陳大擧。又資阿塔海征日本戰艦三千艘。福建省臣言。其有反側意。請除之帝使忙兀台察之。至是忙兀台攜義入朝。保其無事。且乞。寵以官爵。丞相伯顏亦以爲言。乃授義同知廣東道宣慰司事。授明珠虎符。其從林雄等十人並上百戶。

又一百三十二列傳第十九

昂吉兒傳。時兩淮兵革之餘。荆榛蔽野。昂吉兒請立屯田以給軍餉。帝從之。既而阿塔海言。屯田所用。人牛農具甚衆。今方有事日本。若復調發民兵。將不勝動搖矣。議遂寢。未幾宣慰使燕楠復以爲言。帝乃遣數千人。卽芍陂洪澤試之。果如昂吉兒所言。乃以二萬兵屯之。歲得米數十萬斛。日本不庭。帝命阿塔海等。領卒十萬征之。昂吉兒上疏。其略曰。臣聞。兵以氣爲主。而上下同欲者勝。比者連事外夷。三軍屢衂。不一以言氣。海內騷然。一遇調發。上下愁怨。非所謂同欲也。請罷兵息民。不從。既而師果無功。

〔阿塔海〕阿塔海とも書く、元朝遜都思の人、至元の初中書右丞に拜し、樞密院事を兼ぬ、伯顏に從ひて宋を伐つ、宋降るや、其の幼主母后を以て入覲す、功を以て行省左亟相に拜す、卒して順昌郡王に封じ、武敏と諡す。

〔囊加歹〕元朝乃蠻の人、世々其國の大臣たり、太祖、父麻察來歸し、世祖に從ひ宋を伐ちて功あり、囊加歹又幼より父に從ひて戰陣に習ひ、阿朮に從ひて軍功あり、仁宗の時同知樞密院事に任ぜられ、遂に浚都王に封ず。

〔鐵木兒塔識〕元朝の人、字は九齡、康里脫々の子也、初め國子生に補し順帝の時累進して中書平章政事に至る、帝諭して曰く爾の先人累朝に歷事して勞績あり、爾實に能く其家を世々にせよと、特に左丞相と爲す、塔識命を拜して紀綱を修飾し內外通調の法を立つ、上部に幸するに從ひ還つて政事堂に入る、甫めて一日暴かに卒す、年四十六、冀寧王に追封し文忠と謚す、生平學術正大、深く伊洛諸儒の書を讀む。

哈剌䚟傳。至元十六年日本商船四艘篙師二千餘人至慶元港口。哈剌歹謀知其無他。言于行省。與交易而遣之。十八年擢輔國上將軍都元帥。從國兵征日本。値颶風舟回。明年二月。還戍慶元。二十二年罷都元帥。改沿海上萬戶府達魯花赤。二十四年入朝。帝問日本事宜。哈剌歹應對甚悉。命還戍海道。授浙東宣慰使。賜金織文段玉束帶鞍勒弓矢。有差。

又一百三十三列傳第二十

也速䚟兒傳。至元十六年改金虎符管軍總管。江南平錄功。進懷遠大將軍。管軍萬戶領江淮戰艦數百艘。東征日本。全軍而還。有旨特賜養老一百戶。衣服弓矢鞍轡。有加。

今按。也速䚟兒爲懷遠大將軍管軍萬戶。太平記所謂萬將軍者是耶。云蒙古軍破。逋還者其將萬將軍而已。殆近全軍而還之意。然太平記至雍發事荒唐之言也。

又一百四十列傳第二十七

鐵木兒塔識傳。日本商百餘人。遇風漂入高麗。高麗掠其貨。表請沒入其人以爲奴。鐵木兒塔識持不可。曰天子一視同仁。豈宜乘人之險以爲利。宜資其還。已而日本果上表稱謝。俄有日本僧告。其國遣人刺探國事者。鐵木兒塔識曰。刺探在敵國固有之。今六合一家。何以刺探爲。設果有之。正可令觀中國之盛歸告其王使知嚮化。

今按。鐵木兒塔識。還日本風漂人。亦不禁刺探。於是可觀其而資稟宏偉學術正大也。

又一百四十五列傳第三十二

月魯不花傳。俄改山南道廉訪使。浮海北而往。道阻還抵鐵山。遇倭賊。舡甚衆。乃挾同舟人。力戰拒之。倭賊給言。投降。弗納。於是賊卽登舟。擭月魯不花。令拜伏。月魯不花罵曰。吾朝廷重臣。寧爲賊拜邪。遂遇害。當遇害時。庵家奴那海。刺殺首賊。次子樞密院判官老安姪百家奴。扞敵亦死之。同舟死事者八十餘人。事聞朝廷。贈攄忠宣武正憲徇義功臣銀青榮祿大夫遼陽等處行中書省平章政事上柱國。謚忠肅。

又一百五十四列傳第四十一

俊奇傳。十一年又命監造戰船。經營日本國事。八月授東征右副都元帥。與都元帥忽敦等領舟師二萬。渡海征日本。拔對馬一岐宜蠻等島。十七年授龍虎衞上將軍征東行省右丞。十八年與右丞欣都將舟師四萬。由高麗金州合浦以進。時右丞范文虎等將兵十萬。由慶元定海等處渡海。期至日本一岐平戸等島合兵登岸。兵未交。秋八月風壞舟而還。十九年十月。命茶丘於平灤黑堝兒監造戰船七百艘。以圖後擧。二十一年十一月。復授征東行省右丞。

今按。宜蠻訛也。不知指何地。亦思宜與飛音通。蠻恐轡之誤。宜（飛歟）轡島乃平戸之和訓。

又卷一百五十九列傳第四十六

趙良弼傳。至元七年以良弼爲經略使。領高麗屯田。良弼言。屯田不便。固辭。遂以良弼奉使日本。先是至元初。數遣使通日本。卒不得要領。於是良弼請行。帝憫其老不許。良弼固請。乃授秘書監以行。良弼奏。臣父兄四人。死事于金。乞命翰林臣文其碑。臣雖死絕域無憾矣。帝從其請。給兵三千

〔月魯不花〕元朝の人、字は彥明、山南道廉訪使に官す鐵山を過ぎり倭寇に遇ふ、之を擭みて拜伏せしむ、肯ぜず害せらる、遼陽行省平章を追贈し忠肅と謚す。

〔一岐〕壹岐島也、往昔西海道の一國にして、今長崎縣に屬し、壹岐、石田二郡に分る。

〔屯田〕兵を分ちて要害の處に屯し、事なき時は田を耕す也、事物起原に「西域傳曰、自武帝初通西域、置校尉屯田渠犂、又征和中、桑洪羊奏曰、可遣屯田卒、益種五穀張掖酒泉、然則屯田蓋起於漢武開西域之時也」とあり。

〔隋〕支那王朝の名
我が紀元千二百四十九年（崇峻天皇二年）より、千二百七十七年（推古天皇二十五年）に至る、三十年間を稱せり。

〔文帝〕高祖文皇帝と稱す、姓は楊、名は堅、弘農華の人、父忠魏及び周に事へて功を以て隋公に封ぜらる、堅之を嗣ぎ政を秉り遂に禪を受く、位に卽いて九年、陳を平げ國內を統一す、帝性節儉にして政事を勤む、受禪の初民戶四百萬に滿たず、末年八百萬に踰ゆ、帝疾あり、太子廣に弑せらる、在位二十四年、改元二度、開皇、仁壽是也。

以從。良弼辭。獨與書狀官二十四人。俱舟至金津島。其國人望見使舟。欲擧双來攻。良弼捨舟登岸喩旨。金津守延入板屋。以兵環之。滅燭大譟。良弼凝然自若。天明其國太宰府官。陳兵四山。問使者來狀。良弼數其不恭罪。仍喩以禮意。太宰官愧服求國書。良弼曰。必見汝國王。始授之。越數日復來求書。且曰。我國自太宰府以東。上古使臣未有至者。今大朝遣使至此。而不以國書見授。何以示信。良弼曰。隋文帝遣裴淸來。王郊迎成禮。唐太宗高宗時遣使。皆得見王。王何獨不見大朝使臣乎。復索書不已。詰難往復數四。至以兵脅良弼。良弼終不與。但頗錄本示之。後又聲言。大將軍以兵十萬來求書。良弼曰。不見汝國王。寧持我首去。書不可得也。日本知不可屈。遣使介十二人入覲。仍遣人。送良弼至對馬島。十年五月。良弼至自日本。入見。帝詢知其故曰。卿可謂不辱君命矣。後帝將討日本。三問。良弼言。臣居日本歲餘。覩其民俗、狼勇嗜殺。不知有父子之親。上下之禮。其地多山水。無耕桑之利。得其人不可役。得其地不加富。況舟師渡海。海風無期。禍害莫測、是謂以有用之民力。塡無窮之巨壑也。臣謂勿擊。便帝從之。

今按。金津島當作今津。藤原經長記曰。文永八年十月二十三日。蒙古船至今津。在太宰府西。可二三里。因此事東使入洛。向西園寺大納言實兼亭。實兼參太上天皇奏事。卽夜有議。關白藤基忠。花山院前右大臣通雅。內大臣藤師繼。權大納言公藤。吉田中納言經俊。帥中納言經任等參。初蒙古使者曰。入都當上國書。不然則不可放下。太宰少卿曰。蒙古不可參帝闕。惟欲見國書。數爲問答。於是使者寫國書與之。關東奏其書。其書意以。數雖通書而不報。來十一月以爲期。猶無答書則發兵船。

於是衆議。可報而終不報。元史太宰府趙良弼。往復事與此略同。又正應六年七月八日。宣命曰。天皇我詔旨度。掛畏岐伊勢乃度會乃五十鈴河上乃下都石根爾。大宮柱廣敷立氏。高天原爾千木高知氏。稱辭定奉留。天照坐須皇太神乃廣前爾。恐美恐美毛申賜止。申久。朕忝毛苗胤乎稟氏。謬氏神器乎守留。爰去年乃冬比與利。異國忽爾牒書乎送氏。強和合乎求牟若。逆命倍者可用兵之由乎告久。緈既爾文永與利起。今爾及倍里度云止毛。我朝未容其言須。誠爾安危乃間多難決久。理亂乃本毛叵辨志。邊將毛堅久防禦乎儲氏。鎭爾警衞乎致勢波。邦家能煩比無爾非須。旁太衆庶之患倍有利。是則朕加薄德乃令然。云云恰云是比。一歎一愼牟。帝從之非也。據日本傳良弼還。明年征日本。又十八年征日本。則不從良弼言也。惜乎世祖之窮兵黷武。爲無益事矣。

又卷一百六十列傳第四十七

王磐傳。帝將用兵日本。問以便宜。磐言。今方伐宋。當用吾全力。庶可一擧取之。若復分力東夷。恐曠日持久。功卒難成。俟宋滅徐圖之未晚也。又王盤傳。日本之役。師行有期。磐入諫曰。日本小夷。海道險遠。勝之則不武。不勝則損威。臣以爲勿伐。便帝震怒謂。非所宜言。且曰。此在吾國法。言者不赦。汝豈有他心而然耶。磐對曰。臣赤心爲國。故敢以言。苟有他心。何爲從叛亂之地。冒萬死而來歸乎。今臣年已八十。況無子嗣。他心欲何爲耶。明日帝遣侍臣。以溫言慰撫。使無憂懼。後閱內府珍玩。有碧玉寶枕。因出賜之。

今按。王磐之諫亦善。蒙古非無人也。世祖以溫言與寶枕者。姑息之愛也。終不納其言。土芥生靈。

〔高天原〕古代吾が祖先の住せしとなす理想國なり、廣廣たる天上（一）義也、古來より地上に此の地を推定せしもの多し、大和の高市郡、常陸の多珂郡等、海外にては朝鮮、吳國、南洋、小細亞地となすもの是也。

〔王磐〕元朝、廣平永年の人、金の亂を避け河內に寓す業を受くる者常に數百人、所居に題して鹿菴と曰ふ、終馬の意あり、李璮の叛に眞定順德路宣慰使に擢抒す、時に宋を伐つ、帷幄謀議多く決を取る、致して卒す、年九十二、洛國公に追封し文忠と謚す。

〔張禧〕元朝、東安州の人、性峭直、世祖の朝、新軍千戸を授けらる、樊城襄陽を攻むるに先鋒となりて戰功あり、日本を征するに從ふ、颶風に遇ひ他の戰艦悉く壞る、禧の所部獨り完し、京に至る、他將皆罪を獲、禧獨り免る。

〔管如德〕元朝、黃州黃陂の人、江西左丞に累遷す、廣東の鍾明亮叛く、四省の兵を統へて之を討たしむ、如德往き諭すに禍福を以てす、明亮卽ち降る、歿後平昌郡公を贈り、武襄と諡す。

不仁之甚也。

又一百六十二列傳第四十九

李庭傳。十七年拜驃騎衞上將軍中書左丞、東征日本。十八年軍次竹島、遇風船盡壞。庭抱壞船板、漂流抵岸下。收餘衆、由高麗還京師。士卒存者十一二。

又一百五十五列傳第五十二

張禧傳。十七年加鎭國上將軍、都元帥。時朝廷議征日本。禧請行。卽日拜行中書省平章政事。與右丞范文虎左丞李庭同率舟師泛海、東征至日本。禧卽捨舟、築壘平湖島約束。約束戰艦、各相去五十步止泊、以避風濤觸擊。八月颶風大作。文虎庭戰艦悉壞。禧所部獨完。文虎等議還。禧曰。士卒溺死者半。其脫死者皆壯士也。曷若乘其無回顧心、因糧於敵以進戰。文虎等不從曰。還朝問罪我輩當之。公不與也。禧乃分船與之。時平湖島屯兵四千乏舟。禧曰。我安忍棄之。遂悉棄舟中所有馬七十疋、以濟其還。至京師、文虎等皆獲罪。禧獨免。

管如德傳。十二年遷浙西宣慰使。上時政五條。一曰。立額薄征。二曰息兵懷遠。三曰立法用人。四曰省役恤民。五曰設官制祿。時法制未備。仕多冗員。又方用兵日本倭國、而軍民之官、廩祿未有定制。故如德言及之。權臣抑不得上。

綦公直傳。九年爲沂莒膠密寧海五州都城池所千戶。十年賜金符、命造征日本戰船于高麗。時宋未下。世祖知其勇、遣使召見。

又一百五十六列傳第五十三

王綧高麗王瞰之猶子也。子阿剌帖木兒。襲職授虎符。摠管高麗人戶。至元十一年進昭勇大將軍。從都元帥忽都征日本國。預有戰功。五年加鎭國上將軍安撫使高麗軍民總管。尋陞輔國上將軍東征左副都元帥。十八年復征日本。遇風濤遂沒于軍。

楚鼎傳。十八年東征日本。鼎率千餘人。從左丞范文虎渡海。大風忽至舟壞。鼎抉破舟板。漂流三晝夜。至一山會文虎船。因得達高麗之金州合浦海。屯駐。散兵亦漂泛來集。遂領之以歸。

又一百六十七列傳第五十四

王國昌傳。東夷皆內屬。惟日本不受正朔。帝知隋時曾與中國通。遣使諭以威德。令國昌率兵護送。道經高麗。時高麗有叛臣。據珍島城。帝因命國昌與經略使叩突吏樞等攻拔之。八年復遣使入日本。乃命國昌來於高麗之義安郡。以爲拔。

又一百六十八列傳第五十五

劉宣傳。宣上言曰。連年日本之役。百姓愁戚。官府搔擾。今春停罷。江浙軍民歡聲如雷。及再征日本。宣又上言。其略曰。近議復置征東行省。再興日本之師。此役不息。安危繫焉。唆都建伐占城。海牙言平交趾。二數年間。湖廣江西。供給船隻軍須粮運。官民大擾。廣東群盜並起。軍兵遠涉江海瘴毒之地。死傷過半。卽自連兵未解。且交趾與我接境。蕞爾小邦。遣親王提兵深入。未見報功。唆都爲賊所殺。自遺羞辱。況日本海洋萬里。疆土濶遠。非二國可比。今次出師。動衆履險。縱不遇風可到彼岸。倭

〔王國昌〕元朝、膠州高密の人、中統の初、帝廷見して軍旅の事を問ふ、奏對して旨に稱ふ、後ち高麗に往き風俗を視察す、海上千餘里、風濤洶湧、國昌神色自若たり至元八年、命を持して我國に來り、尋で高麗の義安郡に屯す、俄に軍歿す。

〔劉宣〕元朝の人、字は伯宣、其先は潞の人、金末に大原に徙る、至元中、東部尙書に超拜す上書して交趾及び日本を征する二役を諫む、後ち丞相の奸を發く、遂に誣ひられ逮へらる宣憤に勝へず自刎して死す、延祐の初、彭城郡公に追封し、忠憲と諡す。

〔申屠致遠〕元朝、東京壽張の人、字は大用、世祖に從ひ參賛する處多し成宗の時江北道の事を僉す、著す所忍齋集四十卷、釋奠通禮三卷、杜詩纂註十卷あり。

〔王克敬〕元朝、大寧の人、字は叔能、幼にして奇穎、好んで儒者の事を爲す、誠忠、歷官して至る所、皆政績あり、著す所、詩文奏議世に著はる、梁郡公に封ず、文肅と諡す。

國地廣。徒衆猥多。彼兵四集。我師無援。萬一不利。欲發救兵。其能飛渡耶。隋伐高麗。三次大擧數見敗。北喪師百萬。唐太宗以英武自負。親征高麗。雖取數城。而還徒貽追悔。且高麗平壤。諸城皆居陸地。去中原不遠。以二國之衆加之。尙不能克。況日本僻在海隅。與中國相懸萬里哉。帝嘉納其言。

又一百六十列傳第五十七

申屠致遠傳。時寇盜竊發。加之造征日本戰船。遠近騷然。致遠設施有方。衆賴以安。又言。占城日本不可涉海遠征。徒費中國銓選。限以南北。優苦不均。宜考其殿最。量地遠近。定爲立制。則銓衡平。而吏弊革。

又一百八十四列傳第七十一

王克敬傳。除江浙行省左右司都事。延祐四年往四明監倭人互市。先是往監者。懼外夷情叵測。必嚴兵自衛。如待大敵。克敬至悉去之。撫以恩意。皆帖然無敢譁。有吳人從軍征日本。陷於倭者。至是從至中國。訴於克敬。願還本鄉。或恐爲禍階。克敬曰。豈有軍士懷恩德來歸。而不之納耶。脫有釁吾當坐。事聞。朝廷嘉之。

又二百三列傳第九十

張康傳。帝欲征日本。命康以太一推之。康奏曰。南國甫定。民力未蘇。且今年太一無算。擧兵不利。從之。

〔兵部〕官職の名也事物紀原に「周禮夏官司馬之職也、魏有五兵尚書、晉宋爲七兵、後周始曰兵部」とあり、又宋史職官志に「兵部掌兵衞、儀仗、鹵簿、武事、民兵、廂軍、蕃軍、四夷、官封承襲之事、輿馬器械之政、天下地土之圖」とあり

〔禮部〕今式部官と云ふが如し、事物紀原に「唐虞、秩宗、周官宗伯、皆今禮部之任也、後周有禮部、不言職事、隋以與儀曹、其名命自宇文周始也」とあり。

〔起居舍人〕晉書に「起居郎曰左史、起居舍人曰右史、所書言動皆曰起居注」とあり。

又二百八外夷傳第九十五

高麗

至元三年十一月。立潘州以處高麗降民。帝欲通好日本。以高麗與日本鄰國。可爲鄉導。八月遣國信使兵部侍郎黑的禮部侍郎殷弘司議官伯德孝先等使日本。先至高麗諭旨。十二月禃遣其樞密院副使宋君斐。借禮部侍郎金贊等導詔使黑的殷弘等往日本。不至而還。四年正月。禃遣君斐等奉表。從黑的等入朝。六月帝以禃飾辭令去使徒還。復遣黑的與君斐等以詔諭。禃委以日本事。以必得其要領爲期。九月禃遣其起居舍人潘阜書狀官李挺。充國信使。持書詣日本。五年四月。禃遣其門下侍郎李藏用。奉表與也孫脫等入朝。五月帝敕藏用曰。往諭爾主。速以軍數實奏。將遣人督之。今出軍。爾等必疑。將出何地。或欲南宋。或欲日本。爾主當造舟一千艘能涉大海。可載四千石者。藏用曰。舟艦之事。卽當應命。但人民殘少。恐不及期。往者臣國有軍四萬。三十餘年間。死於兵疫。今止有牌子頭五十戶百戶千戶之類。虛名而無軍卒。帝曰。死者有之生者亦有之。藏用曰。賴聖德自徹兵以來。有生長者僅十歲耳。帝又曰。自爾來者言。海中之事。於宋得候風。可三日而至。日本則朝發而夕至。舟中載米。海中捕魚而食之。則豈不可行乎。又勅藏用曰。歸可以此言諭爾主。七月詔都統領脫朶兒武德將軍統領王國昌武略將軍副統領劉傑等。使其國。與其來朝者大將軍崔東秀偕行。八月至其國。禃出昇天府迎之。蓋諭以閱軍造船也。九月以禃表奏潘阜等奉使無功而還。復遣黑的等使日本。詔禃遣重臣導送。十二月禃遣其知門下省事申思佺禮部侍郎陳井起居舍人潘阜

等。從國信使黑的等赴日本。六年七月。帝遣明威將軍都統領脫朶兒武德將軍統領王國昌武略將軍副統領劉傑。相視耽羅等處道路。詔禃選官引達以人。言耽羅海道往南宋日本甚易故也。十一月樞密院臣議征高麗事。初馬亨以爲。高麗者本箕子所封之地。漢晋皆爲郡縣。今雖來朝。其心難測。莫若嚴兵假道。以取日本爲名。乘勢可襲其國。定爲郡縣。七年十一月。有詔諭。禃以其陪臣元傅等妄奏。頭輦哥國王爲頭行省官員數事。及其國私與南宋日本交通。又往年所言。括兵造船。至今未有成効。且謂自此以往。或先有事南宋。或先有事日本。兵馬船艦資糧早宜措置。是月又詔禃曰。嚮嘗遣信使。通問日本。不謂執迷固難以善言開諭。此卿所知。將經略於彼。敕有司發卒屯田。爲進取之計。庶免爾國他日轉輸之勞。仍遣使持書。先示招懷。卿其悉心盡慮。裨贊方略。期於有成。以稱朕意。十二月詔諭禃。送使通好日本曰。朕惟。日本自昔通好中國。實相密邇。故嘗詔。卿導達去使。講信脩睦。爲其疆吏所梗(フサク)。竟不獲明諭朕心。後以林衍之亂故不暇及。今既輯寧爾家。遣少中大夫秘書監趙良弼。充國信使。期於必達。仍以忽林赤王國昌洪茶丘。將兵送抵海上。比國信使還。姑令金州等處屯駐。所需糧餉。卿專委官。赴彼逐近供給。幷鳩集金州旁左船艦。於金州需待。無致稽緩匱乏。八年九月。禃遣其通事別將徐稱。導送宣撫趙良弼。使日本。九年二月。禃致書日本。使通好于朝。十一年三月。遣木速塔八撒木合。持詔使高麗僉軍五千六百人。助征日本。十五年一月。東征元帥府上言。以高麗侍中金方慶與其子愋愃恂婿趙下等。陰養死士四百人。匿鎧仗器械。造戰艦積糧餉。欲謀作亂。捕方慶等。按驗得實。已流諸海島。然高麗初附。民心未安。可發征日本還卒二千

〔耽羅〕一名耽牟羅と云ふ、東國通鑑に「耽羅在朝鮮南海中島也、百濟國周文王時始獻方物于百濟」とあり。
〔馬亨〕元朝、邢州南和の人、字は大用、貲を以て鄕里の雄たり、世祖藩邸に在りしとき辟して京兆榷課所長官と爲す、憲宗の朝に便宜六事を上る、帝大に賞嘆す、至元の初、尚書と爲り左部を領す、尋で阿合馬に誣ひられ官を免す。
〔箕子〕周朝の人、殷の紂王の親戚、武王の時、朝鮮に封ぜらる。
〔陪臣〕陪は重也、諸侯は天子の臣也故に諸侯の臣を云ふ。

〔崔彧〕元朝、弘州馬邑の人、字は文卿、才氣を負ひ、剛直にして敢言す、世祖之れ畏重す、成宗即位して職を辭す、帝曰く、卿若し辭せば誰か敢て抗言せむと、御史臺に居ること十年、正を守りて阿らず、奸人之を疾む、大德の初、平章政事を加へらる、大元の初、鄭國公に追封し忠肅と諡す。

〔月里麻思〕元朝の人、乃馬氏、太宗の朝、宋に往き和を議す、宋將之を脅かす、屈せずして罵る、乃ち之を囚ふること三十六年にして死す。

七百人。置長吏。屯忠清全羅諸處。鎭撫外夷。以安其民。復令士卒。備牛畜耒耜。爲來歲屯田之計。十八年十一月。金州等處置鎭邊萬戶府。以控制日本。十九年正月。畧以日本寇其邊海郡邑。燒居室掠子女而去。請發闍里帖木兒麾下蒙古軍五百人戍金州。又從之。二十年五月。立征東行中書省。以高麗國王與阿塔海共事。

今按。元世祖以獷胡種。奮三世之餘烈。并呑中國。囊括四海。乘勢欲取我神國。然惟此一事終世不能。徒非不能而已。沈溺十萬人。盜賊相繼而起。民不歹生。故終罷擊日本。於是天下後世。知我朝天險神威不可犯。日本豈不盛哉。彼擊我國。取道高麗。戰艦三千艘。兵四十萬。米百萬石。高麗兵船九百艘。軍一萬。梢工水手一萬五千。兵糧十二萬三千五百六十餘碩。擧此大兵。行此大事。深謀遠慮。孰容其議。而不能合兵登岸。可憐神風一陣破滅矣。其行軍用兵之際。爲使不達者。黑的殷弘等也。達者趙良弼也。見殺者 杜世忠等也。未至而還者囊加歹也。請討我國者忻都洪茶丘也。諫止討者崔彧昻吉兒趙良弼劉宜張康也。戰死者月里麻思王淳也。生還者阿塔海哈剌䚟范文虎李庭楚鼎也。還受賞者速解兒也。棄馬七十疋不棄四千兵者張禧也。惜身命棄十萬兵者范文虎也。後之中國人皆知元非。各有議。明太祖皇帝曰。若以人事較之。元長於騎射。短於舟楫。況當是時。日本非元仇讐。非隣邦之患害。而元好强尚兵。以天厭征伐。海風怒號。沈巨艦千艘。淪精兵於海底。如知天命。不可以兵禍而禍日本之良民也。誠哉。

居家必用事類戊集卷之十　水晶

倭國者上品。信州者次之。須要潔淨佮俐不薄不厚。素者尤佳。礙花者多藏粉墩。節病縈壘亦不堪。

亦有烏水晶。

新芳薩天錫雜詩妙選藁全集

天滿宮

無常說法現神通。千里飛梅一夜松。萬事夢醒雲吐月。觀音寺裡一聲鐘。

今按。天滿宮者右大臣菅原道眞公之廟也。公嘗在宇多醍醐之朝。以賢哲輔君。因藤原時平之讒左遷太宰權帥。其出京時。對所愛梅賦和歌曰。古知布加波禰保比於擧世與牟米乃波奈阿留辭那之登氏波婁那和須禮楚。梅飛生于謫所庭。甕而爲神。廟號天滿宮。天曆九年三月十一日。告人曰。我所住當生松千株。忽然一夜北野松生。故斯地亦祭之。都府樓太宰府也。觀音寺觀世音寺。在都府樓上。菅家後草。不出門詩曰。一從謫落就柴荊。萬死兢々跼蹐情。都府樓纔看瓦色。觀音寺只聽鐘聲。中懷好逐孤雲去。外物相逢滿月迎。此地雖身無撿繫。何爲寸步出門行。神之德充溢宇宙。故薩天錫知之。賦此詩。書史會要曰。大元薩都剌字天錫回紇人。發進士第。官至淮西廉訪司經歷。有詩名善楷書。

書史會要卷之八

南村處士陶宗儀九成著

外域

日本國於宋景德三年。嘗有僧入貢。不通華言善筆札。命以牘對。名寂照。號圓通大師。國中多習王

〔觀音寺〕觀世音寺也、筑前國筑紫郡水城村大字觀世音寺にあり、單に觀音寺とも、又、清水山普門院とも云ふ、天台宗也。

〔薩都剌字天錫〕元朝、白目の人、其祖父以來、雁門に居るを以て、雁門と號す、別に直齋と號す、泰定四年の進士、累遷して御史と爲る、權貴を彈劾するを以て鎭江錄事に左遷す、詩を嗜み書を善くす、晩年武林に寓居す、常に瓢を笠に挂け、芒蹻を踏み、深山幽谷に逍遙す、著に雁門集あり。

〔國王弟〕昭は寂昭にて大江定基出家後の號也、定基、圓融天皇の天元中父祖の功勞を以つて擢んで、藏人に補せられ後參河守となれり、さればここに國王とあるは圓融天皇を指し奉り、其の皇弟にして書を善くするもの、恐くは、具平親王を云ひしなるべし、親王は六十三代村上天皇の第七皇子にて、書の妙を以つて一世に冠たり、二品中務卿たるを以つて、後中書王と稱せり。

〔九卿〕周官にて、冢宰、司徒、宗伯、司馬、司寇、司空、小師、少保、小傅を云ふ、治部の職宗伯に當る。

有筆書。照頗得筆法。後南海商人歸。自其國還。得國王弟與照書。稱野人若愚。又左大臣藤原道長書。又治部卿源從英書。凡三書皆二王之迹。而若愚章草特妙。中土能書者亦鮮能及。紙墨光精。左大臣乃國之上相。治部九卿之列也。余嘗與其國僧曰克全字大用者偶邂逅于海隈一禪刹中。頗有華言。云。彼中自有國字。字母僅四十有七。能通識之。便可解其音義。因索寫一過就叩以理。其聯輳成字處。髣髴蒙古字法也。至又以彼中字體寫中國詩文。雖不可讀。而筆勢縱橫。龍蛇飛動。儼有顛素之遺則。今以其字母。附於此云。

以又近移	梨		伊	輪	皮又近眉
	奴	庶平聲又近			尸又近時
法平聲又	盧	土平聲又	和又近	梯呼	緊平聲
宜	窩	尼縮舌呼	指	作音呼	非
波又近婆	懷	乃平聲	爺作音	柴又近	摩
別平聲又近	指作音	阿賴 賴作平	堺	欺又近	蚫又近香
多又近	竹			由	又近
啼又近	大平聲	烏	蒲又通	女	

假如、曰天則云[illegible]、曰地則云[illegible]、曰山則云[illegible]、曰水則云[illegible]、曰日則云[illegible]、曰月則云[illegible]、曰筆則云[illegible]、曰墨則云[illegible]、曰紙則云[illegible]、曰硯則云[illegible]、大意不過如此。

書史會要補遺

外域

〔草聖〕草書の名人を云ふ、晉書衞恆傳に、汝與而有草書、杜度號善作篇、後有崔瑗・崔寔、亦皆稱工、云々、韋仲將謂之草聖ことあり。

〔圖繪寶鑑〕五卷あり、上古以來宋に迄るまでの畫家千二百八十餘人と、金元の畫人二百三十餘人とを論評したるものにて、支那の畫史中に在りて、頗る詳なるものとす。

〔鳥羽僧正〕宇治大納言源隆國の子にして、天台座主又は三井寺の長吏となり、後、鳥羽に住するを以つてこの稱あり。

釋永仁字斗南。日本人。書宗虞永興。

釋中巽字權中。日本人。書宗虞永興。

今按。字母者空海之筆跡也。續日本後紀曰。海在於書法最得其妙。與張芝齊名。見稱草聖。國史說如此。乃書四十七字、便于國人不知一丁者。國語音響無遁於此數矣。字體海草也。出雲國神門寺有海眞蹟字母云。余嘗見其臨寫。簾中抄曰。四十七字本歌詞也。護命空海作之。いろは。にほへど。ちりぬるを。護命作之わがよたれぞ。つねならむ。うゐのおくやま。けふこえて。あさき。ゆめみじ。ゑひもせず。空海賡之。二僧同時人也。今書史會要及音韻字海所載以呂波字體。似是而非也。

圖繪寶鑑第五 外國　　吳興　夏文彥士良　纂

日本國古倭奴國也。有畫不知姓名。傳寫其國風物山水。設色甚重。多用金碧。然殊方異域。而能留意繪事。亦可尚也。至今倭僧多能作墨畫觀音佛像。

今按。本朝畫工之姓名。錄於靑史者甚多。今不再贅。寛平有巨勢金岡。馳譽於古今。菅原道眞公寄詩乞畫圖。山水從來無擅去。願憑君得寫風流之句。可想像其工矣。大學寮先聖先師九哲像。金岡之所圖也。今也滅矣。小小畫圖今猶有之。及中世鳥羽僧正覺猷筆參造化。稱近世無雙。見著聞集。其後惠峰明兆。愛畫入骨髓。丹青得其妙。見性海羅漢供跋。僧周文。曾春王吳。眼睨韋郭。畫中三昧手也。雪舟從之學畫。有寒冰青藍之作。挾藝遠往中華。天子觀其畫。爲國奇寶。非有詔不得畫。遂命爲天童名山第一座。以旌其藝焉。一朝來歸。聲價十倍。而曰大唐國裏無畫師。不道無畫。只是無

師。蓋秦華衡恒之殊。是大唐國之有畫也。而其潑墨之法。運筆之術。得之心而應之手。在我不在人。是大唐國之無師也。雪舟於畫神品。曾千載一人而已。見牛陶齋。亦有世間不知妙筆。如往昔墨繪五大力菩薩。一見者爽目。應驅疫癘。相傳延久年中物也。若令夏文彥觀之。則亦可尙也。

紫陽虛谷居士方回撰

瀛奎律髓卷之三十八

送諸山人歸日東　賈浪仙

懸帆云云　去入杳冥間云云

日東病僧　項斯

雲水云云　已無鄉土信云云　曲盡外國僧老病之味。

送人遊日本國　方玄英

蒼茫云云　郤難知云云　別岸云云　第四句佳。然今自明州定海出日國。往往順風六七日耳。歲惟有此一番風。往來必經年也。

送僧歸日本國　吳融

滄溟分故國。渺渺泛杯歸。天盡終期到。人生此別稀。無風亦駭浪。未午已斜暉。繫帛何須鴈。金烏日日飛。三四妙

贈日本僧智藏　劉夢得

浮杯萬里云云　得寧馨　三四逸麗五六有議論。

今按。所載文苑英華諸詩以云云略之。

〔雪舟〕名は等楊、雪州とも書く、又備溪齋、米元山主、漁樵齋、雲谷等の號あり、備中國都宇郡赤濱の人、幼時同國寶瑞寺に入りて僧となる、天性畫を好みて經卷を事とせず、遂に畫道に入り、應仁二年渡明して技を學びて歸朝す。

〔五大力菩薩〕金剛龍王、無畏十方、雷電、無量力の五吼菩薩を云ふ。

〔瀛奎律髓〕四十九卷あり、唐宋二代の詩を合編し、分ちて四十九類とす錄するところ皆五七言の近體也、十八學士登瀛州、五星聚奎の義を兼取して題名とせりと云ふ。

〔韻府群玉〕元の陰時夫の撰にして、其兄陰中夫之に注するもの、凡そ二十卷あり、毎韻に通用を注し、毎字に反切を舉げ、字の異同變遷を明かにし、經史子集の語及び禪語を錄せり、今世通用する所の韻書は、皆此書より錄出せるものと云ふ。

韻府群玉卷之二　晩學　陰時夫　勁弦　編輯　新吳　陰中夫　復春　編註

手譚池　日本國有凝露臺。臺上有手譚池。池上有玉棊子。不由制度。黑白分明。杜陽編

新編古今事文類聚前集卷之四十二　伎藝部　建安祝穆和父　編集

日本國王子入貢。善奕。宣宗令待詔顧師言與之對。王子不勝。問曰。此第幾手。答曰。第三手。王子嘆曰。小國之一不及大國之三。因獻玉棊局。冷暖玉棊子。玉性。冬則暖。夏則冷。

今按。羣書集事淵海卷之四十七夷狄門引之云。出事文類聚。不知出杜陽編宣宗實錄。見前。

異稱日本傳　卷上三　終

異稱日本傳　卷中一

皇明資治通紀卷之二太祖高皇帝紀　粤濱逸史淸瀾釣叟臣東莞陳建輯著

戊申洪武元年十一月。遣使頒詔。報諭安南占城高麗日本各四夷君長。詔曰。昔帝王之治天下。凡日月所照無有遠邇。一視同仁。故中國尊安。四夷得所。非有意于臣服之也。自元政失綱。天下兵爭者十有七年。四方遐裔。信好不通。朕肇基江左。掃群雄。定華夏。臣民推戴。已主中國。建國號曰大明。建元洪武。頃者克平元都。疆宇大同。已承正統。方與遠邇相安于無事。以共享太平之福。惟爾四夷君長酋帥等。遐邇未聞。故茲詔示想。宜知悉。

今按。明洪武元年當日本南朝後村上天皇正平二十三年。北朝後光嚴天皇應安元年。

己酉洪武二年四月。時倭寇出沒海島中。數侵剽蘇州崇明。殺傷居民。刼奪貨財。沿海之地皆患之。太倉衞守禦指揮僉事翁德帥官軍。出海捕之。遇于海門之上幇。及其未陣。麾衆衝擊之。所殺不可勝計。生獲數百人。得其兵器海舟。奏至。詔以德有功陞本衞指揮副使。其官校賞綺帛白金有差。戰溺死者加賜錢布米。仍命德往捕未盡倭寇。遣使祭東海神曰。予受命上穹。爲中國主。惟圖奠民。因敢忘逸。盞彼倭夷。屢肆寇刼。濱海州郡實被其殃。命德統率舟師。揚帆海島。乘機征勦。以靖邊民。特

〔洪武元年〕洪武は元一代太祖の時の年號也。

〔凡日月云々〕恩惠を施すに、日月の遠近の隔なく照す如くに庶に及ぼしたるを譬へたる也禮記孔子閒居篇に「天無私覆、地無私載、日月無私照」とあり、また張蘊古の大寶箴に「大明無私照、至公無私親」などあると同意也。

〔江左〕江東に同じ楊子江の東は江口よりすれば左なればかく云ふ、晉書桓伊傳に「善音樂、盡一時事妙、爲江左第一」とあり。

〔倭寇〕邦人の支那沿岸を攻略せるを彼の國にて唱へたる稱也。

〔南朝〕北史序傳に「南朝從宋以降云云」とあるに出で、我が國にては、吉野時代の頃、朝廷方を指して云へり

〔北朝〕北史序傳に「北朝自魏以還云云」とありて北朱を云ひしを、我國にて吉野朝時代の頃、足利方を指して稱せり。

〔昔季康子云々〕論語顔淵篇に此文あり、治者貪慾ならざれば、被治者亦盜せざるを云へる也。

〔嘉靖四十三年〕嘉靖は明朝十二代世祖の時の年號也、その四十三年は、我が百五代正親町天皇の永祿七年に當れり。

備牲醴。用告神知。德被命復往捕之。倭寇皆畏懼不復出。沿海遂寧。

今按。洪武二年。當南朝正平二十四年。北朝應安二年。夫倭寇之起。元。至正十年。（當我觀應元年足利尊氏時。）逋逃之徒竄於海島之間。乘亂不畏國禁。往中華朝鮮沿海之地。焚毀官廨。劫掠貨財。自此年々漸猖獗。至正二十三年（當我貞治二年足利義詮時。）八月十三日順帝令朝鮮檄日本禁之。足利不能制之。事具太平記。其後至明。海賊尤熾。數侵剽殺傷居民。犯人婦女。暴逆慘毒無不至矣。昔季康子患盜。問於孔子。孔子對曰。苟子之不欲。雖賞之不竊。誠哉此言乎。足利躡足行伍之間。謀勦宗室。姦驕爲纂逆。士民效尤。罔不小大好草竊姦宄。足利之不欲。豈至於此乎。太祖著訓絶交。世宗不遵祖訓。與義滿修隣好。爲製壽安鎭國之碑者何乎。義滿亦變我前聖王之爲。向外國稱臣。受曆受印者何乎。世宗義滿皆過矣。一時雖獲渠魁。終不能掃除凶逆。剪滅鯨鯢。二百餘年之間海氛不熄。當參考下文諸書。嘉靖四十三年。海寇悉平。明年足利亦失鹿。其俱喪甚可怪也。（永祿八年五月足利義輝爲其臣三好氏見弑。實嘉靖四十四年也。）

又卷之三

辛亥洪武四年八月。日本國王良懷遣使朝貢。

今按。洪武四年。當南朝建德二年。北朝應安三年。日本國王良懷ハ南朝後村上天皇皇子。太宰都督良懷親王也。雖非日本一國主。而日本開闢以來君之子也。菊池氏勤勞王室。奉親王數擧義兵。當斯時。忠臣義士在邊塞。各欲奉皇子。共戮力王室。恢復神國。如新田菊池北畠等是也。可憾其終不振矣。

乙丑洪武十八年四月。湯和還二京師一。以二年高一思レ歸二故鄕一。從容乞二骸骨一。上嘉レ之。賜二鈔五萬一。俾レ造二第鳳陽一。而謂レ和曰。日本小夷。屢擾二東海一。卿等老强爲レ朕行視二要地一。築レ城增レ戍。以固二守備一。和行築二海上數十城一。民四丁取二一丁一爲レ兵。以守レ之。

今按。湯和神道碑。見二獻徵錄第五一。卿等老作二卿雖一レ老。

又卷之五太宗文皇帝紀

癸未永樂元年十月。日本入貢。

今按。永樂元年。當二日本後小松天皇應永十年一。此時相國寺中正藏主入レ明。相傳。中正尤善二楷書一。明人曰。書法第一。乃令レ書二永樂通寶錢文一。今所レ傳二于天下一永樂通寶者中正之筆也。中正亦名仲芳。

丙戌永樂四年正月。遣レ使齎二璽書一。褒二諭日本國王源道義一。先レ是對馬岐臺等島海寇。劫二掠居民一。勅二道義一捕レ之。道義出レ師。獲二渠魁一以獻。而盡殲二其黨類一。上嘉二其勤誠一。故有二是命一。仍賜二道義白金千兩織金綵段二百匹綺繡衣六十件綺繡帳褥枕席銀盤器皿諸物一。又封二其國之山一。曰二壽安鎭國之山一。立二碑其地一。上親製レ文賜レ之。

今按。永樂四年。當二日本應永十三年一。源道義足利義滿。應永二年六月出家。法名道義。岐臺當レ作二壹岐一。此時南朝徹。道義并二諸國一。故明勅二道義一捕二海寇一。按二大明一統志一。明帝多爲二夷狄一封二其國之山一立レ碑。故爲二日本道義一封レ山。以二壽安鎭國之號一立レ碑。又按二中原康富記一。曰。應永八年五月十三日。日本准三后道義。書上二大明皇帝陛下一。日本開闢以來。無レ不レ通二聘問上邦一。道義幸秉二國鈞一。境内無レ虞。故

〔乞二骸骨一〕骸骨は身體也、臣が君に吾身を捧げて任へたる官を辭すること、史記項羽記に「范增大怒曰、天下事大定矣、君王自爲レ之、願賜二骸骨一歸二卒伍一」とあり。

〔永樂元年〕紀元二千六十三年に當る此年八月僧岐陽詩經書經の新註を明より齎す。

〔永樂通寶錢文〕永樂通寶は貨幣の一種、永樂通寶の文字ある錢也、金銀二種あり、永樂錢に擬して我國にて鑄造せるもの也、

〔階下〕階陛に同じ天子に稱する辭也

使肥富相副祖阿通好。獻方物。金千兩。馬十疋。鎧一領。筒丸一領。劒十腰。刀一柄。扇百本。薄様千帖。屛風三雙。硯筥文臺一箇。捜尋海島漂寄者幾許人還之。臣道義誠惶誠恐。頓首頓首謹言。時明洪武三十四年也。明史書此事。

十月。平江伯陳瑄督海運至遼東舟還。値倭寇劫沙門島。瑄率衆追至朝鮮境上。焚寇舟殆盡。殺溺死者甚多。

謹按。洪武永樂二朝。皆行海運。不獨使于轉漕。實令將士習于海道。以防倭寇不虞。自會通河成而海運廢。馴至近日。倭寇海賊遂縱横于邊海。而浙江之寧紹諸郡直隷之。蘇紹一帶之被其荼毒至于燔城郭。劫倉庫。緣海司所官軍。脆怯莫之敢攖。使海運猶行海道有備。當不至此。故丘文莊于大學衍義補。惓惓欲復海運。爲之也。

庚子永樂十八年三月。山東都指揮僉事衛青云云。時。青備倭海上。

今按。永樂十八年。當日本稱光天皇應永二十七年。

又卷之八憲宗純皇帝紀

己丑成化五年三月。鹽賊駕厚料衆作亂江上。僭稱江海上公。備倭都督僉事董寬討擒之。

今按。成化五年。當日本後土御門天皇文明元年。

丁酉成化十三年正月。日本入貢。按南宮疏略曰。日本在東海中。古稱倭奴。漢魏以來已通中國。其地度與會稽臨海相望。在勝國時許其互市。乃至四明。沿海而來。與中國人貿易。卽不滿所欲。則燔熇城郭。抄掠居民。往往爲邊海州郡之害。我祖宗灼見其情。故痛絕之。著于皇明祖訓。可考。于山東淮浙閩廣沿海去處。覆設衛所。以爲備禦。後復委都指揮一員統其屬衛。近年又復增設海道副使一

〔荼毒〕にがなの毒にて、轉じて、害毒の意に云ふ、書經に「罹凶害、弗忍荼毒」とあり。

〔憲宗純皇帝〕明宗八代、景宗の子也、百二代後土御門天皇寛政六年なり、長享元年迄治世す

(文明元年)紀元二千百二十九年也。

〔漢魏〕漢は、我が紀元四百五十五年秦に次いで起り、前(西)後(東)兩漢二十七代四百二十餘年にして滅ぶ、魏は三國時代の一國にして我が紀元八百七十六年曹操王を稱してより、五世四十六年にして晉に讓りて亡ぶ

員專督。可謂防範周且密矣。奈何適來事久而弊。法玩而弛。致嘉靖二年倭夷宗設入貢。沿餘姚江。縱横殺掠。抵紹興府。適令獄城閉關時馬而走。闔民家。守臣避城而任賊焚掠。以城門之鎖鑰付之賊手。以日本之因讐討我東南宗所。額倭夷不過百十餘人。而寧紹兩衛軍民何啻百萬。今乃任彼攻掠。至于旬日之久。倭之揚帆而去。畢竟無與之敵。何爲國有人乎。甚可慮也。楊文懿公守陳亦謂倭夷變詐因時。時以刀扇小物爲貢。其大利見非大利不貢之道乎。斯言確矣。

今按。成化十三年。當日本後土御門天皇文明九年。

又卷之十一　世宗肅皇帝

癸未嘉靖二年十月。給事中夏言言。頃者倭夷入貢。肆行叛逆。且寧波爲倭夷入貢之路。法制具存。尚且敗事。況沿海備倭等衙門廢事可知。宜遣爲區處。乃遣給事中劉穆往按其事。

今按。嘉靖二年。當日本後柏原天皇大永三年。

乙酉嘉靖四年二月。日本宗設賊黨掠入海。縣無可踪跡。有宋素卿瑞佐就執下獄。朝鮮主李懌奏致兵敗所得仲林望古多羅二十三人。及華人被虜者八人獻闕下。命科道劉穆王道覆之。獄既具乃論。素卿叛正。仲林望古多羅故殺斬。瑞佐釋還國。

今按。嘉靖四年。當日本大永四年。宋素卿始姓名朱縞。鄞人也。事詳見圖書編武備志。在下。翰林蔚蘆集云。大明朱素卿嘗附舶入我敝境。余固之要視其人。然而未果者有年于茲矣。聞自泉于攝于城州。遂得相於平安城。右京兆源公召見衙門。頗遇甚厚。因請朝欲令之以爲我國信使之通事。

〔世宗肅皇帝〕明朝十一世、武宗に次いで卽位す、憲宗の子興獻王祐杬の子也、百五代後柏原天皇の大永二年より、百〇七代正親町天皇永祿九年に至る迄治世す。

〔大永三年〕紀元二千百八十三年、十二代將軍足利義晴の頃也。

〔嘉靖四年云々〕按ずるに、此年大永四年に至ると云ふは誤れり、宜しく大永五年とすべし卽ち嘉靖元年は、我が紀元二千百八十二年にして、其の二年は本書に注する如く、二千百八十三年の大永三年に當れり、其の翌々年なれば、大永五年也。

榮莫以若焉。一日叩宜竹之室而突入。余卽出迎。袖出一小詩。係以小序。代諷見之刺也。披而覽之。詞翰淸峻、自然不帶日東之氣習。可尙矣。盖推奬之重不敢當。欲默則不可。仍韻疊和七篇。且致規祝之意。

丁未嘉靖二十六年十一月。海寇犯寧波台州。上令嚴爲備。

今按。嘉靖二十六年。當日本後奈良天皇天文十六年。

己酉嘉靖二十八年七月。浙福巡海都御史朱紈言。長嶼諸澳大俠林恭等。勾引夷舟作亂。而巨奸關通主匿年利。因爲向道正與刑部覆。紈何論未審其僞。宜俟覈覆。臺臣因劾紈顓殺脅賞。帝令紈還聽勘。而訊海防諸臣。

今按。嘉靖二十八年。當天文十八年。

癸丑嘉靖三十二年三月。倭寇海上。王忬督兵攻于普陀山。捷聞。賜金帛有差。

今按。嘉靖三十二年。當日本天文二十二年。

五月。倭寇破上海縣。燒掠縣市。知縣喩顯科逃匿。指揮武尙文縣丞宋鰲戰死。撫按官奏。令太平同知陳璋同蘇州同知任環。統兵籌措。璋因上禦倭十二事。撫按俱從之。

七月。陳璋統兵敗倭寇。斬首千餘級。餘寇出境。浮海東遁。

甲寅嘉靖三十三年十月。倭寇分掠嘉湖。

今按。嘉靖三十三年。當日本天文二十三年。

〔寧波〕寧波府也、浙江省にあり、東は海、西は紹興府、南は嘉興府、北は台州府に隣れり。

〔台州〕寧波府に隣れり、有名なる天台山はこゝに在り

〔天文十六年〕元紀二千二百七年、將軍足利十四代義輝の時也。

〔普陀山〕寧波府定海縣の東北にして昌圖の東の海島也一に梅岑山、又は、補陀落迦山とも云ふ。

〔上海縣〕古の南京にて今の浙江省松江府にあり、楊子江河口に位置す。

〔後奈良天皇〕御名は知仁、後柏原天皇の第二皇子、御母は豐樂門院藤原藤子、第百五代の天皇也。

〔弘治元年〕紀元二千二百十五年也。十三代將軍足利義輝の時に當れり。

〔蘇州〕古の南京、今の浙江省にあり有名なる姑蘇山はこの地にあり。

〔太湖〕古の南京の松江、蘇州、常州の三府及び嘉興、湖州の五府を以つて圍む。

乙卯嘉靖三十四年正月。嚴嵩言。倭寇猖獗。請遣大臣禱海。兼採賊情。命趙文華往賜印。得密啓言事。

今按。嘉靖三十四年。當日本後奈良天皇弘治元年。此年事明政統宗紀之詳矣。見下。凡皇明通紀。明政統宗。皇明實紀所記。有異同詳略。今日本傳引之。大抵同者惟引其一。異者詳者各別引之。

三月。任環督舟師。與倭戰於南沙野。茅洪敗之。斬首百餘級。四月。田州土官瓦氏。幷孫男岑大壽大祿引兵應調。總督張經分配總兵。兪大猷等殺倭奏聞。詔賞銀紵。餘令軍門獎賞。五月。倭寇四千餘突犯嘉興。總督張經分遣參將盧鏜等。水陸擊之。保靖宣慰使彭藎臣與賊遇于石塘江。大敗之。賊走平望。兪大猷以永順宣慰使彭翼南邀擊之。賊奔回。王江涇兵復擊其後。大潰。共擒斬一千八百有奇。餘奔歸柘林。○遣官校逮張經及參將湯克寬。械繫來京。以失機論死。文華劾其玩寇殃民也。經上疏自理。不報。

六月。常熟知縣王鈇。江陰縣知縣錢錞。率士民禦倭死之。贈䘏有加。

八月。蘇松巡撫曹邦輔檄僉事董邦政把總婁宇。以沙兵擊倭寇于滸墅關殲之。賊自宜興奔蘇州。會柘林賊邦輔慮二賊相合為患。乃督兵備王崇古集各部兵。扼其東路。四面蹙之。隨地與競。乃召邦政及宇。以沙兵助。斬首十九級。賊懼奔吳會。欲潜走太湖。追至楊家橋。盡殪其衆。邦輔歸功邦政。奏聞。文華欲攘為己功。怒邦輔先為奏捷。乃以陶宅寇患委罪邦輔邦政。詔下政于總督逮問。

十一月。科臣張拭言。官兵會勦陶宅。倭寇屢敗。奏報不實。文華欺罔大負簡命。上令文華矢心視

師圖效。○科臣孫濬言。防倭諸臣事權不一。久無成功。本兵奏言。督察主遏忠討。要實布聞。總督主被集官兵。指授方略。巡撫至督理軍務。措置餉銀。總兵主設法教練。身親戰陣。有司保安地方。固守城池。命下諸臣遵守。

丙辰嘉靖三十五年四月。倭寇溫州。同知黃釧死之。○倭寇萬餘趨浙江皂林。遊擊宗禮帥兵九百人。禦之于三里橋。三戰三捷。斬首三百餘。賊首徐海等駭懼。稱爲神兵。會橋陷。軍潰。禮等俱死。論者謂。兵興以來。稱血戰第一功。已而贈禮都督同知。世襲指揮僉事。

今按。嘉靖三十五年。當日本弘治二年。徐海事詳獻徵錄世法錄。

五月。倭寇圍巡撫阮鶚于桐鄉甚急。總督胡宗憲知賊首有麻葉徐海二酋。乃飾美妓二人。黃金千兩。繒綺數十疋。下畀送海。而不及葉。葉疑有思志。遂拔砦歸。得不破。

今按。麻葉徐海者。當時倭寇賊首。濫惡逋逃者。海居松浦。詳見獻徵錄。

六月。倭寇破慈谿城。縉紳被禍甚慘。省祭官杜槐。及父文明率兵追敗于王家圍。已復遇于白沙。一日戰十三合。殺賊三十餘人。斬其一首。槐亦被創墜馬死。文明別擊賊于鳴鶴場。斬白眉倭帥一級從七級。生擒二人賊驚遁。追之。以兵少陣沒。事聞。贈官廕子。有司祠祀。

九月。胡宗憲以餌誘徐海。居沈庄。且久議和。而文華力主勦督兵甚嚴。以書遺宗憲。讓其逗兵自老。遂集諸路兵圍之數重。縱焚其廬。死者甚衆。後從溺屍中識徐海屍。浙郡遂平。

十一月獻倭俘。加文華少保。宗憲右都御史。各任一子。

〔溫州〕浙江省溫州府也、台州、處州及び福建省の間にあり。

〔浙江〕今の浙江省に當る、明朝の時寧波、台州、溫州、嘉興、杭州、紹興、處州、湖州、金華、衢州、嚴州の十二府を管す。

〔胡宗憲〕明朝、績溪の人、字は汝貞、嘉靖十七年の進士知縣より御史に擢し、宣大を巡撫す、累りに寇賊を擊ち嘉賞せらる、後嚴嵩文華に構陷せられ、瘐死す、萬暦の初、官を復し、襄懋と諡す。

今按。皇明實紀一子下有錦衣千戸四字。海事詳獻徵錄。

戊午嘉靖三十七年三月。倭寇福建。命浙江巡撫阮鶚往勦之、擒斬萬人。餘賊盡滅。

今按。嘉靖三十七年。當日本正親町天皇永祿元年。據皇明實紀。阮鶚有罪。宜通考。

己未嘉靖三十八年四月。倭寇攻破福安縣。往來沿海諸郡邑。而廣東流倭在詔安漳浦者尤夥。南麂廟灣倭合衆來攻。淮安巡撫李遂督參將曹克新禦之。賊敗溺死者甚衆、捷聞。蔭子、陞賞有差。

今按。嘉靖三十八年當日本永祿二年。

十一月。蘇州自海寇興。亡頼子藉衙贊賈勇。白晝橫行。十百成群。市肆不敢正視。巡撫翁大立擊捕之。諸惡少歃血。夜持刀斧攻長州吳縣。劫獄鼓譟攻入都院。大立挾妻子踰牆遁。乃縱火焚其廨。勅諭符驗俱燬。天曙斬封門關入太湖。事聞。命大立剋期殄滅。○先是倭寇蘇州。城門閉。避倭者聚哭不得入。同知任環按劍開門。全活萬數。前後擊破。斬俘甚衆。尋擢參矢志滅倭。以母喪歸卒。至是以科臣徐師曾請贈光祿卿。蔭子千戸。有司建祠祀之。

今按。皇明實紀。尋擢參字下有政字。

庚申嘉靖三十九年二月。舊例。南京營軍月米。有妻者一石。無妻者減十之四。侍郎黄懋官嗔曰。四十八衛卒。不敢敵二十七倭。焉用是冗食者爲哉。于是故爲裁抑。各月各衛送支冊。必詰其逃亡多寡。又奏停補役軍丁妻糧。諸卒忿甚。比歳大祲。月已既望而關符未下。直振武營操期。遂鼓譟圍懋官第。懋官聞變踰垣而出。諸軍邀而撲殺之。懸其屍于市。脅兵部尚書張鏊。求賞。鏊錯愕不能應。誠意伯劉世

〔福建〕福建省福州省を云ふ、東は海、南は福寧州、西は延平府、北は興化府に隣接し、十縣を管す。
〔阮鶚〕明朝、桐城の人、官浙江提學副使たり、時に倭寇屢々來り犯す、初め能く拒く、後賊に賂ふに羅綺、花金及庫銀を以てす、竟に斥けられて庶民に歸す。
〔福安縣〕福建省福寧州にあり。
〔詔安〕福建省漳州府にあり。
〔漳浦〕同上。
〔李遂〕明朝、豐城の人、字は邦良、嘉靖五年の進士、行人より刑部郎中に擢し、倭寇を好く防ぐ、南京參贊尚書に進みて以て致して卒す。

〔永祿三年〕紀元二千二百二十年、百五代正親町天皇の御代、十三代將軍足利義輝の時也。

〔戚繼光〕明朝、登州南の人、字は元敬、嘉靖中、世職を嗣ぎて都指揮僉事に擢し、兵革に從ふ年あり、殊功擧ぐるに勝へず、其の南方にあるや職功特に盛也、北は卽ち專ら守を主とす、然も竟に劾罷せられて卒す、所著、紀効新書練事實談兵あり、世之を重んず。

〔劉顯〕明朝、南昌の人、落魄の身より起ちて武生となり副千戶を授けらる、累進して都督同知に至る。

延論之稍戰。兵部尚書李遂煬言曰。黄侍郎自論垣死。各軍特不當殘辱之耳。不得稱叛。乃議發賑。人一金始散事聞。命擒偽首者斬之。

今按。嘉靖三十九年。當日本永祿三年。

癸亥嘉靖四十二年四月。副總兵戚繼光督浙江。至福建與總兵劉顯兪大猷。大破倭賊于平海衞。海寇悉平。

今按。嘉靖四十二年。當日本永祿六年。

乙丑嘉靖四十四年三月。嚴世蕃羅文龍至京。刑部尚書勘其交通倭虜謀反。顯證得旨俱處斬。金銀財貨。令按臣盡數追役。餘遣配有差。

今按。嘉靖四十四年。當日本永祿八年。

九月。巡撫浙江劉畿言。寧波沿海。港多兵少防範爲難。市舶一開島夷嘯聚。禍不可測。遂寢市舶之議。穆宗莊皇帝

壬申隆慶六年三月。兵科劉伯燮言。故總督曾銑恢復套河。胡宗憲討擒倭寇海波遂寧。皆立功之臣。竟以罪死。宜加郵錄以爲邊臣勸。從之。

今按。隆慶六年。當日本正親町天皇元龜三年。

明政統宗卷之二　　明　豫章草莽臣　涂山　編輯

己酉洪武二年二月。遣使諭占城爪哇日本等國。賜以璽書。

〔廖永忠〕明朝、巢人、楚國公永安の弟、初め永安に從ひて太祖を巢湖に迎ふ、年最も少し、太祖曰く、汝亦富貴を欲するか、永忠曰く、明主に事へ寇亂を掃除するを獲て名を竹帛に垂る、是願ふ所のみと、累遷して征西副將軍たり、德慶侯に封ず、洪武八年三月、龍鳳を僭用し、諸不法事に坐して死を賜ふ年五十三。

〔吳楨〕明朝定遠の人、初名國寶、良の弟、間諜の術に長ず、兄と俱に太祖に歸し、行々州邑を平げ皆功あり累遷して、靖海將軍となり、海上に練軍す、後靖海侯に封ぜらる。

今按。據皇明通紀。賜璽書洪武元年事也。明政統宗爲二年事。不知孰是。

四月倭寇南畿並海郡縣。指揮戴德捕之。倭寇出沒海島。使掠崇明沿海諸處。德率兵出捕。獲寇九十二人及其兵器海舟。奏聞。陞德爲都指揮。遣使祭東海之神。

又卷之三

癸丑洪武六年春正月。廖永忠請多造櫓船以捕倭。從之。時。東南倭夷竄伏。海軍衞添造多櫓快船。命將領之。沿海巡徼。若倭夷一來則大船薄之。快船逐之。彼欲爲寇不可得也。上善其言。故從之。

今按。洪武六年。當日本南朝後龜山天皇文中二年。北朝後圓融天皇應安六年。

甲寅洪武七年八月。命吳楨總沿海兵捕倭。至琉球大洋獲人船。俘送京師。禎爲靖海侯。

今按。洪武七年。當南朝文中三年。北朝應安七年。

丙辰洪武九年春正月。命湯和傅友德藍玉等。帥師往延安防邊。上諭和等曰。自古重邊防。邊安則中國無事。夷狄可以坐制。今延安地連西北。與胡虜接境。若邊防不謹。即入倭寇。待其既入而防之。則軍士之人受害。持命將帥衆以往。常存戒心。則不至有失矣。

今按。洪武九年。當南朝後龜山天皇天授二年。北朝後圓融天皇永和二年。

又卷之四

辛酉洪武十四年七月。日本國王良懷遣僧如瑤等貢方物。王卻其貢。乃命禮部以書責之。大略曰。大明禮部尙書致書日本國王。王居滄海之中。不奉上帝之命。不守本分。但知環海爲險。限山爲固。肆侮隣邦。縱民爲盜。上帝將假手於人。禍有日矣。吾奉至尊之[illegible]。移文于王。王若不審其微。幷親鑒[illegible]。自以爲大。無乃構隙之源乎。王之國始興曰倭。後更日本。歷朝皆遣使貢方物。當時帝王或授以職。或爵以王。由歸慕意誠。故復禮厚也。若狡詐不常。構隙中國。則必受禍。王其審之。

今按。洪武十四年。當日本南朝後龜山天皇弘和元年。北朝後圓融天皇永德元年。如瑤藏主事。及

〔兪士吉〕明朝、象山の人、字は用貞、建文中、訓導より御史に擢でらる、仕へて宣宗の時に至り、南京刑部侍郎に歴遷して致仕す。

〔陳敬〕明朝、增城の人、洪武十四年賢良に擧げらる、曲靖府經歷たり、劍川州事を署す。鄰寇來り攻む、敬三たび卻く、官兵寡くして退かんと欲す、敬目を瞋らして大呼し、力戰して死す。

禮部書見御製文集。凡我與中華往來。隋唐以來有遣使送使。俱以官人。求法弘道僧亦絡繹。唐季使者絶矣。往往僧渡海潮。未有爲世間免使者。元朝以一山爲使。及明我以如瑤爲使。蓋皆出于一時權道。爾來僧爲使。因習成俗矣。

丁卯洪武二十年二月。置兩浙防倭衛所。

今按。洪武二十年。當本朝後龜山天皇元中四年。北朝後小松天皇嘉慶元年。

又卷之六建文君

辛巳洪武三十四年（實建文三年）九月。倭寇浙東。

今按。洪武三十四年。當日本應永八年。

又卷之七成祖文皇帝

癸未永樂元年十月。日本國入貢。時貢使附載胡椒。與民互市。有司議征稅。上以失國家大體不許。

今按。永樂元年。當日本應永十年。

甲申永樂二年二月。命通政趙居任使日本。令十年一貢。

今按。永樂二年。當日本應永十一年。

乙酉永樂三年四月。命僉都御史俞士吉使日本。封其酋爲國王。

今按。永樂三年。當日本應永十二年。其酋指足利義滿也。

丁亥永樂五年八月。勅陝西行都司都司都指揮陳敬等。及巡按監察御史。禁止外交。上曰。臣無外交。古有明戒。太祖皇

〔應永十四年〕紀元二千六十七年、九十九代後小松天皇の御代、四代將軍足利義持の時に當れり。

〔稱光天皇〕御諱は實仁、法諱大寶壽、後小松天皇第一皇子、御母は日野資國の女、光範門院資子、百一代の天皇也。

〔英宗睿皇帝〕明朝第六世、重祚して八世に再び治す、姓は朱、名は祁鎭、宣宗の長子也。

帝申明此禁。最爲嚴切。如胡惟庸私往卜寵吉兒。通日本等處。禍及身家。天下後世曉然知也。今邊境猶有玩法嗜利之人。往往潜行。詭稱朝使。索取寶物。或于道途盜竊。外夷所貢善馬。或爲商販圖利。此皆邊防不謹致然。都指揮爲朝廷鎭守。邊境御史爲國耳目之官。皆坐視不理可乎。其悉廉間防閑。不可縱弛。

今按。永樂五年。當日本應永十四年。

又卷之八

戊戌永樂十六年八月。遼東總兵劉江請築堡於金州衛金線島備倭。從之。江言。本島西北。望海堝上。其地特高。倭可往劄守備。詢諸土人云。洪武初都督耿忠亦嘗于此築堡備倭。蓋去金州城七十餘里。凡有寇必先過此。爲濱海襟喉之地。乞用石壘堡築烟墩瞭望。

今按。永樂十六年。當日本稱光天皇應永二十五年。

己亥永樂十七年五月。左都督劉江大破倭奴于望海堝。封江爲廣寧伯。先是賜誥印。封其王爲日本國王。名其國鎭山曰壽安鎭國山。給勘合百道。令十年一貢。正副使毋過二百人。若貢非期入。若人船踰數。挾兵刃器以寇論。然倭時時掠海上不止。久之江鎭遼東。而爲築金線島堝。置烽候瞭望。一日瞭者云。海東南島夜擧火光。江計寇且至。將馬步軍伏堝堡上備之。偏銳卒伏山下以待。倭旗擧砲鳴。卽起共夾擊。明日倭二千餘乘海艟。過堝登岸。魚貫行。一酋貌獰甚。揮兵登如入無人境。江蓐食秣馬。不爲動。而潜遣壯士。間道往圍賊。賊畢登則盡焚其艟。已而賊至堝。江披髮出搏。賊擧旗鳴砲。伏盡起夾擊。倭大衂。走櫻桃園空堡內。我師追圍之。將校皆奮請入擊。不許。已而開西壁縱倭急走。張兩翼夾擊。俘斬千數百。倭跳身急走。艟則艟已盡焚。爲舟卒所縛。無一人得脫者。凱還將士請曰。公見敵而秣士馬。臨陣披髮追賊。入堡不殺而縱之。乃卒收功何也。江曰。寇遠來過堝。我以飽待饑。以逸待勞。固治敵之道。賊始魚貫來爲蛇陣。我作眞武狀擣之。亦愚士卒耳目而奪其氣也。賊既入堡有死而已。我師攻急彼必致死。未必無傷。縱其生路。卽圍師必缺之意。此固兵法。顧諸君未察耳。事聞。上賜勅褒。進封江廣寧伯。自是倭不窺海上者數十年。

今按。永樂十七年。當日本應永二十六年。

又卷之十一英宗睿皇帝

〔陶成〕明朝、鬱林の人、永樂中、鄉舉を以て、交趾鳳山典史に除せられ、大理評事に歷す、正統中、浙江僉事に歷進し、處の賊を討ち、賊詐えて之に死す、景泰元年、左參政を贈る。

〔御土御門天皇〕御名は成仁、法諱正等觀、後花園天皇の第一皇子、御母は嘉樂門院藤原信子、第百三代の天皇也。

壬戌正統七年七月。倭寇浙東。時。倭犯樂清。入大嵩。窺伺備禦疎而入。官與民廬焚掠盡。發掘塚墓。得少壯人殺之。束嬰孩于柱。沃以沸湯。視啼聲爲嬉。得孕婦村度男女。刳視中否。爲勝負。其慘毒如此。民大創。下防倭之令而遣[illegible]。

今按。正統七年。當日本後花園天皇嘉吉二年。此時赤松弑其君足利義教。惡民出于外爲暴。上下不治。甚可痛恨矣。

癸亥正統八年九月。倭寇浙東。按察僉事陶成整飭海道。率兵平之。

今按。正統八年。當日本嘉吉三年。

己丑成化五年五月。勅鎮守總督巡海等官防禦倭夷。時。千戸王鏜言。倭夷多譎。時掠海邊。見官軍巡捕。乃僞入貢。伺虛則掩襲邊境。往者火蕩當徒其[illegible]。近見使臣清啓入貢。臣恐使臣固有異志。或僞掩襲之計。兵部因言清啓復自稱傷殺市人。遂宥之。然[illegible]清啓故勅各官整軍伍。嚴斥堠。以防其奸。

今按。成化五年。當日本後土御門天皇文明元年。清啓未詳何人。

又卷之二十五

丙午嘉靖二十五年八月。倭寇浙東。以失執爲巡撫捕之。

今按。嘉靖二十五年。當日本後奈良天皇天文十五年。

又卷之二十六

庚戌嘉靖二十九年二月。浙江御史董威請寬海禁。初。太祖置市舶司于倉黃渡。以通華夷貿有無。詰姦貨。抑姦賈。便利權在上。且以省戍守費。後。以黃貴通京斯。改置于福建廣東。既而絕日本入貢。而三市舶亦廢。海上利之。嘉靖元年。宋素卿宗設仇殺夏言[illegible]。請罷于市舶。[illegible]從請罷之。自是番貨至則爲奸商所籠。賒取番貨。動負數千萬金。不之償。已而番貨主責貴官家。貴以責奸賈。而貴家不負更多於奸商。番人泊近島。坐索其負。不能得。遂出沒寇海上。貴官家乃責[illegible]官府。謂不爲禦倭及官。爲出師復沒其貨。番人積怒日久。乃盤據海洋。日掠

我海濱不去。而窺塞皆從。及失職衣冠士。失志生儒。諸不逞者。皆爲之諜間嚮道。弱者計圖暖。強者奮臂欲泄其憤。于是注五峯徐碧溪毛海峰等。皆以華人據近島。寶主者衣冠。劫掠瀕海諸郡邑。而浙東無寧歲矣。朱紈聞斷其往來。禁海賈。禁通番。嚴貴官家之二三嚢。于是講者四起。竟陷紈落職。御史董威乃奏貴官。指言寬海禁。以便漁樵。裕國課。下兵部集議。從之。

今按。嘉靖二十九年。當日本天文十九年。

壬子嘉靖三十一年夏四月。倭入寇。浙東大震。

今按。嘉靖三十一年。當日本天文二十一年。

甲寅嘉靖三十三年五月。倭寇掠蘇州。給事中王國禎上言。招降賊首汪直非計。本兵覆言。直本徽郡人。以通番入海。後斬寇自贖。有司不收之致有今日。故懸賞招降。非示弱也。上以國禎言是。令一意剿撫。降者待以不死。賊首不赦。

八月。南京太僕寺卿章煥條上海防四事。一曰。築城堡。言。兵因地形。今江南之變。千村萬落皆爲戰場。而郡縣且相率閉城。奈何使各郷兵帶賊。宜急築城堡于諸郷以固守。并爲予聚粮以待戰。郷保有備則賊不敢輕掠。而謀阻。諸郷堅守則兵不必偏分而力裕。將人人自爲戰守。昔皇祖嘗命湯和視海上。於要地築數十城以備倭。而東南安堵。此其驗也。二曰。預軍需。言。西北諸邊一切軍食。皆有司先期部署。以聽督撫調度。故卒有緩急。可以咄嗟而辦。今臨變之時。上官漫督之。主者亦漫應之。眉睫間已成胡越。何況百里之外。副後軍中之行。賞功之費。一二會計所出。貯之別庫。使軍門不以煩有司。有司不以煩居民。則萬全之術也。三曰。練士兵。言。今議者悉備調兵。不知少發則不足。多發則用不繼。久駐則師老費財。暫駐則兵散而賊復入。急之則怨。寬之則驕而爲亂。宜訓練土兵。若土兵不足。宜募近海丁壯。及有恩濟養者居之塔場。給以偶配。予以田宅。使之士著而忘其家。是城堡之外。益以藩籬。計無便此者。四曰。嚴察奸。言。外賊易見。內賊難知。今賊深入內境。凡我動靜無不刺之者。謂得之。又其始至千人。四布莫知。而嘯聚畢集者。又誰爲之。皆奸民所釀也。誠使郡縣得人。來之寬。大布恩信。開以殊常。時招反側者散之。反本而呼天。何變之能生。且海上多壯士。負氣任俠而不肯下人。苟能制之則爲我用。不能制之則爲賊用。故安反側收豪傑。治亂之機也。疏入。詔所司議行。

乙卯嘉靖三十四年二月。遣工部侍郎趙文華往祭海神。兼督察海防。時。嵩言。海寇猖獗。宜遣大臣禱祀東海以奪其魄。宜布朝廷德意。即命察軍情。方求區處長策。因薦文華可用。上從之。乃賜文華印記。令得以密啓言。文華本嵩私人。既奉命出遷。寵恣肆所睚眦。即立摘仆有司。無不望風慴奔走奉。江南爲之困弊。至于牽

〔天文十九年〕紀元二千二百十年、百四代後奈良天皇の御代、十三代將軍足利義輝の時也。

〔南京〕明朝の時、北京に對して、之れを置く、淮安、揚州、徐州、鳳陽、滁州、和州、盧州、安寧、池州、太平、鎮江、常州、蘇州、松江、廣德、徽州、等を管す、首都應天府にあり。

〔太僕〕官名、軍政の長官なり、事物紀原に「周禮夏官司馬之屬、有太僕下大夫」、尚書冏命、穆王命伯冏、爲周太僕正」、則太僕周官也、應劭曰、蓋太卿衆僕之長」とあり。

〔巡撫〕巡行して、人民を撫循する官也、明の時代より之を設く。

〔黜陟〕功ある者はその官職を進め、功なき者はその官職を退くるをいふ、書經舜典に「三載考績、三考黜陟幽明」とあり。

〔社稷〕社は土の神、稷は穀の神也、故に社稷は猶ほ國家といふが如し、後漢書に「社者、土地之主也、稷者、五穀之長也」とあり。

〔烏合〕統一なき集合をいふ、後漢書に「卜者王郎集烏合之衆、震燕趙之北」とあり。

制兵儀。顚倒功罪。以致紀律大亂戰士解體。須徵兵半天下。而賊勢愈熾。人皆以爲藹引用匪人之罪云。

秋七月。倭犯南京。先是高埠逃倭。自杭州西掠至嚴州淳安。僅六十餘人。以浙兵通急突入歙縣。流劫至南陵。趍太平。時操江都御史守太平。督兵禦之。賊引而東犯江寧鎭。守備遣指揮朱襄等。率勇士百人出。時賊已至夾橋。襄等怠緩不知。祖湯纔酒、一遇賊盡爲所殺。羣賊沿途殺人。由安德門夾圍各門外。鄉落搶掠趍秣陵關。時應天府推官羅節卿指揮徐承宗率兵千人守關。望風奔走。賊遂過關而去。

九月。浙江巡撫胡宗憲與直隷巡撫曹邦輔。會兵勦倭

給事中揚允繩疏條禦倭之策。言。海寇爲患已及三載。破邑殺官猖獗日甚。而迄無定期者。在將習故用兵之際。絕無紀律。不鳴金鼓。不別旗幟。聚如兒戲。渙若摶沙。前有伏而不見。後有賊而不知。浸率爲兵浪與賊遇。自相踩踐、全軍覆沒。此其咎端在不知三者。而至于不設諜探。不知地形。又其取財斂之尤。當事者不此之察。動以增兵益餉爲請。意不過張賊聲勢緩己罪愆。豈知難括天下財。供江南之役。藉天下之民。爲江南之兵。如以蛾赴火。以雪實井。竟有何益。臣愚以爲。在先擇將。而至于弊源則又不專在外。督撫賂在京權要。官司又賂督撫。皆取具于民。卽令孑遺待盡之民。豈堪浩蕩侵剝之患。異日國家隱憂。蓋不止海島之間。宜勅令大臣。洗心滌慮。剖絕朋比之私汛。掃苞苴之習。此端本澄源平倭之要道也。疏入。納之。

按。吳瑞登曰。當時嵩父子。以貨賄多寡爲黜陟。而又用趙文華以視師。江浙之吏悉斂脂膏以塡溪壑。當此外寇方熾之時。而又有內寇朘削之根本重地。安所支哉。吾以允繩之疏。更有關于社稷者不小也。

冬十月。論平倭功。胡宗憲陞右都御史。加太子太保。按。支大論曰、嵩內結貴黨。外布黨與。旣滅邦憲。復逆天道。公殺諫臣。自是而沈鍊郭希顏繼殞矣。卽闔門寸斬。不足以洩義士之憤也。

十一月。光祿寺卿章煥疏條禦倭之策八事。

一曰。統兵之制未定。言。將佐雜居。諸軍烏合。兵視將而弁髦。將視郡縣如傳舍。必將有專閫。兵有常伍。無事相習。有事相隨。則兵不可統。二曰。馭兵之制未定。言。諸軍目不睹軍容。耳不聞軍令。有急驅之不能卒集。臨陣而逃。轉相劫掠。必平時有約束。臨陣有紀律。則兵可馭。三曰。調兵之制未定。言。調至土狼猓獠雜調。必以諸邊節制之兵爲準。調到土狼之兵爲補。則兵可調。四曰。募

五部等奔蔡其山。鶚趁兵大戰獲之。黨陳東麻葉輩以次授首。海勢孤。乃退保沈庄。構柵數重。官兵皆觀望不敢進。鶚大怒曰。若輩乃不如賊之攻桐鄉耶。檄趣總兵俞大猷。先鶚親董兵。由海鹽突環之。戰寅至酉。海賊殲之。鶚所部兵自四月戰于觀海。又戰于海寧等處。又戰于蔡其。至沈庄之戰。腹裡賊乃盡。是年六月也。至十二月。鶚與海道正詢都司戚繼光。攻舟山。且拔宗憲兵。乃至。鶚堅主剿。冒險犯猜以至成功。又建言善後。鄭死獨賊撤客兵。言撫者益甘心矣。文華兩上捷。盡冀為己功。上命械繫首惡至京正法。既而兵部尚書聶論等言。首惡就擒地方底定。皆皇上至誠昭格。玄功允洽。是以百靈助順。諜若啓而戰若翼。非區區人力所能强為。乞卜修祀。用答玄貺。文華等功次待覆實擢賞。上從之。降旨旌功。令促文等還京

總督尚書趙文華至京。初文華再督出兵。所至徵兵集餉。驛費不貲。于是編徭役加徵稅租。截留漕粟。扑除京第。迫脅富民。脫釋凶醜。搒括公帑。金寶圖畫以百計。其為軍旅之用。止什之一二。所徵害上民兵。川湖廣貴山東山西河南北無不罹患。而臨敵不前。遣還不去。往往潜為盜賊。行者居者並受其禍。須有梁庄之捷。何足贖。至是回京而吳越之間始若脫距。

十一月。加趙文華少保胡宗憲右都御史。各任一子。以平倭功也。各任一子襲千戶。

朝鮮俘遣使歸俘。助擊倭也。

總督胡宗憲督總兵俞大猷帥師攻舟山倭平之。初。自梁庄捷後倭賊悉靖。惟舟山倭據險結巢。官兵環守之。不能克。時土狼兵俱已遣歸。而川貴兵六千人始至。胡宗憲方留防春汛。隸總兵俞大猷經營舟山之賊。會夜大雪。大猷乃督兵四面攻之。賊悉銳出敵。殺土官莫翁送。諸軍益怒競進。賊大敗歸巢。官兵積薪草。以棕簑捲火擲之。賊四散潰出。斬首一百四十餘級。餘悉焚死。乃平之。

十二月

附錄提督操江都御史高建言。狼福二山乃倭寇出入之處。請募水兵萬人沙舡三百艘。分發參將等官。操練部議。從之。

獻倭俘。趙文華至京。麻葉陳東等械繫亦至。禮兵二部奏請獻俘。從之。群臣俱具服稱賀。仍舉謝玄大典。

又卷之二十七

丁巳嘉靖三十六年三月。倭寇掠寧波府。初梁莊之捷。徐海等敗死。其渠魁王直復糾倭衆。六艘約三千餘人入寧波府岑港。登陸四掠焚戮。慘甚。總督胡宗憲方議招納。按

〔桐鄉〕支那浙江省嘉興府に在り。

〔海鹽〕支那浙江省嘉興府の海岸に在る縣名也。

〔舟山〕支那浙江省杭州灣の東南海に在る島名也。

〔胡宗憲〕字は汝貞績溪の人、嘉靖十七年の進士、知縣より御史に擢し、宣大を巡按す、倭寇の鎮定に功ありしが後ち嚴嵩文華に構陷せられ死す。萬曆の初、官を復し、襄懋と謚す。

〔寧波府〕支那浙江省に在り。

兵不擊。參政劉燾屢請出師。不聽。

今按。嘉靖三十六年當日本弘治三年。

五月。倭寇犯泰州等處。時有倭舟七艘。自金沙登岸。復犯如皐。至泰州。轉掠揚州山東及徐州。官兵禦之。皆潰。逐薄新水關。矢及城中。又進犯天長縣。都司沃田把總丘君寵禦之。皆敗死。賊遂入縣掠。已而由石梁趨盱眙縣。復攻入之。遂突犯泗州。攻城不克。分衆犯清河。攻入縣治。縱火焚掠而去。遂出淮安府。入安東劫掠。

十二月。詔嚴捕妖人馬祖師。先是有妖人馬祖師。流寓湖州之烏鎭民沈松家。以幻術惑衆。有物如蝶。入人家。變幻飛走異狀。禦之則刀杖傷人。夜魘魅惑人至死。其黨有毛盈計中江升高仙等逸李福松蔣明等。更相誑飾鼓煽。遠近愚民爲所誘脅甚衆。約以九月甲子起兵攻嘉興。會有洩其謀者。官司䖏捕之。王寀等皆先被擒。至期馬妖樹白靑二旗。放火縱掠。兵備參政劉燾急督兵擊之。賊潰走南潯。官兵追擊及于雙林。盡殲其衆。獨馬祖師者逸去。總督胡宗憲等以聞。兵部覆議。西浙倭患未已。仍民生日蹙。是以人心搖惑。釁孽易生。故妖道一鼓疏言。響風嘯聚。今惡黨雖擒。元兇未獲。舟山逋逆反側覘釁。宜亟赦脅從。而嚴捕首祖師者以除亂本。詔可。

今按。此言倭患頻。加之妖人出民心搖惑也。

戊午嘉靖三十七年四月。倭寇掠臨海縣。時倭寇二十二艘。約數千人。掠臨海之二石鎭。總督胡宗憲驅走之。

五月。倭攻福建惠安縣。知縣林咸死之。先是倭千餘攻惠安城。率丁壯禦之。倭攻五晝夜不克。丁壯死沒數百。倭亦頗有損失。乃引去。咸復率兵攻倭于縣境之鴨山出不勝。追奔陷賊伏中。而死。

七月。詔奪總兵俞大猷等官。初。總督侍郎胡宗憲遣還毛海峯誘降王直。及直至下獄。海峯遂絕。與倭目善妙等列舟山岑港而守。官軍四面圍之。須頗有斬獲。而賊憑高死守。我兵莫利。先登多陷沒者。新倭大至。上屢降嚴旨趣宗憲。及時平賊。宗憲懼得罪。乃上疏侈言水陸戰功。于是言官極言其欺誕。并劾失事諸臣。乃詔奪大猷及參將戚繼光等職級。期一月蕩平。

十月。總督浙直侍郎胡宗憲請辭功賞。不許。時岑港倭巢柯梅。宗憲督兵討之。不能克。南京御史李瑚乃追劾。宗憲私誘王直啓釁。巡按浙江御史王本固南京給事中劉堯誨亦劾。其老師縱寇濫冒功賞。請行追奪。宗憲自辨。上曰。卿計獲妖賊。人所共知。特以獻瑞故人卽引軍事害卿耳。卿宜竭誠展布以平餘氛。不允辭。因命兵部郎中唐順之往浙直視師。與

〔泰州〕支那江蘇省揚州府に在り。

〔揚州〕支那江蘇省長江の左岸に在り

〔徐州〕江蘇省徐州府に在り。

〔泗州〕安徽省に在り。

〔淮安府〕江蘇省に在り。

〔安東〕江蘇省に在り。

〔惠安縣〕福建省泉州府に屬す。

〔俞大猷〕字は志輔晉江の人、嘉靖十四年の武會試に擧す、世職百戶也、世穆二朝に歷仕して屢戰功を立て後府僉書に至り、車營訓練を領す、萬曆元年卒す。

〔詔安〕福建省漳州府の南境に在る縣也。

〔漳浦〕同州西南部に在る浦名也。

〔泉州〕福建省に在る灣名也。

〔通州〕江蘇省に在り。

〔劉家庄〕山東省沂府に在り。

〔崇明〕江蘇省揚子江口に在る島也、俗に口舌と云ひ、首府を崇明と呼ぶ

宗憲協謀剿賊。

今按。此年事比皇明通紀甚多。

己未嘉靖三十八年三月。廣東倭賊流刼福詔安。官兵禦之。賊引衆犯漳浦。○詔逮浙直總兵兪大猷訊治。先是倭流泊泉州浯嶼。焚掠相拒者一年所。後諸酋移衆南嶼。建屋而居。閩中大譁謂。總督胡宗憲縱寇往。宗憲乃上言。舟山餘孽勢易成擒。而總兵兪大猷邀擊不力縱之。南奔閩廣。宜加重治。上命逮大猷訊治。閩人復大噪。謂宗憲嫁禍大猷。于是南京御史李瑚劾宗憲數其三大罪。瑚與大猷俱閩人。宗憲疑有漏言。遂委罪大猷以自掩飾。

今按。廣東倭賊事。詳皇明通紀。

夏四月。倭寇掠通州如皐松門等處。巡撫都御史李遂督兵拒倭。有廟灣之捷。入爲南京兵部侍郎。

五月。倭犯福清等處。時倭犯福清脊江諸郡。焚掠慘甚。福建御史樊獻科劾都御史王僑參將黎鵬失律罪。詔奪祿。抵罪有差。

八月。總督胡宗憲遣江南副總兵劉顯剿江北倭于劉家庄。敗走之。初。江北倭自鄧家庄敗。後沿河覓舟不得。官兵自後急擊之于劉家橋諸處。賊勞倦困頓。會大雨。乃奔入劉家庄。官兵四面圍之。宗憲遣劉顯以銳卒千餘來援。江北將士謂。功在垂成。慮爲顯所攘。嘖嘖有言。巡撫都御史李遂恐。士卒不和。乃檄江北兵悉屬之。顯軍政既一。遂刻期進兵。顯率所部先登。各營選鋒繼進。縱火衝擊。自辰至酉賊剿。始破奔走。追擊之。先後斬首四百餘級。賊衆盡殄。

庚申嘉靖三十九年正月。以唐順之爲僉都御史。巡撫徐揚。先是。順之以右通政浙直視師。至是令巡撫淮揚。順之因條上海防八事。一曰。禦海洋。言禦倭上策。必禦于海。而崇明舟山乃海賊入寇之路。尤宜預防。當春汛時。宜令蘇松兵備。暫守崇明。寧紹兵備暫往舟山。總副將官常居海中。督兵分哨。如有縱賊入港登岸者。以次論罪。二曰。固海岸。言賊至如不能禦于海。則海岸之守爲第二着。昔但坐地殘破者之罪。今宜併坐賊所從入者。有能衝鋒禦賊使不能登岸深入者。雖無首級。亦以奇功陞賞。三曰。圖海外沿海逋逃之徒。制宜爲賊嚮導者甚衆。宜多方招來以消禍本。并聞日本通貢之徒。若抄把如故則命朝鮮琉球承諭。四曰。定軍制。言調募客兵。坐靡廩餉。宜急練土著之兵。後訓練成悉調罷募。五曰。鼓軍氣。言士卒遇海風。而頭目掉眩。聞朝聲而耳聾心惕。何望掃清大憝。宜責文臣督餉。時御戎服出入軍中。以作武將之氣。武將臨時間取潰。校逃卒一二人以變士卒耳目。六曰。復舊制。言。沿海衛所軍伍素整。屯田

數萬悉可墾種。七省原設三市舶司。收權于上。今數俱已廢壞。宜令諸路酌時修舉。七曰。別人才。言。內海副使譚綸兵備鏡等可舉。而台州知府黃大節副總兵曹克新等宜罷。八曰。定廟謨。言。外患未息。內變恐作。近者吳松定海水卒以呼糧之故。縛官劫獄。漸不可長。宜預議招懷之略。疏入。下所司議。從之。

五月。加胡宗憲兵部尙書。兼右都御史。仍督沿海軍務。初南京御史李瑚劾。宗憲要功致寇。下兵部議詳覆。上不聞。已而閩廣浙直倭寇日熾。福建巡按樊獻科請趣宗憲赴閩應援。浙江巡按周斯盛時。約兵部趣宗憲督剿寇以弭海患。宗憲聞命。泄滯如故。已而寇稍解散。竟以功進兵部尙書。沿海撫巡諸官悉聽節制。其體統如三邊。而勳臣總兵者亦由轅門通謁庭拜下風矣。

又卷之二十八

壬戌嘉靖四十一年二月。福建倭寇犯懷安縣。提督都御史游震得檄兵剿之。時坐營指揮王[illegible]帥三衛鄉兵。先當賊失利。歸罪于[illegible]。震得執[illegible]笞之。斬隊長以下四人。三衛軍不服。有怨言。會副使汪道昆閱操教場。遂大譟。持殺[illegible]數人。求[illegible]。不得。焚城南。久之乃去。

今按。嘉靖四十一年。當日本永祿五年。此年婦女與倭[illegible]者四十三人詳見閩書。在下文。

六月。廣東賊張璉伏誅。閩。自倭寇蹂躪福建江西諸郡。不逞。奸民乃以蜂起。而廣東爲尤甚。未幾張璉林朝曦黃啓[illegible]等衆據城置郊。自建官紀元。攻劫[illegible]。爲患日大。上憂之。總督尙書胡宗憲不能爲計。上疏自言。中風。願乞骸骨。言官劾其託疾避難。置不問。宗憲遷延待命。先奏以三月十有六日發兵剿賊。既而易爲四月十有八日。凡徵集狼兵十餘萬人。久案待時。上頗疑之。手諭元輔階曰。東南寇氛何如。宗憲果有疾否。階上言。寇氛可慮。宗憲疾須補念。未嘗行督剿。上又云。尙書博何不遲[illegible]之。階以語博。博矣。令都督劉顯參將俞大猷領家卒。往督狼兵赴剿。又發永順土兵。以爲[illegible]援。以[illegible]道[illegible]之[illegible]。上[illegible]之。[illegible]聞[illegible]。顯至廣東。督兵進攻。大破之。遂擒張璉。餘黨解散。其林朝曦黃啓[illegible]遁去于海島。不復敢出。捷聞。百官表賀。[illegible]遂領家卒往福建收剿。水陸賊盜數月俱平。

十一月。倭寇攻興化府陷之。初至。先犯邵武。殺指揮齊天[illegible]。[illegible]羅源連江等縣。殺主簿倪[illegible]。遂攻玄鍾所城及寧德縣入之。乘時直抵興化府。浙江參將戚繼光引兵還。遇倭自福淸東營澳登岸。麾兵擊之。斬首一百八十有奇。遂行。而閩倭至者日衆。始攻興化城不克。乃合兵薄城下。圍之且匝月。至是守城卒皆罷。賊乘其怠弛。夜以布梯傳城入之。開門放火。城中方

〔台州〕浙江省の東部に在り。

〔閩〕福建省福州府に在る縣名也。

〔乞骸骨〕骸骨は身體に同じ、官に仕ふるは君に我が身命を捧げしものなれば、官を辭するを骸骨を乞ふと云ふ、史記項羽紀に出づ。

〔陷之〕興化府の都興化を陷れし也これ倭寇の南方にて府城を破れる最初にして遠近等しく震撼せりと云ふ

〔邵武〕福建省邵武府の首都也。

〔羅源連江〕共に福建省福州府に在る縣名也。

〔寧德縣〕福建省福寧府の南部に在り

〔興化府〕福建省に在り。

〔戚繼光〕興化府の陷落は其事甚重大なるにより、世宗詔して兪大猷を總兵官となし、戚繼光を副としこれを討たしむ。劉顯また廣東の兵を率ひて來援し、倭寇を福州府長樂に邀擊す。

〔平海衞〕福建省興化府の東部海岸に在り、當時戚繼光浙江の兵を率ひて來りしより、繼光を中堅、顯を左翼とし、大猷自ら右翼に將として、此地に倭軍を包圍しこれを破る。

〔仙遊縣〕福建省の東部興化府に在り

〔英宗睿皇帝〕明第六世の皇帝也、名は祁鎭、宣宗の長子、第八世として重祚す。

知ニ賊至一。百姓恇擾。參將畢高參政翁時器悉縋レ城宵遁。同知吳世亮爲レ賊所レ殺。賊遂入ニ據府一。總兵劉顯時在ニ會城一。聞レ變來援。至則城已陷。顯大兵留ニ江西一。剿ニ廣寇一。所レ提八閩卒。不レ及ニ七百人一。且罷ニ于屢戰一。倭新至。勢衆且銳。顯知レ不レ敵。乃逼レ城爲レ營。以伺ニ賊隙一。顯有ニ威名一。興化人。初聞ニ顯至一以爲旦夕破レ賊。而相持日久。疑ニ其養レ寇懷以爲レ恨。巡撫福建都御史游震得以レ狀聞。部覆言。賊以ニ旬月內一連破ニ數城一。如レ入ニ無人之境一。師府而下職守謂。何顯ニ事急一之際姑令ニ戴レ罪立ツ功。請。調ニ新募義烏兵一枝一。以ニ戚繼光一統レ之仍起レ丁レ憂參將譚綸與ニ都督劉顯總兵兪大猷一同レ心共濟。以收ニ奇効一。上從レ之。

癸亥嘉靖四十二年夏四月。副總兵戚繼光將レ兵。大破ニ倭賊于平海衞一。是役也、斬レ首二千三百餘級。火焚刄傷及墮レ崖溺レ水死者無レ算。縱ニ所レ掠男女三千餘人一。復得ニ衞所印十五顆一。自レ是蘇州以南寇悉平。

今按。與ニ皇明通紀一同而加レ詳。

甲子嘉靖四十三年二月。福建總兵戚繼光追ニ擊仙遊縣殘倭一。大破レ之。時舊倭餘黨復糾ニ新倭一萬餘。攻ニ仙遊城一。圍レ之二日。繼光引レ兵馳ニ赴之一。大戰ニ城下一。賊敗趨ニ同安一。繼光麾レ兵追至ニ王倉坪一。斬レ首數百級。餘衆奔ニ漳浦之蔡丕嶺一。繼光督レ兵入ニ賊巢一。擒斬數百人。閩寇悉平。殘寇得レ脫者流ニ入廣東界一。掠ニ魚舟一入レ海。

今按。嘉靖四十三年。當ニ日本永祿七年一。

皇明二祖十四宗增補標題評斷實紀卷之三　粵濱臣東莞陳建纂輯　瓊山丘濬鑒定

太祖高皇帝

甲寅洪武七年八月。海上倭寇有レ警。命ニ靖海侯吳禎一。率ニ沿海各衞兵一出捕。至ニ琉球大洋一獲ニ倭寇人船一。俘ニ送京師一。

今按。與ニ明政統宗一大同。

又卷之九

英宗睿皇帝

壬戌正統七年七月。倭寇破大嵩跳諸千戸所、殺掠居民。浙江僉事陶成討誅之。

今按、與明政統宗小同大異。

又卷之十七　温陵　臣　陳龍可　彙輯　瓊山　臣　丘濬　鑒定

世宗肅皇帝

丙午嘉靖二十五年四月。倭寇浙東。自罷方舶。凡番貨至輙賒與奸商。奸商欺負。多者萬金。少不下千金。轉展不肯償。乃投貴官家。又欺負不肯償。貪戻甚於奸商。番人泊近島。遣人坐索。竟不肯償。番人乏食。出沒海上為盜。貴官家欲其亟去。輙以危言撼官府云。番人據近島殺掠人。奈何不出一兵備。害當如是耶。及官府出兵輙齎糧漏師。好語啗番人利他日貨至。且復賒我。番人大恨諸貴官家言。我貨本倭王物爾。價不我償。我何以復倭王。不掠爾金寶殺爾倭王必殺我。盤據海洋不肯去。近年官邪政亂。小民迫於貪酷。苦於徭賦。困於飢寒。相率入海從倭。凶徒。逸囚。罷吏。黠僧。及衣冠失職。書生不得志。羣不逞者皆為倭。奸細為之鄉導。於是汪忤瘋徐必欺毛醢瘋之徒。皆我華人。金冠龍袍稱王海島。攻城掠邑。刼庫縱囚。遣文武官發憤斫殺。而其妻子宗族田廬金穀公然富厚。莫敢誰何。浙東大壞。至是以朱紈為浙江巡撫都御史。兼領福興泉漳治兵捕賊。紈任怨任勞嚴禁閩浙諸通番者。時福建海道副使柯喬都司盧鏜捕獲通番九十餘人。紈欲禁止令行。遣旗牌督決于武場。一時通番稍息。而諸達官家以失利大讎。詆誣惑亂。視聽遂改。紈爲巡視未幾。言官論劾。卽訊甘心煆煉。紈慣悶卒。喬鏜皆論死下獄。自是羣盜益無忌憚矣。

〔世宗肅皇帝〕明第十二世の王、憲宗の第二子興獻王の子也。

〔浙東〕江蘇省に在り。

〔賒〕價の錢を惜みて買ふ也。

〔徭賦〕役及租也。

今按。與明政統宗比之甚詳。嗚呼斯時。明之官邪政亂。故不能柔遠人。於是行旅窮濫矣。惡人因爲黨。而擇將捕獲之。終又害將。明之邪亂如此。何以令四方觀中國光乎。

己酉嘉靖二十八年六月。日本遣使周良等入貢。宴賞有差。

今按。皇明通紀　等書無此事。

甲寅嘉靖三十三年四月。倭犯嘉興。都指揮周應禎指揮季元律等死之。○倭陷嘉善。○倭薄通州。楊州衞千戶洪岱以兵援之。戰死。○倭夜襲崇明。知縣唐一岑死之。

今按。倭陷嘉善。皇明通紀作倭寇分掠嘉湖。

乙卯嘉靖三十四年四月。文華至松江祭海神。會狼兵方應調至。副總兵俞大猷遣游擊白泫等。嘗賊稍有斬獲。文華因厚犒之。激使進勦。至漕涇。遇倭數百人戰敗。頭目鐘等死之。文華固急督戰。冀掩爲功。經謂宜得保靖兵至合力夾功。庶保萬全。文華因强。經不聽。文華遂銜經。

今按。宜參考明政統宗。

五月。倭寇四千餘云云。賊奔歸柘林。

謹按。自有倭來用兵東南。未有如此之捷者。然。文華論經玩寇殘民之疏則已上矣冤哉。

今按。見皇明通紀故略此。

遣官校逮張經李天寵。及參將湯克寬。俱械繫來京論死。經上疏自辨。不報。○倭寇當熟。知縣三鐵禦之。鄉官錢泮率民兵追賊于上滄港。爲賊所掩擊俱死之。事聞。贈鐵太僕少卿。泮光祿少卿。各蔭

〔犯嘉興云々〕此時倭寇は正月大倉に入り蘇州、松江を掠めて江北に趨り、江蘇省の通州に迫り、四月に入りて浙江省嘉善を陷れ、更に蘇州を經て崇德縣に入り六月浙江省嘉興府の首府嘉興を燒く當時海防の任に當れる浙江巡撫王忬茫然爲す所を知らず、李天寵代つて任に就き、兵部尙書張經また出でて江南の野に浙江、山東、福建、湖南の諸軍を督するに至れり。

〔文華〕工部侍郎趙文華也。

〔經〕張經也。

子錦衣百戶。立祀死所。

六月。倭據江陰蔡涇閘。知縣錢錞率狼兵禦之。遇賊于九里山。賊伏發。狼兵悉奔。錞及民兵死于賊。事聞。賜錞光祿少卿。蔭子國子生。立祠死所。

七月。倭突入歙縣。流劫績溪等縣。蕪湖縣丞爲賊所殺。犯江寧鎭。指揮朱襄戰死。亡卒三百餘人。○倭犯南京。

八月。都御史曹邦輔圍賊于滸墅關。賊殊死格鬪。殺指揮張大綱。士卒多傷亡。時僉事董邦政把總婁宇督沙兵守滸宅。邦輔救之助剿。一戰斬首十九級。賊奔吳舍。追盡殲之。文華欲攘其功。至則邦輔已奏捷矣。啣甚。已而欲倖剪殘孽。自將四千人。約邦輔會剿。同力進兵。賊盡銳衝。文華所統兵死者千餘人。師大潰。文華益懸憤。乃疏邦輔邦政避難趨易。僥倖成功。乞加重究。詔下邦政于總督逮問。

十月。倭始犯福建。犯平陽。

戊午嘉靖三十七年二月。寇入蘇松。參將戚繼光率兵捕之。又遣把總方以中破賊巢營。焚燬無餘。賊酋汪直無依。又勾引倭寇福建。伎掠以償所失。

三月。賊酋汪直寇福建。都御史阮鶚從謀士林念謀。謬用漢左弭之術。以金花賈陣。賊酋密與鶚約令。引軍出戰。彼即遁去。使得成功。由是冒殺商賈漁樵之民。共二百五十餘級。稱功論賞。百姓苦不能當。科臣劉祐劾阮鶚十大罪。一曰。賈和倭賊。云云 九曰。倭寇作亂不報。云云 奏上。擬斬市。鶚密遣林念賫金賂嵩乞命。嵩納之。鶚將斬。乃乘間言於上。遂削鶚籍。四月漳倭大至。犯浙福沿海郡邑。

〔江陰〕江蘇省の縣名、長江の右岸也。
〔蔡〕河南省汝寧府蔡州也。
〔涇〕湖北省の一府涇州也。
〔曹邦輔〕應天の巡撫也。
〔追盡殲之〕此時の倭寇の一隊僅に六七十人、全滅するまで前後八十餘日經行蹂躪數千里殺傷四千人と傳ふ
〔汪直〕安徽省歙縣の士、五峯船主と號し、寧波に海外貿易を營み巨財を積みしが嘉靖二年以後通商國禁の後轉じて密貿易を行ひ、更に部下を率ひて平戶に航し我國の浪士等を集め文武の職制を立て自ら徽王と號し、支那沿岸に掠奪を行へり。

陷福淸。執知縣葉宗文。毀庫獄。大肆殺擄、攻惠安殺知縣林成。
己未嘉靖三十八年四月、先是江北兵備劉景韶以遊擊丘陞等擊原駐白蒲倭。一戰于丁堰。再戰于如皐東。三戰于海安。皆捷。共斬首百餘級。及至于大聚謀犯揚州。景韶復督陞等擊敗之。斬首八十級。焚死一百七十人。賊奔入潘家庄。盡銳攻之、復斬首一百二十八級。倭賊喪氣。

今按。皇明通紀。明政統宗所無、故載之。

又卷之二十

神宗皇帝

壬辰萬曆二十年四月。日本酋平秀吉方破朝鮮。東方復洶洶。五月命將出師援朝鮮。而西夏方用兵、倭大入朝鮮。數告急。朝鮮卽古高麗、與遼壤接壤。脩貢謹、輿地延袤六千里。三都八道饒庶有華風。然承平久、懦不習戰。其王李昖湎于酒。而倭酋關白平秀吉起人奴簒立。以梟傑雄六十六州。善用兵。朝鮮釜山去日本對馬島不遠。向有倭戶流寓。往來互市通婚媾。因聞朝鮮弛備。于四月閒分遣巨酋行長淸正義智妖僧玄蘇宗逸等。擁舟師數百艘。徑陷慶尙道。逼釜山鎭。五月濟渡臨津。掠開城。分陷豐德諸郡。朝鮮望風潰。倉卒棄王京。令次子琿攝國事。奔平壤。已復走義州。願內屬倭。遂渡大同江。繞出平壤西界。是時朝鮮八道幾盡沒。王子就俘。旦暮渡鴨綠。則釁且中于遼。請援之使趾相錯也。廷議、以朝鮮屬國爲我藩籬。必爭之地。遣行人入薛藩。諭其王匡復。揚言天兵十萬已環甲。方檄海外琉球暹羅諸國擣倭穴。遼鎭先發游擊史儒等。以偏師訪義州。已遣遼陽副總兵祖

〔神宗皇帝〕明第十四世の皇帝、名は翊鈞、穆宗の子也。

〔梟傑〕梟は健也、猛く秀れしを云ふ。

〔六十六州〕天長元年以後我國の國數也、且し壹岐對馬を除く。

〔望風〕樣子を望み見る也、阮籍の賦に、望風震服と見えたり。

〔倉卒〕急遽の貌也

〔藩籬〕藩は屛、籬は垣也、依て屛垣等の家を守るが如く、宗家の守護となるべきものを云ふ。

承訓統兵三千餘。渡鴨綠援之。

今按。萬歷二十年。當日本後陽成天皇文祿元年。平秀吉。豐臣秀吉也。秀吉數改姓。始稱平。中稱藤原。終稱豐臣。破朝鮮評見圖書編今按。釜山在慶尚道。東萊南二十一里。行長小西攝津守。淸正加藤主計頭。義智宗對馬守。開城豐德俱在京畿道。平壤義州俱在平安道。王子就俘。僧淸韓撰淸正挽詞云。王子兄弟。長曰臨海。次曰順和。走出會寧。因茲淸正追到永安。圍會寧城。會寧城中數萬兵甲擁衛王子。堅守城壘。矢石交下。火箭屢飛。淸正胸中何爲芥蔕。城中一人單刀直入。生捉王子。王子伏首服威就擒。城中兵甲狗奔。鼠竄。已爲烏有。護軍節度后妃媵妾。共生擒之。護送京城。後出釜山。燕丹在秦。宋徽在金。寔可想見。終軍長纓以羇越王致之闕下。亦何異之。會寧在朝鮮咸鏡道。或曰。淸正因二王子于兀良哈者非也。兀良哈女眞之地。挽詞以。淸正生捉王子而後及七日程。直入女眞。拔城振威。明年淸正依秀吉命放還二王子于京。王子等與淸正盟書曰。兩王子臨海君。順和君。兩府夫人。陪官長溪君。上洛君。行護軍大將。南兵使等。自壬辰年七月廿四日被擄日本大將計頭淸正。入城相見。卽加禮遇。一行下人幷給衣粮。撫恤頗至。又禀于關白殿下到釜山浦。還許放還京城。其慈悲如佛。眞箇日本中好人也。況素聞關白殿下雄桀無比。四隣皆畏之。且善於分別。待隣國王子諸官稍存舊意。憐其渡海。使復于京。其恩厚與北海俱深。一行之人其敢或忘。後日若對日本及計頭。復發雜談少有背負之意非人情也。天地鬼神共知之矣。脩好之日。通書寄情事。萬曆廿一年六月初六日。臨海君。順和君。長溪君。南兵使行護軍。鴨綠事。見續文章正宗今

〔後陽成天皇〕陽光院誠仁親王の第一王子、御名を周仁と申す、第百七代の天皇也。

〔東萊〕釜山の西北にて、釜山と梁山との間に當る。

〔開城〕京畿道に在る高麗の舊都也。

〔會寧〕咸鏡道北部に在る朝鮮六鎭の一、圖們江岸に位し滿州間島に近し

〔燕丹〕燕の太子也嘗て秦に質たり、秦王禮せず依て怒りて逃れ歸る。

〔宋徽〕宋第八世の皇帝也、欽宗靖康元年金大擧して入寇し、徽宗欽宗及后妃を執へて北に歸る。

〔員外郎〕郎の定員外に設けし官名、後世郎中の下、主事の上に位す、事物紀原に、隋開皇三年、尙書二十四司各々置員外郎一人、以司其曹帳籍、則郎置員外、自隋文帝始也、と見えたり。

〔緩急〕危急と云ふが如し、緩の字は帶說とて其意輕し、史記袁盎傳に出づ。

〔山海關〕支那直隷省と滿洲との境なる萬里長城の基點に在り。

〔羽檄〕急事の信書也、魏の武帝の時急事は鷄羽を挿みて奏せよと云ひし故事に起る。

按。

七月十六日。援師至安定攻平壤。時霖雨。我師不諳地利。馬奔逸不能止。爲倭擊盡殪。史儒死之。祖承訓僅以身免。報至。朝議震動。請上登萊天津旅順淮陽所在添募設防。○命兵部尙書石星度越江事。倭且疲奔。命募能入倭關說者。于是游客沈惟敬請往。宜諭。以數騎奔倭營。刺情形。歸報。星大惑之。以侍郎宋應昌爲經略。員外郎劉黃裳主事袁黃爲贊畫。石星以沈惟敬可佐緩急。題假游擊赴軍。前請金行間。

今按。行長督二萬兵固守平壤。史儒昇祖承訓攻平壤。行長夜遣步卒惱之。明兵騷亂。行長悅曰。明兵不足畏也。翼日行長進擊之。甲胄馬具旌旗皆鮮麗。明馬大驚奔。史儒昇等命軍士下馬相戰。泥土沒腰不能進步。行長大勝之。史儒昇死。祖承訓遁。於是大明震動。宋應昌等抵山海關。袁黃。字了凡。撰綱鑑。時爲贊畫來于朝鮮。日本人到于今語黃事。

十二月。先是宋應昌抵山海關。以徵調未集。而大將軍李如松亦未至。因謬借惟敬縻倭西向。至是李將軍始至軍。而惟敬歸自倭稱。行長願退平壤。遁西以大同江爲界。李將軍策倭多詐。大方寒。我師利速戰。遂置惟敬標營。于二十五日誓師渡江。○逮楊應龍詣重慶。對簿繫論。法當斬。請以二萬金贖。御史張鶴鳴方駁問。會倭大入朝鮮。羽檄徵天下兵。應龍因懇辦。願自將五千兵報効。詔可。釋回播啓行。尋報罷。巡撫王繼光至。嚴提勘結。遂抗不復出。而張時照等復詣奏闕下。巡撫王繼光乃一意主勦。尋得旨戒以貪功妄殺。

〔李如栢〕副總兵官署都督僉事にして此時中協大將也。

〔吳惟忠〕欽承統領浙江遊擊將軍也。

〔黎明〕黎は比也、夜明の比を云ふ。

〔梟騎〕鋭兵也、漢書高帝紀に「北豹燕人、來致梟騎助漢」と見えたり。

〔碧蹄館〕京畿道高陽に在り、京城の北四里餘の地也。

今按、宋應昌欲與日本決戰、執沈惟敬。石星欲和議、謬借沈惟敬、詳見獻徵錄。

癸巳萬曆二十一年正月平壤大捷。我師于初四日抵肅寧館。倭酋行長遣將吉兵衞三郎餘倭二十一人、同通事張大膳來安定。聲迎沈惟敬窺虛實。李將軍檄游擊李寧生縛之。倭猝起格鬪。止獲吉酋三輩。李將軍按寧申令。一軍股栗。六日抵平壤。度地形東南並臨江。西枕山陡立而迤。北牡丹臺高聳、最要。二倭列拒馬地砲以待。遣南兵試其鋒、佯退。是夜倭襲李如栢營。擊卻之。李將軍因部勒諸將、諭無割級。攻圍止缺東面。屬游擊吳惟忠攻牡丹峰。陰取西南、以倭易麗兵、令祖承訓等僞效裝潛伏。八日黎明鼓行抵城下。倭砲矢如雨。軍稍卻。李將軍手戮一人。我師氣齊奮、聲震天。倭方輕南面為麗兵。承訓等乃卸裝露明盔甲。倭急分兵拒堵。李將軍已督楊元等從小西門先登。李如栢等隨從大西門入。火藥並發、毒烟蔽空。方戰酣時、吳惟忠中鉛洞胸、血殷踵。猶奮呼督戰。而李將軍坐騎斃于砲。易馬馳、墮塹、鼻端出火。麾兵愈進。我師無不一當百。前隊貿首。後勁已踵。突舞于堞。倭遂氣奪宵遁。凡得級千二百八十五、殲酋宗逸平秀忠平鎭信。餘死于火。及從東城跳溺無算。腥聞十里、寘奇捷也。參將李寧查大受等、率精兵三千、前伏江東僻路。得獲級三百六十二。生擒三倭。乘勝追襲、十九日、李如栢遂奪開城、得倭級百六十五。朝鮮郡縣如平安黃海京畿江源四道並復。王歸平壤。惟咸鏡道為倭酋清正拒守。聞開城已破、則並奔王京。王京為朝鮮都會。左江源。右黃海。南全羅。東慶尚咸鏡。忠清為之犄角。頗據有天險。而我師既連勝、有輕敵心。二十七日、去王京九十里。李將軍引梟騎二千、前往踏勘、至碧蹄館。猝遇倭圍數重。李將軍督將士殊死戰。從巳至午。一金甲倭前搏李將

〔飛樓〕敵狀を視察する車也、六韜軍略篇に、「視城中」則有飛樓、とあり

〔立花宗茂〕道雪入道鑑連の養子、天正十三年家を嗣ぎ十五年筑後國十三萬二千餘石を食み柳川城主となる。

〔久留米秀包〕毛利元就の第九子也、天正十五年久留米城に治し、侍從に任ぜらる、依て久留米侍從と號す。

〔元康〕毛利元就の第七子也。

〔吉川〕元春の第三子廣家也。

〔黑田〕孝高（如水）の子長政也。

軍急。賴指揮李有昇死護、刃數倭。竟中鈎墮、爲倭支解。李如栢李寧等乃奮進擁火擊。李如梅箭中金甲倭墮馬。合楊元援兵砍重圍入。倭遂潰。而我精鋭亦多喪。天且雨。近王京平地俱稻畦。冰解泥深。騎不得騁。倭背岳山、面漢水、連珠布營。城中廣樹飛樓。鳥銃自穴中出。應時斃。我師乃退駐開城。

今按。萬曆二十一年。當日本文祿二年。一金甲倭前搏李將軍急。毛利家記等皆曰。小早川隆景屯開城。初牡丹峰之敗、諸將入王京。諸將亦勸隆景入王京。隆景不可。於是石田三成增田長盛・大谷吉隆。及立花宗茂。久留目秀包等從之。隆景乃分所率兵爲三列。一列者粟屋四郎兵衞。其兵三千。二列者井上五郎兵衞。其兵三千。三列者隆景。其兵一萬。次立花宗茂。其兵二千五百。久留米秀包。毛利大藏少輔元康。其兵六千。在隆景陣旁。既而隆景以粟屋井上兵爲一列。從立花宗茂後。李如松先陣與宗茂郎等十時傳右衞門交鋒。傳右衞門死之。明人亦多死。李如松督將士殊死戰。隆景指揮其兵。雷奔電激。縱横衝戰。諸軍大挑戰。此地至王京。吉川。黑田。大谷。增田。石田戮力在焉。次宇喜田等凡八萬餘圍李如松。明兵大破。如松落馬。井上五郎兵衞見之知其爲大將。驅馬前搏之急。賴李有昇護扶如松。乘之於他馬。而逃去。井上不得遂其志。切齒悔怒。一金甲乃井上也。諸將欲追如松。隆景制之。即歸王京。

二月。時諜者言。王京倭二十萬。且聲關白揚帆入犯。經略急檄劉綎陳璘水陸濟師。上發帑金二十萬兩佐軍興。李將軍分留。李寧祖承訓等以萬衆駐開城。命楊元等軍平壤。扼大同江接餉道。李如栢等軍寶山諸處爲聲援。査大受等軍臨津。而身自東西調度聞。倭將平秀嘉據龍山倉。積粟可數

十萬。密令査大受選死士。從間道縱火焚蕩俱盡。倭乏食。〇東師議欵。初我師捷平壤鋒鋭甚。轉戰開城勢如破竹。全羅閑兵亦積獲。殺不復問欵。及碧蹄敗衄氣大索。久頓師絕域。海氣蒸濕。瘟疫盛作。急圖休息結局。于是惟敬欵議始用。而倭芻糧並燼。衆生悪猶。聞我師發虎蹲等砲。及戰車引江上。聲日張。其留行長亦懲平壤之敗。有歸志。惟敬舌端靡靡可聽。因得乘機張翕。而封貢之議自此起。經略既得請于朝。故不窮追。且得倭報惟敬書。乃令金守濬擊周弘謨令惟敬往諭倭歸王京返王子。如約縱歸。倭果于四月十八日棄王京遁。李將軍與經略以翌日入。所餘米荷四萬餘包。芻荳稱是。因以大兵臨漢江尾倭後。計乘間擊惰歸。而倭步步爲營。用分番休迭法以退。別將劉綎帥兵五千趁尚州鳥嶺。鳥嶺廣亘七千餘里。懸崖巉削。中通一道。如綫。灌木叢雜。騎不得成列。倭尚拒險。而別將査大受祖承訓等繇一道踰槐山出鳥嶺後。倭大驚。前移釜山浦。築居屯種。爲久戍謀。我師乃張疑兵。分遣劉綎祖承訓等屯大丘忠州。檄調全羅水兵艤船分布釜山海口。時倭已去王京渡漢江以南千有餘里。朝鮮故土奄然還定。兵科右給事中侯慶遠謂。我與倭何讎。爲屬國勤教道之師。以力爭平壤。以權收王京。孚爾都援之。存亡興滅義聲振海外矣。全師而歸。所獲實多。上乃諭朝鮮王還都王京。釐師自守。我各鎭兵久疲海外。以次撤歸。經略疏稱。釜山雖瀕南海。猶朝鮮境有如（本ママ、）倭。覬戎罷兵。突入再犯。朝鮮不支。前功且棄。考輿圖。朝鮮幅員東西二千里。南北四千里。從正北長白山發脉。南跨全羅界。向西南止。日本對馬諸島偏在東南。與釜山對。倭船止抵釜山鎭。不能越全羅至西海。蓋全羅地界直吐正南。遮西與中朝對峙。而東保劍遂。與日本隔絕不通海道者以有朝鮮也。關

〔瘟疫〕疫病也。

〔封貢之議云々〕慶尙、全羅、忠清三道を割讓し秀吉をして王たらしめんとする也。

〔漢江〕源を五台山に發し、江原慶尙京畿を流れて黄海に注ぐ。

〔尾倭後〕和議成り李如松京城に入るや大臣柳成龍日軍を追擊せんことを請ふ、李如松やむを得ず故らに行軍の步を緩めこれを追ふ、日軍去つて十數日の後也。

〔龜船〕李舜臣の創造せる軍艦也、其上を板にて鋪し龜甲の如くし左右前後に火砲を設く。

自之圖朝鮮意實在中國。我救朝鮮非郷鄰鬬比。朝鮮固則東保薊遼並無虞。京師鞏于泰山矣。今日撥兵協守爲第一策。卽議撤正少需時日。俟倭盡歸量留防戍。部覆南兵暫留分布朝鮮。量留精兵三千。書後餘盡撤如前議。

六月沈惟敬歸釜山。同倭將小西飛彈守來請欵。而倭隨犯咸安晉州逼全羅。聲復漢江以南。以王京漢江爲界。全將軍計。全羅饒沃。南原府尤其咽喉。乃命李平胡杏大受阨南原。祖承訓李寧移南陽。劉綎移陝州。已倭果分犯。我師並有斬獲。兵科都給事中張輔之謂。倭聚釜山。原狩退誘中朝撤兵圖漸逞。無故請欵非人情。今猝犯晉州。情形悉露。宜責簡制征剿遼鎭。都御史趙燿亦報欵。貢不可輕許。會七月十九日。倭從釜山移西生浦。送回王子陪臣。而我師久暴露。一聞撤勞難久羈。經略乃請留戍全羅慶尙云。是時石司馬一意主欵。議撤兵省餉。而經略以師老無成功亦願。借倭退弛担。因謬依違其間。欵策倭多詐。每陳兵難盡徹狀。陰事疑而諱言欵。局委揭前後異同。終無堅決。

甲午萬曆二十二年五月。閣臣王錫爵献忠疏十二欵。云云 一備倭處曰。今天下爭談兵矣。以臣愚見。遼東之患不必在倭而在虜。倭之患不必在北而在南。馭之之策不在欵與戰而在備。備之之策不在添兵而在練兵。○議日本封貢。而總督疏請封貢。並許。上命九卿科道會議。先是惟敬歸自倭營。卽有和親之說。詭云。和好親密。儀制郎中何喬遠等忿請罷封。至是給事中林材參督臣明欺御史唐一鵬參李如松開封釁。而遼東都御史韓取善疏。倭情未定。請封貢並絶。石司馬亦張皇恐。關白不能就羈縻。會九月朝鮮疏請。許貢保國。上始切責群臣阻撓封貢。本兵不能主持。追褫御史郭實等。詔

〔中國〕世界の中央に位する國の義にて、支那人が自國を稱する語也、書經梓材篇に「皇天既付中國民」とあり。

〔部覆〕伏兵を手わけして置く也。

〔王子〕二王子にて臨海君、順和君をいふ。

〔陪臣〕君主を有する臣屬に對して更に臣屬の禮を取る者、卽ちまたげらいをいふ。

〔萬曆二十二年〕我が文祿三年也。

〔九卿〕九人の大臣にて、漢代に九卿の名始めて見えたり。

小西飛入朝決計。石司馬優過如王公。小西飛等殊揚揚過闕不下。既集多官面譯。要以三事。一勒倭盡歸巢。一既封不與貢。一誓毋犯朝鮮。並無異意。以聞。上復命于左闕詳定。語加周複。大略主請封。如石司馬旨。時甲午十二月二十日也。上乃定封議。命臨淮勳裔李宗城充正使。副以都指揮楊方亨。同沈惟敬往。

今按。萬曆二十二年。當日本文祿三年。

乙未萬曆二十三年正月。議日本封事。時禮部議。日本原有王。永諗存亡。關白或另擬二字。或即以所居島封之。行長以下量授指揮銜賞賚有差。上竟准日本王號。給金印。行長准授都督僉事。已總督傳諭。行長語枝梧。且日本王見住山城。行文祿三年曆。可證。與小西飛稱國王爲信長所弑互異。乃與遼鎮都御史李化龍疏文可疑。王可慮。謂倭不識漢字。恐中間兩相欺紿。請從禮部量封秀吉順化王。罷遣沈惟敬。增募水兵。而清正素不服關白。與行長不相能。可用魯連諭燕將計。時封使已發。竟不從。偵倭坐營。陳雲鴻報。熊川島倭船三十六號。業起行歸巢。石司馬遂信。封事必成矣。

今按。萬曆二十三年。當日本文祿四年。日本王見住山城。行文祿三年曆。此言能中。日本開闢以來君之子。世爲天皇。自桓武天皇都山城。當時後陽成天皇在位。年號曰文祿。有曆博士。作曆施行于天下。與小西飛稱國王爲信長所弑互異。尤是。飛州語詳平壤錄。在後。飛州所稱詐也。初征夷大將軍足利義晴。爲陪臣三好長慶所弑。時織田信長立義晴弟義昭。爲征夷大將軍。以報兄讐。其後義昭忘恩欲亡信長。信長放義昭于槇島。飛州影略此義。詐稱國王爲信長所弑。武備志曰。信

〔面譯〕會談する也

〔封事〕封じて上奏する上書也、漢書霍光傳に「上令吏民得奏封事」と見ゆ。

〔禮部〕唐代にありては、禮式、祭祀、貢擧等を掌りし官にて、我が式部官の如し。

〔諗〕爾雅釋言に「念也、注に、相思念也」とあり。

〔枝梧〕さからふ事抵抗する也。

〔曆博士〕陰陽寮の官人にて、天文を卜して密封奏聞し兼て天文生を教授するを掌る。

長逵據二十餘州。殺其主。此亦本于飛州詐。訛傳爲殺其主。倭不識漢字。無中間兩相欺紿。此語亦好。當時不知文字者比比皆是。故行長以封王二字爲封秀吉于大明皇帝之義。勸秀吉施師。如三奉行皆以爲是。實沈惟敬飛州等知其不學而相欺也。淸正素有大志。將一擧攻戰。以行長主和卑之。意甚不平。故曰不服關白與行長不相能。

七月廿四日。總督以聞。是時倭氛未靖。大司馬欲緩應龍攻。圖專事東方。

丙申萬曆二十四年正月。先是東封之使久稽。觀望訛傳不一。至是方抵釜山。而沈惟敬又詭云演禮。同行長先渡海。私奉秀吉蟒玉翼善冠。及地圖武經。又驅壯馬三百南戈崖。騎從陰獻秀吉。娶阿里馬女。與倭合。宗城故紈袴子。誅親從。言倭叵測。四月三日棄使易服。弃印勅遁。遼撫鎭馳奏。併報惟敬就縛。上逮問宗城議戰守。會副使楊方亨受惟敬議。揭倭情無變。改命科臣往。廷臣交章請罷封。上責規避抗違。下御史曹學程于理。竟以方亨充使。加惟敬神機營銜爲副。惟敬因得舞智揣摩。巧完封局。弄司馬股掌矣。

今按。萬曆二十四年。當日本慶長元年。

又卷之二十一

丁酉萬曆二十五年二月。復議東征。時封事已壞。而楊方亨詭報。去年六月十五從釜山渡海。九月二日于大阪受封。即以四日回和泉州。然倭責朝鮮王子不往謝。留釜山如故。謝表後時不發。方亨徒手歸。至是沈惟敬始投表文。案驗。潦草前折。用豐臣圖書。不奉正朔。無人臣禮。而寬奠副總兵馬棟

〔三奉行〕石田三成、大谷吉隆、增田長盛の三人をいふ。

〔紈袴子〕白きねりぎぬの袴地、支那にては貴族子弟の用ふる物なれば、貴族の子弟に轉用して、「在紈袴之間」などいふ

〔不奉正朔〕正は正月、朔は朔日、即ち年の始と月の始との義より暦をいひ、支那にて新たに帝王が國を建てたる時は、その定めたる暦を天下に公布し、國民之れを遵奉する也、故に臣民となるを奉正朔といひ、茲は不奉なれば臣民とならざる也

報清正業擁二百艘屯機張營。方亭始直吐顛末委罪惟敬。幷本兵前後手書進御覽。而惟敬辱囚。及本兵彌縫罪狀。奉旨勘如律。于是以總督尚書邢玠經略麻貴從經綏改備倭爲大將軍。而經理朝鮮。時勅僉都御史楊鎬天津亦開府中贊畫。

謹按。初惟敬本一無賴。石司馬謀中其游說。信以息兵。首鼠兩端以貽國而竪子持議。遂曾通國之言藉口省倘盡徵成兵。欲倚小人成功難矣。且使事不成亦猶可也。數遣心腹偵探。復飾詞迷惑自甘欺罔。至欲媢上。以珍珠貨賄結東廠管校擁官。告言老而天奪其魄。惟敬小人何所不至。合早如進皆撫言罪遣。而劉綎吳惟忠等陷攻下。無撫小不至請張潰裂也。大臣謀國。惟公與盧難矣哉。蓋前後凡七年而邢司馬奏殲倭海上。

今按。萬曆二十五年。當日本慶長二年。大阪當作大坂。于大坂受封非也。于伏見見楊方亭。沈惟敬也。回和泉州。此時唐書來于和泉界。故去時亦回于此也。秀吉以楊方亭等所齎來明帝璽書。令禪僧知漢字者讀之。聞以秀吉封日本國王事。大怒曰。我元自主日本。何假明王書乎。乃擲璽書于地。再發兵征朝鮮。沈惟敬恐得罪于明。僞撰秀吉謝表。楊方亭直吐顛末也。

五月九日。麻將軍貴抵遼陽。十八日望鴨綠。東發所統兵。止萬七千人。請濟師。經略疏請募兵。川浙幷調薊遼宣大山陝兵。朝鮮惟閑山水兵一枝稍勁。請益調建吳淞水兵。而劉綎督川漢兵六千七百聽防勦。與麻貴各建牙。麻將軍密報。候宣大兵至。乘倭未備先取釜山。經略謂。一取釜山則行長擒。清正走。此奇着快人。

六月。倭數十艘先後渡海。分泊釜山。加德。安骨等處。於九如雨。殲朝鮮都守安弘國。已復往來竹島。漸逼梁山熊川。初沈惟敬率營兵二百出入釜山宜寧。與倭合換事不諧。便擧足入倭。經略向切齒

〔機張營〕今の慶尙南道の地にして、釜山の東北、蔚山の南に當る。

〔石司馬〕石は姓、名を星といふ、司馬は軍事を掌る官名也。

〔禪僧〕舜興といふ僧也、舜興は近江國栗田郡常磐村大字蘆原にある觀音寺の住僧、舜興を通事として秀吉が明の使者と面謁したる事太閤記に詳しく見えたり。

〔加德〕加德島にて馬山沖の海中、洛東江の河口に在り一名唐島ともいふ

〔梁山〕今の慶尚南道の地にて、釜山の北方、洛東江の沿岸に在り。

〔慶州〕今も尚ほ慶州といひ、慶尚北道の地にあり。

〔柳川豐前守〕立花宗茂をいふ、筑後柳川の城主にて、後ち四位侍從となり、飛驒守と稱す。

〔犄角〕互に相寄る義にて、五分々々の勢力をいふ。

〔斗粮〕一斗の粮の義にて、僅かの兵粮をいふ。

〔稷山〕今も稷山といひ、忠清南道の地に在り、毛利秀元第二軍の最後の進軍地たり。

謬爲慰藉。惟敬漸移南原。去釜山七百里。經略卽以屬楊元。先假吏換撤其營兵。後惟敬聞上罪石司馬。而倭酋平調信率兵進犯。乃爲起宣寧。會行長之說暗欲走倭。調信果以倭五百來迎。楊元聞卽襲執之。惟敬執而倭嚮道始絕。倭已奪梁山占三浪。則遂入慶州侵閑山。

今按。平調信。柳川豐前守。

七月十五夜襲閑山島。統制使元均風靡遂棄閑山要害。倭駐巨濟。閑山島在朝鮮西海水口右障。南原爲全羅外藩。一失守則沿海無備。天津登萊皆可揚帆。而我水兵止浙三千。甫抵旅順。經略檄且哨且行。赴閑山協守。閑山破則守王京以西之漢江大同江。扼倭西下。兼防運道。八月十二日。倭圍南原。守將楊元本債帥。無固志。十六夜。倭犇乘城。元驚起帳中。跣足遁。時全州有陳愚衷。忠州有吳惟忠。各扼險。而全州去南原百餘里。勢相犄角。愚衷初至州無斗糧。及勸十里外山寨中多貯米荳弓矢。蓋朝鮮苦我兵甚于倭。不欲在州遣貯山谷者。恐倭至反爲寇助也。南原告急。愚衷懦不發兵。聞已破而州民爭竄。棄城去。麻將軍急遣游擊牛伯英赴援。與愚衷合兵屯公州。倭遂犯全羅。逼王京。王京爲朝鮮八道之中。東隘爲鳥嶺忠州。西隘爲南原全州。道相通。自一城失東西皆倭。我兵單弱。因退守王京。依險漢江。麻將軍日夜遣後通我師。防倭暗襲。而發兵守稷山。朝鮮亦調都體察使李元翼。由鳥嶺出忠清道。遏賊鋒。經理身赴王京。躍馬誓以死守。人心始定。九月。副將解生游擊牛伯英頗貴于稷山水源設伏。各有斬獲。參將彭友德等亦報追倭至青山獲級首百十六。軍聲益振。經略乃移郎中董漢儒屯義州。海防使蕭應宮屯平壤。又聲言調南北水陸兵七

十萬。且暮至。[illegible]水兵直搗。日本倭聞風遂不敢進。行長奔井邑。離王京六百里。清正歸竹嶺奔慶尙。離王京亦四百里。

十一月經略邢玠以二十九日至上京。共議進剿。而所調宣大延綏諸路兵並集。乃分三協。左李如梅。右李芳春。解生中高策。並以副總兵分將。時監軍爲御史陳效。上復賜經略尙方劍。重事權。經略乃令麻將軍同經理楊鎬左右協。自忠州鳥嶺向東安。趨慶山。專攻清正。恐行長自西來援。令中協兵馬遏宜寧。東援全羅。西扼全羅援倭。又于三協中摘馬兵千五百。同朝鮮合營。由天安全州南原而下。大張旗鼓。詐言先南攻順天等處。以牽行長。我師陸路粗備。獨水兵陳璘未至。既大聚兵。經略與麻將軍。于十二月二十日會慶州。探倭屯蔚山。蔚山之南島山並不甚高。而城皆依山險中。一江通釜寨。其陸路開山谷通釜山。恐釜山倭由彥陽來援。令中協高重吳惟忠等扼梁山。左協董正誼遮南原。右協盧繼忠兵二千屯西江口。防水路援。于二十三日從蔚山進攻。遊擊擺賽以二千騎誘倭。入伏斬級四百餘。倭盡奔島山。于前連破三寨。翌日遊擊茅國器統浙兵先登。破倭之後。殺六百六十一。倭堅壁不復出。島山距蔚高石城新築堅甚。我師仰攻多損傷。諸將曰。倭艱水道。餉[illegible]。第圍守之。清正可不戰縛也。經理以爲然。分兵圍十日夜。倭至嚼紙充饑。先用礮者倭從隙用鐵發命中。彈皆碎鐵。鐵爲之中多兼雙踐我師稍怠。佯約降緩攻。而行長來援。行長亦虞我襲釜營。止選銳倭三千。虛張幟於江上。頃之經理聞報。即令皇撤兵。倭襲兩協。棄輜重無算。經略乃移各兵回王京。圖再舉。而贊畫主事丁應泰疏劾。經理楊鎬喪師黨散。上罷鎬。命兵科左

〔竹嶺〕慶尙北道內にありて、鳥嶺の東北に當る。

〔進剿〕進擊してみなごろしにする義なり。

〔鳥嶺〕忠清北道の地にあり。

〔彥陽〕慶尙南道の地にて、梁山の北方に在り。

〔[illegible]〕玉篇に「古文觀字」とあり。

〔礮〕字會に「俗作砲、機石也」あり、彈機にて石をはじき飛ばして敵を攻むる武器、今の大砲の如きもの也。

給事中徐觀瀾往勘。併劾大學士張位閣臣以位密揭薦鎬奪情破倭。今乃朋欺債事故也。

戊戌萬曆二十六年正月東征經略以前役缺水兵無功乃益募江南水兵講海運。爲持久計。

今按。萬曆二十六年。當日本慶長三年。

二月。別將陳璘以廣兵劉綎。以川兵鄧子龍。以浙直兵先後至。而天津巡撫都御史萬世德代楊鎬。或語經略。朝鮮地里隔遠。山水險阻。兵聚一處難以成功。不若因地分任人。自爲戰守。經略然其謀。分三協爲水陸四路。路置大將。中路李如梅。東路麻貴。西路劉綎。水路陳璘。各守信地相機行剿。時倭盤據朝鮮七年。沒海千餘里。亦分三窟。東路則清正據蔚山。自去冬攻圍益增築。西生機張在在屯兵。而恃釜山爲根本。西路則行長。據粟林曳橋建堅砦數重。憑順天城。與南海營相望。負山襟水。最據扼塞。中路則石曼子。據泗川。北恃晉江。南通大海。爲東西聲援。薩摩州兵剽悍稱勁敵。而行長水師番休。濟餉往來如駛。尤倭繫重。經略懲島山之失。特于三路外置水兵。一路約日並進。而中路李如梅尋調遼師。以董一元代。

今按。石曼子。島津和訓志摩圖也。晉近。此役島津義弘及子忠恒屯於泗川。南浦文集曰。戊戌之秋。大明率數十萬之兵來求和睦。日域諸軍亦相議以和。我泗川亦欲擇日而修會盟。小春之朔。大明兵僞攻我泗川。我不得已。纔以一萬餘兵相戰。當其兵刄既接也。大明兵棄甲曳兵而走。我軍士乘勝追亡。斬獲甚多。大明參謀大夫龍涯乞降於我。義弘父子謀曰。武豈可久黷乎。竟應參謀之求。執其將茅國科爲質。載之全師歸于日本。

〔浙直兵〕浙江、直隷兩省の兵也。

〔巡撫〕總督の次に位して一省の民治兵制を掌る官也。

〔順天城〕全羅南道にて、濟州海峽に臨む。

〔泗川〕慶尙南道の地内にて、晉江の沿岸に在り。

〔晉江〕源を小白山脈に發し、泗川地方を迂回して洛東江に注ぐ河也。

〔會盟〕兩國が會合して約束を定むるをいふ。

〔武豈可久黷乎〕しば〳〵戰をなして武德をけがさんやと也。

九月二十日分道進兵。劉綎遍行長營挑戰、奪倭橋斬級九十二。驅入大城。陳璘舟師協堵擊燬倭船百餘。麻貴抵蔚山與清正對壘。據險割其糧稻。燓溺甚多。董一元進取晉州。拔望晉。乘勝渡江南。連燬永春昆陽二寨。倭退保泗川老營。鏖戰下之。游擊盧得功歿于陣。得級九十二。前逼新寨。三面臨江。一面通陸。引海爲濠。海艘泊寨下以千計。築金海固城爲左右翼。中通東陽倉。

十月十一日。董將軍一元分派馬步協攻。步兵游擊茅國器彭信古葉邦榮前攻城。騎兵游擊郝三聘馬呈文師道立。柴登科四營後應。邦榮步兵游擊芳威攻東北水門。副將祖承訓殿。攻圍自辰至未。彭信古用大楨擊寨門。碎城堞數處。步兵齊登壕砍獲城柵湧入。忽營中楨破。火藥發烟漲天。倭乘勢衝殺。固城援倭亦至。我師騎兵先潰。遂奔還晉州。經略查參。詔斬馬呈文郝三聘以狥。彭信古等充爲事官。董一元革官銜降府職三級。各戴罪立功。而朝議以師久無功洶洶撤兵。大學志趙志皐請令總督。歸鎭制虜。以東方事專委新經理萬世德。量留兵將分布。上令府部九卿科道集議。兵科都給事中張輔之御史于永清等疏。爭乃一意進勦。會福建都御史金學曾報。平秀吉七月九日死。各倭皆業有歸意。我師因水陸乘勢夾擊。捷音日至。

今按。秀吉八月十八日薨。謂七月九日死者非也。

十一月十七日五鼓。清正發舟先遁。麻將軍貴遂入島山西浦。劉將軍綎因倭詐降。夜半攻其不意。遂奪曳橋。獲級百六十。石曼子引舟師救。行長遇陳將軍璘。半洋邀戰。行長乘小艇。倭泊露梁尚數百艘。氣甚惡。陳將軍璘統蒼唬船追擊。幷焚死。石曼子得級一百二十四。水爲赤。副將鄧子龍朝鮮統制

〔擊燬〕やきうちする也。

〔燓溺〕燓は焚也、焼けて溺死するをいふ。

〔金海〕太閤記には「こもかい」と訓ぜり、慶尙南道の南端にて、洛東江の河口に在り。

〔固城〕慶尙南道の南方にありて、閑山島に相對す。

〔砍〕篇海に「苦感切音坎、砍斫也」とある、「きる」と訓ず。

〔洶洶〕洶は洶に同じ、水勢のさまなりといふ。

〔平秀吉〕安齋隨筆に「秀吉は匹夫の事也、故に姓なし云々、僞りて平と稱し或は藤原と稱せり云々」とあり。

使李舜臣衛レ鋒陣亡、南海蕩平。倭遁二錦山一殲焉。

謹按。鄧子龍。南昌人。驍勇善戰領レ兵征レ倭。渡二鴨綠江一。有レ物觸レ舟。取視レ之乃沈香一段。把翫良久曰。宛似二人頭一。愛二護之一。每入レ夢則香木與レ首或對或偕而爲レ一。後死二于倭一。載レ尸歸。失二其元一。取二香木一雕爲レ首酷肖。子龍善戰。能盡二其才一。亦一時名將。乃存時、僅一偏將。屢爲二言者一所レ攻。世之不二善善一不レ才乃爾。沈香其殆夢而先知。願三與作レ作作二面目一乎。異哉。

董將軍一元報。率レ浙兵游擊茅國器衛。參謀史世用持二經理諭文一往、往二石曼子用事一。郭國安內應、石曼子遂レ諭先撤、各奔潰東西始結局云。捷聞。上發二帑金十萬兩一犒賞。丁應泰再疏賂レ倭賣レ國。上念。將士冲二冒矢石一。特論優敘。應泰回籍聽レ勘。東征勸レ功、改二給事中楊應文一。　時兵備使王士琦調征レ倭。

今按。錦山在二全羅道一。時島津在二泗川一。郭國安在二望津一。國安私約二史世用一。俟二明兵將渡一焚二倭營屯レ糧處一爲二內應一。倭衆退守二泗川寨一。事見二平壤錄一。又島津撤二泗川一事在レ前。

己亥萬曆二十七年二月。時東征業已完局。而撫州議。復用レ兵。劉綎督二川兵一。先發二顧陳董三帥一並檄回。

以二李承勛一充二禦倭總兵一。暫留二戍萬五千人一。前後生二擒倭六十一一。

今按。萬曆二十七年。當二日本慶長四年一。

四月十八日獻レ俘。平秀政。平正成。並梟二磔傳九邊一。

七月上晉二邢玠太子太保一。廕二一子世錦衣指揮僉事一。賜二金蟒一。萬世德陞二左副都御史一。廕二一子入監一。陳璘劉綎各加二都督同知一。麻貴右都督。廕二一子世指揮僉事正千戶一。有レ差。董一元准レ復レ職。仍並給二金幣一。部使董漢儒王士琦梁祖齡等各加レ賞。并賜二兵部尚書田樂金蟒一。廕二一子入監一。兵科都給事中張輔之職方郎中楊應聘並優擢。再叙二禝蔚功一。賜二茅國器陳寅彭友德等金一。前經理楊鎬以二原官一叙用。已復念。御史陳

〔錦山〕全羅北道の地内にて、全州の東北方に在り。

〔沈香〕熱帶地方に產する木の名、之れより製したる香を沈水香と名づく木の心の堅きものは水に沈む故に沈香といふ。

〔一段〕一きれ也。

〔酷肖〕酷似に同じ克く似たるをいふ

〔完局〕なほ終局といふが如し、事件の落着をいふ。

〔同知〕同じき待遇をいふ、卽ち兩人を都督といふ同官に任ぜし也。

〔廕〕玉篇に「亦作レ蔭」と見ゆ、かばふ也。

効殞命絶域。蔭一子錦衣。而棄帥楊元。通倭沈惟敬。先後棄市。

謹按。外史氏曰。今稱倭強大與虜敵。然倭以海爲穴。每欲爭衡上國。予勢不順。而智多出于蠶食。往嚙朝鮮。中朝經略數歲。訖不得要領。或謂。關白忌清正。世臣借兵事出之全慶間。姑翼以齊臣行長。坐是歎或互異。不其然耳。琉球受脅而閩浙爲震動。將憂豈在朝鮮也。余嘗策倭。非有大志。只不越海生心封豕。唯守島素覬我子女玉帛。而奸氓又潛爲勾引。鋌而走險憂方大耳。海禁不可弛。人亦有言。急之適以生變。緩急操縱。消釁未形。在當事者。自爲謀之早矣。

今按。關白忌清正。世臣借兵事出之全慶間。清正記云。小西石田刎頸之交也。二人同心讒清正。秀吉大怒。將賜清正死。清正召在伏見。會慶長元年七月十二日夜。大地震。清正率二百人步卒護伏見城。自明無非。秀吉遂免其罪。令清正歸其采邑肥後國熊本。而後清正渡三韓。聚竹島殘兵拔梁山城。又與毛利參議秀元。黑田甲斐守長政。淺野左京大夫幸長等相議。攻南原城。陳愚衷降。梁山在慶尙道。南原在全羅道。正謂此與。

庚子萬曆二十八年八月。撤回留守朝鮮兵。先是朝鮮王請留水兵三千。止認本邑口糧。至是歲遂得旨盡撤。經理疏善後八事。一選將。以朝鮮右文將宜博採。一練兵。麗人驚悍耐寒苦。而長衫大袖非甲冑制。一守衝要。朝鮮三面距海。釜山與對馬相望。揚帆半日可至。東入機張蔚山。西入閑山唐浦。塗所必經。我登釜山瞭望如指掌。而巨濟次之。宜各守以重兵。一修險隘。朝鮮王京北倚叢山。南環滄海。稱四塞。而忠州左右鳥竹二嶺羊腸繞曲。眞所謂一夫當關萬人莫踰。向倭守此防我南渡。而副將吳惟忠孤軍久戍。倭不敢窺。皆得地利也。今營壘遺址尙存。亟加修葺。一建城池。朝鮮八道十九無城。以避地爲便。而平壤西北鴨淥二江。俱南通海。倘倭別遣一旅。占據平義。則王京聲援既絕。

〔棄市〕死骸を市にさらすこと、又たその刑をいふ、十八史略に「有敢偶語詩書棄市」と見えたり。

〔爭衡上國〕上國と優劣を爭ふ事也

〔勾引〕かどわかすなり。

〔消釁未形〕釁は不和、不和を未然のうちに消滅する事也。

〔如指掌〕極めて見易きにいふ。

〔四塞〕要害にて取り圍まれたる地をいふ。

〔一夫當關云々〕李白蜀道難に「劍閣崢嶸而崔嵬、一夫當關萬夫莫開云々」と見えたり

腹皆受攻。一造器械。倭戰便海。以船制重大不利攻擊。令淮福號造千百艘為奇兵。而添造神机百子火箭。一訪異材。朝鮮俗貴世官賤世役。如錚錚自負。不宜一切錮之。一修內治。此八事誠善後之策也。

今按。萬曆二十八年。當日本慶長五年。

又卷之二十二

己酉萬曆三十七年十一月。倭幷琉球。虜其王。辟取雞龍淡水。使(シトス)閩廣。

今按。萬曆三十七年。當日本慶長十四年。琉球事詳見世法錄今按。

壬子萬曆四十年十一月。是年日本冒琉球貢海上。福建巡撫丁繼嗣奏言。倭將明檄琉球。挾其代請互市。又閩越亡命郭安國等寄書其家。暗指入犯之期。其檄與書語多狂悖。乞頒明旨。以憑發遣。時琉球已為倭奴所幷。其貢物俱是眞倭定為窺伺。心甚叵測。

今按。萬曆四十年。當日本後水尾天皇慶長十七年。代請(トハ)互市。琉球國王尙寧上書大明國福建軍門老大人閣下。恭審小邦去日本薩摩州者僅三百餘里。以故三百年來以時獻不腆方物修其鄰好。頃有不肖嗇夫。緩其貢期。是故薩摩州進兵於小邦。小邦荒墟者誠天之所命。而我亦以無苞桑之戒也。不幸而為其俘囚在薩摩州者二年矣。州君島津家久外好武勇。內懷慈憫。待我以待賓客之禮。禮遇之厚者二年一心。加之送還我於小邦。於是吾民之歌於市。抃於野者茲非幸歟。州君寄言於我。其言曰。夫邦國之在四方也。有金玉者或不足乎錦繡。有粟米者或不足乎器皿。若有

〔奇兵〕敵の不意を襲ひ撃つ軍隊をいふ。

〔狂悖〕物狂はしく我儘なることをいふ。

〔互市〕卽ち貿易をいふ。

〔不腆方物〕不腆は厚からぬ義にて、粗末なる禮物、方物は其の土地の産物をいふ。

〔嗇夫〕貢物を受取り天子に奏上する事を司る官也。

〔苞桑之戒〕牢固なる戒めをいふ、苞桑は、易經否卦に「九五休否、文人吉、其亡其亡、繫于苞桑」とあり、注に、苞は本也、凡そ物、桑の苞本に繫けば卽ち牢固也」と見ゆ。

〔文質彬彬〕彬彬は猶ほ班班の如し、物の入り亂れて而して能く均し、即ち文と質と適度に相雜はるをいふ、論語雍也篇に「質勝文則野、文勝質則史、文質彬彬、然後君子」と見ゆ。

〔翅〕正韻に「同啻」と見ゆ、「ただに」と訓ず。

〔天朝〕俗に朝廷をいふ、睡餘漫錄に「天朝とは屬國の君臣、己が國の朝廷に分たんとて、屬せる國の朝廷を尊んで稱する詞也」とあり。

〔伏楷仲部忱〕楷は文書、部忱は猶ほ微衷の如し、文書を上りて己が衷情を陳ぶる意なり。

餘而不散。不足而無來。民用不足而其貨亦腐。惟坐而待腐。不如通其有無各得其所矣。日本非無金玉器皿。其土宜質素而不及於中華之文質彬彬。是故使我參謀於兩國。一以使日本商船許以容之大明邊地。二以使大明商船來我小邦。交相貿易。三以使一遣使年年通其貨之有無者。匪翅富兩國人民。大明亦無為倭寇。嚴備兵衛矣。三者若無許之。令日本西海道九國數萬之軍進寇於大明。大明數十州之鄉於日本者必有近憂矣。皆是。

日本大樹將軍之意。而州君所以欲通兩國之志者也。伏冀軍門老大人。於斯三者許一於此。我小邦大沐大明之德化。且遂日本之夙志。是亦天朝憐遠字小之仁心也。若然則永守藩職無生貳心。遐方嚮化之念、沒世不忘也。伏楷仲部忱。仰祈尊招。不宣。見南浦文集。

丙辰萬曆四十四年五月、東湧偵倭。福建巡撫黃承玄遣義民董伯起同李進葉貴傳盛等出海探倭。十六舘頭開洋、經竿塘橫山十八至東湧。一路兵船綵各澚皆不見。遂上東湧山四望。止倭船一泊山後南風澚。一泊布袋澚。二澚相連遂。橋偵卸。但掠定海白艕船藏南碇隱處。伯起即將海道硃票藏山上。并掏天妃廟判官。手為証。忽見南碇船張帆來。衆欲走。李進曰。勿走。走則銃打立盡。頃刻倭至。通事問。倭過船搜撿問何船來。以討海船對。通事問。有兵船否。應云。無有。通事問伯起等曰。汝但說。有他以五十金僱我來。我欲去。他不肯說有兵船他方去也。汝但開口。我為汝說。又令取水。彼首軍忽過船。細覘伯起相其手。又覘葉貴三人備相之。即搖首。汝不是討海的老。實說。不則殺汝。以刀臨脛者數次。伯起知不免。乃大聲曰。我等實是軍門海道差來。的聞汝造船三百。我這裏已備戰

〔繇〕說文に「作繇隨從也」と見ゆ。

〔綁眉〕眉毛を細くちゞむる也。

〔酹〕正字通に「俗酬字」と見ゆ。

〔熹宗愍皇帝〕明の第十六世、姓は朱、名は由校、光宗の長子にて、在位七年也。

〔寧謐無日〕寧謐はやすらかに治まること、一日も安らかに治まる時なきをいふ。

〔惕〕說文に「怵惕也、憂也、懼也」とあり。

艦五百。汝來則戰。汝若是好船。久泊此處何爲。今日殺不殺也繇汝。殺我兵船即至矣。于是群倭齊拍手。喃喃且吐舌。通事曰。他現砂磯國王差往鷄籠。風既不便。歸恐得罪。欲將你首軍一人去。回報免罪。決不殺你。即問。誰是首軍。衆指伯起。首軍者彼國老參之稱。遂呼伯起過船。伯起奮躍過曰。我今捺命報國矣。即索綱巾于倭得之。又索衣。首軍以番衣予之。不受。從葉貴等借衫遞與倭。首軍倍伯起食飯。遂帶所掠船。併差船送出台山。伯起請放各船歸。倭船大可丈八。內有馬四匹。銅鐵滿艙。皮箱甚多。叫我人去看說。汝國人往我處每年有三四十船。我俱禮待。你中國人。見我們來使要殺。說彼國便與易。說中國即綁眉。倭亦能寫字。以筆與伯起寫。伯起不寫。倭即寫日本人無情。伯起取其筆。寫日本人有情。倭又探郎有字。仍寫。無字。倭與吾人亦無異。但喜弄刀。或以手作銃。眇視而聲之。無刻不然。明年伯起以計紿之。遂歸。撫以爲海口裨將。

謹按。伯起一義民也。以身救衆。以智全生于患難存亡之際。固了然有以自命者。使用酹其志。又何變之不可定。險之不可出耶。壯哉士也。

今按。萬曆四十四年。當日本後水尾天皇元和二年。其砂磯國不知何地。訛言。

又卷之二十五

熹宗愍皇帝

天啓四年甲子七月。紅夷屢擾閩中。近復勾引日本倭人通連地方奸滑。敢于西窯古雷一帶焚掠。而我將士玩縮不前。寧謐無日。于是撫臣南居益請旨申明賞罰。以振國威以惕人心。而又視閩邊海議口要之防。厳通倭之罰。闌出有禁。越販有禁。八閩賴以安枕。可謂無忝于撫。

〔後水尾天皇〕第百八代の天皇也。

今按。天啓四年。當日本後水尾天皇寛永元年。

異稱日本傳　卷中一終

異稱日本傳　卷中二

兩朝平壤錄卷之四

會稽　諸葛元聲輯　商濬校

日本上

日本故倭奴國也。通鑑前編以爲。吳亡子孫入海爲倭。故倭自云。吳泰伯後。妄談以。倭國有徐福祠。謂爲福後。故中國呼倭爲徐倭。皆非也。蓋仁山據國語寡人達王于甬句東數言而推之。非實有所本。徐福云者。諸書皆以福居會東一州號秦國。但屬之倭耳。光武時。始通中國。歷漢唐宋元貢獻不一。寇亦不一。開皇永徽間。遣人求佛經。學佛法。開元雍熙間。遣人來從儒受經。路由廣東由明越者始于唐德宗時咸亨中。惡倭名。始更號日本。其國在狗邪韓國之東。與朱崖儋耳相近。或南。或東。大小百餘國。小者百里。大不踰五百里。總之極大者三十六州。州各有主。以州統郡。然皆屬於日本。其地分五畿七道。東西長。南北短。西南至海。東北隔大山。北曰狗邪韓。七千里曰對海。又南千餘里曰瀚海。又東南陸五百里曰伊都。卽圖東也。西卽與圖析相望。其人兇狡無信。性貪譎。輕生好殺。人佩一短刀。黥面文身。頭盡去髮。惟項上稍留。趾如中國人。而草履多圓。僅蔽足指根不著地。以便跳躍。其男女服染。青質白紋。男衣過膝而止。女人衣如單被。穿其中以貫頭。皆被髮跣足。拔眉黛額。男女治容者黑其齒。中土人至者擇婦女數人各携衾裯就之。名曰

〔吳泰伯〕史記、吳太伯世家に「吳太伯、太伯弟仲雍、皆周太王之子、而王季歷之兄也、季歷賢而有聖子昌、云々、太伯之奔荊蠻、自號句吳、荊蠻義之、從而歸之千餘家、立爲吳太伯」と見ゆ。

〔徐福〕また徐市といふ、齊人にて、始皇の命を奉じ、童男童女數千人と海に入り、三神山に不死の藥を求めて遂に還らず、或は日本に來るといふ、其祠の所在は本文に見ゆ。

〔衾裯〕ふすま、ねまきの類也、一說に裯は牀帳なりといふ。

〔遇尊長云々〕城主の通過などに際し、百姓等が土下座するを誤り傳へたるものならん。

〔蝴蝶陣〕武備志などにも此語見えたるも、其の陣法未だ鮮かならず。

〔弰〕弓末也。

〔鎖子甲〕錐維子をいふ。

〔娶于其族〕禮記曲禮上篇に「取妻不取同姓、故買妾不知其姓則卜之」など見え、支那にありては同族は婚せざる俗なれば、我が國の同族婚を奇異として茲に擧げたるなり

〔無笞杖〕笞杖の刑は古くより存せし也、戰國には斬罪頻りに行はれしよりの誤なるべし

度種，臥未定。視男欲與者何人。餘各抱褐逸去。其相會以蹲坐爲禮。道遇尊長。脫履而過。其俗信巫。疾無醫藥。病者裸而就水濱。杓水淋沐之。面四方呼其神。誠禱卽愈。其飲食常用磁漆器。尊敬用土器。有匙筯。否則手。兵行人自擧火。不與倚同食。以糯米。鷄鵝鴨去頭尾火燎去毛卽啖之。血流以爲鮮美。牛羊肉生斫碎之。少加薑屑卽食。性多嗜酒。亦喜啜茶。習佛經者頗知漢字。其用兵善埋伏。數遶出我軍後。兩面夾攻。每以寡勝衆。翅營畢。華人輙墮其術。其未戰也。團結分散。三三五五。一人揮扇伏者四起。謂之蝴蝶陣。然長於步戰。怯於水鬪。精於刀法鳥銃。而踈於鏃弓。刀長五尺餘。用雙刀則及丈餘地。又加手舞六尺。開鋒凡一丈八尺。舞動則上下四旁盡白。不見其人。鳥銃用實銅鑄成。以利錐研成孔。極光潤。不用木杜。索繫於臂。實藥加丸。隨發隨至。且無聲人不及避。倭竹弓長八尺。以足踏其弰。立而發矢。矢以海蘆爲幹。以鐵爲鏃。鏃濶二寸爲燕尾。重二三兩。近身乃發。無不中者。中則人立倒。戰士身無甲。冬夏一花布衫下短袴。輕捷如飛。頭領間御鎖子甲。尤精堅。稍長一丈八尺餘。製亦工緻。大舟櫓二十六枝。又次二十枝。近亦有閩人。敎造閩舟矣。其國之西南有鬼國。出利鐵。而人好鬪。倭人入寇多募其人。有曰番鬼黑番鬼。卽古崑崙奴。面深黑。善鬪忘死。倭之取勝大率此爲前矛。凡行師。倭中野島人先之。中國逋逃又次之。凡往兵處率開四壁。令前後相望以謹禍患。其國主以王爲姓。歷世不易。號曰天正王。不與國事。不轄兵馬。惟世享國王供奉而已。（每元旦國王率一大臣謁天王。他時不相接。）其受國事。掌兵馬。皆國王與關白主之。其巨族平原橘藤。更替竊據爲雄長。專國政。天王子娶于其族。關白子又娶諸大臣家。其刑法無笞杖。犯罪不論輕重。卽時殺之。賦三分

之一無他徭。工役皆募（關白倭之大頭領。卽漢大將軍宰相卽此是也。）其沿革。漢以前稱尊。後改稱皇。初皇后日向築紫宮。後徙山城。文武僚吏皆世其官。有德仁義禮智信大小十二等。遍來天文王、皇傳永祿天皇。嘉靖三十九年彼國號天正元年。所屬五畿七道六十六州二島共統五百八十九郡。郡守曰地都。

今按。徐福祠事見上卷。通鑑前編。日本爲泰伯之後。墨談亦爲徐福之後。諸葛氏俱以爲非。此實得事之正矣。仁山撰通鑑前編者。國語寡人達王于甬句東數吉。吳語曰。吳敗、越王告吳王曰。寡人其達王於甬句東。（達致也、甬句東今句章。東海口、外洲也。）夫婦三百唯王所安。以沒王年。（夫婦各三百人以奉之。在所安可與居者。）夫差辭。遂自殺。觀此則吳王終不居洲也。天正王指正親町天皇。國王蓋謂將軍家。其刑法無笞杖。古者有笞杖徒流死五刑。與唐無異。出名例律。今也無笞杖。關白倭之大頭領。卽漢大將軍宰相。元慶四年十一月八日詔右大臣正二位藤原朝臣基經（後諡昭宣公。）爲關白。此我朝關白之元始也。見河海抄。百寮訓要抄等書。萬機巨細皆先關白于其人。然後奏御天子之意。取漢霍光故事。故亦稱博陸侯。大文天皇指後奈良天皇。永祿天皇指後柏原天皇。郡守曰地都。都當作頭。聲訛。東鑑曰。文治元年十一月十二日。因幡前司大江廣元謂源賴朝曰。世及澆季。爲梟者多。叛亂罔極。東海道已爲柳營則無慮矣。禍蓋起於它方乎。欲治之。每發東兵則人煩國費也。今義經等謀反天下騷動。乘此時奏國衙庄園各置守護地頭。坐定亂則可也。賴朝大悅。奏自稱諸國平均總追捕使。處處置守護地頭。充兵糧。段別五升。至是國司領家所有之地日削權亦漸輕。萬民愁訴。續古事談曰。地頭名義難會。一中華書曰。四方兵起乃討之催責國郡兵食。號曰地頭欽。此合今地頭之義。偶觀此文設此名

〔德仁義云々〕推古天皇十二年唐制に倣ひて設け給ひし冠位也、大化三年に至り是れを改む

〔無笞杖〕笞杖共に罪人の臀を鞭つ刑、笞は細杖を用ひ、撃つこと十より五十まで、杖は太杖を用ひ撃つこと六十より百まで也、後世笞杖の刑名なきも其實は江戶時代にも殘る、敲の刑これ也。

〔藤原朝臣基經〕長良の子、良房の養子也。

〔霍光〕字は子孟、漢昭帝始元元年攝政となり、後ち關白に轉ず。

〔博陸侯〕始元二年正月霍光博陸侯に封ぜられしに因る

〔大江廣元〕惟光の子也。

乎。亦童謠之所稱乎。甚可怪矣。

五畿即京洛五州。統五十三郡。

山城　大和　河內　和泉　攝津

東海道關東十四州。統一百十六郡。伊勢州置大將軍鎭守。

伊賀　伊勢　志摩　尾張　三河　遠江　駿河　伊豆　甲斐　相摸　武藏　安房　上總　下總

常陸

東山道八州。統一百十一郡。陸奧置大將軍鎭守。

近江　美濃　信濃　飛驒　上野　下野　出羽　陸奧出金

北陸道七州。統三十郡。近月氏若佐置大將軍鎭守。

若佐　越前　加賀　能登　越中　越後　佐渡

山陰道九州。統五十二郡。出雲置大將軍鎭守。

丹波出水銀　丹後出丹　但馬出鼎　因幡　伯耆　出雲　石見　隱岐　丹波

山陽道八州。統六十九郡。在京畿西南。周防置大將軍鎭守。

播摩　美作　備前　備中　備後　安藝　周防　長門

南海道六州。統四十八郡。在海南。阿波置大將軍鎭守。

伊紀　淡路　阿波出銅　讃岐　伊豫　土佐

〔關東十四州〕關東は廣狹種々の義あり、爰は伊勢鈴鹿關以東の義也。

〔陸奧〕上古の蝦夷後世の鎭域、岩代、陸奧、陸前、陸中五國の總也。

〔大將軍鎭守〕鎭守府將軍の意ならむも、其統轄の區域は陸奧出羽に限る

〔出金〕聖武天皇の天平廿一年陸奧國より始めて黃金を貢し、延喜式にも奧州貢金のこと見えたり。

〔出水銀〕古へ伊勢丹生村より多く出づ、爰に丹波國を產地とせるは恐くは誤ならむ。

西海道九州統九十三郡。乃浙海埠。豐後設大將軍鎮守。

筑前　筑後　豐前　豐後　肥前　肥後　日向　大隅　薩摩沿海黒沙煎出鐵。又出花布。

三島統六郡　伊岐島即一岐　對馬島　多藝島與高麗近。每相往來。

山城州爲畿內重地。東有日野寺。極高。乃日升處。西有高野山寺。二山如龍虎拱鎮國畿。又有日春大寺。高二十丈。銅佛一尊高十六丈。七道周圍山城。各設大將一員。鎮守京畿。居中。惟西海道近瀕江山少。止養久山居海中。方圓二百餘里。竹中叢茂。多茶筍。又出多羅木。有地都守之。各道犯死罪矜免者發彼官賣拘留裁木獻板。非銀贖身。老死不可離也。

今按。日野寺謂日野法界寺。日野三位藤原資業建之。安藥師佛。此像者傳教大師所造。極高。乃日升處蓋此寺東南有朝日山。訛云之。高野山寺在紀伊國伊都郡。帝都西南四面高嶺有平原幽地。名曰高野。弘法大師奏建金剛峰寺。日春當作春日。大寺謂東大寺。在春日側。故訛曰日春大寺。高二十丈。銅佛高十六丈。詳見大佛殿前板文。載在朝野羣載東大寺要錄。養久山拔玖島也。宜參考上卷引通典今按。

其强盜證明即命戮。無牢獄鞭撻。竊盜計贓倍酬。不敷者沒妻孥。犯死求獲逃入寺則罷擒。若遂削髮終身不究。畏佛法過國法也。射箭賭重以奉神。名曰賽愿。鬪銃鬪弓以贏錢。名曰賭博。開場者斬首。家私沒官。對賭者斬右手。不然重罰。僧道宿娼還俗妻良家婦女。獲之即戮。在京文武品官以坐席分大小。一品官九層。二品八層。最下一層。官行用轎馬。前列長大勇卒一員披髮手執偃月

〔日野寺〕今山城國宇治郡醍醐寺村大字日野に在りて俗に日野藥師と云ふ

〔藤原資業〕參議有國の子、文章博士にして、式部大輔左中辨從三位に至る、延久二年薨す。

〔傳教大師〕僧最澄の諡號也、俗姓三津氏、延曆七年延曆寺を建立す。

〔金剛峯寺〕眞言宗古義派の總本山にして、嵯峨天皇弘仁七年の建立也。

〔東大寺〕奈良の雜司にある八宗兼學の寺、後ち華嚴宗總本山となる。

〔大佛殿〕東大寺の本堂也、天平勝寶元年の建立に係る

〔朝野羣載〕詩文官符、宣旨其他公私の文書を拾輯せる書、三善爲康の撰。

刀引導、官住不行、率皆蹲踞、官行參起。部式皆蹲踞。整點人馬、吹海螺爲令、無鼓進金退之則。婚姻亦用媒、媒名乃爾達知。聘用茶食布疋猪羊。娶時拉壻過門、與女同行以輪馬。貧令從者背負妹。先踏火入門、見公姑無拜禮。止合掌稽首、畢通宵歡飲。女無粧奩。止有從嫁。娶曰孫密木草分嫁曰木哥獨里。其產育男女。初必密請一友認爲義父、子年十五以上親父厚禮。甚者二百金。一送子歸義父家。禮逐魁頭義父倍贈并子送歸、由此兩爲至戚。甚者女其義父様髮禮亦如之。官家子姓皆以銹鐵水浸棓子末染牙。與民間以黑白分貴賤。女子不分良賤、染牙始嫁。初喪不飲酒食肉服裏白。置一龕、令亡人合掌、坐於內、外紙糊縫、上書大乘妙法蓮華經七字。又白布盤繞。親友詣龕而吊、殯舉。孝子自擡龕、止一子壻甥代之。令一義男爲從殯。至所先設竹城、置龕其中。容換草履。入參僧唱經畢。孝子各執長竿。火焚龕并竹城等三日三夜、以爲至孝。將灰骨和泥送寺。從殯者令在寺燒香、永不歸。貧無力焚。即於竹城內埋之。孝家滾灑色衣、而歸以取吉利。通國無卓。小卓止供讀書寫字。奉客飯大木碗尖盛食。將半又添其尖以爲敬。官長宴饗殘。必令女使奉酒、始爲至敬。宮室不用瓦板、蓋茅泥灰。故又蓋之。板高聳爲殿堂。墻壁皆木板爲心、外粉泥灰。貧結草茅爲壁。地鋪白沙以爲潔麗。雖皇宮上不蓋瓦。下不鋪磚。本國泥土不膠。無磚瓦匠也。國無欽天監。大明曆日從大隅豐前後薩摩州得之、琉球以資選擇。

今按、上書大乘妙法蓮華經七字、此非定事。後世佛法盛、故書經名、寫佛名也。上古無此事。從殯者令在寺燒香。永不歸。傳聞之訛也。又上古無火葬。佛法西來自文武天皇時有之。詳見續日本

〔鼓進金退之則〕進軍鼓を以てし退却鉦を以てする法也　金鼓は日本紀神功皇后紀に見え、鼓鉦は軍防令に出づ　後ち專ら陣太鼓法螺を以て軍陣進退を指揮せり。

〔棓子〕五倍子也。

〔一龕〕龕は塔の義　爰は唯死者を納むる棺を云へり。

〔殯〕人死して未だ葬らず、假に棺に藏め置くを云ふ。

〔吉利〕舍利也、骨を云ふ。

〔欽天監〕曆を司れる官也。

〔文武天皇云々〕續日本紀文武紀四年に、三月庚戌朔己未、道照和尚物化、云々、弟子等奉遺火葬於栗原、天下火葬、從此而始也と見えたり。

紀。雖皇宮不蓋瓦。云々。無磚瓦匠也。亦此訛也。泥土能膠。亦有磚瓦匠。然本朝舊制。皇宮用檜皮葺。佛寺用瓦。故神事忌言佛寺曰瓦葺。出延暦儀式帳。延喜式等書。國無欽天監亦非也。觀職員令。延喜式。古者有陰陽寮。掌天文暦數事。今猶有司參考諸暦作暦。不用大明暦日。

其嗜好華物云々

今按。云々以下文見武備志圖書編。故略之。

其倭刀

非獨用剛生鐵。久鍛煉成復毀。朝煉煆。暮濕泥。如此百二十日工成。刀可吹毛削鐵。富倭不惜工價制之。延高師學法會者。所擇不過下等。戰必首進刀者在前。衝擊可畏。然有限也。中國不如。望輒畏避擒獲。倭刀亦莫辨高下。豈知大小。長短不同。立名亦異。

日本稱王者自原氏歷橘氏平氏以至秦氏。恐即藤氏也。其姓不一。

今按。原氏當作源氏。歷橘氏平氏。以至秦氏。恐即藤氏也。此義皆非也。宜參考武備志今按。

隆慶初。平清盛秉政。父子兄弟據要路。競爲淫虐。道路側目。原頼朝以兵衛佐竄伊豆州。遂與其黨起兵。據關東。以誅清盛爲名。因乘勝席捲。盡逐平氏。平氏仍據筑前等九州。與原各分其地。連年相攻殺。

今按。隆慶明穆宗年號。當日本正親町天皇時。平清盛後白河二條六條高倉安德天皇六代人。前隆慶殆四百年。謂隆慶初者非也。清盛任太政大臣。二子任內大臣。兄弟衆子居顯職濟濟。一門采邑三十餘州。蔑上放同僚。其惡無狀。原頼朝原當作源。

〔延喜式〕朝廷年中の儀式、諸官の事務、諸國の恆式など詳記せる書、延喜五年醍醐天皇の勅を奉じ藤原時平等撰を始め延長三年成る。

〔職員令〕所謂大寶令の一部、神祇官以下各官の定員及職掌を規定す。

〔陰陽寮〕職員令に頭一人、掌天文暦數、風雲氣色、有異密封奏聞事、と見えたり。

〔吹毛〕刀劍の利なるに喩ふ。

〔二子〕重盛及弟宗盛也。

〔內大臣云々〕重盛は治承元年、宗盛は壽永元年內大臣に任す。

〔采邑〕所領也、采は官の義、官により食む邑の意也。

時國王。姓秦。而平信長爲關白。信長雄鷙能御下。而秀吉爲之義子。秀吉幼微賤。不知父所出。其母爲人婢得娠。生欲棄之。有異徵不果棄。及長勇力蹻捷。不事生業。初以販魚醉臥樹下。信長出獵。吉驚起衝突。欲殺之。復以吉舌辯留之養馬。名木下人。秀吉善上高樹。人呼爲猿精。信長每携之出兵無不勝者。因大寵愛。賜之田土。改名森吉。凡助信長計奪二十餘州。信長恃功大勢盛。遂弑國王自篡立。秀吉以信長篡成實已輕之多怨望。信長知之。恐其叛己。因加獎田地令爲攝津鎭守大將。有參謀阿奇支者。得罪信長。命秀吉統兵掩殺之。已而信長又爲部將明智所弑。秀吉方攻阿奇支聞變。遂與部將行長等乘勝擧義兵。誅明智。此萬曆十四年事也。

今按。時國王姓秦。而平信長爲關白。皆非也。信長時將軍源氏也。信長其先出自平清盛。任右大臣。秀吉事。徵毖錄今按。名木下人。非也。木下秀吉舊氏。非此義。弑國王自篡立。非也。征夷大將軍源義輝爲其臣三好長慶所弑。平信長討三好氏。立義輝弟義昭爲征夷大將軍。義昭不肖。故廢義昭自立。攝津鎭守大將見武備志今按。阿奇支明智非二人。明智和訓阿奇支訛爲二人。明智日向守光秀弑信長。秀吉擧義兵誅明智氏也。此萬曆十四年事訛。實萬曆十年也。

信長雖死有三子。皆長成。秀吉皆廢之而自立。信長太子名御茶鋭。以罪逬居遠島。惟留其第三子在國任事。秀吉旣篡位。乃以關白與其養子孫七郎。（名見吉。秀吉先無子。養爲己子。及二十一年七月十日生一子。即逐孫七郎出守關東。後二十四年。又）聽讒以謀反誅。而以弟美濃爲大將。（未久弟亦死。不爲立後。盡收其家財。）於是益治兵衆。征服諸州。至萬曆十七年兼并六十六州。皆爲臣僕矣。秀吉法令最嚴。縛釘殺戮無所不用。兵行有進無退。即遇湯火不許回盼。回

〔信長其先云々〕織田氏は平重盛の孫親眞より出で、信長は其第十四代の裔也。

〔徵毖錄〕豐臣秀吉征韓の事績を朝鮮の左相柳成龍の記述せる書也。

〔源義輝〕義晴の長子、足利第十三代の將軍也。

〔三好長慶〕長基の長子也、義輝の時朝廷の政を專斷し或は義輝と戰ひ横暴を極めたり、但し義輝を弑せるは長慶の養子義繼及び松永久秀にして事は長慶死去の翌年永祿八年也。

〔義昭〕足利第十五代の將軍也、元龜三年信長と隙を生じ、天正元年信長を亡ぼさんとて却て河內に追はる、

〔信忠〕天正三年叙爵、三年秋田城介となる、幼より征戰に從ひ頗る將器ありしが、天正十年五月父と共に明智光秀に弑せらる

〔出羽國秋田云々〕天正十八年秀吉の旨に忤ひ那須に放たれ二萬石を食み次で秋田に移りしが、明年赦に遇ひ伊勢朝熊に歸居す

〔天正十一年云々〕信孝兄信雄と隙あり、柴田勝家と謀り、信雄及秀吉を滅ぼさんと謀りしが、勝家の敗後勢屈し、尾張國知多郡內海に奔り、大御堂寺にて自刄す

〔美濃守秀長〕姓は羽柴、秀吉の異母弟也、天正十五年權大納言從二位に陞る。

頭者子壻亦斬。故所向無敵。始征關東用馬十二疋。載金在上。前做一紙人。捧金一錠。令曰。用必攻殺賞以馬上之金。又多以金行間。以殺立威。云々。

今按。信長太子名御茶銑。信長第一之子信忠任秋田城介。第二之子信雄小字御茶筅。任內大臣。爲秀吉流于出羽國秋田。其後歸京。第三之子信孝小字三七。天正十一年於尾張國野間內海卒。年二十六。見吉當作三好。秀次原號三好孫七郎。秀吉之甥也。後以爲養子。任關白。卽遂孫七郎出守關東非也。弟美濃。美濃守秀長也。

薩摩一州先以金買其頭目。及老王義久信服。止有一女。卽取爲質。知其四弟能戰卽毒殺之。知其三弟欲反。遂命老王取其首級。其二弟名武庫。命往朝鮮。卽將田地丈量起稅。以京倭攝之。至於肥前肥後。又中國安藝王皆有大功。俱奪其城邑。有不服者。計割耳。二十四馬載回。誅戮殆盡。又大國名尙島者亦降之。所奪各州必質其子弟。皆威計所逼。非心服也。然秀吉多智略。剛果有斷。能脅以恩威。又善用人。故能混一諸島。惟性婬嗜殺。見京都富民妻媚奪而爲妾。聞豐後王之妻甚美命載入京都。其妻守義不至。卽命其王往朝鮮。以他故殺之。有一婢入寺遲回。疑其有奸。將和尙人衆五十三人盡行綁釘。在市有張網者。悞羅其鷹。將張網及左右看者二十四人俱殺。初時丈量田地。有守園人說。此半畝是山。我自力新開爲園。遂惱其大膽出語。將母妻弟婦行吊死。旣吞各島遂啓侈心。將天王二十九年改爲文祿元年。天正王幼子卽位。欺其孤弱視若贅琉。公卿有勢力者逼爲已用。使之孤立無助。至丙戌年改山城爲大閤。日本國王舊居山城邪馬臺(ヤマト)。而于大界護屋島昔爲荒蕪。秀吉始開闢。等

處。蓋築城池四座。名棠棣樂院。每城周圍三四里。大石高壘三四重。河闊二十餘丈。內造宮殿。大樓閣有九層。飾以黃金。下有睡房百餘間。選民間美麗子女。拘留於內。每夜常東西遊臥。令人不知以防陰害。周城外又設立二關。東名相坂關。西名赤間關。一關各有船數千艘。歲二月悉越千丈溪。點齊。選兵自十八歲至五十而止。守城老者亦用之。秀吉恃己富強。使掠朝貢。各夷如琉球呂宋南蠻佛郎機暹羅皆遣令舉貢。往日本生理。且其管轄島嶼。役害諸州。奪其都邑。質其子女。恐各島生變。又已之子方在乳抱。故猶忘脅其徒從征。如薩摩州君義弘（即老王義久弟也。）孫七郎子與哥（孫七郎以謀反。同隨從七十二人俱殺死、）皆往朝鮮。是也。萬曆十七（八イ）年三（九イ）月。遣僧玄蘇和尚。同琉球。嚴令奉朝獻地。又假途本國長史鄭迵。日僉（本名楚漢人在倭四十六姓之內。同倭至京師。遂留本國。至長史。）時國王尚永新逝。世子尚寧監國。人人疑惧。迵以倭情多變。乃勸世子力辭不受。命差一和尚往報謝。同琉球佛國未敢動。乃厚賂和尚。善說世子。令接。義久島津貴久之嫡子。忠久十二世之孫。為薩摩守。謂王者非也。下文安藝王是後王亦然。遂命二老王取其首級。南浦文集曰。義久當西征之時有痿躄之疾。有識者以為非其疾。秀吉。信之令細川幽齋審之。蓋謂此事。其二弟名武庫。命往朝鮮。南浦文集曰。義久依無世子讓守護職於舍弟兵庫頭義弘。義弘與其子忠恒（後改名家久。）從朝鮮軍。即薩摩由地丈量起稅。謂秀吉撿地也。中國安藝王。謂安藝毛利家也。王字非也。尚島蓋指琉球國王多以尚字為名。故訛為尚島。閏豐後王之妻貴美云々。按之此蓋言大友義統事而其初令如松攻平壤。有長遣使于義統等曰。明兵二十萬。近日將攻我平壤。慎勿怠而來救之。義統素怯性。嘗無意于救之。且聞明兵二十萬之語。恐曰。

〔尚永〕尚元の第二子、天正四（萬曆四）年王となる。

〔尚寧〕尚懿の子、天正八年王となる。

〔義久〕島津貴久の長子也、性勇武九州過半を併呑せしが、天正十五年秀吉に降り、薩摩を安堵す、後ち文祿の役に功ありき。

〔貴久〕島津忠良の子也。

〔義弘〕島津貴久の次子也、文祿慶長の征韓に殊功あり封五萬石を加へ宰相に任ず。

〔國王多云々〕舜天王第十二世の孫巴志國內を統一して明より尚姓を與へらる、依て子孫尚氏を稱す。

〔大友義統〕義鎮の嫡子也、

〔買浦〕逃き倒るゝ貌也。
〔增田〕名は長盛と云ふ、五奉行の一。
〔石田〕名は三成也
〔大谷〕盛治の子、名は吉隆と云ふ、三成と共に慶長三年家康と戰ひ關原に敗れて死す、
〔二關自古云々〕相坂關は其初め詳かならざるも、延喜十四年これを廢し文德天皇天安元年再興せり、赤間關も兵庫關從關等の瀬戸內海の海關と共に早くより其名聞えたり。
〔義智〕平知盛の裔と稱せらる、天正十八年朝鮮に使し事情を視察す、後ち十萬石を食み、從四位侍從となる

大兵如此矣。行長決而不生。義統買浦逃歸于王城。增田。石田。大谷等馳告之。秀吉大怒曰。此非勇士之素意。而日本之瑕瑾也。我欲刎義統首。而以世家宥其死。終沒其國。天王二十九年王當作正。九字衍。天正王幼子謂後陽成天皇。丙戌年天正十四年。改山城爲太閤。訛也。山城國名。太閤關白父也。秀吉讓關白于秀次。自稱太閤。居山城國代見里。故訛。昔爲荒蕪。秀吉始開闢。謂名護屋事。名護屋在肥前國松浦郡。此地爲波多三河守之所領。秀吉就之造營殿。設立二關。東名相坂關。西名赤門關。相坂關在山城近江界。赤門關門當作閒。赤閒關在長門國。二關自古有之。非秀吉始立之。孫七郎往朝鮮非也。孫七郎居京不往朝鮮。後爲秀吉遭害。與哥事見引武備志今按。差和尚到琉球。和尚桃菴也。見引世法錄今按。

昨關白併吞列國。惟關東未下。萬曆十八年正月初八。集衆將。令。奉兵十萬征東。且曰。吾欲渡海使唐。遂命肥前守造船。又令列國築城於肥前一岐對馬三處。以爲渡唐館驛。又召舊時汪五峰黨問之。答曰。大唐執五峰時五等三百餘人自南京剿捺。橫下福建。過一年全軍而歸。唐畏日本如虎。欲取如反掌。關白喜曰。以吾之智行吾之兵。如大水崩沙利刃破竹。何國不亡。吾帝大唐矣。惟恐水兵嚴密。（日本只畏中國水兵。）不能勾攝唐地。乃命對馬太守扮作商人至高麗觀地形。太守回報。麗國退兵二十里。以候日本兵。其國不服者多。只一縣與對馬相近者來之。（意郎釜山）然欲攻之可唾手而得也。（後朝鮮奏中國云。本年六年對島守宗義調遣伊男義智來釜浦曰。稱有日本之。及訪劉還人曰。又云。宗義調稱不主已務。爲平義智所代。宗平異姓。卻冒認父子。想義智係秀吉姓。視篡國奪島助逆。故詐稱。義調遣行。）二月。復差和尚往朝鮮。稱關白利害。朝鮮驚惧。即令大頭目十人投降關白。安插爲恐動之謀。

貿。五月高麗貢鱸至日本。關白亦以囑琉球之言囑之。賜金四百兩。（此朝鮮貢關白之始）七月關東壕境塼狼機貢倭于大明國天地圖各一幅。犬一對。馬一對。絲段香寶五萬餘金。十一月關白弟死。十二月關白強占韓後王妻爲妾。時關白伐關東後入寇意已決。

今按。萬曆十八年。當日本天正十八年。集衆將。令李兵十萬征東。以五畿南海山陰山陽北陸。及近江美濃伊賀三河遠江駿河甲斐信濃伊勢尾張兵二十六萬征小田原北條也。宗平異姓非也。平姓。宗氏也。高麗貢鱸。此時所貢土宜甚多。貢鱸僅舉一物。朝鮮征伐記曰。朝鮮國王李昭奉書日本國王殿下。春候和煦。動靜佳勝。遠傳。大王一統六十餘州。雖欲速講信修睦。以敦隣好。恐道路湮晦使臣行李有淹滯之憂歟。是以多年思而止矣。今令與貴价遣黃允吉金誠一許箴之三使以致賀辭。自今以往隣好出于他上幸甚。仍不腆土宜錄在別幅。庶幾笑留。餘順序珍嗇不宣。萬曆十八年三月日。朝鮮國李昭。別幅良馬貳疋。大鷹子十五連。鞍子二面。諸緣具黑麻布三十疋。白綿紬五十疋。青斜皮十張。人參一百斤。豹皮二十張。虎皮二十五張。彩花席十疋。紅綿紬十疋。淸蜜十一碩。豹皮心兒虎皮漤海松子陸碩猠皮裏阿多介一座。以屬琉球之言屬之。答琉球國主書曰。玉章披閱再三薰讀。如同殿閣聽芳言。抑本朝六十餘州。撫兆民施慈惠。而既歸掌握也。頃又有游觀博知之志。故欲弘政化於異域者素望也。玆先得貴國使節遠方奇物。而頗以歡悅矣。凡物以遠至爲珍。以罕見爲奇者。夫是謂乎。自今以往。其地雖隔千里。深執交義。則以異邦作四海一家之情者也。餘蘊分付天龍寺桃菴東堂塢津義久傳說也。恐惶不宣。天正十八年。龍集庚寅仲春二十八日。關

〔征東〕秀吉天下の大半を征服せる後北條氏直に屢使して其上洛を勸めしも狐疑して果さず、依て天正十七年諸國に令して兵を催し、翌年小田原を圍む、城兵勢屈し七月五日氏直城を出でて降り北條氏滅ぶ。

〔李昭〕朝鮮第十四世の王宣祖也。

〔黃允吉〕朝鮮の大臣也。

〔天龍寺〕山城國葛野郡嵯峨村に在る臨濟宗天龍寺派の本山にして、京都五山の一也、夢窻國師が後醍醐天皇の御冥福を祈らむ爲めに、足利尊氏に勸めて建立せしめし寺にて、康永四年竣工す。

〔大高檀紙〕大形の高檀紙也、高檀紙とは皺文ある厚き紙の名也。

〔鹿苑寺〕山城國葛野郡衣笠村にある臨濟宗相國寺派の寺、もと足利義滿の別業にして世に金閣寺と云ふ。

〔北京〕明はもと金陵に都せしが第三代成祖永樂十九年北平に遷都し、これを北京と改む。

白。琉球國王。大高檀紙書之。（鹿苑寺西笑作。）答朝鮮國王書與此亦別。然欲入中國施政化之語意頗同。故曰以屬琉球之言矚之。答朝鮮書見徵毖錄今拔。

適有大國名尙島者。其子受聞金。遂殺父來降。關白自爲大將。令州廣造兵船。聲言。三月入寇大明。入北京者令朝鮮爲嚮導。入福廣浙直者令唐人爲嚮導。又差人脅琉球勿貢大明。致漏事機。時有福建同安船商陳申。寓琉球。因與鄭迥商議。乘本國進貢請封之便。備將關白情由奉報。陳申擒船回。而稟巡撫趙參魯以聞。此萬曆十九年四月也。又江右人許儀俊在薩摩州行醫。亦令同鄉朱均旺備錄關白奸謀。令走告福建軍門。張奏報。朝廷下兵部移咨朝鮮王。朝鮮止深辨嚮導之誣。亦不直陳寇患。故朝廷不以爲事。惟責沿海申嚴戍守而已。至九月初七日關白文書行到薩摩。整兵二萬。大將六員到高麗。取齊使唐。幷起各鎭兵共五十餘萬。限來年壬辰春起程。自己三月初一開船。而薩摩君尊我大明。關白少知之。命薩摩君之弟武庫領兵。薩摩相幸侃亦素敬大明。意欲抽兵密逆呂宋淡水等處。旁觀成敗。機露事不諧。卒與武庫同行。十一月十八日文書遍行列國。各辨三年之糧。先征高麗。盡移日本之民於麗地耕種以爲敵唐之基。若得大唐一縣是吾日本之名得矣。唐之天下在吾袖內也。又令列國兵至高麗岸。則破釜焚舟。不許掠人取財。日取高麗。暮夜築城。（凡倭攻城隨近隨築土。與通閣之。令人不知近。則掘城通地道也。）故於暮夜不許少停。一刻拾取一井。臨陣不許一人回頭。遇山則山。遇水則水。遇寨則落陷寨。不許開口停足。進前死者留其後。退後者不論王侯將軍斬首族滅。十二月又下令。西海道九國爲先鋒。（卽薩摩肥前等州。其人極善戰。）南海道六國。山陽道八國。應之。磐國而行。父子兄弟

不許一人留家。於是國人皆生疑變曰。此事非征大唐。乃襲我等之後滅吾族耳。各密議欲反。

又舊年七月喪子。並無弟兄。又豐後有奪妻之怨。故不親行。

今按。高麗十九年。當日本天正十九年。七月喪子並無弟兄。四月秀吉娶淺井氏生男。名棄。此年秀吉兒秀長薨。千棄亦幷秋死。秀吉甚哀惜。以爲性傷手。數過竹院得半日閑。登東福寺妙雲閣忽催人朝鮮之師。秀吉征朝鮮。分遣不親行者。恐日本之亂起也。謂奪妻之怨者甚非也。

及壬辰正月。止分遣八將。入寇朝鮮八道。豐臣輝元慶尚道。豐臣景隆全羅道。豐臣家政忠淸道。豐臣勝隆。及元親進京畿道。鎭護城中者豐臣秀家也。豐臣吉成江原道。豐臣家治黃海道。豐臣淸正永安道。行長義智平安道。分派後。又内遣三官爲大師。三官者命攝津州前司小西（地名）秘書少監豐臣姓行長名。傍將對馬州前司宗（地名）拾遺侍中豐臣義智爲先鋒。統領倭兵十萬。入犯朝鮮。恐一官不勝。復遣加藤主計頭平淸正統兵同行。自二月渡海。從釜山而入朝鮮。朝鮮古箕子封國。武王始封箕子施八條之約。邑無淫盜。素稱禮度風。秦屬遼東外徼。漢皆郡縣。五鳳元年有蘇伐公者。得大卵於蘿林。有嬰兒。剖卵而出。長有聖德。六村異之。立爲西干。（方言君也）時閼英氏又神產兒於井。右脇生女亦有聖德。人呼二聖。其高句麗百濟。鼎峙而王三韓。至唐高宗時。新羅取二氏而盡有其地。傳五十五世。降於高麗王建（後梁貞明六年）二氏三十一世王顓無道。國相李仁人弑之。立禑。立昌（辛氏非王氏。）高麗國人謀立定國君王瑤。未一年。門下侍郎李成桂廢瑤自立。時洪武二十五年也。始改國號朝鮮。國王姓李。奉朝貢甚謹。其國北隣女直。西北至鴨綠江。東西二千里。南北四千里。至京師三千五百里。在遼東之東南。三面

〔淺井氏〕淺井長政の長女淀君也。

〔東福寺〕京都本町に在る臨濟宗東福寺派の本山也、嘉禎二年藤原道家の創立に係る。

〔箕子〕殷紂の族也紂を諫めて用ゐられず、佯狂して奴となる、紂の滅後武王これを封じて今の大同遼河南江の間を領せしむ、古朝鮮これ也。

〔五鳳〕漢宣帝の時の年號也。

〔唐高宗〕太宗の第九子、唐第三世の皇帝也。

〔二氏云々〕百濟は龍朔三年、高麗は總章元年滅ぶ。

〔李成桂〕成桂嘗て倭寇を鎭めて功あり、漸く人望を收め、遂に自立す。

〔奔二義州〕文祿元年四月、我軍京城を陷る、李昖纔に平壤に逃れ援を明に求む、既にして行長等臨津に到り更に大同江を渡り平壤城を陷るゝや李昖更に北して平安道義州に到る。

〔豐臣輝元〕毛利隆元の子、元龜二年祖父元就の後を嗣ぐ。

〔隆景〕毛利元就の第三子也

〔家政〕蜂須賀正勝の子也。

〔元親〕國親の子也、永祿三年家を嗣ぎ漸次四國の大半を併呑せしが、秀吉の親征に敗れ、降りて土佐一國を領せり。

〔秀家〕直家の子也

〔安治〕安明の子也

濱海（東爲下□十丈）濁清道正與日本遙對。止隔一海。而釜山者朝鮮之海口也。（日本薩摩州與浙江相對。馬島與朝鮮相對。馬島至釜山約五百里。風順一日可至。對馬島至一岐島六百里。一岐島至名護屋島九百里。名護屋即□□自持大兵處。風順四五日可至寧波。六七日至天津。八日至登萊。但登萊等處海多石礁。不便行舟耳。）釜山麗氏。向與倭往來互市無間。有往來通婚姻者。謂之倭戶。以日麗倭朝鮮國王李昖在位日久。政務廢弛。邪臣柳承龍李德馨等陰與倭通合。忠直見疎。且國中久不被兵。民不習戰。聞倭兵猝入。君臣束手。百姓逃奔山谷。守土者望風迎降。以故不兩月而破朝鮮三道。朝鮮凡八道。

京畿道（即漢陽居中） 江原道（在東） 咸鏡道
平安道（即平壤城二道俱在北） 黃海道 忠清道（二道在西）
慶尚道（在東南） 全羅道（在西南）

時平安黃海忠清已破。慶尚全羅尚在旦夕。國王北奔義州。（去鴨綠江二日）不遂入王京。王子國母盡爲所執。（李昖正妃無子。妾金氏生二子。長太子臨海君珒。次子光海君琿。）

今按壬辰即萬曆二十年。當日本文祿元年。豐臣輝元毛利右馬頭。景隆當作隆景。小早川左衛門佐家政蜂須賀阿波守。勝隆訛大谷刑部少輔吉隆。與元親長曾我部土佐守。秀家浮田中納言。吉成訛石田治部少輔三成。與家治訛脇坂中務少輔安治。朝鮮凡八道。潛確類書曰。朝鮮其國東西南三面瀕海。西北抵鴨綠江。北則女直。東西二千里。南北四千里。分八道。中曰京畿。東曰江原。（本濊貊地）西曰黃海。（古朝鮮馬韓舊地）南曰全羅。（本卞韓地）東南曰慶尚。（乃辰韓也）西南曰忠清。（昔古馬韓域）東北曰咸鏡。（本高句麗地）西北曰平安。（本朝鮮故地）分統郡四十、府三十六、州五十八、縣七十。其忠清慶尚全羅三道地廣物衆。州縣雄巨最爲

富庶。俗尙詩書。人才之出比諸道更倍。平安咸鏡二道境接靺鞨。俗尙弓馬。兵卒精强。

倭卒聚于平壤。意欲席捲高麗入犯中朝。朝鮮國王絡繹奏報。擧朝驚訝。謂。倭犯朝鮮窺中國。此二百年來所未見者。計當援之。莫知所出。

一本此處云倭兵聚於平壤。意欲席捲高麗入犯中朝。一晉議曰。吾等越海伐國幸獲全勝。三韓可擧鞭定矣。但其主實伏未降。而全慶各郡多未下。我輕師渡鴨綠。敵反乘吾後。不若。以重兵駐王京。而令水兵西向全羅。遶出西海道。與大兵水陸並進。計之上也。乃一面分兵。一面差和尙仙巢竹溪（仙巢名玄蘇。竹溪名宗逸。）等。持檄告朝鮮王曰。

日本與大明。動干戈。是九牛一毛。大海一粟也。嗤然以難逆國。而要借路於朝鮮。吾國一統以來國富民豐。無望奪國。又無意掠財。只以欲復怨也。（指下南蔚洲客船泊梟山事上借言也。）朝鮮介於兩國之際。路經入大明。除朝鮮外又何國乎。是故到朝鮮則處處備城墩廣道路。是以戰者戮之。降者容之。遂無一土當鋒而自釜山到平壤者不越一月。加之遣豐臣清正於平安道至豆滿江邊。擧歸一握。承前欲屯陣於鴨綠江。先是數日呈書於禮曹判書李公。待其持章逆於平壤。不敢嚴也。亮察。（此書傳自沈惟敬。即其首一句。日本君臣大義已明。乃云本欲求封將誰欺也。）檄至。國王李昖先已告急天朝請兵救援。行長果分遣別將。引水兵一枝由西海直趨全羅。此道田皆沃壤。民多富庶。國用軍實全賴乎此。時八道地雖擒掠過半。尙幸其水陸未合。此一不守。箕封悉倭有矣。幸得水兵將元均統率舟師。扼倭艦於閑山島前洋。奮力齊擊。倭兵棄舟奔還。始不得兼水陸之勢。未敢大逞。（倭兵素不利水戰。其造舟雖多尖小。而脆薄不足當我舟之平衝。又其人利跳躍。其器便刀銃。一入舟風濤震。益跳躍無所施

〔靺鞨〕黑龍江省、吉林省地方に住む蠻族の名也、後は其地域を云ふ。

〔絡繹〕往復絕えざる貌也。

〔玄蘇〕征韓の軍に從ひ、明朝鮮との文書の往來を掌りし僧也。

〔干戈〕干は楯、戈は矛也、依て戰爭の意に用ふ。

〔九牛一毛〕次項の語と共に、物の數ならぬに喩ふ、司馬遷の報任安書に出づ。

〔元均〕慶尙右水使なり、

〔倭艦〕加藤嘉明、藤堂高虎等の水軍なり。

〔閑山島〕慶尙道の南岸に在りて、巨濟島の西に當る。

〔承訓〕遼東副總兵祖也。

〔同史遊擊〕儒算也

〔是夜賊至〕小西行長の軍也。

〔大司馬〕軍事を統ぶる官也。

〔鞭之長云々〕勢强大なるも猶及ばざる所あるに喩ふ、左傳宣公十五年に出づ。

〔沈惟敬〕もと市井無賴の民に過ぎざりしが、明主媾和の急務なるを見、人を求めて惟敬を得、これを重任せる也。

刀銃不相應。我以長槍大弩火炮攻之。勢必不支。故避朝鮮舟師不擊禦。倭先講水兵。所謂禦之於海外也。　朝鮮國王給繹奏報。擧朝驚謂。倭犯朝鮮窺中國。此二百年來所未見者。計當援之。莫知所出。時暹羅貢使在京。自願出兵剿倭。朝以事關至大。行於兩廣總督。另遴一能事官員與原差昇貢使同往彼國宣諭。巡撫蕭彦流爲。暹羅居極西。與滇南相對。日本極東。與吳越相對。約去萬千餘里。而界其中者有安南占城滿喇咖呂宋琉球等國。欲其越人之國而爲中國效力甚難。且舟師所經先之廉雷瓊崗。繼之香山東莞廣州惠潮達于漳福台寧。而後抵日本。中華靡麗無一不備。彼其奉檄而來。勢誰禁之。昔浪士兵所過爲墟。況暹羅哉。事遂寢。時議此皆本兵東明石星也。

七月遼東巡按李時華遼陽守道荊州俊奉命。遣遼將祖承訓同史遊擊。選卒三千人渡鴨綠援朝鮮。時二將所統皆遼東馬。若不諳地利。亦不知攻倭之法。又天時淫雨。山水暴流。馬濘久蹄爛。一登坡嶺足爪盡裂。倭又以逸待勞。七月十五至平壤安定館。營未定。是夜賊至。我兵遂亂。倭衆多戴鬼頭獅面。官馬見之驚退陷淖中不得起。士皆卸甲下馬。墜崖落穽入爛田中。倭劍逼及之。史遊擊沒于陣。承訓僅以身免。三千人回者數十人而已。報至。擧朝震驚。京師戒嚴。大司馬石星議。寧夏未平。復有事遼左。宥羅于奔命。雖鞭之長不及馬腹。越江而戰非完策也。於是遣沈惟敬宣諭倭營。惟敬輒唱封貢議。要倭退兵。平行長止許。退出平壤以大同江爲界。亦以天寒故佯許以援。我師實無退志。惟敬報命。朝廷度其詐。于是一意用兵。拜小司馬宋應昌以都御史經略朝鮮。應昌爲人方面紫髯。目光炯々如巖下電。沈毅慷慨有英雄器略。先是巡撫山東。卽存心邊務。題海防事宜五事。不報。

〔豐潤〕支那直隸省遵化州に在る縣也

〔陳家庄〕支那山東省武定府の一邑也

〔寶坻〕支那直隸省順天府に在り。

〔梁城〕支那湖北省漢口に在り。

〔碁布星羅〕碁石を並べ星を連ねし如く物の陳れ竝べるを云ふ、陳逵の昔山亭賦に、「群園牧監、星列碁布」とあり、又た齊書孔稚珪傳に、「候騎星羅」と見えたり。

〔寧夏〕支那甘肅省寧夏村にあり。

又題海防要略大意謂、倭奴情形已著、而奮圖不可不豫爲之防、因畫選將練兵積粟三策。仍督造軍器火藥、分撥沿海官兵畫地設防、一時籌畫以爲畫計及是、而中外洶々、部題懸賞。有能恢復朝鮮者賞銀萬兩、封伯爵世襲。無應命者、衆始嘆服曰、宋公料敵何神也。于是始廷推特簡經略征倭。于壬辰九月二十六日出都門。奏以李如松爲督提、兵曹郎劉黄裳袁黄爲贊畫。移檄四鎮。修墩堡、益戍兵。督造軍火器械、分布海口。又度地勢險易要衝、備多少之人、過徵何能策應。奏添協守副總兵一員、遊擊一員、守備四員。選募南北兵一萬五千、守備各領兵一千五百。一住南塘。一住豐潤黑洋河。一住陳家庄。一住山海南口。遊擊各領三千。一住海洋。一住寶坻北塘。而守備屬爲、副將統兵三千住常家庄。而遊擊守備屬爲、居中調度、相機應援。而薊鎭總兵節制之。天津亦改設協守副總兵卽領新兵三千、統轄河大等營。仍加薊鎭、各控要地、而保鎭總兵節制之。再設遊擊一員守備四員、副統兵一員。添募北兵一萬南兵二千。以守備二員加南兵二千。屬遊擊。吳惟忠管轄駐樂亭、以控其北、以北兵五千守備二員屬。添設遊擊。管轄駐北塘口以扼其南、副總兵則駐梁城、以節制之。所餘北兵五千給與寺馬。俱屬統領策應、遙通聯絡、碁布星羅、延袤三千里。屹然有干城之固矣。時提督尙羈寧夏。而調兵集者僅三萬五千。應昌以副將楊元將中軍、李如栢將左軍、張世爵將右軍。其參遊諸將分隸摽下。統率出關。

一本曰　應昌以侍郎經略朝鮮。此十月初命也。應昌才名初著。司馬圖其浙産熟倭、又見其有沿海險要圖說。特舉用之。迨受命方欲建明。而石司馬聽沈惟敬游說。而封貢之議遂起。惟敬者本亡賴、客

游京師。與娼妓陳澹如密。澹如有從僕鄭四。（後更名沈加旺。）從海島中逃歸。頗能言倭事。而惟敬少經倭亂。從人樹鄉保。又喜譚倭。司馬一聞朝鮮倭警。方博采群書。適妾父袁茂遊澹如所。遇惟敬意氣慷慨薦之。司馬召與語大悅。及承訓敗。因遣惟敬通倭。惟敬要貲以往。司馬許諾。惟敬遂認娼爲妻寄室司馬而後行。於是攜數千金市蟒衣玉帶花幣。入朝鮮。見倭將行長。但在平壤。惟敬先令人通意。行長遣僧玄蘇宗逸報之。八月二十九日。惟敬先饋金幣。始與行長相會於乾伏山之麓。因極陳和好之使。行長當要惟敬七事。惟敬慨然允諾。行長因聽信惟敬言。許撤平壤之戍。歛兵不進以俟和議。行長與惟敬書云。日本差來先鋒豐臣行長。謹啓大明遊擊將軍沈公閣下。日本絕朝貢者久矣。數年雖求計和議於朝鮮。朝鮮不應日本之求。故起兵矣。惟時閣下來平壤。實兩國復舊規之起本乎。抑閣下以轉奏。遣天使於日本。以爲和親之驗。則幸莫大焉。若見許天使。則相待者以中間五十日爲期。若人悞期者則雖留日本諸將於朝鮮城中。伏乞亮察。誠恐頓首。不宣。計開鎧一甲。鎗一挺。冑一頂。弓一張。箭一腰。付十矢。單刀一個。長劍一挺。又書云。昨呈兵器若干。更有鳥銃之求。雖裝飾甚醜繼以一奏書一道。從來命呈上之。不知適貴也否。又書尾云。到義州進獻土物。又行差人馳覆。云々。不知是何事乎。請。莫少留義州好矣。若中路而遲滯。則無作期出五十日乎。是以云爾。又云。說僕及傍姪名官位。僕攝津州前司小西祕書少監豐臣行長。傍將對馬州前司宗拾遺侍中豐臣義智。粗書呈焉。又云。北虜唵達之事。遂以閣下登庸。開貢則開日本朝貢之路。亦未爲難事。祝祝。餘付譯舌。惟時霜遲菊未花。自愛保重。頓首不宣。壬辰九月初三日。豐臣行長花押。惟敬九月十一日和議回報。時宋經略

〔七事〕一、日本より朝鮮王子以下の俘を返す事、二、慶尙、忠淸、全羅の三道を日本に割讓する事、三、入貢、四、封冊、他の三事は祕して傳はらず、而して行長等入貢を以て隣交の禮となし、封冊を以て秀吉を明に封ずるものとし大に喜びて約を受けたる也。

〔豐臣行長〕小西行長也、豐臣は秀吉よりこの姓を賜はりたる也

〔豐臣義智〕宗義智也、宗氏世々對馬を領し韓事に詳し因つて天正十八年秀吉の命によりて朝鮮と修交の事を周旋し、功により侍從に任じ、羽柴の姓を授けらる。

〔闕〕もと宮城の內觀をいひしが、轉じて宮城の意に用ふ、爰は明の帝京といふ程の意也。

〔表〕文體の一種也 文體明辨に「表者標也、明也、標著事緒、使之明白、以告於上也、古者獻言於君、皆稱上書、漢定禮儀乃有四品、其三曰表云云」とあり。

〔絡繹〕往來絕えざるをいふ、四體書勢に「遠而望之、鴻鵠群遊、絡繹遷延」とあり。

時至遼陽。而提督率兵渡鴨綠江矣。如松分兵爲三協。中協楊元。左協李如栢。右協張世爵。只惟忠領三千南兵馬右協。共五萬人以萬曆二十年十月二十七日出山海關。紀律嚴明。軍容整肅。總督都東管應昌於部逆選謂贊畫劉黄裳曰。才大而不踈。眞經略也。無何石司馬惑于沈惟敬邪說。復使往倭營議封。惟敬奉部咨謁見經略于遼陽。應昌謂之曰。倭求封貢第宜卑辭向闕。何敢破朝鮮以要我。我奉命討倭。惟知有戰耳。汝往見倭。必求封貢者宜盡還朝鮮一國全軍退釜山聽命。其表稱臣。我當爲請。今議止退平壤。是以計緩我師也。有戰而已。汝善保首領。無草草。惟敬唯唯而去。應昌計。倭自彼朝鮮張甚不一。大創之無施而可。於是率衆出關。由廣寧抵遼陽。而朝鮮王促我進兵。使者絡繹于道。應昌謂其使者曰。我師如風雨。朝濟江而夕破賊必矣。顧師行糧從。江以西則我給餉。江以東則爾給餉。餉必給五萬人。必支三月。國王許諾。是時提督大將軍李如松尚未至。有進議者。以衆寡不敵爲憂策。進兵必敗以苦若心。應昌毅然不爲動。乃出祕造火箭明火毒火。集將士于原試之。雖不神驗。曰以此禦敵何慮不勝。軍心乃安。十二月初八日。提督李如松始至。進謁經略。經略曰。倭特衆且悍。吵我國中非敵無以示威。非大將軍無以克敵。今芻糧已充。將士已集。而火藥器械俱備且利。惟大將軍乘西夏餘威一殲滅之。提督避席起曰。如松世受國恩。況承鴻庇敢不惟命。會惟敬至自倭營。執議如初。應昌怒叱曰。賊亡無日。何敢以謾詞欺我。喝令細打一百。將遂誅之。提督贊畫以惟敬石司馬所遣。殺之恐以不和敗事。力爲之請乃弗殺。屬提督拘于軍中。擇十六日誓師渡江頒示軍律三十二條。一軍肅然。會欽賞銀十萬兩適至。歡

聲徹天。應昌宣上德意益切。感激至朗、禡牙于庭。揖提督奉觴。再拜曰、破倭復國、責在大將軍矣。次觴三副將曰、勉樹鴻伐以報主恩。又進諸將士曰、前有封賞、後有軍律。幸各勉圖。於是皆川謝辭去。二十二日後軍始發遼陽。癸巳正月初八日。大軍薄平壤。倭將平行長擁衆十萬、設伏以待師。前軍過戰斬倭十五級。生擒三人。次日兵集城下。倭守牡丹臺爲犄角。穿小孔銃從孔中出。如虎負嵎。莫敢仰攖。提督乃遍指授圍其西南北三門。外佈鉄蒺藜數重。暗設虎蹲等砲。而列兵守之。放毒火神火諸箭入城。毒烟徹空。倭衆昏眩仆嘔。我兵各含解藥。蟻附而上。倭强戰敗奔。斬首一千六百四十七級。薰溺死者十倍之。朝鮮國王報捷疏謂。火焰燭天、纔聞十里。又謂。平壤之捷快絕前聞。蓋紀實也。十八日復遣李如栢率兵追襲倭衆。及於開城。奮擊復斬首一百七十八級。時咸鏡遠在一隅。尚未下。應昌料。平壤既破則其勢孤。固可先聲奪也。行次江浦。遣馮仲纓以利害說之。清正情怖心搖不能自決。會開城失守。遂棄咸鏡以遁。而黄州中和鳳山等處。倭將悉望風奔潰。並趍保王京。李如松以屢勝輕敵往相地形。僅以家丁二三千自隨。倭率精悍十萬圍之碧蹄。如松鼓衆力戰。一以當百。自午至申。殺傷相半。正屬危急。而楊元援兵踵至。內外夾攻。斬首一百六十七級。自是倡倭咋舌咬指。無敢與天朝兵相抗矣。顧王京天險。隋唐不能得志。兼之淫雨日久。將士臥起水中。病者十五。遂頓兵王京城下。相持者數月。先是有爲十不勝之說者謂。衆寡强弱既殊。而主客勞逸迥別。宜從封議。庶可以收左次之功。不然勝則中樞有違異之嫌。敗則禍且不測。此蓋迎合風旨也。應昌曰。吾知爲國。何暇身圖。且淝水赤壁豈在多寡。言者慚、乃以其說送樞府。而沈惟敬復于右司馬處

〔倭强戰敗奔〕李如松は行長等と沈惟敬の和議を利用し虛に乘じて、文祿二年正月俄に平壤を襲ひし也、行長殊死して戰ひしかども利なく、營を燒きて京城に退ける也。

〔殺傷相半云々〕この碧蹄館の戰に於ては小早川隆景、立花宗茂等奮戰して、大に如松を破り、隆景は臨津に追擊して明兵を江に陷れ殆ど之を鏖滅せし也。

〔淝水赤壁云々〕淝水は東晉の謝玄等兵を以て氐酋苻堅の九十萬の大軍を爰に擊破せるを指し、赤壁は吳の孫權、魏の曹操を爰に擊破せる故事を指せる也。

呶々不已、遂將陳璘之兵調守薊鎮、李承勛之兵調守山東。而沈茂之兵遣還浙江。東妬銜愕曰、欽定之兵何可亂動。豈欲徒手平賊乎。抑前旨不足遵耶。知愛者密以意聞。乃撫膺嘆曰。今而後始知處功名之難也。於是進不堪戰、退卒渴望救援。晝夜焦勞、莫知所出。而提山倉有在王京。朝鮮二百年租賦之所入盡積于此。行長率兵就食焉。應昌乃密遣査大受李如梅戚金等、率死士夜往焚之。倭絕食張惶、平秀嘉等亟召行長入問計。行長曰、天朝兵銳不可當。不早講解竊恐。王京亦不可恃。平秀嘉頗不然之。而部下平壤敗卒。往往私議。一軍譸張俱有叛志。於是平秀嘉始懼、遣使納款。竪降旗漢陽江上。願駐釜山以待上命。應昌計、兵勢既衰而事機復左。孰若假此退賊。可不復血刃。乃具揭以聞。尋奉旨。倭如恭順赦不窮追。四月十三日遣使宣諭倭營。倭將率皆羅拜聽命。退出王京。應昌乃遣重兵踵之毋令駐足。然倭亦燒浮橋沈渡艦以去、全羅慶尙二道者宿星嶺南原等處。斬首三十五級。倭相顧驚曰。天兵所至分守。抑何神也。于是悉衆宵遁歸釜山。送還王子并宮眷陪臣百餘名口。應昌念。朝鮮爲中國吃緊屛藩。朝鮮安則中國四鎭可恃無恐。檄副將劉綎督兵一萬六千防守全慶要害。又選麗兵精壯者數萬、令綎敎習訓練。使彼兵漸熟我兵。漸歸移王子光海君。出鎭重地。設險隘、謹斥堠、爲禦外之策。用賢能、均徭役、爲安內之政。方苦心興擧。間會尙書石星一力議封。移文撤防。應昌回咨謂、官可罷防。兵必不可撤。堅持不允。因上愼留撤酌經權一疏。大意謂、臣之議留守經也。本兵之議封貢權也。守經方可行權。無經則無權矣。今日禦倭之計。惟守朝鮮爲至要。守朝鮮之全慶則尤要也。守全慶是謂執簡御煩、扼吭拊背。或與封貢、倭必知吾

〔欽定之兵〕天子の編み定めたる兵の義也。「欽」は天子に關する事物に冠する敬語にして、我が國にて天子の事に「御」の字を用ふると相似たり。正字通に「今御音曰欽勅、御使曰欽命、俗曰欽差、皆取敬意」とあり、この字は特に明代に多く用ひたり。

〔平秀嘉〕豐臣秀吉をいふ。

〔天朝〕屬國がその本國の朝廷を指していふ語也。

〔檄〕文體明辨に「檄軍書也云々、以木簡爲書、長尺二寸、用以號召、若有急、則插鷄羽而遣之、故謂之羽檄」とあり。

有備無隙。只益堅其恭順之心、用力既少、成功又多、完策也。不守全慶、是謂就夷舍險、棄易從難。縱使與封貢、倭必知吾無備有隙。適以動其覬覦之念。用力既大、爲患不小、無策也。況我兵不撤、固欲待彼之歸、而彼倭不歸。寧不待我之撤乎。畏威而遁。乘撤而來。是又不可不爲之慮者。臣與諸將士能逐倭於朝鮮彊域之中。不能逐倭於釜山海島之外。能逐倭使之今日帖然遠遁。不能使倭之他日不必再來。能藉聖主神威、逐二十萬新來之倭奴。不能連釜山等處、逐百餘年舊日之倭戶、能使朝鮮今日之疆土已失而復存。不能使異日疲極之朝鮮再失而再復。臣之留兵防守。假封羈縻。正欲俟倭奴之動靜、修設之完備、方可次第爲之。非謂今日之兵可得而遽撤也。且東夷心狡志狂。烏可認封貢爲全直。而乃拘執以應之乎。議封議守、經權竝施。經能立乎常典之地。權又行乎羈縻之術。如是而後謀出萬全。禦倭完計。若以救朝貢爲是。謂守全慶爲非策。退內地而省粮、惡封貢已撤兵、非臣所知也。疏上。本兵不悅、無何從罷經略。而以顧養謙代任。養謙[illegible]益落多識略。有文武才。欲備兵大舉殲任而未得。惟敬一面請和議事。適指揮胡澤密抄送行長手書。見有和親字。疑之以問徐謝兩生。惟敬初爲謀。欲倣漢唐事。以外女作公主妻關白。兩生諱之云、是夷語、息爭節和親也。經略痛戒。入朝勿言二字。未幾顧經略以疏上。與朝議不合。亦謝病去。而繼之者侍郎孫鑛也。鑛文臣持重。當此時亦不信惟敬言。復遣人以其言詰問行長。行長無異辭。乃具揭到兵部石星。因行長聽命、復令惟敬催小西飛等入朝。如松師歸。正遇惟敬攜重賄蟒衣三十件玉帶七條。及花布四十擔、往途行長。如松笑謂曰。倭方畏寒。今給以此。所謂資寇兵而賞盜也。蓋惟敬再入倭營。不止貨物帶去書

〔羈縻之術〕夷狄を遇する事牛馬の如くにし、繋ぎ留めて絕たざるの方策をいふ、羈は馬の絡頭(オモガイ)縻は牛の紲(鼻にはめる棚)也、漢書に「天子之於夷狄也、其義羈縻勿絕而已」とあり。

〔公主〕天子の女也、天子、女を諸侯に嫁する時、必ず同姓の諸侯をして之を主らしめ、秦漢以來は三公に之を主らしめ呼で公主となせる也。

〔小西飛〕內藤如安也、逸史に「行長聞丹人內藤如安讀書屬文署爲記室、欲己姓氏遠布異域、使如安冒小西氏、如安任飛驒守、故明人呼爲小西飛」とあり。

〔如安〕內藤飛驒守如安也、丹波の人、德庵と稱す、初め織田信長に仕へ、丹波に封ぜられ二十萬石を食む、後ち致仕して小西行長に仕へ朝鮮に渡り、明と媾和を議するに當りその使節たり。

〔鴻臚寺〕蠻客を接待する館也、前漢の頃より之を設く、漢書に「鴻聲也、臚傳之也、傳聲贊通也」とあり、字書に「臚、以禮陳叙於賓客也」と見ゆ。

〔關白〕豐臣秀吉也。

籍。有大明一統志大明官制武經七書。悉以遺之。及回私受倭旗五面。千總徐璋得其一送提督。搜盡得之。即欲誅惟敬。以司馬委用乃告經略。經略詰其受旗故。惟敬以游言自解釋之。十一月初三。倭見小西飛信不回。淸正復發兵搶安康。此時二將所統苗兵一千在慶州未撤。聞之往救。被倭誘入險地。伏起殺我兵三百餘人。故復屯慶州不敢發。十五日。孫經略差人作送夷使入朝。十二月初七抵京。石司馬禮待甚優。如安等過關不下。亦不核。館遇如王公。十一日詣鴻臚寺習禮。十四朝見畢。會同多官赴東闕面譯給筆札。責令親書三事。一釜山倭衆准封後一人不敢留住朝鮮。又不留對馬速回國。一封外不許別求貢市。一修好朝鮮共爲屬國。不得復肆侵犯。小西飛當時一一親書聽從（按此三事即宜於渡海時面決之關白。不當問于倭將之好也。本兵悞國事已見于此。）十七日司禮監太監張誠傳奉聖諭。朕覽卿等所開條欵。譯審倭使之言。及倭使回稱之詞猶未詳確。遽夷請封。必須盡得其情。平秀吉爲何以兵侵掠朝鮮。及至戰敗尙拒釜山不退。今又差使上表乞封。豈可輕率不細加詳審。誠僞者該部詳議封名。先遣二官。一諭彼行長。不許留住釜山。倭夷盡數退還本國。一人不許留住。巢穴房屋盡行燒燬。一諭朝鮮。待彼倭夷盡數退回奏來。卿等可與內閣將小西飛還在左闕。會同文武及科道等官。令通曉夷語通事。當面研加詰問。譯審情僞訂盟。永無他變來說。（大哉皇言。眞明見萬里矣。倭情眞僞初不難知。試問。其初動兵果求封乎。果使掠乎。則行長與惟敬書可證也。旣退釜山又乞封。果力屈乎。果非力屈乎。則晉州安康之警可證也。又問其許封之後 倭果盡退乎 不退乎。則釜山之倭皆在也。胡學士朝思不及此。遂以如安奴口搪塞。致悞軍國。惜哉。）是月二十日石星復會集內閣大學士趙志皐等。定國公徐文壁等。吏部尙書孫丕揚及科道官。俱集左闕。將小西飛請封。始末情由備細研審逐一登答。

一問。朝鮮是天朝恭順屬國。爾關白上年何故侵犯。（小西飛）答曰。日本求封曾教朝鮮代請。朝鮮隱情騙

了。三年又騙日本人來殺。因此擧兵。

一問。朝鮮告急天兵救援。只合歸順。如何抗拒有平壤開城碧蹄之戰。　答曰。日本兵住平壤。要求封納款天朝。並無敢犯之意。二十年七月十五夜。見兵馬殺平壤。無奈接應。及八月二十九。行長與沈遊擊相會。約退讓平壤。不期天朝不信。去年正月初六日進兵攻城。傷殺行長兵甚衆。碧蹄亦是天兵追殺死傷。日本兵亦多退王京。

一問。從來因何退還王京。送回王子陪臣。　答曰。一則聽沈遊擊淮封言語。又說天兵七十萬已到。因此星夜退兵還送還王子陪臣。併將七道送還天朝。

一問。既退還王京。送回王子陪臣以求封。如何又犯晉州。　答曰。晉州原係朝鮮人去日本相遇清正吉長兵馬殺了。因此相殺。後見天兵即便還去。

一問爾原是聲言求貢。本部因爾復犯晉州情形反覆。故許封不許貢。既許爾封。即當歸國待命。如何又運粮蓋房。久屯釜山不去。　答曰。已前原封貢並求。因天朝不肯關白行長求信。只是求封好了。又運糧蓋房。俱各守候天使。並無他求。天使一差後盡皆燒燬。

一問。原約三事盡從方封。爾當傳行長等即令倭戶盡去。房屋盡燬。不復犯朝鮮。不別求貢市。爾能保關白行長盡從否。　答曰。行長有稟帖上孫總督云。一一聽命不敢有違。此係大事。秀吉有命行長。行長有命小的。方敢如此對答。定無反覆。

一問。爾等雖一時遵約。至於日久能保永無他變否。爾當對此訂盟立誓。方與請封。　小西飛誓云。

〔天兵〕天朝の兵の意也、官軍、官兵などいふに同じ。

〔陪臣〕陪は重也、諸侯は天子の臣なればその部下を天子に對して陪臣といふ、爰は朝鮮を明の屬國の如く見なして、朝鮮王子の臣を明よりかくいへる也。

〔三事〕卽ち一に、「釜山倭衆准封後一人不敢留住朝鮮、又不留對馬、速回國」事、二に「封外不許別求貢市」事、三に「修好朝鮮、其爲屬國、不得復侵犯」事の三事をいふ。

〔小的〕部下の意也。

〔明智〕明智光秀也光秀は美濃の人にして土岐氏の支族也・初め朝倉氏に仕へしが去つて永祿九年信長に仕へ功を經て天正二年從五位下に敍せられ、同三年丹波に封ぜらる、後ち事を以て信長を恨み之を本能寺に弑す次で山崎に秀吉の爲に敗れ、小栗栖にて殺さる。

〔天皇卽國王云々〕本文中、國王とあるは多く將軍又は之に准ずべき者を指せり、爰に天皇卽國王とあるは訛傳也。

〔孼〕孽の俗字也、「わざはひ」をいふ

天朝間的言語。小西飛驒守藤原如俺答。的說話如有一字虛說。關白秀吉行長小西飛等俱各不得善終。子孫不得昌盛。蒼天在上鑒之。

一問。爾前云。朝鮮既爲請封。豈肯復犯。但秀吉受知信長。尚且篡奪。朝鮮一時代奏。彼豈不復再犯。

答曰。信長者篡國王不好。因爲部將明智被殺。見今關白豐臣秀吉時爲攝津守。率行長諸將興義兵誅明智。歸併六十六州。若無秀吉平定諸州日本百姓至今不安。

一問。平秀吉既平了六十六島便可自王。如何又來求封。　答曰。秀吉因見殺國王爲明智。又見朝鮮有天朝封號人心安服。故特來請封。

一問。爾國既稱天皇。又稱國王。不知天皇卽是國王否。　答曰。天皇卽國王。已爲信長所殺。

一問。爾既如此。當奏請許爾封。爾當寫書差倭去報平行長。速歸令關白整備册使船隻館舍。及

一應恭候禮儀。一有不虔封仍不許。　答曰。守候已久。件件不敢輕易有違天朝之命。況進擊到釜山。

兵馬卽過海回家。行長守候天使。按。已上皆司馬問。小西飛答。然兵部事事裝飾。豈不能預敎。如安爲此恭順語乎。　當日兵部將此倭使面同多官親書應情辭俱封奏朝廷。

今按。癸巳萬曆二十年。當日本文祿二年。小西飛驒守所答悉皆僞也。飛州黨行長賣降秀吉求媚於明無不至矣。欺秀吉選兵挫鋒。姦兇孼臣也。淸正吉長兵馬吉長當作行長。其攻晉州。淸正行長爲前鋒。毛利秀元面一方。小早川隆景。黑田長政。淺野長政。伊達政宗等屬焉。浮田秀家面一方。島津義弘。鍋島直茂。長曾我部元親。蜂須賀家政。立花宗茂等屬焉。凡軍兵六萬餘人。

〔策命〕天子が諸侯卿、大夫を任命するをいひ、またその文書をいふ、周禮內史に「凡命諸侯及孤卿大夫、則策命之」とあり。
〔誥命〕君上より下下に達する文書也誥は一種の文體也文體明辨に「誥者告也、告上曰告、發下曰誥」云々とあり。
〔扶桑〕支那より日本國をさしていふ淮南子に「扶木在陽州、日之所曊」とあり、註に扶は扶桑にして、陽州は東方也と見ゆ。
〔貞珉〕珉は玉に次げる美石也、石碑にいふ。
〔永樂〕明の成祖の時の年號也、此の時、明と我國との相往交あり。

皇上方准信、卒定封王之議。命工鑄日本國王印一顆。并錫冕服。約費數萬金。詔遣臨淮侯李言恭長子李宗城爲正使。都指揮揚方亨爲副使。賚敕命印章、封秀吉爲日本國王。其誥命曰。聖神廣運。凡天覆地載、莫不尊親。帝命溥將、暨海隅日出、罔不率俾。昔我皇祖誕育多方。龜紐龍章遠錫扶桑之域。貞珉大篆榮施鎭國之山。（永樂年事）嗣以海波之揚、偶致風占之隔。當茲盛際、宜纘彝章。咨爾豐臣平秀吉、崛起海邦。知尊中國、西馳一介之使、欣慕來同。北叩萬里之關、懇求內附。情既堅於恭順、恩可靳於柔懷。茲特封爾爲日本國王。錫之誥命。於戲龍賁芝函。襲冠裳於海表、風行卉服、固藩衛於天朝。其念臣職之當修、恪循要束、感皇恩之已渥、無替款誠。祇服綸言、永遵聲教。欽哉。萬曆二十三年正月二十一日。又頒日本國王詔諭一道。至二十三日。復頒敕諭一道。其文曰皇帝敕諭日本國王平秀吉。朕念承天命、君臨萬邦、豈獨乂安中華。將使薄海內外日月照臨之地、罔不樂生而後心始慊也。爾日本平秀吉比稱兵于朝鮮。夫朝鮮我天朝二百年恪守職貢之國也。告急於朕。朕是以赫然震怒。出偏師以救之。殺伐用張。原非朕意。廼爾將豐臣行長遣使藤原如安來具陳、稱兵之由本爲乞封天朝、求朝鮮轉達。而朝鮮隔絕聲教、不肯爲通、輙爾觸冒以煩天兵。既悔禍矣。今退還朝鮮王京、送回朝鮮王子陪臣、恭具表文。仍申前請。經略諸臣前後爲爾轉奏。而爾衆復犯朝鮮之晉州。情屬反覆。朕遂報罷備倭者。朝鮮國王李昖爲爾代請。又奏、釜山倭衆經年無譁、專候封使、具見恭誠。朕故特取藤原如安來京、令文武群臣會集闕庭、譯審始末、并訂原約三事、白今釜山倭衆盡數退回。不敢留住一人。既封之後不敢別求貢市以啓事端。不敢再犯朝鮮以失鄰好。披露情實、果爾恭誠。朕是

以推心不疑。嘉與爲善。因勅原差遊擊沈惟敬前去釜山宣諭倭衆盡數歸國。特遣後軍都督府僉書署都督僉事李宗城爲正使。五軍營右副將左軍都督府署都督僉事楊方亨爲副使。持節賚誥封爾平秀吉爲日本國王。錫以金印。加以冠服。陪臣以下亦各量授官職。用溥恩賚。仍詔告爾國人。俾奉爾號令。毋得違越。世居爾土。世統爾民。蓋自我成祖文皇帝錫封爾國。迄今再封。可謂曠世之盛典矣。自封以後。爾其恪奉三約。永肩一心。以忠誠報天朝。以信義睦諸國。附近夷衆。務加禁戢。毋令生事於沿海。六十六島之民久事徵調。離棄本業。當加意撫綏。使其父母妻子得相完聚。是爾之所以仰體朕意。而上答天心者也。至於貢獻固爾恭誠。但我邊海將吏惟知戰守。風濤出沒。玉石難分。效順既堅。朕豈責報。一切免行。俾爾後嗣遵守朕命。勿得有違。天鑒孔臧。王其有赫。欽哉。故諭。二月初三日又頒二使勅諭。及沈惟敬勅諭各一道。皆申勅三事。名要遵行。冊使前駐三浪江。必釜山營柵一倭不留。有朝鮮王奏到。然後渡海往封。司馬猶恐未妥。復委兵備副使楊鎬往勘的實。回報行事。沈惟敬以倭前所遺金已不敢受。請留作倭使市買之直。中國貨惟其所欲。時京師朝覲官畢集。觀宗城出使封倭道路竦然咨曰。獨惟敬心有不然。蓋惟敬初爲司馬建此議。希已爲冊使。及不與大失望。宗城紈袴子。不禮惟敬。惟敬亦輕宗城。且惟敬許倭七事。知非一封可了。前議三約。洪要一倭不留。令楊鎬勘實。朝鮮奏報方許往封。此皆奉有欽依。及二使住釜山營。將一年。倭營不撤。惟焚小營。併歸大營而已。楊鎬足蹟不到。朝鮮國王亦無一字奏報。

今按。萬曆二十三年。當日本文祿四年。

〔節〕軍帥たる者に天子より賜はる證符也、牛毛を以て之を飾る、事物紀原に「周禮地官之屬掌節有玉角虎人龍符璽旌等節、漢文有旌節之制、云々」とあり。

〔成祖〕明の第三世也、姓は朱、名は棣也、惠帝を追ひて方孝儒等を殺して卽位す、性剛果にして諸方を征服し、內治亦た見るべきものありき。

〔錫封爾國〕成祖の永樂元年、明より足利義滿に王者の冠服及び方物若干、勘合印等を贈り、日本國王に封ぜるの證とし、且つ封約數條を定めたるをいふ。

〔藉藉〕諠譁の紛々として、やかましき貌也、漢書に「事藉々如此、何可祕也」とあり。

〔封事〕祕密の事の世に漏洩せん事を恐れて、文書を封じて上申するをいふ、漢書に「故事諸上書者皆爲二封、署其一曰副、領尚書者、先發副封」とあり。

〔慶長元年〕後陽成天皇御宇の年號也

自夏徂冬、月復一月、年復一年。司馬日促二使渡海。不曰風潮不順、則曰宮殿未成。不曰禮節未備、則曰不可不加愼重。於是人言藉藉、危疑叵測。司馬憂之。復差大同守備都司當鶴、單騎往釜山探聽。鶴回備陳倭情變幻難測。封事不可徑行。是不然之、復遣家人張竹王胡子。于四月渡海見倭。倭亦遣通事要園安來報。故信封事決成。至十二月十一日、惟敬又私令探倭委官吳邦彥等、將遼東寬奠官馬及京營選鋒馬一百七十七疋、皆送下船。發去日本南戈崖喂養云。備從人騎用。實以日本無好馬、驅獻關白也。以故言者益甚。謂二使必被劫留。二使惶惑。宗域（本ママ）日夜涕泣思歸。惟敬覘知之。乃密令宗城舊識謝隆、揚言封事敗。泣動宗城。宗城大恐。黄夜與僕謀、置印信詔勅、易服出營、從徑道走回。隨行員役皆不知之。次日方亨揭報。經略以聞。時二十四年二月事也。惜哉。宗城殊無識也。既得封事、不安消息。又明見倭不去。胡不以其違詔旨。皆初議者抗疏馳上、止其事。然後徐興師問罪。豈不毅然大丈夫乎。胡庸泣而逃也。想其從行無一有識人。遂失此機。

今按、二十四年萬曆二十四年。當日本慶長元年。

宗城既逃、惟敬快意。方亨愈不自安。見惟敬而泣。沈大言曰。人臣當國難、正宜努力捐軀。徒泣何爲。方亨訴以母老子幼、難自決。惟敬曰。爾誠欲歸、亦無難事。楊知惟敬密於倭、因懇之。惟敬笑曰。審欲好歸、謹記兩語事。一依我行之。方亨問何語。沈曰、支吾中國、奉承日本而已。方亨信諾。遂悉聽主分。將宗城遺下錢糧銀兩及酒器金帛、皆任惟敬收執。又揭報司馬、極言倭情未變。反斥宗城。力薦惟敬能任事。司馬乃爲疏、請以楊方亨攝正使。沈惟敬充神機三營添註遊擊、攝副使、以封倭。宗成未行、時衆咸歸勢惟敬。專其反覆譏弄損國體。司馬奏曰。今日不遣惟敬、異日不效。臣當有辭。故惟敬之隨行、朝廷特賜勅諭、亦爲此也。而果知衆言卒暗遂京城而攘其職。惟敬既拜命、猶不卽行。

〔沙浦郞〕和泉の堺浦也、堺浦は古くより海上交通の要衝に當り、享祿、天文の頃より外國互市場として、諸國の船舶輻輳せしが、天正年間小西行長和泉の守護として此地に來れるより益〻繁盛となれり。

〔躲閃〕體をかはして避け逃ぐるをいふ。

〔搖擺〕ゆり動かして邪魔するをいふ。

〔夜押絲〕小西の誤也、即ち小西行長をいふ。

益肆貪求。司馬皆聽意從之。爲遣項汝奕。領銀二萬兩。隨冊使東行支銷。又與劄付三張。約銀五百兩。界冊使買人。又月給。惟敬家小供贍銀十五兩。又撥巡軍夜爲惟敬看守私宅。司馬夫人時遣饋惟敬妾飲食不絕。是此時亦恐惟敬實已。先差遊擊陳雲鴻（陳女盜司馬爲妾。故自身頓膺三品。）至釜山宣諭倭衆。六月間更遣張竹王鬍子。馳驛至釜山探覘。不意二人皆黨惟敬並爲捏報。妄妥雲鴻。思以全家性命可保萬全。故星一意任之。冊使臨發釜營尚有無數倭。惟敬乃曰。降倭若干。已令朝鮮擇地安插。星亦附奏云。營栅盡焚。尚有餘倭防護冊使。以此語蒙昧朝廷。丙申年六月十五日。惟敬隨從四百餘人渡海封倭。倭將行長淸正等亦先後撤兵。同回日本國。時閏八月十八日。冊使方至日本沙浦郞。朝鮮素知倭人乞欵原無貢心。本不欲遣人。爲惟敬。逼促。只得差全羅道觀察使黃愼同將官朴弘長。隨二使同往。二十九日冊使向五沙浦。日本人民聞天朝封關白。俱翕然震動。沿路焚香頂迎。跪送飲食。一馬倭在駝馬前慢搖。倭將捽而數之曰。天朝來封我日本。爾不躲閃。反行搖擺耶。即立殺之。及抵國門。其臣下亦無不肅敬。而關白先遣平調信來言。主怒朝鮮王子不來謝。二使不許同冊使相見。九月初二日。倭將夜押絲羅元等引冊使入見。方亨在前。惟敬捧金印立階下。良久忽殿上黃幄開。一老叟曳杖挾二靑衣從內出。即關白也。侍衛呼呐。人皆竦慄。惟敬先匍伏。方亨只得隨之。老叟大有責讓語。侍臣行長曰。此天朝送禮人。宜優待之。始出赴館。揚言見關白。（卑屈狀有不堪言者。隨行護勅官徐去登歸私對人言之。故知小人不當重用也。）次日宴冊使。惟敬方發言。撤兵通好。關白即怒曰。天朝遣使封我。我姑忍之。朝鮮決不許和。天使亦不須久留。明日可上船。我當再調兵馬前往朝鮮廝殺。初四日方亨等即還沙浦郞關白遣

〔政長〕長政の誤にて、即ち黑田長政也、當時長政は豐前を領し、中津城に居したるが故にその領地に於て兵を募集せし也。

〔正成〕寺澤志摩守正成也、本名は廣高といふ、父廣正に繼ぎて秀吉に仕へ、屢軍功を經て功により肥前唐津城を賜ひ、邑八萬石を食む、天正十七年從五位下に叙し、志摩守に任ず、征明の役起るや前驅となり、屢功を立つ。

〔反間〕詐りて敵中に入り、その間隙を伺ひ、以て反りて其主に報ずるをいふ、史記に「說王仕齊爲反間、欲以亂齊」とあり。

怒朝鮮欲兵其使得僧諫方止。又喚清正等商議動兵日期。惟敬與方亨商議、我等萬里遠來不得一的信。回去有何面目。且勅書三事皆行長再三講定、還憑行長去申前約。關白怒罵沈惟敬不會圖遂日本所求。但爲朝鮮謀事、我不再見、迫請回去。行長以此言來告。二人聞之心内怏々。住沙浦郎數日。至初八日方亨只得約黃愼等收拾同回。且云。到中國時天使可明白奏上。不然恐誤大事。關白遣人贈二使禮亦優厚。皆行長調停其間。初九臨發平調信私告黃愼。昨日清正向關白說。我今再往朝鮮擧等可定。當令朝鮮遣王子來謝。若不肯當虜這兩個王子。因此關白著清正等四將先發過海。期明年二月大兵隨後調進。黃愼以告二使。惟敬猶未信、及使船回至郎古耶。日本地方泊舟候風。訪之島人則云。連日政長在豐前州。清正在肥後州。各召募兵衆將渡海矣。衆聞無不失色。獨惟敬自若曰。有我在定無害也。須臾忽倭將正成賫關白書來。衆謂、是謝恩表文及詔審。乃責朝鮮一檄。內列朝鮮三罪詞甚倨。大約言。前年朝鮮使來。雖委悉下情。中不達皇朝。無禮多多。其罪一。既依沈都指揮寬宥二王子幷夫妻以下。不先致謝禮。乃隨天朝過海之役歷數月。其罪二。大明日本之和交依朝鮮之反間經歷數年。其罪三。書至朝鮮不敢隱匿。謄寫進呈、并乞發兵隄防。十二月十七日方亨等至釜山。匆匆商議回京復命。不敢擱延。念五日離釜山行至陜川。有朝鮮京畿道都體察使李元翼。先已會黃朴二使。備知關白情由不肯休兵。此日請見冊使于海邦寺。問日本情由。方亨一一備白。元翼欲趨釜營勢寡急攻破之。惟敬曰。慮固當乘動亦宜愼。差之毫釐謬以千里。兵家所以謀萬全者稱良將也。倭兵此時尚未渡海。一擊釜倭傾其巢穴。然後以重兵守其止所謂先發制人。元翼計未爲失也。奈何惟敬阻之。又失此機。元翼因其言未敢擧兵。

今按、丙申明萬曆二十四年。當日本慶長元年。沙浦郎ハ和泉界。夜押絲ハ訛也。蓋小西之轉、關白遣人贈二使禮亦優厚秀吉遣柳川調信賜金銀雜物于冊使也。政長當作長政。黑田甲斐守長政也。倭將正成寺澤志摩守正成也。

二十五年二月十六日冊使方入關、亦各各厚載而回。惟敬恭朝中疑之。乃將屈辱眞情隱下。假捏秀吉十分恭順。頂冠披袍叩首謝恩等語。惟敬先在日本時。即指所攜金托行長。替買猩猩氈四條天鵝絨及大小倭金器皿。亦照當初小西飛買中國諸貨之例。計積三十餘擡牌上明開。日本國王豐臣秀吉補賞什物、先解赴兵部施行、及抵京即以諸物作關白貢獻進朝廷。群臣無不被誑。謂猩猩氈天鵝絨出自南番。皆中國人販賣與日本者。何云方物。又以正成所贈惟敬泥金圍屏、亦充其數。明是欺罔朝廷。不以爲罪。物令內府收受。貽笑遠人。惟石司馬尙信爲眞。問之方亨。方亨向受惟敬節制。一味朦朧不復明言。然謝表竟不至。三月後惟敬再往釜山方差官具進。又無年月、徐黃門斷其假捏無疑。日本自惟敬行後、即遣清正統領部將豐茂守等、駕船二百餘艘於正月十三日順風二日渡海。十四日到朝鮮、入竹島舊壘。與原留倭衆合勢、仍在機張往劄。隨攻梁山逐太守出城。追留住民居之。十五日行長等兵船自釜山外洋進入豆毛等浦不絕于岸上樹四色旗高叫。朝鮮人民勿懷疑議。還來安插也。念二日倭船直入西生浦。周覽下營形勢。仍示牌文一紙云。日本國加藤主計頭清正受太閤殿下之命。令再航海至於此道。使遣使者于朝鮮京城。回報之間。慶尙左道之民更勿疑此書。莫恐怖而退散。玆先遣我臣金大夫以令告報也。慶長二年丁酉正月日。平清正書牌、自此倭兵絡繹

〔天鵝絨〕西洋より傳はれる織物の名也、緯絲に針線を添へて織り上げて抜き去れば、經絲わなをなす、其わなを切り放ちて、毛を立たせたる絹織物也、ピロウドといふは西班牙語の轉也。

〔四色旗〕秀吉の朝鮮を征伐するや、概ねその軍艦を日本丸と號し、旗標は日章旗なりしが此の時は紛はしむる爲に特に四色旗を用ひたるか。

〔太閤〕關白を辭して後ち、其の子關白となりし時、前關白を稱して太閤といふ。

〔宮眷〕王族及び、廷臣、宮人等の意也。

〔浪古耶〕肥前の名護屋を指す、第一回朝鮮征伐の時の秀吉の本營たりき。

〔淤詞〕淤言に同じ無根不定の言をいふ、淤は猶ほ浮の如し。

渡海不絶。各營粮餉陸續搬運。二月初一。行長將釜山原住棚房拆木修築。內建最高樓。外掘三層濠。周圍木柵。爲據久之計。朝鮮士民初以和好事成逃亡漸復。一聞倭兵復至曉夜驚惶。皆荷擔而俟。且數年來自王京至釜山一帶。殘破已久。全羅地方初脫兵燹。城垣頹敗。未暇修葺。倭兵猝至。擧國危懼。國王先將宮眷移往海州。軍民各將家口奔徙遐境。留屯漢兵。禁之亦不聽。閣臣柳承龍托言搜山城粮草。束裝奔尙州。將官權慄等各避極東地境。皆不戰而逃。報人中國。朝鮮告急之文。無日不至。聲言。倭兵百萬分作一三運。將向天朝。關白擬。出往浪古耶躬行調度。徐給事亦言。倭兵船日增。兵粮日積。未見大擧。似有陰俟秀吉親行之意。山海關主事張時顯料關白此時。實難歇手。彼三十六島之觀望全係於此。卽日下不得志終當傾國而來。時擧朝紛紛歸罪司馬。司馬責惟敬。猶然說謊。謂。倭兵此來不過責朝鮮禮節。今專聽天朝處分非有他也。兵科徐成楚析之曰。世有興師十數萬。浮海數千里。爭一禮節奈一王子陪臣者哉。因請速乘其未定。或用間襲虛。或遣人暗燬其積聚。或說客離其心腹。總督孫鑛巡撫李化龍疏。皆老成謀國。當冊使甫還朝鮮、一有實報卽勸司馬。預爲隄備。而星漫不爲意。且聽惟敬游詞云。喚平調信至宜寧。明切與言。朝鮮王子斷無往理。陪臣一節當委曲圖之。先使正成親報關白。說明回報一月十八日。石星無奈。亦疏請。削去宮保職銜。親自帶同贊畫司官一二員。將領數人仍假便宜前往朝鮮。諭令兩國會盟。退兵完事。如終無濟卽揮大兵前進。仍治臣以付托不效之罪。與其殛身刑獄孰若殞命疆場。蓋星已奉旨聽勘也、趙相公勸其親往以息群議。又引先朝本兵王瓊經略哈密。楊博經略薊遼宣大爲證。上不肯許。時連歲用

〔席捲〕收め取る事席を卷くが如く易きをいふ、また物を悉く收め取るをいふ、戰國策に、「雖無出兵甲、席卷常山之險」とあり。

〔簞食壺漿〕食を竹器に盛り、漿を壺に入れたるをいひもと旅行に携ふる所なりしが後ち歡迎の意に用ふ、孟子に「簞食壺漿、以迎王師」とあり。

〔室如懸磬〕府藏空虛にして、但々棟梁ある事、磬を懸けたるが如しとて、極めて貧しきをいふ、磬は一種の樂器也、左傳に「室如懸磬、野無青草」とあり。

〔五穀〕周禮によれば、麻、黍、稗、麥、豆の五をいふ。

兵國計頻絀。今議出兵。非四五萬人不可。朝鮮亦乞。先調南兵三四千。星大進駐要害。以爲聲援。奈何封事一起。已將東征士馬。盡徹回籍。劉綖兵已還四川。其天津登萊戍守南兵。俱各議罷。平壤南兵撤回。時以王賞不給。如松攻平壤時。約先登者給銀萬兩。南兵果先登。鼓譟于石門寨。總兵王保與南兵有小忿。遂以激變誣惑軍門。千二百名悉盡誘殺之。人心怨憤。召募鮮有應者。舉朝無策可施。咸欲請誅石星以彰國典。後至戊戌年。星卒殞于獄。按。星以直諫顯名。致位樞府。卽和議一事。本心無非爲國。第大臣貴虛心集善。根本不欺。星乃偏聽執已。希幸成功。事涉欺罔。遂亦不宜輕主封事之成。舉國知之。舉國言之。星皆目爲異己。新建浮議而排斥之。一惟敬言是聽甚。至直隸總兵宋大斌。倭巢明。星援意當事者曰。琉球佛郞機人非倭也。山東揚文僨軍號報。遇倭於海邊。至朝鮮界上。血戰得功。朝鮮王且爲代奏。未久揚文劾罷矣。混處參將高可學標下哨官陳定斬倭六十級。星不爲叙功。且云。琉球屬夷。何可妄殺。未幾可學被論。諸此類。借甚同得封事。故委曲掩飾。以陷于罪。此皆偏執所致。道其終也。欲身請入于倭營料虎鬚。愚亦甚矣哉。此時倭兵二十餘萬。分五路入朝鮮。如東萊機張西生浦豆毛浦安骨竹島梁山蔚山加德。皆爲賊占據。而熊川金海昌原咸安晉州固城泗川昆陽賊皆橫行蹂躪。差役人一步不敢前進。倭又敢于佔地。不敢于掠財。敢于據要。不敢于殺人。志不在小。日中已無朝鮮。設此際我兵未集。乘其銳氣鼓行而西。席捲全慶。朝鮮且久休矣。賊得朝鮮。爲窟穴則遼陽震動。而登萊浙直無不危急。乃幸天祚中朝。高麗國祚未盡。倭雖兵聚糧餉不敷。未敢深入。蓋倭以海舟運糧。風水不便。先年朝鮮有積蓄。破一道因糧于一道。克一城就食于一城。故敢輕兵直入。五六年來城邑空虛。土地荒蕪。初時王師所經。簞食壺漿以迎者。今則室如懸磬。野無青草。衆之禦寇者爲寇。人煙寂滅。一望蕭然矣。雖有宜田之土無人耕種。慶尙有地與全羅地最肥饒宜五穀。平安道肅州安州。黃海道鳳山黃州沿海並有可耕田土。亦頗宜稼粟米。食物至貴。人不聊生。鵝肉卵一對。家肉一錢二分一斤。牛肉七八分一斤。倭皆目擊。卽有隨糧常恐不繼。所以數月之間人心無

〔竹島〕慶尙南道洛東江の右岸に在り

〔隄備〕隄は堤に同じ、茲は防備の意也。

〔襟帶〕要害の地をいふ、山そびゆるを襟に喩へ、川めぐるを帶に喩へし也。

〔邢總督〕丁酉兵部左侍郎を以て孫鑛に代り朝鮮救援軍の將となり、兵部尙書兼都察院右副都御史に進む、丁酉初夏朝鮮に來り己亥四月還る。

不於懼而彼反從容如鷙鳥匿形。朝鮮人殺其樵採不動。殺其雜兵不動、不自請兵關白、則曰責禮朝鮮。至三日初。行長清正兵糧戰器船方到。蓋倭名六十六州。實比中國一大省分。錢賦不多、關白一時調衆。將渡海。只得將各島居民加水火重刑、徵輸僅足兩月。所以陳雲鴻討遼將寄說、清正只待糧運可支一年。卽分兵略地。有進無退矣、行長見糧運不繼。與竹島倭將商議、必待七八月穀熟方利衝犯。以此言通報關白。所以朝鮮與中國幸得預爲隄備。

今按。二十五年萬曆二十五年。當日本慶長二年。

又卷之四

日本下

北直隸天津衞係畿輔門庭。陸至山海關。凡八百餘里。海面與旅順相對。止三百里。風順頃刻可達也。登萊逼近海口、爲中原襟帶。南至淮安。運河口三千里。又山以東江以北之藩籬也。朝鮮容處。中國所極慮者。不在遼東反在此二處。故建言者欲於兩處各設巡撫。後邢總督亦令周于德。總統舟師往旅順。李承勛增戍卒往登萊。卽此意也。孫經略議。設水兵游擊。統領三千人往旅順口。以保護天津。又設浙兵游擊。統三千人往鴨綠江。西設海防道一員。帶銜山東往遼陽城。專管寬奠起至金州一帶。防倭郎中張汝緼又謂。旅順至天津可登岸者二處。一曰大江、一曰起口。二處相距一百五十餘里。宜以兵一守大江。一守起口。精卒遠探。一有警卽調各鎭兵併力協守。內閣張洪陽議。莫若於開城平壤二處開府。立鎭練兵。屯田。西接鴨綠旅順之師。使有所望而歸依。東衍王京鳥嶺之援。使

（敵愾）敵に當り、愾は恨也、己が主君の恨み怒る所に當り討つを云ふ、左傳文公四年に、諸侯敵王所愾云云、とあるに出づ。

（尺寸）極めて微小なるを云ふ。

（南原）全羅北道に在りて、京城より順天に達する京順街道に當る。

（慶州）慶尙道大邱の東に當る、古へ金城と稱し、新羅國一千年間の舊都なりき。

（忠州）忠淸北道に在りて漢江上流の東に位す。

有所恃而雀躍。勢便則選輕兵而趨利。決勝。不便則虎踞以牽其邪心。自寧前至開城一千四百里。已據朝鮮之半。雖不速進已不爲退計矣。自鴨綠至平壤五百六十餘里。由平壤至王京六百八十餘里。由王京至釜山一千二百六十餘里。今止至開城。故云半也。在倭有屯蓄。吾亦有屯蓄。在倭有轉輸。吾亦有轉輸。就朝鮮之人。雜以漢人。兼以漢法。教以漢戰。變其偸惰。作其敢愾。務農勸耕。通商惠工。廣樹畜之源。開山澤之利。其地多銅。即山鼓鑄以資軍興。錢粟可以爲餉。地民可以爲兵。開半既定。得一步。次第取慶尙忠淸黃海等處屯守。又如前法。見調人馬。先屯一處。以資接濟。不責捷於旦夕。務爲經畫長久。鳥嶺以南相機進止。毋得浪戰損威。鳥嶺以北還定安集。不許尺寸有失。又曰。凡事必先爲久計。而偶値蚤完則可。苟先爲暫計而不克。如願。豈不終可慮哉。前三議皆經理內地。惟張公此議。正是經理朝鮮第一善策。▲二月間孫經略亦去任。而朝命侍郞邢玠爲經略。總督楊鎬爲經理。巡撫麻貴劉綎爲南北大師。而盡徵浙江川廣之兵以援朝鮮。玠山東靑州人。謹重有識略。事必熟慮而至。不爲苟且。二十五年四月念二日。抵密雲交代。方受事。麻總兵欲計倭宜大兵到。乘倭未備先取釜山。釜山取則行長被擒淸正必走。大事須臾可定。玠曰。兵先定謀而後戰。今計畫未定。彼中勢無可乘。而遽行險。是自取敗。一敗則倭奴乘勝長驅。我軍氣難再振矣。吾意先遣楊元吳惟忠領兵二枝。南至王京。兩將分屯於全羅之南原慶尙之大丘慶州。而總兵且在王京居中調度。但楊元昨報。南原城郭圮壞。管房俱無。錢糧無半月之積。慶尙一道又半爲賊有。吳惟忠孤軍亦難入慶州。故今且使楊元催運糧餉。協同朝鮮修理城垣。以爲捍蔽。吳惟忠姑令往忠州扼賊後門。俟七月各兵俱齊又作區處。時總督尙未出關。麻貴先赴王京傳諭二將。又遣人齎國王。督率

〔新總督〕邢玠也。

〔加德〕慶尙道の南岸巨濟島の東に在り、周圍八里餘也。

〔漢城〕京城也、又た漢陽とも云ふ。

〔珍島〕全羅道の南西隅に在り、周圍七里餘也。

〔濟州〕慶尙道の南方に在る朝鮮第一の島、東西三十里南北約九里あり、漢羅山中央に聳ゆ

朝鮮諸臣。練兵固守地方。把截險要。朝鮮王承新總督之命。乃分遣將官。使慶尙左兵使成允門防禦使權應銖等。住慶州以防鳥嶺之路。右兵使金應瑞等住宜寧以防釜山之賊。統制使元均等以舟師專備竹島加德之賊。各務勉勵以候大兵。或又議。朝鮮殘破久。國中無人。倘一不守亡朝鮮是亡中國也。不若。選中國賢能爲朝鮮司道官。分理八道。俾各爲保障。固守山城。然後進兵勦賊。以此宣諭其國。若臣叛中國吞倂。乃疏言。朝鮮舊有三都。漢城。開城。平壤也。今三城爲賊久據。數千百里蕩爲煨燼。臣今居漢城。亦荊棘未除。庶司陪臣依薪櫱爲生資。升斗爲食。遺民還集百不一二三。拮据匍匐呻唫未絕。若分理各道委不能供給。朝議遂止。自此三箇月。南邊俱不動兵。日惟整搠人馬各守險隘。信息不通。惟沈惟敬往來倭營。出入釜山。宜寧一帶與倭混爲一家。朝廷責以撤兵則云。關白要割朝鮮三道。卽忠淸。慶尙。全羅也。惟敬初議封。不顧利害。苟且許之。其寔全慶關係最重。慶尙朝鮮門戶而全羅府藏也。無慶尙則無全羅。無全羅雖有他道無所資爲根本之計矣。以海道言之。賊據全羅則遠而西海一帶。近而珍島濟州皆爲窟穴。賊船縱橫海上無所不通。便風一二日可抵鴨綠則開城平壤亦不足爲國。非獨朝鮮。倭船從海入犯中國。必由全慶二道。地角得便風而後能進。日本入朝鮮以南風。朝鮮進遼東以西風。故倭之不能從海入犯。特二道爲我衛也。全慶亡。倭不必陸犯遼東。舟帆可以直指山海。又從水路之東分兵。四出擾我四鎭。東隅沿海時々有切近之憂矣。此皆必不可許者。而惟敬依廻其間。不過欲延緩逃罪。始以封事騙中國。此又欲以三道騙朝鮮。令中國棄而去之也。五月間統領浙勝營游擊第國器初至王京。問惟敬以倭數多寡。惟敬漫應曰要多就多。天兵不

〔固城〕慶尙南道の南部に位し、泗川の東南岸に在り、一大灣を形れる形勝の地也。

〔西生〕慶尙南道の東岸に在りて、豆毛浦を距る北方數里也。

〔晉州〕慶尙南道に在り、營江府城を環りて東流し、洛東江に入る、交通の衝に當れる要害の地也。

〔石司馬〕石星也。

若退守鴨綠爲上策意可見矣。及二酋遣平調信回日本請師期。惟敬謬云。俟調信回兵卽撤。調信於六月初見關白。關白曰。朝鮮不聽我言。以全羅忠淸二道尙完故也。儞等于八月初一日直入全羅地方。割不爲糧攻各處山城。仍進攻濟州。如是勢難則還兵慶尙。自固城起至西生。止八處。連營住兵。或十餘日程。或五六日程。不時出入使掠。有山城去處。盡力圍把。雖被死傷必攻破而後已。倭力攻破南原以此。　儞等戮力爲之。如不從我言當盡殺儞等妻子。調信回說。卽日天兵大至。已到全羅勢難進攻。關白發怒曰。癸巳年間。天朝大兵雖在近地尙能攻陷晉州。天兵雖大至不須畏避。調信又說。今年六七月。日本大兵當一時渡海西生等處兵自慶州歷密陽大丘向全羅。釜山竹島等處兵自慶州晉州向全羅。關白許之。六月十四日。調信過海傳令行長淸正等。調兵進攻。惟敬得此消息無計解釋。乃求朝鮮僧人以密帖送淸正云。邢總督大兵七十萬將至。勸其退兵。淸正在西生浦。答書曰。太師言大明兵沓至。是我所願也。朝鮮弱兵而無向我敵也。對大明之兵快作一戰。則朝鮮國者不足言。大明北京燒却之不可回首。幸又幸也。餘不具。惟敬又令僧求之美濃部秀吉弟金太夫亦以書答。不肯止兵。於是倭將專求割地。中國專要撤兵。惟敬兩不能應。其計始窮。又見明旨責罪本兵。惟敬心懷疑貳。計欲逃入倭營。特未得間。邢軍門向怒。惟敬欺君辱國賁石司馬。一交代卽思擒之。恐驚動脫走反爲倭用。露中國虛實。又恐好事者以爲。敗其垂成之功。故先爲一檄以諭安惟敬。幷以安倭之心。惟敬初見軍門不疑之。衞將行李家事撤入南原。南原去釜山七百里矣。五月中邢公將出關。令楊元以遼兵三千人赴南原。吳惟忠在忠州。麻總兵赴王京。雖調度防倭。已密帖與

元等四路設伏。防其逃出。惟敬原帶營兵一二百。衆養得其懽心。軍門與其衆夜寧衆殺出。又假以吏換先撤之。惟敬愈不安。使家丁數國安張龍等屢往釜山道意。行長許之曰。當俟機會。遣兵迎汝。于是惟敬令人廣收中國珍奇。及狐貂皮八百張爲媚倭進見之資。六月十八日。平調信忽駕船九隻。帶倭五百至海邊。差人到宜寧。喚惟敬講話。乃爲朝鮮兵阻回其使。又同張龍從陸路回釜山。楊元聞之曰。事急矣。自南原星夜馳至宜寧十里許。迎見惟敬。方馱載狐貂先行。楊元一見問倭情何如。惟敬曰。成不得了。元云。既成不得。何不赴見本鎭以符前言曰。我且不去。明日往慶州差人與清正講話。一月半方回。元視惟敬言若狂而色已變。當時與軍門差官六人出示鈞票。拏回至丹城地方。押送軍門請旨監固。惟敬擒。日本之嚮導中國之禍根方得絕矣。後八月十四日。御史况上進抄陳澹如家。搜出倭旗一面。長短倭刀。倭劍共三百三十六口。倭衣。倭器。細絹。犀帶。日本圖等項共三百六十三件。人心莫不暢快。按。惟敬海上數年。平壤大捷王子得歸。雖盡沒其綏倭之功。此後反覆變幻。彌縫詭詐。年復一年。月復一月。使中國耳目不明。戰守無據。迨於姤宗城。朝日本。撤軍戍。費餉。損威。欺悞本兵。厥罪不小。總督身未渡遼。先計除心腹之患。然後軍中動靜倭將無由知之。謀亦臧矣。彼蕭應宮欲釋惟敬。要亦爲利口所惑耳。　惟敬痛恨楊元。無由報復。被擒之日。暗令婁國安脫身報與行長南原虛實。令其起兵掩襲南原。南原東有雲峰烏嶺。南有三浪大江。直通金海竹島。此爲全羅門戶。可以屯聚馬兵。乃朝鮮最要害處。而閑山島在朝鮮西海水口。守此以阻截倭船。又爲南原右障。故總督未出關。先使副總兵楊元以遼兵三千往扼其地。延綏遊擊陳愚衷統兵二千。往全州以協助之。且恃朝鮮將金應瑞李元翼兵在雲峰之外。權慄兵在閑山之內。閑山又有元均統舟師守把。各爲障蔽也。無何行長得沈惟敬之報。即欲進攻南原。而七月

〔宜寧〕慶尙南道晉州の東北に在り。

〔陳澹如〕もと北京の妓、沈惟敬の妻となる、惟敬が日本の事情を知れるは澹如の僕鄭四によりてなりと云ふ萬曆廿七年惟敬誅せらるゝや捕へこれ官家の婢となる

〔心腹之患〕除き易からざる敵に喩ふ戰國策に、「所以爲心腹之疾者趙也」とあり。

〔全州〕全羅北道に在り。

〔奪閑山島〕慶長二年八月十五日夜藤堂高虎、脇坂安治、島津忠恒、加藤嘉明等元均の舟師を絶影島、加德島及巨濟島に襲ひ大勝す、此の役高虎船六十餘艘を得、斬獲數千に上り、義弘父子亦哨船百六十餘艘を得たり

〔十二日云々〕これより先八月朔日兵を發し二道より南原に向ふ、一隊は宇喜多秀家、一隊は毛利秀元これを率ふ。

〔恩肆館〕忠淸道に在り、公州の南西に位す。

初大雨。四五日不止。晝夜如注。平地皆爲巨浸。三江大河一望滔天。宣府大同調到。人馬俱七月半後。方得至平壤。麻總兵七月初二始得至碧蹄。不過沿途整理。續到之兵査勘城郭山川之險。冒雨前行。甚是艱楚。此時便舟師。不便步騎。朝鮮水營將官元均在閑山。密謀擧兵。約會中國。搗釜山巢穴。不意。金應瑞在宜寧陸路。虛張聲勢。將元均約中國搗巢日期洩于行長。行長欲攻南原。正慮元均襲其後。一聞此信就中用計。遣豐茂等領兵襲殺元均水兵。遂奪閑山島。閑山一失京西水道無處不通。賊於是倭兵水陸並進。賊船不日兩三日內泊光陽豆耻津。距南原甚近。釜山西山之賊。又由慶尙右路俱會南原。權慄李元翼等兵勢不能阻截。皆往趨於東偏。賊益肆行無忌。楊元一聞驚報。八月初十日。先遣家丁將行李一箱押回平壤。（平壤隔南原一千餘里。里中隔大同漢錦諸江。）十二日行長倭兵至城下。元與朝鮮全羅兵馬節度使李福男共守此城。欒箭齊發。賊稍退。日每添賊。四面攻打。採木打造雲梯。懸樓以扒城。又割田稻積濠邊塡濠。又於濠外穿木柵三層以阻我兵突出。凡數晝夜不休。賊忽退綏。元等因倦少息。至十六日一更倭忽擁至南門。猝時登城。先閉城門。賊遂入城。楊元在帳中。聞之驚起不及被衣。跣足出廳上脫。傳報官甯國胤衣靴帶隨。從家丁十八人逃出西門。元所統領。除李福男等凡遼東營兵。幷家丁雜流共三千一百一十七員名。及出圍從大路西盆鳳山走三日。直至恩肆館。査見在者一百十七人而已。李福男等皆死城中。（楊元僨帥耳。僅可隨陣張疑。不堪專城寄守。且南原此時亦不可守矣。楊元尤非守南原者。蓋閑山一失。勢必至此也。邢經略初議欲且守南原。極爲有見。然不知遣水兵協守閑山。又不能愼擇南原之守。所以二城連喪也。惜哉。且馬兵最不利禦倭。倭破馬兵皆以夜至則人不及騎。馬不及鞍。祖承訓與楊元之敗。賊皆夜攻。二人皆遼將六千人皆遼兵也。大抵北將不經倭戰。每視爲易。而卒難。南兵習慣征倭。視倭難而反易。如麻貴未至平壤。即欲輕師直取釜山。經略以四萬人即欲當倭衆二十萬。巧

而速。總視之大易耳。楊元陳愚衷又何足責哉。　此時遊擊陳愚衷在全州。愚衷奉調。以七月內抵王京。麻總兵即令守公州。總督慮南原有失。復調守全州以接應南原。二城相去止百餘里。愚衷入城時。州官言。城中並無升糧。二千人何以供給。及愚衷躬勘地勢。見十里外山寨中。藏貯米豆盛砲鉛彈弓矢鎗刀筅牌等物。各千萬計。遂令搬運入城。州官堅意不肯。蓋此時朝鮮雖賴中國兵援。然被兵殘害處亦不減於倭。所以不欲官兵在州。賊一至民即奔散。所以貯之十里外山谷間。恐賊不時入城反爲寇助也。而愚衷不悟。自令人連夜運入城。分派各兵防禦。及南原告急。楊元星火差人求救。愚衷即宜激厲所統銜枚疾趨。刻期密約。舉火爲號。使楊元裏應夾攻賊可走也。即不然能引兵而前。牽挽賊勢。賊必不能專力攻南原。南原知有外救。必且堅心拒守。亦未即破。奈何愚衷畏懦。先一次回文曰。恐顧彼失此也。後又具稟曰。非不欲救。信地難以輕離。卒不肯發兵。及聞賊已破南原。全州百姓望風震駭。舉欲逃竄。官兵阻之。反傷官兵。盡燒積聚。乘夜撞出城門。愚衷無計。至二十日寅時哨探報。倭兵將到任實。此地去城止二十里　愚衷遂帶領所部。棄城北走。倭兵遂入全州。此時麻貴聞南原被圍。急遣遊擊牛伯英。提兵赴救南來。而愚衷已北遁。乃合兵一處。暫止公州以張聲勢。愚衷初至全州一空城也。即民不逃。糧不燬。亦非效死勿去之民矣。倒此守則坐困。不如捲甲而赴救。更可轉敗爲功。乃既不能救又不能守而卒逃焉。欲以空城委罪。愚衷之衷眞愚哉。　公州漸近王京。而公州北有江一道。王京亦有漢江。總兵慮。恐兵還不便。責令朝鮮多備船隻。連搭浮橋以便過往。數日之後江口止有小船三十隻。詰之云。並無大船。隨喚兵曹官言。我軍數千里遠來。專爲爾國。今如此推諉。南原覆轍可鑒。官云。向來本國糧餉止靠全羅。今全羅殘破。運道已絕。無可奈何。及麻加切責。只得口許。竟托空言。

〔盔〕兜也。

〔筅牌〕采配ならむ

〔銜枚〕漢書高帝紀の顏註に、銜枚者、止言語讙囂欲令敵人不知其來也、枚狀如箸橫銜之、繣絜於項、とあり。

〔任實〕全羅北道の中央に在り。

〔公州〕忠淸南道に在りて錦江に沿ふ古の百濟王文周王の古都也。

〔覆轍〕敗亡也、爰は慶長二年八月秀家、秀秋、行長、淸正等三道より南原に明將楊元を破りしを指す。

〔進退惟谷〕如何とも爲す能はざる也 詩經の疏に、谷に墜つるは是れ窮困の義なりとあり。

〔麻總兵〕名は貴、大同右衞の人、大同參將祿の次子也 嘉靖中、舍人より都指揮僉事に至り 隆慶萬曆の交、總兵官に累擢せらる 後病を引き歸る。

〔甞膽〕身を苦しめて舊怨を忍び、其復仇を計るを云ふ、史記越世家に、越王勾踐反國、乃苦身焦思、置膽於座、坐臥仰膽、飲食亦甞之也、とある故事に出づ。

我軍前有大敵。後有長江。進退惟谷・麻總兵又以二城既失・忠州前後受敵・勢甚孤懸。吳惟忠獨守鳥嶺。而賊已犯全羅。亦爲無益。因令撤回。相機戰堵。朝鮮國王聞二城之報。亦急調都體察使李元翼督率將官高參等。由鳥嶺徑出忠清道以前遮賊鋒。時慶尙地方大半已陷。全羅之南賊皆橫行。不日將到王京。王與經理提督商議。將城中老弱婦女不堪留在軍中者皆許出城避賊。此時總督尙未出關。兵務臨局調度。皆付楊鎬經理。鎬惟安坐平壤不進。至九月初一。聞二城已失方至王京。亦別無措置。惟歸罪一將。謂。南原被圍時。已傳檄愚衷。催督數次。而愚衷按兵不肯南向。以此馳報軍門。總督得報即疏一將失律之罪。寘之重典。其漏泄機密金應瑞。亦咨與朝鮮王令重處以伸國法。又倣孔明界亭之事。自己認罪請命降黜。兵科侯慶遠因朝鮮君臣無鬪志。疏。令督臣移咨。明開國王。中國憫屬國淪沒。再勤王師。惠出望外。是宜爲君者有枕戈甞膽之志。爲臣者有主憂臣辱之節。庶民有親上死長之義。而我之大兵迭出以助聲勢。倭雖強其如朝鮮何。奈何國主思奔。大臣逃竄。總兵賣國而泄機。庶民望風以降虜。即如昨日南原之陷・全州之失。朝鮮官兵竟不聞何在。而且倒戈反向者有之。乘機內亂者有之。是明甘心於倭矣。今咨・該國痛自驚省。若果山下交勉力圖。死守獎率三軍。有進無退。中國即當大發兵餉。助爾討賊。若自輕社稷。竄伏草莽。求緩須臾。中國豈得代爲爾戍。即當還師境上。自固封疆。爾東西南北自在也。該國自計歸著之地。務吐由衷從實詳咨。勿持兩端悞我軍機朝鮮王得咨。隨答前後情節。萬非得已。誠無甘心爲倭。當將金應瑞革秩廢爲卒伍。戴罪自效。附報中國。因又策勵諸將。將所徵一安黃海京畿咸鏡四道軍兵萬餘人。一聽經理

〔柳成龍〕字は而見、西厓と號す、李退溪に就きて學び、官左議政となり大提學を兼ね、壬辰の變兵曹を兼ね、王駕西狩に扈從し、領議政に陞る、萬曆廿三年卒す。

〔黃州〕黃梅道に在り、大同江の南方二里、平壤に至る要地也。

〔安州〕平安南道平壤の西北十八里に位し淸川江に臨む頗る形勝の地也。

提督分付。協同天兵。分守安漢江諸灘。又以漢江上流龍津等處係緊要。覆遣京畿都體察使柳成龍巡歷沿江一帶。撿察守禦形勢。

今按。柳成龍作懲毖錄者。懲毖錄曰。楊根郡守李汝護守龍津。査大受恐賊來襲報余曰。賊欲得査總兵柳體察云。姑避開城。如何。余答之曰。恐無此理。我等一動則民心必搖。不如靜以待之。乃宜與此段參考。

王亦躬服櫜鞬追隨戎馬間。親出城西閱視軍兵。又出城東慰撫守灘將士。奔走效力。此時賊兵已及於王京安城之境。在都城百里內。而提督與經理俱在王京。晝夜隄防。不得不急。蓋總督初議以南原忠州爲左右翼。而以王京爲家。故王京必須堅守。王京一不守。即朝鮮大事再不可爲。而此時守之甚難。京東南有慶尙之賊。京西南有全羅之賊。而我惟陸兵一枝在公州者。大敵在前。長江在後。此兵家大忌。而江口既無浮橋。亦無大船隻。至於王京水路。正西則江華。西北則平壤之黃州。再北則加山安州。再西北則義州之鴨綠。此皆王京以上緊要水口。倭若進海而北。皆可以入賊。以一半從陸牽制于南。一半由水抄入於北。而吾兵反在其中。自此倏忽而旅順。而天津。而登萊。順風揚帆無不可到。倭將久住朝鮮。豈不知之。況我兵未集。彼糧已充。彼勢已驕。而彼反逗遛不進者。一則王師大學先聲奪人。一則惟敬就擒嚮導已絕。一則朝鮮殘破千里。蕭條城無居民。行無傳舍。一晉行師。又步步爲營者誠恐。一遠海口。急難退步。所以八九月來只在全羅道。分散搶掠。修築營壘。掘地成窖。將朝鮮人免殺納糧。意在久住爲蟠據侵犯之計。未敢輕師直入。故朝鮮君臣亦得整兵督餉頗有

次第朝鮮徵糧于東北諸道。供億我師去秋。兼用遊擊葉靖。捧督府檄文入朝鮮催糧。今年二月回糧册。積米豆十六萬八千餘包。因患不足重講海運。海運自天津出海。由旅順而入朝鮮。義州風濤千餘里。沿海處々有鐵板沙。船觸之立碎。戊戌春。山東指揮康永年鄭建都田浩等皆以糧食花布運。船沒於義州海洋。若陸運則由義州平壤轉運。至廣梁三百里。由廣梁至江華府。又五六百里。總督在遼陽日逐飛檄。催浙江川廣各兵。及預辦糧草。水陸趲運俱赴朝鮮。浙江指揮茅明時領兵至遼。獻平倭十議。總督嘉納之。後多用其策。一檄諸夷。欲傳檄琉球女直等國。令或趨釜山。併力征剿。或抵日本。攻其必救。是以夷攻夷。莫此爲便。一工間諜。行長清正二酋久處疑忌易生。令工爲間者。俾其自相矛盾。携心歸國。後令毛國科間義弘。二酋竟歸。　一招投順倭奴營中。半是高麗人。使誘其首以斷歸路。我又嚴其禁以絕自新。卽有招順榜示。聲息難通。莫若臨陣之時毎兵齎帶竹箭一方。上書凡我華人願歸本國者毋論已薙髮未薙髮。苟言語相通卽前有罪犯悉宥不論。中有能斬倭。或斬將領首級。來投者賞銀世爵如例。悉拋擲陣前令拾。自相猜忌。後用此竹箭招回高麗人。動以萬計。　一壯軍威。兵聚則強。兵分則弱。奈何以天朝之援兵爲朝鮮分守乎。惟當圖據上游臨時策應。且令報房傳抄其省調兵幾萬。某省招兵幾萬。傳播中外以奪其膽。今但分而守之。我以孤軍支勁敵。敵不知我分兵之故。遂輕中國爲易與矣。後止分三路。亦用此議。　一敎土著。朝鮮卽古高麗。素稱雄悍。第安寧日久民不知兵。而雄心猶昔也。我卽驅倭過海淨掃釜山。不若以南兵爲敎師。一敎十。十敎百朞年之間。箕兵卽南兵矣。何懼闗白哉。後果用南兵爲麗兵。總以敎練之。　一更屯練。今日爲朝鮮調兵。明日爲朝鮮持餉。終久難繼。當舉行屯練之法。更番

〔江華府〕黃海道江華島に在りて、漢陽の咽喉を扼する要地也。

〔矛盾〕言語物事などの前後撞着せるを云ふ、韓非子難篇に、楚人有鬻楯與矛者、譽之曰、吾楯之堅、莫能陷也、又譽其矛曰、吾矛之利、於物無不陷也、或曰、以子之矛、陷子之楯、何如、其人弗能應也、とあるに出づ。

〔間〕義弘に島津氏の秀吉と嘗て隙あるを聞き以て間すべしとなし、檄を作りて秀吉の罪を擧げ、辯士を遣はしこれを齎らして義弘に説かしめしむ、義弘叱してこれを卻く。

互易。今年屯者明年爲練。今年練者明年爲屯。久當足食而足兵矣。後果舉屯于馬山一揺倭情。我兵不必嶮攻釜山。惟絶其餉道不致往來。僅僅釜山所入幾何。失利之後決不敢徒步數千里以犯燕京。必至操舟東渡。我能預戒舟師要絶歸路。人情赴家必無鬪志。我可盡殲之矣。後果從海上收功。斬獲無算。九月初七日。副總兵解生恐倭直犯王京。分發部下于稷山水源等處防剿。而倭已至全義館。距王京百五十里。城中人戸晝夜驚走殆盡。我兵方溪五里迎遇之。同參將楊登山遊擊牛伯英頗貴直沖之。斬死倭一名落馬。因乘勢追趕十里之外。殺傷數多。後兩哨山谷倭執打旗號。擁衆齊出。適撫院下千總李益喬把總劉遇節引兵驟至。灰塵大起。幷力協攻。良久賊始大敗退去。解生見賊衆兵勢。乃收兵回。共斬首級二十九顆。降倭葉春認得落馬者。係清正下倭將葉一枝也。此時官兵未集。倭日中已無王京。而一戰挫其鋭氣。雖斬獲不多。然王京之守自此方固矣。十月廿日。麻提督遣先鋒副將李如梅等。發兵哨探。擊殺賊于星州谷城等處。倭自星州退谷城。又自谷城漸退求禮。皆于東南陸續退回。又發兵於靑山等處攔剿。屢戰屢捷。倭遂遁走。堅守老營不敢復出。邢經略于十一月方渡鴨綠江。時値嚴冬。雨雪經旬不止。十一月二十九日始抵王京。與楊經理麻提督商議動兵。一面哨探倭賊動靜。或取竹木。或築營寨。或搶稻搜糧散漫山谷。不計其數。約大兵分屯三處。行長在松島。清正在蔚山。與歇在釜山。通共兵馬十餘萬衆。三路又爲六四分[illegible]。蓋主將與偏將各又一路也。邢公向以科臣而復。咨諭朝鮮。堅其鬪志。至是復面諭本國君臣。示以天朝救援之恩。責以君臣戰守之義。皆感泣思奮。督發人馬。用心剿賊。於是兵曹判書李恒福與諸道都巡察使權慄調。遣各將屢有斬獲。十二月念一日。長興府霜山里交鋒。

〔燕京〕明都北京也

〔全義館〕忠淸南道の東部に在り、南原の大勝後京城を攻めんとて北進、九月七日毛利秀元黒田長政等此地に至る。

〔星州〕慶尙北道に在り、若水河これを繞り東流洛東江に注ぐ。

〔谷城〕全羅南道に在り、求禮の西方に當る。

〔求禮〕全羅南道南原の南方に在り。

〔松島〕慶尙南道猫島の[illegible]に在り。

〔蔚山〕慶尙南道蔚州の海岸に在り、城は慶長二年十一月十日頃より普請十二月廿三日成る

斬賊首十顆。奪回原擄男婦三十餘名。十二月十九日。光陽地鏡灘交鋒。斬賊首四顆。十一月念一日。寶城郡瓦井里交鋒。斬賊一顆。十一月初十。樂安交鋒。斬賊一顆。十一月念四。寶城大按觀交鋒。斬賊一顆。又雁峴交鋒。斬賊二顆。十一月念一。晉州代女村交鋒。斬賊首九顆。同日順天別良里交鋒。斬賊二顆。十一月十七日。興陽縣飛羅谷有賊屯據。義兵從事官宋德驥寅夜火攻。燒殺殆盡。斬賊一顆。同日寶城郡廣灘交鋒。斬賊一顆。又松谷里交鋒。斬賊四顆。內有倭將首級一顆。兼二道水軍統制使李順臣哨探任俊英與順天任札賊交鋒。射殺不記其數。仍斬首二十五顆。又寶城縣榧子峪地方與賊相及。斬賊首二十一顆。盡奪被擄男婦。賊衆向東退走。所報捷音通共八十餘級。雖中間零星一二級者多。然朝鮮人素畏倭如虎。而一旦遽能擊斬。士氣漸可振揚。又議政府右議政李原翼著令軍將守令等官。各以國王免死帖文。招出陷賊降倭百姓。前後數千餘人。以孤賊勢。此時宣府大同遼薊延綏保定浙勝營兵俱已到久。而陸續至者又有。續募浙兵四千。因藍芳威未到暫委遊擊葉邦榮署領。南京水兵二千二百八十餘名。陳雲龍統領　福建先調水兵一千五百名。都司許國威統領。應天先調水兵一千。原任參將王元周統領　狼山水兵一千五百名。福日昇統領　其續調浙福水兵亦將督發。廣東陳璘陸兵五千。水兵三千。俱已在途　劉綎川兵與陳廣兵俱次年二月先後方到。各處兵俱于王京會齊。軍門與衆商議進攻次第。以爲。行長營在釜山。清正營在西生浦。如破釜山。陸路必由梁山之西北。有高山峻嶺。止容隻馬。路甚險惡。南原有三浪大江。直通金海竹島。此二處皆咽喉之地。倭俱有勁兵一枝把截。須防其伏兵。水路必由巨濟加德安骨一帶。三處亦咽喉之地。加德安骨已有倭船屯。聞巨濟尚無兵屯。當先據之。但我兵一過梁山三浪江倭兵

〔淸正營云々〕當時淸正は家人加藤淸兵衞以下に、毛利秀元の家人を添へて蔚山の留守たらしめ、自から水路の視察として西生浦に赴き機張に陣せし也。

〔咽喉之地〕極めて緊要の地を云ふ、戰國秦策に、「頓子曰、韓、天下之咽喉、魏、天下之胸腹」とあり。

〔安骨〕慶尙南道の南岸に在りて加德島と相對す。

水陸倶扼險。吾後無應援重兵恐不能出。再益以機張等兵自東而來益不可當矣。如破清正營。陸路自西而東則由東萊機張。自北而南則由慶州蔚山。然此路東南大海。西北山嶺。倶有敵兵。險不可進。卽進止可用步兵。水路必自東而西。由長鬐甘浦。長鬐水兵船止四隻極弱。非添兵未可輕進。又言。倭所依者水。而水戰却不利。正兵須東西各水兵一枝。止作奇兵。牽其四顧。而陸兵方可出沖突。仍一枝屯南原以捍全羅。一枝屯大丘以扼慶尙。一枝屯慶羅之中。如晉州宜寧等處以爲中堅。然後分向釜山機張兩陸路。與水兵東西四面齊發方可。計議已定。上疏奏報。乃將各處兵馬四萬餘人分爲三協。左協副總兵李如梅統領馬步一萬二千六人。部將盧得功遊擊董正誼。遊擊茅國器。遊擊陳寅南兵遊擊陳大綱。川兵千總中協中軍副總兵高策領馬步官軍一萬一千六百九十人。部將祖承訓。立功副總兵頗貴。宣鎭遊擊李寧大同遊擊李化龍。保定遊擊柴登科。遊擊苑進忠。吳惟忠。副總兵右協副總兵李芳春解生共領馬步官一萬一千六百三十人。部將牛伯英。遊擊方時新。守備鄭印。眞定都司王戡眞定把總盧繼忠。遊擊楊萬金。遊擊陳愚聞。其巡撫標下參將彭友德。楊登山。大同遊擊擺賽。坐營張維城。以上倶聽。臨期調遣。東西策應。其監軍道監察御史陳效也。又爲總督奏請尙方劍。先斬後奏以重事權。此時總督主意令麻貴同楊鎬提督左右二協兵。欲自忠州鳥嶺向東安而趨慶州。專攻清正。然恐行長自西來援則令中協兵馬近宜寧一帶。東援左右協。西扼全羅救援之賊。使不暇顧。又于三協中摘發馬兵一千五百人。同朝鮮兵。合營由天安全州南原而下。大張旗鼓。作爲攻取順天等處之狀。以牽制行長。又大發牌。使平壤一帶預備行糧十二萬。聲言。續調陸兵二十萬到。其隨行軍門守王京者不過楊廉安本立陳國寶兵千餘人而已。其

（機張）慶尙南道の東岸に在り。

（長鬐）慶尙南道の東岸に在りて、蔚山の北に當る。

（甘浦）長鬐の南に在り。

（大丘）慶尙北道の大邱なるべし。

（陳寅）蔚山の戰に最も功ありき。

（尙方劍）尙方は少府の屬官にして供御の器物を作る所也、尙方官は爰にて作れる劒にして利なるより一に尙方斬馬劒と云ふ。

（順天）全羅南道新城浦の西北三里の地也。

〔火砲〕朝鮮にて火砲と云ふは、太砲の內最も小形の物也、最大なるを將軍砲と云ひ、火驗炮、石子炮、火炮鳥銃これに次ぐ。

〔佛郎機〕葡萄牙を云ひ、轉じて其地より傳來せる大砲を云ふ。

〔水營〕釜山の近くに在り。

朝鮮人馬則忠淸道節度使李時言兵二千。幷平安道兵二千。貼入左協。慶尙道兵馬節度使成允門兵二千、防禦使權應銖兵二百、慶州府尹朴毅長兵一千。咸鏡江原道兵二千。貼入中協。慶尙左道兵馬節度使鄭起龍兵一千。黃海道兵二千。防禦使高彥伯兵三百。貼入右協。其火器則大將軍砲一千二百四十四位。火箭十一萬八千支。火藥六萬九千七百四十五斤、大小鉛子一百七十九萬六千九百六十七斤、皆遼陽分守張登雲運至於三眼銃、鐵鬚籠。鐵悶棍、火砲、火筒、團牌。佛郎機等器、皆倭所深畏者無一不備。其糧餉足供二月、皆令中國朝鮮專官催運。王京以北則委郎中董漢儒督催、平安黃海等道。節度使韓應寅等將中國所運之餉、俱運至王京、然後轉運各營、國王又分委大司憲尹承勳。專管左協營。吏曹參判柳永慶等專管中協營。戶曹分司參議李時發專管右協營。觀察使黃愼等、管西路全羅各營。進兵之時、卽令跟隨催督。仍令自備。十日烘炒以備緩急。時下王師。陸路兵粗備、惟水兵缺少、總督極以爲憂。屢疏揭到部催調閩浙南直水兵。皆淹延未至。十二月初。天津巡撫萬世德議水兵一萬幷馬步標兵六千。設立參遊五員、分布旅順登萊。應援犄角、而朝鮮海口我中國無一兵、況倭素怯者水兵水戰。而行長西據逼近水營、亦慮我水兵之議其後也。今水兵止三千三百名。孤弱難倚。總督不得已令水兵遊擊季金統率。仍同朝鮮官李仁前去、與水軍節度使李舜臣合營、舜臣水兵亦止二千人。又淸正東據機張一島。賊巢百餘里。而中有朝鮮水兵官李應龍領水兵五百餘名。向伏島中不敢南規。淸正亦易輕之、全不爲備。欺其兵力弱也。總督乃咨國王。加以銃手二百名、抽眞保定長箭手一百名。委南兵把總楊貴鄉導把總于承恩統領、與李應龍暗伏其中。俟賊接戰、則鳴鼓爲疑兵。擾亂之。

〔彥陽〕蔚山の西方山中に在り、

〔要害〕我れに在りては要となり、敵に在りては害となる地の義、賈誼の過秦論に出づ、

〔亡羊云々〕爲す所多端にして遂に効果を得ざるに喩ふ、列子說符篇に、「楊子之隣人亡羊、既率其黨、又請楊子之豎追之、楊子曰、嘻亡一羊、何追者之衆、隣人曰、多岐路、既反、問、獲羊乎、曰亡之矣、曰奚亡之、曰岐路之中又有岐焉、吾不知所之、所以反也、」云々とあるに出づ、

賊潰敗。揚帆爲正兵。夾擊之。邢公之計慮是矣。其調度則未也。既知水戰爲我兵所長。倭衆所怯。而不少俟陳璘等水兵之至。爲水陸夾攻之舉。乃區々欲以四萬人制倭死命。得乎。夫敵衆必攻。合則勢分。分則弱而可圖。今清正專力拒我。我又合其所長。致旁援者乘之。遂從水道而來。況鬪山已失。其來甚便。水勢未審。我師決未可輕動也。分布已定。乃于是年十二月初四日。大聚官兵。登壇祭告天地。誓戒官兵。因賞賚諸將。犒賞三軍。祭旗時。萬砲齊發。聲震天地。朝鮮臣民舉手加額曰。自生長來。所遇兵革。未嘗見此威儀也。於是發兵南行。經理楊鎬帶領標兵隨營。麻總兵調度於東南。總督董留奇兵往守王京。催儹兵餉。并控制於西北。又令朝鮮王遣李大諫領細作。暗送倭營曉諭麗氏。有私書送出。有內應外合之心。二十日經理提督與三協將士皆會於慶州。哨探賊巢。俱屯聚蔚山。而蔚山之南爲島山。二山不甚高。而城皆依山爲固。勢甚險峻。中有一江。可通釜寨。其陸路則由彥陽通釜山。麻總兵欲專力攻蔚山。恐釜山諸賊由彥陽來援。即令中協高策吳惟忠等統領官軍。由彥陽梁山把截適中要害去處。又摘令左協董正誼等統兵。前赴南原求禮一帶。張勢牽制。其水路上仍令季金千承恩統。南兵同朝鮮水兵。由長鬐珍島至鴈山島。張疑設備。又當日先分遣右協盧繼忠。督兵二千至西江口屯住。以防水路援兵。而以左右兩協馬步率議。于二十三日進攻蔚山。防釜山之援者不一。而足及援至。竟不聞一兵阻之何也。且兵力愈分愈弱。未免亡羊於多岐矣。左協副將李如梅同巡撫標下參將楊登山騎兵先到。各挑選輕騎。近岸埋伏。傍海拒援。而令遊擊擺賽以左右騎於是日巳時抵巢誘賊。賊縱萬餘徒。各披帶鮮明盔甲。銃砲齊發。喊聲震地。各揮双迎敵。擺賽佯北。賊衆乘勢追趕。我兵伏者四起。奮勇剿殺。在陣斬獲首級四百四十餘顆。生擒倭將一員。已而右協副總兵李芳春解生等。由西路馬村齊至掩殺。我兵馬步相兼。先後俱進。勢焰張天。烟塵蔽日。賊皆望風奔

潰。半由江邊爭船逃渡、覆舟四五隻。渰死無數。其餘盡歸新修島山城。我師至晚收兵列營住札。與賊相去二三里。當審陣獲披金甲倭將。共稱清正見在城內。次日進兵。倭賊于路連築三寨。伴鴻亭城隍堂太和江皆在島山之前。樹爲屛障。四圍俱塞。壘城各多設銃眼。倭伏於內。擺總兵申嚴號令。督率官兵。努力向前。此日遊擊茅國器統領浙兵。因李如梅已得首功。不待催督。各奮命先登。連將三寨打破。又斬首六百六十一顆。生擒倭四名。得獲倭馬器具盔甲刀銃旗幟無算。又燒毀寨內舖面。及住房萬餘間倉糧牲畜盡數燒毀。倭見我兵勇戰。奔上島山城。堅守不出。二十五日。提督攀率三軍。進攻島山城寨。各軍奮勇。直前攻城。數陣不克。蓋島山比蔚更高。其石城新修堅固。我兵一到城下。被賊齊用鳥銃火砲弓矢。擂石拒堵。我兵多用挨牌布簾木梯迎進。第山城高險。仰攻不能遽上。我兵亦有損傷。即行收兵屯住。俟次日相機攻剿。次早齊奮力鬪攻。城上砲石如雨。如此連日攻不得下。我兵傷死甚衆。諸將謂楊鎬曰。此城水道甚艱。糧運難繼。我兵第四面圍而守之。即不戰清正可坐縛也。鎬以爲然。於是各營兵分屯山下。周匝圍繞。密不令透。清正於窟中。最强悍嚴厲有謀。先聞大兵來。即以降人及疲弱者置外。而悉斂精銳保守山城。至是圍困十日十夜。没餉不敷。倭奴至嚙紙充饑。飲溺解渴。每造飯先食能用礮者。而餘聽其餓死。衆心皇皇。朝暮不保。清正全然不懼。惟死守以俟釜營之救。至然山下皆爛田。我兵無着脚處。倭從銃隙用礮發無不中。彈皆碎鐵爲之。以藥煮過。發之無聲。中者立倒。有一彈傷兩人者。伏則銃難及。起必横趍方免。而伏者又苦泥沒膝。晝夜圍守。冰雪裂膚。故城不下而死傷我兵數百人。倭瞰我兵意怠。令人求緩攻約降。經理信之。疏報云。倭將請

〔新修島山城〕卽ち蔚山城也。

〔伴鴻亭〕蔚山城の東三里に在りて東川に近し。

〔太和江〕蔚山の南方を流るゝ河也。

〔三寨打破云々〕此時楊鎬の兵新寨の第三第二を陷れ、第一に及ばんとし鎬如梅の至らざるを以て命じて兵を收む。

〔二十五日云々〕此日黎明清正五百人を率ひ、輕舸を馳せて城に入る、明兵其威名を恐れ進む能はず、尋で加藤安政五百を以て突出奮戰し明軍を敗る。

〔闕下〕本來は宮門の下の意也、說文に「闕、門觀也」とあり、又正韻に「闕、宮門雙闕也」とあり、轉じて朝廷の意となれり、史記に「持玉杯、上書闕下、獻之」とあり。

〔二十六年〕明神宗の萬曆二十六年にて、我が慶長三年に當る、而して下文に朝鮮之役起りてより六年とあるを以て見れば彼の書と我が記一年の差異あり、又後文に萬曆二十七年に秀吉薨ずる旨あるに徵しても明也、卽ち今用ふる彼我の年代を以てすれば、宜しく一年を減ずべし、卽ち二十六年は二十五年として見るべし。

正勢逼乞降。臣不許之。必當生擒以獻闕下。聞者無不喜躍。吳惟中獨言於鎬曰。圍師必缺。今山城卒未破。恐當缺其一隅。倭逸出。伏兵擒之。鎬張目舉手。向惟忠曰。老將軍只要還我一個活清正。惟忠遂不敢復言。意。鎬必有定見。萬全無慮也。惟忠之言似矣。然亦未盡機宜。大抵三寨既破。後。卽宜斂衆據險。畜養精銳。以俟南兵會集。水陸並舉。三路齊攻。方爲勝算。今以畏敵之孤旅。頓兵堅城下。而卽欲制敵死命。不難矣哉。余是時在劉家營。一見經理前疏。大驚頓足。惜哉國事去矣。傍云。此捷疏何言乃爾。余曰。鎬既不知兵。又不知彼知己。已則已矣。如三軍命何。如國事敗何。旁者猶哂余言。三日而敗績之音至。兵圍將十日。行長果引來援。時逼歲暮。行長又慮。官兵乘其來救。襲破釜營。於是大兵原守大營。止抽精銳一二千。每船不多人。惟遍插旗幟。蔽江而止。時二十六年正月初二日。塘報一至。經理慌懼。更不打探的實。亦不措置遣兵阻截。則議。初四撤兵。已而初三。賊兵彌近鎬益無措。因不俟及期。狼狽先行。盧遊擊二千兵在西江口。亦不傳知。諸將聞經理提督已撤營去。紛々連夜亂退。賊知援兵到。卽開門襲擊。行援者盡被殺死。賴吳副將茅遊擊兩營南兵斷後。倭追十數里。見有兵防後方回。而兩協喪失。并委棄兵餉器械不可數計。是役也。謀之經年已傾海內全力。合朝鮮通國之衆而卒無成功。貽笑遠人。可慨已。邢公始業極爲詳愼。而卒致此者其失有六。委重寄楊鎬。其失一。攻倭利用南兵。而三協主將皆北人。其失二。清正才能勝行長數倍。乃不審堅瑕先攻清正。其失三。倭奴素怯水戰。而[illegible]兵無人不肯少俟陳璘等。急於進征。其失四、倭奔閑山。本路無阻。其來援已甚便。而遣人防援。無一得力。竟以此敗、其失五。王師初出宜令驍騎。先之不當全師以薄一城。其失六。況官兵雜衆非經練者。故不[illegible]而易敗。少俟兩月。卽劉綎陳璘兵至矣。劉將素熟倭。陳將亦慣戰者。皆勁兵也。朝鮮之役至此六年矣。胡爲不強忍須臾乎。三協兵俱回慶州。更慮倭來夾攻。復堀河築城爲固守計。總督得報亦大懊恨。然事已無奈。

只得將各兵撤回王京以圖再擧。時有贊畫主事丁應泰。上疏劾經理之專誅。將校之屢喪、於是楊鎬罷任去。諸將俱充爲事官。行戴罪剿賊。（師既失利。贊畫亦無功。應泰不畏人言之。反爲此奏。且不能深慾楊師之失。而徒歸罪小人。區々兵伍間其生死虛實。較錢穀多寡。亦不揣本而齊末者也。）總督深咎是役無功。只因水路上缺兵。且師久糧匱。乃徵募江南水兵。講議海運。爲持綏之計。二月間陳璘以廣兵。劉綎以川兵。張榜劉子龍藍芳威以浙直兵。陳蚕亦領水兵。俱先後入朝鮮。（鄧子龍本統陸兵。遊擊沈茂募水兵三千至天津。因部卒與稅監役人鬪。且謂已不便於舟師。乃以兵屬鄧子龍。而已領陸兵。未幾又以病辭任。）未幾。朝命天津巡撫萬世德爲經理以代楊鎬。或語總督曰。朝鮮地里隔越山水險阻。兵聚一處難以成功。不若令諸將因地畫力。分任責成。使人自爲戰守。則利害各擔無所推托矣。總督然其謀。乃以左中右三協分爲水陸四路。中路各一主將爲提督。中路大將李如梅。東路大將麻貴。西路大將劉綎。水路大將陳璘。通共官兵十萬衆。各守信地。相機行剿。蓋倭奴盤據朝鮮已七年於茲。沿海一帶千有餘里。分爲三窟。蔚山爲東路。清正據之。順天爲西路。行長據之。泗津四川爲中路。石曼子據之。（石曼子稱其主將義弘也。薩摩州人。按）三路巢穴皆阻海爲固。進可長驅。退可還固。故此三處寨寨特完固。寨傍必置倉厰。寨左右皆有羽翼。畜積歸於大寨。而重兵屯劄。必在險阻近地。寨後倭船往來不絕。俱泊海岸。故總督於三路外。加以水兵一路。以當海口。亦徵島山之失也。四路分派已定。軍門題請遵行。乃於三月間。擇日號集諸將。俱在王京。歃血誓神。約日並進。倘値事機不妨互爲應援。然中路李如梅當楊鎬未去時。已請發官銀。同遼東買馬。及兄如松與虜戰歿。如梅卽代爲遼東總兵。而中路主將無人。乃以董一元代之。時楊經理既去。萬經理未來。而四提督各統所部屬兵。分頭防剿。並遵軍門號令。俱於九月二十日進攻。

〔天津〕支那直隸省にありて、白河の下流に位し、北京に入る咽喉をなす今、北支那最要の通商港なり。

〔蔚山〕朝鮮慶尚南道釜山の北二十里許にあり。

〔順天〕朝鮮全羅道順天郡にあり、京城を距る事約六十八里許なり。

〔石曼子〕下文の割注によれば、島津義弘也、義久の弟にて、驍勇にして善く戰ふ、征韓の役、勇名を顯はし、四萬石を加封せらる。

〔四提督〕李如松、麻貴、劉綎、陳璘の四大將を云へり

麻貴任東路。率所部頗貴牛伯英等。駐劄溫井。與蔚島清正相對。麻提督屢前失。惟深溝高壘。堅壁不出。然亦素遣使入倭營。爲緩兵計。九月間貴自選精銳數千。乘夜令卒銜枚。由溫井直抵蔚山寨。奮力襲擊。斬獲首級數十。自此倭奴堅守山城。不復敢出。

劉綎任西路。統率所部居水源地方。攻順天寨倭。倭築寨近大海中。劉兵不能達。乃謀襲惟敬故智。欲誘行長出會擒之。因遣間使吳宗道等入倭營。告行長曰。先鋒昔年曾以請封。與中國盟誓。本出誠心。特緣清正狡謀惑亂關白。致有今日。我天兵遠來異國。爾衆亦渡海間關。今兩下師老。財匱。終非久計。今提督欲親會通好仍結前盟以遂夙願。行長初猶未信。後通事累次往。綎皆單騎俟於中道以示不疑。行長覘知。因信諾。八月一日。相與約定。行長將出赴會。而綎部中一倭千總密洩其謀。行長大驚起中道遁去。綎計不就。遂率兵進攻。失利回。監軍王士琦聞報。怒綎不用力。傳令縛綎坐營。綎懼不敢歸。乃督諸將奮勇還戰。遂大勝。倭斬獲頗衆。倭敗入釜營。不敢復出。

董一元任中路。統率所部居尙州。中路倭將薩摩州義弘素號狡悍。而望津之寨尤爲天險。北倚晋江。晋州江也東築永春。西築昆陽。三寨鼎立爲犄角。皆峙于新寨之前。新寨三面環海。一面通陸。石曼子義弘居之。外有石城本柵數重。引海爲濠。海艘泊於寨下者常數千。又築金海固城爲左右翼。而中道東陽倉。積糧萬計。屯重兵於舊泗川城以守之。自望津至新寨四十餘里。聯築八寨。步步爲營。勢甚猖獗。每迭出搶掠于陝川宜寧咸陽高靈之間。中路遊擊茅國器初分得全州。自請救經略。謂中路義弘極狡黠。請身當之。經略壯其言。乃復增與兵改守星州。此時董一元奏。回宣府選募家丁未至。星州三

〔水源〕朝鮮京畿道水原郡にあり、今此の地に水原郡々衙あり。

〔尙州〕朝鮮慶尙北道尙州郡にあり、今此の地に尙州郡衙あり。

〔晋江〕朝鮮慶尙南道の晋州郡を流る川にて、晋川江とも云ふ。

〔永春〕忠淸北道丹陽郡にあり。

〔泗川〕朝鮮慶尙南道泗川郡にあり。

〔陝川〕慶尙南道陝川郡にあり。

〔宜寧〕同上宜寧郡にあり。

〔咸陽〕同上咸陽郡にあり。

〔高靈〕慶尙北道高靈郡にあり。

〔平秀吉〕豐臣秀吉也、秀吉其の姓氏詳ならず、初め木下と云ひ、後ち丹羽長秀、柴田勝家の武勇を慕ひ、兩氏の一字を取りて羽柴と稱し、また平姓を冒し、天正十三年七月藤原姓に改め、十四年關白となるに及び更に豐臣朝臣の姓を朝廷より賜ふ。

〔晉州〕朝鮮慶尙南道晉州郡にあり。

〔昆陽〕同上泗川郡にあり。

面受敵。勢極孤懸。國器率浙步兵三千與遊擊盧得功馬兵三千守之。倭奴日出犯搶。雖有斬獲以董提督未至不敢深入。四月間國器令姪指揮茅明時作爲諭倭檄文。又令謀士史世用擧平秀吉十惡大罪。遣倭將以離其心而携其黨。至八月董一元方至尙州。始議大擧。乃進駐高靈晉州。晉州前有大江。江之南卽爲望津。望津之南皆賊巢也。倭據望津臨江固守。勢彌天險。我兵相持月餘。茅遊擊謂提督曰。細看倭營自望津以至新寨。勢若長蛇。望津其首也　碎其首餘如破竹矣。但晉江不能飛渡。當以計取之。董是其言然未得間。一日茅兵出哨。忽一麗婦從倭營出。問其由。婦出一紙。內書云　此婦將度異域矣。吾甚憐之。捐貲以贖放還故土。天朝兵將當憐其窮困。勿加殺害。則救蟻之德也。尾云。知吾姓。者令公之後埋兒之爻。問吾名。者有或之口。無才之捘。理心書我兵引婦來見茅遊擊。兒書猶未解。標下贊畫諸葛鏞解之曰。贖婦姓名必郭國安也。茅默然。入語參謀史世用。（武進人。念六年福建軍門咨至邢經略。三月間發下茅營。）聞之躍然曰。郭國安某先在日本時。與有舊約報效中國。今在倭營。卽可得間矣。因別遣麗倭三箇往探方知義弘尙在泗川老營。惟國安在望津營。乃復令三箇持世用書。入倭營見國安。因約。以九月二十日伏火於倭營屯糧處。俟我兵將渡。發火焚糧草爲內應。至日茅整兵欲渡江。倭衆出營臨江堵截。忽望津寨中火勢焰天。倭大驚奔救。我兵乘勢畢渡。追殺斬獲。立破望津大寨一座。樓房及倭房一千餘間盡行燒毀。倭衆膽落。棄城退守泗川舊寨。是日申時。提督遂分遣官兵。東襲破永春。寨廠亦盡焚燒。二十一日五更。西破昆陽。月下交戰。倭退奔。我兵追斬。寨廠盡付煨燼。三營既破。我得駐兵於江南矣。二十八日夜半。發兵進襲泗川。李寧以大同驍將恃勇背衆

先人。失道反爲倭乘之。被倭亂砍死。及明我兵大衆至。倭方四散搶刈禾稻。見我兵。皆棄禾奔散城內。尙有數千倭。倉皇出戰。我兵衝擊。斬級幾百。盧得功。驍勇將 以騎兵衝陣。被鳥銃陣亡。賴步兵力戰。倭始棄城敗奔新寨。官兵遂燒東陽倉之糧。一日一夜煙焰不息。倭不敢出救。我兵不旬日屢戰。屢克。軍威大振。至二十九日共議。進兵取新寨。卽義弘所居沿海之大營也。茅國器曰。我雖連破數寨而擒斬不多。倭盡倂歸大營。守必竭力。攻之未必能下。而各寨救且至。非全策也。不若先攻固城新寨之倭銳氣方挫。未敢來救。而固城城小。倭寡易破。固城一下新寨援絕。然後相機而進。似爲全策。董師狃望津等寨之易破。便以輕敵乃云本鎭看新寨倭亦無幾何。固城易與耳。今先攻新寨如疾雷不及掩耳。此寨破固城不戰自潰矣。遊擊彭信古素輕敵寡謀。乃言。某親至彼探視。城中烟火不多。可取。遂決意發兵。十月初一日、茅國器葉邦榮彭信古步兵三營直抵寨下攻打。其郝王聘師道立馬呈文藍芳威四營馬兵分作左右堵伏。止留步兵一枝守老營。於是茅葉二將。自卯力攻至巳。用大將軍木楨已打破大門一扇。城垜數處。而彭兵皆京城亡賴。素不習戰。亦不善火器。忽木楨破。藥發衝起。半天俱黑。各兵一時自驚亂。倭因乘隙。從前小門殺出。直冲彭兵。皆潰走。郝師馬騎兵方環城而射。一見兵潰各望風逍走。茅葉兩營殊死鬪。然已在重圍中。衆寡不敵。殺傷甚衆。藍芳威馳兵十里外。斷後亦走。董師不能約止。各兵遂大潰。隨崖落塹不可勝紀。彭兵三千。止存五六十。茅兵亦損六七百。茅營中軍徐世卿被捉去。不屈而死。及抵望津茅遊擊謂。望津天險。得之不易。若棄去。復爲倭據。前功盡棄矣。因會集諸將收散兵。欲復守望津。請命董師。董師曰。此地亦孤立。倘固城倭倂力來

〔固城〕朝鮮慶尙南道固城郡にあり。

〔堵伏〕堵は說文に垣也とあり、卽ち堵伏は人垣を作りて伏せる狀を云ふ。

〔董師〕董一元也、明朝、宣府前衞の人、暘の子、嘉靖中、薊鎭遊擊將軍に任ず、隆慶萬曆の交、左都督に累遷し太子太保を加へられ本衞世指揮使を廢せらる。

〔望津〕一に望晉に作る。

〔星州〕朝鮮忠清南道星州郡にあり、今この地に同郡衙あり。

〔忠清全慶道〕忠清南北、慶尙南北、全羅南北の六道を云へり。

〔山城〕忠清南道軍威郡にあり。

〔加德〕慶尙南道濟東江口にある島也。

〔巨濟〕同道固城郡に屬する島也。

〔義州〕平安北道義州府也。

攻何以禦之。惟歴暫達星州。圖再擧耳。各將遂不敢留。盡日奔回。此時忍餒扶傷。天寒日暮。晝伏夜行。盤桓萬山中。奔走一二百里。哭聲震野。挨殞道路者又數百人。直抵陝川。方得少息。倭以糧餉被燒亦不敢遠出。蔚島新寨之役。我師皆先勝而後敗者。先環攻堅。又且堅爲略也。倭兵皆暴敗而爲功者以逸騎我。又俟而動也。況主將不聞將略。南北兵混無紀律。以下連朝不遑暇食之卒。當久攖四逸之倭。能無敗乎。當是時。既焚倭糧。即駐兵泗川。約會三路。共力剿。庶幾有得無失。倭不難平矣。今不量不慮。得不償失。可慨也　陳璘任水路提督。率其原帶陸兵九千。水兵三千。專管海上防倭。而副總兵陳蚕・鄧子龍・遊擊馬文煥・季金・張良相等皆屬之。共兵一萬三千餘名。戰艦數百艘。皆列於朝鮮忠清全慶道各海口。互爲聲援。晝夜巡警。燈火相望。先時倭兵渡海出沒並無欄阻。至是捕盜船於海面上往來不絕。倭始懼。自夏歷秋倭艇不敢橫行。提督爲諸將曰。吾等專事水路。倭今盤據山城。勇力何施。要當蓄養威鋭。俟便要擊之耳。於是分散各兵。停泊加德巨濟鼓金諸島。忠清道有九龍島者。水族蠕怪著聞。浙水營中軍方日新統浙兵三千。自義州卸糧。將赴鼓金島鄧子龍所。九月念九日至島。夜發定更銃驚動水族。海颶頓起波濤搖蕩。下觸鐵板沙。一更海船首尾俱裂壞。止存中倉。急呼小舟接登岸。方始下船。軍伴五六人齊上。一時覆沒。去岸止尋丈矣。日新紹興衞指揮使也。雖武弁負儁才淹貫洗教。善長書詞賦。且通變有致。與人交多信義。時論稱之。始與沈遊擊督兵屯天津。後屬鄧子龍。又奉命督餉乾舟赴旅順。及難聞者無不痛惜。其平時誦詩。至水深波浪黑。毋使蛟龍得之句。便泫然作楚。蓋其數分定。或有術業難免此禍也。　十月萬經理始至王京。世德山西人。意氣頗能任事。撫天津時人樂從之。及至朝鮮以成書粗定不能別爲更張。又且倭築寨固守非旦夕可平。乃欲設策用間。以離其黨而攻其隙。故自己修一檄文。令人持諭倭將。中間深明關白不道。各島民無罪。何苦八年於外萬里捐軀。本院憫恤。爲約三章。反旆操戈。歸殺關白。推擇酋長統領海邦。

〔金哥〕秀頼を云へり、秀頼文祿二年生る、慶長元年五月從四位に叙し、三年四月從二位權中納言となる、これを金哥と云ふは秀吉室北政所の養子たりし金吾中納言小早川秀秋と混同せるか。

〔釜山〕朝鮮慶尙北道にあり、南韓の一都邑、本州に最も近し。

〔石曼〕上文に「石曼子」とあり、島津義弘を云へり。

〔江西人〕江西の人にて、江西は、朝鮮忠清北道清州郡にあり。

保全人民傳襲子嗣策之上也。明議順逆解甲來降策之中也。釋撤兵各全性命策之下也。各路倭將見經理檄文頗亦感動。未幾人傳秀吉已死。其子金哥年幼國中潛謀纂奪。三路倭將皆有歸意。但無所稟命。未敢先發。茅國器知義弘素怨秀吉。可間而携也。我間得入賊必難留。然後乘此要擊可大得志於倭。彼必不敢再犯朝鮮矣。議定約會各路。劉綖亦遣人諭行長。中路使督陣茅國科持撫牽檄。賚金帛見義弘。動以大義。諭以利害。郭國安從傍贊之。義弘許諾。國安私謂國科曰。國有大故。勢當疾歸。所恃者釜山數月糧耳。不若密遣人一炬焚之。已而倭衆乏糧。歸心益迫。清正無糧。令人見義弘叩借。義弘曰。吾糧亦盡矣。奈何往叩。各營皆然。始相約撤兵。清正因人心變動。卽日先撤蔚島之兵。次石曼撤泗川。次行長撤順天。俱陸續渡海。毛國科間。許儀俊密報。中路倭兵於十六日行李上船。於是我兵各爲准備。陳璘在海上聞此消息。喜曰。吾等擊倭收功。此其時矣。卽令鄧子龍協同朝鮮李統制。引千餘水兵。駕三巨艦爲前鋒。破浪直攻南海。正遇倭船無數渡海。子龍欲奪頭功。親率家丁皆江西人二百餘齊上高麗船。衝鋒奮擊。殺賊無數。不期後船。用火器。失手。反打鄧船。蓬檣俱著。我兵竄伏在一邊。被倭乘勢登舟。將鄧副將及家丁皆砍死。李統制見鄧將有失。奮勇前救。亦及於難。幸第三船把總沈理努力而前。火器齊發。當陣斬獲眞倭一百三十餘級。而陳蚕季金等隨後邀擊。倭本不慣水戰。況無鬪志。當日艘被燒沈。焰同赤壁。有棄船復逃上崖者。被我陸兵追剿。直過海口。南路夾攻。殺溺死者不下萬餘。各路斬獲共千餘級。陳蚕中軍陶明宰亦發子陣。劉綖所當行長也。是日行長未行。亦乘機邀截中路之倭。俱有斬獲。於是義弘行長將毛國科八人。及綖所

差劉天爵等。皆留在船、護送渡海。方得還國。而亡失已甚多矣。中路官兵奪下糧一千五百石。馬三百疋。及倭器刀屛。不可數計。斬級亦三十二顆。皆又乘勢分擊金海固城。倭皆一時宵遁。是役也設非天奪其魄。用閒出奇。力攻血戰。豈旦夕所能奏績。統論四路。自晉江渡而望津破。中路之首功也。火糧倉而入血戰。中路之次功也。八寨平而一倭不留。中路之全功也。海上之捷則陳璘功爲最。至是三路二十一寨之倭悉已蕩平。董一元入新寨。見大寨凡四層。倭房數千間。石城外又爲本城三層。極其牢密。寨內器用。朱几屛風一色泥金。最爲精巧。又有違制金絲鸞鴛金絲掌扇。此二物非倭將攜來。恐是朝鮮王京所掠者炳耀奪目。董令悉焚之。金海固城二寨房屋亦付烈焰。此戊戌十一月事也。倭皆歸國。朝鮮復安。通國君臣頂戴天朝。歡若更生矣。總督經理部署諸將各引兵還朝。籌善後之策。各營兵馬盡撤至星州。以丁應泰疏勘存故實數。先令給事徐觀瀾勘之畢。四提督俱回。復令李承勛統所留兵。杜潛監其軍。暫駐王京。防守。劉綎因播事動。先促歸。茅國器陳蚕俱留釜山。水兵留張良相等。張榜留巨濟。因徐勘不伏。復差刑科給事中楊應文。在義州再勘。唱名逐一勘過。至剪髮剃眉。二十七年四月念六日也。九月方得起行。二十八年正月兵方入關。顧故者沿途散去。募兵復歸邊營。召募者復遣各鎭。浙兵歸者多收入羅木營。刑公晉爵南大司馬。萬經理仍任王京。善後未回。大司農計度支自二十五年邢經略出關。至二十八年歸。凡用餉銀八百餘萬兩。火藥器械馬疋不與焉。

今按。秀吉已死。慶長三年八月十八日。前關白太政大臣從一位豐臣秀吉薨於伏見城。年六十三。遺言曰。我即世則先姑秘之。淺野長政。石田三成速赴筑紫。使朝鮮在陣諸將悉歸本朝。退兵而

〔金海〕朝鮮慶尙南道金海郡にあり。

〔自二十五年云々〕これ明神宗萬曆年間のことにて我が慶長二年より五年にわたれり、朝鮮にては、十四代宣宗の三十年より三十三年に至る。

〔前關白云々〕秀吉天正十九年關白職を猶子秀次に讓りたればかくは云へり。

〔伏見城〕山城國紀伊郡伏見町の東、今堀內村に舊趾あり、故址は一面の山林畑地にて、遺蹟歷々尙存す、近年其の本丸二丸等の地御料地となれり、文祿三年豐臣秀吉の築く處也。

〔阿彌陀峰〕山城國京都東山の一峰也。豐臣秀吉の方廣寺大佛殿跡こゝにあり、今別格官幣社豐國神社ありて、秀吉を祭れり。

〔壬辰〕文祿元年也、朝鮮宣祖二十五年、又明神宗萬曆二十年に當る、其の王京を陷れしは、四月のことなりとす。

〔遭魚肉〕殺害せられたるを云ふ、史記項羽記に「人方爲刀俎、我爲魚肉」とあり。

〔涓涓〕水の流るゝ貌に云ふ、潘岳の文に「泉涓々而吐溜」とあり。

可也。葬于阿彌陀峰。號曰豐國大明神。戊戌ハ慶長三年也。

附錄

識書云。西方女子琵琶仙。皎々衣裳色正鮮。此時渾跡居朝市。鬪亂明臣幾百千。 按。女在西方倭也。鬪亂皎々ハ即國白也。又寓朝鮮二字。鬪亂明臣今已應矣。

沈惟敬于二十七年九月念四日取決。陳濟如入定府爲奴。監軍監察御史陳效歿于王事。該總督尙書邢玠。追贈光祿寺少卿。蔭一子錦衣衛。世襲百戶。仍立廟。朝鮮祀之。

死事官。疏中多有遺失。如方日新與鄧子龍死難。相去僅二十日。而邢公正疏遺之。後始得聞。乃入善後疏云。浙水兵營中軍方日新航海征倭。死事堪憐。杳與康永年事例相同。所當襲陞一級以慰忠魂者也。然聞。死事遺不叙者大小尙有七十二員。

壬辰倭陷王京。宮眷南轅。宗族盡遭魚肉。婦人死節者甚衆。承旨學士趙瑗妾李氏亦死之。李善詩。美而無子。自號玉峰主人。與許妹翰墨交甚密。今存其四首。贈郎柳色江頭五馬嘶。半醒半醉下樓時。春紅欲瘦臨粧鏡。試寫纖々却月眉。 自道廬霽殘溜而纖々。枕簟輕寒曉漸添。花落後庭春睡美。呢喃燕子要聞簾。秋思蛩挐簾踈不礙風。新涼初透碧紗籠。涓涓玉露團團月。凉盡秋情草下蟲。七夕無窮會合豈秋思。不比浮生有別離。天上却成朝暮會。人間謾作一年期。 許妹、名許筠妹也。七歲能詩。國號女神童。適進士金誠立。壬辰誠立死于倭。妹守節不二。自號蘭雪主人。遊仙曲百首今存其四。瑞風吹破翠霞裙。手把天花倚五雲。雲外玉童騎白虎。碧城邀取小茅君。又水晶珠簾鎖一春。落花烟露

〔飛蘭島〕平戸也、肥前國北松浦郡平戸島を云ふ。
〔四也屯〕蓋、織田信長の次子信雄を云ふ、信雄幼名を茶筌丸と云ふ。
〔十吉次郎〕蓋、藤吉郎の訛傳也。
〔爲大將軍〕是れ訛傳也、秀吉、官太政大臣關白となるも、源姓にあらざるの故を以て、大將軍に拜せず。
〔名筑前〕秀吉、天正二年七月從五位下に叙し、筑前守に任ず、名と記せしは訛傳也

蒲綸巾。東皇近日無巡幸。閒殺瑤池五色鱗。又青苑紅堂閉寂寥。觀眠丹竈夜迢々。仙翁曉起喚明月。微隔海霞聞洞簫。又六葉羅裙色曳烟。阮郎相喚上芝田。笙歌暫向花間歇。便是人間一萬年。宮詞二首絳羅袱裡建溪茶。侍女封緘結綵花。斜插紫泥書勅字。內官分送五侯家。綵鞭帷幄紫羅茵。香射霏微暗襲人。明日賞花留玉輦。地衣簾額一時新。

台州寧海人。蘇八被擄在飛蘭島。萬曆十八年關白怒薩摩君調飛蘭島主。領倭一千征之。蘇八隨征至金栢州海島。親見關白。左頰上有黏痣數黑。面似犬形。約年六十餘。止一子方三歲。薩摩不征自服。又云。關白乃民閒倖。本名方自古登在銀山大頭目世子四也屯部下。隨征有功。悅之賜姓木下。賜名十吉次郎。諂事其主。果出必提。遂以爲大將軍。兼相事。更賜姓羽柴。名筑前。因見四也屯年老。糾頭領十八人殺之。逐其子而自立。仍佔銀山地方。萬曆十六七年閒。藉故主餘威兼併諸國。然非盡戰勝。皆虛聲恐嚇。黃金誘閒得之。

異稱日本傳　卷中二終

〔宋〕支那王朝の一也、遼の趙匡胤後周の恭帝の禪を受けて國を宋と號し中國を統一す、我が弘安二年蒙古に滅さる。

〔金〕支那王朝の一也、靺鞨種族にしてもと滿州の東部に住み肅愼、女眞、渤海等と稱せり、會長阿骨打に至り遼を略して金國を建つ、後ち宋、蒙古の聯合軍の爲め滅さる。

〔元〕支那の王朝の一也、始め蒙古と云ふ、西夏を降し、金を滅し、高麗を服し、中亞地方を侵し、宋を併吞し遂に世祖忽必烈に至り其の至元八年（皇紀一九三一）元國を建つ。

高皇帝御製文集卷第二詔

諭二日本國王一詔

曩宋失レ馭中土受レ殃。金元入主二百餘年。移レ風易レ俗。華夏腥膻。凡志君子孰不レ興レ念。及二元將一レ終。英雄鼎峙。聲教紛然。時朕控レ弦三十萬。礪レ刃以觀。未レ幾。命二大將軍一律二九代之征一。不レ逾二五載一戡二定中原一。盍爾東夷君臣非レ道。四二擾隣邦一。前年浮辭生レ釁。今年人來否眞實非レ疑。其然而往問。果較二勝負於必然一。實擇二隙於妄誕一。於戲渺居二滄溟一罔レ知。帝賜二奇甸一。傲慢不レ恭。縱レ民爲レ非。將二必殃一乎。故玆詔諭、想宜二知悉一。

今按。高皇帝御製文集二十卷。明太祖文集也。劉基後序曰。翰林學士臣樂韶鳳宋濂等之所二編錄一。諭二日本國王一者。圖書編曰。太祖賜二璽書一諭二日本國王良懷（ナカヤス）一。謂レ此也。此時本朝分崩離折。咿嚶之羣風驅。良懷親王爲二太宰都督一。在二鎭西一。故明太祖詔諭レ之。然於二竜奮之時一不レ能二蕩攘一。甚可二嘆息一也。

又卷第十六雜著

設二禮部問一日本國王

禮部尚書至意專答二日本國王一。嗚呼王罔レ知。上帝賜二奇甸於滄溟之中一。命世傳而禰二黔黎一。今王不レ奉二上

〔至尊〕天子の稱號也、爾雅の疏に「周公作詁必以始也君也大也、居先者始者無先之稱、君者至尊之號、大則無所不包、故先言之」とあり。

〔井底鳴蛙〕後漢書の「馬援謂隗囂曰、子陽井底蛙耳、而妄自尊大」とある、井底蛙と同意にて、見る所小なる喩にして、獨り尊大振るを云ふ。

〔孫權〕字は仲謀、堅の子、策の弟、三國吳主第一世也

〔生民〕人民に同じ詩經に「厥初生民、時維姜嫄」とあり。

帝之命不守己分。但知環海爲險。巖頭石角爲奇。妄自尊大。肆侮隣邦。縱民爲盜。帝將假手於人。禍有日矣。吾奉至尊之命。移文與王。王若不審巨微。效井底鳴蛙。仰觀鏡天以爲巨之無量。無乃構隙之源乎。恐王大略涉歷古書。不能詳細。特將日本與中國通往禮物及亡。貪商之假辭如王之國至日可細目日本之處大也。且日本之稱有自來矣。始號曰倭。後惡名曰倭遂改日本。其通使中國者。上古勿論。自漢歷魏晉宋梁隋唐宋之朝。皆遣使奉表。貢方物生口。當時帝王或授以職。或爵以王。或睦以親。由是倭皆慕意誠。故報禮厚也。若夫叛服不常。搆隙中國則必受兵。如吳大帝。晉慕容廆。元世祖。皆遣兵往伐。俘獲男女以歸。千數百年間往事可鑒。王其審之。

今按。吳大帝孫權也。權伐夷洲見吳志。列上晉慕容廆武宣皇帝也。慕容廆伐日本者非也。晉書卷一百八載記。慕容廆傳曰。率衆東伐扶餘。扶餘王依慮自殺。廆夷其國城。驅萬餘人而歸。東夷校尉何龕遣督護賈沈。將迎立依慮之子爲王。太祖以此誤爲伐日本事。扶余高句麗百濟之舊國也。元世祖命黑的弘。持書往至對馬島。日本人拒而不納。執其塔二郎。彌二郎二人而還。又十一年征日本。虜掠四境。

設禮部問日本國將軍

大明禮部尚書至意日本征夷大將軍

二儀判久。昭萬象於穹壤。奠海嶽於洪濛。生民盈於寰宇。然而天造地設。隔崇山限大海。人言異。風俗殊。蓋兩間又非一主性命而有也。其所主者又何量也。雖主非一人。又非仁人者天奚輔之。若

非禍首天奚禍之而軍奉書我朝丞相。其辭可謂坐井觀天者也。且往者我朝初復中土。彼日本僧
俗至闕云使。則加禮之。或云商則聽其來。斯我至尊將以爲美矣必識深交日本。是有克勤
仲猷二僧之行。及其抵也。非仁德於使。今又幾年矣。洪武十二年將軍奉書。肆侮奉冊禮答。謂彼來者
將軍。自云貪商。今來者是不信也。今年秋如瑤藏主來陳情飾非。我朝將軍奏。必貪商者將欲盡誅之。
時我至尊弗允。旨云。彼若是此即施刑。豈不小人無幸。況隔滄海之遠。福善禍淫。鑒在高穹。吾中國
雖不強盛人非侮甚。安敢逆帝命而援生民者乎。本部既聽德音。專差人涉海往問。如瑤藏主之來。
果貪商假名者歟。實使爲國事而勞者歟。將行羣臣奏。止日。限山隔海。凡王者奉若天道。各主生民。
今日本君臣縱民爲盜四寇降邦。爲良民害。無乃天將更君臣而伐其惡乎。我至尊弗允而論之曰。
人事雖見天道幽遠。竊敢擅專。若以舳艫數千泊彼環海。使彼東西。趨戰四向弗繼固可。然於生民
何罪。且以禮曹之舉待彼何如。卿等議之。本部復觀彼之浮辭。行雲流水。皆將方無德之徒。忘中國
之寬攝是非於兩端。識者嗤之。治民之國。信浮圖而搆大禍。古至於今未之有也。且尋方問道。不
得自由。盜爲彼國之人。人皆爲盜。是僧不得自由。斯故也。如彼日本邊民。會被中國人民爲盜而援
之乎。及使至彼中拘不自由。果何罪耶。謂元之艨艟漂於蛇海。將爲天下無敵矣。吾不知。彼國以
天之所以然歟。人事之所以然歟。若以人事較之。元生柴寨。不假舟梁。蹄輪長驅。經年不阻。而爲
行獨。但長於騎射。短於舟楫。況當是時日本非元仇讎。非鄰邦之患害。元違帝命。好強尙兵。加以
天厭征伐。海風怒號。沈巨艦千艘。淪精兵於海底。將軍以爲。彼國之人能者也。彼何曾見元之陸勢。鶻

〔坐井觀天〕一部分のほか見えぬより、見識の小なるに喩ふ、韓愈の原道に「坐井而觀天、曰天小者、非天小也」とあり。

〔德音〕善言又は令聞と云ふ意也、轉じて天子の言を云へり、漢書董仲舒傳に「陛下發德音下明詔」とあり、こゝは後文の意也。

〔行雲流水〕一定の質なく、種々に移り變るを云ふ、宋史蘇武傳に「行雲流水、初無定質」とあり、即ち據りどころなきを云ふ

〔浮圖〕浮屠とも書す、祕藏記に「浮圖佛也」とあり、蓋、梵語「ブダア」の音譯の轉也。

旌斂精兵駿騎雲屯霧集。鷁旗舒陣列重山。埃塵直天。蹄鳴雷轟。戈矛掣電。胡人振威。露刃哮吼。鬼魅潛走。所以八蠻九夷盡在畝内。惟倭日本渉居滄溟。得地不足以廣疆。得人非爲元用。所以微失利而不爭。以其藪衛之地也。如知天命不可以兵禍。而禍日本之良民也。今彼國以敗元爲長勝。以疆爲大而不可量。吾將衛疆用渉人而指視。令丹青繪之。截長補短周匝不過萬里餘。陸比元蹄輪長驅。經年不阻而較之。吾不知孰巨細者耶。今彼國通年以來。自誇強盛。縱民爲盗賊。害隣邦。必欲較勝負見是非者歟。辨強弱者歟。至意至日。將軍審之。

今按。日本征夷大將軍。源義滿也。如瑤藏主者。關西親王良懷所遣僧也。圖書編曰。遣僧如瑤貢馬。

詳見下文。

又卷第十九

倭扇行

滄溟之中有奇甸。人風俗禮奇尙扇。捲舒非矩亦非規。列陣健兒首投獻。國王無道民爲賊。擾害生靈神鬼怨。觀天坐井亦何知。斷髮斑衣以爲便。浮辭常云卉服多。捕賊觀來王無辨。王無（本ノマヽ）辨褶袴籠鬆誠難驗。君臣跣足語蛙鳴。肆志跳梁于天憲。今知一揮掌握中。異日倭奴必此變。

今按。日本扇所賞于中華年久矣。見皇朝類苑。其上卷。太祖賦言亂邦事。扇亦從世弃捐。獨不可恨秋風也。一統志我國土産中載扇。在下文。

宋景濂蘿山集第四

〔鬼魅〕ばけもの﹅類に云ふ、易經の疏に「鬼魅盈車．怪異之甚也」とあり。

〔八蠻〕爾雅の疏に「天竺、咳首、僬僥、跂踵、穿耳、儋耳、狗軹、旁脊」とあり、又書經に「通道于九夷八蠻」とありて單に多くのえびすと云ふに云へり。

〔生靈〕人民也、晉書慕容盛傳に「生靈仰其德、四海歸其仁」とあり。

〔浮辭〕實着ならざる言辭也、鄒陽獄中上梁王書に「兩主二臣、剖心析肝相信、豈移於浮辭哉」とあり

〔大偃河〕一に大井川とも云ふ、桂川の上流の名にして、山城國葛野郡嵯峨村及び同郡松尾村の邊にての名にて、又葛野川、西河の稱なり、其の嵐山の麓を流るる間、水清く、奇岩多く、頗る風景に富めり。

〔龜山〕山城國葛野郡嵯峨村なる天龍寺の西北、小倉山の西南にあり、形龜の甲に似たれば名づく。

〔都良香〕貞繼の子にして、平安朝初期の詩人也、承和十一年生、元慶三年歿。

賦日東曲十首

問海上僧。僧多不能答。時辛酉冬十月也。

其一

伊水西流曲似環。宮闕遠映龜龍山。六十六州王一姓。千年猶效漢衣冠。日本自古唯一姓。王姓藤氏。史則云王氏。

今按。伊水。嵯峨大偃（オホイ）河。大偃和訓於保伊。略曰伊。龜龍山。嵯峨龜山。東山龍山。王姓藤氏。史則云王氏訛。王氏藤氏各異。自開闢以日神子孫爲王。非王氏。見圖書編今按中。

其二

藤橘源平族四家。連城甲第競豪華。治書省內多官使。黃牒紛紛簇九花。藤橘源平國中四大姓。治書省乃官署名。有尚書侍郎郎中主事。及鴻臚卿丞之屬。其印文曰太政官印。

今按。四大姓者。後世之所稱。姓氏錄所載一千一百八十二氏其中多大姓。治書省尚書省之訛。我太政官當唐尚書省。八省百官悉屬太政官。非有尚書侍郎郎中主事。及鴻臚卿丞之屬而已矣。其印文曰。太政官印。太政官符所用之印文也。余嘗見延久二年二月廿日官符。朱色退光。印文不全。然欲證日東曲。故下載之。并引公式令。

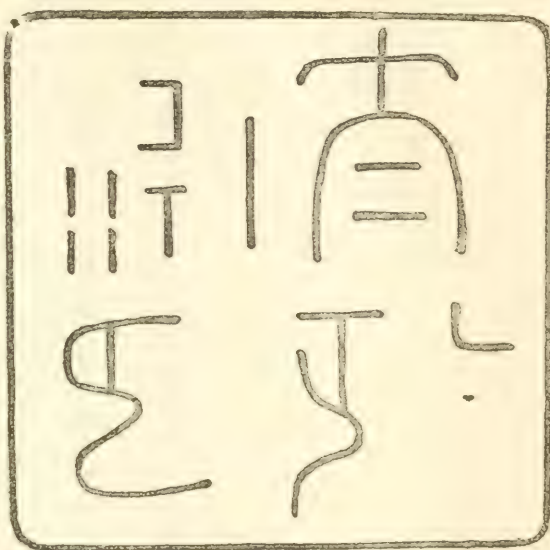
其三

絕人層霄富士岩。蟠根直歷三州間。六月雪花翻素霓。何處深林覓白鷴。富士國中最高山。六月山上有雪。三州謂豆駿相也。

今按。富士山直歷東西南三州。北甲州。凡四州間而隸駿州也。都良香（コシカ）富士山記曰。富士山者在駿

〔大辨〕辨官の首席左右各一人、從四位上。太政官中の重職なるを以て、名家譜第の輩より撰任し、或時は參議を以て兼ねしめたることあり、辨官は、八省を分掌し、庶事を承りて下に達し、太政官内を糺判し、文案を署し、稽失を勾へ、校官の諸司の宿直を監す。

〔史〕左右大小各八人あり、太政官の文書勘例を掌り、諸司國司の庶務を取扱ふ、太政官の佐官也。

〔使人〕符を齎す使者也、令集解三十二註に「使人、謂此止送書之使、非撿按事之使也」とあり。

公式令曰符式

太政官符其國司

其事云云符到奉行

大辨位姓名　　史位姓名

年月日　　使人位姓名

右太政官下國符式

河國。峯如削成。直聳屬天。其高不可測。歷覽史籍所記。未有高於此山者也。其聳峰鬱起見在天際。臨瞰海中。觀其靈基所盤連。亘數千里間。行旅之人經歷數日乃過其下。去之顧望猶在山下。蓋神仙之所遊萃也。云々。宿雪春夏不消。云々。

其四

紅雲起處是蓬瀛。十二樓臺白玉京。不知秦世童男女。還有兒孫蹐鶴行。

今按。此詩言秦徐福事。

其五

天皇大人洩祕寶。八角垂芒貫斗樞。靑牛不度大洋海。莫怪無人識道書。國中無道士。

今按。此詩意言。日本非老子乘靑牛所度之地。故無道士。不知道書。然文德實錄曰。和氣朝臣貞臣弱冠從治部卿安部朝臣吉人受老莊。又菅家文草北溟章小知章堯讓章詩序曰。予罷秩歸京。已爲閑客。玄談之外無物形言。故釋逍遙一篇之三章。且題格律五言之八韻。且叙義理。附之題脚。由此言之。則不可言無識道書也。

其六

玉環妖血汚寰中。豈有靈祠祀鬼雄。莫是仙山眞縹緲。雪膚花貌在珠宮。國有楊貴妃祠。

今按。一雜書曰。尾張國熱田廟前有山。松茂森森然。此號蓬萊。俗相傳云。熱田大明神化楊貴妃亂彼大唐。故玄宗困天寶之蒙塵。熱田之廟背有一基石塔。其長二尺許。其形太醜。巫祝等指之曰。貴妃之塔婆也。又廟外有玄大夫祠。僉云。玄宗三郎之祠也。貴妃謂楊什伍曰。此後一紀當相見。願保聖體。此其證也。兒林謂。雜書熱田大明神化楊貴妃之說甚妄。謹按尾張國風土記曰。熱田大明神者日本武尊也。當景行天皇時東夷反。日本武尊奉詔征之。東夷悉平。歸路於尾張國少解草薙劍。

〔徐福〕秦の人、孝靈天皇の世、勅命により不老不死の靈藥を探ねて我國に來り遂に歸化せし人也。

〔楊貴妃〕支那第一流の美人と稱せらる、唐の玄宗の妃となりて、寵遇せられ、權を後宮に專にす、時に安祿山反す、其の亂源妃より出づとなし遂に縊殺せらる。

〔天寶之蒙塵〕蒙塵は天皇倉皇として急ぎ外に逃るゝを云ふ、左傳僖公二十四年に「天皇子蒙塵于外不弁問官守」とあり、こゝには天寶十四年安祿山反して玄宗馬嵬に逃れ來したるを云へり。

〔塔婆〕卒塔婆の略にて墳廟を云ふ。

有レ光如レ神。不レ把二得之一。故留以爲二形影一。令三宮簀姫奉二齋祭之一。此萬世不刊之說也。爾來愛市潟靈異赫々。推爲二蓬萊一亦可也。至三唐道士入二蓬萊一。蓋至二于此地一乎。於レ是世俗亦畫レ蛇添レ足。以二明神一爲二貴妃一。誑二癡人一面前不レ可レ說レ夢也。余前有二東國之行一。過二熱田社一。乃入拜レ之。懷二往昔神德一盤桓四顧。時木社之後有二小社一荒蕪大甚。巫指レ之曰。此楊貴妃祠也。蓋好レ事者爲設レ之。道傍有二源大夫社一。卜部兼邦云。道祖神也。此說爲レ是。源與レ玄音同。故俗誣以爲二玄宗一而已。

其七

佛隴當時談二妙法一。一道紅光射二海東一。至レ今顯密二宗學。長伴二扶桑出日一紅。天台智者在時。有二傳敎弘法二師一。來受二顯密二致一而去。至レ今國中盛行。

今按。天台智者在時有二傳敎弘法二師一。來受二顯密二致一。非也。傳敎從二天台道邃一受二顯敎一。見二高僧傳一。弘法從二靑龍寺惠果一受二密敎一。見二佛祖統記一。宋濂未レ考二此耳一。

其八

竺門三典巧織題。有レ氣橫レ空若二彩寬一。梵唄動時花氣暖。一齊盡看黑側黎。三典謂二禪敎律之文一也。國中悉有レ之。

其九

無レ容レ持レ刀來厭レ虎。有レ僧擎レ鉢學レ呼レ龍。固知異域山川異。秖把二鯨波一限二四封一。其國無レ虎。或云無二羊驢一。

其十

中土圖書盡購刊。一時文物故班班。秖因讀者多顚倒。莫レ使二遺文一在レ不レ刪。其國但購二得諸書一悉官刊レ之。字與二此間一同。但讀レ之

〔宮簀姫〕日本武尊の妃也、尊東夷を平定し歸路病に罹りて伊勢能褒野に薨ず、妃尾張熱田鄕の地に社を立て奉祭す、今の官幣大社熱田神宮是也。

〔道祖神〕塞神にて我が國にては八衢彥、八衢姬及岐神の三神を祭る、根の國より來る禍神を防ぎ止め給ふ神也、和名抄に「道祖云々、和名、佐倍乃加美」とあり。

〔靑龍寺〕唐の時、其の首都長安に在りし名刹也。

〔竺門〕佛門に同じ朱熹の文に「迷心昧性晒二竺學一」などありて竺は天竺の略にて佛の發祥地なれば佛と云ふに云へり

〔遼東〕東漢にては平州に屬し、晉にては平州に管せらる、今の盛京省奉天府遼陽州の北七十滿里にあり。

〔寧波〕浙江省にあり。

〔五畿七道〕五畿は畿內五ヶ國、七道は東海、東山、北陸、山陰、山陽、南海、西海の七道を云ふ。

〔開元貞元中云々〕開元は唐玄宗、貞元は同じく德宗の時の年號にて、「其使」とあるは、我が國の遣唐使節を云へり、孝德天皇白雉四年より、仁明天皇承和元年迄殆んど各代一度は必ず派遣したり、宇多天皇の時之れを停む。

者語言絶異。又必係譯順文讀下。復逆處而上、始爲句。所以文義雖通而其爲文終不能暢也。

大明一統志卷之八十九　　資政大夫吏部尚書兼翰林院學士臣李賢等　編輯

外夷

日本國

東西南北皆際於海。去遼東甚遠。去閩浙甚邇。其朝貢由浙之寧波以達于京師。

〔沿革〕古倭奴國其他東西南北各數千里。西南至海。東北隅隔以大山。國王以王爲姓。歷世不易。文武僚吏皆世官。其地有五畿七道。以州統郡。附庸國凡百餘。自北岸去拘邪韓國七千里。曰對海國。又南渡一海千餘里。曰瀚海國。又渡一海千餘里。曰末盧（羅イ）國。東南陸行五百里曰尹（伊イ）都國。又東南百里曰奴國。又東百里曰不彌國。又南水行二十日。曰投馬國。又南水行十日。陸行一月。曰邪馬一國。其次曰斯馬國。曰巳百支國。曰伊邪國。曰郡支國。曰彌奴國。曰好古都國。曰不呼國。曰姐奴國。曰對蘇國。曰蘇奴國。曰呼邑國。曰華奴蘇奴國。曰鬼國。曰爲吾國。曰鬼奴國。曰邪馬國。曰躬臣國。曰巴利國。曰支惟國。曰烏奴國。皆倭王境界所盡。其國小者百里。大不過五百里。戶少者千餘。多不過一二萬。自漢武帝滅朝鮮。使驛通於漢者三十許國。皆稱王。其大倭王居邪馬臺國。卽邪摩維（堆イ）是巳。光武中元二年始來朝貢。後國亂。國人立其女子曰卑彌呼。爲王。其宗女壹與繼之。後復立男王。並受中國爵命。歷魏晉宋隋皆來貢。稍習夏音。唐咸亨初。惡倭名更號日本。自以其國近日所出故名。或云。日本乃小國。爲倭所併。故冒其號。開元貞元中其使有願留中國授經肄業者。久乃請還。宋雍熙後。累來朝貢。熙寧以後來者皆僧也。元世祖遣使招諭之。不至。命范文虎等率兵十

萬征之。至五龍山。暴風破舟敗績。終元之世使竟不至。本朝洪武四年。國王良懷遣使臣僧祖來朝貢。其後數歲一來。至今不絕。自永樂以來。其國王嗣立。皆受本朝廷冊封。

〔風俗〕黥面。文身。被髮。跣足。寰宇記。男子黥面文身。衣裙襦巾幅結束相連。不施縫綴。女人衣如單被。穿其中以貫頭。皆被髮跣足。其王至隋時始製冠。以錦綵為之。而飾以金玉。無盜少訟。不娶同姓。同上。人不盜竊少爭訟。婚嫁不娶同姓。父母兄弟異處。惟會同男女無別。飲食用籩豆。初喪不酒肉。同上。飲食以手。而用籩豆。以燔炙為恭敬。死有棺無槨。封土作冢。初喪哭泣不食肉飲酒。親戚就屍歌舞為樂。既葬舉家入水浴潔以祓不祥。信巫好戲。同上。兵有矛盾木弓竹矢。以骨為鏃。灼骨以卜吉凶。信巫覡。好棊博握槊樗蒲之戲。重儒書。信佛法。同上。初無文字。唯刻木結繩。後頗重儒書。有好學能屬文者。尤信佛法。有五經書及佛經唐白居易集。皆得自中國云。交易用銅錢。宋史。土宜五穀而少麥。交易用銅錢。文曰。乾文大寶。樂有中國高麗二部。四時寒暑大類中國。婦人皆被髮一衣用二三縑。

〔山川〕壽安鎭國山　國之鎭山。本朝永樂初。自製之賜之。刻碑立其地。

〔土產〕金 東奧州出　銀 西別島出　琥珀　水晶 有青紅白三色　硫黃　水銀　銅鐵　丹土　白珠　青玉　冬青木（イヌツハキ）　多羅木　杉木　水牛　驢　羊　黑雉　細絹　花布（ナラザラシ）　硯　螺鈿（アヲガイ）　扇　漆 以漆製器。甚工緻。

今按。大明一統志記我沿革風俗。皆見前史。自永樂以來。其國王嗣立皆受本朝廷冊封。謂足利氏受明朝冊封也。土產與世法錄有異同。我朝書所載土產亦甚多。藤原明衡新猿樂記曰。諸國土產所謂阿波絹。越前綿。美濃八丈。又柿 常陸綾。紀伊國縑（カトリ）。甲斐斑布（マタラ）。石見紬。但馬紙。淡路墨。和泉櫛又酢 播磨針。備中刀。伊豫手筥又砥。又簾。又鯖。出雲莚。讃岐圓座。上總鞍鞦。武藏鐙。能登釜。河內鍋又味噌 安藝榑（クレ）。備後鐵。長門牛。陸奧駒。又檀紙 信濃梨子。又烏賊 丹波栗。尾張粔（ヲコシ）。若狹椎子。近江鮒。又餅 越後鮭。又漆 備前海糠。周防鯖。伊勢鯯。隱岐鮑。山城茄子。大和瓜。丹後和布。飛驒餅。鎭西米等。愚謂。諸書所載此外猶多。

〔自永樂云々〕永樂は明成宗の時の年號、我が後小松天皇の應永十年を元年となす、四代將軍足利義滿の頃也、これより二年前、應永八年始めて明使來り、義滿を呼びて「日本國王源道義」と書せし國書を呈し、義滿大いに悅びしと云ふ、以來數度彼國の使節來朝せり。

〔冬青木〕姫椿或は鼠梓木（ネヅミモチ）とも云ふ、木犀科に屬する、觀賞木也。

〔花布〕麻布の上等なるもの、大和國奈良地方より產出す、苧の纖維にて織り、灰にて煮て晒したるもの也。

〔大和瓜〕和漢三才

圖會大和國土產の條に「甜瓜（皮白瓤黃名二梵天瓜一）前胡」等の名あり。

〔兵部〕事物紀原に「周禮夏官司馬之職也、魏有二五兵尙書一、魏宋爲二七兵一、後周始曰二兵部一」とありて又宋史職官志には「兵部掌二兵衞、儀仗、鹵簿、武舉、民兵廂軍、蕃軍、四夷、官封承襲之事、輿馬器械之政、天下地土之圖一」とあり。

〔工部〕事物紀原に「唐虞共工在二周禮一爲二各官之職一、漢置二民曹一、光武改二主繕信工一、作二池苑一、魏爲二左氏一、晉尙書爲二起部郎一、後周始曰二工部一」とあり、百工を掌る官也。

土產亦隨レ時有レ用。有二無用一。有二古今所一レ貴者一。

大明會典卷之一百二十一　兵部十六

驛傳三　應レ付二馬快船一

事例

一凡欽差內臣公侯伯出レ外。公幹如二操江鎭守之類一。應レ從二水路一者。

一每年欽差公侯伯郎中等官赴二各王府一冊封者。

一在京大臣以レ禮致仕。有レ旨馳驛。還レ鄕及丁レ憂病故者。

一襲封衍聖公嗣教張眞人朝覲囘還。

一南京內外官進貢囘還。

一安南日本等國使臣朝貢囘還。

又卷之一百六十　工部十四

船隻

一備レ倭船

沿海衞所每二千戶所一設二備レ倭船十隻一。每二一百戶一備レ倭船一隻。每二一衞一五所。共船五十隻。每船旗軍一百名。春夏出レ哨。秋囘守。月支行糧四斗。船有二虧折一有司補造。損者軍自修理。

又卷之一百七十二　鴻臚寺

凡王府幷鎭守守備備倭等官。外夷宣慰宣撫招討等司。進貢齎本人員。

又卷之一百七十三　　國子監

凡日本琉球暹羅諸國官生。俱賜冬夏衣鈔被靴韈。及從人衣服。

今按。明天子付馬快船於我使人。賜物于我官生。及從人。其遇我厚矣。設備倭船者爲禦寇也。此乃以直報怨。以德報德也。皆我所致也。

紀効新書卷之八

定遠　戚繼光　撰

操練營陣旗鼓篇第八

一戰勝追賊防伏之法

夫倭性。人自爲戰。善於抄出我後。及雖大敗隨奔隨伏。甚至一二人經過尺木斗壑亦藏之。往々墮其計中。辛酉之役。一月十捷我兵損不及六七人。議者謂。非兵之巧。乃賊之拙。此倭不如別倭之有伏也殊不知將前法已曾敎熟于平時。故如花街之捷。戰追四十里而保全勝者非賊之無伏我有搜守之法。而伏無所用也。其法如賊徒一戰而敗。賊遂奔北。我兵追上。凡遇林木人家過溪轉角之處。每遇林木屋垣灣曲大小。卽留一隊。或一哨守其必出之口。而他兵一面徑跑追上。每遇一處卽留一處。又或村落極大者。卽廻行圍止。聽人進搜。無賊高聲爲號。又復前追。其麥田茂草之地。又皆可伏之所。我兵每一哨內卽留一隊。分投下路星散。麥田草中搜打。喊叫一面正兵徑追。故每戰多於麥田中擒獲生擒。此非避我者。正賊之伏也。

〔國子監〕大學也、貴族の子弟及俊才を教育す、國子學に同じ、唐書に「願入學者、附國子監讀書」と、又事物紀原に「晉武帝咸寧四年、初立國子學、國子則舊制也、北齊爲國子寺、隋開皇十三年又爲學、煬帝卽位、改曰國子監」とあり。

〔韈〕足衣、くつしたの類を云ふ、韓愈の文に「文王韈繫解、因自結」とあり。

〔旗鼓〕戰に用ふる「ハタ」と大鼓のことより轉じて、戰術技倆の意ともなれり、管略別傳に「太守單子春、欲試輅之才辯、謂輅曰吾欲自與卿旗鼓相當」とあり

今按、辛酉明嘉靖四十年、當本朝正親町天皇永祿四年。

又卷之十八

臨敵號令軍法

一各船打敗倭寇所擄獲財物包裹、聽船捕簽從公分給。以多半付勤手首功之人、餘皆均處。敢有官捕頭目勒分、甚至夾打追使、公然放肆餘者許各兵徑於回目赴官告首。決打重治加倍追付。各兵頭目依律治罪。其軍器則要報官解驗、不許各兵隱藏。

今按、戚繼光數立戰功、宜乎以其功祀于功德祠。詳見闔書。其軍法可重。故抄出一二條。

說郛續第十

日本寄語　定州　薛俊

寄卽譯也。西北曰譯。東南曰寄。

天文類

天　天帝　日　虛路　月　禿計　星　付泥　云云

時令類云云　地理類云云　方向類云云　珍寶類云云　人物類云云　人事類云云

身體類云云　器用類云云　衣服類云云　飲食類云云　花木類云云　鳥獸類云云

數目類云云　通用類云云

〔嘉靖〕明世宗の時の年號にて四十五年續き、世祖其の十二月殂し、穆宗之れに代りて、隆慶と改めたり。

〔正親町天皇〕御諱は方仁、後奈良天皇の第一皇子、御母は贈皇太后榮子第百六代の天皇也

〔禿計〕「ツケ」にて訓「つき」の訛也。

〔付泥〕「フチ」にて訓「ほし」の訛也。

〔時令〕年中の行事に云ふ、後漢書に「百僚師尹、其勉修厥職、順行時令」とあり。

士君子非先王之法言不敢言。而方言固不足煩唇齒。然言者心之聲。得其言或可以察其心之誠與僞。故時寄其常所接談字彷彿音響而分繫之。似以資衛邊將士之聽聞。亦防禦之一端也。初無義理。觀者不必字爲之釋。

今按。以中國語譯倭語亦見武備志。在下文。故今引續說郛以云云略之。

唐詩訓解卷之四

濟南　滄溟　李攀龍　選
公安　石公　袁宏道　校

送祕書鼂監還日本　日本古倭奴國。後惡倭名更號日本。自言。國近日所出以爲名。貞觀初遣使入朝。其有願留中國授經學業者。久乃請還。　王維

積水不可極。安知滄海東。九州何處遠。萬里若乘空。向國唯看日。歸帆但信風。鼇身映天黑。魚眼射波紅。鄉樹扶桑外。主人孤島中。別離方異域。音信若爲通。

荀子積水而爲海。謝靈運詩。莫辨洪波極誰知大海東。史記。騶衍好爲閎大之言。言。中國名赤縣神州。內有九州。禹之叙九州是也。中國外如神州赤縣者九。乃所謂九州也。列子。乘空若履實。又渤海之東有五山。岱輿員嶠方壺瀛洲蓬萊皆仙人所居。五山之根無連著。隨潮上下。帝恐流於西極。命禺強使巨鼇十五舉首戴之始不動。楚辭。貫魚眼與珠。隋書。日本有如意寶珠。其色青。大如雞卵。夜有光云。魚眼精也。十州記。扶桑在碧海中。樹長數千丈。三千餘圍。兩樹同根更相依倚。故稱爲扶桑。公集中又有送鼂監還日本序。其內云。鯨魚噴浪。鷁首乘雲。扶桑若薺。鬱島如浮等語。與詩義頗合。

或一時贈別所作

鼂監蓋夷人入仕中國者。維與同官相善。故因歸國而送以詩。言。積水尚不可極。安知滄海東乎。彼九州至遠。未有若萬里乘空者也。況越海而行無路可覓。但指日而知國。信風以挂帆。復有魚鼇吞舟之患。當此之時。指鄉樹於扶桑。就主人于孤島。良亦危矣。如此異域若何以通音信哉。

今按。此詩亦載文苑英華卷第二百六十八。作祕書鼂監歸（集作還）日本國。又曰魚（作螢）眼射波紅。若爲之若作苦。

〔王維〕中唐時代に於ける第一流の詩人也、字は摩詰、太原の人、九歳にして詩を善くす、また草書、隷書に長じ、畫をよくす、乾元二年歿す、年六十一。

〔九州〕支那にて冀、兗、青、徐、荊、楊、豫、梁、雍の諸州を云ふ、史記に「凡四海之內九州方千里」などとあるもこれ等の地を云へる也、轉じて遠隔の地に云へり

〔荀子〕二十卷、趙人荀卿の著にて、周禮の道を祖述せり。

〔日ニ一故都ニ云々〕皇道述義曰止之卷五に一「比登」二「不多」三「美」四「與」五「伊都」六「武」七「那々」八「耶」九「許々」十「斗」と訓めり、本文と合考すべし、又其の義につきて曰く、比登は日止、不多は含處、美は身、與は世、伊都は出、武は群（ムレ）那々は無々、耶は物の上へ立昇るを云ひ、許々は「日日」斗は「止」なりとし、萬物生滅の理を述べたるものと說けり。

〔阿蘇山〕有名なる活火山にして、肥後國阿蘇郡の南部熊本市の東にあり

月令廣義卷之一歳令一　盱眙　馮應京　纂輯　新安　戴任　增釋　秣陵　李登　參訂

日本數譯月曰ニ禿計一。日曰ニ盧路一。年紀曰ニ一故都一。一曰ニ丢多子一。又丢微且多。二曰ニ扶達子一。又丢且多。三曰ニ密子倏且多一。四曰ニ學子搖搖做一。五曰ニ意子子難難多一。六曰ニ後子一。七曰ニ乃乃子一。八曰レ效。九曰ニ个个乃子一。十曰レ多。十一曰ニ多多去達子一。　冷曰ニ三孛水一。煖曰ニ挨撥水一。

今按。譯ニ日本語一與ニ續說郛武備志一同。數目多不レ中。

卷之二歳令二

冷暖碁子宣室記。日本國貢ニ玉碁子一。冬則煖。夏則冷。

卷之二十三晝夜令

如意珠統志。日本國阿蘇山。石火起接レ天。俗異而禱レ之。有ニ如意寶珠一。大如ニ雞卵一。色青。夜有レ光。永樂初年。封爲ニ壽安鎭國山一。

今按。阿蘇山事見ニ隋書一。壽安鎭國山事見ニ大明一統志一。而不レ記下封ニ河山一以中此號上。據今據ニ月令廣義一則封ニ阿蘇山一以ニ此號一也。

卷之六二月令

桃李春宋眞宗朝。日本國人滕木吉朝獻。詩云。君問ニ吾風俗一吾風俗最淳。衣冠唐制度。禮樂漢君臣。玉甕篘ニ新酒一。金刀剖ニ細鱗一。年年二三月。桃李一般春。

今按。滕木吉事見ニ宋史一。在ニ上卷一。

劉氏鴻書卷之六

明　宣城劉仲達　纂輯　太史湯賓尹　刪正

地理部三

海防倭夷入寇。毎隨風之所之。東北風猛則由薩摩域。由五島。至大小琉球而視風之變。云云不當專責之幕帥而已。夫倭奴狡詐叵測。我太祖絕其通易。誠見之遠矣。邇來思併朝鮮而有之。朝鮮誠乞援。朝廷憫焉。命將出師。捐不貲之費於積衰之後。則司閫外之寄者宜殫智竭忠。俾狡焉畏服。遠遁而幾危之國得安堵如故。則皇上之命爲不負。而中國之威不遠播乎。聞赴援之初。正値冱寒。倭奴畏寒如蟄虫。一擧而殲之。固大快也。乃逗留觀望坐失事機。聞爲將者以忌功喪師爲主。帥者乃主和議而名曰封貢則其辜不小。和議罷而忽聞。斬獲千餘之捷則功又胡大耶。功罪分而國勢輕重係焉。則桑土至計不可不亟爲之所。滴露漫錄

今按、風之變以下至不當。其間與圖書編大同小異。故略之。

又卷之八

地理部五

夷國

高麗之學始於箕子。日本之學始於徐福。安南之學始於漢立郡縣而置刺史。其中國之文學被焉。後至五代末節度使吳昌文方盛自中國流衍外夷。數千年間。其文皆不免於夷狄之風。窘竭鄙陋不足以續聖教者。蓋其聲音不同。其奇妙幽玄之理非筆舌之可傳。故不相合。原始祕書。

〔五島〕肥前國平戸島の西南に連れる諸島、やゝ大なるもの五つ相接せるより名づく、松浦郡に屬す。

〔大小琉球〕沖繩島を大琉球、大島を小琉球と云ふ。

〔箕子〕殷の王族也周の武王の時、朝鮮に封ぜらる、所謂古朝鮮の始祖也

〔安南〕印度支那半島の東部一帶を占むる國の名、わが國にて古「アナミ」と呼びし國是也、もと支那の藩屬國たりしが、二千五十五年以來佛國の保護國となれり。

〔王仁〕百濟の博士也、應神天皇の朝に論語及び千字文を齎らして來朝す後遂に我が國に歸化せり。

〔桑門〕沙門に同じ世捨人に云ふ、又僧を云へり、文選張衡西京賦に「展季桑門誰能不營」などとあり。

〔聖武天皇〕御諱は首、文武天皇第一皇子、御母は藤原宮子、第四十五代の天皇、深く佛を信じ給ひて、沙彌勝滿と申し上げ、三寶の奴と宣給ふ

〔孝謙天皇〕御名阿閉、聖武天皇の皇女、御母は光明皇后、第四十六代の天皇、寶字二年位を大炊皇子に讓り薙髮して法基尼と申し奉る。

今按。日本之學蓋自徐福以前有之。非以福爲始也。惟正學之不失傳。功被於萬世者王仁也。應神天皇之朝。王仁以漢帝之苗裔來爲仁德天皇菟道皇子師。弘聖賢之道。爲萬世之儒宗。恨不令劉仲達等知之矣。

日本國在大海島中。島方千里。即倭國也。其國乃秦始皇時。徐福所領童男女始創之國。時福所帶之人。百工技藝醫巫卜筮皆全。福因避秦之暴虐。已思遁去。不意遂爲國焉。而中國諸書遂留於此。故其人多尙作詩寫字。自唐方入中國爲商。始有奉胡教者。王乃髡髮爲桑門。穿唐僧衣。其國人皆髡髮。孝服則留頭。思域志

今按。徐福事見引史記後漢書吳志等下。我國自天地開闢有之。當我孝靈天皇統御之時。徐福避虎狼之秦。來投我爲氓。今劉氏鴻書不知之。謂徐福所領童男女始創之國者妄言也。始有奉胡教者。王乃髡髮爲桑門。穿唐僧衣。謂聖武天皇孝謙天皇也。二主皆當唐之世爲桑門。

又

夷俗

烏秏之國有驢無馬。新羅無羊。勿吉無牛羊。琉球無牛羊驢馬。鞠國有鹿而無羊馬。驃度森有豕而無它畜。朝鮮有麋鹿麕麀而無鹿。扶桑有銅而無鐵。日本無木棉。夜郎無桑蠶。烏桓無麴。南詔尋傳之蠻無絲纊。挹婁無鹽鐵。西域無茶茗。瓜哇有麻稻粟菽而無茶麥。波斯無稻黍。三佛齊有米無麥。鞠國有木無草。日本有諸樂而無甘草芎藭。朝鮮無岡桐銀朱。婆陀蠻無鐵。印都檐波貢臘皆無雪

霜。勿斯里無雨。蘇都識匿之國無五谷。**玄覽。**

大琉球之衣以國鏤。南詔之衣以波羅。撥拔力之衣以羊皮。阿里驕之民鹿皮貫木葉而衣之。滑國以羊皮為紙。嘉良之夷以皮為舟。三佛齊以椰葉為瓦。扶南以大箬葉為瓦。拔悉彌以樺皮為瓦。暹羅以蒺草為瓦。朝鮮以布粟為市。日本以漢唐之錢為市。暹羅以海貝為市。文身之民以珍寶為市。晏陀蠻以蚌甲為兵。回紇以駱駝耕。駿馬之國以馬耕。**夷事略**

今按。外國之俗不可知也。惟我日本俗不可不知。上古無木棉如說。武備志。亦曰用布為常服。無棉花故也。古者有綿。亦以木皮名木綿。此曰由布 卽穀是也。以為衣服。後世祭祀身被木綿手繦者象上古之衣服也。見古語拾遺。寶基本紀等書。近世中國以綿花亦名木綿。日本亦有之。呼曰紀波陀。我國人暗古者以神代由布近代紀波多。總書木綿為一物者甚非也。雖中國上古無綿花。按吳淞張叔。翹閔耕餘錄曰。吾松以綿布衣被天下。而綿花之來莫詳其始。相傳謂。種出西蕃。元時始入中國。按。通鑑梁武帝木綿皂帳。史炤釋文云。木綿江南多有之。以春二三月下種。既生須一月三薅。至秋生黃花。結實。及熟時其皮四裂。其中綻出如綿。土人以鐵鋌碾去其核。取如綿者。以竹為小弓。長尺四五寸許。牽弦以彈綿。令其勻細。卷為筒。就車紡之。自然抽緒。如繅絲狀。織以為布。按史炤所言。卽今之綿花無疑矣。但今制彈綿之弓。以木為之。長六尺餘。則與古稍異耳。謂起自元時非也。第史炤以此解木綿。亦未為當木綿出交廣。其樹盈抱。其實如酒杯。其口有綿。可作布。見張勃吳錄。卽今之班枝花。楊用修辨之是矣。原我朝綿花之始。類聚國史卷第百九十九

〔寶基本紀〕神道五部書の一、造伊勢二所太神宮寶基本紀の略也。

〔紀波陀〕青栗隨筆に「綿花を〔きわた〕と云ふ、唐にも木と草と二種あり、木の綿は木ふとくして桐の如く葉は胡桃に似たりとかや、されども草の綿にはおとりけるよし、草なすべて木綿と云ふなる、梵語に迦波羅〔キヤハラ〕とも云ふよし、飜譯名義集に見えたり云々吾が國にも昔渡りしが絕えて、永祿天正の頃異邦より又來りしとぞ」とあり。

殊俗部曰、桓武天皇延暦十八年七月。有一人。乘小船漂著參河國。以布覆背。有犢鼻。不著袴。左肩著紺布。形似袈裟。年可廿。身長五尺五分。耳長三寸餘。言語不通。不知何國人。大唐人等見之僉曰、崑崙人。後頗習中國語。自謂天竺人。常彈一弦琴。歌舞哀楚。閲其資物。有所實者。謂之綿種。依其願。令住川原寺。卽賣隨身物。立屋西郭外路邊。令窮人休息焉。後遷住近江國國分寺。十九年四月庚辰。以流來崑崙人如實綿種。賜紀伊淡路阿波讃岐伊豫土左及大宰府等諸國植之。其法先簡陽地沃壤。掘之作穴。深一寸。衆穴相去四尺。乃洗種漬之。令經一宿。明旦殖之。一穴四枚。以土掩之。以手按之。每旦灌水。常令潤澤。待生芸之。見林近親之長出于此。無甘草萵蕣者誤也。陸奥出羽常陸有甘草。每年貢之。見延喜式。萵蕣諸州往往有之。近世重中國甘草萵蕣。故以爲日本無之。

又卷之六十九

文史部四

雜著　長

倭國

常見倭國求通表文。曰臣聞三皇立位。五帝禪權。豈謂中華之有主。焉如夷狄之無君。乾坤浩蕩。非一主之獨權。宇宙洪荒乃萬民之糾首。故天下者天下之天下也。非一人之天下也。臣居遠彌。偏倭小國。城池不滿六十座。封彊不足一千里。故常存知足之心。而知足常足也。臣聞。陛下作中華之主。

〔近江國國分寺〕滋賀郡石山村大字國分に在り、聖武天皇の天平十三年五月の詔に依りて創立する處也。

〔甘草〕荳科に屬する宿根草、根は黄色にして甘味を有し藥材に用ふ、又その甘汁を味付に用ふ。「あまき」「あまくさ」「あまづる」とも云ふ。

〔三皇〕支那上代の有名なる三人の皇卽ち伏義、神農、黄帝、或は天地人の三皇を稱す。

〔五帝〕支那上代の五人の聖君、卽ち少昊、顓頊、帝嚳、堯、舜、或は伏義、神農、黄帝、堯、舜を云へり。

爲萬乘之君。至尊至上也。城池數千餘座。封疆數萬餘里。尙然不足。常起滅絕之意。天發殺機神鬼號哭。地發殺機龍蛇走陸。人發殺機天地反覆。堯湯有德四海來賓。周武施仁八方拱手。今聞。大國有興戰之策。小邦有卻兵之法。臣豈肯軌途拱奉天顏。順之未必其生。逆之未必其死。今聞。陛下選股肱之師。起竭國之兵。來侵臣境。賀蘭山前聊以博戲。倘若君勝臣輸則滿上國之策。設若臣勝君輸番作小邦之利。自古及今講和爲上。罷戰爲强。免生靈之疾苦。救黎庶之艱辛。年年進貢於中華。歲歲稱臣於弱國。今遣使臣徑詣丹墀。剪勝野聞

今按、倭國求通。表文不知何世事。偶得之於鴻書。故載焉。

〔萬乘〕天皇を尊びて云ふ、孟子梁惠王篇萬乘國註に「萬乘之國者、天子畿內、地方千里、出車萬乘こ」とあるに依れり。

〔丹墀〕「タヂヒ」と訓む、此の時の使臣は多治比朝臣廣成也、入唐滯在中この字を用ゆ、歸國再び本姓に復す子孫木工頭貞成に至りて舒明天皇に請ひて丹墀の字に改めたり、源平及び南北朝の頃武藏七黨中の丹黨と云ふは此の子孫也。

古今萬姓統譜卷之一百四十

吳興　凌迪知稚哲　輯
吳門　俞允文仲蔚　校

諸方複姓

朝臣日本國使人

唐

朝臣眞人長安中拜司膳卿同正副使。　朝臣大父拜率更令同正。

今按、朝臣爲複姓是也。本朝天武天皇以來賜八姓。朝臣其一也。詳見日本紀古語拾遺姓氏錄。謂朝臣日本國使人者非也。粟田朝臣眞人使於唐。故率爾云然。宜參考引唐書下。大父當作大夫。

後漢書曰。使人自稱大夫是也。

又卷之二十五

卜潘賜字文錫、蒲城人。永樂進士。授行人。出使日本。回獻德化書永樂大典頌。上覽之稱善。命入史館。朝擢鴻臚少卿。再使日本。回陞江西參政。傳家摘其詩句以爲妖言。坐落職。宣德間。復除鴻臚寺少卿。又使日本。朝廷深加奬勞。賜才思高遠操履方正。王使外夷。能全大體。以副君命。時論賢之。所著有梅竹篇皇華勝覽客菴文集若干卷。

又氏族博攷卷之七　氏目諸方複姓

朝臣

瑯邪代醉編卷之九　　姑蘇張鼎思睿父輯　蒼梧楊際會士遇父校

外國書

歐陽公日本刀歌。徐福行時經未焚。逸書百篇今尙存。令嚴不許傳中國。擧世無人識古文。由此觀之則尙書全文。日本國尙有之也。聖天子德威遠播。梯航日出之邦。聖賢遺書必有隨玉帛而來者。此千古大快事也。

三才圖會地理九卷補陀山圖說　　雲間　允明父王思義　集

補陀落迦山在定海東北故昌國縣海中。佛書所謂海岸孤絕處。往時高麗日本新羅諸國。皆由此取道以候風信。一名梅岑山。其山有善財巖潮音洞盤陀石蓮花洋。其勝稱絕。

又地理十三卷東夷日本國圖說

日本卽倭奴國。在東南大海中。依倚山谷。高麗在其地。新羅百濟在其西北。地勢東高西下於閩浙爲東北隅。王以王爲姓。文武僚吏皆世其官。有五畿七道。各有所屬州。州以統郡。其附庸國凡百餘自

〔進士〕唐の時、人材登用の制として詩賦を以てす、これを進士と云ひ、經義を以てす、これを明經と云ふ、日知錄に「進士卽擧人中之一科、其試於禮部者人々皆可謂之進士、試畢放榜其合格者曰賜進士及第」とあり。

〔永樂大典頌〕永樂大典を稱述せる詞也、明の永樂元年に、成祖が解縉等に敕して、經史子集より諸子百家僧道技藝の末に至るまでの言を蒐輯せしめたる書にて、全部目錄共に二萬二千九百三十七卷ありしが、明末の亂に焚燬して、僅にその十分の一を殘存せり。

〔倭寇〕我國南北朝の頃より西國浮浪の徒相結托して支那朝鮮の沿海を略掠せり、明人之を名付けて倭寇と云ふ、其後足利氏の末に至りて最も甚しく、鎭西の豪族等も亦之を利として物品を載せて彼の地に至り、彼に隙あれば武器を以つて掠奪し、隙なくば物品を示して朝貢と稱し、近海爲に大に苦めらる、又船舶に八幡宮と書したる旗幟を樹てたるに依り、明人八幡船と呼びて恐る。

北岸云云。故名。云云

今按。日本國圖同二圖書編。說似二大明一統志。故不二煩載一。

又人物十三卷

日本國卽倭國。在二新羅國東南大海中。依二山島居。九百餘里。專一沿レ海。寇盜爲レ生。中國呼爲二倭寇一。

今按。此圖亦寇盜爲レ生之文甚亂レ眞。詳見下引二不求人一下上。

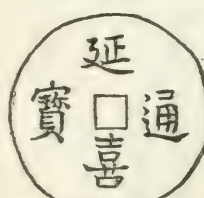
又珍寶二卷錢圖下 外國品

和同錢

隆平錢

舊譜曰。日本國錢四品。並徑寸。重五銖。其文隸書。一曰和同開珍。二曰神功開珍。三曰萬年通寶。四曰隆平永寶。其國延曆中鑄。

神功錢

乾文錢

國朝會要云。太平興國九年。日本國僧大周(奝カ)然等浮ㇾ海而至云。其國用ニ銅錢一。文曰乾文寶。

萬年錢

倭國錢

賓寧傳載曰。倭國在ニ東海中一。正朔一同ニ中夏一。年號天慶天曆。其國用ㇾ錢。文曰延喜通寶。

〔拾芥抄〕諸般事物の抄解にして、洞院公賢の撰也。

〔大江維時〕千古の子、文章博士參議中納言に歷任す。

今按。和同開珍。元明天皇和銅年中所ㇾ鑄。今猶古錢有ニ此文一。神功開珍。拾芥抄作ニ神功開寶一。云天平神護元年鑄ㇾ之。萬年通寶。天平寶字四年三月鑄ㇾ之。隆平永寶。延喜十五年十一月八日鑄ㇾ之。圖說延曆曆當ㇾ作ㇾ喜。乾文寶當ㇾ作ニ乾元大寶一。誤書ニ乾文一。錢文大字滅。此錢。村上天皇時鑄ㇾ之。九條右丞相記九曆曰。天德二年三月廿五日改ニ錢文一曰ニ乾元大寶一。參議大江維時勘進。大內記藤原俊生作ニ詔書一。圖

說大周然當作齊然誤也。延喜通寶。延喜七年十一月三日鑄之。我朝改錢有法。西宮記曰。大臣奉勅。令博士勘錢文。奏定擇吉日。召能書者。於陣頭令書字樣奏之。乃令作物所(ツクモトコロ)彫定。下官符于鑄錢司鑄之。鑄錢司進新錢。云々歷代多錢。開基勝寶金錢也。太平元寶銀錢也。及承和昌寶。長平永寶。饒益神寶。貞觀永寶。寬平大寶等錢有之。三才圖會惟載六錢而已。

五燈會元續略卷第一上　　明　支提山嗣祖沙門淨柱輯

金陵天界寺雪軒道成禪師傳

洪武三十五年七月。太宗文皇帝間登寶位。奉使日本國。師往宣聖化。二年與同使官僚備奏。皇情大悅。恩寵之隆有加。四年以僚佐譖繫於囹圄。百餘日。師坦然無慮。上知其非罪宥之。

今按。續稽古略第三。亦有雪軒禪師事。云至永樂中命師往日本國闡揚佛化。及歸陞左善世。御製詩章賜之。洪武三十五年當日本應永九年。乃足利道義爲政於天下之時也。

又卷第三下

臨濟宗

高峰日禪師法嗣

日本國兜率院夢窻疎石國師。姓源氏。勢州人。宇多天王九世孫。母禱觀音夢呑金色光而孕。暨長給死屍九變之相。獨坐觀想知色身不異空花。慨然有求道之意。十八爲僧。夢遊中國疎山石頭二刹。一龐眉僧持達磨像授之。既寤曰。洞明吾本心者唯禪觀乎。初謁無隱範。次謁一山寧于相州。山曰。我

〔西宮記〕禁中の恒例、臨時の公事等を記せる書、源高明の著也。
〔作物所〕朝廷の調度及金銀細工をなす所也。
〔官符〕太政官より下せる公文を云ふ
〔開基勝寶〕下の太平元寶と共に天平寶字四年の鑄造也
〔承和昌寶〕承和二年の鑄造也。
〔長平永寶〕嘉祥元年鑄造せる長年大寶なるべし。
〔饒益神寶〕貞觀元年の鑄造也。
〔貞觀永寶〕貞觀十二年の鑄造也。
〔寬平大寶〕寬平元年の鑄造也。
〔道成禪師〕字は鷲峰、薊北の人也。
〔足利道義〕義滿也

宗無語句。亦無一法與人。師曰。願和尚慈悲方便開示。山曰。本來廓然清淨。雖慈悲方便亦無。師疑悶無聊。見佛國高峰日公扣請如前。峰曰。一山云何。師述其問答。峰勵聲喝曰。汝何不道。和尚逗漏不少。師於言下有省。辭歸舊隱常牧山。一夕坐久。偶倚壁忽然仆去。豁然大悟。有等閑擊碎虛空骨之句。求峰印可。峰曰。西來密意汝今已得。善自護持。卓菴濃州諸刹。國王命師領南禪天龍等處。王妃延入宮中。執弟子禮問道。賜號正覺。加心宗普濟之號。且遺以手書。其略曰。道振三朝。名飛四海。主天龍席。再轉法輪。秉佛祖權。數摧魔壘。師以年高隱退。尋示寂。

今按。夢窻國師事亦見續稽古略第二。與續五燈會元大同小異。云。諱智曤。王妃延入云々。問道。據夢窻年譜。貞和二年。觀應元年有此事。正覺光明天皇所號。心宗光嚴天皇所賜。普濟後光嚴天皇所加。道振三朝云云等文。觀應二年八月十五日光嚴天皇手詔也。三朝者後醍醐天皇。光明天皇。光嚴天皇。詳見天龍寺紀年考。

釋鑑稽古略續集二　歸安杏溪蘧菴比丘大聞　幻輪彙編

日本禪師。諱印原。字古先。相州藤氏。生有異徵。幼多奇志。八歲歸桃花悟公。十三剃度具戒。奮然南游。初參無見覩公。指見中峰本公。給侍左右。屢呈見解。峰呵曰。根塵不斷。如纏縛何。虛妄塵勞皆非究竟事也。師愈精進。久之有省。現前境界一白無際。入室印決超然領解。峰囑以善自護持。時虛谷靈公古林茂公東嶼海公月江印公師咸往謁焉。以叢林師子兒稱之。後同清拙澄公入日本。建立法幢。化行遐邇。殊有力焉。出世慧林。祝香嗣於中峰。次主等持教寺及眞如萬壽淨智等刹。又住持普應寺長

〔南禪〕京都南禪寺町に在る臨濟宗南禪寺派の本山也、永仁元年龜山上皇の御創建に係る。

〔天龍〕山城國葛野郡嵯峨村に在る臨濟宗天龍寺派の本山也、夢窻國師の開山にして、康永三年成る。

〔八歲云々〕此年父に從ひ相模圓覺寺の桃溪公に歸して童役を勤む。

〔奮然南游〕文保二年元に游べる也。

〔入日本〕正中二年也。

〔慧林〕甲斐に在る寺の名也。

〔等持教寺〕山城國葛野郡衣笠村に在る等持院也。

〔眞如〕山城國葛野郡に在り。

〔萬壽〕京都に在り

壽院。兼主圓覺建長。後退老長壽。是歲(甲寅洪武七年)春正月示疾。至二十三日召門人曰。爾等恪守吾平日所訓。使法輪永轉可也。大書心印二字。付額其塔。壽八十。臘六十云。

今按。五燈會元續略。亦有日本國相州建長禪寺古先印原禪師傳。

日本即古倭奴國。海中諸夷倭奴最大。西南至海。東北大山。國主世以王爲姓。地分五畿三島。又有附庸百餘。拘邪韓最大。唐初更爲日本。其俗男子魁頭斷髮。黠面。文身。婦人被髮。屈紒跣足。間用履。其喜盜輕生好殺。天性然也。物產金銀。琥珀。水精。硫黃。水銀。銅錢。白珠。青玉。蘇木。胡椒。細絹。花布。螺蚰。漆器。扇。犀。象。刀劍。鎧甲。馬。交市華人。喜得童女。錦綺。絲綿。磁針。時入貢不誠。

又三

太初禪師諱啓原。號太初。日本國人。九歲禮物外禪師得度。年十九與宗猷等十八衆游參上國。丙午二月。進京見季潭禪師。後見了室天童無著懶牧等四十五員大善智識。末於傑峰和尚處。入室付頂相大衣拂子法語。後住羅陽三峰寺。及山交龍護禪院。有會語錄。是年(丁亥永樂五年)二月一日卓午說偈曰。生也鐵面皮。死也鐵面皮。一椎百雜碎。白日繞鐵圍。擲筆坐逝。壽七十五。行化四十餘年。塔院南。

夢觀集卷之一　七言古詩

富春　釋如蘭　編次

送勤無逸使日本

大明建國如虞唐。萬方玉帛朝明堂。五百僧中選僧使。奉詔直往東扶桑。扶桑東去渺煙水。百萬樓臺

(圓覺建長)共に鎌倉山之内に在る臨濟宗の寺、圓覺寺は弘安五年、建長寺は建長年間の草創也。

(明堂)朝廷也、陽位に就て建て、八窓四闥なるに依る孟子梁惠王下篇に「明堂者、王者之堂也」と見えたり。

(扶桑)我國の美稱なり。

〔白河關〕磐城國白河郡古關村大字旗宿に在りし關也、其初め詳かならざるも仁德天皇の御宇に創まるならむと云ふ。

〔北野〕京都に在る社也、朱雀天皇天慶五年道眞公の神託により、多治比奇子なるとの小祠を右京七條坊に建てゝこれを祀ること五年、村上天皇天曆元年これを北野神殿に遷す。

〔孝宗敬帝〕憲宗の第三子、明第十世の皇帝也。

〔後土御門院〕御花園天皇の第一皇子御名は成仁、第百三代の天皇也。

〔後柏原院〕後土御門天皇の第一皇子御名は勝仁、第百四代の天皇也

海中起。珊瑚珠樹赤松西。玉嶂金峰碧雲裏。重城堅壁鐵不如。衣冠禮樂傳中都。樓船謾說高氏使。劫灰不動蒼姫書。白河關高玉繩下。天上靈梅移北野。八袠神師解篆龍。十歳小兒知習馬。自從日姓開封疆。履地不敢稱天王。一君四相贊吁咈。本支百世同蕃昌。讀書不貴論王霸。上下唯知尊佛化。尙想兵殘五季餘。全奉台書復中夏。故人自是吾宗傑。北峰印燈垂六葉。此行豈誇專對才。要播玄風翊王業。飄飄瓶錫辭九重。大颿四月開南風。游龍雙迎浪花白。天雞一叫東方紅。我詩白雲天萬里。人生生爲當若是。瓦官閣上望秋濤。待汝歸來報天子。

今按。勤無逸者南京瓦官寺僧也。御製文集所謂克勤是矣。洪武五年來于日本。見圖書編。白河關在陸奧國勝地也。北野在山城國。天滿大自在天神之所鎭坐也。故此詩詠梅。詳見上卷薩天錫詩集條。日姓指日神之種也。

適情錄

林應就自叙云。弘治間。日本僧慮中者來朝止于杭。博學而文且善奕。嘗著決勝圖二卷云云。蓋得奕之三昧。

今按。弘治明孝宗敬帝年號。當我朝後土御門院後柏原院之間。

玉煙堂　唐法書日本

暮春遊施無畏寺。翫半落花。　絕句爲韻。　爵檀一首。

落花委地亦殘枝。如有如空意始知。何似道場檀越老。年顏白髮半頭時。

以上二枚此皇子手跡臨之也
薛嗣昌
日本草書如唐人學二王筆也
晉陽張誠一嘗覽
子昂題

三月盡日於施無畏寺即事、絶句爲簡。　左拾遺一首
艷陽三月今日盡。白首拾遺感懐催。欲以危身期後會。明春誰定見花開。扶醉走筆不避調聲。
以上二枚。此皇子手跡。臨之也。　薛嗣昌
日本草書如唐人學二王筆已。晉陽張誠一嘗覽。　子昂題

（絶句）四句より成れる詩を云ふ。唐に至りて此體成る
（白首）老人を云ふ

〔菅根〕藤原良尙の子、文章博士、大宰大貳、式部少輔藏人頭を歷任し、延喜八年參議に進み、同年卒す。

〔前中書王〕中書は中務の唐名也、後ち村上天皇の皇子具平親王二品中務卿に任ぜられしより、兼明親王を前中書王又は單に中書王と申し、具平親王を後中書王と申す。

〔實頼〕藤原忠平の長子也、關白太政大臣に至る。

今按。此言皇子者。醍醐天皇第十六皇子兼明親王也。母藤原朝臣淑姫。參議菅根之女。親王爲一品中務卿。號前中書王。嘗爲小野宮右大臣實頼見忌。隱於嵯峨龜山。長於詩文音樂。亦能書。世傳老君子曲親王之所作也。初親王居龜山之水。作祭文祈龜山神。甚泉忽湧。今猶在山下篁中。天龍寺曹源池是也。施無畏寺。始名觀音寺在北山。淑姫化去之地。故親王爲當寺檀越。數經歷之。所謂欝檀者親王自稱乎。左拾遺。官名。本朝侍從也　蓋親王同時風騷之士。親王書自及左拾遺詩。故曰。以上二枚此皇子手跡。二王義之獻之工書。稱大王小王。言如日本人皇子手跡之屬。似唐人學二王筆。故唐法書中載之。張誠一嘗覽皇子眞蹟。薛嗣昌臨之。乃爲石刻也。

醫學綱目卷之十九疔瘡門　蕭山仙居岩　樓英全善　撰

〔丹〕日本三藏傳疔瘡方。江子肉十粒。半夏一大顆。研末附子半枚。羌螂一枚。各爲末。四味臭（麝香也）相和。看瘡大小。以稀繩子圍瘡口。以藥泥上。又用絹帛貼傳。時換新藥以可爲度。此方活人甚多。

今按。此方出自日本三藏法師。丹溪朱彦脩傳之。釋氏要覽中卷曰。經。律。論。謂之三藏。謂日本三藏則日本僧通三藏者也。闕其名。可惜。丹溪取之。樓氏載于醫學綱目。其良方可知矣。王肯堂證治準繩亦載此方。

文房器具箋　東海　屠隆

潘鐵幼爲浙人被虜入倭。性最巧滑。習倭之技。在彼十年。其鑿嵌金銀倭花樣式。的傳倭製。後以倭敗還省。徙居雲門。所製甚精。而價亦甚高。

今按。居家必備中。入文房器具箋。潘鐵久在日本。習其國之技。倭敗還。蓋秀吉擒中華朝鮮人數萬。秀吉薨後。慶長十一年朝鮮松雲大師來請和。乃我朝還囚于本國。蓋潘鐵此時人。

本草綱目第卷八金石部水精集解　　勅封文林郎蓬溪知縣蘄州　李時珍　撰

時珍曰。倭國多水精。

又第十一卷石硫石流黃集解

時珍曰。舶上倭硫黃亦佳。

又第三十七卷寓木類琥珀集解

時珍曰。出高麗倭國者。色深紅。有蜂蟻松枝者尤好

五雜組卷之四　　陳留　謝肇淛　著

地部二

海上操舟者。初不過取捷徑。往來貿易耳。久之漸習。遂之夷國。東則朝鮮。東南則琉球。呂宋。南則安南占城(チャンパン)。西南則滿剌迦暹羅。彼此互市。若比鄰然。又久之遂至日本矣。夏去秋來。率以爲常。所得不貲。什九起家。於是射利愚民輻輳。競趨以爲奇貨。而權宋之中使利其往來。税課以便漁獵。縱令有司給符繻與之。初未始不以屬夷爲名。及至出洋乘風挂帆。飄然長往矣。近時當事者。雖爲之厲禁誅首惡一二人。然中使尙在。禍源未淸也。老氏曰。不貴難得之貨。使民不爲盜。上既責以税課方物。而又禁其販海。其可得乎。

〔慶長十一年云々〕これより先徳川家康天下の權を握るや宗義智をして和を議せしめ、此年和議成れる也。

〔李時珍〕字は東璧蘄州の人也、醫者の混亂せるを憂ひ三十年を費し、本草綱目三十九卷を作る。

〔五雜組〕組は俎の誤也、天地人物事の五類に分ち天文地理人事學術等を論述せる書也。

〔謝肇淛〕明の學者なり。

今按。中國市舶之來自唐宋明駱驛不絶、繫萬里舟之地。古者大宰府。二百有餘年以來。有周防。有豐府。有薩摩。有平戸等也。今者長崎市舶之利通功易事、誠富國利民。然無用尤多、前年西洋百蠻番船輻湊。非徒無用。而邪說害神國之道。嘗聞。兼好法師曰。唐物者藥ノ外物雖無之於我常足矣。書籍之類。多弘于斯土。則當書寫之而可也。唐船行路難。積無用之物迮地渡將來。嗚呼愚哉。不寶遠物。又不貴難得之貨。於傳有之。我朝三百年前。有見解之高如此者。五雜組說殆近是矣。

海水之外不知還算天乎。還有地乎。今之高處望日似從海中生者。蓋亦遠視云然。如落日之銜山。非眞從山落也。所云海外諸國如琉球日本之類。皆海中非海外也。北方沙漠之外。不知還有海否。若果有之則中國與北虜亦在海中矣。水土合而成地。大段水猶多於土也。

夷狄諸國莫禮義於朝鮮。莫膏腴於交阯。莫悍於韃靼。莫狡於倭奴。莫淳於琉球。莫富於眞臘。其他肥磽不等。柔獷相半。要其叛服不足爲中國之重輕。惟有北虜南倭。震鄰可慮。其次則女直耳。

今按。南倭北虜語亦見武備志。在下文。日本在高麗南。故以日本攻高麗中國患之。曰南倭。三才圖會曰。高麗在其北是也。又日本人渡海入中國。則著閩浙。故謂之南遊。此語見稽古續略及本國僧傳。三才圖會曰。於閩浙爲東北隅。是也。

元之盛時。外夷朝貢者千餘國。可謂窮天極地。罔不賓服。而惟日本崛強不臣。阿剌罕等率師十萬往征。得返者三人耳。國朝洪武初。四夷王會圖共千八百國。即西南夷經哈密而來朝者三十六國。永樂中重譯而至。又十六國。其中如蘇祿蘇門。答剌彭亨。瑣里古里班卒。白葛達。呂宋之屬二十餘國。皆前

（今者長崎云々）寛永十八年鎖國令發布以來諸國の開港を鎖し、長崎一港と定む。

（兼好法師）卜部兼顯の第四子也、後宇多天皇に仕へ天寵厚かりしが帝崩御の後哀悼の餘僧となり風月を樂む正平五年伊賀に寂す、性老莊の學を好み又た文章和歌に秀でき。

（阿剌罕）札剌兒氏元の宿將也、江東宣撫使を授けられ左丞相に拜せらる日本入寇の後軍中に卒す。

（往征）弘安四年五月壹岐に入寇、閏七月戰艦覆没全軍殆んど滅す。

〔太祖〕姓を朱、名を元璋と云ふ、元朝の衰微に乘じ兵を江淮に擧げ、遂に元を滅ぼして、帝位に金陵に卽く、卽ち明第一世皇帝也。
〔日本朝貢云々〕太祖は我國と修交せん爲め屢われに使せり、爰は弘和元年等に我より送りし書、意に滿たずとして却けしことなどを指せるにや
〔孟子〕周の孟軻の撰せる儒書也。
〔趙岐〕後漢長陵の人、議郎に拜せられ孟子章句を著す
〔十三經注疏〕周易尙書毛詩左傳春秋公羊傳春秋穀梁傳周禮儀禮禮記孝經論語孟子爾雅の諸書の注と疏を集めし書也。

代吏册所不載者。漢唐盛時所未有也、然其中惟朝鮮琉球安南、及朵顏三衞等受朝廷册封。貢賦惟謹比於藩臣、其他來則受之、不至亦不責也。可謂最得馭夷之體。太祖之絕日本朝貢。知其狡也。文皇之三犂虜庭。知其必爲邊患也、舍此二者中國可安枕而臥矣。固知創業之主。其明見遠慮。自非尋常所及也。

琉球國小而貧弱。不能自立。雖受中國册封而亦臣服於倭。倭使至者不絕與中國使相錯也。蓋與接壤。攻之甚易。中國豈能越大海而援之哉。其國敬神。以婦人守節者爲尸。謂之女王。世由神選以相代云、自國王以下莫不拜禱。惟謹田將穫必禱於神。神先往採數穗茹之。然後敢穫。不者食之立死。禦史捍患屢顯靈應。中國使者至則女王率其從二三百人。各頂草圈入王宮中視供億廚饌。恐有毒也。諸從皆良家女。神特攝其魂往耳、中國人有代彼治庖者親見神降。其聲嗚嗚如蚊焉、

韃靼之獰獷而敬信佛法。受禮君子。得中國冠裳皆不殺。卽配以部落婦女。見一僧至。輙膜拜頂禮、不敢褻慢。倭奴亦重儒書。信佛法。凡中國經書皆以重價購之。獨無孟子云。有攜其書往者。舟輙覆溺。此亦一奇事也、

今按。日本無孟子云、有攜其書往者。舟輙覆溺者訛言也。日本有孟子千有餘年。古來宗之。乃趙岐注也。其後有十三經注疏。四書集註。及大全等。流行于世。皆自中國航海䌷載而來者也。孰謂無孟子乎。

卷之五

〔竇公〕漢文帝の時の樂人也。

〔顧思遠〕玄同放言に、至ニ百廿ニ而卒とあり。

〔養老年中〕養老四年成る。

〔舍人親王〕天武天皇の第三皇子也、養老二年一品に陞叙、天平七年薨ず淳仁天皇の御字崇道盡敬皇帝の追尊を賜らる。

〔宋史〕宋代三百十七年間の歷史也、元順帝の時脫脫と云へる者總裁となりて是れを編す。

人部一

人壽不レ過ニ百歳ニ數之終也。故過ニ百二十ニ不レ死。謂ニ之失レ歸之妖。然漢竇公年一百八十。晉趙逸二百歳。元魏羅結一百七歳。總ニ三十六曹事ニ精爽不レ衰。至ニ一百二十ニ乃死。洛陽李元爽年百三十六歳。鍾離人顧思遠年一百十二歳。食兼ニ於人。頭有ニ肉角ニ穰城有レ人。二百四十歳。不ニ復食穀。惟飲ニ曾孫婦乳ニ荊州上津鄕人張元始一百一十六歳。膂力過レ人。進レ食不レ異。范明友鮮卑奴二百五十歳。梁鄱陽忠烈王友僧惠照至ニ唐元和中ニ猶存。年二百九十歳。日本紀武内年三百七歳。金完顏氏醫姥年二百許歳。此皆正史所レ載。其它小說若ニ宋卿黨翁之類ニ又不レ勝ニ其數ニ也。

今按。日本書紀三十卷。養老年中。舍人親王奉レ勅撰ニ其所レ紀。起ニ神代ニ至ニ持統天皇ニ我國正史之一也。武内宿禰者孝元天皇之曾孫。景行天皇初年生。仁德天皇七十八年薨。其壽殆三百十餘歳。詳見ニ日本書紀。宋史曰。有ニ大臣ニ號ニ紀武内ニ年三百七歳。宜レ參ニ考上卷引ニ宋史ニ條ニ

卷之七

人部三

五代東丹王李贊華善レ畫。多寫ニ貴人酋長戈矛甲冑之形ニ爲レ世崇尙。可レ見戎狄之中亦有ニ文雅不レ羣者ニ今西北諸狄識レ字者蓋少。無レ論ニ書畫ニ已。高麗日本畫皆精絕。不レ類ニ中國ニ余從ニ番舶ニ購ニ得倭畫數幅ニ多畫ニ人物ニ形狀醜怪如ニ夜叉ニ然。長短大小不レ一。亦不レ知ニ其何名ニ也。畫無ニ皴法ニ但以ニ筆細畫縈迴ニ環繞細如ニ毫髮ニ四周皆番字。不レ可レ識。又有ニ春意便面一摺ニ其衣冠制度甚爲ニ殊詭ニ設レ色亦不レ類ニ中國ニ也。

今按。圖繪寶鑑有ニ日本繪事一。在ニ上卷一。宜ニ參考一。

卷之十

物部二

凡菌爲レ羹。照レ人無レ影者不レ可レ食。夷堅志載。金溪田僕食レ蕈。一家嘔レ血死者六人。惟丘岑幸以痛飲而免。蓋酒能解レ毒也。又嘉定乙亥僧德明遊レ山忽得ニ奇菌一。歸以供レ衆。毒發僧行死者十餘人。德明亟甞レ糞獲レ免。有ニ日本僧定心者一。寧死不レ汚。至ニ膚理拆裂一而死。至レ今菴中藏。有ニ日本度牒一。其僧姓平氏。日本國京東相州行香縣上守鄉。元勝寺僧也。寧死ニ非命一不レ汚ニ其口一。亦庶ニ幾陳仲子之風一矣。

今按。相州無ニ行香縣上守鄉一。他邦無ニ此縣鄉一。文字之訛也。常州行方郡有ニ井上鄉一。蓋是。

卷之十二

物部四

吳越孫妃以レ物施ニ龍興寺一。形如ニ朽木筯一。寺僧不レ知レ寶。此有ニ胡人一曰。此日本龍蕊簪也。以ニ萬二千緡一貿レ之。

卷之十五

事部三

今天下神祠香火之盛莫レ過ニ於關。壯。繆一。而其威靈感應載ニ諸傳記一。及耳目所ニ見聞一者。皆灼有ニ的據一非レ幻也。如ニ福寧州倭亂之先一。神像自動。三日乃止。友人張叔弢(タウ)親見レ之。

〔度牒〕僧侶道士となる政府の允許證也、度は濟度、牒は札の義也、支那にては唐の玄宗天寶六年受度の僧尼に祠部の牒を給したるを初めとし、本邦にては養老四年始めて僧尼の公驗を授く。

〔陳仲子〕齊人也、兄載齊の卿として祿萬鐘を食む、仲子これを不義なりとし、楚に奔り清貧に安んず。

潛確居類書卷之十三區宇部七　四夷一

史官陳仁錫明卿父纂輯

日本（一）即倭奴。于海中諸夷爲最大。地分五畿七道三島。道統州六十六州。統郡五百七十二。又屬國百餘。自北岸去拘邪韓國七千里曰對海。又南千余里曰瀚海。又千餘里曰末盧。又東南陸行五百里曰伊都。又東南百里曰奴國。又東百里曰不彌。又南水行二十日曰投馬。又南水行十日。陸一月曰邪馬。其次曰斯馬。曰巳百支。曰伊邪。曰郡支。曰彌奴。曰好古都。曰不呼。曰姐奴。曰對蘇。曰蘇奴。曰呼邑。曰華奴蘇奴。曰鬼國。曰爲吾。曰鬼奴。曰邪馬。曰躬臣。曰巴利。曰支惟。曰烏奴。皆倭界所盡。其國小者百里。大者不踰五百里。戶少者千。多者不踰二萬。歷漢唐宋元貢獻非一。入寇亦非一。唐咸亨初。惡倭名更名日本。以日出處近也。其人兇狡貪謠。好殺輕生。鯨面文身。去髮惟稍留頂。衣裙襦橫幅。結束相連。不施縫綴。草履僅蔽足指。跟不著地以便跳躍。服染青質白文。男衣過膝。女衣如單被。穿其中以貫頭。皆被髮。跣足。其王至隋時始制冠。以錦綵爲之。飾以金玉。人不盜竊。少爭訟。婚嫁不娶同姓。父母兄弟异處。惟會同男女無別。飲食以手而用籩豆。以蹲跪爲恭敬。遇尊長脫履而過。疾無醫藥。病者裸而卧水濱。杓水淋沐之。面四方竊神虔禱即愈。死有棺無槨。封土作塚。初喪哭泣不食肉飲酒。親戚就尸歌舞爲樂。既葬舉家入水浴潔以祓不祥。兵有矛盾木弓竹矢。以骨爲鏃。灼骨以卜吉凶。信巫覡。好棊博握槊樗蒲之戲。初無文字。唯刻木結繩。後頗重儒書。有好學能屬文者。尤信佛法。有五經書。及佛經白居易集。皆得自中國。土宜五穀而少麥。交易用錢。文曰乾文大寶。樂有國中高麗二部。四時寒暑大類中國。婦人皆披髮。一衣用二三縑。其譯語呼天爲唆喇。地爲只。日爲非祿。月爲讀急。土產金銀。虎珀。水晶。硫黃。水銀。丹土。白珠。青玉。冬青木。多羅木其所製扇盒器皿皆精巧。刀則無人不佩。尤其精者武藝工于刀法鳥銃。雙刀長五尺。鳥銃實銅鑄成。不用木柄。竹弓長八尺。以足

〔六十六州〕壹岐對馬を除きし日本の國數也、大寶の頃五十八國三州なりしが、其後增減あり、天長元年多褹島を廢するに及び六十六國二島となり、後世に至る。

〔咸亨〕前漢高宗の時の年號也、其初めは我朝天智天皇御宇に當る。

〔始制冠〕推古天皇十一年（隋文帝仁壽三年）十二階の冠位を定め給ひしを云ふ。

〔籩豆〕食を盛る具也、籩は竹、豆は木にて作る。

〔樗浦〕骰子を用ひてなす賭博也。

〔五經〕詩、書、春秋、易、禮の五書を云ふ、漢武帝建元五年五經博士を置きしより名出づ。

〔方谷珍〕台州黃巖の民、元末、海に入りて亂を作し遭運を劫掠す、至正二十七年明太祖これを伐ちて降す。
〔張士誠〕泰州白駒場の人也、元至正十三年兵を擧げ、大周と潛稱し、同二十三年遂に自立して吳王と稱し平江に卽位す、同二十六年明師大擧してこれを討ち、翌年遂にこれを擒ふ。
〔周德興〕濠の人、累戰して功あり、左翼大元帥に陞り洪武三年江夏侯に封ぜらる。
〔執事〕鎌倉幕府にては別當の下に在る政所の役人なりしが、室町幕府にては別當を置かず執事を其長官とす。

踏止。稍近而後發。箭鏃爲燕尾形。甚重。發必中。中必倒。用兵雖數人必用埋伏。國主世以王爲姓。號曰天正王。不與國事。世享供奉而已。其謀國掌兵。皆國相與關白主之。文武僚吏皆世其官。賦法三分之一無他徭。工役皆顧募。犯法不論輕重卽時殺之。洪武間。方谷珍張士誠既滅。遺賊豪者悉航海。糾島倭爲難。旋貢旋寇莫測也。後胡惟庸謀逆復糾倭爲援。以故太祖絕之。載在祖訓。而令湯信國經略海上築。登萊至浙瀕海五十九城。周德興築福建海上十六城。民丁四調。一爲戍兵。永樂宣德間稍得休息。正統以後時時竊發。嘉靖間夏言爲科臣。建言禍繇市舶。請罷之。不知市舶之設。有無相易華夷各便。第不當任內臣耳。自市舶罷而利孔在下。番貨至輒爲奸商所負。已而投貴官家。負戾尤甚。番人據近島索逋。毎乏食。出沒爲盜。貴官又恐嚇。官府出兵驅逐。遂激成汪直徐海之變。大亂十餘年。戕江南百萬生靈。費朝廷千萬財用。邇來反幸通。番禁弛。中國人闌出交易。以故夷情得安。然市舶之利。固已坐失之矣。〇始倭之通中國也。云云山城君云云

今按。始倭之通中國也。云云以下與圖書編同。故略之。草履事亦見乎擴錄。服染靑質白文藍染物也。男衣過膝。奴隸人衣制也。貴人垂衣裳。女衣如單被。穿其中以貫頭。婦人行道時所被以蔽面也。穿其中者非。病者裸而就水濱云々卽愈。熱病浴水。國有醫法鍼灸樂等術。無不悉備矣。無醫藥者非。天正王見乎擴錄。國相指將軍家執事。餘皆見前史。

又卷之九十三 服御部六

明霞錦〇杜陽襍編。女王國有明霞錦。練水香麻爲之。光耀芬馥。五色相間而美麗。過中國之錦。又有

〔漢武帝〕前漢第五世の皇帝也、景帝の子にして、名を徹と云ふ。

〔倭錦〕雄略天皇七年百濟の織工定安那を召し、河内國桃原にて錦を織らしめしより、本朝錦を織ること初まる、これを後世唐土より傳來せる錦に對し倭錦又は韓錦と云ふ。

魚油錦。文彩尤昇。入水不濡。以有漁油故也。

麒麟錦○韻府續編。漢武帝時。日本貢麒麟錦十端。金花炫目。

今按。女王國指日本。明霞錦倭錦也。魚油錦出陸奥國。希婦細布之類。麒麟錦見杜詩集註。在上卷。

凡日本古來多錦。如小車之錦倭文。是也。總號倭錦。平安城有錦小路。昔織錦者居之。

異稱日本傳　卷中三　終

異稱日本傳　卷中四

閩書。崇禎四年熊文燦序曰。今日疆場固不專事西北。而兼在東南。閩憑山阻海。上郡接壤。東粤萑苻所家。潢池盜弄往往見告。三山以南列郡星羅于滄波浩淼之側。昔患倭奴云云

今按。閩書者明黃仲昭始創爲之何喬遠成編。志八閩事也。詳見福清何高序。全部摠百五十四卷其間往往記日本事。足識古今事變。故抄出如左。

閩書卷之三

方域志

福州府侯官縣

臥龍山條有安國寺。僞閩時。僧師備自雪峰來居。館徒千人。高麗。日本亦有至者。師備已見雪峰山有箋經臺。宋大中祥符中。僧可度箋楞嚴經於此。夏竦記其事。

又卷之四

方域志

福州府長樂縣

〔閩書〕明の何司空の著、百五十四卷あり。

〔崇禎〕明第十七世毅宗の時の年號也

〔潢池〕潢は說文に積水地也とあり。

〔福州府〕福建省に在り。

〔僞閩〕五代の時閩王延政建寧に據り帝と潜稱せるを云ふ。

〔雪峰山〕福建通志に、距城一百八十里、高四十里、蟠踞候官羅源古田閩清四邑、とあり。

〔楞嚴經〕大佛頂如來密因修証了義諸菩薩萬行首楞嚴經の略、又た首楞嚴經と云ふ、首楞嚴とは三昧の名、萬行の總稱也、十卷あり。

利充山　山有高麗王祖墓。王名宜星。其父元末任宜州判官。生時星墜庭中。因以爲名。父卒高麗王入貢。見而器之。遂從王歸。王後無子。因以爲嗣。乃襲王矣。按高麗王父在元末。王入貢當在皇朝。高麗國朝貢。其王皆易名。與國中本名異。亦不知宜星國史所載是何王也。又高麗道入遼海。不應出閩。抑從日本來耶。

又卷之六

方域志

福州府福清縣

福盧山。係皇明戚繼光大破倭於此。又三十里爲化南化北一里。隋時掠琉球五千戶居此。化里則皇朝大學士葉向高之鄕。

龍江　舊名𨽻文江。後改名龍江。上接龍首河源。下通東南海澨。橋曰龍江。皇朝嘉靖中倭踐閩。大學士葉向高方襁褓。其母夫人擧家遠避。時夫人襁向高行。憊甚。忽有老人謂曰。吾代若襁。先趨而待於龍江之橋。母夫人不聽。其舅曰。事迫矣。且夫當此時也。而爲人襁兒。必長者也。遂解與之。次日至橋。則老人已先在。問姓名。卒不告。竟失之。

今按。葉向高嘗著蒼霞草。第十九卷有日本考。

又卷之七　方域志

泉州府晉江縣

〔高麗〕唐末に至り新羅の國政亂るゝや半島分裂せしが後梁末帝貞明四年王建と云へる者遂に半島を統一し松嶽に都し國を高麗と稱す、後四百五十六年を經て、恭讓王の時朝鮮國に滅さる。

〔戚繼光〕字は元敬登州南の人、嘉靖中世職を嗣ぎて都指揮僉事に擢署せられ、屢征戰に殊功を建つ、後ち劾罷せられ卒す。

〔襁褓〕襁は小兒を背に約する闊八寸長八尺の紐、褓は小兒の被也、依て嬰兒を云ふ。

〔襁〕襁に約して小兒を背負ふ也。

〔龍江〕龍巖州に發して漳州府にて海に入る。

〔泉州府〕福建省に在り。

〔嘉禾〕目出度き穀物を云ふ。

〔福寧州〕福建省に在り。

〔城隍〕城壕也、隍は說文に、城池也有レ水曰レ池、無レ水曰レ隍とあり。

〔府城隍之神〕城の神也、困學紀聞に北齊慕容儼鎭ニ郢城一、城中先有ニ神祠一、俗號ニ城隍神一、則六朝已有レ之と見えたり。

彭湖嶼　萬曆中於レ此屯レ兵。防レ倭也。

又卷之十二

方域志

泉州府同安縣

嘉禾嶼　嶼在ニ海中一。去レ縣七十里在ニ其南一。以ニ常產ニ嘉禾一名。又名ニ厦門一。又名ニ鷺嶼一。今中左所在ニ其中一。防ニ扼海門一險地也。嶼廣袤五十餘里。洪濟山最勝。上有ニ方廣寺一。有ニ雲頂巖一。日出可レ望ニ日本一。

又卷之三十

方域志

福寧州

羅浮山　與ニ水澳山一相連。泊レ船可レ避ニ北風若南風一。石崖齒齒矣。今防レ倭水寨船多集ニ其地一。

又卷之三十二

建置志福州

福州郡城條嘉靖三十八年設ニ倭備一。增ニ置外敵臺二十六一。環レ城三面塹濠廣之延袤三千三百四十六丈有奇。子城之門七。云云

社稷壇　在ニ郡北天王山下一。舊在ニ城南七里並城以西一。云云　國初令ニ府州縣一得レ祀ニ境內山川一。其後又令ニ風雲雷雨幷城隍一合祭壇一設レ位四。中祀ニ風雲雷雨之神一。左祀ニ府境內山川之神一。右祀ニ府城隍之神一。

悉向南。日本琉球浡泥山川之神。祀西隅東向。歲春秋二仲上巳日。布政使率諸司涖祭。如社稷儀。

今按。社稷壇祀我及外國山川之神。其敬至矣。

防倭廣五里。門五。南曰陽春。北曰拱極。東曰鎭海。西曰清江。西南曰平政。水關五。三十七年。增置敵臺十有三。四十年甃濠。

羅源縣柵條嘉靖三十七年。巡撫王忬檄推官徐必進。拓之以防倭。延袤三里許。闢門四。東曰賓日。西曰承金。南曰阜薰。北曰覿易。敵樓四。水關三。萬曆七年。分巡僉事李樂砌以石。

又卷之三十七

建置志

東洋行縣在十五都。嘉靖辛酉倭變。作東洋民乘亂肆掠。功德祠在縣治左。祀都督戚繼光。以平倭功。

又卷之四十

扞圉志

洪武二十年命江夏侯周德興入福建。抽兵防倭。移置衞所當要害處。德興抽兵五千餘人。築城一十六。增設巡簡司四十五。分隸諸衞云云。嘉靖四十二年以閩中連歲苦倭。議設總兵鎭守。春秋二季駐福州。夏冬二季駐鎭東。設五寨欽依把總。云云

嘉靖戊午倭泊浯嶼。入掠興泉漳潮據之。一年廼去。巡撫譚綸總兵戚繼光請復寨舊地。尋復以孤遠

〔社稷〕社は土の神稷は穀の神也、白虎通に、王者所以有社稷何、爲天下求福報功、人非土不立、非穀不食、土地廣博、不可徧敬也、五穀衆多、不可一一而祭也、故封土立社、示有土尊、稷五穀之長、故封稷而祭之也と見えたり。

〔羅源縣〕福建省福州府の北方に在り

〔泉城下〕福建省泉州府の首都泉州也

〔桐城〕安徽省安慶府の北方にある縣の名也。

〔流言云々〕倭寇に羅綺花金及庫銀を賂へりと稱せられ斥けらる。

〔長樂〕福建省福州府の東方に在り。

罷。萬曆三十一年有夷舟。至泉城下不覺。當事者因移建郡東之日。湖是去郡三十里。不禦門戶守堂奧矣。

嘉靖季。海寇許朝光吳平等。據爲巢穴勾倭。內訌罷敝一省數年廼撲滅之。

又卷之四十四

文莅志

虎都鐵木祿。好讀書。與學士大夫遊。至元末爲福建行省郎中。延祐中大臣以浙東倭奴商舶貿易致亂。奏遣宣慰閩浙。撫戢兵民。海陸靜謐。

又卷之四十五

文莅志

阮鶚。桐城人。嘉靖甲辰進士。倭寇東南無寧歲。侍郎趙文華奏請置撫臣於閩從之。於是鶚以遴才得名。自浙江巡撫都御史改福建。福建有巡撫自鶚始。其時軍府草創兵食俱詘。倭以數萬衆攻會城。勢且岌岌。鶚且戰且守。卒以却倭。未幾爲流言所中去。

劉燾字仁甫。天津衛人。嘉靖三十九年代王詢爲巡撫。時倭寇頻歲焚掠。其年三月爲衆數萬繇南臺寇福州。燾素有威名。善騎射。走及奔馬。下令大開城門往來不禁。親率死士千餘邀賊。閩安鎭。身發三矢中其三酋。應弦而斃。賊大奔潰。赴水死者無算。凱旋之日。士民歡迎馬首。無何復出軍禦倭。長樂之北鄉遇賊。臺井山下手射二酋。賊駭潰遁去。以病免。倭復至。閩人思之。

〔政和〕福建省建寧府に在る縣名也。

〔壽寧〕福建省福寧府の西北に在る縣名也。

〔福安〕福建省福寧府の中央に在る縣名也。

〔甲辰〕二十三年也

〔進士〕もと禮記王制に出で、詩賦の試驗に登第せる者を云ふ、日知錄に進士卽擧人中之一科、其試於禮部者人人皆可謂之進士云々とあり。

〔古田〕福建省福州府西北に在る縣の名也。

〔臨桂〕廣西省桂林府に在り。

〔會稽〕浙江省紹興府に在り。

〔隆慶〕明第十二世穆帝の時の年號也

游震得　倭之入寇也。興化府政和壽寧福安寧德等縣皆被陷沒。論者咎震得懦縮不支。

譚綸。字子理。宜黃人。嘉靖甲辰進士。以浙江參政。丁艱家居。廣賊流劫江西。起復勦平之。改福建參政。乞終制。亡何倭陷興化。又起復綸以僉都御史巡撫本省。綸至以精兵千人自隨。斬偕亂衞卒。責諸將必滅賊。先後與都督戚繼光破倭境上。復遣偏師擊古田諸山寇悉平之。凡俘斬一千二百有奇。獲被虜三千餘人。衞所印一十五章。悉以功歸前督府王詢。是時詢方獲罪得藉以釋。晋副都御史復搗滅界前澳玻璃嶺諸孽。及龍巖楊一蘇阿普藍松山等閩中賊悉平。得請補制。後以蘇遼功陞右都御史兵部尚書。卒。贈太子太保。諡襄敏。

殷從儉。字汝中。臨桂人。嘉靖甲辰進士。轉巡撫閩中。在閩歲餘。值倭寇初殄之後。一以休息爲事。方倭至。時籍民丁田。爲戍餉。名曰丁四糧六。每易一撫臣。輙增分數。即歲祲必取盈。從儉悉復原制。省冗費。汰虛兵。

商爲正。字尙德。會稽人。隆慶五年進士。福寧衞軍亂縛指揮。懸旗閉門。變告總兵。某亟謁問計爲正。曰。衞將暴衆。衆不勝恚。犯上淩長。設至於叛。弗可赦。已衆知必死而果於叛。嬰城四掠窮且入海。今乘其初起遣。急卒持牒。數指揮罪而速擊之。若就戮者衆快忿泄意於無辭。因開其告愬必駢首赴訟。然後求首亂者誅之。事即解矣。總兵從其計。已果定。舟師戍海。護倭百餘。械以獻。將騰疏告捷。爲正駭曰。倭非木人。朝遇敵晡而擒之。格鬭移時。我卒無一創者何也。引至庭下問之。皆手擊地具言。本閩人商海所給文引爲將卒所奪。一囚解行纏則片紙名籍具焉。移檄覈之。果信。皆

得釋。

又卷之四十六

文苑志

汪宗元。棗陽人。嘉靖己丑進士。尋轉右布政使。外禦倭寇。內察民瘼。

又卷之四十八

文苑志

卜大同。字吉夫。秀水人。嘉靖十七年進士。授刑部主事。歷湖廣參議。有平苗功。再遷福建巡海副使。輯備倭圖說。畫戰守計。終任無倭患。

陶大年。字長卿。會稽人。嘉靖二十年進士。以南兵部郎出守吉安。轉山東海道副使。倭寇躪閩。閩督臣請增設憲使一員。專海事。疏下吏部。部請移大年。閩中時軍府草創。賊船出沒。大年守福寧。寇遁畢。相拒累月。去攻連江。後發兵援擊。多有斬捕。

邵梗。字良川。仁和人。嘉靖十七年進士。任福建巡海。道駐漳州。時海禁廢弛。奸民闌出入。貫禍召寇。處置失宜。或激而愈亂。梗下令曰。凡賊臨陣捕虜與奸民爲賊。間及違禁。出物麻。有狀者殺無赦。羅織相告言者勿詰。於是反側帖然。益濬隍增陴。選卒厲兵。徙西郊積蓄入城中。使賊無所掠。已未倭寇合兵萬人犯長泰。選火藥手百人躡擊之。賊宵遁。又遣舟師攻海寇于月港銅山濤浦諸處。凡七克。捕斬六百餘。寇白月港掠舟入海將遁。遣義士沈譙率所部兵。與官兵犄角。邀賊舟于東

〔棗陽〕湖北省武昌府に在り。

〔民瘼〕民の病也。

〔吉安〕江西省の西方に在る府名也。

〔連江〕福建省福州府の東方沿岸に在る縣也。

〔仁和〕浙江省杭州府に在り。

〔漳州〕福建省漳州府の府城也。

〔銅山〕福建省漳州府に在り。

磴。以巨艦衝沈之。擒斬二百餘。溺死者無算。寇盜悉平。梗當師旅倥偬之時。持以恬靜。緩刑。薄征。節力。省費。大功竟集。民不知擾。

又卷之四十九

文蒞志

舒春芳。字景仁。鄱陽人。嘉靖二十三年進士。歷本省僉事分巡建寧。揭白鹿洞規於晦庵之堂。拳拳義利之辨。以古君子聲色貨利之戒爲戒。且以勸勉人。建有孝廉楊應詔。志聖賢之學。賓而禮之。建奸民黠盜雄豪。皆帖帖入把束。倭亂海上。建州告警。春芳策馬登陴。出輙載金帛自隨用以犒賞材勇。激厲士氣。鳩工聚鐵爲鳥銃。懸金錢訓練之。中的與金。民競習之。無不技命中者。及倭數萬攻城。多死於銃。城得不破。一日單騎督兵。與倭戰赤岸橋。兵潰僅以身免。陞湖廣參議。

梁士楚。番禺人。以擧人知詔安縣。居官清勤才猷練達。時値倭燔山海寇盜並起。悉心經理調度。兵馬糧餉。船隻相機剿撫。前後督調鄉兵。擒斬倭賊千餘名。撫散山賊鍾旺雷晚香等六千餘人。又擒斬吳平海賊一千八百餘名。撫散餘黨五千餘衆。

又卷之五十二

文蒞志

福州府連江縣

向辰。馬平人。以擧人任。時邑城初陷。倭環其疆。向辰百萬備禦。城壞數十丈。竪木柵補之。一夜而成。

〔師旅〕詩經箋に、五百人爲旅、五旅爲師とありて、もと軍隊編成上の名稱、依て轉じて軍隊を云ふ。

〔倥偬〕忙しき貌也

〔鄱陽〕江西省饒州府に在り。

〔白鹿洞規〕白鹿洞は江西省南康府に在りし南唐の時の學館にして、其洞規は五教の目、爲學の序、修身の要、處事の要、接物の要等を揭ぐ。

〔拳拳〕忠謹の貌也

〔番禺〕廣東省廣州府に在り。

〔馬平〕廣西省柳州府に在り。

賊皆駭。屢攻不能破。邑人德之。前後令有功福清者同辰爲第一。官終布政司參議。

又卷之五十四

文蒞志

盧仲佃。字汝田。東陽人。嘉靖丙辰進士。善爲民建白興除。時倭寇猖獗。有鎭日安平。人居稠衆。故之城守。仲佃與鄉紳柯實卿倡築上司。以軍興之餉議弓兵加征。置官權稅濟陽橋。仲佃再三爲民請命以拾遺。調福安令時縣城新陷。積骸彌野。仲佃改築城壕與民守之。明年倭又薄城。仲佃携三子時時登陴。民僉有固志。擢南刑曹去。泉福之民俱生祠焉。

林咸。番禺人。由舉人爲尤溪教諭。博學善教。有訓尤錄。遷知縣事。嘉靖季。倭破福清南下。悉力攻惠。咸與鄉士夫堅守。亡何倭復由海道入。咸拜誓城隍趨鴨山。征禦之。不克而死。贈府同知。賜祠官一子。

葉春及。字化甫。歸善人。隆慶初。授閩清教諭。未赴詣闕上書三萬餘言。云々在縣四年。擢守資州忌者匿檄令不得赴。拂衣歸。後以薦召用。歷官戶部郎中。復上書請求日本論語孝經。人僉迂焉。所著有絅齋集惠安政等。

又卷之五十六

文蒞志

建寧府下

〔東陽〕浙江省金華府に在り。

〔猖獗〕人の恣横制す可からざるをいふ。

〔拾遺〕王君に仕へ其過を補ふを云ふ史記汲黯傳に、汲黯願出入禁闥、拾遺補闕とあり

〔福清〕福建省福州府の東南岸に面せる縣也。

〔歸善〕廣東省惠州府に在り、

〔論語〕孔子が弟子及び時人に應答し又は弟子相與に言へる語を記せる書なり。

〔孝經〕曾子の門人が孔子の言を錄せる書、一卷あり。

徐栻。熟人。繇進士仕南御史。當南倭北虜猖獗之時。極論處置防禦之法。

又卷之六十一

文蒞志

興化府

陳瑞龍字體乾。潮陽人。守郡時。郡方被倭賊。虜傅城下。瑞龍令無論縉紳齊民家有丁徒。力能勝兵者悉籍記之。手編守陴。又令城下游兵分吏傳箭。晝坐籃輿察之。或徒步。至夜則秉燭爲微行。扶其失陴者。朱應春記其法甚詳也。已母卒官舍。撫按曰。兵革無避禮也。公善爲城守。

盧堯佐。東陽人。嘉靖中訓導郡中。倭堯佐與城守。城陷死之。

又卷之六十二

文蒞志

興化府仙遊縣

陳大有。南海人。蒞任旬餘。倭方破莆。乘勝以四千餘人從寧海間道薄城下。西鄉叛民附之。環城三匝。大有諭衆曰。吾誓與此城存亡。敢逼者斬。於是賑貧窮。分部伍。携一家僮。宿城南樓。晝不傳餐。夜不帖席。時時夜服單騎。或徒步繞陴飭守。外則重脩土城。環以木柵。簡閱精鋭。爲遊兵。巡邏城下。賊來令堅割。土城內左右協擊之。城上佐以矢石。間縋死士乘其怠斫其營。創流星飛鈎之制。而賊之竹牌雲梯轉爲所紲。最後諜知賊造呂公車大車以來。度所必歷處。遣人瘞礧擩捲。或暗洞

〔潮陽〕廣東省潮州府に在る潮陽なるべし。

〔籃輿〕網代籠也、正字通に、公羊傳文公十五年、筍將而來、注、筍者、竹箯、一名編輿、晉以來謂之籃輿とあり。

〔南海〕廣東省廣州府に在り。

〔竹牌〕敵の矢を防ぐ竹束也。

〔雲梯〕高き梯子を具せる車也、六韜に、視城中則有雲梯飛樓とあり。

〔興化府〕福建省の莆田に在り、福州府の南、泉州府の北に當る。

〔仙遊縣〕興化府の西部に在り。

〔華亭〕江蘇省松江府に在り。

〔鋤ㇾ豪翼ㇾ脆〕强きを滅し弱きを助くる也。

〔興國州〕湖北省武昌府に在り。

〔建寧府〕福建省の北部に在り。

〔南靖縣〕漳州府漳州の西に在り。

土穴。車至輙翻踣摧敵。其他所ㇾ有ㇾ長技輙隨方破壞。前後相持五十餘日。亡ㇾ何戚將軍繼光提ニ大兵一至殺ㇾ賊逐ㇾ之。仙邑竟全。兩臺交疏ニ其嬰ㇾ城死守功。仙人爲ニ保障殊勳錄紀ㇾ之。

又卷之六十二

文苑志

興化府仙遊縣

彭應麟。字允禎。華亭人。以ニ南刑部郎一出知ㇾ郡。鋤ㇾ豪翼ㇾ脆。敎ニ質左華一。戢ニ鹽商一。處ニ客兵一。外禦ニ倭寇一。內制ニ山賊一。

吳國倫。字明卿。興國州人。建寧府同知。國倫左ニ建寧一。請ㇾ戎戢ㇾ姦以弭ニ倭亂一。

又卷之六十五

文苑志

漳州府南靖縣

龔有成。嘉定人。繇ニ舉人一任。時値ニ倭饑一寇發。土寇乘ㇾ之大肆ニ刼掠一。有成繕浚ㇾ壕。經ニ營防禦一。前後剿ニ滅溪東小家諸賊一。具著ニ勞績一。

又卷之六十六

文苑志

福寧州福安縣

鍾一元。秀水人。以進士任州。西郭無城。一元營築六百餘丈。爲保障。甫竣工。倭賊至。民殊賴之。

柴應賓。鄞人。以擧人任州。方倭警一有事。卽橫派里甲强索鋪戶吏緣爲奸。應賓一洗其弊。女墻久圮僝工甫就倭忽至。城賴以完。

夏汝礪。融縣人。嘉靖初爲南平敎諭。待士以誠。賢愚僉金擢知南安縣。縣故無城。前一年爲倭所掠。汝礪集民城之。計田出直。計丁出夫。不一載工完。未幾土寇褚鐸作亂。率衆攻城。堅不可入。因督兵擊之九日山下。秩滿擢福寧州知州。復培州城之雉堞。州賴以固。

章文粹。涇人。嘉靖中以貢訓導。問學淵邃善於說詩。値倭警。屬司城。大開城門入避賊之衆。倭來攻城萬數。州守病屬文粹視事。綜畫有方。未幾襯歸諸。奔送數十里。

章弘信。會稽人。由知印丞。隆慶初夏。倭寇村落。督兵生擒十八。馘五級。皆遁去。

陸鵬。慈谿人。嘉靖中任典史。捐俸造橋亭。提兵剿倭。

程箕。績溪人。嘉靖中敎諭。嚴立敎條。學政一新。明年倭入寇。箕守西門。督兵力戰死之。

李堯卿。番禺人。以擧人任。政平訟簡。民安其業。倭犯城。單弱無援。堯卿與參將王夢麟歃血盟衆。賊有張車登陴者。堯卿手刃其六七。有進逃遁之策者。立叱斬之。倂攻三日。城陷死之。贈太僕丞。蔭一子。

林時芳。瀏陽人。以擧人任。時邑方苦倭。州里爲墟。民匿山谷不返。卽返夜驚復潛遁。時芳多方招集。綏撫流散。至於刑誣賴弛顯禁。戮假倭平鄰猾。創殘之後。能使道不拾遺民心快焉。

〔鄞〕浙江省寧波府に在り。

〔南安縣〕福建省泉州府に在り。

〔涇〕安徽省寧國府に在り。

〔慈谿〕浙江省寧波府に在り。

〔績溪〕安徽省寧國府に在り

〔擧人〕鄕試に及第し會試に應ずる者を云ふ、明史選擧志に三年大比、以諸生試之直省、曰鄕試、次年以擧人試之京師、曰會試、とあり。

〔道不拾遺〕庶民道德を守り奸盜絕えたるを云ふ、孔子家語相魯篇に、孔子之爲政也、三月則鬻牛馬者不儲價、賣羔豚者不加飾、男女行者別其塗、道不拾遺、とあり。

又卷之六十八

武軍志

閔賢。光州人。其先閔得。洪武初以功任廣洋衛指揮同知。永樂中有聚者。陞指揮使。賢以成化中改任。嘉靖末有溶者。沈勇多智。善擊劍。倭寇入境。將兵禦戰海上。計十餘年。斬獲千級。功未上。又與倭戰舟山。火攻失利死焉。

徐棠。宿遷人。洪武末。祖榮襲永寧衛百戶。永樂初陞福州左衛右所副千戶。棠以隆慶初勦倭功陞任。今襲。

趙鑾。安東人。其先趙淸。洪武末調本所百戶。以功陞副千戶。至鑾嘉靖中以倭功陞任。今襲。

盧鼎臣。全椒人。其先盧茂。洪武中以功陞右衛指揮僉事。鼎臣嘉靖間以勦倭功陞指揮使。歷官都司參將。今襲。

王灝。龍門人。其先生政。洪武末以功陞水軍左衛中左所副千戶。至友永樂中調福州右衛中左所。嘉靖中灝襲。以倭功陞任。今襲。

夏啓賢。合肥人。其先夏信。洪武中以功陞本衛右所副千戶。景泰初以征沙尤功陞本衛僉事。啓賢萬曆中併祖擒倭功襲授。

戴棟。壽州人。其先戴賓。洪武末以功授本所副千戶。嘉靖末棟以征倭功陞任。今襲。

楊桂。滁州人。祖麟。嘉靖中以征大同功陞本衛指揮使。麟子湧以征倭功陞都指揮僉事。桂隆慶初

〔光州〕直隷省に在り。

〔舟山〕浙江省寧波府の東北に在る群島也・唐の翁山縣宋の昌國縣にして明初昌國縣、昌國衛等となし、後ち定海衛と改む。

〔宿遷〕江蘇省徐州府に在り。

〔安東〕江蘇省淮安府に在り。

〔全椒〕安徽省滁州に在り。

〔龍門〕直隷省宣化府に在り。

〔合肥〕安徽省盧州府に在り。

〔壽州〕安徽省鳳陽府に在り、古の壽春にして、明初に壽春府と云ひ後ち壽州と改む。

陞任、今襲、
劉仲恩、丹徒人。其先劉鑑宣德初以功陞本所副千戶、仲恩嘉靖末以倭功陞任、今襲、
張灼。海鹽人、其先張維洪武初、授河南衞百戶。旣宇襲調福州中衞中所、灼嘉靖末以倭功陞任、今襲。
朱忠。全椒人、其先朱官普保、洪武中授本所百戶。忠嘉靖末以倭功陞任、今襲、
胡禎。來安人、其先胡雄、永樂初功陞河南衞指揮僉事。洪熙元年調福州、宣德初襲授本衞指揮使。今襲。高志守、山後人、其先卜兒罕忽力、正統十四年以護駕功授指揮僉事。天順中倒刺火調本衞、成化間倭襲、賜姓高、嘉靖末有懷德者、禦倭死事、志守用父功陞在、今襲、
戴尙忠、和州人、其先戴順、洪武中以功陞金鄕衞指揮僉事。至宣宣德初調本衞。成化中有昱者。負將略長詩文。任烽火寨把總、建候潮亭以便行旅、嘉靖末有洪者。禦倭死事、加陞一級、萬曆中尙忠降襲。
劉師琦、壽光人。其先劉勝、洪武初以功授楊州衞副千戶。永樂初調本衞。師琦嘉靖中以倭功陞任。今襲。呼鶴來、和州人、其先呼海、洪武末以功陞保定衞副千戶。永樂中調本衞。隆慶初有良明者。偉貌豐頤、孟諸戚繼光奇其狀。令督兵轉餉、無後期、屢於海上奏奇捷。陞指揮同知。發大炮沈巨寇暫一本船。轉戰大捷、陞本省參將。巨寇林鳳據彭湖出沒爲濱海患。良明先登深入。陞廣東副總兵本省都督僉事。築鎭東城。徙廣西大帥、佩征蠻將軍印。平昭州。征府江、賜白金文綺。尋乞歸。卒。予祭葬。贈驃騎將軍上護軍。良明子鶴來任今職。

（丹徒）江蘇省鎭江府に在り。
（宣德）明第五世宣宗の時の年號也。
（來安）安徽省滁州に在り。
（和州）安徽省廬州府の東北に在り。
（成化）明第九世憲宗の時の年號也。
（壽光）山東省青州府に在り。

〔沔陽〕湖北省漢陽府に在る州也。

〔福清縣〕福建省福州府に在り。

〔三十四年云々〕此年倭寇は一度兪大猷に撃退せられしも、再び蘇州、南京其他諸縣を冒せる也。

〔辰〕今の午前八時に當る。

〔申〕今の午後四時に當る。

〔悍驁〕強く猛きを云ふ。

又卷之六十九

武軍志

泉州衞

王鍔。沔陽人。嘉靖中前後擒斬倭賊五百餘人。陞廣東瀧水守備。歷遷福建泉漳水陸參將。截擊倭船二十餘隻。累次殺獲以千計。授昭勇將軍。署都指揮僉事。分守福建南路參將。今襲。

童乾震。含山人。嘉靖中任銅山水寨把總。三十四年倭自福清縣海口登岸。乾震承檄剿捕。與其子養銳千戶白仁義士陳學書等領兵哨禦。屢有斬獲。福清人爲語曰。軍中有一童。倭賊且一空。居旬日。當道檄震爲前鋒。刻期殲之。乾震與養銳仁學書等。奮勇直前抵東嶽山。與賊交戰數十合。斬擒十有一顆。殺傷三十餘。自辰至申殊不却退。約指揮劉玠爲援。而玠兵不至。賊見勢孤。湧出包圍。乾震身被一鎗。猶麾喝戰遂死於陣。而養銳僅身免。事聞命即海口地方立祠祭祀。子孫陞襲一級。養銳遂得襲指揮使。養銳嘗任南日山寨把總。有擊沈海賊功。以老退休。子與藩襲。復以養銳從父戰福清時有擒斬倭。首功未敍。復加陞都指揮同知與藩。

唐海六。合人。永樂中繇平海衞調任。擒斬倭賊有功。子高楨嘉靖季襲。舉武科。亦有擒倭功。今襲。

歐陽深。南安人。嘉靖丁巳以後閩倭。倭害日慘。壬戌復合叛民數萬。發掘墳墓求貲贖屍。人心洶懼。深時以納級。除授本衞提兵。拒賊筍江。從數騎直入賊中。覘其虛實。歸遣人諭以禍福。賊率衆來歸者不絕。深日以私財市牛酒犒賞之。選其悍驁者。置左右不疑。人皆感憤樂爲用。嘉靖四十一年

春率兵攻賊施思備等於東田鄉破走之。遂進剿青陽陳村下衛等處。其夏進攻江一峰諸賊于雙溪。至于尾嶺山徑連破七寨。復進兵英林潘逕等處。擊退李五官。擒殺韋老等。遂追剿水田下浯等處。斬獲倭賊百餘級。乃遣人宣諭謝愛夫黃元爵陳子愛等。俱棄甲來歸。散其黨萬四千餘人。於是賊首蘇光祚康大爾等聞風膺至。獨江一峰李五官等逋據沿海擁衆。尚有萬餘。深遣人撫諭解散。乃督千戶王道。成百戶白希周分道追剿。生擒江一峰李五官南贛老施思備王二千李三直等百一十八人。俘斬泉州市。論功進行都司。其年倭破興化城。盡掠金帛。出據平海衛伺舟出海。軍府檄深應援兵。次東蕭。與賊戰斬首百餘級。乘勝直進。賊來援者衆。深與部士薛天申周岳鎭等血戰益勵。皆死之。事聞。詔立祠歲祀。錄其子孫。令襲。

兪大猷。霍丘人。嘉靖三十一年倭寇浙直。勢甚猖獗。詔命以都御史王忬提督浙福。以大猷爲浙江左參將。是時我中國人王直毛烈亡命入海。爲倭嚮導。大猷與參將湯克寬入海擊直。直遁。復敗以樓船破倭。云云　四十一年福建山海寇無慮數十萬。督撫游震得請以大猷控制全閩江廣湖數道。朝命未下。其冬賊陷興化城。明年春大猷馳至贛。與都督劉顯戚繼光剿滅之。移鎭惠潮。有倭二萬海賊吳平與通。諸山寇亦起。勅江廣福建三鎭撫臣。偕大猷討平之。

鄧巳。沙縣人。歲乙卯浙直倭寇猖獗。奉檄赴援。大戰徐功山普陀蓮花洋羊山陽弋橋等處。斬首千餘級。爲通泰參將王江涇陸涇壩之捷。皆與兪大猷共事。論功相亞。其總兵狼山。方疏置舟師。適倭寇百船突至。城兵不滿四十艘。攻沈倭船無數。倭焚舟登岸。犯白蒲如皐。復奮擊之。擒斬幾盡。

〔膺至〕群り來る也

〔興化城〕福建省興化府の首都にして莆田縣に在り。

〔霍丘〕安徽省に在り。

〔王直〕字は行儉、泰和の人伯貞の子也、永樂二年の進士にして成祖より五朝に歷仕し、少傅兼太子大師兵部尙書に歷任す。

〔樓船〕二階造の舟也、軍事に用ひし例及び遊樂に供せし例あり。

〔沙縣〕福建省延平府に在り。

張養正、坻寶人。先世榮、永樂中調右所百戶。養正嘉靖季承檄戍興化南日寨之青山。倭寇海上、養正甫至戍。即遣其僕守慶還家。趣治纓架爲戰裝具。鬻貲產以募土兵。守慶持架若貲至戍而報。倭至。養正督軍禦之。發五矢中三。倭皆驚遁。詰朝倭黨蜂出猖獗莫過、軍士多以逃匿爲計。養正叱之。即提衆往擊。引弓射之、倭性故悍。雖激矢穿胸曾不退北。反以前驅。衆軍皆遁。僅守慶追隨。且射且卻。賊刃逼身。養正奮撻拔賊刃反斷賊右臂。在傍者追至。守慶抱賊請代。呼天叩地情詞懇切。倭亦不曉所謂。遂斬守慶足。斷其首。併力逐養正。養正傷足及臂。尙張目瞭賊、神色不變。既而首斷。挺身如壁。賊解去其衣甲。居民逃賊栖匿山上者。目睹情狀。爲之慟哭。聲震天地。養正年方十九。娶婦竟三月耳。當道題請陞一級。附祀衛民祠春秋配祭。今世襲副千戶。

張榮（閩書）人。其先世洪武中有陣亡者。封昭信校尉。嘉靖中倭舶艤大岞登岸。人情匈匈。以崇武孤城斗絕。弟欲堅守。榮奮身出禦之。力戰陣亡。賊亦遁去。今襲。

又卷之七十

武軍志

建寧左衛

賴榮貴。本縣人。兄榮華、嘉靖中以義夫長官百戶領里兵。往浙江。征倭、大破倭。斬首十級。收兵而餉、賊奔至。中鳥銃死。榮貴以榮華功蔭襲、

廖安。景東人。洪武中父景山以進象歷陞副千戶因左遷限典刑。至安調衛。五傳至芳。有斬倭功陞

〔寶坻〕直隸省順天府に在り。

〔詰朝〕翌朝也、說文長箋に、詰もと詰に作る、古の哲の字、明の義に借用す、故に明朝を吉朝とす、今俗誤りて詰に作るとあり。

〔建寧〕福建省邵武府に在り。

〔景東〕雲南省に在り。

〔遵化〕直隸省順天府の東に在る州名なり。

〔廬州〕安徽省に屬し江北に在り。

〔正統〕明第六世英宗の時の年號也。

〔縉紳〕高位高官の人を云ふ、漢書郊祀志の顏注に、李奇曰、縉、插也、插笏於紳。紳、大帶也、師古曰、字本作搢、或作薦紳者、亦謂薦笏於紳帶之間。其義同、とあり。

本衞指揮同知未任、今襲。

又卷之七十一

武軍志

邵武衞

王源、遵化人、嘉靖三十八年奉檄守閩安鎭。明年調兵攻剿濂海澳門倭寇。奮勇接戰、衝沈大倭船數隻。追至海嶼海洋。射殺倭將一人。又乘勝追之於小蟹礁。援舟後至、力戰而死。事聞、許其子陞襲二級。今襲。

顧遠、懷遠人、洪武間祖成累功、陞指揮僉事。至遠調本衞。數傳至斌。正統末鄧茂七寇漳閩城。斌時以把總防倭海上。分遣諸軍護海上城寨。自率水軍五百歸擊賊。云云擢福建都指揮僉事。奉勅備倭。斌死、漳人無貴賤樂歸而葬之。

黎春、合肥人、歷守汀漳。擢北路參將。破倭福寧。衝沈其舟。焚溺不計數。擒獲泉賊潘若海江一峰二酋。悉定泉寇。

吳貞、廬州人、父昇。乙未從軍。洪武初陞正千戶。貞替職。洪武二十七年、繇觀海衞調本所。四傳至清。嘉靖三十一年、領兵征倭古縣。生擒賊首馮春陳乾六等。力戰死之。今襲。

又卷之七十六

英舊志縉紳

蔡海永樂十四年任二象山教諭一。倭寇犯レ境。人民伏匿。海獨正レ襟危坐。少頃寇至。海指罵曰。醜徒自當レ稱二貢中原一。敢寇掠耶。賊刺レ之。海罵不レ絶死。

又卷之八十

英舊志　縉紳

項志德。字尙之。云云出爲二四川參議一。云云倭夷入二寇福淸一。城破。志德子爲レ所レ虜。志德方奉レ表入賀。萬壽聞レ之。卽上疏乞レ歸。諸縉紳在二京師一者莫レ不下厚餽二志德一。使上レ歸贖レ兒。悉却不レ受。或謂。君淸尙固。爾愛子被レ虜。贈レ君贖レ之。諸公厚意也。志德曰。吾已不レ仕。諸公憐レ我當レ不レ責レ報。第因レ難爲レ利則不レ敢耳。未レ幾子亦得レ歸。

又卷之八十七

英舊志　縉紳

泉州府晋江縣

王用汲。字明受。爲二郡諸生一。時郡困二倭賊一。所レ召二募客兵一橫二肆市中一。徒飽二饘餉一。會御史按レ泉。用汲入爲二御史一言レ狀。郡守恚レ之曰。何與二諸生一用汲曰。范希文自下做二秀才一時上。便以二天下一己任。矧鄉井事諸生無レ涉耶。

又卷之八十八

英舊志

〔危坐〕正坐する也史記日者傳に、猶レ纓正レ襟危坐と見えたり。

〔王用汲〕晋江の人隆慶二年の進士、推官より戶部員外郎に至りしが、萬曆の間張居正に忤ひて貶せらる、居正の歿後累官して南京刑部尙書の官に進む。

〔饘餉〕饘は米、又は生肉の義、餉は飯也、總じて食物な云ふ。

泉州府南安縣

黃養蒙。字存一。舉進士第。嘉靖戊午倭寇大掠燬廬舍。令夏汝礪主議建城。養蒙力贊之。

歐陽模。字安甫。父深以擒倭陣亡。贈昭毅將軍。見武軍志。

又卷之九十四

英舊志

魏良臣。字以忠。隆慶中舉進士。令崇明邑。有倭警。民復相率爲奸。設法平之。

又卷之一百三

英舊志縉紳

延平府沙縣

謝應元。字長卿。令定安邑。近倭寇時。困城月餘。設法防禦。頼以晏堵。

林騰蛟字士材。補任休寧邑。故無城。會倭夷倡亂。力建議創築。

又卷之一百九

英舊志縉紳

林富。字守仁。正德中以進士。授大理評事。云云　日本貢夷素驕蹇館于郡中。時其廩餼約以禮分。夷悉感服。

又卷之一百二十四

〔延平府〕福建省に在り。

〔隆慶〕明穆宗の時の年號也。

〔晏堵〕禮記月令注に晏安也とあり、安堵に同じ、堵は牆也、人皆牆内に安じて動搖せざる義也、又た史記高祖紀の應劭注には喩四人皆安然如堵牆之不遷動也と見えたり。

〔正德〕明第十一世武宗の時の年號也

〔僊遊城〕仙遊縣の首都仙遊城也、惠安の北八十二支里木蘭溪の左岸に在り。

〔福州府〕福建省に在り。

〔諸生〕學生を云ふ、諸は諸侯に於ける如く一人亦稱し得と通俗編に見えたり。

〔閩縣〕今侯官縣と合し閩侯縣と改む

弁輪志

興化府仙遊縣

龔騰霄。武試三捷。嘉靖四十二年。倭攻僊遊城。騰霄被軍門取用。設策督兵。穿圍救守。城賴保全。

又巻之一百二十六

英舊志韋布

福州府閩縣

鄭靜夫。郡諸生也。少孤家貧。所得束修。悉充母甘旨。嘉靖季邑有倭寇。靜夫負布囊納神主。奉母出逃。至鳳岡山中遇寇。棄其二子獨負母。一賊創靜夫右臂。去之忍痛至水礁橋。既寇大至索金。見囊空併欲殺母。靜夫空手衛母。泣告寇家貧母老。殺我足矣。寇及靜夫右臂。臂落。猶以左肱扶母。尋仆于地。母坐守一夜。靜夫乃死。後賊退族人收骨葬之。而二子不知死所矣。

鄭天挺。邑諸生也。嘉靖間倭寇閩。天挺居邑鳳山。母喪在殯。衆出避賊。天挺獨守柩。賊至索金。天挺拜且哭。貧無金也。所不去者爲母柩耳。寇欲舍之。向導者誘令殺之。并焚其柩。

又巻之一百三十一

閩巻志

福州府閩縣

陳織思。嘉靖末倭寇猝至。郷人皆逃匿。織思父母老疾獨侍不去。寇憐而舍之。舟覆溺百餘人。織思恐

收瘞之。路得遺金。捐入里社弗取也。卒年可百歲。

謝介夫。故掾也。好勇喜俠。嘉靖季倭屯福州南門外。旦暮酒酣皆荷戈寢。介夫結死士。欲夜襲其營。時巡撫意在和倭。乃痛箠之。介夫既出。村野居民雖得賊首級。無敢報矣。其後巡撫被罪去。有司復遣介夫追賊。竟與戰死。而福清有夏叔憤者。亦死之。

陳言。邑掾也。嘉靖季倭寇縱橫。請放被虜八十餘人。憤誅納無策。上便宜七事。啣大府命入壘諭賊。賊皆開心回面。至爲抵頷他賊。以報功上。得掾臬司。以母老竟棄去。

伍氏憲。安平鎮人。嘉靖戊午倭至。扶父際會逃反。遇賊。氏憲長跪曰。勿驚吾父。餘任君欲。賊不聽。刃其父。氏憲挺身殺二賊。又傷數賊。後隊至。落其右手。臥草中。一手荷戈。口喃囈呼父。三日乃絕。至今煙雨中。見道傍有男子荷戈立者。人輒合掌呼孝子而過。

黃元謙。嘉靖間。泉中倭。無良之民。相煽爲盜。永春。南安人。呂尙四陳子洪兄弟等。剽掠鄉吐。而有赤鬚兒者。跳而往從。赤鬚兒。元謙從弟也。元謙伺其潛歸執之。會族告祖。質以大義。投之水中。已出之。所以自預凶具。殯殮之曰。死之爲其作賊。殮之者以我弟也。子洪兄弟聞之。擁衆至執元謙。痛捶之。元謙不服。綑致壘中。露刃殺之。元謙瞋目曰。寧死肯從賊乎。子洪兄弟亦投水中。

邵棟。守禮耽書史。嘉靖中倭陷城。棟出穀賑民。凡遇凶年。減價零糶。貧戶賙助遍於族里。

張德。雅負義氣。膽力過人。嘉靖間倭攻縣城。城中死守相去三越月。倭造天車。高與城等。一倭跳入手舞大刀。衆驚走。德奮勇前斬之。餘倭不知也。相尾闖上者五六人。德手不停刀。尋擲火藥燒之。明日

〔福州〕福建省福州府閩侯縣に在りて閩江岸を北に距る三支里に當る。

〔死士〕決死の士を云ふ。

〔箠〕鞭つ也。

〔首級〕秦の法に敵の一首を斬れば爵一級を得、依て一首を一級と云ひ、遂に首を首級と云ふに至る。

〔零糶〕米の小賣也

〔賙助〕賑はし助くる也。

（汀州府）福建省最西部に位し、西北は江西省瑞金石城の二縣に接す。

（簪珥）珥は耳飾りなり、前漢書東方朔傳に、廼下殿去簪珥とある注に、珥音餌、珠玉飾耳者也と見えたり。

（西門）長汀縣城の西門也、縣城は韓江の上流汀江の右岸に在り。

賊不敢近。止以銃彈遠擊。德不避險。竟爲流彈所斃。倭亦解去。松人祠祀之。

又卷之一百三十二

英舊志閩卷

汀州府長汀縣

戴俛。歲饑稱貸遠糴。煮粥以濟貧人。妻唐脫簪珥佐之。夜半夫婦乘此舍未炊。起假其釜鐺大爲粥。且拂坐滌器。迓來食者。齒序堂上。無敢憍泄。賤者。丐者。病者。散置別屋。恣食不爲量。唐主女若婦。亦無所惰。遠近悅其齋邀。日一再餐。凡數百人兩月乃已。後十一年孫科登第。則有神。授夢於主司曰。此積德家子。宜錄之。又六年倭寇將火其宅。係纍者羣泣曰。幸無焚我施粥公居。倭嘆不止。復書壁戒後至者。卒九十六。唐齊算焉。

陳廷聲。嘉靖辛酉率鄉兵應募。與倭奴力戰于南郊死之。

常白。都掾也。嘉靖辛酉自縋西門下。伏莽射倭。倭斫其首去。

陳主亮。性長厚。好行德。每訓其子澄渙熙。輒歎曰。安得世世無分異耶。古張陳哉。嘉靖壬戌熙死于倭。澄號天咬指出血。遂得熙亂屍中抱歸殯之。賊執熙子。澄與妻黃詣賊。請曰。吾季亡矣。僅此一孤。願以子代。賊義並釋之。澄沒。渙持家乘。大書孝友二字于堂曰。父訓也。吾兄力踐之。吾其忍忘。拮据聯屬。建置祠田。與子姪公財無私。萬曆中三房五世。中外六十餘人。尚未分異。有司旌之。

吳汝韜。嘉靖三十七年倭寇入境。首率子廷爵。姪廷喬。廷蘭。應縣令募。手刃倭首二人。益與子姪力

戰死。縣令聞痛憤。欲身督戰。賊乃懼遁。事寧令旌其一門忠義。給地葬之。

程伯簡、嘉靖丙辰倭萬餘攻堡。伯簡編中伍。選游兵。精壯前採。弱者次之。婦女釁首運石。傳餐立于後。倭更番挑戰七晝夜。伯簡誓衆死守、倭見衆皆稟命伯簡、知其爲魁首也、爭向射之。伯簡殊不撓沮。賊馳二雲車至伐樹杈格。使不得薄堞、遂以草烏弩及銃斃數倭。倭乃宵遁、伯簡死城上。鄉人李春榮等爲立祠。幷共難四十餘人並祀之。

又卷之一百四十

閨閣志

福州府閩縣

趙天麟妻方氏居長灣。嘉靖中倭入長灣。天麟出禦、舉家浮江。賊突至舟、驅天麟父母入水。方與天麟妹坤淑同時投水死。

陳九叙妻吳玉蓮。嘉靖己未爲倭寇所獲、驅之不行。罵不絕口。延頸受刃、賊遍斫其膚去。扶歸逾數月卒。時年二十五。

林師學妻廉氏。與吳玉蓮並時不汙賊死。

許鐸妻吳氏。倭寇長樂。夫婦俱見執。賊挾刃睨鐸。吳抱鐸哭請代。賊遂殺吳。

林廷妻何玉眞。倭夷入寇。父子被執。賊質廷求賂不得。遇害。玉眞遂自殺。

又卷之一百四十一

〔縣令〕縣の知事也　事物紀原に、周官有縣正下大夫、春秋之時縣邑之長曰大夫、秦本紀曰孝公十二年幷諸小鄉聚爲大縣、縣一令、商君列傳曰、鞍令邑聚爲縣、置令丞、則縣令及丞自秦孝公始也、とあり。

〔魁首〕魁は根本也張本と云ふに同じ

〔長樂〕福建省福州府の東岸に在りて閩江口の南に當る

〔泉州府〕福建省の南方に在りて、北は興化府、南は漳州府に隣る。

〔晉江縣〕泉州府の東方に在り。

〔己未〕嘉靖三十八年也。

〔翳莽〕叢の蔭を云ふ。

閨閣志

泉州府晉江縣

諸生王式妻吳氏。嘉靖己未避倭大嶝寨中。寨陷被擄。罵不絕口。賊怒將殺之。有告賊曰。此大家妻可挾以索贖。乃令嫗扶之行。適道旁有泉。深數丈、遂投而死。人名泉曰義泉。

蔡士訓妻洪四娘。年二十二。嘉靖己未避賊大嶝嶼中。反遇賊。賊迫之。行頓坐於地。拾瓦石擊之。厲聲哭罵。賊怒殺。一婢恐之不爲動。已又殺其女及二稚子。愈益哭罵賊。度不可脅乃刺之。中胷洞膈。無血。賊怪駭而去。時同避賊者伏翳莽中。其憐其死。爲埋屍淺沙中。比賊退已四十九日。士訓發殮。顏色如生。

海澄庠生林鳳翔妻葉氏。年二十。夫亡事姑孝謹。嘉靖季倭入寇。葉歸寧、父喪與衆婦避賊涉淺溪。猝遇賊。衆婦被執。葉獨抗不就。賊刃其胷。大罵曰。死賊何不速殺。賊剜唇吻。猶罵不絕。死之。

郭氏守者椿姪孫。氏守以軍舍人死倭。訃至。妻楊欲死矣。以有身強粥。既得誕。所親諷之更嫁。唾不顧也。姑陳氏或微贊之楊久閉視不言。轉面牆目曰、嫗亦出此言耶。陳曰、身故孀婦。何敢敗爾志。立繼可乎。輒曰。婦大與嫗異。嫗子婦。否。居三月竟死。年二十。

歐陽寨、本衛人。嘉靖季倭陷城。寨妻與其姑及其夫弟被掠、而有諸生楊敬中者。其家西貧也。亦在掠中。賊俱閉諸人房室中。寨妻欲死。恐無計出其姑與其夫弟。語敬中曰。願君以婦私我告。賊質婦君曰求與吾姑及吾夫之弟出。曰。且圖金爲贖。賊悅婦艷信而許之。度行既遠。持刀黥面。罵賊不

已。賊怒焚之於火中。

永寧衛前所百戶朱冕妻陳三娘。嘉靖間値倭亂。冕血戰陳亡。三娘年二十七。欲死殉之。念姑在。四十年倭陷永寧城。挾姑逃難。被賊面斫一刀。姑病。孝養湯藥。姑歿。稱貸資葬。

又一百四十二

閨閣志

建寧府建安縣

葉氏姑娘者。江華之妻。而陳應娘。葉弟惠勝妻也。二婦貞潔和順。守貧苦節。嘉靖四十一年十二月。同里人避倭寇匿長潭。値半夜里男。覓刀剃頭。弗得。姑娘乃出諸懐。衆婦問故。姑娘曰。設有急可自裁也。獻歲四日倭圍長潭。執姑娘應娘共繫一繩。姑娘謂應娘曰。我二人今日被虜。縱生還潔亦名汚。不如就斃。應娘唯唯。姑娘探刀懐中則已墮失。於是各抱幼女。連繩跳潭水中。

林壽妻范惠女。嘉靖四十一年臘月與衆婦避倭匿廖墩山塢。城掠山。執惠女及衆婦至水南。獨惠女與抗。或謂。今且順之家中來贖矣。惠女曰。可贖身也可贖辱哉。我則寧死。賊見言殺其幼女以懼之。惠女自如。曰。併及汝矣。曰。固所求也。賊殺之。

又卷之一百四十四

閨閣志

興化府莆田縣

〔陳亡〕陳は陣也、戰死を云ふ。

〔建寧府〕福建省に在り。

〔建安縣〕今甌寧縣と合せ建甌縣と改稱す。

〔臘月〕臘は十二月に行ふ祭の名也、依て十二月を云ふ風俗通に、禮傳曰夏曰嘉平、殷曰清祀、周曰大蜡、漢改曰臘、臘者獵也、因獵取獸、祭先祖也、とあり。

〔莆田縣〕興化府の東方に在り。

嘉靖壬戌、與倭難者四十三人。四十一年倭陷興化城。與難者四十七。其事可表。其志曒如也。庠士林觀頤妻柯氏。倭圍城。語妯娌曰。城陷死矣。賊至被執。至顧提學池亭。賊稍使之。遂赴水死。庠士林須恭妻劉氏。年二十六。姿貌殊麗。賊強使之。劉抗拒、刃剸其腹。同俘者見其屍仆地。猶手執裩襠。賊感動爲之具棺殮。高翰妻翁氏。賊入城。翁抱姑哭。賊殺姑。礪刃翁頸曰。不從砍矣。翁伸頸罵曰。賊奴便砍、何可從也。賊復殺其幼子。而擬以兵。曰砍矣。翁復罵曰。姑死、子死。吾獨生乎。伏姑屍大哭。遂被害。陳復拱妻黃三姐。年十七。垢面糞免污。賊獲逼之。梳洗。黃哭罵。奮前奪刀。賊大怒拽之出。黃且指。且罵。賊擘之。五指俱落、仍刺殺之。同俘者覆以青袍。積薪焚其屍。知縣鄭文煥繼室郭氏。賊執欲污之。厲聲罵。遂遇害。魚臺尹鄭任妻陳氏。賊入城時卽投井。家人救出之。同夫被執。入營奮必死。旣而夫釋。獨留。遂罵賊死。歸殯之。顏色如生。知縣黃約妻高氏。城陷。抗賊死節。庠士蘇繼茂妻唐氏。城圍急。指後庭井中、謂臧獲曰。城陷此吾死所矣。倭入城盡室迸竄。唐氏投井死。鄉貢士方繼曾妻林氏。夫歿貧且無子。忍死養舅。城陷。亟扶舅縋城。舅老悸不能下。乃垢面男髻扶舅歸。伏其夫棺側。賊獲之笞舅。請以身代。賊兩釋之。戒諸黨勿爇其居。庠士周大佐妻游氏。城陷被執。賊責贖金、露刃臨之。游無畏色。值他賊過、欲以金代贖。游罵愈厲。遂被害。庠生鄭東野妻陳氏。年二十五。賊入城。卽投井、家人救出之。同夫被執。罵賊死。庠士林觀文妻陳氏。年二十四。守志。又四年被執不屈。賊生縛而投之火中。庠士鄭肇妻鄒氏。肇被賊執、舅引姑及鄒匿鄰舍。天明賊獲之逼使前。鄒奮曰。死卽死、不可前也。賊怒刀刺洞胸。血被地。猶屹然坐。姑驚號。賊斫姑頰。愈憤罵激

〔曒如〕公明なるを云ふ、論語に曒如也とある注に、明也と見えたり。

〔妯娌〕兄弟の妻也 廣雅に、兄弟之妻相呼曰妯娌と見えたり。

〔裩襠〕股引の類也 裩は褌也、釋名に褌貫也、貫兩脚上繫腰中也とあり襠は下袴也。

〔殮〕斂に同じ、收むる也。

烈。賊刺其喉死。　庠士宋茂淳妻張氏。賊逼之。具脂粉使自飾。張號罵盡碎其具。賊欲刃之。交以頸。乃禁之密室。潛自牖出抱乳兒下井死。　庠士李咨謨妻黃氏。方盛年。賊至。匿其男雞塒中。覆以麥草。與二女赴水死。　州判黃采妾朱氏。張氏。城陷。朱自縊死。張與采被執。賊屢犯不從。執采焚之。張自投烈火死。朱年二十五。張年二十。　李塗妻陳氏。塗嬰疾。陳事姑甚孝。年十九。倭執而逼之。罵賊投水死。　庠士鄭日新妻蕭翠鬟。與其婢同爲賊執。曰。吾必死之。即以所生子付其嫡妻。既至。賊逼之。不從。佯欲殺之。即引頸受刃。如是者三。婢勸之曰。何自苦乃爾。怒罵愈厲。賊刃之。　吳緒妻鄭氏。年二十八。夫亡勵節。城陷死焉。　林文鉞妻王氏。早寡撫孤有孫矣。城陷遇賊。賊欲刃之。孫廷準曰。祖母守節請殺吾。賊殺準。王得釋。準妻黃氏絕城遁入山。聞夫訃不食死。準弟廷瀷以護幼弟出城。爲賊所殺。未娶婦鄭氏適被繫。亦自投白馬潭中。　黃懋志繼室翁氏。莊重美姿。賊見而悅之。給以更衣自縊死。　王大勳妻張氏。年二十二。夫亡姑老。自吃糠覈以米啗姑。遺腹生男。撫教之。賊入城。與婦朱氏扃門燔死。　吳應桓妻陳氏。年二十七。寇獲之。大號曰。一死便休。從汝虜耶。仆地不起。賊斬之。　黃士龍妻陳氏士龍宕也陳爲俛拾仰取生有男女矣。而士龍歿閩舅欲嫁之。涕泣跽庭自明志義。亡何男女夭喪。志節益堅。賊且至城中。屢驚語人曰。吾聞死而無辱。則魂魄不媿。竟被擄赴水死。　郭景順妻何氏。年二十五。猝遇賊。勸之不從。欲兵之。曰。可死不可辱。賊五舟聯爲一舟。縛何氏。出刃摩其頸以示同俘諸婦。時冬方衣絮。絮領故厚。何自抑衣領。伸頸受刃。嫚罵祈死。賊怒殺之。投屍海中。　鄭若濟居江口。妻至江口。妻蕭方入城。若濟遇害訃聞。哭投

〔脂粉〕臙脂と白粉なり。
〔嫡妻〕正妻也、增韻に、正室曰嫡とあり。
〔糠覈〕覈は康煕字典に、音紇與麧同、麥糠中不破者とあり。
〔魂魄〕たましひ也、左傳昭公七年に、子產曰、人生始化曰魄、既生魄、陽曰魂、とあり。
〔不媿〕媿は愧也
〔絮衣〕綿入れ也。

江橋死。　阮有道妻黃細娘居海上。聞倭警。携二子附舟避之。賊追至。赴水死。有道從弟道充妻陳氏。遇賊。亦赴水。年俱二十餘　蕭奇烈。奇照。兄弟也。其二婦皆林氏。同孀共節。倭至城。二婦相語曰。吾二人嫠居十年。不可辱也。當求所以生一孤耳。奇照妻縋兒城外。投城下從之。奇烈妻則毀面易乞人服。從城門出。奇照妻足傷尋卒。奇烈妻被傷仆地。力獲其兒。居月餘亦卒。　雍士憲妻林氏。倭臨城。姑方臥病。林不忍去姑。賊至將殺姑。林請代。賊見林色悅之。免其姑。縛林去至渠河。林紿曰。不須縛也。願自行。賊信而解之。遂投河死。　陳在良妻方邵娘。城陷。與姑若夫出避賊。賊擁至。姑若夫俱相失。賊逼之。邵娘罵賊投河死。　林承芳妻鄭氏遇賊。罵不從。賊怒割其左耳。罵愈厲。復割其右耳。又復罵賊。大怒割鼻遂之。　劉氏二女被倭擄繫。入知府林介祠中。倭飲而酣。遍視繫中。得二女出之。姉妹也。姉年可十七八。有殊姿。倭先取姉。姉厲聲曰。我名家女也。肯汚賊。倭莫知云何。詢舌人其以對。倭微笑。命慰之曰。若從我終當詢父母歸汝耳。女曰。父母未可知。此時尚論歸耶。倭知其不然。以姿故乃撫背作款語狀。女雄視罵益甚。時黃昏。倭方縱火。女即赴火死。已復使其妹。妹大罵曰。我姉爲汝死。我豈汝汚。夷雖不辨其音。然見其色厲甚。露刃脅之。女不爲動。曰。死即死。倭無可爲計。欲強犯之。女知之。紿舌人曰。吾固願從。姉屍未化。吾不忍也。化姉屍從汝矣。倭聞譯言有喜色。身負薪爲諸酋先。火熾女又赴火死。倭恚甚。連劊其膚。殺其被逮四五人以洩怒。　黃河妻陳氏。河陷賊。賊質以索鑼。陳氏遍過宗人無所得。乃自入虜閫請代。告賊曰必放夫出。鑼乃可得。逾旬河不至。賊以爲紿己。引出割其乳立斃。　西門女子者。賊至匿西門涵竇中。賊

〔嫠居〕婦人の獨居するを云ふ。

〔乞人〕乞食也。

〔殊姿〕容姿の秀れしを云ふ。

〔舌人〕通譯也、國語周語に、使舌人體委與之、とある韋注に、舌人能達異方之志、象胥之官也、とあり。

〔化〕火葬する也。

〔吐レ舌〕呆れて言語を發せざる様也

〔三飡〕飡は餐也、三食と云ふに同じ

〔福寧州〕福建省に在りて、北は温州府、南は福州府に隣る。

〔回祿〕左傳昭公十八年に、「子産禳二火于玄冥回祿一」とありて、もと火神を云ひしが、轉じて火災の別稱となれり。

得之、擲地不起、賊怒刺其喉。四五日顏色如生。但頭微俯。如支頤之狀。　二卯女。姉妹也。賊欲汚姉。姉厲聲大罵。値火發。遂赴死。已而意及妹。亦投火從之。賊吐舌去。　溝頭地嫗者賊將殺一男子。嫗固抱持云夫也。賊奪而殺之。嫗拊屍哀血哭。移時亦被害。　北門嫗者。賊殺其姑。抱哭同死。水關旁女子者賊執之。罵賊。賊斷女子舌寸斬焉。　後村婦人者。容色甚盛。不受賊汚。曰。請受刃。賊戀之置之房。乃自垢其面請死甚切。賊不忍。復以火燬面皮。決之如癩。賊舍之。　釘壁女子者。抗賊不屈。賊釘其手足於梅峰寺前之壁間以死。　槐樹下女子。與父同執。賊欲質其父取贖金。女曰。吾女流無能爲也。可放吾父。賊出其父。女知父貧無所取金。遂代父死。　衣紅女子。丘家女也。容色麗都。賊住西洲得之。厲聲罵。賊死。　鄕貢士蔣龍妻林四娘。龍訃偕卒旅邸。四娘年二十二。無子。勵志艱貞。事姑甚孝。時海賊蠭起。扶姑匿山谷間。遇賊驅至水塘。挺身投之。載沈載浮。賊以矛鉤置隄上。氣絕。移時復生數載。姑沒推衣被爲殮。薄形度寒。三飡不給。及卒御史何淳之。禮葬之。

又卷之一百四十五

閨閣志

福寧州寧德縣

知縣左承芳妻陳氏。倭賊陷城。舅姑老病。陳氏以身先後。卒全其命。承芳見縉紳。　痒士龔佐妻左氏。子邦卿甫五歲。佐與父繼亡。內外無靠。左舉三喪。重遭回祿。孤苦酸辛。日夜紡績課邦卿讀書。仕爲訓導。其後遇倭變赴水死。邦卿見縉紳。　痒士林文挺繼室謝氏。二十于歸。甫二年。挺病篤。一子胎髮未

〔日蜻蜓國〕神武紀に「皇輿巡幸、因登腋上嗛間丘、而廻望國狀曰、研哉國之獲矣、雖內木綿之眞迮國、猶知蜻蛉之臀呫焉、由是始有秋津洲之號也」と見えたり。

〔徐禮云々〕徐禮は又、徐市、徐福ともいふ、史記秦始皇本紀に「齊人徐市等上書言、海中有三神山、名曰蓬萊、方丈、瀛洲、仙人居之、請得齋戒與童男女求之、於是遣徐市發童男女數千人、入海求僊人」とあり。

〔課丁〕納税の義務ある者をいふ。

燥、文挺謂曰、能終事乎。謝掩泣剪髮示挺、未幾。倭賊充斥。抱孤子奔竄。凍餒荒山草莽中。竟以撫孤而完節。

嘉靖中與倭難者一十七人。庠士林鴻漸妻崔氏。倭擄不從。見殺身磚地。已而屋燬屍焚。天陰雨。其形宛然著磚。

庠士林執中妻吳氏。執中被擄。吳以身衛執中得脫。吳斷兩截。　庠士林邦京妻陳氏。　崔允約妻薛氏。　崔文泰妻林氏。　陳軨妻黃氏。　徐元呂妻龔氏。俱被倭刃者。　林文奎妻何氏。　陳翰妻林氏。

曹堤妻謝氏。　林若山妻周氏。　林一陽妻阮氏。　林金妻何氏。俱赴水者。　庠士黃熜寡妻林氏赴火死。　林示纘未婚。妻陳淑慈。　彭瀾未婚妻陳愛婉。　湯日進未婚妻陳纖靜。俱自刄以殉。

今按及我　皇綱解紐、足利失威、頑民入中國殺越不止。犯人婦女。瀆我禮義之名。是可忍乎。中國生靈之塗炭忠臣孝子輕命。烈婦之死節令後之人淚濕巾。

又卷之一百四十六

島夷志

日本古倭國。在東海中。縮波而宅。自玄菟樂浪底於徐聞東莞。所通中國處。無慮萬餘里。其地東高西下。勢若蜻蜓。古亦曰蜻蜓國也。國君居山城。以王爲姓。以尊爲號。徐禮齎五百童男女入海。爲秦始皇求仙。無所得。懼不敢歸。避居焉。今其裔也。所統五州七道三島。爲郡五百有奇。皆依水嶼。大者不過中國一村落而已。戶可七萬餘。課丁八十八萬三千有奇。而攝摩。伊勢。若佐。博多。其民相矜以

貿積貨或百萬。和泉一州鼎食。撃鐘謠。俗有中國之風也。薩摩之鄕哥里。其民備殺。重爲邪。獨伊紀之頭陀僧三千八百房。頗鶚猰者殺。而薩摩肥後長門三州之人最喜入寇。諸州郡統於山口豐後出雲三軍門。三軍門相揃剝。因分爲三。而總屬山城君。以後豐後獨强。國人服之。愈於山城。其朝貢始末。具載前史。元時世祖遣黑的趙良弼等諭之不至。使將將十萬兵往征。風覆其舟於蛇海。終元世不相通也。高帝卽位。方國珍張士誠旣誅服。諸豪亡命。往往糾島夷入寇山東旁海諸郡。帝以卽位之二年使行人楊載諭其國王良懷。賜之璽書曰。上帝好生而惡不仁。我中國自趙宋失馭。北夷據之。凡百有心莫不興憤。辛卯以來中原擾々。爾時來寇山東。乘胡虜耳。朕本中國舊家。恥前王之辱。師旅掃蕩垂二十年。遂膺正統。尙者山東來奏。倭兵數寇海邊。生離人妻子。損害物命。故修書特報。兼諭越海之繇。詔書到日。臣則奉表來庭。不則修兵自固。如必爲寇。朕當命舟師。揚航捕絶島徒。直抵王都。生縛而歸。用代天道。以伐不仁。惟王圖之。良懷得之不至。復寇山東。轉掠温台明州傍海民。遂寇福建沿海郡。上復使萊州同知趙秩責讓之。良懷遣其臣僧祖來。隨秩奉表稱臣。上賜文綺帛若僧衣。遣僧仲猷克勤等八人護送還國。賜良懷明曆雜繒。是爲洪武四年。然其人時時剽掠海濱不絶。官軍乏舟不能追擊。五年命浙江福建瀕海諸衞造海舟。德慶侯廖永忠請增造多櫓快舡。來則大船蕩之。快舡逐之。上曰。善。居久之承相胡惟庸。得罪懼誅。欲借倭人爲不軌。惟庸已敗。又久之事覺。上追怒。於是名日本曰倭。下詔切責其君臣暴其過惡天下。著祖訓絶之。而命信國公和江夏侯德興經略海上郡。成祖卽位國王名道義者。獲擾邊魁醜以獻。蒸之海上。上嘉之。四年以俞士吉爲都

〔鼎食〕美味珍膳をいふ、史記主父偃傳に「生不食五鼎、則死烹五鼎」とあり。

〔師旅〕師は二千五百人、旅は五百人卽ち軍隊をいひ、轉じて戰爭の義にいふ、茲は後者の意なり。

〔舟師〕水軍也。

〔洪武四年〕第九十九代後光嚴天皇の御宇にて、足利三代將軍義滿の代也明は太祖の時也。

〔快舡〕速力の早き船をいふ。

〔不軌〕亂をなすことにいふ、漢書卜式傳に「此非人情、不軌之臣、不可以爲化而亂法」とあり。

〔宣德〕明の宣宗の時の年號にて、我が第百一代稱光、後花園兩天皇に亘り、足利六代義教の代也。

〔方物〕其の土地の產物をいふ。

〔抄盜〕掠盜をいふ我が强盜の如し。

〔正統〕明の英宗の時の年號、我が足利義教より義政に至る。

〔成化二年〕明の憲宗の代、我が文正元年にて、足利八代義政の世也。

〔正德中云々〕宋素卿の我が國に來れるは正德二年也。

〔禮部〕禮式、祭祀貢擧等の事を掌る官也。

御史齎賜之龜鈕金印。誥命封爲日本國王。名其國之山曰壽安鎭國。上親製文勒碑其上。遂給勘合百道。令十年一貢。貢道繇寧波。船無過二隻。人無過二百。然倭狡易叛。亦復時時寇略東北邊。顧其時我方招徠海外諸夷。願得賚給互市。後國入貢。亦時踰額。宣德初復增例船三隻。人三百。是倭往往載方物戎器。行海上爲詐欺。得間則張其戎器。不得則陳其方物。無所不得利。至其小小抄盜。或不絶。其主良不知也。要以利給賚互市。其貢常先期至。至正統中。乃入桃渚犯大嵩。海濱人絶苦。於是朝廷命重帥。恒鎭要地以備之。按堵者且十餘年。成化二年復詐來稱貢。遂破大嵩諸處。十一年復使貢。及歸闌賄用金鼓送之出海。隨以砲銃擊。其舟多沈者。正德中鄞人朱縞變姓名爲宋素卿。亡入其國。國王源義澄悅之。遣入貢。素卿與其故族人耳目爲奸利。厚賂閹璫。得賜飛魚服以歸。嘉靖二年其西海道大內誼興國遣僧宗設入貢。居數日。素卿復爲南海道海川高國所遣。與僧瑞佐以來。皆止寧波江下。故事番使止寧波有宴。先至者居上。素卿賄市舶太監義先閱貢宴之坐。上坐。宗設衆不平。攻瑞佐殺之。追逐素卿抵紹興城下。素卿竄入慈谿。縱火大掠。指揮劉錦與戰死。遂蹂躪寧紹間。九年國王源義晴復附琉球使來言。爲素卿乞宥罪。幷請復脩貢獻。是時夏言爲兵科給事中言。夷人仇殺之禍皆起市舶。禮部請罷之。而日本貢使絶矣。十八年復以脩貢請許之。期以十年。人無過百。船無過三。然諸夷嗜中國貨物。至者率遷延不去貢。若人數又恒不如約。是時市舶既罷貨主商家。商率爲奸利虛。値轉鬻貨。其貴不啻千萬。索急則投貴官家。夷人候久不得。頗搆難有所殺傷。貴官家輙出危言。撼當事者。其之使去。而先陰泄之。以爲德。如是者久。夷人大恨言。挾國王

賁而來。不得直。爲歸報。因盤據島中。並海不逞之民。若生計困迫者糾引而歸之。時時寇沿海諸郡矣。朝議置大臣。兼巡淛福海道。詔以巡撫南贛汀漳都御史朱紈爲之。是爲二十五年。紈至則嚴勾連主議。禁犯者戮。無少假。上章鐫暴二三貴官家。浙人口語藉藉。罪及建議主議之臣。而欽人王直者少任俠多略。一時惡少若葉宗滿徐惟學陳東王汝賢王滶等樂與游而激爲直義子。直姦出禁物。歷市西洋諸國。致富不貲。夷人信服之。貨至一主直爲儈。紈禁既嚴。諸奸商藉是益負。倭競責直。直無所出。招亡命千人逃入海。推許二者爲帥。引倭結巢霸衢之雙嶼港圍淛。蠭起之徒益附之。浸淫蠶食海上衆保矣。紈居淛二年。盛集舟師雙嶼。挑之不出。會夜風雨將逸去。紈火攻之。多所斬捕。更令福建都指揮盧鏜搗之。俘斬。溺死者數百人。餘黨迫入福建之浯嶼。紈帥鏜剿平之。躬督兵衆塡塞港口。令不得復入。當鏜破雙嶼時。許二逸不得。王直收合其餘衆。更泊他嶼。而廣東有海賊陳四盼者。自爲一黨。直計殺之。扣關獻捷以求關市。官司弗許。賜米百石而已。直大詬投米海中。益入盜。此時有滿刺加夷者。故商漳州之月港障民。畏紈厲禁不敢與通。捕逐之。夷人憤起格鬭漳人擒焉。紈語鏜及海道副使柯喬。無論夷首從若我民悉殺之。戮其九十六人。謬言於朝。佛郞機夷行刼至漳界。官軍追擊于走馬溪上。擒得者紈以厲禁爲淛中。二三貴官家所不樂。先是言官業請改巡撫爲巡視。以輕紈權。以消淛人觖望之意。至是御史九德劾紈專擅濫殺。詔罷紈下鏜喬吏。遣都給事汝楨卽訊訊報。則滿刺加夷來市。非佛郞機行刼者。專擅濫殺。誠如御史言。詔鏜喬論死繫獄。逮紈。至京師訊之。紈竊仰藥自盡。從此當事者以紈爲戒。三十一年朝廷以王忬提督軍務。巡視福淛許便宜從事。

〔無少假〕少しも假藉するところなしの意なり。

〔王直〕泰和の人、字は行儉、伯貞の子、永樂二年進士となり、庶吉士より修撰に歷す、成祖より五朝に歷仕し、少傅兼太子大師兵部尙書に歷進し、老のため致仕し天順六年卒す、文端と謚せり。

〔佛郞機夷〕ポルトガル人にて支那邊海を侵すものをいふ。

〔觖望之意〕不平に堪へ得られぬ心をいふ。

〔滿刺加夷〕馬來半島の南端にある國人をいふ。

以兪大猷湯克寬爲分守參將。其明年春破其寇於倭閘。二月大猷入烈港。火賊營。王直突圍去。更集餘黨掠嘉定劉家河揚帆西六合。知縣董邦政追及於吳淞。直値探陶港賊。與合遂復大糾入寇。羽書狎至。浙東西及蘇松淮北諸郡。直更造巨艦。連舫榜木爲樓櫓。入倭據薩摩州之松浦津。僞稱徽王。部署宗滿惟學東爲將領。汝賢澂爲腹心。而三十六之夷皆其指使者。倭賊由而驚。每戰赤體舞刀。前不復別生死。大率狡悍善設伏。能以寡擊衆。而内地久寧目不見寇。海艦距濱沿海諸郡僅僅保孤城。賊往來聚散。如入無人之境。是年陷福建之寨與四矣。此時忬請添設海防副總兵總督金山等處。以克寬爲之。出盧鏜爲福建備倭都指揮。詔如忬言。復改忬爲巡撫。其明年正月倭攻嘉定。閩上海。陷嘉善。犯海寧。大掠蘇州。轉掠崇德。上命南京兵部尚書張經不妨原務。兼右副都御史。總督南直隸浙江山東兩廣福建等處。會大同患虜。上復用忬大同。而以李天寵代。是時倭大擾江南。而經故總督兩廣有威。爲諸蠻夷所信服。奏調田東蘭諸州狼土兵。及承順保靖二土司兵備前行。所調兵未至。經持重未即戰。而朝廷遣工部侍郎趙文華出視師。劾經養寇玩賊。逮死西市。是爲嘉靖三十四年。先是徐惟學者貸夷人金。以其姪子海爲質。惟學死。夷求海金。令取償於寇掠。海乃偕辛五郎聚舟。結黨入南畿浙西諸路。是時應天巡撫都御史爲南京戶部右侍郎楊宜。而天寵以京慶罷。代之者胡宗憲也。此時倭大猖獗江以南。其冬復有一百餘人。犯福建莆田縣鎮海鎮東等衛。泉州指揮童乾震所與戰死於海口者也。蓋閩中犯倭自此始。先是賊未寇。輒謬謠曰。某島某倭東南入。久知王直叛。而不知寇來。皆直所坐遣。是歲朝廷立賞格。有擒斬王直者。封伯爵賞萬金。於是遣生員蔣

〔吳淞〕楊子江の河口に在る都邑也。

〔赤體〕裸體に同じ

〔張經〕侯官の人、字は延彝、初め蔡姓を冒す、正德十二年進士となり、累進して右都御史兼兵部右侍郎に至り、嘉靖三十四年五月讒に擄りて獄に投ぜられ、隆慶の初め故官に復す

〔嘉靖三十四年〕我が後奈良天皇の弘治元年にて、足利義輝の代也。

〔[illegible]〕説文に「阤下也」とあり。

〔鎮東〕福建省内にて、閩江の沼岸に在り。

〔泉州〕福建省内にて、鎮東の西南方の海岸にある都邑なり。

洲陳可願克市舶提舉。入海說王直。而是時徐海已擁薩摩洲夷入寇浙中。戰敗於崇德。宗憲復使人賄[illegible]之。海念欲歸。遂[illegible]日[illegible]怨。宗憲使擇便地。自營竟行間。賊黨中復殺海。其年獻俘京師。此時文華復以[illegible]總督尚書[illegible]聞。至上則加文華少保。宗憲以兵部右侍郎兼僉都御史。上則擢宗憲右都御史兼兵部右侍郎云。又一年宗憲計誘王直擒之。上加宗憲太子太保云。直雖已擒。然其餘黨毛烈知無所歸。尚據舟山阻岑港柯梅。遁犯吳越首尾幾閩中。七八歲間所破滅城十餘。掠子女財物不可勝計。官吏軍民[illegible]及俘死。不下數十萬。轉漕軍食。橫賞賜。乾沒入橐中者。費以鉅萬。而東南寓騷動矣。是冬則又犯福州洪塘南臺等處。遂撫都御史阮鶚坐逮繫。罷爲民。三十七年四月辛巳。倭大至犯潮州台溫福建興泉等府。丙申陷福清。殺縣令。劫庫獄。擄男婦千餘。攻惠安。殺知縣林咸。五月戊申入南安。甲戌倭自福清海口出港。參將尹鳳等擊之。斬獲溺死者甚衆。十一月朔日柯梅駕舟出海泊福建浯嶼。復移泉南浯山。造屋以居。福興潮廣間。紛紛以倭寇聞矣。三十八年又大至福建。攻福寧州不克。攻福安壽寧。破之。福興泉漳。無地非倭矣。三十九年破永定城。又破寧德縣。殺參將王夢麒知縣李堯卿。興泉漳三郡城以外皆爲賊藪。貧民無賴者投入賊中。爲之謀主羽翼。掠行人。發墳塚。量其家貲索贖。諸將帥冒功飾敗。賊滿載歸者。指爲逐遁。阻風旋者。指爲邀擊。上下相蒙遂成故事。先後巡撫王詢以避難引疾去。而劉燾貪縱欺誕。厚賄分宜。相言官交章論詆。猶得以風土不便調外矣。是年胡宗憲檄浙江參將戚繼光來援。繼光故訓練義烏兵。有勇可使。則率之來時。倭據寧德之橫嶼沮水爲營。官軍坐守踰年。繼光令軍人持束草填河。進力戰大破之。生擒九百斬首二千

〔太保〕天子を輔翼する最高の官にて三公の一也。
〔[illegible]〕[illegible]の人、官浙江[illegible]副使たり、倭賊に羅掠、花金及び[illegible]を賂うて斥けられ、庶民に歸す。
〔縣令〕一縣を主宰する官也。事物紀原に「周官有縣正下大夫、春秋之時縣邑之[illegible]曰大夫、秦本紀曰、孝公十二年幷諸小鄕聚爲大縣、縣一令、商君列傳曰、[illegible]令、邑聚爲[illegible]、置令丞、則縣令及丞自秦孝公始也、漢百官表曰、縣令長皆秦官、萬戸以上爲令、減萬戸爲長、宋朝會要曰、周衰六國置縣邑、其長稱曰大夫云々」とあり。

六百餘。焚溺死者無算。奪所擄三千七百餘人。乘勝剿福清牛田倭。又大破之。夜搗入興化。連破其六十餘營。而繼光復歸于浙。四十一年八月。新倭大至犯福清羅源連江等縣。殺遊擊將軍倪濠。十一月攻興化府陷之。殺同知奚世亮。據城中者二月。分衆攻陷壽寧政和。其明年巡撫都御史游震得具陳失事狀。上從部議。起丁憂參政譚綸統浙兵三千人往。以副總兵戚繼光統義烏兵一枝。而江西兵一枝。則令撫臣自擇良將。星馳應援。震得尋被論罷。陞綸爲僉都御史代之。二月興化倭結巢崎頭。都指揮歐陽深率兵追剿陷伏。中死之賊乘勝陷平海衞。引舟出海。把總許朝光率輕舟抄之。賊焚舟還屯平海衞。四月繼光與總兵劉顯俞大猷夾攻大破之。斬首二千二百餘級。墮崖溺水死者無算。縱所掠男婦二千餘人。是戰也。賊與顯及大猷對壘日久頗懈。謂繼光遠來。疲之未能軍。而繼光兵至如風火。擒殺無遺。興化人德繼光如親父兄。興化圍解。繼光分前將。趨福州。合擊長樂寇破之。倭屯海上者盡逝。殘寇五百繇北嶺窺霄城。千總胡世驅之。多赴海死。四十三年繼光復擊仙遊殘倭破之。賊趨同安。繼光追至王倉坪。又追及於漳浦之蔡丕嶺。斬首千餘級。其殘寇得脫者流入廣東。令兩廣南贛徵調士兵大集急擊之。賊掠漁舟入海。遇風多覆溺。乃復登岸屯海豐金錫。都總兵俞大猷率兵圍之。相守且二月。賊食盡將遁。報刻副總兵湯克寬設伏待之。擒斬二千餘人。自是倭寇絕。自東南中倭以來十餘年間。生靈之塗炭已極。倭亦大傷至盡島不返。隆慶時海上連寇曾一本等。復稍稍勾引。入犯閩粵。我亦嚴爲備。旋至旋撲。非如嘉靖之季矣。萬曆中一使中貴人搉礦稅。中貴搒求百出。海禁懈弛。市舶縱橫。逐臭之夫。且爭趨爲樂土。又有亡賴如中行說者。陰爲之畫東

〔戚繼光〕登州衞の人、字は元敬、嘉靖中、世職を嗣ぎ、都指揮僉事に擢署せらる、紀效新書、練兵事實談兵等の著あり。

〔海豐〕廣東省内の沿岸に在りて香港と相對す。

〔俞大猷〕晉江の人、字は志輔、嘉靖十四年の武會試に舉す、世職百戸たり、世穆二朝に歷仕して屢戰功を樹て、後府僉書に至り、萬曆元年卒す、左都督を贈り、武襄を謚す。

〔隆慶〕明の穆宗の時の年號、我が永祿十年より元龜三年に至る、足利義昭の代也。

踐朝鮮之郊。南設琉球之販。雖伏梟張。漸窺堂奧。夫志止於剽掠。則疥癬之憂。志不止於剽掠。則膏肓之患矣。貢物曰馬。曰盔。曰鎧。曰劍。曰腰刀。曰鎗。曰塗金裝綵屛風。曰灑金廚子。曰灑金文臺。曰灑金手箱。曰描金粉匣。曰描金筆匣。曰抹金銅提銚。曰灑金木銚角盥。曰貼金扇。曰瑪瑙。曰水晶數珠。曰硫黃。曰蘇木。曰牛皮。

今按。其地東高。西下。勢若蜻蜓。古亦曰蜻蜓國者。日本書紀曰。神日本磐余彥天皇。三十有一年夏四月乙酉朔。皇輿巡幸。因登腋上嗛間丘。而廻望國狀曰。姸哉乎國之獲矣。雖內木綿之眞迮國。猶如蜻蛉之臀呫焉。由是有秋津洲之號也。徐福云云。今其裔也甚妄。詳見上卷。源義澄足利政知之子義政之甥。任征夷大將軍。號法住院。諡與謚與義同。海川海當作細。源義晴義澄之子也。任征夷大將軍。號萬松院。薩摩州之松浦津非也。松浦肥前州郡名。

呂宋條。南倭北虜皆有文字。類鳥跡古篆。意其初有達人制之耶。

琉球條。萬曆二年遣給事中蕭崇業行人謝杰往。皆禮如初然。或倭亂。或以風期待。渡于閩。凡三閱歲乃行。使旋所錄。極其往來險阻艱辛狀。又其國貧無以給使者儀仗。十九年復以嗣封請。于時倭犯朝鮮。海氛不靖。令其使者自齎詔冊歸。使臣罷勿遣。更十餘年朝鮮師解。復堅乞如故事。上嘉其爲不叛之臣復許之。三十二年命兵科給事中夏子陽行人王一禎往。始杰冊封琉球還言。其國有日本館。輩衆數百人待封使之舟轉與市。其人出入擁利刃。琉球心懾之。及子陽還復言。日本近千人。露刃而市。琉球行且折於日本矣。居一年其國王果爲日本所執。且欲代日本求貢於我。中丞丁繼

〔膏肓之患〕其の事に耽り溺れて容易に改め難き患ひをいふ。

〔盔〕正字通に「俗呼首鎧曰盔」とあり、「かぶと」をいふ。

〔灑金〕蒔繪の事をいふなるべし。

〔提銚〕所謂銚子の事也。

〔類鳥跡古篆〕我が國の假名文字を指してその形をいへるなるべし。

〔謝杰〕長樂の人、字は漢甫、萬曆の初め進士となり、更に行人より戶部尙書に累進し、食場を忤す、萬曆三十二年卒す。

〔外貢〕外國のみつぎをいふ。

嗣直指陸夢祖因且疏請緩外貢修我内備。許之。

異稱日本傳 卷中四 終

異稱日本傳　卷中五

圖書編卷之五十　　　　潛初子岳元聲訂　南昌後學章潢本淸甫編

古東夷考略

倭　卽日本

倭在二韓及帶方郡東南大海中一。依二山島一爲レ居。去二樂浪郡境及帶方郡一。並一萬二千里。凡百餘國。其地大較在二會稽東冶之東一。與二朱崖儋耳一相近。統二五畿七道一。凡三千七百七十二鄕。四百一十四驛。八十八萬三千三百二十九課丁。課丁之外不レ可二詳見一。

日本國序

日本在二滇渤之東一。其地形類二琵琶一。東西數千里。南北數百里。九州居レ西爲レ首。肥前肥後豐前豐後筑前筑後日向大隅薩摩　陸奧居レ東爲レ尾。至二山城一旱程七十五日。舊云陸奧爲レ頭。薩摩大隅爲レ尾者非。　山城居レ中。乃彼國之都也。山城以東地方廣邈。雖二倭奴遠服賈者一。不レ能二閱歷而知一。況華人乎。故其島之數可レ考。按二舊圖一。山城以東中爲二近江伊賀尾張三河美濃飛彈信濃上野陸奧一。北邊海爲二但馬丹後若佐加賀越前越後越中出羽甲斐常陸一。南邊海爲二攝摩攝津大和河內遠江駿河伊豆相摩武藏下野一。東北懸海則爲二佐渡一。在レ南懸海則爲二志摩七島上總下總安房一。　而其間廣狹。至下於有レ不レ能レ考者上。今姑據二昔之所一レ聞者一而述レ之。山城之南爲二和泉一。其南海梟泊レ舟者爲二阿賈介撒几（アマカサキ）一。爲二歪打一。阿波爲二于撒几一。爲二天正一者爲二沙界衣（サカイ）一。　又其南爲二沙界之

〔五畿〕山城、大和攝津、河內、和泉をいふ。

〔七道〕東山、東海北陸・南海、西海山陰、山陽をいふ

〔常陸〕恐らくは常陸の誤なるべし。

〔相摩〕相模なるべし。

〔志摩七島〕今の伊豆七島をいふなるべし。

〔丹渡〕丹波の誤りなるべし。

〔素埋〕須磨なるべし。

〔安功州〕淡路をいふなるべし。

〔和奴密知〕今の尾道也。

〔伊岐島〕隱岐をいふ、古事記に「此二洲大八洲の内にて、筑紫國の次に生坐り、伊伎島、亦名天比登都柱云云」と見ゆ。

東南。爲紀伊。東爲三河出海之口。南濱大海。其島爲康大。爲科什麿。爲奴智。紀伊之西爲伊勢。北爲三河。其裏爲腰大。爲阿乃奴子。山城之西爲丹渡。左爲攝津。其裏爲瓢船各。爲阿家世奴辣。素埋。爲男女懷。東南懸海爲安功州。左之西爲播摩。其裏爲那敗。爲合箇世。爲抗茄。爲我這古。爲嚕羅。右爲但馬。右之西爲因幡。丹渡西爲是作。左爲備前。其裏爲亢什麽舵。爲茄賣茄里。爲舍多大。左之西爲備中。出鐵。其裏爲山子加。爲言奴乎賴。爲那什麽。南爲東島。懸海三十里。右亦(爲)因幡。右之西爲伯耆。沿海俱白沙。無舟可泊。其鎮爲阿家殺記。爲倭子介。爲他奴賀知。其北爲竹島。懸海三十里。美作之西爲備後之北境。其裏爲一子該一知。爲于奴鼻。和奴密知爲拿敗。爲赦東大。出雲之南境。其裏爲希備。爲山子介。爲欽子溪。爲斤渧。爲非賴咐。爲尖喇哈咐。爲也生忠。爲洛和奴尖記。其北爲隱岐。懸海三百五十里。備後之西爲安藝。其裏爲翁家搭日毘敗。爲法子加一枝。爲窟撒子。爲谷也。爲他加歪喇。其南爲宮岳。懸海三十里。出雲之西爲石見。出銀與銅。其裏爲南高番馬。爲番瑪搭。爲歌爲撮奴市。爲有奴子。北至海三千里。安藝石見之西爲山口國。即古之周防州也。橫直二百四十里。其南邊海之裏爲翁哥里。爲密火逝里。爲東大。爲陀奴米。爲哈迷奴尖記。爲奴羅市米。其北邊海之裏爲斯殺。爲賣抵哈打。爲夜市。爲高奴鳥刺。北至三島。海面三百五十里。山口之西爲長門。橫直皆二日程。裏爲花浦。爲黃州。爲番關渡在焉。記。爲倭委。北至三島。懸海三百五十里。其西早閩爲阿介馬失記。抽分司投於此。渡此而西爲豐前。橫五百里。直二四百里。其裏爲可苦蹋。爲嘛介襪。次爲大義地。爲野慢茄。爲阿世夜。爲幕浛。爲一賣。其南爲豐後。橫直皆六百里。其裏爲福乃。爲倭凡奴法賣。爲鎖孤舟。爲由奴鳥刺。爲撒一恭。爲鳥四恭。又其南爲日向。橫直皆三百六十里。其裏爲多故奴甫浛。豐前之西北爲筑前。橫六百五十里。直四百里。其奧爲石勢。爲加菩里。爲加打野馬。爲多賣里。爲一萬字。爲奴打。爲世加。爲經守里。爲多羅。爲密那多。爲法哈璧。即博多之別名也。其北離伊岐島海面五百里。西南爲筑後。橫直皆二百五十里。筑後之南爲大隅。其南濱海之奧爲什麽鳥思

〔撒介烏刺〕松浦なり。

〔彭湖島〕明史臺灣紀略に「澎湖島舊屬同安縣、明季因地居海中、人民散處、催科所不及、乃議棄之、後內地苦徭役、往々逃于其中、而同安漳州之民爲最多、及紅毛入臺灣、并其地有之、而鄭成功父子、復相繼據險、恃此爲臺灣門戸」とあり

〔溫州〕浙江省内の沿岸にて、寧波の西南方に當る。

〔舟山〕上海沖にある島の名也。

〔定海〕杭州灣内の島にある都邑なり

迷。今之人訛傳爲懸海。懸海乃大漁州也。　大隅之西爲薩摩。橫直皆三百六十里。其奥爲暗孛喇。爲起麻子
大隅與日向薩摩等連壤。名爲九州。　記。爲羊埋高。爲康國什麼。爲龍里。爲拖馬
里。爲强頭馬里。爲鴨哥里。爲　豐後東南懸海爲土佐。爲伊豫。爲河波。阿波相近懸海爲炎路。土佐豐
年市米。爲仙臺。爲審孛署。
後之間爲佐加關。土佐至佐加關。海面一百八十里。　薩摩之北爲肥後。橫直皆五百里。其奥爲　牙子世六。
佐加關至豐後。海面七十里　爲阿麻國撒。爲昏陀。爲一國撒介
鳥刺。爲開懷世。又其北爲肥前。橫直皆五百里。其奥爲鉄來。爲吉奴氣子。爲法司奴一計。爲客舍。其内沿
利。爲達加什。　湖泊舟交易之處。爲倭慶喇。爲知十歪。爲法一溪。爲夜間迷。爲坐迷
子。爲迷坐骨知。爲一掃骨捕。爲愛奴乎喇。爲世子。爲迷古里。爲　肥前西懸海爲平戸。東西海面十里。西
失撒。爲喃哥牙。爲雄婆哥。爲松本。一名爲馬子喇。爲法麻撒几。　北至博多海面
四百五　五山懸海相錯而生其中。其奥可泊。乃日本西境之盡處也。過此西行連五六
十里。平戸之西爲五島。日。四望無山。直抵陳錢壁下。此島與薩摩相去一千五百里。與肥前相去四百
三十里。與平戸相去一百五十里。五島至山口必由平戸經過。其奥爲乃　北爲多藝。爲伊岐。橫直皆七十
路。爲倭齊家。爲衣屋奴密。爲通記。爲達奴烏喇。爲烏苦。爲話哈嗟。　里。至對馬
島海面　爲對馬島。橫三百里。其南奥爲哥爲廿大密。東乃爲排乃哥世。西北爲堆　其西北至高麗也。必
五百里。　沙几。爲山谷。爲撒思乃。爲知六麻。爲彌他。北爲倭奴烏喇。
由對馬島開洋。各島之人俱至堆沙几撒思。乃山谷三奥開洋。至高麗之則失多。順風一日約五百里。南至琉球也必由薩摩州開洋。順風七日。
其貢使之來必由博多開洋。歷五島而入中國。因造舟水手俱在博多故也。貢船回則徑收長門。因
抽分司官在焉故也。若其入寇則隨風所之。東北風猛則由薩摩。或由五島。至大小琉球而視風之
變遷。北多則犯廣東。東多則犯福建。　彭湖島分䑸。或之泉州等處。或之梅花所長樂縣等處。　若正東風猛則必由五島歷天堂
官渡水而視風之變遷。東北多則至烏沙門分䑸。或過韭山海閘門而犯溫州。或由舟山之南而犯
定海。經大猫洋金堂岐門入犯象山奉化。由東西厨入湖頭渡犯昌國。入石浦關犯台州。入桃渚海門松門諸港。　正東風多則至李西
壁下陳錢分䑸。或由洋山之南而犯臨觀。過漁山兩頭相姑山。入蟶浦。則犯給與之臨山三山。過霍山洋五嶼烈表平石。則犯寧波之龍山觀海。犯錢塘。

〔橈〕博雅に「楫謂之橈」ことあり、かぢ也。

〔山口長子〕大内義隆を指す。

〔陶殿云々〕日本人物史に「陶晴賢、初名隆房、後剃髮號全姜、世仕大內家爲長臣、最擅威權矣、大內義隆、武事漸施奢侈日長、晴賢屢諫、爭而不聽、云云、於是晴賢、忽挾自立之思、襲山口、義隆不背戰、逃于長州、而自殺焉云々」とあり。

過大小衢徐公入盤。或由洋山之北而犯青南。過馬蹟潭而西。犯大倉。過竹箔而西北或過南沙而入大江。過孝
子門爛山則犯省城。
山入蘇角嘴渉谷村狼福山。而犯爪儀常鎮。若在大洋而風歘東南也、則犯淮陽。犯登萊。過步州洋亂沙入鹽城口則犯海安。入廟港灣則犯揚州南通。而北
則犯登萊。若在五島開洋而南風方猛則趨遼陽趨天津。大抵倭船之來。恒在清明之後。前乎此風候不
常屆期。方有東北風。多日而不變也。過五月風自南來。倭不利於行矣。重陽後風亦有東北者。過
十日(必究日作月)風自西北來。亦非倭所利矣。故防春者以三四五月為大汛。九十月為小汛。其
停橈之處。焚劫之權。若倭得而主之。而其帆檣所向一視乎風。實有天意存乎其間。倭不得而主之
也。向之入寇者。薩摩肥後長門三州之人居多。其次則大隅筑前筑後博多日向攝津州紀伊種島。而豐
前豐後和泉之人亦間有之。乃(因)間之(必究無之字)商于薩摩而附行者也。而日本之民有貧有富。如攝摩
伊勢若佐博多。其人以商為業。其地方街巷風景宛如中華。富者各數千家有積貨至百萬者。又如和泉一州富者八萬戶。皆居積貨殖。有淑有慝。如薩摩之鷄哥里。方數十里。其邑長安慶能納民於
執打。無一人為盗。又如富島人。不嗜殺人。有不平事。但詣神廟罰錢。又如紀伊之頭陀僧。三千八百房專習武藝。殺人而不犯中國。富而淑者或登貢艘而來。或登商
舶而來。凡在寇艘皆貧與為惡者也。山城君號令不行。徒出空名於上。非若我中國禮樂征伐自天
子出大一統之治也。山口豐後出雲開三軍門。(如中國總督府之義)各以大權相吞噬。今惟豐後尚存。亦不過兼
幷肥前等六島而已。(肥前肥後筑前筑後豐前豐後)山口出雲以貪滅亡(山口原幷國十二。曰石見長門安藝備前備後備中出雲伯岐丹後因幡但馬。後出雲奪歸其地。山口長子
死焉其君亦為陶殿所殺。豐後君以其弟攝山口事。吞安藝。安藝殺之。嘉靖三十六年山口無君。豐後獨稱雄焉。山城君金印勘合久為山口所有。向來入貢俱山口自主。山城惟出名而已。陶殿之亂。宮殿勘合俱焚。
金印亦損一角。不知所歸。貢自此絕矣。)欲望彼國之約束諸夷斷斷乎不能也。愚聞之軍志曰。無恃其不來。而恃吾有
以待之。斯言也。禦倭之道備矣。昔自今大修祖宗舊制。禁戢沿海。接引之人擇守令。阜民生。儲餽糧
練精銳。寇來則殺之。入貢則撫之。通商則紀之。如是而亂有不息者吾未之信也。

今按。漳木清所記地名錯誤。播磨作攝摩、淡路作炎路之類是也、華人不通方音、故寄語之訛多。又登壇必究第二十二卷。有倭國事略。與圖書編日本國序頗同。山城者謂天子也、自桓武天皇世都山城國平安城、故明人稱之云爾。宮島嚴島也。島有伊都岐島大明神。推古天皇時降于此地。威靈甚新。紀伊之頭陀僧三千八百房、蓋謂根來寺也。按。僧尼令曰、習讀兵書。殺人奸盗依法律付官司科罪。王室衰此法不行。諸寺僧習武藝殺人。豐臣欲施一萬石于根來寺息其兵、而僧等不從。遂一炬焦土。山口大内氏、豐後大友、出雲尼子氏、山口長子死、九州軍記曰、大内義隆無子、養土佐一條房冬之子。號新介。天文十一年出雲之戰死。陶殿陶尾張守晴賢。初大内氏。屬足利年年強固。至義隆取諸州居周防山口。天文二十年九月一日、其臣陶作亂弑義隆、迎豐後大友義鎭弟義長爲主。自擅國事。後爲安藝人毛利元就族滅、嘉靖三十六年當我朝後奈良院弘治三年。尼子佐佐木之一族、世居出雲富田城。永祿六年毛利元就闘之尼子出奔、

今按。此圖與三才圖會日本國圖大抵同而加詳。國名倒置多訛昔大僧正行基作日本國圖。載在于藤原公賢拾芥抄。其圖不差云。行基亦著國府記六卷。古者民部省有圖帳數百卷。又有六十餘州風土記。志國郡鄉里山川名義物產。

日本國考在回回館。今移于此以便覽。

日本即倭奴國。在東南大海中。依倚山谷。高麗在其北。新羅百濟在其西北。地勢東高。西下。於閩浙爲東北隅。王以王爲姓。文武僚佐皆世其官。有五畿七道。各有所屬州。州以統郡。其附庸國凡百餘。自北岸去拘邪韓國七千里。曰對海國。又南渡一海千里。曰瀚海國。又渡一海千餘里。曰末羅國。

〔根來寺〕紀伊國那賀郡にあり、大傳法院とも號す、眞言宗新義派に屬す

〔大僧正行基〕元亨釋書に「釋行基は世の姓は高志氏にて、和泉國大鳥郡の人、百濟國王の後胤なり、天智帝七年に誕生せらる云々、聖武帝は甚しく敬重し賜ひ、天平十七年に大僧正となれり、云々同じき二十一年二月二日になれば、菅原寺の東南院に於て右脇にして寂せり、年は八十二也」とあり。

〔對海國〕對馬也。

日本國圖
西南至福建界
種島
女島
浙江
西
淮揚
山東
遼東
北至朝鮮國界
倭高家小頭目住此
乃路
關王祠
王山相錯而生總名五島
領二郡多藝州
阿奴烏喇
你打

南至大ニ

硫黄山

名火魚

七島

日向州領五郡

多談奴南治

大隅州領五郡

男島

鳥若

赤爛關

筑後州領十二州

筑前州領十五郡

北至月ニ

琉球國
氏國界
領二十郡 伊豫州
領九郡 阿波州
領六郡 土佐州
領十三郡 伊賀州
領四郡
日本國君所居 山城州
壽安鎮
丹波州 領七郡
領八郡 備前州
領九郡 備中州
領十六郡
攝津州 領十三郡
領十五郡
領二十四郡
領十八郡
領六郡
領四郡
領八郡
石見州 領六郡
出雲州 領四郡
領四郡 安藝州
領六郡 長門州
周防州
三島
隱岐山 領四郡

東南至東女國界
東
紀伊州 領十郡
和泉州 領四郡
大和州
志摩州 領二郡
河内州 領十三郡
伊勢州
駿河州
遠江州 領五郡
三河州 領五郡
伊豆州 領三郡
相摩州 領八郡
白沙地 此地出金
陸奥州 領九郡
下総州 領十二郡
甲斐州 領四郡
下野州 領六郡
尾張州 領二郡
武蔵州 領十四郡
安房州 領四郡
上総州 領四郡
上野州 領九郡
信濃州 領十郡
飛騨州 領三郡
越後州 領七郡
越中州 領四郡
越前州 領十二郡
能登州 領三郡
常陸州 領十二郡
出羽州 領十二郡
佐渡州 領二郡
東北至毛人國界

東南陸行五百里。曰伊都國。又東南百里曰奴國。又東百里曰不彌國。又南水行二十日。曰投馬國。又南水行十日。陸行一月。曰邪馬一國。其次曰斯馬國。曰已百支國。曰伊邪國。曰郡支國。曰彌奴國。曰好古都國。曰不呼國。曰姐奴國。曰對蘇國。曰蘇奴國。曰呼邑國。曰華奴蘇奴國。曰呼邑國。曰鬼國。曰鬼奴國。曰邪馬國。曰躬臣國。曰巴利國。曰支惟國。曰烏奴國。皆附倭境。其國小者百里。大者不過五百里。戸少者千餘。多不過一二萬。自漢武帝滅朝鮮譯通漢者三十許國。皆稱王。其大倭王居邪馬臺國。即邪摩維（ヤマト）。是已光武中元初。始來朝貢。後國亂國人立其女子曰卑彌呼。爲王。鬼彌死。其宗女壹與繼之後復立男王。並受中國爵命。歷魏晉隋唐皆來貢。稍習夏音。唐咸亨初。惡倭名更號日本。自以其國近日所出故名。或曰。日本故小國。爲倭所併。因冒其號焉。宋雍熙後累來朝貢。熙寧以後來者皆僧也。元至元初。遣使招諭不至。因命使由高麗且介高麗王植。致書諭意。皆不報。至十七年春二月。顧殺國使杜世忠等。世祖怒。於是召范文虎。議招募士卒伐之。踰年遂率兵十萬以往。至五龍山暴風破舟。文虎等擇好舟乘走。棄餘衆山下。衆推張百戸爲主將。伐木造舟。會倭來戰盡殲焉。逃歸者纔三人。終元之世使竟不至。以上俱寰宇一統等志及元史 本朝洪武二年命臣趙秩往諭。其國王良懷遣使臣僧祖朝貢。自後歲一來後屢入寇。且與胡惟庸通謀。惡之著爲訓。絶不與通。爰命信國公湯和經略沿海。自遼左至徐閩甚具。詳具沿海圖志。永樂以來嘗遣太監鄭和招諭諸夷。日本首先納款。乃給勘合。百道許其通貢。仍非時寇至。十九年大寇遼東等處。總兵官劉江盡殲之於望海堝。海氛始熄。百八十年海上恬晏。姦商造孽。乘時跳梁。大掠沿海内地。自壬子至戊午。幾至滔天。幸而渠魁授首。兇燄頓衰。雖間或弗靖然要領絶矣。故永安長算其猶須詳議乎。

〔伊邪國〕伊勢也。

〔彌奴〕美濃をいふ

〔宋〕支那王朝の一也、遼の趙匡胤後周恭帝の禪を受け國を宋と號し中國を統一す、後欽宗に至りて、金切りに北邊を掠め皇紀千七百八十四年遂に國都汴京を陷れ南京と稱す、後金と和したるも蒙古起り金を亡ぼし、宋も亦滅さる、我が弘安二年に當る

〔雍熙〕宋二世太宗の時の年號、我が花山天皇の頃也。

〔高麗王植〕至元年間初期は二十四世元宗、其の十五年よりは二十五世忠烈王也。

〔五龍山〕肥前國北松浦郡鷹島村にあり、弘安の役元兵の據りし處也。

今按。王以王爲姓者非也。此亦猶北史隋唐書倭王姓阿每之類。我天子開闢以來天照大神之孫而未雜異姓。故不稱姓。考功胙土命氏者衆子諸臣之制也。雖天子之子有王號制存焉。繼嗣令曰。凡皇兄弟皇子皆爲親王。女帝子亦同。以外並爲諸王。自親王五世雖得王名不在皇親之限。三代實錄曰。謹撿天長九年十二月十五日詔書稱。夫王氏者王號止於五世。資蔭不過六世。典制斯在。沿來淩久。是以六七世賜姓。及嵯峨天皇諸子繼體外賜姓。令列於人臣勤勞于王室也。其後四世賜姓以爲例。近代貞成親王之後號親王。滿仁親王之裔任神祇伯者稱王氏。此外無王氏。高麗王楨。楨當作禎。高麗元宗順孝王諱禎。字日新。當元至元中。

海寇圖說

始倭之通中國也。實自遼東。由六朝及今。乃從南道浮海。率自溫州寧波以入。風東北迅。自彼來此。約可四五日程。而西風迅自此之彼。約亦四五日程。蓋其去遼此遠而去閩浙甚邇。右（若）盡其國界則東西也長。行可四五月。南北也短。行三月而皆極於海。其西北至高麗也必由對馬島開洋。順風僅一日二日。南至琉球也必由薩摩州開洋。順風七月。其貢使之來必由博多開洋。歷五島而入中國。以造舟水手俱在博多故也。貢船回則徑收長門。抽分司官在焉故也。若其入寇則隨風所之。東北風猛則由薩摩或五島至大小琉球。而仍視風之變遷。北多則犯廣。東多則犯福建。彭湖島分䑸。或之泉州等處。或之梅花所長樂縣等處。若正東風猛則必由五島歷天堂官渡水。而視風之變遷。東北多則至烏沙門分䑸。或過韭山海閘門而犯溫州。或由舟山之南而犯定海。輕大猫洋入金口門犯象山奉化。由東西廚入湖頭渡犯昌國。入石浦關犯台州。入桃渚海門松門諸港正東多則至李西嶴壁下陳錢分䑸。或由洋山之南而犯臨觀。過漁山兩頭相三姑山入

〔繼嗣令〕令第十三に規定さる、皇室繼嗣に關する令也凡四條あり。

〔天長九年云々〕四十七代淳和天皇の詔書也。

〔六朝〕支那後漢の滅亡以後隋の統一まで、建業卽ち今の南京に都せし、吳、東晉、宋、齊、梁、陳の稱也。

〔溫州〕支那浙江省の東南部にあり。室町時代の日明交通の要地たり。

〔寧波〕室町時代倭寇の屢侵掠せし處にて、支那浙江省の東北部にあり。

〔台州〕天台山の所在地として有名にて、支那浙江省の南部にあり。

〔紹興〕支那江浙省の南部にあり、杭州灣に臨む、寧波と杭州の中間に位せり。

〔太倉〕江蘇省の南西部にあり。

〔淮安〕江蘇省北東部にあり。

〔清明〕清くして明かなる義にて、二十四氣の一、春分より後十五日目を云へり。

〔重陽〕陰曆九月九日を云ふ、九は陽數なれば、九九と重ぬる故にかく云へり、二十四氣の寒露と霜降の間にあり。

〔笠前、笠後〕筑前筑後也。

蠊浦。則犯紹興之臨山三山。過霍山洋五嶼烈表。不右。則犯寧波之龍山觀海。犯錢塘。過大小衢徐公入鱉子門赭山則薄省城。或由洋山之北而犯青村南匯。過馬頭潭而西犯太倉。過馬蹟潭而西北。或過南沙而入大江。過茶山而入吳角山而犯爪儀常。在大洋而風歘東南也則犯淮陽登萊。過步州洋亂沙入鹽城口。則犯淮安。入廟灣港。則犯楊州兩越。而北則犯登萊。若在五島開洋而南風方猛則趨遼陽趨天津。大抵倭舶之來。恒在清明之後。前乎此風候不常。雖準定清明後方多東北風。且積久不變。過五月風自南來。不利於行矣。重陽後風亦有東北者。過十月風自西北來亦非所利。故防海者以三四五月爲大汛。九月十月爲小汛。其停橈之處。焚刼之權雖曰在倭。而其帆檣所向一視乎風。實有天意。有備者率勝。前此入寇者多薩摩。肥後。長門三州之人。其次則大隅。笠前。笠後。博多。日向。攝摩。津州。紀祇。種島。而豐前。豐後。和泉之人亦間有之。蓋因商於薩摩而附行者。蓋日本之民有貧有富。有淑有慝。富而淑者或因貢舶。或因商舶而來。其在寇舶率皆貧而惡者。且山城君號令久不行於諸島。而山口。豐後。出雲又各專一軍。如中國總督府之義相呑噬。今惟豐後強。頗併肥前等六島而有之。山口。出雲俱以貪滅亡。倭蓋無常尊定主矣。山城君倭王別號也。此段乃崑山鄭若曾所聞於蔣州夷菜庭云。

今按。攝摩津州紀祇訛也。當作播磨攝津紀伊。今惟豐後強。頗併肥前等六島而有之。六島名。見前日本國序。弘治永祿之間。大友宗麟居豐後府内。威震九州。其所有之地凡六州。然無道國日削。詳在治亂記等書。

海中泊舟

自潭岸山以北以西之海水淺多硬。大船誤閣則破壞。且無避風。安群兵船至。彼如過夜必須富洋下

碇。碇不能堅每被急流衝去。或夜半發風則尤危。然多賴天幸。非安計。然則宜如何。曰。錢塘江烏嘴頭浦內船。兵一枝不可無。餘則揀陸兵精卒一枝以待。而嚴龕赭嘴探遠課焉。庶救倉猝。或曰。賊舟何能至此。曰賊用單桅小舟。徑抵山邊閘乾登岸。故必用陸兵。追捕方不走脫。若以兵船必高大方能勝賊。如與賊舟等則勝負未可必也。今言禦賊於海也易。要非通論。海本逆潮。舟行全藉天風與潮。人力能幾。風順而重則不問潮候逆順。皆可行。若風輕而潮逆甚難。夏秋之間西北風起。不日必有極大西北風也。操舟者見此風候須急收。安嶴兵船在海。每日過但但要酌量收船安嶴以防。夜半發風至追賊亦要預計。今晚收船何嶴若一意前追。過夜風起悔無及矣。

海中嶴港

沿海之中。上等安嶴可避四面颶風者凡三十三處。曰馬蹟。曰兩頭哃。曰長途。曰高丁港。曰沈家門。曰舟山前港。曰濤江。曰烈港。曰定海港。曰黃岐港。曰梅港。曰潮頭渡。曰石浦港。曰豬頭島。曰海門港。曰松門港。曰蒼山嶴。曰玉環山梁嶴等嶴。曰楚門港。曰黃花水寨。曰江口水寨。曰大嶴。曰女兒嶴。中等安嶴可避兩面颶風者凡一十八處。曰馬木港。曰長白港。曰滿門。曰觀門。曰竹齊港。曰石牛港。曰烏沙門。曰桃花門。曰海閘門。曰九山。曰爵溪嶴。曰牛攔磯。曰且門。曰大陳山。曰大床頭。曰鳳凰山。曰南麂山。曰霓嶴。其餘下等安嶴只可避一面颶風。如三姑山衢山之類。不可勝數。必不得已寄泊一宵。若停久恐風反別迅不能支矣。又潭岸山灘山許山之類皆團生無嶴。一面之風亦且難避。可不慎乎。

海戰用舟

〔錢塘江〕支那浙江省杭州府を流るゝ河の名也、杭州灣に注ぐ。

〔安嶴〕波穩かなるみぎは、又は沖を云ふ、嶴は澳と同字にて、五雜組に見え、明の頃より成れる新字也。

〔海門港〕支那浙江省の沿岸にて、台州と楚門港との間にあり。

〔松門港〕支那浙江省の沿岸にて、海門港と、楚門港の間にあり。

〔楚門港〕支那浙江省東南部の沿海にて、台州と溫州との中間にあり。

〔大嶴〕支那浙江省の南部沿岸にありて、福建省堺に近き處にあり。

海戰雖藉風潮全在舟楫堅善。今造以利。徒既苦鹹涑薄而軍數率詭名冒餉。即執楫下碇。俱之人。故兵不可戰而舟難出洋。甚者利倭焚燒以滅跡。藉口弊爲極矣。觀元兵至五龍山大風破舟。然范文虎猶擇得堅好者乘以遯。使能盡護破舟奔山之人不自相爭。猶可一戰。以俟伐木造艦而相棄如仇莽無約束。遂致被虜俱殲同葬鯨穴。可恨哉。

邊海守備

國初懲倭之詐。緣海備禦幾於萬里。其大爲衞。置軍四千六百四十人。次爲所。置軍一千二百餘人又次爲巡檢司。置弓兵百人少亦不下數十人。大小相維。經緯相錯。星羅棊布。狼顧犬防。故所在製數百料。大船八櫓哨船。若風尖快船。高把稍船。十槳飛船。凡五等。至如昌定海昌國貢道所經。切近彼島則船數陪蓰他處而以時出。哨各有限準。如三月爲頭哨。四月爲二哨。五月爲三哨。號大汛。至六月收港避風。及秋七八九月亦如前爲小汛。汛必回衞休息。責令各取印到單海物爲驗。至各港。次舉所則又設有水寨營柵以止舍之而統。指揮千百戶。鎭撫總以閫職督。以憲臣所以制禦之者密矣。而歲久人玩法去盜生。二十二年來山頹瀾倒。當事者見不可用。遂別募以充。遠徵以禦。改造巨艦。一切從宜。而舊法因廢不講則亦懲咽之過矣。自頃客兵驕恣。鮮克宣勞。故中外建言。鄕兵似矣。然猶名弗思終屬文具。夫所謂鄕者對客兵而言。豈謂荷鋤耒耜稽奴牧竪然哉。竊謂。衞所巡司軍壯弓兵之類宜因舊法。潤澤損益之務足。故伍或抽羨丁壯。或僉壯士無論軍舍。通融湊攢優與津給。而以其半哨守其半團。練吏迭肄之。俾皆可戰。或慮一時未習。不足應猝則暫留舊募與調之。選以備緩急。久之或可盡罷。一守石浦而循焉。雖然此特治其標末云爾。若夫約已裕人。宜民酌損脩明法紀。變

〔星羅棊布〕きらぼしの棊石を並べたる如きを云ひ、軍容を稱せり、星羅は星の如く列ること、西都賦に「列卒周布星羅雲布」とあり、周布は棊石を打ち並べし如く散列するを云ふ舊唐書に「列俎棊布」とあり。

〔狼顧〕狼の性は、怯にして去る時常に反顧するに喩えたり、漢書食貨志に「失時不雨、民且狼顧」とあり。

〔哨〕ものみするを云ふ、正字通に「凡屯戍防盜處名曰哨」と、又、子方言に「秦晉之西鄙自冀隴而西使犬曰哨」とあり。

易風俗。力挽澆頽。躋冒之。習務敦忠實節愛之政。是謂自治。是謂先爲。不可勝則存乎其人焉矣。

海中風汛

按。海寇舊乘風汛。易於爲備。歲凡仲春東南風始迅。番舶乃西北行。至秋而歸。今任其何風。可轉帆借發。往者由新羅百濟至遼陽南下。

本朝初。由大小琉球迂繞福建至浙。近乃發五島。由八山霍山直對寧波。不五日夜必至浙。發則無時。

海寇情弊

按。國初吳淵頴論倭書。說盡事情。乃引辛毗對魏文帝之言曰。罷我互市任彼貿易。中國免激利之名。外夷知效順之實。計莫便於此。惟其商道不通而利之所在人必趨之。不免巧生計較。商轉而爲寇。商道既通則寇復轉而爲商。彼其既犯國禁。思圖苟安。因陷引勢家。同作勾當。行之既久。不免惹起奸圖。大生覬覦。時則不因商。貢不通而實成寇心矣。伏按。國初禁海之例始。因遣諭不來。纖恨林賢巨燭之變。欲與閉絶之。故非以通商之不便耳。惟其不通商而止通貢。所以正德年間各道爭貢以規利市。在彼國則強請勘合。倭王遂不能禁制。在中國則有宗設宋素卿之禍。而漳寧惡少則甘蹈負固而縱肆横行。然以前狡僞未備。華夷兩家行之。既久併力合作。乃有不可知者。推厥所原。各爲行商之意而終貽地方之害。能無慮乎。

禦倭問答

〔福建〕福建省也、支那の東南部に當り、首都を福州と云ひ、北西は浙江省、西は江西省、西南は廣東省に接し、東方は支那海を隔てゝ我が臺灣に對す。

〔浙〕浙江省也、北は江蘇省、西は安徽、江西兩省、南は福建省に接し、東は支那海を隔てゝ我が琉球列島に對す。

〔魏文帝〕魏國一世にて、曹操の子也三國時代に出で、後漢建安二十五年獻帝を廢して自立して帝と稱す、在位七年にして、子明帝に讓る。

問曰。近日倭寇剽掠爲患倏來忽去。備之無餘力。攻之無定形。何以保東南民社而安室家也。曰。聞諸洪武永樂間倭夷數犯而莫禦。今惟漳寇耳。且勅巡撫嚴督之。是以激而變生。欲弭之。請考前之無寇者何謹微以防漸不必過嚴不治。治之而寇息矣。

又曰。禦海寇與山寇不同。故禦山寇利用攻。禦海寇利用守。攻貴神速。守貴招降。是以憲臣廣投檄文以誘其從。將臣勤加巡望。以嚴其備則海寇得生。而居民無擾也。

又曰。禦海無難。在得人。在據險。在利器。在足餉。在令嚴。夫統率執綸。士卒尩羸。人匪得也。南藍田以及興福。東龍王以膊琴室。北武場以至楊村。疎而且曠。險勿據也。戈矛幹脆而鐵銹。甲冑線穿。而紙糊器不利也。歲久不支。包侵爲弊。枵腹稱戈。妻子啼饑食不足也。守而敵者無功。退而逆者不罪。令匪嚴也。必總戎者身先行伍。內守者勤加策。應伏兵以絕汲道。寫遠居民則徙之入城。此保海鹽一隅之策。若欲海寇悉平。必須憲臣奏請。沿海凡泊船處所。多設市舶司。有貨稅。貨無貨稅船。船出地方給以票證。人皆好生而嗜利。化寇而爲良善。且因以裕國用矣。

又曰。破海寇其策有三。防其源。困其遙。間其黨也。沿海出船。海口查其家。註之册。誘其親屬。俟寇回諭其降。以自新不罪。又嚴禁不使招引。下船則在海者日減而無增。此防之策也。海寇食必須米。飲必須泉。截其掠米汲泉之路可也。可泊之處。悉立鐵尖撞樁隱于水面。礙其來船可也。伺其聚泊。束芻灌油。桴筏隨之順風縱火可也。此困之策也。或取重囚。許釋其罪。持檄往喩。能殺大船寇首來降者賞以爵。能殺小船寇首來降者賞以金。登岸對陣。投戈自降者不罪。或用木牌硃漆書

〔洪武永樂云々〕洪武元年より前二年我が後村上天皇の正平二十一年、高麗國來り、翌年元使來り倭寇の禁を請ふ、洪武永樂の間高麗明元の諸國數度之れを訴へ來るに徵して、倭寇の害彼に及ぼせるの甚しきを知るべし。

〔楊村〕支那浙江省中央部の沿岸にありて、寧波の南西に位せり、寧波府奉化縣に屬す。

〔海鹽〕支那浙江省嘉興府海鹽縣也。

寫。順流浮至海船聚處。寇必取視自相猜疑而黨不固矣。此間之策也。夫用間自古長勝之策。不特可消海寇而已也。

日本國考

日本

日本古倭奴國。海中諸夷倭奴最大。西南至海。東北至大山。國主世以王爲姓。群臣亦世官。地分五畿七道三島。又有附庸國百餘。拘邪韓最大。其國小者百里。人不過五百里。戶少者千。多止一二萬。皆倭種也。漢滅朝鮮。通使稱王者三十餘國。倭主最雄長者居邪馬臺。卽邪摩維。歷漢魏晉宋隋皆朝貢。稍習華音。唐咸亨初。惡倭名更號日本國。明洪武二年倭寇山東。併海郡縣。又寇淮安。三年寇山東。轉掠浙東福建旁海諸郡。是上使萊州府同知趙秩。賜璽書諭其王良懷。言倭寇海上。書至日。如臣我奉表來庭。不臣則脩兵自固。先是勝國時。嘗遣使趙良弼。襲擊日本。遂絕不通中國。此秩至。疑爲良弼後。將殺之。秩言。今天子用夏變夷。非蒙古比。且曉以禍福。王乃懼禮秩。遣僧進方物。隨秩奉表稱臣入貢。使未至。又掠溫州。五年遣明州天寧僧祖闡南京瓦棺寺僧無逸開諭之。王遣使同二僧入貢。是年寇海鹽澉浦溫州。初令浙江福建造海舟防倭。而倭又寇海上諸郡。六年以於顯爲總兵官。出海巡倭寇。倭寇登萊。七年寇膠州。是年遣僧來貢無表文卻之。其臣亦遣僧貢馬茶馬刀扇。上曰。此私交也。亦不受。令中書移文責王。九年遣僧歸庭川等奉表貢馬及方物謝罪。賜王及使文綺有差。已而上覽表曰。良懷不誠。詔責之。十二年來貢。無表文。安置使人於陝西番寺。十三年遣使詔諭。良懷遣僧如瑤貢馬。令禮部移書責王數掠我海上。復卻之。諸僧皆安置川陝番寺。十四

〔山東〕支那山東省也、北東南の三方海に面し一大半島をなす、直隸、河南、江蘇の三省に隣接す。

〔萊州〕支那山東省にありて、勃海灣に臨めり。

〔膠州〕山東省の東南部沿岸にある要港也。

〔陝西〕支那陝西省也、北は蒙古、東は山西、西は甘肅四川、南東は山東河南の諸省に接饒せらる。

年遣僧入貢。乞還安置諸僧使。上曰。日本旣謝罪。還其使。召至京。宴賞遣歸。十五年歸庭用又來貢。
于是有林賢之獄。曰。故丞相胡惟庸通日本。蓋訓所謂日本雖朝實詐。暗通奸臣胡惟庸謀爲不軌。故
絕之也。是時惟庸死。且三年矣。十六年寇金鄕平陽。十七年如瑤又來貢。坐通惟庸發雲南守禦。是年
遣信國公築登萊至浙沿海。五十九城民丁四調一爲戍兵。二十二年置浙東西防倭衞所。是年遣江
夏侯周德興築福建海上十六城。設衞所。遂探福建漳泉。人爲戍兵。二十六年寇金鄕。二十七年二月
遣都督僉事劉德商嵩。巡視兩浙防倭。三月又刺都督楊文。尋又勅魏國公徐輝祖安陸侯吳傑。練浙
江海上兵防守倭。二十八年寇金州。靖難後太監鄭和等帥舟師三萬下西洋。日本遣人來貢。併擒犯
邊賊二十餘人。即付使人治之。縛置甑中。永樂二年使還。遣通政趙居任賜王冠服。文綺。金銀。古器。
書畫。又給勘合百道。令十年一貢。每貢正副使等毋過二百人。若貢非期人船踰數。夾帶刀鎗並以
寇論。居任還。不受王餽。上嘉厚賜之。尋命僉都御史俞士吉賜王印誥册。封爲日本國王。詔名其國
之鎭山曰壽安鎭國山。上爲文勒石。久之嗣王道義卒。子源道義嗣。益奸狡。時時令各島人掠我海
上。九年寇磐石。十五年寇松門金鄕平陽。是年遣禮部員外郎呂淵諭王還所掠海上人。十六年遣使
謝罪。十七年倭賊數千分乘二十舟進圍望海堝。遼東總兵劉榮率精兵。設伏出奇。斬首七百四十
二。生捕八百五十七。召榮至京。封廣寧伯。自是不敢窺遼東。二十年寇象山。宣德元年遣人來貢。人
船刀劍不奉我約束。上諭使臣。自後貢毋過三舟。使人毋過三百。刀劍毋過三十。否則不受。七年遣
人來貢如約束受之。八年源道義卒。命太監雷春少卿潘賜等弔祭。十年嗣王遣使貢謝。倭自得勘

〔金鄕〕支那浙江省東南部沿岸、福建省堺にあり。

〔平陽〕同省にありて、前記、金鄕と溫州との中間に位す。

〔雲南〕支那雲南省也、國の西南隅にありて、西部は印度、交趾支那、安南に接し、西藏、四川、貴州、廣西の諸州に圍繞せらる。

〔漳泉〕共に福建省の沿岸にある、漳州、泉州を云へり。

〔象山〕浙江省中部沿海地方にあり。

〔宣德元年〕明宣宗の時にて、我が應永三十三年に當り足利五代將軍義持の時也。

〔正統四年〕明英宗の時にて、我が後花園天皇の永享十一年に當り、足利六代將軍義敎の時也。

〔寧年浦〕支那浙江省、錢塘灣入口にあり、北は江蘇省に隣れり。

〔源義植〕十一代將軍足利義植也。

〔大内藝興〕周防山に城主大内義興也義藝音相通ず、政弘の子にして、其子義隆の時、奸臣陶晴賢に亡殺されたり。

合方物戎器滿載而來。遇官兵矯云入貢。即不如期。倖臣幸無事。輙請循順夷情主客者爲書可條奏。即復許貢云。不爲例。嗣後再至。亦復如之。我無備。即肆出殺掠滿載而歸。宣德末年、海防益備、賊不得間。貢稍如約。遂許夷至京師。宴賞市易飽恣其欲。已而備禦漸疎。正統四年寇大嵩。入桃渚。焚刼屠掠。慘毒不可言。於是朝廷下詔備倭。命重師守要地。增城堡。謹斥堠。修戰艦。合兵分番屯住。海上寇盜稍息。七年來貢。十一年復寇寧年浦。成化初、忽至寧波。知我有備矯稱進貢。守臣爲請于朝。且欲遣之至京。楊文懿公守陳貽書張主客。力言其不可許。二十年遣周瑋等來貢。弘治八年壽蓂來貢。正德六年宋素卿永壽來貢。求祀孔子儀注。不許。鄞人朱澄告言。素卿本臣從子。叛從夷人。守臣以聞。主客以素卿正使釋之。令諭王效順無使邊　八年僧桂梧等來貢。嘉靖元年王源義植無道。國人不服。諸道爭貢。大內藝興遣僧宗設。細川高遣僧瑞佐及素卿。先後至寧波。故事凡番貢至者閱貨。筵席並以先後爲序。時瑞佐後至。素卿奸狡。饋市舶太監以重賓。先閱瑞佐貨宴。又令坐宗設席間與瑞佐忿爭與相讐殺。太監又陰助佐。授之兵器殺總督備倭都指揮劉錦。大掠寧波旁海鄉鎭。素卿坐叛論死。宗設瑞佐皆釋還。給事中夏言上言。禍起于市舶。禮部遂請罷市舶。自是番貨至。不得市。輙賒奸豪家。久之奸豪欺負日積。番人坐索不得償。遂出沒海上爲盜。諸負貨者利其速去。以危言嚇官府。出兵捕之。番人益怨恨。大肆殺掠而中國又多爲之嚮道。於是工忤瘋徐必欺毛醢瘋之徒。皆我華人。稱王海島。攻城掠邑。浙東大壞。二十五年以朱紈爲浙江巡撫都御史兼領福興漳泉軍務。紈勇于任事。上章暴二三勢豪通番狀。竟爲勢豪阻誣被劾。恚憤卒。其所任福建副使柯喬都指揮盧鏜

殺賊有功。皆論死繫獄。於是群盗肆起益無忌憚。三十一年殘黄岩掠定海。全浙騷動。遣都御史王忬巡視兩浙。兼領福興泉漳四郡。以都指揮兪大猷湯克寛爲參將。剿賊。時兵政久弛。所在無備。忬經略未幾。群盗總至。勢益猖獗。三十二年大猷出洋焚賊巢。群賊乘風奔突。倏忽千里。徧略温台寧紹杭嘉蘇松淮揚十郡。破昌國臨山霩衢乍浦靑村。南匯呉松江諸衞。三十三年遂犯江北海門如皐通州。皆被殺掠。是時復用盧鏜爲參將。而以兪大猷爲浙直總兵。未幾工部侍郎趙文華以海賊猖獗。請禱海道。遂遣文華行禱。公私勞費不貲。皆歸忬比。忬改大同巡撫。徐州兵備李天寵代忬。南兵部尚書張經提督浙閩江南北軍務。有王江涇之捷。文華又出監督監軍。素忌經。天寵逮詔獄論死西市。而以浙江巡按胡宗憲代天寵。南戸部侍郎楊宜代經。自後賊益熾。縱横出入二十六郡。宗憲計擒賊首王直。浙西江東稍得安。寧浙東温台江北淮揚尤被其毒。時李遂巡撫淮揚以智略誘至廟灣。縱兵殲之。四十年賊破興化政和壽寧平海銅山寧德等郡縣。巡撫譚綸總兵戚繼光募浙兵剿平。自是始更置政府。紘轍一新中外文武大吏。悉心經略武衞稍振。賊雖時肆寇掠。多創少利。沿海郡邑始免倭患矣。

今按。嗣王道義卒。子源道義嗣。八年源道義卒。皆非也。道義源尊氏孫源義詮之子。諱義滿。法名道義也。道義子義持嗣立。法名道詮。皆爲征夷大將軍。八年僧桂梧等來貢。梧當作悟。桂悟住南禪寺。號了菴。王源義植征夷大將軍。源義植道義之曾孫也。大内藝興藝當作義。細川高。高字下脱國字。世法錄有國字是也。高國細川勝元之孫也。

計處倭酋

〔略温台寧云々〕温州、台州、寧波、紹興、杭州、嘉興（以上浙江省）蘇州松江、淮安、揚州（以上江蘇省）を云へり。

〔昌國〕浙江省の沿岸にて、前記、楊村と海門との航路の中間にあり。

〔呉松江〕呉江、松江にて各れも江蘇省にありて、蘇州に近し。

〔江北海門云々〕江北は揚子江北岸の意にて、海門、如皐、通州共に江蘇省にあり。海門は黄海に臨み、通州は揚子江の沿岸河口にあり。

〔寧德〕福建省の東北岸にあり。

〔壽寧〕同省にありて、浙江省界の山間部にあり。

〔丙戌〕正親町天皇の天正十四年也、此の年正月秀吉家康と和す、二月聚樂第成る、五月家康秀吉の妹を娶る十月家康秀吉と大阪に會見、十二月秀吉太政大臣に任じ、姓を豐臣と賜ふ、又此年方廣寺を造り、大佛殿を立て、又朝鮮に舊交を求むる等のことあり。

〔州官義久〕島津義久也、貴久の子、義弘の兄也。

〔豐後州官〕大友宗麟也、字は義鎭、義鑑の子也。

〔浙直閩〕浙は浙江省、直は直隷省にして、閩は閩江にて福建省を云へり

按。平秀吉。此嘗起于厠役。由丙戌至今不十七八年。而簒奪兩誅。降諸島。黎其子弟。臣其父兄。不可謂無奸雄之智。興兵朝鮮。席捲數道。非我皇上赫然震怒。命將東征則朝鮮君臣幾於盡爲俘虜。不可謂無攻伐之謀。整造戰艦以數千計。徵兵諸州以數十萬計。皆曩時之所未有。日夜圖度思得一逞。不可謂無窺中國之心。使其遣嘗出衆。乘風揚帆。寇我沿海府郡。備禦兵力容有未完。一時勝負得失是未可知也。然臣等竊料。平秀吉一狡詐、殘暴之夫耳。本以人奴簒竊至此。彼國諸嘗欲爲秀吉之爲。而思攘奪之者甚衆。陰謀伐國。構怨亦深。如結薩摩州將幸侃、通令州官義久殺其弟中書以自明。義久不得已而佯爲降順。其心未嘗一日忘秀吉也。奪豐後州官之妻爲妾。民間妾女充塞臥內。淫虐百端。諸州質子。禁若囹圄。父子兄弟不能相見。共不勝其仇讐忿恨之情。日本原無征科之擾。而今令各州遠道輸糧、原無興大兵。動大衆之擧。而今則徵發騷然擧國鼎沸、倭之人民何以堪命。日肆殺人而虞其噬。多行不軌而慮其毒。故出則蒙面。臥則移徙、彼亦自知其不免于禍。以事理策之。秀吉之自底滅亡可計日而待也。今夫謀動干戈。驅無辜之蒼赤而欲盡置死亡之地。此爲神明之所不與。特其取諸州之故智以襲朝鮮。憑其破朝鮮之餘威。思犯中國。濫起國內之將爲無前之擧。怒臂當車。不量彼己兵驕者敗。豈可長久。且彼雖十萬之衆航海而來。我沿海舟師以主待客。以逸待勞。隨至隨擊。勝算在我。而又絕嚮導。乖其所之。彼未可以遽入吾地也。戰艦雖巨而多離船則不能守。守之則不能登陸而戰。兵以數萬計。日須數萬石之糧。我堅壁清野。使無所掠食則困斃立至。曩時倭犯浙直閩廣之間。雖有生靈受其塗毒。卒就殲滅。曾無生還。

咋入朝鮮之倭。不下二十萬。遇我王師僅二三萬。一戰退怯。償其死亡者。過半。其伎倆可知矣。蠢爾夷邦主者不過一匹夫之勇。左右羽翼非素親信。曾無韓白之略。又或懷豫讓之謀。故以臣策之此酋必不能得志于我。而不戢自焚。施就顚蹶。亦理勢之所必然。今中外洶洶有畏蜀如虎之意者皆過也。若夫封貢之說。臺省禮部諸臣言之甚詳。臣等無容復置其喙。竊謂。日本有山城君在。雖其懦弱名分猶存。一旦以天朝封號加之僭逆之夫。且將置山城君於何地。崇姦怙亂。乖紀斁倫。非所以令衆庶而示四夷也。北虜俺嗒之孫把漢那吉來投於我。我執以爲質。而彼卑辭求之。因而還其孫那吉。與之議通貢市。假以王封。先帝有不殺之恩。北虜無要挾之迹。此一時機會。偶有可乘而然。而今非若此也。王秀吉無故興兵。聲言內犯。陷我屬國。東征之師相拒日久。損失日多。碧蹄戰後暫退釜山。尙未離朝鮮境上。而我以細人之謀聽其往來。講封講貢。若謂朝廷許我封貢則退。不許我封貢則進。要耶。非耶。近朝鮮國王李昖奏稱。倭賊方千金海釜山等處。築城造屋。運置糧器。焚燒攻掠無有已時。至稱屠戮晉州死者六萬餘人。尙可謂乞退兵乞和耶。夫乞封固非秀吉本謀。然藉此名號以讋服諸夷。益以恣其狂逞之志則秀吉亦姑爾從之。行長小西飛諸酋懾于平壤王京之戰。旣未能長驅直入。而入朝鮮者又死亡數多。恐無辭于秀吉。喪師之戮。亦姑假封貢之說。以詒秀吉。而緩其怒。是以沈惟敬輩僥倖苟且之謀得行乎其間。若我經略總督諸臣不過因惟敬輩。而過信行長。諸酋又因行長。諸酋而錯視乎秀吉。不知秀吉豺狼之暴。狐兎之狡。變詐反覆必不可以信義處者也。玆觀總督所呈請封表文末云。世作藩籬之臣。永獻海邦之貢。因封及貢。其情已露於此。葢秀吉狂謀

〔豫讓之謀〕豫讓は古の烈子、其主智伯の趙襄子に滅さるゝや、これが仇を報ぜんとして、具さに艱苦を嘗めたりしが、遂にその志を遂げずして殺さる、しかも其の謀略凡ならざるものとして稱せらる、今之れに喩へて云ひし也。

〔碧蹄戰〕碧蹄館の戰を云ふ、碧蹄館は、朝鮮京畿道漢城府の西、礪石嶺の北にあり、文祿二年正月明將李如松、兵二十萬を率ゐ、勝に乘じて此處に來りしが、我が小早川隆景これを礪石嶺下に邀擊して、殆ど明軍を殲にせり。

畜積已久。一封必不足以厭其意。要而得封必復要而求貢。求市、得隴望蜀。憑陵及我。朝廷又將何以處之。朝鮮李昖之奏亦謂、賊兵仍舊屯留。聲言待天朝。准許封貢、乃退又放出臣貳賤息。無非所以姑緩天兵而求逞兇計。則倭酋之情。朝鮮君臣知之矣。今當事之議、欲令倭盡歸島。不留一兵于朝鮮以聽命。顧彼方進兵攻掠、肆無忌憚。又安肯收兵還國。幡然順從。揆情度勢臣等恐其不能得此于彼也。卽使暫時退兵旋復入寇。敗盟之罪又將誰責。卽議者多謂。封貢不成倭必大舉入寇。不知秀吉妄圖。情形久著。封貢亦來。不封貢亦來。特遲速之間耳。六十六州與朝鮮一國先和後取。此其狡謀明甚。奈何堂堂天朝而可下同於夷邦小國之愚耶、伏乞、皇上大震天威、罷議封貢。明詔天下、以倭酋平秀吉干犯天誅。必不可赦之罪。兼勅文武將吏、及詔諭日本諸酋長、以擒斬平秀吉則有非常之賞破格之封。朝廷不封兇逆之夫、而封其能除兇逆者。以此曉然令於天下。然後奸權喪膽、豪傑生氣。平秀吉一酋不久。當殄滅無難也、臣等迂籌以爲今日之計。莫妙於用間。莫急於備禦、莫重於征勦。何者倭酋倡亂、惟在平秀吉一人、諸州酋長多面降而心異、中間有可以義感者。有可以利誘者。秀吉原無親戚子弟股肱心膂之人。儻得非常奇士密往圖之、五間俱起、神秘莫測、則不煩兵戈而元兇可擒。一獲元兇倭亂頓弭。故曰莫妙於用間。備禦之策。頻年屢奉明旨申飭。當事諸臣亦云嚴矣。臣等竊惟。遼陽天津兩地密邇京師。一由朝鮮渡鴨綠江而上。一由山東海而乘風疾趨、設有疎虞令倭得長驅。而入震驚宸極、此不可以不慮。宜將東征之兵挑選。或增募二三萬人遣大將二員。分屯兩地以防不測。其各省直水陸兵防更於今日嚴爲整備。俟其入寇五境。或犄或

〔得隴望蜀〕一の望みを得て更に其の上を望む意にて飽くことなきに喩ふ、魏志に「人苦無足、既得隴復望蜀」とあり。

〔酋長〕蠻人の長に云へり、貞觀貞要に「每見一人初降、賜物五匹袍一領、酋長悉授大官」とあり。

〔鴨綠江〕朝鮮國第一の長流にして、源を白頭山の西に發し、西南を流て滿韓兩域を過ぎ、義州に至りて海に入る。

〔震驚〕ふるひおののくを云ふ、易經に「震驚千里」とあり。

角・相爲戮力殲。此不可恃其不來。一日懈緩故云。莫急於備禦。然用間妙矣。恐未可必得志於彼。備禦急矣恐未能使喪膽於我。臣等以爲。彼不內犯則已果其內犯。大肆猖狂。乞我皇上與二三大臣定議征討。特發內帑百萬分勖諸省。打造戰船一千餘隻。選練精兵二十萬人。乘其空虛出其不意。會師上遊直擣倭國。順命者宥。逆命者誅。彼秀吉一酋何能逃遁。此所謂堂堂之陣。正正之旗。名其爲賊敵。乃可服者也。故曰。莫重於征剿。或者謂。興師遠涉爲費不貲。當國計詘之時何以堪。此臣等計之。山東浙直閩廣備倭兵餉歲不下一百萬兩。積之十年則一千萬兩。又積之三五十年。其費不可勝窮。今征剿所費不過一歲之需而足。若倭奴蕩平之日。海防又可息肩。各處歲辨餉銀。可以坐省其半。一勞永逸。事半功倍。未有若斯擧者矣。臣聞。元世祖曾以舟師討倭。致溺十萬衆於五龍山下。談者恒以爲口實。臣竊料。雖雄其實虜人不諳海上形勢。當時將帥必多違官。彼不習波濤。不識風汛之人。而驅駕海洋。直顚倒沈溺。雖百萬何用。今在東南而用舟師則大不然。必習波濤。必知風汛。乘時而往無憂覆溺。試觀沿海商民興販各國者。百鮮失一故元事非所論于今日也。夫人情慮倭而畏其來。又惟議株守而憚於往。是以倭酋得恐嚇要求於我。誠知所以備禦之策與夫攻伐之謀不患其來。復制其往則彼雖狡詐百出。無所用之。兵志所謂先聲後實。又謂。未戰而廟算勝者。此擧是也。

今按。嘉靖四十三年倭寇熄。歷二十八年。豐臣秀吉起。有囊括四海之意。幷吞八荒之心。將事于明。堂々之陣。不可與前海寇烏集之衆同日而語矣。用干戈於朝鮮。將渡鴨綠江一擧入明。其

〔堂堂之陣云々〕盛大なる陣容、整頓せる軍列を云ふ、孫子に「無激正正之旗、勿擊堂堂之陣。此治變也」とあり。

〔一勞永逸〕僅少の勞にて永久の安樂をなすこと、齊民要術に「苜蓿長生、種者一勞永逸、楡砍後復生不煩耕種、所謂一勞永逸」とあり。

〔嘉靖四十三年〕明世宗の時にて、我が百六代正親町天皇の永祿七年に當れり。

〔囊括四海云々〕四海を包み、八荒を合するをいふ、四海八荒は四方八方の意也、賈誼過秦論に「有席卷天下、包擧宇內、囊括四海之意、併吞八荒之心」とあり。

志豈區々哉。明人曰。南倭北虜。又曰。中外洶々有ニ畏レ蜀如レ虎之意一。亦非ニ過情一乎。秀吉不レ肯ニ朝鮮一。故不下以ニ四道一爲中采邑上。其大度可レ知矣。然年老無ニ長子一。亦無ニ股肱心膂之人一。晩年有ニ赤子一。欲ニ以爲一レ嗣。殺ニ猶子秀次一。不レ幾而身亦瘁死。此役也。諸士暴露。萬民汗血。枕骸遍ニ于野一。功不レ補レ患。反失ニ天下人心一。乃秀吉之失計不學之誤也。明亦雖レ不レ被レ終爲ニ大讐一。秀吉數改レ姓。始稱レ平。中稱ニ藤原一。終稱ニ豐臣一。日本有ニ山城君在一云云。示ニ四夷一也。言。日本有レ君。而亦加ニ國王號於秀吉一。則廢ニ君臣大倫一也。此論正大。由レ此觀レ之則知。足利號ニ日本國王一。亦非也。然明天子暗ニ此理一。終亦封ニ秀吉一爲ニ日本國王一。

制倭八策

今倭之疲ニ中國一也。雖レ自ニ遼東一。由ニ六朝一及レ今。實從ニ南道一浮レ海。率自ニ溫寧一以入。蓋其去レ遼甚遠。去ニ浙閩一甚邇也。其入寇則隨ニ風所一レ之。或由ニ薩摩五島一至ニ琉球一而犯ニ閩廣一。或由ニ五島一歷ニ天堂官渡一。至ニ烏沙門一。分レ𦨕。過ニ韮山海鴨門一而犯ニ溫州一。或由ニ抒山之南一而犯ニ定海一。犯ニ象山奉化一。犯ニ昌國一。犯ニ台州一。若至ニ李西嶴壁下陳錢一分レ𦨕。由ニ洋山之南一而犯ニ臨觀一。犯ニ錢塘一。過ニ南山一而入ニ大江一。在ニ大洋一也則犯ニ淮楊登萊一。若在ニ五島一。開レ洋則趨ニ遼陽一。趨ニ天津一矣。其𦨕之入全視ニ風候一。大要春之後。冬之前。匪レ是者不レ利レ往。此入犯之大較也。彼既出沒不レ一。其地則海防不レ得レ不レ周。彼既往還不レ一。其時則海汛不レ得レ不レ謹。所以制馭之策有レ八。諸所ニ恒稱一。簡レ兵足レ餉。重レ將議レ援之類。不レ與焉。一激ニ朝鮮一而夾攻。可レ資ニ一刺一。敵隱而勝算可レ決。三廣用レ間而大酋可レ折。四奮ニ火攻一而衆寡可レ易。五重ニ屯戍一而險阨可レ固。六蒐ニ軼才一而衆智可レ集。七得ニ樞督一而奇勳可レ奏。八搗ニ賊瑕一而屬園可レ解。區區小醜何足レ慮哉。

〔遼東〕支那盛京省奉天府遼陽州にあり、遼河の東にあればかく名づく。

〔溫寧〕浙江省の溫州府及び寧波府を云ふ。

〔閩廣〕福建省の閩江の流域及び廣東省の廣州府を云ふ

〔舟山〕浙江省寧波府の寧波の沖にある島也。

〔奉化〕浙江省寧州府にあり。

〔大江〕揚子江を云ふ、崑崙山の南側に發し、大小數十の溪流を合はせ、東流して支那海に入る、長さ三千哩也。

又卷之五十七

日本諸島入寇。多自閩趨廣。柘林爲東路第一關鎖。使先會兵守此。則可以遏其衝而不得泊矣。

議者曰。廣東三路雖並稱險阨。今日倭奴衝突。莫甚於東路。亦莫便於東路。而中路次之。西路高雷廉又次之。西路防守之責可緩也。是對日本倭島則然耳。

倭寇擁衆而來。動以千萬計。非能自至也。由福建內地奸人接濟之也。濟以米水。然後能久延。濟以物貨。然後敢貿易。濟以嚮導。然後敢深入。海洋之治。接濟嚴而後倭夷可靖。所以稽察之者。其在沿海寨司之官乎。

愚聞。漳泉人運貨至省城。海行者每百斤腳價銀不過參分。陸行者價增二十倍。覔利其難。其地所産魚鹽。比浙又賤。蓋肩挑度嶺。無從發賣故也。故漳泉强梁狡猾之徒。貨貲通番。愈遏愈熾。不可勝防。不可勝殺。爲倭嚮導者。官府繫其家屬。不敢生還。歲歲入寇。是外寇之來。皆由內寇糾引之也。福建之亂。何時已乎。福亂不已浙直之患何時請乎。唐荊川云。倭患始于福建。福建者亂之根也。諒哉言乎。

福寧在福建之東南。突出海中。左爲甌括。海居東面。右爲福建。居南面。福寧尤當東南北三面之衝。倭船入寇必先犯此。水寨之設職是故也。舊寨在州東北五六十里三沙海面。

海上有三山。彭湖其一也。山界海洋之外。突兀迂迴。居然天險。實與南澳海壇並峙爲三島。賊所必窺也。往林鳳何遷輝跳梁海上。潜伏于此。比倭夷入寇。亦往往藉爲水國焉。險要可知矣。

〔高雷廉〕並に支那廣東省にある州府の名也、即ち高州府、雷州府、廉州府を云へり。

〔强梁〕才力强き也專ら力の强きに云ふ、即ち木の水に架するを梁と云ひ棟を負ふを梁と云ふ、共に其の力の强きに取る、老子に「强梁者不得其死」とあり。

〔狡猾〕奸智にたけたるを云ふ、左傳昭公二十六年に「王子朝曰、若我兄弟甥舅、奬順天法、無助狡猾」とあり。

〔彭湖〕今彭湖列島と稱する處あれども昔時は臺灣島を稱せしことあり。

浙海諸山。其界有三。黃牛山馬墓長塗冊子金塘大樹蘭秀劔山雙嶼雙塘六橫韭山檀頭等山。界之上也。灘山滸山羊山馬蹟兩頭洞魚山三姑霍山徐公黃澤大小衢大佛頭等山界之中也。花腦求芝絡華彈丸東庫錢壁下等山界之下也。此倭寇必由之道也。

一會聞。宋以前日本入貢。自新羅以趨山東。今若入寇必由此路。但登萊之海。危礁暗沙不可勝測。非諳練之至。則舟且不保。何以迎敵而追擊乎。故安東以北若勞山赤山竹篙岩門劉公芝界八角沙門三山諸島。乃賊之所必泊。而我之所當偵焉者也。若白蓬頭槐子石橋鷄鳴嶼金嘴石食廟淺灘亂礁。乃賊之所必避。而我之所當遠焉者也。嚴出洋之令。勤會哨之期。交牌信驗。習熟有素則他日廟堂或脩海運亦大有賴焉。獨禦倭云乎哉。

通政唐順之云。禦倭上策自來無人不言。禦之于海而竟罕能禦之者何也。文臣不下海者則將領畏避潮險。不肯出洋。將領不肯出洋而責之小校水卒則亦躱泊近港不肯遠哨。是以賊惟不來。來則登岸殘破地方。則陸將重罪而水將旁觀矣。竊觀崇明諸沙舟山諸山各相連絡。是造物者特設此險以迂海賊入寇之路。以蔽吳淞江定海內地港口也。國初設縣羅衞最有深意云云。

寧波生員陳可願云。禦海洋之策。有言其可行者有言其不可行者。將以何爲定乎。嘗親至海上而知之。向來定海奉象一帶平民。以海爲生。盪小舟至陳錢下八山。取殼肉紫菜者。不啻萬計。每歲倭船入寇。五島開洋。東北風五六晝夜至陳錢下八分綜。以犯直浙直隷。此輩恒先遇之。有遇殺者、有被擄爲鄕導者。因此諸山曠遠蕭條。無居民守禦。賊以深入。總督胡公與趙工之議所由建也。

〔三山諸島〕浙江省台州府東海岸沖にある小海島也。

〔石橋〕浙江省台州府にあり、

〔廟堂〕もと祖先の靈を祀る處を云ふ然るに人君政の始め必ず宗廟に告げこれを明堂に議するにより、朝廷の稱となれり、漢書徐樂傳に「賢主獨觀萬化之原、明於安危之機、修之廟堂之上、而銷未形之上患也」とあり。

〔直隷〕直隷省にて支那本部の北部にある一省也、蓋首都に直屬するの謂也。

日本島夷入寇之圖
從寇至閩廣總路
小琉球
從此入福興
從此入泉漳
從此入潮惠
從此入廣州
從此入瓊州
從此入雷州
安南國
興化
福州
泉州
漳州
潮州
惠州
廣東
高州
雷州
瓊五指
方
崖
儋
廣
龍
思明

日本
薩摩州
對馬島
五島
大琉球
倭冦至直浙山東総路
倭冦至朝鮮遼東総路
徐福
從此入朝鮮
朝鮮
從此入遼東
旅順
從此入直沽
遼東
直沽
京師
從此入登萊
登
萊
青
從此入淮安
從此入揚子江
高郵
淮安
泰
通
從此入松江
從此入鎮塘
從此入寧波
從此入台州
從此入温州
寧波
台州
平陽
温州
紹興
浙江
嘉興
常州
鎮江
蘇州
松江
南京

沿海界倭要害之地

沿海自廣東樂會縣接南安界。起歷海條奧爲文昌界。鋪前港爲會通界。神應港豐盈浦爲瓊州界。麻頭浦呂灣浦爲臨高界。田禾灣爲儋州界。莪詐山爲昌化所界。歴白沙營爲感恩縣界。大洞天。小洞天爲崖州界。牙郎澳雙洲爲陵水縣界。七十二經牙山淡水灣爲欽州界。革水營烏雷山爲靈山縣界。青嬰池楊梅池平江池爲廉州界。鄒州爲永安所界。邪洲爲康海所界。潿洲爲錦農所界。詞洲獨豬山爲石城千戸所界、磠洲小黄程汾洲爲寧川所界。青聚山羅浮峰爲神電衛界。海陵山爲雙海所界。小獲山爲海朗所界。中獲山爲陽江所界。大獲山爲新寧縣界。西雄山鶚洲山爲新會縣界。萬斛山上川山爲順德縣界。石岐峰爲香山縣界。蛇西山大南當山爲南海番禺界。烏沙洋爲白沙巡司界。九星洋爲福永巡司界。珊瑚洲渡抔山爲東莞縣界。合蘭洲爲大鵬所界。馬鞍洲爲鐵岡驛界。寧洲山桔洲山爲惠洲界。記心洋爲平海所界。徐娘山爲海豐縣界。大星尖山爲捿勝所界。吉頭峰爲碣石衛。莆標峰爲甲子門所界。陶娘灣靖海澳爲靖海所界。大浮山玉嶼山爲潮陽縣海門所界。小柑山爲蓬州所界。大柑山爲大城所界。大京山九猴山爲饒平縣界。計五千里。抵福建南澳山爲玄鍾界。歴侍郎洲石城嶼爲銅山所界。歴鴻儒嶼沙洒澳爲陸鰲所界。大激嶼壁洲山爲鎮海衛界。小激嶼爲月港界。舊浯嶼爲高浦所界。嘉禾山大担山爲中左所界。小担虎頭山爲金門所界。大登山小登山爲福全所界。大捕山小捕山爲永寧衛界。瑤球峯獺窟峰爲崇武所界。沙塘灣爲惠安縣界。嵝嶼白嶼爲蜂尾巡司界。湄洲山爲南泉寨浦禧所界。石獅峰小嶼峰爲小海衛界。瑤中三江中爲沖心巡司界。綱山王家嶼爲萬安所界。六湖山碧水

〔瓊州〕廣東省雷州の對岸、海南島の府名也。

〔臨高〕海南島の北方海岸にある邑名也。

〔儋州〕海南島の北西部の縣名也。

〔昌化所〕海南島の西岸にあり。

〔感恩縣〕海南島の南西沿岸地方の縣名也。

〔崖州〕海南島南部海岸地方の縣名也

〔欽州〕廣東省廉州の縣名にして、首都を欽と云ひ、欽江に臨み、東京灣沿岸の一港也。

〔靈山〕欽州府欽江の上流にありて、廣西省堺に接す。

（鎭東）福建省福州府福清縣の東岸の一港也。

（連江）福建省福州府連江縣也。

（寧德縣）福建省福寧州府にあり。

（平陽）浙江省温州府にあり。

（瑞安）同省同州府にあり。

（三山）福建省福州府連江縣にあり。

島爲鎭東衛界。日嶼月嶼爲梅花所界。即會城三波礁五虎澳爲連江界下千塘四嶼所定海所界。花瓶爲北茭巡司界。飛鸞渡爲寧德縣界。青山峰爲大金所界。天千山丁家程大俞山三星山流江爲福寧州界。計二千里。抵瀏江懸中峰爲浦門壯士二所界。歷長沙大昆山爲金鄕衛界。鳳凰山爲平陽所界。銅盆山爲沙園所界。仙口峰飛雲渡爲瑞安所界。大衛山海安港爲海安所界。寬碁被山爲寧村所界。黃華港爲磐石衛界、大巖頭爲磐石後右界。前山甕斗門爲蒲岐所界。九眼塘斗門關爲三山巡司界、了髻峰爲楚門所界。臨門隘爲隘頑所界。省梅坑爲沙角巡司界。大陳山石塘港爲松門衛。金清閘西嶼閘。冰清閘皆朱文公所造、爲新河所界。金沙灘鐺礁爲海門衛界。海門港爲海門前所界。五嶼爲桃渚所界。三門山爲健跳所界。石浦港爲前後二所界。青苔灣爲昌國衛界。小目山爲爵谿所界。西厨山爲前倉所界。孝順洋白塗爲大嵩所界。大射山爲穿山後所界。洛茄山長白山爲中左所界。大魚灣爲長山巡司界。招寶山巾子山爲定海衛界。金家碁爲寧波界。丘家洋爲慈溪界。金墅浦爲龍山所界。松浦港爲松浦巡司界。黃山爲觀海衛界。破山浦爲三山所界。化龍浦爲餘姚界。臨山港爲臨山衛界。西海塘爲上虞界。漁山蒙池臺爲紹興三江所界。鱉子山爲蕭山界。和尚山栲門爲會城界。茶浦門爲海寧所界。大衢山小衢山爲澉浦所界。扶桑山爲海寧衛界。西海口馬蹟山北丁興殿前山淡水門爲乍浦所界。計二千七百里。抵南直隷三姑山爲金山衛胡家港金山巡司界。上釣山中釣山下釣山大盤山爲青村所界。蒲碁爲南滙所界。陳錢山茶山爲南蹌巡司界。寶山爲上海界。永字山分水礁海礁山綵淘港爲吳淞所界。浪岡山顧涇港爲嘉定界。竺二箔沙送信嘴小團沙新安沙爲大倉界。大陰沙管

〔鹽城〕江蘇省淮安府にあり、黄河の支流の細流する處に當れり。

〔安東〕江蘇省にありて黄河左岸にあり。

〔海州〕江蘇省海州府海州也。

〔孤山〕奉天省遼東州にあり。

〔金州〕奉天省遼東州の遼東半島にあり、北に金州灣、南に大連灣を抱き旅順口背後の要衝として名高し。

〔蓋州〕奉天省遼東州にありて、蓋州河流域の地これ也首邑を蓋平と云ふ遼東半島の頸部を占むる要地也。

家沙爲崇明界。福山狼山三槿口爲通州千戸所界。唐家港海門島爲泰州界、亂沙新洋港爲鹽城界。開山淮河口鶯山爲安東界。妨山高公島爲海州所界。清河口巳頭河爲贛楡界。旬島勞山島爲安東界。孤耆山爲石臼所界。計一千八百里。抵山東青沈峰。歷胡家峰爲高港巡司界。沙嘴峰爲靈山衛界。黄埠峰爲夏河寨界。洋河○(闕字)爲膠州界。大勞山田横島爲鰲山衛界。走馬峰爲即墨界。馬山爲浮山所界。旬島赤島爲雄崖所界。舌○(闕字)徐福山爲大山所界。巨高島爲大嵩衛界。竹島爲海陽所界。松島莫邪島漫雞島爲靖海衛界。佛島爲津寧所界。五壘島下勞山爲尋山所界。歇馬墩洛口堡爲成山衛界。海牛島爲不夜城界。寶家峰爲百尺崖所界。古陌貝爲威海衛界。文島爲金山所界。新安堡戲山峯爲寧海衛界。海雞山爲籠河寨界。武家庄爲馬埠寨界。洋山爲萊州界。八角島蜿蟻島爲登州界。劉馬窪爲盧洋寨界。沙門島爲解宋寨界。單山爲黄縣界。桑島爲馬停寨界。龜島爲昌邑縣界。歆末島爲壽光界。都里鎭爲蒲臺界。靑島爲利津界。黄島爲霑州界。直沽口爲寶坻縣界。塔山爲盧龍衛界。蔬菜島爲中前所界。牛車島爲中後所界。孤山爲中右所界。何陽島羅兒島爲金州衛界。石灘島爲左所界。東雲島黄駝島爲蓋州衛界。屛風山爲復州衛界。鳳凰山爲中左所界。女兒河爲中屯衛右屯衛界。遼河渡古寺島爲廣寧衛界。麻田島平島爲海州衛界。湯站堡爲鎭遼所界。臨江爲義州界。計一千三百餘里。爲鴨綠朝鮮界。總其入寇則隨風所之。東北風猛則由薩摩○(域)或由五島至大小琉球而視風之變。北多則犯廣東。東多則犯福建。正東風猛則由五島歷大堂官渡而視風之變。東北多則至烏沙門分綜。或過韭山海閘門而犯溫州。或由舟山之南而犯定海。犯象山奉化。犯昌國。犯台州。正

東風多則至李西磐壁下陳錢分綜。或由洋山之南而犯臨觀、犯錢塘、或由洋山之北而犯青南。犯太倉、或由南沙而入大江。犯瓜儀常鎭、或由(在)大洋而風欻東南也、則犯淮揚登萊。若在五島開洋而南風方猛則趨遼陽天津。防倭者以三四五月爲大汎、九十月爲小汎。向之入寇者、薩摩肥後長門三州之賊居多、其次則大隅筑前筑後博多。博人善造舟。而豐前豐後和泉之人間亦有之。乃因商于(於)薩摩而附行者。夫廣東列郡○(者)十分爲三路、高雷廉近占城滿剌諸番。烟烽稀曠東○(中)路東莞○(東路)惠潮、皆倭寇不時出入(沒)之地。而東路爲尤要衝、若柘林者則又東路控(制)賊之咽喉門戶也。無柘林是無水寨矣。無水寨是無東路矣。瓊州四面環海。東西九百里。南北一千一百四十里。長山峻嶺二黎錯居其間。而五指腹心、盡爲黎據群岡之中。定安尤險、稍或撤(徹)備。門庭皆勍敵矣。頃因辛丑之亂、擧兵討平。事雖大定險終在、夷議者欲於羅活崗據以重兵斷其往來。成(竄)伏。噫必如是而後爲久安之計乎。福洋烽火門寨設于福寧州。所轄官井埕羅浮爲南北中三哨。後官井添水寨。則又以羅江古鎭分爲二哨。是在烽火官井(井)當會哨者五。小埕水寨設于連江。所轄。安○(閩)鎭北菱焦山等七巡司爲南北中三哨、是在小埕、當會哨者三。日南水寨設於莆田。所轄冲心浦禧岑武等所司爲三哨。而文澳港則近添設於平海之後、是在日南。當會哨者四。浯嶼水寨設于同安。上自圍頭以抵日南。下自井(井)尾以抵銅山。大約當會哨者二。銅山水寨設於漳浦。北自金山以接浯嶼、南自梅嶺以接廣東。大約當會哨者一。由南而哨北。則銅山會之浯嶼、浯嶼會之日南。日南會之小埕。小埕會之烽火。而北來者無不備矣。由北而哨。南則火烽會之小埕。小埕會之日南。

〔遼陽〕滿洲奉天省にあり、太子河右岸の州城にて、近くは、明治三十七年七月末より九月に亘りて、此の地に日露兩軍の激戰あり、九月四日、我が軍遂にこれを占領せる等を以つて知らる。

〔博多〕筑前國博多にて今福岡縣福岡市に併せらる。

〔和泉〕五畿の一國にて今大阪府の管內也。

〔占城〕三才圖會に「占城漢林邑也」とあり、今の交趾支那を云へり。

〔普陀〕浙江省寧波府の一海島の名也

〔五穀之饒〕五穀は稻黍稗麥菽の五種の總稱にして、孟子に「后稷敎民稼穡、樹藝五穀」とありて生民に缺くべからざる糧食の料也、依てこれの饒は卽ち農民の豐かなれるを云ひし也。

〔魚鹽之利〕魚をすなどり、鹽をとる利益のこと也、史記に「通商工之業、便魚鹽之利、而人民多歸齊」とあり、こゝには前の五穀云々の句に對して海人の利益あるを云ひし也。

日南會之浯嶼。浯嶼會之銅山。而南來者無不備矣。哨道聯絡勢如長蛇。防禦之法其(豈)能踰此耶。總計八閩之地。二面當海者二。興。泉是也。一面當海者二。福。漳是也。其要害地。如晉江深扈獺窟興化沖心平海龍溪海門漳浦島尾南靖九龍寨溪是也。然莫有如福寧之尤險者。三面孤懸海中。如人吐舌。賊入必首犯之。舊寨設於州。東北六十里。三沙海面。後焦弘倡議棄徙松山。今必復舊而後可乎。浙洋沿海舊設四總。今增爲四參六總矣。四參者杭嘉湖一。寧紹一。台一。溫一也。六總者定海昌國臨觀松海金盤海寧也。悉其防禦之制。自內達外有三重焉。會哨于陳錢。分哨于馬蹟。羊山普陀爲第一重。沈家門馬墓之師爲第二重。總兵督發兵船爲第三重。備至密也。乃若定海者是寧紹之門萬(戶)舟山者。又定海之外藩。其地則故懸治也。爲里者四。爲嶴者八十有三。五穀之饒。魚鹽之利。可供數萬人。不待取給于外。非若普陀諸山比也。國初遣昌國衞於其上。屯兵戍守。誠至計也。信國經略海上。以其民孤懸徙之內地。改隷象山。識其小而未見其大也。蘇松爲畿輔望郡。濱于大海。自吳淞江口以南黃浦以東海壖數百里。一望平坦。皆賊徑道○(徃)因不能禦之于海。致賊深入。其禍慘矣。今建議者曰。松江之有海塘而無港口者則自上海之川沙南滙(匯)華亭之靑村柘林。凡賊所據以爲巢穴者。各設陸路把總以屯守之。而金山界于柘林乍浦之間。尤爲直浙要衝。特設總兵以爲陸路各將之領袖。又于(於)其中添設遊兵把總一員。專駐金山。往來巡哨。所以北衞松江而西援乍浦也。至于蘇之沿海而多港口者。如嘉定之吳淞大倉之劉家河常熟之福山港。凡賊○(舟)可入者各設水兵把總以堵截之。至于崇明孤懸海中。尤爲賊所必經之處。特設參將。以爲水兵各將之領

〔滄溟〕青海原を云ふ。

〔北狄〕北方のえびすを支那にて云ふ語也、杜審言送高郎中北使詩に「北狄願和親、東京發使臣」などと見えたり。

〔藩籬〕まがき也、門戸の意也。

〔洪武初〕洪武は明太祖の時の年號にて、其の元年は九十八代長慶天皇の正平二十三年に當れり。

袖。而又于(於)中添設遊兵把總一員。分駐行治營前一沙。往來巡哨、所以遠哨海洋而遮蔽港口也。外内夾持。水陸兼備。上之可以禦賊于外洋。下之可以循塘而拒守。亦既精。且密矣○(鴻書無此六字)乃若淮陽二郡介於江淮之間。東瀕大海。三面隄防。考其形勢起自東南蓼角嘴姚家蕩。綿延四百里。除安豐等三十六場俱在腹裏。其爲要害之處乃(鴻書曰未爲要害要害之處乃)通州也。狼山也、楊樹港裏河鎭也、餘東餘西等場也。蓼角嘴呂四場也。掘港新閘港也。廟灣劉家庄金沙場也。其尤要者有三。曰新場。爲其出入至近逼楊州也。曰北海所。爲其通新閘港且有鹽艘聚泊也。曰廟灣。爲其巨鎭而通大海口也。須設三把總以駐之。仍用陸路遊擊一員駐劄海安。則東可以控狼山通州海門之入。而西可以捍禦楊州矣。倭患之作、嶺嶠以北達于淮楊。靡不受害。而山東獨不之及者豈其無意于此哉。(鴻書無此八字)良以山東之民便鞍馬。不便舟楫。無過海通番之人爲之嚮導接濟耳。所慮者登萊突出海中。三面受敵。且危礁暗沙不可勝數。非諳練之至。則舟且不保。何以迎敵而追擊乎。故安東以北若勞山赤山竹篙旱門劉公芝界八角三(沙)門沙(三)山諸島。乃賊之所必泊。而我之○(所)當伺者。若亡蓬頭槐子口橋鷄鳴嶼夫人嶼金勞石倉廟淺灘亂磯。乃賊之所必避而我之所當遠者。當事諸臣無恃其不來。恃吾有以備之。造舟選卒。練習故事。將來廟堂。或脩海運以備不虞。亦大有賴焉。獨禦寇云乎哉。遼東古。營州地也。皆(其沓)爲沙漠花當告列迷諸部落在焉。其面爲滄溟。其餘氣爲朝鮮。國初設瀋陽遼陽三萬鐵嶺四衛。統于開元以遏北狄之衝。金復海蓋旅順諸軍聯屬海濱以防島夷之入。東北藩籬。可謂固矣。洪武初。倭奴以玩南方之心。而玩遼東。遼人以

〔山海關〕直隷省の最東北部にて、奉天省堺に接す、有名なる萬里の長城は、こゝより發し甘肅省昌府の岷州に至る。

〔程新〕明朝の人、字は彥實、洪武中、河間を戍る、景泰中四川參政に擢でられ、天順成化の交、南京兵部參贊機務に累進す卒して、太子少保を贈り襄毅と謚す。

〔故事〕昔ありし事を云ふ、即ち先例也、漢書に「明習故事」「奉使不辱命」などとあり。

〔議將〕兵を統率する方略を謀るを云ふ、將は統率の義也。

禦北狄之法。而禦倭寇。斬滅無遺。海氛蕩熄。劉江金線島之捷。是已。二百年來邊備如故。倭敢邇犯哉。但地方千有餘里。馬步九萬員名。止藉山海關一路饋餉。我朝北都燕。而遠漕江南粟。又自京師達于遼陽。飛輓不繼。何以食之。此其患非渺小矣。邇者登萊運米達遼。甚便。惜未多耳。愚謂國初軍屯商中之制。至爲精當。而大壞極敝。司國計者當深念而亟圖之。不當專責幕帥而已也。

二字闕 禦寇要地

漳之月港向爲倭之窟穴。今改設海澄縣於防禦。亦爲得策矣。云云

禦倭之船當高大。高大則我能衝壓彼。彼舟小不能當我也。我之長技在火器。在長兵。在筅。筅居前而夾用長兵火器。斯爲善用長技者矣。譚戚二公敗之于仙遊。驅出其巢穴。盡殲之于廣東之界上。用此法也。濟倭之人。在士夫家之門幹。在我學校中。一一無恥。生亦或利倭之來。相與將迎而羽翼之。如所謂程新。所謂朱濼載者。則軍門既嘗正法。而予嘗黜革其一二示警戒矣。是在後來者加之意。時倣循故事振飭焉。海氛庶可息矣。

禦倭夷總論

禦倭之策。謹條其事之大者。蓋有七焉。一曰議將。二曰議守令。三曰議兵。四曰議財。五曰議援。六曰議守。七曰議防海。此七議者。固游談之常言。而當事者所易厭者也。然而不可易也。云云

自明興以來。防倭之法備矣。當是時。信國江夏築城。起自登萊至浙。沿海凡五十九城。費非不甚大也。籍民丁四之一以戍人。非不甚勞也。設置衛所。間以烽墩。其故基纍然猶有存者。役非不甚

〔聖祖〕清朝第四世仁皇帝を云ふ、姓は愛親覺羅、名は玄曄、世祖の第三子、康熙帝として有名也。

廣也。然且爲之。亦見倭之不可不防。而聖祖之遠謨。創始慮終甚深遠也。

異稱日本傳 卷中五 終

異稱日本傳　卷中六

武備志卷八十六　陣練制　練　教藝三　防風茅元儀輯

劍

固知。中國失而求之四裔。不獨西方之等韻。日本之尚書也。

刀

茅子曰。武經總要所載刀凡八種。而小異者猶不列焉。其習法皆不傳。今所習惟長刀。腰刀。腰刀非團牌不用。故載於牌中。長刀則倭奴所習。世宗時進犯東南。故始得之。戚少保於辛酉陣上。得其習法。又從而演之。幷載於後。此法未傳。時所用刀制略同。但短而重。可廢也。

今按。戚少保戚繼光。辛酉明嘉靖四十年。當日本正親町天皇永祿四年。影流日本劍術者流名也。影當作陰。凡日本自古雖多撃劍者。源義經稱絕軏。鞍馬寺有僧正谷。寂寞無人之境也。昔權僧正壹演嘗修行佛道于此。故名僧正谷。出眞言傳。世傳。義經少年避平治之亂。到僧正谷。逢異人。異人教以劍術。義經善習刺撃之法。其後劍客居多。及乎足利氏之季有日向守愛洲移香。磨[illegible]刃年久。詣鵜戸權現祈業精。夢神顯猿形示奧祕。名著于世名家曰陰流。其徒上泉武藏守藤原信綱用

〔鞍馬寺〕山城國愛宕郡鞍馬村にあり松尾山と號す、天台宗にて、延暦寺末なり、寶龜元年鑑眞の開基也、源義經の持佛なりし地藏堂、又、義經が禪師阿闍梨覺日に從て學びし處たる東光坊等皆こゝにあり。

〔僧正谷〕鞍馬寺本堂の西北十町餘に在り、義經の劍を學びし處と傳ふ。

〔鵜戸權現〕日向國南那珂郡鵜戸村字宮浦に在り、祭神鵜草葺不合尊、今官幣大社に列す。

〔上泉武藏守信綱〕劍道上泉流の祖にして、小笠原宮内大輔氏隆に就きて學び、後ち自ら一流を工夫せり。

影流之目録

猿飛

此手ハてきニ寄色しはなる太刀なり

虎乱青岸陰見

レ心損益之。號二新陰流一。有二猿飛。猿囘。山影。月影。浮船。浦波。覽行。松風。花車。長短。徹底。礒波等手法一。

茅氏舉二猿飛。猿囘。山陰。虎飛。青岸。陰見之名一而收二入國字一。傳寫之誤。謬草有二缺畫一。

影流之目錄　猿飛　此手ハテキニスキレハ意分太刀タリ　虎飛青岸陰見　又敵ノ太刀ヲ取候ハンカヽリ何造作モナウ先直偏カラス彼以大事子切ヲ意婦偏幾ナリイカヽニモ法ニニキリテ有偏シ　猿囘此手モ敵多チイタス時ワカ太刀ヲテキノ太刀ア者ス時取偏ナリ初段ノコトク心得ヘシ　第三山陰　蓋武備志所レ載有二缺誤一。大抵應レ如レ是。

又卷八十七　陣練制　練二十　教藝

鐵鈀

紀効新書曰。此器自有二倭時始用一。在二閩粤川貴雲湖一皆舊有レ之。而製不レ同。乃軍中最利者。

又卷二百二十三　四夷一

曰。日本。日本不レ患二于古一而患二于今一。自二元世祖以二八荒來王之威一。而不レ能レ加二于日本一。日本將二日肆一。天道然也。幸一海爲二之限一耳。然其威有レ所レ加。俱必越レ海而及レ之。故不三以爲二難也。國家之患曰二南倭北虜一。

又曰。日本雖下屢肆二啓疆一。然志在上レ通レ市。得二其道一可二顧指二使之一。

祖訓四夷條

正東偏北

日本國雖レ貢實詐。暗通二奸臣胡惟庸一。謀爲二不軌一。故絕レ之。

〔新陰流〕神陰流なるべし、神陰流は上泉伊勢守秀綱の創めたる劍術の流派也、此の流の祕歌に「いづくにも、心留らば棲かへよ、ながくは又も本の」故鄕といへり。

〔元世祖云々〕元の世祖、姓は奇渥温氏、名は忽必烈、鐵木眞の孫也、茲は卽ち弘安の役を指したる也。

〔通市〕通商をなすをいふ。

〔不軌〕軌は法（ノリ）也、國家の法を守らざること叛逆といふに同じ。

日本國
種子島
葉活島
南浦葉島
硫黄島
琉球国
隅島
七島
鷹島

庄内
志武志
内浦
根下口
小島
山川港
向島
坊津港
泊津港
久志港
秋目港
片浦
小松原
薩摩
天草港
天
樺島
五島

自護屋一百六十里海至壹岐壹岐一百六十里海至對馬自對馬二百一十里至朝鮮西地登呼

和泉
内河
土佐
記伊
南海道六州
讃岐
淡路
阿波
白
石
淡路島
伊豫
柄

五畿界
山城倭京
大和
攝津
大坂
福島
伊勢穴澤
淡水洲
因幡
伯耆
山陰道八州
丹波
丹後
河口
河間峽
次磨
明石
淡路
高沙洲
周防
山陽道八州
播磨
備中
備後
長門
美作
安藝

遠江
駿河
相模
伊勢
東海道十五州
參河
伊勢乃皇大神所居
志摩
武藏
上總
尾張
安房
伊賀
常陸
下總
石見
信濃
伊豆
近江
美濃
但馬
隱岐
越前
出雲
越中
能登
備前

甲斐

下野

東山道八州

上野

飛驒

出羽

陸奧

北陸道七州

加賀

若狹

佐渡

越後

〔倭姫命〕垂仁天皇紀に「皇后日葉酢姫命生三男二女、云々、第四曰倭姫命」とあり。
〔菟田筱幡〕大和風土記に「宇陀郡篠幡庄、御杖神宮、所祭非正魂靈、倭比賣命戴天照大神、爲御杖、至此地、仍尋御宮地、經三月、終爲神戸、延喜式神名帳云、宇陀郡御杖神社」とあり。
〔廻美濃〕通釋に「儀式帳云、次美濃伊久良賀宮坐」とあるに當れりとなし、美濃國古蹟考に「伊久羅大神在大野郡伊久羅村」と云へり。
〔入近江國〕通釋に「儀式帳云、次淡海坂田宮坐」に當るとし、解に坂田

今按。右日本圖甚多訛。方隅倒置。文字差謬。不頗序正。唯伊勢乃皇大神所居之語爲是。皇大神者二所大神宮摠稱也。二所神德洋溢宇宙。故雖華人知其所居之地不失事實。天照大神居伊勢者自垂仁天皇時始。按。日本書紀曰。垂仁天皇二十五年三月倭姫命求鎭坐大神之處而詣菟田筱幡。更還之入近江國。東廻美濃到伊勢國。時天照天神誨倭姫命曰。是神風伊勢國則常世之浪重浪歸國也。傍國可怜國也。欲居是國。故隨大神教其祠立於伊勢國。一云隨神誨。丁巳年冬十月甲子。遷于伊勢國渡遇宮。丁巳年。垂仁天皇二十六年也。大神鎭坐事。又詳見鎭坐傳記倭姫命世記等書。豐受大神居伊勢者。鎭坐傳記曰。御間城入彥五十瓊殖天皇（垂仁天皇也）三十九歲壬戌止由氣之皇神（豐受大神也）天降于丹波國余佐郡眞井原。泊瀨朝倉宮御宇天皇（雄略天皇也）廿一年丁巳冬十月一日倭姫命夢。天照大神誨覺。迎止由氣大神。立祠於伊勢國度遇之山田原。爾來豐受大神與天照大神合明齊德。自垂仁天皇二十五年至雄略天皇二十一年。該四百八十二年。或曰。天照大神稱皇字。豐受大神不稱皇字。然但謂皇大神者二所大神也。永仁年中數有此議。詳見皇字沙汰文。其略曰。皇號源起天祖。流傳王家。德侔天地則稱之。義同太虛則號之。夫兩宮者。天神地祇之大宗。君臣上下元祖。天下大廟也。國家社稷也。長養萬物。照臨群品。故曰皇大神。上古以來祕記。貞觀延喜式文。延久承德宣命。稱兩宮皆曰皇。

又卷二百三十

四夷八

日本考

日本古倭奴國。在東海中。地分五畿七道二島。又附庸國百餘。大者五百里。小者百里。最强大桀黠。漢滅朝鮮通使。稱王者三十餘國。其後天村雲尊立。累傳皆稱尊。神武天皇立。累傳皆稱天皇。亦間立女王。時與中國通。唐咸亨初。改號日本。元世祖使趙良弼招之。不至。遣唆都范文虎將十萬兵往征。至五龍山遭風舟覆軍盡沒。終元世絕不通。國朝洪武二年倭寇山東淮安。明年再入轉掠閩浙。上遣趙秩語其王良懷。爾能臣則來。毋患苦吾邊。不能則善自爲備。良懷言。蒙古嘗使趙良弼好語餂我。襲以兵。今使者得毋良弼後乎。其亦將襲我也。欲刃之。秩爲具言。所以來宣國家威德耳。豈狙汝耶。良懷氣沮。乃遣僧隨秩。奉表稱臣。入貢。上亦遣克勤仲猷二僧往諭。然其爲寇掠自如。瀕海郡縣迄無寧歲。乃下令造海舟防倭。德慶侯廖永忠請備輕舸以便追逐。從之。七年來貢。無表文。其臣民(氏)久私貢。並却之。九年表貢。語謾。詔詰責之。十三年再貢。皆無表。以其征夷將軍源義滿所奉丞相書來。書倨甚。命鐲其使。明年復貢。命禮臣爲檄數而却之。已復納其貢艘中。助逆臣胡惟庸。惟庸敗事發。上乃著祖訓。示後世。毋與倭通。而令信國公湯和江夏侯周德興分行海上。視要害地築城設衛所。摘民爲兵。戍之。防禦甚周。倭不得間。小小入與我軍相勝敗。永樂元年。王源道義遣使入貢。上賜冠服文綺給金印。道義稍捕獲諸島寇來獻。賜賚甚豐。封其山。碑而銘之。予勘合十年一貢。八年道義死。子源義持立。遣使往封。頃之我兵獻海上俘。其首皆倭人。羣臣請誅之。上釋歸。璽書下義持。爾父畏天事大。職貢不愆。先烈之不圖。而輕于上國。爾罪在必討。朕所以隱忍者未忘爾

郡宇古村坂田明神所在の地とせり。

〔間立女王〕四十一代持統天皇、四十二代元明天皇、四十四代元正天皇、四十六代孝謙天皇（重祚四十八代稱德天皇）等を云へり我が國女帝の始めは三十五代皇極天皇を以て初とす

〔王源道義〕足利三代義滿を云へり、義滿は義詮の子にて、幼名春王、剃髮して道宥または道義と號せり。

〔八年道義死〕應永十五年に當る、此の年五月六日義滿薨ず。

〔子源義持立〕義持の將軍となれるは義滿薨去十二年前應永二年六月のことなりとす。

〔源義敎〕足利第六代の將軍義敎也、義滿の四子、初め薙髮して義圓と稱し、還俗後義宣と云ひ更に義敎と改めたり、法名普廣院道詮顯山大居士と號す。

〔成化〕明憲宗の時の年號にて、其の元年は、後土御門天皇の寬正六年に當れり。

〔王源義澄〕足利十一代將軍義澄也、左兵衞督政知の二子、義政の養子となる、初名義遐、又義高、後ち勅命にて義澄と改む、一に阿波御所と稱す、法名法住院清晃旭山大居士と號す。

父之恭耳。爾其思之。義持奉表謝罪。禮其使遣歸。未幾復寇遼左。都督劉榮大破之。初榮偵倭至即伏兵望海堝。而別遣奇兵斷其歸路。倭中伏奔。捕馘無孑遺。當是時。我方招來。諸島夷絡繹海上。倭乘爲欺詐。瀕海復騷。賴是捷遂戢。論功。封榮廣寧伯。宣德七年以日本貢久不至。命中使諭其王源義敎。明年來貢。自後遞貢遞掠。備嚴則貢。得間則掠。與之期不遵。我亦取羈縻示寬大而已。倭益肆無忌。至焚官庾民舍。縛嬰兒竿上。沃以沸湯。卜孕婦男女。剖視賭勝爲樂。慘毒不忍言。至成化時。廷臣始有發憤議却其貢者。而竟格不行。正德四年王源義澄遣宋素卿來貢。素卿者鄞人朱縞也。逃入倭。有寵於其王。易姓名充使。其族人相與耳目爲奸利。守臣白發之。禮臣恐失外夷心。置不問。素卿厚賂閹璫。賜飛魚服遣歸。嘉靖二年再奉使。至是時國王源義植孱。諸島爭貢以邀利。大內藝興遣宗設謙道。先素卿至俱留寧波。故事夷使以先後至爲序。市舶中官賴恩墨(ムサボリ)素卿財。先素卿。宗設大忿相讎。殺戕指揮劉錦袁璡。大掠寧波。奪舟去。巡按御史以聞。禮臣仍右素卿以給事御史言。乃下素卿獄論死。沒其貲。絕貢者十七年。至嘉靖十八年。其王源義晴復貢。乞易勘合還素卿貲。不許。仍申約。貢必如期。舟三。人百。不者却勿受。夷性婪違約如故。內地奸豪往往與爲市。不償直。夷索逋急則恫喝。官府以縱寇爲辭。兵出則陰泄之倭。速其去。且樹德也。如是者久之。倭大恨言。我挾王貲而來。不得直何以歸報。因盤據島中。我亡命無賴及小民。迫於貪酷饑寒。困苦者咸相率從亂。東南之禍大作。於是朱紈以巡撫涖治之。紈日夜飭兵。覈料察上章。暴勢豪交通罪。奸謀稍解。紈竟爲豪所中自殺。賊益猖獗。三十一年殘浙東。明年犯太倉。破上海崇德嘉善諸邑。時王忬爲巡視。忬

經略摘發頗有緒。旋移大同去。李天寵代。將則盧鏜湯克寬俞大猷。是時倭至無虛月。屯據柘林川沙窪靑村陸涇壩諸處。四出流剽。而柘林賊最劇。鏜戰孟宗堰。大猷戰金山衛。天寵合諸將兵。戰烏程縣之璽墩。皆不利。別將李逢時率山東兵。戰新涇橋。小勝隨大敗。三十三年張經爲總督。經前總督兩廣有威惠。計調廣兵禦倭。兵未集。而工部侍郎趙文華以禱海至。文華素貪。緣大學士嵩。貴幸顧指經。經自以大臣位其上。自重不爲下。文華屢促出師。經以兵機祕業已刻師期不告也。文華遂劾經養寇。幷及天寵。詔逮訊。時經已與賊大戰王江涇破走之。斬首千九百八十有奇。進攻陸涇壩賊。又敗之。斬首二百七十有奇。焚其舟三十餘艘。倭大創業。上疏自理。不聽。竟論死西市。以周琉代經。胡宗憲代天寵。琉未幾去。以楊宜代。屬文華督察其師。倭來者益多。大衆掠江北焚漕舟。文華盛集兵。戰于陶宅敗績。遂還朝。應天巡撫曹邦輔再戰再敗。惟蘇松參政任環戰稍捷。賊別部自日照登掠贛榆。自上虞登掠高埠。皆不滿百人。官兵莫能禦。高埠賊轉掠浙西南。直破南陵溧水。橫行數千里。殺傷無算。至蘇州乃滅。諸將大猷等逐賊海上。頗有斬獲。而閩廣倭大至。三十五年楊宜罷去。宗憲代。阮鶚代宗憲。文華復出督師。時浙賊惟陳東最强。徐海後至與之合。參將宗禮率所部河朔兵九百人與戰於崇德。三遇三克。追踰橋。橋陷兵潰。禮死之。賊進圍鶚於桐鄉。鶚固守不能拔。乃解去。而宗憲欲攜二賊。乃遣人至海所若爲好語者。東疑之。宗憲則厚賂海。使執東自贖。海許諾。卽計擒東及其黨麻葉等百餘人以獻。而自率其衆別營梁莊。官兵遂圍東巢盡殲其餘黨。進攻海於梁莊。海死。別部據舟山。俞大猷攻之。未下。會夜大雪。大猷督兵進。賊拒戰敗歸巢。擁柵自固。我兵

〔李天寵〕淸朝の人、字は世來、鑑堂と號す、光地の猶子、康熙乙未進士となり、編修に官す、史館にあること二十年也。

〔俞大猷〕明朝晉江の人、字は志輔、嘉靖十四年の武會試に擧す、世職百戶たり、世穆二朝に歷仕して屢戰功を立て、後府僉書に至り、車營訓練を領し、三疏して歸を乞ひ卒す、時に萬曆元年也、左都督を贈り武襄と諡す。

〔張經〕明朝侯官の人、字は廷彝、正德十二年の進士、嘉興縣に知たり、嘉靖中累遷して右都御史兼兵部右侍郎に至り、禦寇の功を積む。

縱火焚之、斬首百四十餘級。餘悉死巢中。兩浙平。其明年末王其主直者徽人也、嘯聚海上。能號召諸夷、治大船、巢五島中。奸商王激・葉宗滿・謝和・王清溪等、共集衆與相署置。倭之來皆直等導之。宗憲欲招之。乃迎其母妻至杭。供具犒慰甚厚。而先是鄞諸生蔣洲者、上書督府言。能說日本使禁戢諸夷、毋內犯。宗憲遣洲行。以諸生陳可願副之。至五島、直邀入爲言。日本方亂、往無爲也。誠令我輩得自歸、無難倭矣。遂遣養子毛臣同可願還。其自直語。而傳送洲至豐後島。其島主留洲稍爲傳諭諸島。居一歲、乃遣僧德陽及夷目四十人、隨洲來貢。直亦許俱至。而宗憲亦遣毛臣歸報。直所以遊說百端。至是直乃至。御史王本固疏言。不宜招直。異議閧然。直至、覺有異。乃先遣王激入見宗憲曰、吾等奉招而來。謂宜信使遠迎、宴犒交至也。今行李不通、而兵陳儼然。公毋誑我乎。宗憲曰、國法宜爾。毋我虞也。與約誓堅甚。直終不信。曰果爾、可遣激歸。宗憲立遣之。復以指揮夏正爲質。直乃使毛臣王激守舟。而身入見、頓首言。死罪。且陳其與洲戮力狀。宗憲慰藉甚至。令居獄中候命。疏聞。詔誅直。始宗憲本無意殺直。以本固爭之強。議者且謂其受直金、欲貸其死。故宗憲懼不敢爲請。直死、王激毛臣殺夏正、率餘衆據舟山、延之踰年乃解。三十八年倭寇江北。分數道入、巡撫李遂馳至如皐、與賊遇、日諭諸將言。宜及其未定擊之。遂曰。夫戰貴得地、賊方銳。而我軍未嘗見大敵、卽小挫。難復奕。約勒軍中、毋得言戰。賊益進。遂策曰。賊分道入。過如皐必且合。合則道有三。自泰州逼天長鳳泗、卽皇陵驚最要。自黃橋逼瓜儀、搖商都而梗漕。次之若從富安而東、海濱荒涼、擄掠無所得。至廟灣絕矣。乃吾得地時也。於是部諸將防遏、令毋得過天長瓜儀、而分兵綴賊

〔王直〕明朝、泰和の人、字は行儉、伯貞の子、永樂二年の進士、庶吉士より修撰に歷す、成祖より五朝に歷仕し、少傅兼太子太師兵部尚書に歷進し、老を乞て歸り、天順六年卒す、太保を贈り、文端と謚す。

〔豐後島〕豐後國也上古豐前國と倂せて豐國と云へり、文武天皇の時之を二分して初めて置けり古訓「トヨクニノミチノシリ」と云ふ。

〔其島主〕大友氏を云へり、この記事は明の嘉靖三十五年の條なれば、我が弘治二年に當れり、當主は義鎭の代也。

後賊果走南灣。遂欲以策困之。通政唐順之以視師至。促戰死傷甚衆。順之度不能克釋去。遂益合兵攻圍。賊困甚欲遁。副使劉景韶督兵焚其舟。賊救舟。我兵水陸攻之大潰。斬首八百餘級。江北倭悉平。其寇福建者張甚。連攻破寧德福清永福諸邑。巡撫阮鶚罷去。王詢劉燾游震得相繼撫閩。無尺寸功。宗憲檄參將戚繼光往援。時賊據寧德之橫嶼。阻水爲營。路險隘。官軍坐守踰年莫敢進。繼光軍令嚴。所部用命。至則令軍中人持束草塡河。進力戰大破之。生擒九十餘人。斬首二千六百餘級。焚溺死者無算。奪所擄二千七百餘人。歸乘勝勦福清牛田倭。又破之。繼光初至福清。邑令及父老請師期。繼光曰。吾兵疲且休矣。佯緩圖之。賊偵者歸告不爲備。其夜督兵行三十里。黎明破其巢。邑人尚未知兵出也。繼光歸。賊復肆。四十一年攻陷興化。總兵劉顯去賊一舍而軍不敢戰。後命繼光往。時賊方巢平海。聞繼光至欲逃。爲兪大猷所扼不得出。繼光督軍薄戰。大猷繼之。因風縱火。賊皆麇集中無脫者。支黨寇仙遊連江諸處。盡討平之。當是時微繼光。幾無閩。未幾廣東倭亦爲官軍所敗逃至甲子門。將奪舟入海。暴風盡溺。得脫者僅二千餘留屯海豐。兪大猷就圍之。賊食盡欲走。副總兵湯克寬伏兵待之。賊至伏發。擒斬幾盡。倭患遂息。自東南中倭以來十餘年間。中外騷擾。財力俱詘。生靈之塗炭已極。倭亦大傷至盡島不返。隆慶時。海上逋寇曾一本等。復稍稍勾引。入犯閩粤。我亦嚴爲備。旋至旋撲。非如嘉靖之季矣。始倭盛時。議者以市舶罷夷無所衣食故反。宜開市如諸蕃。參將大猷以爲。倭與諸蕃不同。諸蕃產物多。舶至而征之其利厚。倭之市僅一刀一扇。無他產可利也。而又生禍端。國初絕之。今忍開之乎。且倭能苦我者以我陸而禦之。主客反而勝敗

〔唐順之〕明朝武進の人、字は熙德、荆州と號す、寶の子、嘉靖八年の進士、官に出入すること四、嘗て累朝實錄を校する一、疏を上る三、嘉靖三十九年春汛期至る、疾を力め海に泛び、焦山を度り、通州に至る、巡撫の官に卒ず、崇禎中、襄文と諡す、著す所、文武儒稗六篇あり。

〔劉顯〕明朝、南昌の人、落魄して、叢祠に之き自經せんと欲す、神ありて之を護り死せしめず、間行して蜀に入り、童子の師となる、已に籍を冒して武生たり、初め副千戸を授けらる、累進して都督同知に至る。

〔神廟〕明十四世神宗顯皇帝を云へり、姓は朱、名は翊鈞、穆宗の子、帝の末年清太祖滿州に起り邊警日々に急也、在位四十七年。

〔平信長〕織田信長也、姓は平、信秀の二男也、天正五年右大臣に任じ、六年正二位に進む、こゝに「爲關白」とあるは誤傳也。

〔信長恐其叛云云〕こゝに「令爲攝津鎭守大將」とあるは、永祿十二年將軍足利義昭信長に謂て曰く、吾が爲めに一將の智勇兼備の者を置き以て京師を鎭せしめよと信長之を秀吉に命ずる處ありしを傳へ記せるものなるべし。

分也。吾以海爲塹、以舟爲家、明風候、嚴約束、來擊。去追、倭可創矣。舍此不圖、而輕與之市、爲國家生事、後必悔之。大猷習海上事、後多用其書。日本稱王者自源氏、歷橘氏平氏、以至秦氏、卽藤氏其秉政者曰關白。神廟初、平信長爲關白。雄黠能御下。有秀吉者、幼而賤。勇蹻辨才、販魚而醉臥樹下。信長出獵。馬驚。欲殺之。以辨而免。養爲義子、更名森吉。每出戰無不摧。信長遂據二十餘州。殺其主。而秀吉以賞輕頗怨望。信長恐其叛、乃令爲攝津鎭守大將。已而信長爲部將明智所弑。秀吉討平之、廢信長之子而自立。當是時乃萬曆十四年也。至十七年盡幷六十六州矣。嚴刑以御衆狡智以誘叛。故所嚮皆靡。亦以是失衆心。是年誘琉球不下。脅朝鮮。朝鮮遂入貢。次年將自朝鮮入寇。禁琉球、脅我貢、恐以洩其事。琉球相鄭迥密以聞。天子乃下詔責朝鮮。壬辰遂自釜山掠朝鮮戊戌秀吉死。始底定。詳朝鮮考中。其地北跨朝鮮、南盡閩浙、其西北至朝鮮也。自對馬島開洋、信宿至閩浙。順風旬月至。其主居山城。故稱山城君。山城之南爲和泉。又南爲沙界。沙界之東南爲紀伊。紀伊之東爲伊賀。山城之西爲丹波。左爲攝津。左之西爲播磨。右爲但馬。右之西爲因幡。丹波西爲美作。左爲備前。左之西爲備中、右爲因幡。右之西爲伯耆。美作之西爲備後之北境出雲之南境。備後之西爲安藝。出雲之西爲石見。安藝石見之西爲山口谷國。卽古之周防州也。山口之西爲長門關。渡在焉。渡此而西爲豐前。其南爲豐後。又其南爲日向。豐前之西北爲筑前。西南爲筑後。後之南爲大隅。大隅之西爲薩摩。豐後東南懸海爲土佐、爲伊豫。爲阿波。阿波相近懸海有淡路。土佐豐後之間爲佐加關。薩摩之北爲肥後。又其北爲肥前。肥前西懸海爲平戶。平戶之西爲五島。北爲多藝。爲伊

岐。極北則對馬島。諸島皆有酋長。山城君弱空名耳。倭不稟其號令。內相攻。強則役屬。而豐後最大。每歲清明後至五月。重陽後至十月。常多東北風。利入寇。故防海者以三四五月爲大汛。九十月爲小汛。其入寇多薩摩肥後長門三州人。次則大隅筑前筑後博多日向豐前豐後和泉諸島。俗喜盜。輕生好殺。每戰必單列緩步。爲蝴蝶陣。前一人揮白扇爲進止。木弓竹矢以骨爲鏃。刀極剛利。中國不及也。男子魁頭斷髮。黥面文身。婦人披髮跣足。簡用履。土氣溫燠宜禾稻桑麻。產金銀琥珀水晶硫黃水銀銅錢白珠青玉蘇木胡椒細絹花布漆器扇刀劍鎧甲。貢道故自寧波達於京。茅元儀曰。今我之禦倭者綦密矣。然假簡而實疎。兵渡於伍。將坑於法。器毀於敝。然猶可言也。唯是我之步卒不能當倭之利刃。倭之水師。不能當我之戰艦。故先正謂禦倭者必禦之於海。設會哨之法。謹戰艘之修。所以事責豫也。今防汛者以捕魚爲業。而舟楫颿檣。敝者莫葺。缺者莫補。自失其險。欲將安彊。至於絕貢市杜私販。固萬年長策哉。然亦未盡然也。天地不能違人情而制道。聖王不能違人情而制治。我之利於倭者一扇一刀。固適物之不貴。倭之利於我者絲纊封磁。乃資生之必藉。貢市絕則私販通。私販通則寇掠啓。私販則姦民藏致勾引之釁禍。譏察廢弛禁物之闌出。貢市通則舍門戶之險。延盜中堂均不可也。而私販者日衆。其將吏防閑適所以啓賄。冒法而入寄命人手。故昔則教之入寇。今且教之造船。使彼之船與我等便。彼之習船與我等巧。勝負未可知也。故不如稅販物。藉商名。嚴冒禁。核往返。收其什一。而挈其紀領。順其性欲而杜其佐凌。誠良法也。昔者肅皇帝之禁北虜馬市也。曰。再言者斬。今竟以貢市收五十年之奠安。制治因乎時耳。東南之禍在於旦夕。主國是者曷深長思哉。其地理語言。嗜好寇術。特詳之左方以告來者。

〔清明〕二十四氣の一にて、春分の次、穀雨の前に當り、陰曆三月の候に當る、陽曆にて四月五日に配せり。

〔揮白扇云々〕扇を軍陣に用ゐしこと我國にては異例に非ず、軍用記に「元來軍中の扇を用ふる主意は、夏暑氣の時は勿論の事、常にも軍中にては働き強き故、身熱する間、扇を使ひて熱をさまさざれば堪へ難し云云、只常の扇を用し也」とあり、後には軍扇とて別種のもの出來たり。

今按。天村雲尊立者非也。舊事本紀曰。天村雲命度會神主等祖。乃天孫之臣也。以天村雲命爲我天子之祖。茅氏等不知而作也。道義義滿法名也。義持義滿之子。義教義持弟也。義澄義教之孫。義晴義澄之子。日本稱王者自源氏歷橘氏平氏。以至秦氏。卽藤氏者甚誤也。源。平。藤。橘。秦。俱姓氏也。以源橘平秦卽爲藤氏。謬混之甚也。據紹運圖姓氏錄等書。源橘平俱皇別也。源氏有嵯峨仁明清和村上等諸源。嵯峨天皇弘仁五年五月八日。勅皇子八人賜源姓。自此以來有源氏。橘氏出自敏達天皇四世之孫葛城王。平氏出自桓武天皇皇子葛原親王之子高棟王。源橘平之先皆爲親王諸王。謂稱王者近是。秦氏蕃別也。秦始皇十一世孝武王男功滿王我仲哀天皇八年來朝。應神天皇十四年功滿王男融通王。率二十七縣百姓歸化。獻金銀玉帛等物。仁德天皇時。分置百姓于在在。卽使養蠶。織絹貢之。天皇詔賜姓波多。用秦字。言絹溫柔肌膚。(肌膚和訓波多)雄略天皇時。加大字曰大秦。(大秦和訓禹都萬佐。卽委積增益之義。古語拾遺曰。言隨積埋益也。)其先雖爲異邦帝王來於我朝臣僕也。謂稱王者非也。藤原氏神別也。出自天兒屋根命。與源橘平秦非同出自也。天兒屋根命二十一世之孫鎌足有功。賜藤原氏。奕葉爲宰輔。謂稱王者非也。平信長爲關白者非也。元龜五年十一月信長任右大臣。叙從二位。天正十年六月二日爲其臣明智光秀所弑。十月詔贈太政大臣從一位。無爲關白事。秀吉者訛也。豐臣秀吉微時。號木下藤吉郎。訛稱之。攝津鎭守大將者似是而非也。天正十一年秀吉更築攝津國大坂城居之。爲政於天下。十三年三月任內大臣。七月改姓藤原蒙關白詔。其略曰。名冀翔朝。威霆驚世。閑禁闕之藩屏。忠信無私。居藤門之棟梁。奇才惟異。夫萬機巨細百官總已。皆先關白。然後奏

〔嵯峨〕嵯峨源氏は嵯峨天皇の皇子融より出づ、融姓源を賜ひ、官左大臣從一位に至る、箕田、渡邊、松浦、赤田、瓜生等皆此の流也。

〔仁明〕仁明源氏は仁明帝の皇子多、冷、光、効、覺等姓源氏を賜はりしに始まれり。

〔清和〕清和源氏は清和天皇の皇子、貞純親王より出でたるもの最も名あり、長子基經六孫王と稱し村上天皇天德五年姓源朝臣を賜ふ初めとす、新田、足利、德川等は其の流也。

〔村上〕村上源氏は村上天皇の皇子具平親王より出づ、親王の子師房を始祖とす。

下一如舊典。後亦改姓豐臣。文祿元年當萬曆廿年。慶長三年當萬曆廿六年。

又卷二百三十一

四夷九

日本考二

茅子曰。日本之地不甚廣。而置道分州。列郡甚夥。蓋摹倣中華而侈言之者也。語言嗜好不明則無以知其情。舶船利器寇術不詳則無以制其變。故差次之。

疆域津要附　譯語　嗜好　舶船　利器　寇術

今按。疆域至於寇術下詳之矣。登壇必究第二十二卷亦有之。無異。但嗜好下。鄭若曾曰。日本所貴倭扇描金盒子類皆異物也。其所悅於中國者皆用物也。彼有資於我。而我無資於彼。忠順則禮之。悖逆則拒之。不易之道也。若狥其求而愆期。許貢無端互市斷斷乎不可也。

疆域

畿內部州五

山城大　大和大　河內大　和泉小　攝津大

右共統五十三郡

畿外部道七

東海道州十五

〔畿內部〕畿內の部の意也、畿內は獨斷に「京師、天子之畿內千里」或は說文に「天子千里地、以遠近言之則曰畿」とある意をとれり、孝德天皇大化一年正月初めて之を定む、當時の詔に「初修京師、置畿內國司郡司云々、凡畿內、東自名墾橫河以來、南自紀伊兄山以來、西自赤石櫛淵以來、北自狹狹波、合坂山、以來爲畿內」とあり〔大〕令及延喜式等に定制せる大國の意を取れるなるべし、令に「大國、守一人、介一人、大掾一人、少掾一人、大目一人、少目一人、史生三人」と職員を定めたり。

伊賀小伊勢大志摩小尾張大三河大遠江大駿河大伊豆小甲斐大相模大武藏大安房中上總大下總
大常陸大
右共統「一百一十六郡」
東山道州八
近江大美濃中飛彈小信濃大上野大下野大陸奥大出羽大
右共統「一百一十二郡」
北陸道州七
若佐小越前大加賀大能登中越中大越後大佐渡小
右共統「三十郡」
山陰道州八
丹波大丹後中但馬大因幡大伯耆大出雲大石見小隱岐小
右共統「五十二郡」
山陽道州八
播磨大安藝大美作大備前大備中大備後大周防大長門中
右共統「六十九郡」
南海道州六

〔中〕中國の意也、職員令に「中國守一人、掾一人、目一人、史生三人」とあり。

〔東山道〕七道の一山道とも云ふ、天武紀十四年九月に石川朝臣蟲名を東山使者となすとあるを以て初見とす文武天皇の時八國なりしが、後世十三國となれり。

〔陸奥〕今の岩代、磐城以東北の五ヶ國の古稱也、古代の道奥國を云へり

〔出羽〕今の羽前羽後の古稱也、和銅中陸奥越後を分ちて初めて之れを置けり。

〔若佐〕若狹國也、今福井縣の管下に屬せり。

紀伊大　淡路小　阿波大　讃岐大　伊豫大　土佐中

右共統ニ四十八郡一

西海道州九

筑前大　筑後大　豐前大　豐後大　肥前大　肥後大　日向中　大隅中　薩摩中

右共統ニ九十三郡一

島二

壹岐小　對馬小

共爲レ驛四百一十四戸。七萬餘課。八十八萬二千三百二十九。

津要

國有ニ三津一。皆商舶所レ聚。通レ海之江也。西海道有ニ坊津一。薩摩州所レ屬　花旭塔津　筑前州所レ屬　洞津　伊勢州所レ屬　三津惟坊津爲ニ總路一。客船往返必由ニ花旭塔津一。爲ニ中津一。地方廣闊。人煙湊集。中國海商無レ不レ聚ニ此地一。有ニ松林一。方長十里。名ニ十里松一。土名ニ法哥煞機一。乃廂先也。有ニ一街一。名ニ大唐街一。唐人留レ彼。相傳今盡爲レ倭也。洞津。爲ニ末津一。地方又遠。與ニ山城一相近。貨物或備或缺。惟中津無レ不レ有。貿易用ニ銀金銅錢一。憑レ經紀レ名曰ニ乃隔依理一。錢鑄ニ天順永樂洪武一。樣自ニ琉球高麗一得レ之　銀一兩換ニ二百二十三文零一。用ニ二文一抵ニ一分一。總ニ錢千一稱ニ一貫一。毎ニ米一石一常價一兩。中國斛可ニ三石一。絹段有ニ花素一。花者三四兩。素二兩。大紅七八兩。

〔坊津〕類聚名物考に「按坊津在ニ鹿兒島坤一」とし、倭訓栞に「或說に、防は坊に作るべし、蓋坊人の津なるべし」とあり。

〔花旭塔津〕今筑前國福岡市博多町也三代實錄に「博多是隣國輻湊之津、警固武衞之要、云云」とありて古來より外交の要地たり。

〔洞津〕伊勢風土記に「安濃津、仁德天皇乙亥、定ニ三津一其一也、夷方之蠻船、本邦公私之著船、湊入之船、各來ニ于此一、待ニ其風雲一、擧國之名湊也」とあり、伊勢國安濃郡安濃村の地也、今津市に編入す。

〔禿計〕月毎に光りの竭く故の義かと云ふ。

〔烏彌〕大水（オホミヅ）の約かとも云ふも、一に「阿麻」とも云へば、「天空」（アマ）の轉にて廣き義ともいふ。

〔依志在水古〕イシジヤリコ（石砂利子）の意なるべし。

〔羊埋俚〕俗に嫁の實家を「さと」（里）と云ふを誤聞して「嫁入」の義を取れるか。

・譯語

天文
- 天 天帝
- 雲 朽罔（クモ）
- 落雨 挨迷付魯（アメフル）
- 日 盧露
- 雨 挨迷（アメ）
- 月 禿計（ツキ）
- 霧 吉利（キリ）
- 星 付泥（ホシ）
- 雪 計伏六攸計（ユキ）
- 風 有味加前
- 霜 名未辭滿（シモ）

時令
- 早 來運梭挨發羅
- 晴 骨辣水（ケンミ）
- 後日 亞撒是（アサテ）
- 明日來 挨戌打俚（アスヨリ）
- 夜 搖落（ヨル）
- 冷 二字水（ニブシ）
- 昨日 傑奴（キノ）
- 後日來 挨殺核阿耶俚
- 午 非路（ヒル）
- 煖 挨撥水（ア）
- 前日 阿多堆（ヲトトイ）
- 晚 搖撒田午
- 今日 詐以呼雞華介喬
- 日暮 非故路路（ルクル）
- 明 挨介水（アカシ）
- 明日 挨迷亞失日（アス）
- 今日來 介阿耶俚（ケヨリ）

地理
- 地 大樣禿智（ノチ）
- 石 依水在水古（イシ）
- 山 羊賣爺賣（ヤマヤマ）
- 火 非（ヒ）
- 水 明東（ミツ）
- 鄉 羊埋俚
- 海 烏彌（ウミ）
- 江 打各計
- 沙 何吉大水

島名
- 山城 羊馬失羅（アマシロ）
- 豐前 字前
- 筑前 職骨前（チク）
- 和泉 因字米（イノミ）
- 大和 野馬多（ヤマト）
- 豐後 蓬哥
- 筑後 職骨骨（チク）
- 攝津 子祭困彌（ツノクニ）
- 河內 茄懷知（カハチ）
- 肥前 非前（ヒ）

〔讚者〕讚岐國也、古事記神代卷に「讚岐國謂ニ飯依比古ニ」とあるを初見とす、景行天皇の御世に神櫛皇子の國造となる、天智天皇の六年に讚吉に作り、次いで十年讚岐の字に改めたり。

〔陸奥〕陸奥也「チク」と訓めるは、「みちのく」と云へるを傳聞して下二言をとれるなるべし

〔宮島〕安藝國佐伯郡嚴島を云へり、古來嚴島神社の境域たれば、此の異稱あり。

〔種島〕大隅國熊毛郡にあり、今種子島と書く、古へ多禰或は多褹とも書けり。

伊賀　衣加
大隅　阿、思米
紀伊　乞奴苦藝
讚者　三箏基
武藏　木撒署
上總　茄米倭撒
若狹　懷加榭
長門　奴茄多
能登　奴朶
伯耆　花計
信濃　申阿農
下野　什麼子計
五島　我島
種島　他尼什麼
三島　密什麼

肥後　非谷
尾張　倭阿里
淡路　阿婆智
甲斐　既怡苦藝
山口　即周防羊馬窟諸
下總　什麼倭散
安藝　阿計
越後　日淸谷
但馬　達什麼
美濃　米奴
隱岐　和計
陸奥　窩收
男島　賀什麼
博多　花哈達

伊勢　衣舍
薩摩　撒子馬
駿河　絲能茄
伊豫　伊右
安房　阿窪
備中　避畫
越前　日知前
丹波　丹白
佐渡　沙渡
出雲　因字太
上野　康子計
多藝
小島　科什麼
竹島　他計什麼

日向　兒加
三河　迷茄懷
阿波　挨懷
相模　砂茄彌
美作　迷馬撒家
常陸　非大智
播磨　法里馬
加賀　坑茄
因幡　奚奴白
飛彈
伊岐　尤計
出羽　迷外
對馬島　則什麼
平戶

志摩　石馬
遠江　拖多彌
伊豆　因懇
土佐　拖撒
備前　避然
備後　避队
越中　日畫
丹後　丹哥
近江　多烏、米
石見　一哇彌
女島
宮島　迷挨什麼
速島　卒賴什麼
佐賀關

方向

〔東〕「ヒカシ」と訓むは「ヒムカシ」の約にて、「日向（ヒムカ）風（シ）」の義にて、風の名を本とすと云へり、風を「シ」と訓むは嵐（アラシ）旋風（ツムジ）など云ふにても知らるゝ如く、古言也、一に日頭（ヒカシラ）の略にて日の出づる義なりとも云ふ。〔南〕「ミナミ」と訓むは、正午太陽の位置する處になれば善く見ゆる義にれて「皆見」の意なりと云ふ。〔錢〕「ゼニ」と云ふは鬼を「オニ」訓を「クニ」等と訓むと同じく「セン」の音轉也。〔獨眼人〕片眼を「かんた」といへるは、「がんち」の轉にして、「眼一」（イガンチ）の約なりといふ。

東 熏加什（ヒカシ）　南 迷南來（ミナミ）　西 義西　北 計多（キタ）　前 日皆利婆

後 吾失利（シリ）

珍寶

金 空措尼（コカネ）　銀 失落楷尼（シロカネ）　珠 他賣（タマ）　錢 前移（ゼニ）　黃銅 中若佐（チウジャク）　紅銅 鶯更措尼（アカガネ）　水銀 明東楷尼（ミツ）　好

銅錢 姚禮善尼（ヨレセニ）

人物

皇帝 大利天王家利　官 大米烏野雞（ヤケ）　百姓 別姑常　公 翁知　大官 大大烏野雞　妻 猶浦翁妃

父 阿爺（オヤ）　母 發發（ハハ）　兄 挨尼（アニ）　嫂 阿尼尤尼（アニヨメ）　弟 阿多多（ヲト）　妹 亞尼多一沒多（イモ）　姉 亞尼（アネ）　孀 完多　子 英（ム）

宿哥（スコ）　姪 何義（ヲ）　女 莫宿眼（ムスメ）　孫 阿奚胡來　丈人 子多　丈母 子多　叔 何治王官老前（オチ キチ）　丈夫 壽山

婦人 倭家倒（ヲカタ）　老 禿古要介　女子 何奈公姑（ヲナコノコ）　後生 倭家達（ヲコタチ）　孩 歪鼻（ワラベ）　親春 親雷（ミシーイ）　姐夫 不哥迷　朋

友 道門大聖滿門大帝（トモタチ モタチ）　女壻 米哥（ムコ）　僕 三三字郎　小厮 歪皆水（アカシ）　和尚 才老烏柰　老實人 埋骨多

艱難人 胡奈故人門厥人　強盜 六宿鼻隨（スヒト）　瞎子 眉骨賴（メクラ）　獨眼人 密皎關鴻（カンタ）　倆 撫哥丁梭里　誰人

搭梭（タソ）　我 何埋俚阿奴利（ワレヲヲノシ）　徒弟 加食雞　財主妻 斗烏賣　生得好 眉眉月失眉眉姚水（メノ コ）　外甥 萌哥（シ）　長

子 雖解水　媳婦 嫌妙報　長 弔　年少 華蓋　主人 味某朶　生得醜 會歪失　聰明 刀哥（ト）　貴 他介水（タトシ）

賤 那塑羊騃　富 烏多哥　貧 腮東且　乞丐 寬需計　好淫 梭羅　年紀 一故多（イクツ）　癡子 英入骨水　村 孫拐

科水非計（サシヒキ）　賊 陸宿人（ス）

〔傷寒〕病の名、熱病の如くにして、熱重きもの、傷寒論輯義に「太陽病、或已發熱、或未レ發熱、必惡寒體痛、嘔逆、脈陰陽俱緊者、名爲二傷寒一」とあり。

人事

要 妓水水　不要 依也　立 達子　等待 埋亂　眠 羊達路烏將卒　拿來 未低吉反俚未得哥已　拿去 未

底千古　相攙 括計括箍　亂說 思量骨多莫話介反俚　看 覓見迷路　不送 何埋解邪賣　嬉 挨蒲　坐

移路阿將梭　病 伴埋依子　揖 科眉乃可民奈禮〇林按武備志圖二七字一今以二續說郛一補。　罵 寶彼計乃俚話鬟眼皮　馸 因彼計　罟 烏論

羊埋水烏鬚爺計　睡 密路　去 漫陀羅獨俚且多　在 何故伊虜何打路　不在 論速持躭　來 何耶俚吉人

便來 羊伴地何耶俚慢陀的如　回來 慢慢的耶俚　便去 密路　怪來 發下何耶俚法古　送與 扎面皮　愛

惜 搖落打滿　怕 倭蹉路路　出去 一一計　前行 殺雞倭　行 挨籠門　喜 一吸水毗羅打步　說話 未納

惹打俚　怠慢 羅利骨多罵山奴　飲 那慕　獨樂 哥賣　羞愧 番助山水水　喫 何賣利　安排 蘇路　不來

未且盧買矢　走 法古　快去 法古計　打人 生强達達个　借 麗路各夾　買賣 烏利加一　不喫了 禁

哥 喃嘛夫　莫怪 哥面乃逞　多喫酒 何賢鼻且　敎 何水尤路　喫酒 麻黑殺雞　那里去 陀姑移姑

添 所有踏踏　行路 的盆磨波　曉得 个个俚打夫火　賣 烏路無六　叫人 多奴　老實說話 罷多溢多　痛

一軒水　起身 倭達的接　多多喫了 前行哥　遊 西孫步　還了 諸也數　不曉得 指賴路不失打　殺 其奴

瞎咀郞　請人 家掃梱多　慢慢的 買得買得　害 天　不賣 烏魯賣加　怎麼 雞烏禮在　肚饑 動大路水

哭 乃古　多少 一故賴介　打 胡子　有情 亞姉吉乃　無情 亞姉吉乃乃水　醉 邀帶　換 皆賀　無工

夫 一孫櫸水　怪 發賴且多堅固　死 身大　腫 刺大　喚 加右　笑 歪罷　活 吉打　買 加利　輪 埋計打利

傷寒 雞骨　寫字 加計

〔甲〕鎧也。

〔麝香〕麝といふ動物の腹部にある脂肪のかたまりを精製して造るといふ香料也。

〔沈香〕熱帶地方に生ずる沈香木より製したる香料也、又た沈水香ともいふ。

〔鞋〕草鞋也。

〔箬帽〕烏帽子をいふ。

身體

耳 眉日　口 骨上　鼻 發奈　眉 賣尤　手 鐵　足 挨身　心 个个路　頭 客成賴　鬚 熏計　髮 揩迷夾

迷　肚 發賴　指 尤皮　爪 卒腱　齒 法

器用

小刀 驛過乃空客打乃　中刀 歪計柴需　大刀 閩中撻打奈　刀柄 脫介俚　甲 大買路　弓 油米　盒子 剛

白哥　紙 揩袂加美　硯 孫助俚箄力子　砂子 揩路依水　筆 粉地　墨 陳煤　薄紙 沃發子　扇 黃旗

鎖 哥利素　厚紙 沃速水　船 浮泥　針 快利法利　鑰匙 坑其　鑊 難皮　磨刀石 依水　泥銅扇 法古

黃旗　箒 花雞　泥金扇 空揩泥黃旗　箏子 發介俚　小箱 法哥　硯箱 孫助利法哥　酒盞 晒加藤計

鋸 拿剛鑿利　碟 曬賴沙賴　銀砵 失祿挨揩水　鏡 亢皆彌　枕 麻骨賴埋骨賴　麝香 射哥　漆 烏論

水　蓆 不奴　木香 木哥　傘 隔落隔曬　盤 何水雞　沈香 沈哥　筋 法水　碗 倭吉貼濤　酒瓶 哭笋

昆皮　梯 課水飛計　香 宜哥

衣服

衣服 乞麻俚　靴 骨都　鞋 水托里失其里　箬帽 搖娑俚　錦 歪帶　氈衫 迷奴　手巾 達昂個　綿布 木

棉　夏布 奴奴棉　被 伏思麻

飲食

茶 解素　酒 曬箕　白酒 明東曬箕　燒酒 隔辣曬箕　老酒 福祿曬箕　飯 密　飲酒 曬加乃　鹽 失河

收河　喫飯 密黍阿羅　醬 彌沙　米 科眉科眉　油 挨蒲賴　大麥 烏蒙崎　小麥 柯蒙崎　穀 慕米倭

米　羹 水路　豆 磨米　肉 恕恕　笋乾 大吉糯古　醬瓜 可羅米糯

花木　杉 松計　檜 丟那雞　松 埋止　梅 而婆水　芥 刼辣水　菜 奈　瓜 烏埋　蘼蕪 入骨水　茄子 乃沱皮

鳥獸　牛 胡水　狗 意奴　猪 家家　雞 抓泥揆地泥環多禮　鵝 解加　馬 烏馬　魚 遊河　蟹 指泥　虱 失辣水

羊 羊其　鼠 眠助未

數目　一 丟多子丟微咀多　一箇 个利　二 扶達子侒坦多　三 密子倏坦多　四 學子搖搖做　五 意子子雖雖多　六

後子　七 乃乃子　八 效子　九 個個乃子　十 多　十一 多多丟達子　五十 大　百 法古　千 借一貫

萬 慢亦

通用　有 挨路迷路　無 乃　好 高高的姚鎖盧　極好 明哥多　不好 出無乃　大 加小思姑奈何計　小 發餘　少

素古乃水　多 快都河河水　遠 多侯　近 的個　瘦 牙十大　短 迷加　細 相快大　枵 骨篩路　厚 挨卒

水　薄 溫卒水　歪貨 不高歪賴水　破 羊銭里里　不是 松山乃係　要緊 馬多合子　緩 慢大慢大　無

用　設計　多有 何何水　未 慢大　香 干牌水　臭 骨篩水

今按。譯語多訛。華人不通和語也。昔王仁以漢帝之苗裔自百濟來于我國。能通和語訓導國人。誠非後世之所及也。

〔梅〕（ムメホシ）と訓ぜるは、梅と梅干とを混同したるなるべし。

〔鵝〕鵝鳥をいふ。

〔干牌水〕カンバシとよむ。

〔王仁〕大日本史に「王仁百濟人、其祖曰狗、狗先曰鸞、出自漢高祖、狗始至百濟、因家焉、王仁博通經籍、應神帝十五年、百濟使阿直岐來貢良馬、云、王仁遂從而來、獻論語十卷、千字文一卷云々」と見えたり。

〔販去〕販賣するをいふ。

〔優人〕俳優をいふ

〔五經〕易、書、詩、春秋、禮記をいふ。

〔四書〕大學、中庸、論語、孟子をいふ。

〔川芎〕藥草、本名芎藭と稱す、蜀の川州の產を上品とすれば特に名とす古名をんなかづら高さ一二尺、葉は夏の芹葉に似て枝多し、莖葉共に淺綠色にして、香氣多し、秋月、花實あり、形狀當歸に同じ。

嗜好

絲所以爲織綢紵之用也。蓋彼國自有成式花樣。朝會宴享必自織而後用之。中國綢紵但充裏衣而已。若番舶不通則無絲可織。每百斤直銀五六十兩。販去者其價十倍。　絲綿髡首裸程不能耐寒。冬月非此不煖。常因匱乏。每百斤價銀至二百兩。　布用爲常服。無綿花故也。　綿紬染彼國花樣。作正衣服之用。　錦繡優人劇戲用之。衣服不用。　紅線編之以綴盔甲。以束腰腹。以爲刀帶書帶畫帶之用。常因匱乏。每一斤價銀七十兩。　水銀鍍銅器之用。其價十倍中國。常因匱乏。每百斤賣銀三百兩。　針女工之用。若不通番舶。而止通貢道。每一針價銀七分。
　鐵鍊懸茶壺之用。倭俗客至飲酒之後喫茶。已即以茶壺懸之。不許著物。極以茶爲重故也。鐵鍋彼國雖自有而不大。大者至爲難得。每一鍋價銀一兩。　磁器擇花樣而用之。香爐以小竹節爲尚。碗碟以菊花稜爲尚。碗亦以葵花稜爲尚。制若非觚。雖官窑不喜也。　古文錢倭不自鑄。但用中國古錢而已。每一千文價銀四兩。若福建私新錢。每千價銀一兩二錢。惟不用永樂開元二種。　古名畫最喜小者。蓋其書房精潔懸此以爲清雅。然非落款圖書不用。　古名字書房粘壁之用。廳堂不用也。　古書五經則重書禮。而忽易詩春秋。四書則重論語學庸。而惡孟子。重佛經。無道經。若古醫書。每見必買。重醫故也。　藥材諸味俱有。惟無川芎。常價一百斤價銀六七十兩。此其至難至貴者也。其次則甘草。每百斤二十金以爲常。　氊毯馬背氊王家用青。官家用紅。　粉女人搽面之用。　小食籮用竹絲所作。而漆飾者然惟古之取。若新造則雖精巧不喜也。小盒子亦然。　漆器文几古盒硯箱三者其最尚也。盒子惟用菊花稜。圓者不用。

今按。嗜好不甚遠。不自鑄錢者非也。古者朝廷設鑄錢司。鑄錢王思義略知之。詳見下引三才圖會下。

舶船

日本造船與中國異。必用大木。取方相思合縫不使鐵釘。惟聯鐵片。不使麻筋桐油。惟以草塞罅

漏而已（名短水草）。費功甚多。費材甚大。非大力量未易造也。凡寇中國者皆其島貧人。向來所傳倭國造船千百隻。皆虛誑耳。其大者容三百人。中者一二百人。小者四五十人。或七八十人。其形卑隘。遇巨艦難於仰攻。苦於犂沈。故廣福船皆其所畏。而廣船旁陸如垣。尤其所畏者也。其底平不能破浪。其布帆懸於桅之正中。不似中國之偏。桅機常活。不似中國之定。惟使順風。若遇無風逆風。皆倒桅盪櫓。不能轉戧。故倭船過洋非月餘不可。今若易然者。乃福浙沿海奸民買舟於外海。貼造重底。渡之而來。其船底尖能破浪。不畏橫風鬪風。行使便易。數日即至也。凡倭船之來。每人帶水四百斤。約八百碗。每日用水六碗。極其愛惜。常防匱之也。水味不同海水。鹹不可食。食即令人泄。故彼國開洋必於五島取水。將近中國。過下八山陳錢之類。必停舶換水。所以欲換者冬寒稍可耐久。若五六月蓄之桶中二三日即壞。雖甚清冽不能過數日也。海洋浩渺風濤叵測。程不可計。過山而汲亦其勞耳。盥頮沐浴海水山水亦可用。或云。浴海水令人膚冽近訪之不然。但黑肌膚而已。倭奴有一秘法。煮泉一二沸。置之缸缻。能令宿而不壞。然亦不過半月。久則不能也。其至普陀必登者非換水。亦非真欲焚香。乃覘其防虞實耳。

利器

刀大小長短不同。立名亦異。每人有一長刀。謂之佩刀。其刀上又插一小刀。以便雜用。又一刺刀長尺者謂之解手刀。長尺餘者謂之急拔。亦刺刀之類。此三者乃隨身必用者也。其大而長柄者乃擺導所用。可以殺人。謂之先導。其以皮條綴刀鞘佩之於肩。或執之於手。乃隨後所用謂之大制。

〔中國〕支那人が自國を呼ぶ誇稱也、大學に「唯仁人放流之、迸諸四夷、不與同中國」と見ゆ。

〔桅〕廣韻に「小船檣也、舟上帆竿」とあり、帆柱をいふ。

〔轉戧〕回轉し創むる也、即ち船を進むるをいふ。

〔缸缻〕風呂をかめと見誤りたるなるべし。

〔解手刀〕懷刀即ち鎧通をいふ。

又有小裁紙設機刀。出長門號兼常者最嘉。又有作貴游賞翫不拘大小。名雖爲刀其實無用
上等曰上庫刀。山城君盛時。盡取日本各島名匠封鎖庫中。不限歲月竭其工巧。謂之上庫刀。其間
號寧久者更嘉。世代祖傳以此爲上。
次等曰備前刀。以有血漕爲巧。刀上或鑿龍。或鑿劍。或鑿八幡大菩薩。春日大明神。天照皇大神宮。
皆其形著在外。爲美觀者。
如匠人製造之精。不論刀大小。必於柄上。一面鐫名。一面刻記字號。以爲古今賢否之辨。鎗劍亦然。
鳥銃原出西番波羅多伽兒國。佛來釋古者傳於豐州。造鳥銃一門。價二十餘兩。用之奇中。別州無此
妙。
制火藥亦得眞傳。用梧桐燒炭爲質。次取鹻硝。滾水煮過三次。硫黃擇明淨者爲勻。每銃用藥二
錢。多彈遠中。四季各有加減之方。一銃總按三彈。橫直分發。皆秘法也。

寇術

倭夷慣爲蝴蝶陣。臨陣以揮扇爲號。一人揮扇。衆皆舞刀而起。向空揮霍。我兵倉皇。仰首則從下
砍來。又爲長蛇陣。前耀百脚旗。以次魚貫而行。最強爲鋒。最強爲殿。中皆男怯相參。賊每日雞鳴起。
蟠地會食。食畢夷酋據高坐。衆皆聽令挾冊展視。今日劫某處。某爲長。某爲隊。隊不過三十人。每
隊相去一二里。吹海螺爲號。相聞即合救援。亦有二三人一隊者。舞刀橫行。薄暮即返。各獻其所劫
財物。毋敢匿。夷酋較其多寡而嬴縮之。每擄婦女夜必酒色酣睡。劫掠將終。縱之以焚。煙燄燭天。

〔血漕〕樋の事也、俗に血走りともいふ。

〔八幡大菩薩〕貞丈雜記に「八幡大神宮を、八幡大菩薩と菩薩號をおくり奉りしは、桓武天皇の御代也、勝尾寺の開成といふ僧に託宣ありしによりて菩薩號を奉らるゝ由申し傳へたれども云々、專ら弘法大師、傳敎の輩の菩薩號をなすゝめ奉りしなるべし」とあり。

〔波羅多伽兒國〕ポルトガル也。

〔長蛇陣〕常山の蛇勢の義、長常唐書相同じきを以て通用せり、首、中、尾の三段より成る陣也。

人方畏其脅裂而賊則抽矣。愚諂我民勿使邀擊。專用此術。賊至民間遇酒饌。先令我民嘗之。然後飲食。恐設毒也。行衢陌間。不入委巷。恐設伏也。不沿城而行。恐城上拋磚石也。其行必單列而長。緩步而整。故占數十里莫能近。馳數十日。不爲勞。布陣必四分五裂。故能圍。對營必先遣一二人。跳躍而蹲伏。故能空竭吾之矢石。火砲衝陣。必伺人先動。動而後突入。故乘虜長驅。戰酣必四面伏起。突遶陣後。故令我軍驚潰。每用怪術。若結羊驅婦之類。當先以駭觀。故吾目眩而彼械乘慣雙刀。上誑而下反掠。故難格。鉈鎗不露竿。突忽而擲。故不測。弓長矢巨。近人則發之。故射命中。斂跡者其進取也。張揚者其逃遁也。故常橫破舟以示遁。而突出金山之圍。造竹梯以示攻。而旋有勝山之去。將野逸則逼城。欲陸走則取棹。或爲以窖詐坑。或結稻草以絆足。或種竹簽以刺逸。常以玉帛金銀婦女爲餌。故能誘引吾軍之進路而擊爲吾軍之邀出。俘虜必閉塘而結舌。莫辨其非倭。故歸路絕恩施附巢之居民。故虛實洞知。賞豐降虜之工匠。故器械易具。細作用吾人。故盤詰難。向導用吾人。故進退熟。宿食必破壁而處、擇高而瞭。故襲取無機。閒常一被重圍矣。餌以僞贓而逸之。或被蓑頂笠。沮溺於田畝。或雲巾綸履蕩遊於都市。故使我軍士或愚而投賊。或疑而殺良。江海之戰本非其長。亦能聯艫舟。張帆羅。以容發吾之先鋒。措婦女。遺金帛以嚮退吾之後逐。凡舟之裙檣。左右悉裹布帛被褥。而濕之以拒焚擊交鬪。間或附遂而飛越。卽雷震而風靡矣。寇擄我民引路取水。早暮出入按籍。呼名。每處丐薄一扇。登寫姓名分班點閘。眞倭甚少。不過數十人。爲前鋒。寇還島皆云做客回矣。凡被我兵擒殺者隱而不宣。其鄰不知猶然稱賀。

〔衢陌〕町中の道路をいふ。

〔細作〕また細間ともいふ、またしもの即ち間諜也。

〔向導〕先頭の意、先に立ちて案内する者をいふ。

〔被褥〕しきものをいふ。

〔交鬪〕交戰に同じ鬪は「たたかふ」義也。

又卷二百三十六

四夷十四

海外諸國考

洪武二年遣吳用顏宗魯楊載等。使占城(チャンパ)瓜哇日本等國。

又卷二百三十九

四夷十七終

朝鮮考

朝鮮箕子封國、漢初爲燕人衞滿所據。傳至右渠。武帝攻殺之。置眞番、臨屯、樂浪、玄菟四郡。漢末公孫氏、晉高氏並據其地。高本扶餘別種人。改國號曰高麗。居平壤。卽樂浪也。已爲唐所破東徙。後唐時王建代高氏。幷有新羅百濟。地益廣。東徙松岳。以平壤爲西京。元至元中西京內屬。置東寧路總管府。畫慈嶺爲界。國朝高皇帝洪武二年王顓表賀卽位。遣符璽郎偰斯齎金印誥文。封顓爲高麗國王。使者入謝。上從容問。王居國何爲。城郭修乎。甲兵利乎。宮室壯乎。頓首言。東海之波臣。朝夕禮覺王甚恭。他未皇也。璽書諭王。佛法非所以治國。梁武後世之前車也。王其毋惑。以王君臨一方。而出令之無所。其何震之有。王國北接虜而南鄰倭。虜創于此。恐將逸于彼。倭狡而貪。出沒海上。且窺王虛實。朕私憂之。設險蒐乘以固吾圉。惟王念哉。今以經史諸書賜王。其悉朕意。中書省臣言。高麗使者往來私爲市。非法。請征其入而禁其出。不聽。五年顓請徙耽羅國所留蒙古人。及征蘭秀山逋

〔箕子〕東國通鑑に「殷太子箕子、紂諸父也、紂無道、比干諫而死、微子去之、箕子卽被髮佯狂爲奴、嘗曰、商其淪喪、我罔爲臣僕、及周武王伐紂、訪道于箕子、箕子爲陳洪範九疇云々」と見ゆ。

〔王建〕潁川の人、字は仲初、大歷十年の進士、大和中陝州司馬となる、韓愈、張籍と時を同じうし相友とし善し、樂府歌行の著あり。

寇。報詔。耽羅爾附庸也。蒙古亦人耳。爾何棄焉。通寇以朕命、命之傳、機可致。勿用兵。責之貢馬五十疋。道亡其二。使者以聞。及馬至無恙。詰之則使者所償也。上責其不誠却之。七年諭中書省臣曰。古諸侯事天子。比年小聘。三年大聘。五年一朝。九州外夷或世見而已。高麗去中國近。知經史禮樂。非他邦比。宜令三年一聘。不則比年聘。亟高麗貢獻數。使者溺海歿不返。甚失朕意。丞相其明以諭王。八年顓弑死。子禑嗣。貢不如期。却之。禑執其使周誼。仍勅遼東守臣絕勿通。十七年表請故王諡及嗣封。不許。十八年許之。明年貢馬千疋布萬匹謝。請易冠服。不許。指揮高家奴自其國市馬歸。言。禑辭馬商。上令給之。二十一年國相李仁人廢禑立王昌。歲中兩請入朝。皆不許。李成桂復廢昌立定昌國院君瑤。瑤嘗遣子奭來朝。奭未歸。而成桂廢瑤自立。王氏自五代至今。傳數百年絕。其國評議司表言。禑昌不當立。瑤昏虐失人心。國虛無王。僉成桂莫適與也。惟朝廷命之。上曰。彼夷耳。吾何誅。成桂更名旦。徙居漢城。已請更國號。詔仍稱朝鮮。二十八年入貢。表語謾。逮遣表者鄭總羈留之。令遼東絕朝鮮。旦老請子芳遠嗣。永樂元年賜冕服經籍。從芳遠請也。六年世子禔來貢。八年獻馬萬匹。助征虜。十三年表更立子祹爲世子。是年芳遠老請以祹嗣。宣德元年遣使賜祹五經四書。及性理大全綱目通鑑。因謂禮臣。是書有國家所當知。朕嘉惠遠人。故賜之。四年祹進海東青。制詔。珍禽異獸非朕所貴。其勿進。方物效誠而已。毋金玉器。祹再進。再諭之。已請遣子弟入學。不許。仍賜諸書。俾學于國中。正統四年建州夷酋凡察童倉進居朝鮮界上。別酋李滿住以爲言。詔問。祹亡何。凡察歸建州。祹表言。凡察以窮歸臣。臣遇之善。卿翼而遂飛。必索之。凡察復言。祹羈留其私屬。請

〔丞相〕君主を助くる義にて、執政の大臣の官名也，また宰相ともいふ、史記秦紀に「悼武王二年初置丞相」とあり。

〔五代〕唐滅びて、新に宋に至るの間即ち後梁の太祖より後周の大祖に至る四十三年間を稱す、我が醍醐、朱雀、村上の三帝の御代に當る。

〔宣德元年〕明の宣宗の世にて、我が明德三十三年、足利義持の時也。

〔正統四年〕明の英宗の世、我が永享十一年、足利義教の代也。

〔景泰元年〕明の景宗の世にて、我が寶德二年、足利義政の代也。

〔天順三年〕明の英宗の世にて、我が長祿三年、足利義政の代也。

〔弘治八年〕明の孝宗の時にて、我が明應四年、足利義澄の代なり。

〔隆慶元年〕明の穆宗の世にて、我が永祿十年、足利義榮の時也。

檄遣。不則懾以兵。詔兩解之。且慰藉禍。國家以王爲東藩。如凡察直夷畜之。何敢望王。彼其懷鳥獸心。去留無恒、王第善自備毋與較。景泰元年賜禍世子珦冕服。禍卒、珦嗣。三年卒、子弘暐嗣。稚而孱。遜其叔瑈。天順三年邊臣疏。瑈私與建州夷酋董山通、已又殺毛憐酋郎卜兒哈。累詔戒諭之。成化三年進海青白鵲。郤之。時方征建州。瑈遣中樞府知事康純等。率兵助王師。擒斬李滿住。及其部落遣使來獻俘。璽書褒嘉之。明年瑈卒。子晄嗣。六年晄卒從子娎嗣。復出兵助擊建州。捷聞、遣中使賚王金幣。幷及其將士。弘治八年娎卒。子㦕嗣。病風遜其弟懌。嘉靖二十三年懌卒。子峼嗣。未踰年卒、子峘嗣。時日本入寇。舟漂至朝鮮。及奸民往來海上私與倭市。峘輙捕以獻。上亦厚賜予、答其意。隆慶元年峘卒。從子昖嗣。李氏自成桂以來事朝廷恭。歲時朝貢外、慶慰報謝無常期。行李踵於道。王嗣立則使者往封。有大事則頒詔其國。他夷不敢望也。始成桂立。高皇帝雖置不問然心惡其篡。而傳者復以成桂爲仁人子。故祖訓謂。其父子先後弑王氏四王。其後嗣宮永樂正德嘉靖間、累表自白言。恭愍之弑。由嬖臣倫。仁人誅倫立禑。禑既立則遣兵侵遼東。先臣成桂懼于上國返其兵。禑遂遜位于子昌。而恭愍妃安氏。以禑昌皆非王氏不當立。乃黜昌立瑤。瑤復不道。國人請命高皇帝立先臣。廢瑤別邸終其身。先臣實未嘗爲弑。而虛蒙此聲。又家世出新羅司空。顧以爲仁人子。甚寃甚。乞下史館昭雪之。神廟初乃得請。其地之釜山者海口也。與日本相對。釜山之民向與倭往來互市無間。有長子孫。通婚姻者。曰倭戶。又曰麗倭。時王昖久於位。怠棄政事。其臣柳承龍李德馨乘邪諛得政。或事廢弛。故日本酋平秀吉乘之師起。不兩月而封疆已失其半矣。入王京。王昖奔義州。告急於本朝。

〔沈惟敬〕邊志略に嘉興無賴子沈惟敬とある如く、市井無賴の徒に過ぎざりしが、明主講和の急なるを見、人を求めて惟敬を得之れを使節とせるなり。

〔稽顙〕額を地につけて敬禮する事也禮記檀弓に「稽顙而後拜」と見えたり。

〔李宗城〕言恭の子少より文學を以て知らる、初め都督僉事を授けられ、充正使たり、萬曆中朝鮮を援けて日本に破らる。

〔那古耶〕名護屋なり、肥前國東松浦郡名古屋村ないへり。

乃拜兵侍郎宋應昌爲經略。將兵以勦之。是時議者謂。倭得朝鮮可以旦夕渡鴨綠。內窺畿輔。外扞山東。皆擧手之易。故勦之者不惟恤屬國。亦以杜巨害。而兵尙書石星入沈惟敬之說。使往倭營說封貢。星之意以倭之所以躁中國者在不得互市耳。可以表餌代甲兵。與之封號如北虜西番。以備四夷來王之禮。固無所不可。而惟敬乃壽張其說。遂私許以帝女下降。而其議兩抗而不入矣。應昌薄軍平壤。倭來博戰。遂乘之斬獲頗多。於是降議始有緖。以詔旨宣諭之。羅拜聽命。去王京送還五子官眷百餘口。言者謂應昌不任。乃以顧養謙代。養謙疏上與朝議不合。亦謝病去。乃以孫鑛代。是時小西飛者報命。因請封。上以倭尙屯釜山。乃廷詰之。小西飛稽顙曰。留軍待封使。非敢有它懷。乃鑄王印。遣臨淮侯長子李宗城副將楊方亨往封之。是時惟敬謂。功多可得專使。卽不爾亦可介。而兩不用。宗城復紈袴不諳事。謾罵惟敬。惟敬思有以困之。且倭戀釜巢未肯輕去。遂囑二使於倭營二載。度其窘以危言惕之。宗城棄璽書而遁。朝議逮宗城。而以惟敬副方亨。倭將行長淸正始撤師。册使得渡海。朝鮮陪臣從。秀吉責朝鮮王子不親謝。及期引使者入見。方亨前立。惟敬捧印立階下良久。忽殿上黃帷開。一老叟曳杖。挾二靑衣而出。卽關白秀吉也。侍衞呼噪。二使匍伏。老叟頗加詬讓。行長曰。此天朝送禮人。宜優待之。始出就館。次日宴册使。惟敬方發言撤兵通好。秀吉卽怒曰。天朝遣使封我。我不敢辭。朝鮮決不許和。天使亦不須久留。詰朝可卽發。我當再征朝鮮耳。二使行至那古耶（ナゴヤ）。將渡海。倭酋賚秀吉書來。二使謂謝表也。發之乃檄責朝鮮。列其三罪。至釜山。釜山倭營尙弱。朝鮮將李元翼欲乘虛擊之。惟敬不可。乃私市珍異。爲秀吉貢物以詭報。而倭兵陸續

渡海。以行長清正與哥義弘將。朝鮮避兵韻越。本朝復議出師。而兵已盡撤。募者不至。乃下石星於理。時倭兵二十餘萬分五路而入。不復掠財嗜殺。唯據險守城。爲久遠設施。第敵本因糧朝鮮。而朝鮮久遭兵燹。公私無儲。野谷未蒂。故倭亦待秋而進。鑛乃議。設水兵於天津登萊以防其海道衝突。自寧城至開城千四百里。皆設兵守之。據朝鮮形勢之半。教其國兵以漢戰。即山以鑄錢。因地以開屯。亦爲久遠設施。未幾鑛亦去。而邢玠代。楊鎬爲經理。惟敬度不能得之秀吉。乃乞朝鮮僧百計說清正。終不得。懼得罪將竄降倭。玠乃密授南原守將楊元擒獲之。惟敬恨元乃以虛實報行長。攻破南原。得柘林要路。水陸並闌入全州破。守將陳愚衷遁。時慶尙大半已陷。全羅之南賊皆橫行逼王京。玠尙未出山海關。朝鮮惟倚藉經理鎬。鎬駐平壤不即進。聞二城破始至王京。漫無一籌。是時朝議以。朝鮮不自奮。檄責其王。苟奬率三軍死守社稷。當大發兵餉以助討賊。如自輕棄宗廟。竄伏草莽求緩須臾。中國豈得代爲爾戍。弗持兩端以悞機務。朝鮮王具言誠疑請躬服櫜鞬以待指揮。是時王京水路要害。皆爲賊所得。使其半由陸牽制於南。半由水抄入於北。則吾兵陷死地。而倭犯旅順。犯天津。犯登萊無不可。直踐中國。第倭酋無雄略。恐離海口易進難退。故築營壘。蓄芻糧。令麗氏納糧免戮。愈爲久遠設施。而我得待兵餉之集。玠未抵王京。倭遊兵先至全義館。距王京止百五十里。偏將楊登山牛伯英敗之。斬其驍將葉一枝。倭氣稍挫。玠至覘知行長營在釜山清正營在西生浦。與諸將計曰。我先攻釜山。則倭據險阻。我水陸失援必先破清正。則可以盡步兵之力。東至東萊機張。北至慶州蔚山。但必得水軍爲奇兵以牽其四顧。而陸兵方可出。所患者水軍弱耳。乃

〔石星〕此時石星は兵部尙書たり、一本には石司馬と見ゆ、軍事を掌る官にありし也。

〔登萊〕登州・萊州をいふ、何れも山東半島に在りて渤海灣に臨む。

〔社稷〕茲にては國家の意也。

〔櫜鞬〕櫜は弓ぶくろ、鞬は矢づつ也。

〔奇兵〕敵の不意を撃つ軍隊をいふ。

合計步馬共得四萬餘。幷將高麗之軍萬餘。以高策爲中軍。李如梅爲左軍。李芳春爲右軍。大將麻貴同經理鎬。自忠州鳥領向東安而趨慶州。專攻淸正。然恐行長自西來援。則令中軍扼全羅使不暇顧。又摘三路騎兵千餘人。同朝鮮之師。由天安全州南原而下。命平壤一帶備行糧十二萬。聲言大舉以搖其心。分其勢水軍寡使暗伏。俟戰鳴鼓爲疑兵。倭敗遁則夾擊之。盟師而發。是時丁酉十二月四日也。至二十日兵會於慶州。知賊巢於蔚山。蔚山之南爲島山。二山不甚峻。而城依山爲固。中有一江。可通釜山。其陸路則由彥陽亦可通釜山。麻貴將專攻蔚山。分軍扼彥陽以絕釜山之援。李如梅等斬獲四百四十餘。遂逼島山營。遊擊茅國器又斬獲六百六十餘。遂密匝四圍困之十日。倭食盡。汲斷。至嚙紙飲溺。幷食以食善礮者。而餘聽其餒死。礮彈以碎鐵蘸藥。可一發傷兩人。淸正固守不下。俟我之怠詐以降請。鎬信之。疏報曰。淸正乞降。臣不之許。必當生擒以獻闕下。老將吳惟忠曰。圍城必缺走而可擒也。鎬叱之。逮十日行長援至。然恐我師乘其後止抽精銳二千。逼樹旗幟蔽江而下。水兵寡。故不足以禦。鎬震懼。議正月初四撤兵。先一日輕騎遁去。士皆奔竄。淸正襲之。損失過半。以是鎬罷歸。二軍俱回屯慶州。桑濬以自固。乃益召川廣兩浙之師。而名將陳璘劉綎張榜鄧子龍藍芳威等皆至。以萬世德爲經理。玠以地理隔越。山川險阻。兵不可聚。分爲水陸四路。以李如梅主中。麻貴主東。劉綎主西。陳璘主水。合師十萬。各守信地。未幾如梅鎭遼。以董一元代之。世德猶未至。玠卽于九月二十日進師。是時倭據朝鮮七年于茲矣。沿海千里分爲三窟。淸正仍據蔚山。行長則據順天。義弘則據望津泗川。麻貴駐溫井當淸正。深溝高壘。時出遊兵以擾之。劉綎駐

〔丁酉〕明神宗の萬曆三十年、我が慶長二年にて、之れ再度の朝鮮征伐の時をいふ。

〔彥陽〕慶尙南道內にて、蔚山の西方に在り。

〔慶州〕慶尙北道に在り、蔚山の北方に當る。

〔陳璘〕字は朝爵、廣東翁源の人、嘉靖の末、指揮僉事と爲る、謙將を以て聞ゆ、朝鮮に兵を用ひし功により左都督世廕指揮使となり、卒して太子太保を贈らる。

〔劉綎〕字は省吾、顯の子、勇敢にして父の風あり、朝鮮に師を用ひて戰死す、其用ひし所の鐵刀實に百三十斤なりといふ。

〔董一元〕宣府前衞の人、鵰の子也、嘉靖中、薊鎮遊擊將軍に歷す、隆慶萬曆の交、左都督に累進し、太子太保を加へられ、本衞世指揮使を廕せらる。

〔麻貴〕大同右衞の人、大同參將祿の次子也、嘉靖中、舍人より都指揮僉事に陞る、隆慶萬曆の交總兵官に累擢せらる。

〔昆陽〕慶尙南道にあり、晉江を挾みて泗川と相對す。

〔鄧子龍〕豐城の人、容貌魁梧、驍捷絕倫、嘉靖中都指揮僉事に拜す、此時子龍齡七十餘歲、舟中に於て戰死せり。

水源當行長。行長寨逼于海、綎兵不能進。乃誘行長出會以擒之、每期則單騎俟於道。行長潛信之。而綎部下降倭洩其謀。行長驚遁。綎以兵迫之。不利。愈迫之、遂大獲。董一元當義弘。引兵宜府募家丁。未至。裨將茅國器請以身當賊。日有斬獲。乃作檄諭之以攜其黨。黨有離心。乃俟一元至大擧。倭臨江固守。勢若長蛇。國器曰。觀其形勢以望洋爲首。首碎則立破矣。然晉江不可飛渡。當以計得之。邏騎得一婦。自倭營來。懷中出一紙。署曰。此婦將度異域。吾憐而贖之。天兵那害也。末曰。知吾姓者令公之後埋兒之爻。問吾名者有或之口。無才之按。國器費盡諸葛緒解曰。此郭國安也。以語參謀史世用。世用躍然曰。郭國安華人也。往與共在日本。誓自効於本朝。今在兹。可以間矣。乃諜詗之。知義弘尙在泗川。主望津營者國安也。乃遣書約之。於九月二十日伏火屯聚。俟我師渡焚糧以應之。至期如所約。遂大勝奪其營。倭退守於泗川。是日麻貴亦襲破永春。焚其營壘積聚。二十一日西破昆陽。焚燬殆盡。三營既破。我兵得駐江南。二十八日夜半襲泗川。驍將李寧以先入失道陷沒。我兵反爲所乘。及曉我兵四集。倭奔敗。遂斬獲數百。倭棄城奔新寨。乃燒其東陽倉。二十九日議取新寨。卽義弘所居也。國器曰。倭雖敗而士尙衆。併歸大營。其守必力。攻之不下而援兵四集。往事可鑒也。不若先攻固城。倭方挫未敢出救。固城拔則新寨援絕。此長策也。一元狃于屢勝抵案曰。疾雷不掩耳。寨將不戰而下矣。遂進師。城幾壞。而木樻破藥煙障日。倭遂乘之、我兵大敗奔潰。國器欲死守望津。而諸將已不能軍。乃還星州。是時陳璘率鄧子龍等扼海道。倭艇不敢橫行。忠淸道有九龍島者。不可燃犀。裨將方日新過其處。銃驚水怪。一軍盡沒。十月世德至王京。乃移檄倭營數秀

吉之罪、而嘆閔島民無辜八年暴露、以感激之。是時倭衆久思歸、得機心動。値秀吉死、其子金哥幼。國中潜謀簒奪。三將皆欲歸、莫敢先發。國器知義弘素怨秀吉可間也、乃遣茅國科持世德檄、齎金帛以見義弘。郭國安從旁贊之。義弘諾。國安私謂國科曰、國有大故、勢當疾歸。所恃者釜山數月糧耳。糧盡當歸矣。已而清正糧果盡。告借義弘。義弘不許。清正乃先撤蔚山之師。義弘行長以次而撤。陳璘侯其渡海、以水師邀之。鄧子龍深入。後軍火器悞中其帆檣。遂戰沒。我兵戰益力。倭不善水戰。且無鬪志。遂大敗。復竄於岸者爲陸兵所掩。溺死萬餘。斬首尙千餘級。行長最後發。師猶在道爲劉綎所邀、大敗之。至是三路二十一寨悉蕩平。是時戊戌十一月也。我師歸、朝鮮得再有其國焉。至庚子善後始畢。大司農計度支白、費出。凡四載用餉銀八百餘萬兩。軍資不與焉。昖卒子暉嗣。四十六年奴酋犯順、乃勑王鏊軍協勦、經略楊鎬於己未二月十一日誓師而發。鎬卽故經略朝鮮釜山宵遁而罷者也。起鎬田間。識者曰、無以謝遼士。且不可使朝鮮聞也。然事急莫敢言者。鎬以詔旨發其師。暉命姜弘立爲都元帥。金景瑞副之。率士萬三千人。銃手居多。朝鮮之習火器自東征始也。其法以木爲牌、並列如墻。開穴置銃。銃力頗猛。鎬命屬於劉綎。綎卽征東時大將也。時當一面。其道出寬奠。與朝鮮近、故使屬之。而命遊擊喬一琦當督焉。綎之師頗有斬獲。朝鮮再喪之餘稍知訓練。亦能成軍。虜覆他路將杜松。假其旗幟以襲綎軍。綎一琦皆戰沒。朝鮮裨將金應河據山爲營。嚴銃以拒。虜中銃不退。天乃大風揚塵。銃不能發。應河據胡牀持大弓射賊。力屈而死。弘立與景瑞擧軍降。次年天子下詔恤朝鮮之死事者。命經歷程畬以二萬金往廷（一本作賚以萬金助以火藥延議請之）

〔値秀吉死〕秀吉の死せるは慶長三年八月十八日なり。

〔三將〕小西行長、加藤清正、島津義弘の三人を指す。

〔戊戌〕我が慶長三年、明の萬曆二十六年也。

〔庚子〕明の萬曆二十八年、我が慶長五年也。

〔喬一琦〕字は伯桂上海の人也、萬曆中劉綎に從ひて戰功あり、竟に淸兵に敗られ、崖に投じて死す。

〔胡牀〕たたむやうに造りたる腰掛をいふ、卽ち牀几也。

議、又請以行人（一本作行人司副）劉時俊往、且詰（一本作且令）、詰義州以奬勵朝鮮士卒。是時朝鮮使臣在京師、以往者東征之役。官軍頗擾其民。請自奉勅請齎賚以往不敢煩天使。且言。殘敗之餘未能整衆。義州之駐無益事宜。本兵黄嘉善遂請。令顧齎勅賚。如所請。而時俊駐寬奠。寬奠則我境也。非卽卒外藩之意矣。時俊辭。遂罷其使。是時奴常以威脅朝鮮。朝鮮權遂陰與通。而陽謂於我。邊臣有言其餽鹽米與虜者。言路以爲言。王琿震恐、乃表答行人失辭。請命專使。并白其遙辭緩禍。非敢陰餽鹽米。疏留中。其地東西相距二千里。南北四千里。分八道。統府州郡縣。其設官略倣中國。以田制俸。刑法不苛。俗柔謹崇釋。倘鬼。惡殺。茅居苧衣。知文字喜讀書。上下威儀燦然可觀矣。山川丸都。神嵩北岳。海鴨綠江爲大。產金銀鐵水晶鹽紬苧布白硾紙狼尾筆果下馬長尾雞貂豽海豹皮八稍魚昆布秔黍麻榛松人參茯苓。其貢道由鴨綠江歷遼陽廣寧。入山海關。達京師。成化中苦女直邀封請改道。職方郎劉大夏持不可。議遂寢。

茅子曰。藥少師嘗謂。隋唐之際高麗勁矣。明興濡沫皇風。俎豆詩書爲冠帶國。彼威之而不來。此柔之而愈服。雖招攜有經。亦先聖之遺化也。成桂初興逆取順守。於今弗替可謂盛矣。而襲休日久積弱成形。高皇帝言徵於左卷。神聖豫謨曷可忽哉。余竊有感也。高皇豈特謂其弱哉。知其弱則不能守。不能守則唯強者是附。唯強者是附則不可責以忠義望其圖報矣。今李氏宗社失而復存。朝廷之德實與天並。迺者東事紛紜頗有陰陽。天下不能無望焉。夫成桂之於王氏何如哉。奪其國以至於今。故洪武末年令遂東絕朝鮮。且著之祖訓焉。朝鮮之再通自永樂元年始也。董山之叛亦陰受其爵。

〔崇釋〕釋は釋迦の義にて、佛教を崇拜するをいふ。

〔倘鬼〕靈魂を倘ぶ也。鬼には、禮記禮運篇の注に「鬼者精魂所歸」とあり。

〔茅居〕かやぶきの家に住居する也。

〔苧衣〕からむしにて造りたる衣服をいふ。

〔濡沫〕うるほふこと也。

〔宗社〕宗廟と社稷の義より轉じて國家をいふ、五代史に「安宗社」と見ゆ。

此其通女直之始也。今禮義修於外。觀望存於中。我待其服。彼恐其慢。異日隱憂恐有不出高皇豫料者。可不戒哉。故詳其疆域于左。

疆域

京畿道

楊根郡　豐德郡　水原郡　漢城府　開城府
長湍府　楊州　廣州　潤州　驪州
果州　谷州　坡州
交何縣　三登縣　土山縣

江原道

忤城郡　平海郡　通州郡　寧越郡　松岳郡
旌善郡　高城郡
江陵府　淮陽府　三步府　襄陽府　鐵原府
原州　江州　槐州　溟州
平康縣　安昌縣　烈山縣　麒麟縣　酒泉縣
丹城縣　蹄麟縣　蔚珍縣　瑞和縣　歙谷縣

黃海道

〔女直〕又女眞ともいふ、肅愼（ミシハセ）國也、三才圖會云、女眞在契丹之東北長白山之下、鴨綠江水之源、古肅愼之地也」とあり。今の松花江、烏蘇里江、黑龍江流域にありし通古斯民族をいひ、轉じて其住居地の國名となれり。日本紀に、欽明天皇五年、佐渡國御名部崎に來りしを初見とし、齊明天皇四年、越後國守阿部比羅夫肅愼を討伐せし事見ゆ。

〔州〕この時代の行政區劃の最小のものにて、周代には二千五百家ある部落をいへり。

〔全羅道〕朝鮮半島の西南に在りて、北は忠清道、東は慶尙道に接す、今南北二道に分つ。

〔珍島郡〕全羅南道の西岸に在る島也

〔濟州〕全羅南道の南に在る濟州島也

〔慶尙道〕朝鮮半島の東南に在りて、西は忠清、全羅、北は江原道に接す今南北二道あり。

遂安郡　延安郡　平郎郡　平山府　瑞興府
承天府　黃州　白州　海州　愛州
仁州
安岳縣　三和縣　龍岡縣　咸從縣　江西縣（以上五縣俱屬黃州）
牛峯縣　文化縣　長淵縣

全羅道（センラ）

靈岩郡　古阜郡　珍島郡　全州府　南原府
羅州　濟州　光州　昂州
萬頃縣　茂長縣　鎭安縣　扶安縣　全溝縣
康津縣　興德縣　黃城縣　樂安縣　昌平縣
濟南縣　會寧縣　大江縣　臨波縣　古皐縣
南洋縣　富順縣　扶寧縣　廉仁縣　潜城縣
海南縣　神云縣　移安縣

慶尙道（ケグシヤク）

蔚山郡　咸陽郡　熊川郡　陝川郡　永川郡
梁山郡　清道郡

金海府　善山府　寧海府　密陽府　安東府
昌原府　慶州　泗州　尙州　晉州
蔚州
東萊縣　淸河縣　義城縣　義興縣　聞慶縣
巨濟縣　昌寧縣　三加縣　安陰縣　高靈縣
守城縣

忠清道

清風郡　溫陽郡　天安郡　林川郡　忠州
衿州　興州　淸州　靖州　禮州
公州　幸州　洪州　永春縣　扶餘縣
保寧縣　報恩縣　石城縣　連山縣　燕岐縣

咸鏡道

端川郡　蜀莫郡　寧遠郡　咸興府　永興府
鏡城府　安邊府　會寧府　延州　德州
開州　惠州　蘇州　合州　燕州
隋州　利城縣

〔忠清道〕朝鮮の西部に在りて、北は京畿道、南は全羅道、東は江原道及慶尙道に接す、今南北二道に分る。

〔咸鏡道〕朝鮮の西北隅に在りて、北は豆滿江を隔てゝ滿洲に隣り、西は平安道、南は江原道に連る。

〔小西飛〕逸史に、行長聞ニ丹人内藤如安讀レ書屬レ文、署爲ニ記室一、欲ニ己姓氏達一有ニ異域一、使三如安冒ニ小西氏一、如安任ニ飛驒守一、故明人呼爲ニ小西飛一と見えたり。

〔金吾秀秋〕金吾中納言小早川秀秋也、天正十九、隆景の養子となり、文祿三年其封を襲ふ。金吾は衛門府の唐名也、秀秋左衛門督たりしによる。

〔高臺院〕尾張人木下肥後守定利の女にして淺野彌兵衛の養女也、名を寧子と云ふ、秀吉薨後剃髮して高臺院湖月尼と稱す。

平安道

加山郡　价川郡　郭山郡　云興郡　熙川郡

宣川郡　江東郡　慈山郡　龍川郡　順川郡

傳川郡

平壤府　見仁府　成川府　寧邊府　定遠府

江界府　昌城府　合蘭府　廣利府　安州

靈州　青州　定州　朔州　昇州

平州　撫州　常州　義州　宿州

銀州　鋼州　渭州　鉄州　貿州

孟山縣　德川縣　陽德縣　江東縣　中和縣

泰川縣

今按。豐臣秀吉將レ有レ事ニ于大明一。用ニ干戈於朝鮮一。武備志粗志ニ顚末一。近世記ニ此事一者。圖書編。皇明實記。朝鮮懲毖錄。我征伐記。小瀨氏記。家譜等書也。事繁不レ遑ニ枚舉一。朝鮮考所謂小西飛者小西飛驒守如安也。郎古耶郎當レ作レ那。那古耶肥前國名護屋也。行長。小西攝津守行長。淸正加藤主計頭淸正。與哥下文作ニ金哥一。指ニ金吾秀秋一也。秀秋者秀吉夫人高臺院兄之子。秀吉以爲レ子。義弘島津兵庫頭義弘。茅國科爲ニ義弘一。因在ニ薩摩一。秀吉薨後。我國送ニ還諸囚一。萬曆二十八年（當ニ我慶長五年一）四月二

十一日。明提督總兵官都督李關諭日本國諸酋長。朝鮮世奉天朝正朔不失臣節。故加其義而列之藩國、如遇外寇侵陵、必相救援。此天朝柔遠字小之仁也。往者關白逞兇狡爲啓疆、虔劉其人民。焚爇其廬舍、走其君臣、而掠其玉帛、與爾國有不共戴天之讐者。我聖天子赫然震怒。不吝帑金、不靳糧糈、命將興師。驅逐憑陵、還其土地。復其宗社。此俱往事。今無論已。顧朝鮮爲爾國破殘。荐遭水旱、元神未復。聖天子惓惓軫念屬藩。慮其衰弱不能自振。乃專敕經理撫院、遴選本鎭提督、拔擢將領。提兵十萬、分守要地、善後朝鮮。爲屯牧長久之計。且聞書諄諄。惟務蕩平外寇、殄絕片帆。戰守機宜。本鎭專責。即今爾輩返其原使。似有悔心之萌。但連年戰爭干戈相向。即一旦改心易慮。誰復信之。但今送還人役、乃昔年三提督所遣、本鎭檄來朝鮮。安得與聞。第念爾國不憚使人、不戮俘獲、遣將輸誠、翻然有恭順之意。乃特加爾優賚發還。此後毋得假事差遣窺伺海寓。雖一介相通、亦所必戮。且朝鮮既奉其命令、亦不敢擅自通和。自起昔年招悔之釁。爾國雖越在海外、亦我天地覆載赤子也。誠能無事侵陵、恪守境土、我皇上天地存心。亦且包容茹納、盡收之覆載中矣。豈獨愛字朝鮮、而故仇爾國耶。爾其思之。如諭奉行。自此我與明終絕、年年商船來互市于　我。余親見諭、故載之。

〔天朝〕屬國より己が屬せる國の朝廷を尊びて云ふ語也
〔正朔云々〕正は年の初、朔は月の初、總じて曆を云ふ、而て王者革命すれば必ず曆を改む、その曆の行はるゝ範圍は統治の及ぶ所なる故、統治に服するを正朔を奉ずと云ふ也。
〔字小〕字は說文に乳也、愛也、と見えたり。
〔虔劉〕殺す也、左傳に、芟夷我農功、虔劉我邊陲、とあり。
〔天地覆載〕天の覆ひ地の載する處即ち全天下也。
〔赤子〕臣民也、正字通に、始生小兒曰赤子、君謂民亦曰赤子、とあり

異稱日本傳　卷中六　終

異稱日本傳　卷中七

續文章正宗卷之五　　後學　浦陽鄭栢　選輯　　後學　義烏王褘　校正

論倭　　吳萊

臣愚不佞。揆今之世提封萬里。東西止日所出入。南北皆底於海。邊徼無烽燧之警。士卒無矢鏃之費。外夷重譯鄉風。効順。梯山航海。莫不來獻方物。漢唐之盛所未有也。然以倭奴海東蕞爾之區。獨違朝化三十餘年。奉使無禮。恃險弄兵。當剪其鯨鯢以爲誅首可也。而迄今未即誅。意者有說乎。臣切即前事觀之。海東之地爲國無慮百數。北起拘耶韓。南至耶馬臺而止。旁又有夷州紵嶼人。莫非倭種。度皆與會稽臨海相望。大者戶數萬。小者僅一二百里。無城郭以自固。無粟米以爲食。徒居山林。捕海錯以爲活。漢魏之際已通中國。其人弱而易制。慕容廆嘗掠其男女數千。捕魚以給軍食。其後種類繁殖稍知用兵。唐攻百濟。百濟借其兵敗於白江口。乃逡巡斂甲而退。今之倭奴非昔之倭奴也。昔雖至弱猶敢拒中國之兵。況今之恃險且十此者乎。鄉自慶元航海而來。艨艟數千戈矛劍戟莫不畢具。銛鋒淬鍔。天下無利鐵出其重貨。公然貿易。即不滿所欲。燔焫城郭。抄掠居民。海道之兵猝無以應。追至大洋。且戰且卻。戕風鼓濤。洶湧前後。失於指顧。相去不啻數十百里。遂無

〔邊徼〕國の邊土に設けし柵也、徼は史記司馬相如傳の注に、徼塞也、以木柵爲蠻夷界と見えたり。

〔烽燧云々〕外寇の虞なきを云ふ、烽は火を擧ぐるにて夜これを用ひ、燧は煙を擧ぐるにて晝これを用ふ、支那にて邊境に高櫓を築き外寇の際こゝにて烽燧を擧げし也。

〔慕容廆〕燕王也。

〔百濟云々〕百濟第三十代義慈王唐の虜となり社稷絶えし後、福信等其子豐を我國より迎へて王となし救を請ふ、天智天皇依て阿曇比邏夫を遣せしが忠清道白河口に唐將劉仁軌と戰ひ敗北せり。

奈何喪士氣。虧國儲。莫大於此。然取其地。不能以益國。掠其人。不可以强兵。徒以中國之大、使見侮於小夷、則四方何所仰觀哉。唐太宗擒頡利、而戴羈來朝、太宗曰、戴羈來突厥臣服也、今倭奴不及於突厥遠甚。若其內屬。則戴羈者又多。臣恐其有効尤於後也、以臣度之倭奴之國、去高麗航羅不遠、今戍高麗航羅者當不下數百萬。戍慶元海道者亦不下數百萬。每歲水發以作士卒之氣。大艦數百薄海上下。然迄未能以兵服之者、地絕大海險故也。間往征之。三軍之士感激嗚咽誓不再見父母妻子。颶風連晝夜。大魚跋扈驚觸舊柁。勁弩不暇發。齒舌相視、不幸而有覆艦之虞。衣衿結聯。溺死枕籍。幸而一存。拔刀斫弦。手指可掬。雖親戚不相救援。生死尚未能保。何暇較勝負者哉。昔隋人統五十二萬人伐高麗。高麗終拒守不下。所恃者鴨綠一小江耳、今倭奴之强固不如高麗。而大海之險甚於鴨綠水者奚啻幾十倍、其人率多輕悍。其兵又多銛利。生習於水。若鳧雁然。又能以攻擊爲事。而吾海道之兵擐甲而重戍。無日不束。而望洋而歎。使其恃强不服。雖盡得而勦之。摧枯拉腐也。彼乃肆然未嘗一擢。非恃險也、何敢若是、吳嘗浮海伐夷州矣、獲其人三千而兵不勁強、隋嘗浮海伐留仇矣、拔其城數十而國不加益也、何則人非同我嗜欲。弗能生也、地非接我疆土。弗能有也、爲今之計果出兵、以擊小小之倭奴。猶無益也、古之聖王務脩其德。不敢勤兵於遠。當其不服則有告命之詞而已。今人往往遣使臣奉朝旨。飛舶浮海以與外夷互市。是有利於遠物也、遠人何能格哉。魏文帝謂辛毗曰。昨張掖獻徑寸大珠。今欲求之蜀若。辛毗對曰。聖王惟德之務。四夷畢獻方物。求而得之不足貴也。今不若罷我互市。從彼貿易。中國免徼利之名。外夷知效順

〔唐太宗〕唐第二世の皇帝也、高祖の次子、名を世民と云ふ、父を助けて天下を統一し、其禪を受くるや文武の名臣を用ひ政を勤む、後世これを稱へて貞觀の治と云ふ。

〔突厥〕匈奴の別種也、阿爾泰山附近より起り勢强大なりしが、隋末唐初に至り内亂あり、勢衰へたるに乘じ太宗及其子高宗これを打ち滅ぼす

〔魏文帝〕魏の第一世にして、名を丕と云ふ、曹操の子なり。

〔建安〕後漢第十三世獻帝の時の年號なり。

〔鮮卑〕後漢の頃匈奴の漢兵に攻められ西に去れるに乘じ、東方より其跡に遷り來れる蠻族なり。

〔班超〕彪の次子、班固の弟也、明帝の時西域に遠征し留ること三十餘年西域五十餘國を歸服せしむ。

〔夜郎〕西南の夷也漢書西南夷傳に、西夷君長以十數、夜郎最大とあり。

之會。計莫便於此。彼倭奴者心嗜利甚。我苟不以利徼之。雖不煩兵猶服也。何以知其然也。漢建安中。鮮卑軻比稍寇遼東三郡。其後來朝。則詰之曰。我雖夷狄亦人也、禽獸猶知擇美水草以居。況我人乎哉。前者守臣數徼我以利。使吾不得畜牧。吾故叛去。今反其法。吾故來。又況倭奴之人稍知文字。豈反不及軻比能耶。而獨不知効順者。此臣所以日夜扼腕切齒。爲朝廷惜也。臣年長矣。每思傳介子班超之所爲。慨然嘆息。使二子不自奮於絶域。未免爲田里之匹夫。功或不成於漢朝。至老死亦無聞於後世。臣自揆不能如二子之智。而欲有二子之功。雖不容於死。幸而朝廷假臣一命。奉其告辭得往諭之亦一奇也。議者必曰。緋會數遣使。猶不得要領。近自對馬絶景等島渡大海。徑抵太宰府。高麗航羅沮撓百出。留使臣不使邊見中夜守護。排垣破戶喧呶囂號、兵燧交舉。後雖僅得其使介來廷。終至渝平而不服。意者一泛使之遣。未足以服之乎。自臣觀之。今則高麗航羅已服。所未服者倭奴而已。然亦不勝其懼矣。故今遣使。不可與鄉遣使並論也。臣必謂其王曰。海東之地曾不能當中國一大州。其兵衆之多寡可料而知也。以今中國之盛不即明誅於海東者天子之德。不忍煩兵於遠。非有愛於海東也。鄉者王之衆航海而來。驚我海道之兵。且戰且卻、王之輪車喪失者太半。而我曾不損一毫。三軍之士忿然含怒甚。惟寐忘之。當慶元海道者莫不被堅甲躪勁弩帶利劍飛艦蔽海而東。超足距躍輕風濤萬里之險、決死生以問罪於王。兼之高麗航羅之衆。其識海道習水性。與王國同。是王數面受敵也。然迄今不即加兵者。意王猶有人心。欲以禮義服之。又不忍煩兵以苦王。以故遣使臣來。今朝廷攻王之土地非如伐夜郎略朝鮮可以置城守

也、雖得之越海弗能有也。寶珠金帛積如丘山、不恃外夷之貢獻也。殊方異物來獻于廷、又不假王之重貨也。罷我之互市、從王之貿易、吾土地之所產王反得而用之也。然王之名物不譯於舌人也久、游隙一開、市易且有禁、非王之利也。且夕大兵且來王必悔之。若聽使臣、是得效順之美名、而免受敵之實患也。此臣喩之之說也。

今按、吳萊元處士、不仕山居。窮經史以著述爲務。善論文、門人私諡之曰淵穎先生。見袁了凡綱鑑。無城郭者非也。颶風連晝夜、大魚觸舊艦、檣柁勁弩不暇發。齒舌相親等語、善形容之。又曰、其人率多輕悍。其兵多銛利。性習於水、若鳧鴈然、能以攻擊爲事。此論我國風甚是。鴨綠、鴨綠江在三韓。觀性理大全、黃河。長江、鴨綠江。天下三大河之其一也。日本書紀所謂阿利那禮河是耶。阿利鴨也。利綠也。二字略音。那禮三韓河之俗語。見日本紀。即江也。再謂河者猶佛書梵漢並擧例矣。

隋人伐高麗。日本書紀曰。推古天皇二十六年秋八月癸酉朔、高麗遣使貢方物。因以言隋煬帝興三十萬衆攻我、返之爲我所破、故貢獻俘虜貞公普通二人、及鼓吹弩拋石之類十物、幷土物駱駝一疋。

續資治通鑑綱目卷之二十三　明　吏部尚書兼文淵閣大學士商輅等續編

庚辰　元世祖文武皇帝至元十七年冬十月以阿剌罕爲右丞相、復大發兵擊日本。

今按、至元十七年當日本弘安三年。

初帝屢遣使往通日本、不納。乃命鳳州經略使忻都伐之、無功而還。復遣禮部侍郎杜世忠等使

（處士）士にして仕へざるを云ふ。
（性理大全）宋の道學者凡そ百二十家の說を採錄せる書にて七十卷あり、明永樂十三年勅により胡廣等の編せるもの也。
（日本書紀云々）同神功皇后紀、新羅王の誓言に見ゆ。
（隋煬帝）隋第二世にして、名を廣と云ふ、高祖の第二子也。
（攻我云々）隋書煬帝紀に、大業八年三月、親總六軍、擊高麗、云々、七月、號二百萬、九軍並陷、將帥奔還とあるは是れ也
（杜世忠云々）杜世忠の我國に來りしは建治元年四月也其書狀無禮なりしより九月之を斬る

〔范文洪〕もと宋の殿前指揮使なりしが、德祐元年元に降り中書左丞に進む日本入寇に敗れ纔に還るを得たり

〔洪茶丘〕名は俊哥茶丘は其小字也。

〔李庭〕小字を勞山と云ふ、宋の滅すに殊功あり、尙書左丞商議樞密院事になる、

〔黷武〕前漢書師古注に黷狎濁也、とあり。

〔財三人〕史記孝文本紀の注に、財與纔同、とあり。

其國。亦不報。且執世忠等殺之。至是命阿剌罕爲右丞相。范文虎洪茶丘等爲右丞。李庭張拔都參知政事竝行中書省事。率師十萬以往。時高麗王睶來朝。願益兵併擊之。加睶行省右丞相。

周德泰 〔發明〕復者已甚之詞、所貴乎天子者以其禁暴誅亂而已。書稱胤征之言曰。今予以爾有衆奉將天討。爾衆士同力王室。尙弼予欽承天子威命。無非奉天伐暴之師。故曰。三代之師若時雨。今日本窮荒小夷。初無跋扈如有苗。又無怠政如羲和。何爲窮兵黷武。較勝於遠夷乎。世祖初平天下而志存征伐。遂使繼世之君襲爲故事。稱干比戈。其禍可勝言哉。故不曰討而曰擊。一以見日本無罪。一以譏元之黷武。其義亦深 而著明矣。

辛巳十八年秋七月阿剌罕卒于軍。八月諸將棄師於海島而還。

阿剌罕既卒。詔以左丞相阿塔海代之。未至。文虎等已航海。至平壺島遇颶風敗舟。諸將各擇堅艦乘之遁去。棄士卒十餘萬于島。衆推張百戶者爲帥。方伐木作舟爲歸計。日本覘知之。率衆襲殺。殆盡。惟餘南人萬餘。不殺而奴之。未幾得還者財三人。

〔發明〕書卒于軍、嘉死事也。然何以不書其官。蒙上文也。書棄其師、罪諸將也。自去冬書擊日本。至今年秋書棄其師、則是玩兵黷武。至於經年功旣不成。暴棄師旅。其罪可勝言乎。雖然棄師者諸將之罪。而行師者世祖之責。王者以天下爲度。以四海爲家。區區小醜烏足與之爭衡哉。直書于册。交罪之也。

張時泰 〔廣義〕日本懸居海心。藉使得之不過珍玩而已。豈有人民賦稅供給其上者。綱目於大書

〔阿答海〕遜都思の人、至元の初中書右丞に拜し樞密院事を兼ぬ、後ち伯顔に從ひて宋を攻め功により行省左丞相に拜す。

〔孔子所謂云々〕論語季子篇に出づ、魯の大臣季氏他の大臣顓臾と隙を生じこれを討たんとして、孔子に可否を問へるに答へし語也。

〔萬乘之君〕天子を云ふ、漢書刑法志に、天子畿方千里、提封百萬井、定出賦六十四萬井、戎馬四萬匹、兵車萬乘、故稱萬乘之主と見えたり。

分注。備載元人敗衂而還者、所以志其貪婪之失也。

今按、至元十八年當日本弘安四年。

癸未 二十年五月復命高麗王睶及阿答海發兵擊日本。

帝責日本襲殺島中軍、命高麗王睶及阿答海領征東行省左丞相。率師往擊之。詔各路。拘集水手及造船五百餘艘。民不勝艱苦、中丞崔彧言、江南相繼盜起、皆緣募水手造海船、民不聊生。日本之役宜姑止之。昂吉兒亦以爲言。皆不從。

發明 魏相曰、間者匈奴未有犯於邊境。今聞欲興兵入其地。臣愚以爲不知此兵何名也。今左右不憂。此乃欲報纖芥之忿於遠夷。殆孔子所謂吾恐季孫之憂。不在顓臾而在蕭墻內也。帝自混一以來、征日本之師兩見覆。前既征之無功。棄師海島。今復發兵征之。是亦不可已乎。以萬乘之君較勝負於小醜、豈不深可恥哉。故書以著其失。

今按、至元二十年當日本弘安六年。

甲申 二十一年二月遣王積翁使日本。未至。舟人殺之、

帝以其俗尚佛。遣積翁與補陀僧如智往使。舟人有不願行者。共謀殺積翁。

今按。至元二十一年當日本弘安七年。如智補陀寺住持也。普陀山志曰、至元十年住持如智建接待寺。云云

丙戌 二十三年春正月詔罷征日本。

先是立征東行省。命阿呇海洪茶丘等再擧日本。敕各處造海船集漕船募水手。貯糧餉。期以是年三月以次而發。八月會於合浦。有司徴歛大爲民利。吏部尚書劉宣上書言、近議再興日本之兵。此役不息安危所係。近用唆都議伐占城海牙言。征交趾。三數年間更兵大擾。盜賊蜂興、且交趾小邦親王提兵深入無功。反喪大將。況日本海洋萬里非一國比。萬一不利發兵安能飛渡耶。帝納其言。遂下詔罷征日本。

今按。至元二十三年當日本弘安九年。

又卷之二十四

己亥成宗皇帝大德三年二月、遣僧一山使日本。

江浙平章政事也速答兒復勸帝用兵日本。帝曰、今非其時。因其俗奉佛遂遣一山往使。而日本竟不至。

發明 往使絕域。必得忠義聞望如宋之洪皓富弼諸賢。則不辱君命矣。今乃因日本奉佛遣僧使之。則是失使人之道。而虧國體矣。豈不深可醜哉。直書于冊。不再貶而其失自見。

今按。大德三年當日本後伏見天皇正安元年。先是七年伏見天皇正應六年三月廿日。官符奉授伊勢風社宮號。依異國降伏之賞也。自此稱曰風宮。見神祇本源。七月八日祈攘胡兵于伊勢太神宮。至是天驕狼心遂于夷。

大學衍義補卷第一百五十五　　國子監掌監事禮部右侍郎丘濬　撰

〔古城〕廣東の西南方に在り、もと漢の林邑の地なりしが、漢末に獨立す。

〔成宗皇帝〕元第二世の皇帝にして、世祖の孫也。

〔僧一山〕一寧の號也、日本に來朝後平貞時之を間者なりとし修禪寺に幽す、後ち許され正和年中南禪寺の僧となれり

〔風宮〕伊勢國度會郡に在る大神宮の別宮にして、風神級津彥神、級津姫命を祀る、弘安四年七月朝廷同社に蒙古擊退を祈禱せしめしに果して神驗ありしより、年來請へる所の宮號を許せる也。

〔吳萊〕字は立天、婺州の人也、延祐間、禮部に擧して第せず、之より專ら閑居して諸書を涉臘し著書を以て業とし、至元中宋遼金三史を修む。

〔眞臘〕占城の南方に在りし國也、隋の大業年中始めて支那と交る。

〔闍婆〕瓜哇也。

〔宣德〕明第五世宣宗の時の年號也。

〔正統〕明第六世英宗の時の年號也。

馭夷狄

四方夷落之情下

日本在東海之中。古稱倭奴國。或云惡其舊名。故改名曰日本。以其近日所出也。

吳萊曰。海東之地爲國無慮百數云云。非昔之倭奴也。

臣按。皇明祖訓所列諸夷國名凡十有五。而日本與焉。而於其下註曰。日本國雖朝貢。暗通姦臣謀爲不軌。故絕之。蓋以此國其人雖粗知文字。而心實狡詐。海外諸蕃如占城眞臘闍婆之類。皆未嘗爲邊境患。惟此一國居海之中。在勝國時許其互市。自四明航海而來。艨艟數十。戈矛劍戟莫不畢具。出其重貨。貿易。即不滿所欲。燔爇城郭。鈔掠居民。海道兵卒無以應之。往往爲海邊州郡害。聖祖灼知其故。故痛絕之。當開國之初。四夷賓服。雖西北之虜。亦皆遠去邊塞。稽顙闕廷。惟茲倭奴時或犯我海道。故於山東淮浙閩廣緣海去處設爲衞所居多。大抵爲倭故也。宣德以前彼猶出沒海濱以爲民害。正統以後蓋罕有至者矣。向時因風候遣舟師由海道以備之。近乃於緣海都司委都指揮一員。統其屬衞。摘撥官軍。專以備倭爲名。操習戰船以爲防備。是以數十年來。彼知吾有備不復犯邊。時或數年一來朝貢。朝廷亦以其恭順之故而禮遇之。噫前日之絕。而今日之容。非自相戾也。前日之詐。今日之誠也。聖人何容心於其間哉。以上四方夷落之情。臣伏讀皇明祖訓有曰。四方諸夷皆限山隔海僻在一隅。得其地不足以供給。得其人不足以使令。其不自揣量。來犯我邊。則彼爲不祥。彼既不爲中國患。而我興兵輕伐亦不祥也。吾恐後世子孫倚中國富

〔華夷云々〕人民及諸外夷を服する也

〔秦皇〕秦始皇帝也六國を滅し天下を統一せる後、將軍蒙恬をして匈奴を擊たしめ、また南越を征して今の安南地方まで略せり依て爰に漢武と共に引ける也。

〔漢武〕漢第七代の皇帝にして景帝の子也、古朝鮮を併呑して四郡を置き南越匈奴を平ぐ。

〔華夏〕支那の美稱也、夏は大の義、大文明國の意也。

強貪一時戰功。無故興兵。致傷人命。切記不可。但胡戎與西北邊境互相密邇。累世戰爭。必選將練兵。時謹備之。大哉聖祖之言乎。萬世聖子神孫。所當佩服以爲家訓者也。臣故於馭夷狄之後。謹錄而備書之。以垂萬世帝王統馭華夷之則。

又卷一百五十六

治國平天下之要。

馭夷狄

劫誘窮黷之失

元世祖至元十八年擊日本。兵十餘萬死于海島。還者僅三十人。

臣按。元世祖在位之日、擊緬甸。擊爪哇。擊占城。擊日本。殆無虛歲。其所以窮兵黷武。比之秦皇漢武何如哉。夫以。長城之築。出塞之師。所以爲中國生靈計耳。蓋以害中國者莫如北狄。方吾盛時。苟不驅除之。異日爲吾子孫害必深也。秦皇漢武之心。不過如此。世祖之擊此諸國則異於是。緬甸接於百夷。占城隔乎交阯。爪哇日本皆在炎天漲海之外。地勢不相接也。兵刃不相及也。而必征之何哉。利其所有耳。蓋聞此諸國多珠貝寶石之類。欲得之耳。嗚呼求無用之物。害有用之人。爲人民之主而殺人。以逞所欲。一之不已。而至再至三。嗚呼世祖爲此。豈復有君人之道哉。彼夷狄之主無足怪耳。後世履一帝三王之位。爲華夏人民之主者愼勿效尤。

今按。還者僅三十人十字衍。元史曰。十萬之衆得還者三人耳。乃擧三人名。曰于閶。曰莫青。曰吳

〔朱子〕建寧の人、名は熹、字は元晦と云ふ、宋の學者にして所謂朱子學を建つ。

〔尚書〕虞夏商周四代の政道の記錄を孔子の删定せる書にして、五經の一也、後世書經と呼べり。

〔歐陽公〕名は脩、字は永叔、宋の學者にして、唐宋八家の一人、詩を以て名あり。

〔書未焚〕始皇帝三十四年丞相李斯の議を用ひ、醫藥、卜筮、農業以外民間の書を焼き以て天下學者の輿論を蔽へり。

〔夷貊〕夷狄と云ふに同じ。

〔宣宗章皇帝〕明第五世の皇帝、名は瞻基、仁宗の子也。

萬五也。此三人脫歸。詳見下引二元史一條上。

聽雨紀談　吳郡　都穆　著

朱子於經傳多有訓釋。惟尚書則否。蓋以其多錯簡脫文。非古文之全也。蔡氏書傳序云。二典禹謨先生蓋嘗是正。則其他固未之及。世所傳有朱子書說。蓋當時門人取語錄文集中語以成之。非朱子意也。或謂日本國有眞本尚書。乃徐福入海時所携者。予初未之信。後觀歐陽公日本刀詩。有云。徐生行時書未焚。逸書百篇今尚存。令嚴不許傳中國。擧世無人識古文。先王大典藏夷貊。蒼波浩蕩無通津。則外國眞有其本。歐公之言未必無據。朱子之不注者豈以是耶

五倫書卷之二十一　明　宣宗章皇帝　御製

君道

善行

命將

元世祖至元十八年正月。命行省右丞相阿斯罕云云。世祖勅曰始因云云。使卿輩爲此。云云。朕甚憂之云云。答之。

今按。此事見元史日本傳。故略之。

又卷之三十二

臣道

善行

諫諍

元王磐爲二宰相一。世祖欲レ伐二日本一。師行有レ期。磐入諫曰。日本云云非レ所レ宜レ言。此在二吾國法一。云云。以二溫言一慰二撫之一。

又卷之四十二

臣道

善行

奉使下

國朝趙秩奉レ使往二日本一。泛レ海至二折木崖一入二其境一。關者拒勿レ納。秩以レ書達二其王良懷一。乃延レ秩入。秩諭以二中國威德一。而詔旨有下責二讓其不レ臣二中國一語上。王曰。吾國雖二處僻在二扶桑一。未三嘗不二慕二中國之化一。而通二貢奉一。惟蒙古以二戎狄一涖二華夏一。而小國視レ我而使二其使趙姓者一。訹レ我以二好語一。初不レ知二其覘レ國也。既而使者所レ領水犀數十艘。一時雷霆風波。漂覆幾無二遺類一。自レ是不レ與通一者數十年。今新天子帝二華夏一。天使亦姓趙。豈昔蒙古使者之雲仍乎。亦將下訹レ我以二好語一而襲上レ我也。命二左右一將レ刃レ之。秩不レ爲レ動。徐曰。今聖天子聖神文武。明燭二八表一。生二于華夏一而帝二華夏一。非二蒙古比一。我非二蒙古使者後一。爾若悖逆不二我信一。卽先殺レ我。則爾之禍亦不レ旋レ踵矣。我朝之兵天兵也。無レ不二一當一レ百。我朝之戰艦。雖二蒙古戈船百一。不レ當二其一一。況天命所レ在。人孰能違。豈以二我朝之以レ禮懷一レ爾者一。與下蒙古之襲二爾國一者上比耶。於レ是其王氣沮。下レ堂延レ秩。

〔良懷〕懷良親王の誤也、後醍醐天皇の皇子にして、延元三年征西大將軍に任ぜられ筑紫を鎭撫し給ふ、興國元年島津貞久を破りしを始めとし、一色、大友、小貳を平げ鎭西略ぼ定まる、後年の御事詳かならず。

〔其使趙姓〕元使趙良弼也。

〔雲仍〕遠孫を云ふ

〔不レ旋レ踵〕直ちになり。

禮遇有加。遣其臣僧祖并僧九人隨秩入貢。奉表稱臣。貢馬及方物。

今按。趙秩事見前。五倫書錄事詳矣。故亦表章之。

下求人全編卷之十三諸夷

京南　龍陽子　精輯

日本國

即倭國在新羅國東南大海中。依山島而居。九百餘里。專一沿海寇盜爲生。中國呼爲倭寇。

今按。建武至天文殆二百餘年。我國大亂。當斯時西海小民入中國或爲盜。詳見引闕書等下。此圖乃圖其寇形乎。又王氏三才圖會。圖日本國人爲僧形。此偶見日本僧入明者圖之也。惜乎。不令中國人觀我縉紳先生而圖之也。昔粟田眞人冠進德冠。頂有華蘤四披。紫袍帛帶。進止有容。唐書之所志。豈不盛乎。此圖可掩袂而過也。

〔建武云々〕建武は後醍醐天皇御宇、天文は後奈良天皇御宇の年號也、此間南北朝の戰爭に起り、室町時代諸將の反亂絶えず、遂に戰國時代に終れり。

〔粟田眞人〕其父詳かならず、慶雲二年中納言と爲り、和銅元年太宰帥に遷り、養老三年薨す。

〔德冠〕推古天皇十一年制定せる冠位による位冠也。

〔華蘤〕蘤は花也。

皇明世法錄卷之七十六　史官　陳仁錫　評纂

江南倭防

禦寇之法。海戰爲上。故先之以海防。海防失守。而後滋蔓及江。故江防次之。

海防

蘇松海洋。乃倭奴内犯之上游也。哨捕于海中。勿使近岸。是爲上策。拒守于海塘海港。勿容登泊。是爲中策。若縱之深入殘害地方。首當坐罪。

江防

江防以拱護留都爲重。長江下流。乃留都之門戶也。過寇于江海之交。勿容入江。是爲上策。截殺于江中關隘。（營前沙狼山靖江之類）使賊不得遡流而西。是爲中策。若縱之。過金焦襟山震驚陵寢。罪坐不原。

嘉定縣總論

海中諸夷。狡猾莫如日本。入寇亦莫如日本云云。

今按。世法錄第七十六卷。凡四十九張。第七十七卷。凡四十張。其間盡載江南倭防事而已。然事甚繁。故不引之。

又卷之七十九奏議

日本志

洪武十五年四月浙江都指揮使言。抗州紹興等衞。每至春則發舟師出海。分行嘉興澉浦松江金山。

〔陳仁錫〕明朝、長州の人、字は明卿、天啓間、殿試を以て翰林編修に拜す、權貴の意に忤ひ罪を得て籍を削らる、崇禎間、南京國子祭酒に拜す、尋で疾を得て卒す、福王の時、詹事を贈り文莊と謚す。

〔杭州〕浙江省杭州府也、首都を杭州と云ふ、禹貢の時揚州の域、春秋の時呉越に屬す、九縣を管す。

〔紹興〕禹貢の時杭州と同じく、揚州の域、八縣を管す同じく浙江省にあり。

〔嘉興〕禹貢の時揚州の域、春秋の時長水と名く、七縣を管す、同じく浙江省にあり。

防禦倭夷、至秋乃還。後以舟難出閘。乃聚泊於紹興錢清匯、然自錢清抵瀝浦金山、必經三江海門、候潮開洋。凡三潮而後至、或遇風濤、動踰旬日、卒然有急、何以應援。不若仍於瀝浦金山防禦為便。其台州寧波二衛舟師則宜於海門寶陀巡禦、或止於本衛江次、備禦有警、則易於追捕。若溫州衛之舟卒難出海、宜於蒲洲楚門海口備之。詔從其言。

永樂十七年六月遼東總兵劉江以捕倭捷聞。江嘗請於金州衛金線島西北之海堝上築城堡立烟墩瞭望倭寇。一日瞭者言、東南海洋內。王家山島夜擧火。江以寇擧其間、亟遣馬步軍赴堝上小堡備之。翌日倭舶三十一艘泊馬雄島、寇衆登岸、徑奔望海堝。江親督諸將、伏兵堡外山下、伺賊既圍堡擧砲發伏、都指揮錢眞等領馬隊要其歸路、都指揮徐剛等領步隊逆戰、寇衆大敗、奔入櫻桃園空堡中。官軍圍殺之、自辰至酉擒戮盡絕、生獲百十三人、斬首千餘級、

宣德七年巡按廣東御史陳汭奏、廣東海洋廣闊。海寇屢出為患、往者調遣官軍五千人、海船五十艘、出海巡捕、二十餘年多被漂沒、無益警備。請如福建設立水寨於潮州碣石南海神電廣海雷州海南亷州八衛海道衝要之處、官軍操舟。就糧守備、每寨用指揮一員督之、仍委都指揮一員總督以備寇。且整飭腹裡諸衛軍以備應援。上謂尚書許廓曰、凡事雖有變通、然亦不可不審。官軍巡海已非一日。今欲立水寨、未知果便與否。宜令三司及巡按御史定議以聞。

八年二月登州衛指揮戚珪言、初山東緣海設十衛五十戸所、以備倭寇。其馬步軍專守城池器械。水軍專沿海運後調赴操備營造。軍士已少而都指揮衛青復聚各衛馬步水軍於登州一處操備、遇夏分

〔永樂十七年〕永樂は明の成祖の時の年號、其の十七年は、紀元二千七十九年百一代稱光天皇の應永二十六年にて足利將軍四代義持の時也。

〔宣德七年〕宣德は明の宣宗の時の年號、其の七年は紀元二千九十二年百二代後花園天皇の永享四年にて、足利將軍六代義教の時也。

〔廣東〕廣東省也、清朝の時、潮州府以下九州府を管す支那の南極にありて、交趾に接す。

〔潮州〕廣東省潮州府也、古代閩越と稱す。

〔弘治十八年〕弘治は、明の孝宗の時の年號、其の十八年は、紀元二千百六十五年百四代後柏原天皇の永正二年にて、足利十一代將軍義澄の時也

〔應天府〕江蘇省南京府也、北京を順天府、南京を應天府と云へり、清朝の時、江寧と改む。

〔崇明縣〕江蘇省蘇州府にある海島也和漢三才圖會に、「其川口（楊子江口）島名崇明縣至日本海上凡三百里」とあり。

調以守文登郎墨諸處。及秋復聚、若倭寇登岸。守備空虛無以禦敵。且倭船肆掠。無分冬夏。倉卒登岸而官軍聚於一處。急難策應。請以原設捕倭馬步水軍各歸衛所。如舊守備。且査。海運遇有警急。互相應援則芻糧免於虛費、軍民兩便。上命山東三司。及巡按御史計議以聞。

正統初罷浙江水寨海艚守備。時有吏周頌言浙江沿海地方洪武間設立衛所。置造哨船。令各守分地。有警遞相應援、倭賊不敢犯。永樂間因內官王鎭奉使日本。回奏調諸衛官軍駕使海船于懸海沈家門等處。建立水寨守備。後屢有倭賊。登岸殺掠。皆因城守乏人。及水寨海船重大。非得順風便潮卒難駕使不能赴援。宜照洪武時例。各依衛所守備。改海船作快船。於港口哨瞭、彼此應援則倭賊畏懼。民人莫安矣。至是會官議當從其言。故罷之。

弘治十八年二月巡撫應天都御史魏紳上處置海道事宜。謂。海洋之民習性貪悍。好鬪輕生。中間爲盜之徒。多起於爭利。如崇明縣半洋營等沙東漲者盡歸有力之家。貧弱賠糧。富豪專利、始則仇訟。終則劫奪。習染威風。遂至嘯聚。臣等欲附近府分。委官箇閱。如某處先有而今坍。某處先無而今漲必彼此通融、使田糧相稱。與奪適均。脫有強梗霸占不服。處分者、官調邊衛軍舍。餘發邊充軍民。發口外爲民。其沿海衛分本爲備倭。備盜。而設貼守之處。歲以二月往。十月還。令倭寇不復敢侵。而沿海盜賊多發於冬春之月。正以乘其不備故也。況附近衛所官子弟家人多盜、憲與假名公差。陰實爲盜。其崇明一縣。海勢渺茫、雖有備禦官軍。然每遇盜賊。輒相推避。請行備倭。都指揮王憲會捕盜。僉事胡瀛將沿海官軍舍餘。通行棟選。定立陸戰水戰。機宜以時操練。及將貼守官軍照依京操事例。

〔湖廣道〕湖廣省也武昌府以下二十州府を管す、古荊州の地也、首都を武昌と云ふ。

〔漳泉福〕漳は福建省の漳州、泉は同じく泉州府、福は同じく福州府を云へり。

〔寧海關〕浙江省台州府にあり。

〔此沿海諸郡云々〕倭寇のこと本書に屢〻詳述する處なるも、何五雜俎にも「國家近邊之民、常苦北虜、濱海之民時遭倭患、云云、倭自嘉靖末、抄掠浙直閩廣、所屠戮不可勝數」とあり。

毎年分春秋兩班行糧照例支給。務使倭寇海寇兩不失備。仍各限以地界。脫有疎失。查照責治。仍禁衛所官、不得縱容子弟家人、從賊爲非違者、從重問遣本官。改調西北邊衛從之。南京湖廣道御史屠仲律條上禦倭五事。一絕亂源。夫海賊稱亂、起於負海姦民通番互市。夷人十一、流人十二、寧紹十五、漳泉福人十九。雖槩稱倭夷、實多編戶之齊民也。臣聞。海上豪勢爲賊腹心。標立旗幟勾引深入。陰相窩藏、展轉貿易、此所謂亂源也。曩歲漳泉濱海居人。各造巨舟。人謂、明春倭必大至、臣初未信。既乃果然。故禦盜之權。在腹裏防之、弭盜之本。當邊海制之、邊海諸處、漳。泉。福爲始。而寧。紹次之。其一禁放洋巨艦。其二禁窩藏巨家。其三禁下海姦民。三法者立而亂源塞矣、即舊賊未盡殄滅。然後無所繼。其勢自孤。退無所歸。其情知懼、與今往來自若者不同矣。二防海口。夫海固涯涘無際、然賊浮海來犯。放洋則衝濤。入口則起陸、非可絕險徑渡也。往來所繇出入、可設險防拒者。姑自浙東西大江以南濱海數郡言之。入平陽港則近金州。入黃花澳則近磐石。而逼溫州。入海門則越新河而寇台州。入寧海關。入湖頭灣則窺象山定海而瞰寧波。入三江口則搖尾於紹興。入鱉子門則乘潮於杭州。入乍浦峽則流毒於嘉興。入吳淞江則犯松江。入劉家河。入七了港則犯蘇州。此其大勢也、中間經行、或潛形於馬頭山。或遯跡於大七洋、及大小衢上下川、則其要害也、此沿海諸郡之通患也。故守平陽港。扼黃花澳。據海門之險、則不得犯溫台。塞寧關絕湖頭灣、遏三江之口、則不得窺寧紹。扼鱉子門、則不得近杭州、防吳淞江。備劉家河七了港楊威馬蹟大七洋大小衢上下川諸險、則不得掩蘇松嘉興。此地險也。一處失守蔓延各處。不可以彼此分遠近異也。且賊長於陸戰。短於

〔封域〕諸侯の領地を云ふ、史記に、「諸侯各守其封域」とあり。

〔長策〕善計也、六代論に「觀五代之存亡、而不用其長策」とあり。

〔明信〕確なる音信也、朱熹の文に、「亦不得明信、令人懸心耳」とあり。

〔赤子〕幼兒也、書經に「若保赤子、惟民其康乂」とあり。

水閘。以船不敵。而火器不備也。在我宜用所長。擊所短。則莫若恃海船。請以見在把總船隻通行查。濟不足。則令福建如法添造。或即令沿邊地方買補。每大小船百隻。或五十隻。號爲一綜。務以慣習柁工水稍。而充以原額水軍於前。諸海口各量緩急。以爲置船多寡。又爲遊擊數綜。分布上流。往來要害。海軍芻糧衣甲之給。比陸軍加優。令更番巡邏。併力捍禦。來過其衝。去擊其惰。毋令賊入。賊入而力拒。有功者陞賞。其失備重究。比禦寇之長策也。故法不可不厲也。臣聞倭之入也。豈盡無軍之患。蓋有軍而移入便地者矣。有失於巡哨者矣。甚有賈渡報水受其鉤餌者矣。若此則地方奚賴焉。夫百處守之。一處失之無益也。千日防之。一日疎之無益也。事在督撫及海道諸臣明信賞罰耳。三責守令。夫荷戈戟。載甲冑。爭鋒死刃者將士之能也。保封域。固邦折。全境安民者。守令之任也。今之守令。不肖者棄城守走矣。賢者大率過警則嬰城守耳。其關廂村鎮委之無可柰何。夫城外獨非赤子乎。且邊海孤城卒然無備。猶可誘也。腹裏巖都江南奧壤。虜非可長驅卒至者。顧不能設險預防。使寇徜徉去來。若履無人之境。國家建邦設邑。張官置吏。將焉用耶。自今江南守令當以調練士兵。保全境土。爲殿最。仍勑吏部。凡遇沿海守令員缺。必愼擇其才且賢者。然後授之。庶保障足賴耳。四議調發。近日徵調各處民兵。遠近四集。徐邳山東永保川廣。及軍門編調各府。義勇無慮數萬。然師老財殫。竟不克膚功之奏者。臣請指諸臣不善用兵之弊陳之。古者用兵。潛機密計。電馳霆擊。進退倏忽。妻子莫問。所以能有成功也。今先發後行。尅期始動。前軍未啓。而先聲已聞。其弊一也。古者名將算不百勝。不敢輕動。今謀不預成。計不先定。冥行突進。動陷伏中。其弊二也。守不據險。

〔權愛〕場合に相當せる計略を云ふ、後漢書に「全羊多任于權愛」とあり。

〔枵腹〕饑餓するをいふ、范成大詩に「匏瓜設枵腹、蒲柳無貞姿」とあり。

〔爨〕鼎の沸かんとする貌也、集韻に「爨爨鼎欲沸貌」とあり。

〔賁育〕孟賁、夏育の二人、共に古の勇者なり、故に勇氣あるに喩ふ、戰國策に「烏獲之力而死、賁育之勇而死」とあり。

屯不列要。奔急救難。賊逸我勞。其弊三也。兵法曰。夜戰聲相聞足以相救。晝戰目相見足以相識。權愛之心足以相死。言兵之貴熟習也。今兵不專一。主客雜聚卒遇狡賊。易衣變飾。突然而來。不能別識。其弊四也。兵無素統。將不預設。一遇有警。卒然命官。本以烏合之人。帥以未識面之將。其弊五也夫三軍之衆所以冒白刃。蒙矢石。至死無敢卻顧者威行之素也。今法令殆息。紀律不肅。進有必死之怨。退無伏鑕之虞。是以畏敵而不畏將。其弊六也。地形不習。險易不識。趨利不及。避難不早。其弊七也。糧糗不儲。芻料不周。遠兵勞役。撫恤未至。枵腹待爨。窮愁思歸。其弊八也。士不精選。勇怯無辨。前擊後解。譁然而散。雖悍夫勇士。或以無援而力屈。或見先奔而膽喪。其弊九也。地狹人衆。不能旋轉。互相排擠。雖有勇敢。無以效其所長。其弊十也。十弊不去。雖頗牧操刃。賁育執戈。莫能濟矣。夫賊非有遠略大志。約束號令。不過群聚爲姦利。在貪得耳。所以制禦之。非兵少之憂。而實寡算之患。蓋欲防盜者必知盜情。欲制盜者必存盜心。故必深謀而熟計之。然後成功可期也。五作勇敢。沿海如沙民鹽徒打生手。及村壯悍夫。皆勇敢可用。然多樂效用於私室。而不樂報名于私家。何者以公家勢遠而文繁也。豪民以之保村里則有餘。以之充行伍則無益。何者以行伍人多而心力渙也。然則順其情。相其宜。以振作鼓舞之。必有術矣。乞勅各有司。通諭豪家大族。及里巷豪傑。各爲身家併力拒守。有能團結鄉民。保固村鎭者。先與免其糧里。押運重役。及均徭。一應雜差。獲功者一體陞賞。其有願授文職。審其力。能保障一方。及斬首十顆以上。民得比輸粟例。入監。係有職役者。得起送赴部。與本等常選陞授閭里之人。竝得以其功。累增至赴部。實選其不願官爵者。重給賞優

〔蘇松嘉湖〕蘇は江蘇省の蘇州、松は同じく松江州、嘉は浙江省の嘉興州、湖は同じく湖州の地を云へり。

〔寧紹〕寧は浙江省の寧波府、松は同じく紹興浙を云ふ

〔溫台〕溫は浙江省の溫州、台は同じく台州を云へり。

〔直隸〕今の直隸省にて清朝の中世頃迄は北京府と云へり、永平府以下八州府を管せり。

恤之。或亦制賊之一策也。近蘇松嘉湖之民。苟有糾集智勇。乗賊怠玩。或掩其昏暮。間能殺賊。奪其輜重者。隨爲官軍。劫其財而奪其功。夫居民出百死之力。卒被劫奪。曾不獲分毫之報。不激衆怨而失民心乎。又有村民團結自相防護。志在全家保妻子耳。有司輒謂其能遂報名入官。以故人各畏避不敢復謀拒賊。此又沮民之氣而抑其忿也。請諭地方官。凡義民不願在官者。不得一切附報。且嚴禁官軍。不得攘奪民功。則民見利而動。無畏而奮。將各思所以自效矣。兵部覆其議。悉是。詔允行之。

三十九年正月浙直視師通政唐順之。條上海防善後事宜。一禦海洋。言。禦倭上策必禦于海。而崇明諸沙舟山諸山各相聯絡。乃海賊入寇路。尤當預防。自今每遇春汛。宜令蘇松兵備。暫駐崇明。寧紹兵備暫駐舟山。副總將官常居海中。督兵分哨。如有縱賊入港。登岸者。以次論罪。一固海岸。謂。賊至既不能禦于海。則海岸之守爲第一著。而諸將往往相推誤事。以致深入今宜爲約沿海。力斬損兵析將。則坐內地不能策應之罪。內地殘破沿海幸免。則坐沿海縱賊之罪。又或均爲沿海地方賊繇寧紹登岸。寧紹幸免殘破而殘破溫台。賊繇溫台登岸。溫台幸免殘破而殘破寧紹。往歲但坐地方殘破者之罪。今則宜并坐。賊所從入者。其沿海文武將吏有能衝鋒禦賊。不得登岸深入者。雖無首級亦以奇功例陞賞。一圖海外。沿海逋逃之徒爲賊嚮導者甚衆。宜嚴行守臣。多方招徠以消禍本。一定軍制。謂募客兵坐糜糧餉。今宜急練土著。必不得已而召募。且先取土著。如處兵沙兵之類。以充其選。方應募者亦必土人。保任而後用之。至總督軍門歲調廣兵。亦有定額。如直隸幾千。浙江幾千。專爲衝鋒之用。聽川湖軍門選發。俟土兵練成則調募悉罷。一鼓軍氣。國家承平日

久。文吏游談而養尊。武臣恬嬉而保身。每一當賊。戰卻走。又有遇海風而頭目掉眩。聞潮聲而耳聵。心惕者。如此而望長驅海島。掃清大憝。難矣。宜責文臣督師。時御戎服。出入軍中。以作武將之氣。武將臨陣。時間取讀校逃卒。斬一二人。以變士卒之耳目。則軍氣自振。一復舊制。國初海島近區皆設水寨。今雙嶼烈港浯嶼諸島。海賊巢據者。卽其故地。沿海衛所軍伍素整屯田亦多。及金塘玉環諸山。膏腴幾萬頃。皆古來居民置鄕之所。悉皆墾種。浙廣福三省原設三市舶司。所以收其利權而操之於上。使奸民不得乘其便。今數者俱已廢壞。宜令諸路酌時修擧。

今按。右日本志。議備倭事。當想時勢故載之。

日本攷

日本古倭奴國。天御中主都筑紫。號大倭王。傳三十三世。彥瀲尊第四子神武天皇。自筑紫入都大和州强原宮。仍以倭爲號。迄漢桓靈。倭奴作亂。歷年無主。有一女子。名卑彌呼。年長不嫁。以妖惑衆。乃共立爲王。在位數年死。宗男嗣。國人不服。更相誅殺。立卑彌呼宗女國遂定。逮唐咸淳初。賀平高麗。稍遂夏音。惡其名不善。乃更號日本。蓋取近日始升之義。先時秦遣徐福。將童男女數千入海求蓬萊仙。不得。懼誅止夷澶二州。稱秦王。國號倭。故中國總呼之曰徐倭。非日本正號。性狙詐狼貪。且以疆域言之。東南大海中。依山島爲居。西南皆距海。東北隅隔以大山。廣袤四面各數千里。東北山外歷毛八國文身國。約七千餘里。南到侏儒國。約四千餘里。西循一支。正北望耽羅。渡百濟。到樂浪。約一萬二千里。以州郡言之。所都有山城大和河內和泉攝津五州。共統五十三郡。故曰五畿。畿

〔都筑紫〕是誤傳也、國都筑紫にありしは、瓊々杵尊の降臨を以つて嚆矢とす、其れ以前は高天原也。

〔傳三十三世〕瓊々杵尊より神武天皇迄は記紀共に三代とせり、尙これは初世以來の主たる神、別天神五柱、神代七代、天照大神、忍穗耳尊を加ふるも十七代に過ぎず、按ずるに、別天神五柱、神代七世の神十三柱、天照大神、天忍穗耳尊並弟神四柱、瓊々杵尊、彥火出見尊並に兄弟神二柱、葺不合尊並に御子神三柱及神武天皇合せて三十三柱の神等を云ひしか。

〔東海道〕七道の一西宮記に「ウミヘツミチ」又「ウヘツミチ」と訓ぜり、後世には單に海道筋とも稱す、崇神天皇の朝、武渟川別を東海に遣る由記せるを初見とす。

〔南海道〕七道の一仲哀天皇の時南國と稱し、天武天皇十四年九月始めて南海の名見ゆ。

〔西海道〕七道の一上古筑紫の島と稱し、文武天皇の時初めて西海道を置けり。

〔北陸道〕七道の一書紀傍中に「クヌカノミチ」、西宮記に「クルカノミチ」又「キタノミチ」と訓めり、古く高志道と稱す、崇神紀に北陸とあるを初見とす。

外所部。東海道有伊賀伊勢等六十四州。共統一百一十六郡。南海道有伊紀談路阿波讃者伊豫土佐六州。共統四十八郡。西海道有豐前豐後筑前筑後肥前肥後日向大隅薩摩九州。共統九十三郡。北陸道有若狹越前加賀能登越中越後佐渡七州。共統三十郡。山東道有通江美濃驛信濃濃野下野陸奥出羽八州。共統一百三十二郡。山陽道有播摩美作備前備中備後安藝周防長門八州。共統六十九郡。山陰道有丹彼丹彼徂馬因幡伯耆出雲石見穩岐八州。共統五十二郡。故曰七道。又有一伎島對馬島多褹島。各統二郡。故曰三島。其屬國有五十餘。新羅百濟莫非屬國。皆以倭爲大國。多珍物。恒通使往來。洪武四年國王良懷遣僧祖朝貢。七年復來。以無表文却之。其貢僧人發陝西四川。各等居住。著爲訓。絕不與通。三十五年復來。詔定爲期。十年一貢。成祖嗣位。國王皆受冊封。或三年。或五年。貢無定期。正德四年南海道刺史。右京兆大夫細川高國強請勘合。遣使宋御(祖)卿貢。正德六年西海道刺史左京兆大夫大内藝興強請勘合。遣使省佐貢。嘉靖二年各道爭貢。國王乂値(義植)初立。幼沖不能制。大内藝興遣使宋設謙道。細川高國遣使瑞佐宋素卿交貢。舟泊寧波港。互相詆謗。宋設謙道等讎殺宋素卿伴從追至紹興地方騷動。嘉靖二十七年倭益肆猖獗。閩廣浙直遍受其禍。迄今未寧。

今按。強原宮當作橿原(カシハラ)宮。卑彌呼事見後漢書。作上卷。咸淳當作感亨。稱秦王。據情書則日本中有秦王國見上卷。毛八國當作毛人國。和景當作和泉。東海道有伊賀伊勢等六十四州。共統一百一十六郡。六十四州當作十五州。一百一十六郡當作一百二十九郡。伊紀當作紀伊。談路當作淡路。四十八郡當作五十郡。九十三郡當作八十五郡。三十郡當作三十一郡。山東道當作東山道。通

江當作近江。驛字上脫飛字。濃野當作上野。一百三十二郡當作一百十三郡。六十九郡當作七十郡。丹彼當作丹後。徂馬當作但馬。又有一伎島對馬島多褹島、各統二郡。故曰三島。一伎壹岐也、壹岐對馬謂之二島。多褹島天長以前不攝國郡。有能滿益救二郡。如二島。自天長隷大隅國。類聚三代格卷第五載、天長元年九月三日太政官謹奏。停多褹島隷大隅國事。右參議大宰大貳從四位下小野朝臣峰守等解偁、謹撿案內。太政官去二月十一日符偁。件島南居海中。人兵乏弱。在於國家良非扞城。又島司一年給物、准稻三萬六千餘束。其島貢調鹿皮一百餘領。更無別物。可謂有名無實。多損少益。右大臣宣、奉勅宜勘利害言上者。南溟淼淼。無國無敵。有損無益。一如符旨。須停島隷大隅國。計其課口不足一鄕。量其土地有餘一郡。能滿合於馭謨。益救合於熊毛。四郡爲二。於事得宜者。云云 僧祖御製文集所謂如瑤藏主者與。大內藝興藝字當作義。

倭人在東海之中。新羅國之東南。本名倭。後自醜其類改日本云。左右小島五十餘。皆自名其國而臣附之。其國東西五月。西南三月行。竝無城郭。聯木柵居之。風土與新羅百濟類。自山東文登縣成山衛絕海入匏蘆河。以入新羅。歷太鎭七貞現三。遂抵百濟之熊津。及嘉林任存二城。此城猶百濟水陸之衝。通此二城則日本之右臂折矣。夫新羅百濟日本國。於東南民物豐阜。金銀溪積。好閩廣糖菓青衣㢡葛絲羅段絹。川廣藥材銅鍋鼎銚。又性慕鬼神。每招約朝鮮。嘗以六月間登萊州定海縣之落迦山。賽祭觀音以邀其福。若藏邊海條禁以遂商賈貿遷。仍寬分利以致其來。平價值以息其爭。惇誠信以固其意則利盡。東海壕堡無煙。歲抽其稅。不可勝言。上可以益國家之賦。下可以寬東

〔多褹島〕大隅國熊毛郡に屬する海道也、今種子島と云ふ、持統紀にあるを初見とす。

〔益救〕薩摩國大隅郡にあり、推古天皇の時始めて入朝す、今益久島に作る。

〔類聚三代格〕三十卷、今散佚して十五卷を存す、弘仁貞觀、延喜三代の格を類聚したるものを云ふ。

〔大隅國〕和銅六年日向薩摩を割きて始めて當國を置く延喜式に「菱刈、桑原、贈於、肝屬、始羅、大隅、熊毛馭謨」の八郡を載せたり。

〔勃海〕周の時、肅愼と云ひ、後變遷ありて、隋の時靺鞨と云ふ、其のズンガリ河流域にある粟末部の人、大祚榮、高句麗の故地を略定し、唐睿宗の冊封を受けて勃海郡王となる、これより國號を勃海と改む、其の隆盛時には、南新羅に接し、東日本海に抵り、西遼河を踰え、五京を有し海東の一强國たりき。

〔暹羅〕古への天竺にして、後分れて暹と羅斛の二國となる、支那洪武の時初めて暹羅と稱せり。

海之征。沿邊征倭官兵永以坐嘯矣、行之數年。海民慣熟、因類汲引。可達福餘。福餘東北番衞也。與朶顏大寧延州四衞互相表裏。爲遼東薊門之聲。陸路遼未可通、惟自成山徑抵新羅。轉達穢貊沃沮福餘。可以規制。朶顏復大寧以爲京師陵寢磐石之固。未可視爲末務而不講也。唐置勃海高麗之使。遂有大寧通奚之軍。已先爲之矣。東胡弓馬偏長而不敢行舟。南方便舟。如使馬而疾於步騎。異日有事。大寧薊門遂左掖其東西。南方舟師直擣福餘。所謂迅雷不及瞑目。疾雷不及掩耳者。況取利於市舶。民力不費。資勢于新羅百濟。兵卒精強。何所拘泥而不早圖耶。

今按。右世法錄。以日本與倭人別立條者非也。

又卷之八十

琉球國居海島中。直福建泉州之東。自長樂梅花(モイハ)所開洋。風利可七晝夜至。距福寧。溫。台亦頗近。云云。或云。於古爲流虬。地界萬濤。蜿蜒若虬浮水中。因名。後轉謂之琉球。云々。嘉靖二年福州府盤獲琉球夷人三十二名。譯稱往暹羅。齎貢儀。抵漳州外洋。遭風。會倭使宋素卿等於寧紹讐殺。上恐墮奸計。命併發浙江。查勘。三年琉球貢使金良等言。本國先遣正議大夫鄭繩等貢方物。渡海。風漂未至先進表歸國。上報聞許之。以倭使宗設等逋誅鄭繩。還令齎敕。轉諭日本捕治云云。三十四年尙淸(琉球王)卒。明年倭寇浙直。敗還入琉球境。世子尙元發兵邀擊殲焉。得所掠金坤等六人。遣廷會修貢賚送。因言。貢使須乘夏令南風迅始得歸。請如三十四年例。聽於福建海口自行修貢歸舟。上嘉其忠許之。賜敕奬諭厚賚金幣。三十七年遣給事中郭汝霖行人李際春。持節册。封尙元爲王。越

再歲還福州。其國遣廷會。謝以倭警。請如正德中封占城例。詔册回國。禮部以非故事。且無世子印文。不許。四十一年始竣封。明年遣陪臣鄭憲等入貢。因送歸中國漂流人口。且請歸本國流移。上頒檄瀕海諸路。萬曆元年尙元卒。四年世子尙永嗣。及永卒三十一年封尙寧嗣王。如令甲。三十七年薩摩州倭侵琉球。虜其王。四十年遣使復修貢報。中山王業反國。海道參政石崑玉等駁貢物雜倭產。請阻回俟勢定。上從部議。令貢使無入朝。量收方物給賞。四十四年五月中山王尙寧遣通事蔡廛報。倭造戰艦五百餘。脅取雞籠山島野夷。雞籠淡水洋。一名東番云。東去三百里。爲葉壁山。又東卽日本。恒與貿易假貸。近國那覇首里。竝有馬市販鬻。率女儈市。用日本錢。十當一。如宋季鵝眼綖環。國初使來言。其俗不貴紈綺。貴磁器鐵釜。賜予及市馬。多用之。鹽舶魚艇制稍異。酷信鬼。不知醫藥。以婦人不二夫者爲尸。其魁號女君。近王宮有寺。藏經千卷。它籍無五經。有四書。以杜律虞註爲經。土田砂礫。樹藝鹵莽。野多麀及馬牛羊豕。山多蛇無虎。樹之佳者鳳尾蕉。貢有蘇木胡椒黃熟降檀諸香。竝非所產。產饒硫黃海貝。讌會令童歌夷曲。舞以侑觴。酒以水漬米。越宿婦人嚼以取汁。曰米奇。間來自暹羅。淸冽易令人醉。武宗嘗賜玉杯。每出爲壽。學書及武以倭爲師。甲用皮革。矢可至二百步。節以金鼓。衆驍耐饑寒勞苦。好爭狠鬬。度不免卽引刀。自斃於海上。故稱勍國。然不當倭十一。國別號大琉球。西南則暹邏。東北則日本。從長樂广石出海隱々一小山浮空。卽所謂小琉球也。

今按。琉球去日本薩摩國三百餘里。撿我國記。文德天皇仁壽三年秋。唐商欽良暉發舶。智證大師

〔萬曆元年〕萬曆は明神宗の時の年號其の元年は、皇紀二千二百三十三年にて百六代正親町天皇の天正元年に當り、足利十五代將軍義昭の末年也

〔薩摩州倭侵琉球〕慶長十三年、島津家久、幕命を受けて琉球を征し國王尙寧を擒にす十五年沖繩及諸島を撿地して、貢物の納額を定め、且つ在番奉行を沖繩におきて、諸事を監理撿察せしめたるを云へり。

〔米奇〕御酒の訓也酒は「榮水〔サカイミヅ〕」の義にて、約して「サガ」、「サケ」と訓み、更に「キ」と約まれる也

共之泛海入唐求法。時北風俄起漂流流求國。遂見數十人持戈矛立濱坻。良暉悲泣謂智證曰。我等當爲流求所噉。爲之如何。蓋言不幸爲島夷見枉害也。智證持咒。須臾東南風來。翼日著福州。近衛帝時。源爲朝渡流求驅魑魅。安百姓。自此島民欽我風。國中爲朝遺迹甚多。沙門袋中詳記之。琉球漸爲島津氏附庸之國。時亦不從命。後花園帝寶德三年七月琉球人來獻鵝眼一千貫。將軍源義政進之于禁中。先是琉球人數來于兵庫市交易。及陽成帝天文十七年五月廿七日。琉球國王上關白殿下書曰。承聞。日本六十餘州拜望下塵歸服幕下。加之及高麗南蠻偃威風。天下太平囊弓。撫四夷。吾遠島淺陋小國。雖非及一禮。島津義久公使大慈寺西院和尙有命。故差上天龍桃菴和尙。明朝塗物。當國土宜。輕薄之進物錄于別楮。爲遂一禮也。恐惶不宣。關白答書在下卷。慶長年中島津家久遣一使於琉球責其不貢。琉球臣三司官邪那無禮。不以爲宗國。於是家久建言于關東。遣數千兵以討之。疏球大敗。國都那覇陷。遂捕尙寧王以歸。時慶長十四年當明萬曆三十七年五月也。尙寧王在薩摩三年而後得還。自是琉球感戴納欵通和。

又按。琉球之名始見於隋書。其義亦詳於世法錄。已刻于上。南浦文集曰。源爲朝以累代將種掛千鈞强弩。其威偃塞垣草木。遠航於海征伐島峙。於斯時也。舟隨潮流求一島於海中。而征伐鬼類。平其島。故名流求。中改流求二字。共从玉爲琉球。黄耇之言如此。未知是否。見林謂。爲朝之武義震殊域者實也。自隋至爲朝五百五十餘年。流求之名自隋有之。則其名非始於爲朝矣。袋中曰。琉球國王宮榜以龍宮城。觀此則琉球者龍宮之義也。音通。此國在東南。水府之內極深之庭也。推

〔智證〕僧圓珍の諡號也、圓珍俗姓和氣氏、讃岐那賀郡の人、弘法大師の姪、父は宅成、母は佐伯氏、天安十年天台座主に補せられ、天慶七年法眼和尙位を授けらる、寺門派の祖也。

〔流求〕琉球也。

〔鵝眼〕訓「セニ」は錢音の轉訛也、鵝眼を金貨の意に用ゆるは、書言字考に「宋泰始中有鵝眼錢、鵝、其瞳方其眼圓、錢圓形方孔、又、能似之故名焉」とあり。

〔關白殿下〕天文十七年五月頃の關白は藤原房通也、房通十四年忠冬の後を承けて關白となり、十七年十二月罷免。

爲龍宮亦可也。世法錄流虬之說。意相近矣。

普陀山志卷二

郡人吏部侍郎周應賓 纂輯 尚寶司丞沈泰鴻 校正
邑人刑部主事邵輔忠 同校 文安御用監太監張隨 梓行

山水

蓮花洋卽山西海也。倭奴入貢。見觀音靈異。欲載還國。滿海生鐵蓮花。舟不能行。倭懼而還之。洋之得名以此。

今按。下文曰。慧諤得觀音相於五臺山。將迎歸本國。舟觸新螺礁蓮華當洋。舟蔽不前。觀此則蓮華洋之名始于萼矣。此曰倭奴入貢。見觀音靈異。欲載還國。滿海生鐵蓮花。舟不能行。蓋前後所記。本皆此一時事。而所記有異聞耳。據此言之則萼於五臺山得觀音像。欲歸朝舟過會稽海。有鐵蓮花之異。故萼與像止于其上一山。自此以海名蓮花洋。山號補陀山也。又佛祖統記曰。舟過補陀山附著石上不得進。無鐵蓮花事。

建置

梁貞明二年。日本僧慧諤得觀音相於五臺山。將迎歸本國。舟觸新螺礁蓮花當洋。舟蔽不前。謁禱曰。使我國衆生無緣見佛。當從所向建立精藍。有頃舟向潮音洞泊焉。有居民張氏。目覩斯異。遂捨所居。築室奉之。號爲不肯去觀音院。

〔五臺山〕支那山西省の北部にあり、文珠出現の靈地と傳へらる、我が平安朝時代に、慈覺大師の入唐して、密敎を修學せし處也。

〔普陀山〕浙江省寧波州府の海上にある島也，往昔我國の彼の國に航する通路に當れり、普陀は補陀落の略にて梵語海中の義也

〔貞明二年〕貞明は後梁末帝の時の年號也、其の二年は紀元千五百七十六年六十代醍醐天皇の延喜十六年に當れり。

〔不肯去觀音院〕觀音院、もとは胎藏界曼陀羅の第三院の稱，こゝには普陀山の院號也。

今按。惠蕚直唐大中間入唐。佛祖統紀說得之。見上普陀山志前後。皆謂梁時者謬也。又蕚作諤或鍔者非也。

國朝嘉靖六年。河南郡府施琉璃瓦三萬。磚一萬修餝。三十二年東倭入犯。總督胡宗憲遷其殿宇于定海縣東城外之招寶山。迎大士像供焉。餘舍盡焚。

今按。嘉靖三十二年當日本後奈良天皇天文二十二年。

梁日本僧慧鍔從五臺山得菩薩像。將還國。舟抵礁石不能動。望潮音洞默叩。遂得達岸。乃以像舍于洞側。張氏為築院奉之。屢昭神異。郡聞之迎其像入城。為民祈福。未幾有僧。至補陀。復求嘉木。扃戸刻像。彌月像成。而僧不知所在。後像偶亡二指。忽波間浮花至。視之廼所亡像指也。

今按。蕚非舍像。乃與像止于洞側。終不歸日本也。

釋子

梁惠鍔日本僧首創觀音院。

萬曆己丑夏五月既望。鎭守總兵官雲間侯繼高記。茲歲仲春余督哨海洋。舟過補陀。肅謁大士。禱曰。我佛靈赫尙克相余。俾我師貞吉少效尺寸以上報天子。未幾倭奴竊發寬我邊界。皇威丕震。我是以有花腦浪岡之捷。謂非大士默相之功可乎。

今按。萬曆己丑當日本天正十七年。

卷四

〔大中〕唐の宣宗の時の年號にして、紀元千五百七年五十四代仁明天皇の承和元年に當れり、十三年を經て、咸通と改元す。

〔佛祖統紀〕五十四卷、宋の志磐の撰、天台一家の正史也

〔大士〕道德高き人を敬稱する語、五燈會元に釋迦牟尼佛、姓刹利父淨飯天母大淸淨妙位登補處生兜率天上名曰勝善天人亦名護明大士」と、又、韓詩外傳に、「謂子貢曰、辯士哉、謂顏淵曰、大士哉」とあり。

〔會稽〕浙江省紹興府會稽縣也、古へ吳越の戰の時、越王勾踐の隱れし會稽山こゝにあり。

〔泰定元年〕泰定は元の晉宗の時の年號にして、其の元年は、紀元千九百八十四年九十六代後醍醐天皇の正中元年に當れり。

〔補陀落迦山〕佛典に載する山名也、光明山、海島山、小花樹山等と譯す印度の南海岸に在て觀音の住處也、舊華嚴經入法界品に「於此南方有山曰光明彼有菩薩名觀世音」とあり。

事略

元吳萊甬東山水古蹟記

昌國古會稽海東洲也、東控三韓日本。北抵登萊淮泗。南至慶元城。三伯五里。泰定元年六月自慶元桃花渡覔舟而東、海際山童無草木。或小權如筋。輙刈鬻鹽戶。東偪海有招寶山。或云他處見山有異氣。疑下有寶、或云、東夷以海貨來互市、必泊此山。山故有砲臺。嘗就臺蹠弩射夷人。洞船猶入地尺。又別作大筒。曳鐵鑽江水。夷船猝不得入前。至淶口。恠石嵌險離立、南曰金雞。北曰虎蹲。又前則爲蛟門、淶東浪激。或大如五斗石甕。躍入空中。却墮下。碎爲零雨。或遠如雪山冰岸。挾風力作聲。勢崩擁舟蕩々與之上下。一僧云。此特其小小者耳、秋風一作海水又壯。排空觸岸、杳不辨舟楫。獨帆檣上指潮、東上風西來水相鬪、舟不能咫尺。一撞礁石且靡解不可支持。又前則爲三山大洋。山多磁石。舟板釘鐵、或近山則膠掣不動、昌國境中多大山。四面皆海、人家頗居篁竹蘆葦間。或散在沙嶼。非舟不利往來。田種少類。入海捕魚。蝤蛑水母彈塗桀步。腥涎褻味逆人鼻口。歲或仰穀他邦。東從舟山。過赤嶼。轉入外洋。望岩峉山。山出白茇。地多蛇、東判梅岑山。梅子眞煉藥處、梵書稱補陀洛伽山也、華言小白華山、自山東行西折爲潮音洞。洞瞰海外。巉中裂、大石壁紫黑旁罅而兩岐、亂石如斷圭。積伏蟠結。怒潮徉擊、晝夜作魚龍嘯吼聲。又西則爲善財洞。峭石嚙足。泉流滲滴。懸纏不斷。前入海數百步、有礁。土人云、嘗有老僧。秉燭行洞穴且半里。山石合一竅有光、大如盤盂。側首睨之。寬引潔白。非水非土、遠不辨涯際。又自山北轉得磐陀石山。麗恠金高、疊石如峌、東望窅々。想像

麗日本如在雲霧蒼茫中。日初出。大如米篩。薄雲掩蔽。空水弄影。恍若鋪金僧伽黎衣。或見或滅。南望桃花馬秦諸山。嵌空刻露屹立。巨浸如山擊太潮。鐵壁不著寸土尺樹。天然可愛。東南望東霍山。山多大樹。徐市住丹于此。土人云。自東霍轉而北行。盡昌國北界。有蓬萊山。萊山四圍。峙立旋繞。小嶼屹如千丈樓臺而中處。又有紫霞洞。與山爲鄰。中畔通明。方如大車之輿。潮水一退人可入。或云。人不可到。隱々有神仙題。墨漫不能辯。又有沙山。細沙所積。海日照之有芒。手攫則霏屑下。漸成窪穴。潮過又補。終不少損。旁有石龍。蒼白角爪鱗鬣皆具。蜿蜒跨宣。亘三十里。舟經其下。西轉別爲洋山。中多大魚。又北則爲朐山岱山石蘭山。魚鹽者所聚。又自北而南則爲徐偃王戰洋。世言。偃王既敗不之彭城。而之越。棄玉几案于會稽之水。又南則爲黃公墓。黃公赤刀壓虎。不行爲虎所食者也。夫昌國本禹貢島夷。後乃屬越。曰甬勾東。越王勾踐欲使放吳王夫差居之。然不至也。海中之山。安期羨門之屬。或避秦亂至此。方士時未深入。或云。王山在山底。故稱。入會稽者爲入東海。抱朴子亦云。古仙者之樂登名山。爲上海中大島。如會稽之東翁州者次之。今昌國也。八月自昌國回。姑錄山海奇絕處。明吾人之不妄。時一展玩索。少文臥遊不是過矣。

今按。越梅岑山。自我朝惠蕚始稱觀音堅坐之地。有補陀洛伽號。此記錄山海絕景。如見畫圖。故全載之。此山擬佛說補陀洛伽山。亦猶我朝熊野那智近江石山之類。然萊據佛祖統記以爲梵書所稱補陀洛伽山者非也。招寶山名義舉二說。皆通。嘗見道元禪師傳。寶慶三年冬元歸自宋。發船。天寒雪霏々。忽有神人。現舩曰。我龍天也。在支那名招寶七郎大權修理菩薩。隨師護正法。蓋

〔芒〕孟子に「又、光芒」と見ゆ、光輝の放射をいふ。

〔黃公〕黃石公の事也、仙人にて、張良に兵法を授けたる事、史記に見ゆ。

〔安期羨門〕安期は安期生といひて瑯琊の海邊に藥を賣りて千年の壽を保ちたりといふ仙人也、羨門は史記秦始皇紀に「入海求羨門高誓」と見え、其の註に「羨門古仙人也」と見えたり。

〔道元禪師〕父は久我通親、母は藤原基房の女にて、正治二年京都堀川の邸に生る、越前永平寺の開祖也。

此山神也、禪刹造二其像一供養、二山大洋多二磁石一。舟板釘レ鐵。或近レ山則膠掣不レ動。嘗聞二古老人唐賛一云。我國人帶レ刀。過レ多二慈石一地。不レ見レ吸者以二朴樹一造レ鞘故也、朴能制二慈石一。又我朝自レ古造二表函一以レ朴蓋古唐日本通、昔時制乎。

遵生八牋卷之八　　古杭　高濂深甫氏編次

袖爐焚レ香携レ爐。當下製有レ蓋透レ香、如二倭人所一レ製。漏レ空罩レ蓋。漆鼓熏爐似二便清齋一、焚レ香、炙レ手。薰レ衣、作レ烹レ茶。對レ客常談之具。今有二新鑄紫銅一、有二罩蓋方圓爐式一。甚佳、以レ之爲二袖爐一、雅稱清賞。

又卷之十六

文具匣　倭式用レ鉛鈐レ口者甚佳。

事林廣記續集卷之三　　西穎　陳元靚　編緝

倭韓粟生二倭韓國中一。大如二雞子一。

唐詩歸第九卷　　景陵　鍾惺伯敬父　譚元春友夏父　選定　古吳　劉敬典生父　重訂

王維

送三秘書晁監還二日本國一。

譚云。淹韻詩難レ得。如レ此渾成。常宜レ誦レ之。以接二喉間清氣一。○鍾云。亦復壯幻。

積水不レ可レ極。云云音信若爲レ通。

今按。此詩見レ前。

〔膠掣〕固くひきつくをいふ。

〔慈石〕磁石なり、磺石の一種、性鐵を吸引する故に、母子相戀ふるに比して名づく。

〔袖爐〕所謂火鉢をいふ也。

〔王維〕太原祈の人字は摩詰、九歲にして辭を屬する事を知り、草隸に工なり、張九齡の政を執る時右拾遺に擢でらる、安祿山の亂に賊に捕へられ、後、尙書右丞に遷り、上元の初めに卒せり。

〔天台寺〕支那浙江省台州天台縣にあり、隋の智者大師の創建に係る。

〔鮫人〕人魚をいふ。述異記に「南海有二鮫人一、水居如レ魚、不レ廢二機織一、其眼能泣、泣則出レ珠」と見ゆ。

〔彈指〕指にてはじく間の義にて、極めて短かき時間をいふ、蘇軾詩にも「三過レ門老病死、一彈指頃去來今」とあり。

〔桑田變〕桑畑が何時しか變じて碧海となる義にて、世運のうつりかはりの甚しきにいふ。

〔中元二年〕我が垂仁天皇の八十六年に當る。

又第二十四卷

沈頌　送二金文學還一レ日東一。

君家東海東。君去因二秋風一。鍾云。因字灑而妙。漫々云々。冒レ險當レ不レ𥁕。皇恩措二爾躬一。鍾云。措字老。甚幻甚別。著二一字一替レ他不レ得。譚云。皇恩措二爾躬一五字。稱是先秦以上。

今按。此詩見二文苑英華一。在二上卷一。英華𥁕作レ懼可也。

明詩選卷上　　李卓吾　輯

五言律詩

海屋爲二華古鼎一賦　　董良史

海上高僧屋數椽。珊瑚碧樹繞二階前一。過レ橋半(?)蓉天台寺。泊レ岸風帆日本船。龍女獻レ珠來供レ佛。鮫人分レ席與參レ禪。百季劫數如二彈指一。眼見桑田幾變遷。

唐類函卷一百十六　　明　東吳　俞安期　彙纂　明　山陰　何光達　校訂

邊塞部一東夷　倭杜氏通典

倭自二後漢一通。在二東南大海中一。依二山島一爲レ居。凡百餘國。光武中元二年倭奴國奉二朝貢一賀。使人自稱二大夫一。倭國之極南界也。　安帝永初元年。倭國土地王師升等獻二生口一。桓靈間倭國大亂。更相攻伐。　魏明帝景初二年。司馬懿之平二公孫氏一也。倭女王始遣二大夫一詣二京都一。貢獻。魏以爲二親魏倭王一。假二金印紫綬一。

隋文帝開皇二十年。倭王姓阿每名日多利思比孤。其國號二阿輩雞彌一。華言天兒也。遣レ使詣レ闕。其書

曰。日出處天子致書日沒處天子無恙。云々。帝覽之不悅。謂鴻臚卿曰。蠻夷書有無禮者勿復以聞。
明年帝遣文林郎裴清使倭國。渡百濟。東至一支國。又至竹斯國。又東至秦王國。其人同於華夏。以爲夷洲。疑不能明也。又經十餘國達海岸。自竹斯以東皆附庸於倭。清將至。王遣小德阿輩臺（アハタ）。從數百人。設儀仗。鳴鼓角來迎。又遣大禮歌多毗。從二百餘騎。郊勞。既至彼都。其王與清相見。設燕享以遣、復令使者隨清來貢方物。　唐貞觀五年遣新州刺史高仁表。持節撫之。浮海數月方至。仁表無綏遠之才。與其王爭禮。不宣朝命而還。由是遂絕。　倭一名日本。自云。國在日邊。故以爲稱。武后長安二年遣其大臣朝臣眞人貢方物。眞人猶中國地官尙書也。頗讀經史。解屬文冠進德冠。其頂百花分而四散。身服紫袍。以帛爲腰帶。容止溫雅。朝庭異之。拜爲司膳員外郎。天寶末。衞尉少卿朝衡。卽其國人。
今按。此俞安期略記杜氏通典者也。詳見上卷。雖如涉泛。而使幼學之士知唐類函亦引之。

博物典彙卷之二十

史官黃道周參玄氏　纂

四夷

日本

東夷曰日本高麗女直。日本故倭奴國。光武時始通中國。歷漢唐宋元。貢獻不一。寇亦不一。開皇永徽間遣人求佛經。開元雍熙間遣人來從儒受經。路由廣東由明越者始于唐德宗時。咸亨中惡倭名始號日本。其國在朝鮮韓國之東。與朱崖儋耳相近。國初遣使宣諭。遂乞降。洪武五年復令二僧往說法導之歸化。後因胡惟庸通倭謀逆。故大誥內禁絕其貢。蓋四海諸番惟此一國居海中。

〔日出處天子云々〕この事、東國通、五雜俎、隋書などにも見ゆ、而して是れ我が朝推古天皇の八年也。

〔鴻臚卿〕太平御覽に「六典曰、鴻臚卿之職、掌賓客及凶儀之事、領典客司儀二署、以率其官屬、而供其職務云々」と見えたり。

〔裴清〕太歷の間、宿州の刺史たり。

〔竹斯國〕筑紫國の事也。

〔燕享〕燕は宴にて酒宴なり、享は饗應にて、もてなすことをいふ。

時許ニ其互市ヿ。自ニ四明ー航レ海而來、艨艟數十戈矛劍戟莫レ不ニ畢具ー。出ニ其重貨ー貿易、若不レ滿レ所レ欲、燔ニ燒城郭ー、抄ニ掠民居ー。聖祖故深絶レ之。令ニ東南沿海州縣ー。歷遣レ將出レ海巡レ倭、永樂初年曾封ニ源道義ー爲ニ日本國王ー。十七年倭犯ニ遼東ー、都督劉江設レ伏破レ之。擒ニ斬三千餘人ー。無ニ一得レ脱。故遼東至レ今少ニ倭警ー。宣弘後隨貢隨掠。嘉靖間俠商汪直始勾ニ倭人ー犯。海上騷然其連ニ七省ー、總制尚書張經巡撫李天龍皆以レ失レ律坐レ誅。朝宗憲總之經營十年。費レ餉數百萬。始寧。至ニ萬曆十四年ー平秀吉始篡レ位。秀吉關白。平信長養子。于レ是益治ニ兵衆ー征ニ服諸州ー。十七年兼ニ幷六十六州ー。十八年集ニ兵十萬ー征レ東、且曰。吾欲ニ渡レ海侵ー唐。遂攻ニ破朝鮮ー。將レ入ニ犯中國ー。時石司馬星惧ニ聽沈惟敬封貢之議ー。致レ損ニ國威ー。倭衆猖獗。六七年。自ニ二十五年ー邢經略玠出レ關、至ニ二十八年ー而後得レ息。

〔艨艟〕廣韻に「艨艟戰船也」とあり、又た釋名に「狹而長曰ニ艨艟ー以衝ニ突敵船ー也」と見えたり。

〔燔道〕燔は康熙字典に「焚之古文」とあり、燔は玉篇に「本作レ燒也」と見ゆ、やきはらふ義也。

〔源道義〕足利三代將軍義滿をいふ、道義は義滿剃髮して道義又た道有といへり。

〔平信長養子〕秀吉は信長の養子となりたる事なし、恐らくは何等かの誤傳なるべし。

音韻字海卷之首

長州　周鍾　介生父　新安　陳明廷　家修父　長洲　周光祥　承明父輯次

附錄夷語音釋

天文門

天　句尼

雫　由旗(ユキ)

霞　嗎嚧尼

昨日　乞奴(キノ)

日　飛陸

星　波世

起風　嚧濟福藤沾

風雹　嚧濟科立

月　都急(ツキ)

霜　失母(シモ)

天陰　句泥奴枯木尼

風　嚧濟(カセ)

雹　科立

天晴　句泥奴法工的

雲　姑木(クモ)

霧　氣力(キリ)

下雨　嚧乜福藤

雷　刊眉(カミ)

露　禿有

下雪　由旗福藤(ユキノル)

雨　嚧乜

電　波得那

明日　阿者(アサ)

〔[illegible]〕拼也。

〔磚〕集韻に、與レ甎同とあり、しきがはらをいふ。

〔笋〕廣韻に「竹胎也」とある、たけのこをいふ。

〔龍眼〕熱帶地方に産する植物にて、圓き茶褐色の實を結ぶ、之れを龍眼肉といふ。

〔荔枝〕支那にては閩廣地方に生ずる二尺許の木をいひ我が國にては、瓜の一種なる蔓草をいふ。

地理門

地 只尼　土 足只　江 密乃庚　河 嘻哇　海 吾七　山 牙馬奴　水 民足(ミス)

冰 谷亦里　路 密集(ミチ)　石 依石(イシ)　井 依嘻喇　鍋 拿別　城 達(キ)　泥 七祿

沙 是那(スナ)　灰 活各力　橋 扒只(ハシ)　磚 牙及亦石　瓦 嘻哇喇　岸 倭嗑　遠 它加撒

近 郎加撒　長 拿嗑失　短 密失拿失(ミシカシ)　前 馬七　後 吾失祿　左 分達里(ヒタリ)　右 民急里(ミキリ)

上 吾七　下 世英　東 加失(カシ)　西 尼失(ニシ)　南 米南米(ミナミ)　北 乞大(キタ)

時令門

春 法(ハ)　夏 拿都　秋 阿及(アキ)　冬 由扁　冷 碎牙撒　熱 噓子撒　寒 詐角祿撒

暑 奴[illegible]撒　陰 姑木尼　陽 法立的　晝 皮祿　夜 由祿　早 達多　晚 約姑里的

時 吐急(トキ)　氣 亦急　年 多失(トシ)　節 [illegible]谷尼而　正月 燒哇的　二月 [illegible]哇的　三月 撒哇的

四月 升哇的　五月 [illegible]哇的　六月 祿谷哇的　七月 式的哇的　八月 法只哇的　九月 谷哇的　十月 柔哇的

十一月 失木都反　十二月 失哇思(シハス)

花木門

茶 札　花 法拿　米 谷米　樹 拿急(エキ)　果 吾七　松 馬足　栢 馬足拿急

竹 達急(タケ)　笋 達急　棗 那都七　草 谷撒　瓜 吾利　菜 菜　梅 吾七

葉 尼　香 橘　蓮花 花孫法拿　龍眼 龍嗜　荔枝 利是　甘蔗 翁急　胡椒 窩[illegible]

〔蘇木〕蘇枋の事なり、熱帶產の喬木にて、黃色の花を着け、青き實を結ぶ、材は楊弓などに用ひ、其の鉋屑を煮て赤色の染料とす。

〔騾〕らば也、驢馬と馬との雜種にて體軀小さくして強く、馬と同樣に使役せらる。

蘇木 司哇(スハ)

鳥獸門

龍 達都(タツ)　虎 它喇(トラ)　鹿 加日　馬 吾馬　獅 失失(シシ)　牛 吾失　兎 吾撒忘

熊 谷馬(クマ)　象 嗑(サ)　雞 土地　鵝 啨哪　猫 哇　驢 同　騾 同

狗 亦奴　皮 嗑哇(カハ)　鼠 彜　鶯 打答噶　魚 游(ヨ)　羊 匹牝啞　蛇 密蜜

猴 撒傢　龜 嗑七　雀 由門都里　鳳凰 呼窩　麒麟 麒彜　孔雀 枯盧枯　獬豸 害宅

仙鶴 司傢　象牙 嗑哈其　琥珀 嗑七那各　牛角 吾失組奴　喜鵲 孔加査思　鶴頂 它立奴谷只

宮室門

門 郁　牕 牙　房 亦棄　樓 塔嗑牙　御路 密集　丹墀 密集(ミチ)　御橋 扒只(ハシ)

皇城 窩宿孤　館驛 館牙　瓦房 嗑喇亦棄牙

器用門

盛 嗑塌吐　甲 幼羅衣(ヨロイ)　刀 塔塔拿(カタナ)　箭 牙　弓 由七(ユ)　弦 子奴　鎗 牙立

卓 代(タイ)　盤 扒只一名桶盤　盆 大箹　瓶 匹胡平　床 隘各　船 蒲尼(フネ)

柱 花時　舵 呑息　櫓 羅　篷 賀　筯 婆匙(ハシ)　帶 文帶　畫 棄

書 佐詩　筆 忽嘆(フデ)　字 閑第　墨 司默(スミ)　紙 㟐枇(カミ)　硯 孫司利(スヽリ)　鎖 挿息

碗 麻佳里(マサリ)　屏風 飄布(ビヤウブ)　香爐 槁爐　花瓶 捉拿　香盒 䲰法各(フハコ)　倭扇 拒其(アフギ)　箱子 凱

〔通事〕通譯をいへり。

〔和尙〕楚語鄔波遮迦の轉、力生と譯す、師の力が法身を生長する義、茲にては單に僧の義にいへり、天台宗にてはクワシヤウ、眞言宗にては、ワジヤウ、禪宗、淨土宗にてはヲシヤウといふ、律宗、眞宗にては和上と書く。

菓子 餞其(ギ)　玉帶 衣食乞各必　酒鍾 撒嗑子急(サカツキ)　茶鍾 茶麻加里(マカリ)　金鍾 孔加尼麻加里(コカネ)

人物門

皇帝 倭的每　王妃 倭男札喇　國王 倭王嗑吶戸　王子 倭奴僻勃入誇　朝廷 倭木奴

大夫 太福(シノ)　長史 文的　使者 使臣　通事 通貪　正使 申司(シンス)　副使 付司(フス)　唐人 大刀那必周

師父 失農褒(シノ)　和尙 褒子(ホウス)　父親 一更加烏牙　母親 倭男姑吝牙(フナコ)　兄 先牝

弟 屋都(ヲト)　妻 司之　子 枯哇　女 烏男姑(ヲナコ)　琉球人 倭急拿必周(ワキエビス)　日本人 亞馬吐必周(ヤマト)

大明帝王 大苗倭都每　琉球國王 倭急拿敖那　朝貢使臣 嗑得那使者

人事門

跪 匹舍鼇貪之　說 嗑答里　拜 排失之　興 屋起里　走 迫姑一其　行 亞立其(アリキ)　去 亦急

來 吃之　你 吾喇　我 瓦奴　有 阿力(アリ)　無 妳　反 哇祿撒　買 科的

賣 屋的　睡 眠不里　請來 子盍失之　見朝 大立葉亦急　入朝 大立葉密達

鞠躬 曲尸麻平的　低頭 嗑蘭自之　立住 答止歪立　叩頭 嗑藍自之　謝恩 溫卜姑里　平身 度漫思吾

慶賀 密由烏牙　表章 虎烏　賞賜 吾一加每奴　起來 揭知　進貢 嗑得那　進表 嘌那阿絭的

報名 包名　辭朝 畏之謾歸　囘去 悶都里一其　早起 速都蜜的　下程 司眉曰尸　筵宴 札半失

勅書 倭眉脚都司墨　拿來 嗑子密的枯　好看 丘達撒　不好 哇祿撒　放下 由六尸

作揖 利十之　方物 木那哇　給賞 烏牙沒谷古里　多少 亦加撒　言語 麻奴嗑答里

〔韈〕廣韻に「本作韤」と見え、韈は說文に「足衣也」とあり、茲にては足袋をいへり。

〔衫〕篇海に「小襦也、一曰、單襦」と見ゆ。

〔裙〕說文に「下裳也」とあり、下着をいふ。

曉得 識吉哇　聖旨 由奴々失　不曉得 失藍　且慢走 慢的　上緊走 排姑亦急　上御路 悪牙卽的里

再叩頭 麻達嗑藍子其　御前謝恩 悪牙客涅卜姑里

衣服門

段 圖受里　紗 撒　羅 羅　紬 柔　絲 西花　絹 舌見　布 木

韈 多末　鞋 末低　帽 沒東　帶 爲那　衫 遮那　裙 爲子　褲 下乎

綿布 奴奴木綿　夏布 拿都木綿　紵布 達急木綿　葛布 嗑布　綵段 拋拿圖受里　改機 盖乞

官絹 活見　倭絹 活見　紗帽 官末　網巾 君望　員領 空爲　衣服 乙衣

飮食門

酒 撒其　茶 札　飯 汪班尼　菜 菜　菓 刻納里　粉 由諾沽　麵 皿其諾沽

肉 失失　魚 游　酒飯 撒其汪班泥　喫茶 札安急弟　喫飯 汪班尼安急弟

喫肉 失失安急弟

身體門

頭 嗑藍子　耳 米米　眉 馬由　目 乜　口 窟之　牙 喏其　鼻 拋拿

手 剃　脚 匹奢　心 起模　身 庋　髮 嗑十藍其　鬚 品其　齒 扒

鬍子 胡品其

珍寶門

〔瑪瑙〕寶石の一種にて、玻璃の如き光を有して紅色を帶ぶるものを第一とす。

〔萬々歲〕千年も萬年もの義にて、もと長壽を祝ふ詞にいへり。

〔悲〕楽韻に「黑子也」とあり、ほくろをいへども、下に「カサ」とあれば今の黴毒をいふなるべし。

金 孔加尼(コガネ)　銀 南者　銅 押里嚧尼　鐵 窟碌嚧尼(クロカネ)　錫 石碌嚧尼　錢 惹尼　鈔 支尼

玉 依石　珠 撻馬　石 一實(イシ)　珍珠 撻馬　瑪瑙 吾馬那達馬　珊瑚 牙馬那達馬

水晶 血子撻馬　玉石 撻馬　琥珀 拔末　犀角 胡豸　硫黃 收末

數目門

一 的子　二 荅子　三 賦子　四 由子　五 一子孜　六 畝子　七 拿納子

八 鴉子　九 鬧骨碌子　十 吐　一錢 一止買母　二錢 尼買每　三錢 山買每　四錢 申買每

五錢 五買每　六錢 六谷買每　七錢 式止買每　八錢 法止買每　九錢 枯買每　一兩 蕉買每　十兩 撒姑每

一百兩 撒牙姑每　一萬個 嘛蕉吐失　千歲 森那　萬々歲 嘛由吐失

通用門

看 密只　閑 漫圖押里　笑 瓦喇的　啼 那其　叫 陸的　痛 一借沙　悲 課沙

實話 馬訟沽夷　說話 嘛奴嚧達里　求討 荅毛里　知道 識之　不敢 揚密撒　東西 加尼尼失(ニシ)

不見 迷闌　不閑 漫圖索　說慌 由沽辣舍　快活 括其　辛苦 南及之　不知道 失藍子

明早起身 阿者迷圖拖枚揚支

附夷字音釋

以字　路字　眾字　尼字　布字　比字　度字　知字

利字　奴字　兩字　倭字　哇字　加字　有字　他字

〔鶴林玉露〕宋の羅大經の撰する所、詩話語錄の間にありて、議論を詳かに、考證に便せるもの也、凡て十六卷より成る。

〔傳敎〕元亨釋書に「釋最澄は俗姓は三津氏にて、近江國滋賀郡の人也、其先祖を尋ぬれば後漢の世の獻帝と申す帝の子孫に坐します云々」と見えたり。

〔慈覺〕明匠略傳に「慈覺大師、諱圓仁、俗姓壬生氏、下野國都賀郡人也云々、延曆十三年大師誕生日云々」とあり。

呂字　毘字　子字　尼字　那字　刺字　式字　烏字

倚字　怒字　窩字　末字　吉字　牙字　去字　不字

孤字　依字　的字　惡字　沙字　其字　又字　永字

美字　實字　泄字（エイノ）　庇字　毋字　世字　是字　敲字

凡夷國上下。文移。往來書札。只寫二此數字一。凡有二音韻略相類者一。卽通用也。予因昔年遊レ閩。得レ遇二琉球納欵通事一。以レ此告レ予。故筆二之於書一以助二觀覽一。諸同志者幸勿三目以爲二迂一云。

喜聞劉孔當謹識

今按。字海夷語音釋ハ日本語也。與二鶴林玉露日本寄語登壇必究武備志一。有二異同一而相表裏。又夷字音釋與二書史會要一頗同。劉孔當之所レ識會要無レ之。故並載レ之。くやま一次倒置。京案字。傳敎加レ之。或云。慈覺加レ之。

大明一統賦卷之上

吳　莫且氏　著

日本國卽古之倭奴。其地周回數千里。西北至レ海。東北限以二大山一。國王以レ王爲レ姓。歷代不レ易。文武皆世レ官。有二五折七道附庸國一。凡百餘。其俗黥レ面文レ身。披レ髮跣レ足。婦女不レ淫不レ妬。飲食籩豆。初喪却二酒肉一。計二其道里一在二會稽之正東一。洪武四年朝貢。至レ今不レ絕。

儷語編類卷之七

中直大夫弘文館典翰趙仁奎景文　編

送二日本僧歸一

韋莊

〔檀紙〕厚くして色白く皺文あるものをいふ。「マユミノカミ」ともいふ、檀の皮にて造る故にいふ、後には楮にて作れり、また陸奥國より始めて造り出せるより、陸奥紙ともいへり

〔大高檀紙〕檀紙の丈け高く長きものをいふ。

〔小高檀紙〕檀紙の狹く短きものをいへり。

扶桑已在渺茫中。家在扶桑東更東。此去與師誰共別。一船明月一船風。

弇州稿選卷之五　　弇州山人王世貞

日本國出松皮紙。

今按、日本國中。諸國多生名紙。如延喜式美濃國紙・源氏物語陸奥國紙。美麗紙屋紙之類。不可勝數。松皮紙即蘭紙、今檀紙也。有大高檀紙小高檀紙。其紙礫硐似松皮。故號松皮紙。宜參攷上卷引新唐書今按。

異稱日本傳　卷中七　終

異稱日本傳　卷中八

〔咸亨云々〕唐の高宗の時の年號にて我が天智天皇の御代也、玆に日本といふ國號を改むとあれども、本居宣長の國號考には、孝德天皇の大化元年に、新に制定したるものなる由、記せり。

〔范文虎〕呂文德の婿にて、宋の咸淳中、殿前副指揮使となる、弘安の役に將となりて來り颶風に逅ひて破船し、僅かに敗板によりて生きて還るを得たり。

〔良懷〕後醍醐天皇第十六皇子懷良親王を申す、延元三年征西大將軍に任じ、筑紫を鎭撫せられし也。

蒼霞草卷之十九

福淸　葉向高進卿甫　著

日本考

日本古倭奴國。在東海中。地分五畿七道三島。又附庸國百餘。大者五百里。小者百里。最強大桀黠。漢滅朝鮮通使稱王者三十餘國。其後天村雲尊立。累傳皆稱尊。神武天皇立。累傳皆稱天皇。亦間立女王。時與中國通。唐咸亨初。改號日本。元世祖使趙良弼招之不至。遣唆都范文虎。將十萬兵往征至五龍山。暴風舟覆。軍盡沒。終元世絕不通。國朝洪武二年倭寇山東淮安。明年再入轉掠閩浙。上遣趙秩諭其王良懷。爾能臣則來。毋患苦吾邊。不能則善自爲備。良懷言。蒙古嘗使趙良弼好語餂我。襲以兵。今使者得毋良弼後乎。其亦將襲我也。欲刄之。秩爲其言所以來。宣國家威德耳。豈狙汝耶。良懷氣沮。乃遣僧隨秩。奉表稱臣。入貢。上亦遣克勤仲猷　僧往諭。然其爲寇掠自如。瀕海郡縣迄無寧歲。乃下令造海舟防倭。德慶侯廖永忠請備輕舸以便追逐。從之。七年來貢。無表文。其臣氏久私貢。並却之。九年表貢語謾。詔詰責之。十三年再貢。皆無表以其征夷將軍源義滿所奉丞相書來書倨甚。命錮其使。明年復貢。命禮臣爲檄。數而却之。已復納兵貢艘中。助逆臣胡惟庸。惟庸

〔周德興〕濠の人にして明の太祖と同里也、少より相得て從ひ、累戰して功あり、左翼大元帥に遷る、洪武三年に江夏侯に封ぜらる、進んで節制鳳陽留守司幷訓練屬衞軍士たり。

〔劉榮〕宿遷の人、初め父の名江を冒す、徐達に從ひて灰山黑山林に戰ひ總旗たり、英宗の時太子少傅たり。

〔宣德七年〕明の宣宗の世、我が永享四年にて、足利義敎の代也。

敗事發。上乃著祖訓示後世。毋與倭通。而命信國公湯和江夏侯周德興。分行海上。視要害地。築城設衞所。摘民爲兵戍之防禦甚周。倭不得間。小小入與我軍相勝敗。永樂元年王源道義遣使入貢。上賜冠服文綺。給金印。道義稍捕獲諸島寇。來獻。賜賚甚豐。封其山碑而銘之。予勘合。十年一貢。八年道義死。子源義持立。遣使往封。頒之。我兵殲海上倭。其首皆倭人。群臣請誅之。上釋歸。璽書下義持。儞父畏天事大。職貢不愆。先烈之不圖而輒犯于上國。儞罪在必討。朕所以隱忍者。未忘儞父之恭耳。儞其思之。義持奉表謝罪。禮其使遣歸。未幾復寇遼左。都督劉榮大破之。初榮偵倭至。即伏兵望海堝。而別遣奇兵斷其歸路。倭中伏奔。捕馘無孑遺。當是時我方招來諸島夷。絡繹海上。倭乘爲欺詐。瀕海復騷。賴是捷遂戢。論功。封榮廣寧伯。宣德七年年以日本貢久不至。命中使諭其王源義教。明年來貢。自後遞貢。遞掠。備嚴則貢。得間則掠。與之期不遵。我亦取羈縻。示寬大而已。倭益肆無忌。至焚官庾民舍。縛嬰兒竿上。沃以沸湯。卜孕婦男女。剖視賭勝爲樂。慘毒不忍言。至成化時。廷臣始有發憤。議却其貢者。而竟格不行。正德四年王源義澄遣宋素卿來貢。素卿者鄞人。朱縞也。逃入倭。有寵于其王。易姓名充使。其族人相與耳目爲奸利。守臣白發之。禮臣恐失外夷心。置不問。素卿厚賂閹瑾。賜飛魚服遣歸。嘉靖二年再奉使。至是時。國王源義植孱。諸島爭貢以邀利。大內藝興遣宗設謙道。先素卿至。俱留寧波。故事夷使以先後至爲序。市舶中官賴恩黷（ムサボリ）素卿財。先素卿。宗設大忿相讎。殺我指揮劉錦袁璡。大掠寧波。奪舟去。巡按御史以聞。禮臣仍右素卿。以給事御史言乃下素卿獄。論死沒其貲。絕貢者十七年。至嘉靖十八年其王源義晴復貢。乞易勘合。還素卿貲。不

〔朱紈〕字は子純、長洲の人、正德十六年の進士也、嘉靖の間、右副都御史巡撫南贛に改む、處州の礦盜を平げ擅殺を以て劾せられ、藥を仰ぎ死す。

〔虛月〕其の事のなき月をいふ、毎月其の事ある也。

〔李逢〕字は邦吉、進士より戶部左給事中に進み、同官と共に帝の南巡を諫め、詔獄に下され永福典史に謫せらる。

〔楊宜〕衡水の人、初め河南を撫し、劇賊師尙を平げ、南京戶部右侍郎に遷り、次で兵部右侍郎に擢でられしも倭寇の勢盛なりし故に其職に堪へず、半歲にして落職せり。

許。仍申約貢必如期。舟三。人百。不者卻勿受。夷性獒。違約如故。內地奸豪往往與爲市。不償直。夷索逋急。則恫喝官府。以縱寇爲辭。兵出則陰泄之。倭遂其去。且樹德也。如是者久之。倭大恨言。我挾王貲而來。不得直。何以歸報。因盤據島中。我亡命無賴。及小民迫於貪酷饑寒困苦者。咸相率從亂。東南之禍大作。于是朱紈以巡撫蒞治之。紈日夜飭兵。嚴糾察。上章暴勢豪交通罪。奸謀稍解。紈竟爲豪所中自殺。賊益猖獗。三十一年殘浙東。四年犯大倉。破上海崇德嘉善諸邑。時王忬爲巡撫。忬經略摘發頗有緒。旋移大同去。李天寵代將則盧鏜湯克寬兪大猷。是時倭至。無虛月。屯據柘林川沙窪青村陸涇壩諸處。四出流剽。而柘林賊最劇。鏜戰孟宗堰。大猷戰金山衛。天寵合諸將兵戰烏程縣之窯墩。皆不利。別將李逢時率山東兵戰新涇橋。小勝隨大敗。三十三年張經爲總督。經前總督兩廣有威惠。計調廣兵禦倭。兵未集。而工部侍郎趙文華以禱海至。文華素貪。緣大學士嵩。貴幸頤指經。經自以大臣位其上。自重不爲下。文華屢促出師。經以兵機祕。業已刻師期不告也。文華遂劾經養寇。并及天寵。詔逮訊。時經已與賊大戰王江涇。破走之。斬首千九百八十有奇。進攻陸涇壩賊。又敗之。斬首一百七十有奇。焚其舟三十餘艘。倭大創。經上疏白理。不聽。竟論死西市。以周珫代經。胡宗憲代天寵。珫未幾去。以楊宜代。屬文華盛集兵。戰爭陶宅。敗績遂還朝。應天巡撫曹邦輔再戰再敗。惟蘇松參政任環戰稍捷。賊別部自日照登掠贛榆。自上虞登掠高埠。皆不滿百人。官兵莫能禦。高埠賊轉掠溧西南直。破南陵溧水。橫行數千里。殺傷無算。至蘇州乃滅。諸將大猷等邀賊海上。頗有斬獲。而閩廣倭大至。三十五年楊宜罷去。宗憲代。阮鶚代宗憲。文華復出督師。時浙賊惟陳東最強。

〔宗禮〕字は大本、河南永寧の人、洪武中、國子生より山西按察司僉事に擢でらる、永樂中工部尚書に累進し隆慶六年太子太保を贈らる。

〔宗憲〕姓は胡、字は汝貞、績溪の人、知縣より御史に擢し、宣大を巡按す、累りに寇賊を撃ちて嘉賞せらる、後ち嚴嵩文華に搆陷せられ、瘐死す。

〔王本〕累進して四輔官に至るも、後ち事に坐して誅せらる。

徐海後至、與之合、參將宗禮率所部河朔兵九百人、與戰于崇德、三遇三克。追踰橋、橋陷兵潰。禮死之。賊進圍鶚于桐鄉、鶚固守不能拔、乃解去。而宗憲欲携二賊、乃遣人至海所、若爲好語者、東疑之、宗憲則厚賂海使、執東自贖。海許諾、卽計擒東、及其黨陳葉等百餘人以獻、而自率其衆、別營梁庄官兵遂圍東巢。盡殲其餘黨、進攻海于梁庄、海死。別部據舟山、俞大猷攻之、未下、會夜大雪。大猷督兵進、賊拒戰敗歸巢、擁柵自固、我兵縱火焚之、斬首百四十餘級。餘悉死巢中、兩浙平。其明年誅王直。王直者徽人也、嘗遁海上、能號召諸夷。治大舶、巢五島中、奸商徽鄞葉宗滿謝和王淸溪等共集、衆與相署置。倭之來皆直等導之。宗憲欲招之、乃迎其母妻至杭、供其犒慰甚厚、而先是鄞生員蔣洲者上書督府言、能說直使禁戢諸夷毋內犯。宗憲遣洲。行以生員陳可願副之、至五島。直邀人爲言、日本方亂、往無爲也。誠令我輩得自歸、無難使倭來、遂遣養子毛臣、同可願還。其自言直語。而傳送洲至豐後島。其島主留洲、稍爲傳諭諸島、居一歲、乃遣僧德陽及夷目四十人、隨洲來貢、直亦許。俱至而宗憲亦遣毛臣歸報直。所以游說百端、至是直乃來。御史王本固疏言、不宜招直、異議閧然。直至覺有異、乃先遣王滶入見宗憲曰、吾等奉招而來、謂宜信使遠迎、宴犒交至也。今行李不通、而兵陳儼然、公毋誑我乎。宗憲曰、國法宜爾、毋我虞也。與約誓堅苦、直終不信曰、果爾可遣滶歸。宗憲立遣之。復以指揮夏正爲質、直乃使毛臣王滶守舟。而身入見頓首言。死罪。且陳其與洲戮力狀。宗憲慰藉甚至、令居獄中俟命。疏聞、詔誅直。始宗憲本無意殺直、以本固爭之強、議者且謂。其受直金、欲貸其死。故宗憲懼不敢爲請。直死、王滶毛臣殺夏正、率餘衆據舟山拒之、踰年乃解。三十八

〔如皐〕江蘇省通州府にあり、
〔白蒲〕同省同府如皐の東にあり。
〔泰州〕江蘇省揚州府にありて、如皐の西、揚州の東にあり、
〔天長〕安徽省泗州府天長縣にあり。
〔南都〕南京也、江蘇省江寧府にあり
〔寧德〕福建省福寧府疊山縣にあり。
〔福淸〕同省福州府にあり。
〔牛田〕同省福州福淸縣にあり。
〔興化〕同省興化府にあり。
〔仙遊〕福建省興化府にあり。
〔連江〕同省福州省連江縣也。

年倭寇江北。分數道入。巡撫李遂馳至如皐、與賊遇白蒲。諸將言。宜及其未定擊之、遂曰。夫戰貴得地。賊方銳、而我軍未嘗見大敵。卽小挫難復矣。約勤軍中毋得言戰。賊益進、遂策曰、賊分道入過如皐。必且合、合則道有三。自泰州過天長鳳泗、卽皇陵驚最要。自黃橋過瓜儀掠南都。而梗漕次之、若從富安而東。海濱荒涼擄掠無所得。至廟灣絕矣。乃吾得地時也。於是部諸將防遏令毋得過天長瓜儀。而分兵綴賊。後賊果走廟灣。遂欲以策困之。通政唐順之以視師。至促戰斬獲甚衆。順之會有他役釋去。遂益合兵攻圍。賊困甚欲遁、副使劉景韶督兵焚其舟。賊救舟。我兵水陸攻之。大潰。斬首八百餘級。江北倭悉平。其寇福建者張甚連攻破寧德福淸永福諸邑。巡撫阮鶚罷去。王詢劉燾游震得。相繼撫閩無尺寸功。宗憲檄參將戚繼光往援。時賊據寧德之橫嶼。阻水爲營。路險隘。官軍坐守。踰年莫敢進。繼光軍令嚴。所部用命。至則令軍中人持束草塡河。進力戰大破之。生擒九十餘人。斬首二千六百餘級。焚溺死者無算。奪所擄三千七百餘人歸。乘勝剿福淸牛田倭。又破之、繼光初至福淸。邑令及父老請師期。繼光曰。吾兵疲且休矣。俟緩圖之、賊偵者歸告不爲備、其夜督兵行三十里。黎明破其巢。邑人尙未知兵出也。繼光歸。賊復肆。四十一年攻陷興化。總兵劉顯去賊一舍而軍。不敢戰。復命繼光往。時賊方巢平海。聞繼光至欲逃。爲俞大猷所扼不得出。繼光督軍薄戰。大猷繼之。因風縱火。賊皆麇集中無脫者。支黨寇仙遊連江諸處。盡討平之。當是時微繼光幾無閩。未幾廣東倭亦爲官軍所敗。逃至甲子門。將奪舟入海。暴風盡溺。得脫者僅二千餘、留屯海豐。俞大猷就圍之、賊食盡欲走。副總兵湯克寬伏兵待之。賊至伏發。擒斬幾盡。倭患遂息。

自東南中倭以來十餘年間。中外騷擾財力俱詘。生靈之塗炭已極。倭亦大傷。至盡島不返。隆慶時海上道遼曾一本等復稍々勾引。入犯閩粵。我亦嚴爲備旋至旋撲。非如嘉靖之季矣。始倭盛時。議者以市舶罷夷無所衣食。故反。宜開市如諸蕃。參將大猷以爲。倭與諸蕃不同諸蕃。產物多。舶至而征之。其利厚。倭之市僅一刀一扇。無他產可利也。而又生禍端。國初絕之。今忍開之乎。且倭能害我者。以我陸而禦之。主客反而勝敗分也。吾以海爲塹。以舟爲家。明風候。嚴約束。來擊去追。倭可剿矣。舍此不圖。而輕與之市。爲國家生事。後必悔之。大猷習海上事。後多用其畫。其地北跨朝鮮。南盡閩浙。其往朝鮮也。自對馬島開洋。信宿至。閩浙順風旬月至。其主居山城。故稱山城君。山城之南爲和泉。又南爲沙界。沙界之東南爲紀伊。紀伊之西爲伊勢。山城之西爲丹波。左爲攝津。左之西爲攝摩。右爲但馬。右之西爲因幡。丹波西爲美作。左爲備前。左之西爲備中。右爲因幡。右之西爲伯耆。美作之西爲備後之北境。出雲之南境。備後之西爲安藝。出雲之西爲石見。安藝石見之西爲山口谷國。卽古之周防州也。山口之西爲長門。關渡在焉。渡此而西爲豐前。其南爲豐後。又其南爲日向。豐前之西北爲筑前。西南爲筑後。筑後之南爲大隅。大隅之西爲薩摩。豐後東南懸海爲土佐。爲伊豫。爲阿波。阿波相近懸海爲淡路。土佐豐後之間爲佐加關。薩摩之北爲肥後。又其北爲肥前。肥前西懸海爲平戶。平戶之西爲五島。北爲多藝。爲伊岐。極北則對馬島。諸島皆有酋長。山城君弱空名耳。倭不稟其號令。內相攻。強則役屬。而豐後最大。其入貢必由博多歷五島而行。回則徑趨長門。每歲清明後至五月。重陽後至十月。常多東北風。利入寇。故防海者以三四五月爲大汛。九十月爲小汛。其入寇多

〔隆慶〕明の穆宗の時の年號也、七年にして萬曆と改元す、其の元年は、紀元二千二百二十七年百六代正親町天皇の永錄十年、足利將軍十三代義輝の時に當れり、

〔嘉靖〕明の世宗の時の年號也、四十五年を經て、隆慶と改元す、其の元年は、紀元二千百八十二年、百四代後柏原天皇の大永二年、足利將軍十二代義晴の時也。

〔閩浙〕今の福建省廣東省の古稱也。

〔和泉界〕界は堺也和泉國泉北郡の北端にあり、今大阪府堺是也、此の地古へ攝河泉三國の堺なれば名付たり享祿天文の頃には內外の船舶常に輻輳して殷賑を極めたり。

〔山口〕周防國吉敷郡の西北部にあり足利時代の中世期より末期に亙りて、大內氏之れに據り中國九州の間に覇を唱へたるを以て有名也。

〔大內氏〕姓は多々良、其先は百濟國琳聖太子より出づ延文永正の間、義弘、義興、義隆最も著名也。

薩摩肥後長門三州人。次則大隅筑前筑後博多日向豐前豐後和泉諸島俗喜盜。輕生好殺。每戰必單列綬步爲蝴蝶陣。前一人揮白扇爲進止。木弓竹矢以骨爲鏃。刀極剛利。中國不及也。男子魁頭斷髮。黥面文身。婦人被髮跣足。間用屨。土氣溫煖。宜禾稻桑麻。產金銀琥珀水晶硫黃水銀銅錢白珠青玉蘇木胡椒細絹花布漆器扇刀劍鎧甲。貢道故由寧波達于京。

論曰。四夷爲中國患從來久矣。而皆厲於西北。狡然島夷狂逞。肆噬則明興實甚。豈盛衰之數。亦遷乘歟。夫以高皇帝之威靈。北暢南浹。獨倭馭之而不馴。綏之而愈貳。此其不可以禮義化誨懷服。視諸夷爲特甚矣。東南江夏僇力經營。保障之具犂然畢舉。廣寧一戰威震殊俗。赳々虎臣于今爲烈矣。顧鉅防墮于平世。彊弊于匪人。東南之禍其亦有必然者也。重以匪茹閎懲。包荒太甚。郊關弛禁。虎兕狎遊。遂令貢使內訌。姦氓外市。紛紜糾結。干戈日尋。毒流海內十載不休。祖訓之嚴於絕倭。淵乎卓哉。眞萬世之龜鑑矣。

今按。天材雲尊。材當作村。以天村雲命爲帝祖非也。詳見武備志下。圖書編武備志日本考。多蓀蒼葭草爲文也。氏久德陽俱未詳何人。沙界和泉界也。界訓沙加以。故訛稱沙界。紀伊之西爲伊勢非也。伊勢在紀伊東。丹渡當作丹波。攝摩當作播摩。山口谷國谷國二字衍文。山口在周防國。大內氏之墟也。西南爲後。後字上脫筑字。淡路淡路之訛。和前和泉之訛刀極剛利中國不及也。此言能中。凡自神代多利劍。昭昭于傳記百家之書矣。

國朝獻徵錄卷之十

秣陵　焦竑弱侯　編輯

咸寧伯進封侯諡武襄仇鉞墓誌　　楊廷和

高祖成洪武初。從レ征有レ功。授二楊州衛百戸一。與二倭賊一戰沒。

又卷之十一　　弇州別集

胡惟庸

惟庸直隷定遠人。惟庸爲レ人雄爽有二大略一。而陰刻險鷙。衆多畏レ之。起二家寧國令一。時太師李善長秉レ政。惟庸饋二遺善長黄金二百兩一。遂得二召入一爲二太常少卿一。累遷二中書參政一。上既誅二楊憲一悔レ之。群臣亡三當レ意者一。惟庸晨朝擧止便辟。卽上所レ問能强記專對。少レ所レ遺。上遂大愛二幸之一。擢二中書右丞相一。惟庸小人。驟得レ志大肆二貨賂一。酬報睚眦。諸徹侯失職亡命。多依二依惟庸左右一。而誠意伯劉基以二師臣一時接上議二天下事一。亹々言。惟庸劣犢必破レ轅僨レ犂。宜二早賜一レ罷。上猶豫未レ果。惟庸微伺二從上左右一得レ之心害レ基。而會基引レ疾還。上別勅鄕國事許レ不二時聞一。靑田民私卽レ海煑レ鹽。因取便刼掠。基條請立二巡撿一。控制嚴二其禁一。令二子璉上一レ之。不レ關二白中書一。惟庸亦大恚。譖二於上一言。基視二民家山有二天子氣一奪レ之不レ得乃爲レ此。欲下以聳二動上一。而陰中中其策上。上不レ懌。基皇恐馳謝自明。留二闕下一。久之屬レ疾。上遣二丞相一挾レ醫視。遂進レ毒。踰レ歲基不レ起。右丞相汪廣洋懦從レ旁得二其狀一。不二復能發一。而惟庸益橫甚。無二復知一レ所レ忌。會其家人爲二奸利事一。道關榜二辱關吏一。吏奏レ之。上怒殺二家人一切責。丞相謝不レ知。乃已。又以二中書違慢一數詰二問所由一。惟庸懼乃計曰。主上魚二肉勳舊臣一。何有レ我耶。死等耳。寧先發毋二爲レ人束死寂々一。上究二故誠意伯死狀一。惟庸懼二且見一レ發。而日本來貢使私見。惟庸乃爲約二其王一。令下舟載二精兵千人一僞爲二貢者一。及レ期會二府中一。力掩執レ上度レ可レ取。

〔咸寧〕陝西省西安府西安縣にあり。西安の古稱也。

〔楊州〕江蘇省楊州府也。

〔定遠〕今安徽省鳳陽府定遠縣也、ここに直隷とあるは江蘇安徽兩省の古稱なる南直隷省の略也。

〔魚肉〕魚肉は人に食せらるゝもの、因て殺害せらるゝに云ふ、史記項羽傳に「人方爲二刀俎一我爲二魚肉一」又同張儀傳に「毋レ爲三秦所二魚肉一」とあり。

取之。不可則掠庫物。泛舸就日本。有成約。惟庸因僞爲第中甘露降、請上幸臨。上許之。會中貴人奇走告變。上乃登城樓望其第。藏兵甚衆。卽發羽林掩捕考掠。具狀礫於市。夷三族而盡誅其僚屬黨與者。凡萬五千人。誣罔株蔓甚衆。令圖惟庸死時狀戒天下。因罷丞相官矣。

今按。明太祖答日本征夷大將軍書曰。前奉書我朝丞相。丞相謂胡惟庸也。又武備志曰。征夷將軍源義滿所奉丞相書來。已復納兵貢艘中助胡惟庸。觀此則義滿助胡惟庸者也。

又卷之十九

右春坊右中允秦君鳴夏墓志銘　羅洪先

會倭夷內寇。鄕邑糜潰。日夕盻々不休。未幾盡得其利害情實。與夫戰守攻守之勢。乃更慨然懷憤。時時出議中其機牙。於是撫按亦皆交薦其才。以爲可備緩急。而尙書趙公祝師北歸復以名聞新命下君。方慶幸得少有籍。以售其所爲。湧躍就道。至彭城疽發背卒。丁巳七月六日也。

倭寇則曰。不守海而守城。猶納寇於門而拒之堂也。不習水戰而角於陸。是示人走而責其死敵也。其諸擇將鍊兵。設守節財。具有條議。未及盡試。聞者悲之。

今按。丁巳嘉靖三十六年。當日本弘治三年。

又卷之二十

翰林學士承旨嘉議大夫知制誥兼修國史兼太子贊善太夫致仕潛溪先生宋公濂行狀　鄭楷

〔羽林〕羽翼の疾く撃つが如く、林木の盛なるが如き義にして、天子の親兵を云ふ。

〔三族〕父母、兄弟妻子を云ふ。

〔春坊〕太子の宮を云ふ、宮僚備安に「太子宮曰春坊」とあり。

〔翰林學士〕事物紀原に「唐太宗時名儒・時時召以草制待詔、常於北門候進止。號北門學士。明皇改曰翰林待詔。開元二十六年乃爲翰林學士」とありて、詔勅を草することを掌る職也。

旣司制作之柄。造門求文之士、先後相繼、其使朝貢者、數問先生安否。日本得淸溪集、刻板國中。高麗安南使者至購先生文集、不啻拱璧。

又卷之二十一

翰林院修撰張公洪傳　楊士奇

永樂元年擢行人。奉使日本、卻其餽金。

今按、永樂元年、當日本應永十年。

又卷之二十六

嘉議大夫吏部右侍郎兼翰林院侍讀學士贈禮部尚書盛公訥神道碑　王家屛

封倭之議聚訟盈庭、公抗言、倭不畏而求款、恐非情實。宜控守要害、調度兵糧、爲自治計。屏內事外、舍己從人、未見其便、衆以爲石畫。

今按、封倭封豐臣秀吉爲日本國王也。

又卷之二十七

南京吏部尙書王公本固傳　聶豹

按浙値倭寇猖獗。時有海寇王直者、逃罪居倭。數爲浙患。督府以計誘歸、欲釋罪官之、公不可。竟阻其議。置大辟罪。朝論韙之。督府以寇平、欲置酒高會、號太平宴、以示耀、計費萬金。公曰、元惡雖擒、餘孽尙在、何太平稱。宴乃罷。

〔神道碑〕墓門に建つる碑也、事物紀原に「晉宋之世始有神道碑、天子諸侯皆有之、其刻文止曰某帝或某官神道之碑、按後漢中山簡王薨、詔大爲修冢塋開神道、注云、墓前開道、建石柱以爲標、謂之神道、是則神道之名在漢已有之也、晉宋之後易以碑刻云」とあり。

〔韙〕是に同じ、「よし」と訓ず。

〔高會〕大會に同じ、漢書高祖紀に「收羽美人貨財、置酒高會」とあり

〔戶部〕我國昔時の民部に當る職司を執る役名也。

〔明應五年〕紀元二千百五十六年百三代後土御門天皇の御代にて、足利將軍十一代義澄の時也、明にては孝宗の治世たり。

〔弘治元年〕紀元二千二百十五年百五代後奈良天皇の御代にて足利將軍十三代義輝の時、明にては世宗の治世也。

〔柘林〕江蘇省金山縣にあり。

又卷之三十二

通議大夫南京戶部右侍郎程公嗣功行狀　汪道昆

比遷秩流倭薄都城。大司馬四明張公曰。君行吾誰與守。于時公居中調度。譚襄敏出師禦之。倭却而東。兩君子力也。

又卷之三十八

兵部尚書贈少保鄺忠肅公埜傳

倭寇犯遼東。埜往按問戍守之。失律者凡百餘人。皆應死。埜開陳其可矜狀。上宥之。

又卷之三十九

光祿大夫太子太保兵部尚書兼都察院右副都御史默齋許公論墓志銘　張鼎文

日本國遣使請釋梟囚。公屈其辭。

弘治丙辰正月倭夷入寇。公上平倭九事。

今按。丙辰弘治九年日本明應五年也。

光祿大夫柱國少保兼太子太保兵部尚書贈太保謚襄毅王公崇古墓誌銘　澹園集

嘉靖乙卯晉副使飭兵常鎭。常鎭故無兵備。以倭患專設云。

今按。乙卯三十四年弘治元年也。

在常鎭創海防條議。躬擐甲往來清江柘林。率兪大猷等于海洋。殲倭奴二百餘級。

大司馬二華譚公綸傳

大司馬二華譚公。名綸。字子理。江西撫州府宜黃縣人也。弱冠以儒士應癸卯擧於卿。取甲辰聯。第進士。初任南祠部主事。內艱服闋補庫部。既而庫部郎中。時倭奴薄留都。都下蓋人々恐。率又怯懦無敢前。獨毅然請募壯士。禦卻之。公從此以知兵名。朝廷從此亦專以兵事任公矣。擢公守台。台東北濱海。倭所嘗出入之地。畏公能治兵。郡中有所劖。不敢入台境且三年。既而公以治行。兼兵功。陞按察使之副。巡海道寧波。既而又以兵功。陞右參政。仍兼憲職。治兵丁外艱。尋以廣寇張璉等流劫江西。奪情起。公勦廣寇於江西。是年以江西廣寇平改福建。方疏請得終喪。而福建之興化陷於倭。尋又奪情起公。應援興化。公赴興化援。蓋以原官在道聞報。陞右僉都。予督撫。勅趨亟行。於是亟行入閩。而陷興化之倭。盡被公殲之於渚林。無返者。自是又勦前後入寇倭。於福淸之神前澳。於仙遊。於同安。於漳浦之玻璃嶺。閩倭患既稍々息。

方公之在南曹也。所募僅五百人。時又年少爾。而出以禦倭。倭寇兩浙。轉掠蘇松。勢方張莫或敢嚮邇。公卻之。若有以褫其魄而走。其在台所練台守卒僅千。當仙居黃巖殘破後。而能擊斬生擒千百倭於栅浦。於北嶺。於楊沙溪。旬日間凡三戰而三大捷。備兵寧波。散遣徵調。後簡土著。不過千餘人。以相從。乃不獨戰勝。倭酋毛善等於所轄信地。如粤港。如柯梅。如何家礦。如馬岡。所向無不披靡。而又能冒雨。忍饑。晝夜馳嶺道三百里。赴台人之急。竟全桃渚海門。幾不能守之兩城。又能邀破此賊於新河於太平之南灣陷之。泥滓之。中使殲焉。又如在江西。則張璉及林朝義蕭雪峰等號稱最劇

〔江西〕江西省也、揚子江の西岸にあるを以つて名付く古くは、浙江、福建、湖南と共に江南道と稱せり。

〔撫州府〕江西省の略中央部に位し、北に饒州、南昌、南に寧都、東に建昌、西に臨江、吉安の諸州府に隣接す。

〔同安〕福建省泉州府にあり、廈門に近し。

〔漳浦〕同省漳州府にあり。

〔桃渚〕浙江省台州府にあり。

〔新河〕下の太平共に、浙江省沿岸にあり。

賊。動連三省。乃指顧間皆相繼誅夷。在福建則賊已破莆陽城。勢張甚。數千之倭於諸林而殲之於一日。若刈麥芟草然。仙遊遁去之倭追於玻璃嶺下蕉田中。跪而頸受刀者且千餘。餘奔廣界。喘息至不能定。竟亦死。

今按。毛善未詳。

又卷之四十一

兵部左侍郎趙公孔昭傳

再按兩浙。會倭寇猖獗。大肆殺掠廛。世廟宵旰有詔。切責撫臣勦之。即以巡按御史紀功罪。一不當即寘重典。當事者難之。時督撫某結歡權相。氣燄薰熾。異己者傾擠立至。時應天撫台曹公横被陵轢。且欲誣以重罪。公對衆抗辨。略不少遜。事竟寢。次年平倭績上。錄公功。陞俸一級。賞銀二十兩。紵絲二表裏。尋陞南京大理寺右寺丞。一時疑獄多所平反。

兵部右侍郎贈尚書兗嵎蕭公廩墓志銘　陸可教

是歲以捕倭功賜白金文綺。先是公令海上卒。即倭非大舉必生致之。以防僞級。既而遙覘。若倭船者數十。迫而擒之。皆閩出捕魚民也。悉解縱之。

兵部左侍郎贈南京工部尚書許公孚神道碑　孫鑛

即推廣東僉事。時廣有倭警。而大盜李茂許俊美復張燄海上。助爲聲勢。公發十策。大約以水陸夾攻爲要領。即身率一軍薄賊壘。一軍軍石城村。一軍軍烏嶼。兩魁大懼。公遣使諭之。即乞降。且願縛

〔莆陽〕福建省興化府にあり。

〔應天〕福建省江寧府南京の異稱なり北京を順天府と云ふに對す。

〔平反〕反は飜也、獄を斷じ、罪人の辭を飜して輕きに從はしむるを云ふ、漢書楚元王傳に「劉德寬厚好施生、每行京兆尹事、多所平反罪人」とあり。

〔廣東〕廣東省也、古へ嶺南道に屬せり。

〔石城〕廣東省高州府にあり。

〔死士〕決死の勇士也、吳越春秋に、「越王將選死士出三江之兵入五湖之中」とあり。

〔帑金〕要意して蓄積せる金也、庫に納めて置く金のことを云ふ。

〔沈惟敬〕文祿の役我れと明との和議に預り、其奸猾遂に再び相戰はしめたり、瀛環志略、萬曆二十年（文祿元年に當る）の條に「嘉興無賴子沈惟敬應募往」とありて、其出は極めて卑しきものたりし也。

倭自效。適遊擊希功將掩降者覆之。茂俊美復逃去。一方皆驚。公見事急、即身航海抵賊舟。示以肝隔日必活汝。賊衆掩泣羅拜。遂獻所擒倭黨七十餘人。身隨公來。公又建善後十二議。乞安堵報上。詔賜金。

尋擢右通政。晉右僉都御史。巡撫福建時。倭擾朝鮮。浪傳乞封。本兵議許之。衆論不然。方紛紜未定。然其端原自閩發之。公至福建密募死士。往彼國偵焉。簡薔兵。請帑金六十萬貯以備猝警。無事不用。裁行都司及各府巡司清海地。課諸雜稅。不關司農者悉并入稅局。由是餉漸充而民所供顧減。已而偵者來。悉得彼詭謀并諸島酋相讐狀。疏聞於朝。請發兵擊之為上策。禦之中策。不可輕與封。本兵至膠執見之。亦悚然至親見司禮道其實。謂即切責。某數語罷封貢最善。後奸人惑之。乃復搖動卒之。倭患得息者用公中策也。公又念。嘉靖中倭亂本由嚴海禁者激成之。今禁故在也。而不甚嚴。閩出入者往々皆是商（里）人懷一篆符。至急時乃出之。或公然為盜。今欲嚴之難。莫若開其禁。皆官給帖以往。令為官商。私出者罪無赦。庶幾法得行而海患弭。詔允之閩人便焉。

今按。倭擾朝鮮。浪傳乞封。小西行長與沈惟敬謀。為秀吉乞封也。許孚遠募勇士偵之。可謂有智略矣。又令官商以往。私出者罪之。其法亦可也。到于今閩人來于我。其遺俗乎。

在閩二年。擢南大理卿。尋晉南兵右侍郎。是時倭未平。公既佐留樞。仍募閩人往探。又贊尚書料理諸兵事。當事者以公熟倭情改北兵左。然公在南都以聞曹。

又卷之四十二

〔萬安〕江西省吉安府にあり。

〔潮州〕福建省潮州府也、首邑を海陽と云ふ。

〔南贛〕江西省の贛州府、及南安府を云ふ。

〔汀漳〕福建省の汀州府及漳州府を云ふ。

〔雄韶惠潮〕共に福建省の、南雄州、韶州府、惠州府、潮州府を云ふ。

〔湖廣〕湖南省、廣西省の略也。

〔吉安〕江西省吉安府也、首邑を吉安と云ふ。

資政大夫南京兵部尙書贈太子少保郭康介公宗皐墓志銘　于慎行

其先江西萬安人。國初編田賦兵。備倭海上。

又卷之四十三

資善大夫南京兵部尙書贈太子少保鄒公杰神道碑　王家屛

倭奴起首急。朝鮮之難徵調兵餉數道並發。比還朝獨謂。封貢非宜議。與本兵石公左。其後事僨而朝紳服公之先見也。

嘉議大夫南京兵部右侍郞虛齋王公積行狀　王世貞

都御史朱公紈方議防倭寇。下諸道規兵食。久未報。公至勾稽簿牘。稽逋數。所以條對甚詳。朱公旣素賢公。至是乃上疏薦公自代。且引宋蘇洵氏言。必代已有賢者。而後可以死。論鹵斬倭功賜金十兩。

陸北川穩墓志銘　徐階

流賊盧梅林起閩楚之交。賊張璉起廣之興埔。璉故縣猾胥也云々。冀王伯宜入海導倭夷。犯潮州。率我兵。不得相救。勞猖獗。辛酉秋八月詔拜公都察院右副都御史。提督軍務。開府虔州合江西之南贛福建之汀漳廣東之雄韶惠潮湖廣之郴州。環數千里皆受節制。公行至吉安。梗道梅林不得前。

又卷之四十七

少司寇鑑塘朱公鴻謨傳　鄒元標

公爲操江撫應天。會倭事告急。當事者多屑越帑藏爲備倭計。公獨察地理要害。與夫兵器朽敗者飾之。諸子弟弄兵者戢之。不妄支一錢。曰。吾安能以未至之倭憊久安之赤子乎。久之倭不來。吳亦不困。

又卷之四十九

南京刑部侍郎沈應龍傳

倭寇告急。朝廷加意海防。登州故有備倭兵船。後既逃亡。船亦遷滅。公言。防海必資于船。禦寇必資于兵。亦復國初舊制。及査成化年間事例。以爲攘倭靖海之策。

又卷之五十二

王鈁傳

戊午倭寇自閩轉入揭陽。其勢張甚。公調兵邀擊。斬首三百。俘百有奇。奪還男婦四十人。上聞有白金文綺之賜。已而復犯潮陽。調兵擒剿百七十人。奪還男婦亦百七十人。上聞如初賜。

南京工部尚書進階資德大夫正治上卿礪峰康公大和墓志銘　林庭機

時倭夷孔棘。詔九卿各陳所見。公駐屯要害。練鄉兵固防守。寬委任。日事。上嘉納。

又卷之五十三

南京工部侍郎張公鉞行狀　劉麟

己丑遷浙江海道副使。時倭夷滰寇出沒爲患不常。鉞嚴令申儆。奸民以海舶取利。乘間爲盜入境

〔登州〕山東省山東半島の東端を占む首邑を登州と云ふ、有名なる威海衞、百尺崖等は本州に在り。

〔成化年間〕成化は明の憲宗の時の年號二十三年を經て孝宗の弘治元年となる、我が百三代後土御門天皇の御時にて、足利將軍八代義政、九代義尙の頃也。

〔揭陽〕廣東省潮州府にあり。

〔潮陽〕同前、揭陽の東にありて、海門灣に臨めり。

則倚豪勢爲淵藪。鉞逮治當路者數家。悉置之法。由是盜賊屏跡。

南京工部侍郎劉公愨傳

已出知嘉興府。時倭夷犯浙西。兵部尚書張經提兵壓境。愨爲調度糧餉。民不勞而事辦。比趙文華以工部尚書視師海上。暴横索賂。少不如意陷以大辟。愨終無以應之。第相見不激。不阿而已。文華卒不能害。

又卷之五十五

副都御史韓公宜可傳　雷禮

洪武十九年行取到京。命撰祭鍾山大江文。諭日本征烏蠻詔。作堯舜禹湯傳賢論。皆稱旨。

都察院右副都御史進階正議大夫資治尹穎東黨公以平行狀　張鼎文

倭夷讎殺爲地方患。獲海賊五百人。憲臣欲以爲功。喜謂公曰。我列公功以聞于朝。例當封侯如信國公故事。公訊其爲海中漁樵。爲賊所掠。悉縱之曰。殺無辜以幸賞吾不爲也。

又卷之五十七

許恭襄公論傳　汪道昆

於時北虜南倭警息日至。上患倭與患虜等集。群議下本兵。公折其衷。上平倭九事。諸軍謹奉廟略。悉中機宜。丙辰倭入淮揚虜入寧夏。諸軍戮力驅勦。悉從本兵受成。

胡公宗憲勦徐海本末　茅坤

（嘉興府）浙江省にあり、首邑を嘉興と云ふ、江蘇省界に接せり。

（洪武十九年）紀元二千四十六年、九十九代後龜山天皇の元中三年に當る足利將軍三代義滿の時也。

（堯舜禹湯）堯帝、舜帝（以上五帝の一）夏の禹王、周の湯王を云へり。

（入淮）江蘇省淮安府に入りたりと也、

（徐海）江蘇省の海州（北部海岸を占め山東に接す）徐州（北部山間部にありて、山東、河南、安徽三省の間に挿入す）の二府を云へり。

〔嘉靖丙辰〕嘉靖三十五年也、我が百五代後奈良天皇の弘治二年、足利將軍十三代義輝の時に當れり。

〔海門〕江蘇省通州府にあり今狼山港に屬せり。

〔淞江〕江蘇省江淞府也、同省の南東部にありて、稍半島形をなす。

〔上海〕淞江府にあり、楊子河口に臨み、現今世界有數の良港として知らる。

〔定海關〕浙江省紹興府にあり、寧波府の海沖中の一島也、首邑を舟山と云ふ。

〔慈谿〕浙江省寧波府にあり。

嘉靖丙辰、徐海之擁諸倭奴而寇也。一枝由海門入略維揚、東控京口。一枝由淞江入掠上海。一枝由定海關入略慈谿等縣、衆各數千人、而海自擁部下萬餘人。直通乍浦而岸。岸則破諸舟悉焚之、令人各爲死戰。又導故窟柘林者陳東所部數千人、與俱併兵攻乍浦城。蓋四月十九日也。當是時朝廷方奪故總督、而新總督胡公自提督代之、甫八日開幕府。麾下募卒僅三千人、俱羸弱不可用。故總督所徵四川湖廣山東河南諸兵俱罷去、所爲緩急者特容美土兵千人。及參將宗禮所籍河朔之兵八百人耳。南北諸倭酋不下數萬。諜者聲言。他酋分掠江淮於越諸州郡。間以拖援兵。而海等當窟乍浦。下杭州。席卷蘇湖、以臨金陵、氣恣甚。總督胡公方召諸司。畫計無何。故提學阮公代胡公爲提督。檄未至、夜半聞乍浦圍卷甲趨之。胡公亦分遣兵澉浦海鹽之間、爲聲援、而自引兵壁塘西、相犄角。居頃之海頗聞。新總督胡公卽故御史所嘗提兵督戰於鶯湖王涇之間。而覆之者氣稍沮。尋罷乍浦圍。聞兩公方擁兵壁近郊、不復敢窺杭。於是徑路峽石、越皂林、出烏鎭以北。烏鎭者卽海故所犯蘇湖舊路也。當是時胡公獲諜、度蘇湖之間、惟鶯湖爲四戰地。於是檄河朔兵。自嘉興入駐勝墩陣而待。因以吳江水兵遮其前。湖州水兵尾其後、而公自引麾下募兵及容美土兵。衡擊之。提督阮公自崇德聞賊且出烏鎭也、卽道挾河朔之兵騎、而馳及之於皂林、令善射者、且躡且射。賊稍稍引去。賊縱數百人爭之、輒又敗去。賊怒甚。鼓譟而前。提督阮公勢益急、於是走輕舸入桐鄉城。而參將宗禮與柳將霍貫道等。乃自張左右翼。厚集其陣以待戰、數合擊殺數千人。會日暮賊且引去。時賊氣頗窘、而宗禮霍貫道等亦已絕糧道。不得擇善地便水草。以自休止。明日餓而戰。賊遣候者樹而望。蓋孤壘

（桐鄉）浙江省嘉興府桐鄉縣の首邑也

（辯士）辯舌を以て論談する人也、莊子天道篇に「驟而語刑名賞罰、此有知治之具、非知治之道、可用于天下、不足以用天下、此之謂辯士」とあり。

（脣齒）利害關係の密接なるに謂ふ、左傳に「諺所謂輔車相依、脣亡齒寒云々」とあり。

以塹。無他援者也。大喜復縱兵。以半擊其前。以半繞其背。而霍貫道河朔故驍將也。大呼衆力戰。矢砲如雨下。無不人人一當十。復擊殺數十百人。而貫道亦手自刃十餘人。賊益怖。海且中砲欲馳去。會火藥盡。而霍貫道宗禮仰天呼曰。吾南人再得藥數斗可以了此賊矣。未幾貫道與宗禮俱陷。衆大敗。賊遂乘勝圍桐鄉。時總督胡公已引兵躡崇德。聞之潸然流涕曰。河朔之兵既敗、我兵皆氣奪莫敢戰。東南之事無復可支矣。賊已困桐鄉。假令復分兵困崇德以劫我。我兩人譬之抱而自沈也。國家且奈何。於是還省城。檄諸路兵為戰守計。先是胡公始為提督。時嘗與監督尚書趙公謀曰。國家困海上之寇數年於茲矣。諸酋奴乘潮出沒。將士所不得斥堠。而戍者人言。王直以威信雄海上。無他罪狀。苟得誘而使之。或可陰攜其黨也。按部題亦嘗有用間為策者。於是遣辯士蔣洲陳可願。及故嘗與王直友善者數輩。入海諭直。直果感悅。願如約。遣其養子毛海峰。款定海關謝過。間以諭海。海已散他島勾島入劫。故不相及。而海峰者云云。彼固未之聞也。公策曰。直與海雖順逆不同。其勢固脣齒也。直既悔悟。海獨不可以大義說之乎。不然彼貪人也。誘之以利。或可狃其心。間桐鄉城小而堅。緩之數十日則永保。戍兵至固可破之矣。於是疾走。人諭海峰。因厚遺諜者陰過海所曰。直已遣子款定海關。朝廷固且赦之矣。若獨無意乎。新總督威名非曩時比。且仰體朝廷德意。推心置人腹。若不乘此時解甲自謝。他日必為虜矣。海頗然其計。於是亦遣酋自謝。約罷圍去。因以要公。稍出中國貨物。遺他倭酋。而疏釋其罪。公佯諾。棘以銀牌綺幣。厚遺來謝酋。而陰令營中盛兵。容私諜者。故縱酋瞰之。酋既德公遺。又內怖公之兵威也。歸以報於海。明日復遣他酋來謝。公飭之

〔湖州〕浙江省嘉興府の北西部にあり大湖に臨む、要津也。

〔烏鎭〕同じく同府内にありて、桐鄕の東北にあり。

〔石門〕同じく嘉興府にありて、桐鄕の南、杭州府界に接せり。

〔皂林〕同じく同府にありて、石門と相對せり。

〔飛語〕誰の言ひしとも知れぬ話也、無根の誹謗に云ふ　漢書灌夫傳に「迺有飛語、爲惡言聞上」とあり。

如初凡數往復、海於是始歸心於公。願爲公死矣、然陳東獨心竊疑海私公遺。猶鞅鞅未之從也、海間遣酋。次桐鄕城下。私城上兵曰。某已聽總督胡公約解去矣。城東門故柘林賊陳東黨也。驚悍不吾從。若謹備之。是夕海果道崇德而西。且乞他兵於公。以夾擊東。公猶心訝未之許。而東獨盛爲樓櫓撞竿以撞城。而桐鄕令金燕者彊幹吏也。城中一切兵仗火藥諸已繕備、提督阮公復躬厲矢。口狗城上人人。令散千金募敢死之士。督戰益亟、所殺傷賊亦數十人。方撞竿自樓櫓中躍而撞城、城幾壞。一男子爲繩索圜撞竿。所擊故窮處竿至即縋挽以上斬之。又募亡命者。炎鐵汁灌城下酋。城下酋不敢逼。東既無何、聞海等解去、道遠勢且孤、亦相與稍稍引去。圍始解而提督阮公出矣、時五月二十三日也、方阮公困桐鄕。時固日夜。望總督胡公援兵之至。而胡公亦重念、東南之安危。身之禍福、與阮公相旦暮倚固急、業已遣兵備劉公督同留守王倫宣撫田九霄、勒兵。自嘉興入壁斗門。分守、汪公督同知縣張冕勒兵。自湖州入壁烏鎭。參將丁瑾勒兵。自海鹽入壁王家店。指揮樂墳督同千戶羅天與勒兵。自崇德入壁石門。又令崇德令崔近。悉收河朔之散卒入城爲聲。援兵四面環賊。遠者二三十里。近者十餘里而陣、然各以狃皂林之敗。逡巡惶怖、不敢逼。而公業遣諜爵說、賊亦日夜遲永保戍兵之至。以決一戰也、計無可柰何而胡公與阮公。兩人者爲同年。故深相結者。及援兵不合。阮公自圍中頗急。於是兩相猜而他譖者、與爲飛語。撼兩公者盈道路矣。當是時朝廷聞東南之寇。即日出尚書趙公督山東河朔諸兵。援之又兩公所私相猜者、語頗聞趙公。趙公亦故與兩公者爲肺腑交。所嘗兩推轂。中朝以塡東南者。念兩公卒有郤則東南之事。牴牾不可圖。於是日夜引兵而。南至楊

〔錢塘〕杭州の別名也、錢塘江卽ち浙江の河口にある都邑をいふ。

〔諜者〕間諜に同じまはしもの也。

〔輜〕荷物兵糧などを載する車をいふ

〔內附之心〕來りて服從する心をいふ

〔他釁〕釁は左傳の註に「釁瑕隙也」とあり、他の仲たがひをいふ。

〔兩睚眦〕互に遺恨に思ふをいふ。

〔簪珥〕簪は正韻に「首笄也」とあり、珥は漢書の註に「珠玉飾耳者也」とあり。

洲。則阮公業已出桐鄉。圍東渡錢塘。狥會稽諸下邑。擊他賊。胡公亦聞尙書趙公之至。且戰且南。淮楊毘陵之間無足慮。獨海爲巨孽。間雖狃而內附。中固不可測。而上海之賊萬餘人。由吳淞江西引方急。乃日遣諜者啗海。以金帛而說之。東出海上擊他賊。海亦果收諸倭酋。出乍浦道平湖。時諜報。吳淞江之賊已鼓行涉嘉善界。欲西合海。公念。海萬一卒他變兩相合柰何。因策海始已焚舟爲深入今不得舟必急。於是遣諜詗海謂。海既內附。何不如故約勒兵擊吳淞江賊。且篡奪其輜。掠舟以歸。海果然其計。卽日引諸酋逆之朱涇道上。斬首若干級。餘賊遂夜走。以故海不及篡奪其舟而還。及他酋脫而出海也。公又別遣總兵俞大猷伏飛艦海上遮擊之。溺且盡。於是海既德公不敢背。又聞吳淞江賊之出爲海兵所遮擊益內怖。日輸款於公。遂肇故所戴飛魚冠。及他堅甲名劍數十種並以輸公。而且遣其弟洪入質於公。公固佯納之。公又諜聞。海麾下獨書記葉麻爲長酋。其爲人頗黠而悍。近與海爭一女子有微郤。非用間急縛之。則無以死彼之內附之心。於是遣諜就海帳中諷。海縛葉麻以出。葉麻出而諸酋中。故隷葉麻部曲者。稍稍怨且懼矣。怨且懼。恐生他釁。則又以他罪縛。縛幾百餘人。公又策陳東於諸部曲中。與葉麻聲相倚。頃以桐鄉之役兩睚眦者也。數遣諜持簪珥璣翠遺海兩侍女。令兩侍女日夜說海。幷縛陳東。海既諾。而陳東者薩摩王弟故帳下書記酋。海固未之能也。於是出葉麻囚中。令其詐爲書於東。反兵賊殺海。其書故不以遺東。陰泄之於海激怒之。使幷縛東。海讀其書涕雙下。益德公之不忍爲東所賊殺之也。日夜諜縛東以報公。居無何。尙書趙公移兵渡江來所過州縣數擧兵向賊。賊輒敗走。俘斬若干級。兵威大布。當是時。公已知海

〔乍浦〕上海の西南に在りて杭州灣に臨む。

〔燧〕のろしをいふ。史記の註に「索隱曰、纂要云、烽見敵則擧燧、有難則焚烽、主晝、燧主夜」と見えたり。

〔甲士〕武裝したる兵士をいふ。

〔求欵〕交誼を求むる也。

〔稽首〕公羊傳に「頭至地曰稽首」と見えたり。

之甘心於東不忍疾擊。海疾擊之。二人追而深相結。則東南之事未易圖。而尚書趙公之至也。私約公。共部署兵擊海日急。且召公故所遣諜而詰之曰。若爲我諭海。海連兵以來罪不容死。非縛陳東。及斬千餘級以獻。恐無以謝朝廷。若能則吾當同督府諸公疏釋之。不然若且齏粉矣。是時阮公亦至。於是海益怖。出所故掠中國貨物千餘金賂王弟。詐請東付罪書記。海因夜得東即縛。以故約復於胡公。葉麻與陳東相繼縛。而諸酋長洶洶內亂矣。是時諸酋長既疑。且怨海。無鬪心。故其氣日奪。海亦自度。縱令反故島。當亦必爲諸酋長所賊殺。故爲內附日固。而公與趙公籌責海益急。海既急因急。欲掠舟出海。恐爲海上兵所劫。欲列壘拒官兵。又業已內附。不忍背。且陳東黨固日夜襲殺之也。公策曰。彼既亂吾可來之矣。因遣諜私海曰。我固欲寬若。趙尚書爺以若非孽大何不聽。我艤數十艘海上。若且誘之。逐海上艘。令俘斬千餘級。以謝趙公。而若因得以自完乎。海不得已且疑且諾因約。兵備副使劉公引兵仗乍浦城中。而某日時某當引衆出海岸。去乍浦城半里而陣。佯令衆酋逐海上艘。某手旗麾之。城中官兵即擧燧爲號。從城中出亟擊勿失。諸官兵卒如故約乘之。諸倭酋逐海上艘如蟻。不及還兵圖。於是諸官兵得乘勝蹂而前。不傷一卒。所俘斬數十百人。沒海者無算。於是海自以數有功於朝廷。願與部下諸酋長入欵其庭。謁胡公與尚書趙公提督阮公及巡按趙公並許之。諜往復。期以八月初二日。然海猶恐。陰設甲士劫之。先期一日。卒擁酋數百人。冑而陣平湖城外。自帥酋長百餘人。冑而入平湖城中求欵。四公者計不許。恐他變。遂許。海與諸酋長北嚮面四公按次稽首呼。天星爺死罪死罪。海欲再爲欵胡公。而未之識。因顧諜。諜目示之。海復面

胡公。稽首呼。天星爺死罪死罪。胡公亦下堂。手摩海頂謂之曰。若苦東南久矣。今既内附。朝廷且赦若。慎勿再爲孽。海復稽首呼。天星爺死罪死罪。於是四公厚犒遺之而出。是日城中人無不洒然色變者。海既出。諸公者固已忿恚。海之列欵猶胄而入。脇彊胯無禮。又不及如謀故所期月日。而先日至也。其習行黠若此。於是圖謀。不勒兵誅之。他日必爲患計。部下尚千餘人。猛鷙難卒破。永保兵猶迤邐遠道未至也。於是佯令海自擇便地居之。海果自擇沈家庄。卽儌沈家庄與居之。是爲八月八日。當是時衆復諠然譁。諸公輩何不撲滅。海不然。且縱之。出海上令自解去。顧豢虎以自禍也。不知諸公者固有待。於是胡公與尚書趙公提督阮公私自部署兵。又日夜遣使趣永保兵來會。兵未集。恐海覺禍。且肘腋間胡公日遣諜詗海。且啗海如嚮時。因謀以請於趙公曰。吾聞善兵者乖其所之。海與陳東黨業已深相仇。今令而兩附者迫故耳。聞沈家庄故東西兩處。而中縮河爲塹。何不說海以西沈家庄居陳東黨。而自擇東沈家庄以居部下酋乎。諜以諭海。海果如其言。頃之永保兵至會。海輸二百金於公市酒米。公復與趙公謀。以藥毒其中而歸之。又令陳東詐爲書夜遣其黨曰。海已約官兵夕劉汝輩矣。陳東黨果疑。而夜伏邏卒東沈家庄。道上圖之。適海昰急。因令酋竊兩侍女出道上而急。則因間道走莫府以自托。邏卒瞰知之歸以報於陳東黨。陳東黨聞之大驚。卽勒兵夜兩侍女。過海所。罵曰。吾死若俱死耳。遂私相稍（猜）而鬪。海中稍（猜）衆大亂。明日官兵四面合。墻兵而進。保靖兵先登之稍卻。河朔兵乘之。又卻。俄而胡公擐甲厲聲叱。永保兵左右列大呼而入瞰壘下擊。會風烈。公麾衆束千餘炬。人各持炬。縱火焚之。海窘甚。遂沈河死。甫食頃人人驚而擾。千餘酋蒐斬。

〔猛鷙〕猛と鷙とは同義、たけき義にいふ。

〔迤邐〕つらなりつづく也、梁簡文の詩に「迤邐觀鵝翼」とあり。

〔肘腋間〕肘と腋との間の義にて、近き間の意也。

〔瞰〕韻會に「視也、又窺也」と見えたり。

〔莫府〕大將軍の本營をいふ。

〔邏卒〕みまはりの兵士、巡兵也。

殆盡矣、中所故飲毒首虜黑色者凡三百餘人。於是永保兵俘兩侍女而前問。海何在。兩侍女者王姓。一名翠翹、一名綠妹、故歎使也。兩侍女泣而指海所自沈河處。永保兵遂蹈河。斬海級以歸。

江上丈人曰、海以一緇衣起島上。五年之間百戰百勝。朝廷遍徵海内諸名將。與之喋血。吳越諸州郡間、未聞有俘其偏卒者。方其擁兵數萬人、分五道。入湛舟以戰。示無復還意。當是時其氣飄忽奮迅、固已欲呑江南矣。何其猛也。已而困於胡公區區之餌。卒之糾纏狼狽以自剪而死。若封羊豕然。豈非所謂人固屈於慾也乎。善哉。友人唐司諫嘗曰、始賊盛兵圍桐鄉。時假令胡公持觖觖不量彼已。而鼓兵以戰。一蹶而僨、東南事去矣。今且堅忍舒徐以收之。兵法曰。利而誘之。亂而取之。若胡公者。可謂合兵變者也。雖然、公開襟多自喜。嘗欲倣諸葛武侯縱孟獲故事。且生縛海獻之天子。疏請海與王直兩人者、爲戈媒於海上而因以纓繫海上酋。嗟乎公之心固雄虎檻而逸。亦危矣。幸而趙公與公沈謀、掩公手曰、不殺海吾兩人無以使劍報天子。公意遂決。不然彼讒口之所以交吻於公者。豈其小哉。

今按、丙辰嘉靖三十五年當我弘治二年。陳東者薩摩王弟故帳下書記酋、言。東者故爲日本薩摩守弟門客右筆也。謂薩摩王者非也。薩摩守也。出所故掠中國貨物千餘金賂王弟。詐請東、付罪書記。言賂華物于薩摩守弟。請東托以書記事罪之也。此薩摩守弟不委其名。

經略朝鮮蘇遂保定山東等處軍務兵部左侍郎都察院右都御史桐岡宋公應昌神道碑銘

王錫爵

〔翠翹〕金陵の名妓にて、詩翰を能くせり。

〔一緇衣〕緇衣は黑色の衣の義より僧侶をいふ、一僧侶の意也。

〔觖觖〕史紀荊燕世家の註に「觖缺也、陰望不滿所望而怨耳」と見ゆ。

〔僨〕爾雅釋詁に「覆敗也」とあり、破る義也。

〔諸葛武侯〕諸葛亮也、武侯とは孔明の謚をいふ。

萬曆丙午、前經略朝鮮桐岡宋公卒、長子守一伏闕、上書白父冤、詔復故官、次子守敬乞予神道文、志公不朽、予惟公朝鮮復國之功、皇上擇日告廟、宣捷、班賞、將士有差、國王特疏陳謝、陪臣父老勒碑建祠、尸祝公者以萬餘計、其詳具載大學士龍江沈公志中、予復何言、獨念、公功最捷、亦最高、任事最難、而浮議擠公者亦最急、嗚呼非予其誰表之、按狀公之先會稽人、始祖元古籍杭之仁和里、凡數傳而生富、富生義、義生儒、是爲公父虎山公、長子應期、次卽公也、公諱應昌、號桐岡、嘉靖甲子舉於鄕、乙丑成進士、知絳州、陞刑部員外郎、改戶科給事中、轉刑禮二科左右給事、出爲濟南守、歷山西副使河南左參政山東按察司使江西福建左右布政使、進都察院副都御史、巡撫山東、陞大理卿工部右侍郎、隨改經略、以三品考最、贈祖父如其官、廕一子、入監諸書、兵部覆東征功、詔加右都御史、世襲正千戶、公居官精心救荒、其禱雨多用春秋繁露法、輙有奇應、有龍見於龔及猗氏壇井中、鱗角皆具、蒲州水嚙城城圮、公操文祭之、水驟落三尺、其他編審義倉、鄕約保甲、至今絜爲令不廢、上下安之、公守絳常、受委査閱寧化等關、目擊邊弊、登陴浩歎、及官給事新鄭方以互市議邊、公卽疏陳撫賞不便者三、巡京營、邊報狎至、江陵以無虜對、公輙據傑以聞、陳防虜七事、江陵怒遂出公濟南、嗣後累官藩臬、參佐兵事、略不以外補爲解、旣而建節山東、首請加意防海、復營衛巡司、諸舊制衆皆目爲迂濶、未幾朝鮮告急、始歎服公神算、而經略之命下矣、壬辰初倭奴擧六十六島之衆、當劉哱倡亂之秋、我方西討、未遑東征、倭奴突入、朝鮮國王李昖走竄義州、虜王子臨海（イモハイ）君珒、順和（シュノフ）君玒、發靖康恭傳二王墓、八道三韓殘破幾盡、聲言內犯、京師戒嚴、詔拜公兵部右侍郎、經略薊遼山東保

〔伏闕〕闕は宮廷の門の義より宮廷をいふ、伏闕とは屈伏する意也。

〔乙丑〕明の孝宗の弘治十八年にて、我が後柏原天皇の文龜二年也。

〔進士〕官吏登用試驗に及第したるものをいふ、唐代には詩賦に及第したるを進士といひ、經義の試驗に及第したるを明經といへり。

〔春秋繁露法〕董仲舒の著なる春秋繁露といふ書中に祈雨の法を載せたり之れをいふ、其文長ければ今之れを略す。

〔李如松〕字は子茂、成梁の長子にて、父の蔭を以て都指揮同知たり、次で總兵に累進し太子太保を加ふ、遼東の役に戰死す、少保寧遠伯を贈り、祠を立て忠列と諡す。

〔鉄蒺藜〕鐵にてはまだしの實の形に作り、敵の來る道に散布して其進軍を防ぐもの也、木にて作れるを木蒺藜といふ。

〔李承勛〕嘉魚の人字は立卿、田い子にて、弘治六年の進士也、屢賊を討ちて功あり、嘉靖十年卒す、少保を贈り、康惠と諡す。

〔麗人傾城〕ともに美人をいふ。

定等處。防海禦倭軍務。時經略創設。提督大將軍李如松纔寧夏。未至。繕甲練兵。儲糧製器。又倉卒未備。詔書督促。正如空手搏戰耳。公鑿空支吾。不兩月而部署出關。會遊擊沈惟敬使倭。道謁公。公曰。我奉命討賊。知有血戰耳。汝毋以身試法。臘月與李大將軍踏冰渡江。惟敬執款議如初。公屬繫軍中。不許更入倭營。而議討賊益急。春正月兵薄平壤。倭將平行長築飛樓。鑿墻穴。守壯丹峰。以相犄角。公指授方略。圍其三門。外布鉄蒺藜數重。火器齊發。毒烟蔽空。吾軍含解藥仰面攀附而上。諸門盡破。斬首一千六百四十七級。焚溺死者無算。行長卷營遁回王京。大將軍輕其屢敗。走探地形。倖遇重圍。大將軍殊死戰。斬金甲倭。墜馬。而楊元張世爵援兵復至。倭潰圍解散。是時王京聚倭號有三十餘萬。且又當八道之中。去釜山千五百里。倭不退朝鮮不可復也。公方畫依山僻攻之策。而李承勛兵留於山東。陳璘兵奪於薊鎮。沈茂兵遣還浙江。進不能策。疲病之卒退。不能待救援之師。夜令死士以明火箭射燒龍山倉十三座。糧盡。倭棄王京而去。公又遣兵追擊至南原。與清正夜戰。又追及晉州。斬級甚衆。倭自此仍還釜山舊巢。又復遠遁熊川西生浦。蓋朝鮮之局始完。而公亦乞骸骨歸矣。歸之日王率光海君宴公江亭。麗人傾城相送。尾至數百里外。拜泣而別。是役也。索回王子陪臣宮眷百餘人。斬倭首二千三十級。克復平壤開城王京。總還故地二千五百里。而議者猶以請封撤兵罪之。夫倭封於乙未之七月。公歸於甲午之三月。則請封不在公也。公留劉綎兵萬六千居守。而予議。撤還則撤兵亦不在公也。公提軍絶域。身經累戰。夏沐暑雨。冬偃冰雪。食無鹽酪。臥無甘寢。乃不以驅逐朝鮮境內之倭為功。而以退歸釜山海外之倭為罪。此公負國乎。抑言事者

〔黃門〕昔支那にて宮城の門を黃に塗る故に、宮城の門をいひしが、轉じて禁門内の役所をいひ、再轉じて宦官をいふに至る、玆は後者の意也。

〔器局岸偉〕器量が岸丈にして偉大なるをいふ。

〔段文昌〕字は墨卿長慶の初め翰林學士となる、上屢思政殿に召して顧問し、俄に相に拜せらる、著す所食經五十卷あり。

〔杜弼〕字は輔玄、幼にして聰敏、初め定州刺史となり諸生を簡試す。

負公乎。假令倭終盤據開城、就延歲月、薦食畿輔、揚帆江南、王子不生還、朝鮮不再造、兵連禍結、老師匱財、又將何以處公哉。公方面紫髯、目如閃電、東征陛辭。上遣黃門陰瞯公。風神警亮。器局岸偉。大喜得人。賜金綺以寵公行。既入朝鮮、又賜麒麟一品服。公感知遇、每與李大將軍以死自誓。戰勝之後、拊傷掩骼。招歸脅從以萬計。仍分前兵、屯守大丘南原慶州等處。移檄國王、斬塹挑濠、築關置堠、修設善後之宜、甚備。行軍賞罰嚴明。軍需節省僅支馬價二十餘萬。揆事圖策、捷出人意表。每當百司使者容請輻湊、公隨事裁決。初若不經思、退而熟議之、即老吏宿將終不能易也。襲公受命時、予適在政府、每歎公經略外夷、與邊臣不同。邊有堅城可憑、而海則與倭共之。無處不犯、則無處不瑕。難一。他鎮調兵必先主而後客。老弱居半。道路遷延。難二。邊臣伸縮自由、而經略則空名客寄、俯仰隨人。難三。羽書以風為遲速、語言以譯為往來。難四。朝鮮利於留兵、不利罷兵。倭來則貸手報仇。倭去則張小為大。飾緩為急。難五。李氏盛滿人心不附、而又立萬金之賞、懸封拜之格、忌寧遠者、并以忌公。難六。嗚呼此公所以累疏乞休。高臥西湖、絕口不談東事也。然朝鮮陳謝有疏、朝廷敘錄有旨。何忍不一為公論昭雪、而令忠臣孝子扼腕不平哉。昔淮西文昌黎不及李愬、愬子曳碑仆之、訴功於朝、命段文昌更撰以旌其伐。杜弼請裁抑勳人。齊高祖令軍人張弓挾矢、舉刀按矟以夾道、使弼冒出其間、弼戰慄汗流。高祖然後諭之曰、箭雖注不射、刀雖舉不擊、矟雖按不刺。汝猶頓喪魂膽。諸勳人身觸鋒劍、百死一生、乃以尋常例之耶。觀此而宋公之論定矣。余故略他績不書、而著其復國之功、勒石墓道、使讀者識公苦心云。若生平婚娶、別有志。銘曰。島夷不靖

肆彼鞠凶。八道三韓如葉時風。君臣父子奔播西東。箕疇故墟幾亡是公。帝命六師誕張九伐。彀弓銜轡。走雲挐月。復城歸胤。恩浹窮髮。龍子暫分。虎符復合。我武維揚。稽顙天闕。馬鳴蕭蕭。歌凱東回。功成不賞。市語如雷。勞臣解體。戰士心灰。公笑何言。請付口碑。時淸論定。終遭天寵。玉冊金書泉臺夜永。劍履衣冠精靈呵擁。穹石千霄星垂斗拱。巖谷綿亘草木薈鮮。桓桓隧道鬱鬱新阡。何以報公。有家祈連。何以報君。億萬斯年。

今按。諸書皆曰。回朝鮮二王子者沈惟敬之力也。但王錫爵所撰神道碑銘。以爲。宋應昌之謀。牡丹峰一戰。行長敗績終回王子。倭軍退歸。朝鮮復將亡之故地。其說與諸書異。愚謂。蓋挫行長等鋒者宋應昌運籌之功也。及此時日本民窮兵疲。惟敬亦屬石星。私就行長執和議欲回王子。自立功。行長嘗媚疾淸正生擒王子。而且苦久力戰。故與惟敬計。秀長三成等才弱敵彊。群疑滿腹。欲班師。於是惟敬計行。行長乘勢獨步。欺朝主以秀吉請封日本國王。誑秀吉以許封大明國王。秀吉不及深謀遠慮。乃令諸將徙回王子。容遷所略之五道地。惟敬行長同心爲奸。所以日本兵再起也。

總督河漕御史大夫晉大司馬李公顧行狀　　劉應麒

北備虜東備倭。二千里邊防。八百里海岸。是責任而控制之。

又卷之五十八

〔六師〕天子の軍をいふ、六軍に同じ、周禮地官に「五師爲軍」の註に「一軍、萬二千五百人、周制天子六軍、諸侯大國三軍、次國二軍、小國一軍」とあり。

〔虎符〕銅虎符の略にて、銅を以て虎の形に造りたるわりふをいふ、軍事に用ふる物也。

〔天闕〕上帝の宮門をいひ、又た天子の宮門をいふ、史記天官書に「雨河天闕間爲關梁」とあり。

〔桓桓〕勇武の貌にいふ、詩經に「桓桓于征」とあり。

〔湯克寬〕邳州衞の人、世蔭を以て都指揮僉事に歷官し浙江參將に充つ、萬曆四年、妙灣を撃ち、伏兵に遇ひ戰死す。

〔盧鏜〕汝寧衞の人嘉靖中世蔭によりて福建都指揮僉事に歷す、四度罪に觸れ、竟に免ぜられたり。

〔尹鳳〕南京の人にて字を德輝といふ總兵錫の歩將にて世々府軍後衞指揮同知たり。

〔筴〕康熙字典に「與筴同謀也」とあり、はかりごと也。

〔巵酒〕杯につぎたる酒をいふ。

資善大夫都察院右都御史兼兵部左侍郎思質王公忬墓志銘總督　李春芳

壬子巡撫山東。僅三月。會倭奴寇浙。且侵閩中。挺擢公提督軍務。巡視浙江。兼轄福建漳泉二郡。無何改巡視爲巡撫。公至則委心參將兪大猷湯克寬。而奏釋在繫都指揮盧鏜尹鳳。數人者皆東南折衝將也。括蒼多惡少年。則以其人悍而喜鬬。招集之以分置諸部。於是諜知。賊衆巢據海港横嶼中。而環列巨艘爲水寨。授筴諸將。夜從間道火其巢。賊衆大潰搶奔舟中。隨而擊之。殲盡。忽風起。勢亂賊乃得脫。所俘馘三百餘級。而焚溺死者亡算。公所釋尹鳳者。時部閩兵。則邀餘衆於諸洋。又擊之。所俘馘亦三百餘級。捷聞。先帝賜以金幣。是時賊魁數輩。而蕭顯者號爲尤甚。率勁倭四百居南沙。還逼松江。松江守告急。公顧謂盧曰。我出汝死。何以報我。盧因跽曰。請取彼蕭顯以報。公命巵酒壯之。授以鋭師。盧倍道掩擊大破之。按江左者疏聞。以爲越境全郡。其功尤偉。賜金幣加初。

今按。壬子嘉靖三十一年日本天文二十一年也。

又傳　李攀龍

壬子巡撫山東。凡三月。巡視浙閩提督軍務。亡何改巡視爲巡撫。請誅賞便宜行事。南會二廣。北會江左。諸鎭犄角應援也。屬倭賊王直徐學毛勳犇襲我。公夜縱狼土兵括蒼少年。以兪大猷湯克寬擊之。鹵獲倭生口百四十三首百五十級。焚而溺殺者數百人。軍大振。以尹鳳將閩兵。徼於表頭。北茭諸洋又鹵斬百餘級。奪生口二百餘。後先以捷聞。是時賊黨蕭顯率勁倭四百餘居吳郡南沙。還逼淞江。淞江守告急。公曰。吾嚮所請犄角者非此乎。以別將盧鏜掩擊。大破之。斬蕭顯。餘衆潰入浙中。大猷

諸將徼殺無孑遺。是役也、越境而殲虜、且陸勝賊矣。因行部凡二十餘縣。計倭所由道、次第畢城之。獨慈溪謝不可。公去一歲、而慈溪破、始就城。相請不蚤聽王公言。公在浙閩可二一歲、凡一十餘捷功次三千餘所。得沿海大猾為倭內主者、繫之、覆其家數十人、賊自是無與嚮導、往往食盡遁矣。

今按、壬子同前。

丙辰上欲用為兵部尚書、輙不果。時大舉討倭、發兵五千人、以裨師尹秉衡往、有功。

今按、丙辰嘉靖三十五年當日本弘治二年。

又卷之六十二

都察院右副都御史秋厓朱公紈壙志　自撰

戊申三月至寧波撫海島。倭夷六百餘人悉受約束入城。四月襲破雙嶼賊巢。五月寧波詐傳詔、指斂夷作亂、以殺巡撫為辭。于時駐定海、以鎮群林渡炎海入雙嶼、以定不拔之計。賊失其巢、往來外洋者一千二百九十餘艘。上下連戰皆捷。九月兵部錄雙嶼之功、奏旌之。賜白金一綵幣一。

今按戊申嘉靖二十七年當日本天文十七年。

又卷之五十九

資政大夫都察院右都御史棠谿王公誥墓表　禮還　林庭機

乙卯遷南京戶侍督儲。居頃之、遷右都總督漕運鎮撫淮南。時倭夷猖獗、自通泰直犯淮揚諸路、所過塗毒哭聲震野。屬公初至、嚴兵固守、遂疏請旗牌、督率將士、誓剪此朝食、會都指揮劉顯至。分兵夾

〔無孑遺〕少しも殘す所なしの意也、孑遺は僅かにのこる意、詩經大雅に「周餘黎民、靡有孑遺」と見えたり

〔丙辰〕明孝宗の弘治九年にて、我が明應五年、足利義澄の代也。

〔旌〕周禮天官の註に「樹旌以表門」とあり、あらはす也。

〔劉顯〕南昌の人、落魄して叢祠に行き自剄せんと欲す、神あり之を護り死せしめず、間行して蜀に入り、童子の師となる、已に籍を冒して武生たり、初め副千戸を授けられ、累進して都督同知に至る

〔文綺〕あやぎぬをいふ。

〔李茂〕李如松をいふ、六八二頁頭注を參照すべし。

〔辛卯〕明の世宗の嘉靖二十六年にて我が享祿四年、足利義晴の代也。

〔戎械〕兵器をいふ

〔節嗇〕冗費を節してをしむをいふ。

擊。倭奴氣奪。大破之。捷奏。蒙賜白金文綺。既而議處兵餉。休班客兵。寛貸租稅。停免馬匹。數事皆長慮。却顧先事爲備。人服其見。

今按。乙卯嘉靖三十四年當日本弘治元年。

贈太子少保工部尚書兼都察院右副都御史吳公桂芳行狀河道　　王宗沐

時與倭持兵尚未解也。公以計授其將。且聞東莞有李茂材者。頗以鄉兵雄於里。召而密約。厚以賞使。其隨官軍尾擊之海上。皆悉擒斬。方叛兵環海。轉掠省城。非公星馳還鎮。則城外民居廛貨俱爲盜資。是功既奏而公始決意城省外城矣。是時居民以撤屋。度城址。頗不悅。至有飛語。公銳於戎事。且罪言者。其規畫大抵視揚城例。張築甫畢公遷去。而閩之流寇曾一本突入犯省城。曾老於賊。部下梟雄數千人意固垂涎。濱河居民財富將甘心焉。不謂有城也。比泊而樓櫓森整殊失計去遂就擒。于是人知公有保障功。爭立祠祀之。

又卷之六十二

巡撫福建右副都御史傳野司公汝濟墓志銘　　袁宗道

辛卯六月晉都察院右副都御史。巡撫福建。于時閩海息警久矣。而公初至。倭報驟傳。公于是增舟師。練士卒。備戎械。簡將才。又稽寺租清商稅。裁軍門供應。及一切餉遺。無名之費。諸所節嗇盡充兵儲。以是賦無少增。而兵餉用饒。兵曹題允抽沿海兵船。集天津防禦。公念。由閩海航天津。相距萬里。有如萬一不測。是以有用之舟塡鯨穴。而以將士之命委魚腹也。豈不惜哉。請以舟値匠作往使。疏

入。獲允、閫中將士如獲更生。公自念。食祿多年。値此疆場多故之時。正人臣殫慮竭蹶。圖報日也。方將發舒。大竟其用。而言者且急持之矣。遂力辨求去。得旨囘籍聽用。公笑曰。吾于江陵公。蹤跡始末甚明、言者豈惟不能誣我、且功德我。我日者拮据兵事食不下咽。今翩々歸矣。吾萬竹山房蒼翠騰峻。高者拍雲。下者拂牖。寒濤淸耳。濃蔭覆席。得老是中。豈不萬倍中丞樂乎。聞者皆稱公達。公既歸里。杜門息交。適意林水。寄興毫素。以薜蘿爲袵席。指鷗鷺爲友朋。升沈苦樂視如昨夢矣。藉令假之年。當極雲林之樂。而罹疾未幾倏焉長逝。傷哉傷哉易簀之日。公絕無他語。惟取筆書十許言。有開府非卑五十非夭之句。可謂達生觀幻、脩然去來者矣。

今按。江陵公。江陵張公于時執政者。

又卷之六十三

右僉都御史函峰阮公鶚墓志銘 福建　　李春芳

癸丑擢浙江提學副使頒示條約。一如畿內。而因地裁成之。得人爲盛。浙方歲苦倭寇。甲寅尤甚。公下令。諸生操弓矢習射。作忠義之氣。乙卯夏省城戒嚴。撫臣檄諸司畫地防守。公當守武林門。則列營關外。令士女分道入。遷至遷開。視他守者。獨無追迫蹂躪之慘。民咸德公。焚香祝天曰。安得阮公開府以活百姓耶。丙辰陞廣西右參政。臺省交章薦公。有文武才。可大用。上擢公右僉都御史。提督軍務巡撫浙江。聞命即展布方略。誓告將吏。四月賊攻乍浦追斬。皂林賊奔桐鄉。公冒重圍入桐鄉。方賊之圍城浹旬也。多方攻擊。而公亦隨機應之。顧孤城力乏。數請援於總督胡。胡不應。城中危甚。卽唯陽之急不是過也。賊又持總督紅牌。抵城下。議和。人心搖惑。非公抗議固守。鮮不敗者。

〔殫慮竭蹶〕思慮の限りをつくして失敗を無くする意也。

〔拮据〕身體を勞して働くをいふ、詩經に「予手拮据」と見えたり。

〔薜蘿〕つたかづらをいふ。

〔袵席〕寢間也。

〔夭〕夭折にて、わかじに也。

〔阮公鶚〕阮鶚也、五二二頁頭注阮鶚を見よ。

〔四竄〕四散に同じ四方に逃げ散るをいふ。

〔自寅至酉〕寅は今の午前四時頃、酉は今の午後六時頃をいふ。

〔羽書〕至急の意味を示すために特に鳥の羽をつけたる回狀にて、卽ち羽檄也、杜甫の詩に「直北關山金鼓振、征西車馬羽書遲」とあり。

〔捷書〕戰勝を知らする報告文書をいふ、蘇軾の詩に「捷書夜到甘泉宮」と見ゆ。

少宰松溪程公序平夷碑。亦謂。公有睢陽之節。武穆之忠。以此久之。賊計窮遁去。五月賊陷仙居。公又募金台諸郡兵。分疑設伏。凡三戰大破之。而賊首徐海黨與衆盛。復集舊巢。時趙尚書文華出視師。與總督胡共持和議。乃公獨銳然決戰。會言官。上疏罪議和者。詔下。專命公勦平。公得報益自磬竭。命奇兵四伏。正兵突擊。賊遂大敗四竄。巨魁陳東麻葉辛五郎皆就擒。賊又奔據沈庄。憑險自固。若謂。必不可破。而主和議者猶觀望不進。公大怒曰。不滅海尚留根蔓乎。檄諸道。分兵四圍。夜渡濠薄賊柵。火其巢。自寅至酉力戰。俘獲甚衆。徐海始就滅。功最稱奇。而讒忌亦自是漸起矣。公顧一意向賊。謂諸將曰。寧波鴈門久爲賊據。而舟山餘黨尚在。奈何安枕耶。遂夜驅水陸兵。並進大破於蔡奇山獨山大潭山。水戰於淸港洋丘家洋。直抵舟山。山賊方除夕酣醉遂擒斬。殆盡。自是兩浙三吳始得休息矣。上賜金綺者五。進秩者一。方鄉用公。而忌者愈忿。謀奪公柄。移公專鎭閩。是時閩寇方張。而兵弱財匱。私計可以困公。而公不爲困。丁巳春公發浙江。倭犯福寧。公抵建寧。倭犯會城。已而犯福淸。犯海口。羽書猝至。公日夜治兵儲糗。愼選諜。而於先登陷陳之士不惜重賞。往往能得其死力。遂奮擊賊衆於古源陽崎長樂港閩安鎭。凡十餘戰。計任事不過數月。捷書飛奏。上大加獎異。奈何。忌之者力謀傾公。乃指摘。公糜費儲餉。肆爲萋菲。風聞論列遂被逮至京。然募兵。壯造戰艦。相賞予。卷牘具在有司可覆視也。卒莫能中傷。落職歸角巾私第。絶跡城府。東阡西陌。朋舊過從。悠然不知老之將至也。

今按。癸丑嘉靖三十二年。當日本天文二十二年。甲寅嘉靖三十三年。當日本天文二十三年。乙卯嘉

〔春汎急〕汎集韻に「一日水貌」とあり春になりて楊子江の水流が急になりたる意也。

〔崇明沙〕楊子江の河口にある崇明島の海濱也。

〔級〕切り取りたる首也、秦の時敵の首一つを斬りたる者は位一階を進むる制なる故にいふ。

〔狼兵〕戰爭に敗れて亂れたる兵也

靖三十四年。當弘治元年。丙辰嘉靖三十五年。當弘治二年。丁巳嘉靖三十六年。當弘治三年。

僉都御史荊川唐公順之言行錄

甲寅倭奴起寇。流血東南。先生日擊其勢。至不能寢食。適居有懷。公喪而趙公雨江以上命視師海上。來訪先生。與陳機略。且言。非專任梅林胡公不能平此寇。趙歸朝首薦先生。以南部車駕主事起之。先生不應。陞北部職方員外。又堅臥不起。及巡按提學二侍御奉旨促行。先生不得已赴京。即陞本司郎中。陛見後即奉命。查勘邊務。繼而視師浙直。先生奮然曰。一月賊不平。請拏將官。三月賊不平。請拏郎中。十二月先生將至浙。賊聞風遁去。先生計平賊上策。當禦之海外。而海道不可不熟。乃自江陰自嘉興兩次下海。泛大洋至蛟門而還。未幾春汎急自登海船。督諸將。泊崇明沙。沈賊船十三隻。斬賊首百二十級。餘賊走三沙。陞太僕少卿。胡公奏留同事。又陞右通政。於時江北巡撫李克齋告急。胡總制檄總兵盧鏜往援。先生以江北陵寢重地。乃以三沙賊檄鏜堅守。身往江北與李公首尾擊賊。敗之於姚家蕩。又敗之於廟灣場。度其勢無能爲。復自江北往攻三沙。居海中二月。竟以鹽鹵之故腹疾增劇。方回太倉調遣狼兵。而賊乘風雨夜登江北岸矣。先生每以此自愧。其斬馘功皆遜不居。而胡公竟上之。三有白金文綺之賜。先生每與胡公論國家事。未嘗不泣下沾襟。誓以身許國。曰胡公計事。先我一著至忠義。一念則甚相符合。未幾陞僉都。撫淮楊。因積勞病甚不能行。然以淮楊重地朝方倚任。十一月勉強赴官。值歲歉。請於朝得餘鹽銀二萬兩以賑。又自捐俸金。令有司以次捐俸易米。散各鎭爲粥。以食饑氏。先生素仁心。不忍見氏之饑死。又以淮

〔賑濟〕恤救に同じにぎはしすくふ也

〔定海〕杭州灣内の島にある都邑也。

〔閧然〕ときのこゑの貌也。

〔大䑸〕䑸は集韻に「海船也」とあり、大船と同義也。

〔行人〕周代には賓客の接待を掌る官なる事禮記に見えたり。

楊所轄天下要道。即有變於內倭寇乘之。貽患不細。故於賑濟獨勞心焉。時病已甚。而先生治軍務不少休。三月二十一日登焦山。望三江。嘆曰。吾第一梟將。使吾病而不能展其能。柰何。然使三一病都堂能居海中。則諸將無敢不下海。諸將能下海海則敵人自奪氣也。欲從太倉取道。常居海中。行至通州。而病不起矣。二十九日也。將革。猶以爲。人與學問未成。未了。十年工夫自恨。時天皎々聞天鼓鳴於舟上者三。而先生氣絕。

今按。甲寅嘉靖三十三年。

荊川唐都御史傳　　李開先

二十年前並無倭患。今忽有之。須求其故。古云。兵久則變生。近日吳淞定海之間。水卒呼糧。抹官縛吏。則民變之漸矣。蘇人素怯。今亦燒官寺。劫獄囚。閧然一譟。則兵變之漸矣。況憑倭導倭。自爲倭者可勝計耶。

右僉都御史王鎬傳寧夏　　永平志

是時倭寇猖獗。爲繕城池。備守具。給餽餉。檄土著子弟。往出奇設伏。左右翼殲之。沈大䑸數十擒斬俘獲無一東還者。論功當超遷一級蔭子。不行。僅止得賞銀幣。轉右僉都御史。巡撫寧夏。

又卷之六十七

通政使李公際春傳　　杞縣志

李際春字應元。嘉靖乙卯舉於卿。明年成進士。授行人。時琉球中山王請封。應往者各以計脫。公獨毅

然請行。適倭寇浙閩往來艱危中幾三載。初解維時颶風大作。波浪兼天。不分晝夜。舟刺々有聲。若分崩然。衆皆股慄。公獨危坐。神色不動。俄而江光燭天。若有神。緋衣峨冠擁護得免。事見使琉球錄中。天子嘉勞擢爲尙寶丞。累遷至通政使。

今按。琉球中山王琉球國王也。潛確類書曰。琉球分其國爲三。曰中山王。山南王。山北王。景泰間。中山遂幷取二國云。

通政司左通政趙居任傳　　實錄

嘗奉使日本。其王贈以名馬方物。悉却不受。上聞而嘉賚之。

又卷之六十八

大理卿宋公儀望傳　　王世貞

公至閩。於大帥戚繼光合策破倭。鹵斬無算。

又卷之七十六

中憲大夫南京鴻臚寺卿張公朝瑞墓表　　焦竑

隆慶戊辰擧進士。屬州有倭警。議築城。公卽捐坊金爲倡釋褐。令安丘臺。使者以治蹟交止。今按。隆慶戊辰二年當日本永祿十一年

又卷之八十三

常州府知府陳侯實墓志銘　　邵寶

〔股慄〕恐れて足のふるふこと也。

〔中山王云々〕中山國史略に「第七、玉城、英慈の子、此の時國分れて三となる、玉城を中山王といひ、大里按司を山南王といふ、今歸仁按司を山北王といふ、三山戰爭止まず、我が正和年にあたる」とあり。

〔鴻臚寺卿〕鴻臚寺の長官也、鴻臚寺とは外國に關する事項、朝貢、來聘の事などを掌る役所也。

〔髩〕說文に「髩鬢也」とあり、かめをいふ。

〔錢公錞〕字は鳴叔、鍾祥の人、嘉靖廿九年の進士、次で江陰知縣を授けられ、倭兵を伐ちたる功に依り、光祿少卿を贈られ、世世錦衣百戸を蔭せらる。

〔癸丑〕明の世宗の嘉靖三十二年にて我が天文二十二年足利義輝の代也。

〔脣齒地〕脣と齒との如く關係の極めて密接なる地をいふ。

浙東海道倭人入貢。與民交貨。群鬪殺人。都指揮以下騙焉。而被害者一人。傷者若干人。事聞於朝。朝議。守者不豫欲置重法。上遣都給事中劉君會。巡按御史王君臨覈之。二君以侯法家撽與其事。侯言。倭來以貢不以寇。事出不虞。安能豫之。雖然官以備名。亦不能無罪焉。若加重法則過矣。至於士卒於主將死不赴救。自有常法。亦不可加重。二君上如侯議。上從之。

淮安府知府范先生檟墓志銘　陶望齡

民家子徐栢及婚而失之。父訴府。公曰。臨婚當不遠遊。是爲人殺耶。父曰。兒有力。人不能殺也。久之莫決。一夕秉燭坐。有濡衣者。臂兩髩僂而趨。公默詑曰。噫是栢魂也。而繫髩水死耳。明日問左右曰。何池沼最深者。吾欲暫遊。對曰某寺。遂輿以往。指池曰。徐栢屍在是乎。網之不得將還。忽泡起如沸。復於下獲焉。召其父視之。栢也。然莫知誰殺。公念。栢有力殺栢者當勍。一日忽下令曰。今亂初已。吾欲簡健者爲快手。撰竟視一人。反襖脫而觀之。血漬焉。呵曰。汝何殺人。曰。前陣上漉耳。解其裏血漬需纈。公曰。倭在夏秋。豈須襖。殺徐栢者汝也。遂且服云。以某童子故。童子至曰。初意汝戲言也。果殺之乎。一時傳以爲神焉。

今按。倭寇熾時。中國盜殺人者多。托倭爲惡。大人能察之。如范檟是也。

江陰令贈光祿寺少卿錢公錞傳

時倭夷亂浙東。朝廷置督撫大臣鎭之。錞虔。浙直脣齒地。彼有備賊必西向。亟請繕城待之。明年癸丑城成。而賊果犯蘇松。又明年甲寅四月賊掠江陰。錞遣兵逆之斜橋。三戰却之。賊不敢偪城。退營

於定山。會歲使江陰。群盜亦起。鐸恐其覺賊。稍招輯之。誅其魁而解散其餘黨。是年冬賊掠柘林。明年乙卯春。賊自柘林入三丈浦。騰陸犯趨青暘鎮。已賊艘在三丈浦者。爲參政任環所燬。乃奪民艘南趨無錫。攻無錫城不克。又還趨江陰。鐸禦之於石撞。矢盡繼以瓦石。鐸被創猶鬪。賊遂遁去。鐸策賊意未滿。當復來。預營華墅而陣。賊果復來。官兵斬首九級。相距久之死傷略相當。乃更合常熟賊三千人。析其半寇靖江。而餘航蔡港入偪城。鐸業領檄。援靖江。得報。亟還江陰。賊已度大橋。明日攻城。城守固。賊移營蔡涇。距城九里。焚掠四野。烟燄蔽天。鐸從城上望之。君指誓曰。剪屠烈矣。奈何與此賊俱生耶。乃騎而背城決死戰。時狼兵與所募甲士僅千人。先是狼兵驕。鐸素折之。至是乘其薄。賊故望風潰走。賊自督其所從卒共有仁起。鐸墜馬。復躍而上。賊戟之下死焉。時六月十三日明日縣人求鐸屍。雜莽間不得。有識其印纏於肘者。與之歸。緝其殊始成殮。巡按御史周如斗上其事於朝。詔贈鐸光祿少卿。蔭一子錦衣衛百戶。立祠江上。歲以春秋祀。

又卷之八十四

成化丁酉春忽報。倭船數百犯邊。公時在杭。縈家驚問。公徐曰。彼果來犯。吾將盡誅之。乃出巡至寧波府衛。已戒嚴。守令呼民壯。授甲林立矣。公謂曰。海上甲兵自足。內地不須慮。安用民壯。今農事方殷。亟散之。至定海。數日乃知倭僅兩船入貢耳。於是皆服公之智量。

今按。成化丁酉十三年當日本後土御門天皇文明九年。

浙江按察司副使張公文墓志銘

程　敏　政

〔甲士〕甲兵に同じ武裝したる兵士をいふ。

〔雜莽間〕莽は孟子趙岐註に「莽亦草也」とあり、雜草の間也。

〔成化丁酉〕明の憲宗の世にて、我が足利九代義尙の時たり。

〔浙江〕浙江に同じ

會倭寇犯レ邊。公以レ計殲レ之。朝廷有二綺段寶鈔之賜一。至レ是寇起二處州一。將レ薄二金華一。衆議曰。蘭溪乃賊所二從出一之路。蘭溪不レ守則兩浙震動矣。陶僉憲有二謀略一。非レ得レ之以遏二其衝一。賊不レ易レ弭也。公至二蘭溪一。首率二民壯一。因二故城址一立二木柵一。晝夜儆備。又於二縣南五十里一立二山口蘇村太岩諸寨一。以扼二其要害一。屢用二計略一擒二賊黨數百人一。聲震二遠邇一。賊不二敢犯一レ境。一邑晏然而鄰境亦恃以無レ恐。

又卷之八十六

江西提學副使唐公錦行狀

嘉靖甲寅四月十有二日。龍江先生以レ避レ倭去二其鄉一。卒二於華亭之石湖塘一。

江西布政使司左參政贈光祿寺卿錢公泮墓志銘　　文徵明

嗚呼自二倭夷爲一レ患者。數年鹵掠燒刼。多レ所二殺傷一。兵不レ得二休息一。民不レ得二安居一。而常熟濱海帶湖罹レ禍尤慘。雲江錢公以二江西參政一居二憂邑中一。謂二邑宰王公鈇一曰。寇既得レ志。勢必復來。公有二守土之責一。而吾父母之邑。墳墓親戚所レ在。忍二坐視一也。乃日與商略爲二備禦計一。練レ兵飾レ甲。部分調遣。事甫就レ緒而寇猝至二城下一。卽與乘二捍禦一。悉レ衆急擊。連弩繼發。寇乃遁去。又明日寇自二上湖一北下直指二讓港一。公謂二王公一曰。此可二邀而擊一也。部二領民兵一。抗レ旌出レ港。轉戰而前。殺傷相當。俄而賊大衆掩二至公艫下一。烏獸散。衆寡不レ敵。公自被二數鎗一。猶手刃二三賊一。遂與二王公一死焉。是乙卯五月二十有四日也。事聞。天子震悼。贈二公光祿卿一。其子部錦衣百戸。遣レ官。論二祭於其家一。嗚呼承平日久。所レ在備弛。兵興以來並レ海州縣。往々閉レ城自守。或不レ發二一矢一。而公非レ有二官守一。未三始受レ命征二討一。徒以二桑梓之故一。慷慨激發。摧レ鋒陷レ陣。竟以レ身殉。豈不二

〔儆備〕儆は韻會に「戒也」と見ゆ、警備に同じ、いましめそなふる也。

〔嘉靖甲寅〕甲寅は嘉靖三十三年にて明の世宗の世、我が足利義輝の時なり。

〔數鎗〕鎗は、正字通に「俗以レ鎗爲二刀槍字一誤」とあり、五六の槍傷をいふ。

〔乙卯〕明の世宗の嘉靖三十四年、我が弘治元年にて、足利義輝の時也。

〔桑梓〕詩經に「維桑維梓、必恭敬止、靡レ瞻匪レ父、靡レ依匪レ母」とあるより、故郷の義にいへり。

誠義烈也哉。

又卷之八十七

文林郎贛州府推官石樓林君萬朝墓志銘　羅洪先

倭人入貢、道故出郡中。牽爭市以鬪。當鬪時持矛戟攫拏、官司無敢誰何。然獨畏君廉。君出市、倭即釋鬪以寳。贛當江廣之衝。重商大賈之所往來、異時爲關征以濟軍。而守者輒無廉。譽君以當代。固辭不受。已而檄攝興國。其猾胥善巧。伺以愚令至、是故進敝器以嘗君冀少怒。即得詐爲機利。君覺之不一問。左右請易器、君曰、於余甚宜。由是猾胥搖手相戒。

又卷之八十九

江陵知縣朱公訥墓志銘　崖銑

倭夷來朝、貿利與中國關市、守臣怪、倭久留邪。趨有司牽海艑行。倭操短兵譟呼出殺牽夫。數人死。公馳騎入其曹。語譯者以禍福約三日。出關、倭乃定。

又卷之九十

福建按察司副使卜君大同墓志銘　徐階

會海寇掠倭作難、海所在皆震。而閩爲禍首。時論推君才推福建巡海副使、咨有問海事者。君應曰。倭所處聯絡海島。譬如飈風掣電。猝絕之難恃。備在我耳。夫禦外者必內固。今不吾固。而與倭逐。是馳飈掣電鮮克濟矣。乃趣駕至海上。簡卒伍謹烽堠。控險要。大治樓船。積糗糧以待賊。又輯備倭

〔猾胥〕胥は周禮地官に「胥師二十四則一人皆二史」とある註に「胥及肆長市中給繇役者」とあり、小役也、猾胥はわるがしこき小役人をいふ。

〔敝器〕壞れて用に立たぬ兵器をいふ

〔飈風〕飈は玉篇に「暴風也」と見えたり。

〔掣電〕電光のはげしくひらめくをいふ。

〔烽堠〕烽はのろし堠は敵の動靜を探るために設けたる土堡、即ち「のろし」を打揚ぐる爲めに設けたる「ものみのをか」也。

〔糗糧〕糗は、ほしひをいふ、玆は單に食糧の意也。

圖記授吏士。言甚悉。初閩人多入海。與諸夷市。而漳。泉爲甚縱。弛禁則法廢。禁嚴則奸民失利而倖亂。往々導賊入。或且攘臂群起以張。賊勢最號難治。而海禁寖寛。利權下者既多自敗。其名潔廉者又率避弗肯爲。以故海防日益廢弛。獨君毅然任之。既修飭內治。諸所興革一切與民爲宜。民咸安其政。賊亦知有備。終君任三年。弗犯閩而屢寇甌會。吳越間攻掠城邑。數千里被其毒。至動天下之兵不能制。獨閩得君晏然。君卒後二年乃始告警。

又卷之九十四

陝西按察司副使沈先生啓原行狀　　潛園集

會倭亂暴起。以軍興加賦閭里騷然。督撫公破禽徐海等于平湖。奏捷還郡城。文武將吏暨召募士著之兵。皆在餼廩行糧。日費一百金。不貲。縣令念閭里空乏。盡括羨餘以佐之。不五日告竭。先生偶以他事謁令與語。令忽忽仰屋深念。先生曰。公何念之深也。令曰。非他。時文武大臣及募調諸兵。在念有能具五日費。則某之責可逭已。先生立曰。原當任之。令躍起拜。先生亦拜。即夜歸率幹僕數人。持千金畀之。聞者以爲難。初徐海未禽。連歲剽掠嘉湖蘇松間。先生倩膂力販徒。散以飛舸。日團聚長湖大溪中。躬指授進退之法。重償其直。而諸販徒亦自感奮。一日倭果操兩巨艦。由平望入鄉而南。近家不一里。遇飛舸。從傍夾擊之。因逦退北遯。至晚先生大犒之。顧鄉之親友曰。吾以此舟得免一鄉害。較所費孰多。此舉也始以團聚而脫倭奴之禍。又以脫禍而收販徒之心。知者自是服先生才可以大受也。

〔閭里〕閭は周代に里卽ち二十五家をとりまく門の義より、二十五家一郭の稱となり、更に村里の義にいへり、また村里の民をもいふ。

〔餼廩〕餼は、食料又は生牲を致すにいふ字、廩は、兵士に給與する食料品の倉庫也。

〔羨餘〕剩餘に同じあまりをいふ。

〔膂力〕「揚雄」に「力也、宋魯曰膂」とあり筋肉の力をいふ。

〔逦退〕逦は、つらなる義、退は玉篇に「敗走也」とあり。

陝西按察司副使梁策傳

時倭夷蹂朝鮮、登州戒嚴、南兵三千戍守門督府曰。是卒覊旅也。瀕海多健兒。與衣糧而日練之、皆精兵矣、彼利得衣糧保室家。豈不勝召募。督府稱善、數月得兵數千。

又卷之九十五

整飭蘇松兵備山東布政司右參政兼副使贈光祿寺卿任公環墓志銘　徐階

嘉靖癸丑、倭夷寇東南。于是時天下承平久。吏與民不知有兵革。賊至輒奔以潰、復菴任公同知蘇州、獨訓練所統民兵、與力戰而躬介冑、策馬以先之。自書其姓名於腹背并足曰。死戰吾責也。雖然先人之遺體不可棄也、茲用以識、庶得收葬焉、聞者咸感泣。公又與其兵同寢食。或連日夜粒米不入口、或露宿草莽。植立泥淖中、未嘗稍自異。所得俸直、及諸上官之牢醴、悉分與其兵。由是兵亦日奮、敗賊於上海之八團、方戰時寇拔劍擊、公賴庖人某身蔽公以免、公猶被三創。既而守太倉。以積勞疽發于背、公子備孝、請公還郡就醫、公叱曰。吾誓不與賊俱生、幸吾疾愈而賊滅。當與若共太平之福、否則有臣死忠、妻死節、子死孝而已。歸以是語備母。吾不能與婦子對泣幃榻間、泯々以沒也。會報賊至、公遂裹瘡出海擊之。怒濤如山。南人習舟者皆震眩失色。公意氣彌厲手劍麾舟師擣之、賊大敗俘斬百餘。未幾又敗之陰沙。敗之保山。敗之南沙。賊望公旌旆輒遁去、捷聞、擢山東按察司僉事、整飭蘇松兵備。甲寅賊犯蘇、民爭走入城聚保、而門鑰不得入。民相抱號哭。聲震原野。公泣曰、城池視百姓重等耳、奈何棄之、亟命啓門、而謂其守曰。賊入者某請任其責。活十數萬人。明日賊

〔覊旅〕旅行に同じ。

〔嘉靖癸丑〕明の世宗の三十二年にて我が足利義輝の時也。

〔牢醴〕牢は玉篇に「牲備也」とあり、醴は玉篇に「甜酒也」とあり、いけにへとあまざけと也。

〔庖人〕料理人をいふ。

〔疽〕集韻に「惡創也」とあり。

〔幃榻〕榻は廣韻に「一曰單帳」とあり、榻は「說文」に「牀也」と見ゆ。たれぎぬを張り廻したるねどこの意也。

〔丁母趙夫之憂〕丁は爾雅釋詁に、「丁當也」と見ゆ。母趙夫人の喪にであふ事也。

〔孺人〕禮記曲禮下篇に「天子之妃曰后、諸侯曰夫人、大夫曰孺人」と見え、又た文選の恨賦に「左對孺人顧弄稚子」とありて、廣く妻の義にいへり。

〔丈人〕爰にては長老の意也、易經師卦に「師貞、丈人吉、无咎」と見えたり。

〔司命〕權を握る者をいふ、孫子作戰篇に「知兵之將、民之司命」と見えたり。

至。以計敗之蔣門。乙卯賊復大至。復大敗之。斬首六十餘級。詔進公副使。賜白金文綺。蔭一子。爲瀋州衛左所千戶世襲。丁母趙夫人憂。部使者及諸士民連疏乞起公。詔責公大義。而特贈公母爲孺人以慰公。公不得已受命。明年倭寇平疏乞終。制詔報可。仍陞山東布政司參政以旌其功。

又卷之九十八

四川按察司副使遠齋顧公碑墓志銘　　呂　本

擢福建布政使司參議。時倭賊猖獗而福寧尤急。巡撫王公詢特以公往剿之。公馳至其地。凡可以禦備之者。無所不至。一捷于秦嶼。再捷于大金閩峽。三捷于州城之外。斬首三百級餘。俘馘二百有奇。賊大挫逃遁。地方底寧。撫按奏聞。上嘉獎賜以白金文綺。

又一卷之百五

慶府右長史王公允武墓志銘　　余　繼　登

時粤西狼兵調入。剿倭者所過橫甚。百姓患苦之。以次當至南康郡。人甚恐。公乃預爲檄。檄其渠率曰。以爾剿倭。奈何乃自爲倭。今與爾約。餽餉不時。罪在有司。餽餉時而爾橫如故。三尺法具在。吾知用吾法耳。率已前聞公名。既得檄頗懼而戢其下。公亦勅屬邑爲具以待。竟過南康。無敢縱者。

又卷之一百六

特進光祿大夫少保兼太子太保中軍都督府左都督孟諸戚公繼光墓志銘　　汪　道　昆

以爲丈人。爲司命。爲社稷之衞。爲不二心之臣。則戚少保其人。當世無兩少保。文武具足。會倭掠吳

〔辛酉〕明の世宗の嘉靖四十年にて、我が正親町天皇の永祿四年也。

〔嚄唶〕口やかましき貌也。史記信陵君傳に「晋鄙嚄唶宿將」と見ゆ。

〔偏裨〕補佐をいふ

〔簧鼓〕樂器のしたを鼓舞して音響を發する如く、妄言して人を惑はすことをいふ。莊子、駢拇に「簧鼓天下之耳目」と見えたり。

入浙。辛酉寇台州。少保將所部兵。九捷而平。戚之先起定遠。繼光其字元敬。其號孟諸。山東蔵遣治兵使者。部六郡良家子入戍。春秋少保任中軍。從使者起。文學侍從嚄唶諸偏裨。中軍務輯衆心。一軍皆服。所部急推轂。進總督備倭都司。尋轉浙江都司僉書。會倭難甚。浙殘矣。少保上練兵議。其略曰。無兵而議戰。亦猶無臂而格千將。乃今烏合者不張。徵調者不戢。吾不知其可也。聞義烏露金穴。括徒選陳兵入疆邑。人奮鈐棘禦之。暴骨盈野。其氣敵愾。其習慓而自輕。其俗力本無也。宜可鼓舞。及今簡練訓習。一旅可當三軍。督府乃檄少保亟募三千人。假以節制。則以什伍起于丘乘。兵寓于農。第西北夷宜得地利。南而走險不利。竝驅乃間。長短兵夾振而進隊立。一人爲長。偏則伍之。而則什之。犄角互張。攻距擊刺互用。是名鴛鴦陣。惡用鵞鸛爲哉。居無何。卒服習矣。督府請補浙東參將。分部台州。辛酉島夷入台州。晧旌旗皆辟易。所嚮以全取勝。語具台州平夷傳中。時新兵若發硎至如破竹。其年江西告急。督府檄少保西行。既捷露布以聞。軍聲益振。夫巳氏故暱。督府逝將擠而代之。陰揣東南慣客戍苦軍興。則扇甘言。爲簧鼓。未及入閩先上封事。請因兵求兵。因糧求糧。無庸徵調。內應者讙然爲口實。夫夫無負。神武師及使者彈事不行。各守官如故。夫巳氏既失策。無敢食言。寇虐益張。兵食無措。徒負長技。擐弓躍馬當先。一倭操利刃追之。斷馬尾而免。寇分壘爲三窟。一據橫嶼。一據牛田。其酋長壁莆東南出沒楚掠。因而塞路。扶野不耕。山寇陸梁。海寇盤踞。廣敉兵乘亂出入。毗若無人。言者謂。督府衆制八閩。亟解懸以希悔禍。乃屬少保部兵八千往。余爲監。自橫嶼搗牛田。俘馘立盡。他夷部繼至。樲先登者五之。三其一二。突圍南奔。窮追絕跡。將振旅。余操

（眇然一夫）小さき男の意にて、自己をいふ謙遜の辭也

（三酹）酹は玉篇に「以酒祭地也」とあり、卽ち三度酒を地に注ぎて神を祭るをいふ。

（枕藉）重なり伏すにいふ、蘇軾の赤壁賦に「相與枕藉乎舟中」と見えたり。

（脇從）脇は玉篇に「除也疾也」と見ゆ、また脇從は威力を用ゐて人をおどすをいふ、書經に「脇從罔治」とあり。

壺漿逆之。福清西樓。余謂。倭咱利如蠅。旋撲旋集。非一大創。疇能息肩。公歸。未及税車。閩烽擧矣。少保辟人耳語。明公知余小子所由來乎。督府之援以開府。故亦將以謝群言耳。借一爲券。寧慮什全。天意必欲完閩。幸明公在八閩之事。明公以獨身肩之。督府之重。明公愈于開府。願明公躬謁督府。悉陳往者之過計。請兵請餉而西。余小子眇然一夫。願從公殉國矣。余三酹而三拜。少保出百金劍一分佩之。誓而指天。渝成言者不祀。既入省會勤。功平遠寨。少保既班師。余上書。所部願奉詔旨請援于浙。所部皆不可。閩方急無寧。出護軍境外乎。余爭之彌。今且必往。傳遽三宿聞。寇入莆城。所部發急足追。余還那聽。又三宿驛聞。督府逮京師。所部發急足追。余遠那聽。既而大司馬趙公代督府。乃發浙餉。屬少保募精兵萬人。閩望援兵。日幾幾如望時雨。兵至寇畏飛將軍如虎。枕藉而死。屍以澤量。當戰務釋俘囚。獨脇從視首功居多。語具京觀碑中。不具載。進左部督。其加秩則少保兼太子太保。其階則特進光祿大夫。

叙都督劉將軍顯淮上戰功

嘉靖三十六年夏四月倭奴寇楊及淮。殘琢州縣。十有三殺。都指揮一所過。鞠市爲墟。暴骨如莽。我國孔棘。留京戒嚴。時劉將軍方北下。將祇役金山。大司馬張公檄將軍守浦口。無何白司馬曰。賊性貪惏輪掠既衆。其欲已盈。必無南。今去者半。其在泗州者需亦去耳。不如擊之。顯留此不能自效也。大司馬許之。會御史馬公移書辟將軍。將軍乘傳謁御史。御史喜命具饗。饗將軍。將軍曰。賊在。顯不咽食也。請爲君滅賊還饗耳。五月乙卯與其家甲驅王安東諜之賊艘二十九。賊衆時脅從散去。簡人人

倭也。遣將軍謾書。將軍謾書笑曰。賊素易我。且歸則志惰。可整而待也。潛伏甲岡下。躬率四騎。薄賊艘詬之。賊出將軍叱三騎使前以身殿。斬一人以狥。且戰且却。射馬中矢馬駭。將軍下馬。扶殺。賊卒馳將軍前。將軍躍馬斬馳者。賊至岡下。弩發。賊多中弩者。然且扶傷而鬪。甲亦殊死戰。賊乃引去。甲欲逐之。將軍曰。日旰矣。勿逐也。賊言焚民廬以摧我。將軍即先自焚。賊縱所俘美女子以蠱我。將軍戒毋犯。悉縛送有司。將軍度夜當雨。謂甲曰。我露宿。是彼以逸待我也。乃達岡十五里而軍焉。選人持火器。潛涉賊艘。賊數驚。徹夜不得寢。厥明丙辰援桴誓衆。將軍執一幟以號于衆曰。汝官軍有能敢勇殺賊樹功勳者。立此幟下。得三百人。曰我前拒。汝爲後勁。命甲四十人塞隘巷之衝。每巷以五人守。以五人巡曰。賊出汝路。命甲六十人分四部。伏岡下曰。賊潰汝擊。命三巨艦積葦。泊上流曰。賊艘汝燔。右之虛營以張其勢。左之疑兵以分其黨。復令數人升屋而譟曰。獲賊矣。獲賊矣。既誓乃陣。賊自巷出者連斬四五人。遂不敢復出。退語其魁。魁怒摘冠揮袛。左手持刃。右手持扇。登岸麾。賊衆蟻螓。矢集如雨。將軍單騎遇之。格者斗。援者斗。矢盡。又張其銃。鬪將軍數圍弗克。〇〇射賊。輒殪。賊氣稍奪。將軍曰。彼衆我寡。不先磔其魁。則衆不携也。廼一呼突賊壘。斬前隊二人。直擣鼓下斫指麾者。自頂至踵。裂其尸出賊陣後。賊披靡相怖以目。甲四起夾擊之。斬獲甚衆。賊大潰還奔舟。舟焚。將軍追至舟上。盡斬之。又擒一魁名五大王者。亦斬之。溺水死者不可殫計。淮倭悉平。將軍不冑不介。著一白布單衣。巾褲加之。身不滿七尺。猶夫眇小丈夫耳。及遇敵提兩刃。騰躍超踊。矯捷若飛。刃起見刃。不見將軍。淮民自河上觀者。咸咄咄曰。神人神人云。黄子曰。倭奴犯徼。

〔謾書〕いつはりの文書也。

〔弩〕說文に「弓有臂者」とあり。いしゆみ又はおほゆみ也、機械にて矢又は石を發射する懸具也。

〔隘巷之衝〕狭きちまたの要所をいふ。

〔袛〕禮記曲禮の註に「袛以席也」とあり、しとねをいふ。

〔蟻螓〕蟻聚に同じ、蟻の如く多く集まることをいふ。

〔不可殫計〕殫は盡す、計へつくし難しなどの意、即ち數へきれざるをいふ。

七年于茲。我軍不戰而覆者衆矣。即戰要十獲一。往往是也。若去歲梁莊舟山之捷。亦僅見者。將軍以寡殲衆。而不折一卒。豈非奇功也哉。

又卷之一百七

後軍都督府都督同知贈左都督兪公大猷行狀　　趙恒志

公進實授都指揮僉事。守瓊州等處參將。其冬倭人入寇。浙東尤甚。移公參將浙東。至則上方略。謂攻賊長技當以福建樓船破之。而蒼沙諸船非足恃也。中丞思質王公。亟爲大調福建舟師。分布諸島澳。小而鵰勦。大而合戰。於是松門普陀烈港昌國臨山觀海諸處連捷。凡俘千五百。甲寅進提督南直隷副總兵。公始至。見在之兵不三百。而所徵諸道兵未至。倭盈數萬。衆寡懸絕。公與制府牛洲張公議。權刷河船。集土兵。扼險守要。防過內突。至乙卯乃得以所徵永順保靖兵與倭戰。平望橋王江涇破之。以閩兵戰六。金壚秋母亭英德湖破之。凡斬九百六十餘級。而倭之據村鎭者氣奪矣。會監軍某者求貨於張不得。讒之論死。而公亦以始至。時建用兵難易之議。或持以語華亭公不知也。分宜謂公故略已嗛(イトフ)之褫公職。公以候代。未至。猶提兵戰吳淞江。再戰營前沙。又截之。茶山洋擒斬五百餘級。捷上。諸公卿廻會請以公克爲事。官鎭守浙直總兵官。復公祖職百戶。尋陞前軍都督府僉事。舊倭之盤據舟山者有年所。我師相守已老。公佯不戰。而密授裨將張四維。夜縱火襲之。斬一百四十級。乙卯進都督同知。新倭人沈家門。與公水兵遇。俘五十二。又戰小姑渡。斬二百四十級。徵賊王直爲倭嚮道。朝議必欲得直。甘心公議。與盧帥不合制府。是盧帥後雖得直殺之。而倭之被誘

〔樓船〕二階づくりの屋形船をいふ。水戰又は遊興等に用ふ。史記平準書に「大修昆明池。治樓船。高十餘丈」と見えたり。

〔鵰勦〕鵰は說文に「鵰鷻也」とありくまだかの如き速さをいふ。

〔甲寅〕明の世宗の嘉靖三十三年にて我が天文二十三年足利義輝の世也。

〔嚮道〕又た嚮導に作る、案內に同じ。

來者焚舟殊死戰。逸入閩地。梅林胡公以不聽公言爲悔。

征蠻將軍都督兪公大猷功行紀

壬子東倭入寇。陷城池壞村鎭。去還莫誰何。千里蕭然。朝命以思質王公忬督浙蘇。以公左參戎浙江。王公遣使者從瓊速公。公卽圖上方略。謂。攻賊長技當以福建樓船破之。則蝘蜓之醜不足平。而蒼沙諸船非足恃也。王公善之。大調福建舟師分布諸島澳。公至溫。遂入海擊之。斬俘數千。徽人王直者亡命入海。據烈港。勾倭貿易。公然爲逋逃主。時假官兵殺賊請賞。公以賊直不殺終爲大患。發兵擊之。賊矢石俱盡而颶風大作。我舟幾覆。賊因走日本。定海故倭人入貢關也。故定海最爲賊衝。自公至賊無敢邇關。軍屯秋毫無犯。公又廉靖不擾。士民弦誦耕織如故。浙東西底寧。民甚德公。云云。癸亥正月。公自贛晝夜兼程。馳至平海。駐軍秀山。都督劉公駐明山。距賊營三四里。都督戚公提浙兵未至。公度未可戰。是布兵營。畫地鑿溝。東西通海。列柵其上。賊屢挑戰。公按兵不動。移檄速戚公兵。作滅倭議。其略曰。今賊且萬餘人殊死鬪。官兵之數僅僅相當。約日列陣以合戰。勝負之形猶相半也。若迫城而攻之。彼實我虛。彼飽我饑。彼逸我勞。萬一受挫。東南之禍何日而已。不若列營以困之。彼欲攻柵以遁則彼虛我實。彼勞我逸。彼饑我飽。縱有突遁。秀山明山二營之兵。又截之於前。可使無孑遺矣。且速戰賊之利也。賊得一戰勝亦可遁。負亦可遁。遲戰我之利也。兵日益多。守日益固。賊日益困矣。敵以戰爲守。我以守爲攻。攻守之機。微乎至於無形。會新督府二華譚公至。得議甚喜。且移書於公曰。萬勿速戰。以四月十九日抵師。明日以三將軍分道並進滅之。賊騎馬躍

〔壬子〕明の世宗の嘉靖三十一年、我が後奈良天皇の天文二十一年にて、足利義輝の世也。

〔蝘蜓之醜〕蝘蜓はやもり、卽ち壁虎也、倭寇を嘲りたる詞也。

〔秋毫〕細毛は秋に至りて益々細纖となるをいひ、轉じて物事の纖細なるは云ふ、孟子の朱註に「毛至秋而末銳、小而難見也」とあり、又た兪樾曰「鳥獸夏時毛羽脫落、至秋更生也、新生之毛、其細可知、故古人言細、必稱秋毫」と見えたり。

走。盡陷溝中無一漏。時閩中諸公責戰急至以逗遛語於朝。公不爲動。平海山無竹木。營材不辨。公命毀殘屋爲營。興泉二郡既無以供軍。仰糧運。數日不至。公令軍採麥食之。興化人多怨公。公曰。吾爲將三十年。不擾民。一草一木今乃種孽於父母之邦耶。捷書入。譚公進副都御史。戚公進都督門知。劉公加抶。公賞金幣而已。譚公貽公書云。論功疏未行。而前捷疏已覆。公止受金幣之賚而已。大抵世人知公者少。至於眞知公。則惟綸乃不爲衆楚所咻（カマビスシ）。然又不能爲重。今綸向人又有說矣。範制精明公不如綸。信賞必罰。公不如戚。精悍馳騁公不如劉。然此皆小知而公堪大受。蓋誠如霍子孟。任如諸葛亮。大如郭子儀。忠似文文山。毅似于肅愍。可以托孤寄命。知及仁守。當今之世舍公其誰。惟公幸甚自愛。此點精誠想不以老而衰。因時而變也。時潮州倭寇二萬。與吳平相爲犄角。久横界中。積五六歲。而閩中新倭繹錯南下。天子閔恤東南。屢勅江廣閩三鎭撫臣。借公平之。詔公移鎭其地。天語峻切。而諸嵩山寇蕃。松三余大春李春文劉萬清蘇阿普各擁衆數千掠提縣令。陳紹祿掠延平。梁道輝掠汀州。伍端溫七葉丹樓有衆萬餘。尤輕剽善戰。時出掠數百里外。燬村破堡。迄無寧日。惠潮之間幾無民矣。五月公自泉中遣把總洪道謙持節鉞往督。陳紹祿歸嵩。令無得復擾民。公至上杭遂單騎入紹祿營中。稍責諭之。令紹祿俯伏願受鞭杖。杖之遂統以行令驅。梁道輝歸嵩過汀。其黨遂散。乃令鄉民殺之。陳紹祿歸。其黨亦散。僉憲徐鏡湖殺之。八月公至惠州。時督府百川張公臬方聚兵討伍端。別將與戰不勝。乃詐言爲參家軍。伍端大懼。馳出陣前驅。諸酋以歸。公果至。乃遣人乞降。公遣王鸞奈何志許之。遂俘賊首溫等七人以出。故有府幕某。爲伍端所執在

〔馳騁〕馬をかけ走らすこと也。周禮冬官考工記に「終日馳騁」と見えたり。

〔霍子孟〕霍光をいふ、子孟は字也、漢の武帝の時、奉車都尉たり、武帝の子弗陵を補けて未だ嘗て過あらず、甘露中、大將軍博陸侯霍氏と稱して名を云はず。

〔郭子儀〕明代、華州鄭の人、玄宗の朝、朔北節度使たり、安祿山反するに及び大いに之を破り、天下の安危を爲すもの實に三十年に及べり。

縶纏久。遽具僕從騎衛奉之以歸。而不留。公所遣去者一人。公乃遣翁思偉斎尙志持節鉞。將伍端兵二千人。由惠來往潮。殺賊自贖。不取人一蔬一菓。途有言。公將誘之潮以坑之者。端伍遽曰二將斬之。至鄒塘。夜斬倭數十人。十二月公由河源程鄉往潮藍。松三葉冊樓俱以次疑之。乃遣人誘吳平。吳平率衆來謁。公單騎往見之。平見公涕泣。願以身投於公。其諸酋長尙多不甚聽平。故平不能自決。然猶爲公殺倭百餘級。而吳平遂與倭人絕。平故梅嶺人也。公使居其地。

榮祿大夫南京中軍都督府都督同知萬公表墓志銘　　澹園集

按狀。公諱表。字民望。別號鹿園居士。世居定遠。高廟起淮甸。始祖國珍首率義兵歸之。賜名斌克萬戶。斌生鍾。授龍驤衛副千戶。奉命備倭寧波有功。賜第。因家焉。云云　歲甲寅海上倭亂起。公散家財募死士。奮欲往擊。會以都督僉書南京中府。道經姑蘇。與倭遇妻門楊涇橋。公率所募及少林僧躬冒矢石挫賊鋒。身中流矢。不爲止。遺書於子曰。我家世以戰功死王事。乃我獨持文墨議論。身不任兵令。晩年增一箭痕。不亦美乎。

又卷之一百八

都督僉事呼公良明行狀　　葉向高

時倭方中閩。中丞皖城阮公檄公巡海上。斬巨酋通三曬等十餘名于東梅山。威名遂振。以功領中軍。嗣後中丞天津劉公新安游公汪公成都塗公皆雅重公。當游公時。賊據莆中閩。南道梗聲息不相聞。公獨以小艇渡海。傳命往返甚駃。而汪公與都督定遠戚公案諸閩將。獨謂公可大用。先後委督兵

〔節鉞〕鉞はまさかり、賊徒征伐のとき天子より賜はるまさかり也、我が節刀の意に同じ。孔叢子に「天子當階南面、授之節鉞」とあり。

〔姑蘇〕江蘇省蘇州府にあり、春秋戰國時代、吳の都府にて、吳王夫差が越を破りて得たる美人西施を置くために、此地に姑蘇城を築きたり。

〔駃〕集韻に「與快同」とあり、はやしと訓ず。

鮈。送于倭平論功。進指揮同知。世其官。復與巨寇曾一本鏖戰海上。賊鋒銳。軍幾不支。親發大砲沈其船。轉戰大捷。功第一。陞公爲閩諸朝。進守備汀漳。至則繕城。料兵覈田。克鮈武備一新。劇寇黃棠杜高山困平遠。公督所部。解其圍。汀人祠而祀之。進遊擊將軍。兼坐營屬閩南閩參將。以公往攝。公嚴簡舟師。設伏出奇。大破鄭寇何廷韜。閩廣之禍稍息。已直補其官。巨寇林鳳據彭湖。出沒濱海。患苦諸郡邑。無已。時奉命會勦。公先登冞入其阻。以功賜白金文綺。頃之進副總粵東兵。而閩臺使者謂。公不宜去閩。具疏請留。公已晉署都督僉事總兵鎮粵西。未行乃如。使者請徙鎮閩。公起孤窮自奮于功名。戮力行閒。二十餘年遂佩大將印。建節鄉里。春秋防海居鎮東。軍容甚肅。衛官避署爲行營。諸故與公同儕。及據公上者。皆以軍禮見。匍匐頓首不敢仰視。公晨夕朝太夫人于堂。市井聚觀。公自惟國恩深厚。圖所以報。稱日以防海爲事。倭一入犯。輒督舟師戰。斬首五十餘級。

今按通三曬似訛倭人俗名

後軍都督府都督僉事尹公鳳墓志銘　　澹圖集

晉提督。備倭福建。歲壬子帥舟師討海寇許朝恩。斬首一百六十級。奪還鹵掠二百四十有奇。捷聞。賜帑金。癸丑徙僉浙江都司事。秋晉參將。分守福興泉漳等處。乙卯倭患起。其擁衆來也。公以所部寡坐無功。召詣對薄事。尋白。輒以新募兵屬公。公選驍果以軍法約束之。稍不中率。即斬以狥於是烏合之人皆爲精卒矣。戊午與賊戰浯嶼東洛七礁外洋。生擒二十有三人。馘百七十有奇。溺水死者無算。己未戰梅花並中竿塘等處。生擒九人。馘百二十有奇。奪還所鹵掠。亦無算。是役也。公血戰

〔鹵掠〕かすめ取りたる物也。漢書高帝紀に「毋得鹵掠」と見えたり

〔癸丑〕明の世宗の嘉靖三十二年にて我が後奈良天皇の天文二十二年、足利義輝の世也。

〔烏合之人〕烏のあつまりの如く紀律のたゝざる人々の集團をいふ。

〔戊午〕明の世宗の嘉靖三十七年にて我が後奈良天皇の永祿元年、足利義輝の世也。

〔己未〕前項戊午の翌年也。

數十、親冒矢石、甲不解者月餘、方轉鬪海洋、直糧盡。輒馳島中、采稗食之。三日而餉至。人見公所摧敗震一時、不知其難如此也。捷聞、復賜金、說者謂。公斬首虜多。當益封、然公軍吏封者數人。而公不得封、晉長浙江都司。以疾予告歸、隆慶戊辰詔舉邊材、言者交口材。公起長福建都司。討巨盜曾一本平之。捷聞、復賜金、尋奉表入賀。再乞歸。辛未復起浙閩。壬申晉徐宿歸德參將。亡何徙守蘇松。會今上踐阼念公功、以彩幣勞之。

又卷之一百十

佐擊將軍贈都督同知諡忠壯清源宗公禮傳　澹園集

丙辰正月抵松江黃浦閘。制府命止營禦新場賊。時新場賊約千五六百人。漳潮寧紹爲賊翼者若土人。入倭爲鄉導者不下三千餘人。皆兇狡。而被虜供其使令者又二千餘人。於是新場百里間皆賊藪。耽々虎視。公數奮兵過浦挑戰、有金娘子橋八師庄下沙諸處賊。先後被創、堅守不敢出。至三月二十三日、探柘林新城堡新倭二百餘登岸縱掠。公提兵掩擊、賊奔潰。次日追至劉津村。又新倭二千餘擁衆來、公復提兵掩擊、賊又奔潰。會新場舊賊與新至者合。猝與我兵遇。公分騎兵百爲兩翼、用箭圍射。當獲十數人、又次日乘勝攻破新場賊巢。賊大慟。倉皇奔新船遁去。旋奪回被虜婦女六百餘口。而新場諸穴悉平。前是以南人柔脆不任戰倭益張。公要剿之。聞者相顧愕眙以爲神。四月總督胡公檄公。隨賊所向追勦之。適有吳江嘉興之勝。十九日兵至崇德縣。探倭至皂林。勢且犯杭。公兵遄往皂林。遇西石橋止營禦之。二十三日倭萬餘夾河來戰。公統兵不滿九百人。自寅至辰所殺傷

〔隆慶戊辰〕隆慶二年にて、明の穆宗の世、我が永祿十一年、足利義榮の時たり。

〔丙辰〕明の世宗の嘉靖三十五年にて我が後奈良天皇の弘治二年、足利義輝の時たり。

〔耽々虎視〕虎の恐ろしき目を以て見る貌、轉じて强力者が機會を窺ふさまにいふ。易經頤卦に「虎視耽々、其欲逐逐」と見えたり。

〔永平〕支那直隷省永平府也。灤河の流域にあり、北京を距る東九十餘里近く山海關を控へて極めて險要の地たり。

〔宣德〕宣德は、明朝五代宣宗の時の年號にて、十年にして、正統と改む、我が足利六代將軍義教の頃に當れり。

〔驛〕葦毛馬也。

〔金山〕江蘇省松江府にあり。

多。賊敗去、頃之復來戰。自辰至巳。又自午至申、賊番休來攻。三戰三北。死傷無算。軍大振。會石橋前鋒中賊砲。橋失守。公被重傷。猶裹創奮臂戰、徒以九百當萬人。衆寡遂不敵。兼盡日乏食。軍無後救者。公力竭仰天疾呼曰。死當滅賊以報國。遂遇害。乃是日之暮也。總督聞其事於朝。肅皇帝亟下詔褒之。贈都督同知。蔭一子。世襲指揮僉事。予祭六壇。謚曰忠壯。建祠邑林。額曰褒忠。命有司以時饗焉。

今按。丙辰嘉靖三十五年。此時倭寇甚熾。見前。

又卷之一百十二

麴祥傳　　　　　　　　　　　　金山志

麴祥字景德。其先永平人。永樂初待父百戶亮調任金山。年十四被倭虜去。轉鬻日本。其王知爲中國人。召見之。留左右。改名元貴。因得力學。遂爲士官。畜妻子。然心未嘗一日忘中國也。屢諷主入貢。宣德中與使臣抵京。上疏陳情。臣夙遭虜、抱憤痛心。死生路梗、流離困頓。辛苦萬狀。生還中國。夫豈由人。伏乞歸省侍。上柔遠方。隆不欲遲留之。遣令還國。許給驛。暫詣金山。乃惟母存耳。母曰。果吾兒則耳陰有赤痣。驗之信然。抱持慟哭。悲動隣里。咸嘆異爲再生。未幾重違。上命別去。祥至日本。啓以聖諭。蕃王允之。仍令入貢。復申前請。詔許襲職歸養。母子相失幾二十載。又有華夷之限。得遂初志、難矣。祥事母備甘旨。聞言及父事、輙哽咽不已。後母寢疾。三載。朝夕扶持不離左右。及卒哀毀骨立。襄經三年。祥博覽經史。通左氏春秋學。善吟咏。年八十餘以壽終。

今按、自永樂至宣德迄二十載、則其間歷足利義滿義量義持義教四代。元貴蓋侍此諸將左右也。

舉三孝子疏　陳子貞

王在復係太倉州民。嘉靖三十三年地方倭亂。在復時年二十一歲。隨父監生王亮[illegible]讀書城外朗澄庵。本年五月初九日同父奔入城居。父因身肥不便行、至中途遇倭。父子相失。時在復已脫身。二里許展轉尋父、聞父為倭執。急趨父所、見倭露刃嚇財、跽求祈免。倭以刃背擊其父、即以身蔽之。痛哭求。倭怒奮刀一揮。父子被為四段、二首墮地、而軀殼猶相扭不釋手。同時避難窩友徐志昂徐仲山馬堂食良等目擊可證。本生家亡、祀絕、湮沒日久、迄今父子一塚藁塟州城之北。該臣看得。王在復孝出因心、義能殉難。捐生於嚴親之被執、同死於倭寇之狂鋒。兩々幽魂、含泣九原之下。英々烈行、同揚萬口之芬。孝出異常。光沈沒世。既經勘實、相應表揚。

今按、嘉靖三十三年當日本天文二十三年。

又卷之一百十五

隱君徐子仁霖墓志銘　顧璘

自前元趙孟頫亡、書學遂微、篆法尤多失正、至周伯溫始復振。本朝少師李文正公。遠續其緒。時則徐君子仁出。以其超穎之姿、躬詣堂室。蚤尚雄麗。晚益樸古拔俗。篆登神品。餘若眞行、皆入妙。碑板書師顏柳、楷法題榜大書師本朝詹孟舉。並絕海內。四方操金幣。走其門求書者恒滿賓館。聲沛夷裔。朝鮮日本使臣得其書者什襲為珍。

〔太倉州〕清國江蘇省にあり。

〔跽〕長くひざまづく也、說文に「長跪也」と見え、史記に「項王按劍而跽」ともあり。

〔藁塟〕叢中に葬るを云ふ、正字通に藁は草也、塟は俗の葬字とあり、又漢書馬援傳に「藁塟」の語見ゆ。

〔九原之下〕墓下也本と地名、晉の卿大夫の墳墓の在る所、後世轉じて黃泉の義として用ふ、禮記檀弓に「從先大夫於九原」」とあり。

〔閩浙〕支那浙江、福建兩省の稱也。

〔陝西〕陝西省也、支那本部の一省にして、東に山西、北に四川、西に甘肅に接す、渭水甘肅の地より發して本省に入り、潼關に至り黃河に合す其の流域は地味豐饒にして、所謂關中の地也、支那第一の要地にて、古來爭奪の地たり。

〔四川〕四川省也、東は湖南、湖北に西は西藏に、南は雲州、貴州に、北は陝西、甘肅に隣る、蜀漢の好地也。

又卷之一百十八

釋道

佛日普照慧辨禪師梵琦塔銘　　宋　濂

君子謂。師縱橫自如應物無迹。山川出雲。雷蟠電掣。神功收歛。寂寞無聲。由是內而燕齊秦楚。外而日本高勾麗。咨決心要奔走座下。得師片言裝潢襲藏。不翅拱璧。

又卷之一百二十

四夷

日本志　　王　世　貞

日本古倭奴國。在大海中。於閩浙爲東北隅。其國主以王爲姓。世々不易。文武官僚亦然。有五畿七道。統郡至五百七十三。然皆依水附嶼。大者不過中國一村落而已。戶可七萬餘。課丁八十八萬三千有奇。自元師討日本者沒於水不得志。日本亦絕不復來貢。高帝初遣使臣趙秩諭降之。僧祖來貢方物。十三年丞相胡惟庸謀叛。令伏精兵貢艘中。計以表裏挾上。卽不遂掠庫物。乘風而遁。會事露。悉誅。而發僧使於陝西四川各寺中。著訓示後世。絕不與通。於是遣信國公湯和等。沿海規畫。自南直隸山東浙江福建廣東西。咸置行都司。以備倭爲名。犬羊盤錯矣。永樂初太監鄭和等齎賞。諭諸海國。日本首先歸附。詔厚賚之封其鎮山。賜勘合。百道與之期。期十年一貢。無何三千人犯遼東。爲都督劉江所破殺。無子遺。自是歛跡不敢大爲寇。而少々抄盜亦不絕。或其主不知也。其貢則恒多

先期而至。要以利中國綺賚、與互市爲利耳。嘉靖初、其主幼沖不能制羣臣。右京兆大夫高貢、使宋素卿貢。亡何左京兆大夫內藝興遣宗設貢。咸強請勘合。後先至寧波。爭長不相下。宗設桀盛於宋素卿。遂攻敗之。追北至紹興。躪諸郡縣。剽掠以千計。都指揮劉錦、及千戶百等官遇之皆死。後以詔指諭。且下宋素卿獄。始肯聽。徐々解。自是有輕中國心矣。而中國亡命者多跳海。聚衆爲船主。往來行賈閩浙之間。又以財物役屬勇悍倭奴自衞。而閩浙間奸商猾民、覘其利。厚私互市。違禁器物咸托官豪庇引。有司莫敢誰何。黠者又多取其貲。匿去莫與酧。船人怒則輙有所殺害。而他船不爲商者又行剽掠。海中漸彰聞。朝廷慮之。乃特設閩浙巡撫開軍門。聽以軍法從事。而所用撫臣朱紈素潔廉。然鋭果壯往。則日夜練兵甲。嚴斜察。數尋船盜淵藪破誅之。而又嚴根株通海者。令迫急。諸豪右咸惴惴重足立。其仕宦貴臣相呴。紈不休。竟以擅殺逮紈。及置一司。用事者於理。紈恚自殺。及罷巡撫不復設。而船主土豪益自喜爲奸益甚。官司視以目。莫之禁矣。壬子賊始犯台州。破黃巖象山諸邑。議復設提督都御史。用家巖爲之。時沿海衞所。軍久廢弛不習戰。軍府草創財用磾屈。家巖於是益召募驍勇。委良將。申約束。要諜其巢穴覆之。斬獲以千計。於是移舟而南犯吳松郡。二郡固都會。素沃饒而其民恩怯弱。賊至則咸壞散不支。稛載而去。所被攻剽群邑爭以檄書上聞。巡撫操江憲臣相繼罷。而家巖又以雲中急改節鉞。天子數憂東南。計用張經矣。倭賊勇而驁。不甚別生死。每戰輙赤體提三尺刀。舞而前。無能捍者。其魁則皆閩浙人。善設伏。能以寡擊衆。反客主勞逸而用之。此所以恒勝也。大羣數千人。小群數百人。比比蝟起。而船主推王直爲最雄。徐海次之。又有毛海峰彭老。

〔寧波〕一に四明とも呼ぶ、浙江省にあり、唐代には明州と稱し、我國往時の遣唐使は多く此處より上陸せり

〔紹興〕浙江省にあり、越王勾踐の都にして、會稽の故地なり。

〔黃巖〕浙江省台州府黃巖縣也。

〔吳松郡〕江蘇省にあり、太倉州に屬す、首邑吳松は、上海より黃浦河を下り、吳松江に出づる所にありて良港の稱あり。

不下十餘師。張經者南京兵部尚書也。朝討調廣狼上兵討之。而經舊嘗爲彼總督。有威惠。經亦慷慨以平賊自負。故用爲大帥節制當天下半。得以便宜行事。開府辟召諸郎署參佐。中外忻忻謂。賊旦夕盡矣。然經素貴。侈靡行事。有承平風。而諸特用大將何卿沈希儀等。名位極老而驕。新進之士又慓猾。果往速退。田州瓦氏山東槍手兵連戰敗去。經望實稍々損矣。而侍郎趙文華出督祭文華繇上疏。行有所負挾。願淩經而經以大臣自重。治其上。文華恚則疏、連劾經謂。其才足辨也、特家閫避賊糜。故嘍唶縱賊。爾而會兵科亦有言。上怒甚。趣使捕徵經。經則已聚兵。大破賊於嘉興。斬首二千級。溺水死者稱是。兵科言。宜留經以賊平自劾。不聽。併巡撫李天寵皆論死。文華既已攘其功。則奏超巡按御史朝宗憲代天寵。○臣亦有更道。由是中外文武惴惴重足立。憂不在倭矣。文華俄還朝。進太子太保工部尚書。而宗憲亦遂以兵部侍郎總督。無何徐海入寇圍巡撫阮鶚。蹂浙地。告急疏上。尚書趙文華請出督。許之。其進止機宜如張經加重。乃與宗憲誘徐海降。而令兵掩捕平之。徐海死。進文華少保。宗憲亦遷右都御史。又明年獲王直。王直者故徽人也。以事走海上。後爲舶主。頗尚信有盜道。雖夷主亦愛服之。而其姓名常借他舶。以是凡有入掠者皆云直主之。蹤跡詭秘未可知也。宗憲亦徽人。乃以金帛厚賂誘之云。若降吾以若爲都督。置司海上。通互市。而直亦自嚮言。必能肅清海波。贖死命。宗憲與之誓甚苦。直信之。從入杭州。宗憲具狀聞上。然不敢悉其故。廷議以直元兇不可赦棄市。宗憲亦得加太子太保。餘遷賞有差。然其衆無歸者。而寇復犯淮揚不利。連犯吳越粵閩中。首尾七八歲間所破城十餘。掠子女財物數百千萬。官軍吏民戰及俘死者。不下數十萬。

〔田州〕支那廣西省思恩府にあり。

〔杭州〕浙江省にありて、錢塘江の北岸にあり、水利の便多く、古來商業繁盛の地たり。

〔嘉興〕浙江省の北方にあり、杭州、上海間の中央に位す、上海を去る約四十里、杭州府と相並びて、地味肥沃にて、農產豐饒の地と稱せらる、吳の時、嘉禾と稱し、唐代に杭州に屬し、明の時嘉興府と改む。

雖時有勝負。雅不相當。而轉漕軍食犒賞賜。乾沒入橐中者以鉅萬計。天下騷動。東南髓膏竭矣。胡松著海圖說曰。始倭之通中國也。實自遼東。今乃從南道浮海。率自溫州寧波。自靑林。此約可四五日程。蓋其去遼東甚遠。云云

登壇必究第六地理一

淮滁　王鳴鶴　編輯　姑蘇　袁世忠　校正　門生（廣陵方元壯　貴陽鍾伏武）同校

浙江圖叙

浙江古楊州地。崇山巨浸所在限隔。然嘉（嘉興湖州）湖與江淮相表裏。嚴（嚴州衢州）衢以徽（直隷徽州府）饒（江西饒州府）爲郭。左信郡（江西廣信府）右閩門（在福建北境）。大海東蟠繞出淮楊（淮安楊州）之背。斯固四通八達之區也。云云溫台（溫州台州）並海而南。信宿再達于福寧（福建福寧州）。估客良便之。然不能不防他寇也。若倭夷奉珍入貢。則風帆直指寧波。突至倏來。黠詐叵測。先事而備。其在定海（寧波府屬縣即夷舟所從入）乎。

又第十兩直各省事宜一

吳郡監生金魚云。倭寇之患起於吳浙。而沿及淮楊。蓋楊州富甲天下。人所素聞。三十五年之夏。賊以二百餘人突至楊州城下。城中謹閉自守。任其遊逸。無如之何。大掠而去。自是益生歆豔。而楊州爲賊所必窺之地矣。以江北之大勢言之。東起廖角嘴大河口。以及呂四盧家等場。沿于楊樹港海門裏河通州。興如皐泰州。稍折而北則爲楊州矣。過楊州而西。稍北則天長滁州。抵中都。踰海門而北則爲徐步營。又北則爲掘港。又東北則爲新挿港。轉而西北則金沙鹽城廟灣劉庄姚家蕩。再西北則蛤

〔湖州〕浙江省の西北部にあり、杭州を去る水路十六里蘇州を去る二十里餘、春秋の時吳に、後ち越に屬し、戰國の時楚に、三國の時、吳の寶鼎元年始めて吳興郡を置き、隋の代湖州を置き、宋の時、安吉州とし、元の時湖州路と稱し、明の時今の名に改む。

〔饒州〕江西省にあり、鄱陽湖の東南岸に位し、鄱江其の南門外を流る、附近地味肥沃にして物產豐か也。

〔廣信府〕江西省の東北にあり。

（安東）江蘇省淮安府にあり。

（秦州）江蘇省楊州府にあり。

（海州）江蘇省海州府にあり。

（贛楡）江蘇省海州府の北部海邊にあり。

（鳳陽）支那安徽省の北部にあり、廬州府の北方、淮水の右岸に位す、明の太祖勃興の地也

蜊麻線等港、而至大海口矣。劉庄東北則安東。安東之北則爲海州贛楡秦州。西北則爲高郵寶應。寶應之北爲淮安。淮安轉西則泗州以達鳳陽。此江北形勢之大略也。賊入海之道有二。其一新港爲一道。新港卽所謂三江口。葢由南江狼山越儀眞瓜州。而入。登岸則下家墳周家墳、稍折而東則楊州矣。此可入以登岸。亦可從以出海者也。此最爲便道。其二則蛤蜊麻線等港。沿北大海口爲一道。大海口有水陸路。南通廟灣與劉庄姚家蕩。俱爲大鎭。賊若據此。我兵屯於湯潮岸等處。賊南尋新港路。出不得則必北尋大海口而出。勢所必然也。若安東海州之東北。有大北海。不惟道里迂遠。且砂磧甚多。此不可運舟者也。掘港新插港之東。亦有北海。砂磧亦多。不堪重載。此但可從以入。而不可出者也。是賊出海之路。止有三途。若其登岸之處則不一。東則廖角嘴呂四場。西則楊樹港徐沙營。又西則狼山楊樹港。北則新插港。皆其所從以登岸而入寇之路也。夫賊所歆慕惟在楊州。一執居民使問其道。若登狼山。必窺通州。而楊州在西。使子餘東餘西等處。率民以掣其後。則賊必不敢直前。以寇楊州若干。廖角嘴呂四場。或新插港掘港以進使于餘東餘西等處。屯兵以過之。則楊州可無危。故今餘東餘西等處。最爲要地。而當事者欲屯宿重兵。以控扼賊鋒者有以也。按江北之地。細港委蕩固亦有之。而平原浩壤則視吳松爲多。夫西北騎兵倭寇。未易以攖其鋒也。既得平地則騎兵可施。三十八年之捷。以西北騎兵三千。爲之先衝可見也。他有湯潮岸者。又范公所築以捍海溢者也。故亦名范公堤。東南起呂四場。西北抵姚家場。綿亘幾三四百里。高岡平衍可用騎兵爲之長驅。今東關瓜州俱已建堡。賊若於廖角嘴呂四場。及新插港掘港以進。或不能襲取楊州。必轉之東北。而窺淮安

〔通州〕支那北京の東方に當り、金の天德三年始めて通州と稱す、大通河に臨みて漕運通濟の便あるによると云ふ。

〔新河〕直隷省冀州府新河縣也。

〔北海〕渤海を云ふ黄海の一部にして直隷海峡によりて黄海に通ず、南に山東半島あり、北に遼東半島ありて海口を扼す、支那沿岸中最も深き灣入にして、中に遼東、直隷の二支灣あり。

安東。以據劉庄廟灣。我軍苟能彼此夾攻逼之。使至湯潮岸以西。北騎兵衝其鋒。而以火器殲之。各路兵隨後擊之。賊可一戰成擒矣。故我軍獲利。賊之至此者有以也。新挿港東臨北海。素有鹽徒。數百艘聚泊崇明。北徒之寇。欲翼鹽協徒而不果。當事者欲置官于此。以提督鹽徒。使不爲賊用。而爲我用。亦一見也。夫寇興以來。燒刼屠戮之慘。吳浙淮楊所同。若獲利之多。則未有如淮楊者。而賊所必不能舍者在是矣。況其地運道陵寢在焉。所係尤重乎。夫江北之地。除安豐等三十六場俱在海內。不爲要害。其要害之處乃通州也。狼山也。楊樹港利和鎭也。餘東餘西等場也。廖角嘴呂四場也。掘港新挿港也。廟灣劉庄金沙場姚家蕩也。今皆已建城堡設戍守。非若往日之無備矣。其要害之尤者曰新河。出入最便。逼近楊州也。曰北海。所從以通新挿港。且有鹽徒。聚艘於此者也。曰廟灣。以其爲巨鎭。而可通大海口也。故當事者欲以把總三人。住新港。一住北海。一住廟灣。一爲陸路遊擊。住劄海安鎭。若海安在如皐泰州之間。東可以控扼狼山通州海門之入。而西可以捍衛楊州也。按。往者倭寇熾亂江北。常被禍矣。未有如江南之慘。且旋奏。大捷者何哉。蓋倭寇無他長。所恃不過一刀。縱有倭弓銳金。亦無幾何。惟其深入則專。必死則鬪。且性狡獪善於設伏。故常以寡擊衆。江南地多溝洫。騎不得長驅。步不得用衆。往々爲其所陷。江北則地多平原。人便弓馬。誠以鐵騎强弩。風馳電驅。未有不如駭鯨之決細網者。劉顯淮楊之捷是也。若在東南非節制之兵。兼火器長技。未易以較雌雄矣。故大江以南陸兵。雖不可少。而禦之於海爲要。大江以北舟師雖不可廢。而禦之於陸亦易。不惟地利所宜。誠以南人使船如馬。北人乘馬如船。正當以長擊短。而不以短擊長也。

〔一名顆〕首級一箇の意也、顆は、說文に「小頭也」とあり。

〔萬曆六年〕萬曆は明朝十三代神宗の時の年號也、四十七年にして、泰昌と改む、其の六年は、皇紀二千二百三十八年百六代正親町天皇の天正六年にして、織田信長の頃也。

〔大敗衂〕大いに戰に敗るゝを云ふ、衂は、廣韻に「挫也」とありて、勢を挫く也、又、五代史、符存審傳に「未嘗敗衂」とあり。

又第十二卷賞罰一

鄧鍾曰。平倭事例。內稱遇聚至五百名以上。大勢倭賊我兵數僅相當。有能衝鋒陷陣。一鼓蕩平或以寡擊衆。力戰成功者。列爲一等。內擒斬有名眞倭賊首一名顆者。陞實授三級。不願陞者賞銀一百五十兩。如賊數不多。易於取勝者。列爲二等。獲有名眞倭賊首一名顆者。陞實授一級。不願陞者賞銀五十兩。俱照舊外設。自萬曆六年九月。以後擒斬倭功不拘。外洋登岸賊至五百名之外。船至十隻以上。爲一等。所獲眞倭從賊一名顆者。陞署職一級。不願陞者賞銀五十兩。獲漢人脅賊三名顆者。陞署職一級。不願陞者賞銀二十五兩。賊至三百名之外。船至五隻以上。爲二等。所獲眞倭從賊三名顆者。陞署職一級。不願陞者賞銀二十五兩。如不及數一名顆者。賞銀二十兩。一名顆者賞銀十五兩。獲漢人脅從賊三名顆者。賞銀二十兩。一名顆者賞銀十五兩。一名顆者賞銀十兩。賊不過數十人。船不過一二隻。及敗後散遁零星擒斬首。獲有名眞倭賊首一名顆者賞銀二十五兩。不願賞者。陞署職一級。獲眞倭從賊一名顆者賞銀十兩。獲漢人脅從賊一名顆者賞銀五兩。此外軍中尚有衝鋒賞格。只要衝殺賊徒敗走。仍直前趕殺。不拘斬級。以賊大敗衂爲首功。俱即時照格陞賞。不容斬各。至若賊犯信地。官兵逡巡不進。致賊深入。或颺去者。或能工線手。故意不直射賊船者。或貪取賊人遺棄財物。貫物縱賊不追者。或巡海踪虜。致賊登岸焚掠者。或賊登陸。官兵失于堵截。臨陣退縮者。俱即時處以軍法。近奉兵部題奉。欽依比照禦虜事例。如有容令一船泊岸。一倭登陸者。部坐以失機之罪。有能堅守信地。一倭不犯者。即爲首功。雖與前人所論不同。似可酌議而行

也。又按、斬首賜爵始於秦。然仕泮獻馘已見於詩、則上功首虜所從來遠矣。我朝軍功。凡非臨陣親斬者不得世襲、而領兵官。自守把參遊。以上皆不得上親斬功。豈以爲將者責在旗鼓、而不以斬馘爲務哉。抑以其功易於虛冒。而不錄耶。然爲將亦有摧鋒陷陣身先士卒者。又焉可盡誣其皆虛冒也。惟領兵官。無親斬功、則有身爲大將。而其子孫僅襲一千百夫長。至其則役走卒因人成事。往々得襲萬戶者。豈非小功反錄、而大功不賞哉。如蒙題議以後領兵官不拘總副。參遊守把。如果親身督戰。勝一陣者。得陞實戰一級。因其賊之多寡。功之難易以爲等差。亦激勸戎行之一机也。或曰。如此不幾於陞賞太濫乎。曰不然。夫一陣而斬倭虜一百。則陞賞百級矣。斬倭虜一千。則陞賞千級矣。彼百與千者不吝賞、而獨吝於領兵官之一二級。是輕千金而重豆羹簞食也。可乎哉。

又第二十一　四夷一

四夷總圖叙

設十三館通事、譯其語音。禮部轄之。設四夷館譯其文字。太常寺卿提督亦禮部轄之。十三館、曰朝鮮、琉球。日本。暹邏、安南。滿剌。百夷。韃靼。女直。委兀兒。西番。囘囘。占城。

又第二十二東南夷一卷

今按。右登壇必究日本國圖中。日本愛岩山。靈感地藏王之文。他書所無。故載全圖。岩當作宕。愛宕山在丹波國。東南多屬山城國。爲王城西山。有五岳。曰朝日峯。曰大鷲峯。曰高雄山。曰龍上山。曰賀（カ）魔藏（マクラ）山。秀出於嵯峨萬仞之上。淸瀧流博。檜原綠長。實靈區也。三代實錄作阿當護（アタゴ）。延喜式作阿多

〔滿剌〕馬來にて、今のマレー半島の地を云へり。

〔愛宕山〕山城國葛野郡の西、丹波の國境に聳ゆ、京都市の西北に位す、高さ二千八百尺也

〔高尾山〕山城國葛野郡愛宕山五岳の一にして、東方にあり、山に楓樹多く、栂尾、槇尾と共に京の三尾山と稱し、京都紅葉名所の隨一と稱せらる、

〔賀魔藏山〕今鎌倉山と書す、愛宕山峰の南に位し、清瀧川其の山麓を流る。

日本國圖

正東　東南方無影無圖

三島
竹島
對馬島
合島
五島
平戸津
岩見州六郡
筑前州十五郡
長門州六郡
周防州六郡
男島
肥前州
豊前州八郡
衣島
長岐
筑後州
江津
天草山
赤間関
淡路州二郡
種子島
土佐州六郡
七島

古。或曰愛太子（アタゴ）。皆一山同音也。凡通用愛宕字。神護寺鐘銘詞曰。愛宕之山是也。山有明神。延喜式神名帳曰。丹波國桑田郡阿多古神社。麗氣記曰。天津彥々火瓊々杵尊也。聖德太子曰。高嶽之上龍爲窟宅。常臨擁護。卽指此山也。又當山。延喜式外神多。如三代實錄之雷神。破无神。古事談之竹明神等是也。後世佛者以愛宕神者地藏菩薩之化身。亦猶義楚法師六帖。吉野神爲彌勒之化身矣。學世尊信。甚有靈感。中華傳聞之曰。靈感地藏王。或問曰。台記藤賴長云。愛宕護山有天公。飛行。所謂天公者何物乎。答曰。嘗見朝鮮鄭道傳謝魑魅文序云。會津多大山茂林。僻近於海。曠无人居。嵐蒸瘴泄。易陰以雨。其山海陰虛之氣。草木土石之精。薰染融結。化而爲魑魅魍魎。非人。非鬼。非幽非明。亦一物也。日本天狗殆庶幾于是。與中華書之木客山𤢖。似而非也。深山窮谷往々有之。其形不可見。或現大身。則長人如僧。高鼻勾爪。復現小々。羽化雲騰。若變作異形。猶人。東海一漚集載。化松蕈欲懺明惠上人之類是。強字之曰天狗。蓋象惡星也。台記作天公。明月記作天狗。

或又問曰。保元亂前流言。藤原賴長釘愛宕護山天公像目。詛近衛天皇。故天皇目盲早世。鳥羽天皇及妃藤原得子聞之。甚恨賴長。賴長矢之自明。事詳見台記。釘天公目。近衛天皇崩。果有此理否。答曰。鳥羽及妃。無道輕信巫蠱。故疑賴長。鳥羽淫色妄爲廢立。三綱滅盡。母愛者子抱。故得子所生近衛立。崇德廢。於是天人不安。屢呈妖孽。然。鳥羽少無悛矣。近衛早崩者。宗廟社稷不助之也。非呪詛之所爲也。鳥羽終身不省。故陵土不乾。天下大亂。王室遂衰。昔三代之滅無不由女寵。可不愼乎。

〔阿多古神社〕今山城國葛野郡愛宕山朝日嶽に鎭座、火の神火之夜藝速男神を祭る、もと丹波國桑田郡國分村に鎭座せしを、光仁天皇の天應中今の地に遷すと云ふ。清和天皇貞觀六年五月從五位下に、十四年十一月從五上に、陽成天皇元慶三年閏十月從四位下に叙せられ、延喜の制官社に列す、祭日四月中亥日を以つてす。

〔古事談〕上古より平安朝の中世期に至る、幾多の傳說を記したるもの、第六篇に分る、作者詳ならず。

〔台記〕十四册、藤原賴長の日記也、日次記又は曆記とも云ふ。

登壇必究第二十二卷有倭國事略寄語雜類島名倭船倭奴寇術倭刀。其說與日本寄語圖書編武備志同。已列于上。故略之。

又第二十五卷江防一

嘉靖壬子癸丑間、適倭夷犯海上。凡蘇松淮楊皆爲寇穴。操江臣南北奔命爲疲、勢難周遍。於是朝議加南撫臣督提軍務、與操江臣畫地而守。圌山以下屬江南。撫臣三江會口以下屬江北。撫臣操江臣專督爪鎭以上江防。又用言者召福浙兵。增募江靖兩縣者民。凡七千有奇、增軍餉五萬餘金。事定已十年餘矣。

今按、壬子嘉靖三十一年。當日本後奈良天皇天文二十一年。癸丑嘉靖三十二年當天文二十二年。

又第二十五卷水戰一

輯水戰說

王鳴鶴曰、舟師始于盟津之會。後世遂用之。以習水戰。故吳楚以舟楫爲輿馬、江海爲康衢。斯言非謬也。漢晉以還、如樓舡下瀨、艨衝連舫之類、代各不同。然皆足以取勝而鞭撻四夷。此東南之形勢、必宜于水戰者固已然矣。方今所最患者、島夷竊發蹂躪外藩。敢於犯皇威而抗封命。沿海之民日夜東顧、不遑寢處而防禦之。乃是篇所載、戰艦戰具戰法圖、分縷悉靡不畢備。司寄東南者、固宜著龜眡之、似足以決勝波濤之上矣。但慮中國之奸民或迫于飢寒。或毆于刑法。往々逸入倭奴爲逋逃藪、而且爲之內主焉。凡我制馭之術、我未及行。而彼伺之甚密。尋反從而斁我。是中國之技且與

〔蘇松淮楊〕並に江蘇省の中にて、蘇州府、松江府、淮安府、楊州府の略也。

〔江南〕支那江蘇、安徽兩省を云ふ、揚子江の流域にして地味最も沃饒にて、人煙稠密也、都府の殷賑なるもの亦尤も此地方に多し。

〔三江〕何れも江蘇省太湖の委流にして、松江、婁江、東江の三江より成る。

〔江靖兩縣〕江は江陰縣にて、江蘇省常州府にあり、靖は、靖江縣にて、江陰縣と同じく、常州府にあり。

島夷共之。烏在其能決勝哉。法曰。善用兵者修道而保法。故能爲勝敗之政。此今日所宜議者。彼鞏金輪粟。徵兵萬里之外。救藩園以屏中華固善計也。恐倭近我遠〇而難繼。脫巾易起。其憂不獨在倭夷也。備中國以制東夷。猶爲勝算。自有廟堂主之。么麼武臣何敢置喙。

備倭船

國朝沿海衞所每千戶所設備倭船十隻。每一百戶備倭船一隻。每一衞五所共船五十隻。每船旗軍一百名。春夏出哨。秋冬回守。月支行糧四斗。船有斷折。有司補造。損者軍自修理。

又第三十九卷奏疏三

報三相公幷石司馬書

某向來入朝鮮時。其山川形勝尙未眞知。故未敢浪陳。玆身歷其境。兼詳考圖帖細詢譯者。始知本國幅員。東西二千里。南北四千里。蓋地從正北長白山發脈。故北最長。釜山鎭偏在東南隅。與對馬島正面。故日本兵馬易於入寇朝鮮。若全羅一道直吐正南。與中國蘇常相對。如日本欲犯登萊天津。必須乘東北風灣轉此嘴。又候東南風然後能達。大海巨洋波濤險惡。安能如意。若不至朝鮮登萊天津。實未易犯。故天護神京。亘此一國於東西南北之間。使日本兇夷不得逞志中華者。天險限之也。關白雄奸熟察此。故舍浙直閩廣。竟圖朝鮮。蓋朝鮮與蘇保山東相拒。止是西南一海。並無旱路間隔其中。由南而北。自東及西。若尙州之洛東。王京之漢水。開城之臨津。安州之清川。定州之大定。平壤之大同。義州之鴨綠。諸江俱係大川。俱通西北海面。陸行則有遼左一路。以抵山海。而水行則

（長白山）朝鮮と滿州との境上を走る大山脈にして、八千七百尺の高きに達し、鴨綠江、圖們江の如き大河皆源を之れに發す、積雪九月より翌年五月に至るを以て、積鮮にては白山又は白頭山と稱し、支那にては、太白山又は白山として古來有名也。

（蘇常）江蘇省の蘇州府と常州府とを云へり。

（登萊天津）山東省の登州府と萊州府及び直隷省の天津府を云へい。

（洛東）朝鮮慶尙北道尙州郡にあり。

（漢水）京畿道龍山に注ぐ、一に漢江と云ふ。

〔遼蘇〕遼東と蘇州府を云へり。

〔閩廣〕福建省と、廣東省地方を云へり。

〔善山〕朝鮮慶尙北道尙州府にあり、府邑尙州を去る南六里、京城より四十九里、東洛東江に臨み、西秋風嶺の嶮を控ゆ、附近灌漑の利多く、農產物多し、京城街道に沿ふを以て、古來名あり。

〔碧蹄〕朝鮮京畿道高陽郡にあり、古來碧蹄館と稱して有名也。

有七路。可達天津山東等處。若得順風、二五日卽道無阻礙者。故此奴一得朝鮮、據爲巢穴、分投入犯。特易易爾。吾禦於陸而水路難支、吾禦於水而陸路不免。三境動搖、京輔振慴、其患有不可勝言者。故關白之圖朝鮮、實所以圖中國、而我兵之救朝鮮、實所以保中國。非若救鄰國者比也。各降倭報稱、初意欲建都朝鮮、陣脾睨遼薊、以三十萬犯浙直、三十萬犯閩廣、以窺中原。似非虛語也。幸伏社稷威靈、廟堂有畫、連戰三捷、今且應出王京。事亦覺有頭緒。但倭奴擁衆、尙駐尙州善山等處、未卽東往。見今殺死朝鮮軍民數千。懸首旗竿者千餘、且列寨無等、聯絡數十里不絕。虎牢木柵石城土堡、極其堅固、一路險隘處處埋伏哨丁。宋好漢幾爲所獲、某雖屢激提督進兵、而將兵懈惰。必不肯前。軍中洶洶俱謂、我雖百死一生、以三四萬兵馬、卻數十萬強倭、不數月而朝鮮土地幾已盡復。晝夜身處冰雪。鹽菜毫無入口、功勞非細、通吉。官返謂、報捷悉虛、缺賞、又云、先給二十兩、北寧夏以爲不如。經略題叙又不肯覆。今乃天氣炎蒸、疾病交作、又欲遠追。且倭勢甚衆、營壘堅完、鳥銃利害。道路崎嶇、若有蹉跌、將何以處職、與提督雖百般催儹、多方策勵、然恐兵心有變、不敢過責。兵士多有疾故者、後日人不察。此尙歸之碧蹄之戰、又可深慮。任事者畏首畏尾、如此何以集事。如幸而倭眞恐懼、漸次逸歸。當爲朝鮮悉心善後、務要萬全、縱令再來、必不使如去年竟達平壤、若履無人之境也。其要害分布、亦當盡圖貼說、與四鎭回說、並進退保朝鮮、若保中國、必不敢草率完事。設關白果惡。行長輩擅出王京、益兵添餉。諸倭不敢遠歸。我兵雖於卽返。必須尊臺王張卽發。陳璘沈茂兵馬前來協助。再假勑文、慰勞將士、紋賞須給全數。庶皇恩播而軍心勵、兵勢張而倭服落。完績或可

〔荒唐之言〕廣大にして限り無く取り留めなきに云ふ、莊子天下篇に「以謬悠之說、荒唐之言、無端崖之辭、時恣縱而不儻」とあり。

收也。事關重大。不敢不罄其愚。此乃萬分眞的。非敢誣者。乞賜密訪其情自見。惟台慈鑒原。社稷幸甚。

○日本傳之作。自國史記乎諸子。上始周室。下盡明年。凡爲上中下。合十五卷。志中華三韓之稱我事蹟。諸書甚博。以待他日續添。我通中華。雖有黃帝（出雲笈七籤）及唐堯（出山海經）之時通說。荒唐之言不可知也。惟周代通之說出論衡。爲有理致源委。凡今按中不盡言者。亦有之云爾。

異稱日本傳 卷中八 終

（康富記）二十卷、中原康富著、應永八年辛巳五月より康永元年乙亥十二月に至る日記也、朝野の大事を記せり。

（新羅始祖）新羅はもと辰韓の地也、始め秦漢朝鮮の遺民、東海濱の山谷閼川楊山、突山高墟、觜山珍支、茂山大樹、金山加利、明活山高耶に分居す、是を辰韓の六部とす、高墟の村長蘇伐公、一人の嬰兒を養ふ、稍々長じて岐嶷也、六部の人立てゝ君となす、是を朴赫居世と云ふ、我が崇神天皇の四十一年に當れり、卽ち新羅の始祖とは之れを指したる也。

異稱日本傳　卷下一

東國通鑑卷之一

紬誠明亮佐理功臣崇政大夫達城君兼弘文館大提學藝文館大提學知經筵春秋館成均館事　臣徐居誠等撰修

三國紀

新羅　高勾麗　百濟

新羅始祖八年（漢甘露四年）倭來寇邊。聞王有神德乃還。

今按（赫居世）漢甘露四年。當我崇神天皇四十八年。崇神天皇無征新羅事。雖然日本書紀曰。崇神天皇六十五年秋七月。任那國遣蘇那曷叱知。令朝貢也。任那者去筑紫國二千餘里。北阻海以在鷄林之西南。垂仁天皇二年。任那人蘇那曷叱智。請之欲歸于國。蓋先皇（指崇神天皇）之世。來朝未還歟。故敦賞蘇那曷叱智。仍賫赤絹一百疋。賜任那王。然新羅人遮之於道而奪焉。其二國之怨。始起於是時也。觀此則崇神天皇。雖不征新羅。新羅得罪于我朝。起於此際矣。終至神功皇后得征之。蓋爲任那征之也。

三韓沿革。昔上世我素盞烏尊。與其子五十猛神。入於斯羅（シラキ）國。而不欲居之。堯之時檀君。周武王時箕子。主之。國號朝鮮。久之大亂。分崩至七十八。所謂三韓者。其強者也。並列疆界。弱吐強呑。戰爭不息。當斯時。任那來貢。我厚賜還之。新羅遮道奪之。自招仇讎之禍。我數代先王不征之。神功皇后瓌聖聰明。周行天下。劬勞羣庶。愛育萬民。奉天神地祇命。一戎衣問新羅罪。已而亦哀新羅所窮。全將戮之首。授要害之地。高麗百濟觀感叩頭。永稱西藩。不絶朝貢。諸韓恐後之。無不臣服。於是韓地置日本府。任宰以治之。新羅當親戴我。與天地不遂。而時逆天背盟。違我恩義。數侵任那。至欽明天皇二十三年。新羅遂滅任那。自神功皇后。以來五百九十三年。任那之存。如此永久也。此非神功皇后之大神餘烈乎。其後新羅滅百濟。新羅亦降于高麗。三韓失鼎峙之勢。而高麗至宋不忘故舊。朝聘無絶。

漢鴻嘉元年。新羅始祖三年。八年高句麗始祖(東明王)十八年。（辛丑）春二月。新羅遣瓠公聘於馬韓。馬韓王讓曰。辰卞二韓爲我屬國。比年不輸職貢。事大之禮。其若是乎。對曰。我國自二聖肇興。人事修。天時和。倉庾充實。人民敬讓。辰韓。卞韓。樂浪。倭人無不畏懷。而吾王謙虚。遣下臣修聘。可謂過於禮矣。而大王反怒。刼之以兵何耶焉。馬韓王愈怒欲殺之。左右諫止。乃聽還。先是中國之人苦秦亂。東來馬韓者頗多。與辰韓雜居。至是寢盛。故馬韓忌之。瓠公本倭人。初以瓠渡海而來。故號焉。

今按。鴻嘉元年。當日本垂仁天皇十年。瓠公事無所見。蓋瓠公以瓠渡海者非也。日本新羅之間。大洋遙隔。風濤蹴天。豈一瓠之所抗乎。乃傳會神功皇后征伐故事也。舉征伐故事如左。

〔五十猛神〕神代紀に「素盞鳴尊帥其子五十猛神降到於新羅國居曾尸茂梨之處、乃興言曰、此地吾不欲居、遂以埴土作舟、乘之東渡」とあり。

〔檀君〕東寰錄に「檀君、名王儉、唐堯、戊辰、降于太白山檀木下、國人立爲君、國號朝鮮、都平壤」とあり。

〔箕子〕太平御覽に「武王勝殷、繼公子祿父、釋箕子之囚、箕子不忍商之亡、走之朝鮮、武王聞之、因以朝鮮封之、箕子既受周之封、不得無臣禮、故於十二祀來朝」とあり。

古事記中卷曰、底筒男。中筒男。上筒男三神。（住吉大神也）教息長帶比賣命（日本紀作氣長足姫尊神功皇后也）曰、欲求新羅國、則奉幣帛於天神地祇。及山神河海之神。我魂坐于船上、而眞木灰納瓠、亦多作箸及比羅傳。散浮大海、以可度。故如神教、整軍雙船。度幸。時海原魚不問大小。悉負御船而渡。爾乃順風大起。御船從浪。從御船之波瀾。遂揚新羅國。旣到國中。於是新羅國王畏奏曰。自今以後隨天皇命。爲御馬飼。每年雙船不乾船腹。不乾柂檝。共與天地無退奉仕。乃以御杖。衝立新羅王之門。以住吉大神荒魂。爲國守神。祭而後還幸。

漢王莽初始元年。新羅南解王五年。高勾麗瑠璃王二十七年、百濟始祖（溫祚王）二十六年。（戊辰）春正月。新羅王以長女、妻昔脫解。脫解本多婆那國人。國在倭國東北一千里。

天鳳元年、新羅南解王十一年。高勾麗瑠璃王三十三年。百濟始祖三十二年。（甲戌）倭使新羅邊郡。新羅發六部勁兵千人以禦之。樂浪乘虛。攻金城急。夜有流星墜於賊營。賊懼而退。屯閼井上。造石堆二十而去。六部兵追者至閼川。見石堆知賊衆乃止。

今按、天鳳元年。當日本垂仁天皇四十三年。

卷之二

漢永平十六年。新羅脫解王（三世）十七年。高勾麗太祖王二十一年百濟婁多王四十六年。（癸酉）夏五月。倭使新羅木出島。王遣角干羽鳥禦之不克。死之。

今按、永平十六年、當日本景行天皇三年。

漢永壽三年。新羅阿達羅王四年。高勾麗次太王十二年。百濟蓋婁王三十年。新羅置迎日縣。初東海濱有人。夫曰迎烏。妻曰細烏。一日迎烏採

〔底筒男云々〕神代に天照大神と、素盞鳴尊と、天の安河原に誓約し給ふ時に生れませし三神也。

〔比羅傳〕柏の葉を刺し綴りて、皿の如く作りたるもの也。

〔荒魂〕和魂に對する語にて、荒び給ふ御魂の義也「あらみたま」と訓む、神功紀に「荒魂、此云阿邏瀰多摩」と注せり。

〔樂浪〕古昔朝鮮の平安北道及同南道の古稱也。

〔金城〕朝鮮慶尙北道の慶州の古稱也

〔意富伽羅國〕垂仁紀に見ゆ。隋書新羅傳に「加羅國」其他「大駕洛」「伽耶」等に作る、太古辨韓の故地にして、今の朝鮮慶尙道地方に當れり。

〔比賣語曾社神〕延喜式神名帳に「攝津國東生郡比賣許曾神社、名神大月次相嘗新嘗」とありて、同臨時祭式に「比賣許曾神社一坐、亦號下照比賣」とあり。

〔出石大社〕出石神社也、今但馬國出石郡神美村宮内にあり、當國の一の宮にて、官幣大社に列せり。

〔儺縣〕今筑前國那珂郡の古稱也。

藻海濱。忽漂至日本國小島為王。細烏尋其夫。又漂至其國。立為妃。時以迎烏細烏為日月之精。至是置縣焉。

今按、迎烏細烏事。證之我國史。殆有近之事。曰意富伽羅國王之子。都怒我阿羅斯等。得神石化為美麗童女。後童女向東方去。阿羅斯等乃尋追求。浮海入日本國。仕崇神天皇。所求童女者。為比賣語曾社神。此事詳古事記。童女生出大奇。不可以夏蟲論也。又垂仁天皇三年。新羅王子天日槍來歸。蓋亦日精耶。可觀其名以知之。死為但馬國出石大社。廟食於千古。誠非凡人也。愚亦謂、我朝人呼外國。稱曰伽羅者。蓋外國人始來者。都怒我阿羅斯等也。乃意富伽羅國王之子也。爾來以外國。總稱伽羅。不獨稱中國也。意富伽羅國。東國通鑑作大駕洛國。始祖。名金首露。後新羅滅其國。號金官郡。

卷之三

魏青龍元年。新羅助賁王四年。高句麗東川王七年。百濟仇首王二十年。（癸丑）夏五月。倭寇新羅東邊。伊飡于老戰于沙道。乘風縱火。焚戰艦。賊赴水死盡。

今按。魏青龍元年。當日本神功皇后三十三年。此年無與新羅戰事。先是神功皇后元年。征新羅。即後漢獻帝建安六年也。皇后舉兵。三韓臣服。神武靈異非人力之所及也。沛然誰能禦之。過化存神。凜凜于千古。不可不敬矣。據國史記大槩如左。日本紀。仲哀天皇紀曰。八年正月己亥到儺縣。因以居橿日宮。九月己卯。詔群臣以議討熊襲。時有神。託皇后而誨曰。天皇何憂熊襲之不服。是膂

之空國也。豈足擧兵伐乎。愈茲國而有寶國。譬如美女之睩。有向津國。眼炎之金銀彩色。多在其國。是謂𣑥衾新羅國焉。若能祭吾者。則曾不血刃。其國必自服矣。復熊襲爲服。其祭之以天皇之御船、及穴門直踐立所獻之水田。名大田。是等物爲幣也。天皇聞神言。有疑之情。時神亦託皇后曰。汝王遂不信、則汝不得其國。唯今皇后始有胎。其子有獲焉。然天皇猶不信。強擊熊襲。不得勝而還。九年春二月丁未。天皇忽有痛身。而明日崩。時年五十二。即知不用神言而早崩。一云、天皇親伐熊襲。中賊矢而崩也。時皇后傷天皇不從神教而早崩。以爲。知所祟之神。欲求財寶國。是以命群臣及百寮。以解罪改過。更造齋宮於小山田邑。三月壬申朔、皇后選吉日入齋宮。親爲神主。則命武內宿禰令撫琴。喚中臣烏賊津使主爲審神者。因以千繒高繒。置琴頭尾。而請曰。先日教天皇者誰神也。願欲知其名。逮于七日七夜。乃答曰。神風伊勢國之百傳度逢縣之拆鈴五十鈴宮所居神。名撞賢木嚴之御魂天疎向津媛命。亦問之、除是神復有神乎。答曰。幡荻穗出吾也於尾田吾田節之淡郡所居神之有也。問亦有耶。答曰。於天事代於虛事代玉籤入彥嚴之事代神有之也。問亦有耶。答曰。有無之不知焉。於是審神者曰。今不答而更後有言乎。則對曰。於日向國橘小門之水底所居而水葉稚之出居神。名表筒男。中筒男。底筒男神之有也。問亦有耶。答曰。有無之不知焉。遂不言且有神矣。時得神語。隨教而祭。然後遣吉備臣祖鴨別。令擊熊襲國。未經浹辰而自服焉。荷持田村有羽白熊鷲者。其爲人強健。亦身有翼。能飛以高翔。是以不從皇命。每略盜人民。戊子皇后。欲擊熊鷲而自橿日宮遷于松峽宮。時飄風忽起。御笠墮風。故時人號其處曰御笠也。辛卯至層增岐野。即擧兵擊羽白熊鷲而滅之。謂

〔向津國〕通釋に、「向津國とは、海の遠に遙に見さくる國を云ふ、繼體紀の歌に武智左履樓（ムカサクル）以祇能和駄唎（イキノワタリ）ともあり」とあり。

〔𣑥衾新羅國〕單に新羅國と云ふに同じ、𣑥衾は「白」（シロ）の枕詞也。

〔穴門直踐立〕通釋に「長門國豐浦郡住吉荒神社の神主となれり」とあり。

〔撞賢木云々〕天照大神の荒魂としての御名也、今官幣大社廣田神社に祭れり、攝津國武庫郡廣田村にあり。

〔尾田吾田云々〕志摩國に答志（タフシ）英虞（アコ）の郡名ありたり、これなるべしと云ふ

〔山門縣〕和名抄に筑後國山門郡山門郷とある地これなり、今同國八女郡に併せらる。

〔火前國〕肥前國也

〔松浦縣〕和名抄に「肥前國松浦（萬豆良）郡」とし、古事記に「筑紫末羅縣」とあり、今の肥前國松浦郡也。

〔玉島里小河〕通釋に「貝原好古曰、松浦郡濱崎の驛より南方半里許にあり此川二派に流れ、玉島の下にて落合ひ、其の川を今も小川と云ふとぞ」とあり。

左右曰。取得熊鷲、我心則安、故號其處曰安也。丙申轉至山門縣、則誅土蜘蛛田油津媛。時田油津媛之兄夏羽、興軍而迎來、然聞其妹被誅而逃之、夏四月甲辰。北到火前國松浦縣。而進食於玉島里小河之側、於是皇后勾針爲鉤。取粒爲餌。抽取裳縷爲緡。登河中石上、而投鉤祈之曰。朕西欲求財國。若有成事者河魚飲鉤、因以擧竿乃獲細鱗魚。時皇后曰希見物也、（希見此云梅豆邏志）故時人號其處曰梅豆羅國。今謂松浦訛焉。是以其國女人。毎當四月上旬、以鉤投河中、捕年魚、於今不絶。唯男夫雖釣、以不能獲魚。既而皇后則識神教有驗。更祭祀神祇、躬欲西征。爰定神田而佃之、時引儺河水、欲潤神田、掘溝及于迹驚岡、大磐塞之不得穿溝。皇后召武内宿禰、捧劍鏡令禱祈神祇而求通溝、則當時雷電霹靂。蹴裂其磐令通水。故時人號其溝曰裂田溝也、皇后還詣橿日浦、解髮臨海曰。吾被神祇之教、頼皇祖之靈、浮渉滄海、躬欲西征。是以今頭滌海水、若有驗者髮自分爲兩、卽入海洗之。髮自分也、皇后便結分髮而爲髻、因以謂群臣曰。夫興師動衆國之大事。安危成敗必在於斯。今有所征伐、以事付群臣。若事不成者罪有於群臣。是甚傷焉、吾婦女之加以不肖、然暫假男貌強起雄略。上蒙神祇之靈、下藉群臣之助、振兵甲而度嶮浪。整艫舳以求財土、若事就則群臣共有功。事不就則吾獨有罪。既有此意、其共議之。群臣皆曰。皇后爲天下、計所以安宗廟社稷。且罪不及于臣下。頓首奉詔。秋九月己卯。令諸國集船舶練兵甲。時軍卒難集、皇后曰。必神心焉、則立大三輪社、以奉刀矛矣。軍衆自聚。於是使吾瓮海人烏摩呂出於西海、令察有國耶、還曰、國不見也。又遣磯鹿海人名草而令觀。數日還之曰。西北有山。帶雲橫絚。

蓋有國乎。爰卜吉日而臨發有日。時皇后親執斧鉞。令三軍曰。金鼓無節。旌旗錯亂。則士卒不整。貪財多欲。懷私內顧。必爲敵所虜。其敵少而勿輕。敵强而無屈。則奸暴勿聽。自服勿殺。遂戰勝者必有賞。背走者自有罪。既而神有誨曰。和魂服王身而守壽命。荒魂爲先鋒而導師船。卽得神教而拜禮之。因以依網吾彥男垂見爲祭神主。于時也。適當皇后之開胎。皇后則取石挿腰。而祈之曰。事竟還日産於茲土。其石今在于伊都縣道邊。既而則撝荒魂爲軍先鋒。請和魂爲王船鎭。冬十月辛丑。從和珥津發之。時飛廉起風。陽侯擧浪。海中大魚悉浮挾船。則大風順吹。帆船隨波不勞櫓楫便到新羅。時隨船潮浪遠逮國中。卽知天神地祇悉助歟。新羅王於是戰戰栗栗。厝身無所。則集諸人曰。新羅之建國以來。未嘗聞海水凌國。若天運盡國爲海乎。是言未訖之間。船師滿海。旌旗耀日。鼓吹起聲。山川悉振。新羅王遙望以爲。非常之兵將滅己國。讋焉失志。乃今醒之曰。吾聞東有神國。謂日本。亦有聖王。謂天皇。必其國之神兵也。豈可擧兵以距乎。卽素旆而自服。素組以面縛。封圖籍。降于王船之前。因以叩頭之曰。從今以後長與乾坤。伏爲飼部。其不乾船柁。而春秋獻馬梳及馬鞭。復不煩海遠。以每年貢男女之調。則重誓之曰。非東日更出西。且阿利那禮河之逆流。及河石昇爲星辰。而殊闕春秋之朝。怠廢梳鞭之貢。天神地祇共討焉。時或曰。欲誅新羅王。於是皇后曰。初承神教將授金銀之國。又號令三軍曰。勿殺自服。今既獲財國。亦人自降服殺之不祥。乃解其縛爲飼部。遂入其國中。封重寶府庫。收圖籍文書。卽以皇后所杖矛。樹於新羅王門。爲後葉之印。故其矛今猶樹于新羅王之門也。於是高麗百濟二國王。聞新羅收圖籍。降於日本

〔和魂〕荒魂に對して、にぎび給ふ御魂を云ふ。

〔依網吾彥云々〕依網吾彥は尸（カバネ）、男垂見は名也、依網吾彥姓は古事記に「開化天皇御子、建豐波豆羅和氣王者、依網之阿毘古等之祖也」とあり。

〔伊都縣〕筑前國怡土郡也、一に伊蘇伊覩又は伊斗に作れり。

〔阿利那禮河〕朝鮮三大河の一、鴨綠江を云ふ、朝鮮平安北道と、支那の遼東との境間を流る。

〔氣長宿禰王〕開化天皇第三皇子大彥命、其子山代大筒城眞稚王、眞稚王の子加爾米雷王、雷王の子卽ち氣長宿禰王也。

〔葛城高額姬〕古事記明宮（應神天皇）の段に「新羅國王之子天之日矛、泊多遲摩國、卽留其國、而娶多遲摩之股尾之女名前津見、生子多遲摩母呂須玖、此之子多遲摩斐泥、此之子多遲摩比那良岐、此之子多遲摩毛理、次多遲比多訶、云々、多遲摩比多訶娶其姪由良度美生子葛城高額比賣命、此者息長帶比賣命之御祖」とあり。

國。寄令何其軍勢。則而不可勝。自來于營外。叩頭而歎曰。從今以後永稱西蕃。不絕朝貢。故因以定內宮家。是所謂三韓也。皇后從新羅還之。十二月辛亥生譽田天皇（應神天皇也）於筑紫。故時人號其產處曰宇瀰也。云云。皇后御名氣長足姬尊稚日本根子彥太日日天皇（開化天皇也）之曾孫。氣長宿禰王之女也。母曰葛城高額姬。足仲彥天皇（仲哀天皇也）二年。立爲皇后。幼而聰明叡智。貌容壯麗。父王異焉。治天下六十九年。夏四月丁丑崩於稚櫻宮。時年一百歲。冬十月壬申葬狹城盾列陵。後奉謚神功皇后。

魏正始九年。新羅沾解王二年。高句麗東川王二十二年。中川王元年。百濟古爾王十五年。（乙丑）夏四月。倭寇新濟殺于老。初倭使葛耶古聘新羅。王使于老擯之。于老戲言。早晚以汝王爲鹽奴。王妃爲爨婢。倭王聞之。遣將軍于道朱君來侵。王出居于柚村。于老曰。今日之寇由臣言致之。臣請當之。遂抵倭軍曰。前日之言戲之耳。豈意興師至此耶。倭人執之。積薪燒殺之。乃去。後倭使來聘。于老之妻請於王私饗之。及其醉。使人執而焚之。倭怒來攻金城不克引去。　權近曰。金富軾以謂。于老爲時大臣掌軍國事。戰必克。不克亦不至敗。則其謀策必有過人者矣。然以一言之悖。致兩國交兵。以取身死。樞機之不可不愼如此。其妻能不忘讐。必欲報之。有足嘉矣。然徒欲報其私怨。敢殺來使。又致兩國之交兵。當時君臣不能禁於未然。亦不得辭其責矣。　臣等按。惟口出好興戎。不可不愼也。于老以一言之失。構釁小醜。召兵速禍。喪身辱國。固不足多責矣。抑羅之君臣所失亦多。倭奴遽興忿兵。直造國都。此正門庭之寇。利用禦之者。乃聽于老單騎赴敵。使賊得以快心焚炙。于老雖有失言之罪。國之勳戚大臣。係國家

重輕者也。委諸賊手而莫之救。其失一也。大臣見殺於敵。其爲國家之恥大矣。是宜興師問罪。勸巢覆穴。則庶可報于老之讎。雪前日之恥。伸大國之威矣。而當時未聞征討之擧。其失二也。如或度勢相時。力有所不逮。兵有所不加。則固當絕其聘問。拒其來使。不與之相好可也。今乃捨當討之罪。而猶待以交隣之禮。其失三也。倭使之來。于老之妻私饗醉殺。爲所天報復。在于老之妻。則有足多者矣。因一婦人而殺其信使。如國體何。其失四也。遇一機會而有此四失。將何以脩內治而禦外侮乎。自是兵連禍結。外寇益熾。未必不由於今日處置。失宜之致然也。

今按。正始六年。當日本神功皇后四十五年。日本書紀神功皇紀云。禽獲新羅王。詣于海邊。拔王臏筋。令匍匐石上。俄而斬之埋沙中。則留一人。爲新羅宰而還之。然後。新羅王妻不知埋夫屍之地。獨有誘宰之情。乃誂宰曰。汝當令識埋王屍之處。必篤報之。且吾爲汝妻。於是宰信誘言。密告埋屍之處。則王妻與國人共議之殺宰。更出王屍葬於他處。時取宰屍埋于王墓土底。以擧王櫬。委其上曰。尊卑次第固當如此。於是天皇聞之。重發震忿。大起軍衆。欲頓滅新羅。是以軍船滿海而詣之。是時新羅國人悉懼不知所如。則相集共議之。殺王妻以謝罪也。此與于老妻事相似。蓋一時事。記之有異而已。葛耶古。蓋葛城襲津彥之誤。日本書紀曰。應神天皇十四年。弓月君自百濟來歸。因以奏之曰。臣領己國之人夫。百二十縣而歸化。然因新羅人之拒。皆留加羅國。爰遣葛城襲津彥。而召弓月之人夫於加羅。然經三年。而襲津彥不來焉。十六年八月。遣平群木菟宿禰。的戶田宿禰於加羅。仍授精兵。詔之曰。襲津彥久之不還。必由新羅人拒而滯之。汝等急往之擊新

〔臏筋〕膝骨也、倭名抄に「臏字亦作髕、阿波太古、俗云阿波太、今案臏與膝臏名異實同膝骨也」とあり。

〔弓月君〕姓氏錄左京諸蕃、太秦公宿禰の條に「秦始皇帝十三世孫、孝武王之後世、男功滿王、足仲彥天皇八年來朝、男融通王一曰弓月君」とあり。

〔平群木菟宿禰〕武內宿禰の子也、仁德天皇と同日に生る、鷦鷯あり、其室に入る、木菟、帝の産室に入る、應神天皇以て祥兆となし、武內に命じて相易て名と爲さしむ、因て木菟と名付けしと云ふ

羅。披其道路。於是木菟宿禰等進精兵。莅于新羅之境。新羅王愕之服其罪。乃率弓月之人夫與襲津彦共來焉。

晉元康四年。新羅儒禮王十一年。高句麗烽上王三年百濟責稽王九年。（甲寅）夏倭人攻新羅長峰城。不克。

今按元康四年。當日本應神天皇二十五年。

晉元康五年。新羅儒禮王十二年。高句麗烽上王四年。百濟責稽王十年。（乙卯）春新羅王謂群臣曰。倭人屢犯我城邑。百姓不得安居。吾欲與百濟共擊之如何。弘權對曰。我軍不習水戰。冒險遠征。恐有不測之危。況百濟多詐。常有呑噬之心。恐難與同事。王曰善。

今按元康五年。當日本應神天皇二十六年。

晉永康元年。新羅基臨王三年。高句麗烽上王九年。美川王元年。百濟汾西王三年。（庚申）春正月。新羅與倭國交聘。

今按永康元年。當日本應神天皇三十一年。

晉永嘉六年。新羅訖解王三年。高句麗美川王十三年。百濟比流王九年。（壬申）三月。倭遣使請婚於新羅。以阿飡急利女送之。　臣等按。春秋之法。父母之讎。不共戴天。今王于老之子。于老嘗見殺於倭奴。則王之於倭奴有不共之讎。何羞忍恥。皆怨忘親。輕以許嫁何耶。魯莊之於齊襄有父之讎。方居苫塊。無時焉可通也。而當其身棄恐釋仇。或主婚。或盟。或會。或狩。大失子道。故春秋備書于策。詳加譏貶。以著忘親之罪。今王雖欲辭魯莊之罪得乎。嗚呼夫差。夷狄之君也。猶不忘越王之殺其父。出入之省。終必報復而後乃已。今王非特春秋罪人。抑亦夫差之罪人與。

〔儒禮王〕新羅王十四代也、十一代助賁の子にして、十三代金味鄒に次いで王たり。

〔烽上王〕高句麗王十四代也、十三代西川王藥盧の子也。

〔責稽王〕百濟王八代也、古爾王の子也。

〔基臨王〕新羅王十五代也、儒禮王の弟乞叔の子也。

〔美川王〕高句麗王十五代也、烽上王の弟咄固の子也。

〔汾西王〕百濟王九代也。

〔訖解王〕新羅王十六代也、十代奈解王の孫也。

〔比流王〕百濟王十代也、六代仇首王の子也。

今按。永嘉六年。當日本應神天皇四十三年。先是四十一年。天皇崩。年百十歲。其後三年之間。大鷦鷯尊。菟道稚郎子。兄弟讓天下。不即位。當斯時。誰請婚乎。東國通鑑說甚非也。

卷之四

晉建元二年新羅訖解王三十五年。高句麗故國原王十四年。百濟比流王四十一年。契王元年。甲辰春二月。倭遣使新羅請婚。不報。

今按。建元二年。當日本仁德天皇三十二年。我國史諸書無請婚事。

晉穆帝永和元年。新羅訖解王三十六年。乙巳高句麗故國原王十五年。百濟契王二年。二月。倭移書新羅絕交。

今按。永和元年。當日本仁德天皇三十三年。

晉永和二年。新羅訖解王三十七年。高句麗故國丙午原王十六年。百濟契王三年。近肖古王元年。九月。倭寇新羅風島。進圍金城急。王欲出兵擊之。伊伐飡康世曰。賊遠至。其鋒不可當。不若緩之待其師老。王然之。閉門不出。賊食盡。將退。命康世率勁騎追擊走之。

今按。永和二年。當日本仁德天皇三十四年。

晉哀帝興寧二年。新羅奈勿王九年。高句麗甲子故國原王三十四年。百濟近肖古王十九年。夏四月。倭大擧侵新羅。王懼造草偶人數千。持兵列吐含山下。伏勇士一千於斧峴東原。倭恃衆直進。伏發擊其不意。倭兵大敗走。追擊殺之幾盡。

今按。興寧二年。當日本仁德天皇五十二年。

晉大元十七年。新羅奈勿王三十七年。高句麗故國壤壬辰王九年廣開土王元年。百濟辰斯王八年。阿莘王元年。夏五月。倭人來圍新羅金城。五日不解。將士皆請出戰。王曰今賊棄舟深入在於死地。鋒不可當。閉門固守賊乃退。王先遣勇騎二百要其歸路。又遣步

〔故國原王〕高句麗王十六代也、美川王の子也。

〔穆帝〕晉朝五代の帝也、四代康帝の子也

〔契王〕百濟王十一代也、九代汾西王の子也。

〔近肖古王〕百濟王十二代也、比流王の子也、

〔哀帝〕晉朝六代、穆帝に次いで卽位す、穆帝の伯父武帝の子也。

〔奈勿王〕新羅王十七代也、末仇の子にして、訖解王の後を次ぐ。

〔故國壤王〕高句麗十八代にして、兄小獸林王邱夫に次いで王たり。

〔安帝〕晉朝十代也孝武帝の子也。〔廣開土王〕高句麗王十九代也、故國讓王の子也。〔阿莘王〕一に阿華王に作る、百濟王十六代也、十四代枕流王の子也。〔實聖王〕新羅王十八代也、十七代奈勿王に次ぎて王たり、金閼の裔孫也。〔微叱己知〕神功紀に「微叱己知波珍干岐」に作る、通釋には「東國通鑑」を考ふるに、新羅第十九王にあたる奈勿王の子、訥祇王が弟に、未斯欣（ミシコン）と云ふものありて、皇國に質たる由見えたるは、似たる事ながら別人なるべし」と云へり。

卒一千追於獨山。夾擊大敗之。殺獲甚多。

今按。太元十七年。當日本仁德天皇八十年。

晉安帝隆安元年。新羅奈勿王四十二年。高句麗廣開土王六年。百濟阿莘王六年。丁酉 夏五月。百濟與倭結好。遣太子腆支為質。 權近曰。世子君之儲副。其重係乎宗社。不可以輕出者也。古者諸侯朝於天子。有時而不可後。故老病者。使世子攝己事。以行急述職也。諸侯相朝本無時。未有使世子攝行之禮。故曹伯使世子射姑來朝於魯。君子譏之。以為取危亂之本也。朝且不可。況出質乎。漢唐以降外夷君長。或遣世子入侍。是以小事大。以夷慕華禮亦然矣。若百濟王以世子映出質于倭。則是輕其國本。而棄之非類之地也。苟能修德行政。強於自治。輯和其民人。慎固其封守。遣使修聘以通隣好。倭人雖暴何畏焉。乃不能然。以千里畏人。汲汲焉欲結其好。出質世嫡。虔若小夷之事中國。而不知恥焉。衰微甚矣。何以為國乎。及其薨也。二弟相戕。國遂危亂。微鮮忠獻謀。國人殺碟禮。則映之復國。必不可行矣。此可以為永世之戒矣。

今按。隆安元年。當日本仁德天皇八十五年。

晉元興元年。新羅奈勿王四十七年。實聖王元年。壬寅 高句麗廣開土王十一年。百濟阿莘王十一年。 三月。新羅遣未斯欣質于倭。王常恨奈勿王質己於高句麗。思欲釋憾於其子而遣之。

今按。元興元年。當日本履中天皇三年。未斯欣我國史所謂微叱己知（ミシコチ）歟。或作微叱許智。皆音之轉也。按日本書紀。神功皇后征新羅。新羅王降以微叱己知為質。仍賫金銀彩色。及綾羅縑絹。載于八十

艘船。令從官軍。此新羅王常以八十艘之調。貢于日本國之緣也。後九年。微質許智脫去。其事頗相似。而世之相後二百餘年。詳于下文。

晉義熙元年。新羅實聖王四年。高勾麗廣開土王十四年。百濟阿莘王十四年腆支王元年乙巳 秋九月。百濟王阿莘薨。太子腆支質倭國不還。太子仲弟訓解攝國政。以待太子之還。季弟碟禮殺訓解。自立爲王。腆支聞王訃。痛哭請歸。倭主以兵百人衛送腆支。既至國界。漢城人解忠。迎謂曰。大王棄世。碟禮殺兄自立。願太子早爲之計。腆支以倭兵自衞。依海島備之。國人殺碟禮。迎立爲王。

今按。義熙元年。當履中天皇六年。日本紀。阿莘作阿華。腆支作直支云。應神天皇十六年。是歲百濟阿華王薨。天皇召直支王謂之曰。汝返於國以嗣位。仍且賜東韓之地而遣之東韓者甘羅城。高難城。爾林城是也。觀此則腆支歸國履中以前也。

晉義熙四年。新羅實聖王七年。高勾麗廣開土王十七年。百濟腆支王四年。戊申 二月。新羅王聞倭人置營於對馬島。鍊兵儲糧。謀將襲之。欲先其未發擊破之。舒弗邯未斯品曰。臣聞兵凶器。戰危事。況涉巨浸以伐人。脫或失利。悔不可追。不若依險設關。來則禦之。使不得侵掠。伺其便出擊之。此所謂致人而不致於人。策之上也。王從之。

今按。義熙四年。當日本反正天皇三年。

晉義熙八年。新羅實聖王十一年。高勾麗廣開土王二十一年百濟腆支王八年壬子 高勾麗請質于新羅。王遣卜好爲質。卜好未斯欣之兄也。王既質未斯欣於倭。憾猶未釋。復以卜好質於高勾麗。

今按。義熙八年。當允恭天皇元年。

（腆支王）百濟王十七代也、阿莘王の子也。

（東韓之地云々）これより先き、應神紀八年の條に「百濟記云、阿花王立、无禮於貴國、故奪我忱彌多禮（トムタレ）及峴南（ケムナム）支侵、谷那（コクナ）東韓之地。是以遣王子直支于天朝、以脩先王之好也」とありて、東韓の一度奪れたりしを、此時又勅命ありて賜ひしもの也。

（高難城）通釋には今全羅道昌平縣の東方に、高山と云へる山名あり、もしくはこゝかと云へり。

（訥祇王）新羅王十九代也、十七代奈勿王の子にして、實聖王に次いで、王たり。

（長壽王）高句麗王二十代、廣開土王の子也。

（若九牛落一毛）最多數中の一小部分と云ふ事にて、物の數にも當らぬを云ふ也。司馬遷の報任安書に「假令僕伏法受誅、若九牛落一毛」とあり。

（婆娑王）新羅王五代也、三代儒理の子にして、昔脫解王に次いで王たり

晉義熙十四年。新羅訥祇王二年。高句麗長壽王六年。百濟腆支王十四年。戊午春。新羅遣歃良州干朴堤上如高句麗。堤上與王弟卜好自高句麗來。初王即位思見未斯欣卜好。求得辯士往說之。聞堤上勇而謀可以濟事。召問曰。吾二弟久質倭麗。何術以生還。堤上曰。臣聞。主憂臣辱。主辱臣死。論難易而後行。謂之不忠。圖死生而後動。謂之無勇。臣雖無狀。請行。遂聘高句麗語王曰。臣聞。交隣之道。誠信而已。若交質子。則不及五霸。誠末世之事也。今寡君之愛弟卜好在此。殆將十年。寡君以鶺鴒在原之意。永懷不已若大王惠然歸之。則若九牛落一毛。無所損也。而寡君之德大王可量也哉。高句麗王然之。許與堤上同歸。堤上婆娑王五世孫也。（ ）秋。新羅朴堤上如倭死之。王弟未斯欣自倭來。初卜好既還。王語堤上曰。我念二弟如左右臂。今只得一臂乃何。堤上曰。臣雖駑才。既以身許國。有何敢辭。然。高句麗大國。王亦賢。臣得以一言悟之。若於倭當以謀紿。不可以口舌諭。臣若得罪而逃者。及臣既行。請囚臣家屬。乃以死自誓不見妻子。抵栗浦已解纜。其妻追至大哭。堤上曰。我已將命自分必死。遂入倭國。若叛者。倭王疑之。先是百濟人。入倭國紿言。新羅與高句麗將謀伐倭。王遂遣兵邏戍。會高句麗侵新羅。并其邏卒殺之。倭王以百濟人言爲實。及聞新羅王囚未斯欣堤上家屬。謂堤上實叛者。於是出師將襲新羅。仍以堤上未斯欣爲鄉道。行至海島。諸將密議滅新羅。執堤上未斯欣妻孥以還。堤上知之。與未斯欣日乘舟若遊玩然。倭人不疑。堤上勸未斯欣潛還。未斯欣曰。豈忍捨君而獨行。堤上曰。若能救公之命。而慰大王之情。則足矣。安敢愛生。未斯欣泣辭道還。堤上獨寢舟中。晏起以竢未斯欣遠行。倭人覺知未斯欣之亡。縛堤上追之。會煙霧晦冥不及。倭王怒囚堤上。鞫之曰汝何竊遣未

斯欣耶。堤上曰。臣是雞林之臣。欲成吾君之志耳。倭主怒曰。今汝已爲我臣。而稱雞林之臣。則必具五刑。若稱倭國之臣者。必賞以重祿。堤上曰。寧爲雞林之犬㹠。不爲倭國之臣子。寧受雞林之箠楚。不受倭國之爵祿。倭主怒。剝堤上脚。刈蒹葭使趨其上。問曰。汝何國臣。曰。雞林之臣。又使立於熱鐵上。問。何國之臣。曰。雞林之臣也。倭主知不可屈。乃燒殺木島中。王聞之哀慟。贈堤上大阿飡。厚賜其家。使未斯欣娶其第二女。未斯欣之來。王命六部郊迎。及見握手相泣。置酒極娛。作憂息曲慰之。後堤上妻率三女上鵄述嶺。望倭國痛哭而死。仍爲鵄述神母。今有祠。　臣等按。士生天地間。所甚重者身也。又有重於身者。曰忠義志節而已。蓋先忠義而後其身。重志節而輕其身。惟天下烈大夫能之。今於朴堤上見之。堤上良州一老子耳。王未嘗畀位重祿。圖議國政。堤上亦未有食君之粟。任君之事。則無死君之義也。王聞人之薦。而擧之。遽屬大事。而使强鄰。其爲計危且殆矣。堤上聞命忠憤慷慨之心。自激於中。當西使高句麗也。出萬死之力。掉三寸之舌。從容立談之間。麗主感悟乃還質子。功不細矣。及東使日邦也。吾計得行質子既還。自分必死。寄命虎狼之口而不辭。其忠肝義膽。强毅果敢之氣。屹如山岳。孰得而撼搖哉。及倭主備諸酷刑。千剉萬苦。愈剛愈勁。曾不小屈。甘心就死。豈非所謂先忠義重志節天下烈大夫乎。嗚呼荊軻聶政以匹夫之勇。行盜賊之謀。然輕生忘死。自快於心。後世猶稱之。況忘身徇國。視死如歸。如堤上者。豈易得哉。

今按。義熙十四年。當日本反正天皇三年。未斯欣事見上。又日本書紀曰。應神天皇五年春三月己酉。新羅主遣汙禮斯伐（ウレシホ）毛麻利叱智（モマリシツ）富羅母智（フモ）等朝貢。仍有返先質微叱許智（ミシコチ）伐旱（ハチカム）之情。是以誂許智伐

〔雞林〕朝鮮の一名。もと新羅の名なりしが、此國朝鮮を統一したりしかば遂に朝鮮の總名となれり。舊唐書に、龍朔三年に新羅の文武王を雞林都督となし、新羅を雞林都督府になすとあるを初見とす。

〔掉三寸之舌〕雄辯を振ふに云ふ、史記淮陰侯傳に「蒯通謂韓信曰、酈生一士、伏軾掉三寸之舌、下齊七十餘城」とあり。

〔荊軻〕周末の志士也、「風蕭々兮易水寒、壯士一去兮不復還」の詩を以つて名高し。

(皇太后)神功皇后也、書紀神后皇后攝政元年の條に「群臣尊皇后曰皇太后」とあり。
(葛城襲津彥)古事記に葛城長江曾都毘古とあると同人也、武內宿禰の第六子にして、玉手臣、的臣、生江臣、阿藝那臣等の祖也
(微叱旱岐)「微叱」は名也「旱岐」は新羅の王族の號也。
(鉏海水門)今の慶尙金海附近の水門也。
(桑原)大和國葛上郡桑原也。
(佐糜)大和國葛上郡神戶(後ち佐味といふ)也。
(高宮)葛上郡にあり。
(忍海)近江、肥前等にあれど、爰は大和のを指せり。

旱。而給之曰。使者汙禮斯伐毛麻利叱智等告臣曰。我王以坐臣久不還。而悉沒妻子爲孥。冀暫還本土。知虛實而請焉。皇太后則聽之。因以副葛城襲津彥而遣之。共到對馬宿于鉏海水門。時新羅使者毛麻利叱智等。竊分船及水手。載微叱旱岐令逃於新羅。乃造蒭靈置微叱智之床。佯爲病者。告襲津彥曰。微叱智忽病之將死。襲津彥使人令看病。即知欺而捉新羅使者三人。納檻中以火焚而殺。乃詣新羅次于蹈鞴津。拔草羅城還之。是時俘人等。今桑原佐糜高宮忍海凡四邑漢人等之始祖也。日本書紀說。與通鑑朴堤上事大同小異。蓋世殊事異乎。今並書傳疑。

宋元嘉二十一年。新羅訥祇王二十八年。高句麗長壽王三十二年。百濟毗有王十八年。(甲申)夏四月。倭寇新羅。圍金城十日。糧盡乃歸。王欲出兵追之。左右曰。兵法窮寇勿追。王其舍之。不聽。率數千騎追至獨山東合戰。爲賊所敗。將士死者過半。王蒼黃棄馬登山。賊圍王數重。忽昏霧不辨咫尺。賊謂有陰助收兵乃退。

今按。元嘉二十一年當日本允恭天皇三十三年。

宋大明三年。新羅慈悲王二年。高句麗長壽王四十七年。百濟蓋鹵王五年。(己亥)夏五月。倭以兵船百餘艘襲新羅東邊。進圍月城。四面矢石如雨王固守。賊將退。出兵擊敗之。追至海口。賊溺死者過半。

今按。大明三年當日本雄略天皇三年。

宋大明七年。新羅慈悲王六年。高句麗長壽王五十一年。百濟蓋鹵王九年。(癸卯)春二月。倭侵新羅歃良城。不克而去。王命伐智德智。伏兵於歸路要擊大敗之。王以倭屢侵疆埸。築沿邊二城。

今按。大明七年當日本雄略天皇七年。

〔寶藏王〕高勾麗第二十八代の王にして、榮留王建武の弟、大陽の子也。

〔百濟王義慈〕百濟第三十代の王にして、王璋の子也。されど三國史記、東國通鑑等によれば義慈王此時未だ立たざりき。

〔王子豐章〕東國通鑑に、唐貞觀十五年、百濟武王四十二年、王璋薨、謚曰武、太子義慈立云々」とあり、故に爰は豐章は「餘豐の誤也、皇極紀には「百濟太子餘豐」とあり。

卷之七

唐顯慶四年。新羅太宗王六年。高勾麗寶藏王十八年。百濟義慈王十九年。（己未）春二月。新羅將伐百濟。遣使如唐乞師。

唐顯慶五年新羅太宗王七年。高勾麗寶藏王十九年 百濟義慈王二十年。（庚申）三月。唐遣左武衛大將軍蘇定方等伐百濟。初新羅因宿衛金仁問乞師。至是帝決意討之。徵仁問問道路險易。仁問應對甚悉。帝悅遂以定方爲神丘道行軍大摠管。仁問爲副大摠管。帥左驍衛將軍劉伯英龐孝公右武衛將軍馮士貴等水陸十三萬伐百濟。勅新羅王爲嵎夷道行軍摠管。爲之聲援（一）秋七月。唐兵與新羅兵圍百濟都城拔之。百濟王義慈降。唐兵執之以歸。時蘇定方金仁問等。濟師于伎伐浦。百濟合兵熊津口禦之。定方出左涯。乘高而陣與之戰百濟軍大敗。云云。王與太子孝率左右夜遁保熊津城。王宮諸姬走大王浦。嵒石上墮死。後人名其嵒爲落花。次子泰自立爲王。率衆固守。太子之子文思謂隆曰。王與太子固在。而叔自王。唐兵雖解我輩安得全。遂率左右縋城而出。民皆從之。隆與大佐平千福等出降。定方令兵士攀堞立唐旗幟。泰窘開門請命。於是義慈率太子孝自熊津城來詣定方降。云云 新羅王自今突城至。遣弟臨天福。露布告捷於唐。八月置酒宴定方及將士。坐義慈堂下使行酒。百濟羣臣莫不嗚咽流涕。九月定方以義慈及子孝。泰。隆。演。大臣將士八十八人。百姓萬二千八百七人。渡海還。

今按。日本書紀曰。舒明天皇三年（當唐貞觀五年）三月庚申朔。百濟王義慈入王子豐章爲質。

卷之八

新羅　高勾麗

〔太宗王〕また武烈王ともいふ、新羅第二十九代の王にて、文興王の子也

〔文武王〕武烈王の子也。

〔刺史〕州の長官にして、古の牧伯の官也、文獻通考職官門に〔唐武德元年後罷郡置州、改太守爲刺史〕と見えたり。

〔正朔〕正は年の始め也、因りて曆數の義とす併して王者革命すれば必ず曆を改む、その曆の行はるるは統治の權の及べるを證する也、故に正朔を頒つとは統治するの意也。

唐龍朔元年。新羅太宗王八年。文武王元年。高句麗寶藏王二十年。春正月。百濟宗室福信等。立故王子扶餘豐爲王。豐嘗質於倭。福信起兵與浮屠道琛。據周留城迎立之。西北部皆應引兵圍劉仁願於熊津城。時郎將劉仁軌坐罪白衣從軍。唐詔以爲撿校帶方州刺史。將前都督王文度之衆。便道發新羅兵。以救仁願。仁軌喜曰。天將富貴此翁矣。請唐曆及廟諱而行曰。吾欲掃平東夷。頒大唐正朔於海表。仁軌御軍嚴整轉鬬而前。福信等立兩柵於熊津口拒之。仁軌與新羅兵合擊之。百濟軍奔入柵。爭橋墮死者萬餘人。福信等乃釋圍退保任存城。新羅人以糧盡引還。於是道琛自稱領軍將軍。福信自稱霜岑將軍。招集徒衆。其勢益張。使告仁軌曰。聞大唐與新羅約。盡殺百濟遺民。以國界新羅。我與坐而受死。豈若力戰而鬪存。仁軌遣使賚書。具陳禍福。琛等恃衆。館使者於外。嫚報曰。使人官卑。我是一國大將。不合相參。書不答遣還之。仁軌以衆少。與仁願合軍休士。上表請合新羅兵攻之。新羅王春秋奉詔。遣其將金欽將兵救仁軌等。至古泗。福信邀擊敗之。欽自葛嶺道遁還。新羅不敢復出。尋而福信殺道琛。并其衆。豐不能制。福信以仁願孤城無援。遣使慰之曰。大使何時西還。當遣相送。○二月。百濟人攻泗沘城。新羅王命伊飡品日爲大幢將軍。率上州下州誓幢郎幢將軍等。往救之。品日至百濟境。分麾下先至豆良尹城南。相營地。百濟人望軍陣不整。猝出擊之。羅軍驚潰。大軍續至。攻豆良尹城。三旬不克。○夏四月。新羅品日等。還至賓骨壤。猝過百濟軍戰敗。兵械輜重失亡殆盡。上州郎幢兵遇百濟軍於角山。進擊克之。入其屯堡。斬獲二千級。王聞軍敗。遣將軍金純等救之。至加尸兮津。聞軍退乃還。王以諸將敗績。論罰有差。○秋八月。新羅王率諸將。會唐兵伐高句麗。次熊峴。攻百濟甕山城拔

（不龔）龔は恭に同じ、爰は百濟が唐の命に從はざるをいふ。

（齊明天皇の西征）齊明天皇の七年正月、百濟を救ひ新羅を討たんが爲に天皇親ら舟師を率ゐて西征し、三月筑前國于娜大津に至りて軍を營し給ひしが幾ばくもなくして病みて崩じ給ひ、之を果し給はざりき。

（沙彌）梵語也、息慈、息惡、行慈等と譯す、男子の出家して十戒を受けし者の稱也。

（佐平福信）「佐平」は百濟の大臣の位に當る、福信の武功を賞していへる也。

之、先是帝遣金仁問儒敦等遣謂曰。朕既滅百濟、除爾國患。今高句麗負固、與濊貊同惡。違事大之禮、棄善隣之義。朕欲問伐以殲惡亡之虜。王雖在服重違帝命。遂以金庾信爲大將軍、仍部分二十三摠管、自領至始飴谷。有告者曰。百濟餘民據甕山城。王先遣使諭之。不服。王行次南川州。鎭守劉仁願亦自泗泚來會。庾信進圍甕山城。諭百濟人曰。爾國不龔。致大國之討。順命者賞。不順命者戮。今汝等獨守孤城。欲何爲乎。將必塗地。不如早降。非但全軀。富貴可期也。百濟人曰。城雖小兵食倶足。士卒義勇。寧爲戰死。誓不生降。庾信笑曰。困獸猶鬪此之謂也。圍不解。九月王進次熊峴。停集諸摠管。親臨誓師涕泣。士皆奮勵。遂與庾信合兵圍之。先燒大柵。斬數千人。城陷。獲賊將戮之。王論賞有差。○新羅上州摠管品日等、率兵攻百濟雨述城。斬千餘級。達率助服恩率波伽等與衆降。王賜助服級湌。仍授古陁耶郡太守。波伽級湌。又賜田宅衣物。

今按。唐龍朔元年、當日本齊明天皇七年。我齊明天皇之西征、天智天皇興大軍欲存百濟。皆斯時也。日本書紀曰。齊明天皇六年九月癸卯。百濟遣達率闕名沙彌覺從等。來奏曰。或本云逃來告難今年七月。新羅恃力作勢。不親於隣。引搆唐人。傾覆百濟。君臣總俘。略無噍類。於是西部恩率鬼室福信赫然發憤。據任射岐山。達率餘自進據中部久麻怒利城。各營一所。誘聚散卒。兵盡前役。故以棓戰。新羅軍破。百濟奪其兵。既而濟兵翻鋭。唐不敢入。福信等遂鳩集同國。共保王城。國人尊曰佐平福信佐平自進。唯福信起神武之權。興既亡之國。冬十月。百濟佐平鬼室福信。遣佐平貴智等。來獻唐俘一百餘人。今美濃國不破。片縣（片當作山）二郡唐人等也。又乞師請救。并乞王子余豐璋曰。唐人率我

姦賊來薄搖我疆場。覆我社稷。俘我君臣。而百濟國遙賴天皇護念。更鳩集以成邦。方今謹願迎百濟國遣侍天朝王子豐璋。將爲國主云云。詔曰。乞師請救。聞之古昔。扶危繼絕。著自恒典。百濟國窮來歸我。以本邦喪亂。靡依靡告。枕戈嘗膽。必存拯救。遠來表啓。志有難奪。可分命將軍。百道俱前。雲會雷動。俱集沙喙。剪其鯨鯢。紓彼倒懸。宜有司具爲與之。以禮發遣云云。十二月庚寅。天皇幸于難波宮。天皇方隨福信所乞之意。思幸筑紫。將遣救軍。而初幸。斯備諸軍器。是歲欲爲百濟伐新羅。乃勅駿河國造船。已訖。挽至續麻郊之時。其船夜中無故。艫舳相反。衆知終敗。科野國言。蠅群向西飛踰巨坂。大十圍許。高至蒼天。或知救軍敗績之怪。七年正月壬寅。御船西征始就于海路。甲辰御船到于大伯海。庚戌御船泊于伊豫熟田津石湯行宮。三月庚申。御船還至于娜大津。居于磐瀨行宮。天皇改此名曰長津。四月。百濟福信遣使上表。乞迎其王子糺解。五月癸卯天皇遷居于朝倉橘廣庭宮。是時斮除朝倉社木而作此宮。故神忿壞殿。由是病死者衆。七月丁巳。天皇崩于朝倉宮。皇太子（天智天皇）素服稱制。遷居于長津宮。稍聽水表之軍政。八月遣前將軍大華下阿曇比邏夫連。小華下阿邏百枝臣等。後將軍大華下阿倍引田比邏夫臣大山上物部連熊大山上守君大石等。救百濟。仍送兵仗五穀。九月皇太子御長津宮。以織冠授於百濟王子豐璋。復以多臣蔣敷之妹妻之。乃遣大山下狹井連檳榔。小山下秦造田來津。率軍五千餘衛送於本鄕。於是豐璋入國之時福信迎來稽首。奉國朝政皆悉委焉。天智天皇元年正月丁巳。賜百濟佐平鬼室福信矢十萬隻。絲五百斤。綿一千斤。布一千端。韋一千張。稻種三千斛。三月癸巳。賜百濟王布三百端。五月大將軍大錦

〔社稷〕猶ほ國家といふ如し、後漢書に「社者、土地之主也、稷者、五穀之長也」とあり

〔熟田津〕伊豫國溫泉郡一萬村の西にあり、今秋田津といふ所なるべし。

〔于娜大津〕筑前那珂郡にあり、太宰博多津とも、博多大津ともいふ。

〔素服稱制〕素服は喪服の總稱也、上古は白布を用ひしが、後ちには黑布となり、更に衿あり袖なき短衣となれり、「稱制」は政治を見らるゝをいふ。

〔織冠〕孝德天皇大化三年に制定されたる冠位の第二位なるものをいふ。

中阿曇比邏夫連等。率舡師一百七十艘、送豐璋等於百濟國。宣勅以豐璋等使繼其位。又予金策於福信、而撫其背、褒賜爵祿。于時豐璋等與福信稽首受勅、衆爲流涕。救百濟、修繕兵甲。備具船舶、儲設軍糧。

秋八月、蘇定方破高句麗軍於浿江、奪馬邑山。遂圍平壤城。

唐龍朔二年、新羅文武王二年、高句麗寶藏王二十一年。壬戌　春正月、新羅王遣金庾信金仁問眞服良圖等九將軍。與留鎭劉仁願。率兵數萬。以車二千餘兩載米四千石、租二萬二千餘石。赴平壤。至風樹村。氷滑道險。車不得行、并駄牛馬。至七重河。人皆懼、莫敢先。庾信先濟。諸軍繼之。入麗境。至蒜壤。人皆困乏。庾信語諸將曰。麗濟二國爲我世讎。今不畏死赴難者。欲藉大國之力滅二國。以報國讎。諸君宜勉之。直趣平壤。過[illegible]兵於梨峴。逆擊克之。所得兵仗甚多。○唐沃沮道總管龐孝泰與高句麗戰。兵敗死之。初孝泰率嶺南水戰之士、軍於蛇水上。蓋蘇文迎擊之。孝泰大敗。或勸突圍詣劉伯英曹繼叔之營。孝泰曰。我代事兩代。過蒙恩遇。高句麗不滅、吾必不還。我將鄉里子弟五千餘人。今並死盡、豈爲一身求活耶。蘇文內薄攻之。死者累萬、箭如蝟毛。孝泰遂與其子十三人皆死。○二月、唐遼東道總管蘇定方解平壤圍引兵還。先是金庾信等至獐塞。道險距平壤數里。會風雪寒沍。人馬多凍死。

今按。龍朔二年、當日本天智天皇元年。日本書紀曰。齊明天皇七年十二月。日本救高麗。軍將等泊于百濟加巴利濱。又曰。高麗國寒極浿凍。唐軍雲車衝輣、鼓鉦吼。然高麗士卒膽勇雄壯。故更取唐二壘。唯有二塞。唐兵抱膝而哭。天智天皇元年三月。唐人新羅人伐高麗。高麗乞救。國家仍遣軍將

〔稽首〕首の地に至りて稽留するをいふ、最も重き禮也。

〔麗濟二國〕高麗と百濟也。

〔蝟毛〕蝟は針鼠といふ動物也、毛針の如し、漢書賈誼傳に「反者如蝟毛而起」とあり。

〔雲車〕後漢光武紀に「雲車十餘丈」とあり、注に「雲車卽樓車、稱雲言其高也、升之以望敵、猶墨子云公輸般爲雲梯之械」と見ゆ。

〔衝輣〕後漢光武紀に「衝輣撞城」とあり、注に「輣樓車也、云々、衝衝車也、輣有樓車、以之撞城」と見ゆ。

〔客星〕臨時に現はるゝ星にして、彗星の一種也。
〔項羽〕名は籍、羽は字也、楚に生る人となり勇力絶倫也、秦末、陳勝、吳廣に次ぎて蜂起し遂に劉邦と共に秦を亡ぼし、後ちまた劉邦の爲に亡ぼされたり。
〔范增〕居巣の人也初め項梁に仕へ獻策して楚の懷王を立てしむ、項梁死して後ち項羽に仕へ、屢〻縱橫の謀計を以て、項羽の大功を成さしむ、項羽之を尊びて亞父となせり、後ち漢の陳平の反間を信じて稍之が權を削ぐ、增怒りて天下の事大に定る、君王自ら之を爲せと、遂に辭去す。

據疏留城。由是唐人不得略其南界。新羅不獲踰其西塁。東國通鑑所記多合我國史。然不知我助高麗。

耽羅國主佐平徒冬音律朝新羅。初高乙那十五代孫。高厚高淸兄弟三人造舟渡海至于耽津。于時客星見于南方。太史奏曰。異國人來朝之象也。未幾。厚等果來。王嘉之稱長子曰星主。以其動星象也。二子曰王子。蓋王愛淸令出胯下。如己子。故名之。季子曰都內。邑號曰耽羅。以來時初泊耽津故也。各賜寶蓋衣帶而遣之。不知何王時也。後臣屬百濟。故以佐平爲官號。至是來降爲屬國。

今按。日本紀。先是齊明天皇七年五月丁巳。耽羅始遣王子阿波伎等貢獻。其後數來朝。故表出耽羅事。亦宜參考下之三。

三月。新羅王以百濟既平大赦。命有司設大酺。○秋七月。唐熊津都督劉仁願等大破百濟兵於熊津。帝以平壤軍還。勅仁願等西歸。劉仁軌以爲。如此則百濟餘燼不日更興。高麗逋藪何時可滅。乃守便宜襲破福信餘衆於熊津。東拔支羅城。及尹城大山沙井等柵。殺獲甚衆。仍分兵鎭守。福信等以眞峴城臨江高險當衝安。加兵守之。仁軌夜督新羅兵。薄城板堞比明入城斬殺八百人。遂通新羅餉道。仁願奏請益兵。詔左威衛將軍孫仁師。爲熊津道行軍摠管。發淄青萊海兵七千餘人。往就熊津。時福信專權。與豐璋相猜。謀殺豐。豐帥親信掩斬之。遣使高句麗倭國。乞師以拒唐兵。

今按。福信之遭害。據我國史天智天皇二年六月也。卽當唐龍朔三年。福信者百濟之良將。其勢將復百濟。豐璋暗嫌害之。猶項羽之害范增也。百濟自取滅也。甚可惜之。日本紀曰。天智天皇二

年二月丙戌、百濟遣達金受等進調。是月。佐平福信上送唐俘續守言等。六月百濟王豐璋嫌福信有謀反心。以革穿掌而縛。時難自決。不知所爲。乃問諸臣曰。福信之罪既如此焉。可斬不。於是達率德執得曰。此惡逆人不合放捨。福信卽唾於執得曰。腐狗癡奴。王勤健兒斬而醢首。八月甲午。

新羅以百濟王斬己良將。謀直入國先取州柔。

唐龍朔三年。新羅文武王三年。高句麗寶藏王二十二年。（癸亥）秋九月。新羅王及唐熊津總管孫仁師等。攻百濟周留城拔之。扶餘豐奔高勾麗。先是仁師來與仁願合。士氣大振。新羅王率金庾信等二十八將來助。於是諸將議所向。或曰。林城水陸之衝。合先擊之。仁軌曰。兵法避實擊虛。加林險而固。攻則傷士。守則曠日。周加留城百濟巢穴。若克之諸城自下。於是仁師仁願及新羅王帥步騎。仁軌及扶餘隆帥舟師。自熊津江進同趨周留城。遇倭人於白江口。新羅軍力戰四合皆克。焚其舟四百艘（西峯按東國通鑑。文武王九年七月。唐總管薛仁貴遣僧琳潤致書於王。其略曰。龍朔三年。倭人來助百濟。兵船千艘泊于白沙。觀此則千艘中焚四百艘歟。）煙焰灼天。海水爲赤。豆陵尹周留等城皆下。豐脫身走王子忠勝忠志等。帥其衆與倭人皆降。新羅王謂倭人曰。我與爾國隔海講和。聘問交通。未嘗交攜。何今日與百濟謀我。今爾之命在我掌握。不忍殺之。歸語爾王。遂縱之。分兵擊諸城降之。獨遲受信所據任存險固。糧儲又多。攻之三旬不下。

今按龍朔三年。當天智天皇二年。日本書紀曰。三月遣前將軍上毛野君稚子間人連。大蓋中將軍巨勢神前臣譯語三輪君根麻呂。後將軍阿倍引田臣比邏夫大宅臣鎌柄。率二萬七千人伐新羅。六月前將軍上毛野君稚子等。取新羅沙鼻岐奴江二城。八月新羅聞福信之死。謀直入百濟先取州柔。

〔達金受〕中臣本には「達率金受」とあり。

〔醢首〕醢は和名抄に「醢、之之比之保、肉醬也」とあり即ち刑罰として、首を鹽漬けにするをいふ、呂氏春秋に「殺梅伯而遺文王其醢」とあり

〔避實擊虛〕敵を攻むるにその防備の堅固なる所を避けて、備への乏しき所を擊つをいふ孫子虛實篇に「水之形避高而趨下兵之形、避實而擊虛」とあり。

〔沙鼻岐〕文獻備考新羅に「三岐縣、本三支縣、一云麻枝」とある三岐なるべし。

〔廬原君臣〕君は姓臣は名也、姓氏錄右京皇別に「廬原公、笠朝臣同祖、稚武彦命之後也」とある一族也。
〔白村江〕東國通鑑には「白江口」又は「白河」とあり、忠清道野川縣泊浦の下流附近也。
〔官軍敗績云々〕通鑑唐紀に「龍朔三年九月戊午、熊津道行軍總管右威衛將軍孫仁師等、破百濟餘衆及倭兵於白江、拔其周留城」云々、百濟王豐南引倭人以拒唐兵、仁師與仁願仁軌合兵勢大振云々とあり。
〔逃去高麗〕通鑑唐紀に「百濟王豐脫身奔高麗、王子忠勝忠志等帥衆降」とあり。

於是百濟知賊所計。謂諸將曰。今聞大日本國之救將廬原君臣率健兒萬餘。正當越海而至。願諸將軍等應預圖之。我欲自往待饗白村。戊戌賊將至於州柔。繞其王城。大唐軍將率戰船一百七十艘陣烈於白村江。戊申日本船師初至者。與大唐船師合戰。日本不利而退。大唐堅陣而守。己酉日本諸將與百濟王。不觀氣象。而相謂曰。我等爭先彼應自退。更率日本亂伍中軍之卒。進擊大唐堅陣之軍。大唐便自左右夾船繞戰。須臾之際官軍敗續。赴水溺死者衆。艫舳不得廻旋。朴市田來津仰天而誓。切齒而嗔殺數十人。於是戰死百濟王豐璋與數人。乘船逃去高麗。九月丁巳。百濟州柔城。始降於唐。甲戌日本船師。及佐平余自信達率木素貴子谷那晋首憶禮福留。并國民等。至於氐禮城。明日發船始向日本。

愚按。夫三韓。世爲我國附庸。然新羅忘我恩。動輙有虎心。百濟納款誠。而及其變亂告急。豈可不恤危乎。是以齊明天皇。天智天皇幸筑紫。數興大軍。欲存其國。然於存亡危急之間。福信見枉害。

三月國遂丘墟。此豐璋之過也。天乎人乎悲夫。

十一月。唐劉仁軌還將。攻拔任存城云云

唐麟德元年。新羅文武王四(甲子)年。高句麗寶藏王二十三年。二月。唐遣劉仁願將兵代戍熊津。以扶餘隆爲熊津都督。俾還其國。招輯餘衆。令與新羅釋憾。○三月。百濟餘衆又聚泗沘城叛。熊津都督發所管兵。攻克之。

唐麟德二年。新羅文武王五(乙丑)年。高句麗寶藏王二十四年。秋八月庚子。新羅王與劉仁願扶餘隆同盟于熊津之就利山。其誓詞曰。往者百濟先王迷於逆順。不敦鄰好。不睦親姻。結托高句麗。交通倭國。共爲殘暴。侵削新羅。剝邑屠

〔辜〕說文に「罪也」とあり。
〔後昆〕子孫也、爾雅釋會に「昆後也」とあり、書經に「王懋昭大德、建中于民、以義制事、以禮制心、垂裕後昆」とあり。
〔桑梓〕古は牆下に桑、梓の二木を栽ゑ、蠶食の用に供す、子孫よりいへば、その父母の栽うる所なるを以て故鄉の義とす、詩經に「維桑維梓、必恭敬止、靡瞻匪父、靡依匪母」とあり。
〔泰山〕支那山東省にあり、五岳の一にして、古來宗教的儀禮を以て尊祀さる。
〔朝散大夫〕朝官のみにして、その職掌なき大夫をいふ。

城。略無寧歲。天子憫一物之失所。憐百姓之無辜。頻命行人。諭以和會。負險恃遠。侮慢天經。皇赫斯怒。龔行弔伐。旌旗所指一戎大定。固可瀦宮汚宅。作誡來裔。拔本塞源。垂訓後昆。然懷柔伐叛。前王之令典。興亡繼絕。往哲之通規。事必師古。傳諸曩冊。故立前百濟大司稼正卿扶餘隆。爲熊津都督。守其祭祀。保其桑梓。依倚新羅。長爲與國。各除宿憾。結好和親。各承詔命。永爲藩服。仍遣使人右威衞將軍魯城縣公劉仁願。親臨勸諭。寔宣成旨。約之以婚姻。申之以盟誓。刑牲歃血。共敦終始。分災恤患。恩如兄弟。祗奉綸言。不敢失墜。既盟之後。共保歲寒。若有乖背。二三其德。興兵動衆。侵犯邊陲。明神監之。百殃是降。子孫不育。社稷無守。禋祀磨滅。罔有遺餘。故作金書鐵券。藏之宗廟。子孫萬代無敢違犯。神之聽之。是饗是福。仁軌之辭也。歃訖埋牲幣於壇之壬地。藏其書於新羅宗廟。於是仁軌領新羅使者。及百濟耽羅倭人四國使。浮海西還。會祀泰山。隆畏衆携散。亦歸京師。後唐以隆爲熊津都督帶方郡王。遣歸國安輯餘衆。仍移安東都護府於新城以統之。隆畏新羅之强。不敢入舊國。寄治高勾麗死。百濟遂滅。

今按。麟德二年。當天智天皇四年。日本書紀曰。九月壬辰唐國遣朝散大夫沂州司馬上柱國劉德高等。等。謂右戎衞郎將上柱國百濟將軍朝散大夫柱國郭務悰凡二百五十四人。七月二十八日至于對馬。九月二十日至于筑紫。二十二日進表函焉。十一月辛巳饗賜劉德高等。十二月辛亥賜物於劉德高等。是月劉德高等罷歸。是歲遣小錦守君大石等於大唐。云云等謂小山坂合部連石積大乙岐彌吉士針間。蓋送唐使人乎。觀此則東國通鑑所謂倭人使。蓋謂此。

卷之九

新羅紀

文武王

唐總章二年新羅文武王九年。己巳秋七月唐摠管薛仁貴遣僧琳潤致書於王。其略曰。至總章元年百濟渝盟。越境侵犯。又致書云。天朝修理戰艦。外託征倭欲伐新羅。

今按。總章元年當日本天智天皇七年。

庚午十年唐咸亨元年八月倭國更號日本。自言近日所出。以爲名。

今按。咸亨元年當日本天智天皇九年。更號日本説。唐書之文也。詳見上卷。元元集第一。和漢春秋曰。括地志云。和國。武后改曰日本國。釋日本紀。延喜講記曰。日本者自唐所號也。隋文帝開皇中。入唐使小野妹子。將改倭號爲日本。然依隋皇暗物理。遂不許。至唐武德中。始號日本。又曰。日本當大唐東方。故名之。纂疏曰。日本者日始出之國也。故曰日本。一義。本猶始也。陰陽二神始生日神。故以日本爲名。西峰按。神功皇后征新羅。時新羅王曰。吾聞東有神國。謂日本。卽漢建安中也。觀此則日本之號久矣。非始于唐。

卷之十

新羅紀

孝昭王

戊戌七年唐聖曆十五年。春三月。日本國遣使來聘。

〔咸亨〕唐の高宗の時の年號也。

〔隋文帝〕隋國の第一世也、姓は楊、名は堅、性節儉にして、政事を勤む後ち太子廣に弑せられたり。

〔小野妹子〕天帶彥國押人命の後裔也推古天皇に仕へ、大禮の位に叙され天皇の十五年遣隋使となる、後再び遣隋使となり、位大德冠に至れり。

〔武德〕唐高祖皇帝の時の年號也。

〔陰陽二神〕伊邪那岐命、伊邪那美命を申す。

〔建安〕後漢の獻帝の時の年號也。

今按、嗣聖十五年當日本文武天皇二年。續日本紀曰。天之眞宗豐祖父天皇（文武天皇）二年春正月甲子。新羅使一吉飡金弼德等貢調物。二月甲子金弼德等還蕃。四年五月辛酉以直廣肆佐伯宿禰麻呂爲遣新羅大使。勤大肆佐味朝臣賀佐麻呂爲小使。大少位各一人。大少史各一人。冬十月癸亥直廣肆佐伯宿禰麻呂等至自新羅。獻孔雀及珍物。觀此則東國通鑑以新羅使來爲我國使往年。

聖德王

三十年（唐開元十九年）（辛未）春二月。日本國以兵船三百艘寇東邊。王命將擊破之。

今按。開元十九年當日本聖武天皇天平三年。此年我國無伐新羅事。續日本紀曰。天璽國押開豐櫻彥天皇（聖武天皇）七年二月癸卯。新羅使金相貞入京。癸丑遣中納言正三位多治比眞人縣守於兵部曹司。問新羅使入朝之旨。而新羅國輙改本號曰王城國。因茲返却其使。九年二月己未遣新羅使奏新羅國失常禮不受使旨。於是召五位已上并六位已下官人。摠四十五人于內裏。令陳意見。丙寅諸司奏意見表。或發兵加征伐。三月壬寅遣新羅使副使正六位上大伴宿禰三中等四十人拜朝。四月乙巳遣使於伊勢神宮大神社筑紫住吉八幡二社。及香椎宮奉幣以告新羅無禮之狀。觀此則當斯時新羅得罪。本朝欲伐之。然其後新羅令王子金泰廉等拜朝改悔前過。故不問其罪。王子拜朝。事見下文。

孝成王

六年（唐天寶元年）（壬午）冬十月日本國使至。不納。

〔續日本紀〕四十卷六國史の一也、文武天皇の元年より桓武天皇の延暦十年に至る迄の歴史にて、菅野朝臣眞道等、桓武天皇の勅を奉じて撰す。

〔開元〕唐玄宗皇帝の時の年號也。

〔多治比眞人縣守〕宣化天皇の皇子上殖葉の後裔にして島左大臣の子也、文武、元明、元正、聖武の四朝に仕へ唐との交涉及び蝦夷征伐に就きて大功ありき。

〔香椎宮〕筑前國糟屋郡香椎村にあり神功皇后或は仲哀天皇を祀るといふ聖武天皇の神龜元年の創建なりと傳ふれど定かならず

今按。天寶元年當日本天平十四年。此年無遣新羅使事。新羅不納日本使者非也。續日本紀曰。天平十四年二月戊寅太宰府言。新羅使沙飡金欽英等一百八十七人來朝。庚辰詔。以新京創宮室未成。便令右大辨紀朝臣飯麻呂等饗金欽英等於太宰。自彼放還。觀此則我朝不納新羅使也。

惠恭王

己未十五年唐大曆十四年春三月遣金巖聘日本。巖允中庶孫也。性聰敏。少爲伊飡。入唐宿衞。間就師學陰陽家術。自述遁甲立成法。示其師。師曰。不圖明達至此。自是不敢以弟子待之。及還。爲司天大博士。歷守良康漢三州。復爲執事侍郎。鎭浿江。所至盡心撫字。每農隙教以六陣兵法。人皆便之。嘗有蝗。入界蔽野。百姓憂懼。巖至誠禱之。忽風雨作。蝗盡斃。至是聘日本。王知其賢。欲留之。會唐使高鶴林來。相見甚懽。以巖爲大國所知不敢留。乃還。

今按。大曆十四年當日本光仁天皇寶龜十年。續日本紀。金巖作金嚴。無欲留之事。曰。寶龜十一年正月己巳天皇御大極殿受朝。唐使判官高鶴林新羅使薩飡金蘭蓀等各依儀拜賀。辛未新羅使獻方物。仍奏曰。新羅國王言。夫新羅者開國以降。仰賴聖朝。世々天皇恩化。不乾舟楫。貢奉御調。年紀久矣。然近代以來。境內奸寇不獲入朝。是以謹遣薩飡金蘭蓀級飡金巖等。貢御調。兼賀元正。又訪得遣唐判官海上三狩等。隨使進之。又依常例進學語生。參議左大辨正四位下大伴宿禰伯麻呂宣勅曰。夫新羅國。世連舟楫。供奉國家。其來久矣。而泰廉等還國之後。不修常貢。每事無禮。所以頃年返却彼使。不加接遇。但今朕時遣使修貢。兼賀元正。又搜求海上三狩等。隨使來。此之勤

〔天寶〕唐玄宗帝の時の年號也

〔太宰府〕筑前國御笠郡太宰府村にあり、西海道九國三島を總管し、兼ねて外寇を防ぎ、外交の事を掌る役所也。

〔大曆〕唐の代宗皇帝の時の年號也。

〔遁甲立成法〕遁甲術の一種にて、陰陽、方位家の術也後漢書方術傳注に「遁甲推六甲之陰而隱遁也、今書七志有遁甲經」とあり。

〔元正〕年の始め即ち一月一日也、公羊傳注に「變一爲元、元者氣也、又正月一日、日元日」とあり、正は正韻に「歲之首月也」とあり。

朕有嘉焉。自今以後如是供奉厚加恩遇。待以常禮。宜以茲狀語汝國王。是日宴唐及新羅使於朝堂。賜祿有差。壬申授新羅使薩飡金蘭蓀正五品上。副使級飡金巖正五品下。大判官韓奈麻薩仲業。少判事奈麻金貞樂。大通事韓奈麻金蘇忠三人各從五品下。自外六品已下各有差。並賜當色并履。

哀莊王

壬午三年唐貞元十八年　冬十二月授均貞爲大阿飡。假稱王子。欲以質倭國。均貞辭。

今按貞元十八年當日本桓武天皇延暦二十一年。夫新羅事我之禮厚。故王子代國王入朝。例也。今以均貞欲假稱王子。然非其實。故均貞辭乎。舉王子來例如左。續日本紀曰。寶字稱德孝謙皇帝天平勝寶四年六月己丑。新羅王子金泰廉等拜朝。并貢調。因奏曰。新羅國王言日本照臨天皇朝庭。新羅國者始自遠朝。世々不絕。舟楫並連來奉國家。今欲國王親來朝貢進御調。而顧念。一日无主國政絕亂。是以遣王子韓阿飡泰廉。代王爲首。率使下三百七十餘人入朝。兼令貢種種御調。謹以申聞。壬辰是日饗新羅使於朝堂。詔曰。新羅國來奉朝庭者。始自氣長足媛皇太后平定彼國。以至于今。爲我蕃屏。而前王承慶大夫思恭等。言行怠慢闕失恒禮。由欲遣使問罪之間。今彼王軒英改悔前過。冀親來庭而爲顧國政。因遣王子泰廉等。代而入朝。兼貢御調。朕所以嘉歡勤款。進位賜物。又詔自今以後。國王親來宜以辭奏。如遣餘人入朝。必須令齎表文。

丙戌七年唐憲宗元和元年。　春日本遣使來聘。

〔朝堂〕朝堂院也、天皇の朝に臨み、百官政を行ひ、諸司告朔するの所をいふ、また中臺八省院、大極殿院とも稱す。

〔祿〕褒美又は祝物として、天皇より諸官、諸臣に賜はる當座の賜物也。

〔貞元〕唐の德宗皇帝の時の年號也。

〔氣長足媛皇太后〕神功皇后を申す、皇太后は尊稱也、日本書紀神功皇后攝政元年の條に冬十月癸亥朔甲子、群臣尊皇后曰皇太后ことあり。

〔蕃屏〕籬垣となりて本家を屏蔽するをいふ、左傳に「封建親戚以蕃屏國」とあり。

〔契丹〕支那南北朝時代に遼河の上流地方に居りし滿洲族にして、始め唐に屬せしが、唐末に至り、耶律阿保機なる者自立して皇帝と稱し、遼河上流なる臨潢に都せり、爾來次第に四方を征服し、その盛時は支那北部及び滿洲、蒙古地方をも併呑せり。

〔天聖〕宋朝四代仁宗皇帝の時の年號也。

〔皇祐〕宋朝四代仁宗皇帝の時の年號也。

今按、元和元年當日本平城天皇大同元年。

卷之十六

高麗紀

顯宗

二十年（宋天聖七年契丹太平九年）秋七月、耽羅民貞一等還自日本。初貞一等二十一人泛海。漂風到東南極遠島。島人長大。遍體生毛。語言殊異。劫留七月。貞一等七人竊小船。東北至日本那沙府。乃得生還。

今按、宋天聖七年當日本後一條天皇長元二年。那沙府太宰府也。言沙音近太宰。

卷之十七

高麗紀

文宗仁孝王

三年（己丑）（宋皇祐元年。契丹重熙十八年。）秋九月、日本對馬島遣使。送我國漂風人二十。

今按、皇祐元年當日本後冷泉天皇永承四年。

卷之十八

高麗紀

宣宗思孝王

三年（丙寅）（宋哲宗元祐元年。遼大安二年。）六月釋煦還自宋。初煦至宋。帝引見于垂拱殿。待以客禮。寵賚甚渥。煦請遊方

問法。詔以主客員外郎楊傑爲館伴。至吳中諸寺。皆迎餞如王臣禮。王上表乞還國。詔許東還。煦至禮成江。王奉太后。出奉恩寺以待。其迎迓儀之盛。前古無比。煦獻釋典。及經書一千卷。又於興王寺奏置教藏都監。購書於遼宋日本。多至四千卷。悉皆刊行。

今按。宋元祐元年當我白河天皇應德三年。

十年癸酉宋元祐八年。遼大安九年。 秋七月西海道按察使奏。安西都護府轄下延平島。巡檢軍捕海舡一艘。所載宋人十二。倭人十九。有弓箭刀劍甲冑。幷水銀眞珠硫黃法螺等物。必是兩國海賊共欲侵我邊鄙者也。其兵使等物請收納官。所捕海賊並配嶺外。賞其巡捕軍士。從之。

今按。元祐八年當日本堀河天皇寬治七年。

卷之二十五

高麗紀

毅宗

二十三年己丑宋乾道五年。金大定九年。 春正月幸奉香里離宮。宴群臣。仍賜宋商及日本所進玩物。

今按。宋乾道五年當日本高倉天皇嘉應元年。

卷之三十一

高麗紀

高宗二

〔上表〕表は文體の一種也、文體明辨に「表者標也、明也、標著事緖、使之明白、以告於上也、古者獻言於君、皆稱上書、漢定禮儀乃有四品、其三曰表」とあり

〔釋典〕釋迦の教を收めたる經典也。

〔元祐〕宋の哲宗の時の年號也。

〔法螺〕貝の一種にして、もと佛徒の用ひし物也、法華經に「爾時文殊師利云々、吹大法螺擊大法鼓云々」とあり。

〔乾道〕宋の孝宗の時の年號也。

〔寶慶〕南宋第五代理宗の時の年號也

〔金〕もと女眞と號し遼に屬せしが阿骨打の時獨立して屢宋を苦しめしが建國以來百二十年にして蒙古太祖の子太宗に滅さる。

〔蒙古太祖〕鐵木眞也、成吉思汗とも稱す。

〔安貞〕後堀河天皇御宇の年號也。

〔淳祐〕南宋理宗の時の年號也。

丁亥
十四年宋寶慶三年。金正大四年。蒙古太祖二十二年。夏四月倭寇金州。防護別監盧且發兵捕賊船二艘。斬三十餘級。且獻所獲兵仗。○五月倭寇熊神縣。別將鄭金億等潛伏山間。突出斬七級。賊遁。○日本國寄書謝賊船寇邊之罪。仍請修好互市。○十二月遣及第朴寅聘于日本。時倭賊侵掠州縣。故遣寅講和。

今按。寶慶三年當日本後堀河天皇安貞元年。

戊子
十五年宋紹定元年。金正大五年。秋八月朴寅還自日本。寅到日本。諭以歷世和好不宜來侵。日本推撿賊倭誅之。遂賫和親牒以來。自是侵掠稍息。崔瑀給銀瓶五段子六十匹布五百匹米豆五十碩鞍馬。以賞之。

今按。紹定元年當安貞二年。寅事宜參考東文選。見下。

卷之二十二

高麗紀

高宗三

甲辰
三十一年宋淳祐四年。春二月有司劾奏。前濟州副使盧孝貞。判官李珏在任時。日本商船遇颶風敗於州境。孝貞等私取綾絹銀珠等物。徵孝貞銀二十八斤。珏二十斤。流于島。

今按。宋淳祐四年當日本後嵯峨天皇寬元二年。

卷之二十四

高麗紀

元宗順孝王一

（癸亥）四年宋景定四年蒙古中統四年 夏四月遣大官署丞洪貯詹事府錄事郭王府如日本國請禁賊。牒曰、自兩國交通以來、歲常進奉一度、船不過二艘。設有他船、枉憑他事、濫擾我沿海村里、嚴加禁制以爲定約。今春貴國船一艘入熊神縣勿島、掠其貢船、又入椽島、奪我民產。甚乖交通之意、請徵還所掠之物以固兩國和親之義。○秋八月洪貯等還自日本曰、竊掠海賊乃對馬島倭也、徵米二十碩、馬麥二十碩。牛皮七十領而來。

今按。景定四年當日本龜山天皇弘長三年。

（丙寅）七年宋咸淳二年蒙古至元三年 冬十一月蒙古遣黑的殷弘等來。詔曰。今爾國人趙彝來告。日本與爾國爲近隣。典章政治有足嘉者。漢唐而下亦或通使中國。故今遣黑的等往日本、欲與通和。卿其導達去使。以徹彼疆。開悟東方。向風慕義。茲事之責。卿宜任之。勿以風濤險阻爲辭。勿以未嘗通好爲解。恐彼不順命。有阻去使。爲托卿之忠誠。於斯可見。卿其勉之。彝。本咸安人。初爲僧。後歸俗。叛入蒙古。能解諸國語出入帝所。以讒毀本國爲事。○命樞密院副使宋君斐侍御史金贊與黑的等往日本。

今按。咸淳二年當日本龜山天皇文永三年。

（丁卯）八年宋咸淳三年蒙古至元四年 春正月宋君斐金贊與黑的等至巨濟松邊浦。畏風濤之險遂還。王又令君斐隨黑的如蒙古。奏曰、詔旨所諭、導達使臣。通好日本事。謹遣陪臣宋君斐等伴使臣以往。至巨濟縣遙望對馬島。見大洋萬里風濤蹴天。意謂危險若此。安可奉上國使臣冒險輕進。雖至對馬島。彼俗頑獷無禮義。設有不軌將如之何。是以與俱而還。且日本素與小邦未嘗通好。但對馬島人。時因貿

〔中統〕元世祖の時の年號也。

〔碩〕石に同じ。

〔龜山天皇〕人皇第九十代の天皇にして、御名を恒仁と申す、後嵯峨天皇の第七皇子也。

〔歸ㇾ俗〕還俗する也。

〔巨濟縣〕慶尙南道に在り。

〔頑獷〕頑なにして猛惡なるを云ふ。

〔不軌〕法を守らざる義、また、むほんを云ふ。

易往來金州耳。小邦自陛下即祚以來。深蒙仁恤。三十年兵革之餘、稍得蘇息。綿綿存喘。聖恩天大。誓欲報効。如有可爲之勢。而不盡心力有如天日。○秋八月宋君斐等與黑的殷弘復來。帝諭曰。向者遣使招懷日本。委卿嚮導。不意卿以辭爲解。遂令徒還。意者日本既通好。則必盡知爾國虚實。故托以他辭。然爾國人在京師者不少。卿之計亦疎矣。且天命難諶。人道貴誠。卿先後食言多矣。宜自省焉。今日本之事一委於卿。卿其體朕此意。通諭日本。以必得要領爲期。卿嘗有言。聖恩天大。誓欲報効。此非報効而何。李藏用以書贈黑的等曰。日本阻海萬里。雖或與中國相通。未嘗歳修職貢。故中國亦不以爲意。來則撫之。去則絶之。以爲得之無益於王化。棄之無損於皇威也。今聖明在上。日月所照盡爲臣妾。蠢爾小夷敢有不服乎。然蜂蠆之毒。豈可無慮。國書之降。亦甚未宜。隋文帝時上書云。日生處天子致書于日沒處天子。其驕傲不識名分如此。安知遺風不存乎。國書既入。脫有驕傲之荅不敬之辭。欲捨之則爲大朝之累。欲取之則風濤艱險。非王師萬全之地。陪臣固知大朝寛厚之政。亦非必欲致之。偶因人之上言。姑試之耳。然取捨如彼。尺一之封。莫如不降之爲得也。且豈不聞大朝功德之盛哉。既聞之計當入朝。然而不到蓋。恃其海遠耳。然則期以歳月。徐觀其至否。至則奬其内附。否則置之度外。任其蚩々自活於相忘之域。實聖人天覆無私之至德也。陪臣再觀天陛。親承睿澤。今雖在遐陬。犬馬之誠思効萬一耳。蓋藏用度日本竟不至將累我國。故寄以書貽黑的。欲令轉聞以寢招懷之事。然不先聞於王。故王疑有貳心。即配雲興島。接伴起居舍人潘阜亦坐不告流彩雲島。阜方對黑的武士突入曳出。黑的怒詰問。知之乃還藏用書。且曰。我若歸奏

〔綿々〕長くして絶えざる貌也、詩經に出づ。

〔天命難諶〕德なきものは、天之を去つて助けず、故に天運信じ難しと也、書經に、天難諶、命靡常、とあり、諶は信實の義也。

〔蠢爾〕小蟲のうごめく貌を云ふ、詩經に、蠢爾蠻荊、大邦爲讎とあり。

〔蜂蠆之毒〕形小なるも毒甚しきを云ふ、蠆は「さそり」也。

〔隋文帝〕隋第一世の皇帝也。

〔日生處天子云々〕推古天皇の遣し給ひし御書と察せらる。

此書。幸而聽之。天下福也。如不之聽。於汝國亦有何罪。罔止之。由是皆獲免。○遣起居舍人潘阜。賫蒙古書及國書。如日本。蒙古書曰。大蒙古皇帝奉書日本國王。朕惟自古小國之君。境土相接。云云以至用兵。夫孰所好。王其圖之。國書曰。我國臣事蒙古大國。稟正朔有年矣。皇帝仁明以天下爲一家。視遠如邇。日月所照。咸仰其德。今欲通好於貴國。而詔寡人云。日本與高麗爲隣。典章政治有足嘉者。漢唐而下屢通中國。故特遣書以往。勿以風濤阻險爲辭。其旨嚴切。玆不獲已。遣其官某。奉皇帝書前去。貴國之通好中國。無代無之。況今皇帝之欲通好貴國者。非利其貢獻。蓋欲以無外之名。高於天下耳。若得貴國之通好。必厚待之。其遣一介之使。以往觀之。何如也。貴國商酌焉。○冬十一月遣弟安慶公淐。如蒙古賀正。因告更遣潘阜使於日本。

今按。咸淳三年當文永四年。

戊辰九年宋咸淳四年蒙古至元五年二月安慶公淐還自蒙古。賜王西錦一匹。曆日一道。初帝以趙以彝之譖怒不解。親勑淐曰。前日爾國所奏。朕今說之。爾其詳聽。云云便與日本交通。爾國人來居此者。無不知之。爾於前日何言未嘗交通。以欺朕乎。爾等所奏皆是妄說。不必答也。○六月蒙古遣吾都止。偕李藏用來閱戰艦軍額。初藏用謁帝。帝曰。朕命爾國出師助戰。云云爾等不知。出師將討何國。是乃欲討宋與日本耳。今朕視爾國猶一家。爾國有難朕不救乎。朕征不庭之國。爾國出師助戰。亦宜也。爾歸語王。造戰艦一千艘。其大可載米三四千碩者。云云帝又曰。爾國於宋風順則可兩三日而至。日本則朝發夕至。云云○秋七月遣閤門使孫世貞郎將吳惟碩。如蒙古賀節日。又遣起居舍人潘阜偕

〔稟正朔〕其統治に服するをいふ。

〔寡人〕寡は少也、少德の人の義にて諸侯の謙稱也、もと周代に始まる、禮記曲禮下篇に、自稱其與民言、曰寡人、とあり。

〔文永〕龜山天皇御宇の年號也。

〔宋與日本云々〕蒙古は憲宗の時宋を討ちしが軍中に死して功成らず、世祖其遺志を繼ぎ南征を劃せし也。

〔太宰府〕筑前國御笠郡太宰府村に在る廳にして、西海道を總管し兼ねて外寇を防ぎ外交のことを掌る、但し當時は別に鎭西奉行ありてこれ等のことを行はしめしにより太宰府は全く有名無實なりき

〔國贐〕國の贈物也

〔至元〕元世祖の時の年號也。

行。上書曰。向詔臣以宣諭日本。臣卽差陪臣潘阜。奉皇帝璽書。幷賫臣書及國贐。往諭其國。使不納王都。留諸西偏太宰府者凡五月。館待甚薄。授以詔旨。而無報章。又贈國贐。多方告諭。竟不聽。逼而送之。以故不得要領而還。未副聖慮。惶懼實深。○冬十月蒙古遣明威將軍都統領脫朶兒武德將軍統領王國昌武略將軍副統領劉傑等。來閱軍額戰艦。仍視日本水道黑山島。又令耽羅別造船百艘。王使郎將朴臣甫都兵馬錄事禹天錫從國昌劉傑等往視黑山島。○十一月蒙古遣兵部侍郎黑的禮部侍郎殷弘等來。詔曰。向委卿導達使者。泛至日本。卿乃飾辭以爲風浪險阻。不可輕涉。中道乃還。其言若是。今潘阜等何由得達。今來奏有潘阜至日本。逼而送還之語。此亦安足取信。今復遣使以往。期於必達。卿當令重臣導達。毋致如前稽阻。○十二月遣知門下省事申思佺侍郎陳子厚起居舍人潘阜。偕黑的殷弘如日本。

今按。咸淳四年當日本文永五年。

卷之二十五

高麗紀

元宗二

十年（己巳 宋咸淳五年蒙古至元六年）三月黑的及申思佺等至對馬島。執倭二人以還。○夏四月遣參知政事申思佺。偕黑的以倭二人如蒙古。○秋七月蒙古使于娶大等遣還倭人。初申思佺以倭人謁帝。帝喜曰。爾王祇稟朕命。爾等不以險難爲辭。入不測之地。生還復命。忠節可嘉。厚賜匹帛。又謂倭人曰。爾國朝

〔南宋〕宋第九世欽宗の時金入寇して汴を陷れ欽宗等を擒へて北に歸る、依て欽宗の弟高宗位に即き金を避けて江南の臨安に都す、爾後を南宋と稱せり。

〔秘書監〕秘密の記錄を掌る官也、漢桓帝の時始めてこれを置く。

〔鳩集〕集むる也、書經堯典篇に、共工方鳩僝功、とある傳に、鳩聚と見えたり。

觀中國其來尙矣。今朕欲爾國之來朝。非以逼汝也。但欲垂名於後耳。賚予甚稠。

今按。咸淳五年當文永六年。

庚午十一年宋咸淳六年蒙古至元七年十二月世子諶還自蒙古。帝命斷事官不花孟祺等俱來。詔曰。云云且爾國與南宋日本交通。卿以惑於小人之言以爲無有。今歲行省獲南宋商船。及日本人嘗往來爾國者。以告朕。知卿平日之言皆詐也。

今按咸淳六年當文永七年。

卷之三十六

高麗紀

元宗三

辛未十二年宋咸淳七年蒙古至元八年春正月遣樞密院使金鍊。如蒙古請婚。且辨與日本南宋交通。○蒙古遣秘書監趙良弼來。詔曰。朕惟日本自昔通好中國。又與卿國地相密邇。故嘗詔卿導達去使講信修睦。爲渠疆吏所梗。不獲明諭朕意。後以林衍之故不暇及。今既輯爾家。復遣趙良弼充國信使。期于必達。仍遣忽林赤王國昌洪茶丘。將兵送抵海上。比使者還姑令金州等處屯駐。所需糧餉卿可委官赴彼逐近供給。鳩集船艦待於金州。無致稽緩匱乏。王迎詔于郊。茶丘見王不拜。又以中書省牒來索其叔父百壽。王拜百壽樞密副使致仕。將遣之。茶丘故爲遷延。竟不偕去。蓋欲激帝怒而危國家也。○趙良弼請與倖臣康允紹偕行。王不得已從之。○三月蒙古遣忻都及史樞等代阿海。詔曰。

〔屯田〕兵を分ちて要害の處に屯せしめ、事なき時農事に從はしむるを云ふ、漢武帝の時に起ると云ふ。

〔世子〕古へ世と太と通ず、依て太子を一に世子に作りしが、後世は天子に太子と稱し、諸侯に世子と稱す。

〔燕京〕今の北京也

〔神國〕神明これを創き神裔これを統べ給ふ國の義也、神皇正統記に、大日本は神國なり、天祖はじめて基を開き、日神長く統を垂れ給ふ、我國のみ此事あり、異朝には其たぐひなし、此故に神國といふなりとあり。

朕嘗遣信使通諭日本。不謂執迷固閉。難以善言開諭。此卿所知。今將經略於彼。勅有司發卒屯田。用爲進取之計。庶免爾國他日轉輸之勞。仍復遣使。持書先示招懷。卿其悉心盡慮。裨贊方略。期於有成以稱朕意。

今按。咸淳七年當文永八年。

（壬申）十三年（宋咸淳八年 元至元九年）春正月趙良弼還自日本。遣書狀官張鐸。率日本使十二人如元。○二月世子諶至自元。世子久留燕京。從者皆愁思東歸。勸世子以東征事。請帝而還。云云世子知之。不得已遂告都省。以請于帝曰。惟日本未蒙聖化。戰艦兵糧方在所須。儻以此事委臣。庶幾勉盡心力。小助王師。帝遣斷事官不花郎中馬絳。護世子還國。中書省移文令具舟糧助征。國人見世子辮髮胡服皆歎息至有泣下者。○夏四月日本使還自元。張鐸宣帝命曰。譯語別將徐偁校尉金貯使日本有功。宜加大職。於是拜偁爲將軍。貯爲郎將。遣御史康之邵護日本使還其國。○秋七月倭船到金州慶尙道。安撫使曹子一恐交通事覺。獲譏于元。密令還國。洪茶丘聞之。嚴鞫子一。鍛鍊其辭聞于帝。遂殺之。

今按。咸淳八年當文永九年。高麗懦弱。王子沈綿盜賊間。遂至於辮髮胡服。其國人歎息而泣者宜也。我朝不通好于蒙古。不失神國風。可謂全盛也。高麗世爲日本附庸。而終黨蒙古。故日本人到于今罵異類曰牟苦梨骨日離（ムクリコクリ）。乃蒙古高勾麗（ムクコクリ）之轉音也。

（癸酉）十四年（宋咸淳九年 元至元十年）三月元復遣趙良弼如日本招諭。良弼至太宰府。不得入國都而還。

〔吉續記〕二十三冊龜山天皇の文永四年以後の吉田定房の日記也、吉田經房の「吉記」に倣ひて名づけたりといふ。

〔亞相〕大納言の唐名也、其地位相に亞ぐを以て名づく

〔仙洞〕上皇又は其御所を申す。

〔太宰少卿〕太宰少貳を云ふ、其唐名都督少卿なるよりいへり。

〔菅原長成〕爲成の子也。

〔逋租〕年租の未納なるを云ふ。

今按、咸淳九年當文永十年、趙良弼事見元史、在上卷、不得入國都、證之我國記、吉續記曰、文永八年十月廿三日、先是蒙古船着今津郡、此地自太宰府相隔一二里奉牒狀、依此事東使入洛、向西園寺亞相亭、亞相參仙洞執奏、故今日可有評定之由、師中納言奉行、廿四日蒙古事、去夜評議、關白華山院前右大臣內大臣權大納言吉田中納言師中納言等相議云。初蒙古使曰。當持參牒狀于國都。若不然則不可手釋牒狀。太宰少卿曰、舊貊無入國都例、使亦難有所對遂不能入帝都。使者乃寫牒狀、與少卿、關東進之、彼狀意數投牒狀而無報。故今以十一月為期、猶無答書、可艤兵船、案議曰、當有答書、於是菅原長成草創之、而無報。

甲戌十五年　宋咸淳十年元至元十一年　三月元遣使來命發軍五千、助征日本。時全羅州道造船。洪茶丘所領監造軍供給不足。輸東京晉州道內米與之、王患徭役之煩。轉輸之弊。有防農務。遣上將軍李汾禧往稅茶丘。頗丘頗然之。每一船留五十人、其餘悉放歸農。○夏四月遣諫議大夫郭汝弼如元。上表曰、向者洪茶丘移書金方慶曰、船三百艘、梢工水手一萬五千人、宜先備之。小邦地偏人稀、加以喪亂。往者征耽羅兵卒萬師。悉赴造舡之役。今征日本之師、將於何出。小邦北界諸城。及西海道逋租之民。往投東寧府者皆習操舟。請悉刷還以補軍額。又自庚午至今五年。供軍糧餉。早曾之絕。今此造船屯田。及洪摠管軍濟州留守軍糧。悉令陪臣及百姓供給。尚不能纔特蒙聖慈、運米二萬碩以補之。又賜糧價絹匹。報謝無階、然公私匱竭。又因造船農失其業。貨絹峙糧恐不如意。○秋八月日本征討都元帥忽敦來自元。○冬十月都督使金方慶將中軍、朴之亮金忻知兵馬事任愷為副使。樞密院副使金

〔至一岐島云々〕文永十一年十月五日元船四百五十艘對馬に入寇守護代資國奮戰せるも子息等悉く戰死して敗戰す、越えて十四日壹岐を攻め守護平景隆城を構へ防戰に努めしも遂に敵せず自刄す。
〔嚆矢〕嚆は嚆なるべし。かぶら矢也。
〔孟明焚舟〕孟明は百里奚の子、秦に仕ふ、繆公三十六年晉を討つに河を濟りて舟を焚き必死以て敵に當り大に晉を破る。
〔淮陰背水〕淮陰は漢高祖の臣淮陰侯韓信也、漢三年韓信趙を討ちし時水を背にして陣し大捷せしを云ふ。

侁爲左軍使。韋得儒知兵馬事孫世貞爲副使。上將軍金文庇爲右軍使。羅裕朴保知兵馬事潘阜爲副使。號三翼軍。與元都元帥忽敦右副元帥洪茶丘右副元帥劉復亨以蒙漢軍二萬五千。我軍八千。梢工引海水手六千七百。戰艦九百餘艘發合浦。越十一日船至一岐(イキ)島。倭兵陣於岸上。之亮趙朴逐之。倭請降而復戰。茶丘與之亮朴擊殺千餘級。捨舟三郎浦。分道以進。所殺過當。倭兵突至衝中軍。方慶拔一嚆矢。厲聲大喝。倭辟易而走。之亮忻抃李唐公金天祿申奕等殊死戰。倭兵大破。伏屍如麻。忽敦曰。雖蒙人習戰何以加此。諸軍終日戰。及暮乃解。方慶謂忽敦茶丘曰。我兵雖少已入敵境。人自爲戰。即孟明焚舟。淮陰背水也。請復決戰。忽敦曰。小敵之堅大敵之擒。策疲兵戰大敵非完計也。不若回軍。復亨中流矢。先登舟。故遂引兵還。會夜大風雨。戰艦觸巖崖多敗。侁墮水死。

今按。咸淳十年當文永十一年。

異稱日本傳卷下一終

異稱日本傳　卷下二

〔忠烈王〕高麗第二十五世の王也。

〔孝恭帝〕南宋第七代の皇帝也、度宗の次子、在位二年にして元兵に降る。

〔後宇多天皇〕人皇第九十一代の天皇也、龜山天皇の第二皇子にして御名を世仁と申す。

〔端宗〕南宋第八代の皇帝也。

又卷之三十七

高麗紀　忠烈王一

乙亥元年（宋孝恭帝德祐元年元至元十二年）春正月遣門下侍中金方慶。大將軍印公秀如元。表奏曰。小邦近因掃除逆賊。大軍糧餉連歲戶收。加以征討倭邦。修造戰艦。丁壯悉赴工役。老弱僅得耕種。早旱晚水禾不登場。國用彫弊。況兵傷水溺不返者多。雖有遺噍。不可以歲月期其蘇息也。若復擧事日本。則戰艦兵糧實非小邦所能支也。伏望審收裁欵。○二月元遣宣諭日本使禮部侍郎殷世忠。兵部郎中河文著來。○秋九月元遣使與劔工古內來。古內在元言。高麗有路。可徑至日本。故遣之。○冬十月以金光遠爲慶尙道都指揮使。修戰艦。以元將復征日本也。

今按。德祐元年當日本後宇多天皇建治元年。

丙子二年（宋端宗景炎元年元至元十三年）秋七月遣中贊金方慶直史館文璉。如元賀聖節。王上書中書省曰。達魯花赤經歷張國綱。明敏淸平百姓德之。瓜期已滿。乞令留任。陪臣金方慶佐宮軍。攻破珍島耽羅。及征日本。修造戰艦。揚兵海上。實有力焉。乞賜虎頭金牌。用勸者來。○十二月郎將王涓宗室疏屬也。廣平公

謔奪其奴婢。消增密直金侁訟而得之。後征倭溺死。謔獻其奴婢于公主。公主召老奴問。其奴婢與謔奴婢。連婚接派者幾三百人。公主幷取之。謔扣頭宮門請還之。不許。有一尼。獻白苧布。細如蟬翼。雜以花紋。公主以示市商。皆云。前所未覩也。問尼。何從得此。對曰。吾有一婢。能織之。公主曰。以婢遺我如何。尼愕然不得已納焉。公主嘗以松子人參送江南。獲厚利。後分遣宦官求之。雖不產之地無不徵納。民甚苦之。

今按。景炎元年當建治二年。

丁丑三年宋景炎二年元至元十四年冬十二月帝欲復征日本。以茶丘爲征東都元帥。

今按。景炎二年當建治三年。

戊寅四年宋帝昺祥興元年元至元十五年秋七月王謁帝。云云王又奏曰。日本一島夷耳。恃險不庭。敢抗王師。臣願更造船積穀。聲罪致討。帝曰。王歸與宰相熟計。遣人奏之。〔〕王上書于帝。云云又請留合浦鎭戍軍以備倭寇。帝曰。何必留之。其能無害於汝民乎。汝可自用汝國人鎭戍。倭寇不足畏也。

今按。祥興元年當後宇多天皇弘安元年。

又卷之二十八

高麗紀　忠烈王一

己卯五年宋祥興二年元至元十六年秋七月初帝遣使日本。王令舍人郎將徐賛。及梢工上左等三十人導行。倭人皆殺之。惟上左等四人逃還。遣郎將池琠如元奏之。

〔公主〕天子の女を云ふ、天子女を諸侯に嫁する時に必ず同姓の諸侯をして之を主らしむ、依て公主と云ふ由公羊傳に見えたり

〔宦官〕宮中の小吏也、閹人を云ふ、男子の勢を去りたる者也。

〔宋帝昺〕南宋第九代の皇帝也、元の攻撃を避け崖山に遷りしが、後ち敗死して宋滅ぶ。

〔不庭〕政に服せざる也。

〔上都〕今の北京也蒙古は太宗の時都を喀喇和林に奠めしが、世祖大汗の位に卽くに及び、此地に都を遷せしなり。

〔陛下〕陛は階也、群臣天子に奏するには必ず先づ階下の近臣に告げ傳奏せしむ、依て天子の尊稱となれり、事物紀原に、周以前天子無陛下之呼、史記李斯議事、始呼之耳、則此號秦禮也、漢霍光奏太后、亦曰陛下也、とあり。

〔霾雨〕陰雨也。

〔供億〕物の不足を補ひて安心せしむるを云ふ。

今按。祥興二年當弘安二年。

實長六年元至元十七年五月倭賊入固城漆浦。遣大將軍韓希愈防守海島。又選忽赤巡馬諸領府二百人。分守于慶尚全羅道。倭賊又寇合浦。乃遣大將軍印侯郎將池瑄告于元。○八月王如元。至上都謁帝。云云時忻都茶丘范文虎皆先受東征畫策。茶丘曰。臣若不擧日本。何面目復見陛下。於是約曰。茶丘忻都率蒙麗漢四萬軍發合浦。范文虎率蠻軍十萬發江南。俱會一岐島。兩軍畢集。直抵日本城下破之必矣。○十一月遣右承旨趙仁規大將軍印侯如元。上中書省書曰。小國已備兵船九百艘。軍一萬。梢工水手一萬五千。兵糧以漢碩計者十一萬。以至器械皆備。庶幾盡力以報聖恩。云云近得行省牒。將以明年五六月發船。我國每歲五六月霾雨不止。小有西風。海道霧暗。儻或淹留時日。未即發船。恐軍民一時乏食。若不預先申覆後有闕誤。利害非輕。云云小邦軍官曾於珍島耽羅日本之役。累有戰功。未蒙官賞。乞追錄前功。○十二月趙仁規印侯還自元。帝冊王爲開府儀同三司中書左丞相行中書省事。賜印。又以金方慶管領高麗軍都元帥。朴球金周鼎爲昭勇大將軍左右副都統。並賜虎頭金牌印。趙仁規爲宣武將軍王京斷事官。兼脫脫禾孫。賜金牌印。朴之亮等十人爲武德將軍管軍千戶。賜金牌印。趙抃等十人爲昭信校尉管軍摠把。賜銀牌印。金仲成等二十人爲忠顯校尉管軍摠把。時征日本戰艦軍粮器仗。令本國一切幹辦。而遣元帥忻都右丞洪茶丘監督。君臣拱手聽命。力不能堪。朴恒言於王。具以狀奏。帝乃有是命。萬戶千戶百戶俱受宣命符信。使忻都等不得自專。其東征供億之策。及軍機措置。皆自恒出。

〔芻豆〕秣（マグサ）と豆即ち馬の飼料也

〔駙馬〕天子の乘輿に用ふる副馬を云ひ駙馬都尉の官を置きこれを掌らしめしが、魏晉の世より、公主に尙する者は必ず此官に拜す、漢書百官公卿表注に、駙、副馬也、非正駕車、皆爲副馬、とあり又た行營雜錄に、皇女爲公主、其夫必拜駙馬都尉、故謂之駙馬、と見ゆ

〔尙公主〕天子の女を娶る也、康熙字典に、娶公主謂之尙。言帝王之女尊而尙之、不敢言娶、と見えたり。

〔梢工〕舵取也。

今按。至元十七年當弘安三年。

七年（辛巳）（元至元十八年）春正月遣知密直司事韓康于忠淸交州道。以備軍馬芻豆。〇金方慶還自元。帝賜方慶弓矢劍白羽甲。又賜弓一千。甲冑一百。緋襖二百。令分賜東征將士。〇三月元帥金方慶萬戶朴球金周鼎等率師向合浦。元遣忻都洪茶丘來。〇元賜駙馬國王宣命征東行中書省印。先是王奏曰、臣旣尙公主。乞改宣命益駙馬二字。帝許之。〇王與忻都洪茶丘議事。王南面。忻都等東面。事元以來、王與使者東西相對。今忻都茶丘不敢抗禮。國人大悅。忻都等遂往合浦。〇夏四月丙寅朔幸合浦。〇致仕宰雖遭父母喪、過五十日、卽從軍。〇五月戊戌忻都茶丘及金方慶朴球金周鼎等以舟師征日本。〇辛酉忻都茶丘金方慶至日本世界村大明浦。使通事金貯檄諭之。金周鼎先與倭交鋒。諸軍皆下與戰。郞將康彥康師子等死之。諸軍向一岐島。船軍一百十三人。梢工三十六人。遭風失其所之。遣郞將柳庇告于元。〇六月金方慶金周鼎朴球朴之亮荊萬戶等與日本兵力戰。斬首三百餘級。日本兵突進。官軍潰。茶丘棄馬走。王萬戶復橫擊之。斬五十餘級。日本兵乃退。茶丘僅免。翼日復戰敗績。軍中大疫。死于兵疫者凡三千餘人。忻都茶丘等累戰不利。且范文虎過期不至。議回軍曰、聖旨令江南軍與東路軍六月望前必會于一岐島。今南軍不及期。我軍先到。大戰者數矣。船腐糧盡。其將奈何。方慶默然。經十餘日又議如初。方慶曰。奉聖旨賫三月糧。今一月糧尙在。俟南軍來合而攻之。必滅島夷矣。諸將莫敢復言。旣而文虎以戰艦三千五百艘蠻軍十餘萬至。適値大風。蠻軍皆溺死。屍隨潮汐入浦。浦爲之塞。可踐而行。〇元遣兵三百騎。來戍合浦。〇己酉王至自合浦。〇金方慶使中郞將朴

品奏。諸軍至太宰府與戰交綏而退。蠻船五十艘隨至。復進戰。因獻所獲甲冑弓矢鞍馬等物。拜品撝將軍。〇閏八月遣左司議潘阜。勞忻都茶丘文虎。忻都等遂北還。元軍不返者無慮十萬有幾。我軍不返者亦七千餘人。〇冬十月元置鎭邊萬戶府於金州等處。以印侯爲昭勇大將軍鎭邊萬戶。賜虎符及印。張舜龍爲宣武將軍鎭邊管軍總管。

今按。至元十八年當弘安四年。

八年〔壬午、元至元十九年〕春正月元罷征東行中書省。〇二月罷征東戰亡者欠負官錢。〇三月遣上將軍印侯戍合浦。〇夏四月元遣不八思馮元吉來勸兵糧。又以東征軍敗遣兵二百四十戍合浦。六十守王京。以備不虞。東征時所支兵糧十二萬三千五百六十餘碩。〇六月蠻軍摠把沈聰等六人自日本逃還。遣上將軍印侯郎將柳庇送于元。〇十一月元遣禿滿貢仲謙來修戰艦。復征日本也。遣知密直司事宗玢于慶尙道。同知密直司事金伯鈞于全羅道。密直副使禹潛于忠淸道。判司宰之卿于西海道。董之。

今按。至元十九年當弘安五年。

九年〔癸未、元至元二十年〕春正月遣郎將仇千壽。如元覘東征緩急。至平灤州。見修戰艦乃還。〇元遣東于李良茂。送楮幣三千錠。爲修戰艦費。本國人廣瞯言於帝曰。以蠻夷攻蠻夷中國之勢也。請令高麗蠻子征日本。勿遣蒙古軍。又令高麗備兵粮一十萬碩。帝許之。禿魯花金忻等問瞯曰。汝非黠弱賚諒之孫耶。而欲壞國家如此。瞯曰。汝國王如泥塑佛耳。尹秀李貞元卿朴義梁善大等。剝民所取。亦足以備軍糧。我欲去左右姦臣復正三韓也。〇三月中郎將柳庇自元還言。帝徵江南軍。將以八月征

〔交綏〕兩軍共に退くを云ふ、左傳文公十二年に、乃皆出戰交綏、とありて其注に、古名退軍爲綏と見ゆ。

〔虎符〕龍虎は威猛あれば兵符にこれを圖する例なりき、その虎を圖せるを虎符と云ひ、龍を圖せるを龍節と名づく。

〔董〕明かにする也

〔上將軍〕軍の總大將也、春秋戰國の頃始めて此名出づ

日本。○重房調東征軍。往往有撤屋而逃。重房請奪田以與從軍者。四隣不告。徵白金一斤。舍匿者二斤。又遣部夫使于諸道。○令諸王百官及工商奴隷僧徒出軍糧有差。○遣使諸道。備兵糧。造軍器。修戰艦。○遣副知密直司事趙仁規。如元請減軍糧。帝曰。人言。汝國足備二十萬碩。若誠不能量力爲之。○夏四月元遣塔納阿孛禿剌。來督修戰艦。○東界杆城人宋蕃告於元曰。高麗東西界歸於朝廷。其田尙爲國人所有。計其畝可得四萬碩。請充東征軍糧。中書省遣人徵之。王問宰樞曰。朝廷以蕃之言。徵發軍糧四萬碩。奈何。對曰。前者原隰請賦二十萬碩。家抽戶斂至於窮獨僅得四分之一。若增四萬何以辨之。宜更遣人奏請。○五月鄭仁卿等還自元言。帝寢東征。王命罷修艦調兵等事。○六月元册王爲征東中書省左丞相。

今按。至元二十年當弘安六年。

乙酉十一年元至正二十二年十二月元中書省遣人來督造船。○以同知密直司事宋玢爲慶尙道造船都指揮使。又遣使諸道。督造船。備軍糧。○元中書省移牒調發軍粮十萬碩。

今按。至元二十二年當弘安八年。

卷之三十九

高麗紀　忠烈王三

丙戌十二年元至元二十三年春正月元遣使詔。大赦寢東征。命王勿朝。

今按。至元二十三年當弘安九年。

戊子十四年元至元二十五年夏四月元詔以王爲征東行尙書省左丞相。

〔帝寢東征〕此時淮西の宣慰使昂吉兒、中丞の崔彧等庶民の勞甚だしきを以て暫く兵を留めんことを奏し軍議罷みしと云ふ

〔弘安八年〕後宇多天皇の御宇也、此年北條貞時時宗につぎ執權となる。

〔大赦〕罪人を悉く放免するを云ふ、文獻通考刑考に、宋朝赦宥之制、其非常覃慶則常赦不原者咸除之、其次釋雜犯死罪以下、皆謂之大赦、と見えたり。

今按。至元二十五年。當日本伏見天皇正應元年。

庚寅十六年元至元二十七年三月前知僉議府事金周鼎卒。云云東征之役颶風覆舟。官軍多溺死。周鼎以計拯溺所活甚衆。

今按。至元二十七年。當正應三年。

壬辰十八年元至元二十九年八月世子謁帝于紫檀殿。先是有人。奏帝以爲。江南戰艦制大。遇觸則毀。此所以失利也。如使高麗造舶。再征日本可取也。至是帝問東征事。洪君祥曰。軍事至大。宜先遣使問諸高麗。然後行之。帝然之。○九月元遣洪君祥。來命我護送日本人還其國。又令招諭日本。君祥以帝命問再征日本事。王對曰。臣既隣不庭之俗。庶當躬自致討以效微勞。仍以監察御史金有成陞大僕尹。爲官諭使。直文翰署郭麟陞供驛署令。爲書狀官。護送之。仍致書諭以禍福。時書狀闕。人皆以計。避麟擢狀元。忠直有文章。語衆曰。事不辭難臣子之義。何辭爲。或以白宰相。宰相喜充書狀。婦翁權謁欲謁宰相復奏。麟奮然曰。死一也。死國事不猶愈於死妻子之手乎。遂行。日本嘗懲東征。皆拘留不還。二人存歿世不得聞。○敎曰。諸道之民。自兵興以來。流亡失業。在元王己巳年。計點民戶。更定貢賦。厥後賦斂不均。民受其病。可更遣使者量戶口之贏縮。土田之墾荒。計定民賦以遂民生。

今按。至元二十九年。當正應五年。

癸巳十九年元至元三十年秋八月元遣萬戶洪波豆兒。來管造船。寶錢庫副使瞻思丁管軍粮。將復征日本也。波豆兒乃福源之孫。望王宮下馬。流涕曰。雖是衣錦還鄕。職是勞民可愧也。禮遇宰相甚恭。○分遣

〔伏見天皇〕人皇第九十二代の天皇也後深草天皇の第二皇子にして、御名を煕仁と申す。

〔洪君祥〕小字は雙叔、福源の第五子也、元に仕へ高麗を鎭撫して功績ありしが、宋に降り同僉樞密院事に歷遷し、歸りて皇華山に退居す、後召されて遼陽行省左丞となり官に卒す

〔福源〕始め高麗に在り、蒙古太祖の兵來りし時衆を率ゐて歸降す、太祖依て管領を授け高麗軍民を招討せしむ、定宗の時命を奉じて諸國を平定せしが讒により殺さる。

都指揮使判密直金之淑于忠清道。知密直崔有渰于全羅道。都僉議參理金㥠于慶尙道。以備船粮。○遣郎將宋英。如元請親朝奏征日本事宜。

今按。至元三十年當永仁元年。

二十年（甲午）（元至元三十一年）春正月罷造戰艦。時王入朝欲陳東征不便。會帝崩。洪君祥白丞相完澤。遂寢東征。○十二月元遣中書舍人愛阿赤來。先是爲征日本運江南米十萬碩在江華島。今遼瀋告饑。帝詔以五萬碩賑之。

今按。至元三十一年當永仁二年。

又卷之四十

高麗紀　忠烈王五

二十八年（壬寅）（元大德六年）十二月遼陽省奏。帝請併征東遼陽爲一省。移司東京。王上表。以征東立省。本爲鎭遇倭寇。今自東京至我開京一千五百餘里。自開京至合浦一千四百餘里。若以征東省移置東京。則合浦海外如有告急。往返數千餘里。必不能相及。請仍舊制以鎭東方。

今按。大德六年當日本後二條天皇乾元元年。

三十二年（丙午）（元大德十年）秋七月僉議中贊韓希愈卒于元。希愈性撲素。略達善射御。有膽力。從金方慶討珍島耽羅日本。皆有功。

今按。大德十年當德治元年。

〔二十年〕高麗忠烈王の二十年也。

〔江華島〕京畿道にあり、北は開城郡に對し、東南は仁川に對す、漢江の流口にある一島にて、周回三十餘里、曾て、蒙古の爲めに高麗の攻めらるゝや國王こゝに逃れ、又李成桂の爲めに禑王の幽せられたる處也。

〔忠烈王〕高麗王二十五世、元宗の子也、其治世我が後宇多、伏見、後二條の四朝に當る。

〔大德〕元朝二世成宗の時の年號、十一年にして、至大と改む。

〔忠定王〕高麗王三十世、二十八世忠惠王の子にして、二十九世忠穆王の弟也、我が後村上天皇(吉野朝時代)の時代に當る。

〔竹林〕慶尙南道固城郡巨濟島の西岸にあり、島中第一の良港にして、後に鷄籠山聳え、前に蜂巖島横はり、港内廣く水深し。

〔巨濟〕巨濟島にあり、巨濟島は、慶尙南道の南海岸にありて、馬山浦に相對す、古、倭寇の根據地となり、又豐太閤征韓の役には彼我海軍の爭地たり、一に裳島とも稱す。

〔恭愍王〕高麗王三十一世、二十八世忠惠王の弟也。

又卷之四十五

高麗紀　忠定王

二年（庚寅・元至正十年）春二月倭寇固城竹林巨濟等處。合浦千戸崔禪等戰破之。賊死者三百餘人、倭寇之興始此。○夏四月倭賊百餘艘寇順天府。掠南京求禮靈光長興府漕船。○五月倭賊六十六艘寇順天府。我兵追獲一艘。斬十三級。○六月倭賊二十艘寇合浦。焚其營。又寇固城會源長興府。

今按、至正十年當日本南朝後村上天皇正平五年。北朝崇光天皇觀應元年。

三年（辛卯・元至正十一年）秋八月倭船一百三十艘來寇紫燕三木二島。焚其民舍。殆盡。又焚南陽府雙阜縣。遣萬戸元顥于西北面。萬戸印璫前密直李權于西北。屯兵以備之。又命璫等入海捕倭。權還白王曰。臣非將。又不食祿。不敢奉命。固辭不行。○十一月倭寇南海縣。

今按。至正十一年當日本南朝正平六年。北朝觀應二年。

又卷之四十六

高麗紀　恭愍王

元年（壬辰・元至正十二年）三月命內府少尹金暉南。率戰艦二十五艘禦倭。至楓島遇賊船二十艘。不戰而退。至喬桐。又望見賊船甚盛。遂還西江。請濟師。與倭賊戰于宥梁安興長岩等處。獲賊船一艘。王除暉南左常侍。○瑞州防護所獲倭船一艘殲之。○倭船大至。金暉南兵少不能敵。退次西江。告急。鷹揚軍上將軍金鏞調發諸領兵。婦女攔街痛哭。都城大駭。又斂百官坊里民戶軍糧及箭有差。○倭焚喬桐

〔沃溝〕全羅南道沃溝郡にあり、群山浦を去る二里、全州街道にあり、往昔沃溝府と稱せり。

〔忠宣王〕高麗王二十六世、忠烈王の子也。

〔喬桐〕京畿道にあり、京城を去る北西十六里の地にあり。

〔顯戮〕罪人を斬りてさらすこと、書經に「功多有厚賞、不迪有顯戮」とある顯戮も、此の意也。

〔角山〕黄海道にあり、南は喬桐島に對し、禮成江の北岸にあり。

〔黔毛浦〕全羅道にあり。

甲山倉。前代言崔源與戰獲賊船二艘。○六月倭寇全羅道。知金州事金輝等領舟師擊之不克。沃溝監務鄭子龍坐逗留不進。杖配突山烽卒。

今按。至正十二年當日本南朝正平七年。北朝後光嚴天皇文和元年。

甲午三年元至正十四年 夏四月倭掠全羅道漕船四十餘艘。

乙未四年元至正十五年 夏四月倭掠全羅道漕船二百餘艘。

今按。至正十五年當日本正中十年。文和四年。

丁酉六年元至正十七年 九月倭入昇天府興天寺。取忠宣王及韓國公主眞而去。○閏九月倭寇喬桐。遣上將軍李云牧將軍李蒙古大追捕倭寇云。牧詭曰。若不殲賊請受顯戮。議者料其無成。果未獲一級。

今按。至正十七年當日本南朝正平十一年。北朝延文二年。

又卷之四十七

高麗紀　恭愍王二

戊戌七年元至正十八年 三月倭寇角山戍。燒船三百餘艘。○四月以大將軍崔瑩爲楊廣全羅道體覆使。仍命不能禦倭者悉以軍法論。○倭焚喬桐。京城戒嚴。發丁坊里爲軍。○都評議使司啓。近因倭寇漕運不通。百官俸祿不給。請自今諸封伯。已行侍中者從宰樞科。其餘伯依異姓諸君科。從之○秋七月倭侵黔毛浦。焚全羅道漕船。○八月倭焚花之梁。寇仁州。

今按。至正十八年當日本南朝正中十三年。北朝延文三年。

（碧成江）黃海道の北部滅惡山脈中に發し、南流して、黃海、京畿兩道の境を流れ、漢江、臨津江と合して、黃海に入る。

（甕津）黃海道にあり、京城を去る、北西四十二里なり。

（蔚州）慶尙南道の蔚山を云ふ。

（洞州）慶尙南道の洞川を云ふ。

（正平）後村上天皇御宇の年號也、二十四年にして（長慶天皇の二年）建德と改む。

八年〔己亥、元至正十九年〕五月倭寇碧成江。焚甕津縣。

今按、至正十九年當日本南朝正平十四年、北朝文和四年。

九年〔元至正二十年〕夏四月倭寇洞州角山。○五月倭寇全羅道會尼沃溝等處。又寇楊廣道平澤牙州新平等縣。焚龍城等十餘縣。京城戒嚴、以柳濯爲京畿兵馬都統使、李春富爲東江都兵馬使。我桓祖爲西江兵馬使。發丁坊里爲軍、又令百官助戰。諫官詣宮門拜辭。參政鄭世雲曰、諫官從軍古所未聞。如國儀何。王特免之。國子博士等上言、臣等侍於夫子廟、學官從軍古無其例。侍中廉悌臣李嵒皆曰、禰衡不侍孔子、孔子焉逃。簽書金希祖爭之不得。○閏五月倭寇江華。入禪源龍藏二寺。殺三百餘人。掠米四萬餘碩。有沈夢龍者斬倭十三級。竟死於賊。○倭焚喬桐縣。

今按、至正二十年當日本南朝正平十五年、北朝文和五年。

十年〔辛丑、元至正二十一年〕夏五月全羅道按廉使田祿生啓曰、州縣之弊防倭爲大。自庚寅以來道内之戍歲益增。置至十八所。其軍官虐州郡以立威、致其凋弊。役戍卒以營私、使之逋逃。及寇至徵兵州郡、謂之煙戶軍。雖有戍所、不聞禦寇。祇以害民。不若罷諸戍所、令州郡謹烽燧、嚴斥候以應其變。○八月倭寇掠東萊蔚州。焚其漕船。又寇梁州金海府洞州密城郡。

今按、至正二十一年當日本南朝正平十六年、北朝後光嚴天皇康安元年。

十二年〔元至正二十三年〕○三月倭國歸我被虜人三十餘口。○夏四月倭船二百十三艘泊喬桐。京城戒嚴。以安遇慶爲防禦使。

今按。至正二十三年當日本南朝正平十八年。北朝後光嚴天皇貞治二年。

又卷之四十八

高麗紀　恭愍王三

甲辰十三年元至正二十四年　三月倭船二百餘艘。寇河東固城泗州。金海密城梁州。○全羅道右道兵馬使邊光秀。左道兵馬使李善領漕船遇倭兵。與戰敗績。先是漕船阻倭不得運。王遣東北面武士友喬桐江華東西江戰船八十餘艘。命光秀善分將往護之。光秀船至代島。有內浦民被虜者。逃來告曰。賊伏兵伊作島。不可輕進。善不聽。鼓譟先進。賊以二艘逆之佯退。俄而賊五十餘艘圍之。兵馬判官李蓀孫。中郎將李和尙等。先與戰。盡爲賊所殺。諸船兵望見喪魄。投海死者十八九。光秀善等觀望不戰而退。戰卒大呼曰。兵馬使何棄士卒而退耶。願小駐爲國家破賊。光秀等終不救。士卒氣益沮喪由是大敗。唯副使朴成龍力戰全船而來。身中數矢。兵馬判官金承漢與判官金鉉散員李天生殊死戰賊退之不敢近。有賊船一艘。忽從西橫擊。士卒不能支。皆投水。獨承漢力戰中數矢。亦投水。然能泅故得不死。夜還登船。有一卒。中矢。亦投水。按舷。無力不能上。承漢引致船中。晝夜手棹三日得到南陽府。還者唯光秀善等船才二十艘而已。喬桐江華東西江哭聲相聞。光善等竟不坐。○全羅道都巡察使金鉉領漕船。遇倭兵與戰敗績。初鉉居羅州。以豪右奪古田民。資財傾富。嘗擊倭于木浦。受賞職。輪貨權要。屢爲捕倭使。時爲巡察使。時全羅道饑。重以兵革。民不聊生。鉉剝民掊克。無所不至。一方嗷嗷。大護軍宋芬死。其友服未闋。鉉托官事鉤致。自此強淫。因以爲妾。至是亦以漕船至內浦。與倭戰敗

〔羅州〕全羅南道羅州郡の主邑也、木浦を去る東方約十五里、東に光州、南に靈岩あり、北に錦城山聳え、東南榮山江に沿ひ、江を隔てゝ渺茫たる大平野に接し、地味肥沃にして、農畜の產物豐なり、此地新羅時代の著名の地にして、當時支那地方へ航する船舶の發航地點たりき。

〔木浦〕全羅南道にあり、今府制を施く、七市街地、十九面に分たる、榮山江の河口に在り、前に多島海あり、後に湖南の平野を控へ、農海の產物豐かなり。

〔掊克〕無理にものを徵發すること、此語詩經に出づ。

死者太半。變孝孚鉉將反擊之。王賜內醞迎勞。人多憤恨。○五月慶尚道都巡問使金續命擊倭三千於鎮海縣。大破之。獻兵仗。王賜衣酒金帶。賞戰士有差。○十二月倭寇阻江。殺關吏。

今按。至正二十四年當日本南朝正平十九年、北朝貞治三年。

乙巳十四年元至正二十五年　三月倭寇喬桐江華。命東西江都指揮使崔瑩。帥兵出鎮東江。○倭入昌陵。取世祖眞以歸。以金續命爲東西江都指揮使。○夏四月倭寇喬桐江華東西江。○五月貶贊成事崔瑩爲雞林尹。時照主密直金蘭家。蘭以二處女與之。瑩責蘭。妖僧遍照嫉之。會瑩與慶復興率私兵大獵東郊。時方旱蝗。識者譏之。照因是譖于王。王遣李珣讓之曰。倭入昌陵。取世祖眞。卿爲東西江都指揮使。而不知。以金續命代卿。而卿猶領其兵田獵無時何也。予雖不言。臺諫其不論乎。今以卿尹雞林。可亟之任。瑩聞命向闕。歎曰。今之得罪者鮮克保全。吾得尹雞林。聖恩厚矣。遂行。

今按。至正二十五年當日本南朝正平二十年、北朝貞治四年。

丙午十五年元至正二十六年　五月倭寇深嶽縣。○倭奪漕船三艘。死傷甚衆。又屠喬桐縣。京城大震。命安遇慶池龍壽李珣等。領三十三兵馬使。出屯東西江昇天府。時影殿正陵役大興。百司所事不出土木。庶事廢弛。倉廩虛竭。宿衛單弱。軍政不修。至無兵可操。無甲可授。諸軍索然望賊不敢進。○九月倭入陽川縣。掠漕船。○全羅道都巡問使金庾募兵得百艘。討濟州敗績。

今安。至正二十六年當日本南朝正平二十一年、北朝貞治五年。

丁未十六年元至正二十七年　三月倭掠江華府。

〔太半〕大半に同じ、半分以上なるに云ふ、漢書高帝紀の注に「韋昭曰、凡數二分、有二爲太半、有一分爲小半」とあり、又東方朔の文に「年既已過太半今」とあり。

〔世祖〕朝鮮王七世にして、四世世宗の子也、初め世宗の長子珦父王の讓りを承けて五世文宗となる、在位二年にして歿し、其子端宗繼ぐ、年幼なるを以つて叔父琇政を攝す、遂に實權を掌握して、之れに代る、世祖之れなり。

〔濟州〕全羅南道の濟州島の北岸にある、同島の主邑也、京城を去る南方水路八十六里餘也。

〔元至正二十八年〕我が紀元二千二十八年に當り、此の年正月朱元璋帝を稱し國を明と號す。四月明軍、元兵を破る、八月元亡ぶ、朱元璋即ち明の太祖也、故にこゝに大明太祖皇帝云々と並べて注せり。

〔禮山〕忠清南道禮山郡にあり、京城を去る南方二十二里二十八町也。

〔海州〕黃海道海州郡にあり、道の南部に位し、京城を去る北方三十四里古來同道の主驛にして、今も同道に廳並に海州郡衙あり、北に首陽山を負ひ、南、海州灣に臨み交通至便也

今按。至正二十七年當日本南朝正平二十二年北朝貞治六年。

戊申十七年元至正二十八年大明太祖高皇帝洪武元年春正月日本國遣使來。先是王忠倭寇侵擾。遣金逸請禁。故至是報聘。辛旽不爲禮。館待甚薄。其使梵盪等怒而去。

今按。至正二十八年當日本南朝正平二十三年北朝應安元年。　梵盪東人。詩話所謂。日本釋梵齡同人與。

己酉十八年大明洪武二年　十一月倭掠寧州溫水禮山沔州漕船。初倭人願居巨濟。永結和親。國家信而許之。至是入寇。

今按。洪武二年當日本南朝正平二十四年北朝應安二年。

又卷之四十九

高麗紀　恭愍王四

庚戌十九年大明洪武三年　二月倭寇內浦。掠諸州租船。又寇宣州。西北面元帥楊伯淵邀擊斬五十餘級。

今按。洪武三年當日本南朝建德元年北朝應安三年。

辛亥二十年大明洪武四年　三月倭入海州。火官廨。虜牧使妻及女。○秋七月倭寇禮成江。焚兵船四十餘艘。杖流兵馬使金立堅。

今按。洪武四年當日本南朝建德二年北朝應安四年。

壬子二十一年大明洪武五年　夏四月倭掠瑱溟倉。○六月倭寇江陵府及盈德德原二縣。時李春富子沃。沒爲東界官奴。及倭寇至我軍望風奔潰。府使按廉聞沃勇敢。授兵使擊之。沃力戰却之。王賜鞍馬免其役。

〇倭寇安邊咸州。以我太祖爲和寧府尹。仍爲元帥以禦倭賊。〇倭寇東界安邊等處。虜婦女。掠倉米萬餘碩。罷行誅使李子松。放歸田里。〇倭又寇咸州北靑州。萬戶趙仁璧伏兵大破之。斬首七十餘級。〇倭寇洪州。〇冬十月我軍與倭兵戰于陽州敗績。王親餞左軍出次昇天府。〇倭船二十七艘入陽州留三日。諸將領兵出戰。我軍皆成衆愛馬。未習水戰。故大敗。王以各司成衆愛馬及五部坊里人分隸左軍。親率出昇平。遂次龍泉寺峰。以宿衛不嚴。捉諸提調官。詰賛成事安師琦曰。予之此行非好遊。欲親行師如何耳。庚子辛丑之紅賊。庚寅以來之倭賊。非不可敵。而民被虜掠。因至播越者。以用兵無律。號令不嚴耳。今予親臨。尙有不用命者。況諸將代行者乎。卿其諭予意曉諭衆人。自今軍令毋或不謹。

今按。洪武五年當日本南朝文中元年。北朝後圓融天皇應安五年。

癸丑二十二年大明洪武六年　春二月倭寇龜山縣。慶尙道都巡問使洪師禹斬數百級。獻所獲器仗。〇倭寇河東郡。晋州人鄭任德嘗成是郡。適被疾。子愈懲擁父走避。賊追及之。愈射殺數人。賊不敢前。忽一賊奮劍突進。刺任德頰。遂以身蔽之。且斬四人。竟歿於賊。事聞。拜愈爲宗簿寺丞。〇夏四月全羅道都巡問使都興獻倭一俘。并獻所獲兵仗。〇倭船集東西江。寇陽川。遂至漢陽府。燒廬舍。殺掠人民。數百里騷然。京城大震。〇秋七月倭陷喬桐。〇倭寇海州。殺牧使嚴益謙。誅吏之不救者。降爲郡。〇以西海道萬戶許子麟不能禦倭。遣體覆使三司左尹鄭丹鳳杖之。丹鳳縊殺之。子麟弟訟其挾私枉殺。丹鳳逃。

〔洪州〕忠淸南道洪城郡にあり、京城を去る、南西二十七里也。

〔水戰〕舟いくさ也。後漢書岑彭傳に、上（光武）報彭、曰大司馬（吳漢）習用步騎不曉水戰と見ゆるも此の意也。

〔龜山縣〕一に龜城とも云ふ、今の慶尙北道義城郡の地也。

〔漢陽府〕京城の別稱、我が九十九代後龜山天皇の元中九年、李成桂、高麗國を亡し、朝鮮國を創め、自ら王位に卽き、都をこゝに奠めたり。

今按。洪武六年。當日本南朝文中元年。北朝應安五年。

甲寅二十三年大明洪武七年春正月。檢校中郎將李禧上書言。今倭寇方熾。乃驅不習舟楫之民。使之水戰。每至敗績。臣生長海邊。稍習水戰。願率濱海居民慣於操舟者。與之力戰。庶可立功。王慨然曰。草野之臣如禧者。尙獻計如此。百官衞士之中。曾無一人如禧者耶。衞士柳爰廷進曰。中郎將鄭准提嘗草平寇策。第未獻耳。准提適侍殿陛。王顧問之。准提卽取諸囊中以獻。王覽之大悅。以禧爲楊廣道安撫使。准提爲全羅道安撫使。並兼倭人追捕萬戶。王謂宰相曰。今爵禧等。卿等勿以爲異。冀其成功激人心耳。他日無功亦當不赦。時准提與禧再三上疏。凡數十條。其略以爲。深陵之民不閑舟楫。雖以禦倭。但簽生長海島及自請水戰者。令臣等將之。期以五年可淸海道。若都巡問使則徒費軍餉擾民生。乃罷之。准提後改名地。○二月倭寇安州。牧使朴修敬力戰却之。○夏四月米都巡問使金鉉。初鉉以吮癰流。復起附金興慶師著。得是職。貪殘無比。至是倭船三百五十艘來寇合浦。燒軍營兵船。士卒死者五十餘人。王遣趙琳誅之。支解以徇。○西海道萬戶李成副使韓方道寇思正與倭戰于木尾島。敗死。○倭寇紫燕島。○倭寇江陵三陟。又寇慶蔚二州。○九月以倭賊近境。都城戒嚴。○倭寇安州。○十二月倭寇密城。火官廨。掠人物。

今按。洪武七年。當日本南朝文中三年。北朝應安七年。

又卷之五十

高麗紀　辛禑一

〔安州〕平安南道安州郡にあり、京城を去る北六十四里（平壤よりは北十八里）にあり、淸川江の南岸に位す平壤義州間に於ける、屈指の都會にして、南北兩道を通じて穀物集散地として其の首位にあり。

〔合浦〕今の慶尙南道馬山府の古稱也、釜山の西南十四里餘に位し、加德、巨濟兩島其の前面を掩ひ、一大灣を成す、高麗時代合浦と稱す、元寇の役、彼軍の根據地たり。

〔慶蔚二州〕慶尙南道の蔚山と、慶尙北道の慶州也、

〔樂安〕もと全羅道に樂安郡の名あり今見えず。

〔寶城〕全羅南道寶城郡にあり、京城を去る南七十五里也。

〔瑞州〕今忠清南道瑞山郡瑞山を云ふ京城を去る南、三十一里餘也。

〔自金海云々〕金海は、慶尙南道金海郡の主驛也、下文「沂黃山江」の沂恐くは泝の誤、黃山江は洛東江を云へり、其の上流に密陽府城あり、密城是也。

辛禑元年（明洪武八年）○大（乙卯）三月倭寇慶陽縣。楊廣道都巡問使韓邦彥與戰敗績。○五月倭藤經光率衆來投。處之順天燕岐等處。官給資糧。○秋七月諭全羅道元帥金先致。誘殺藤經光。先致大具酒食。欲因餉殺之。謀緩而洩。經光率其衆。浮海而去。僅捕三人殺之。先致懼罪詐報。斬七十餘級。事覺編配戍卒。初倭寇州郡。不殺人物。自是激怒。每入寇婦女嬰孩屠殺無遺。全羅楊廣濱海州郡蕭然一空。○八月倭寇樂安寶城。○慶尙道副元帥尹承順斬倭二十級。○九月倭船大集德積紫燕二島。時將卒悉赴北征。乃簽軍坊里及諸陵戶。又徵兵楊廣全羅慶尙諸道。以我太祖及判三司事崔瑩領之。耀兵東西江。以備之。○倭寇寧木二州。崔瑩請征擊之。不許。○倭寇瑞州結城。○十一月楊廣道安撫使朴仁桂獲倭船一艘殲之。○倭寇金海府。殺掠民物。焚官廨。都巡問使曹敏修與戰敗績。又戰於大丘縣敗績。士卒死者甚衆。倭賊數十艘又自金海沂黃山江。將寇密城。敏修邀擊斬數十級。禑遣中使賜衣酒及馬。敏修上箋謝。命左正言金子粹製回敎。子粹辭曰。敏修摠兵一道。金海大丘之戰怯懦敗沒。多殺士卒。密城小捷功不掩罪。衣酒廐馬賞已過矣。又何回敎。且回敎紀功德。今敏修無功可紀。不敢奉命。禑怒下子粹巡衛府。命池奫河允源鞫之。奫等欲坐以違旨。子粹曰。先王置諫官。所以補君之失也。是以自古王者有不可。諫官諍之。願諸公察國家置諫官之意。奫大怒欲杖流。議諸都堂。諸宰相畏之無敢出言。密直副使李寶林曰。子粹雖小儒諫官也。且所謂違旨者。蓋如置人于東擅移于西者也。子粹之罪。恐不得以此論。都堂是其言。只請流之。禑曰。巡衛府已議其罪。今欲輕之何。遂不允。右使金續命入白太后曰。臣等武人不識。然文臣咸曰。諫官雖忤旨不罪。所以開言路也。

今子粹罪小。不宜重論。太后乃請禑曰。予老經事多矣。未聞枚爲諫官。若國人皆杜口。國事將日非矣。於是免枚流于全羅道突山戍。希等意。子粹必與郎舍議。又流諫議鄭寓于慶尙道竹林戍。

今按。洪武八年當日本南朝天授元年。北朝永和元年。

辛禑二年（明洪武九年）○大（甲辰）春正月全羅道都安撫使河乙沚捕倭船一艘。賜衣酒。乙沚無才行。又有簠簋之誚。賂權貴得任閫寄。士林鄙之。○三月倭寇晉州。曹敏修與戰于清水驛。斬首十三級以獻。○六月倭寇林州。全羅道兵馬使柳實知。益州事金密等力戰却之。○秋七月倭寇全羅道元帥營。又寇榮山。焚戰艦。又寇羅州。縱火剽掠。時元帥乙沚聞柳濚來代己。輒歸晉州農莊。倭乘隙而至。無敢拒者。是以大敗。枚流乙沚河東縣。○倭寇扶餘。至公州。牧使金斯革戰于鼎峴。敗績。遂陷公州。元帥朴仁桂以屬縣懷德監務徐天富不赴救斬之。倭又寇石城。趣連山縣開泰寺。仁桂迎戰。墜馬被殺。賊遂屠開泰寺。○判三司事崔瑩聞朴仁桂敗死。自請擊倭。禑及諸將以老止之。瑩曰。蕞爾倭賊肆暴如此。失今不制後難圖也。今若將他人未必制勝。且兵不素鍊亦不可用。臣身雖老。志則不衰。但欲安社稷衛京城耳。請率麾下亟往擊之。請至再三許之。瑩不宿而行。○倭寇朗山豐堤等縣。全羅道元帥柳濚全州牧使柳實。力戰却之。獲所掠牛馬二百餘。還其主。○訛言倭將寇都城。夜半發坊里軍守城。又聞賊將先登松岳山。遂以僧爲軍分守要害。○崔瑩與楊廣道都巡問使崔公哲助戰。元帥康永兵馬使朴壽年等至鴻山。倭先據險隘。三面皆絕壁。唯一路可通。諸將畏怯不進。瑩身先士卒。盡銳突進。賊披靡。有一賊隱林中。射瑩中脣。血淋漓。神色自若。射賊應弦而倒。仍拔矢戰益力。遂大敗之。俘斬

〔突山〕全羅南道麗水麗水の前面に橫はる一大島にして、南方金鰲島及び二三の小嶼と相擁して、一港灣を造る、港內水深く大艦巨船の碇繫に適す、島の西南に突邑あり

〔榮山〕全羅南道を流るゝ榮山江流域の總稱也、江口に木浦あり、良港として知らる。

〔石城〕忠清南道扶餘郡にあり　京城より南三十四里二十四町也。

〔自若〕平氣なる貌也、史記甘茂傳に「魯人有與曾參同姓名者殺人、人告其母曰、曾參殺人、其母織自若也」とあり。

殆盡。遣人獻捷。賜紫衣服鞍馬。八月崔瑩凱還。謁命宰樞。供帳于天水寺。巡衛府具雜戲。迎于臨津。如迎詔使禮。九月論鴻山功。以崔瑩爲鐵原府院君。柳濚爲密直副使商議。其餘軍士除授有差。時變復與李仁任池奫提調政房。池李擅權。植黨樹國。趨附銓注之際。視人賄賂多少。伺候動息。以爲升黜。官或不足。則添設無限。或累旬不下批。以待貨賄之來。時謂之隱批。其論賞鴻山戰功。不從軍而得官者甚衆。復興廉潔自守。雖欲薦賢率制不能有爲。○倭寇古阜泰山興德等郡縣。焚官廨。又寇保安仁義金堤長城等縣。倭陷全州。牧使柳實與戰敗績。賊退屯歸信寺。實復擊卻之。以趙思敏爲全羅道副元帥。睦忠爲助戰兵馬使。又以邊安烈爲楊廣全羅道指揮使兼助戰元帥。時倭陷臨陂縣。撤橋自固。柳實潛令士卒作橋。安烈率兵得渡。使按廉李士顯設伏橋畔。賊望見遁擊。我軍敗績。○憲府上疏曰。全羅元帥柳濚不以閫寄爲意。日玩聲色。以致倭寇乘勝肆暴。及陷全州。詐稱墮馬。擁兵逗留。請置於刑。兵馬使柳實所管泰山郡亦被寇劫。討捕失機。反爲所敗。又不能收復金州。罪亦大矣。然實於往者。倭犯全州。悉力擊卻。其與濚罪似有輕重。請削奉翊以上官。於是廢濚爲民。并實戍遠地。○冬十月羅興儒還自日本。日本遣僧良柔來報聘。仍獻綵段畫屏長劍等物。自辛巳東征之後。絕交且百年。至是日本以興儒爲諜者囚之。良柔本我國晉州僧。少從倭僧而去。聞興儒至來謁。遂請釋使之通好。興儒之還。其國僧周佐寄書曰。維我西海道一路。九州亂臣割據。不納貢賦且二十餘年矣。西邊海道頑民。覰釁出寇。非我所爲。是故朝廷遣將征討。深入其地。兩陣交鋒。日以相戰。庶幾克復九州則誓天指日禁約海寇。時興儒年僅六旬。給曰。吾今百有五

〔臨津〕臨津江沿岸の地を云ふ、臨津江は、咸鏡道の馬息嶺に發し、江原道の西北端を流れ京畿道に入り、諸水流を合せ、西流して、豐德の南に至り漢江と合して海に入る。

〔古阜〕全羅北道井邑郡にあり、道の西南部に位し、京城の西南五十三里餘の所にあり、近くは、東學黨の巨魁全倖準の擧兵の地として知らる。

〔金堤〕全羅北道金堤郡にあり

〔長城〕全羅南道長城郡にあり、郡内の首邑にして、京城を去る南五十九里餘也。

〔倡妓〕唐書倡伎に作る、音曲歌舞を以て酒席の興を助くる女を云ふ、倡は「わざをぎ」也・西京雜記に「縱酒作倡」とあるは卽ち是也。

〔燒酒〕燒酎に同じ、通俗編に「東坡書唐時酒有名燒春者、當既燒酒也、元人謂之汗酒」と又た飲膳正要に「燒酒之法自元始」とあり

〔嘉德島〕慶尙南道にあり、一に加德島に作る、道の南方海中、巨濟島の東にあり、周回八里餘、大船を泊すべき港灣なきも、西南岸には漁船の碇繫所多し、島の周圍には屬島多し

十六。倭人驕鬪柴樹。至有畫像作讚而贈之者。○倭寇扶寧。邊安烈羅世趙思敏等進擊大敗之。○倭寇鎭浦。又寇江華府。焚戰艦。又寇韓州。崔公哲擊之。斬百餘級。賜酒鞍馬。○十一月倭寇晉州溟珍縣。又焚掠咸安東萊梁州彦陽機張固城永善等縣。○倭寇晉州班城縣。又寇蔚州會原義昌等縣。殺掠殆盡。又寇密城郡及東萊縣。○十二月倭焚合浦營。屠燒梁蔚二州。及義昌會原咸安珍海固城班城東平東萊機張等縣。先是元帥金縝大集一道倡妓有姿色者。日與麾下晝夜酣飮。軍中號曰燒酒徒。以紿嗜燒酒也。卒伍偏裨有犯必鞭辱。一軍憤怨。及寇至。軍士却立不戰曰。元帥使燒酒徒擊賊。我輩何爲。以故大敗。

今按。洪武九年當日本南朝天授二年。北朝永和二年。

辛禑三年○大明洪武十年丁巳春正月倭寇會原倉品米。時軍餉不足。令州郡隨職品出米。有差。謂之品米。○以金縝敗軍。廢爲民。流嘉德島。斬其千戶一人。杖軍官。有差。○二月倭寇新平縣。○倭寇慶陽。遂入平澤縣。陽廣道副元帥印海與戰不克。○召募良家子弟善射御者。及郡縣吏有膂力者防倭。覈諸司員吏告歸田里。久不還者。削職。取其田給有戰功者。○初倭寇金州。都堂議擇元帥。而難其人。擬遣池奫子益謙。奫內不平。李仁任奫崔瑩等。會慶復興第。議久不決。奫厲聲曰。判三司公可。瑩怒曰。吾既分官楊廣道。豈可之他乎。奫前請仁任曰。侍中謀事。此而未決。侍中可往。奫又托攻。遂以撓其議曰。倭賊但侵邊。不足憂。脫大軍根據定遼衞。後必難圖。爲今之計。莫若移師先攻。侍中之計雖善。非今日謀國之長策。仁任勃然曰。吾敢爾。君既善謀國。吾當讓避。吾意第以全州國之襟喉。吾亡當

寒。不可不救。爲是拳拳爾。三宰抗此議。則吾何能爲。遂徑出。復與走追挽其袖。泣止之。奫頓首謝。及仁任移病在家。奫過門不謁。人始知池李有隙。至是有人。貼匿名書于仁任門曰。池奫門客金允升等七八人。嗾門下舍人鄭穆。欲劾大仁任。以奫爲侍中。事迫矣。其速圖之。其末又云。吾職判事。吾姓李。吾名十一畫。仁任秘不發。大護軍具成老又得其書。以示仁任。仁任密以示奫曰。公與吾交分甚篤。是得無間吾二人耶。奫曰。此掌令金賞所書也。賞卽仁任族姪也。時判典校寺事李悅左常侍華之元右副代言金承得與知申事金允升結朋黨。謀事奫以希遷擢。自謂。池門四傑。仁任欲剪奫黨。未得間。之元承得會悅家言。厚待元使。不用洪武年號。行宣光七年。無乃速乎。仁任廉得之。遂下三人巡衞府。奫時爲巡軍副萬戶。故仁任托以誹謗朝政。命鞫之曰。近日若等會悅第。作何等文書。畫日月乎。對曰。天下方亂。戰爭未息。先王決策事南。今不遵先志。遽用宣光紀年。不已速乎。但議之耳。非因文書而發是言也。韓略亦以奫黨幷繫獄。遂杖流。悅之元略幷承得賞流之。其不及允升者。蓋仁任欲以慰安奫危疑之心。且冀其發之不暴也。奫大懼。嘗謂仁任曰。予若謀公。天必誅之。使其子益謙請救於崔瑩。不得乃嚴兵自衞。○三月誅池奫。云云）倭夜入窄梁。焚戰艦五十餘艘。海明如晝。死者千餘人。萬戶孫光裕中流矢。乘劍船僅免。先是崔瑩戒光裕曰。耀兵窄梁江口。愼勿出海。是日光裕纔出窄梁。大醉熟眠。賊突至。遂見敗。京城大震。倭又寇江華府。萬戶金之瑞府使郭彦龍。遁于摩利山。賊遂大掠。虜之瑞妻而去。府吏處女二人遇賊。義不汙。相携赴江而死。下光裕之瑞彦龍于獄。○判開城府事羅世請提兵入江華。擊走倭賊。禑壯其志。賜廐馬二匹。遂遣世及李元桂

〔朋黨〕一味徒黨を云ふ、もと朋は君子の友を云へり、黨は小人の友に云へり、升菴外集に、「君子有朋而無黨、小人有黨無朋、云云、朋者君子之善類也、云々黨者小人之兇類也」とあり。

〔開城〕京畿道にあり、一に松都と稱し、京城を去る北十六里、往古、高麗朝の舊都にして義州街道の要衝たり。

〔通津〕京畿道にあり、江華島と相對す、京城を去る、西八里三十二町也。

〔鴻山〕忠淸南道扶餘郡の首邑なり、京城を去る南三十六里十六町也。

〔梁州〕慶尙南道梁山郡梁山也、釜山の北數里の處にあり。

〔靈山〕慶尙南道靈山郡にあり、京城を去る南六十五里也。

姜永朴壽年趙思敏。擊倭于江華。都統使崔瑩次昇天府以備之。賊乃棄江華。退寇守安通津童城等縣。所過蕭然。至童城語曰。無人呵禁。誠樂土也。時有童子。自賊中逃還。諸將召問賊所爲。對曰。賊常言。所可畏者。唯白髮崔萬戶而已。曩日鴻山之戰。崔萬戶至。則麾下士卒。爭先躍馬。蹴踏我衆。甚可畏也。○慶尙道元帥禹仁烈報。倭賊自對馬島蔽海而來。帆檣相望。已遣兵分守要衝。然賊勢方張。防戍處多。以一道兵分軍而守。勢甚孤弱。請遣助戰。元帥以備要害。時江華之賊。逼近京都。國家備禦不暇。又得此報罔知所爲。○崔瑩啓曰。喬桐江華禦寇要害之地。豪强爭占土田。軍資不繼。請罷一二邑私田以充軍食從之。徙喬桐人老幼於內地。留壯者以治農桑。○崔瑩令諸元帥各出從事十人。又發愛馬宮司倉庫人爲兵。遣戍江華。○夏四月倭寇蔚州雞林。○點五部丁壯爲兵。計屋十間出一丁。九間以下。出資糧器仗。以給軍卒。○倭又寇蔚州。元帥禹仁烈往擊之。斬九級。○金海府使朴葳擊倭于黃山江口。斬二十九級。賊投江死者甚衆。○倭寇蔚州梁州密城。焚掠殆盡。又寇彥陽縣。○倭寇密城郡。禹仁烈與戰敗績。寇至靈山縣。仁烈及副元帥裴克廉等戰于栗浦。斬十餘級。○倭船入西江。崔瑩遣安烈出師却之。○倭寇餘美縣。○五月我太祖興三司右使金得齊知密直李琳密城副使柳曼殊。往擊倭于慶尙道。○倭寇密城。王賓擊却之。○以京城濱海。倭寇不測。欲遷都內地。會耆老尹桓等。書動止二字。議可否。衆雖不肯。後若有變。恐禍及己。皆占動字署名。唯崔瑩否。乃陳徵師固守之策。李仁任曰。今赤地千里。農夫輟耕。以望雲霓。而又徵師俾失農業。非爲國之謀也。慶復興瑩等詣太祖眞殿。下動止得止字。禑曰。盜賊密邇。可從卜乎。遣政堂文學權仲和。相宅于鐵原。

〔蝟毛〕はりねづみの毛を云へり、又もの多き貌に云ふ、漢書に「反者如蝟毛而起」とあり。

〔裨將〕副將軍を云ふ、漢書に「梁爲會稽將、籍爲裨將」とあり。

〔麾下〕旗下に同じ大將の旗本を云ふ史記に「馳入吳軍、至吳將麾下」とあり。

〔覇家臺〕案するに姓氏に非ずして、博多人たりしにより、かく傳へしか。

〇禹知仁烈遣精騎五百追擊倭于沙弗郎松岳。賊潰爭舟墜水。中矢者亦多。邏卒又言。賊船隱見海島。不多少。時我太祖行未至。人心恂懼。仁烈飛報纔至。太祖幷日而行。與賊戰于智異山下。相去二百許步。有一賊背立俯身。手扣其臀。示無畏以辱之。太祖用片箭射之。一矢而倒。於是賊驚懼氣奪。即大破之。賊衆狼狽登山。臨絕崖露刃垂槊如蝟毛。官軍不得上。太祖遣裨將率衆攻之。裨將還白。巖高峻馬不得上。太祖叱之。又使恭靖王分麾下勇士與之偕行。恭靖王還白。亦如裨將之言。太祖曰。然則我當親往見之。乃謂麾下士曰。我馬先登。則汝等要當隨之。遂鞭馬互覽觀其地勢。即拔劍用刃背打馬。時日方中。劍光如電。馬一躍而登。軍士或推或攀而隨之。於是奮擊之。賊墜崖死者大半。遂擊餘賊殲焉。太祖素得人心。又士卒精銳。戰無不克。州郡望若雲霓。〇金海府使朴葳擊倭于黃山江敗之。初倭船五十艘先至金海南浦。牓示來賊曰。吾輩適乘風利。泝黃山江直擣密城。葳偵知之。設伏兩岸。將舟師三十艘以待。賊果至。牓有一大船先入江口。伏發。葳亦突至遮擊。賊狼狽自忍。投水死。殆盡。江州元帥裴克廉又與倭戰。賊魁覇家臺萬戶。令步卒具左右。騎馬而前。馬旋濘而止。我軍迎擊斬之。〇倭自江華攻陷楊廣道濱海州郡。初賊兵僅二十一艘。奪我戰艦。多至五十艘。邏卒望見我戰艦以爲我。軍民皆信之。不避。殺傷不可勝計。賊又寇慶陽及安城郡。楊廣道元帥王安德怯懦不戰。乃召副元帥印海及陽川元帥洪仁桂。退次加川驛。欲邀擊歸路。賊望見由他路引去。安德率銳追擊。不克。號天而哭。擒賊諜訊之。諜曰。吾等議。若使楊廣諸州。崔瑩必帥師而下。於是乘虛直擣京城可圖也。初賊入安城。伏兵廳田。使被擄三四人。田于隴上。若農夫然。以紿之。水

原府使朴承直聞三元帥至。亦領兵來。問田者曰。賊退否。三元帥何在。對曰。賊既退。三元帥追之矣。承直信之直趨官廨。賊伏發圍之。承直單騎突圍脫走。軍士多被殺虜。自水原至陽城安城。蕭然無復人煙。體覆使崔仁哲還朝妄言。臣督王安德仁桂印海。擊倭于稷山縣。斬五十餘級。禑賜仁哲廐馬白金。賜安德等衣酒廐馬。遣責成事楊伯淵評理邊安烈林堅味助戰。○禑命築宮城于鐵原。崔瑩曰。夏月遷都。恐防農事。且以京城委賊。國將自潰。可乎。事遂寢。○倭賊百餘騎寇南陽安城宗德等縣。又二十艘復寇江華。殺府使金仁貴。戍卒被虜者以千計。又寇水原府。元帥楊伯淵羅世以戰艦五十艘擊走之。世過江華境。有一婦。隱水濟。指示曰。賊諜入彼民家。世疾趨圍而火之。殺賊二十九人。○烽火自江華晝夜不絕。京城戒嚴。遣諸元帥分戍東西江。召募勇士。皆賞以官。先給布人五十匹。○倭又寇江華。大肆殺掠。○六月憲府劾崔仁哲承命出使。擅自還朝。妄獻倭捷。欺誣國家。請受責賜。請置于法。以懲後來。杖流道死。○倭寇信州豐津文化等縣。元帥趙仁璧羅世沈德符與戰不克。請濟師。○倭寇順天樂安等處。兵馬使鄭地斬十八級。擒三人。○倭寇西海道安州又寇長湍縣。○禑謂都堂曰。今聞邊民被虜於賊。幸而逃還。皆指謂賊諜輒殺之。甚不可也。夫思歸懷土。人情之常。況有父母妻子者。孰不思還。特畏死從賊耳。自今凡逃還者。必加褒賞。敢害者毋得殺戮。官給資糧以遂其生。如有斬倭逃回者。賞之加等。其令邊郡張榜以示。違者罪之。○遣判典客寺事安吉常于日本。請禁賊。吉常至日本病死。○倭賊一百餘艘寇海州。又寇永康長淵豐州安岳咸從三和江西等縣。○禑謂宰相曰。倭雖盜賊。然其死屍亦當瘞之。況我江華西海之民。死賊暴露甚衆。豈可忍視。

〔水原〕朝鮮京畿道水原郡の都府、一に華城府と稱す、京城の南七里にあり。

〔陽城〕朝鮮京畿道安城郡にあり。

〔安城〕朝鮮京畿道安城郡の首驛也、京城を距る東南十七里、同道内にては開城に次ぐ大市場也、近くは日清戰爭の古戰場として知らる。

〔鐵原〕朝鮮江原道鐵原郡にあり、京城を距る約十八里今同道第一の米産地を以て知らる。

〔江華〕朝鮮京畿道江華郡の地を云ふ又此の地の主驛に同名の地あり。

出內帑錢布以資掩埋。○秋七月全羅道水軍都萬戶鄭龍等聞倭寇濟州。率兵船二艘詗之、獲賊一艘盡殺之。○倭寇尊州。○遣使諸道修築山城。○八月倭寇西海道信州文化安岳鳳州。元帥梁伯益羅世朴普老都巡問使沈德符等擊之。敗績。請遣將助戰。以我太祖及門下評理林堅味邊安烈密直副使柳曼殊洪徵爲助戰元帥。○日本遣僧信弘來報聘。書云。草竊之賊。是逋逃輩。不遵我令。未易禁焉。○倭寇海州。○九月我太祖與諸元帥擊倭于海州。安烈堅味等奔潰。我太祖將戰、置兜鍪於百數十步外試射之、以卜勝否。遂三發皆洞貫。曰。今日之事可知。戰於州之東亭子。戰方酣、過泥濘之地丈餘。太祖之馬。一踴而過、從者皆不得度。太祖以大羽箭射賊。十七發皆斃之。乃縱兵乘之、遂大破之、是戰也、太祖初御大羽箭二十。及戰罷餘三矢。謂左右曰。吾皆中射左目眥。汝往觀之。往觀之果盡驗、餘賊阻險積柴、自固。太祖下馬。據胡床張樂。僧神照割肉進酒。命士卒焚柴。煙焰漲天。賊勢窮出死力衝突。矢中座前餅。太祖安坐不起。命金思訓等擊之殲殘。○倭寇鎭光長沙牟平咸豐等地。○倭又倭海平二州。禑賜崔瑩鉞使。與元帥李希泌金得齊楊伯淵邊安烈禹仁烈等。擊走之。○倭寇岳陽縣、元帥李琳擊之、獲其船一艘。○遣前大司成鄭夢周報聘于日本。且請禁賊。○倭屠燒洪州。殺牧使池得淸妻。虜判官妻子。楊廣道元帥王安德等、與戰于蘆峴敗績、翌日賊又寇溫水縣。焚伊山營。元帥印海等戰于新橋。夜賊四圍。士卒驚潰。多被殺傷。賊又自鎭浦入韓州。安德請遣將助戰。禑命商山君金得齊密直府使睦忠王賓赴之。○冬十月倭船四十艘寇東萊縣。○徵諸道兵以備倭。○倭寇寧州牙州。王安德洪仁桂印海金得齊睦忠王賓與戰于牙州。走之。擒三人。○倭又寇

〔信州〕朝鮮黃海道信州郡にあり。

〔文化〕朝鮮黃海道信州郡にあり。

〔安岳〕朝鮮黃海道の安岳郡にあり。

〔草竊〕草賊に同じ小ぬすびとを云ふ書經に見えたり。

〔太祖〕李成桂也、咸鏡道永興の人、父を李子春と云ふ高麗に仕へ、大いに倭寇を防ぎて功あり、後ち高麗王恭讓に代つて、朝鮮王となる。

〔定山〕朝鮮忠清南道青陽郡にあり。

〔扶餘〕同忠清南道扶餘郡にあり。

〔鴻山〕同じく扶餘郡にありて、今同郡の郡衙あり。

〔金海府〕朝鮮慶尚南道金海郡にあり今同郡の郡衙あり洛東江河流の西にありて、古の大伽羅の首府にして、今尚其の遺蹟を存す。

〔以身〕一身を犠牲にするを云ふ、淮南子に「以身役物」又莊子に「以身殉利」などとあり。

感悦縣。○十一月倭寇定山扶餘鴻山。○倭賊百三十艘寇金海府。又寇義昌縣。都巡問使裴克廉與戰敗績。○倭寇寺安童城通津等縣。○十二月順天兵馬使鄭地斬倭四十餘級。擒二人以獻。

卷之五十一

高麗紀　辛禑二

辛禑四年○大明洪武十一年戊午春正月倭寇延安府。○二月倭寇安山仁州富平衿州。○三月倭寇泰安郡。○倭寇南陽。遂焚掠水原府。府使愼仁道僅以身免。元帥王賓與戰敗績。請濟師。命密直副使朴修敬赴之。倭又寇韓林二州。○夏四月判三司使崔瑩等。與倭戰于海豐。大敗之。先是倭寇德豐合德等縣。火都巡問使營。又大集寍梁。入昇天府。聲言。將寇京城。中外大震戒嚴。分命諸軍。出屯東西江。兵衛列於闕門。以待賊至。城中洶洶。令坊里軍登城望候。瑩督諸軍軍于海豐郡。贊成事楊伯淵副之。賊覘知之。以爲。得破瑩軍。則京城可窺。乃經諸屯捨不與角。趨海豐直向中軍。瑩曰。社稷存亡。決此一戰。遂與伯淵進擊之。賊逐瑩。瑩奔。我太祖率精騎。直進與伯淵合擊大敗之。瑩望見賊披靡。率麾下乃進從傍擊之賊殆盡。餘黨夜遁。城中聞瑩被逐。僉洶洶莫知所之。禑欲出避。百官裝束累重會于闕以待。及諸元帥使人獻捷。京城解嚴。百官畢賀。朝廷以爲瑩功。賜號安社功臣。○倭寇西州庇仁縣。又寇水原府。○六月倭寇清州。賊鋒甚銳。我軍望風而遁。賊四出攻掠。我軍復乘間襲之斬十餘級。○日本九州節度使源了俊使僧信弘率其軍六十九人。來捕倭賊。○倭又寇木州溫水縣。○以禹仁烈爲慶尚楊廣全羅三道都體察使。仁烈獻倭捷。賜酒及鞍馬。○倭寇宗德松莊永新等縣。元帥崔公哲朴修敬王

〔源了俊〕今川貞世を云へり、範國の子、足利義詮に仕へ、初め遠江の守護となり、後ち剃髮して、了俊と號し、建德二年鎭西探題となれり。

〔公州〕朝鮮忠清南道公州郡にあり、今同郡衙の所在地なり。

〔連山〕忠清南道論山郡にあり。

〔懷德〕朝鮮忠清南道にあり。

賓等擊却之。○秋七月鄭夢周還自日本。九州道節度使源了俊。遣周孟仁偕來。是行也。人皆危之。夢周略無難色。及至極陳古今交隣利害。主將敬服。館待甚厚。倭僧有求詩者。援筆立就。緇徒坌集。日擔肩輿請觀奇勝。及歸。刷還俘尹明安遇世等數百人。且禁三島侵掠。夢周又憫倭賊奴我良家子弟。乃謀贖歸。力勸諸將。各出私貲若干。且爲書授尹明以遣。賊魁見書辭懇惻。還俘百餘人。自是每明之往。必得俘歸。倭人稱慕夢周不已。後聞其卒。莫不嗟惋。至有齋僧薦福者。○倭寇牙州。崔公哲王賓朴修敬等擊走之。○日本僧信弘與倭寇戰于兆陽浦。獲一艘。盡斬之。還被虜婦女二十餘人。○八月慶尚道元帥裴克廉擊倭于欲知島。斬五十級。○倭寇長興府。都巡問使池湧奇遣卓思清。與戰于會寧縣。擒斬九人。○倭寇延安府及海州。又寇衿州陽州。○遣判崇寧府事羅世判密直沈德符。以戰艦大索倭賊于諸島。○九月倭寇瑞州。○倭寇鐵州。又寇益州 公州尼山連山懷德珍同沃州青山等縣。○冬十月倭寇林州。又屠燒全州。○遣版圖判書李子庸前司宰令韓國柱于日本。請禁賊。○倭寇靈光。光州同福縣巡問使池湧奇順天兵馬使鄭地追及於玉果縣。賊入彌羅寺。我軍圍之。縱火奮擊。賊自焚死。獲馬百餘匹。是戰地之功居多。捷至。賜湧奇地各銀五十兩。○倭寇潭陽縣。池湧奇鄭地。與戰斬十七級。倭又寇益州。○十二月倭寇河東縣。又寇晋州。都巡問使裴克廉追擊于泗州。斬二十餘級。○憲府上疏曰。云云近因倭寇漕運不通。倉廩虛竭。云云

今按。洪武十一年當日本南朝後龜山天皇天授四年。北朝後圓融天皇永和四年。 節度使源了俊謂探題今川了俊也。了俊初名貞世。姓源氏。號伊豫守。後剃髮名了俊。駿河遠江二州守護。今川國範第二之子也。有文武才。能詠和

歌。應安四年二月。菊池奉關西親王。勢方盛。於是足利義滿令了俊爲探題。大内義弘副之。以抗菊池。應永三年爲甥泰範及大内義弘所讒。停探題。凡在職二十六年。

辛禑五年〇大己未
明洪武十二年春正月諫官上言。云云 倭賊日熾侵掠諸道。而國家待其告急。然後遣將出師。道里悠遠。將帥垂至而賊已浮海。不及與戰。假令與戰併日倍馳。士馬疲困。屢致敗績。請於諸道預遣將帥。寇至則擊之。民惟邦本。本固邦寧。近因倭寇水旱之災。百姓飢饉。宜加存恤。勸課農桑。○二月倭寇順天兆陽等處。鄭地與戰敗績。慶復興黃裳禹仁烈俱詣崔瑩第。瑩曰。倭寇侵擾至此。諸將何不憂慮。一鄭地雖勇其如衆寇。何諸相有慚色。瑩又嘗謂李仁任曰。國家多難。公爲首相。何不此之憂。但以家產爲念。仁任默然。○三月倭寇道康谷城。又寇南原順天府。○夏四月以評理商議韓邦彥密直商議金用輝同知密直慶儀。爲楊廣全羅慶尚道助戰元帥。使贊成事楊伯淵督戰。以知密直洪仁桂副之。又遣萬戶鄭龍尹松。以戰艦二十艘追捕倭賊。民間聞伯淵等來。語曰。寧逢倭寇。勿逢元帥。○倭寇安山郡。○倭侵延安府。遣金海君金庾延安君羅世。以戰艦五十二艘往擊之。○倭寇合浦。元帥禹仁烈戰却之。斬四級。仁烈中流矢。我軍死傷者八十餘人。○五月倭賊。騎七百步二千餘。寇晉州。楊伯淵與禹仁烈裴克廉韓邦彥金用輝慶儀洪仁桂。戰于班城縣。斬十三級。賜物有差。○倭焚掠豐州。○羅世金庾與倭戰于龍岡縣水串浦。獲賊船一艘殲之。○閏月安州萬戶崔元祉擊倭于永清縣。敗之。○倭寇蔚州。又寇雞林府。日本海盜捕捉軍官朴居士與倭戰。元帥河乙沚不救。居士軍大敗。僅存五十餘人。先是韓柱國還自日本。居士率其軍一百八十六人偕來。○六月倭寇淸道郡。元帥禹仁烈擊之。

〔關西親王〕懷良親王也。世に、鎭西宮、九州宮、阿蘇宮、肥後宮等とも稱す、後醍醐天皇の第十六皇子、母は、權大納言三位局なり、延元三年征西大將軍に任じ給ふ。

〔探題〕武家時代、重要なる地方を總管せしむる爲め幕府より任補したる要職なり、ここには九州探題を云へり。

〔大内義弘〕弘世の子、父に繼ぎて周防權介を襲ふ、文中の頃、豐後の守護となる。

〔谷城〕全羅南道谷城郡にあり。

〔南原〕全羅北道南原郡にあり。

〔義州〕今朝鮮平安北道義州府也。

〔東萊縣〕今朝鮮慶尙南道に東萊郡あり、釜山浦に近し。

〔結城〕忠淸南道洪城郡にあり。

〔洪州〕忠淸南道の安眠島にあり。

〔全羅道〕今南北兩道に分れ、北道は一府十四郡、南道は、一府十六郡を管す。

○以趙仁璧爲江陵道元帥、朴修敬爲安東道元帥兼府尹。以倭賊自雞林將向江陵道也。○倭寇龍州。義州萬戸張侶擊走之。倭又寇蔚州清道密城慈仁彥陽等地。禹仁烈裴克廉河乙沚與戰于蔚州。獲船七艘。○秋七月倭寇樂安郡。○李自庸還自日本。九州節度使源了俊。歸我被虜民二百三十餘人。○倭入武陵島。留半月而去。○倭留蔚州。刈稻黍爲粮。使入機張彥陽。掃地無遺。禹仁烈募兵。戰于東萊縣。斬七級。○八月倭寇餘美縣。又寇隴郭二州。○慶尙道元帥禹仁烈裴克廉朴修敬兵馬使吳彥。擊倭于泗州。大破之。斬四十三級。○九月倭寇班城縣。登確山頂。樹柵自保。禹仁烈朴修敬吳彥。合圍攻克之。斬馘三十四級。倭又寇丹溪居昌治爐等縣。至于嘉樹縣。都巡問使金光富。與戰敗死。倭又寇山陰晉州泗州咸陽。晉州戸長鄭滿如京。賊闌入所居里。滿妻崔氏携諸子。避匿山中。崔年少且美。賊得欲汚之。露刄以脅。崔抱樹拒奮。罵曰。死等耳。與其見汚而生。寧死義。罵不絕口。賊遂害之。○遣使西海楊廣道。簽水軍以備慶尙全羅道倭寇。○冬十月遣贊成事睦仁吉密直副使睦子安梁濟。擊倭于全羅道。先是仁吉在廟堂。颺言曰。倭賊侵掠州郡。吾等在此飽食。略不愧恥。可謂有人乎。仁任怒其言逼己出之。

今按。洪武十二年當日本南朝天授五年。北朝康曆元年。

辛禑六年庚申○大明洪武十三年三月倭寇光州及綾城和順二縣。遣元帥崔公哲金用輝李元桂金斯革鄭地吳彥閔伯萱王承寶都興禦之。○五月倭寇結城洪州。○以不能禦倭杖流全羅道助戰元帥崔公哲楊廣道都巡問使安翊。斬都鎭撫一人。○六月倭寇井邑縣。元帥池湧奇擊之。○全羅道元帥池湧奇與倭戰于鳴

良鄕。奪所俘百餘人。○倭寇西州。又寇扶餘定山雲梯高山儒城等縣。遂入鷄龍山。時婦女嬰孩。避賊登山者。多爲所害。楊廣道元帥金斯革擊走之。賊遂掠靑陽新豐鴻山而去。又寇沃州錦州咸悅豐堤等縣。○秋八月遣海道元帥羅世沈德符崔茂宣。以戰艦百艘追捕倭賊。○倭寇公州。金斯革擊走之。

○倭賊五百艘入鎭浦口。以巨絙相維。分兵守之。遂登岸散入州郡。恣行焚掠。屍蔽山野。轉穀于其舶。米棄地厚尺。羅世沈德符崔茂宣等至鎭浦。始用茂宣所製火炮。焚其船。煙焰漲天。賊燒死殆盡。赴海死者亦衆。賊盡殺所俘子女。山積。所過波血。唯三百三十餘人。自拔而來。賊脫死者趣沃州。與登岸賊合。焚利山永同縣。○金斯革追捕倭賊于林州。斬四十六級。○倭寇黃澗禦侮二縣。又寇中牟化寧功成靑利等縣。遂焚尙州。○羅世沈德符崔茂宣等還。禑賜金各五十兩。裨將鄭龍尹松崔七夕等銀各五十兩。○倭焚善州。初賊在尙州。全羅道。元帥池湧奇麾下裴儉自募。請往覘賊。諸元帥許之。及儉至。賊欲殺之。儉曰。天下無殺使之國。我國諸將領精兵無算。戰則必克。然盡殲汝等何益。汝等占居一邑若何。賊曰。是給我也。汝國誠欲活我。豈奪我舟楫耶。吾亦計之熟矣。飲儉以酒。遂以鐵騎護送。掠得二三歲女兒。剃髮剖腹淨洗。兼奠米酒祭天。賊分左右。張樂羅拜。祭畢。掬分其米而啖。飲酒三鍾。焚其兒。槍柄忽折。卜者曰。吾等留此必敗。卽引軍趣善州。

今按。洪武十三年當日本南朝天授六年。北朝康曆二年。

○倭侵京山府。○以我太祖爲楊廣全羅慶尙道都巡察使贊成事。邊安烈爲體察使以副之。王福命禹仁烈都吉敷朴林宗洪仁桂林成味李元桂爲元帥。皆受太祖節度。師出至長湍。白虹貫日。占者以

〔高山〕朝鮮全羅北道益山郡にあり。

〔南朝〕後醍醐天皇後村上天皇、長慶天皇、後龜山天皇の四世の御宇を云ふ、この時代を吉野朝と稱す。

〔天授〕九十六代長慶天皇の御宇の年號也。

〔北朝〕光嚴、光明、崇光、後光嚴、後圓融の五院の間を稱す。

〔康曆〕後圓融院の時の年號也。

〔沙斤乃驛〕慶尙南道咸陽郡にあり、全羅南道に通ずべし。

〔雲峰縣〕全羅南道南原郡の西部にあり、智異山脈の支峯、三峯嶺を負ひ險害の地也。

〔柳葉箭〕鏃の形柳の葉の如きを云ふ

爲戰勝之兆、賊自鎭浦之敗、攻陷郡縣、肆殺掠。賊勢益熾、三道沿海之地、蕭然一空。自有倭患、未有如此之比。○倭屯沙斤乃驛。元帥裴克廉金用輝池湧奇吳彥鄭地朴修敬裴彥都興河乙沚、擊之敗績、修敬裴彥死之、士卒死者五百餘人、倭遂屠咸陽。○九月倭攻南原山城不克、退焚雲峰縣。屯引月驛。聲言將穀馬于光之金城北上。中外大震。○我太祖擊倭兵于雲峰、大敗之。時太祖與邊安烈等至南原。裴克廉等來謁于道、莫不懽悅。諸將咸曰、賊負險、不若俟其出與戰。太祖慨然曰、興師敵愾、猶恐不見賊、今遇賊不擊、可乎。遂部署諸將、詰朝誓、而東踰雲峰、距賊數十里。至荒山西北、登鼎山峰。太祖見道右險徑曰、賊必出此襲我後矣、我當趣之。諸將皆由坦途進、望見賊鋒甚銳、不戰而却。時日已昃矣、太祖旣入險、賊奇銳果突出。太祖以大羽箭二十射之、繼以柳葉箭射之。五十餘發皆中其面。莫不應弦而斃。凡三遇摩戰殲之。地又泥濘、彼我俱陷。其中相顚仆。及出、死者皆賊。我軍不傷一人。賊據山自固、太祖指揮士卒、分據要害。使麾下李大中等十餘人挑之。太祖仰攻之、賊出死力衝突。我軍分北而下、太祖顧謂將士曰。堅控轡勿使馬蹶。旣而太祖復使吹螺整兵、蟻附而上。衝賊陣。有賊將引槊直趨太祖後甚急。偏將李豆蘭躍馬大呼曰。令公視後。令公視後、太祖未及見、豆蘭遂射殪之。太祖馬中矢而仆、易乘。又中仆。又易乘。飛矢中太祖左脚。太祖抽矢氣益壯。戰益急。軍士莫知太祖傷。賊圍太祖數重。太祖與數騎突圍而出、賊又衝突。太祖立殪八人、賊不敢前。太祖誓指天日。麾左右曰、怯者退。我且死賊。將士感厲。勇氣百倍。人人殊死戰。賊植立不動。有一賊將。年纔十五六。骨貌端麗。驍勇無比。乘白馬舞槊馳突。所向披靡。莫敢當。我軍稱阿只拔都、爭避

〔兜牟〕かぶと也、兜鍪に同じ、韻會に「鍪通作牟」とあり。

〔纓〕かぶとの紐也卽ち、俗に「忍の緒」と云ふ。

〔儺戲〕盛大なる遊戲の意也、儺は、雅の註に「盛貌」とあり。

〔寧海府〕慶尙北道盈德郡にあり、京城より東南、六十六里二十四町也。

之。太祖惜其勇鋭。命豆蘭生擒之。豆蘭白曰。若欲生擒。必傷人。其人至於面上皆被堅甲。無隙可射。太祖曰。我射兜牟頂子。兜牟落汝便射之。遂躍馬射之。正中頂子。兜牟纓絶而側。其人急整之。太祖卽射之。又中頂子。兜牟遂落。豆蘭便射殺之。於是賊挫氣。太祖挺身奮擊。銳鋒盡斃。賊痛哭。聲如萬牛。棄馬登山。諸軍乘勝馳上。鼓譟震地。四面崩之。遂大破之。川流盡赤。六七日色不變。人不得飲。皆盛器候澄。久乃得飲。獲馬一千六百餘匹。兵仗無算。初賊十倍於我。唯七十餘人奔智異山。太祖曰。天下未有殲敵之國。遂不窮追。退而大作軍樂。陳儺戲。軍士皆呼萬歳。獻首級山積。諸將懼治不戰之罪。叩頭流血。乞生。太祖曰。在朝廷處分。又曰。賊之勇者殆盡矣。時被虜者自賊中還言。阿只拔都望見太祖陣整齊。謂其衆曰。觀此兵勢。殊非往日諸將之比。今日之事。爾輩宜各愼之。初阿只拔都在其島。欲不來。衆賊服其勇鋭。欲爲主。固請而來。諸賊每進見必趨跪。軍中號令皆進退。是行也。軍士帳幕柱皆易以竹。太祖謂曰。竹輕於木。便於致遠。然亦民家所植也。且非吾裝齎舊物。不失舊而還足矣。軍士敬服。咸棄之。太祖所至不犯秋毫。皆類此。東寧之役。太祖獲其將處明不殺。處明感恩。毎見矢痕。必嗚咽流涕。常隨侍左右。是戰也。處明居馬前。力戰立功。時人稱之。○我太祖振旅而還。云云太祖威名益著。倭賊虜國人必問。李萬戸今在何處。何問乃入寇。

今按。阿只拔都高麗國語訛稱我國人名。

○倭焚金海府。

辛禑七年○大辛酉明洪武十四年春二月時因倭寇漕路不通。宰相之俸不過數斛。○倭焚寧海府。○三月倭寇江陵道。

遣簽書密直南佐時密直副使權玄龍。往擊之。時是道大飢。備禦甚疎。遣同知密直李崇。率交州道兵以助之。○倭墜松生蔚珍三陟平海寧海盈德等地。遂焚三陟縣。○夏四月倭自智異山逃入無等山。樹柵圭峰寺岩石間。三面峭絶。唯小逕緣崖僅通一人。全羅道都巡問使李乙珍募敢死百人。乘高下石。以火箭焚其柵。賊窘墜崖死者甚衆。餘賊走海竊小船而遁。前少尹羅公彦以快船追及。盡殺之。擒十三人。○五月倭寇伊山戍。楊廣道都巡問使吳彦戰却之。擒斬九級。○雞林元帥尹虎斬倭十一級。○安東兵馬使鄭南晉擊倭。斬十六級。倭又寇寧海府。○六月倭寇庇仁縣。又焚永州。○倭船五十艘寇金海府。圍山城。元帥南秩擊却之。秩又戰於寧海蔚州梁州彦陽等處。凡五合斬八級。○倭寇蔚珍縣。權玄龍與戰敗之。斬二十級。獲馬七十匹。○秋七月倭寇金海府。○倭寇固城縣。南秩與戰。斬八級。○九月倭寇瑞州。○冬十月倭寇臨河縣。○倭寇潘南縣。元帥池湧奇李乙珍。與戰却之。獲一艘焚之。斬九級。賊投水死者亦多。○十一月倭寇保寧縣。又寇密城縣。

今按。洪武十四年。當日本南朝弘和元年北朝永德元年。

辛禑八年○大明洪武十五年壬戌二月倭寇林州。都巡問使吳彦擊之不克。○閏月倭寇林州扶餘石城。○三月倭寇平海三陟蔚珍羽溪等縣。○倭寇寧越禮安榮州順興甫州安東。○夏四月憲府劾啓。慶尙道都巡問使南秩。不能禦倭。下都堂議之。李仁任與秩善。止令安置宜寧縣。○楊水尺群聚。詐爲倭賊。侵寧越郡。焚公廨民戶。遣判密直林成味等追捕之。獲男女五十餘人馬二百餘匹。○江陵道上元帥趙仁璧副元帥權玄龍與倭戰。斬首三十級。○西海道按廉使李茂獻所獲水尺三十餘人馬百匹。諸道按廉守令各獻

〔弘和〕九十九代後龜山天皇の御宇の年號也、三年にして元中と改む。

〔永德〕後圓融院の時の年號也、三年にして至德と改む

〔辛禑〕高麗王、第三十二世なり、恭愍王に次いで、世を治む。

〔石城〕朝鮮忠清南道石城郡にあり。

〔平海〕朝鮮江原道蔚珍郡にあり。

〔三陟〕同じく江原道三陟郡にあり。

〔蔚珍〕江原道蔚珍郡にあり。

所獲水尺。及馬匹。下巡軍鞫之、斬其首謀者。沒入妻孥馬匹。餘皆釋之、分置水尺于諸州。比平民差役。有不從令者斬之。〇倭踰竹嶺寇丹陽郡。元帥邊安烈韓邦彥等擊破之。斬八十餘級。獲馬二百餘匹。〇五月誅妖民伊金。伊金固城民。自稱彌勒佛惑衆曰。我能致釋迦佛。凡禱祀神祇者。食馬牛肉者。不以貨財分人者。必死。若不信吾言。至三月日月無光矣。又曰。吾爲作用。則草發靑花。或木結穀實。或一種再刈。愚民信之。爭施米帛金銀。牛馬死則棄之不食。有貨財者。悉以與人。伊金又曰。吾勅山川之神。悉送日本。倭賊可易擒也。於是巫覡尤加敬信。城隍祠廟。撤去其神。敬伊金如佛。以祈福利。無賴之徒。從而和之。自稱弟子。轉相誣誑。所至州郡守令。或有出迎館之上舍者。淸州牧使權和誘致之。縛其渠首五人囚之。於是都堂移牒諸道。皆捕斬之。前判事楊元格素信奉其說。及是逃匿。窮搜獲之杖流。道死。〇邊安烈韓邦彥等擊倭于安東。斬三十餘級。獲馬六十匹。〇六月諫官鄭釐朴宜中等上疏曰。比年以來倭賊日熾。州郡凋弊。加之水旱饑饉荐臻。草賊竊發。私相屠戮。上國不許通好。窺伺釁隙。況天災人妖地怪。與夫鳥獸泉魚之異。疊見譴告。一國人民罔不憂懼。誠宜兢々業々無敢逸豫。云云〇倭寇慶山大丘花園雞林等處。又寇通溝縣。〇遣典法判書趙浚。爲慶尙道體覆使。時倭寇甚熾。州郡騷然。民皆奔竄山谷。而國無紀綱。將帥環視不戰。賊勢日盛。浚至號令嚴明。諸將股栗。連戰告捷。一道之民賴以稍安。先是守城人曹希參扶其母。欲避倭於京山府城。行至洛東江。無船不得渡。賊追及之。其母曰。吾老且病。死無悔矣。汝其走馬以免。希參曰。母在。予何往。遂與母伏於田間。賊欲刄其母。希參以身蔽之。爲賊所害。母得以免。京山府人裵仲善之女爲倭所逐。負其

〔彌勒佛〕梵語、梅呾麗耶の音譯、慈氏の意、當來の佛を云ふ。

〔城隍祠廟〕城の守護神を祀れる社を云ふ、隍は城下の池を云ふ、集古錄に「李陽冰記曰、城隍祀典無之、吳起有爾」と又困學紀聞に「北齊慕容儼鎭郢城、城中先有神祠、俗號城隍神」などと見えたり。

〔慶山〕慶尙北道慶山郡にあり。

〔大丘〕今慶尙北道大邱府也。

〔慶尙〕今南北兩道に分れ、南道は二府十九郡、北道は一府二十三郡を管す。

〔汗馬〕奮戰の樣に云ふ、故にかくして得たる戰功を汗馬之勞と云ふ、史記に「蕭何未嘗有汗馬之勞」など見ゆ。

〔宮醞〕天皇の賜ひし酒を云ふ、宮は儀禮士昏禮に「古者貴賤所居皆得稱宮、至秦始定爲至尊所居之稱」とありて、皇居の謂、醞は酒類を云ふ。

兒至所耶江。江水方漲。裴度不能脫。投入水中。賊至岸。持滿注矢。曰。爾來可免死。女曰。烈女不更二夫。之死不爲汝所辱。賊射之中其兒。賊引滿又語如前。竟不出。遇害。靈山人郞將辛斯藏之女。年十六。爲賊所逐。隨父至江。乘船將渡。賊猝至。殺舟中人。殆盡。其父亦被害。有一賊。執其女下船。女曰。汝殺吾父。不共戴天之讎也。寧死不汝從。遂扼賊吭。蹴而倒之。賊怒遂殺之。浚上其事曰。三人節孝如是。可旌其門。以勸來者。遂立石記其事。〇冬十月倭寇南原郡。又倭船五十艘入鎭浦。海道元帥鄭地擊走之。追至莘山島。獲四艘。

今按。洪武十五年當日本南朝弘和二年。北朝永德二年。

卷之五十二

高麗紀

辛禑九年〇大明洪武十六年　癸亥　春正月海道副元帥鄭地擊倭。大破之。賜金帶一腰白金五十兩。〇夏五月海道元帥鄭地擊倭于南海縣。大敗之。時地所將戰艦僅四十七艘。次羅州水浦。賊船百二十艘大至。慶尙沿海州郡大震。合浦元帥柳曼殊告急。地日夜督行。或手自櫂。櫂卒益盡力到蟾津。徵集合浦士卒。賊已至南海之觀音浦。勢甚熾。四圍而進。地督進。至朴頭洋。賊以大船二十艘。艘置勁卒百四十人爲先鋒。地進攻大敗之。焚賊船十七艘。浮尸蔽海。兵馬使尹松中箭死。地謂將佐曰。吾嘗汗馬。破賊多矣。未有如今日之快也。捷音至。禑大喜。遣李克明安紹連。賜宮醞以勞之。軍器尹房之用奉使日本還。道遇倭賊。被獲。鎖頸置船底。及是戰賊曰。若不勝必先斬之。戰罷賊徒盡殲。而之用乃免。〇倭寇慶尙道

吉安安康杞溪永州新寧長守義興義城善州等處。又寇丹陽堤州。遣典儀令禹夏于慶尙道。督察元帥禦倭勤怠。〇秋七月禹夏督諸兵馬使。擊倭于義城。斬三級。又戰于禮安順興。斬十四級。〇八月倭寇比屋義城等處。賊衆我寡。屢戰不利。副元帥尹可觀與戰于安東禮安等處。敗績〇倭陷居寧長水等縣。分兵欲寇全州。副元帥皇甫琳戰于礪峴。却之。〇禑召密直提學趙浚曰。楊廣慶尙道倭賊大熾。元帥都巡問使恇怯不戰。卿可往察軍機。浚對曰。殿下若命臣。專制兩道。其將帥逗留敗績者聽臣區處。不然元帥都巡問使位在臣上。豈畏死就死地乎。將帥之族忌之。白禑止之。乃以門下評理文達漢爲楊廣慶尙道都體察使。命之曰。往察將帥勤怠軍容盛衰。其有逗留不進者。元帥則禁身以聞。其餘照律直斷。〇倭賊二百餘騎寇槐州長延縣。元帥王安德金思革都興。與戰斬二級。〇倭賊千餘寇春陽寧越旌善等郡縣。〇左司議權近等諫曰。今倭寇侵擾。四方反問。刺客往來京城。殿下從以數騎。馳騁道路。終夜不返。臣等深爲殿下危之。禑曰。我誠有此愆。非卿等。誰肯言之。〇倭賊千餘陷沃州報令等縣。遂入開泰寺。據雞龍山。文達漢王安德都興進攻之。賊棄馬登山。公州牧使崔有慶判官宋子浩。與戰于仇岾。子浩敗死。達漢及金斯革安德都興安慶朴壽年等。與戰于公州盤龍寺。斬八級。斯革追擊木川黑岾。斬二十級。〇九月倭寇紅陵府及金化縣。又陷淮陽府及平康縣。京城戒嚴。徵平壤西海道精兵入衛。遣前政堂南佐時知密直安紹王承貴王承寶鄭熙啓印海開城君王福命開城府事郭璇等。往擊之。戰于金化敗績。〇倭陷洪川縣。元帥金立堅李乙珍。與戰斬五級。〇冬十月都體察使崔公哲至狼川。倭突出掩擊。留覆使鄭承可。與倭戰于楊口敗績。退屯春州。賊追至春州陷之。遂侵加平

〔新寧〕慶尙北道永川郡にあり。

〔義興〕同じく、軍威郡にあり。

〔義城〕同じく、義城郡にあり、今同郡々衙の所在地たり、京城を去る南五十二里十六町也

〔丹陽〕忠淸北道丹陽郡の主驛也、京城を去る東南三十二里三十二町あり

〔堤州〕今忠淸北道堤川郡堤川の地也三國時代新羅の水を貯へて灌漑に供せし池塘あるによりて此の名あり。

〔安邊府〕咸鏡南道安邊郡の地なり、元山津の南三里にあり、東南狼城江を帶び、北に鐵嶺を臨む、北京を去る東北四十六里の地にあり。

〔歙谷縣〕江原道の最北端の沿岸にあり、京城を去る東北四十一里二十八町なり。

〔江陵〕江原道江陵郡にあり、京城を去る東北四十七里四町也。

〔高城浦〕江原道にあり、京城を去る東北四十五里十二町なり。

縣。元帥朴忠幹與戰逐之。斬首六級。賊入據淸平山。以贊成事禹仁烈爲都體察使。前密直林大匡爲助戰元帥。往擊之。○倭寇安邊府歙谷縣。四出虜掠。如蹈無人之境。禑以密直提學趙浚爲江陵交州道都撿察使。○李乙珍及副元帥權玄龍兵馬使郭忠輔擊倭于洞山縣。斬二十餘級。獲馬七十二匹。賊收餘衆。退泊高城浦。禑賜乙珍等白金有差。○十一月知門下府事鄭地請造戰艦于諸道。以備倭寇。從之。

今按。洪武十六年當日本南朝弘和三年。北朝後小松天皇永德三年。

辛禑十年。大明洪武十七年。甲子 ○二月倭入鎭浦。以小艇載還被虜婦女二十五人。○閏十月倭寇長淵縣。西海道上元帥王承寶與戰敗績。○十一月倭寇咸陽郡。都巡問使尹可觀晉州牧使朴子安與戰斬十八級。○倭寇同福縣。都巡問使尹有麟光州牧使金進長興府使柳宗。與戰斬九級。○禑見權近爲代言曰。此人皆爲諫官。使予不得遊幸。何得近侍爲代言乎。合令防倭。○倭寇水原工一鄕。府使許操擒賊諜三人。○海道萬戶尹之哲遇倭于德積島。擊走之。獲倭船一艘。得所虜八十人。

今按。洪武十七年當日本南朝元中元年。北朝後小松天皇至德元年。

辛禑十一年。大明洪武十八年。乙丑 ○春正月海道副元帥前開城尹曹彥擊倭于汝走島。獲船一艘。擒三人。禑賜白金五十兩。○二月遼東都司遣百戶程與來問金得卿擊殺官軍之故。乃執得卿歸京師。禑與林堅味李成林得程與極厚。潛使張子溫賂與金五十兩。傔從三人。銀各五十兩。得卿行至鐵州。中夜盜殺之。以遇倭聞于帝。得卿將行。都堂誘之曰。北靑州之事汝當其責。勿以累國。得卿曰。吾但奉行都堂牒

〔麒麟島〕今江原道麟蹄郡に、麒麟と稱する地あり、この地なるべし。

〔平海府〕又平海郡と稱せり、今江原道蔚珍郡に此名あり、京城を去る東北七十八里なり。

〔洪原〕咸鏡南道洪原郡にあり、京城を去る北八十一里二十八町なり。

〔北青〕同じく、北青郡にあり、京城を去る北八十九里二十八町なり。

耳。上國若有問。豈敢終諱。堅味憂懼無以爲計。密直提學河崙密謂堅味曰。事貴從權。當今西北倭賊充斥。豈無遇賊死者乎。堅味大喜。遂從其計。使盜殺之。

今按。洪武十八年當日本南朝元中二年。北朝至德二年。當時高麗托倭寇爲奸。如楊水尺。伊金。林堅味。是也。以此觀之。則他稱倭寇。不悉爲倭人乎。果未可知也。

夏四月倭寇交州道。以趙仁璧爲四道都指揮使。○秋七月左司議李至等上疏。諫遊畋。禑使知申事廉廷秀。釋其文義。遽大怒曰。時方危亂。此輩不欲吾習馬。不忠孰甚。當痛懲之以絕言者。後又悉書諫官名。以藏曰。此輩可使防倭。由是諫官多謝病。

今按。及高麗之將滅。辛禑出矣。荒淫暴虐。無不至也。諫爭爲不忠。赴其人于死地。嗚呼斯時日本亂甚。高麗亦知此。痛哉。

○倭寇端州。東北面上元帥沈德符。與戰敗績。○倭寇甕津麒麟島。海道萬戶鄭龍追擊之。○倭寇平海府。江陵道都體察使睦子安。擊却之。斬五級。○八月全羅海道元帥陳元瑞捕倭二十餘級。○九月倭賊百五十艘寇咸州洪原北青哈蘭北等處。殺虜人民殆盡。元帥沈德符洪徵安柱黃希碩鄭承可等。與戰于洪原之大門嶺北。諸將皆敗先遁。唯德符突陣獨入。中槊而墮。賊欲復刺。麾下劉訶郎哈馳入射之。遂連斃二人。奪賊馬以授德符。轉戰出陣。於是德符軍亦大敗。賊勢益熾。太祖請往擊之。至咸州部署諸將。營中有松在。七十步許。太祖召軍士謂曰。我射第幾枝第幾箇松子。汝等觀之。卽以柳葉箭射之。七發七中。皆如所命。軍中皆蹈舞歡呼。明日直指賊所屯兔兒洞。伏兵於洞之左右。賊衆

先據洞內。東西山谷。聞螺聲大驚曰。此李太祖舊諱砷礶螺也。太祖率李豆蘭高呂趙英珪安宗儉韓邦海金天寵黃等百餘騎。按轡徐行過其間。賊見兵少行緩。不測所爲。不敢擊。東賊就西賊爲一屯。太祖登東賊所屯處。據胡床。令軍士解鞍息馬。久之將上馬。百步許有枯槎。太祖連射三矢。皆正中之。賊相顧驚服。太祖令解倭語者呼謂曰。今主將卽李萬戶也。汝其速降。否則悔無及矣。賊酋對曰。唯命是從。方與其下議降未定。太祖曰。當因其怠而擊之。遂上馬。使豆蘭呂英珪誘賊。賊先鋒數百追之。太祖陽北自爲殿。退入伏中。遂回兵。親射賊二十餘人。皆應弦而斃。與豆蘭宗儉等馳擊之。伏兵又起。於是太祖身先士卒。單騎出入賊陣者數四。所向披靡。手斃賊無算。所射洞徹重甲。或有一矢而人馬俱徹者。賊奔崩。官軍乘之。呼聲動天地。僵尸蔽野。無一人得脫。是戰也。女眞軍乘勝縱殺。太祖令曰。賊窮可哀。勿殺。生擒之。餘賊入千佛山。亦盡擒之。禑賜太祖白金五十兩。五表裏鞍馬。又加賜定遠十字功臣號。○以前知門下李乙珍爲江陵道元帥。以捕倭賊。○冬十月忠州兵馬使崔雲海斬倭六級。

辛禑十三年明洪武二十年○大丁卯二月判密直司事尹可觀卒。初倭賊皆由丑山島入寇。可觀出鎭合浦。建白置船卒。自後倭患稍息。性淸儉秋毫不取。不近聲妓。銷兵器弊棄者爲農器。開屯田以贍軍食。及還鞍勒破缺。以麻繩補之。○秋八月鄭地上書。自請東征曰。倭非擧國爲盜。其國叛民分據對馬一岐兩島。隣於合浦。入寇無時。若聲罪。大擧覆其巢穴。則邊患永除矣。且今水軍非辛巳東征蒙漢兵。不習舟楫之比也。順風而往。則二島一擧可滅。○十二月倭寇井邑縣。典醫正景德宜妻安氏。攜二子及三婢。匿後

〔枯槎〕朽ちたる筏也。

〔女眞〕往昔は、今の露領沿海州の地の稱也、此の時代にては、滿洲地方の稱也、其の「女眞軍」と云ふは、明の太祖の、朝鮮に遣したる援軍を云へり。

〔忠州〕忠淸北道忠州郡にあり、道廳及び郡衙の所在地にして、京城を去る東南二十八里、漢江の上流なる平地を占む。

〔丑山島〕慶尙北道盈德郡にあり。

〔井邑〕全羅南道井邑郡の主邑也。

〔捽首〕捽は說文に、持頭髮也、とあり。
〔洪武〕明第一世太祖の時の年號也。
〔元中〕後龜山天皇御宇の年號也。
〔後小松天皇〕第百代の天皇也、後圓融天皇の第一皇子にして、御名を幹仁と申す。
〔辛禑〕僧辛旽の子也、高麗恭愍王子となし、依て辛旽と計り、禑を己が落胤と稱す、恭愍王弑せられし後、高麗第三十二世の王となる、依て王位は一時辛氏に移りしが、後ち恭讓王これを誅して王室を復せり。
〔太祖〕朝鮮の太祖李成桂也。
〔光州〕全羅南道の中央に在り。

閫土宇。賊尋得欲亂之。安罵且拒。賊捽首。拔劍脅之。安極口罵曰。寧死不從汝。賊怒殺之。虜一子一婢而去。又執中郎將李得仁妻李氏。欲汚之。李以死拒。賊遂殺之。

今按。洪武二十年當日本南朝元中四年。北朝後小松天皇嘉慶元年。

卷之五十三

高麗紀　辛禑四

辛禑十四年〇大明洪武二十一年。戊辰夏四月乙巳朔禑次鳳州。初禑獨與崔瑩決策攻遼。未敢顯言。是日召瑩及我太祖曰。欲攻遼陽。卿等宜盡力。太祖曰。今者出師有四不可。以小逆大。一不可。夏月發兵。二不可。舉國遠征。倭乘其虛。三不可。時方暑雨。弓弩膠解。大軍疾疫。四不可。禑頗然之。云云〇丁巳禑命奉天船都元帥同知密直李光甫。還屯開京西江以備倭。〇倭入椒島。時京城丁壯皆從軍。唯餘老弱而已。每夜烽尖屢舉。京城單虛。人情危懼。莫保朝夕。〇五月倭船八十餘艘來泊鎭浦。寇旁近州郡。禑遣上護軍陳汝宜于全羅楊廣道。凡托疾不赴北征。使子弟奴隸代行者。悉令禦倭。避者斷以軍法。籍其產。〇楊廣道按廉田理報。倭寇道內四十餘郡。留兵單弱。如蹈無人之境。乃遣元帥都興金湊趙浚郭璇金宗衍等禦之。令諸妃之在漢陽者悉還開京。〇六月癸卯朔諸軍來屯近郊。爲書授金完曰。盛夏動衆。三韓失農。倭奴乘虛。深入爲寇。殺我人民。燔我府庫。云云〇秋七月倭陷光州。命楊廣全羅慶尙道都體察使皇甫琳。楊廣道副元帥都興。全羅道副元帥金宗衍。慶尙道副元帥具成老等。救之。時判典校寺事康好文妻文氏有二兒。負幼携長將走匿。忽被虜。欲自絕不肯行。賊繫其頸。逼令前行。

又遍棄ニ所レ負兒一。文氏知レ不レ免、裹ニ幼兒一置ニ樹陰一、謂ニ長兒一曰、汝且在レ此。將レ有ニ收護者一。兒強從レ之、行至ニ夢佛山一極樂菴畔有ニ石崖一。高可ニ千尺餘一、上有レ路如レ線。文氏謂ニ同被レ虜隣女一曰、汚レ賊求レ生、不レ如潔レ身就レ死。奮身而墜。賊不レ及レ止之、罵極口。殺ニ其兒一而去。崖下有ニ蘿蔓蒲草一。又寄得レ不レ死、折ニ右臂一、久而復蘇。適里中人先在ニ崖竇一、見而哀レ之、饘粥以養、居ニ三日一、聞ニ賊退一乃還ニ鄉里一。莫レ不ニ嘆驚一。○大司憲趙浚等上書曰云云。民之出ニ私田之租一也、稱ニ貸於人一而不レ能レ充也。其所レ貸者、賣レ妻鬻レ子而不レ能レ償也。父母飢寒而不レ能レ養也。寃呼之聲、上徹ニ于天一、感ニ傷和氣一、召ニ致水旱一。戶口由レ是而一空、賊奴以レ之而深入千里。暴レ屍莫レ有ニ禦禁者一。貪饕之聲聞ニ于上國一、社稷宗廟危ニ於累卵一。○八月以ニ鄭地一爲ニ楊廣全羅慶尙道都指揮使一。時倭寇擾ニ亂三道一。所レ至將帥守令莫レ有ニ禦者一。以ニ地威名足ニ以攝ニ伏倭寇一。命與ニ金伯興金用鈞等一往擊レ之。又遣ニ慈專尹曹彥密直副使崔七夕張思吉和寧尹鄭曜一禦レ之。○大司憲趙浚陳ニ時務一曰、云云。全羅慶尙楊廣三道貢賦之所レ出、國家之腹心。今也倭奴橫行、攻ニ陷我州郡一、踐ニ踏我禾稼一、殺ニ戮我老弱一、奴ニ婢我丁壯一。而擁ニ旌節一者嬰レ城竄伏、莫レ有ニ鬪志一。賊勢日熾、願令ニ大擧一、及レ時掃淸、云云。水尺才人不レ事ニ耕種一。坐ニ食民租一。無ニ恒產一而無ニ恒心一、相ニ聚山谷一、詐ニ稱倭賊一。其勢可レ畏。不レ可レ不ニ早圖一之。○慶尙道都巡問使朴葳安東元帥崔鄲擊ニ倭于尙州中牟縣一、破レ之。各賜ニ弓馬一。○楊廣全羅慶尙道都指揮使鄭地等擊ニ倭兵於南原一、大敗レ之。時倭寇ニ三道一。自レ夏及レ秋、屠ニ燒州郡一。晉州牧使李賚戰死。倭又自ニ咸陽一踰ニ雲峰八羅峴一、至ニ南原一。地督ニ都巡問使崔雲海副元帥金宗衍助戰元帥金伯興陳元瑞金州牧使金用鈞楊廣道上元帥都興副元帥李承源等一、奮擊大破レ之。斬ニ五十八級一、獲ニ馬六十餘匹一。賊夜遁。地以ニ諸軍無レ食不レ能

〔累卵云々〕極めて危きを云ふ、司馬相如ガ喩ニ巴蜀一檄に、去ニ累卵之危一、就ニ永安之計一、豈不レ美與、とあり、又た史記范雎傳に、秦王之國、危ニ於累卵一、と見えたり。

〔腹心〕要所を云ふ

〔倭奴橫行云々〕曩に辛禑王は倭寇の鎭遏を足利義滿に請ひたれども郤けらる、時に藤原經光といへる者順天に在りしが、全羅道元帥これを誘殺せんとして果さず、これより其徒激怒し、入寇益猖獗となり、高麗滅亡の一大原因となれり

〔無ニ恒產一云々〕孟子梁惠王上篇に、無ニ恒產一而有ニ恒心一者、云々とあるに出づ。

〔恭讓王〕高麗第三十四世の王也、神宗第七世の裔にして、諱を瑤と云ふ。

〔元帥朴葳云々〕これより先水軍の將鄭地獻策して倭賊の根據地壹岐對馬を衝かんことを乞ふ、元中五年倭船八十餘艘また全羅慶尙二道に焚掠するや、遂にその橫暴に堪へずして其獻策を納れ、卽ち朴葳をして不意に對馬阿佐尾浦を襲ひ、民舍を毀ち船舶三百艘を燬く。

追。賊乃登船。人謂。非此戰則三道民幾盡矣。昌賜地等宮醞段絹。○九月朴葳擊倭于高靈縣。斬三十五級。○西海道觀察使趙云。仡將行上書曰。我本朝水近倭島。陸連胡地。固不可以不慮也。云云○十二月先是。典法及郎舍上疏曰。崔瑩事我玄陵。云云。逮奉上王却倭寇於昇天。以存社稷。

今按。洪武二十一年當日本南朝元中五年。北朝嘉慶二年。

卷之五十四

高麗紀　　恭讓王一

己巳元年大明洪武二十二年二月慶尙道元帥朴葳以兵船一百艘擊對馬島。燒倭船三百艘。廬舍殆盡。元帥金宗衍崔七夕朴子安等繼至。搜被擄民百餘以還。昌賜葳衣服鞍馬銀錠。奬諭之。人以爲葳但燒廬舍舟楫。實無俘獲。○六月慶尙道都節制使朴葳捕倭船一艘。斬三十二級。京畿節制使朴子安與倭戰。斬三十級。○秋七月倭船二十艘來泊海州。遣節制使柳曼殊我恭靖王。禦之。賜弓矢。○冬十月倭寇楊廣道都屯串。都體察使王安德。與戰大敗○十二月大司憲趙浚等上疏。略曰。云云軍士與倭奴戰。而所得馬匹器仗與凡民。殺賊所得之物所在官悉輸京都以希重賞。罔上毒民。軍士解體。願自今諸道將師。破賊者獻馘而已。軍民所得倭物。勿使推鞫。

卷之五十五

高麗紀　　恭讓王二

庚午二年大明洪武二十三年六月倭寇楊廣道。至陰竹陰城安城竹州槐州。遣我恭靖王及知密直司事尹師德捕之。

〔孑遺〕僅に遺る也。

〔素盞烏尊云々〕日本紀神代卷に、一書曰、素盞嗚尊所行無狀、故諸神科以千座置戶、而遂逐之、是時素盞嗚尊帥其子五十猛神、降到於新羅國、居曾尸茂梨之處、とあるを引けり。

〔曾尸茂梨〕日本紀口訣に、荒芒地、とあり、纂疏に、在新羅之地名と見えて明かならず。

〔廻庭樂〕日本紀通證に、今按曾聞其舞圖、著蓑笠以屈折、蓋模素尊流離辛苦之體也、と見えたり。

〔百舌鳥野北陵〕今和泉國泉北郡向井村に在り。

遇賊于寧州道高山下、斬賊百餘級、取所虜男女以歸。

今按。洪武二十三年當日本南朝元中七年北朝明德元年。

卷之五十六

高麗紀　恭讓王二

辛未三年大明洪武二十四年。二月中郞將房士良上時務十一事。云云自庚寅倭寇以來、州郡蕩然失所、邑無孑遺。

今按。庚寅元至正十年、至今洪武二十四年該四十二年。庚寅倭寇之興、見東國通鑑第四十五卷。

具前。

壬申四年大明洪武二十五年。二月倭寇慶尚道仇羅島。萬戶李興仁擊破之、獲戰艦以獻。賜米二十碩。○三月慶尚道水軍萬戶車俊獲倭船一艘以獻。王賜帛。

今按。洪武二十五年當日本後小松天皇明德三年。

右東國通鑑五十六卷記三韓始終。其間往往有日本事。表章如上文。惟恨志近代小事煩雜、於上世大事多闕如也。昔我素盞烏尊帥其子五十猛神、降到於新羅國、居曾尸茂梨之處。乃興言曰。此地吾不欲居。高麗曲有蘇志磨利、與曾尸茂梨訓近。或曰廻庭樂。蓋素盞烏尊所作樂也。遺音載在仁智要錄。三韓人不知之。又百濟王仁來大闡儒風。仁其先漢人也。崔豹古今注所謂。千乘王仁者耶。和泉國百舌鳥野北陵。反正天皇陵也。陵東池上池名楯井池。號凡人中家姓氏錄。泉姓出其地。有王仁祠。應神天皇皇子菟道稚郎子、嘗師仁學。其後受禪讓於兄大鷦鷯尊。兄弟有夷齊之行。皇十薨、尊悲哀不已。仁乃獻和歌

〔於レ是尊即レ位〕即ち仁徳天皇也、
〔寥寥〕淋しき貌也

方勸レ即レ位。於レ是尊即レ位。此我朝之美談也。必仁之教導所レ使乎。亦可レ觀二百濟有一レ人矣。然三韓人。寥寥無レ聞。豈惟惡二己國惡一。不レ書而已哉。雖二美事一不レ知。此類也。

異稱日本傳卷下二終

異稱日本傳　卷下三

三國史記卷第一

輸忠征難靖國賛化同德功德臣開府儀同三司檢校大師大保僕射尙書兼禮部事集賢殿大學士監修國史上柱國致仕臣金富軾奉　宣撰

新羅本紀第一

始祖三十四年。(前漢陽朔元年)脫解尼師今立。一云吐解。時年六十二。姓昔。妃阿孝夫人。脫解本多婆那國所生也。其國在倭國東北一千里。初其國王娶女國王女爲妻。有娠。七年乃生大卵。王曰。人而生卵不祥也。宜棄之。其女不忍。以帛裹卵幷寶物。置於櫝中。浮於海。任其所往。初至金官國海邊。金官人怪之不取。又至辰韓阿珍浦口。是始祖赫居世在位三十九年也。時海邊老母以繩引繫海岸。開櫝見之。有一小兒在焉。其母取養之。及壯身長九尺。風神秀朗。智識過人。或曰。此兒不知姓氏。初櫝來時有一鵲。飛鳴而隨之。宜省鵲字。以昔爲氏。又解韞櫝而出宜名脫解。脫解始以漁釣爲業。供養其母。未嘗有懈色。母謂曰。汝非常人。骨相殊異。宜從學以立功名。於是專精學問。兼知地理。望楊山下瓠公宅。以爲吉地。設詭計。以取而居之。其地後爲月城。至南解王五年。聞其賢。以其女妻

(脫解)新羅第四世の王也、我國の人なりと傳へらる、邦人瓠公を大輔に擧げ、よく政を努め、新羅の基を堅めたり。

(辰韓)馬韓、弁韓と共に三韓の一也馬韓の東に在りて北は濊貊、南は弁韓に接す。

(赫居世)姓を朴と云ふ、其先を詳かにせず、年十三、朝鮮の遺民に奉ぜられて君となる。

(南解王)赫居世の嫡子にして、新羅第二世の王也。

〔多婆那國〕或は丹波の地にして、新羅第四世脫解は、丹波國主の、娜縣主の女を娶りて生みし所なりとも云へり。
〔太宗王〕新羅第廿九世の王にして、眞智王の孫也。
〔滅百濟〕當時百濟の義慈王雄略ありて、新羅を併呑せんとし、其數十城を略す、太宗王依て唐に援兵を請ひ、共に百濟を滅ぼせる也。
〔文武王〕新羅第三十世の王にして、太宗王の子也、父に次で英武、遂に高麗をも併せて朝鮮の大半を統一す
〔祇摩〕新羅第五世の王婆娑王の太子也、第六世の王となる。

之。至七年登庸爲大輔。委以政事。儒理將死。曰先王顧命曰吾死後無論子壻。以年長且賢者繼位。是以寡人先立。今也宜傳其位焉。

今按。新羅始祖元年。當日本垂仁天皇六年。多婆那國在倭國東北一千里。東國通鑑亦有之。本出于此。謂倭國東北。則蓋蝦夷之地也。三國史記五十卷記新羅高麗百濟三國事。與東國通鑑有異同。今竝存之。

三年夏五月。與倭國結好交聘。

今按。脫解尼師三年當日本垂仁天皇八十八年。

十一年。倭人侵木出島王遣角干羽烏禦之。不克羽烏死之。

今按。十一年當垂仁天皇九十六年。東國通鑑。以羽烏事爲脫解十七年事。角干新羅位名。三國史記職官志曰。大角干（或云大舒發翰）太宗王七年滅百濟。論功授大將軍金庾信大角干。於前十七位之上。加之。非常位也。太大角干（或云太大舒發翰）文武王八年滅高句麗。授留守金庾信。以太大角干賞其元謀也。於前十七位及大角干之上加此位。以示殊尤之禮。

祇摩尼師今立（或云祇味）十年（後漢建武九年）四月倭人侵東邊。十一年夏四月。大風東來。折木飛瓦。至夕而止。都人訛言。倭兵大來爭遁山谷。命伊飡翌宗等諭止之。

今按。祇摩尼師今祇摩王也。尼師今麻立干等語者國諺王號也。後朝鮮人惡國諺鄙野稱王。非舊也。三韓有國字。有諺音。權世珍抄編四聲通解上下卷言之。十年十一年當垂仁天皇六十五年。

十二年春三月。與倭國講和。

今按。十二年。當垂仁天皇六十五年。講和事我國史不見。

又卷第二新羅本紀第二

阿達羅尼師今立。五年(後漢元嘉元年)春三月。倭人來聘。

今按。五年。當日本成務天皇二十一年。謂倭人來聘者無稽之言也。

二十年夏五月。倭女王卑彌乎遣使來聘。

今按。二十年。當成務天皇四十年。卑彌呼。異邦訛稱神功皇后也。見前。此年神功皇后降誕。安得有生而遣使來聘乎甚謬。

伐休一作發暉尼師今立。十年(後漢初平四年)六月。倭人大饑。來求食者千餘人。

今按。十年。當日本仲哀天皇二年。此時日本新羅未通。豈有倭人求食于新羅哉。

助賁尼師今立。一云諸貴三年(魏大和六年)夏四月。倭人猝至圍金城。王親出戰。賊潰走。遣輕騎追擊之。殺獲一千餘級。

今按。三年。當日本神功皇后三十二年。

四年五月。倭兵寇東邊。

秋七月。伊飡于老與倭人戰沙道。乘風縱火焚舟。賊赴水死盡。

今按。通鑑爲五月事。

〔阿達羅〕新羅第七世逸聖王の長子、第八世の王也。

〔元嘉〕後漢第十一世桓帝の時の年號なり。

〔伐休〕新羅第九世の王也、同元年三月先王阿達羅嗣無くして薨ず、依て國人脫解王の孫伐休を立てし也。

〔初平〕後漢第十三世獻帝の時の年號なり。

〔助賁〕新羅第十一世の王也、伐休王の孫にして、先王奈解王の女婿也。

〔大和〕魏の明帝の時の年號也。

沾解尼師今立。三年（魏嘉平元年）夏四月。倭人殺舒弗邯于老。

今按。三年。當神功皇后四十九年。

儒禮尼師今立。四年（西晉大康八年）夏四月。倭人襲一禮部。縱火燒之。虜人一千而去。

今按。四年當日本應神天皇十八年。

六年夏五月。聞倭兵至。理舟楫。繕甲兵。

今按。六年。當應神天皇二十年。

九年夏六月倭兵攻陷沙道城。命一吉飡大谷。領兵救完之。

今按。九年。當應神天皇二十三年。

十一年夏。倭兵來攻長峰城。不克。

今按。十一年。當應神天皇二十五年。

十二年春。王謂臣下曰。倭人屢犯我城邑。百姓不得安居。吾欲與百濟謀。一時浮海入擊其國。如何。舒弗邯弘權對曰。吾人不習水戰。冒險遠征。恐有不測之危。況百濟多詐。常有吞噬我國之心。亦恐難與同謀。王曰善。

今按。十二年當應神天皇二十六年。

基臨（一云基丘）尼師今立。二年（西晉永康元年）春正月。與倭國交聘。

今按。三年當應神天皇三十三年。

（沾解）新羅第十二世の王にして、骨正の次子、先王助賁の母弟也。

（嘉平）魏の齊王の時の年號也。

（夏四月云々）此時于老戲れに倭人に向ひ其王を侮辱すに依て擒へられ焚殺せらる。

（儒禮）新羅第十四世の王にして、助賁王の長子也。

（大康）晉の武帝の時の年號也。

（基臨）新羅第十五世の王にして、助賁の孫也。

（永康）晉の惠帝の時の年號也。

〔訖解〕新羅第十六世の王にして、奈解王の子也。

〔永嘉〕晋懷帝の時の年號也。

〔奈勿〕新羅第十七世の王にして、仇道葛文王の孫昧鄒王の女婿也。

〔興寧〕東晋哀帝の時の年號也。

訖解尼師今立。三年(西晋永嘉六年)春三月。倭國王遣使。爲子求婚。以阿飡急利女送之。

今按。三年。當應神天皇四十三年。與通鑑同。

三十五年春二月。倭國遣使請婚。辭以女既出嫁。

今按。三十五年。當日本仁德天皇三十二年。與通鑑異。

三十六年二月。倭王移書絕交。

今按。三十六年。當仁德天皇三十三年。與通鑑同。

三十七年倭兵猝至風島。抄掠邊戶。又進圍金城急攻。王欲出兵相戰。伊伐飡康世曰。賊遠至。其鋒不可當。不若緩之待其師老。王然之。閉門不出。賊食盡將退。命康世率勁騎追擊走之。

今按。三十七年。當仁德天皇三十四年。與通鑑同。

又卷第三新羅本紀第三

奈勿(一云那密)尼師今立。九年(東晋興寧二年)夏四月。倭兵大至。王聞之。恐不可敵。造草偶人數千。衣衣持兵。列立吐含山下。伏勇士一千於斧峴東原。倭人恃衆直進。伏發擊其不意。倭人大敗走。追擊殺之幾盡。

今按。九年。當仁德天皇五十二年。與通鑑同。

三十八年夏五月。倭人來圍金城。五日不解。將士皆請出戰。王曰。今賊棄舟。深入在於死地。鋒不可當。乃閉城門。賊無功而退。王先遣勇騎二百。遮其歸路。又遣步兵一千。追於獨山。夾擊大敗之。殺獲

〔實聖〕新羅第十八世の王にして、金閼智の裔孫也。奈勿王薨じて其子未だ幼少也、依て國人實聖を迎へ立つ

〔兵凶器〕國語越語に、范蠡曰、勇者逆德也、兵者凶器也、云々、とあり。

〔訥祇〕新羅第十九世の王にして、奈勿王の子也、始め實聖王の爲めに高麗に質となる、依てこれを怨み、遂に王を弑して自立せる也。

〔王弟卜好云々〕訥祇王の弟卜好高麗に質たり、王これを憐み、婆娑王五世の孫提上の智勇有るを聞き高麗に使せしめ、遂に高麗長壽王に說き、放還せらるゝを得し也。

甚衆。

今按。三十八年。當仁德天皇八十一年。通鑑爲三十七年事。

實聖尼師今立。元年（東晋元興元年）三月與倭國通好。以奈勿王子未斯欣爲質。

今按。元年。當日本履中天皇三年。與通鑑同。

四年夏四月。倭兵來攻明活城。不克而歸。王率騎兵。要之獨山之南。再戰破之。殺獲三百餘級。

今按。四年當履中天皇六年。

六年春三月。倭人侵東邊。夏六月。又侵南邊。奪掠一百人。

今按。六年。當日本反正天皇二年。

七年春二月。王聞倭人於對馬島置營。貯以兵革資糧。以謀襲我。我欲先其未發。揀精兵擊破兵儲。舒弗耶未斯品曰。臣聞。兵凶器。戰危事。況涉巨浸以伐人。萬一失利。則悔不可追。不若。依嶮設關。來則禦之使不得侵猾。便則出而禽之。此所謂致人而不致於人。策之上也。王從之。

今按。七年。當反正天皇三年。與通鑑同。

十四年八月。與倭人戰於風島。克之。

今按。十四年當日本允恭天皇三年。

訥祇麻立于立。二年（東晋恭帝德文元年）春正月王弟卜好自高勾麗與堤上奈麻還來。秋王弟未斯欣自倭國逃還。

今按。二年。當允恭天皇八年。

十五年夏四月。倭兵來侵東邊。圍明活城。無功而退。

今按。十五年。當日本允恭天皇二十二年。

二十四年倭人侵南邊。掠取生口而去。夏六月又侵東邊。

今按。二十四年。當允恭天皇三十一年。

二十八年夏四月倭兵圍金城。十日糧盡乃歸。王欲出兵追之。左右曰。兵家之說曰。窮寇勿追。王其舍之。不聽。率數千餘騎。追及於獨山之東。合戰、爲賊所敗。將士死者過半。王蒼黃弃馬上山。賊圍之數重。忽昏霧不辨咫尺。賊謂有陰助。收兵退歸。

今按。二十八年。當允恭天皇三十五年。與通鑑同。

慈悲麻立干立。二年(宋大明二年)夏四月。倭人以兵船百餘艘。襲東邊。進圍月城。四面矢石如雨。王城守。賊將退。出兵擊敗之。追北至海口。賊溺死者過半。

今按。二年。當日本雄略天皇二年。與通鑑同。

五年夏五月。倭人襲破活開城。虜人一千而去。

今按。五年。當雄略天皇五年。

六年春二月。倭人侵歃良城。不克而去。王命伐智德智領兵。伏候於路。要擊大敗之。王以倭人屢侵疆場。緣邊築二城。

（二十八年云々）國史に此事なし。

（窮寇勿追）孫子軍爭篇に、歸師勿遏、圍師必闕、窮寇勿追、用兵之法也、とあるを引けり。

（陰助）冥助と云ふに同じ、神佛の人知れず助くるを云ふ。

（慈悲）新羅第二十世の王にして、訥祇王の長子也。

今按。六年。當雄略天皇六年。

十九年夏六月。倭人侵東邊。王命將軍德智擊破之。殺虜二百餘人。

今按。十九年。當雄略天皇十九年。

二十年夏五月。倭人舉兵。五道來侵。竟無功而還。

今按。二十年。當雄略天皇二十年。

炤知（一云毗處）麻立。八年（南齊永明四年）夏四月。倭人犯邊。

今按。八年。當日本顯宗天皇二年。

十五年秋七月。置臨海長嶺二鎭。以備倭賊。

今按。十五年。當日本武烈天皇二年。

十九年夏四月。倭人犯邊。

今按。十九年。當武烈天皇六年。

二十二年春三月。倭人攻陷長峯鎭。

今按。二十二年。當日本繼體天皇元年。

又卷第六新羅本紀第六文武王上

立。十年（周天授元年）十二月。倭國更號日本。自言近日所出。以爲名。

今按。十年。當日本持統天皇四年。

〔二十年云々〕以上雄略天皇の御宇に當れる記事、國史と稍異り、國史によれば、天皇八年高麗より新羅を擊つ、新羅援を任那府に請ひて大に高麗を破る、高麗また叛く、朝廷紀小弓、蘇我韓子を遣してこれを征せしめしが、小弓病死し將士和せず、竟に利を失ひて歸れる也。

〔炤知〕新羅第二十一世の王にして、慈悲王の長子也。

〔永明〕齊武帝の時の年號也。

〔八年云々〕國史に此事なし。

〔周〕則天武后の位を潛して建てし國の名也。

又卷第七新羅本紀第七文武王下

十一年秋七月。至龍朔三年。摠管孫仁師領兵。來救府城。新羅兵馬亦發。同征行至周留城下。此時倭國船兵。來助百濟。倭船千艘停在白沙。百濟精騎岸上守船。新羅驍騎。爲漢前鋒。先破岸陣。周留失膽。遂卽降下。南方已定。回軍。云云

今按。十一年當持統天皇五年。

又卷第八新羅本紀第八

孝昭王七年（周聖曆元年）三月。日本國使至。王引見於崇禮殿。

今按。七年。當日本文武天皇二年。

聖德王二十一年（唐開元十年）冬十月。築毛伐郡城。以遮日本賊路。

今按。二十一年。當日本元正天皇養老六年。

又卷第九新羅本紀第九

景德王元年（唐天寶元年）冬十月。日本國使至。不納。

今按。元年。當日本聖武天皇天平十四年。

十二年。秋八月日本國使至。慢而無禮。王不見。乃廻。

今按。十二年當日本孝謙天皇天平勝寶五年。

又卷第十新羅本紀第十

（助百濟云々）當時百濟の社稷既に亡びしも、武寧王の子豐質として我國に在りしを以て福信等これを立て我國また阿曇比邏夫をしてこれを援けしめしも戰敗れ豐は高麗に奔る。

（孝昭王）新羅第三十二世の王、諱は理洪、神文王の子なり。

（聖德王）新羅第三十三世の王にして諱を興光と云ふ。

（景德王）新羅第三十四世孝成王の母弟にして卅五世の王也。

哀莊王三年(唐貞元十八年)冬十二月。授均貞大阿飡。爲假王子。欲以質倭國。均貞辭之。

今按。三年當日本桓武天皇延曆二十一年。

四年秋七月。與日本國交聘結好。

今按。四年。當延曆二十二年。

七年春三月。日本國使至。引見朝元殿。

今按。當日本平城天皇大同元年。

九年春二月。日本國使至。王厚禮待之。

今按。當大同三年。

又卷第十一 新羅本紀第十一

憲康王二年(唐乾符三年)八月。日本國使至。王引見於朝元殿。

今按。當日本清和天皇貞觀十八年。

八年夏四月。日本國王遣使。進黃金三百兩明珠一十箇。

今按。當日本陽成天皇元慶六年。此年我無遣使于新羅事。三代實錄曰。十二月廿七日乙未。加賀國馳驛言。今月十四日。渤海國入覲使裴頲等一百五人著岸。渤海國高麗別種也。及高麗衰。其地多入渤海。三國史記。自第十三至第二十二。高麗本紀也。一言無我國事。粗略之甚也。

又卷第二十五百濟本紀第三

〔哀莊王〕新羅第四十世の王也、昭聖王(第卅九世)の子にして、諱を淸明と云ふ。
〔貞元〕唐の德宗の時の年號也。
〔憲康王〕新羅第四十九世の王にして諱を晸と云ふ、景文王の子也。
〔乾符〕唐の僖宗の時の年號也。
〔三代實錄〕淸和、陽成、光孝三代三十年間の實錄にして、宇多、醍醐二代に亙りて撰修す全部五十卷也。
〔渤海國〕今の滿洲東蒙古の地に在りし國也、文武天皇の頃、大祚榮と云ふもの、諸部を併呑し、次で唐これを封じて渤海郡王となす、これ渤海國の初め也。

辰斯王六年（東晋大元十五年）夏五月。王與倭國結好。以太子腆支爲質。

今按。當仁德天皇七十八年。

十一年五月。遣使倭國求大珠。

今按。當仁德天皇八十三年。

十二年春二月。倭國使者至。王迎勞之。特厚。

今按。當仁德天皇八十四年。

腆支王（或云直支）梁書。名映。阿莘之元子。阿莘在位。第三年立爲太子。六年。出質於倭國。十四年。王薨。王仲弟訓解攝政。以待太子還國。季弟碟禮殺訓解。自立爲王。腆支在倭聞訃。哭泣請歸。倭王以兵士百人衞送。既至國界。漢城人解忠來告曰。大王棄世。王弟碟禮殺兄自王。願太子無輕入。腆支留倭人自衞依海島以待之。國人殺碟禮。迎腆支卽位。妃八須夫人生子久爾辛。

今按。直支百濟第二十世王也日本書紀曰。應神天皇八年春三月。百濟人來朝。（百濟記曰。阿花王立遣王子直支于天朝。以脩先王之好也。）十六年春二月。百濟阿花王薨。天皇召直支王謂之曰。汝返於國以嗣位。仍且賜東韓之地而遣之。（見林按。直支在日本凡九年。）二十五年百濟直支王薨。卽子久爾辛（クニシン）立爲王。王年幼。大倭木滿致（モクマンチ）執國政。與王母相婬。多行無禮。天皇聞而召之。

十四年。夏遣使倭國。送白綿十匹。

今按。當允恭天皇七年。

（辰斯王）百濟第十六世の王にして、近仇首王の仲子枕流王の弟也。

（腆支王）百濟第十八世の王也。

（阿莘）百濟第十七世の王にして、枕流王の子也。

（直支）三國史記に腆支或作直支とあり。

（大倭木滿致）木羅斤資（モクラコンシ）新羅を討ちし時、其國婦を娶りて生みし所也、父功により任那にて威あり、次で百濟に入り國政を執る。

毗有王二年（宋元嘉五年）春二月、倭國使至、從者五十人。

今按。當允恭天皇十七年。

又卷第二十七 百濟本紀第五

武王九年（隋大業四年）春三月。隋文林郎裴清奉使倭國。經我國南路。

今按當日本推古天皇十六年。

又卷第二十八 百濟本紀第六

義慈王十三年秋八月王與倭國通好。

今按。當日本孝德天皇白雉四年。

二十年春二月遣使高句麗倭國。乞師以拒唐。

今按。當日本齊明天皇六年。

又卷第三十八

雜志第七 職官上

領客府本名倭典。眞平王四十三年改爲領客典。（後又別置倭典）景德王又改爲司賓府、惠恭王復故。令二人、

眞德王五年置位。自大阿飡至角干爲之卿二人云云。

又卷第四十一 列傳第一 金庾信上

金庾信王京人也。十二世祖。首露不知何許人也。以後漢建武十八年壬寅登龜峯。望駕洛九村。遂

（大阿飡）東國通鑑に「一曰伊伐飡、二曰伊尺飡、三曰迊飡、四曰波珍飡、五曰大阿飡、皆授眞骨（眞骨王族也）」とあり。

（角于）天智紀七年九月の條に「新羅上臣大角于庾信」と見ゆ、東國通鑑、新羅大宗王七年條に「贈戰死者官有差、初置大角于云々、在十七位之上云々」と見ゆ、角于亦之れに次ぐ位なり。

（金庾信）新羅王二十九代武烈、三十代文武の時の人にして、兩王を輔翼し、忠誠を竭し、唐及び百濟、高麗の間に周旋して、よく統一の業を成せり。

至其地開國。號曰加耶。後改爲金官國。其子孫相承至九世孫仇死。或云。仇次休於庾信爲曾祖。羅人自謂少昊金天氏之後。故姓金。

又卷第四十三列傳第三庾信下

開元二十一年大唐遣使。敎諭曰。靺鞨渤海外稱蕃翰。內懷狡猾。今欲出兵問罪。卿亦發兵相爲掎角。聞舊將金庾信孫允中在。須差此人爲將。仍賜允中金帛若干。於是大王（聖德大王也）命允中弟允文等四將軍。率兵會唐兵伐渤海。允中庶孫巖。性聰敏好習方術。少壯爲伊飡。入唐宿衛間就師學陰陽家法。聞一隅則反之以三隅。自述遁甲立成之法。呈於其師。師撫然曰。不圖吾子之明達至於此也。從是而後不敢以弟子待之。大曆中還國。爲司天大博士。歷良康漢三州大守。復爲執事侍郎浿江鎭頭上。所至盡心撫字。三務之餘。敎之以六陣兵法。人皆便之。嘗有蝗。蝗自西入沮江之界。蠢然蔽野。百姓憂懼。巖登山頂。焚香祈天。忽風雨大作。蝗蟲盡死。大曆十四年己未。受命聘日本國。其國王知其賢。欲勤留之。會大唐使臣高鶴林來相見甚懽。倭人認巖爲大國所知。故不敢留。乃還。

今按。金巖事比通鑑詳。故載之。

又卷第四十五列傳第五

昔于老奈解尼師今之子。（或云。角干水老子也。）助賁王二年七月以伊飡爲大將軍。出封甘文國破之。以其地爲郡縣。四年七月。倭人來侵。于老逆戰於沙道。乘風縱火。焚賊戰艦。賊溺死且盡。十五年正月進爲舒弗耶兼知兵馬事。十六年高句麗侵北邊。出擊之。不克。退保馬頭柵。至夜士卒寒苦。于老躬行勞問。手

〔加耶〕加羅に同じ太古辨韓の地にして、今の朝鮮慶尙南道の東南部を云へり。

〔少昊金天氏〕支那古代の聖君たる五帝の一、少皡金天氏を云ふ。

〔掎角〕掎は足を後より引くこと、角は頭を前より捕ふることにて、前後相應じて、敵に當るを云ふ、左傳に「譬如捕鹿、晉人角之、諸戎掎之」とあり。

〔伊飡〕通證に「彼國(新羅)一等の官にて云々、又伊伐飡と云ふ」とあり。

〔昔干老 奈解尼師今〕昔は姓也、新羅王九世伐休の子一に滑正と云ふ。

〔甘文國〕慶尙北道開寧地方の古稱也

〔纊〕玉篇に「細綿也、絮也」とあり、こゝには柔かく溫かさうなる綿の意也。

〔七年癸酉云々〕我が神功皇后攝政五十三年に當る、倭國使臣葛那古詳ならず、これより前二年の三月百濟入貢、千熊長彥を送使として遣せること正史に見ゆるも新羅に遣使のこと明かならず、案ずるに、攝政六十二年に葛城襲津彥をして彼れを討たしめしことあり、此の名を誤傳せしか。

〔婆娑尼師今〕尼師今官名也、婆娑は朴赫居世子南解、南解子儒理、儒理の子即ち婆娑也。

燒薪蘇煖之。羣心感喜如夾纊。沾解王在位。沙梁代國舊屬心。忽背而歸百濟。于老將兵往討滅之。七年癸酉、倭國使臣葛那古在館。于老主之。與客戲言。早晚以汝王為鹽奴。王妃為爨婦。倭王聞之怒。遣將軍于道朱君討我。大王出居于柚村。于老曰。今茲之患。由吾言之不慎。我其當之。遂抵倭軍。謂曰。前日之言戲之耳。豈意興師至於此耶。倭人不答執之。積柴置其上。燒殺之乃去。于老子幼弱不能步。人抱以騎而歸。後為訖解尼師今。未鄒王時。倭國大臣來聘。于老妻請於國王。私饗倭使臣。及其泥醉。使壯士曳下庭焚之。以報前怨。倭人忿來攻金城。不克引歸。

論曰。于老為當時大臣。掌軍國事。戰必克。雖不克亦不敗。則其謀策必有過人者。然以一言之悖以自取死。又令兩國交兵。其妻能報怨。亦變而非正也。若不爾者其功業亦可錄也。

今按。昔于老事始終詳。故亦載之。

朴堤上 或云毛末 始祖赫居世之後。婆娑尼師今五世孫。祖。阿道葛文王。父。勿品波珍飡。堤上。仕為歃良州干。先是實聖王元年壬寅。與倭國講和。倭王請以奈勿王之子未斯欣為質。王嘗恨奈勿王使己質於高句麗。思有以釋憾於其子。故不拒而遣之。又十一年壬子。高句麗亦欲得未斯欣之兄卜好為質。大王又遣之。及訥祇王即位。思得辯士往迎之。聞水酒村干伐寶靺・利村干仇里迺・利伊村干波老三人有賢智。召問曰。吾弟二人質於倭麗二國。多年不還。兄弟之故。思念不能自止。願使生還。若之何而可。三人同對曰。臣等聞。歃良州干堤上剛勇而有謀。可得以解殿下之憂。於是徵堤上。使前告三臣之言。而請行。堤上對曰。臣雖愚不肖。敢不唯命祇承。遂以聘禮入高句麗。語王曰。臣聞。交

〔五霸〕春秋時代に相爭ひし、齊の桓公、晉の文公、秦の穆公、宋の襄公、楚の莊王を云ふ、權謀を廻らし、相爭ひし例に引けり。

〔鶺鴒云々〕兄弟相親しむの義也、詩經に「鶺鴒在原」と、成語考に「兄弟似鶺鴒之相親、患難相顧、似鶺鴒之在原」とあり。

〔九牛云々〕僅小の譬語也、漢書に、「假令僕伏法受誅、若九牛亡一毛」とあり。

鄰國之道、誠信而已。若交質子、則不及五霸。誠末世之事也。今寡君之愛弟在此、殆將十年。寡君以鶺鴒在原之意、永懷不已。若大王惠然歸之、則若九牛之落一毛。無所損也、而寡君之德大王也、不可量也。王其念之。王曰、諾。許與同歸。及歸國大王喜慰曰、我念二弟、如左右臂。今只得一臂、奈何。堤上報曰、臣雖奴才、旣以身許國、終不辱命。然高句麗大國、王亦賢君、是故臣得以一言悟之。若倭人不可以口舌諭。當以詐謀可使王子歸來。臣適彼則請以背國論、使彼聞之。乃以死自誓、不見妻子。抵栗浦、汎舟向倭。其妻聞之、奔至浦口、望舟大哭曰、好歸來。堤上回顧曰、我將命入敵國、爾莫作再見期。遂徑入倭國、若叛來者。倭王疑之。百濟人前入倭、讒言新羅與高句麗謀侵王國、倭遂遣兵邏戍新羅境外。會高句麗來侵、幷擒殺倭邏人。倭王乃以百濟人言爲實。又聞羅王囚未斯欣堤上之家人、謂堤上實叛者。於是出師將襲新羅、兼差堤上與未斯欣爲將、兼使之鄕導。行至海中山島。倭諸將密議滅新羅後執堤上未斯欣妻孥以還。堤上知之、與未斯欣乘舟遊、若捉魚鴨者。倭人見之以謂無心喜焉。於是堤上勸未斯欣潛歸本國。未斯欣曰、僕奉將軍如父。豈可獨歸。堤上曰、若二人俱發則恐謀不成。未斯欣抱堤上項、泣辭而歸。堤上獨眠室内、晏起、欲使未斯欣遠行。諸人問將軍何起之晚。答曰、前日行舟勞困、不得夙興。及出知未斯欣之逃、遂縛堤上。行舡追之。適煙霧晦冥、望不及焉。歸堤上於王所、則流於木島。未幾使人以薪火燒爛支體。然後斬之。大王聞之哀慟。追贈大阿飡、厚賜其家。使未斯欣娶其堤上之第二女爲妻以報之。初未斯欣之來也。命六部遠迎之。及見握手相泣。會兄弟置酒極娛、王自作歌舞。以宣其意。今鄕樂憂息曲是也。

今按。木斯欣事見前。憂息樂事三國史記卷第三十二。樂志曰。憂息樂祇王時作也。

三韓詩龜鑑卷之下

拙翁崔　瀣　批點　石澗趙　云仡精選

密直郭預

感渡海

扶桑之海遠不極。萬里蒼蒼接天色。有夷生寄海中央。未道絶通變難測。聖明未自置度外。遂將貪功謀欲得。受命東征自往年。東南師期在六月。千艘雲屯會一岐。（日本島名）十丈風帆檣欲折。相望涉夏不交鋒。辛苦何須爲君說。炎氛瘴霧熏著人。滿海浮屍冤氣結。沴舒癘盈潮落生。九月已當三十日。是時八極顚風來。擊碎蒙衝何太疾。蒼皇誰借千金輕。枉教壯士探鮫室。哀哉十萬江南人。攀依絶嶼赤身立。如今恨骨與山高。永夜羈魂向天泣。當時將帥若生還。念此能無增傷悒。壯哉萬古烏江上。恥復東歸樂功業。

今按。密直官名。郭預高麗人。此詩閱至元辛巳蒙古犯日本。高麗與之。會壹岐盡沒海也。

慕齋詩集卷之一

朝鮮　金安國

書日本人犬吠圖

大明初出烁當空。焰遍光輝四海同。堪笑蜀中羣狗吠。只緣風土喜陰霿。
百越窮冬暖若春。黃茅瘴氣毎蒸薰。千年一下霏霏雪。無怪狂奔吠犬羣。

今按。此詩見日本人所畫蜀犬越犬圖。爲作之也。

〔羈魂〕旅の心也、戴叔倫の詩に「羈魂愁似絶、不得待猿吟」とあり、羇は羈に同じく、旅行の意也、篇海に「羇羈本字」とありて、字彙に「羈旅寓也」とあり。

〔蜀中羣狗吠〕蜀の地、山國にて日を見る事少し、故に犬日を見れば吠ゆと云ふ、非常識の行は、常に疑はるに喩ふ、韓愈の書に「蜀中高霧重、見日時少、毎至日出、則群犬疑而吠之也」とあり。

〔霿〕爾雅の釋天に「天氣下地不應曰霿」とありて、註に「言蒙昧」とあり、即ち霧氣を云ふ。

送ニ別日本僧弼中等一五首

縹緲雲帆向ニ日東一。海天無際起ニ悲風一。千年曲裏無ニ鍾子一。三笠溪邊憶ニ遠公一。酒爲レ排レ愁偏取レ醉。詩因レ恨レ別覺レ難レ工。他時最是相思處。月白中秋夜快空。曾與レ師賞ニ中秋月一。

海外知音更幾人。客中懷抱涙沾レ巾。明年八月天河上。須下泛ニ仙槎一再問上レ津。

愛ニ君標格出ニ塵埃一。幾度相傾月下杯。一夜西風動ニ歸興一。天涯離思杳難レ裁。

鴈叫ニ長空一水國秋。天涯離別逾添レ愁。憑レ君莫レ唱ニ陽關曲一。涙染ニ青衫一不レ禁レ收。

聚散悠悠夢不レ眞。幾回揮レ涙海天濱。扁舟萬里一歸去。便作ニ今生永別人一。

今按。弼中道德禪師。東海碩昕禪師上足。乃中峰晉應國師十世法孫也。

又卷之二

答ニ日東使宗國貞一書簡

蕭蕭白髮慕齊翁。衰病年來百慮空。萬里情知皆健否。每窮ニ昏眼一海天東。

渺渺滄溟鴈過疎。今朝忽把故人書。只得ニ相聞一難レ得レ見。箇中懷抱果何如。

中秋皓月重陽菊。爛熳尊前幾醉顚。追想舊遊眞一夢。一看ニ華札一一潸然。

題レ扇寄ニ日東客一

十年懷渺渺。萬里海茫茫。爲借清風陣。憑傳庾嶺香。自是懷中物。寧忘袖裏藏。憑レ渠寄ニ離思一。好去到ニ扶桑一。

〔鍾子〕酒杯也、鍾は說文に「酒器也」とあり。

〔仙槎〕筏を云へり仙は、釋名に「老而不レ死曰レ仙。仙遷也、遷ニ入山一也、故字从ニ人旁一レ山」とありて、神仙の義にして、神仙の用ゆる如き理想的の筏の意をとれり

〔陽關曲〕送別の詩を云ふ、書言故事に「送別唱ニ陽關曲一、王維詩、渭城雨浥ニ輕塵一、客舍青々柳色新、勸レ君更盡ニ一杯酒一、西出ニ陽關一無ニ故人一、後人以爲ニ陽關曲一、三疊唱レ之」とあり。

〔葉札〕書簡を云ふ葉は、博雅に「書冊也」とありて、文を記せるに云ふ

次日東使易宗上人韻

皤皤悠悠一禿翁。壯年懷抱轉頭空。齊庭倚混吹竽列。謾遣虛名落海東。
自愧匡時術已疎。腐儒無用五車書。飛騰本是夔龍輩。目斷雲霄敢望如。
滄海桑田幾變遷。坐看烏兎遞相顚。故人兜率天中去。十載陳蹤意黯然。
遠公高韻遠難參。忽誦新詩意不堪。安得虎溪逢一笑。傳燈豈待發二三。

次寄日本僧月江韻二首

萬里扶桑使、曾同南歲歡。襟期有支許。酬唱倣黃韓。悵別海空闊。相思春欲殘。天涯長有夢。渺渺赴槐安。
每憶曾逢日。平生罄一歡。難追飛錫隱。還似贈衣韓。海外千山杳。廛中兩鬢殘。深慚鷦鷯翼。只應一枝安。

次日本弼中人上韻

年來多病懶杯觴。筆路緣渠又廢荒。敢向長鯨誇颶風。不堪彪虎敵羣羊。吾方欲斂風騷習。師莫頻攜般若湯。萬里知音寧易得。歡娛今日正逢場。
開抱談論借酒觴。十年茅塞勦荒。初疑角逐楚漢鹿。轉覺俱忘臧穀羊。法界禪清風作馭。塵機念絕雪消湯。稽首吾師煩指教。如何始脫死生場。
莫辭貧簡醉壺觴。故國迢迢望眼荒。席上流金張火傘。簾邊生浪舞商羊。行裝謾拂魚腸劍。旅況難憑

〔吹竽〕笙笛の類を吹き鳴らすを云ふ、竽は、說文に「竽三十六簧樂也」とあり。
〔五車書〕書を藏むることの多くして五車に滿載すべきを言ふ、莊子に「惠施多方、其書五車、其道舛駁、其言也不中」とあり。
〔夔龍輩〕妖怪變化の類をいふ、夔は夔の譌字、正字通に「夔夔之譌」とありて、說文に「夔神魖也、如龍一足」と、魯語に「木石之怪曰夔」とあり。
〔烏兎〕日月の異名也、張衡靈憲序に「日者、太陽之精、積而成烏象云々月者、陰精之宗、積而成獸象兎陰之類」とあり、轉じて歲月の意に云ふ。

蟹眼湯。正賴忘レ憂術。此物。淵明一句擅ニ詩場一。得下與ニ吾師一共ニ一觴上。禪言因果非レ荒。今生疑是前身永。過去安知舊姓羊。物外高談方擧レ玉。人間熱鬧任レ探レ湯。相對汗漫無何有。聊付ニ殘生一戲劇場。

與ニ弼中上人一飮且彈レ琴

廬館生レ涼暑氣收。抱柯蟬響報ニ新秋一。白杯興倒朱絃裏。千里思遙碧海頭。聚散關レ天寧屑屑。悲歡閱レ世劇悠悠。峩洋曲曲知音在。一笑相看萬事休。

次ニ弼中上人聽レ琴韻一

古意仍將寄ニ古徽一。頻傾ニ俗耳一尙依俙。澗中流水淙淙響。天際閑雲自在飛。

冰作ニ琴形一玉作レ徽(コトヂ)。峩洋一曲想依俙。莫レ教ニ彈起離ニ鸞怨一。庭葉先レ秋意欲レ飛。

與ニ弼中一話。及睡夢中。指ニ庭中槐樹一曰。睡鄕風味盡在ニ此中一。我輩聚散寧非ニ一夢一乎。因感而贈レ之。

世界一槐安。悲歡一夢中。倏然聚意意。散後還忡忡。智者悟ニ其妄一。笑ニ彼愚者蒙一。寧知至人者。眞妄併爲レ空。吾師了ニ茲意一。我亦欽ニ其風一。乾坤納ニ芥粒一。掉レ臂超ニ鴻濛一。汗漫凌ニ倒景一。下視螻蟻封。師能從レ我否。曠志將無レ同。萬古復萬古。來者亦無レ窮。一笑更何言。醉面聊發レ紅。

與ニ日本釋弼中月江玉成組芳一賞ニ仲秋月一。夜分乃散。明朝各贈ニ壹首一

月到ニ中秋一幾度圓。淸光昨夜最堪レ憐。乾坤萬里雲如レ掃。風露三更酒有レ權。泛レ渚新詩聊可レ詠。登レ樓豪興欲レ成レ顚。明年此日容相憶。南北迢迢路八千。

〔抱柯〕樹枝に留るに云ふ、柯は、爾雅の釋詁に「柯、云々、又枝」とあり。

〔峩洋曲曲〕山高く海洋々、樂の音律の高低に喩へたるも也、曲は音を云ふ、說文解字註に「韋云、曲云々、樂曲也」とあり。

〔一槐安〕猶一夢と云ふが如し、樂善錄に「淳于棼嘗晝寢、夢二紫衣吏引自ニ宅南古槐下一入云云、榜曰ニ大槐安國一、王以ニ公主一妻レ之云々、公主死、方悲悼間忽然驚覺」とある故事に出づ。

〔鴻濛〕元氣の未だ分れざる貌、淮南子に「西窮ニ杳冥之黨一、東開ニ鴻濛之先一」とあり。

壹年壹度中秋月。爭得年年此夜明。湖海論レ交無二萬里一。酒杯撩レ興到二三更一。露薄風冷寒光轉。雲歛天高霽氣呈。造物似レ知吾輩意。十分圓了十分清。

銀河傾側夜將レ闌。露洗二長空一桂影寒。盡倒二碧尊一期共醉。正逢青眼背辭レ歡。淒涼笛咽三更弄。宛轉琴鳴壹指彈。更續茲遊那可レ得。年年秋月兒相看。

去歲中秋夜。待レ月月不レ明。君南我在レ北。萬里阻二海程一。半面不二相識一。寧知相愛情。今年中秋夜。明月正盈盈。纖氛淨如レ洗。宇宙涵二水晶一。君乘二海上槎一。飄然來二王京一。相逢郎一笑。便尋方外盟。導レ我躡二雲梯一。引レ我遊二化城一。坐レ我廣寒府。聽レ我鈞天聲。沆瀣徹二肺腑一。洒然神骨醒。冷風翼二兩腋一。俯視渺二蓬瀛一。芬華擲二微屣一。垢濁蛻二塵纓一。大海釀爲レ酒。大斗爲二瓶罌一。浥以二北斗杓一。衙以二天籟笙一。一醉三千齡。殤視喬與レ彭。嗟哉一瞬歡。轉レ頭如レ夢驚。明年此夜月。明晦不レ要レ評。依然各南北。兩地懷不レ平。對レ月共相憶。壹杯聊自傾。明年復明年。此月年年清。我與レ君相別。幾時相喜迎。古來樂難レ持。此會寧再成。

走レ筆謝二却弼中惠一レ藥

煩惱人間苦。兼因二熱惱侵一。常移腰上帶。久廢枕邊琴。調攝何關レ術。功夫只在レ心。安閑方合レ劑。清淨待二深鍼一。欲レ鍊眞丹求。須レ投舊笏簪。願隨二飛去錫一。永散鬱湮襟。塵土非二吾戀一。仙區代レ子尋。殷勤謝二禪客一。藥力詎能任。

和二日本僧康樂等韻一以別

塵世悠悠只強顏。十年魂夢繞レ雲開。何方可レ逐凌レ空錫。去踏蓬瀛海上山。

〔浥〕說文に「濕也、潤也」とあり。

〔北斗杓〕春秋運斗樞に斗第一天樞、第二璇、第三璣、第四權、第五玉衡、第六開陽、第七搖光、「第一至二第四一、爲レ魁、第五至二第七一爲レ杓、合爲レ斗云々、故稱二北斗一」とあり。

〔天籟笙〕自然に鳴る笙の意にて、自然の音樂の意、天籟は、風などないふ、莊子齊物論篇に「子游曰、地籟則衆竅是已、人籟則比竹是已、敢問二天籟一、子綦曰、夫吹萬不同、而使二其自己一也、咸其自取、怒者、其誰耶」とあり。

渺渺扶桑天一涯、海山何處訪二仙家一。此生此別應二長別一。淚眼休レ驚見二黑花一。

一歡那意遽成レ非、白首詩盟轉失レ依。萬里幸逢天際鴈、百年音信莫レ教レ稀。

欲レ挽二歸舟一未レ有レ緣、數行清淚落二尊前一。他年夜夜長相憶、人在二東西一月在レ天。

孤懷牢落倚二高樓一。殘日沈吟送二遠遊一。客與二年光一抛レ我去、不レ堪レ傷レ別復悲レ秋。

相看一笑意無レ餘、肝膽都輸レ誠而初、今日慇慇生二別恨一。小詩和レ淚爲レ君書。

又卷之三

贈二日本國使安心東堂一　余舊爲二宣慰使一。接二日本使僧彌中一。安心自說。彌中法孫。接二彌中一時。曾共賞二中秋月一。多有二唱和一。彌中歸示レ寂已久。

多生應レ結日本緣、祖遜孫來偶又傳、四大本知都是妄、存亡唯記月懸レ天。

賜レ宴席次二安心東堂韻一

隣邦交誼篤二兩間一。講二禮賓筵一荷二兩君一。笑裏從容方度曲。日邊談笑更忘レ文。層波萬里貽二長憶一。轟飲千觴費二暫欣一。欲レ絆二飛鳥一終爛與、宵言朽老柰レ無レ節。

次二安心東堂韻一

恩筵杯酒幾相逢。今日離懷正不レ窮。仙棹一歸滄海渺、百年唯信夢魂通。

此生無レ處更相逢。蒼海茫茫意不レ窮。白髮倚書何取レ望、鳳槎唯冀信頻通。

觀レ射次二安心東堂韻一

羣才爭試白猿公、妙藝寧レ楊百發中、四海一家無レ用レ此、兩階干羽是神功。

〔四大〕釋氏六帖に「四大、地水火風亦名二大種一、以二形相大一能生二萬物一」とあり。

〔轟飲〕飲食の狀の喧しきに云ふ。

〔千觴〕酒杯を多く傾くるに云ふ、李白の詩に「高談滿二四座一、一日傾二千觴一」などあり。

〔干羽〕タテとハネにて、舞具也、周禮春官樂師に、干舞、羽舞あり、書經大禹謨篇に「帝乃誕敷二文德一、舞二干羽兩階一」とあり。

蚕嶺遊觀次日本使僧安心韻

雙來飛錫日東傍、欽對高僧學道光、禪客本無桑下戀。湖山勝處孰非鄉。

次安心韻

峻嶺臨江入、清流抱作灣、凱歸遲疾異。蹤迹往來閑、醉極緣心契。吟多覺鬢班、丁寧照君月。好作送鄉山。

慕齋文集卷之三

答對馬島主書

蒙惠書。憑審、體履裕和、開慰開慰。日本隣我東鄙。交好之義、譬無間於遠邇、以貴島最近於我。爰自先朝特加撫綏。貴島亦自先世代輸誠款。罔或有替。至于足下益虔無二、國家寔用嘉之、適者我國邊氓漂到深遠之島、足下聞之、旋即遣人探問。欲將重費贖以送我、其用意勤至、足見效忠之誠。終爲彼取回、不遂素志、在足下豈不慊然之意。以我國視之唯嘉足下之誠。豈關事之成否乎。況濟人危急、効己忠款、善莫大焉、善不獨專、而樂與人共。尤善之善者也、君子之心公平矜恕、強於爲善、不以必出於己爲利、亦不以或出於他爲僞也。今足下以彼人押解漂民、不受貴島文引。違例徑由他路爲非、書中辭意反復不一而足、至求姜衍恭等私相寫示之迹紙送於我。豈以護送漂民不由於己爲忌、而欲罔之乎、或以深遠之人來、由貴島例出文引、以達我國、其古定約。固不可違、況得漂民即宜通議貴島、因力護送、與貴島分功共善、於義合矣、今乃不然、徑奉漂民擅由

〔桑下戀〕桑間濮上の琴音を戀するを云ふ、此の琴音は卑しき淫亂の響を發せりといふ、禮記の樂記に「鄭衛之音、亂世之音也、比於慢矣、桑間濮上之音、亡國之音也、其政散、其民流云々」とあり。

〔矜恕〕憐み慈しむに云ふ、即ち人を憐み、又人を慈むの心を云ふ、矜は、公羊傳に「見人之厄則矜之」とある註に「矜憫也」とあり、恕は、論語に「其恕乎己所不欲勿施於人」とありて、其の程註に「恕者仁之施也」とあり。

在舊不通之路。彼之取爲未可知也。意欲獨專其功而然歟。或別有他由歟、若謂有隱慝之謀。則似非其情也、然足下爲我國計慮無所不至、欲我國預爲防閑周圖。而善處之、俾無後患。益見足下効節。納忠之悃、本曹即以轉啓、殿下深用嘉悅、特命賜日寺布四匹黑麻布四匹。以示褒奬之意。惟領納。至若漂民之事、既因足下之示而知其由。又得南邊守將所報云、有日本國船漂海到泊。說稱五島守官使送押領貴國漂流人十九名、泛海指向貴國而來、忽被風顛海暗。迷失舊路。漂到于此、亦已轉啓行當來京、但不知果因風漂而至此歟、抑故違約例、不由貴島、不受文引。別向新路而來歟、未及究詰。得其本情、然違約之罪、雖取當責問。聞須濟活漂民而至、其義甚嘉、彼以其誠。我不得不以誠報之、以爲有罪功、亦足以掩之、義不可拒而不納、因宜優禮遣還、然不受文引。擅由新路深犯嚴約。法所難恕、終當重責而迸黜、以後更犯約當論以賊倭不饒。丁寧勅適。則彼豈不悔懼自沮乎、早觀姦衍恭寫示之圖。皆妄謬非實、何關利害、然當按法究治、以正譸張爲幻之罪。足下其勿深憂。且濟州本古耽羅巨國、土地甚廣、人民甚衆、地險兵強、四面鐵壁如削、只有一路。僅泊一舟舡。往者百年前、海寇充斥、不得一犯。彼五島之人、縱懷不善之意。非所憂也、足下其亦勿以爲慮、而況五島邈在遐遠之境、貴島爲我國藩籬。而當其前。彼雖欲爲犯竊之計、而畏我兵之威聲、後忌貴島之遮截。進無所泊、退無所止、茫茫大洋孤懸無依、豈不惜死、而肆然爲猖獗之謀乎、惟足下量之。餘冀順序。千萬自重、不宣。

今按、此言朝鮮邊民漂流五島。不受對馬文引。護送之。對馬以其違例疑有異志。朝鮮以未及究

〔譸張〕人を謀り欺くを云ふ、玉篇に「譸張誑也」とあり

〔遐遠之境〕遠き處と云ふに同じ、遐は遠と意同じ、說文に「遐、遠也」とあり。

〔不宣〕書牘の終に書く語、意述べ足らざる意にて、已れの言の整はざるを遜りて云へり。香祖筆記に「宋人書簡以尊與卑、曰不具、以卑上尊、曰不備、朋友交馳曰不宣」とあり、

詰爲辭也。

對馬島通諭書契

書來就認。迪吉良慰良慰。所獻禮物轉啓收了。將土宜某布幾匹。幷給賜虎皮一張。付回使。惟領留。書中所示歲賜米豆等事。約條久定。轉啓爲難。惟足下祇順朝命。益勉忠績。則豈無恩獎之時乎。五島倭人雖無文引。救恤漂民而至。義不可拒。不得已姑待之。後若無文引而來。則嚴絕不納之意尚已詳。復因倭之事前亦復之。而來書再及。豈足下猶未釋然於中耶。何言之重複而不置耶。雖然今聞。來使之言。因倭之事。渠將則固無干涉矣。意或村里之間。潜相來往容有被害之虞。甘禁潜行雖其自取。然人命所關。將欲窮極緝問。苟得其跡。自當究治。但觀足下書辭多慢。乏婉順之意。有乖敬上之體。無乃。足下有異意。欲得釁端假此數事而爲辭乎。堂堂大朝武威非不足也。唯以禮義德化爲重。恤隣撫小務盡誠厚。然倘有犯分梗化之事。則自有公法。天討不得不舉也。忠順則獲福。悖慢則禍至。雖愚人皆知。以足下之智。而豈不及此乎。且夫足下忠績之實於何驗之。唯在夫恪承朝命。一意遵奉。懲戢奸竊。靖帖海徼。刷護漂氓。活命復業。檢飭使价。無敢違禁而已。凡此數事。皆足下常所盡心者。然奉足下之命而來使者。不體足下忠順之意。不念國家綏撫之恩。館待餽饋之厚。又不念往日奸恣致禍之由。包荒寬大之德。而頓不檢下。無賴奸頑之徒多率諸倭而來。其還也皆潜留不隨。積以歲月。有若素居而後無慮三十餘年。相與結黨朋惡厭其拘關。不與客館諸倭共處。尋常隱伏林谷。有如鬼蜮。甚乘輕舠托稱漁釣。橫行浦島。逢人則刧。或殺或掠。夜越垣籬。出入里落。竊

〔祇順〕敬ひ從ふ意也、祇は、爾雅釋詁に「敬也」とあり、順は、玉篇に「從也」とあり。

〔婉順之意〕溫和の心也、婉は順と同意、說文に「順也」とあり。

〔堂堂〕自重尊大の貌也、釋名に「堂、高顯貌」とあり。

〔刷護〕害物を拂ひ處を守る意也、刷は惡きを拂ひ淸むる義也、爾雅の釋詁に「刷、淸也」とあり。

〔鬼蜮〕蜮は短狐(イサゴムシ)也、沙を含み水中の人影を射れば、其の人病む、其形見えず、以て陰險なる人に喩ふ。詩經に「爲鬼爲蜮則不可得」とあり。

約奸商、潜相貿貨、奸淫闘鬨、無所不至。我國之人苟或禁之、則抽劍欲刺、逞其暴兇。此等情跡有難枚狀。凡諸禁約大法、無不冒犯、以累足下畏天致忠之節。其中最恣横無忌、縱惡不已者、迎時羅等十三人也。誠慮不早禁治、從至滋蔓、則兩間之禍自此作矣。邊臣守將不勝憤疾、交章請誅。我主上至仁天覆、且以足下効節之故、不忍遽從。特命先諭足下、使之嚴究眞罪。足下猶不能禁、則國家自有以處之、而不容貸也。惟足下惕承朝命、剗即出令、一一推鞫、自今若此奸縱之類、勿復出送。嚴示法禁、一以杜後來奸亂之釁、一以効足下忠悃之績、則國家豈無嘉奬之命乎。足下其審處之。但計奸頑之人、侮法無忌、奸亂興禍、乃其素性、足下雖嚴治之、又禁出送、彼將百計伺隙、潜圖復來。足下亦將不能一一致察矣。若迎時羅等輩久住浦所、其名與形貌、本處將卒無不詳知。貴島使船凡至浦所者、同舟之人、當先點檢。苟有將前項奸類一名偕來者、則同乘諸倭、並不許接事。約令已定矣。足下亦悉此意、通諭管下、嚴加禁戢幸甚。且貴島之於我邊、雖曰溟海之隔、烟火可望、朝發夕至。近來使船之至、考其文引、日月則或隔七八月之久、豈無所以處。或有奸欺之事。亦望足下致察而謹處之、唯務誠實、以無虧事上之度。幸甚。餘冀順序。珍重不宣。

今按、此言自今以後、五島無對馬文引而來則不納之、幷迎時羅等輩縱惡、當禁治之。迎時羅對馬管下者也。

與對馬島主書

炎涼之交、不審動履何如。前者第一船主回還、賚去書已達矣。薺浦留倭横恣之狀、與夫處置之意、備

〔憤疾〕憤嫉に同じ、いかりねたむを云ふ。五代史に「羣臣憤嫉、莫斯出氣」とあり、又嫉は、爾雅の釋鳥に「疾又與嫉通」とあり。

〔至仁天覆〕仁愛の絶對なるを以つて統治する意也、禮記閒居篇に「天無私覆、地無私載、日月無私照、奉斯三者、以勞天下矣」などあり。

〔惕承〕畏み奉ずる也、惕は、說文に「懼也」とあり。

〔薺浦〕慶尚南道の鎭海に面する處にあり。

〔疆圉〕邊境也、疆は、說文に「疆、界也」とあり、圉は、爾雅の釋詁に「垂也」とありて、註に「守圉在外垂也」と見え、邊陲の意也。

〔殲殄〕絶盡する意也、殲は、爾雅の釋詁に「殲、盡也」と、又、殄は、說文に「殄、盡也、一日絶也」とあり。

〔玉石俱焚〕よき玉も、よからぬ石も同樣に燒盡する意にて、善惡の差別なく害ふに喩ふ、書經に「火炎崑岡、玉石俱焚」とあり。

載書中。皆稟白上命。想足下悚然敬承商出措處之令矣。治惡於未稔。遏亂於未作。使彼此兩和而無釁。疆圉平安而無虞。固王政之大慮。其先事而爲之圖以處置。此輩特朝廷一號令之餘。邊將一震威之間耳。所以必付足下治之者。蓋欲使撿戢之威全出於足下。俾管下之衆。畏懾足下之嚴令。而不敢復有所犯也。國家所以恩護足下。令不斷忠順之績之意至矣。但不審足下得書之後。果何以處之乎。而留館兇頑不逞之徒。非不聞知通書貴島之故。而猶不悔戢益肆橫。適冒兩度之犯。俱係兇殺寇亂。釁發於旬月之中。尤爲駭愕。耳不忍聞。一則數十成群。乘夜蹤越墻限。刺殺官兵三人。一則潛乘昏暗成群。騎使中船。掩襲邊官因事往來之船。於薺浦相近之處。害死人命。數至三十。殺人者死。寇亂必誅。古今天下大法。法之所犯無間國之彼此。化之內外。理不容貸。苟或容奸不致於辟。則死者含冤於冥冥之中。天地鬼神必加殃禍於弛法之人矣。況特其由。馳啓請加殲殄。國家以謂。此非盡擧館之倭所爲。蓋出於其中最獷惡之徒。今若不辨而並誅。則非王者至仁之政。特遣近臣。馳往浦所。欲究正犯之徒而誅其罪。留館船主十餘人等。非不知犯人之爲誰。而竟隱諱不告。其容奸黨惡之罪。亦所當治。邊臣猛將。益用憤激。請殲不已。主上復以爲。犯人則已矣。不告之罪雖曰黨惡。自與犯人有間。豈宜淫刑縱誅。以致玉石俱焚之濫乎。乃命廷臣議之。皆謂。不論罪之輕重。一切誅討。固非仁政。然殺人寇亂之臣。不可不究極而致辟。在館之倭既不摘告。無從鞫辨。彼既黨惡不首罪。亦重矣。兩犯之時。凡在館者不給。留浦過海之糧不復接待。盡令人送本土。通諭島主。島主苟能嚴鞫。作變之時。同館之倭。捕護兩度。止犯之徒。倭使押送。顯戮於境上。以正天誅則宜加恭命

討罪之忠績。優示褒典撫綏如舊矣。島主自先代世輸忠款。管下之人苟有寇犯之罪。則常承我國之命。盡心誅禁。曩者雖有庚午之變。厥後感國家棄罪還待如天之恩。悔驚自新。敬順金慶。在今島主納忠彌篤。今聞茲變。且承國家嚴論。豈不惕然畏懼驚訝哉。推鞫期得其人以宗乎。即今來京倭使不干浦所之犯。請命島主爲書。付送。令諭島。試觀處置之如何。果能捕告犯人。則依向議施行。如或依違不即捕告。則非徒貴島之船。雖深處信使之紅。請一切永不接待。非我絶之。彼自絶之也。尚誰咎乎。廷議如是。主上不得不從。然不許邊將誅討之請。若命開諭。足下審而處之。其委曲加恩涵洪施仁至矣。貴島之中。豈無通利害度義理。老成智計之人乎。足下其共商議而行。毋貽後悔。以不失羈縻之綱。餘冀。以時千萬自重。

今按此言薺浦所留倭人爲寇亂。對馬島主處治之也。所以必付足下宣之者。蓋欲使撿戢之威全出於足下。俾管下之衆畏憚足下之嚴令。而不敢復有所犯也。此語敬島主。撿朝鮮八道地圖。薺浦在慶尙道。熊川南五里。

復日本國大内殿書

承書憑審。雅履裕勝欣慰殊深。所獻禮物足見誠款。輒啓收了。前送五經暨寺額。因蒙遠索。聊申綏好之禮。何用煩謝。念此諸經皆具傳註。苟能講究足以闡道義。出治化。無以復加矣。而足下猶慊然於心。復勤遠价。更求朱氏新註五經。可見足下向道之切慕學之篤。不覺敬嘆倘有焉。豈敢愛惜。今天下所尙而習學者。皆程傳易。胡傳春秋。蔡傳書。朱傳詩。鄭註禮記。本國教學所尙亦不外此。別無

〔庚午之變〕百四代後柏原天皇の永正七年庚子四月朝鮮三浦の亂起る、宗義盛之を伐つ、大いに熊川城に戰ひ衆寡敵せず戰死せり、この役を云ふ。

〔熊川〕慶尙南道熊川郡にあり、釜山を隔つ僅か、街鎭海灣に臨み、碇舶に便也、京城を去る七十六里餘也。

〔遠价〕遠大の志ある意也、价は、正韻に「善也、又大也」とあり、ここは後者の意に從ふべし。

〔朱氏〕朱熹を云ふ。

朱氏新註、故而者曾以本國所存者奉送、今承再索、美意不可虛負、唯念五經之中、詩書尤切於講習、今各添送一件、以爲好書之助、更漏之器、亦係敬天授時之具、有土者所不可闕、足下又以爲請益、見雅尙之得其要矣、貴國之人必通有於候曆之術者、其制象之器應亦致精矣、今所求蓋欲參校考刻、益究其精耳、其意不亦嘉哉、本國漏器、規制不一、取其中簡易能致遠者一具、幷以奉寄、惟希領納、餘冀加珍重不宣、

今按、大內氏好學、求五經新註幷漏刻器于朝鮮、其志可嘉尙矣、時朝鮮所用易則朱子本義、詩則朱子集傳、書則蔡沈傳、春秋則胡安國傳、雖中華不外於此也、禮記則鄭玄註、朝鮮未如有陳澔集說、漏刻器古來日本有之、天智天皇在東宮時、始製造之、詳見日本書紀、其後及保元二年十一月、品物咸秩、乃重刻更漏、出百鍊抄、此大內氏蓋左京大夫兼周防介義隆、當時天下大亂、古代器物多滅、故求更漏之器于朝鮮乎、先是永樂十三年、成祖文皇帝命儒臣集諸家傳註、而爲五經大全、註則上所列新註也、然不到于朝鮮、故金氏所復如右、其後中華新補載來于我、惜乎大內氏未及見之、

答日本國小二殿政尙（マサナホ）書

書來、得認動履康勝、深慰深慰、所獻禮物謹啓收了、將土宜若干匹、幷給賜帛紬五匹、白細綿布五匹、虎皮一張、付回使、惟領納、來書所云、去已亥歲被燒糧料軍器、其時本曹因使人之告、文移邊將、令照數備給、而貴使兩行同時被燒、其空行則旣已空去、獨此行未及並受、意者應有所以然之故、或

〔五經〕詩・書・春秋・易・禮の五書を云ふ。

〔漏刻〕壺の中に箭を立て、別槽より水を注ぐときは、矢は次第に水上に浮び出づ、此時矢柄に豫め刻せる目盛を讀み時刻を知る裝置也。

〔鄭玄〕後漢の學者なり。

〔天智天皇云々〕日本紀天智紀十年の條に、夏四月丁卯朔辛卯、置漏剋於新臺、始打候時、動鍾鼓、始用漏剋、此漏剋者、天皇爲皇太子時、始親所製造也、と見えたり。

〔百鍊抄〕大治年間より正元元年頃に至る雜事等也。

〔義隆〕大內義興の長子也。

因邊將未及考覈。而使人已歸。故然爾。今經數載。覈驗頗難。第念足下世輸誠欵。國家所厚待。況在綏遠恤患之道。又不容不應其請。並用其由啓稟主上。特命賜給。貴价自知其數而去。并惟領受。仰體主上優眷之恩。益謹聘事之禮。以永修好。幸甚。春暄加愛、不宣。

今按。小二筑前少貳也。其先任太宰少貳。奕葉以少貳爲號。己亥明嘉靖十八年。即日本天文八年也。少貳初與北條。後黨足利。勢甚盛大。及政祐爲惡無度。大內義隆伐之。政祐遂亡。古所謂岩戶少卿。大藏種直裔。少貳之先也。

答對馬島主書

書來就認請迪。良用開慰。所獻禮物轉啓。收了。將士宜正布三匹。及今壬寅年例賜米豆各伍拾碩。付回使。惟領納。但審覆辱書了。無感戴寵錫之意。反多不遜未滿之語。殊失敬順。事犯悖上。誠所未喩。駭訝殊深。念惟貴島之於我朝。自厥先世納欵効忠之不懈。我朝撫恤不啻若慈母之愛赤子。賓與寵奬之恩。彌久彌厚。而貴島之人忘大德。背大恩。敢煽叛亂。罪不容於覆載。固當永與之絕。不許復通。爲緣日本國王專使來請懃懇不已。隣好之義難於固拒。黽勉副從。悖逆之徒縱許容貫恩接之。典理雖如舊。裁損其制立爲約條。固爲永世遵守不得撓改。貴島苟念前日之所爲如何。我朝之寬貸如何。則自當感幸蹈踏之不暇。敢復濫有所望哉。況庚午叛亂專由三浦居倭之故。雖萬世不可更許。貴島固不得並與他事而出諸口。筆諸書也。若此事轉啓爲難。未敢承教。前人則已矣。自足下主島而來。改其前轍。殫盡忠欵。無異先世之爲者。國家嘉美恩待有加。足下苟能効忠不已。功懋績

〔太宰少貳〕太宰府にて權帥（又は大貳）に次ぐ官人也定員二人、相當從五位下也。

〔奕葉〕代々也、奕は重ぬる也。

〔政祐云々〕少貳氏は嘉賴の時（嘉吉元年）大內持世に敗られ、勢大に衰へしが、其孫政祐、永正三年筑紫の麻生等と力を協せ、少貳家を復さんと謀りしが、大內義興の大兵に破られ戰死せる也。

〔覆載云々〕罪の免すべからざるを云ふ、覆載は天の覆ふ所、地の載する所の義也。

〔懋績〕大なる功績也、懋は康熙字典に盛大之意とあり

〔規規〕自失する貌なり。

〔繩治〕正し治むるなり。

〔聖人虎兕云々〕論語季氏篇に、虎兕出於柙、龜玉毀於櫝中、是誰之過歟、とあるを引き、人民の則を超ゆるは卽ちこれを守る者の罪に外ならざるを云ふ、兕は野牛に似たる獸名、柙は檻也。

〔恪事〕謹み仕ふるをいふ。

累則褒異之典。自有新命。何用規規。以已棄之舊例為請乎。去歲捕送罪倭之事。益見足下效忠之實。國家嘉悅略有恩賚。物雖不腆獎寵之意未為不寓於其中。凡在下之道承恩於上。物雖微細榮則重矣、固當論肌知感。戴視無已。足下荷上寵賜未為不優。不但不自榮感。而反多慢辭。是何意也。貴島雖僻在海中。素不習於詩書義理之訓。豈無賢知之人知禮義之所在。而迺至於此乎。夫事上之禮。我雖無罪上以為非。而譴責於我則引咎於己。深懷畏懼。上以為是而褒獎於我則不有其功。自謙不居。足下捕送罪倭。忠則美矣、國家亦以盡知而施褒典矣。然在足下則職分所當為也。一度上書伸朝廷知之足矣。何必重複其言而不置乎。且夫去歲罪倭雖皆其自犯、不干於足下。然島中居人厥數有限。足下苟能檢攝於平日有所犯科。隨其所聞一一繩治。則彼奸濫之萌、如金老古延時羅等。害人作弊。何敢若此之縱恣乎。管下之人作奸於我國。足下縱曰不知。律以聖人虎兕出柙之訓。則責亦不得不歸於足下矣。非以足下為身實有慝也。此之不思而乃曰。我何作舊之失乎。殊無引咎自當之意。恐不合於事上之禮也。足下其更思之。貴島先世恪事我國之時。如有愆慝重事。或遣朝臣。此固出於先朝恩數之優。視島主忠否而行之。初非恒式。庚午之歲。亦遣朝臣于貴島到浦將發。值捕倭叛亂。未達而返。實由貴島之犯順。而此禮遂廢耳。足下忠順懋著則先世之禮。豈無講行之時。祇在足下勉蹈先世之忠而已。去歲奸濫之發。非特罪在倭人。我國奸商潛相交通引惹為慝。藏匿倭物而不許者相應有之。前因貴价書告轉啓于上。發遣京官窮極搜捕、而貴使書告之名。多與我國人名不同。捕其疑似。訊鞫甚嚴、備不得實。獄事蔓延。斃於杖下者甚衆。貴島之人雖真

面貿。不得正犯。至今獄事未竟。深以未獲罪人而致辟爲慮。足下其悉此意。且足下居諸島要衝之地。防遏鼠竊。使我邊得以無虞。我國之所以厚於貴島者。不唯字小之仁。亦以紀其功也。貴島之倚恃於我國。猶赤子之托慈母。又何俱於么麼之海賊乎。且審來書別幅。歷擧去年新立約條中。有未便於來倭者爲言。足下是言亦不爲過。凡日本與貴島朝聘於我者。非徒輸誠納欵。或因以交通有無。貸以生活。何異於我之赤子。以王者一視無外之仁。惟欲盡我撫字接護之恩耳。豈欲故爲拘束可厭之事乎。但來朝之人。及格倭之類。豈可保其盡爲良善者。有如去歲奸縱之徒。雜於其間而不復防禁。恣其所爲。無異前日。則或憑依漁釣採薪。刧掠於海浦。或潛結奸商。昏夜於閭閻以致歐鬪賊殺。欺奪物貨。或托稱候風。剽掠於海島。或賊艘混於聘船而來。乘間作耗。若此等事爲害多端。恐起釁緒。兩好不全。則貴島受禍尤重矣。故朝廷共議。不得已爲此防範約條耳。暫料之雖若有苦。細思之實大有益。兩間和好賴是而久。豈但爲我國之無虞。貴島與日本永享安利。以此言之所以爲貴島永固其好。奚獨爲我也。足下特未審料之耳。但其中貴島及日本聘船。依舊例尺量。後又復點人者當初慮。或有如去歲奸濫縱惡之倭。網漏不伏其罪。潛從聘使而來。以致依舊作奸。故併入約條耳。今因書來更料之。足下既能捕懲罪倭。又能嚴加督察。豈復有潛來肆惡者乎。況承足下懃懇之請。商量八條之中。唯此可改而無甚大害。故具由轉啓。許依舊例日尺量船隻。不復點人矣。惟希亮察。餘冀。順序自玉。不宣。

今按。此言朝鮮與對馬約條中。舊例尺量船隻。後又點人。而從島主所請。改不點人也。壬寅明嘉

〔要衝〕肝要なる場所也。

〔么麼〕細小なるを云ふ、么は說文に小也、象子初生之形也．とあり、麼は廣雅に微也、と見えたり。

〔撫字〕愛撫する也字は說文に、乳也、又愛也と見ゆ。

〔格倭〕格は命に服せざるを云ふ、康熙字典に、頑梗不服也、とあり、倭は日本也。

〔閭閻〕閭は里門、閻は里の中の門也總じて村里を云ふ

〔歐鬪〕擊ち鬪ふ也

〔點人〕人を點檢する也

〔網漏〕法を免るゝ也。

〔瞻覿〕見參する也、瞻は仰ぎ見る意、覿は謁する意也。

〔奸細〕奸にして心卑しきを云ふ。

〔包荒〕荒穢を包む義、雅量あるを云ふ。

〔生齒〕周禮に、掌登萬民之數自生齒以上皆書于版、とありて、當歲の子を云ふも爰は廣く子孫既に增殖せる意也。

靖二十一年。卽日本天文十一年也。日本國王專使來請懃懇不已。宜通考下文答弸中師書。復日本國王書。庚午明正德五年。卽日本永正七年也。金老古延時羅。似朝鮮人名。而書中意對馬官下者也。素不習於詩書義理之訓。及何異於我之赤子等語。自高大。輕慢他也。

答對馬島主書

海途阻隔。瞻覿無由。雖堪勤企。就中貴島。世輸忠款。恪事無二。國家亦用嘉之。接遇之典。無所不至。交通脩好。久而不渝。我國收綏遠之效。貴島獲畏天之福。可謂兩得其道矣。頃年以來奸細之徒。漸肆兇獷。不顧國家卵育之恩。不畏足下檢戢之威。何間作耗。比比有之。在丙寅九月。倭船一艘犯全羅道界。因濟州人夜泊楸子島。掩襲刼掠。至殺朝臣柳軒金晏輔等。此非貴島人則必居三浦者也。三浦之倭來投我土。長子若孫安業而居。殆將百年。其使漁釣通互市以資衣食者。無非我祖宗綏懷之恩。而蠢爾無知之輩。忘恩背德。輒懷奸軌。撫之愈勤。稔惡愈甚。自甲子年後連辱邊將。又擅越關限。焚蕩民家。肆兇無忌。至此其甚。國家豈不知所以處之。但以王者包荒之量。姑不與較。以開革面自新之路。然只此而已。則彼頑悍之徒。無所懲創。愈懷奸圖以干王法。終至於不可赦。則誠爲憫惻。且在我祖宗朝。許處三浦者。只約六十戶。其出入行住皆有界限法程。年代浸久。漸失本約。繁衍種族。因循苟留。生齒既衆。奸類之孳芽其間。勢所必至。在我既不得綏懷之宜。在彼亦非自全之道。不得不申擧舊約。刷還餘戶。使彼我兩全。故前者併將此意。通書貴島。使足下究獲賊倭及辱邊將焚人家者。置於法以彰足下之威。又令刷還三浦倭戶。一依舊約。以絕奸賊交惡兩間之

〔噬臍〕後悔するも及ぶべからざるに喩ふ、襄習孔の晉谷臥論に、麝者捕麝以取其臍、麝時急、自噬破其臍、則人不之取、若既就禁、噬臍、亦無及矣とあり。

〔仁如天覆〕仁德到らぬ隈なきを云ふ。

〔正德〕中御門天皇御宇の年號也。

〔永正〕後柏原天皇御宇の年號也。

患。欲永世修好、共享平安之福、而足下得書以來。未聞有所舉行。亦不通答其由。不知足下之意。果何如哉。其以爲尋常而不足聽歟。抑以通好我國爲無所益。而有忽易之心乎。足下苟不遠慮。在我自有處之之道。固無所損斷。在足下不遵先世信誠、欺罔之意。貽致後日噬臍莫及之悔。則無柰失計乎。足下旣不戒飭。故在管下者亦不畏我、肆惡稍備。於前年十一月初二日、倭船一隻犯慶尚道界、刼掠加德島。伐討民人。殺害九人。殺傷八人。又於今年二十一日。倭紅五艘犯全羅道界。刼掠濟州供獻物船。殺害二十一人。殺傷十一人。尋侵本道而使要擊。賊倭因被逐脫得。其一隻爲我所獲斬十七人頭以獻。此南邊作耗之賊、必皆貴島及三浦之人。其背國恩。竟生姦心、以至兇奸。一至此哉。我殿下臨撫一國、于今四載。綏遠字小、仁如天覆。以貴島自先世納忠、迄今不衰。深用嘉獎。但慮足下邊處荒遠、不能悉國家更新之化。且問頑暴無知之徒、累違邦憲。恐終不能自保。故茲特遣禮賓寺正尹殷輔。前往貴島。申諭國家綏撫有加之意。且將搜獲前後犯邊作賊之倭、寘之於法。事且申明舊約。刷還三浦數外倭戶等事、并諭足下。足下其體國家禮遇隆重之意。深思報効、宜永禁約。使姦慝永絕。交好益篤。福流子孫、世世無替。豈不美哉。惟足下審諒。故賜別件、詳具別幅。餘冀若時珍重不宣。

今按。丙寅明正德元年。日本永正三年也。甲子明弘治十七年。日本永正元年也。三浦之倭。海東諸國記曰。對馬島之人。初請來寓三浦、熊川之乃而浦、東萊之富山浦、蔚山之鹽浦。號爲三浦。互市釣魚。其居止及通行皆有定處。不得違越。事畢則還。因緣留居、漸止繁滋。在我祖宗朝許處三浦者、只約六十戶。海東諸國記曰。

世宗命移書島主宗貞盛。(正統元年丙辰)令皆刷還。貞盛答曰、當盡刷還。其中最久者六十名、姑請仍留。

乃許之。其後因仍不還。

答對馬島主書

承書得審。雅履和勝開慰。書中所示亦已備悉。國家綏懷遠人。任如褒賞、送往迎來。無闕。接遇之典無不詳盡。邊吏若不奉行。往來之際、廩給不時、以致阻滯困乏、則其罪固大。卽已具由轉啓、推鞫果如來書所云、則當治慢法之罪。足下其體國家至意、開諭邊海之徒、從嚴禁戢、不勝幸甚。但來書以焚燒倭戶。爲熊川縣監之事。邊吏縱頑、豈能不畏國憲而故令焚之乎。專是浦居倭人、自相失火。後因我貫擅越國限、焚我廬舍。而欲免己罪、矯飾其辭、反歸咎邊吏、以誣足下。足下初既不能檢戢、後又傾信誣說、無奈過乎。設使邊吏無狀焚蕩其戶、彼當申訴于朝、使治其罪。豈可冒犯邦憲、擅行報復乎。足下果能爲國盡誠、檢下以禮、則必不至此。且國家修其隣好、爲來久矣。待之以誠而約之以信。彼此苟不以誠信相接、則非初修好本意也。其等約船往來計、皆六十餘艘、初約之時、其人年齒必不下數十。據今近百歲。已皆死沒。而代受圖書者、往來猶舊。此豈誠信之道。故令邊吏勿許接待矣。足下亦諒此意、毋給文引。以不負誠信之約。徐冀順序、珍重不宣。

通諭對島島主書

書來就諗、雅履清迪、用慰。所献禮物、已啓收了。將土宜正布一十匹、付回使權貢留、所索日本布、前來乃而油第六紅面知汝文書去、惟照諒。邇者足下洗心滌慮、悔禍圖新、謹奉約束。屢遣體使貢誠于朝。

〔宗貞盛〕宗氏は平知盛の孫重尙に出で、重尙寛元四年對馬國に渡り、島主阿比留氏を追討しこれを横領してより、子孫代々同國を領す、貞盛は重尙第八代の裔にして、讃岐守と稱す、應永二十六年封を襲ぐ。

〔綏懷〕安んじ、なづく也。

〔檢戢〕檢し留むるなり。

〔乃而浦〕慶尙南道熊川縣に在りて、加德島の北に當る

〔誠悃〕悃は純一なる志、卽ち眞心也。
〔奸慝〕奸惡なるを云ふ、慝は廣韻に惡也とあり。
〔寘〕置く也。
〔毋孤〕背く勿れの意也。
〔手儀〕美しき儀容也、爰は貴翰と云はむが如し。
〔搖毫弄墨〕文章を弄する也、毫は筆に同じ。
〔台榭〕台は上を築きて上を平にせるもの、樹は台の上に屋根を作れるもの也、總じて高樓を云ふ、孔傳に、土高曰臺、有木曰榭、とあり。
〔郁郁〕文物の盛なる貌也。

深用嘉歎。謂自今後益虔忠順之節。永無拂戾違悖之事。不意。貴島管下賊倭三艘窃入全羅道境楸子島近處。於去閏四月初五日昏夜。乘其不備。共劫本國商舡五隻。殺害人命。盡掠載物件而去。聞之不勝駭愕。此雖非足下所知。足下平日苟能盡心効忠。痛戢羣下。勿得恣出。少有所犯。嚴加誅罪。誠信積孚。威令素行。則安有如此之事乎。縱下逞惡致犯我邊。誰任其咎。足下向國誠欵之實。果安在哉。所爲若此。而猶望國家恩待之厚乎。致足下忠績虧缺誠悃未白。皆由此奸慝之輩。足下宜急下令管內。務得捕獲寘之明刑。以慰足下藩衞國家之素心。不勝幸甚。繼今以往。申勅一島。嚴加檢戢。毋俾縱惡。以克終恪順之美。毋孤國家棄瑕優撫之恩。

今按。此言日本人乘亂入全羅道境劫殺也

答日本國羽中師書

日者獲接手儀。辱奉晤笑。亹々無厭。自謂。得空門良友。如陶徵君之於惠遠師。蘇內翰之於參寥子。顧念我非二子之賢。不足爲吾尊師之所肯許也。乃今忽承辱札。兼以高韻。披展再三不覺自喪。噫師眞以僕爲可許耶。抑偶爲之。搖毫弄墨以相調戲耶。何其譽溢而語誇耶。無其實而來虛譽。君子謂之不祥。僕雖鄙寧可冒不祥之稱。而甘不實之譽乎。豈師有欺於僕哉。師之心許也與。其不許也與。則不可知也。雖然師旣以筆許之矣。僕敢不以筆復之耶。弊邦隘陋不足以壯吾師之覽觀。宮室臺榭山川城郭。雖小大異區。華朴殊制。猶貴國也。豈師觀之之所在乎。古之人善觀人之國者。不于其國。而于其人。衆德之集。群才之聚。郁郁也濟濟也。國雖小未嘗不大也。德禮廢而人才不

與。山川城郭未足爲其大也。吾師學朝廷儀制之偉。人物敬禮之容。以爲言。其必有所得乎中歟。其知所以觀之者乎。第僕才陋。識鄙。威儀粗率不足以動遠人之瞻視。適以辱朝廷。羞衆賢耳。吾師觀之果以爲何如也。雖然一枝非鄧林之全。自踊嘆獻者之妄。吾師之觀眞觀也。其肯以一人而誤其全觀乎。雖然吾師今者之觀則外也。非內也。他日以內觀內。一笑於杯酒之間。默存乎言說之表。吾師許我乎。我許吾師乎。禿奴鈍卿何能狀其萬一也。姑和雅句用賭粲然。

答日本國使彌中師書

承書具悉示意。大內殿果遣重秋重盆兩將。禁戢奸猾。則誠可嘉尙。然事無形跡。不合轉啓。故禮曹難之。足下又請於禮曹佐郎。致書兩將。慰奬其勞。而佐郎示以人臣義不得私通。書問不能奉依尊意。今足下又以此意請於鄙僕。誠懇之情。僕所深知。但人臣之義恪奉君命而已。擅通簡札。私致殷懃誠所不敢。未得依示。深以爲恨。幸冀恕亮。至如對馬島敢背國家天地之恩。叛亂悖逆若是其極。雖千百億年義不可復通。但以貴國專使來請。足下亦以累朝舊勞善於使職。欲遂君命之意出於至誠。故國家有命云。若盡誅叛亂之徒。函首來獻。則當更商量。如此特恩果由貴國信儀。交好之力。足下血忱顓天之功也。事具國家所答書契中。僕更何言以贅哉。幸勿苛誚。謹白。

今按。重秋。重盆二人倶大內家將。不詳。

答對馬島主書

因使价就認。迪吉開慰。且承辱書。具悉足下滌心改慮。輸誠効欵。感國家之恩。修申謝之禮。敬順

〔一枝云々〕事の一斑を見て全體を推量し難きに喩ふ。

〔賭粲然〕人の笑草に供ふと云ふ程の意也、粲は鮮明の貌より、轉じて齒を顯はして笑ふ貌にいふ。

〔顓天〕天に呼ばはる也、書經に、無辜顓天、と見えたり。

〔苛誚〕强く責むる也、前漢書注に、誚責也、とあり。

〔轉ニ達冕旒一〕上に傳奏する也、冕は説文に、大夫以上冠也、旒は索に玉を貫き前後に垂れたる冕の飾也。

〔覼縷〕玉篇に、委曲也、とあり、詳悉の貌也、覼は羅に通ず、羅列也、縷は、縷々として絲の如しとの義に取る。

〔枝辭〕支離せる言辭を云ふ、易經繫辭下傳に、中心疑者、其辭枝とあり。

〔壬申〕正德七年卽ち我が永正九年也

懇惻之意。溢於言表。深可嘉尚。卽已轉達冕旒。但約束乃事、當初許和之日、朝廷已商議酌定。理難更變。前此已再通書。詳論、足下想亦悉矣、不復覼縷。足下試思前日之所爲果何如也、而國家猶盡棄前愆。許其自新。又特賜賜恩例之半。俾不失先世之緒。足下寧不感激思所以盡其心乎。爲足下計。尙當一遵國家約束。奉承無違。益勵內向之誠。久著忠勤之績。則褒嘉之典。國家自應擧之。足下不此之勉、而連遣違約之使。强聒不已。致足下敬順之誠。反似拂戾之跡。未知足下之意何在。惟足下更加商量。與島中老成賢知之人。熟計利害而審處之。以收後日之福。不勝幸甚。所獻禮物轉啓收了。今將回賜果物。給付來使。惟領納。餘冀若時。珍重不宣。

答對馬島主書

承辱書。審動止淸適。閱書中意思以忠謹效款爲言。益見足下敬順內向之誠。深用嘉歎。國家旣許貴島自新。又特賜約例之印。恩出非常。爲足下者固宜隕越罔措。感激銘深。愧前日之左。若不自容。益篤忠謹之心。猶懼少弛。不暇更希分外之求。而常慮事之之道或有所未盡也。愈久愈勉。誠積於中而發諸行事。著諸功績。則國家豈不嘉美之乎。非惟足下爲然也。凡在足下管內。苟有心輸忠於國家者。人各自効。亦若是焉。則國家亦豈不並嘉美之乎。旣嘉美之。則獎賞之典。自應隨之。前復書所云。蓋謂是也。足下猶不深悟。乃不敬遵約束。欲礪忠績。以聽國家之命。而尙枝辭繁語。輙干非望。襲日藩衛南鄙。是足下先世之忠。非預今日足下之事。壬申斬首之獻。亦爲謝咎請和之擧。不涉今日自効之賞。而足下漫擧已前之事。猥稱忠謹之績。欲國家毀已定之約。而加無名之

〔徼暍〕暍は説文に傷暑也とあり、暑さ當り也。

〔韃韁〕束縛せらるに喩ふ、韃は馬の手綱の口に當る所、韁は手綱也。

〔咫尺〕近き距離を云ふ、咫は説文に周制、寸尺咫尋、皆以人之體爲法、中婦人手長八寸、謂之咫、周尺也、と見えたり。

〔莫逆〕極めて親密にして互に逆ふこと莫きを云ふ。

〔尖奴〕筆を云ふ。

恩。不亦大謬哉。島中賢智之人。想不爲少。而爲足下計畫。何若是不審乎事爲拂戾。理難轉達。惟足下其暨一島人。唯憂忠謹之誠不篤且久而已。勿憂國家恩典之終無也。可更詳審而處之。以永一島之福。不勝幸甚。刷還擄口。亦將卜足下忠謹之誠否。而來書語及剃至。雖足可嘉。安知終有自効之實哉。所冀益勵忠順。亟宜刷遣以副國家秉瑕垂恩之至意也。所獻禮物謹啓收了。今將回賜某物。就付來价。惟領納。餘冀順序。愼嗇不宣。

此亦言欲刷還擄口也。壬申明正德七年。日本永正九年也。

又卷之四

復日本國東陽師書

別來已踰一紀。東望目斷。勞想何極。溟海浩渺窅隔萬里。豈謂茲生得聞信音。近患徼暍避暑江墅。幾旬餘乃返。忽見玉韻。披諷再三。喜慰之懷不能自禁。安國囊病日甚。加之韃韁所絆。佇想高風。未由接覿咫尺之近邈若山河。追憶中秋舊會叨侍唔詠。實百年一幸也。無因得續一轍而已。猥蒙引東坡佛印事爲喩。相得之雅跡雖相類。鄙淺下學。豈敢望先賢於萬一。惟吾師遠韻清趣有不讓於佛印者。鄙生希自托焉耳。未論儒釋同異。情契氣合。便作莫逆。下俗區區之語。豈足贅於師我之間乎。貧儲偶搜得尖奴十枝。取五奉投禪案。分五寄宗國。舊契用表。拜覘之感。想慰之抱。亦如前敘。望希傳說。輒不自揆。依韻和奉禪榻旅寂。冀一領粲。

復日本國王書

〔卵育〕もり育つるを云ふ。

〔黽勉〕勉むる也、孫季昭の書に、蛙黽之行、勉强自力、故曰黽勉、如猶之爲獸、其行趑趄、故曰猶豫、とあり、黽は青蛙也。

〔轅門〕陣屋也、轅は車の長柄也、もと王者が軍を率ひて他處に止宿するとき、車を併べて陣を作りしに出づ

〔書契〕木を刻し其側に書して、以て事を約するものを云ふ、爰は事を約せる文書の意也。

〔皂隷〕皂は蒙昧の民也。

海道險遠。再辱聘問。副以贐貺。千萬感荷。況爲弊邦。命對馬誅討逆黨。函首以送。尤見貴國交隣信義之篤。深增銘佩。又至許和之請。豈不欲從。但對馬島負我累世卵育之恩。敢逞兇逆。其惇惡大罪莫容於覆載之間。不亟加之天討。爲幸大矣。何敢望其和乎。特緣去歲貴國專价來請。義不得固拒。故復之。以對馬若能革心服罪。盡誅逆徒。函首來獻。則當更商量云。者蓋爲貴國黽勉。不得已而爲此語耳。初非欲輕貰對馬也。貴國卽因弊邑之言。旋下嚴命。誅討亂逆。以彰大義。貴國之舉不亦善乎。爲對馬者。固當感幸弊邦之命。畏慴貴國之威。率一島之衆。盡捕逆類。寘于顯戮。縛其渠魁。致諸轅門之下。使我前日死亂者之父兄子弟甘心焉。庶可以暴白其初不與知之心也。顧乃不然。承貴國之命。勢不得違逆。雖強勉斬首而來。當叛亂之時。稱省將通書契。如盛親者猶爲代官。偃然修書以隨。以此觀之。所獻之首。安可信。其眞魁惡也。且其時亂與。不意我赤子之無辜者。固多被其淫害。爲所擄去亦宜不少。而今無一人遣還者。島主服罪輸誠之意。於何見乎。況盛親雖自訟無罪。乃不躬來自明。使舉國快知其黯昧無實之情。而願因一紙之書。飾枝蔓之辭。欲我國不已疑。不亦慢乎。然則其實有罪無罪。亦果何由而知之乎。貴國之爲弊邑。無不盡心。而對馬實負貴國之命。狡詐難信如此。今縱不許其和。非我孤貴國之請也。良由對馬不奉順貴國之命之罪耳。弊邦之所患唯患不得與貴國盡交好之道而已。若茲小島。加之不信。雖永絕之。固無不可。弊邦臣庶獻議于朝。爭執于廷者。舉請寡人勿聽其和。下至皂隷卒伍之賤。亦皆不願復通。寡人不能違國衆之心而獨行之。但念弊邦與貴國。自在先祖世篤隣好。今者爲此一事。再勞使价。遙涉風濤請

之。勤懇厚意難拒。姑勉從之。然其對馬。事恣肆兇之罪。不可全釋待之之事。則當裁減於舊。嗚呼寡人以貴國之故。復通小醜。使我一國臣庶小大咸謂失擧。寡人實涼于德。不能綏服遠人。致構兇逆禍我邊圉。寡人深愧德之不脩。不得如虞朝之格頑苗。寧暇爲耀武罪討之計哉。雖然我赤子之陷于彼者。寧忍棄之。盛親之黨惡與否。又豈可含糊不終辯問乎。縱使盛親非己所犯。身爲一島代官。管一島之事而被人偸印圖書。假其名字。敢亂于我邊。亦不得爲無罪也。貴國必皆有以處之。島主又豈不爲之計哉。予既已許其和矣。從今以往。徐觀島主所爲。可察知其革心歸化之誠不誠耳。不腆土宜具載別幅。貺東報略。秖懷漸覥。寒候漸逼。冀益保重。不宣。

今按。此日本國王足利義晴也。盛親詳書中意對馬代官也。

承王旨書諭日本國使臣貿銀事

國王以國產白銀。遠送我國。意甚勤欵良。深感荷。但此白銀。我國群邑亦無處不產。不關生民衣食之重。多屬侈奢之用。國若採取。利源一開。則民爭效之。趍利忽本。末流難防。故官既不採。又禁民採久矣。近聞。商賈之徒。潛貿倭銀。國家慮競利之路漸開。崇侈之風日滋。立法禁之。使臣豈不聞知。在立法前。客使時有賣銀兩請貿者略許貿之。蓋欲以綏懷遠人耳。非欲貿以爲用也。法立之後彼亦知之。不復賣來。縱或賣來斷不許貿矣。我兩邦交好之道。重在信禮之篤。豈以物貨爲厚薄哉。況邦國相與之際。非微人聘使之比。享儀往來在所當愼。今者國王送銀之擧。儀情則備。固當敬答。但念以德相益。不徒以貨。則兩好愈光矣。今敬國王之送。而許貿則恐民聞之將謂。國既樂貿他國之銀。

〔邊圉〕邊陲卽ち國の片邊也、爾雅釋詁に、圉、垂也とあり。

〔虞朝〕帝舜の時代也、虞は舜の姓有虞氏なるによる。

〔頑苗〕苗は支那太古に、楊子江黃河の間に住居せし蠻族也、帝舜卽位三十六年三苗を征服せり。

〔足利義晴〕義澄の長子也、大永元年義植に次ぎ、足利第十二代の將軍となる。

〔對馬則云々〕日本紀天武紀三年の條に、三月庚戌朔丙辰、對馬國司守忍海造大國言、銀始出于當國、卽貢上云々、凡銀在倭國、初出于此時、とあり、又た延喜式に、太宰府より每年銀八百九十兩づつ貢すとあるは卽ち對馬の所產也其後鳥羽堀河の頃まで同島より銀を出せしこと、白石建議に見えたり。〔銀山神社〕もと大調神社と云ふ、白鳳中對馬より銀を出せし時の創建なりと云へり。〔足利義植〕義視の子也、延德元年義尙に次ぎ足利第十代の將軍となり、十二代義澄の後復將軍に重任せり。

意在崇重寶物、競趨利門。何能勝過。因有朝議、難於貿。貿易完、厥朝議亦非不在於敬答國王之禮、盡欲寡躬務德、而崇本推以交隣。亦愛之以德、以永講好之道耳。其意亦未爲過。然反覆思之。國王厚意義、難終孤。況復使臣以使事不卒爲惧、懇請不已、義亦諒矣、不得不勉以從。特設公貿二萬兩、以表予敬重國王之意。餘不敢盡貿、以從朝議。倘禮有缺、心甚未安。事有所不得已耳。使臣其悉予意。

今按、日本國中諸國多生銀、而對馬則我國始所生銀之地也。延喜式神名帳曰、對馬島下縣郡銀山（カナヤマ）神社。蓋以其始所出銀之山、故祭之。宜參考上卷末史今按。今足利送銀者以羨補不足、未必爲非、而韓重衣食外財、其法亦是。

慕齋先生行狀附錄

公諱安國、字國卿、號慕齋、義城人。云云

正德六年辛未、階加奉列。夏日本國使弸中來、公爲宣慰使。中見公曰、老生再朝中國。南聘琉球。三至貴國。見人多矣、未嘗見如公者也。凡館待情禮俱盡、酬唱藻思工敏。中尤敬服不已。臨分至於涕泣自是倭使至、必問公安否。七年壬申階加奉正。中又以馬島通好來。以公爲宣慰使。云云嘉靖二十一年壬寅夏。日本國使臣安心東堂等來、公以禮制待之。至誠得其悅服。時日本馬島契印俱不違。公之答辭委備得中。時論益以爲重。

今按、正德六年當日本後柏原天皇永正八年。足利義植將軍之時也。嘉靖二十一年當日本後奈良

天皇天文十一年。

東文選卷之十

五言律詩

洪武丁巳奉使日本作　　鄭夢周

水國春光動。天涯客未行。草連千里綠。月共兩鄕明。遊說黃金盡。思歸白髮生。男兒四方志。不獨爲功名。

今按。鄭氏來我。詳見東國通鑑。此其時詩也。下二首一時作乎。鄭氏著圃隱奉使藁。當多往作。又有圃隱集。未見之。

偶題

今日知何日。春風動客衣。人遊千里遠。鴈過故山飛。許國寸心苦。感時雙淚揮。登樓莫回首。芳草正菲菲。

旅寓

平生南與北。心事轉蹉跎。故國海西岸。孤舟天一涯。梅窓春色早。板屋雨聲多。獨坐消長日。那堪苦憶家。

送日本僧文溪　　釋卍雨

相國古精舍。洒然無位人。火馳應自息。柴立更誰親。楓岳雲生屨。盆城月滿闉。風帆海天闊。梅柳古鄕

〔律詩〕八句より成れる詩也、文體明辨に、按律詩者、梁陳以下、聲律對偶之詩也、云々、其詩一二名起聯、又名發句、三四名頷聯、五六名頸聯、七八名尾聯、とあり。

〔洪武丁巳〕洪武十年は、我が後村上天皇の天授三年に當る。

〔菲菲〕草の茂れる貌也。

〔闉〕城門外の副城なり。

〔排律〕律詩の八句より長きものにして、もと長律と呼びしが、明の高廷禮が唐詩品彙を撰せし時始めて此名を附す、五言六韻十二句を正、とす

〔銀漢〕天河也。

〔芒煥〕遠く輝く也

〔咸池〕日の浴する天池即ち海を云ふ　爰は淮南子に、日出於暘谷、浴于咸池、拂于扶桑、とあるにより、發句の扶桑に對せるなるべし。

〔鰈域〕朝鮮の異稱也、東海鰈魚を産するより名づくといふ

春。

又卷之十一

五言排律

送鄭大司成奉使日本　　權近

嵩嶽天低北、扶桑日出東、鯨濤連浩渺、使節講交通、慷慨男兒志、周旋儒者風。遠尋徐氏迹、應有陸生功、漸海聲初暨、無波譯已重、格苗文廼誕、事葛德彌弘。銀漢星芒煥、咸池曉色紅、梯航紛玉帛。劍佩會英雄。帝闕承聽履、賓筵拜貺弓。名將勒金石。赫赫耀無窮。

今按、大司成官名、鄭夢周也、徐福來我有陳迹、故曰遠尋徐氏迹、此詩以朝鮮比舜禹成湯、僭竊甚倨。

贈日本僧　　崔恒

鰈域與雞廣、龍飛寶曆賒。乾坤扶景運、羲昊撫淳龢。英傑歸鞭策。豪雄入網羅。文超兩階舞。武軼大風歌、不冒天無外。能容海匹涯。仁賢完猶狄。離燭洞幽遐。日月照神化、雷霆蕩舊邪。寰中閑賁枕、塞上久包戈。椎髻爭重譯。雕題盡一家、搏桑渺如髮、行李疾於梭。俗尚猶波奈。禪居似洛伽、來朝須簡選。出世每透迤、可但遮梨夜、而兼鉢底婆。吾師來綸綍、卽日謝煙蘿。杯泛六鼇伏、帆飛一鳥過。蛟宮從𩻰鰐。蜃市任騰挐。異國音敷奏、彤庭拜嘉、周旋足不失、專對口無訛。若茁殊榮極。霈雲寵渥沱。珍羞飫香積。仙液挹流霞、況敢頒宸翰。仍申錫貝多。衣冠瞻肅穆。禮樂觀繁華。襟帶山河壯。周遭雉堞遐。九

街紛綺錯。雙闕聳嵬峩。騁脅嫌猶晚。覩周綦倍加。祥奇尋紺宇。瑞脊禮青螺。晴倒討幽履。冉披採勝蓑。碧溪穿窈窕。峯巘陟陂陀。妙悟希龍樹。澄觀繼鳥窠。識該窮四部。業贍富三車。心共點頭石。跡同風脚駝。寂喧元不二。定慧即非他。降呪豈無虎。所經應有鵝。高懷秋濯桂。淨性水抽荷。往往詩魔惱。時時技癢爬。章成吞吐鳳。筆落認驚蛇。文發凌雲漢。詞源倒九河。道安堪齒列。靈徹可肩差。旅館初傾盖。清燈乍啜茶。金盆開軟語。玉麈共高哦。却愛圓機活。方恰巧笑瑳。錫懷前日卓。松憶昔年摩。忽擲騰空杖。俄乘貫月槎。來隨梅綻子。去趁菊開葩。玉露青汀草。金風響蘋葭。鯨欣迎洗鉢。龍慣護歸椏。行咏月輪輾。臥占星斗斜。五雲長入夢。千里定含嗟。顧我將頑鈍。憑渠庶切磋。汲深羞短綆。造奧愧蒸砂。竄唧容鑽仰。甑毛謾琢磨。悾悾拖紫綬。汨汨走烏紗。柱擬雲間鶴。其如井底蛙。眼花多掩翳。鬢雪亂鬖髿。贈策言三復。書紳笑一過。昌辰遇隆準。盛化致騶牙。歲歲宜投李。年年好濯爾（瓜イ）。師乎利他日成佛薩婆訶。

又卷之十六

七言律詩

尹憲叔來言。錦之禮賢驛。有龍家嫗云者。龍家即其子也。里閭高嫗。年不敢名。而以子號之。年過百歲。強康無恙。去年以病死。渠云。生七歲見東征之師。蓋宋之季。元之至元乙亥。乃其生年。而東征則辛巳。日本之役也。嫗年一百又四矣。予太史氏宜倣左氏記絳老人例。書之於策。予聞其語。姑題四韻一篇。以爲後日張本云。己未年作

〔紺宇〕貴人の家をいふ。
〔窈窕〕幽閑の貌を云ふ。
〔陂陀〕平かならざる貌、即ちけはしきをいふ。
〔四部〕四部經即ち無量壽經、觀無量壽經、阿彌陀經、鼓音聲陀羅尼經を云ふ。
〔三車〕聲聞乘、緣覺乘、大乘を、羊車、鹿車、牛車の三車に喩へし語、法華經譬喩品の所說也。
〔九河〕今の黃河也受け詩藻の盡きざるに喩ふ。
〔鑽仰〕德を慕ひ仰ぐを云ふ、論語子罕篇に出づ。
〔張本〕底本也、凡て物の下地、前置きを云ふ。

錦郡山中有老叟。一身無恙閲期頤。生先南取錢塘歳。語及東征日本時。過客皆驚顏似玉。曾孫自歎鬢如絲。自從德祐夾洪武。終始宜爲太史知。　　季　景　仁

又卷之十七

七言律詩

奉使日本有感　　朴　瑞　生

一飯聊申一祝辭。君恩偏重遠游時。盤飧日日多兼味。尊酒時時滿大卮。異卉幽花隨處好。回山曲水到頭奇。不因奉使來東域。天下奇觀總不知。

今按、此詩言日本有奇異山水草花、爲天下奇觀也。

又卷之六十二

書

遺蒙古使黑的書　　李　藏　用

日本阻海萬里。雖或與中國相通。未嘗歳修職貢。故中國亦不以爲意。來則撫之。去則絕之以爲。得之無益於王化。弃之無損於皇威也。今聖明在上。日月所照。盡爲臣妾。蠢爾小夷。敢有不服。然蜂蠆之毒。豈可無慮。國書之降。亦甚未宜。隋文帝時。上書云。日生處天子。致書于日沒處天子。其驕傲不識名分如此。安知遺風不存乎。國書既入。脫有驕傲之答不敬之辭。欲捨之則爲大朝之累。欲取

〔期頤〕百歳を云ふ。人壽百歳を以て期となす、頤は養也。人百歳に至れば凡て人に養はるゝ故也、禮記曲禮上篇に、百年曰期頤、飮食居處皆待于養也、とあり。

〔德祐〕南宋恭宗の時の年號也。

〔大卮〕大杯也、卮は玉篇に、酒器也、受四升、とあり。

〔到頭〕盡頭に窮到する義、猶ほ至竟と云ふが如し。

之則風濤艱險。非王師萬全之地。陪臣固知。大朝寬厚之政。亦非必欲致之。偶因人之上言。姑試之耳。然取舍如彼。尺一之封。莫如不降之爲得也。且彼豈不聞大朝功德之盛哉。既聞之計當入朝。然而不朝。蓋恃其海遠耳。然則期以歲月。徐觀其爲。至則奬其內附。否則置之度外。任其蚩蚩自活於相忘之域。實聖人天覆無私之至德也。陪臣再覲天陛。親承睿渥。今雖在遐陬。犬馬之誠。思効萬一耳。

今按。黑的元代人。詳見上卷。

又卷之六十三

書

答宗貞國書　　申叔舟

承書得悉。動履佳勝。欣慰欣慰。所獻禮物。謹已啓納。仍審示意。兼聆使者之言。間有不相委者。不可不復。我與日本兩國交懽年代甚久。自我朝開國。貴島始祖靈鑑。首款於我。宗貞茂繼世誠附益謹。及其末年不能和輯。島人散爲海賊。侵掠我邊鄙。于時我先王赫怒。遣兵問罪。數年之間往來不通。宗貞盛乃與島之舊老。遣使來欵。悔禍謝罪。且明海賊。率皆一岐九州之人。非獨對馬島。我先王以爲罪而討之。服而捨之。古今通義。今既服矣。已往之愆不必追咎。遂命待之如舊。自是歲遣使船。或多或少。我先王以諸州使船皆有定額。獨對馬不曾定額。慮或生弊。癸亥之歲。始約以五十船爲歲額。凡島之有事任者。亦各有歲額。圖書以爲驗。其他館待之節。道路之限。船之大小。人之多寡。皆有成

〔陪臣〕陪は重也、依て諸侯の臣を云ふ、爰は元に從屬せる高麗の臣なる故此稱を用ひし也

〔內附〕外國の降り從ふを云ふ。

〔犬馬之誠〕臣子報效を思ふ心也。

〔宗貞國〕盛國の次子にして、名を彥七と云ひ、刑部少輔と稱す、應仁二年封を嗣ぎて對馬國を領す。

〔宗貞茂〕賴茂の子也、應永九年封を嗣ぐ。

規。各守信約。罔敢違越。夫法久必弊。弊而有救。有國之常事。自三浦上京。程有日限。而處處稽留。至有踰時經歲。非徒島人謀多受料。押行通事亦有謀。私以至於是。近年南方遇災。年穀不登。沿途館驛訴不能堪。於是申明舊約。以節其太甚。以救其弊耳。非更變舊約也。況其小小違法之事。尚皆優容不較。今足下之簡有曰。待遇之違舊貫。所未相委者也。使者所言。料米減以凶歉。是乃邊吏之罪。近因凶歉。稅入不多。不得不用舊例。然雖以凶歉。豈國家之意也。今皆具由以啓。我殿下命曰。今對馬主能通變。守義。事大以誠。凡於所諭。聞命卽行。無有疑貳。又不自阻。有懷悉陳。予甚嘉也。爾禮曹特緩使人上京程限五日。而治我邊吏給料不謹之罪。凡對馬島人。務加優厚。具書以答。惟足下照悉。竊念。邦交之際。務從簡易。堅守信約。彼此無欺。然後可以久而益敦矣。若各聽往來之言。遽懷彼我。其不致後悔者幾希矣。無知之人。少不知意。輒以不靖相嚇。此苟不靖。則彼豈得獨安哉。是乃不思之甚也。凡今厚往薄來。歲費鉅萬。而無所惜者。寧不知坐費儲廩之爲可靳也哉。惟我殿下特念彼此人民一視同仁。故爾足下細念始終。商度利害。體聖上兩濟罔間之意。撫戢姦細。禁制非違。益堅誠款。以永交好。豈不嘉哉。邇來察足下施措。事合幾宜。又能彰明信篤。無有所隱。眞可與有爲者也。際會匪易。敢此縷縷悉陳所懷。足下體而察之。益育令譽。不勝幸甚。

又

春和欣想清適。閑慰閑慰。本曹今承王旨。若曰。我先王以對馬島人寄居三浦者日增。在彼則逃賦。在此則隱迹。投閑騁詐。爲弊於邊。乃命禮曹。移書島主。令遵舊約。點刷以聞。先島主卽遣人。來刷

〔稽留〕滯留に同じ。

〔年穀〕穀物也、年は說文に、本作秊、穀熟也、とあり、又た爾雅釋天の疏に、年者禾熟之名と見えたり。

〔凶歉〕年穀の不登なるを云ふ、歉は說文に、食不滿也とあり、博雅に、少也、と見えたり。

〔可靳〕靳は、左傳の疏に、服虔云、恥而惡之、曰靳とあり。

〔一視同仁〕韓愈の原人に、天者日月星辰之主也、地者草木山川之主也、人者夷狄禽獸之主也、主而暴之、不得其爲主之道矣、是故聖人一視而同仁、篤近而擧遠、とあるによる。

〔姑息〕小康に安んずる也、禮記檀弓上篇に、曾子曰、君子之愛人也以德、細人之愛人也以姑息、とありて鄭注に、姑且也、息休也、謂苟且取安也、と見えたり。

〔以聞〕天子に上書するを云ふ。

〔閭井〕市街也、閭は里門の義、井は市街の道四達して井の如きより云ふとなし、或は井田によりて市をなす故用ふとなす。

〔榛莽〕雜草木の亂れ茂りたる草叢をいふ。

罪人。方欲黠刷而遣、族未果。今島主新立。必能繼先志以敦誠款、爾禮曹具馳書以諭島主、本曹稽考。厥初貴島之人。來市我邊。因而寄居三浦。其數甚少、久而漸多。歲甲寅。我莊憲大王。視徹慮遠。命悉刷還、當時島主悉刷還之、而請姑留六十名。厥後因仍以至于今。容姦積多勢必生釁。如是而猶爲姑息之計。豈非永好之道。今我殿下新臨大東。方整疆埸。綏近及遠。足下亦初政於島。方修款。誠宜體聖上敦眷之意。不墜先志。悉刷還本。一如舊約。其有不得已。仍留者錄名以聞、以除積弊、以篤新歡。以永隣好。彼此幸甚。特賜物件。具如別錄。領納、且冀珍重。

今按、藁齊詩集。有答日東使宗國貞詩。蓋貞國國貞同人。

又卷之七十八

記

盈德客舍記　　權近

盈德在海上。最僻且遠、久困倭耗。人民避匿閭井丘墟者有年。及爲城而鳩集之。然後逋民稍還。粗安其業云云

又卷之七十九

記

淸河縣養倉廨舍記

己巳之冬。予謫寧海。明年春量移興海。遵海而南歷。所謂淸河之境。時因倭寇濱海之地鞠爲榛莽。

寧興始城、甫二年。僅有遺氓、復業者若清河等地。闃然無人。賜環之後、聞清河又城。以招集其流民也。今年夏。欒正金君袖一詩來示。卽黃鸝李公題清河義倉廨舍之作也。稱道其宰閔侯政績頗詳。水泊戰艦。陸置屯戍。禦侮之道備矣。流亡既復。耕鑿既安。撫字之方得矣。設義倉以惠貧弱。立廨舍以待賓客。守令之職。靡所不擧。讀是詩可以想其爲人也。予爲之歎曰。凡物之盛衰。必有其數。否傾則泰。理之常也。沿邊之地播蕩久矣。方今聖運龍興。革舊鼎新。海寇讋服。邊塵安靖。選用良吏以任民治。使前日荊棘之藪化爲桑麻之區。復泰之期。適當于今斯民之幸至矣。而況義倉之設。尤便於民。贏而收。歉而散。雖有凶荒民無指瘠。固良法也。閔侯孜孜以擧行。後之繼者守而勿墜。將見民生富庶以登壽域可期矣。予嘗踐歷其境。目其殘廢。惻然之念。未嘗忘于懷。今觀是詩。寧不爲之喜慶耶。欒正請記。因書此以歸。閔侯諱天佐。榮州人也。予雖未相識。欒正純謹、黃鸝端介。未嘗輕於譽毀、則閔侯之爲人亦可信也。洪武三十一年後五月既望。

今按、此言因倭寇濱海之地爲榛莽也。

又卷之九十

送密陽朴先生敦之奉使日本序　　權　近

日本氏在海中。與我相望。使聘往來、自古而通。高麗氏之季。文恬武嬉。固圉無備。蕞爾邊島之民敢爲剽竊。來寇我疆。垂五十年于玆矣。上天悔禍眷佑。聖人革古鼎新以開我朝鮮。文明之運、謀臣猛將咸効智力。內修外攘算無遺策。水陸之師所在告捷。於是海寇讋服。至有自降願爲之氓者。主上嘉

〔遺氓〕遺民也、氓は說文に、民也とあり。

〔闃然〕靜かなる貌也、闃は玉篇に靜無人也、とあり。

〔讋服〕懼れ從ふ也前漢書項籍傳に、諸將讋服、とある師古注に、讋失氣也、と見えたり。

〔孜々〕勤勉怠らざるを云ふ。

〔黃鸝〕朝鮮鶯也、我國の鶯卽ち報春鳥より其形稍大にして鳴聲劣れり。

〔既望〕陰曆十六日を云ふ、望日卽ち十五日は既に過ぎたりとの義也。

〔文恬武嬉〕天下太平にして文武官安恬嬉遊せるを云ふ

其慕義。不念舊惡。賜以第宅衣廩。俾獲再生。其所以懷綏之者至矣。然其遺孽猶未盡殲。故我將士屢請興師明致天討。永清海道。恭惟。我聖上欲廣文德。不即用兵。越今年秋。日本遣使來聘。且喩禁賊。上心嘉之。優禮以待。將還。擇朝士之有文學才辯可專對者。以報其聘。秘書監密陽朴先生。實膺是命。以行。先世以世族之冑。早魁進士。參掌銓選。高步諫垣。華問大播。嘗奉使航遼海。歷齊魯之郊。過江淮。以朝于天子之所。今又涉風濤不測之險。以使遠國瘴霧之所侵、鯨鯢之所駭。其可懼也極矣。而先生無一毫憂畏憚勞之色。慨然以交隣繼好。戢暴安民爲己任。豈非眞知輕重大丈夫哉。古人謂、大丈夫生不爲將。得爲使折衝口舌之間足矣。吾於先生望之矣。夫日本在天地之極東。卽天地生物之方也。其人之生。得天地之心。以爲吾性之仁者。亦與四方之人均矣。其見赤子匍匐而入井。亦必有惻隱之發以思其救。況可忍視無辜之民。死於鋒鏑。轉於溝壑也哉。吁仁人之心。以天地萬物爲一體。四海爲兄弟。故雖隔海岳異疆域。言殊俗別。而其爲人同類。則其相愛必矣。故古之聖人。制爲邦交聘問之禮。象譯以通其意。幣帛以厚其情。粲然有文以相接。懽然有恩以相愛。此人所以爲人而無愧於天地者也。今彼國使來修聘。以講舊好。其意固善矣。苟不知此。而戕賊其同類。則必獲罪於天地。見怒於鬼神。不仁之禍。終亦自及。必死於兵而後已。豈不哀哉。先生之往。苟以是語於其人。必有所感發愧赧而自新者矣。揖讓談笑之際。從容尊俎之間。變介冑爲衣冠。化弓刀爲玉帛。革頑兇於善良。復俘掠於鄕井。永結和親以堅隣好。能使兩國之氓躋於仁壽之域。當在此行矣。不其偉歟。

〔諫垣〕諫官（諫議大夫等）の詰め居る所を云ふ。

〔瘴霧〕暖地の毒霧なり。

〔四海爲兄弟〕論語顏淵篇に、四海之內、皆兄弟也、君子何患乎無兄弟也、とあり。

〔尊俎〕尊は酒を盛る器、俎は牲を載する器也、轉じて筵席に尊俎を連ね外國の使と杯酒談笑の內に交渉するの意に用ひらる。

今按、朝鮮朴敦之來于我、蓋應永五年事。序文曰、高麗氏之季、垂九十年于玆。以此考之、李氏代王氏取高麗、改國號朝鮮、已及五十年、則此時也。又序文曰、今年秋、日本遣使喩禁賊。應永五年八月、諭朝鮮書曰、比者九州違命之小醜、既伏其罪、次當遣偏師、盡殲海島殘寇、以通往來舟船。而結兩國歡心也、爾其勉之、即謂此。日本在天地之極東、即天地生物之方也。造化論曰、太平之人仁。註東至日出、蓋本于此。

又卷之九十二

送日本天祐上人還歸序

禪學之士、往往乎數千里、游方訪道、固其志也。然時有治亂、道有通塞、亦冥行而暗趨、觸危而抵險、故終其身而志莫之遂者、夫豈少哉。幸今殿下即祚、文治興武備修。交隣以道、四方無虞、爲參訪者不亦樂乎。己亥之夏、日本國遣使來聘、沙門祐公隨至。蓋欲托行事而實訪乎名山者也。其爲人也端潔、有道氣。字畫詩律俱有可觀。殿下嘉其慕義納款、命有司館待甚隆。及將還也、祐上人進言於朝曰、金剛山靈異之迹、擅名於天下。吾禪而遊者、以不到是山爲嫌。願留錫以觀之。仍賦詩達其志。使轉告於吾君、於是命禮官從其願留。又特賜鞍馬而待之益隆。其年秋使乘傳以訪所謂金剛山、極其遊觀之美。隨遇隨記、其爲文無慮萬言矣。予借一讀之、詞綵曄然溢目。非禪寂者所能也。留一載、又進言曰、吾道雖曰辭親割愛、然有老母而無他兄弟。願得歸覲朝之。文士咸嘉其志。皆詩之贈其行。俾余題其卷首。予之所學儒也、道不同、安能言哉。然竊聞之、睦州蹤公嘗編

〔取高麗云々〕高麗は内姦臣の憂あり、外倭寇の患ありて、國力日に衰へしが、恭讓王に到りて滅び、倭寇討伐に功ありし李成桂これに代りて朝鮮を建つ。

〔沙門〕又た桑門に作り、息、功勞、貧道などと譯す、出家の總名也。

〔留錫〕足を駐むる也、僧に就きて云ふ、錫は錫杖の略、僧侶修驗者の携ふる杖にして、梵語に、隙棄羅と云ふ。

〔曄然〕照り輝く貌なり。

〔睦州〕黃檗希運禪師の法嗣也、姓を陳氏と云ふ、睦州龍興寺に隱遁す。

〔慈明〕趙宋の潭州石霜山の僧にして名を楚圓と云ふ。汾陽昭の法嗣、臨濟六世の孫也。

〔華嚴經〕具さには大方廣佛華嚴經と云ふ、東晉の佛䭾跋陀羅の譯六十卷唐の實叉難陀の譯八十卷、唐般若譯四十卷の三本存す

〔此東方云々〕華嚴經四十五菩薩住處品に、海中有處名金剛山。從昔諸菩薩衆於中止住、現有菩薩名曰法起、とあり。

〔鑑眞〕唐の高僧也天平勝寶六年來朝し、我國に寂す。

蒲團以給其親。慈明圓公乃以白金遺若母。後世稱唐宋諸師道行之著者。必曰睦州慈明之二師。豈外乎道哉。抑所謂絕愛辭親。一意乎道者。竹公之所以不歸也。然而終有以報其親焉。今上人旣篤於其道。又攻乎文藝。嘗在其國。而爲其君所器重。至賜號文溪。以寵異之。則事親固不待於編蒲遺金。而有足以瀟灑者。無他日洞山之所以報其親者。吾又望於文溪。其勉之哉。

今按。己亥蓋應永二十六年。金剛山在朝鮮江原道。與本朝金剛山同名。華嚴經曰。從此東方有金剛山。法喜菩薩作佛事。二國皆擬之乎。我金剛山本曰葛城山。金剛沙出。可以磨鑽玉石。故山西人號曰金剛山。自鑑眞和尚有此號云。

又卷之九十三

圃隱集序　　權　採

西朝京師。東使日本。

今按。圃隱集。鄭夢周集也。夢周使日本。事見前。

又

日本國使齡上人松泉幽卷詩序

日本氏。國於扶桑之域。政簡民淳。故其俗多尙浮屠。參訪之人。因奉使而遊列國者。前後相望。唐宋以來有若烟然寂想。及榮睿之徒。是已我殿下卽位之初。有倪上人祐文溪之徒。繼踵而來。亦皆韻釋也。今齡上人亦因求法。自歲壬寅至乙巳。四年之中。奉使於我國者三矣。殿下嘉其義。命攸司郊勞。

館穀加焉。上人年芳而學碩。神清而形臞。粲々清立。望之如出壑之冰盛之玉壺也。一日以其所扁松泉幽請於搢紳先生曰。歲在壬寅。特蒙家書之賜。余固珍藏。願贈一言以終惠焉。於是朝中文士咸詩之矣。而俾余序。余惟人所好各從其類。淵明之愛菊。以其隱逸。桒那之愛楊。以有五利。其他王徽之竹。遠公之蓮。皆有所好。今上人以松泉自扁。果何所取歟。以吾儒之說言之。聖人於松有歲寒後彫之語。於泉有不舍晝夜之嘆。未識上人所取亦從是否。亦以清淨寂滅之道。有感於其類而愛之乎。想夫千岩萬壑。一間蘭若。松風洒面。泉木澄心。頓除熱惱。一段清凉之境。有不可以言語形容者焉。觀其蒼蒼楨幹。傲雪凌霜。貫四時閱千歲不改柯易葉。則有如上人得堅固力金剛不毀之節矣。冷冷活活水注玉。含雲根一派達千里無滯形礙迹。則有如上人洞開眞源。浩入聖海之妙矣。上人之所取。其在是歟。余觀上人奉使我國。辭命之不差。聘享之有儀周旋升降。皆中法度。眞所謂墨名而儒行者也。將以我國家禮樂文物之盛。交隣懷遠之道。達之於其國。使兩國之間相好息民之機。至于千萬世而不替也。無疑矣。是以序。

今按。齡上人者。足利義持時人。見應永三十年七月道詮（義持法名）奉朝鮮國王李裪書。曰。茲從使者之所請。搜索被虜人於處處以歸之。今重遣專使籌知客副使齡藏主。別有所陳。云云　自壬寅至乙巳。自應永二十九年至應永三十二年。

又卷之一百一

傳

〔淵明〕姓を陶と云ふ、晉末に仕へて州の祭酒となりしが、後辭して閑居自適し、詩と酒とに親しむ、其の飮酒の詩に、采菊東籬下、悠然見南山、の句あり。

〔王徽〕晉の人にして、字を子猷と云ひ、大司馬桓溫參軍に至る、卓犖不羈、風流を事とす、嘗て人の空宅に寄住し竹を植ゑしめしこと世に名高し

〔歲寒云々〕論語子罕篇に、歲寒然後知松柏之後凋也とあるに因る。

〔不舍晝夜〕論語子罕篇に、子在川上曰、逝者如斯夫、不舍晝夜とあるに因る。

〔足利義持〕義滿の子、第四代將軍也。

星主高氏家傳

鄭以吾

耽羅之境。初未嘗有人。其山奇秀曰漢拏。宛在雲海渺茫之上。降其神靈和氣。化生神人于山之北毛興穴。三者同時湧出。曰高乙那良乙那夫乙那。而高乙那。卽高氏鼻祖也。俱漁獵以爲食。譜云。日本國主生女七人。遣四女于丹狄國。丹狄卽所謂赤狄之種也。命其女三曰。西南海有山。孕秀生神人三昆季將建國。無媲偶。若輩可往事之。後世子孫必繁衍盛多矣。乘之以金木船。兼備五穀牛馬之種。且使神人衞而送之。至耽羅東海之濱。神子三人出獵遇之。其衞護神人乃紅鞓紫衫者也。凌空而去。三子分娶之。卜毛興窟近地以居。數年間產業俱就。其後漸大。至高乙那十五世孫高厚。與其弟高淸將朝見新羅。有客星先現。觀臺報云。異邦神人來朝之徵也。旣而高厚兄弟渡海。初泊耽津。遂至新羅。王喜待之。以客星先現之故。賜高厚爵星主。且令高淸出王之膝下。愛如己子。爲王子。賜邑號曰耽羅。蓋自耽津至新羅故也。羅史載之甚詳。及前朝太祖統三之初。星主高自堅王子梁且美。卽良乙那之後。改以梁。聲相近也。世一朝見。太祖待之優渥。貴日三接。飮食供帳殆擬王者。自率從至於權夫賚予稠疊。蓋所以寵異之也。然世襲星主王子而已。未有筮仕王國。而大顯者高維始以賓貢。靖王乙酉首中南省試。明年丙戌李作挺榜第三人。官至右僕射。子兆基。舊名唐愈。睿王丁亥。韓卽由榜登科。仁王朝出入臺閣。好直言。敢諫。相毅王知。戊辰擧位至平章判吏部事。名迹猶猶有詩集二卷。行于世。平章子廷益之子高適敍其卷端曰。子廷琥職綴三品。與其誠明俱早歿。唯廷益亢王癸巳春。乞退還鄕。先儒崔瀣誌東人文曰。無子。有三女。蓋未之知也。高適亢王辛酉登第。卽人金閨。因覲親還

〔耽羅〕今の濟州島に在りし國也、日本紀天智紀五年春正月の條に、耽羅遣王子始如等貢獻、とあるを我國史に見えたる初めとなす。

〔媲偶〕配偶也、媲は說文に配也、とあり。

〔紅鞓〕赤き皮帶也、玉篇に、鞓、皮帶也、鞓亦作綎とあり。

〔紫衫〕衫は短き衣又は袖の端なき衣を云ひ、或は廣く衣の意に用ひらる。

〔客星〕凶星にして周伯、老子、王蓬絮、國星、溫星の五種ありと云ふ。

鄕。比及至元八年辛未夏、神義軍三別抄叛入耽羅、二十年癸酉夏四月、國家濟師、討之、盡殲、以高適爲留摠官。特令安集餘民。戊寅夏赴朝、親授金牌、甲申改摠管府爲軍民安撫使司。纔世遂罷焉、丘世孫仁坦、襲爵。至元辛巳元朝欲征日本、勅前朝備戰艦九百艘軍資器仗一切辦辨、故令下耽羅、使造一百艘、儲待應副亦無有闕、其計皆自仁坦出也。至元二十一年又受宣命金牌、明威將軍安撫司使、二十九年以征東行中書省劄付充耽羅指揮使。至是乃與副使文昌祐同知金珥、定議奏達元朝、還屬本國。忠烈王嘉其忠誠、特使譯語郞將鄭恭任良弼宣召爲星主云麾上將軍、賜紅鞓紫衣寶蓋。賚予不貲、紅鞓寶蓋之賜、自新羅耽羅與焉。忠烈若曰自新羅代直至于今、何國赤誠爲可惜也。星主之職永世毋墜。仁坦傳之同母弟守作無後、仁坦之子高頤者爲西道副千戶、後頤之冢子順良傳襲星主。弟順元繼之。千戶曹典書高臣傑、洪武己酉、爲西海道副千戶、越七年、玄陵興師討哈赤。後仍以臣傑爲副千戶、明年乙卯車玄有內成群、搆逆將亂殺、本國萬戶臣傑乃與王子文忠傑議、請於國討平之。車玄有之黨知之、三日圍高文二家、盡殺六畜。高文二人僅以身免。使國之憲克正其罪。丙辰丁巳、倭船六百許艘周迴而入、臣傑中箭盡心禦之。受職賞。甲子加星主、仍賜紅鞓紫袍寶蓋、及弓矢表裏宣醞臣傑。生四子、曰鳳仁、鳳義、鳳禮、鳳智。仁義俱早逝、鳳禮字伯恭、鳳智仲明事我太祖康獻大王、鳳禮位至摠制、鳳智折衝上將軍、鳳禮以長襲星主、而鳳智先卒。子今司醞署令得宗、廬墓盡禮、土人皆慕之、告于朝。旌異其門閭。今上甲午得宗爲義盈庫直長、條列耽羅事宜、上書闕下、盡祛百弊。是年秋上臨軒策士、得宗對策中乙科十三人。明年襲星主。累轉爲可憲監察刑書都官佐郞禮

〔權輿〕物の初め也、權衡を造るには、權より始め、車を造るには輿より始むるによる、一説に蘿蕍の假音とも云ふ、蘿蕍は草木の萌芽なり

〔冢子〕太子也、左傳閔公二年に、太子奉冢祀社稷之粢盛、以朝夕視君膳者也、故曰冢子、とあり。

〔洪武己酉〕洪武二年に當る。

〔六畜〕爾雅釋畜に馬、牛、羊、豕、犬、鷄、謂之六畜、とあり、總じて家畜家禽類を云ふ。

〔伊尹〕名を摯、號を阿衡と云ふ、湯を佐けて桀を滅し海內を平定す。

〔空桑云々〕呂氏春秋本味に、有侁氏女子採桑、得嬰兒於空桑之中、獻之其君、云々、命之曰伊尹、とあり。

〔平章〕平は均、章は明也、善、庶民を治むるを云ふ。

〔神皇正統記〕神代より後村上天皇御踐祚までの歷史を傳へ、南朝の正統なるを唱へし書、北畠親房の著也。

曹佐郎。戊戌秋七月。奉使歸故鄉。士林榮之。得宗謂吾曰、吾宗肇基毛興之穴。自新羅式至于今。世襲星主。服事王家。赤心無已而俛仰陳迹。非托之文字、懼其湮沒無以示來裔。然世次譜牒不全、姑以大槩爲請。以吾聞伊尹生於空桑。傳悅降於傅巖。皆怪而疑之。及讀生民詩傳、先儒曰、天地之始、固未嘗先有人也、則人固有化而生者矣。蓋天地之氣生之也。又觀得宗先世如此。而後有以知神人之生異於人也宜。其碩大顯融、磊砢相望、棊落其世職也。況吾得宗年未立、而志愈謙光。其奇氣偉節蔚然有平章之風迹。嗚呼高氏其未艾哉。

今按、日本國遣四女于丹狄國。其事不可考。備五穀之種。至耽羅之濱、撿日本書紀。曰。天智天皇八年三月耽羅遣王子久麻伎等貢獻。丙申賜耽羅王五穀種。殆近似矣。然日本書紀無我妻耽羅事。神皇正統記曰、昔桓武之朝有我與韓同種之文書出。而帝惡去之。如高氏譜說、亦此類耶。其不足信明矣。

又卷之一百二

跋

跋黃蘗語錄。　李穡

黃蘗傳心要訣、宛陵錄。共三十又八紙。唐裴休譔、日本釋。允中菴思欲廣布手刻之。既徵予言爲跋。予於是學蓋不暇。不敢措辭。獨書知允者云。允年二十五。以歲己亥携是錄。航海西。學中原。爲風所搖。遂來王京。道梗志不果。中遭兵厄。失其所携本。今所刻者、報法齊禪師之舊藏也。禪話如麻

斤屎橛雷掣霆擊。令人愕眙。惟是錄明白易曉。觀元所好如是。其心可知也。其師見龍山與道長老同師中峰有得。住持江南兜率寺。既而歸國。適留燕京。諸山尊敬之。皆自以爲不及。予在燕時熟聞之。故知龍山亦非庸衆人。元之淵源又可見已。觀遠臣以其所主元之館於人元政堂廉密直也山則必於人跡所罕至其於墨戲也。蕭散有奇趣。尤喜爲白衣仙傳神。最其爲人無可議者。予故樂爲之書。

今按。傳心要訣。傳心法要也。宛陵錄裴休於宛陵作。俱一卷。休嘗得親黄蘗希運禪師。傳心要所集也。見龍山諱德見。號龍山。姓平氏。年十二師寂菴照禪師。授法華。即能諳誦。且通義理。後南遊住兜率悅禪師古剎。俄動歸心。遂附舶抵博多。當貞和五年。號眞源大照禪師。元其弟子也。

又卷之一百三

跋

朴判事日本行錄跋　　李　詹

風雅可以感鬼神。詞章足以感人心。然必有三百篇之遺音。然後足以感人。而其感人也。有自然之音響節族。而又有和平憂思懽愉窮苦之異。誠有不可揜者矣。雙谿朴先生少學詩。以温柔敦厚爲心。而得興觀群怨之義。其奉使日本也。島寇方肆其虐。而帆程萬里波濤洶湧。睨鼉窟儕鮫室。跕危履險。一粟其身。寸絲其命。任其浮沈。惟以忠信自守而泰然也。至則六州牧奇器之。既屈節以禮貌。又言於大相國以導其接見。相國之待先生猶於六州也。先生於是極言凶輩倭略邊境。虜我人物

〔墨戲〕書畫を云ふ
〔希運〕閩の人也、百丈山の海禪師に仕へ、還て黄檗山に住す、大中年中寂す、謚號を斷際禪師と云ふ。
〔德見〕下總香取の人也、年廿二、萬難を排して當時我國と隙ある元國に游び、歸朝後南禪、天龍の二刹を董し延文三年寂す、
〔寂菴照禪師〕鎌倉壽福寺の僧也。
〔法華〕妙法蓮華經の略、秦の羅什譯にて、二十八品あり、初の十四品に一乘の因を說き、終の十四品にその果を說く、七卷本及八卷本あるも、後世法華八講行はるゝに及び、八卷本用ひらる。
〔鼉窟〕海蛇の窟也

之狀。使出義兵殲盡兇醜汎清海道。復修兩國之好。卽與信使同舟而歸、先生寓日本二年、有感於心者。其可愛、可愕。可怪。可歎。一寓於詩。旣成以示其人。無不歎服。一日袖若干篇來示余。余一見而得先生心也、若夫風作波興困於澎湃。則想其憂思也。容與江潭。點檢水物。則知其和平也、至若郊勞禮送館待之優。則可以懽愉矣。方探虎穴。兵刄交接勝負雖期。則可謂窮且苦矣、四者之來隨、忠應之。而其中之所守、則夷險一節爾。故其句律高古從容、蒼然其色、琤然其聲、獨追古作者爲儔則至於感人而後已。可謂盛矣、夫學詩故能言。能言故可以使四方。宜乎謂詩能動物也。日本民與吾本國絕好者殆千有餘年。今其獻捷修聘、自先生始、嗚呼詩道有以感之也歟。

今按、東文選百三十卷。目錄上中下三卷。大抵多脫簡。撿目錄上下。卷之八有尹紹宗賀李相國大破倭寇振旅還都、及申叔舟題日本僧壽蘭詩軸七言古詩。卷之十八、有權近送日本釋大有還國、及崔恒題日本師七言排律。卷之八十八。有李崇仁送鄭達可奉使日本詩序、及送日本天祐上人還國序等。今皆闕如也、朴判事螯朴瑞生、

晉山世稿卷之二

送高僉樞奉使日本

煌煌龍節指扶桑。雲濤洶湧連天長。風帆萬丈拂秋空。快若逸騎奔康莊。男兒何用守故丘。弧矢由來志四方。吾聞彼俗尙儒雅先生已自能文章。況是與國舊修好。講和須使恩信彰。館待遙知享儀豐耆艾競觀孤鳳凰。金盤霜橙壓香橘。冰椀蔗漿洗煩腸。惜別置酒臨江樓。撫琴相顧天蒼茫、明年刮

〔探虎穴〕危地に投ずる也、三國吳志に、呂蒙曰、不探虎穴安得虎子とあり。

〔古詩〕漢詩の一體也、韻を押すのみにて、平仄に拘らず、其體に五言、七言又は長短句のものあり。

〔耆艾〕老人を云ふ者は至也、老境に至るの義にて六十歲の稱、艾は「ヨモギ」也、顏色蒼白艾の如きの意にて五十歲を云ふ、禮記曲禮上篇に、五十曰艾、服官政、六十曰耆、指使、と見えたり。

〔李裪〕朝鮮第四世の王にして、世宗と稱す、在位三十二年也、

〔孟秋〕初秋卽ち舊七月を云ふ、

〔姸媸〕美醜也。

〔嫫母〕醜婦也。

〔西施〕越の賤民の女、容姿絕世也、越王勾踐これを吳王夫差に獻ず、夫差其色に溺れて遂に國を傾く。

〔圭竇〕圭は上圓く下方なる珠也、依て門旁の潛りの圭の形をなせるものを圭竇と云ふ。

日定何時。鶯化春蒲五雲鄉。

今按、高僉樞僉知中樞院事高得宗。明正統中朝鮮人。正統四年（當日本永享十一年）七月十二日朝鮮王李裪奉日本國殿下書曰、孟秋猶熱。想動靜佳勝。念惟我邦隣於貴國。世惇舊好。第以海洋遼隔、久闕交聘。緬懷良深。遣臣僉知中樞院事高得宗。虎勇侍衛司大護軍尹仁甫。聊致慶賀以達遐悰不腆土宜具如別幅。切希留納。惟冀順時自重。

送中泛翁歸日本

送子乘槎作遠遊。汀洲芳草暮雲愁。孤帆縹緲海天濶。千里月明相憶不。

日本躑躅花

我主上殿下踐阼之二十有三年春。日本國進躑躅數盆。上命道內庭及其花開葉單而花瓣甚大。色類石榴重跗疊萼久而不衰。其與我國色紫而葉千者。姸媸不啻若嫫母與西施也。上嘉賞之、命下上林園分植。外人秘莫能得。幸余屬忝戚里。從一宗英得寸根。未知其性品則一以種盆。一以種地以試之。種地者凍死、而盆者無恙。數年之間枝條方盛。至四五月群芳衰謝。浩態濃艷。爛熳如紅錦。實非圭竇衡門所堪賞也。客至以一盆示之。皆莫知爲何等花也。噫。島夷邈處東溟。距京都萬餘里。若非聖化東漸。豈能使涉滄海。脩職貢至以此爲獻邪。視漢家遣絕域。至十八年之久。僅得安石榴以還。其相去不翅萬萬矣。收藏勿暖。澆水勿濕。屈其枝地接。一如接瑞香之法。盆用瓦器。

今按。晋山世稿四卷。朝鮮夏官姜相公編。其祖父兄三世之所著也。時明成化癸巳云。昔我王室之盛。新羅國輸八十艘之貢。彼爲不知之。今足利氏之衰。贈杜鵑花數盆。彼以自誇大。此猶齊人驕妾婦之顏乎。其蔑視漢家。名我島夷。僭不知名分也。

東人詩話卷下

朝鮮　徐侯剛中　著

驪興淸心樓。古今題詠者多。辛巳日本東征天使詩云。江淸徹見水中水。樓逈可觀山外山。世傳美句。以予觀見山外山意好。其曰水中水。則前輩無此等語。語頗牽强。牧隱云。撑水功高馬岩石。浮天勢大龍門山。語嶮壯。柳巷云。山中苦別纔殘子。部裏來逢元次山。語典實。日本釋梵齡云。淸磬月高知遠寺。長林雲盡辨遙山。語淸絕。圃隱鄭文忠公一絕云。烟雨空濛滿一江。樓中宿客夜開窓。明朝上馬衝泥去。回首滄波日鳥雙。河東鄭相國常云。諸詩固好。終不若此詩閑遠有味。

今按。釋梵齡不詳何人。

三綱行實圖

集賢殿副提學　偰循　編

實聖王遣奈勿王子未斯欣質倭。云云。倭王囚堤上。問曰。何竊遣王子。云云。妻率三娘上鵄述嶺。望倭國哭死。　詩　訥祇初立念天倫。辯士旁求得此人。質弟歸來全二質。新羅千載一忠臣。勸欣還國滯扶桑。身被淫刑最可傷。哭望東溟妻又死。至今忠烈更增光。

今按。堤上事見三國史記等。故略之。圖亦不載。下倣此。

洪武丁丑九月。倭賊寇宣州關之泥城萬戶金原桂率兵赴援。倭賊戰敗解圍去。原桂乘勝逐之突入

〔八十艘之貢〕日本紀神功皇后新羅征伐の條に、愛新羅王波沙寐錦、云々、仍賣金銀彩色及綾羅縑絹、載于八十艘船、令從官軍、是以新羅王常以八十船之調、貢于日本國、其是之緣也、とあり。

〔齊人云々〕齊人外より歸るや常に其妻妾に告げて曰く今日某所に饗應せらると、其擧ぐる所悉く知名の士ならざるなし、妻妾怪みこれに尾するに葬式に殘物を請ひ居たりと云ふ孟子所載の寓話を引ける也。

〔淫刑〕濫りに刑するを云ふ。

虜中。遂爲賊所害。六月諫官上言。原桂素有驍勇之才。聞賊圍宣。奮不顧身、卽提孤軍。倍道疾馳。以解重圍。全城於幾陷。追亡逐北。突衝陷陣。矢盡力窮。竟以不振。以一身之死。易萬氏之命。其功烈烈。死且不朽。乞令攸司追贈官爵。且於本處立祠奉祀。敍錄子孫。奬慰忠魂。以勸後人。國家幸甚。敎可。　詩。倭奴窺伺肆頑兇。來寇宣城疾若風。鐵甲將軍心膽壯。解圍摧敵樹邊功。長驅遠鬪救危城。臨難何曾愛此生。義氣凜然忠貫日。聖朝追贈重褒旌。

今按。洪武丁丑三十年。當日本後小松天皇應永四年。

烈婦崔氏。靈巖士人仁祐女也。適晉州戶長鄭滿。生子女四人。其季在襁褓。洪武己未倭賊寇晉。闔境奔竄。時滿因事如京。賊闌入里閭。崔年方三十餘。且有姿色。抱携諸息走避山中。賊四出驅掠。遇崔露刃以脅。崔抱樹而拒。奮罵曰。死等爾。汚賊以生。無寧死義。罵不絕口。賊遂害之。斃於樹下。賊擄子息以去。第三兒習甫六歲。啼號屍側。襁褓兒猶匍匐就乳。血淋漓入口。尋亦斃焉。後十年己巳都觀察使張夏以聞。乃命旌門、蠲習吏役。　詩。良人上計赴王京。倭寇搶攘陷邑城。汚賊幸生寧死義。中心取舍已分別。　賊勢縱橫闔郡驚。携兒被擄若爲情。可憐抱樹捐生處。風響依稀罵賊聲。

今按。洪武己未十二年。當日本南朝天授五年北朝康曆元年。

烈婦京山人進士裴中善女也。旣笄歸士族李東郊。善治內事。洪武庚申倭賊逼京山。闔境擾攘無敢禦者。東郊時赴合浦帥幕未還。賊騎突入烈婦所居里。烈婦抱乳子走。賊追之及江。江水方漲。烈婦度不能脫。置乳子岸上。走入江。賊持滿注矢擬之曰。而來。免而死。烈婦顧見賊罵曰。何不速殺我。我

〔逐北〕北は逃に同じ、荀子議兵篇の注に、北者乖敗之名、故以敗走爲北、とあり、又た後漢書臧宮傳の注に、人喜陽、而惡陰、北方幽陰之地、故軍敗者皆謂之北、と見えたり。

〔邊功〕邊は夷狄也夷狄を討ちし功を云ふ。

〔依稀〕さも似たりと訓す。

〔笄〕十五歲となるを云ひ、又た女子の許嫁するを云ふ禮記曲禮に、十有五年而笄、とあり、又た儀式に、女子許嫁笄云々、と見えたり。

〔持滿〕弓を引き張る云ふ。

豈汚賊者邪。賊發矢中肩。再發。再中。遂歿於江中。體覆使趙浚上其事。旌表里門。 詩。島夷來逼孰能當。闔境蒼皇走且僵。忍見乳兒呱岸上。自知難脫赴滄浪。 倭寇由來性不仁。那知烈婦行眞純。灘聲千載猶悲咽。到此無人不愴神。

今按。洪武庚申十三年。當日本南朝天授六年、北朝康曆二年。

林氏。完山府儒士拒之女也。適知樂安郡事崔克孚。倭寇本府。林被執。賊欲汙之。林固拒。賊斷一臂。又斷一足。猶不屈。被害。 詩。林氏完山禮義家。倭奴突入肆兵戈。兒孫自刃誰能免。之死心堅矢靡他。 貞烈高風擧世驚。臨危捨命不偸生。一身取舍分明甚。義重方知死亦輕。

續三綱行實圖　　朝鮮　申用漑等撰

金得仁。東萊縣人。幼年喪父。家貧。養母至孝。母歿廬墓三年。後遷其父葬于母塋。又居三年。前後居喪九年。値年飢。金山浦倭奴四散剽掠。猝至得仁廬。感其誠孝。嗟嘆而去。後以海菜米香遺之。康靖大王三年特授豐儲倉副奉事。 詩。喪父惸惸奉母親。慈顏見背更誰因。仍遷舊塚同塋葬。九載居廬備苦辛。 海寇過廬遺米香。固應純孝服頑強。聲名上徹宸旒聽。積善終然荷寵光。

今按。當時南倭心非石木。感人誠孝。可見存天理也。

藥哥。善山人趙乙生妻也。乙生爲倭寇擄去。藥哥未知存歿。不食肉。不茹葷。不脫衣服而寢。父母欲奪志。矢死。不從。凡八年而乙生還。爲夫婦如初。 詩。杳杳滄波阿每鄕。夫從擄去定存亡。心喪八載全貞節。豈料他時再見郞。 却葷斷肉守孤房。矢死難移一寸腸。畢竟歸來還會合。也知誠意

〔蒼皇〕急遽措を失する貌也。
〔愴神〕心を傷ましむる也。
〔適〕玉篇に、女子出嫁也、とあり。
〔堅矢〕堅く直きを云ふ。
〔廬墓〕死者に仕ふる爲め墓邊に廬を結び謹み居るを云ふ。
〔塋〕墓に同じ。
〔擄去〕掠め去るをいふ。
〔不茹葷〕茹は食ふ義、葷は韮等の臭菜也、齋戒して是等の臭菜を食せざるを云ふ、莊子養生主篇に、顏回曰、回之家貧、唯不飲酒、不茹葷者、數月矣、若爲齋乎、云々、と見えたり。

格蒼蒼。崔氏忠州人與副使韓約定婚。約從征日本戰歿、崔終身守節、事聞旌閭、詩。約定從征歿未歸、更無門勢可因依、崔家處子心如鐵。守節終身誓不違。崔氏青年秉志誠。防身以禮守堅貞。平生未會韓郎面、竹帛同垂萬古名。

今按。阿毎鄕、北史云、倭王姓阿毎。朝鮮人本于此。指日本曰阿毎鄕。然謂阿毎者非也。詳見北史

今按下。

大平通載卷之七十五

草

近歲有一名相。奉使日本、到西方寺。叅謁一老宿。少憩聽事。老宿令沙彌捧一海螺來示。螺背有物。如龍蛇蟠蜒之狀。纏結數重。間有鬖𩯭。細如針、熟視之、乃菖蒲（セキシヤウ）也。如龍蛇者根也、而如針者葉也。相甚異之、欲試其意。因戲語云。願賜奇寶以侈吾行。老宿曰。積至數百年乃成。儻出塵世必枯朽、此神物也、遂令還置舊處。何其奇怪一至於此、固異於世之菖蒲也。（出養花小錄）

今按。西方寺在山城國松尾南。行基法師所建也。眞如親王亦居之。其後寺廢甚。曆應二年檀越藤親秀請夢窻居焉。遂爲禪院。改西方爲西芳。詳見窻年譜。

異稱日本傳　卷下三　終

〔竹帛同垂云々〕夫妻共名を後世に遺さむと也、竹は竹簡、帛は布にて古代これに文字を記せり、依て書物を竹帛と云ふ。

〔北史〕北朝の魏より隨に至る二百四十二年間の歷史にして、唐の李延壽の選也。

〔行基法師〕姓は高志氏、和泉の人也、十五歲出家し、天平十七年大僧正となり、二十一年大菩薩號を賜はる。

〔眞如親王〕平城天皇の第二皇子高岳親王の御法名也。

〔藤親秀〕延久中中原師員堂舍を修め源空を請ず、親秀は師員四世の裔也

〔夢窻〕天龍寺の開山疏石の號也。

異稱日本傳　卷下四

經國大典卷之三禮典

寧城府院君臣崔恒　右議政臣金國光　西平君臣韓繼禧　右贊成臣盧思愼　刑曹判書臣姜希孟　左參贊臣任元濬　右參贊臣洪應　同知中樞府事臣成任　達成君臣徐居正撰

寫字

倭學伊路波消息。書格老乞大。童子教雜語本草。議論通信。鳩養物語。庭訓往來。應永記。雜筆富士。

今按伊路波消息以下。多皆國俗兎園之冊。老乞大胡語訛混。惜哉不ㇾ令ㇾ高麗人ㇾ知ㇾ國史諸書ㇾ矣。

譯語

漢學。蒙學。倭學。女眞學。並飜經國大典。臨ㇾ文

譯科覆試　額數　漢學十三人。蒙學倭學女眞學各二人。本曹同本院提調錄各試取

待ㇾ使客ㇾ

日本國王琉球等國同　使則遣ㇾ宣慰使ㇾ三品朝官率ㇾ通事ㇾ迎送。日本國諸大臣使則遣ㇾ通事ㇾ迎來。朝官護送。其餘臣曾使及對馬島主特送。則卿通事率ㇾ來朝官ㇾ護送。其餘倭人。及野人往來。並差ㇾ通事ㇾ率行。並於ㇾ下ㇾ船處及沿途。設ㇾ慰宴。

〔童子教〕實語教と同じく、字句を局して當年兒童の教訓とせる書にて、僧安然の著也。

〔庭訓往來〕書牘十二月往來にて、僧玄惠の著也。

〔應永記〕應永六年大內義弘、將軍義滿を恨みて和泉に叛きし次第及びその征伐の顚末を記せる書也。

〔兎園之册〕俗語にて綴れる卑近の書を云ふ、通俗編に類書言、梁孝王園名ㇾ兎園ㇾ、王卒、帝以ㇾ園令ㇾ民耕種籍ㇾ其租ㇾ以供ㇾ祭祀ㇾ、其簿籍皆俚語、故鄕俗所ㇾ誦云ㇾ兎園册子ㇾ云々、と見えたり。

〔迎餞〕送迎に同じ。餞は唯人を送るにも云ふ。

〔女眞國〕滿州族にして黑龍江地方に居り遼に屬せしが阿骨打の時獨立して金國を建つ、其後百二十年にして蒙古に滅さる。

〔日本府〕神功皇后御征韓の時始めて任那に內官家を置きしが、皇后攝政六十七年同地に日本府を置き三韓を治めしむ、欽明天皇の御宇滅ぶ。

國王使則浦所慶尙道各三次、忠淸道京畿各一次。大臣使則浦所慶尙道各二次、忠淸道京畿各一次。巨酋使及特送、則浦所慶尙忠淸道各一次。還時同浦所。餞宴則並一次。到京日、禮賓寺迎慰。還則設餞。特送人則無迎慰。闕拜日、賜宴于闕內。拜辭日亦賜宴。又賜宴于本曹。將還、亦賜餞。其餘倭野人只於境上迎餞。闕拜日、賜宴于闕內。其餘倭野人同。又賜宴于本曹。餘倭野人無餞。○野倭人往來勿令宿閭閻。如有使接諸邑諸驛。或用人煩擾者、押領員人杖八十。

倭人到浦邊將考書契圖書、路引依歲朝數上送。書契違格者、還入送。因商賈往來者、觀察使有備考據啓。所賣物、觀察使定差使員。稱量分道上送。騎載馬滿十五匹以上者。東。或水淺時、外並由水路。氷魚重者量數留浦。移文本曹。野人則兩度使移文。本曹啓移。戶曹買賣、留浦物令近邑用。奴婢貢布、依京直一貫。○進上則本曹戶曹堂下官看品、進市價給荅。賜野人進上同。

今按野倭人野人倭人也。野人指女眞國。過我使客、皆後世之制也。上古我置日本府于三韓。三韓聽命。今也絕矣。

大典續錄卷之三禮典

廣川君臣　李克增右贊成臣　魚世謙吏曹參議臣　李諿禮曹參議臣　安瑚兵曹參知臣　金首孫刑曹參議臣　金謹工曹參議臣　金礎暨戶曹參判臣　權健撰

待使客　別例接待、倭人外年例對馬島主。及諸酋使送。歲約紅數內出來人、令各官守令同僉節制使。考其賣來書契。及浦在見樣圖書、在前接待、文案一以報。觀察使隨卽發馬上送。若一人使送紅隻。分泊三浦。則不無疊待之弊。每倭人出來時。三浦隨卽互通問。知其虛實。然後方許馬文上送。○對馬島主歲遣五十紅。或因事別遣船則稱特送。無定數。諸州酋長或有歲遣一二紅者。或有歲遣一紅者。○國王使臣有副紅。或至三紅。巨酋使只有副紅。其餘並一紅。○倭客人來往陸路。自薺浦由金山

淸州。到京則十八日程、由大丘尙州槐山廣州。到京則十九日程。自釜山浦由大丘尙州槐山廣州。到京則十九日程。由永川竹嶺忠州楊根。到京則二十日程。自鹽浦由永川竹嶺忠州楊根。到京則二十日程。水路自釜山浦由梁山昌寧善山忠州廣州。到京則二十六日程。自薺浦由昌原昌寧善山忠州廣州。到京則二十四日程。自鹽浦由慶州丹陽忠州廣州。到京則二十日程。國王使臣外依上項程途日限。給留浦糧。其過限日數則勿給。若因身病或水漲。不得已留連則告所在邑。受間文者方許取實。○國王使臣則上京者毋過二十五人。巨酋使送十五人。對馬島主特送三人。別例則加降。九州都元帥使送三人。負物滿五駄加一人。每加五駄加一人。毋過五人。諸酋使送一人。負物每五駄加一人。毋過三人。受職倭人堂上官。則上京者三人。上護軍以下二人。對馬島主每一舡上京者一人。負物每五駄加一人。毋過二人。○倭客人過海糧分爲三等。對馬島給五日糧。島主特送人則加五日。一岐島十五日糧。日本國王琉球國王使臣及諸大臣九州使人並二十日糧。○受職倭人護軍以上。則過海時。給十日糧。○倭客人過海糧支給。關文付客人帶去鄕。通事以途所在邑。憑考支給。具數粘元關報。觀察使移文戶曹。○畠山。京極。武衞。山名。細川。大內等殿大臣使人到浦。所在邑轉報。觀察使給馬帖。到後十五日還浦。後二十日以爲定限。其限外故留者勿給糧。對馬島主特送同。○諸倭使舡到浦。除計點人口。只量舡之大中小給糧。○依例接待深遠處。倭客人到浦。節制使萬戶同差使員。尺量舡隻。時幷點檢舡隻破毀與否。陸物諸緣有無。報水軍節度使。水軍節度使檢覈其所無諸緣量宜題給。舡隻破毀處。令留浦舡主等上京客人。未還浦前。預先修補。每三朔具給物之

〔畠山〕足利義兼の長子義純に出づ、畠山重忠の歿後時政其邑を義純に與ふ、義純これより畠山と稱す。

〔京極〕佐々木信綱の子氏信より出づ氏信の第京都京極にありし故也。

〔武衞〕斯波氏を云ふ、九〇〇頁本文を參照すべし。

〔山名〕新田義重の長男義範上野國新田郡山名を領し山名三郎と稱す、子孫依て山名を氏となす。

〔細川〕源義康の曾孫義季に出づ。

數以啓。○素非通信倭人。及書契違格還。入送倭人過海。粮題給。闕文無回。馬人則給馬下送。○對馬島主特送人。及諸大臣使送人到浦。只饋正官。餘皆散料。○倭客人護送京。通事於終到邑受下去。日時明文納本曹。過限者則倒前仕鄉通事同還齊浦。則熊川。釜山浦則東萊。鹽浦則蔚山。考發京日時。過限者依律論罪。後移文本曹。○倭人押行鄉通事等求媚倭人。所經各官各驛多般作弊。以至陵蔑倭人以遂所欲者。推考論罪。後他道充軍。○倭館使令。及房守奴子定送。時容貌年歲置簿撿擧。使令毋得再行。房守一年內毋得再定。如有違者。報本曹啓聞論罪。館官員知而不撿擧者並論。客人還歸時。義禁府郎廳嚴加考察。房守奴子毋得門外出餞。如有犯者。房守奴子。及帶行通事義禁府郎廳推考重論。

又卷之四兵典

〔獎勸〕每式年。生徒漢學十五人。蒙學五人。倭女眞學各六人。歲貢。

〔符信〕倭野人闕內供饋時。部將領軍士禁雜人。掌設奴子等出入者給三稜信符。

〔給保〕漢蒙倭女眞學同居二人。毋定他役。無率丁則給戶別一人。

又卷之五刑典

〔禁制〕倭人賣來大狼皮及雜物。浦所潛相貿易人。及知情通事。依大典潛賣禁物者。例杖一百。徒三年。不能撿擧。所在僉使。及守令以制書有違律論。

重刊神應經序

〔啓聞〕上申することを云ふ。

〔杖〕五刑の一にして、笞と同じく罪人を打つ刑なるも刑具の形狀及び回數を異にす、例へば後世刑法の範たる隋法によれば、笞は一十乃至五十の五等にして、杖は六十乃至百の五等也。

〔徒〕五刑の一、年を定めて使役する刑名也、唐書刑法志に用刑有五、其三曰徒、徒者奴也、蓋奴辱之、量其罪之輕重、有年數而捨、と見えたり。

〔釋〕釋迦の略稱にてもと佛世尊の姓なるが、佛門に入れば釋迦氏の種を紹ぐ意にて、一般僧侶これを法名の上に冠する也。

〔良心〕左近將監秦久秋の子也。

〔巫覡〕男女の神子也、周禮春官に、凡以神仕者とありて、賈疏に、男子陽、有兩稱、名巫、名覡、女子陰不變、直名巫、無覡稱と見えたり。

〔淫祀〕邪神を祀るを云ふ。

〔遐方之獻〕遠邦よりの朝貢也。

〔孟冬〕孟は始也、初冬卽ち舊十月を云ふ。

恭惟我主上殿下之六年也。命禮曹申嚴醫教設鍼灸專門法。擇其精於術者爲師。而資性明敏者爲弟子。勸勵之法甚悉焉。適有日本釋良心。以神應經來獻。兼傳其本國神醫和介(ワケ)氏丹波氏治癰疽八穴法。其八穴雖未試用。神應經其傳授遠有所自。而所論折量補瀉法。皆古賢所未發者。其取穴又多有起發古人所未盡處。其所著穴皆撮其切要。而得効者文簡而事周。令人披閱晷刻間。證與穴瞭然在目。聖上嘉歎。命以八穴法付於神應經之末。鋟梓廣布。且以永其傳焉。臣竊惟。醫療之方。藥餌鍼灸不可偏廢。但藥非本國所産者頗多。大槩皆求之中國。而又非盡出於中國也。轉轉市易得之甚難。豈眞贋陳新之可擇。而貧窮下賤與遠方之人。亦未易遍及也。唯砭焫之方。無費財遠求之勞。採艾合和之難。一鍼一艾傳應無方。運於指掌。辨於談笑。貧富貴賤。遠近緩急。無適不宜。況於取効常在藥力所不及之處。而其功用神妙難以備述。庸醫不知以爲卑賤。至相詬病而不肯爲。故世之病者。生死壽夭。率皆付之巫覡淫祀。豈不哀哉。聖上愍其然。及設專門益嚴勸督。適有遐方之獻。不以珍奇可玩之異物。而以此救民濟世之神方。不期而至。以孚我聖上仁民愛物之盛德。夫豈偶然哉。成化十年十一月二十一日。推忠定難翊戴純誠明亮經濟佐理功臣崇祿大夫西平君臣韓繼禧謹序。

八穴灸法

成化九年癸巳孟冬。日本國畠山殿所使副官人信州隱士良心言。我國二百年前有兩名醫。一爲和介氏。一爲丹波氏。此二醫專治癰疽疔癤瘰癧等瘡。定八處灸法。甚有神効。

頭部二穴　諸瘡發于頭部則耳尖上周廻用禾稈量之。（自左耳尖上起端。右旋經右耳尖上。還至起端處斷之。）以其稈當結喉下。至項後雙垂之。以患人手橫握其端。而切去之。（以其稈中央當結喉下。兩端左右會于項後雙垂之。以患人手橫握其兩端之末而斷之。如針經夬之法。）其稈端當處。脊中骨上點之。瘡出左者去中骨半寸灸左。出右者灸右。出左右者並灸左右。

手部二穴　瘡發于手部則自肩上高骨端。（即肩髃穴）至第三指頭爪甲端斷之。以其稈當結喉下。至項後雙垂之。如頭部法。

背腹部二穴　（自大椎下至鳩尾骨端。爲背部。自天突穴下至陰毛際。爲腹部。兩腋亦屬腹背部。）瘡發于背或腹則乳上周廻。（自左乳頭上起端。右旋周身經右乳頭上。還至起端處。）以其稈當結喉下。至項後雙垂。如頭部法。

足部二穴　瘡發于足部則並立兩足。令相著。自左大拇指端。至右大拇指端周廻。（自左足大拇指頭起端。從足際右旋。經左右足踵。右足指端。還至起端處。）以其稈當結喉下。項後雙垂。如頭部法。

灸八穴。痛則灸到不痛。不痛則灸到痛。或五百壯。或七八百壯。大炷多灸尤妙。癰疽始發。而灸則不潰而自愈。已潰而灸則生肌止痛。亦無再發。

今按。成化明憲宗純皇帝年號。成化五年當日本後土御門院文明五年。此時能登國刺史畠山義統。爲足利老也。良心。信濃國人。釋氏而醫也。爲畠山奉使也。新續古今和歌集載良心法師河上落葉和歌。蓋此人。和介氏和氣氏也。介與氣音近。和氣氏。出自垂仁天皇皇子鐸石別命。至村上天皇時。其後和氣時雨有醫譽。故任典藥頭。自此子孫多良醫。丹波氏出自後漢靈帝。子孫來住丹波國。故及圓融院永觀中。賜其後康賴丹波氏。丹波康賴以醫鳴。子孫纘其業。凡兩家之傳。誠有所由矣。昔

〔刺史〕國司の唐名なり。

〔畠山義統〕政國の子也、文明五年管領となり、同十一年相伴衆に列す。

〔新續古今和歌集〕後花園天皇享享五年飛鳥井雅世勅を奉じて撰みし歌集にして、同十一年奏覽す。

〔河上落葉和歌〕湊川紅葉吹きこす木枯の山もと下るあけのそぼ舟是れ也

〔和氣時雨〕眞綱の孫也、宮忠來に從て學び醫譽あり、承平三年左兵衞の醫師となり、侍醫鍼博士醫博士に累遷し天曆十年典藥頭に擢でらる。

〔靈帝云々〕靈帝五世の孫阿智王來朝歸化す、康賴は其七世の裔也。

神代大已貴命。少彦名命二神。定療病之方。後世蒙其恩。兩家祖述之。幷參考中華醫書。故其術尤精也。蓋如三藏之方。八處灸法。皆神代遺法乎。二百年前當龜山院時。此時兩家猶有名醫。當花園後醍醐之間。和家末孫。性全在洛。在鎌倉。博極醫籍。集覆載萬安方六十二卷。以救人疾苦。二百年前。兩氏之有名醫。可以此知之。

海東諸國記

輸忠協策靖難同德佐翼保社炳幾定難翊戴純誠明亮經濟弘化佐理功臣大匡輔國崇祿大夫議政府領議政兼領經筵藝文　館春秋館弘文館觀象監事禮曹判書高靈府院君臣申叔舟撰

成化七年辛卯季冬。申叔舟序云。竊觀國於東海之中者非一。而日本最久且大。其地始於黑龍江之北。至于我濟州之南。與琉球相接。其勢甚長。厥初處處保聚。各自爲國。周平王四十八年。其始祖狹野起兵誅討。始置州郡。大臣各占分治。猶中國之封建。不甚統屬。習性强悍精於劍槊。慣於舟楫。與我隔海相望。撫之得其道則朝聘以禮。失其道則輒肆剽竊。

今按。狹野狹野尊。神武天皇也。日本書紀曰。所稱狹野者。是年少時之號也。後撥平天下。奄有八洲。故復加號。曰神日本磐余彥尊。

凡例云。道路用日本里數。其一里準我國十里。

計田用日本町段。其法以中人平步兩足相距爲一步。六十五步爲一段。十段爲一町。一段準我五十負。

〔大已貴命〕大國主神を申す、素盞嗚尊の御子也、或は六世の孫とも傳ふ

〔少彦名命〕神皇產靈神の子神にて、大國主命と共に葦原中國を經營し給へり。

〔平王〕周第十三世の王也。

〔洲〕我國を云ふ　古事記に、伊邪那岐命、伊邪那美命御合、生子淡道之穗之狹別島、次生伊豫之二名島、次生隱岐之三子島、次生筑紫島、次生伊岐島、次生津島、次生佐度島、次生大倭豐秋津島、故因此八島先所生、謂大八島國、とあり。

〔三管領〕管領は將軍を補佐する室町時代の重職にして鎌倉幕府の執權に當る、もと斯波、細川氏等これに補せられしが、應永五年畠山基國この職に任ぜられしより、三氏交迭して管領たり、依て三管領と稱す。

〔四職〕室町時代侍所の所司を務むる山名、京極、一色、赤松の四家を云ふ

〔天神七代〕國常立尊より諾册二尊までの七代十一神を申す。

〔地神五代〕天照太神、天忍穗耳尊、瓊々杵尊、彥火々出見尊、鸕鷀草葺不合尊を申す。

日本國

男子斷レ髪而束レ之。人佩ニ短劍一。婦人拔ニ其眉一而黛ニ其額一。背垂ニ其髪一。而續レ之以レ髢。其長曳レ地。男女治容者。皆黑ニ染其齒一。凡相遇蹲坐以爲レ禮。若道遇ニ尊長一。則脱ニ鞋笠一而過。人家以ニ木板一蓋レ屋。唯天皇國王所レ居。及寺院用レ瓦。人喜レ啜レ茶。路傍置ニ茶店一。賣レ茶。行人投ニ錢一文一。飲ニ一椀一。人居處處千百爲レ聚。開レ市置レ店富人取ニ女子之無レ歸者一。給ニ衣食一容ニ飾之一。號爲ニ傾城一。引ニ過客一留宿饋ニ酒食一而收ニ其錢一。故行者不レ齎レ粮。

今按。前後日本圖。差訛失レ眞。富士山高四十里。四時有レ雪。其言殆近。秀吉征ニ朝鮮一時。清正於ニ兀良哈一。捕ニ獲一人一。名世琉兜宇須。元日本松前人也。嘗乘ニ漁舟一。所ニ風漂一。在ニ濟州一二十年。清正悅爲ニ鄕導一。改ニ名後藤次郎一。次郎云。此地天霽。可レ見ニ富士山一。甚近。下文天皇宮內裏國王殿。指ニ室町殿一。與ニ足利氏所レ居一。武衞細川畠山。所謂三管領。山名京極四職之列。皆足利之臣也。其外郡鄕島之名。多ニ傳聞之訛一。

日本國紀

天皇代序

天神七代

地神五代

人皇始祖。神武天皇。名狹野。地神末主彥瀲尊第四子。母玉依姬。神女。俗稱ニ海一。以ニ庚午歲一生。周幽王十一年也。四十九年戊午入ニ大倭州一。盡除ニ中洲賊衆一。五十二年辛酉正月庚申。始號ニ天皇一。百十年己未定ニ國都一。在位七十

鳥道
東嶋
見付嶋
佐渡川
扶桑
能登
伯耆
因幡
美作
但馬
山陰道
丹後
若狭
越前
北陸道
加賀
越中
越後
津軽大里
東海鎮守府
陸奥
白川関
東山道
下野
上野
信濃
富士山
出羽
常陸州
流洲
女島
日本國都
近江
湖
美濃
飛彈
鎌倉
甲斐
武蔵
相摸
東海道
伊豆
駿河
遠江
三河
尾張
伊勢
伊賀
大和
和泉
紀伊
河内
兵庫
上総
下総
安房
志摩
大嶋
黒齒
尾渠

日本國本圖
夷島
津輕大里
扶桑
東山道
出羽
秋田城
夷地
鎮守府
陸奥
瀛洲
鎌倉
白河關
常陸
女國
羅剎國
去奥二十里
三佛齊

鴈道
能登
佐渡洲
越中
越後
加賀
下野
上野
高四十里
富士山
四時有雪
信濃州
飛驒州
美濃
甲斐
遠江
三河
尾張
伊勢
駿河
伊豆
相模
東海道
武藏
上總
下總
志摩州
大嶋
安房
勃楚
黑齒
勃海

日本國本圖
隱岐州
見付島
因幡州
丹後
若狹
北陸道
但馬州
丹波州
越前
國王殿
天皇宮
山城州
播摩州
近江州
攝津
都
畠山殿
細川殿
武衛殿
山名殿
京極殿
畿内
兵庫浦
長二十里
廣十八里
湖
河内
和泉
大和州
伊賀
南海道
紀伊
大漢
尾渠

箕島
指筑前博多
長門州
石見州
三尾関浦
出雲
湖
伯耆州
山陰道
周防州
大内殿
山口
安藝州
備後州
備中
山陽道
美作
備前
指肥前
竈戸関
自赤間関至此三十五里
尾路関
讃岐
伊豫
土佐
阿波
自竈戸間至此三十五里
淡路州
指琉球大島

日本國西海道九州國
於露島
指出雲州
小崎於嶋
經島
於島
藍島
指赤間關
自赤間關
文字關
豊良河
豊前
博多
筑前
小二殿
上松浦
下松浦
千葉殿
肥前國
九州
筑後
豊後
大友殿
菊池殿
肥後
天草津
西海道
大隅
日向
山内津
薩摩
硫黄島
高島
房津
赤嶋
種嶋
中島
指大隅
自兵庫浦

指岐毛都伊浦

小豆大島

五島洲

飢島

宇侍島

黒島

小蛇島

小川地島

多伊羅

烏起島

諏訪島

淡賀羅

指大島

子島

一岐圖
波古沙只里
信昭千里
忠佐代宮源武
唯多只郷
侯加伊里
阿里多里
伊除而時重
也麻老夫里
古仇音夫郷
愁未要時里
一岐島
小于郷
指筑前博多

指對馬島訓羅串

時昌維郷

無山都郷

毛都伊浦
自風木至
此五里

毛而羅

訓乃古時泊

呼子鳴村分泊

卧多羅浦

指肥前上松浦

日本國對馬嶋圖
雙舌郡
豊崎郡
對馬島
尼老郡
宗居
島職
此成
島主宗
貞國居
指風本浦

指乃而浦
伊乃郡
封老郡
要羅郡
吾甫羅仇
時浦
雙介浦
古茂應只浦
完多老浦
沙吾浦
美女郡
豆々郡

六年。壽百二十七。

今按。庚午歲爲幽王十一年非也。實桓王九年也。四十九年。五十二年。皆聖算也。始號天皇。本紀曰。

辛酉年春正月庚辰朔。天皇卽帝位於橿原宮。是歲爲天皇元年。

綏靖天皇。神武第三子。自神武崩四年。兄弟共治國事。辛巳正月卽位。在位三十三年。壽八十四。

安寧天皇。綏靖太子。元年甲寅。在位三十八年。壽八十。

懿德天皇。安寧第三子。元年壬辰。在位三十四年。壽八十四。

孝昭天皇。懿德太子。元年丙寅在位八十三年。壽百十八。

孝安天皇。孝昭第二子。元年己丑在位百二年。壽百三十七。

孝靈天皇。孝安太子。元年辛未。七十二年壬子秦始皇遣徐福入海求仙。福遂至紀伊州居焉。在位七十六年。壽百十五。

孝元天皇。孝靈太子。元年丁亥。在位五十七年。壽百十七。

開化天皇。孝元第二子。元年甲申。在位六十年。壽百十五。

崇神天皇。開化第二子。元年甲申始鑄璽劍。開近江州大湖。六年己丑。始祭天照大神。天照大神地神始主。俗稱日神。至今四方共祭之。七年庚寅始定天社國社神戶。十四年丁酉伊豆國獻船。十七年庚子始令諸國造船。在位六十八年。壽百二十。是時熊野權現神始現。徐福死而爲神。國人至今祭之。

今按。始鑄璽劍。始字非也。神代有神璽之鏡劍。歷代天子受天照大神神勅。與神鏡同床共殿。至

〔桓王〕周第十四世の王也、平王の孫にして、名を林と云ふ。

〔橿原宮〕日本紀神武紀に、畝傍山東南橿原地とあり、今大和國高市郡白橿村の地に當ると云ふ。

〔兄弟共云々〕神武天皇崩御の後、綏靖天皇の御兄手研耳命政を預り聞き給へるをさす。

〔神戶〕神領に附屬し、租調庸を其の社司に納むる民戶を云ふ。

〔十四年丁酉云々〕皇代紀、年代略記歷代皇紀等に見ゆ

于崇神天皇。漸畏神威。更鑄鏡造劍。以爲璽。奉安遣神代靈器於別所。非始鑄之。詳見日本紀。古語拾遺等書。開近江州大湖非也。近江國舊名淡海國。衆山東西峙。中湛大水。殆如海。味淡。故名淡海國。以有遠淡海國。號近淡海國。後曰近江。非人力之所開。或曰。一夜地坼生大湖。其土飛爲富士山。甚妄也。赤人望富士山歌曰、天地之分時從神左備手高尊寸駿河有布士能高嶺乎天原振放見者度日之陰毛隱比照月乃光毛不見白雲母伊去波伐加利時自久曾雪者振家留語告言繼將往不盡能高嶺者。觀此則自神代有此山可知之矣。熊野權現始現。徐福死而爲神。國人至今祭之。非也。宜參考上卷引後漢書。今按。熊野權現者。據長寬勘文。雖多諸說。爲伊弉冊尊正說也。乃合日本紀義。日本書紀曰。伊弉冊尊神退去矣。故葬於紀伊國熊野之有馬村焉。土俗祭此神之魂者。花時亦以花祭。又用鼓吹幡旗。歌舞而祭矣。今訪之有馬村人。考那智三卷書。有馬村有產田宮。乃伊弉冊尊神退之地。其東有隱窟。亦曰產立窟。亦曰花窟。所葬伊弉冊尊是也。暮春以繩作花及幡旗形。圍繞於窟。歌舞祭之。蓋神代遺俗也。本宮者。崇神天皇建之。伊弉冊尊也。

垂仁天皇。崇神第三子。元年壬辰。十三年甲辰。天照大神降。二十三年甲寅。初置伊勢國齋宮。二十五年丙辰。始立天照大神宮于伊勢國。在位九十九年。壽百四十。

今按。齋宮者。皇女所居。乃居此齋戒。以奉天照大神。故曰齋宮。據延曆儀式帳。自美和御諸原造齋宮。始有之。及大神鎭坐于伊勢國。於大宮際造之。古語拾遺曰。洎于卷向玉城朝。（垂仁天皇也）令皇女倭姬命奉齋天照大神。仍隨神教。立其祠於伊勢國五十鈴川上。因興齋宮。令倭姬命居焉。

〔古語拾遺〕齋部廣成が、國史家牒に漏れし古傳を錄して齋部氏祖先の功績を表はせし書也

〔赤人〕神龜天平頃の人、姓を山部といふ。和歌を以て名あり。

〔長寬勘文〕長寬年中伊勢熊野の兩社が其の祭神社格に就て諍論したる時の勘文也。

〔產田宮云々〕以下那智三卷書の所載による、窟は有馬村の東北に當る。

〔本宮〕熊野座神社と號す、崇神天皇十六年の創建也。

〔卷向玉城〕大和國磯城郡穴師村の東北に在りし宮也、垂仁天皇二年十月爰に都し給ふ。

〔倭姬命〕垂仁天皇の第二皇女也。

〔定州郡〕成務天皇四年二月國郡を定むべき詔あり、翌年國郡に造長を立て、縣邑に稻置を置く。

〔置大臣〕此時武內宿禰大臣となる

〔五年乙酉云々〕此時新羅の使者汙禮斯伐等來朝、曩に我國に質たりし微叱許智伐旱の返還を乞へる也。

〔職原抄〕我國歷代の官位の沿革補任の次第を記せる書北畠親房の著也。

〔始制衣服〕今年二月百濟王縫衣工女を貢ぜるより誤傳せるならむ。

〔書籍〕即ち論語十卷、千字文一卷也

〔漢人始來〕此年九月倭漢直の祖阿知使主其黨十七縣を率ゐ來れるを云ふ

景行天皇。垂仁第三子。元年辛未。十三年癸未。賜諸國人姓氏。十八年戊子。始定諸國名。在位六十年。
壽百六。

成務天皇。景行第四子。元年辛未。初定州郡。三年癸酉。置大臣。五年乙亥。諸州始貢稻。七年丁丑。定
諸州經界。在位六十一年。壽百七。

仲哀天皇。景行孫。日本武尊第二子。身長十尺。元年壬申。九年庚辰。初作神樂。百濟國始遣使來。在位
九年。壽五十二。

神功天皇。開化五世孫。息長宿禰女。仲哀納爲后。仲哀沒。遂主國事。元年辛巳。五年乙酉。新羅國始遣
使來。三十九年己未。始遣使于漢。在位六十九年。壽百。

今按。神功皇后有聖德。謙讓不即天皇位。謂神功天皇者非也。職原抄曰。仲哀崩。皇后攝政。平三
韓而歸筑紫。誕生皇子。在襁褓。皇后猶攝政。遂臨天下六十餘年。雖同正帝不稱攝政。

應神天皇。仲哀第四子。母神功。元年戊寅。七年丙申。高麗始遣使來。十四年癸卯。始制衣服。十五年甲
辰。百濟送書籍。十六年乙巳。百濟王太子來。二十年己酉漢人始來。在位四十一年。壽百十。

仁德天皇。應神第四子。應神歿。二年無主。癸酉正月即位。五十五年丁卯。大臣武內死。年三百四十。歷
任六朝。六十一年癸酉。始造冰室。在位八十七年。壽百十。

履中天皇。仁德太子。云云

當今天皇。崇光曾孫。名彥仁。云云

今按。當今後花園天皇也。自二履中一至二後花園一。其間云云事、大抵據二日本俗間年代記一。不レ遑二枚擧一。又我朝年號大化爲レ始。大寶以來不レ絕。然年代記自二繼體天皇一每每紀二年號一。其語多鄙淺、而無レ有二大化號一。崇德天皇作二宗德天皇一。花園天皇作二華山天皇一。或作二花國一。皆非也。其他謬不レ可二勝紀一。

國王代序

國王。姓源氏第五十六代清和天皇。十八年丙申。賜二第六皇子貞純親王姓源一。源氏始レ此。即唐僖宗乾符三年也。後白河天皇保元三年戊寅。征夷大將軍源賴朝主二鎌倉一。二條天皇永曆元年庚辰。賴朝以二兵衛佐一竄二于伊豆州一。是時平清盛秉レ政。父子兄弟盤二據要路一。政治征伐出二於其手一。驕奢淫虐道路側レ目。賴朝自二伊豆一起レ兵而西。先據二關東一。累戰而勝。乘レ勝席卷。安德天皇壽永元年壬寅。遂入二京城一。平氏兵敗。挾二安德一奔二于西海一。乃立二後鳥羽天皇一。仍鎭二鎌倉一。世相承襲。傳十二代。至二仁山一。後醍醐天皇辛未。又攻二平氏一。盡逐二其黨一。總二攬國政一。自號二等持殿一。仁山死。子瑞山嗣。號二寶篋院殿一。瑞山死。子義滿嗣後出家法名道義。號二鹿苑院殿一。義滿死。子義持嗣。後出家法名道詮。號二勝定院殿一。義持死。子義教嗣。號二普廣院殿一。義教以二大臣占一レ地太廣難レ制。欲二稍稍分一レ封之。大臣有二赤松殿者一。其從弟嬖二于義教一。義教欲下分二赤松之地一以封中從弟上。遂以語二赤松家臣一。家臣洩二於赤松一。今天皇嘉吉元年辛酉。即正統六年。赤松伏レ兵。請二義教一宴二于其家一。義教盛レ兵而往。請入二內聽一。酒酣放二廐馬一。因闔レ門伏發。遂弑二義教一。大內持世被レ搶。踰二垣一而出。遂與二管領細川等一立二義教子義勝一。三年癸亥病死。又立二其弟義成一。義成死。又立二其弟義政一。即今所謂國王也。於二其國中一不三敢稱二王。只稱二御所一。所レ令文書稱二明教書一。每歲元率二一大臣一謁二天皇一。常時不二與相接一。國政及聘二問隣國一。天皇皆不レ與焉。

（貞純親王）又た桃園親王と申す、四位に叙し常陸大守たり、延喜十六年薨ぜらる。

（辛未云々）これ元弘亂の初めにして平氏（北條氏）の亡びしは癸酉（元弘三年）のこと也。

（赤松殿）赤松義則の長子滿祐を指す

（其從弟云々）足利義教赤松滿祐とよからず、備播作の三州を割きて、滿祐の叔父貞範の嫡孫貞村に與へんとす、偶々教康と云へるもの此事を聞き、これを滿祐に告げ、滿祐之を謀りて弑せし也。

（大內持世）義弘の長子也、嘉吉二年卒す。

（細川）細川持之を指す。

今按。國王指將軍家也。壽永元年。遂入京城。平氏兵敗。非也。壽永二年。頼朝從兄弟木曾義仲入洛。平氏奉帝出奔。文治元年。頼朝弟義經等與平氏戰于一谷。平氏兵敗。奔于西海。終滅。世相承襲。傳十二代。至仁山。非也。頼朝三世而滅。其後頼朝婦家。北條氏九世執天下兵權。然後後醍醐天皇舉兵。北條氏滅。仁山始屬官軍。後反自立。仁山其先出自足利義康。與頼朝雖同姓。其派亦別。明教書。御教書也。明御音訓相近。故訛。我朝天皇誥命。稱御教書。見御教書案。御教書案二卷。載先王命辭。後世將軍令。亦稱御教書。

道路里數

自我慶尙道東萊縣之富山浦。至對馬島之都伊沙只(ツイサト)。四十八里。自都伊沙只至船越浦。十九里。自船越至一岐島風本浦。四十八里。自風本至筑前州之博多。三十八里。自博多至長門州之赤間關。三十里。自風本直指赤間則四十六里 自赤間至竈戸關。三十五里。自竈戸至尾路關。三十五里。自尾路至兵庫關。七十里。並水路 自兵庫至王城。十八里。陸路 都計水路三百二十三里。遠路十八里。以我國里數計則水路三千二百三十里。陸路一百八十里。 八道六十六州 對馬島一岐島附

畿內五州

山城州　分爲國都。有山。如城。峻嶮自北而南。東西回抱。至南而未分別。有圓山。當其口。二川東西而下。至圓山合流。南入于海。都中閭巷道路皆方通四達。每一町有中路。三町爲一條。條有大路。井井不紊。凡九條二十萬六千餘戶。巷有市。國王而下。諸大臣皆有分地。如封建世襲。雖居外州。亦皆

〔木曾義仲〕源義賢の第二子也。
〔北條氏九世〕時政義時、泰時、時氏、經時、時頼、時宗、貞時、高時是れ也。
〔仁山〕足利尊氏の法名也。
〔足利義康〕姓は淸和源氏、源義國の次子也。其居地下野國足利郡足利に因み、始めて足利氏を稱す、鳥羽上皇に仕へて北面となり、左衞門大尉、陸奧守・撿非違使を歷任し、保元の亂の功により藏人に補せらる。
〔都伊沙只〕對馬の北端に在る豐浦なるべし。
〔船越浦〕對馬下の島(北島)の南端に在り。
〔風本浦〕勝本也。

〔雄德山〕山城國綴喜郡男山を云ふ。

〔里內〕里內裏の略稱也、大內裏以外にて京中に設け給へる皇居を云ふ。

〔山槐記〕仁平元年より建久二年に至る中山忠親の日錄にて、二十八册也。

〔江次第〕禁中の年中行事を記せる書大江匡房の著也。

〔柳營〕將軍の營所也、漢書にある周亞夫の故事による

〔室町殿〕京都北小路の北、室町の東に在り、足利義滿始めて柳營とす。

〔雍州〕支那長安城の屬する州名也。

〔山名源教豐〕教豐は持豐の誤也。

置家京中。謂之京師。所屬郡八。水田一萬一千一百二十二町。

今按。圓山指雄德山也。二川謂賀茂川桂川。

天皇宮在東北隅。周以土垣。有大門。軍士數百把守。國王而下諸大臣。以其麾下兵輪番遞守。凡過門者皆下馬。宮中支用別有二州。收其稅供進。

今按。天皇宮。在東北隅。後世里內。土御門亭是也。山槐記曰。土御門亭。土御門北。東洞院東。前大納言藤原邦綱家也。百練鈔曰。鳥羽天皇始造此亭。周以土垣。古制也。江次第曰。大內造築之法充諸國。到于今諸國諸侯。以土築宮垣。其遺法乎。

國王殿在天皇宮西北。亦有土垣。軍士十餘把守其門。大臣等率麾下兵。輪番入直。謂之御所。

今按。國王殿。足利氏柳營。所謂室町殿也。今之御所內。此其地也。

畠山殿。居天皇宮東南。世與左武衞細川。相遞爲管提。即管領佐國王秉政。今天皇康正元年乙亥。景泰六年遣使來朝。書稱管提畠山修理大夫源義忠。寬正六年乙酉。成化元年義忠死。子義勝嗣。文明二年庚寅成化六年遣使來朝。書稱管提畠山左京大夫源義勝。又有源義就。寬正元年庚辰。遣使來朝。書稱雍河紀越能五州摠大守畠山右金吾督源朝臣義就。義就乃義忠同母弟。德本之子。同宗。故皆稱畠山。

今按。雍。山城國。古來以山城比雍州之國。如山城守卜部兼方。自稱雍州刺史之類。

細川殿。居國王殿西。世與畠山左武衞。相遞爲管提。源持之死。子勝元嗣。時未遣使於我。勝元娶山名源教豐之女。而無子。教豐以其幼子屬爲養子。其後教豐受讒於國王。黜居外州。其子義安等二人

侍國王。教豐令二子請還於國王。二子以其父性惡。恐還而起釁。不為之請。乃令勝元請之。勝元為請於國王。遂得還。以是教豐甚德勝元。及勝元有子。以其所養教豐之子為僧。教豐怒。乃與勝元。為仇相戰。教豐之外孫大內殿。及女婿一色殿土岐殿等舉兵助之。勝元挾國王移天皇於其陣內。大小羣臣從細川者衆。焚京都一條以北。塹而守之。相持今六年。勝元年四十餘矣。

今按。應仁元年丁亥五月二十六日。山名細川起亂。自此天下大亂。明成化七年辛卯。申叔舟作海東諸國紀自應仁元年到此。該五年。謂今六年者非也。自是百有餘年亂罔極矣。

又有持賢。文明二年庚寅。遣使來朝。書稱細川右馬頭源朝臣持賢。持賢乃勝元父持之之弟。持賢無子。勝元於其家後作別室。號典廐。置持賢而師事之。年老。或云。已死。又有細川勝氏。勝元從兄弟。文明二年庚寅。遣使來朝。初上松浦郡久野能登守藤原朝臣賴永。遣壽蘭書記來朝。時我世祖方。議通信於日本國王。以風水險遠。欲因諸酋使為使問。時在館者。則壽蘭於其中稍解事。遂命授書與禮物以送于國王。又命禮曹書諭大內殿。賴永護送兼致賜物。文正元年丙戌五月。受命而去。庚寅乃來。壽蘭言。其年六月。還上松浦。修船備行裝。丁亥二月。自上松浦發向國都。都中兵起。海賊充斥。南海路梗。從北海而往。四月始到若狹州。(倭訓臥可沙)馳報國王。國王遣兵迎之。然盜賊縱橫。或從間道。或留滯。備經難苦。凡六十日而得達國都。致書與禮物于國王。館于東福寺。國王方在細川殿陣中。與山名殿相持未暇修答。至戊子二月。受答書。國王更議。不可無答使。又命勝氏備方物。遣使勝氏。自為書。遣心苑東堂等。與壽蘭偕來。壽蘭又言。大內處書與賜物。使人傳送。為海賊所掠。其

〔大內殿〕大內政弘なり。

〔一色殿〕一色義直なり。

〔成化〕明第九世憲宗の時の年號也。

〔文明〕後土御門天皇御宇の年號也、次の文正も同じ。

〔丁亥〕應仁元年也

〔國王〕八代將軍足利義政を指す。

〔東福寺〕京都本町に在る臨濟宗東福寺派の本山にして五山の一也、嘉禎二年藤原道家の創立に係る。

所言多浮浪。不可盡信。

左武衛殿。居國王殿南。世與畠山細川。相遞爲管提。掌他國使臣支待諸事。後光嚴天皇應安三年庚戌。（宣德三年）源義淳使遣來朝。書稱左武衛源淳。及義敏嗣。寬正元年庚辰遣使來朝。書稱左武衛源義敏。義廉嗣。四年癸未。遣使來朝。書稱左武衛將軍源義廉。

今按。武衛之號。志波尾張守高經之子義將。任右兵衛督。兵衛唐名武衛。故其子孫世號武衛。

山名殿居國王殿西。今天皇長祿三年己卯。（天順三年）始遣使來朝。書稱但幡伯作因備前後藝石九州總太守山名霜臺源朝臣教豐。教豐出家。法名宗全。方與細川相持。國王有異母弟。皆出家。號淨土院。國王無嗣。命還俗。將以爲嗣。號今出川殿。一年國王有子。語今出川曰。汝必傳之我子。今出川誓而許之。山名既與細川爲仇。細川挾國王令。山名亦推今出川爲敵。國王今年三十七歲。國王之子年七歲。今出川殿年三十二歲矣。教豐二子義安等侍國王。不敢歸。教豐其長義安尋死。義安之子在山名所。山名將以爲嗣。

今按。淨土院當作淨土寺。細川挾國王令。山名推今出川者非也。按應仁記。山名細川故有隙。而細川奉將軍弟今出川義視。山名奉將軍子義尙。天下武士各祖大戰。宜與前章參考。

文明元年己丑。義安遣使來朝。書稱丹波丹後但馬因幡伯耆備前備後八箇州總太守山名彈正少弼源朝臣義安續父山名左金吾源朝臣宗全之蹤。宗全書亦曰。我所領八箇州悉與義安。二年庚寅。宗全又遣使來朝。書稱因伯丹三州太守山名少弼源教豐。

〔源義淳〕斯波義重の子也、應永十六年管領となる。

〔義敏〕大野義健の子也、義淳の孫義健の卒後、將軍義政命じて其家を嗣がしむ。

〔義廉〕澁川義紀の子也、始め義敏斯波家を嗣ぐや家臣服せず、遂に足利義政に請ひて義敏を罷め義廉を立つ、これ應仁亂の一因也。

〔一年國王云々〕寬正六年義政の室富子義尙を生む、依て弟義視を卻けこれに嗣を讓らんとし、事を山名持豐に托す、これ應仁亂の主因也。

〔應仁記〕應仁の戰記にして一卷也、著者詳かならず。

京極殿。居畠山殿南。世掌刑政。長祿二年戊寅。源持清遣使來朝。書稱京兆尹江岐雲三州刺史。住京極佐佐木氏。兼大膳大夫源持清出家。法名生觀。　又有源高忠。文明二年庚寅。遣使來朝。書稱所司代京極多賀豐後守源高忠。其使人言。生觀同母兄也。三年辛卯。又有榮熈遣使來朝。書稱山陰路隱岐州守護代佐佐木尹左近將監源榮熈。其使人言。生觀同母弟也。初以高忠既稱生觀之兄。榮熈又稱其弟。其所言難信。不許。接待其使。強留不還。乃以對馬島特送例接待。其使言於禮曹曰。生觀兄弟只榮熈一人耳。高忠乃生觀族。親之爲麾下者也。榮熈時居隱岐州。

右武衞殿。自高麗之季海寇爲患。門下府移書稱關西省探題相公。令禁約海寇。及我朝開國。亦往來通書。然失其來書。未得其詳。稱光天皇應永十五年戊子。（永樂六年）議政府答書。始稱九州牧右武衞將軍源公。十六年己丑源道鎭（ヤス）遣使來朝。書稱九州府探題。或稱鎭西節度使。或稱九州伯。或稱九州都督。或稱九州都元帥右武衞。或稱九州都督府探題。或只稱右武衞。或稱九州摠管。前後所稱不一。而國人稱右武衞殿。二十七年庚子。道鎭以年老委政。其子義俊自稱前都元帥義俊。稱九州都督左近大夫將監。自此父子俱遣使不絕。其所進方物甚豐。故我之報賜亦厚。三十一年甲辰。道鎭書云。不意有訟事入京去。其後在其王城。只有道鎭。猶遣使求丐。至今天皇永享元年己酉。（宣德四年）以後。無使。文正元年丙戌京城澁河。源朝臣義堯（タカ）遣使來朝。其使言。義堯之父曾爲右武衞西海道九州總管。然不能言其詳。蓋是道鎭之後歟。

甲斐殿。左武衞之臣。專掌左武衞之事。文明元年己丑。源政盛遣使來朝。書稱甲斐遠尾越後四州守。其使以臣酋例接待。

〔掌刑政〕京極殿は、持清也、寶德元年侍所別當なるに依つてかくいへる也。

〔京兆尹〕京を司る職を云ふ、京兆は首府の謂也、尹は長官を云ふ、京極持清侍所の別當となるや、部下の士多賀高忠を擧みて京都所司代とし、京師をも管せるに依つて稱せるなるべし。

〔源道鎭〕筑前國續風土記に「管領斯波義將が一族、從五位下澁川右兵衞佐源滿頼、九州探題となる、剃髮して道鎭と號す」とあり。

〔源朝臣義堯〕澁川滿頼の子也。

伊勢守　政親、文明二年庚寅遣レ使來朝、書稱ニ國王懐守一、納ニ政所伊勢守政親一、其書略曰、細川與ニ山名一私起ニ干戈一、京城大亂。余爲ニ停止一而未レ止、兩人之罪不レ少、依ニ扶桑殿下命一、集ニ諸侯諸軍一、將レ收ニ太平一、欲レ蒙ニ大國餘力一、所レ望綿紬綿布苧布米、其所レ進方物亦豐、且政親爲ニ國王近侍之長一、出ニ納庶政一者、特給ニ綿布一、正布各千匹、米五百石、次助ニ軍需一、令レ轉ニ達國王一、又於ニ政親一別有ニ回賜一、其使以ニ巨酋使例一館待。

教通、庚寅年、稱ニ壽藺護送一遣レ使來朝、書稱ニ山城居住四國伊豫住人河野刑部大輔藤原朝臣教通一、壽藺往ニ來兵中一、故多稱ニ護送一而來者下同。

之種、庚寅年稱ニ壽藺護送一、遣レ使來朝。書稱ニ京城奉行頭飯尾肥前守藤原朝臣之種一、其使人言、近侍ニ國王一、其使以ニ特送例一館待。

信忠、庚寅年稱ニ壽藺護送一、遣レ使來朝、書稱ニ京城居住宗兒駿河守源朝臣信忠一。

勝忠、庚寅年、稱ニ壽藺護送一、遣レ使來朝、書稱ニ京城居住鷹野氏部少輔源朝臣勝忠一。

建昌、庚寅年、以レ館ニ接壽藺一、遣レ使來朝、書稱ニ慧日山内常喜祥（衍字）菴住持建昌一、能レ文、喜祥（常喜）菴在ニ東福寺内一。

昌堯、戊子年、遣レ使來朝。書稱ニ京城東山淸水寺住持大禪師昌堯一、以ニ宗貞國請一接待。日本國亂年饑、寄ニ食於我一者甚多、故前不レ遣レ使之人、皆不レ許ニ接待一、使人等强留ニ三浦一而不レ還。宗貞國爲レ遣レ人請レ之、乃許ニ接待一。下並同。

冉書記、己丑年、遣レ使來朝。書稱ニ深修菴住持冉書記一。以ニ宗貞國請一接待。

〔政親〕下に「政親爲ニ國王近侍之長一」とあるを以つて推するに、恐くは、義政に仕へ、右筆となりて内外の諸事を與り知りし、伊勢貞親ならん。

〔慧日山〕東福寺の山號也、今惠日山に作る、京都下京區本町にあり、五山の第四位、臨濟宗東福寺派の本山、四條帝の時、藤原道家の創建する處也。

〔喜祥（常喜）菴〕東福寺の祖堂に常樂庵あり、持明院の宸翰の額を揭ぐ、こゝを云へるか。

〔宗貞國〕成職の子、祖重尙以來惟宗氏を稱せるを、應仁二年平氏を稱す。

〔西宮〕攝津國武庫郡西の宮町也。

〔佛法護持四天王寺〕攝津國大坂市天王寺にあり、荒陵山と號す、又難波寺、難波大寺、御津寺、法華闍堀江寺とも云ふ、天台宗也。

〔信濃州禪光寺〕下文に善光寺とあり即ち今の長野市の善光寺也、帝王編年記欽明天皇十三年の條に「同年又同王（百濟國聖明王）獻ニ阿彌陀佛像（長一尺五寸）觀音勢至像（長各一尺）ニ此像信濃國善光寺佛是也」とあり。

大和州　郡十三。水田一萬七千六百十四町。
和泉州　郡三。水田四千一百二十六町。
河内州　郡十一。水田一萬九千九十七町。
攝津州　郡十四。水田一千一百二十六町。
忠吉。今天皇應仁元年丁亥。成化三年遣使來朝。書稱畿内攝津州兵庫津平方民部尉忠吉。受圖書。約。歲遣一船。
吉光。戊子年。遣使來朝。書稱畿内攝津州西宮津尉長鹽（ナジホ）備中安源吉光。以宗貞國請接待。
昌壽。戊子年。遣使來朝。書稱畿内攝津州佛法護持四天王寺住持比丘昌壽。以宗貞國請接待。

東山道八州

近江州　郡二十四。水田三萬三千四百二町五段。
美濃州　郡十八。水田一萬四千八百二十四町五段。
飛驒州　郡三。水田一千六百十五町五段。
信濃州　郡十。水田三萬九千二十五町三段。
善峰。戊子年。遣使來朝。書稱信濃州禪光寺住持比丘善峰。以宗貞國請接待。
今按禪光寺。當作善光寺。
上野州　郡十四。水田三萬二千一百四十町三段。

下野州　有火井。産硫黃。郡九。水田二萬七千四百六十町。
出羽州　有温井。産金。郡十。水田二萬六千九十町二段。
陸奥州　産金。郡三十五。水田五萬一千一百六十二町二段。

東海道十五州

伊賀州　郡四。水田一千五百町。州有天照大神祠。國無貴賤遠近。皆來謁祭。
今按。州有天照大神祠。以下十七字。當在伊勢州下。傳寫之誤也。
伊勢州　産水銀。郡十二。水田一萬九千二十四町。
志摩州　郡二。水田九十七町。
尾張州　郡八。水田一萬一千九百四十町。
三河州　郡八。水田八千八百二十町。
遠江州　郡十三。水田一萬二千九百六十七町。
伊豆州　有温井二所。火井一所。産硫黃。郡三。水田二千八百十四町。
駿河州　郡七。水田九千七百十七町。
甲斐州　郡四。水田一萬四千三町。
相模州　郡八。水田一萬二千二百三十六町一段。
上總州　郡十一。水田二萬二千八百七十六町六段。鎌倉殿所居。國人謂之東都。今鎌倉殿源氏仁山之後。據鎌倉以東而叛。二十餘年。國王累征不克。

〔火井〕續博物志に「火井、以草爨之則煙騰火發」とあり、我が國にも、北越奇談信濃奇勝等に見ゆ燃燒性の瓦斯自然に發して、火を付くれば燃ゆる故に名付く。

〔温井〕續博物志に「温井、以草內之則露凝」とあり和漢三歲圖會に「温井、湧冷井者、豐後五處、肥前二處有之」とあれば、今云ふ温泉也。

〔鎌倉殿源氏仁山〕鎌倉殿は、關東管領を云ふ、源氏仁山は足利尊氏を云ふ、尊氏法名を仁山妙義と號せり。

今按。鎌倉殿以下三十八字。當在相模州下。
下總州　郡十一。水田三萬三千一町。
常陸州　郡十四。水田四萬九千九町六段。
武藏州　郡二十四。水田三萬五千七十四町七段。

山陽道八州

幡摩州　郡十二。水田一萬一千二百四十六町。
吉家。丁亥年。遣使來賀觀音現像。書稱幡摩州室津代官藤原朝臣吉家。自上院寺有觀音現像。圓覺寺有雨花舍利之異。以後諸州遣使來賀者甚多。雖前不遣使者。皆許接待。下並同。
盛久。戊子年。遣使來賀觀音現像。書稱幡摩州太守周間(スマ)浦居住源光祿盛久。
美作州　郡七。水田一萬一千二十二町四段。
備前州　郡八。水田一萬三千二百十町二段。
貞吉。丁亥年。遣使來賀觀音現像。書稱備前州卯島津代官藤原貞吉。
廣家。戊子年。遣使來賀觀音現像。書稱備前州小島津代官藤原廣家。
備中州　產銅。郡九。水田一萬二百二十七町八段。
備後州　產銅。郡十四。水田九千二百六十九町二段。
吉安。丁亥年。遣使來賀觀音現像。書稱備後州海賊大將撓原左馬助源吉安。

〔幡摩〕播磨也。

〔室津〕播磨國揖保郡室津村にあり、古、五泊の一、室の泊又室の浦とも云ふ。

〔周間浦〕須磨浦也攝津國武庫郡にあり、風光の明眉を以つて古來名あり或は歌（萬葉集、古今集等）に、或は小說（源氏物語）等の題材となる。

〔小島〕兒島也、備前國兒島郡にあり岡山市の南方に斗出したる一半島にして、古くは、一の離れ島たりし也

政良。戊子年。遣使來朝。書稱備後州高崎城大將軍源朝臣政良。以宗貞國請接待。

光吉。戊子年。遣使來朝。書稱備後州反津代官藤原朝臣光吉。以宗貞國請接待。

家德。戊子年。遣使來朝。書稱備後州三原津太守左京助源家德。以宗貞國請接待。

忠義。己丑年。遣使來朝。書稱備後州守護代官山名四宮源朝臣忠義。以宗貞國請接待。

安藝州　郡八。水田七千二百五十町九段。

持平。庚申年。遣使來朝。書稱安藝州小早川美作守持平。約。歲遣一舡。父常賀近侍國王。

國重。甲申年。遣使來朝。書稱安藝州海賊大將藤原朝臣村上備中守國重。受圖書。約。歲遣一船。

教實。戊子年。遣使來賀觀音現像。書稱安藝州太守藤原武田大膳大夫教實。

公家。戊子年。遣使來賀觀音現像。書稱安藝州嚴島太守藤原朝臣公家。

周防州　產荷葉綠。有溫井。郡六。水田七千二百五十七町九段。

大內殿多多良氏世居州大內縣山口。倭訓也望仇知 管周防長門豐前筑前四州之地。兵最强。日本人稱。百濟王溫祚之後入日本。初泊周防州之多多良浦。因以爲氏。至今八百餘年。至持世二十三代。世號大內殿。至持世無子。以姪教弘爲嗣。教弘死。子政弘嗣。大內兵强。九州以下無敢違其令。以係出百濟。最親於我。自山名與細川爲敵。政弘領兵往助山名。今六年未還。小二乘間。復取博多宰府等舊地。詳見筑前州小二殿。

弘安。庚寅年。遣使來朝。書稱周防州山口所司代杉河守源弘安。大內殿代官時方居守山口。

〔友津〕鞆津也、今備後國沼隈郡鞆町これ也、一に巴津とも書き、古來より要津又は風景を以て名あり、舊名を渡守と云ひしを神功皇后三韓を征し給ひし時、糸崎より此地に渡って鞆を神璽として舟玉神を祠り給ひしより此名起ると云

〔三原〕備後國御調郡三原町也、沼田川の河口に位し、要害の地たり。

〔百濟王溫祚〕溫祚は百濟王第一代にて、高麗王高朱蒙の子也、大內氏は百濟國琳聖太子の後と傳ふれば、かく云ひし也。

〔多多良浦〕扶桑記勝に「多々良、三田尻の東十町餘にあり、湊也」とあり

教之。甲戌年遣使來朝。書稱周防州大內進亮多多良別駕教之。大內殿政弘叔父。納歲遣一舡。

藝秀。丁亥年遣使來賀雨花。書稱周防州大島太守海賊大將軍源朝臣藝秀。

義就。丁亥年遣使來賀觀音現像。書稱周防州上關太守鎌苅源義就。

正吉。戊子年遣使來賀觀音現像。書稱周防州上關守屋野藤原朝臣正吉。

盛祥。戊子年遣使來賀觀音現像。兼報漂流人。書稱富田津代官源朝臣盛祥。

長門州　産銅及刃鐵。郡五。水田四千九百二町四段。

弘氏。丁亥年遣使來賀觀音現像。書稱藝石防長四州守護代官陶越前守多多良朝臣弘氏。

光久。丁亥年稱壽蔺護送遣使來朝。書稱長門州文司浦大將軍源光久。

忠秀。丁亥年遣使來賀觀音現像。書稱長門州赤間關鎭守高石藤原忠秀。辛卯年。又遣使來報我漂流人事。

忠重。丁亥年遣使來賀舍利分身。書稱赤間關太守矢田藤原朝臣忠重。

義長。戊子年遣使來賀觀音現像。書稱長門州賓重關太守野田藤原朝臣義長。

國茂。戊子年遣使來賀觀音現像。書稱長門州鷲尾多多良朝臣國茂。

正滿。戊子年遣使來朝。書稱長門州乾珠滿珠島代官宮內頭藤原正滿。以宗貞國請接待。

貞成。己丑年遣使來朝。書稱長門州三島尉伊賀羅駿河守藤原貞成。以宗貞國請接待。

南海道六州

〔大內〕姓は多々良百濟琳聖太子の後也、太子推古天皇十九年、百濟舟に乘じて周防國多々良岸に着す、其子正恒始めて姓多々良を賜ひ、周防大內縣を食み、子孫世々居住す、依て大內氏と稱す、政弘は正恒二十世の孫也。

〔上關〕周防國熊毛郡上關村釜戸に關の舊趾あり、中ノ關（同國佐波郡にあり）下ノ關（長門にあり）に對して云ふ。

〔文司浦〕門司浦也長門國の對岸、豐前國にあり、昔は長門國に從屬したり。

〔乾珠滿珠島〕長門國赤間關市、境の浦の沖にある二つの海島也。

紀伊州　郡七。水田七千二百三町七段。
淡路州　郡二。水田二千七百三十七町三段。
阿波州　郡九。水田三千四百十四町五段。
義直。戊子年。遣使來賀觀音現像。書稱阿波鳴渡浦大將軍源朝臣義直。
伊豫州　郡十四。水田一萬五千五百七町四段。
盛秋。戊子年。遣使來朝。書稱伊豫州川野山城守越智朝臣盛秋。以宗貞國請接待。
貞義。戊子年。遣使來朝。書稱伊豫州鎌田關海賊大將源貞義。以宗貞國請接待。
讃岐州　郡十一。水田一萬八千八百三十町一段。
土佐州　郡七。水田六千二百二十八町。

北陸道七州

若狹州　郡三。水田三千八十町八段。
忠常。辛卯年。稱壽藺護送。遣使來朝。書稱若狹州十二關一番遠敷守護備中守源朝臣忠常。
義國。戊子年。遣使來朝。書稱若狹州大濱津守護代官左衛門大夫源義國。以宗貞國請接待。
越前州　郡六。水田一萬七千八百二十九町五段。
越中州　有溫井。水田一萬七千九十九町五段。
越後州　郡七。水田一萬四千九百三十六町五段。

〔川野〕河野氏也、神倭速日命の後、越智氏より出づ、一に孝靈天皇の皇子彥狹島王の後とも云ふ、文武天皇の時越智玉興伊豫大領となり、其の弟玉澄河野に居す、依つて姓となす。

〔遠敷〕若狹國遠敷郡なり。

〔大濱〕按ずるに、若狹國遠敷郡小濱町の誤ならん。

〔田伊佐津〕丹後國加佐郡に田邊町（今舞鶴市）あり、其の隣接に伊佐津（今同郡中筋村の内）あり、この兩者混同せしか。

〔舍利分身〕舍利は死屍也、資治記に「舍利此翻遺身、即死屍也」とあり、又佛身を云ふ、俱舍光記に「馱都者即佛身界也、亦名舍利羅、唐言體、佛身體也、舊云舍利訛也」とあり、ここは後の意也、分身は、諸佛方便力を以て處々有緣の衆生を化せん爲に身を十方に分ちて成佛の相を現ずるを云ふ。

〔美保關〕出雲國八束郡美保關也。

能登州　郡四。水田八千二百九十七町。

佐渡州　郡三。水田三千九百二十八町三段。

加賀州　郡四。水田一萬二千七百六十七町四段。

山陰道八州

丹波州　郡五。水田一千八百四十六町九段。

丹後州　產深重青銅。郡六。水田五千五百三十七町。家國。戊子年。遣使來朝。書稱丹後州田伊佐津平朝臣門四郎家國。以宗貞國請接待。

但馬州　郡八。水田七千一百四十町。源國吉。丁亥年。遣使來賀舍利分身。書稱但馬州津山關佐佐木兵庫助源國吉。

因幡州　郡七。水田八千一百二十六町。

伯耆州　郡六。水田八千八百三十町。義保。己丑年遣使來朝。書稱伯耆州太守緣野源朝臣義保。以宗貞國請接待。

出雲州　郡十。水田九千四百三十町八段。盛政。丁亥年。稱壽蘭護送。遣使來朝。書稱出雲州美保關鄉左衛門大夫藤原朝臣盛政。公順。丁亥年。遣使來賀觀音現像。書稱出雲州見尾關處松田備前太守藤原朝臣公順。義忠。己丑。遣使來朝。書稱出雲州留關海賊大將藤原朝臣義忠。以宗貞國請接待。

石見州　郡六。水田四千九百十八町。

和兼。周布兼貞之子。丁卯年。親來受圖書。書稱石見州因幡守藤原周布和兼。約歲遣一船。

賢宗。庚寅年。遣使來朝。書稱石見州櫻井津土屋修理大夫平朝臣賢宗。

久直。丁亥年。稱壽藺護送。遣使來朝。書稱石見州益田守藤原朝臣久直。

正教。丁亥年。稱壽藺護送。遣使來朝。書稱石見州住右馬頭源朝臣正教。

吉久。戊子年。稱壽藺護送。遣使來朝。書稱石見州北江津太守平朝臣吉久。

隱岐州　郡四。水田五百八十四町九段。

秀吉。己丑年。遣使來朝。書稱隱岐州太守源朝臣秀吉。以宗貞國請接待。

西海道九州

筑前州　在距海濱三里。山頂有火井。日正照煙焰漲天。水沸而溢。凝而爲硫黃。凡產硫黃島皆同郡十五。水田一萬八千三百二十八町九段。州有博多。或稱霸家臺。或稱石城府。或稱冷泉津。或稱筥崎津。居民萬餘戶。小二殿與大友殿分治。小二西南四千餘戶。大友東北六千餘戶。以藤原貞成爲代官。居人業行商。琉球南蠻商船所集之地。北有白沙三十里。松樹成林。日本皆海松。唯此有陸松。日本人多上畫以爲奇勝。往來我國者。於九州中博多最多。

小二殿居宰府。或稱大都督府。西北去博多三里。民居二千二百餘戶。正兵五百餘。源氏世主之。稱筑豐肥三州摠太守。太宰府都督司馬少卿號小二殿。至源嘉賴。今天皇嘉吉九年辛酉。大臣赤松作亂。國

〔大臣赤松云々〕嘉吉元年赤松滿祐足利將軍義敎を弑せし事變を云ふ、所謂嘉吉の亂也。

〔筥崎津〕筑前國糟屋郡箱崎町也、中世博多と共に西海の名津たり、こゝに博多の一名となすは、博多津と博多灣と混じたるが如し。

〔大友殿〕大友氏也、姓は藤原、祖能成の子能直婦の家號大友を以つて姓となす、鎌倉時代世に鎭西奉行たり、建武中氏泰足利尊氏の猶子となり源姓を冒す。

〔小二殿〕小貳氏也藤原秀鄕の後、賴平の子賴資將軍賴家の時、太宰少貳となる、依つて氏となす。

王徵兵諸州。小二殿不至國王命。大內殿討之。嘉賴兵敗奔肥前州平戶源義所居。尋投對馬島。居美女浦。對馬島亦其所管。大內殿遂盡有小二所管筑前州博多宰府等地。後嘉賴欲復舊地。舉兵而往至上松浦。大內殿迎擊敗之。嘉賴奔還對馬。嘉賴死。子教賴嗣。丁亥年。教賴又以對馬島兵往至博多宰府之間見月之地。爲大友殿及大內代官。壬申所敗而死。對馬島代官宗盛直等亦從敗沒。己丑年國王以大內黨山名命小二復舊土。又命諸州助之。秋七月。對馬島主宗貞國舉兵奉教賴之子賴忠而往。沿路諸酋護送助之。遂至宰府。悉復舊境。賴忠既至宰府。令貞國守博多。貞國身留愁未要時小二殿所管在博多西南半里。民居三百餘戶 遣麾下守博多。肥前州千葉與其弟有隙。小二右其弟。命貞國往攻之。貞國難之。小二强遣之。値大雪。敗還對馬島。兵千人凍瘃。多死者。長門筑前一岐之境。海賊縱橫。今辛卯年春。我宣慰官養民等往慰賴忠貞國。至對馬島。貞國聞之。托以海賊梗路。宣慰官不能來。我當往迎。遂留兵守博多愁未要。時不告賴忠身還對馬。賴忠前在對馬島。約歲遣一二舡。今還本土。其使人依臣酋使例館待。

護軍道安。曾爲琉球國使。來常於我。因是往來。乙亥年。來受圖書。丁丑年來。受職大友殿管下。

司正林沙也文　道安子。庚寅年。從其父來。受職大友殿管下。

護軍宗家茂。乙亥年。來受圖書。受職富商石城府代官宗金之子。宗金大友殿所著。大友殿管下。

司果信盈。己丑年。來受職。向他卒。中樞藤安吉女壻安吉父。曾來朝。死於京館。因葬于東郊。其母命安吉來侍朝。仍守父墳。安吉死。弟茂村又來。侍朝爲副司果。安吉母時時遣船。稱藤氏母。大友殿管下。

〔嘉賴〕滿貞の子也又この時の大內殿には、大內持世を云へり。

〔丁亥年〕百三代後土御門天皇の應仁元年也、將軍は八代足利義政也。

〔見月之地〕水城之地にして、筑前國筑紫郡水城村に舊趾あり、堤防を築き其の中に水を貯へ、敵を防ぐに供したる處と云ふ。

〔己丑年〕文明二年也、百三代後土御門天皇の御時にて將軍は足利義政也

〔丁丑年〕百四代後柏原天皇の永正十四年に當り、將軍は十代足利義植の重任の時也。

氏鄕。乙亥年。遣使來朝。書稱筑前州宗像朝臣氏鄕。約歲遣一船。小二殿管下與氏俊。承國王之命。爲宗像殿。主有麾下兵。

今按、宗像朝臣氏鄕、據世系、寬正中爲宗像大神大宮司。乙亥。蓋明景泰六年。我康正元年也。其先與足利尊氏好、自此以來勢如諸侯。

貞成。辛巳年。遣使來朝。書稱筑前州冷泉津尉兼內州太守田原藤原貞成。受圖書。約歲遣一二船。大友殿族親博多代官。

信重。丙子年。遣使來朝。書稱筑前州冷泉津藤原佐藤四郎信重。約歲遣一二船。辛卯冬。以琉球國王使。來受中樞府同知事。博多津商定清女壻。大友殿管下。

安直。丁亥年。遣使送漂流人。書稱筑前州筥崎津寄住臣藤原孫右衛門尉安直。八幡神留守殿管下。

直吉。丁亥年。送我漂流人。書稱筑前州筥崎津寄住藤原兵衛次郎直吉。信重兄子。八幡神留守殿管下。居筥崎津。

重家。丁亥年。送我漂流人。書稱冷泉津布衣臣平與三郎重家。大友殿管下。

親慶。丁亥年。遣使來賀觀音現像。書稱筑前州怡土郡北崎津源朝臣親慶。

正家。丁亥年。稱壽蘭護送。遣使來朝。書稱筑前州相以島大將軍源朝臣正家。

氏俊。丁亥年。遣使來賀舍利分身。書稱筑前州宗像先社務氏俊。

今按、社務神主職也、永保二年神祇官移遠江國。文云、應令以清原則房補任小國神主。執行社務。

〔宗像大神大宮司〕大巳貴命の六世孫雙像子宿禰を以って初祖となす、累世宗像神社の大宮司たり、類聚符宣抄、圓融天皇、天元二年二月十四日太政官符、太宰府應補任坐筑前國宗像宮大宮司正六位上宗形朝臣氏能事の條にも「安和二年八月五日、初蒙官符、補任大神宮司以降神威彌嚴」とあり。

〔八幡神〕筥崎宮也筑前國糟屋郡筥崎町にあり、今官幣中社に列す、祭神應神天皇に、神功皇后、玉依姫尊二柱を配祀す。

〔怡土郡〕今志摩郡と合して糸島郡と稱す。

觀此則非神主外有社務矣。文選劉琨石勸進表曰。以社稷爲務。

道京。戊子年。遣使來朝。書稱筑前州絲島太守大藏氏道京。以宗貞國請接待。

繩繁。戊子年。遣使來朝。書稱名島櫛島兩島太守藤原繩繁。以宗貞國請接待。

成直。己丑年。遣使來朝。書稱筑前州廳政所秋月太守源成直。以宗貞國請接待。大友殿管下稱秋月殿。有武才。

信歲。丙戌年。遣使來賀觀音現像。書稱筑前州麻生藤原信歲。丁亥年又遣使來。以不緊不接待。

今按。麻生氏住筑前遠賀(ヲカ)郡蘆藏。領地千町。始爲大内管下。見九州軍記。

筑後州　郡十。水田一萬三千八百五十一町八段。

豐前州　郡八。水田一萬三千二百七十八町二段。

邦吉。戊子年。遣使來朝。書稱豐前州蓑島海賊大將玉野井藤原朝臣邦吉。以宗貞國請接待。

俊幸。戊子年。遣使來朝。書稱豐前州彥山(ヒコサン)座主黑川院藤原朝臣俊幸。以宗貞國請接待。大友殿管下。居彥山。有武才。

今按。彥山在豐前國田川郡。蟠根於豐前豐後筑前三國。和歌所詠彥高峰是也。山有神。名彥山大權現。西國人甚敬。寺號靈仙寺。其草創舊矣。役小角久居之。至後伏見天皇皇子助有法親王住山。稱座主。以統諸僧。戊子應仁二年。賴有座主職時也。藤原俊幸者。蓋其未出家時姓名乎。亦設爲之乎。天下方亂。故雖山僧。往往有武才。以防不虞。

〔絲島〕延喜式以下の國史に、筑前國の西部を占むる地に、志麻、怡土の二郡あり、今合して糸島郡となす。

〔名島〕筑前國糟屋郡多々良村にあり博多灣内多々良濱に沿ふ一小島也。

〔筑前州廳政所〕古への筑前國々府は今の筑紫郡水城村國分の地也、こゝは、秋月氏の居城朝倉郡秋月を云ふ

〔秋月〕秋月氏は、本姓大藏、世々筑前に住す、後漢の孝靈帝より出づと云ふ、始め原田氏後ち秋月氏に改む

豐後州　有溫井五所、郡八。水田七千五百二十四町。

大友殿、源氏、世襲所居、民戶萬餘、見兵二千。在博多。來六七日程。兼管博多。與小二分治。初源持直稱豐筑兩後州太守。今天皇永享元年己酉（宣德四年）遣使來朝、自是使船不絕。九年丁巳、又有源親重者。稱豐筑兩後州太守。而遣使。其書稱持直爲伯父。持直書亦稱讓于親戚親重。至長祿元年丁丑。又有親繁者。稱豐州大友而遣使、源持直使亦至。禮曹問其使及同來諸使、皆言持直與小二殿同時失土。大內殿以親繁代持直爲大友殿。今大內與安藝州相攻。持直小二欲乘間復土而未能。或云、源持直養從弟親重爲嗣、及大內討小二黜親重而以其弟親繩代之。二年戊寅親繁又遣使。其書略曰、曾祖父以來捧書通使、自九州陷兵雖續箕裘之業。不以時致敬、寬正元年庚辰（天順四年）又有師能者。亦稱豐筑守大勝大夫。而遣使、其書略曰。大友特蒙大國之恩。不知幾年。去年十月逝去、余爲持直嫡孫。續大友家業。今辛卯年、豐州日田守護親常。遣使來朝、其使言。親常今大友殿政親之弟也、前大友親重年老、傳之其子政親、政親乃大內政弘妹婿、小二之復土也、政親欲助大內。父親重以爲王命不可違。遂助小二。又間時來諸使。其言皆同、是年冬來。國王使光以藏主曰。源持直初無子。以從弟親繁爲嗣。親繁今爲大友殿。年六十一歲。長子政親今爲豐前州太守、將爲嗣。持直既以親繁爲嗣。而後生二子。長師能。次能堅、皆封小地。其曰親重者不知爲何人。疑繁重二字、於國訓相近。故或稱重也、其曰親繩者、親繁之同母弟、封豐後州小地、死已十四年矣。同時來琉球使、博多人信重曰。親繁五子。一曰五郎。卽政親。年三十餘當爲嗣。二曰親常。年二十餘、今爲日田守。三曰七郎。年

〔源持直〕大友親世の子也。

〔今天皇〕百二代後花園天皇也。

〔宣德〕明朝五代宣宗の時の年號也。

〔長祿元年〕後花園天皇の御宇の年號にて、將軍は八代足利義政也。

〔箕裘之業〕箕は農具の一種、裘は皮衣也、禮記に「良冶之子必學爲裘、良弓之子必學爲箕」或は列子に「良弓之子必先爲箕、良冶之子必爲裘」等とある語より出で父祖の業を承け繼ぐに云へり。

〔寬正元年〕長祿四年十二月二十一日改元して、寬正と號す。

〔日田郡〕豐後國にあり。

〔小城〕肥前國小城郡小城町也、佐賀市の西北、三里十九町あり。

〔千葉〕姓は平氏、良文の二子忠頼より出づ、源頼朝の頃千葉常胤名あり、其の七世の孫貞胤懐良親王に從ひ鎭西に赴き、遂に留りて肥前に居す。

十八。四僧。五幼。大友殿於九州兵強。小二而下皆敬事之。然稱大友者數人。豐後州在九州之東。地最遠。來者稀少。未能辨其眞僞。姑記往來之書及諸使之言以待後考。

親常。大友殿異母弟。辛卯年遣使來朝。書稱日田郡守護修理大夫大藏親常。

國光。庚辰年遣使來報我漂流人。丁亥年。又遣使來賀觀音現像。書稱豐後州日田郡太守源朝臣國光。

茂實。戊子年。遣使來朝。書稱豐後州守護代官木部山城守茂實。以宗貞國請接待。

肥前州　有溫井二所。郡十一。水田一萬四千四百三十二町。州有上下松浦。海賊所處。前朝之季。寇我邊者松浦與一岐對馬島之人率多。又有五島。或稱五多島。日本人往中國者。待風之地。

今按。天下文明之世。何地處海賊。此時喪亂甚。故海賊處松浦。

節度使。己丑年遣使來朝。約歲遣一二船。書稱九州節度使源教直。或稱九州都元帥。或稱九州總管。居肥前州阿也非知。有小城。在博多南十五里。民居一千餘戶。正兵二百五十餘。總治九州之兵。對馬島人宗大膳等言。初教直助大內。及小二復土。權棄所居。潛投肥後州也望加知。

千葉殿。己卯年遣使來朝。居有小城。北距博多十五里。民居一千二百餘戶。正兵五百餘。書稱肥前州小城千葉介元胤。約歲遣一船。

源義。乙酉年遣使來朝。書稱呼子一岐守源義。約歲遣一二船。小二殿管下。居呼子。有麾下兵。稱呼子殿。

源約。乙亥年。遣使來朝。書稱肥前州上松浦波多島源約。受圖書。約歲遣一二船。小二殿管下。居波多島。人丁不過十餘。

源永。丙子年。遣使來朝。書稱肥前州上松浦鴨打源永。受圖書。約歲遣一二船。小二殿管下。居鴨打。有麾下兵。稱鴨打殿。

藤源次郎。丙子年。遣使來朝。書稱肥前州上松浦九沙島主藤源次郎。約歲遣一船。

源祐位。丁丑年。遣使來朝。書稱肥前州上松浦那護野寶泉寺源祐位。約歲遣一船。僧居寶泉寺。

源盛。丁丑年。遣使來朝。書稱肥前州上松浦丹後太守源盛。受圖書。約歲遣一舡。小二殿管下有麾下兵。

源德。丙子年。遣使來朝。書稱肥前州上松浦神田能登守源德。受圖書。約歲遣一船。

源次郎。己丑年。遣使來朝。書稱肥前州上松浦佐志源次郎。受圖書。約歲遣一船。小二殿管下能武才。有麾下兵。稱佐志殿。

義永。丙子年。遣使來朝。書稱肥前州上松浦九沙島主藤原朝臣筑後守義永。受圖書。約歲遣一舡。

源義。乙亥年。遣使來朝。書稱肥前州下松浦一岐州太守志佐源義。約歲遣一二舡。小二殿管下。能武才。遣麾下兵。稱志佐殿。

源滿。丁丑年。遣使來朝。書稱肥前州下松浦三栗野太守源朝。約歲遣一舡。小二殿管下。有麾下兵。居三栗野。

〔那護野〕名護屋也、今肥前國東松浦郡にあり。

〔神田〕肥前國唐津町に神田村あり。

〔佐志〕肥前國東松浦郡佐志村佐志の地あり。

〔志佐〕今肥前國北松浦郡に志佐村志佐の地あり。

〔三栗野〕御厨の訛也、今肥前國北松浦郡御厨村御厨の地あり。

源吉。乙丑年、始遣使來朝。書稱肥前州下松浦山城太守源吉。受圖書。約歲遣一二船。

源勝。乙亥年、遣使來朝。書稱五島宇久守源勝。受圖書。約歲遣一二船。丁丑年、以刷還我漂流人。特加一船。居宇久島。總治五島。有麾下兵。

少弼弘。丁丑年、遣使來朝。書稱肥前州田平寓鎭源朝臣彈正少弼弘。約歲遣一二船。有麾下兵。

源義。丙子年、始遣使來朝。書稱肥前州平戶寓鎭肥前太守源義。受圖書。約歲遣一船。少弼弘弟。有麾下兵。居平戶。

藤原賴永。丙戌年、遣壽藺書記來朝。書稱肥前州上松浦那久野藤原賴永。壽藺受書契禮物。傳于國王。事見上。山城州細川勝氏居那久野。

源宗傳。戊子年遣使來朝。書稱肥前州上松浦多久豐前守源宗傳。以宗貞國請接待。居多久。有麾下兵。

源泰。戊子年遣使來朝、書稱肥前州上松浦波多下野守源泰。以宗貞國請接待。居波多。有麾下兵。

四郎左衛門。乙丙年。以源滿使來受同參。丁亥戊子、連年而來、不許接待。

源貞。丁亥年、遣使來賀觀音現像。書稱肥前州下松浦大島太守源朝臣貞。居大島。有麾下兵。

源義。丁亥年、遣使來賀觀音現像。書稱肥前州下松浦一岐津崎太守源義。有麾下兵。

貞茂。己丑年、遣使來朝。書稱五島悼大島太守源朝臣貞茂。以宗貞國請。接待。居五島源勝管下微者。

源茂。丁亥年。遣使來賀雨花舍利。書稱五島玉浦守源朝臣茂。居五島源勝管下微者。

〔山城〕西松浦郡の西部なる、東山代西山代の二村也。
〔宇久〕北松浦郡の海島宇久島也。
〔田平〕北松浦郡の北西岸なる、田平村也、平戶島に對す。
〔多久〕小城郡の北半を占め、其の北境東松浦郡に接する、北多久、西多久、東多久、南多久、多久の五ヶ村也。
〔大島〕北松浦郡の一海島也、周圍八里十七町、今、度島を合せて大島村と稱す。
〔玉浦〕南松浦郡玉浦村也、五島列島の最西部福江島の西岸にあり。〕

源貞。丁亥年遣使來賀觀音現像。書稱五島太守源貞。居五島源管下徽者。

藤原盛。己丑年遣使來朝。書稱五島日島太守藤原朝臣盛。以宗貞國請接待。居五島源勝管下徽者。

淸男。己丑年遣使來朝。書稱肥前州彼杵郡彼杵遠江淸原朝臣淸男。以宗貞國請接待。

源重俊。丁亥年遣使來賀舍利分身。書稱肥前州大村守源重俊。居大村。能武才。有麾下兵。

源信吉。戊子年遣使來賀觀音現像。書稱肥前州風島津太守源信吉。

源豐久。辛卯年遣使來朝。書稱平戶寓鎭肥州太守源豐久。先父義松己丑春逝去。又述義松所受圖書。而請受新圖書。今乃終述。

肥後州　有溫井。郡十四。水田一萬五千三百九十七町。

菊池殿。丙子年遣使來朝。書稱肥筑二州太守藤原朝臣菊池爲邦。約歲遣一二船。庚寅年。又遣使來受圖書。所管兵二千餘。世號菊池殿。世主肥後州。

源藤爲房。乙亥年遣使來朝。書稱肥後州藤原爲房。歲遣一船。

教信。己卯年遣使來朝。書稱肥後州八代源朝臣教信。約歲遣一船。

政重。丁亥年遣使來賀觀音現像。前此再度救我漂流人。書稱肥後州大將軍大橋朝臣政重。

武敎。丁丑年以武磨稱名使人來朝。以遠處不緊。人不接待。丁亥年。改名武敎。來賀觀音現像。書稱肥後州高瀨郡藤原武敎。菊池殿族親。爲其管下。居高瀨。

日向州　郡五。水田七千二百三十六町。

〔日島〕五島列島の一、南松浦郡に屬し、若松島の北西にあり。

〔彼杵〕東彼杵郡の中部にありて、彼杵川に沿ひ、彼杵灣に臨む。

〔大村〕東彼杵郡大村町也、郡の西境にありて、彼杵灣の支灣大村灣に臨む。

〔菊池爲邦〕建武の忠臣菊池武時の後也、武時子武重、其の六世孫を持朝と云ふ、持朝の子卽ち邦爲也。

〔八代〕八代郡八代町也。

〔伊集院〕日置郡に上、中、下伊集院の三村あり。
〔島津〕島津氏は祖忠久薩摩大隅日向三國守護職に補せられ、下向して薩摩國出水郡山門院木牟禮城に居し、其子忠時は日向國津庄に徙り、五代貞久に至り鹿兒島來福寺城に移り、後子孫元久の時清水城を築きて之れに居る、天文十九年鹿兒島城に遷る即ち、此の時は清水城に居りし也、舊趾鹿兒島市の北淨明寺の北青木川の西の丘にあり、持久、忠國、系圖に見えず。
〔市來〕日置郡に東市來、西市來二村あり、中世市木鄉と稱せり。

大隅州　郡八。水田六百七十三町。

薩摩州　產㆓硫黃㆒。郡十三。水田四千六百三十町。

盛久。丁丑年。遣㆑使來朝。書稱㆓薩摩州日向太守藤原盛久㆒。約歲遣㆓一二船㆒。

灝久。乙亥年。遣㆑使來朝。書稱㆓薩摩州伊集院寓鎭隅州太守藤原灝久㆒。約歲遣㆓一二船㆒。

持久。丁丑年。遣㆑使來朝。書稱㆓薩摩州島津藤原朝臣持久㆒。約歲遣㆓一船㆒。忠國族親。爲㆓其管下㆒。居㆓島津㆒。

源忠國。丁丑年。遣㆑使來朝。書稱㆓薩摩三州太守島津源忠國㆒。約歲遣㆓一船㆒。丁亥年。以㆓觀音現像㆒又遣㆑使。書稱㆓日隅薩三州太守島津陸奧源忠國㆒。國王族親。總㆓治薩摩日向大隅三州事㆒。

藤原忠滿。丁亥年。遣㆑使。來㆓賀觀音現像㆒。書稱㆓薩摩州古志岐島代官藤原忠滿㆒。

只吉。戊子年。遣㆑使來朝。書稱㆓薩摩州房泊代官只吉㆒。以㆓宗貞國請㆒接待。

久重。戊子年。遣㆑使來朝。書稱㆓薩摩州市來千代太守大藏氏久重㆒。以㆓宗貞國請㆒接待。

國久。戊子年。遣㆑使來朝。書稱㆓市來太守大藏氏國久㆒。以㆓宗貞國請㆒接待。忠國從弟。爲㆓其管下㆒。居㆓郡府㆒。

吉國。己丑年。遣㆑使來朝。書稱㆓薩摩州內種島太守吉國㆒。以㆓宗貞國請㆒接待

持永。己丑年。遣㆑使來朝。書稱㆓薩摩州島津藤原朝臣持永㆒。以㆓宗貞國請㆒接待。

對馬島　郡八。人戶皆沿㆓海浦㆒而居。凡八十二浦。南北三日程。東西或一日。或半日程。四面皆石山。土瘠民貧。以㆑煮㆑鹽捕㆑魚販賣爲㆑生。宗氏世爲㆓島主㆒。其先宗慶死。子靈鑑嗣。靈鑑死。子貞茂嗣。貞茂死。子貞盛嗣。貞盛死。子成職嗣。成職死而無㆑嗣。丁亥年。島人立㆓貞盛母弟盛國之子貞國㆒爲㆓島主㆒。郡守而下

〔天神〕王勝間に「和多都美御子神社は仁位鄕（上縣郡）仁位村にありて、神階五位上今は天神と申す」とあり、又同郡木坂村に和多都美神社あり、其の方位は、後者は對島の北岸にありて、前者は南方にあり、此の兩神のことを云ひしなるべし、後者は今、海神社と稱し國幣中社に列す古は當國の一の宮也。

〔豆豆郡〕下縣郡に豆酘（ツツ）村、豆酘瀨村、豆酘內院村等あり、これに當る。

〔仁位郡〕下縣郡仁位村也。

〔要羅郡〕下縣郡與良內院村也。

土官。皆島主差任。亦世襲以土田鹽戸分屬之。爲三番。七日相遞會。守島主之家。郡守各於其境。每年踏驗損實。收稅取三分之一。又三分其一。輸一于島主。自用其一。島主牧馬場四所。可二千餘匹。馬多曲背。所產柑橘木楮耳、南北有高山。皆名天神。南稱子神。北稱母神。俗尙神。家々以素饌祭之。山之草木禽獸人無敢犯者。罪人走入神堂。則亦不敢追捕。島在海東。諸島要衝諸酋之往來於我者、必經之地。皆受島主文引。而後乃來。島主而下各遣使船。歲有定額。

八郡　豐崎郡。或稱都伊沙只郡。郡守宗盛俊。宗貞國異母兄。在前、宗貞國爲郡守。今傳于盛俊。盛俊居古于浦。遞治。戊子年。遣使來朝。書稱對馬州守護代官平朝臣宗助六盛俊。豆豆郡郡守宗彥次郎盛世。　伊乃郡郡守宗盛弘。貞茂之子。宗貞盛妹婿。乙丑年。遣使來朝。書稱對馬州宗右衞門尉盛弘。約歲遣四船。歲賜米豆幷十五石。　卦老郡或稱仁位郡郡守宗茂秀。癸丑年。遣使來朝。書稱出羽守宗大膳茂秀。無子以其弟茂直子宗彥九郞興秀爲嗣。茂秀父賀茂。奪黜島主靈鑑而奪其任。靈鑑之子貞茂還奪之。然以賀茂族盛不得絕之。以茂秀爲郡代官。　要羅郡郡守島主自守。　美女郡郡守島主自守。　雙古郡郡守島主自守。　尼老郡郡守宗盛家。宗貞盛再從弟。爲貞盛女壻。甲子年。遣使來朝。書稱對馬州宗信濃守盛家。約歲遣四船。壬申年以其請加三船。歲賜米豆幷二十石。

護軍多羅而羅　一名而羅洒文家次。一名而羅洒文家繼。一名平松而羅洒文家繼。一名太郎二郎。庚辰年受圖書。來則賜米豆幷拾石。賊首也。

八十二浦　時古里浦二十餘戸　尼神都麻里浦百餘戸　皮多加地浦五十餘戸　安尼老浦二十餘戸　司直源茂崎。乙

亥年以救我漂流人功受職。　守于時浦五十餘戸　郎加古時浦三十餘戸　頭末浦十餘戸　緊浦四十餘戸　阿時末浦百餘戸　皮都浦二十餘戸　和因都麻里浦二十餘戸　五時浦二十餘戸　時多浦三百五十餘戸　沙加浦五百餘戸　護軍六郎洒文。己卯年來受圖書。來則賜米豆幷十石。　司正都羅而老（タロジラウ）向化。鉄匠于知沙也文子。隨父而來。受職。今還本島。　秦盛幸。本係唐人。島主宗成職時掌書契文引。丁丑年。因島主請受圖書。約歲遣一船。書稱海西路關所鎭守秦盛幸。　職盛故代官宗盛直之子。戊子年。遣使來朝。己丑年。又遣使來朝。請繼父遣船。以無島主之書不從。書稱對馬州平朝臣宗四郎職盛。　時羅浦十餘戸　仇時老浦二十餘戸　所溫老浦百餘戸　溫知老毛浦六十餘戸　昆知老浦四十餘戸　也里古浦三十餘戸　要古浦二十餘戸　時羅古浦二十餘戸　要時浦十餘戸　可門諸浦三十餘戸　訓羅串百餘戸　上護軍平茂持平盛秀之弟。爲從兄六郎次郎繼後。來則賜米豆幷十五石。　護軍皮古時羅（ヒコジロ）平茂持弟。甲申年受職。己丑年受圖書。來則賜米豆幷十石。副司果平伊也。知平茂持子。又名早田彥八。庚寅年以島主請受職。　仇愁音夫浦二十餘戸　吾可多浦二十餘戸　挂地浦四百餘戸　尼于浦十餘戸　那無賴浦三十餘戸　古浦十餘戸　安沙毛浦　古于浦百餘戸　島主宗貞國。今天皇嘉吉三年癸亥（正統八年）宗貞盛爲島主時。約歲遣五十船。如有不得已報告事。數外遣船。則謂之特送。歲賜米豆幷二百石。　宗貞秀。貞國長子。與貞國同居。丁亥年遣使來朝。書稱對馬州平朝臣貞秀。約歲遣七船。歲賜米豆幷十五石。貞秀襲貞國前任。故傳船。賜米。皆仍其舊。　盛俊豐崎郡守。詳見豐崎郡。　國幸。今辛卯年。以對馬島特送來朝。兼察三浦。稱宗□勝國幸。以島主所親信。別例厚待而送。　仇多浦三十餘戸　造船五浦十餘戸　仰可未浦十餘戸　封伊老浦二十餘戸　那伊老浦二十餘戸

〔阿時末浦〕上縣郡芦見村也。

〔沙加浦〕下縣郡嵯峨村也。

〔也里古浦〕下縣郡に鑓川村あり是なるべし。

〔要古浦〕下縣郡横浦村也。

〔尼宇浦〕「ネウウラ」と訓むべく、下縣郡根緒（ネヲ）村なるべし。

〔古于浦〕下縣郡に小浦村あり、「コウラ」と訓めり、此地なるべし。

（佐護郡）上縣郡佐護村也。

（貞秀）貞國の子也。和漢三才圖會に、「貞秀得朝鮮兵道之珍書獻將軍義尹公。將軍賞之賜諱字。改號義盛。自此稱對馬屋形」とあり。

（可時浦）下縣郡加志村也。

（皮老浦）下縣郡豊ヶ浦也。

安佐毛浦五十餘戸　豆豆浦三處合三百餘戸　宗茂世。一名宗虎熊丸。宗貞盛之姪。乙亥年。約歲遣二船。來則賜米豆幷十石。書稱九州侍所管事平朝臣宗彥八郎茂世。　世伊浦二十餘戸　仇女浦二處合五十餘戸　沙愁浦四處合三百餘戸　國久。乙酉年。因島主請受圖書。書稱對馬州佐護郡代官平朝臣宗幡摩守國久。約歲遣一船。管天神山海賊。今領兵在博多。　宗彥九郎貞秀。故代官宗盛直從弟。卦老郡守宗茂秀立以爲後。庚辰年。遣使來朝。書稱對馬州平朝臣宗彥九郎貞秀。受圖書。約遣一船。　上護軍宗盛吉。宗盛家弟。癸未年。受圖書。來則賜米豆幷十五石。今身死。有子。時未遣使。　宗茂秀。卦老郡守。　宗茂直。宗茂秀同母弟。　阿里浦百餘戸　曩吾里浦二十餘戸　于那豆羅浦五十餘戸　多浦百餘戸　美女浦六百五十餘戸　仇知只浦三處合百五十餘戸　伊乃浦二處合百餘戸　皂多老浦三百餘戸　是時未浦三十餘戸　仇波老浦二十餘戸　豆那浦百餘戸　加羅愁浦五十餘戸

沙愁那浦四百餘戸　國吉。戊子年。遣使來朝。書稱佐須郡代官平朝臣宗石見守國吉。　吾溫浦百餘戸　護軍皮古汝文。戊寅年受職。庚辰年。受圖書。總治三浦。恒居倭。　司正所溫皮古破知。宗茂次子。改名茂實。丁亥年。因島主請受職。　宗茂次。庚辰年。救我漂流人來朝。丁亥年。又來稱對馬州上津郡追浦平朝臣宗伯耆守茂次。　皂時老道伊浦七十餘戸　道于老浦四十餘戸　也音非道浦無人戸　掛尼老浦十餘戸

可吾沙只浦有神堂　阿吾頞羅可知浦百餘戸　可里也徒浦二百餘戸　敏沙只浦二百餘戸　頞知洞浦二百餘戸　中樞平茂續。賊首早田之子。嘗來侍朝。爲中樞。今還本島。　護軍中尾吾郎平茂續之子。中尾彈正立以爲後。戊子年來受職。　可時浦一百五十餘戸　護軍井可文愁戒。父賊首井大郎。於己亥年東征有功。乙酉年。受圖書。歲賜米豆幷十石。壬午年。襲父職。　皮老浦四十餘戸　多計老浦八十餘戸　仇老世浦一百四十餘戸　護軍

皮古仇羅。海賊。護軍藤茂家倭訓邊沙也文之子。乙酉年受職。受圖書。來則給米豆十石。　愁毛浦四百餘戸　吾屯厤浦一百餘戸　老夫浦二百餘戸　臥伊多浦一百餘戸　古老世浦五十餘戸　介伊侯那浦二百餘戸　護軍時難酒毛。平家久倭訓和知難酒毛之子。戊子年受職。　吾甫羅仇時浦五十餘戸　雙介浦五十餘戸　完多老浦一百餘戸　古茂應只浦二百餘戸　沙吾浦二百餘戸

一岐島　郷七。水田六百二十町六段。人居陸里十三。海浦十四。東西半日程。南北一日程。志佐佐志。呼子。鴨打。鹽津留。分治。有市三所。水田旱田相半。土宜五穀。收税如對馬。

七郷　加愁郷。佐志代官主之。　唯多只郷。志佐代官源武主之。戊子年。受圖書。約歳遣一二船。書稱一岐守護代官眞弓兵部少輔源武。　古仇音夫郷。源經主之。己丑年。受圖書。約歳遣一二船。書稱上松浦鹽津留助次郎源經。　源重實。丁丑年。約歳遣一船。書稱上松浦鹽津留松林院主源重實。　宗殊。己卯年。遣使來朝。書稱一岐州上松浦鹽津留觀音寺宗殊。約歳遣一船。　小于郷。呼子代官源實主之。約歳遣一船。書稱上松浦。呼子一岐州代官牧山帶刀源實。庚寅年。源實子正遣使來朝。書稱去歳六月父爲官軍先鋒而死于敵。臣繼家業。乃依父例館待。　無山都郷。鴨打官主之。　時日羅郷。呼子。鴨打。分治。各有代官。　郎可五豆郷。呼子。鴨打。分治。各有代官。

十三里　波古沙只一百五十餘戸　信昭于七十餘戸　侯加伊一百三十餘戸　阿里多五十餘戸　愁米要時七十餘戸　伊除而時一百餘戸　也那伊多三百餘戸　也厤老夫九十餘戸　牛時加多一百三十餘戸　多底伊時九十餘戸　毛而羅五十餘戸　侯計八十餘戸　應口五十餘戸

十四浦　世渡浦三十餘戸　豆豆只浦二十餘戸　仇只浦二十餘戸　因都溫而浦四十餘戸　阿神多沙只

〔邊沙也文〕平左衛門の訛なるべし。
〔沙吾浦〕上縣郡佐護村也。
〔一岐島〕壹岐國也
〔呼子〕壹岐郡沼津村黑崎の呼子崎也
〔加愁郷〕壹岐郡香椎村可須也。
〔唯多只郷〕壹岐郡那賀村湯岳也。
〔時日羅郷〕壹岐郡志原村なるべし。
〔波古沙只〕壹岐郡箱崎村也。
〔愁米要時〕「スメヨシ」にて、壹岐郡那賀村住吉（スミヨシ）の訛也。
〔多底伊時〕壹岐郡鯨伏村立石也。
〔豆豆只浦〕壹岐郡石田村筒城也。

浦　頭音甫浦四十餘戶　火知也廠浦一百餘戶　毛都伊浦一百餘戶　護軍三甫郎大郎、賊首護軍藤永繼子。辛巳年受圖書。來則賜米豆幷十石。　司正有羅多羅、又名可文愁戒源貞乃三甫郎大郎之兄。戊寅年受職。司正豆留保時藤九郎次子、庚寅年受職。長子也、三甫羅今來侍朝、爲司正。　訓乃吉時浦四十餘戶　臥多羅浦百餘戶　無應只也浦一百四十餘戶　仇老沙只浦二十餘戶　于羅于未浦五十餘戶　風(カザモト)本浦倭訓間沙毛都于羅

今按、讀國王代序。天下邑有君。村有長。各自分疆。用相陵轢。非君命越竟外交、君臣大義至此蕩然。今盡抄出于此者、春秋祭伯來之意也。爲後世事君而有貳心者之明戒也。

懲毖錄卷之一

萬曆丙戌間。日本國使橘康廣。以其國王平秀吉書來。始日本國王源氏。立國於洪武初。與我修隣好。殆二百年。其初我國亦嘗遣使、修慶吊禮。申叔舟以書狀往來。卽其一也、後叔舟臨卒、成宗問所欲言。叔舟對曰。願國家毋與日本失和、成廟感其言、命副提學李亨元書狀官金訢修睦、到對馬島。使臣以風水。驚疑得疾、上書言狀、成廟命致書幣於島主而回。自是不復遣使、每其國信使至。依禮接待而已、至是平秀吉代源氏爲王、秀吉者或云。華人流入倭國。負薪爲生。一日國王出、遇於路中。異其爲人。招補軍伍。勇力善鬪。積功至大官。因得權、竟奪源氏。而代之。或曰、源氏爲他人所弑。秀吉又殺其人。而奪國云、用兵平定諸島。域內六十六州。合而爲一、遂有外侵之志。乃曰。我使每往朝鮮。而朝鮮使不至。是鄙我也、遂使康廣來求通信。書辭甚倨。有今天下歸朕一握之語。蓋源氏之亡已十餘年、諸島倭歲往來我國。而畏其令嚴不泄、故朝廷不知也。康廣時年五十餘、容貌傀偉、鬚髮半白。

〔毛都伊浦〕壹岐郡柳田村物部（モッヘ）也。

〔仇老沙只浦〕壹岐郡沼津村黑崎也。

〔日本國王源氏〕國王は將軍を云へり源氏とは、足利將軍を指して云へり

〔立國於洪武初〕正平二十三年十二月足利義滿將軍となりたるを云ひしも、此年高麗始めて（弘安役後）好を通す。

〔成廟〕成宗旣に歿後の王たるを以つて敬稱せり、廟は說文に「尊先祖貌也」とあり。

〔妓樂〕遊藝歌踊を技とする女也、妓は、字彙に「女樂」とあり。

〔聲伎〕聲は音曲、伎は業にて、卽ち音樂也。

〔皓白〕眞白也、皓は、小爾雅に「白也」とあり。

〔倫次〕秩序也、倫は、字彙に「次序」とあり。

〔平行長〕小西行長也。

所經館驛、必令上官、擧止倨傲、與平時倭使絶異、人頗恠之、故事一路郡邑、凡遇倭使、發境内民夫執槍、夾道以示軍威。康廣過仁同、睨視執槍者、笑曰、汝輩槍竿太短矣。到尙州、牧使宋應洞享之、妓樂成列。康廣見應洞衰白、使譯官語之曰。老夫數年、在干戈中、鬚髮盡白。使君處聲伎之間、百無所憂、而猶爲皓白、何哉。蓋諷之也、及至禮曹判書押宴酒酣、康廣散胡椒於筵上、妓工爭取之。無復倫次。康廣回所館、歎息語譯曰、汝國亡矣、紀綱已毀、不亡何待、及還朝廷但報其書、辭以水路迷昧、不許遣使、康廣歸報、秀吉大怒殺康廣、又滅族、蓋康廣與其兄康年、自源氏時來朝我國、受職名。其言頗爲我國地、故爲秀吉所害云、日本國使平義智來。秀吉既殺橘康廣、又令義智來求信使、義智者其國主兵大將平行長女壻也、爲秀吉腹心。對馬島太守宗盛長世守馬島、服事我國。時秀吉去宗氏使義智代主島務、以我國不請海島爲辭、拒通信、詐言。義智乃島主子、熟海路、與之偕行。便欲使我無辭以拒、因又覘我虛實。平調信僧玄蘇等同至。義智年少精悍。他倭皆畏之、俯伏膝行不敢仰視。久留東平館、必邀我使與俱、朝議依違而已、數年前倭寇全羅道。擄竹島。殺邊將李太源、捕得生口言、我國邊氓沙乙背同者叛入倭中。導倭爲寇、朝廷憤之。至是人或言。宜令日本刷還叛民。然後議通信、以觀誠否。使館客者諷之、義智曰、此不難。卽遣平調信、歸報其國。不數月悉捕我民之在其國者十餘人來獻、上御仁政殿。大陳兵威。鎖沙乙背同等入庭。詰問斬於城外。賞義智内廐馬一匹。後引見倭使。一行賜宴。義智玄蘇等皆入殿内。以次進酌。時余判禮曹。亦宴倭使於曹中。然通信之議久未決。余爲大提學。將撰國書。啓請速定議。勿致生釁。明日朝講知事邊協等亦啓。宜

遣使報答。且見彼中動靜而來。非失計也。於是朝議始定。命擇可使者。大臣以僉知黃允吉司成金誠一爲上副使。典籍許筬爲書狀官。庚寅三月。遂與義智等同發。時義智獻孔雀及鳥銃槍刀等物。命放孔雀於南陽海島。下鳥銃於軍器寺。我國之有鳥銃始此

今按、丙戌萬曆十四年。日本天正十四年也。秀吉者、或云。華人流入倭國者也。秀吉尾張國阿育郡人。父名筑阿彌小民也。詳見道喜居士記僧玄蘇行集。名仙巢稿

辛卯春。通信使黃允吉金誠一等。回自日本。倭人平調信玄蘇偕來。初允吉等上年四月二十九日。自釜山浦乘船抵對馬島。留一月。又自馬島水行四十餘里。到一岐島。歷博多州長門州那古耶。至七月二十二日。始至國都。蓋倭人故迂廻其路。且處々留滯。故累月乃至。其在對馬島。平義智請使臣。宴山寺中。適平秀吉往擊東山道。留數月秀吉回。又託以修治宮室。不卽受國書。前後留館五月。始傳命。其國尊其天皇。自秀吉以下。皆以臣禮處之。秀吉在國中不稱王。但稱關白。或稱博陸侯。所謂關白者。取霍光凡事皆先關白之語。而稱之也。其接我使也。許乘轎入其宮。以笳角前導。陞堂行禮。秀吉容貌矮陋。面色皺黑。無異表。但微覺目光閃閃射人云。設三重席。南向地坐。戴紗帽。穿黑袖。諸臣數人列坐。引我使就席。不設宴具。前置一卓。中有熟餅一器。以瓦甌行酒。酒亦濁。其禮極簡。數巡而罷。無拜揖酬酢之節。有頃秀吉忽起入內。在席皆不動。俄而有人。便服抱小兒。從內出徘徊堂中。視之乃秀吉也。坐中俯伏而已。已而出臨楹外。招我國樂工。盛奏衆樂而聽之。小兒遺溺衣上。秀吉笑呼侍者。一女倭應聲走出。授其兒更他衣。皆肆意自得。旁若無人。使臣辭出。其後不得再

〔阿育郡〕愛知郡の訛也。
〔辛卯〕萬曆十九年にて、我が天正十九年に當れり。
〔上年〕前年也。
〔那古耶〕肥前國東浦郡名護屋也。
〔擊東山道〕東海道の誤傳也、秀吉此年(十八年)四月北條氏直を小田原城に圍み、七月遂に之れを降せり。
〔笳角〕笛也。
〔紗帽〕薄絹を以つて製したる帽子にて、我が冠を云ひし也。
〔黑袖〕黑衣にて、黑色の裝束を着けたるを見て、如此云へり、我が古制諸王諸臣一位の服色黑紫を用ひたり秀吉は此時既に從一位なり。

〔黄言〕黄口、黄吻等と同じく、幼稚なる口吻を云ふ。

〔雁書〕音信の書狀也、漢書蘇武傳に「教使者謂單于、言天子射上林中、得雁、足有係帛書、言武等在某澤中」とある故事に出づ。

〔八風〕八方風也、淮南子地形訓に、「何謂八風、東北曰炎風、東方曰條風、東南曰景風、南方曰巨風、西南曰涼風、西方曰飂風、西北曰麗風、北方曰寒風」とあり。

〔有遠慮云々〕論語衛靈公篇に「子曰、人無遠慮、必有近憂」とあるに因る。

見。與上副使銀四百兩。書狀通事以下有差。我使將回。不時裁答書。令先行。誠一曰。吾爲使臣。奉國書來。若無報書。與委命於艸莽同。允吉惧見留。遂發至界濱待之。答書始來。而辭意悖慢。非我所望也。誠一不受。改定數次。然後行。凡所經由。諸倭贈遺。誠一皆却之。允吉還泊釜山。馳啓情形。以爲必有兵禍。既復命。上引見而問之。允吉對如前。誠一曰。臣不見其有是。因言。允吉動搖人心。非宜。於是議者或主允吉。或主誠一。余問誠一曰。君言與黄使不同。萬一有兵將奈何。曰。吾亦豈能必倭終不動。但黄言太重。中外驚惑。故解之耳。　時倭書有率兵超入大明之語。

今按。辛卯。萬曆十九年。日本天正十九年。率兵超入大明之語。秀吉答書曰。朝鮮國王閣下。雁書薫讀。卷舒再三。抑本朝雖爲六十餘州。比年諸國分離。亂國綱。廢世禮。而不聽朝政。故予不勝感激。三四年之間。伐叛臣。討賊徒。及異域遠島。悉歸掌握。竊按予事蹟。鄙陋小臣也。雖然予當托胎之時。慈母夢日輪入懷中。相士曰。日光所及無不照臨。壯年必八表聞八風。四海蒙威名者。其何疑乎。依有此奇異。作敵心者。自然摧滅。戰則無不勝。攻則無不取。既天下大治。撫育百姓。憐愍孤獨。故民富財足。土貢萬倍千古矣。本朝開闢已來。朝廷盛事。洛陽壯麗。莫如今日也。夫人生于世。雖歷長生。古來不滿百年。焉鬱々久居此乎。不屑國家之隔。山海之遠。一超直入大明國。易吾朝風俗於四百餘州。施帝都政化于億萬斯年者。在方寸中。貴國先驅而入朝。有遠慮無近憂者乎。遠邦小島在海中者。後進輩者不可作許容也。予入大明之日。將士卒臨軍營。則彌可修隣盟也。予無它。只顯佳名於三國而已。方物如目錄領納。珍重保嗇不宣。

余謂。當即具由。奏聞天朝。首相以爲恐。皇朝罪我私通倭國。不如諱之。余曰。因事往來隣邦。有國之所不免。成化間。日本亦嘗因我求貢中國。即據實奏聞。天朝降勅回諭。前事已然。非獨今日。今諱不聞奏。於大義不可。況賊若實有犯順之謀。從他處奏聞。而天朝反疑。我國同心隱諱。則其罪不止於通信而已也。朝廷多是余議。者遂遣金應南等馳奏。時福建人許儀俊陳申等。被擄在倭中。已密報倭情。及琉球國世子尙寧。連遣使報聲息。獨我使未至。天朝疑我貳於倭。論議藉藉。閣老許國曾使我國。獨言。朝鮮至誠事大。小不與倭叛。姑待之。未久應南等賚奏至。許公大喜。而朝議始釋然云。

朝廷憂倭。擇知邊事宰臣。巡察下三道。以備之。金睟爲慶尙監司。李洸爲全羅監司。尹光覺爲忠淸監司。令備器械。修城池。慶尙道築城尤多。如永川淸道三嘉大丘星州釜山東萊晉州安東尙州左右兵營。或新築。或增修。時昇平既久。中外狃安。民以勞役爲憚。怨聞載路。余同年前典籍李魯陜川人貽書余言。築城非計。且曰。三嘉前阻鼎津。倭能飛渡乎。何爲浪築勞民。夫以。萬里滄溟猶不能禦倭。而欲限一衣帶水。必倭之不能渡。其亦疎矣。而一時人議如此。

壬辰四月十三日。倭兵犯境。陷釜山浦。僉使鄭撥死。先是倭平調信玄蘇等。與通信使偕來。館於東平館。備邊司請令黃允吉金誠一等。私以酒饌往慰。因從容問其國事。鉤察情形。以備策應。許之。誠一至館。玄蘇果密語曰。中國久絕日本。不通朝貢。平秀吉以此心懷憤恥。欲起兵端。朝鮮先爲奏聞。使貢路得達。則必無事。而日本六十六州之民。亦免兵革之勞矣。誠一等因以大義責諭之。玄蘇又曰。昔高麗導元兵擊日本。日本以此報怨於朝鮮。勢所宜然。其言漸悖。自是再不復問。而調信玄蘇

〔成化間云々〕成化は、明の憲宗の時の年號にて、我が百三代後土御門天皇の御宇に當れりこゝには、足利八代將軍義政の朝鮮交通のことを云ひし也。

〔琉球世子尙寧〕尙懿の子也、天正七年王位を繼ぐ。

〔三嘉〕慶尙南道陜川郡にあり、京城を去る南方六十八里餘也。

〔壬辰〕我が文祿元年也、此時釜山を陷れたるは、小西行長の軍也、行長依つて、五月三日付を以つて、感狀を下されたること、古今感狀集に見ゆ。

自回。辛卯夏、平義智又到釜山浦。爲邊將言、日本欲通大明。若朝鮮爲之奏聞則幸甚、不然兩國將失和氣。此乃大事。故來告。邊將以聞、時朝議方咎通信。且怒其悖慢不報。義智泊船十餘日、怏怏而去。是後倭人不復至。釜山浦留館倭常有數十餘人、稍々入歸。一館幾空。人恠之。是日倭舡自對馬島蔽海而來。望之不見其際。釜山僉使鄭撥出獵絶影島。狼狽入城、倭兵隨至。登陸四面雲集。不移時城陷。左水使朴泓見賊勢大、不敢出兵。棄城逃、倭分兵陷西平浦多大浦。多大僉使尹興信、力戰被殺。左兵使李珏聞聲息、自兵營入東萊。及釜山陷、珏恇撓失措。託言欲在外掎角、出城退陣于蘇山驛。府使宋象賢留與同守、珏不從。十五日倭進迫東萊。象賢登城南門督戰。半日而城陷、象賢堅坐受刃而死。倭人嘉其死守、棺斂之埋於城外。立標以識之。於是郡縣望風奔潰。密陽府使朴晉自東萊奔還。欲阻鵲院隘路以禦之。賊陷梁山、至鵲院見有守兵。從山後乘高。蟻附散漫而至。守隘者望之皆散。晉馳還密陽、縱火焚軍器倉庫。棄城入山。李珏奔還兵營。先出其妾城中洶洶。軍一夜四五驚。珏乘曉亦脫身遁去。衆軍大潰、賊分道長驅。連陷諸邑、無一人敢拒者。金海府使徐禮元閉門城守。賊刈城外麥禾塡壕、頃刻與城齊。因踰城。艸溪郡守李某先遁。禮元繼出。城遂陷、巡察使金睟初在晉州。聞變馳向東萊。至中路聞賊兵已近不能前還走右道。不知所爲、但檄列邑諭民避賊。由是道內皆空。愈不可爲矣。

今按。辛卯萬曆十九年。日本天文十九年。

賊兵入咸鏡道。兩王子陷賊中。從臣金貴榮黄廷彧黄赤、及本道監司柳永立。北兵使韓克誠等皆被執。

〔多大浦〕釜山の西端にありて、鳴湖島・加德島に對す。

〔蘇山〕釜山の北方にあり、機張、東萊、梁山の中間に位す。

〔鵲院〕慶尙南道にあり、釜山と梁山との中間に位す。

〔天文十九年〕天正十九年の誤也。

〔賊兵入咸鏡道〕加藤淸正の率ゆる兵を云へり。

〔兩王子云々〕古今感狀集に「七月二十五日之書狀加披見候朝鮮之都を立五十二日丑寅差而押詰無難高麗之王子兄弟幷官人女官二百餘人生捕候之由無油斷働故思召候云々」とあり。

〔中山〕こゝは咸鏡道に向ひし軍情を記せる處なれば、咸興南道の甲山の誤なるべし。

〔閧〕鬨に同じ、鬨は篇海に「俗鬪字」とあれば、戰爭の意也。

〔鬮〕說文に「取也」又玉篇に「手取也」とあり、和訓「くじ」と云ふ、吉野日記うみかたはこゝにて二三日、兵議をなして是よりも所々の手宛の鬮をとり、ゐあどうには加藤殿、平安だうには小西攝津守殿云々とあり。

〔境城〕鏡城也、咸鏡北道鏡城郡の首邑也、京城を去る東北百四十二里餘あり。

南兵使李渾走至中山、爲我民所害、南北道郡縣。皆沒于賊。有倭學通事咸廷虎者、在京城爲賊將清正所得、同隨清正入北道、賊退後逃還京城。見余言北道事頗詳。清正在賊將中尤勇悍善鬪、與平行長同渡臨津、至黃海道安城驛。謀分掄兩界。各議所向。未決、二賊拈鬮、行長得平安道。清正得咸鏡道、於是正擒安城居民。使向導。二人辭。以生長此地不諳北路。清正卽斬之、一人懼請先導。從谷山地踰老里峴出於鐵嶺北。日行數百里、勢如風雨。北道兵使韓克誠。率六鎭兵。相遇於海汀倉。北兵善騎射。地又平衍乃左右迭出。且馳且射、賊不能支。退入倉中。時日已暮、軍士欲少休侯賊出。明日復戰、克誠不聽、揮其軍圍之賊出倉中穀石、列置爲城。以避矢石。從其內多發鳥銃。我軍櫛比而立、中聲如束、中必貫穿、或一丸斃三四人、軍遂潰、克誠收兵退屯嶺上。欲天明更戰。夜賊潛行環我軍、散伏于草間。朝大霧。我軍猶意賊在山下。忽一聲砲響。從四面大呼突起。皆賊兵也。軍遂奔潰將士、向無賊處奔走、悉陷泥澤中。賊追至斫、死者無數、克誠遁入境城、遂被擒。兩王子臨海君。順和君。俱至會寧府。蓋順和君初在江原道。賊兵入江原道、故轉向北道。是時賊窮追王子。會寧吏鞠景仁率其類叛、先縛王子及從臣以迎賊。賊將清正解其縛、留置軍中。還屯咸興。獨漆溪君尹卓然、路中稱病。從他路深入別害堡。同知李墍不從、王子留江原道。皆免執。柳永立拘賊中數日。賊以爲文官。防禁少懈。永立乘間脫走還行在。

今按、行長清正拈鬮事、與清正記合。會寧吏鞠景仁縛兩王子迎清正、與清正挽詞異。挽詞說見前。

〔上〕宣宗を云へり朝鮮王十四代也。

〔世子〕皇太子光海君を云へり。

〔大同館門〕平壤の南東の廓門にして大同江に臨めり。

〔大同江〕一に浿水と稱す、平安南道の東北境劔山附近に發し、南西流して平壤に至り、西流して黄海に注ぐ長さ七十里餘あり

〔位版〕位牌也

〔行宮〕天子の假宮也、行在して漸く坐す宮の義也、通鑑綱目集覽に「故行曰乘輿、止曰行在」とありて、天子の居宅につきて云ふ也。

命左相尹斗壽。率都元帥金命元巡察使李元翼等守平壤。數日前城中人。聞車駕欲出避。各自逃散。閭里幾空。上命世子出大同館門。集城中父老。諭以堅守之意。父老進前曰。但聞。東宮之令。民心不信。必得聖上親諭乃可。明日上不得已御館門。令承旨曉諭如昨。父老數十人拜伏痛哭。承命而退。遂各分出。招呼。悉追老弱男婦子弟之竄伏山谷者入城。城中皆滿。及賊見形於大同江邊。宰臣盧稷等奉廟社位版。並護宮人。先出。於是城中吏民作亂。梃刃橫路。縱擊之。墜廟社主路中。指從行宰臣。大罵曰。汝等平日偸食國祿。今乃誤國欺民乃爾耶。余自練光亭赴行宮。路上見婦女幼稚。皆怒髮上指。相與號呼曰。旣欲棄城。何故紿我輩入城。獨使魚肉於賊手耶。至宮門。亂民塞街。皆袒臂持兵仗。遇人輒擊。紛囂雜沓不可禁。諸宰在門内朝堂者。皆失色起立於庭中。余恐亂民入宮門。出立門外階上。見其中有年長多髯者。以手招之。其人卽至。乃土官也。余諭之曰。汝輩欲竭力守城。不願車駕出城。爲國之忠則至矣。但因此作亂。至於驚擾宮門。事甚可駭。且朝廷方啓請堅守。上已許之。汝輩何事乃爾。覩汝貌樣。乃有識人。須以此意曉喩衆人而退。不爾則汝輩將陷重罪。不可赦也。其人卽棄杖。斂手曰。小民聞欲棄城。不勝憤氣。妄動如此。今聞此言。小人雖迷劣。胷中郎豁然矣。遂揮其衆而散。蓋前此朝臣聞賊兵將近。皆請出避。兩司弘文館。連日伏閤力請。寅城府院君鄭澈尤主避出之議。余曰。今日事勢與前在京城時有異。京城則軍民崩潰。雖欲守之末由也。此城前阻江水而民心頗固。且從此原地方若堅守數日。天兵必來救。猶可藉以却賊。不然從此至義州。更無可據之地。勢必至於亡國。左相尹斗壽同余議。余又謂鄭澈曰。平時每意公慷慨不避難易。

〔江沙上〕大同江の沙洲なる羊角、狸岩、蓬萊等の諸島を差して云へり。

〔練光亭〕今平壤府觀察府の東端、大同門に近き處に舊蹟存す。

〔車賀〕車駕に同じ天子の車也、賀は牛馬の牽く車を云ふ、揚子方言に、「凡以驢馬駝駞載物者謂之負他、亦謂之賀」とあり。

〔義州〕義州也、平安北道の北端にありて鴨綠江に沿ふ。

〔至遼東云々〕吉野日記に「こゝに一つの大事あり、唐高麗のさかひなるりうとう國と云國と云々、六萬よきをもほして、平安の城にかゝりけるを云々」とあり。

不圖今日之議如此也。尹相詠文山詩曰。我欲借劍斬佞臣。寅城大怒。奮袂而起。平壤人亦聞余爲守議。故是日聞余言。頗順從而退。

時賊至大同江。已三日矣。余獲在練光亭。望見越邊。有一倭以木末懸小紙。挿江沙上。令火砲匠金生麗。棹小舟往取之。不帶兵器。與生麗握手。拊背。極款狎。附書以送。書至。尹相欲不聞。余曰。開見何妨。開視則書面云。上朝鮮國禮曹判書李公閤下。蓋與李德馨書。而平調信玄蘇所裁也。大槩欲見德馨議講解。德馨以扁舟會平調信玄蘇于江中。相勞問如平日。玄蘇言。日本欲借道朝貢中原。而朝鮮不許。故事至此。今亦借一條路。使日本達中原。則無事矣。德馨責以負約。且令退兵後議講解。調信等語頗不遜。遂各罷去。夕賊數千結陣於江東岸上。

車賀至義州。天將參將戴某。遊擊將軍史儒各領一枝兵。向平壤。至林畔驛。聞平壤已陷。亦還駐義州。天朝賜犒軍銀二萬兩。唐官領到義州。先是遼東聞我國有賊變。卽奏聞。而朝議多異同甚。或疑我爲賊向導。獨兵部尚書石星銳意救援。時我使申點在玉河館。尚書呼至廷。出遼東報變文書示之。點卽號慟。與一行朝夕大臨。先請援兵。尚書奏發二枝兵。往衞國王。及請賜銀。點囘至通州而告急。使鄭崐壽繼至。尚書引入火房。親問事狀。或至流涕云。至是連遣使至遼東。告急請援。且乞內附。蓋賊已陷平壤。則勢如建瓴。意謂。朝夕當至鴨綠江。事之急如此。故至欲內附。幸賊旣入平壤。斂跡城中。延至數月。雖順安永柔去平壤咫尺。而猶不來犯。以此人心稍定。收拾餘燼。導迎天兵。終致恢復之功。此實天也。非人力之所至也。

七月。遼東副摠兵祖承訓率兵五千來援。十九日祖總兵軍攻平壤。不利而退。史遊擊戰死。先是祖承訓至義州。史儒以其軍爲先鋒。祖乃遼左勇將。累與北虜戰有功。是行謂倭必可取。至嘉山問我人曰。平壤賊無乃已走耶。曰。不退。承訓擧酒。仰天祝之曰。賊猶在。必天使我成大功也。是月。自順安三更發軍。進攻平壤。適大雨。城上無賊守兵。天兵從七星門入城內。路狹多委巷。馬足不可展。賊依險阨亂發鳥銃。史遊擊中丸卽斃。軍馬多死。祖遂退軍。賊不急追。後軍陷泥潦中。不能自拔者。悉爲賊所害。承訓引餘兵。還過順安肅川。夜中至安州城外立馬。呼譯官朴義儉曰。吾軍今日多殺賊。不幸史遊擊傷死。天時又不利。大雨泥濘不能殲賊。當添兵更進耳。語汝宰相毋動浮橋。亦不可撤。言畢馳渡兩江。駐軍於控江亭。盖承訓戰敗膽慴恐賊追躡。欲前阻二江。故狹急如此。余使辛從事往慰。且載送糧餼。承訓留控江亭一日。連日夜大雨。諸軍露處野中。衣甲盡濕。皆怨承訓。已而退還遼東。余恐人心動搖。啓請仍留安州。以待後軍之至。

全羅水軍節度使李舜臣。與慶尙右水使元均全羅右水使李億祺等。大破賊兵于巨濟洋中。初賊旣登陸。均見賊勢大。不敢出擊。悉沈其戰舡百餘艘。及火砲軍器於海中。獨與手下裨將李英男李雲龍等乘四船。奔至昆陽海口。欲下陸避賊。於是水軍萬餘人皆潰。英男諫曰。公受命爲水軍節度。今棄軍下陸。後日朝廷按罪。何以自解。不如請兵於全羅道。與賊一戰。不勝然後逃。未晩也。均然之。使英男往舜臣請援。舜臣辭。以各有分界。非朝廷之令。豈宜擅自越境。均又使英男往請。凡往返至五六不已。每英男回。均坐船頭。望見痛哭。旣而舜臣率板屋船四十艘。並約億祺到巨濟。與均合兵。

（嘉山）平安北道博川郡にあり、安州定州間の要驛也。

（順安）平安南道平原郡にあり、平壤と安州との中間にあり。

（七星門）平壤の北端にありて、新溪谷山等の諸郡を經て咸鏡南道に通ずる街道の出發點也

（肅州）平安南道平原郡肅州を云ふ、順安と安州との中間に在り。

（兩江）淸川江と其の支流大寧江也、これによりて平安道を南北に分つ。

（昆陽海口）昆陽海は、慶尙南道昆陽郡沿岸に圍まるる一灣也、前に南海島ありて、外波の荒るゝを防ぐ。

（遼東金復海盖）遼東は、今の奉天省の南部の凡稱、金は其の地の金州、復は復州、海は海州、盖は蓋州也。

（普通門）平安南道平壤府北西普通江岸にあり、平壤に入るには、これより景昌門及び靜海門に通ずる二道に岐る、義州街道に通ずる要地也

進與賊船遇於見乃梁、舜臣曰。此地海狹水淺難於回旋、不知佯退誘賊、至海濶處相戰也、均乘憤欲直前搏戰。舜臣曰、公不知兵、如此必敗、遂以旗揮其船退、賊大喜、爭乘之、旣出隘口舜臣鳴鼓一聲、諸船一齊回棹、擺列於海中、正與賊舡撞著、相距數十步、先是舜臣創造龜舡、以板鋪其上。其形穹窿如龜、戰士櫂夫皆在其內。左右前後多載火砲。縱橫出入如梭、遇賊船連以大砲碎之、諸船一時合攻、烟焰漲天、焚賊船無數、有賊將在樓船高數丈上。施樓櫓。以紅段彩氈圍其外。亦爲大砲所破、賊悉赴水死。其後賊連戰皆敗、遂遁入釜山巨濟、不復出。一日方督戰、流丸中舜臣左肩。血流至踵、舜臣不言。戰罷始以刀割肉出丸、深入數寸、觀者色墨、而舜臣談笑自若。捷聞朝廷大喜、上欲加舜臣以一品。言者以爲太濫、陞正憲。億祺均陞嘉善。先是賊將平行長到平壤。投書曰。日本舟師十餘萬、又從西海來、未知大王龍御自此何之、蓋賊本欲水陸合勢西下。賴此一戰遂斷賊一臂。行長雖得平壤、而勢孤不敢更進。國家得保全羅忠淸。以及黃海平安。沿海一帶調度軍食傳通號令。以濟中興。而遼東金復海盖與天津等地。不被震驚。使天兵從陸路。來援以到却賊者。皆此一戰之功。嗚呼豈非天哉。舜臣因率三道舟師、留屯于閑山島、以遏賊西犯之路。

九月天朝遊擊將軍沈惟敬來。初祖承訓旣敗、賊愈驕投書我軍、有羣羊放一虎之語、羊喩天兵。虎以自託。聲言、朝夕將西下。義州人皆荷擔而立。惟敬本浙氏。石尚書以爲素諳倭情、假遊擊將軍號出送。旣至順安。馳書倭將。以聖旨責問、朝鮮有何虧負於日本、日本如何擅興師旅。時倭變猝發。且殘毒甚、人人惴恐、莫敢有窺其營者。惟敬以黃袱裹書、使家丁一人背負、騎馬直馳。由普通門而入倭將行長見其書、即回報。求面見議事。惟敬將往。人皆危之、多勸止者。惟敬笑曰。彼焉能害我也。從

三四家丁赴之。行長平義智玄蘇等。盛陳兵威。出會于城北十里外降福山下。我軍登大興山頭望見。倭軍甚多。劍戟如雪。惟敬下馬入倭陣中。羣倭四面圍繞。疑被拘執。日暮惟敬還倭衆送之。甚恭。翌日行長遣書致問。且曰。大人在白刃中。顏色不變。雖日本人無以加也。惟敬答之曰。爾不聞唐朝有郭令公者乎。單騎入回紇萬軍中。曾不畏懾。吾何畏爾也。因與倭約曰。吾歸報聖皇。當有處分。以五十日爲期。倭衆毋得出平壤西北十里外搶掠。朝鮮人毋入十里內與倭鬪。乃於地界立木爲禁標而去。我國人皆莫測。

京畿監司沈岱爲賊所襲。死於朔寧。岱爲人慷慨。自變後常憤惋。奉使出入。不避夷險。是年秋代權徵爲京畿監司。

江原道助防將元豪擊賊于龜尾浦。殲之。又戰于春川。兵敗而死。時賊大陣在忠州及原州。連營達于京都。其在忠州者。取路竹山陽智龍仁往來。其在原州者。欲從砥平楊根楊州廣州抵京。元豪擊殲于驪州龜尾浦。利川府使邊應星又船載射手。乘霧邀賊於驪州之馬灘。殺賊頗多。由是原州賊路遂斷。悉由忠州之路。而利川驪川楊根砥平等邑之民。見遺於賊鋒者。人以爲豪之功也。巡察使柳永吉又催豪。擊春川賊。豪既勝。頗有輕敵之意。賊知豪將至。設伏以待。豪不知而進。伏發。遂爲所殺。於是江原一道無禦賊者。

訓鍊副奉事權應銖鄭大任等。以鄉兵擊永川賊破之。遂復永川。應銖永川人。有膽勇。與大任率鄉兵千餘人。圍賊于永川。軍士畏賊不進。應銖斬數人。士卒爭奮。踰城而入。與賊巷戰。賊不勝。奔入倉

〔忠州〕忠淸北道忠州郡にあり、小西行長勢の屯所とす。

〔原州〕江原道原州郡にありて、加藤淸正勢の屯所とす。

〔竹山〕黃海道安城郡にあり、小西勢の進路に當る。

〔陽知〕黃海道龍仁郡にあり。

〔龍仁〕黃海道龍仁郡にあり。

〔砥平〕京畿道楊平郡にあり、加藤勢の進路に當れり。

〔楊根〕云畿道楊平郡にあり。

〔廣州〕京畿道廣州郡にあり、漢江を隔てゝ、京城と數里の地點にあり。

〔龜尾浦〕慶尙南道東萊郡にありて、洛東江に臨む。

〔義興〕慶尙北道軍威郡にあり、加藤清正勢の進路に當りし處也。

〔西生浦〕慶尙南道蔚山郡にあり、蔚山灣口に面す。

〔禮泉郡〕慶尙北道にあり。

中。或上明遠樓。我軍以火攻之。悉燒死。臭聞數里。餘賊數十遁歸慶州。自是新寧義興義城安東等處。賊皆聚一路。而左道郡邑得保。永川一戰之功也。

左兵使朴晉收復慶州。晉初自密陽奔入山中。朝廷以前兵使李珏棄城逃走。即其所在誅之。以晉代爲兵使。時賊兵充滿。行朝聲聞不通南方已久。人心搖動。不知所出。及聞晉爲兵使。於是散民稍集。而守令往往從山谷中復出莅事。始知有朝廷矣。及權應銖復永川。晉率左道兵萬餘進薄慶州城下。賊潛出北門掩軍後。晉奔還安康。夜又使人潛伏城下。發飛擊震天雷。入城中墮於客舍庭中。賊不曉其制。爭聚觀之。相與推轉而諦視之。俄而炮自中而發。聲震天地。鐵片星碎中仆。即斃者二十餘人。未中者亦顚仆。良久而起。莫不驚愼。不測其制。皆以爲神。明日遂擧衆棄城。遁歸西生浦。晉遂入慶州。得餘穀萬餘石。事聞。陞晉嘉善。應銖通政。大任禮泉郡守。震天雷飛擊。古無其制。有軍器寺火砲匠李長孫者。創出。取震天雷以大碗口發之。能飛至五六百步墜地。良久火自內發。敵最畏此物。

又卷之二

獲賊諜金順良。余自安州遣軍官成男。持傳令密約。進取事于水軍將金億秋。時十二月初二日也。戒曰六日內回繳。過期不繳。追成男詰之。成男云。已使江西軍人金順良還納。又捕順良來問。傳令安在。其人故作迷罔狀。言辭流遁。成男曰。此人持傳令出。數日還軍中。牽一牛來。與同伴屠食。人問牛何來。順良答曰。吾牛而寄養族人家。故還取耳。今聞其言。蹤跡可疑。余始令拷掠而嚴鞫之。乃吐實

曰。小人爲賊間。其日受傳令及秘密公文。直入平壤示賊。賊將置傳令案上。公文則見卽扯裂。賞一牛。同爲間者徐漢龍賞紬五匹。約更探外事。期十五日來報。故聽出矣。余問。爲間者獨汝乎。更有幾人。對曰。凡四十餘輩。每散出順安江西諸陣。以至肅川安州義州。無不貫穿行走。隨事輙報。余大駭。卽狀啓。又按名急通諸陣捕之。或得或逸。斬順良於城外。不久天兵至。而賊不知。盖其類駭散故耳。茲亦事機之偶然者。莫非天也。

十二月。天朝大發兵。以兵部右侍郞宋應昌爲經略。兵部員外郞劉黃裳。主事袁黃。爲贊畫軍務。駐遼東。提督李如松爲大將。率三營將李如栢張世爵楊元及南將駱尙志吳惟忠王必迪等渡江。兵數四萬餘。先是沈惟敬既去。倭果歛兵不動。既而過五十日。惟敬不至。倭疑之。聲言。歲時將飲馬鴨綠江。自賊中逃回者皆言。賊大修攻城之具。人以爲懼。十二月初惟敬又至。再入城中。留數日。更相約誓而去。所言不聞。至是兵至安州。下營於城南。旌旗器械整肅如神。

提督使副總兵査大受。先往順安。給倭奴曰。天朝已許和。沈遊擊且至。倭喜。玄蘇獻詩曰。扶桑息戰服中華。四海九州同一家。喜氣忽消寰外雪。乾坤春早太平花。時癸巳春正月初吉也。使其小將平好官領二十餘倭。出迎沈遊擊于順安。査總兵誘與飲酒。伏起縱擊之。擒平好官斬戮。從倭幾盡。三人逸馳去。賊中始知兵至。大擾。時大軍已到肅州。日暮方下營做飯。纔至。提督彎弓鳴弦。卽以數騎赴順安。諸營陸續進發。翌日朝進圍平壤。攻普通門七星門。賊登城上。列竪紅白旗拒戰。天兵以大炮火箭攻之。砲聲震地數十里。山岳皆動。火箭布空如織。烟氣蔽天。箭入城中。處處火起。林木皆焚。駱尙

〔扯裂〕引きさく也、扯は、撦の俗字にして、開裂の意也。

〔按名〕名簿を検するを云ふ、按は、廣韻に「又察行也、考驗也、」とあり。

〔天兵〕官軍を云ふ。

〔渡江〕江は鴨綠江を云ふ。

〔四海九州〕共に廣く國土に云ふ、世界萬國の意、四海は爾雅に「九夷八狄七戎六蠻謂之四海」と見え、九州は、古支那にて本國以外の地を九ヶ州に分けたる稱也。

志英惟忠等率親兵蟻附登城。前者墜、後者升。莫有退者。賊刀槊下垂。城堞如蝟毛。天兵戰益力、賊不能支。退入内城。斬馘焚燒。死者甚衆。天兵入城攻内城。賊於城上爲土壁。多穿孔穴。望之、如蜂窠。從穴中銃丸亂發。天兵多傷。提督慮窮寇致死。收軍城外以開走路。其夜賊渡氷過江遁去。先是余在安州。聞大兵將出。密報黄海道防禦使李時言金敬老使邀其歸路。戒之曰。兩軍沿途設伏。俟賊過躡其後。賊飢困遁走。無心戀戰。可盡就縛。時言卽至。敬老辭以他事。余又遣軍官姜德寬督之。敬老不得已亦來中和。賊退前一日。因黄海道巡察使柳永慶。關還走載寧。時永慶在海州。欲自衛。而敬老憚與賊戰避去。賊將平行長平義智玄蘇平調信等。率餘衆連夜遁還。氣乏足繭、跛躄而行。或匍匐田間。指口乞食。我國無一人出擊。天兵又不追之。獨李時言尾其後。不敢逼。但斬飢病落後者六十餘級。是時倭將之在都城者平秀嘉。乃關白姪。或言壻也。年幼不能主事軍務。制在行長。而清正在咸鏡道。未還。若行長義智玄蘇等就擒則京城之賊自潰。京城潰則清正歸路斷絶。軍心洶懼、必沿海遁走不能自拔。漢江以南賊屯次第瓦解。天兵鳴皷徐行。直至釜山痛飲而已。俄頃之間、海岱肅清安有數年之紛々哉。一夫不如意。事關天下。良可痛惜。余狀啓請斬金敬老。盖余爲平安道體察使。敬老非管下。故先請之。朝廷遣宣傳官李純一。持標信至開城府。欲誅之。先告于提督。提督曰。其罪應死。然賊未滅。一武士可惜。姑令白衣從軍。使之立功贖罪可也。爲咨文授純一而送。適李鎰巡邊使。史以李薲代之。平壤之戰。天兵從普通門而入。李鎰及金應瑞等。從含毬門而入。及收兵皆退屯城外。夜賊遁去。明朝始覺之。李提督咎我軍不警守使賊遁去。而不知於是天將之會

〔載寧〕黄海道載寧郡にあり、京城を去る北四十餘里也。

〔平義智〕宗義智をいふ。

〔平調信〕柳川調信也。

〔平秀嘉〕浮田秀家の誤也、秀家明暦元年八十三才を以て終ると云へば、此の時は二十歳頃也。

〔乃關白姪云々〕秀家の父直家天正十年卒す、秀吉取て子となし、美作國を授くと云へば、猶子の誤聞也。

〔坡州〕京畿道坡州郡の首邑也、京城の北七里、臨津江の南岸にあり。

〔碧蹄南〕卽ち碧蹄館を云ふ、京城を去る北西三里、今京畿道楊州郡碧蹄驛に舊趾あり。

〔三鼓〕夜の十二時を云ふ、三更に同じ。

往來順安。與李薲相熟者爭言。鎰非將才。獨李薲可。提督移咨言狀。朝廷使左相尹斗壽至平壤。問鎰罪。欲行軍法。良久疑釋之。更以薲代鎰。選兵三千騎。從提督而南

今按癸巳。萬曆二十一年。我文祿二年。

李提督進兵坡州。與賊戰於碧蹄南。不利還。屯開城。初平壤既復。大同以南沿途賊屯皆遁去。提督欲追賊。謂余曰。大軍方前進。而聞前路無糧草。議政既爲大臣。當念國事。不可憚勞。宜急行准備軍糧。勿致疎誤。余辭出。時天兵先鋒已過大同江而南。簇擁塞路。不可行。余委曲疾行出軍前。夜入中和。至黃州已三鼓矣。時賊兵稍退。一路荒虛。人民未集。計無所出。急移文于黃海監司柳永慶。使之備運。又移文平安監司李元翼。調發金應瑞等所率軍人之不堪戰陣者。自平壤負載追隨。遂至黃州。又令舡運平安道三縣之穀。從青龍浦輪運於黃海道。事非預辦。臨時猝急而大軍隨至。恐乏軍興。爲之勞心焦思。永慶頗有儲峙。畏賊散逃山谷間。督民輪至沿途。不至闕乏。既而大軍入開城府。正月二十四日。賊疑我民爲之內應。且忿平壤之敗。盡殺京城中民庶。焚燒公私閭舍。殆盡而西路州屯之賊皆會京城。謀拒王師。余連請提督速進。提督遲徊者累日。進至坡州。翌日副總兵查大受與我將高彥伯領兵數百。先行偵探。與賊相遇於碧蹄驛南礪石嶺。斬獲百餘級。提督聞之留大軍。獨與家丁騎馬者千餘馳赴之。過惠陰嶺。馬蹶墮地。其下共扶起之。時賊屯大衆於礪石嶺後。只數百人在嶺上。提督望見。揮其兵爲兩翼而前。賊亦自嶺而下。漸相逼。後賊從山後遶上山。陣幾萬餘。天兵望之心懼。而已接刃不可解。時提督所領皆北騎。無火器。只持短劍鈍劣。賊用步兵。刃皆三四尺。

〔陽德〕平安南道陽德郡の首邑也、道の西南隅にありて咸鏡南道に隣る。

〔孟山〕平安南道孟山郡にあり、大同江の上流にて、道の東北隅に位し、孟山嶺を隔てゝ、咸鏡南道に接す。

〔畿甸〕畿內に同じ說文に「甸、天子五百里地」とあり、こゝにては、京畿道を云ふ。

精利無比。與之突鬪、左右揮擊、人馬皆靡、無敢當其鋒者。提督見勢危急、徵後軍、未至、而先軍已敗。死傷甚多、賊亦收兵不追。日暮提督還坡州、雖隱其敗、而神氣沮甚、夜以家丁親信者戰死痛哭。明日欲退軍東坡。余與右議政俞泓都元帥金命元元帥李薲等至帳下、提督出立帳外。諸將左右立。余力爭曰。勝負兵家常事。當觀勢更進。奈何輕動。提督曰。吾軍昨日多殺賊、無不利事、但此地經雨泥濘、不便駐軍、所以欲還東坡休兵進取耳。余及諸人爭之固。提督出示己奏本草。其中有曰賊兵在都城者二十餘萬、衆寡不敵。末又言、臣病甚、請以他人代其任。余駭、而以手指點曰賊兵甚少、何得有二十萬。提督曰。我豈能知之。乃汝國人所言也。蓋託辭也。諸將中張世爵尤勸提督退兵。以余等固爭不退、以足蹴、巡邊使李薲叱退、聲色俱厲。是時大雨連日。且賊燒道邊諸山、皆兀兀無寸草。重以馬疫、數日間倒殞者殆將萬匹。

提督還平壤。時賊將清正、尙在咸鏡道。有人傳言、清正將自咸興踰陽德孟山襲平壤。時提督有北還意、未得其機、因此聲言、平壤乃根本。若不守大軍無歸路、不可不救、遂引軍還平壤、留王必迪守開城。謂接伴使李德馨曰、朝鮮之軍、勢孤無援。宜悉還江北。是時全羅巡察使權慄在高陽幸州巡邊使李薲在坡州高彥伯李時言等在蟹踰嶺元帥金命元在臨津南、余在東坡。提督恐爲賊所乘故云然。余使從事官辛慶晉馳見提督、陳不可退軍者五。先王墳墓皆在畿甸、淪於賊藪。神人望切不忍棄去。一也。京畿以南遺民日望王師。忽聞退去無復固志、相率而歸賊。二也。我國境土尺寸、不可容易棄之。三也。將士雖力弱、方欲倚仗天兵共圖進取。一聞撤退之令、必皆怨憤離散。四也。一退

（據京城已二年）我軍の京城を陥れしは、前年（萬暦辛卯年）の四月也。

（列泊江岸）江岸は、漢江の岸也。

（京都）京城也。

而賊乘其後、則雖臨津以北亦不可保也。提督默然而去、
全羅道巡察使權慄敗賊于幸州。移軍披州。先是慄以光州牧使代李洸爲巡察使、率兵勤王。懲李洸等野戰而敗、至水原據禿城山城。賊不敢攻。乃聞天兵將入京城、渡江陣于幸州山城。至是賊從京城大出攻之、軍中洶懼欲散。而江水在後。無走路。不得已還入城。力戰矢雨下、賊分爲三陣。迭進皆敗。會日暮。賊還入京城。

請發軍粮餘粟賑救飢民。許之。時賊據京城已二年、餘焰所被千里蕭然。百姓不得耕種、餓死殆盡。城中餘民聞余在東坡、扶携擔負而至者、不計其數。査總兵於馬山路中、見小兒匍匐飲死母乳、哀而收之。育於軍中。謂余曰、倭賊未退、而人民如此。將奈何。乃嘆息曰。天愁地慘矣。余聞之、不覺流涕。時大兵將再至。糧船之自南方來者、皆列泊江岸。不敢他用。適全羅道召募官安敏學募得皮穀千石、船運而至、余喜甚、卽狀啓、請以此賑救飢民。以前郡守南宮悌爲監賑官、取松葉爲屑。每松屑十分、合米屑一合、投水以飲之。人多穀少、所活無幾。唐將亦哀之。自分所食軍糧三十石賑給。百不能及一。又日夜大雨。飢民在余左右。哀吟呻楚、不可忍聞。朝起視之、狼藉而死者甚多。慶尙右道監司金誠一、亦遣前典籍李魯、告急于余曰、欲糴全羅左道之穀賑濟飢民。且爲春耕種子。而全羅都事崔鐵堅不肯賑貸。時知事金瓚爲體察副使、在湖西。余卽移文于瓚、令馳下全羅。自發南原等倉移一萬石于嶺南。以救之。大抵自京都至南邊、賊兵橫貫。時方四月、人民皆登山入谷、無一種麥之處、使賊更數月不退。則生類盡矣、

沉遊擊惟敬再入京城。誘賊退兵。四月初七日。提督率兵。自平壤還開城府。先是金千鎰陣中。有李藎忠者。自請入京。探候賊情。得見二王子及長溪君黃廷彧等還言。賊有講和意。既而賊投書於龍出舟師乞和。云云

四月二十日京城復。天兵入城。李提督館於小公主宅。後稱南別宮。前一日。賊已出城矣。余隨入城見。城中遺民百不一存。其存者皆飢羸疲困。面色如鬼。時日氣烘熱。人死及馬死者處處暴露。臭穢滿城。行者掩鼻方過。公私廬舍一空。獨自崇禮門以東。循南山下一帶。賊所止舍處稍存。宗廟三闕及鐘樓。各司館學。在大街以北者。蕩然惟餘灰燼而已。小公主宅。亦倭將秀嘉所止。故見遺。五月李提督追賊。至聞慶而回。宋侍郎始發牌文於提督。使之追賊。時賊去已數十日。侍郎恐人議己縱賊不追。故作如此擧止。以示之。其實畏賊不敢進而回。賊在途。緩々而去。或留。或行。我軍之在沿途者。皆左右屛迹。無敢出擊者。賊退分屯於海邊。自蔚山西生浦至東萊金海熊川巨濟。首尾相連。凡十六屯。皆依山憑海。築城掘塹。爲久留計。不肯渡海。天朝又使泗川總兵劉綎率福建西蜀南蠻等處召募兵五千。繼出屯星州八營。南將吳惟忠屯善山鳳溪。李寧祖承訓葛逢夏屯居昌。駱尙志王必迪屯慶州。環四面而相持不進。糧餉取之兩湖。踰越險阻。散給諸陣。民力爲困。提督又使沈惟敬往諭倭。令渡海。又使徐一貫謝用梓入那古邪。見關白。六月。賊始還兩王子臨海君。順和君。及宰臣黃廷彧黃赫等。遣沈惟敬歸報。而一面進圍晉州。聲言。報前年戰敗之怨。蓋賊於壬辰圍晉州。牧使金時敏禦之。不克而退。故云然也。八日而城陷。牧使徐禮元。判官成守璟。倡義使金千鎰。本道兵使崔慶會。忠淸兵使

〔崇禮門〕京城八門の一、俗に南大門と云ふ、壯奐雄偉堅牢無比と稱せらる。

〔南山〕京城の南隅を占め、崇禮門の右方に當る高丘を云ふ。

〔三闕〕昌德宮、慶福宮、慶熙宮の三宮殿を云ふ。

〔那古邪〕肥前名護屋也。

黄進。義兵復讎將高從厚等皆死。軍民死者六萬餘人。牛馬雞犬不遺。賊皆夷城塡濠、堙井刊木、以快前憤。時六月二十八日也。初朝廷聞賊南下、連下旨、督諸將追賊。都元帥金命元。巡察使權慄以下官義兵。皆聚於宜寧。懲狃於幸州之捷、欲渡岐江前進。郭再佑高彦伯曰。賊勢方盛。我軍多烏合。堪戰者少。前頭又無糧餉。不可輕進。他人依違而已。李蘋從事成好善。駭不曉事。奮臂責諸將逗留。與權慄議合。遂過江進至咸安。城空無所得。諸軍乏食。摘青柿實以食。無復鬪心矣。明日諜報。賊從金海大至。衆或言。當守咸安。或言。退守安鼎津。紛紜不決而已。聞賊砲響、人人洶懼。爭出城。墮吊橋死者甚多。還渡鼎津。望見賊兵。從水陸來、徹野塞川。諸將各自散去。權慄金命元李蘋崔遠等先向全羅道。惟金千鎰崔慶會黄進等入晉州。賊隨至圍之。牧使徐禮元判官成守璟曰。唐將支待。差使員久有尙州。聞賊向本州、狼狽而還。纔二日矣。州城本四面據險。壬辰移東面、下就平地。至是賊立飛樓八座。俯瞰城中。刈城外竹林、作大束。環列自蔽。以防矢石。從其內發鳥銃如雨。城中人不敢出頭。又千鎰所率、皆京城市井召募之徒。千鎰又不知兵事而自用太甚。且素惡徐禮元。主客相猜。號令乖違。是以甚敗。惟黄進守東城。敢戰數日。爲飛丸所中死。軍人奪氣。而外援不至。適天雨。城壞。賊蟻附而入。城內人方束荊投石。極力禦之。賊幾却。千鎰軍守北門。意城已陷先潰。賊在山上望見軍潰一擁而登。諸軍大亂。千鎰在矗石樓。與崔慶會携手痛哭。赴江死。軍民得脱者數人而已。自有倭變以來。人死未有如此戰之甚者。朝廷以千鎰死義。贈以崇秩議政府右贊成。又以權慄敢戰不畏賊。代命元爲元帥。劉總兵綎聞晉陷。自八莒馳至陝川。吳惟忠自鳳溪至艸溪。以護右道。賊亦既破晉

〔烏合〕諸方より集りて統一することなき軍勢を云ふ、文選に「新起之寇、烏合之衆、非吳蜀之敵」などとありて、註に「烏合之衆者、謂無部分也」とあり。

〔飛樓八座〕高樓八棟の意也、飛樓は唐書にも「史思明爲飛樓」とも見え屋宇の高く峙ちたるものを云ふ、飛は、釋名に「船上重室曰飛廬」とある註に「在上曰飛也」とありて高きに云ふ。

州還釜山聲言。待天朝許和乃渡海云。十月車駕還都。十二月天使行人司行人司憲來。先是沈惟敬挾倭將小西飛持關白降表而歸。天朝疑降表非出於關白。行長等詐爲之。又惟敬纔至而晉州見陷。納款之意不誠。留小西飛於遼東久不報。提督及諸將皆還去。惟劉綎吳惟忠王必迪等。萬餘兵駐劄八莒而中外飢甚。且困於饋運。老弱轉溝壑。壯者爲盜賊。重以癘疫。死亡殆盡。至父子夫婦相食。暴骨如莽未幾。劉軍自八莒移南原。又自南原還都城。留十餘日。逡巡西去。而賊猶在海上。人心益恐。於是經略宋應昌被劾去。新經略顧養謙代至遼東。遣參將胡澤以劄付來諭我羣臣。其略曰。倭奴無端侵爾。勢如破竹。據王京開城三都會。有爾土地人民十八九。虜爾王子陪臣。皇上赫怒興師。一戰而破平壤。再進而得開城。倭奴竟遁王京。送還王子陪臣。復地二千餘里。所費努金不貲。士馬物故亦不少。朝廷之待屬國恩義止此。皇上罔極之恩亦已過矣。今餉已不可再運矣。兵已不可再用矣。而倭奴亦畏威請降。且乞封貢矣。天朝正宜許之封貢。容之爲外臣。驅倭盡數渡海。不復侵爾。解禁息兵。所以爲爾國久遠計也。今爾國糧盡。人民相食。又何恃而請兵耶。既不與兵餉於爾國。又絕封貢於倭奴。倭奴必發怒於爾國。而爾國必亡。安可不早自爲許耶。昔句踐之困於會稽也。豈不欲食夫差之肉乎。而姑忍恥含詬。以有待也。身且爲臣也。妻且爲妾也。況爲倭奴請爲臣妾於中國以自寬。而徐爲之圖。是愈於句踐君臣之謀也。此而不能忍。是悻々小丈夫之見耳。非復讎雪恥之英雄也。爾爲倭請封貢。若果得請。則倭必益感中國。而且德朝鮮。必罷兵而去。倭去而爾國君臣遂苦心焦思。臥薪嘗膽。以修句踐之業。天道好還。安知無報倭日也。其言縷縷千百。大意如此。胡

〔小西飛〕秉燭譚に「文祿壬辰の役に日本より小西飛と云ふもの朝鮮にわたり、明人と對談せしこと、懲毖錄等の書に萬曆年間に記載す、此は大田飛驒守と云ふ人なり」とあるも、こゝは小西行長を云へり。

〔罔極之恩〕恩の廣大なるを云ふ、罔極は、限り無き意。詩經に「欲報之德、昊天罔極」とあり。

〔昔勾踐之云々〕勾踐は越王、夫差は吳王也。

〔臥薪嘗膽〕仇を報いんが爲めに苦心するを云ふ、吳越春秋に「越勾踐臥薪嘗膽欲報吳」とある故事に出づ。

〔漢城〕今朝鮮京畿道京城府を云ふ、一に漢陽とも稱す

〔熊川〕慶尙南道昌原郡にあり、京城を去る北七十六里、鎭海灣に臨み、又釜山と鎭海の中間に位す。

澤在館三月餘、朝議不決。聖意愈難之。臣時以病在告、啓曰、請封義固不可。惟當詳其近日事情奏聞、以聽中朝處置。屢啓乃允、於是陳奏使許頊去、時顧經略又以人言辭去、新經略孫鑛來代。兵部發請。收小西飛入京。詰以三事。一但求封不求貢、二一倭不留釜山、三永不侵朝鮮。如約卽封。不如約不可。小西飛指天爲誓。請遵約束。遂令沈惟敬更帶小西飛入倭營宣諭。又差李宗誠楊方亨爲上副使往封平秀吉日本國王、而使宗誠等留我都城、候倭盡撤方行。乙未四月、宗誠等至漢城連遣使促倭渡海、項背相望。於是倭先撤熊川數陣及巨濟場門蘇津浦等諸屯、以示信。且曰、恐如平壤見欺。願天使速入倭營。當悉如約。八月、楊方亨因兵部劄付先到釜山、而倭遷延、不卽盡撤、更請上使。人多疑之。兵部尚書石星信沈惟敬言、意倭無異情、又急於退兵、屢促宗誠前去。雖朝議多異、而星奮然以身當之。九月、宗誠纔至釜山、平行長不卽來見。又言將往復關白、定奪然後迎天使。行長入日本、丙申正月始廻、猶不明言撤兵事。沈惟敬留二使、又獨與行長先行渡海、託言將豫定迎使禮節。人莫能測。惟敬錦衣登舟。旗上大書調戢兩國四字。立船頭而去。旣去久無回報。李宗誠乃開國功臣文忠之後、以功襲爵。紈綺子弟、性頗恇㤼。或言於宗誠曰、倭酋實無受封意。將誘致宗誠等拘囚而困辱之。宗誠懼甚。夜半以微服出營。盡棄僕從幡重印節而逃。翌朝倭始覺。分道追之。至梁山石橋。不得而回。楊方亨獨留倭營。撫戢群倭、且移文我國。令勿驚動。宗誠不敢由大路、竄入山谷中。數日不食。從慶州來西去。旣而沈惟敬行長始廻、又撤西生浦竹島等屯。其未撤者。只釜山四屯。乃挾楊副使過海。沈惟敬又要我使同行。遣其姪沈懋時催發。朝廷不肯。懋時必欲

〔伏見城〕山城國紀伊郡伏見町の東方に舊趾あり、文祿三年正月豐臣秀吉の築く處也。

〔淸正記〕加藤淸正の臣木村又藏の著最初太閤治世の大略朝鮮征伐の發企より、兩度の渡韓秀吉薨の事等に終る、就中淸正を主として諸將の軍功を記す、一名を木村又藏覺書と云ふ

與俱。不得已以武臣李逢春等稱跟隨陪臣。以應之。或謂武人往彼。中多失誤。宜使文官識事理者往。時黃愼以沈接伴使在倭營。就令愼隨行。天使楊方亨沈惟敬。回自日本。先時方亨等至日本。關白盛飾館宇。欲迎接。會一夜地大震。摧倒幾盡。遂迎候於他舍。與兩使一再會。初若受封者然。忽大怒曰。我放還朝鮮王子。朝鮮當使王子來謝。而使臣秩卑。是謾我也。黃愼等不得傳命。並促楊方亨沈惟敬等同回。亦無謝恩天朝之禮。賊將平行長回釜山浦。淸正復率兵纔屯西生浦。聲言。要王子來謝始解兵。關白所求甚大。不止封貢。中朝但許封不許貢。況惟敬與平行長相熟。欲臨事彌縫。苟且成事。而不以實情聞諸天朝。與我國事竟不諧。本國卽遣使馳奏其事。於是石星沈惟敬皆得罪。而天兵再出矣。

今按。乙未。萬曆二十三年。日本文祿四年。丙申。萬曆二十四年。日本慶長元年。會一夜地大震。此年閏七月十二日地震。伏見城摧倒。詳見淸正記。

建水軍統制李舜臣下獄。初元均德舜臣來救。相得甚懽。既而爭功。漸不相能。均性險詖。且多連結於中外。搆誣舜臣。不遺餘力。每言舜臣初不欲來。因我固請乃至。勝敵我爲首功。時朝議分岐。各有所主薦。先是賊將平行長使率倭要時羅（ヨジロウ）往來慶尙右兵使金應瑞陣。致慇懃。方淸正欲再出也。時羅密言於應瑞曰。我將行長言。今此和事不成由於淸正。吾甚疾之。某日淸正當渡海。朝鮮善水戰。若要諸海中。可以敗殺。愼毋失也。應瑞上其事。朝議信之。海平君尹根壽尤踴躍。以爲機會難失。屢啓之。連催舜臣前進。舜臣疑賊有詐。遲徊者累日。至是要時羅又至曰。淸正今已下陸。朝鮮何

〔玄風〕慶尙北道達城郡にあり、洛東江の上流右岸にありて、慶尙南道堺に位置す。

〔閑山〕慶尙南道統營郡にあり、巨濟島と相接する一小島也。

〔湖嶺〕南部朝鮮山脈の一支脈たる智異山山脈の一嶺にして、慶尙南道と全羅南道との境に跨る。

不要截。佯致恨惜之意。事聞。廷議皆咎舜臣。臺諫請拿鞫。慶尙道玄風人前縣監朴惺者。亦承望時論。上疏極言舜臣可斬。遂遣義禁府都事拿承、元均代爲統制使。上猶疑。所聞不盡實。特遣成均司成南以信。下閑山廉察。以信旣入全羅道。軍民遮道。訟舜臣寃者不可勝數。以信不以實聞。乃曰。清正留海島七日。我軍若往可縛來。而舜臣逗遛失機。舜臣至獄。命大臣議罪。獨判中樞府事鄭琢言。舜臣名將。不可殺。軍機利害難可遙度。其不進未必無意。請寬恕以責後效。栲問一次。減死削職充軍。舜臣老母在牙山。聞舜臣下獄。憂悸而死。舜臣出獄。道過牙山。成服卽往。權慄帳下從軍。人聞而悲之。天朝以兵部尙書邢玠爲總督軍門。遼東市政司楊鎬爲經理朝鮮軍務。麻貴爲大將。楊元劉綎董一元等相繼而出。丁酉五月、楊元領三千兵。先至留京城數日。下全羅道。駐守南原。蓋南原據湖嶺之衝。城頗堅完。往時駱尙志。又增築可守故也。城外有蛟龍山城。衆議。欲守山城。楊元以爲。本城可守。增埤浚濠。濠內又設羊馬墻。晝夜董役。月餘粗完。

今按。丁酉。萬曆二十五年。日本慶長二年。

八月初七日閑山舟師潰。統制使元均。全羅右水使李億祺死慶尙右水使裵褉走免。初元均旣至閑山。盡變舜臣約束。凡褊裨士卒。稍爲舜臣所任使者皆斥去。以李英男詳知已前日奔敗狀。尤惡之。軍必怨憤。舜臣在閑山時作堂。名曰運籌。日夜處其中。與諸將共論兵事。雖下卒欲言軍事者。許來告以通軍情。每將戰。悉招褊裨問計。謀定而後戰。故無敗事。均挈愛妾居其堂。以重籬隔內外。諸將罕見其面。又嗜酒。日事酗怒。刑罰無度。軍中竊語曰。若遇賊惟有走耳。議將私相譏笑。亦不復稟

〔絕影島〕釜山浦の入口にあり、一に竹島と云ふ、再征(此の時)の時には朝鮮再征秀吉人數分數目錄に「竹島ノ城、羽柴久留目侍從千人」とあり。

〔將士四百餘人〕武書所載、秀吉朱印狀に「七月十六日之注進狀今日九日到來(本書八月初旬となす些か相違あるも同戰のことなり)云々、釜山浦へ切々取出日本通路相支候處去十五日夜相働彼番船百六十餘艘伐捕外海へ追入并先々津津浦十五六里之間船共悉燒捨之手柄之段無比類候」とあり、彼軍の大敗の樣を知らる。

畏。故號令不行。時賊將再入寇。平行長又遣要時羅。紿金應瑞曰。倭船某日當添至。朝鮮舟師猶可邀擊。都元帥權慄尤信其說。且以李舜臣逗留得罪。日促元均進兵。均亦以已前常言。舜臣見賊不進。以此陷舜臣。而已得代其任。至是雖知其勢難。而慙無以爲辭。只得盡率舟艦進前。倭營之在岸上者。傍覘船行。互相傳報。均至絕影島。風作浪起。日已昏。船無止泊處。望見倭船出沒海中。均督諸軍進戰。舟中人自閑山終日搖櫓。不得休息。又困飢渴。疲不能運船。諸船縱橫進退。乍前乍却。倭欲疲之。與我船相近。輒僞佯引避而去。不與交鋒。夜深風盛。我船四散。分漂不知去向。均艱收餘船。還至加德島。軍士渴甚。爭下船取水。倭兵從島中突出掩之。失將士四百餘人。均又引退至巨濟泰川島。權慄在固城。以均無所得。檄召均杖之。督令更進。均還到軍中。益忿懣飲酒醉臥。諸將欲見均言事。不得。夜半倭船來襲之。軍大潰。均走至海邊。弃舟登岸欲走。而體肥鈍。坐松樹下。左右皆散。或言。爲賊所害。或言走免。終不得其實。李億祺從船上投水。裵楔先是屢諫均必敗。是日又言泰川島淺窄不利行船。宜移陣他處。均皆不聽。楔私約一所領船。戒嚴待變。見賊來犯。奪港先走。故其軍獨全。楔還至閑山島。縱火焚廬舍糧穀軍器。徙餘民之留在島中者。使避賊而去。閑山既敗。賊乘勝西向。南海順天次第陷沒。賊舡至豆耻津。下陸進圍南原。南湖大震。蓋賊自壬辰入我境。惟見敗於舟師。平秀吉憤之。責行長必取舟師。行長佯輸款於金應瑞。使李舜臣得罪。又誘元均出海中。盡得其虛實。因行掩襲。其計至巧。至我悉墜其計中。哀哉。倭兵陷黃石山城。安陰縣監郭趍前咸陽郡守趙宗道死之。初體察使李元翼。元帥權慄。議修道內山城。禦賊築公山金烏龍紀富山等城。而公山金

〔斗絶〕山勢斗桝の隅の如く曲りて岨つを云ふ。

〔靜帖〕靜かに落着ける也。

〔奔竄〕竄は奔の古字也、走り逃るゝを云ふ。

〔閑山敗報〕慶長二年七月十五日閑山島附近の海洋に韓將元均の艦艦を要擊してこれを敗りし也。

〔洶々〕康熙字典に鼓動聲也とあり。

鳥用長力尤多。悉收芻郡器械糧餉實其中督守。令盡率老弱男婦入守。遠近騷然。及賊再動清正自西生浦西向全羅將與行長水路兵會攻南原。元帥以下的望風引去。傳令各處出城入守者。各散去避兵。惟義兵將郭再佑入昌寧火王山城。期死守。賊到山下。仰見形勢斗絶。而城內人靜帖不動。不攻而去。安陰監郭䞭入黃石山城。前金海府使白士霖亦入城中。士霖武人。衆心倚以爲重。賊兵攻城一日。士霖先遁。諸軍皆潰。賊入城。䞭與子履祥履厚皆死。䞭女嫁柳文虎。文虎爲倭所擄。郭氏已出城。聞之謂其婢曰。父死而不死爲有夫在耳。今夫又執。吾何生爲。自經死。趙宗道嘗曰。吾嘗從大夫之後。不可與奔竄之徒同死草間。死則當明白死耳。率妻子入城中。作詩曰。崆峒山外生猶喜。巡遠城中死亦榮。遂與䞭同被害。復起李舜臣爲三道水軍統制使。閑山敗報至。朝野震駭。上引見備邊諸臣問之。羣臣惶惑不知所對。慶林君金命元兵曹判書李恒福從容啓曰。此元均之罪。惟當起李舜臣爲統制使耳。從之時權慄聞元均敗。已使李舜臣往收餘兵。賊方衝斥。舜臣與軍官一人。自慶尙道入全羅道。晝夜潛行。間關達珍島。欲收兵禦賊。倭兵陷南原府。天將楊元走還。全羅兵使李福男。南原府使任鉉助防將金敬老。光陽縣監李春元。唐將接伴使鄭期遠等皆死。有軍器寺破陣軍十二人。隨楊元入南原。皆被兵死。獨有金孝義者。得脫爲余道城陷事。甚詳。楊總兵既至南原。增築城一丈許。城外羊馬墻多穿砲穴。城門安大砲數三坐。鑿深濠塹一二丈。閑山既敗。賊從水陸而至。報甚急。城中洶洶人民逃散。獨總兵所領遼東馬軍三千在城內。總兵檄召全羅兵使李福男同守。福男遷延不至。連發夜不收催之。不得已乃至而所率纔數百。光陽縣監李春元。助防將金敬老等繼至。八月

〔遊兵〕所屬部隊を定めず、隨時救援に赴く爲めに備へたる兵也、史記彭越傳に「彭越常往來爲漢遊兵」とあり。

〔一更〕一夜を五つに區別したる第一の時刻、卽ち今の午後八時に當る、又た初更ともいふ、而して二更は十時、三更は十二時、四更は二時、五更は四時也。

〔家丁〕家の召使をいふ。

十三日。倭先鋒百餘到城下。放鳥銃。頃刻而止。皆散伏田畝間。三三五五作隊。既去復來。城上人以勝字小砲應之。倭大陣在遠。出遊兵交戰。陣行迭出。故砲發不能中。而守城卒往往中賊丸斃。既而倭到城下。呼城上人求與語。總兵使家丁一人挾通事往倭營。以倭書來。乃約戰書也。十四日。倭環城三面結陣。以銃砲迭攻如前日。先是城南門外民家稠密。賊臨至。總兵使焚之。而石牆土壁猶在。賊來依牆壁間。自蔽放丸。多中城上人。十五日望見倭衆刈城外雜草及水田中稻禾。作大束。無數積牆壁間。城中不測。時遊擊將軍陳愚衷領三千兵在全州。南原軍日望來援。而久不至。軍心益懼。是日晩。守堞軍往々交頭耳語。準備馬鞍。有欲遁色。夜一更聞倭陣中囂聲大起。略相應和有運物狀。而一面衆砲向城亂放。飛丸集城上如雨雹。城上人縮頭不敢外窺。經一二時囂聲止。草束已平濠。又堆積羊馬墻内外。頃刻與城齊。衆倭蹂躪登城。已聞城中大亂云倭入城矣。孝義初撥守南門外羊馬墻。慌忙入城。城上已無人。但見城内處處火起。走至北門。唐軍悉騎馬欲出門。門堅閉不可易開。馬足如束。街路塡塞。既而門開。軍馬爭門而出。倭兵在城外。圍匝數三重。各守要路。奮長刀亂斫之。唐軍俛首受刃。適月明。得脱者無幾。總兵與家丁數人馳馬突出。僅以身免。或云。倭知爲總兵。故使逸去也。孝義與同伴一人出門。一人遇賊死。孝義跳入水田伏草中。待倭收兵乃逸云。蓋楊乃遼將徒知禦虜。不知禦倭。以至於敗。亦知平地之城守之甚難。詳記孝義之言使後之守禦者知所戒云。南原既陷。而全州以北瓦解不可爲矣。後楊元竟以此伏罪。傳首狗示。統制使李舜臣破倭兵于珍島碧波亭下。殺其將馬多。時舜臣至珍島。收拾兵船得十餘隻。時沿海人乘船避亂者

〔奸細〕細は細作にて、間者の意、奸惡なる間者の意也。

〔楊鎬〕商邱の人、萬曆八年進士となり、吏に知縣より御史に擢でられ、右僉都御史に進み崇禎二年事に坐して法に伏す。

〔醬〕正字通に「麥麪米豆皆可罨黃加鹽曝之成醬」と見えたり。

無數。聞舜臣至。莫不喜悅。舜臣分道招呼。遠近雲集。使在軍後以助形勢。賊將馬多時號善水戰。率其舡二百餘艘欲犯西海。相遇於碧波亭下。舜臣以十二舡載大砲乘潮至。順流攻之。賊敗走。軍聲大振。是時舜臣已有軍八千餘人。進駐古今島。患乏糧。作海路通行帖。令曰。三道沿海公私船。無帖者以奸細論。毋得通行。於是凡避亂乘船者。皆來受帖。舜臣以船大小差次使納米受帖。大船三石。中船二石。小船一石。避亂之人。皆載財穀入海。故不以納米爲難。而以通行無禁爲喜。旬日得軍糧萬餘石。又募民輸銅鐵鑄大砲。伐木造船。事事皆辦。遠近避兵者往依舜臣結廬造幕。販賣爲生。島中不能容。既而天朝水兵都督陳璘出來。南下古今島。與舜臣合兵。璘性暴猛。與人多忤。人多畏之。上餞送于靑坡野。余見。璘軍人毆辱守令無忌。以繩繫察訪李尙規頸。曳之流血滿面。令譯官勸解不得。余謂同坐宰臣曰。可惜李舜臣軍又將敗矣

今按。馬多又訓乎。我俗吏稱又某者多。此又不知誰。

賊兵退。時賊蹂躪三道。所過皆焚蕩廬舍。殺戮人民。凡得我國人。悉割其鼻以示威。兵至稷山。都城人皆奔散。九月初九日。內殿避兵西下。經理楊鎬。提督麻貴在京城。而平安道軍五千餘人。黃海京圻軍數千。徵至分守江灘。守倉庫。賊從京畿界還退。淸正再屯蔚山。行長屯順天。沈安頓吾屯泗川。首尾七八百里。是時都城幾不守。朝臣爭獻出避之策。知事申磼進言曰。車駕應往寧邊。臣嘗爲其使。備諳寧邊事甚。最可憂者乃無藁也。若不預辦。何以需用。聞者傳笑曰。幸不合醬。一大臣言於朝堂曰。此賊何足憂。久當自息。惟當奉乘輿往守便處耳。元帥權慄走至京。上引見問之。慄曰。當初車駕

不合遼還都城。當留住西方以觀賊勢如何。既而聞賊退。標又下慶尙道。臺諫論標無謀恇㤼、不可爲元帥。不聽。

戊戌九月、邢玠又分調。麻貴主蔚山。董一元主泗川。劉綎主順天。陳璘主水路。同時進攻皆不利。董軍爲賊所敗、死者尤多、十月劉提督再攻順天賊營。統制使李舜臣以舟師大破其救兵於海中。舜臣死之。賊將平行長棄城而遁。釜山蔚山河東沿海賊屯悉退。時行長築城于順天芮橋堅守。劉綎以大兵進攻不利還順天。既而復進攻之。李舜臣與唐將陳璘扼海口以逼之。行長求援於泗川賊沈安頓吾。從水路來援。舜臣進擊大破之。焚賊船二百餘艘。殺獲無算。追至南海界。舜臣親犯矢石力戰。有飛丸中其胸出背後。左右扶入帳中。舜臣曰。戰方急。愼勿言我死。言訖而絕。舜臣兄子莞。素有膽量。秘其死。以舜臣令督戰益急。軍中不知也。陳璘所乘舟爲賊所圍。莞望見揮其兵救之。賊散去。璘使人于舜臣謝救己。始聞其死。從椅上自投於地曰。吾意老爺生來救我。何故亡耶。拊膺大慟。一軍皆哭。聲震海中。行長乘舟師追賊過其營、自後遁去。先是七月、倭酋平秀吉已死。故沿海賊屯悉退。

今按、戊戌我慶長三年。明萬曆二十六年也。

錄後雜記

戊寅秋。長星竟天。狀如白練。自西向東。數月而滅。戊子間。漢江三日赤。辛卯。竹山太平院後有石自起立。通津縣僵柳復起。民間訛言。將遷都。又東海魚產於西海。漸至漢江。海州素產青魚。近十餘年絕不產。移產於遼海。遼東人謂之新魚。又遼東八站居民。一日無故相驚曰。有寇從朝鮮至。朝鮮王子

〔董一元〕宣府前衞の人、嘉靖中薊鎭遊擊將軍を經て、萬曆の頃、左都督に累進し、次で太子太保を加へられ本衞世指揮使を蔭せらる。

〔拊膺大慟〕膺は說文に「胸也」とあり、胸をうちて大いに慟哭するをいふ。

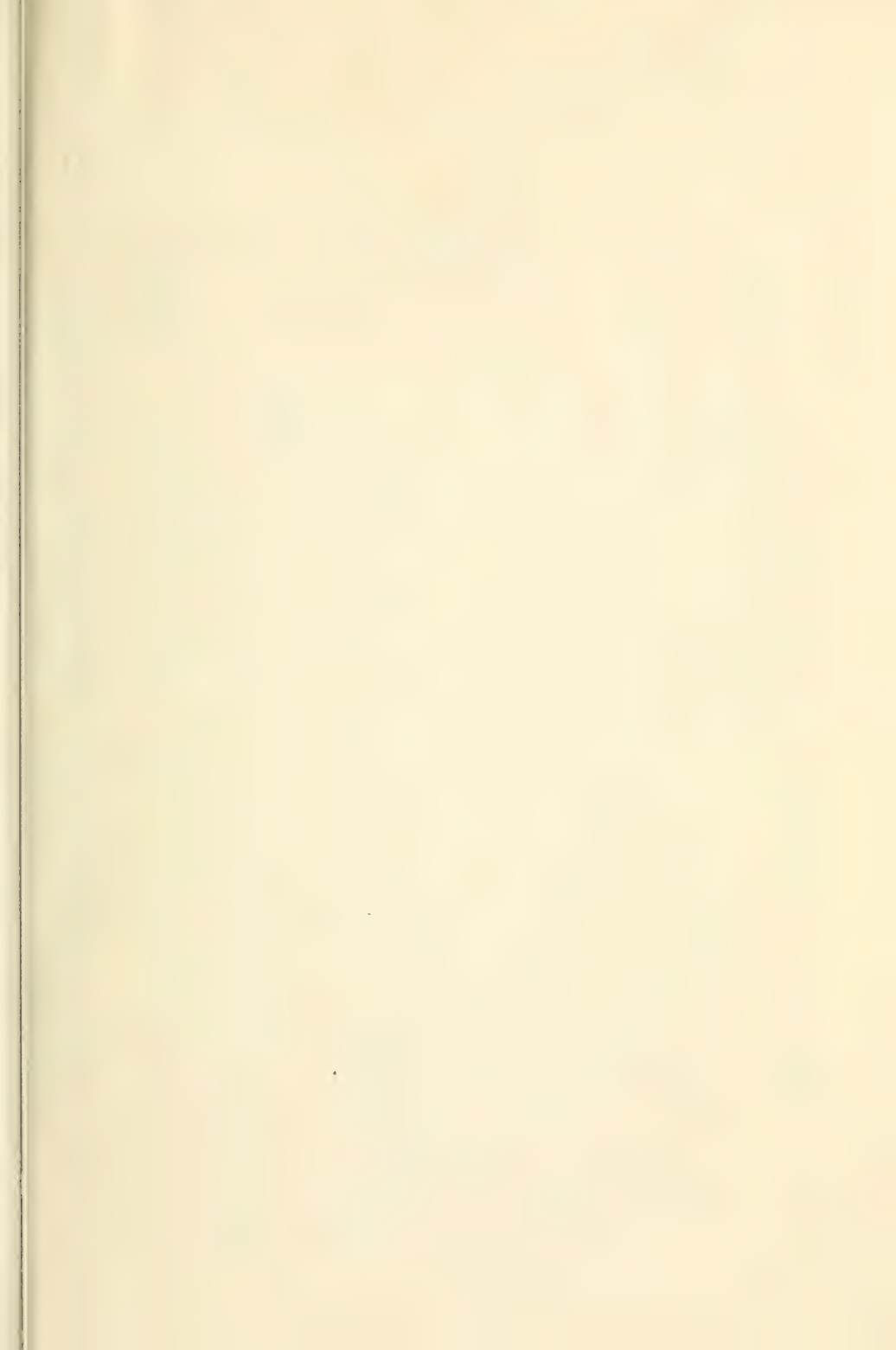
〔先是七月云々〕秀吉の死去せるは慶長三年八月なり、茲に七月とあるは誤なり。

〔長星〕慧星の類にて、兵亂の前兆として出現すといふ

十字橋子。到鴨綠江。傳相告語。老弱登山數日乃定。又我國使臣自北京還。宿金石山河姓人家。其主人言。有朝鮮譯官。語我曰。爾有三年酒五年酒。毋惜爲樂。不久兵至。爾雖有酒。誰其飲之。以此遂人疑朝鮮有異志。多驚惑云。使臣歸啓其事。朝廷以譯官必有造言生事。誣陷本國者。逮捕數人。鞫於仁政殿庭。用壓膝火刑。皆不服而死。此辛卯年間事。明年遂有倭變。是知大亂將生。人雖未覺。而形於乖睽。不一其端。至於白虹貫日。太白經天。無歲無之。人視爲常事。又都城內。常有黑氣。非烟非霧。盤地接天。如此幾十餘年。其他變怪難以殫記。天之告人。可謂深切。而特人不能察耳。今按。戊寅萬曆六年。日本天文六年。戊子萬曆十六年。日本天文十六年。辛卯萬曆十九年。日本天文十九年。

〔乖睽〕乖は玉篇に「戾也、異也、背也」とあり、睽は莊子應帝王註に「睽兆也」と見ゆ、背叛の前兆をいふ。
〔太白〕夕方に西方に表はる、金星即ち、よひの明星をいふ、一說に、長庚星に同じともいふ。
〔殫記〕殫は說文に「極盡也」とあり、悉く記す也。

異稱日本傳 卷下四 終

渡邊亨 校

昭和貳年十月十二日印刷
昭和貳年十月十五日發行

不許複製

（全二十冊非賣品）

（新註皇學叢書　第十一卷）

著作者　物集高見

東京市小石川區竹早町三十二番地
發行者　川俣馨一

東京市小石川區諏訪町五十六番地
印刷者　松浦政吉

東京市小石川區竹早町三十二番地
發行所　廣文庫刊行會
電話小石川（[illegible]）五四番
[illegible]六九番
振替東京二八七九〇番

常磐印刷所印刷